
IS [ツイン・ソウルズ]

犬吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS (ツイン・ソウルズ)

【Nコード】

N6103Q

【作者名】

犬吉

【あらすじ】

IS。

女性にしか動かさせないそれを、世界で唯一操る事のできる男子【織斑一夏】。

実は彼には、天才と呼ばれた双子の兄【織斑春斗】がいた。だが、二人は普通の双子ではなく……？

IS学園を舞台に入り混じる、人間関係と幾つもの謎。

その先にあるのはどのような結末か。

ついに夏休み編に突入です。

原作、アニメを追いつつ、オリジナル展開を進めていく予定です。

第1話 ようこそ、IS学園へ！（前書き）

この作品は、主に原作主人公【織斑 一夏】との掛け合いを楽しむ作品です。

会話文が多めですので、¹注意下さい。

第1話 ようこそ、IS学園へ！

未来。

一人の天才が創り出したマルチフォームスーツ【インファイニット・ストラトス】。

宇宙開発を目的に作られたそれは、現行していたあらゆる兵器を上回る性能を秘めていた。

インファイニット・ストラトス 通称ISの誕生によって、宇宙

開発は大きく進むかと思われた。

だが、結果としてそうはならず、ISはその姿を徐々に変えていく。

兵器として、武力としてのIS。それを恐れた国々はISに関する一つの条約をまとめる。

それが【アラスカ条約】である。

これによって、IS発明国であった日本はその技術を独占できなくなり、さらにIS操縦者育成期間設立などの条項にサインする事となる。

その結果、ISはスポーツの一分野として定着をする。

だが、ISのコアは限られていた。

世界で唯一、コアを作ることの出来る科学者、【篠ノ之 束】はコアの量産を是としなかった。

ISはコア無くして成立せず、そしてコアは数が限られている。

故に、世界にISは限られた数しか無く、各国は如何に優秀な機体を作り上げるかに執着する。

強力なISと多くのIS、それは国家戦力の比として扱われていた。

そしてもう一つ。ISの特徴である、女性にしか扱えないという部分が、男女の社会的力関係に影響を及ぼした。

ISは国家戦略にも影響を与える代物。

今や、女性は【女性であるというだけで男性よりも偉い】という風潮になりつつあったのだ。

だがそれは、長い人類史から見れば大した事ではないのかも知れない。

何故なら過去、女性蔑視の時代は多々あったからだ。

今、それが男性に代わった。それだけの事なのかも知れない。

『……………』ということで、今も世界中でこういった男女の社会的地位における問題が多発しているんだ……………聞いてるか、一夏？』

「ああ……………ちやくんと聞いてるよ」

試験会場に向かう電車。その車中で学ランに身を包んだ少年は、ウンザリとした顔で生返事を返していた。

彼 織斑 一夏は受験生である。

第一志望の高校は私立。彼の偏差値的にはかなり厳しいランクであった。

だが、この数ヶ月の追い込みによって、何とか出来るランクにまで上がった。

それもこの、優秀過ぎる家庭教師のお陰である。

織斑 春斗。一夏の双子の兄に当たる、所謂天才児。

若干13歳にして、【ISの宇宙開発における意義と、その課題】をテーマにした論文を書き上げたこともある。

彼の地獄のような講義を受け、ようやく受験日。

移動の車中ぐらいは眠らせて欲しいのだが、春斗は最後の復習だと記憶力勝負の歴史に関する講義を行っていた。

(ああ、貴重な睡眠時間が……………)

『睡眠なら十分取ったろう？ ここで寝ると、受験開始時間に脳が覚醒できないよ？』

(くそ、隠し事も出来ねえ……………)

『何を今更……………と、そろそろ到着だよ？』

「うああ、マジかよ……………」

無情にも、電車はホームに滑りこんでいく。そこから数分行った所にある多目的ホール。そこが一夏の受験会場である。

寒風に首を窄めながら会場に到着すると、すでに他の受験生たちもぞろぞろと会場入りしていた。

皆、単語カードやらミュージックプレイヤーで最後の暗記に努めている。

「…………よし、行くかつ!!」
頬をバチン、と叩いて気合を入れ直し、一夏はいよいよ会場に足を踏み入れた。

この十分後。

受験に向けた織斑一夏の努力は全て、水泡に帰す。

春。

新しい日々の始まる予感にあふれた季節。

誰もがこれから始まる時間に不安と期待を抱かずにはいられない、そんな季節。

一夏は真新しい白の制服に身を包み、教室のドアの前に立っていた。自動ドアであるこれの前に、後半歩進み出ればドアは開く。

『一夏、分かっているとと思うけど……此処から先は敵地だ。一切の希望を捨てて、このドアを潜るんだ、良いね?』

『いやいや、どんだけ恐ろしい所なんだよ、ここはッ!?!?』
春斗の言葉に思わず内心で突っ込む。

『分かっているけどね、一夏。女子のイジメって、すごく陰湿なんだよ? 異物を排除するためなら、一夏の人間性だって否定するよ…』

……

『やめてくれよ……入れねえじゃねえか!?!』

『まあ、その時は僕が本気ですから……問題ないよ』
『それが一番、問題ある気がするんだけど!?!?』

いつまでも入口前で漫才をしても仕方ないと、一夏は覚悟を決めて足を一步踏み出した。

ここはIS学園。

世界で唯一、IS操縦者育成を目的として設立された学園である。

ISの専門学校である以上、当然女子ばかりがいるこの場所に、何故彼がいるのか。

あの冬の日以降、世界を驚くべきニュースが駆け抜けた。

織斑一夏。

世界で初めて、【男子によるIS起動に成功】した人物。

当然の事ながら試験は受けられず、あれよあれよという間に、IS学園への入学が決まっていた。

それは一夏の存在がとても貴重で、国家機関でもあるIS学園でのデータ収集とその身の保護を目的とした処置であった。

一夏は、春斗の言葉の意味を今更ながら痛感していた。彼の席は最前列の教壇前という、居眠りには余りにも不向きな場所であった。

当然、殆どのクラスメイトからの視線はその背中に集中している。

何せ世界で唯一の、男子IS操縦者なのだ。注目するなという方が無理だろう。

なるほど、ここは敵地である。

「これは……想像以上にキツイ……」

『僕も、ここまでとは思わなかったよ……まだまだ、認識が甘かったのかもね』

ちなみに、先程から教壇には教師が立っている。

名前を名乗ったり、改めて学園について説明したりしているが、クラスは何故か沈黙。

そのせいか、なんか今にも泣き出してしまっそうである。

彼女はこのクラスの副担任、山田 真耶。眼鏡を掛けた、おっとりとした印象のある、幼さを感じる顔立ちの女性。

ただ一点、その自己主張激しい胸部の発育具合を除いて、だが。

この学園に勤めているという事は、彼女も優秀なIS操縦者であったのだろう。

見た目からは想像できないが。

「じゃ、じゃあ……自己紹介なんかしてもらおうかしら……出席番号順で……」

沈黙に負け、挙動不審になりながらも、真耶は職務を果たそうとする。

『一夏、自己紹介だって。何か考えとかなくて良いの?』

春斗の言葉も、一夏には届かない。
この状況にさっさと白旗を上げたくて仕方ないのだ。

チラリと視線を左に滑らせる。窓際の最前列、長い髪をポニーテールにした女子と目が合った。
が、すぐにそれは逸らされてしまった。

彼女は篠ノ之 篝。IS開発者の篠ノ之 束の妹にあたり、一夏と春斗の幼馴染でもある。

『なんだよ、篝のヤツ……それが六年ぶりに再会した幼馴染に対する態度かよ……！ 俺、嫌われてるのか……？』

『さあね。でも今は、それよりも優先することがあるみたいだよ？』
『は……？』

「り斑君……織斑一夏君っ！」

「っ！！ は、はいつ!？」

いきなり名前を強く呼ばれ、驚いた一夏は上ずった声を上げてしまった。

クスクスと笑う声がそこら中からする。

「ごめんなさいね、大きな声出して……でも、”あ”から始まって、今”お”なんだよね……」

教壇に身を乗り出して話しかける真耶。一夏の視線は、その見事過ぎる胸のふくらみに向けられてしまった。

「っ……」
思わず唾を飲んでしまう。

『うん、これは凄いな……一夏、もうちょっと上から』

『っ……!?!? 何をさせる気だ、お前は!?!?』

「だから、自己紹介……してくれるかな？ ダメ、かな……？」
そんな視線と青少年の葛藤に気付くこと無く、真耶は可愛らしく首を傾げる。

「いや、そんな……っと……」
どうしようかと思い悩みながら、一夏は取り敢えず立ち上がった。

まずは名前。そう、それを名乗れば良い筈だ。

「織斑一夏です。よろしくお願いします……っ！？」
その瞬間、クラス中の視線が強まった。

何かを期待する目。好奇心の光がキラキラを通り越してキラギラになっている。

『は、春斗……ッ!!』

『ゴメン、僕には無理だ』

双子の兄はさっさと見限った。

ならばもう一度と、筈に助けを求める。
が、すぐに視線を外された。

兄と幼馴染に見捨てられ、一夏のパニックは更に増した。

(ま、マズイ……このままだと、暗い奴だと思われる……!!)
何とかしなければ。その意識が頂点に達した時、一夏は動いた。

息を深く吐き、そして大きく息を吸い込む。

「っ……！」

その身から感じる強い意志。眼前にいる真耶や、クラスメートの女子達にも、緊張が走る。

挑戦か、それとも宣戦布告か。

「っ……」

誰かの、固唾を飲み込む音が響いた。

「 以上ですっ！！」

ガダタタターーーーーーッ！

クラス中から、新喜劇も真っ青な見事なズッコケが響いた。
ちなみに左端から「ゴソッ！」という小気味良い音が響いていた。
音源の筈は額をさすっている。

「えっ、あれ！？ ダメでした！？」
何で全員コケているかも分からず、一夏はキョロキョロとクラスを
見回す。

『一夏、それは………ないわ』
『ええっ！？ 何でだよ！？』
その上、春斗からのダメだし付き。
何処の世界にその一言をここまで溜めて、気合入れまくりで言う奴
がいるのか。

そんなダメダメな一夏には、すぐに天誅が下った。

脳天に走る衝撃。その余りにも受け慣れた痛みに、一夏は頭を抱えて悶絶した。

何故こんな記憶にこびり付いたものを受けたのかと顔を上げてみると、そこには黒いスーツに身を包んだ女性が立っていた。

「げっ！ 千冬姉え……あぐっ!？」

更にもう一発。ピンポイントで同じ場所だ。

「織斑先生だ。このバカ者め」

(な、なんで千冬姉がここに……?)

織斑 千冬。

一夏と春斗の実姉で、職業不詳(一夏曰く)。月に数回、仕事の休みに家に帰るぐらい。

元IS操縦者であること以外、一夏は姉の事を知らなかった。

『ここにいるってことは、一つしか無いでしょ?』

『それって……ま、まさか……!!』

嫌な予感が、一夏を襲った。

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で育て、使い物にするのが私の仕事だ」

『やっぱりね……』

「な、なんだっ……」

一夏が驚きの声を上げそうになった、その瞬間。

クラス中から、黄色い悲鳴が上がった。

飛び交うその黄色い声を拾い上げれば、「千冬様」「おねえさま」「かっこいい」「素敵」といった感じた。

「やれやれ、毎年良くもバカ者が集まるものだな……私のクラスにだけ、集中させているのか？」
もはや恒例行事のようなそれに、千冬は頭を押さえた。

そんな憂いを帯びた(?)表情が、クラスの狂喜を更に加速させる。

拾い上げると「もっと叱って」「もっと罵って」「いっそ踏んで」「強く縛って」「そして叩いて」「でも優しくして」「そしてつけ

上がらないように躑して」などだ。

明らかにおかしい声援もあるが、そんな事は気にするだけ無駄である。

「……………で、お前は挨拶ひとつ、碌に出来んのか？」

ゴキリ。と、拳を鳴らして千冬が一夏を睨む。

「いや、千冬姉……………それはへブツ!？」

千冬の手が一夏の頭をつかみ、机に叩きつけていた。そのままギリギリと、机とのサンドイッチにする。

「織斑先生”だ。いい加減、同じ事を言わせるな」

「ず、ずびばせん……………おりぶらせんぜい……………」

『あゝあゝ、凄い面白い顔になってるし……………』

そんな姉弟のやりとりを余所に、クラスメート達がヒソヒソと話し始めた。

「ねえ、織斑君ってあの千冬様の弟なの……………?」

「それじゃあ……………男で唯一ISを使えるっていうのも……………それが関係してるのかしら?」

「 静かにつ!!! 」

ざわめきが大きくなるところで、千冬が一喝する。
しん、と静まった教室。千冬は教壇に上がってそれを見回した。

「諸君には半年でISに関する基礎知識を覚えてもらおう。その後、
実習だが……基礎動作は半月で体に染み込ませろ、良いな。」

良いならば返事をしろ。良くなくても返事をしろ!!!
千冬の凛々しい、というよりは雄々しい姿に、クラス中から「ハイ
ッ!!! 」という、一斉に強い返事が返される。

「……………」

一夏は啞然としてしまっていた。

さて、無事に(?)SHRを終えた一夏であったが、すぐ千冬に呼
び出された。

「何ですか織斑先生。こんな所まで……………」

人気のない場所まで引つ張り出され、一夏は首を傾げる。

「余り人目があるのはマズイだろう? 」

そういつて踵を返す千冬。先程までの厳しい顔とは少しだけ違っ
ていた。

「どうだ、IS学園は? やって行けそうか…………? 」

「出来るなら、今すぐ転校させてください」

一夏は見事に頭を下げた。

「却下だ」

「だよね」

心底残念そうな一夏に、千冬は少しだけ笑ってしまふ。そしておもむろに、指を動かした。

まるで目に見えないスイッチでも燃るような動きに、一夏はすぐに気付いた。

それは二人の間で使っているフィンガーアクション。

一夏はスツと目を閉じ、意識を沈めていく。

深い海に落ちて行く感覚。それと同時に、何かが上がっていく感覚。

そして、一夏は目を開いた。だが、その雰囲気は大きく変わっていた。

例えるなら、先程までの一夏はその名の如く暑い太陽のような印象であったが、今は春の日向のような眼差しである。

「……………おはよう、春斗」

「おはよう、千冬姉さん……………」と、ここでは織斑先生だっけ？」

「いや、構わない。それで気分はどうだ……………？」

「そうだね……………取り敢えず、今のところは大丈夫だよ」

「そうか。すまないな……こんな事になってしまった……」
「別に、姉さんが謝ることじゃないよ。全部、一夏が悪いんだし」
「ばつの悪そうな表情の千冬に、春斗は優しく微笑んで返す。

『おいおい、俺が悪いのかよ!?!』

『一夏が僕の忠告、無視するからだろう?』

『ぐっ……!』

「ともかく、入学おめでとう……春斗」

「ありがとう、千冬姉さん……あ、一夏が文句言ってるよ。俺には何も無いのか、だって」

「無いな」

『何だとちくしょう!?!』

一夏は、色々納得できないといった表情で教室に戻ってくると、そこは更に色々面倒な事になっていた。

入り口に、他のクラスの女子が固まっていたのである。

何事かと思いつつ、取り合えずはこのままだと中に入れないので声を掛けてみる。

「あの……ちょっと退いてくれないかな?」

「えっ……ああ、いたっ!?!」

「ええっ!?!」

その声に、廊下にいた女子達の視線が一気に向けられた。

『どうやら、彼女達のお目当ては一夏みたいだね』
『勘弁してくれ……』
一夏は頭痛を禁じ得なかった。

どうにか教室内に入るが、内と外からの興味の視線は途切れる事がなかった。

嫌でも耳に飛び込んでくる声は、野次馬心丸出しのものばかり。

こんな状況に一人で来ていたら、気がおかしくなったかも知れない。

『本当、春斗が一緒に良かったよ』

『その為に、僕が窮屈な目に合うのは納得行かないけど……』

春斗は呆れ気味に嘆息した。

『そんな事言うなよ。俺達、双子の兄弟じゃないか』

『一夏。分かっているとは思うけど……改めて説明するよ。僕は定期的に表に出なくちゃいけない』

『おう、良く分かってるぜ？』

『で、ここでは”僕らの事”を知るのは千冬姉さんだけだ。他の人間に知られる訳には行かない』

『ああ、分かっている』

『では、これだけ注目を浴びてる中で……僕はどうやって、定期的に表に出れば良いんだい？』

『……そこはほら、天才、神童と謳われた春斗様の明晰な頭脳で……』

『あのねえ……』

脳内でそんなやり取りをしていると、不意に目の前に誰かが来た気配がした。

顔を上げてみると、篠ノ之箒が立っていた。

「……ちよつと良いか？」

「えっ……？」

視線で、着いて来いと合図をすると、箒は先に行ってしまう。意味も分からず、一夏はその後に続くのだった。

IS学園、一年棟の屋上。

そこに二人はやって来ていた。

正確には二人ではなく三人であり、そしてその他数人であった。

『……何か、野次馬も来てるね』

『実害ないならほっとこうぜ？ それよりも……』

一夏は、箒の背に目を向けた。

呼び出しておきながら、彼女は柵に寄りかかったまま何も言っていない。

仕方なく、一夏から切り出すことにした。

『……何の用だよ？』

『うん……』

『六年ぶりに会ったんだ。何か話があるんじゃないのか？』

『っ……』

しかし箒はチラチラと一夏を見るが、すぐに目を逸らしてしまう。眉を八の字に潜め、どことなく恥ずかしげな表情をしている。

『先生、ヘルプを使用します』

『誰が先生だ。……うん、なにか当たり障りない話題を振るってのはどうかな?』

『当たり前障りない話題、か……そうだ!』

丁度良い話題を見つけ、早速それを言うことにした。

「……そういえば」

「な、何だ……?」

「去年、剣道の全国大会で優勝したんだろ? おめでとう」

「なっ……!?!? 何でそんな事を知っているんだ!?!?」

一夏は去年、新聞で見たそれを思い出した。

ずっと剣道を続け、全国優勝するまでになった彼女の姿に、驚きと我が事のように嬉しかったのを覚えている。

「なんでって……新聞で読んだんだけど?」

「何で、新聞なんて読んでるんだ……」

とはいえ、このリアクションは予想外だった。

まるで、自分が新聞を読んでいるのが可笑しいみたいではないか。

「悪かったな。俺が新聞読んで……春斗だったら可笑しくなかったか?」

「いや、そうではない……いや、春斗だったら普通とというか……い

や、そんな事を言いたくないんじゃないんだ!?!?」

「……」

ワタワタとする筈がちょっと面白い。

ともあれ、会話も何とか出来るようなので、言うておかないといけない事がある。

「筈」

「こ、今度は何だ……!?!?」

「久しぶり。六年ぶりだったけど……すぐに筈だって分かったぞ?」

「えっ……?」

笑顔で一夏がそう告げると、箒がビックリしたように目を丸くする。そして頬がわずかに紅潮していた。

「ほら、髪型一緒だし」

「あつ……………よくも覚えてるものだな」

「いや、忘れないだろ。幼馴染のことぐらいたさ」

「普通は覚えていない方が多いと思うけどね……………」

「そうか？ 春斗だって箒の事、すぐ分かったじゃないか」

「……………まあね」

そんな内心でのやり取りをしていると、箒がこちらに何か言いたげな視線を向けていた。

何だろうかと、一夏が聞いてみようとした時、学園にチャイムが鳴り響いた。

「一夏、そろそろ戻らないと」

「箒、教室に戻ろうぜ。初日から、これ以上のお叱りはゴメンだからな」

「あ、ああ……………分かっている」

箒は何故か髪をいじりながら、複雑な表情をしていた。

『結局、箒の奴……………何がしたかったんだ？』

『それに気付けないのは、世界広しといえども一夏ぐらいなもんだ』

『94』

『何でだよっ！っ？』

第2話 セシリア・オルコットからの挑戦！（前書き）

投稿早々、感想を下さりありがとうございます。
タイトル通り、作者の大好きな彼女の登場ですw

第2話 セシリア・オルコットからの挑戦！

既にもの凄く時間が経ったような気もするが、それでも授業はこれからだ。

『……よし、ギブアップ。後はお願い』

『諦めるの早いよ！？ まだ開始して10分だよ！？』

早々に教科書とのニラメッコを諦め、一夏は内心の天才にこの場を託そうとする。

『もつダメなんだよ。この……アクティブなんとか広域うんたらとか、訳分かんないし……』

『一夏。参考書をちゃんと読んだでしょ？ だったら分かる筈だよ……』

『読んだけどさ……こう、どうにもこうにも……頼む、俺を助けてくれッ！』

一夏の切実過ぎる祈りに、春斗はちよつとだけ負けそうになるが、いやいや、それでは駄目だと思ひ直す。

『一夏。ここで僕が助けたら、君の為にならないよ』
『……』

『僕はある参考書の内容は勿論、二年の修了課程まで頭に入ってる』
『何だっ！？』

『でもね、僕の記憶や知識は一夏の脳の中にあるんだ。それを引き出せないのは一夏が鍵を持っていないからだ』

『鍵……？』

『そう。分り易く言えば、大きなダンスの引き出しに、いろんな知識が入っている。で、僕は鍵を持っているから、それを取り出せるんだ。』

でも、一夏は鍵を持っていない。だから開けられない。じゃあ、一夏はどうする?」

春斗からの間に、一夏は少し考える。鍵を持っていないタンスの鍵を開ける方法を。

「……………鍵を、作る?」

「そう。ここでいう処の鍵は、一夏が学んで得たもの。それ自体が当たるんだ」

「何にしても、勉強からは逃げられない、と……………」

「大丈夫。一夏には優秀な家庭教師がいるじゃないか。分からない所は随時、説明をするよ」

「……………そうだな。ズルは俺も余り好きじゃないしな」

「それに一夏、根本的な事を忘れてるよ……………」

「何……………?」

「前、見てご覧よ」

春斗が言うので、教科書から顔を上げてみると、そこには黒スーツの女性が一夏を見下ろしていた。

「げえっ、関羽!?!」

「誰が三国志の武将だ!?!」

バシーンッ!!

千冬が手にした出席簿が、一夏のこめかみを痛打した。

何で殴られなきゃならないんだ!?

そう言おうとしたところ、また別のものが目に入った。

「グスン……いいんです……どうせ……こんな顔だから頼りがい無く思われて……どうせ教師なんて向いてないんです……」
副担任の山田真耶が教室の隅で膝を抱えていた。壁にのの字を書いている辺り、かなり重症だ。

『何で泣いているの……？』
『一夏に無視されたからじゃない？ さっきから何度も声掛けてたし……』

『何で教えてくれないの！？』
『だって聞かれなかったし……取り敢えず、フォローしておいた方がいいんじゃない？』

『お前やれよ……』
『僕が……！？ やれやれ……』
仕方なく、春斗は一夏と入れ替わった。

「おい、聞いているのか！？」
「聞いてます、ちゃんと」
「っ……！」

顔を上げた一夏を見て千冬は一瞬、目を見開いた。
（は、春斗……！？）
それが春斗であるとすぐに分かり、動揺を押し殺す。

「……なら、授業内容は耳に入っていたんだろうな？」
「勿論です。授業もしっかりと聞いていました」
「ならば何故、山田先生の問い掛けを無視した？」
「無視はしていません。ただ、集中し過ぎて普通に気付かなかっただけです」

いけしゃあしゃあと云ってのける春斗に、千冬は眉を潜めた。

「ならば講義した内容を言ってみろ」と聞けば、春斗は一言一句間違えず言っただけのけらだろ。」

だが、それをさせれば他のクラスメートはいざ知らず、窓際にいる篠ノ之 篤はその違和感に気付くはずだ。

彼女は一夏と春斗の幼馴染。二人と親交深かった彼女をその後、誤魔化せるだろうか。

(全く……場を上手く使ってくるな)

仕方なく、千冬は白旗を上げた。

「……………だそうだ、山田君。何時までもそんな所でいじけていないで、授業を再開してくれ」

「ふうう……………本当ですか、織斑君？」

涙目で振り返られ、春斗は少しの罪悪感と共に、もうちょっと苛めてみたいという衝動に襲われた。

「本当ですから、自信を持って続けて下さい……………山田先生」
そんな衝動を抑え、春斗は優しく微笑んだ。しかも先生の部分に強く意思を込めて。

「そ、そうですね……………私は、先生なんですよね！」

何か分からないが、立ち直ったようで春斗は一安心と嘆息した。

「では、テキストの25ページを開いて下さい……………！」

ただ真耶の頬が若干赤みを帯びているのが気になったが、きつと大した事はないだろう。

どうせ、苦労するのは一夏なのだからと、春斗は一夏と入れ替わった。

授業が無事に終了して、今は休み時間。
トイレ（職員用を使った）を済ませた一夏は、春斗先生による補習
中であつた。

『……で、ISの高機動は成り立っている訳。分かつた？』
『分かつたよ。分かんような……』
『一夏の場合、実際にISを使ってみればきつと分かるだろうから、
今はそれで良いよ。じゃあ、次ね……』

授業の要点を纏めてから説明されると、一夏にもぼんやりと分かつた気がしてくる。

春斗は昔から教えるのが上手い。一夏も箒もよく、春斗に宿題を手伝ってもらつたものである。

「ちよつとよろしくて?」

ノートに春斗の説明を書いていると、いきなり誰かが声を掛けてきた。

筈ではない、聞いたことのない声だ。尤も、殆どの声を聞いた事がないのだが。

「んあ……?」

間の抜けた声と共に顔を上げてみると、そこにはブロンドの女性が立っていた。

肌は陶磁器の様に白く綺麗で、少し垂れたような瞳は美しいサファイア。恐らくは欧州系ヨーロッパだろうか。

フリル付きのカチューシャと、クルリと巻かれたロールヘアがバネのように弾み、また見事なものである。

「まあ、なんてお返事!? 私に話しかけられるだけでも光栄なので、それから、”それ相応の態度”というものがあるのではないかしら!?」

そんなロールさん（仮名）は一夏の返事に大層、驚いた顔をしていった。

「……………邪魔だな」

もしかして有名人なのだろうか。しかし、一夏はそんな事言われても困る。

ただでさえ、授業を邪魔された事で、春斗が不機嫌になり始めているのだ。

さつさと彼女には退散してもらおう。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないんだ。ゴメンな」

という事で、補習再開　とは行かなかった。

「知らないっ!? この《セシリア・オルコット》を……イギリスの代表候補生にして、入試首席のこの私をッ!?」

バシン、と一夏の机を叩き、驚きとそれ以上の怒りをこめて、ロールさん　セシリアはずい、と迫ってきた。

「あ、質問」

「フツ、下々の要求に答えるのも貴族の務めですわ。宜しくてよ？」
一秒前までの怒りは何処へやら。セシリアは鼻を鳴らして髪を掻き上げた。

「……………ダイヒョウコウホセイって、何？」

ガタタタ——————ンッ!!

本日二度目の新喜劇、頂きました。

「あ……あ……」
セシリアは余りの事に頬をヒクヒクとさせている。どうやら突発的な出来事に弱いようだ。
それもそうだろう。まさか、そんな事を聞かれるとは思いもしなかったのだ。
というか、これには流石の春斗も頭を抱えていた。
「あ……？」

キツ、と再起動を果たしたセシリアが一夏に迫る。

「信じられませんか！！日本の男性というのは、こんなにも知識に乏しいものなのかしら！？」

「失敬な。日本人じゃなくて、一夏が馬鹿なだけだ！！」

「お前も大概酷いな！？」

「一夏。代表候補生っていうのは、言葉通り【未来の国家IS操縦者代表】になる候補の事だ」

「ほうほう？」

「ISの世界大会に代表として出場する【国家代表】は、その国の技術力、資金力、なにより国の威信そのものといえる」

「へえ……じゃあ、凄いなだな」

「千冬姉さんと同じ立場になる人物だからね。それは、467機しか無いコアの内の一機を、個人専用として与えられる点からも分かるだろう？」

「専用機持ちつてことか……！？」

「そう。候補生の中でも専用機を持っている……間違い無く、彼女はエリートだよ」

「なるほど。よく分かりました」

「では、講義を終わります」

「 という現実を、もう少し理解して頂ける!？」
「 ……え？ えっと……そうだな？」
春斗の説明が終わると、何故かセシリアがズズイ、と顔を迫らせていた。
「 どうやら、一夏の知らない間に色々言っていたらしい。」

「 ……バカにしていますわね？」
「 いいえ、聞いていなかっただけです。とは言えず、一夏は困ってますわ。」

「 ……お前が理解しろっていうから、そうだなって返したんだろう？」
「 エリートなのは分かった。それがクラスに居るといのは、彼女の言う通り幸運なんだろう。」
「 だが、それと自分に何の関係がある。」

「 大体……何も知らないでよく、この学園に入れましたわね？ 男で唯一、ISを操縦できると聞いていましたけど……期待はずれですわ。」
「 俺に何かを期待されてもな……。」

一夏はどちらかと言えば、成績は下の方だ。

千冬は、ISの元日本代表でエリート。

春斗は、将来を期待されていた天才。

こんな出来の良い二人と比べ、自分は平凡な男子で、自慢できるのはその体の頑丈さぐらいだ。
そんな自分に、特別な事など期待されても困る。

すっかり調子を取り戻したのか、一夏の周りをセシリアは優雅に歩く。どうやら、まだ解放されないようだ。

「まあ、私は優秀ですから……あなたのような人間にも、優しくしてあげますわよ」

「……………」

そう思うなら、早く解放して欲しい。

「分からない事があれば……そう、泣いて頼むのでしたら、教えて差し上げても良くてよ？」

『僕に分からない事を、彼女が答えられるとは思わないけどね……………』
ああ、内側で春斗が毒を吐き出している。

一夏は即時解放を願う。もしくは、この話題がさっさと終わることを。

しかしセシリアの私自慢は終わらない。

「何せ私は入試で唯一、教官を倒した……エリート中のエリートなのですから!」

「あ、俺も倒したぞ」

「は」

その瞬間、セシリアが凍りついた。

「はあああああああああああつ!?!?」
再起動した彼女は、一夏に信じられないといった視線を向けてきた。
「いや、倒したって言うか……いきなり突っ込んできたからそれを避けて……そしたら、壁に突っ込んで……で、気絶しちまって……」
『ああ、あれは凄かったね……』
あの時、二人はしみじみと感じた。

「大丈夫か、この学園?」と。

あれを倒したと言っていいのか不明だが、取り敢えずはそういう事になっているらしい。

「わ、私だけだと聞いていましたが……?」
声が若干上ずり、動揺が耳を通してよく分かる。

「それ……」女子では”って、オチじゃないのか……?」

「っ……!?!?」
さりげなく一夏は止めを刺した。

「あなたが!?!? あなたも教官を倒したって言うの!?!?」
セシリアは自尊心を傷つけられ、感情を吐露して一夏に肉薄した。
怒りに頬を紅潮させ、眉は釣り上がり、目鼻先まで顔が迫っている。

「お、落ち着け……なっ?」

「これが落ち着いて……!?!?」

その時、救いの鐘が鳴り響いた。休憩時間が終わりを迎えたのだ。

流石にこの場ではこれ以上は無理と、セシリアもすぐに理解した。

「この続きは、また改めてしますわー！」

だが、次があるらしい。

ズンズンと床を踏み抜くように、セシリアは自分の席に戻っていった。

『流石は一夏。息をするようにへし折っていくな……色々とくくく、と春斗は愉快そうに笑っている。』

『何が面白いんだよ……』

『いやいや、あの驚きの顔といったらもう……それと一夏？』

『なんだよ』

取り敢えず、次の授業のテキストを取り出しながら返す。

『遅れた分は昼休みと放課後に回すから、そのつもりで』

『おのれ、セシリア・オルコットオオオオオオオオオオッ……！』

怒りをテキストに込めて、一夏は机を叩いていた。

さて、二時限目が開始される。
今度は千冬が担当するらしく、教壇には彼女が立っている。

「さて、授業を始める前にクラス代表を決めておく」
クラス代表とは、再来週に行われるクラス対抗戦に出場する選手であり、同時にこのクラスのクラス長も兼任する。
その為、生徒会や委員会など、色々と駆り出されるポジションである。

(うわぁ、絶つつつつ対にやりたくねえ……!!)
説明を聞き、一夏が思ったのはそれだった。この場にいれば確実に春斗を推薦してやるところだ。
いや、実際は此処にいるのだが。

「自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

「はい」

一人の生徒が手を上げた。立候補かと思われたがそうではなかった。

「織斑君を推薦します！」

「なっ……!!？」

「私もそれがいいと思います」

「え……?」

「私も!」

「ええ、何で俺っ!?!」

「他には居ないか? いないなら、無投票当選だぞ?」

次々に上がる、織斑一夏推薦の声。一夏は納得できず、千冬に抗議しようとした。

「納得できませんわッ!」

だが、それを遮って凜とした声が響いた。

『うわ、噛み付いてきた……』

その声に、一夏も春斗も嫌な予感しかしなかった。

振り返ればやはり、セシリアが不満ありまくりといった表情で立っていた。

「そんな選出は認められませんっ!」

(お、もしかして意外と良い奴か?)

「男がクラス代表だなんて、いい恥晒しですわ!! このセシリア・オルコットに、そんな屈辱を一年間も味わえとおっしゃるのですか!?!」

そんな事を一瞬でも思った自分が馬鹿だったと、一夏は反省した。彼女はプライドが高い上、どうやら女尊男卑主義者のようだ。

そして彼女の怒りは止まらない。いよいよもってとんでもない所へ走りだした。

「大体、文化としても後進的なこんな国で暮らさなくてはいけない事自体、耐え難い屈辱だというのに……!!」

「……イギリスだって、大したお国自慢は無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ?」

流石にこれには力チンときた一夏は、内心の怒りに任せて暴言を吐く。

「美味しい料理はたくさんありますわっ!! あなた、私の祖国を侮

辱しますの!？」

「その侮辱を先にやったのはお前だろうがっ!！」
それが更に、セシリアの怒りに油を注ぐ。

「決闘ですわ!！」

怒りを込めた指先を突きつけ、セシリアが叫ぶ。

「おお、いいぜ? 四の五の言うよりは、よっぽど分り易い!」

「私が勝つたらあなたを小間使い……いえ、奴隷にして差し上げますわ!！」

「好きにしるよ。で、ハンデはどのぐらいつける?」

「あら……早速、お願いかしら?」

それをハンデの申し入れと思ったのか、セシリアがフフンと鼻を鳴らした。

「俺が”どのぐらい、ハンデをつければ良かった事だよ”

「は……?」

一瞬の沈黙。

そして、クラス中が爆笑した。

「ちょっと織斑君、それ本気？」

「男が女より強いなんて…… ISが出来る前の話だよ？」

「もしも男と女が戦争したら、三日持たないって言われてるのに」
次々に飛ぶ言葉。一夏はしまったと自分の迂闊な発言を後悔した。

だが、そう思っていない人物もそこにはいた。

「…………… 一夏、ちょっと代われ」

『春斗……………？』

『こいつらのバカな勘違いを修正させる』

『おい、ちょっと……………！』

突然、一夏の視界が暗くなり、意識が落ちて行く。

それは春斗が一夏と強制的に入れ替わった時の症状だった。

「…………… 随分と酷い勘違いをしているな？」

「え……………？」

いきなりの言葉に、笑っていたクラスメート達が静まり返る。

「な、何が勘違いだっけ言うの……………！？」

先程、男女間の戦争について言った女子が不服そうに尋ねる。

「男と女の戦争……………それは単純にIS全機と現行の兵器全てを比べた場合の戦力比較だ。」

戦争は兵器だけするものじゃない。それを運用する人間、補給線の維持、必要なものは果てしなく多い。

そもそも、ISのコアは世界中に分散されているんだ。全てが一同に集まって戦力となる訳じゃない。

何より、世界には【戦略兵器】なんて物騒なものもある。単純にどつちが有利なんて話じゃないさ」

「うっ……」

そう言われれば、そういうデータだったと思い出したらしく、彼女は沈黙した。

「で、でもそれだって…… ISの能力が低いつて事じゃないでしょ！？」

今度は、「男が女より〜」と言っていた女子が、春斗にぶつかってきた。

「確かにその通りだ。じゃあ逆に『ISを使える男は女性より弱いのか』？」

「あっ……！！！」

その言葉の意味に、目を見開いた。

男女の強さを分けるのがISなら、それを使える一夏はどうなるのか。

少なくとも、女子より弱いという事にはならない筈だ。

「それにこれは、織斑一夏とセシリア・オルコットの決闘だ。国家だの戦争だのなんて話は、そもそも関係がない」

春斗がきっぱりと断じて見せると、クラスに笑う者は最早いなかった。

「……なるほど。学はそれなりにお有りのようですね」

一人だけ、セシリアを除いては。

「ですが、私は専用機持ち……ハンデはむしろ私がつけるべきです

わ

「……………ふっ」

「ッ……………!?!」

春斗はそれを、せせら笑ってやった。

「祖国への愛、自分への挟持、大いに結構。決闘とは己の誇りを賭けて戦うものだからな。だがな、セシリア・オルコット!」
春斗はセシリアに向かって、力強く指を突きつけて見せる。

「だからこそ、誇りと驕りを履き違えているような奴に、俺は絶対に負けない!!」

「ッ……………!?!? 何ですってえ……………ッ!?!」
宣戦布告を返され、セシリアはギリッ、と歯ぎしりする。

怒りが今にも吹き上がりそうな心を、彼女は必死に押し留める。

一触即発。誰もがこの睨み合いの行く末を、固唾を呑んで見守った。

「……………そこまで!?!」

それを破ったのは、千冬の鶴の一声だった。

「それでは、勝負は次の月曜、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ、準備をしておけ」

「分かりました」

「承知しましたわ」

春斗とセシリアは一瞥しあうと、席に座った。緊張感から解放されて、何処からとなく安堵の息が零れた。

『どうだい、一夏。口喧嘩ってのはこうやるんだよ』

『お見事。しかし、珍しいな……お前があそこまで怒るなんて』

『別に……ただ、ISって物騒な玩具をもらってはしゃいでいると、危ないって言いたかったのさ』

『危ない……？』

『追い詰められた人間は何をするか分からないからね……本当に戦争になったら目も当てられない』

『起きるのかよ、戦争なんて……』

『たった一発の銃弾が、世界大戦のきっかけになった事だつてある。何が原因で起こるか、想像もつかないよ』

出来るなら、ISが正しい運用をされますように。

春斗は、そんな思いを抱かずにはいられなかった。

そんな問題もありつつも授業はちゃんと行われ、次の休み時間。予告と違い、セシリアはやって来なかった。

あれだけやり合ったのだ。そうなるのも当然であるが。

代わってやって来たのは篁

ではなかった。

「ねえ、織斑君？」

「ん……？」

テキストを片付けていると、声を掛けられた。顔を上げてみると、それは先程、一夏を笑った女子達であった。

彼女たちはどこか言いづらそうな顔をしていたが、一人がようやく口を開いた。

「さつきはごめんね。その、笑ったりして……」

「ああ、別に気にしてないよ。ていうか、俺の方こそ考えなしに言っちゃまったからな……笑われても仕方ないって」

思い返すと、何と短絡的な行動だろうか。恥ずかしくて死にそうになる。

「でも、その後の織斑君は……ちょっとカッコ良かったよ……」

「え……？」

「うんうん。なんて言うか、流石は千冬様の弟っ！て、感じだった！！」

「あの『誇りと驕りを履き違えているような奴に、俺は絶対に負けない！！』なんて、チヨー決まってたし！！！」

「あ、ありがとう……ハハ、ハ……」

なんかもう、笑っしかなかった。

そして昼休み。

一夏は筭と共に、屋上に上がってきていた。

購買で買ってきたサンドイッチとコーヒーが昼食である。いつもならもつと食べるのだが、今日はこれが精一杯である。

「……さつきは随分とモテモテだったな、一夏？」

所々に怒気を孕んだ筭の声がチクチクと痛い。

一夏にしてみれば濡れ衣に等しい事なのだが、それを言う訳にも行かない。

「全く……よりもよって春斗を真似するとは。もう少し自分というものをわきまえておけ、似合わないぞ？」

「……」

『……』

(本人だっただけだなあ)

(本人なのに……酷いよ、ほーちゃん)

ちなみに、“ほーちゃん”というのは、春斗が筭を呼ぶ時の愛称である。何故かすごく嫌がられるのだが。

「それで？ あれだけ啖呵を切ったんだ、勝ち目はあるんだろうな？」

「まあ、それはこれから次第……かな？」

「……よし、私も協力してやろう。今日から特訓だ！！」

「ええっ！？」

『一夏。悪いけど今日は断ってくれ』

「ええっ！？」

「……何故、二度も驚く？」

「何でもないです」

不審がる箒に手を振って気にするなとアピールする。それと同時に、春斗にどういふ事を尋ねた。

『今日は別にやる事があるからね。特訓は明日からにしてもらって欲しいんだ』

「……………えつと、箒？」

「何だ？」

「今日の特訓は……………無しにして欲しいんだけど？」

「つ……………！ お前は、代表候補生に勝つ気があるのか！？ 一分一秒が惜しいのだぞ！？」

「分かってる！！ だからこそ、特訓は明日からにして欲しいんだ！！！」

「……………勝つ為に、必要な事なのだな？」

「ああ。絶対に必要な事だ」

春斗の意図は分からない。だが、春斗がそう言うのだから間違いない。それは確信と言ってもいい。

「……………分かった。特訓は明日からにする」

箒も納得したのか、承知してくれた。

そんなこんなで初日の授業を終え、一夏は安堵の溜息を吐いた。
慣れる前に、へばってしまいそうだ。

セシリアは既に教室を出てしまい、箒も早速入った剣道部に向かつてしまった。

「……ていうか、あいつ部活あるのに特訓しようとしたのか？」

「それが愛だよ、一夏」

「なんだよ愛って……?」

「君はあれだ、爆死した方がいいと思うよ?」

「何でだよ!？」

そんな内部漫才をしつつ、一夏も教室を後にした。

「……で、これから何をするんだ?」

『名づけて 《今日から始めるセシリア・オルコット対策！！ポロリもあるよ》パート2！！』

「……………パート1は何処行つたよ！？ てーか、ポロリって何！？」

『一夏、声出てるよ』

「あつ……………！」

慌てて辺りを見回すが、取り敢えず誰もいないようだ。

『それで……………1は何処行つたんだよ？』

『1ならもう終わってるよ？』

『……………何時やつた？』

『二限目の教室で』

『……………あ、まさかあれか？ あの、お前なんかに！ってヤツ……………』

『！』

『ご名答。あれでかなり、彼女は怒つただろうからね……………まずは一手だ』

一夏は少し疑問に思っていた。

あの台詞だけは、春斗らしくない気がしたのだ。春斗なら、あんな風に露骨な挑発をしない。

もつと陰湿で重箱の隅をつつきまくる様子ないやらしい責め方をする筈だ。

尤も、一夏のふりをしていたという事で納得していたのだが。

『でも、怒りは持続しないんじゃないのか？ 勝負は次の月曜……………来週なんだぞ？』

『確かにそれだけ時間が空けば怒りも消えるだろうね……………でも、鎮火する訳じゃない』

『……………？』

『ああいったタイプは、心の奥底で燻らせたままになる事が多い。ちよつと薪をくべてやれば、あつという間に燃え上がる……………』

『……………』
我が双子ながら、なんて暗い。一夏は頭を抱えそうになった。

『じゃあ、これからどこに行く？』

ライブラリウム
『電子情報閲覧室に行こう。今はセシリア・オルコットの情報を集めないといけないからね。』

ライブラリウム
電子情報閲覧室は、教員に許可を得ないと使えないから、誰か適当に捕まえよう』

「情報から戦術を考えるか……じゃあ、職員室だな」

ということ、二人は職員室へと向かうのだった。

第2話 セシリア・オルコットからの挑戦！（後書き）

あれだけ表に出るのを気にしていた春斗。
思いつきり出まくってますねw

第3話 初日終わって日が暮れて（前書き）

前二話で、春斗を知性派とかクール系とか、そんな印象を持ってしまった方に警告です。

この話は主人公がもの凄くはっちゃけてます。というか、素が丸出しですのでご注意ください。

第3話 初日終わって日が暮れて

ライブラリールーム
電子情報閲覧室を使うため、職員室に向かった一夏。

だが、ちょうど会議中だったようで、しばし廊下で待つことになった。

『丁度良い。少し代わってくれら？』

『ああ。何するんだ？』

入れ替わった春斗はバッグから携帯PCモバイルを取り出した。これは数少ない春斗の私物である。

『今の内に、メールをチェックしておこうと思って……ここ最近、バタバタしていたからね』

モバイルを起動させて、サーバー上のメールボックスを開く。

そこには英語、ドイツ語、ポルトガル語等、様々な国の言葉が並んでいた。それらを一纏めにして消去する。

『……相変わらずだな』

『毎回、良く飽きないと感心するよ……』

それらは全て、春斗に新しい論文を書いてもらいたい、という内容のメールであった。

以前書いた論文を科学系サイトに送ってみたところ、それ以来こんな風であった。

春斗はモバイル内にある個人用アドレスを開いた。

こっちにも何通ものメールがあるが、全て差出人は同じである。

一番上の未開封メールをクリックする。

すると開かれたメールは、全てフランス語であった。

『相変わらず読めねえ……何て書いてあるんだ？』

『秘密。知りたかったら、自分でフランス語を勉強するんだね？』

『ケチッ』

『人のプライベートメールを知りたいっていうのは、デリカシーがない証拠だよ？』

『……………』

一夏も納得してくれたようで、春斗は安心してメールを読み始めた。

『親愛なる HARUへ。』

久しぶりにメールを貴方に送ります。

こっちでは今、世界で初めての男性IS操縦者の事が連日、トップニュースとして扱われています』

HARUとは、春斗のハンドルネームである。

メールの差出人は同年代の女性のようで、たまたま寄った科学系のコミュニティサイトで知り合いになったのだ。

何度かBBSを通じて交流し、今はこうやってプライベートアドレスに直接やり取りする仲である。

『……………へえ。一夏の事は、向こうでも連日のニュースになってるみたいだよ？よっ、有名人！』

『連日とかウソだろッ！？ うわぁ……………死にたい！！』

『死にたいならどうぞ。止めないよ？』

『止めるよ薄情者！？』

そんな一夏の事は無視して、メールを読み進めていく。

『私もそれを初めて聞いた時には、なんて冗談だと思いましたが、今はそうでもありません。女性だからとか、男性だからとか、そんな小さな事で括られてしまう程、世界は狭くないと、貴方が教えてくれたからです。』

さて、どうしてこんなメールを送ったかということ……実は私の、日本への留学が決まったのです。

HARUの祖国、そして初めての男性IS操縦者が誕生した国に行けると思うと、もう胸がドキドキしてしまいます。

留学の準備でしばらく忙しくなるので、メールを送る事が出来ませんが、落ち着いたら改めて送りたいと思います。出来ることなら、貴方に日本で出会えますように』

『へえ……今度こっちに留学するんだって、彼女』

『留学ねえ〜。一人で異国に行くなんてやっぱ、不安とかあるんだろうな?』

『そりゃそうだろうね……あの、セシリア・オルコットもさ』

『……だな。ところでそのメールの子、なんて名前だったっけ?』

『シャルロットだよ』

『そうそう、シャルロットだ。一体、どんな子なんだろうな?』

『一夏。ちよつと滝にでも打たれて来ようか?大丈夫、きっと真人間になれるから』

『何でだよ!?! 俺は現在進行形で真人間だつ!?!』

などとやっている、職員会議が終わったのか、ルームプレートから会議中の文字が消えた。

『よし。それじゃ、行こうか』

モバイルをバッグにしまい、春斗はドアをノックした。

「何……ライブラリールーム電子情報閲覧室の使用許可？」

「はい。それとセシリア・オルコットの入試試験記録の閲覧許可と、訓練用ISを二機、使用許可申請をします」

「いきなりだな……。オルコット対策か？」

「ええ。それで、許可の方は頂けますか……。織斑先生？」

春斗の申し込みに千冬はフム、と腕を組んで考える。IS使用の許可は時間が掛かるが問題はない。

だが試験データは本来なら、生徒の閲覧は禁止されている事だ。

「……仕方ないな。山田君、閲覧には君が同席してくれ」

「はい、分かりました」

「打鉄の使用はすぐには出来ん。早くとも明日だ。それとデータの持ち出しは勿論、コピーも禁止だ。それを破った場合、停学も覚悟しておけ」

「ありがとうございます、先生」

「それと、これを渡しておこう」

千冬が取り出したのは一枚のメモとキー。そこには『1025号』室』と書かれてあった。

「……………何ですか、これ？」

「今日からお前が使う寮の部屋だ」

「『は……………？』」

しれっと言つ千冬に、春斗と一夏は啞然とする。

「いや、入寮までは少し……………間があつた筈ですよな？」

「普通ならばな。だが、お前の場合は事情が事情だ。それと荷物は既に私が送つておいた。

着替えと生活雑貨、携帯の充電器と電子ブックぐらいで充分足りるだろう？」

『足りるかよっ！！』

『僕は電子ブックがあるから良いや』

『俺の漫画コレクションはどうなった！？』

「あの下らない漫画の入つたやつなら、きっちり置いてきた。安心しろ」

『安心出来るか！！』

まるで、一夏の声が聞こえているかのようなやり取り。

尚、電子ブックの中には百冊近い専門書が入っている。その上、同じだけ入つた外部メモリが三つ。

これも春斗の私物である。

一夏も一度だけ読んで、数行でダウンした事は記憶に新しい。

あんな物を数時間。微動だにせず読み耽られる春斗を、本当に人類なのかと疑つたこともある。

「それと、寮には大浴場があるが……………お前はしばらく使えないぞ？」

「何ですか？」

「お前、同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「相手さえ良いと言つてくれるなら、拒みません」

バシューンッ！！

「……………すみません、冗談が過ぎました」

こめかみをさする春斗の後ろで、顔を真っ赤にした真耶がフルフルと震えている。

「本当に冗談であることを祈っている。で、寮室内にはシャワーがあるから、しばらくはそれを使い」

「解決案は模索中ですか？」

「一応な。それと、お前には学園の方で、専用のISが用意される事が決まっている」

「 貴重なサンプル用に、ですか？」

「……………そうだな、そうとも言えるな」

春斗の”サンプル”という部分に、チクリと刺さるものを感じ、千冬は顔を曇らせた。

一夏は唯一貴重な存在であるが、それと同じぐらい貴重な存在がある。

それは世界で最も”次にISを動かせる可能性を持った人物”の事である。

『春斗……………』

「……………ともかく、くれるという物は有り難く貰っておけ。予備機もないしな。流石にIS無しでオルコットとは戦えんだろう？」

「その時は、彼女に決闘をリタイアしてもらう方法を考えます」

「…………… 本当にやりそうな上、本気でやれるだろうから恐ろしいな、その発言は」

そんな事をやったら、停学なんてチャチな罰では収まらないだろうが。

「ともかく、ISの件は明日には何とか出来るだろう。後、ライブ電子情報ラリアルーム閲覧室の使用は6時までだ、良いな？」
「了解しました」

こうして春斗は真耶を伴い、ライブラリアルーム電子情報閲覧室へと向かった。

と、その前に一度振り返る。

「先生」

「何だ？」

「その専用機。近接戦用と射撃戦用……どっちだと思いますか？」

電子情報閲覧室。

そう書かれた室内は、薄暗かった。
大きく曲線を描いたコンソールに幾つものモニター、そして特殊強化ガラスの向こうにはスパコンが設置されている。

此処は通常の資料室とは異なり、許可を得ないと使用できない場所である。
それはここに、アクセルレベルコードの設定がされている点からもよく分かる。

「では、操作はこちらですので織斑君は、そこに座っていてください」

「分かりました」
真耶はコンソール前のシートに座ると、IDカードをリーダーにスラッシュし、OSを起動させる。

春斗はその左隣の席に着き、その作業を何と無しに見ていた。

動くたびに揺れるたわわな果実に、春斗は眼福といった表情である。

『うーん、素晴らしい眺めだ』

『これ、俺の体なだけ!? マジで色々と自重してくれない!』
『?』

『やだなあ。自重しなかつたらこんなもんじゃないよ?』

『もうやだ、このリアル変態紳士』

「じゃ、早速再生するけど……良いかな?」

「ええ。お願いします」

そして、正面のモニターに映像が流れ始めた。

『これが、《ブルー・ティアーズ》。セシリアのISか』
『見たところ第三世代……思考性無線誘導兵器の実験機、つてところかな？あれはかなり厄介だ……』
『あんなそこら中から撃たれたら、躲すだけで精一杯だぞ！？』
『だけど、掻い潜らなければ勝機はないよ？』
『そんなの出来るのか？』
『それを、これから考えるのさ』
食い入るように、春斗はその記録を見つめていた。

戦闘時間は4分22秒。

再生を終え、真耶が振り返った。

「じゃあ、これでいいかしら？」

「もう一度。最初からお願いします」

「えっ……もう一度？」

春斗は口元を手で覆うような姿で、画面から一切視線を外さずにいた。

無言の圧力に負けて、真耶が向き直った。

「じゃ、じゃあ……もう一度ね？」

そうして再び始まる映像。4分22秒後に終了した。

「じゃ、じゃあこれで……良いかしら？」
「……もう一度、お願いします」
「ええ……！？」

二度始まる戦闘映像。やはり同じように終了した。

「えっと、これで……」
「もう一度、お願いします」
「ふええ……！？」

こうして、時間ギリギリまで繰り返された戦闘映像。
一時間半程の時間を、春斗は微動だにせずに映像に集中していた。

「……じゃ、じゃあ……これで時間だから……もう、良いわよね
……ね？」
「……はい。ありがとうございました」
「はづうづう……」

春斗の（全く意識していない）プレッシャーに気圧され続け、真耶

はグツタリと崩れたのだった。

学園寮は、校舎から50メートル程離れた所にある。

その道行を進みながら、一夏は春斗の解説を聞いていた。

『まず、メイン武装のライフル《スターライトmk?》の威力は洒落にならない。直撃を喰らい続ければ、数分と持たずに落とされる』

『要注意か……で、例の無線誘導兵器は?』

『《ブルー・ティアーズ》は、数は多いけど一発の威力は低いと思う。躲し難いのは、四機が見事にコントロールされているからだ。被弾覚悟で一機潰せば、戦局は有利になるだろうね』

『肉を切らせて何とやらか……いいね、そういうの。嫌いじゃないぜ?』

『勝利の鍵はどちらも《ブルー・ティアーズ》にある。制する前に落ちるか、その前に攻略するか……勝負だね』

『……負けたらどうしよう?』

『その時は一夏が手練手管を尽くして、セシリア・オルコットを籠絡してしまえば良いだけさ』

『俺は何処のナンバーワンホストですか!? そんなの出来る訳無

「いだろ!?」

そう一夏が言うと、春斗は深々と溜め息を吐いた。

『君はあれだ、二丁目にでも行って、新しい自分でも見つけてきたら良いんじゃないかな?』

『どんな自分探しですか、それ!?』

相も変わらずの漫才をしつつ、気が付けば寮の中。

それも部屋の前まで来ていた。

「いつの間に……」

『これが噂のキング・クリスタル……!?』

「それ、何か違うないか……?」

『ん、違ったつけ?』

ともかく、鍵を使いドアを開ける。

「おお……これはすごいな……!」

『流星は国立。金が掛かっているね』

室内には調度品のようなものは殆ど無く、代わりに大きめのベッドが二つ、仕切りのような物を挟んで置かれている。

そして、その向かい側には生徒が使用する為のデスクがある。

どれも安物ではないと、見ただけで感じられる一品だ。

知らない人間に部屋の写真を見せれば十中八九、ホテルの部屋と答えるだろう。

バッグを適当に置き、早速ベッドに座ってみる。

「うおっ、このベッド凄えフカフカだ！！もしかして羽毛か!？」

『僕は布団派なんだけどな。ま、贅沢は言えないか』

『いや。言ってるからな、贅沢?』

「誰かいるのか？」

一夏がベッドの感触に感動していると、入口の方から声がした。

通路横のドアが開き、蒸気が室内に流れこんでくる。そこはシャワールームのようだ。

(ま、まさかこの展開は……!?)

このIS学園には極々一部の例外を除き、女性しかない。その極々例外は、ここにいる一夏である。

「ああ、同室になった者か。これから一年宜しく頼むぞ」

使用されていたシャワールーム。そこから出てくるのは当然

「こんな格好で済まないな。私は篠ノ之 ほう……………」

「『あつ……………』」

「でえええええいッ!!」

奥のベッドに置かれていた胸着袋に差されていた木刀を引き抜き、返す刀で、踏み込み突きを打ってきた。

「だあっ!?!」

『おおっ!?!』

一夏はギリギリで躲し、そのまま廊下に向かって走る。

春斗が奇声を上げているが、そんなのに構ってはられない。ドアから飛び出し、急いで閉じる。

「はあく、危なかった……」

安堵の溜息。が、すぐに体を戦慄が襲った。

「ヒッ!?!」

ドゴンッ!! という音と共に、顔のすぐ横を木刀が突き抜ける。

『まだ来るぞっ!?!』

「よっ、はっ、とっ、なんとおっ!?!」

次々に襲ってくる突きの嵐。最後はゴロゴロと、廊下を転がって躲す。

「こ、これは普通に即死レベルだろ……っ!?!」

『容赦無いなあ……うん、やっぱりほーちゃんは素敵だ』

「遅しいね、ほんとに!?!」

「なにになに?」

そんな騒ぎを聞きつけて、わらわらと人が集まってくる。

このIS学園には極々一部の(略)。
その極々例外(略)。

「あゝ、織斑君だゝ！」

「えゝつ、ここが織斑君の部屋なんだゝつ！ いい情報、ゲットしちやっただゝつ！」

「うわつ……ああつ！？」

やって来た女子達は皆、くつろぎモード。当然の事ながらラフというか、警戒心希薄な格好である。

身を屈めてきた女子の胸元が思いつきり見えてしまい、一夏は慌ててドアにすがる。

「箒！ 箒さん！？ 入れてください！！ 今すぐにつ！！ 謝りますから！ このとーりつ！！」

両の手を合わせ、ドアの向こうの天照大神に祈る。

すると、刺さったままになっていた木刀が抜かれ、天岩戸が静かに開いた。

「入れ」

何故か剣道着に着替えた箒が、それだけを言って、奥へと戻る。

「お、おう……」

一夏は、恐る恐る中に入った。

穴だらけのドアを閉じ、女人地獄からの解放に一息つく。

箒は奥のベッドに腰をおろし、まだ解けていた髪を結んでいた。

「あつ、奥のベッド狙ってたのに……」

『いや、そこを気にするタイミングじゃないよね？』

そう。気にするのはそこに座っている人間のことだ。

「……お前が、私の同居人だというのか？」

「何か、そういう事らしいぞ……？」

『神の采配に感謝だな』

『お前はちよつと黙れ』

「どういうつもりだ……？」

「は……？」

意味が分からず、聞き返す。

「どういうつもりかと聞いている！」 男女七歳にして同衾せず、常識だぞ！？」

「何時の時代の常識だよ、それ……」

『いや、ほーちゃんの言うとおりだ。一夏、しっかり反省しないと』
『お前は箒マンセーか！？』

『当たり前じゃないか。ほーちゃんの味方以外、何になるっていうんだ？』

『取り敢えず、双子の弟の味方になってくれ』

『却下』

『分かってたよ畜生！！』

などとやりつつも、一夏はこの状況について考えてみる。

「確かに15歳の男女が同棲……いや、同居は色々問題があると思っけど……」

『いや、何も問題はない！！』

『黙れ』

『はい』

織斑春斗。引き際を弁えているオープンスケベである。

「お前が……希望したのか？ 私の、部屋にしると……？」
「は……？」

また意味の分からないことを箒が言い出したので、一夏は首を傾げた。

「何言ってるんだ？ そんなバカな事いう訳が無いだろう？ 春斗じゃあるまいし……ってえ！？」

いきなり木刀が頭目掛けて襲ってきた。

反射的に手を伸ばし、それを挟んで受け止める。

「バカ……バカだと……？ フッフ……そうか、お前は……そう言うのか……！」

受け止められた木刀を、箒はジリジリと押していく。

『これは……柳生新陰流、無刀取りの極意……！ 一夏、おぬしやるようになったのお……』

『訳分らんこと言っでないで助けてくれ……！……！……！』

『一発喰らえば？』

『死ぬから！？ それ死んじゃうから！？』

その間にも、ギリギリと箒が自重を預けてくる。

「わっつ、篠ノ之さん、だいたぐんっ……！」

「抜け駆けはするいよっつ？」

「っ……！？」

ドアから盗み見ていた女子が、やいのやいのと言ってきた。それにハッとして、箒は慌てて一夏から離れる。

「あ、終わっちゃった〜」

「あゝあ、いいところだったのに……」

ボタン、とドアが閉じられる。

『オートロックじゃなかったのか、ここ……』

「オートロックだったら死んでたぜ……」

アナログセキユリティ万歳。一夏はそう心の中で叫んだのだった。

一先ず休戦となり、ベッドに座って向かい合う二人。
日々を暮らすに辺り、色々決めておこうと筈が提案したのだ。

「まずはシャワーの使用時間だ。私は7〜8時。一夏は8〜9時だ」
「俺、早い方がいいんだけど……」

「私に部活後、そのままにいるというのか!？」

「部活棟にシャワー、あるんじゃないか?」

「私は……その、自分の部屋でないと落ち着かないんだ!」

「そんなもんかね……ま、俺もトイレは学校よりは家の方がいいけどな」

ここで何故、トイレに話がスライドするのか。
そこが、織斑一夏クオリティである。

「そつだ。ここつて、個室にトイレないんだつて？」

「ああ。トイレは廊下の両端だ」

「おいおい……俺、どうすればいいんだ！？ まさか、そこを使えとか……つたあつ！？」

いきなり顔に木刀が突き刺さる。

「しばらく見ない内に変態趣味に走るようになったか……一夏！」

「何でそうなる……？」

「女子のトイレに入りたいなど……変態趣味以外のなんだ！！」

「俺にそんな、春斗みたいな趣味はないっ！」

「春斗にそんな趣味がある訳がないだろう！ お前と一緒にするな
！！！」

『全く、何て失礼な奴だ』

『春斗……後で覚えてろよ』

そんな内に、箒の中で再開のゴングが鳴っていた。

「そこに直れ一夏！！ その性根、この場で叩き直してくれる！！」

「っ！！ そう何度も」

一夏は箒の胴着袋に差されてあつた竹刀を掴んだ。

「やられるかよっ！」

さあ来いといわんばかりに構える。と、何か見慣れないものが先っ

ちよにぶら下がっているのに気が付いた。

「何だ、これ……？」

それを手に取る、スベスベとしながら柔らかく、時折、芯があるような硬さがある。

「見るなああああああああああつ！！」

箒が真つ赤になりながら、一夏の手からそれを引つ手繰った。

『……一夏、今のブラジャーだよ』

「箒……お前……」

謎の物体の正体を知り、一夏はしみじみと思った。

「……………ブラジャー、着けるようになったんだな」

パソコンッ！！

直後。

顔面に痛烈な痛みを受け、織斑一夏は大の字に倒れた。

『今のは、一夏が悪い』

第3話 初日終わって日が暮れて（後書き）

ということ、初日終了。

春斗の暴走ぶりは誰に求められない！

勿論、一夏の体だからこそ、自重しないんですよ？

次回からは知性派（笑）の彼に戻ってくれるでしょう。

第4話 白き鋼翼、来る（前書き）

日常編ラスト。

「篤さん、マジ乙女^{ヒロイン}」と言って頂けたなら成功です（何が？）

第4話 白き鋼翼、来る

「痛て……おい篤、幾ら何でもやり過ぎだろ!？」
真つ赤になった額をさすりつつ、一夏は文句を垂れる。が、仕切向パーティーション
ここの篤は黙ったままだ。

『ダメだ。完全に怒ってる……』

『一夏が悪いんだから、何とかしなよ。これから一緒に暮らすのに、こんな状況は嫌だよ?』

『む、どうすっかな……』

篤が激怒して以降、春斗の機嫌も悪い。

昔から春斗と篤は仲が良かったからだと、一夏は思い出しつつ、この状況をどうするか考えた。

春斗に言われずとも、一夏だってこんなのは望んでいない。

せつかく再会した幼馴染なのだ。出来るなら仲良くしたい。

どうするにも、まずは相手がリアクションしてくれないと、どうにもならない。

なら、どうすればリアクションしてくれるか。

「……あっ、そうだ」

一つ思い出した事があった。一夏は運ばれてあった段ボールを開け、

中身を漁る。

「良かった、入ってた……！」

早速一夏はそれを取り出し、箒に話し掛けた。

「箒、ちよつといいか……？」

「……」

リアクションは、やはり無い。が、それでも一夏は続けた。

「お前に渡したい物があるんだ」

「……… いらぬい」

今度はリアクションあり。だが、動く気配がない。

仕方なく、一夏は最後の札を切る。

「俺からじゃなくて……春斗からなんだけど」

少しすると、ゴソゴソと動く音。そして仕切パーテーションがゆるゆると開けられていった。

「春斗から……？」

「……… おう」

分かってはいたが、どうにも釈然としない。

自分にはいつもツンケンして、怒鳴って、竹刀で叩いたり何だりしてくるくせに、春斗には豪く素直なのだ。

子供の頃、道場でしこたま打たれて、さんざん口うるさく言われたそのすぐ後、道場前で箒と春斗が楽しそうに会話していた。

その時の箒は自分に見せたことがない、素直な笑顔を春斗に向けていたので、良く覚えている。

あの後、箒に「もしかして、春斗が好きなのか？」と聞いてみたら、顔を真っ赤にして何発を頭を叩かれた。

（その際、箒に「バカ者」「この朴念仁」「鈍感男」などと罵られた）

六年経った今でも、箒は春斗の名前だけで態度をあっさりと軟化させた。

なぜか、悔しい。

そんな内心を余所に置き、一夏は手にしていた物を差し出した。

「これ、春斗から。剣道大会優勝のお祝いだって」

「そうか……態々、すまないな。開けても良いか？」

「ああ。春斗がきつと、箒に喜んでもらえるって自信たっぷりを選んでんだぞぞ？」

「ほう……っ！？」

包装を解いて木箱を開けると、そこには木製の櫛と金色の液体が入

つた、小さな瓶が入っていた。

「これは……柘植の櫛と、椿油……しかも、祇園の老舗物じゃないか！」

「もしかして高いのか？」

「いや、そこまで高くはないが……安い訳でもない。ただ、手に入り難い品の筈だ……」

『そうなのか？』

『色々探したらあったんだ……運が良かったよ』

箒は手の中の箱を見つめて嬉しそうにしていたが、やがて顔を上げた。もう機嫌は直ったようだ。

「なあ、一夏。春斗の連絡先を教えてください。お前の家の電話番号、忘れてしまつてな……春斗にお礼を言わないと」

「あゝ、いや……それは……無理だな」

「何故だ？ まさか、自分の家の番号を知らない、などとは言つまないか？」

「言わないって。あいつ……今、入院してるんだ」

「なつ……！？ 何時からだ！？ そんなに悪いのか！？」

突然の告白に箒は動揺する。それを心苦しく思いながら、一夏は”台本”を読み続けた。

「いや、そんなに悪い訳じゃないよ。でも昔っから体が丈夫じゃなかったし……少し体調が崩れたただけだ」

「本当か……？」

「ウソ言つても仕方ないだろう？」

「そ、そうか……そうだな。良かった、大事なくて……」
箒は落ち着けたのか、安堵の溜息を吐く。

「で、それに加えて……俺がこんなになつちまつただろ？」

「こんなん？ ああ、男性初のIS操縦者か……」

「そんなもんで、あいつも今は政府が保護しているんだ。もし、I

Sを動かせるのが遺伝子的な要因だとしたら、次に動かせるのはあいつかも知れない。

もし動かせなくても、一卵性双生児の俺とあいつで違いを比べれば、俺が動かせる秘密が分かるかも知れないんだと

「な、なるほど……」

篤は一夏の言葉に納得したように頷いている。

説得力があるのも当然。この”台本”は春斗が、事実を織り交ぜて書き上げたものだ。

実際、春斗は”入院”しているし、”政府の保護下”にもある。

「で、居場所を知られない為に、連絡は俺と千冬姉だけが許可されてるんだ」

「そ、そうだったのか……ならば、仕方ないな。では一夏、祝いの品は有難く受け取ったと伝えて欲しい」

「……分かった」

何とか篤の機嫌が治ったらしく、安堵と共に疲れがドッと吹出し、シャワーを出てすぐ、一夏は眠りに落ちてしまった。

電気は消え、枕元のスタンドだけが明かりとして灯されている。

「……………」

箒は引き出しから、一つの写真立てを取り出した。

そこには頬を赤くしながらもブスツとしたような表情の自分と、その右隣にピースサインをしている元気良い少年が写っている。どちらも道着を身に付け、竹刀を手にしていた。

そして、左隣。

そんな二人に苦笑いしている、一夏と似た顔立ちの少年がいた。その手には和弓が握られている。

「春斗……………」

箒にとつて、春斗はとても大切な幼馴染である。一夏と比べたらと聞かれると困るが、それでもだ。

天才、神童などと呼ばれながら、自分の才を鼻にも掛けず勉強家で、努力家で、尊敬さえしている。

そして 自分の恋心を知る、多分唯一の男子。

一夏に対して素直になれず、その都度後悔する自分を、何時でも慰めてくれた。

二人はいつも一緒に、一夏がこの学園に来ると知った時、春斗も一

緒だと疑い無く思ってしまった。

その二人は今、ISによって離れ離れになってしまった。

「……………」

いつか、必ず会いに行こう。

篠ノ之 箒の幼馴染は、織斑一夏と織斑春斗。この二人なのだから。

そう、誓いを立てた。

翌日。

朝から色んなことが起こった。

箒と食堂で朝食を食べていると、そこら中の席からひそひそ話が聞

こえてきた。
まだまだ、織斑一夏は珍獣らしい。

「織斑君……隣、いいかな？」

と、そこへ同じクラスの三人がやって来たので良いよと返事をする。すると、途端に筭の機嫌が悪くなり、一人で食べ終えていつてしまった。

最後の、味噌汁一気飲みはさすがに熱かったんじゃないかな、と心配したが大丈夫のようだ。

『一夏。君はいつかきつと、撃たれるか刺されるね』
とは春斗の談。

今度はそこに、一年の寮長が現れた。なんと、驚くべきことにそれは姉の千冬であった。

白のジャージを着ていて、遅刻をしたらグラウンドを十週させるぞ、と宣告する。

ちなみに、この学園のグラウンドは一周、約5？。フルマラソン以上の距離を走らされたら死ぬだろうが、それでも彼女はやらせるだろう。

それは恐ろしいと、全員は急いで朝食の処理に挑んだ。

そして今は学園。

二日目にして、一夏の学園生活は混沌としていた。

休みの度に押し寄せるクラスメート。

「遅れは取れない」だの「このまま一気に玉の輿」だの「これでお姉さまに近づける」だの。

最後の奴、そういうのは直接本人に行けと言いたい。

それに乗じて、整理券を有料配布するのまでいた。

『「こらこら、そういうのはマネージャーを通してもらわないと』

『誰がマネージャーだよ』

そんなこんなで、午前もいよいよ最後の授業である。

授業では、コアに関する講義が行われていた。

そこで一つの問題が起こった。

IS開発者【篠ノ之 束】が、筈の姉であるとバレたのだ。

珍しい名字である以上、いつかは分かる事なのでそれ自体は仕方ない。

だが興味本位で騒がれたことが、彼女の何かに触れてしまったのだろう。

「あの人は関係ないッ!!」
一喝。それだけでシン、と静まり返る。

「声を荒らげてすまない。だけど、私はあの人じゃない……教えられるような事は、何も無い……」

姉に対する明確な拒絶。いや、敵意に近いほどの感情。それを吐き出すと筈はつい、と窓の方を向いてしまった。

まるで、今の顔を一夏に見られたくないかのように。

『どうしたんだ、筈？ 東さんとそんなに仲、悪かったか……？』

『……少し、分かる気がする』

『どういう事だ？』

『東さんは唯一、ISのコアを作る人だ。その存在は国家、企業にとって計り知れない価値がある。』

『そんな超重要人物が行方不明になったら……どうなると思う？』

『どうなるって……どうなるんだ？』

『当然、その行き先を調べようと動く。そして、まずは家族に取り調べが行くだろうね』

『取り調べて……何だよそれ！？ まるで犯罪者扱いじゃないか』

「!」

『ヘタをしたら他国に亡命。最悪はどこぞの死の商人が、身柄を押さえてしまつかも知れない。手段なんて選んでる余裕はないよ』

『……………だからか?』

『多分ね。僕や一夏だって、色々好き勝手に調べられたじゃないか

……………あいつらに』

『そついや、そつだったな……………』

もう一度、一夏は筭を見る。

「……………」

その後姿は何処か寂しげであった。

『一夏……………?』

『分かってるって』

授業も終わり、昼休み。

一夏は早速、先程のフォーローをするべく動いた。

『僕はちよっと《心の海岸》まで降りてるから……………後はよろしくね?』

『了解。対策、頑張っつて練ってくれよ?』

心の海岸とは一夏らが使う、深層領域の名称である。

普遍的無意識『心の海』に掛けて、表層の意識の一番下をそつ名付けたのだ。

ここまで降りると、視界共有などの外界干渉を受けなくなる。

一夏にとって退屈極まりない場所なのだが、春斗にとっては考えを纏められる絶好の世界らしい。

席を立ち上がってみれば、箒は昼休みだというのに座ったまま、窓から空を見上げている。

他のクラスメート達はというと、若干箒に近寄り難い印象を持ってしまっているようで、遠巻きにしている。

(さてと、春斗のように頑張ってみますか)

「聞きましたわよ?」

と、そこに現れたのは、およそ一日ぶりのロールさんだった。

「……何を?」

「学園から専用機が用意されるそうですわね。流石に、専用機対訓練機では相手になりませんもの」

セシリアがそう口にする、クラスからざわめきが起こった。

(言えないな。春斗が最悪、訓練機でも勝つ方法を模索してるなんて……)

状況は、最善と最悪を常に想定して考えるべし。そんな理念の基、春斗は今も戦術研究中である。

「せいぜい、専用機を仕立てるのを頑張ると良いですわ。この私の477時間を目指して」

「……？ おう、そうだな……」

「あなた、やはり私をバカにしていますわね……？」
そんな事はない。普通に、その時間の意味が分からないだけである。

「では、ごきげんよう。試合が楽しみですわ……！」
セシリアは腰に手を当てて一度高笑うと、そのまま教室から出ていった。

『何、今の高笑いは……？』

『あれ、まだ落ちてなかったのか？』

『いや、落ちてただけ………そこまで聞こえてきた』
「………恐るべし、セシリア・オルコット」

セシリアの事はさて置いて、一夏は篝の席へと向かった。

「篝、今日は食堂に行ってみないか？」

「………行かない」

予想通りの返事。やはり、ヘソを曲げてしまっているようだ。

昔から篝は、いつの間にか集団から外れる事が多々あった。

その度に、一夏や春斗が迎えに行っていたものだ。

「まあ、そう言ったって。ほらほら、立った立った」とはいえ、今は春斗はいない。一夏は筭の腕を掴むと、強引に引き上げてやる。

「なにをっ……こら、腕を組むなっ!」

「なんだ、自分で歩きたくないのか? だったら、おんぶぐらいしてやるぞ?」

「なっ……!!?」

「おーい、誰か一緒に食堂行かないか?」

顔を赤くする筭を無視し、クラスメイトに声を掛けてみる。

「はいはいはいっ!」

「行くよー、ちょっと待ってー」

「お弁当あるけど、行きます!」

早速、返ってきた返事。

それは朝、一夏の隣りに座った三人組。

(一夏命名 のほほんさんとその御一行。 のほほんさんとは、真ん中の子である)

「よし。それじゃ、行こうぜ?」

「だから……行かないと言っているだろう!!」

強引に腕を引っ張ると、筭がいきなり駄々をこねる子供のように叫んだ。

それも只の駄々ではない。

一夏の腕を掴み返し、ひねり上げ、体を入れ替えて投げやっただ。

「ぐお……っ!?!」

ギリギリで受身を取るも、痛いには変わりがない。

箒が一瞬、「しまったっ!?!」という顔をするが、すぐにパイと横を向いてしまった。

そんな光景にクラスがシン、となってしまった。

「痛てえ……箒、随分腕上げたな?」

「……フン。お前が、弱くなっただけだろう……?」

パンパン、と埃を払いつつ立ち上がると、箒はそっぽを向いたまま、言葉とは裏腹に、ばつの悪そうな顔をしていた。

「あゝ、私達やつぱり……」

「今日は遠慮、しておこうかなあゝ」

「え? 何で?」

「……いいから来るの?!」

のほほんさん（本名は布仏 本音らしい）はさながら、捕獲された宇宙人のように二人の友人に連れて行かれてしまった。

「……」

せつかくこれでクラスの微妙な空気を脱せる筈だったのに、箒がそれを壊してしまった。

少しだけむっとしながら、そしてそれ以上に、箒を如何にかしてやらないとという気持ちで、一夏を動かした。

その手を、ガシリと掴む。

「っ……は、離せっ!」

箒がそれを振り払おうとするより早く、一夏の言葉が彼女を制する。

「箒」

「っ……………!!」

「 飯、食いに行くぞ」

「あっ……………」

抵抗がなくなる。そして一夏は箒を引いて食堂に向かった。

「あゝ、こりや凄い。五反田んちの食堂の何倍あるんだ、ここ………?」

一夏は、中学で知り合った友人の実家を思い出して呟いた。

「おい一夏。いい加減に手を離せ……………」

「え? ああ、悪い」

パツと手を解放すると、箒はその手をさつと後ろにしまった。

「さて、何にする? 日替わりは塩鯖定食か……………これでいいか? 何でも食えるだろ?」

「人を犬猫のように言うなっ! 私にだって好みがあるんだ!!」

「よし、日替わりを二つにしよう」

「人の話を聞いているのか、お前は!?!」

「聞いてねえよ。なんだよ、さっきから……………お前、俺がどれだけ温

和に接してやっつてると思ってたんだ？」

「そんな気遣いを頼んだ覚えはない！！」

「俺も頼まれた覚えはねえよ。でもな、長い学校生活に友達がいなかったら………：すげえ暗くて、寂しいんだぞ？」

おばさん達には世話になったし、なにより幼馴染で同門なんだ。世話ぐらい焼かせるよ」

「っ……………」

その時見せた一夏の顔に、篤はハツとした。

一夏の性格なら、きっと友人は多くあっただろう。

だが今、一夏はその時を振り返り、とても悲しい表情を見せていた。

一夏がそれ程に思いやる相手。

一人だけ、それに思い当たったのだ。

『あいつ………今、入院してるんだ』

(春斗の事なのだな、一夏………)

生まれた時から共に過ごしてきた半身。

彼は今、白いベッドに横たわり何を思っているのだろう。

自由に空を飛ぶ権利を与えられた、双子の弟に対する嫉妬？ それとも、純粹にそれを祝福？

決して叶わない願いに心を焦がし、空を睨んでいるのだろうか。それとも、ただ己が身を呪い、何も想うことを諦めようとしているのか。

箒は知らない。転校してからニュースに上がるまでの一夏の事を。

あの一夏が、これ程に思うだけの事がきつとあったのだ。

「……………」

「箒……………」

箒はおもむろに券売機に近づき、ボタンを押した。

「……………」ならせめて、私のはこっちの焼き魚定食にしろ」「カタン、と券が落ちてきた。

「おおっつ、これは美味そうだね、おばちゃん！」

「美味しそうじゃなくて、美味しんだよ」

やって来たプレートに一夏はまた、驚きの声を上げると、食堂のおばちゃんが快活に笑った。

「じゃあ、しっかり食べて頑張んなさいよ」

「おう、頑張るよ！」

「それと……」

おばちゃんはシャモジを一夏に突きつけて、言った。

「お残しは、ゆるしまへんで？」

「了解、心配ナツシングだよ」

箸が来るのを待ってから、一夏は席を探す。

昼時の食堂はなかなか盛況で、パツと見は席がないように思える。

取り敢えずふらついていると、目の前で席が丁度空いた。そこに二人は腰を降ろした。

流石は国立。料理の味も申し分なく、一夏はパクパクと塩鯖定食を攻略していった。

「一夏、もうちょっと噛んで食べる。それでは消化に良くない」

「大丈夫だつて。こちとら男の子だぞ？」

「意味が分からんぞ、それは？」

箸の調子も少しは平常になったらしく、早速今日の特訓の事を話し

た。

「…………練習機を借りれたのか？ 昨日の今日で随分と早いな…………」

「どうも、候補生と世界唯一の操縦者の良いデータ取りがで出来るから、みたいだな…………放課後は頼むぞ？」

「任せておけ。剣の腕ならまだしも、ISで遅れはとらん」

「お、おう…………頼むぜ？」

その言い方では、剣道全国制覇の筈より、自分の方が腕前があるように聞こえるが、気のせいだろうと一夏は思い直した。

それが気のせいでないとするのは後、数時間後の事である。

「……………どういう事だ？」

放課後のグラウンドに、箒の呆れとも怒りとも知れない声が響いた。IS《打鉄》を身に付けた彼女の視線の先には、同じISを付けた、息を荒れさせて倒れている一夏がいた。

「何故、こんなにも弱くなっている……………？」

「……………受験勉強してたから？」

「……………中学は、何部に所属していた？」

「帰宅部。見事、三年間皆勤しよおおおおっ！？」

ドスンッ！！

いきなり振り下ろされた太刀を、横に転がって躲す。

「おまつ、危ないだろ今は！？」

「黙れ！ よくもその鈍りきった頭と体であれだけの事を吹いたものだな！？」

「いや、それは……………あははは……………」

正直、小学校の終わり頃に何もなければ、きっと剣道部に入っていただろう。

だが、中学に上がってからは家計を助けるためのバイトで、部活どころではなかった。

朝は一夏の新聞配達。学校が終わって帰ってきてからは、春斗が簡単な外国文翻訳のバイトをしていた。

剣を振る時間がなかった以上、鈍っているのも仕方ないのだ。

「鍛え直す」

「え……………うがっ！？」

と、疑問を口にする間もなく、箒の太刀が一閃。立ち上がっていた一夏をはじき飛ばしていた。

更に箒が追撃を掛ける。袈裟懸けに振るわれた一撃を、一夏はギリギリで防御した。

「おまつ、だから危ないっての!!」

「ISを使つて近接戦闘訓練をし、武器を振るう感覚を体に覚えさせる……春斗がそう言ったのだろう?」

「そ、そうだけど……?」

ギリギリと、刃同士が擦れ火花が散る。

「そして、その相手に私を指名した……そうだな?」

「あ、ああ……くっ!」

箒には、この練習を提案したのが春斗であると伝えてある。

そして今の一夏は錆だらけの刀も同然である。基礎体力がある分だけ、救いはある。

ならば、自分の役割はそのサビを徹底的に落とすことだ。そう、箒は解釈したのだった。

「いや、だからってこれは危ないんじゃないかな?」

「大丈夫だ。春斗が考案したのなら、間違いなどある筈がないだろう?」

「どんだけあいつを盲信してるんだよ、お前は!」

「少なくともお前の数百、いや数千倍は信用がおける。春斗が”お前が勝つ為”に苦しい病の床で考えた特訓だ。ならば疑う余地など微塵も無い!!」

「自信満々に言つな、畜生!」

その前に、箒の頭の中では春斗はどんな状態になっているのだろう。まるで、不治の病にでもかかっているかのような言い草だ。

「つゝつゝはいだらアツ!！」

一夏は罅迫り合いから体を滑らせて箒を弾き、一度間合いを離す。

「上等だ!! だったら、とことんやってやる! こい、箒ツ!！」

「いい覚悟だ……手加減はせんぞ、一夏ツ!！」

澄んだ金属音が、何度も響き渡った。

そんな感じで時はあっという間に流れる。

時刻は、翌週月曜の放課後。場所は第三アリーナへと移動する。

「……………まだ来ないのか？」

『専用機を一週間で用意……………てのは、流石に無理があると思ってたけどね』

一夏と春斗、そして篤は専用機の到着をピッチで待っていた。

本来、専用機とは個人の為に用意されるのではなく、専用機があつて、その所有権を争う形が多い。

前者のケースでも最低、一ヶ月の時間を掛けて準備がなされるものだ。

それを四分の一で。そこに春斗は不安があつた。そして見事的中した。当たって欲しくない事程、よく当たるものだ。

専用機の到着時刻はとっくに過ぎている。

というより、試合開始時間そのものが目前になっている。

念のため打鉄も用意してもらってあるが、やはり練習機では心もとない。

「織斑君、織斑君、織斑君っ！！！」

一夏を呼びながら、息と全ての男子の夢を弾ませて、我らが癒し系教師 山田 真耶が走ってきた。

「はあく、はあく、ぜく、ぜく。き、来ました……来ましたよっ！！！」

「北からですか？」

「いえ、西からですよ？ とにかくお待ちせしました！ これが、織斑君専用のISですっ！！！」

さり気無く言ったギャグは、さり気無いままにされてしまった。

ピット搬入口が開く。

「」

そこには、全く飾り気のない『白』が存在していた。

その名は《白式》。

天に舞う翼と、その身を包む鎧。全てを白で埋め尽くした一夏のための『白』。

不思議だった。一夏にはそれが、ずっとこうなる事を待っていたような気がした。

そう、全ては、必然であるかのように。

「時間がない。フォーマット 初期化と最適化は実戦でやれ」
千冬がそう宣告する。

時間は既に開始数分前。全てがギリギリだ。

『一応、予測の範囲内だ。一夏、すぐ装着だ!!』
『おうっ!』

乗り込むために機体に触れる。と、初めてISを起動させた時みたいな、あの痺れるような感覚がなかった。
代わりに、とても馴染む。まるで長い間使い続けた愛用の道具を使ったような感覚。

「そうだ。白式に背を預けるようにしろ。セッティングは白式が自動です」

奇妙な感覚を気にしながらも、一夏は白式に搭乗した。

足を通し、手を通すと、自分の体が大きくなったような感覚が起る。

そして空気が抜けるような音がして、一夏の体を装甲が包んだ。

すべてが融和し、融合し、一つへとなっていく。

ハイパーセンサーが世界をクリアにし、自分を中心とした360度全てを把握させる。

力が溢れ、世界が閃いていく。

戦闘待機状態のIS 《ブルー・ティアーズ》を確認

映し出されるデータはまるで昔から見慣れた物のように、違和感なく認識される。

「ハイパーセンサーはちゃんと機能しているな。気分はどうだ、一夏？」

センサーがなければ分からないほどに微かな不安。だが”織斑”ではなく”一夏”と呼んでいるだけで、彼には姉の心情が審に分かった。

「大丈夫、問題ないよ」
安心させるように、頷く。

『これが専用機……白式か。凄いぜ、春斗！……春斗？』

春斗に呼びかけるが反応がない。どうしたのかと思っていると、突如として一夏の前に無数の画面が立ち上がった。

「う、うわぁっ！？ 何だア！？」

「どうした一夏！？ システムトラブルか！？」

『あ、ゴメンゴメン。今消すから』

春斗の声が出たかと思うと、立ち上がった画面がドンドンと閉じられていく。

『お前、何やったんだ？』

『うっん、なんで知らないけど……』

『……………？』

『僕、白式に取り込まれたみたい』

「はぁっ！？」

突然過ぎる告白に、思わず声が出ていた。

一夏が白式を起動させた直後、春斗は強力な引力に引っ張られた。抗うことも出来ず、共有していた視界は遙か彼方に消え、代わって闇の中に白い流星が飛び交う。

「こ、これは……何だっ!？」
徐々に流星が闇を埋め尽くしていく。そして世界がまばゆい白に染まった。

「……………っ!？」

その光の中で、春斗は亡霊を見た。
白い鎧を身に纏った、戦女神の亡霊を。

「ハッ!？」

慌てて周りを見回すと、そこは奇妙な世界だった。

自分を取り巻くプログラムリング。その周囲を、四方八方へと忙しく流れる電子情報の帯が走る。

春斗はそれに似た世界を知っていた。

一夏がISを初めて動かした時に感じたものを、同時に春斗は視認していた。

それが今、再び目の前に現れたのだ。

「ここは、まさかISの……白式の中なのか？」

勿論、こんな世界が実際にある訳ではない。あくまでこれは、春斗のイメージが生み出した仮初の世界だ。

「……………」

春斗はそれが何であるか最初から知っているかのように、手を動かす。

立ち上がるデータ。

戦闘待機状態IS 《ブルー・ティアーズ》確認

そのまま春斗は手を振り、あっという間に数十からなるデータを引

き出した。

機動プログラムアクセス

フォーマット
初期化スタート

ファーストシフト
一次移行データ収集開始

表層装甲 リアルタイム変化開始 ファーストシフト 一次移行データとリンク

開始

搭乗者 パーソナル認識。専用搭乗者として登録完了

面白い。

膨大な量でありながら、それがどのようなデータであるのか手に取るように分かる。

次々にモニターを立ち上げていくと、一夏のビックリしたような声が届いた。

どうやら、立ち上げたプログラムに搭乗者への通達する物があったようだ。

取り敢えず、それを切りモニターを閉じていく。

春斗がISの中に取り込まれたと告げると、一夏はまた、驚きの声を上げた。

『大丈夫なのか……？』

『さあね。今のところは問題はないと思う。なら、優先させるべきは、お嬢様のお相手だ』

『分かった。でも、何かあったらすぐに言えよ？』

『ああ。ありがとう、一夏』

春斗の事は一度置いて、一夏が体を少しだけ前方に傾けると、フワリと機体が浮かび、移動を開始した。

「一夏……!!」

後ろで直接顔は見えないが、センサーが箒の顔を捉えていた。

一見すればわからないほどだが、不安そうな顔をしている。

「『大丈夫』」

二人の声が重なる。幼馴染の少女の心を勇気づける為に。

その一言で、箒の表情は少しだけ和らいだ。

ゲートが開き、光が差し込んでくる。

そこに待つ敵はブルー・ティアーズ。自在なる攻撃を得意とする強敵。

だが、織斑一夏には恐れはない。

向こうがどれだけ凄い機体であろうとも、こちらには最高のブレーンが付いているのだ。

『僕がサポートする。一夏、作戦通り行こう!!』

『頼んだぜ、相棒!!』

『 』
白式、発進っ!!』

滑るように加速し、ピットから大空へ。白き鋼翼はついに飛翔を果

た
し
た。
。

第4話 白き鋼翼、来る（後書き）

今回はいよいよセシリア戦。

ここに来るまでえらく長かった。他の人はあんなにスムーズに行くのに何故……w

セシリアとの勝負の行方は？ そして、白式に取り込まれた春斗の運命は？

何より、色々纏めて本当に一話で終わるのか、今から不安です！！

（えー）

（ちなみにセシリアのIS稼働時間は、取り敢えず「この話ではこれ位」というだけです。公式ではありません）

第5話 VSブルー・ティアーズ/白の覚醒め(前書き)

ついにきた、セシリアとの決戦。

初期設定のままの白式で、果たして代表候補生に勝てるのでしょうか？

それではISファイト、レディーゴーツ!!!(えー)

第5話 VSブルー・ティアーズ/白の覚醒め

巨大な、スコープ付ライフルを持ち、鮮やかなブルーのフィン・アイマー 《ブルー・ティアーズ》をまとって、セシリアはそこにいた。

「逃げずによく来ましたわね。褒めて差し上げますわ」

「……………」

そんな事を褒められてもな、と一夏は思ったりした。

「……………」

何処までもそのスタンスを貫く姿勢に、むしろ感心してきた春斗。

「その勇気に免じて、あなたに最後のチャンスを差し上げますわ」

「最後のチャンス……………」

「ええ。私とあなたでは、やはり実力差があり過ぎますわ。そこで、真撃にお願いなさるなら、ハンデをつけて差し上げますわ」

『敵ISにロツク反応あり。射撃体勢をとつたな……………』

「ふう〜む……………じゃあ、せっかくだから貰っておこうかな？」

一夏は少し考える素振りを見せると、そう答えた。

会場に来ていた他のクラスメートは、そんな一夏の発言にざわめき、がっかりしたという様な空気になっていた。

「やはり男など、そんなものなのね……………それで、どれぐらいのハンデをお望みかしら？」

冷淡な瞳で一夏を見下ろすセシリア。一夏は構わず、指折り数えだした。

「えっと……………武装禁止と飛行禁止。後は回避禁止と防御禁止……………」

所で良いや」

「ええ、分かりまし……って、何を言ってますのっ!?!」

余りにあっさりと言うもので、危うく頷いてしまふところだった。

「何って………くれるんだろ、ハンデ?」

「そういうのはハンデとは言いませんわ! あなた、私に的になれと言ってるのと同じですよ!?!」

「いや、そう言ってるんだけど………分からなかったか?」

「………いいえ、よく分かりましたわ。あなたが、本気で私をバカにしているという事がっ!?!」

『一夏っ!』

警告 敵武装にエネルギー反応感知

「っとお!?!」

白式の警戒よりも早い春斗の指示に、一夏の体が動いた。

ギョウウンッ!

左に半身捻り、胸スレスレを光線が掠める。

「そんな………躲されたっ!?!」

ミドルレンジ 中距離。彼女が最も得意とする攻撃を回避され、わずかに動揺する。

ダメージ17 シールドエネルギー残量582 本体ダメージ

シ無し

「チッ、かすったか………!?!」

『いや、上等だよ。これでやりやすくなる………』

ISバトルは相手のシールドエネルギーを0にすれば勝利となる。ダメージには二種類あり、一つはシールドダメージ。

これは攻撃を受けた際、バリアーに使用されているシールドエネルギーを消耗して換算される。

二つ目は実体ダメージ。バリアーを貫通して攻撃が通った場合、これとなる。

実体ダメージはその後の戦闘に大きく影響を及ぼす。

腕に受ければ武装が、推進機関スラスターに受ければ機動力が殺される。

更にISには【絶対防御】というものがあり、それが搭乗者の命を守る。

だが、貫通した攻撃が当たってこれが発動すると、大きくエネルギーを消耗してしまう。

しかし逆を言えば、これを相手に発動させられれば逆転は可能と言える。

今の場合は、バリアーは通されたが直撃はなく、絶対防御も発動しなかった。という報告がされたのだ。

「クッ、このっ！ ちょこまかと!!」

何度もトリガーが引かれ、銃口が閃光を放つ。が、一夏はそれを数発掠めるも、直撃をさせなかった。

セシリアの主武装《スターライトmk?》はレーザーライフル。
2メートルを超える全長、六七口径から繰り出される一撃は驚異。
直径200mのアリーナで放たれば、僅か0.4秒で着弾する。

つまり回避するには予測回避しかない。

だが、エネルギーチャージに反応しても遅すぎる。
しかしハイパーセンサーではどうしても、危険度の高い情報を優先
させる。

そこで春斗はセシリアの一点、トリガーに掛けられた指に注視して
いた。

まず春斗は、セシリアを怒らせて冷静さを欠かせる。

そして怒りのままに攻撃を撃たせ、それを回避する。そうすれば彼
女は苛立ち、更に冷静さを欠いていく。

するとどうなるか。

一夏は時には空を、時にはアリーナのトラックを滑りながら、次々
に降り注ぐ光線の豪雨スコールを躲し続ける。

最早、掠める事さえ許さない完璧な回避だ。

爆風がシールドに当たって音を立てるその間も、一夏はセシリアから視線を外さない。

「どうして……どうして当たらないんですのっ!?!」

自分では訓練通り、いつも通りに撃っているつもりだろうが、指の動きが荒々しくなっていた。

照準もかなり大雑把だ。

教室で蒔いた種は、見事に目を出していた。

どれだけ優秀なシステムも、使い手次第で幾らでも上げられるし、落とせる。

例えば、怒りで冷静さを欠いた時などだ。

射撃戦闘には三次元座標認識、弾道予測、距離観測、反動制御、一零停止、特殊無反動旋回、弾丸特性、武装間相互干渉を含めた思考戦闘など、複雑な計算が行われる。

それらの情報を処理するのはISだが、それを利用するのは操縦者である。

苛立ちが募らせ冷静さを欠けば、それが更に射撃精度を落としていく。

射撃手は常に冷徹であれ。

戦いの場を支配するのは人の心理であり、武装の性能だけでは決してない。

初手の回避で甘くなった狙いは、一夏が白式の反応になれるまでの時間を充分にくれた。

『よし、だんだん白式の反応に慣れてきたぞ……!!』

『次は武装展開だ。装備は近接戦闘用のブレード一振り』

『……それだけ?』

『出来る事と出来ない事が、ハッキリしていて良いじゃないか?』

『まあ、ブレードでの近接戦しか特訓してないしな……っ!』

キィィィン……。

意識を右手に集中する。光が集い一つの形を成していく。

それは数秒を置き、一振りの刃へと変じた。

「近接戦闘用のブレード……? 射撃型の私相手に?」

「生憎と、これしか無いんでね……!!」

「フフツ……そう、そうですね……!!」

セシリアは不敵に微笑むと、距離を開けるべく上昇した。

その表情には、今までの焦りの色は無い。

相手の武器が接近戦用しか無いのならば、苛立つ必要はないと分かったのだ。

『やっぱり立ち直ったか……武装展開を遅くしたのは正解だったね』
『とはいえ、この距離は遠過ぎじゃないか?』

『次はさっきまでとは違う、本気で躲すんだ!!』
「よっしゃあつ!!」

気合を入れ直す一夏。それを悠然と見下ろすセシリア。

(私としたことが……少々、頭に血が上っていたようですわね)
射撃の基本は相手の行動予測。それだけに集中する。

「ここから、仕切り直しですわっ!!」
そして、トリガーが引かれた。

「うわっ、とあつ!?!」

『左旋回、そのまま右!! ターンだ!!』

「こなくそおっ!!」

『足を止めるな! 蜂の巣にされるぞ!?!』

「うおおおおおっ!!」

先刻までとは比べものにならない精度で、レーザーが降り注ぐ。

白式に慣れ始めた一夏であったが、躲し切れず数発の直撃を受けてしまっている。

上空から見下ろすセシリアには、それが舞踏会場で踊る舞踏家ダンサーに見えた。

ならば自分は、オーケストラ奏者だ。

「さあさあ、踊りなさい！ 私 《セシリア・オルコット》と、I S 《ブルー・ティアーズ》の奏でる円舞曲で……！」

『円舞曲なら、ヨハン・シュトラウスが良いんだけどね……っ！』

「誰だよ、それ!？」

『ウイナーワルツの……っ、一夏は知らないかっ!？』

「全然、知らないね!!」

『勉強不足だね！ 曲があるから、今度聞くといいよっ!！』

「そんな暇があつたらな!!」

一夏は回避に、春斗は情報処理に必死になりながら、軽口を飛ばし合う。

そのお陰か、二人は冷静さをキープできていた。徐々に、この攻撃にも対応出来るようになってくる。

「春斗、そろそろ……!!」

『オーケー。行ってみようか、男の子ッ!！』

「おっしやあっ!!!」

一夏はレーザーを躲すと同時に地を蹴って飛翔した。

「甘いですわ!!」

セシリアが、ライフルのスコープから瞳を外した。

『来るぞ、《ブルー・ティアーズ》だ!！』

「っ……!!」

セシリアの動きにそれを予測して、春斗は警告を出す。

フィン・アーマーから四対のビットが切り離され、飛翔する。それらが三次元軌道を描いて一夏を囲むように動き、射撃を開始した。

「つと……あグッ！」

「一、二発目を回避、三発目が掠め、四発目が背中を撃ち抜く。」

『こちらの予測より展開が速い……！？ やっぱり入試試験のデータじゃ古過ぎたか……！！』

『いや、何も知らなかったらもつと喰らってた……今度はやってみせるさ……！！』

『……なら、再アタックだ……！！』

「よおおおしッ！」

気合充分。一夏はセシリアに向かって突撃した。

ビットからビームが飛ぶ。それを最小限のブロックで受け止め、間合いを詰める。

「ダアアアアッ！」

「くっ……！？ あなた、無茶苦茶しますわね……！」

振るった刃は僅かに、セシリアの皮一枚を削るに留まる。そのまま、セシリアはビットを回収しつつ後退。

「知らないのか？ 無茶苦茶するのは……男の子にとっての褒め言葉だぜ……！」

「知りませんわよっ……！」

一夏が再度、突撃を仕掛ける。セシリアは迎撃のためビットを射出した。

『ビットの動きは修正済…… 一夏っ……！』

「よっしやあっ……！」

四方八方からのビームの嵐。

一夏は旋回してそれらの直撃を回避し、客席ギリギリを飛ぶ。目前で行われるドッグファイトに、観客の生徒から悲鳴が上がる。

『そうだ一夏！ そのまま一気に』

客席には、防御シールドが張られている。それを足場にして、一気に減速。

目の前には、追いつがってきたビット。

「ぶっ叩く!!！」

ブレード一閃。ビットは両断され、爆発。

『まずは一つ!!！』

再加速し、一気に二機目を破壊。

「これで二つッ!!！」

残るビットが、前後で挟み撃つ様に動く。

「これで……!!！」

一夏は攻撃を寸での所で躲し、距離を詰める。

『三つ目だ!!！』

横薙ぎにブレードが振るわれ、爆散。

「『これでえええええっ!!！』」

最後、攻撃を受けつつも構わず突貫。

「『ラストオオオオオッ!!！』」

全方位攻撃を目的に作られた自立行動砲台 《ブルー・ティアーズ》。
その全てが炎の中に散った。

「そんなバカな事が……!?!」

「このブルー・ティアーズは、お前の意思を受けないと動かない。そして、その制御に意識が集中するために、お前自身はその間、攻撃ができない……だろ?」

「……っ!」

「そして攻撃を確実に当てるため、本命の攻撃は常に俺の”最も反応の遠い場所”すなわち、背後から来る」

「……っ!」

「更に付け加えるなら、BT兵器の弱点は連続使用における機動力の低下だ。

《ブルー・ティアーズ》の場合、二回連続だと0、27%。三回だと1、04%、照準が甘くなる」

「そんなっ……データラメを!?!」

「そう思うなら、自分で調べてみるんだな?」
付きつけられていく弱点の数々。

しかも、自分でさえ把握しきれいでいなかった照準率の低下までも指摘され、セシリアは深く動揺する。

「まさか……初見の相手がそこまで見切ると……!?!」

「初見じゃないさ」

「何ですって……?」

「お前の動き、攻撃の癖、立ち回り方……全て調べた。この一週間、

俺は俺に出来る事は全てやってきた……お前に勝つために!!」

「っ…………!?!」

「代表なんてなりたくはないけどな……やるからには勝つ。それが俺の主義だ!!」

一夏は不敵に笑うと、鋒きんをセシリアに向けた。

「さあ、舞踏会ダンスパーティーも御開きと行こうか……セシリア・オルコット!!」

最早、敵の武器はライフルのみ。

直線攻撃だけなら、飛び込むことは容易。一夏は最短距離を一気に飛翔した。

その時、セシリアの口元が微かに歪む。

「掛かりましたわね?」

背後のユニットが稼動し、白い筒状のパーツが一夏に向けられる。

「四機だけとは、誰も言っていないせんわっ!!」

それこそ、セシリアの切り札。

自立行動砲台ではなく、砲弾として直接ぶつける弾道型ミサイルタイプ。

セシリアは命中を確信していた。

一夏は「調べた」と言っていた。つまり、入試試験の記録を見たのだろう。

だが、この弾道型ミサイルタイプは本国以外で一度も使っていない。つまり完全な

隠し札だ。

一夏は加速している。この状況では、回避は不可能。

彼女の予測は正しい。

その距離と加速度から考えれば、振り切り事は不可能。威力を考えれば、当たり前所次第では絶対防御を発動させられる筈だ。

ただ一点。相手がそれを、”予測出来ていなければ”だ。

『残念。それは予測済みだ』

「……………なっ!？」

一夏の反応は早かった。

砲筒が向いた瞬間、左への回避に入っていたのだ。

発射した時には既に直線上に姿はなく、セシリアは慌てて、その後を追わせた。

砲台のような緻密なコントロールを必要としないそれは、とても速かった。

距離を取れなければ、命中は確実だったろう。

「チエストオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

咆哮と共に、白い閃光が駆け抜ける。それは通り過ぎざまに弾道型^{ミサイルタイプ}を両断。その場で爆ぜ散らせた。

「織斑君の専用機の形が……変わってる？」

「一体、どういう事……？」

会場の誰もが、その姿に驚いた。

太陽より舞い降りたそれは、まるで太陽神^{ホルス}。

今までの無骨で機械的な姿をしていたのに対し、今の白式は洗練されたフォルムになっていた。

背部推進機関は大きく展開して白と金色の翼となった。^{スリスター}

その身を守るIS装甲は、滑らかな流線とシャープさを合わせたものへと変わっていた。

英雄物語の主人公が着る鎧の如き姿。

ヒロイックストーリー

物理ダメージは全て回復し、傷の一つさえ勿論無い。

その変化は外見だけではなかった。春斗のいる内部世界でも、それは起こっていた。

白式の変化にあわせ、世界は純白に変わった。

あれほど忙しく動いていた電子の帯は緩やかに、リングは幾重にも重なりながら、静かに流転する。

そして春斗自身もまた変わっていた。

春斗は基本、一夏と同じ服装を取っている。

肉体を持たない春斗に、身だしなみに意味など無いのだが、一夏と入れ替わった時の違和感を少なくする為にそうしていた。

内部世界に来た時、春斗は裸になっていた。

それが今は、全身を黒のスーツで包み、両指には金属製のパーツ。
手の甲には水晶クリスタル体が嵌っている。

そしてその上から、幻想世界の騎士がまとうようなデザインの白いコートを身に付けていた。

その体を薄蒼色の、半透明なスタンディングシートに預け、春斗はオーケストラの指揮者の如く、両腕を振るった。

それに合わせて、真の姿となった白式のデータが全て、そこに現れる。

360度をモニターが囲む。だが、背後のデータも全て読める。

白式は今や、春斗の存在を自身の重要なシステムとして認識していた。

「これが、僕の世界か……！」
白き世界の中で、春斗は堂々たる王者の如くあった。

「ま、まさかファースト・シフト一次移行……！？　あなた、初期設定の機体で、今まで私と戦っていましたの！？」

初期化型と一次移行済みでは、性能は段違いだ。

それは初期化と最適化に容量の殆どを取られ、操縦者へのサポートが殆ど無い状態だからだ。

それが無くなった今、あの機体のポテンシャルがどれほどのものか、想像するだけで戦慄を覚える。

「何せ、機体が着いたのが試合開始直前でさ……全部、実戦で済ませなきゃならなかったんだ」

「はっ……！　まさか……全て計算ずくで……！？」

セシリアは思い返す。今までの戦いの全てを。

攻撃に入らず、回避に専念した戦法。

開始前、そして先ほど。要らぬ口上を並べていたのは何の為か。

「全ては、この為の時間稼ぎ……！？」

セシリアは自分が最初から、相手の術中に嵌っていたと気付かされた。

武装展開 雪片式型

その出現と共に、ブレードが前後に展開。開かれたスpeesから白刃が生み出された。

刃というよりも太刀に近いそれは、鎬と呼ばれる部分から淡い光を溢れさせていた。

「これは……雪片って確か、千冬姉の使ってた武器だよな？」

『どうやらこれは、その後継らしいね。能力は……【シールド無効化】』

「どういう能力なんだ？」

『こっちのシールドエネルギーを攻撃力に変えて、相手のバリアーを無効にするんだ。』

攻撃の度にエネルギーを使うから、やるなら一気に決めないと……」

「なるほど。俺達は、最高の姉さんを持ったってことだな……！」

『今更過ぎると思うけど……その通りだと僕も思う』

「ずっと、姉さんは守ってきてくれた……でも」

いつも、何時でもそうだった。自分達は無力で、ちっぽけで、いつでもその背に守ってもらっていた。

そんな人だから、誰よりも幸せになってもらいたい。

その為に、千冬に伝えないといけない。

『そろそろ僕達も……守られてばかりじゃない』

「ああ。俺も、俺達も……『大事な家族を守ってみせる！』」

もう、守られるだけの子供ではない。だから安心して欲しい、と。

白刃を構え、一夏と春斗が叫んだ。

「何をブツクサと言ってますの!？ まだ、勝負は終わっていませんわ!！」

セシリアが内心の動揺をごまかすように叫び、砲筒を向ける。そこから四発、ミサイルが発射される。だが、それは既に白式の中にデータが存在する。そしてそれを喰らうほど、二人の意識は甘くはない。

「まずは、千冬姉の名前を守らせてもらうぜっ!！」
『弟が出来じゃ、笑い話にもならないからねっ!』
世界が眩しく、体が軽く、頭が閃く。

一夏と春斗はその感覚に、この上ない喜びを感じていた。

一瞬で加速した白式は、天空を舞い踊る。
ミサイルはそれを追い切れず、逆に一夏の斬撃の前に役割を果たせないまま粉碎された。

「ちなみに聞くけど……これって、どれぐらい持つ?」
『そうだね……彼女を倒して、7円ぐらいはお釣りが来るかな?』
「上等っ!！」 一円でも安いものはいいよな!！」
『主夫の基本だね』

「くっ……!！」

セシリアがならばと、ライフルを構え発射する。が、解放された鋼の翼は、その軌道を完全に予測。最小限の動きだけで、あっさりと躲してみせた。

「当たれ……当たりなさいっ!!」

『おっと、それは悪手だ』

既にそこは白式の射程内。ライフルという遠距離武装を使おうとするのは愚策。

一夏は攻撃態勢にあったライフルを、左腕で弾く。射線を外された光線が、会場を守る遮断シールドにぶち当たる。

「でええええええええええいっ!!」

「キヤアアアッ!!」

一撃、返す刀で二撃。たったそれだけで、セシリアの無傷に近かったシールドエネルギーはズタズタにされた。

(これ以上喰らったら……負ける!?)

セシリアは離脱を試みる。だが、速度で勝る白式を振り切る事など不可能だった。

眼前に迫った白式は刃を上段に構える。

セシリアは銃身を横にし、それを防御しようとした。

「これで……終わりだあ!!」

白刃一閃。ライフルごと、一夏はセシリアを斬り伏せた。

落ちていく。バラバラと何かが崩れ落ちていく。

試合終了。勝者、織斑一夏

（私が……負け……たの？）
何処かからその声がしたと思うと、セシリアの意識は闇に沈んでいった。

その直前に見えた　　陽光に煌めく白式を、とても美しいと感じながら。

セシリアが意識を失っていた事に、すぐに気が付いたのは春斗だった。

雪片の威力が高過ぎ、意識を失わせたのか。

出力コントロールは間違っていなかった筈だ。

ドクン。

存在しないはずの心臓が、セシリアの姿に高鳴った。

フラッシュバックする光景。

世界が崩れる様な、あの瞬間。

自分が、一夏の体を使わなければ存在できなくなった瞬間。

あの

春斗は文字通り、そこから飛び出していた。

白式が急降下した。

一気にセシリアを追い抜き、そのまま反転停止して両手を空に掲げる。

「……っ！」

ガッン、とフレーム同士がぶつかる衝撃。

セシリアを受け止め、春斗はすぐにその顔を覗き込んだ。

「しっかりしろ、大丈夫か!？」

「う……うう……?」

春斗の呼びかけに、セシリアはわずかに呻いた。そしてうつすらと瞳が開かれた。

「私……一体……?」

「良かった、気がついた……! 君は、雪片によるダメージのショックで、意識が飛んだんだ……覚えてないかい?」

「そういえば……っ!？」
徐々にハッキリしてくる意識。そうすると、今度は自分の今の姿に気が付いた。

セシリアは春斗に横抱き お姫様抱っこをされている状態だったのだ。

普通に、全身で受け止めるほうが確実だったのだが、春斗はセシリアの状態を鑑み、腕と全身をクッションにして受け止める方法を選んだだけだ。

だが、そんな事はセシリアには関係ない。衆人環視の中で、この格好はこの上なく恥ずかしかった。

「お、下ろしてなさいっ!!」

「無理に動くな! じっとして、休んでいる!!」

「っ……!!」

春斗の強い口調に、セシリアは黙らされてしまう。

「目眩はないか？ 吐き気や痛みは？ 苦しいところは？」
「だ、大丈夫ですわよ……！ それより、何故私を助けたのです？
ISを装備した状態なら、この程度の高さから落ちたところで……」
「……」
抱かれていることが恥ずかしく、セシリアはそれをごまかす為に質問をする。

「何故って……助けたかったからだよ」

「だから、何故ですの！？ 先程まで戦っていた相手をどうして……」

「……！？」

「別に、恨み憎しで戦った訳じゃないだろ？ 互いの誇りを賭けて戦った……これは決闘だろう？」

「そ、それは……そうですけど」

決闘。それはセシリアが言った事だ。確かに、恨みや憎しみで申し入れた訳ではないが、何故こうも割り切れるのか。

「それに、”助けたくても助けられない”事と”助けられるのに助けない”事は全く違う。ISが体を守ってくれても……心までは守ってくれない」

「……」

どうして、彼はそんな悲しそうな瞳をするのか。

「……もう、大丈夫ですわ」

「飛べるかい？」

「ええ……」

ゆっくりと下ろされ、セシリアは浮遊を開始する。

セシリアが彼に振り返った時、先程の悲しみの光はなくなっていた。

「……えっ？」

代わって、セシリアは驚いた。

彼は突然、深々とその頭を下げてみせたのだ。

「セシリア・オルコット、貴女は強かった。その実力、代表候補生の名に恥じぬものでした」

何故、勝利した彼が自分に頭を下げるのか。

「戦術であつたとはいえ、今までの非礼をここにお詫びします。どうか許していただきたい」

深く頭を下げたまま、彼はそう告げる。

その姿は、セシリアが最も嫌いな姿だった。その善だった。

なのに何故、自分はこの姿に気圧されているのか。

それを考え、そして気が付いた。

彼に感じる空気。それはセシリアの母と似た空気だったのだ。

卑屈でなく、ただ真っ直ぐに相手を認めて贖辞を送り、己が非礼を詫びる勇氣。

それは本国でも失われつつあった紳士ジェントルマンの姿であり、あるべき貴族ノブルの心であった。

真摯なるその振る舞いに答えられず、何が貴族か。

「……頭を、お上げくださいませ」

「……………」

彼がスツと頭を上げた。それはとても綺麗で、思わず見惚れてしまふ仕草であった。

「非礼を詫びるといふなら……それは、こちらと同じ事です。今までの事、どうかお許しください」

セシリアは静かに頭を下げた。

誰かに頭を下げるなど、考えたこともなかった。

強く、誇り高く。母の背にそれを習った筈。

「ありがとうございます、セシリア・オルコット。貴女と戦えた事を、誇りに思います」

だというのに、この眼の前の彼はどうしてこつも気高いのか。

差し出された手をじっと見てしまう。

何故、そも相手を認め、受け入れられるのか。

「……………」

セシリアは空を仰いだ。

全てが崩れていく。

IS操縦者として素人同然でありながら、勝利のためにあらゆる努力を通す意思。

戦いを終われば、その力を認め、己の非を打算なく詫びることの出来る器の大きさ。

それは、いつしか彼女の心を懲り固め、歪めていた虚飾を壊していく。

『飾り立てられら宝剣よりも、戦場で振るわれる無骨な一振りが美しいこともある』

本物の輝きの前に、虚飾はただ崩れるのみ。それは貴族の誇り、そのあり方を示した母の言葉。

そう、彼は【本物】だった。

セシリアはそっと、その手を握り返した。

「私の、完敗ですわ」

全ての虚飾を失ったセシリアの微笑は、麗しき女神のように美しかった。

第5話 VSブルー・ティアーズ/白の覚醒め(後書き)

ということ、なんとか一話で決着はつきました。

原作と違い、勝利。そしてどうなる、一夏のセシリアフラグー！

乙女なセシリアさんの登場に、ぜひともご期待くださいw

S i d e セシリア・オルコット 【世界で唯一人の】（前書き）

今回は短編です。

決闘後のセシリアメイン。

恋する乙女の姿をお楽しみください。

Side セシリア・オルコット 【世界で唯一人の】

決闘を終えたセシリアは保健室で軽い診察を受けた後、大事なしと
いうことで寮の自室に戻ってきていた。

サアアアアアアア……………。

シャワーノズルから降り注ぐ温かな雨が、陶磁器の様に白きその身
に付いた、汗と汚れを洗い清めていく。

「……………」

敗北。それも、完全に相手の術中にはめられての、完全なる敗北。
だというのに、セシリアの胸中を締めるのは悔しさではなかった。

いや、悔しさはあったのかも知れない。だがそれよりも遥かに大き
な想いが、その胸を占めていたのだ。

セシリアは英国貴族の出身。

母は女でありながら幾つもの会社を経営する女傑で、オルコット家
を守り、発展させてきた。

そして父は、そんな母に婿入りした

とても情けない人だった

と、セシリアは記憶している。

夫婦仲は、冷め切ったものであった。

名家に婿入りした父は、母に引け目を感じ、顔色を何時も伺い、母はそんな父の事を疎ましく思っていた。

それはISが開発された事でより酷いものとなった。

そんな両親を見て育ったセシリアは、何時しかこう思うようになった。

『自分はこんな情けない男を、絶対に婿にしない』と。

そしてセシリアの理想は【強い男】となった。

だが、女性優遇の時代となった今、そんな男性は何処を探してもいない。
少なくともセシリアは出会った事がなかった。

今日、この日までは。

両親が三年前、列車事故によって亡くなり、セシリアは否応無くオルコット家の当主となった。

彼女は母の残した財を、オルコットの家を守るべく、あらゆる事を必死に学んだ。

その一つとして受けたIS適性試験。彼女はそこでA+という判定を貰う。

英国政府は戸籍保護の為の様々な優遇を、彼女にした。

それはセシリアにとって渡りに船だった。

何故なら、英国政府が後見となった以上、オルコット家の財を狙う者たちは彼女に手出し出来なくなるからだ。

一時とはいえ猶予を得た彼女は、ISを学ぶために日本へとやって来た。

それは彼女にとって不本意であったが、政府の方針でもあり、従わざるを得なかったのだ。

そうしてやって来た日本。興味は少しもなかったかと聞かれれば「ノー」だ。

世界初の男性IS操縦者。その存在に興味を持っていた。

だが、いざ会ってみれば無知、無学、無礼の三拍子。

自分の器も知らない、愚か者。

期待を裏切られた。

彼に決闘を申し込んだのは、そんな身勝手な思いからであった。

でも、それこそ思い違いであった。

彼は強かった。自分の知るどの男性よりも。

逆境に屈せず、抗うことを諦めず。

「俺も……俺達も、家族を守る!!」

確固たる信念を抱き、揺るがぬ決意を輝かせる強い瞳。

荒々しく刃を振るう姿は、空の王者 大鷲のようで。

「ありがとう、セシリア・オルコット。貴女と戦えた事を、誇りに
思います」

かといって、決闘が終われば自分を助け、己の非を謝罪し、相手を
称え認める心を持つ。

卑屈ではなくただ純粹に、自分の信念の下に示す誠意。

その姿は悠然と空を滑り飛ぶ、飛燕のようで。

父とは違う、雄々しい男としての強さ。
母と同じく、理知的なる貴族としての強さ。

それを彼は持っていた。

「織斑一夏……」

その名を一度呟けば、天を舞い踊って白刃を振るう姿が思い浮かび、
ドキッ、と胸が高鳴る。

「織斑一夏……」

その名を二度呟けば、差し出された手と共に優しく微笑むその顔が
浮かび、キュッ、と胸が締め付けられる。

知りたい、彼の事を。
どちらが本当の彼なのか。それとも知らない顔が、未だあるのだからか。

想いは溢れ、心臓が早鐘のように打ち鳴らされる。

その夜、セシリアは眠りに着くことが出来なかった。

翌日の朝。誰もいない教室のドアが開く。
何時も早いセシリアであったが、今日は何時も以上に早かった。

席に着き、セシリアは自分の机に突っ伏す。
眠れなかった自分の顔は、メイク程度ではどうにも出来ない程に酷いものだった。
そんな顔を誰にも見られたくなく、寮を早出してきたのだ。

「はぁ………」

早出の理由はそれだけではない。
誰よりも早く来なければ、教室に入る勇気が無かったからだ。

少し顔を上げる。視線の先には一夏の席。

一晩が過ぎると、セシリアは不安に襲われていた。

心の中で、誰かが言う。

お前の理想とする強い男、織斑一夏。それは、ただの幻だ。

そんな訳がない。彼は確かにそこにいた！

この世界のどこにも、そんな男は存在しない。それはお前の創り上げた妄想でしか無い。

違う、違う違うー！

否定の言葉を重ねる度、不安はより一層深まっていく。

シュウン。

「ッ!!!」

ドアが開く音がして、セシリアは弾かれたように顔を上げた。

「あれ、オルコットさん？ 今日随分と早いね……？」

やって来たのは一夏ではなく、別のクラスメートだった。

セシリアはまた、机に突っ伏した。

その後もドアが開く度に顔を上げたが、一夏の姿はなかった。

またドアの開く音。

もう、顔を上げることもしなくなった。

不安は徐々に絶望へと姿を変えつつあった。

初めて抱いたこの想いが、自分の妄執が産み出した幻なのではないかと、在りもしない考えが巡り始める。

逢いたい。彼声を聞きたい。彼に触れたい。それだけで、全て消え去ってしまうのに。

ドアが、また開く。

「おいーす、お早う！」

「っ……!？」

セシリアはそれに顔を上げた。

入り口から姿を見せるのはずっと伸びた背。日本人特有の黒髪。女子ではあり得ないその、低く響く声。

織斑一夏。それが、その人の名前。

今まで胸の中にあつた冷たい不安が、一瞬で融解していく。代わって胸を、温かいものが満たしていくのを感じる。

それは冷たい冬を乗り越え、命芽吹く春を迎えた世界のように。

気が付けば、セシリアは駆けていた。

「お、セシリア。昨日は

なっ!？」

そのまま、セシリアは彼の胸に飛び込んでいた。

触れて伝わるその鼓動。その温もり。その匂い。

ああ、彼はここにいる。

どうだ、やはり彼は存在しているじゃないか。

女尊男卑のこの世界。理想の男性と出会うことは、砂漠に落ちたダイヤモンドを探すよりも遥かに難しい。

そしてセシリアは、それを見つけた。

代表候補生になり、やって来た極東の島国。そこで巡り出会ったのは”世界で唯一人”の男性。

これは偶然か？

No。

ならば必然か？

No。

ならば、これを何と呼ぶ？

これは運命だ。運命の出会いであり、そして運命の恋なのだ。

一人、オルコットの家を守る自分の為に、神が与えた祝福なのだ。

ならばこの想い、誰にはばかろうか。

この温もりを、誰に渡すものか。

「な、何をやっているんだ責様は……！！　—夏から離れろッ！！—
誰かが何かを言っているが、気にもならない。今はこれが、彼女の
全てなのだから。」

それは、セシリア・オルコットの恋の始まり。

だが、彼女は知らなかった。

その恋の相手は、一人ではなかった事を。

彼女が恋した相手は、一つの体に二つの意識を持つ男。

織斑一夏と、織斑春斗。

その真実を知った時、彼女が自分の恋にどんな決断をするのか。

それは、ここで語られる物語ではない。

「だから、――夏から離れろおおおおおおおおおっ！」

Side セシリア・オルコット 【世界で唯一人の】（後書き）

この話はもの凄くスムーズに書けました。

というか、セシリアのデレっぷりが（この時点での）本編越えをし
ております。

現在のセシリアフラグ

一夏 LV 5

春斗 LV 4

合計 LV 9でドボンww

第6話 目覚めぬ者／思い、様々に（前書き）

シリアスとドタバタの混合回。

主に織斑姉弟の話です。

第6話 目覚めぬ者／思い、様々に

「凄かったですね、織斑君。IS戦闘が、入試を入れて二度目だなんて思えないです……！」

試合をモニターしていた真耶が、感嘆の声を上げた。

一夏がISに触れてから、わずかに数ヶ月。だが、ISを本格的に動かしたのはここ一週間の話だ。

だというのに、初期設定の専用機で善戦。ついにはイギリス代表候補生を撃破してしまった。

これは大金星だと言っても過言ではない。

「オルコットには、付け入れる隙が幾つもあった。それを突いたからこそ勝てた。それだけの事だ。まともによっても勝ち目は薄い相手……だからこそ勝機は唯一点、最適化の直後と決めていたのだから」

千冬はあくまで冷静に、勝因を分析する。

「それって、オルコットさんを動揺をさせるためですか？」

「そうだ」

真耶に頷いて返す。

「相手は初期設定であった事を知らない。動揺を誘うには、充分過ぎる効果があったろうな」

「でも、もしその前に負けていたら……？」

「だから、そうならないように事前準備を欠かさなかったのさ」

「準備……あつ！」

「自分と相手の客観的な戦力分析。それによる戦術構築。それを何度となくシミュレートしていた筈だ」

とはいえ、それだけではない。

薄氷を渡るような可能性の中で、一夏を信じて作戦を練った春斗。

彼の無茶に近い指示に、喰らいつき応え続けた一夏。

二人が深く信頼し合っていたからこそ、その隙を突く事が出来たのだ。

「はあく凄いですね……流石は、織斑先生の弟さんですね」

「……………そうだな」

短く呟き、千冬はモニターに目を戻した。

そこではセシリアと一夏　　否、春斗が会話をしている。

（だが、オルコットの最大の敗因は、相手が一夏だけだと思っていたことだがな……………）

天才　織斑春斗。その存在を知っていれば、あるいは違った結果だったかも知れない。

だが、戦いに”もし”もなければ”かも”も存在しない。ただ結果がある、それだけだ。

「それにしても……………また面倒なことになったな」

「は……………？」

「いや、こちらの話だ」

真耶のきよとんとした顔に、頭を振る。

あそこにいるのは春斗だと、千冬にはすぐ分かった。

何故、一夏がISを動かせるのかは現状不明だ。
そして今、一夏の体とはいえ春斗もまた、ISを動かしている。し
かも一夏の専用機をだ。

それがどういう結論を導くかは分からないが、唯一点だけ、ハツキ
リした事がある。

それは春斗が”ISを動かせる世界で二人目の男性”となる可能性
が更に高まった、という事だった。

セシリアとの戦いを終えて、彼女とは無事に和解。セシリアは先に
ピットへと帰還した。

『おい、春斗。いきなり変わるなって何度も言わせるなよ……!!』
その道中、一夏が話しかけてきた。

強引に入れ替わると、入れ替わられた方は深い所まで落ちてしまい、浮上するまでの間は会話も入れ替わりも出来なくなる。

『ごめんごめん。でも、彼女の姿を見たらこう……体が勝手に動いてたんだ』

『……ま、良いけどさ』

『ところで、白式の中はどう?』

『白式の中……? 何言ってるんだ、いつも通りの場所だよ』

『あれ? ISを起動させると、裏に入った方はISに取り込まれるんじゃないの?』

『知らねえよ。とにかく代わってくれ』

『……了解』

ISに取り込まれた時はどうなるかと思っただが、こうして脱出できると分かったただけ救いがある。

原因は不明のままだが、取り敢えずはよし。そう結論づけて、春斗は何時ものように一夏と意識を入れ替えた。

「……………どうしてこうなった?」

『いや、俺に聞かれても……』

春斗はまた、白式の中に引きずり込まれた。というよりも、ここが春斗の居場所だと言わんばかりに極々普通に、この空間に来てしまっていた。

ピットに帰還する道中、何度か入れ替わってみた。が、やはり一夏はいつも通りで、春斗だけがこの世界に来てしまう。

『もしかして、ISに呪われている……!?!?』

「怖いこと言うなっ!?!? 問題は一つ。この状況で、白式を待機状

態にしたらどうなるか……？」

『そのまま白式の中じゃないか？』

何処までも他人事のように言う一夏に、少し力チンと来た。なので春斗はしつかりと、現実を教えてあげることにした。

「……その場合、入れ替わるのにいちいち、ISを起動させないと行けなくなるよ？ ちなみに不必要に起動させると反省文とか書かせられるんじゃないか？」

それに白式の中じゃ、一夏に勉強も教えてあげられなくなるね。いや、一夏は一人でこれからの学校で生活を頑張る訳だ。いや、すごいね。」

『……ッ！？ 春斗、何とか問題の早期解決を！！』

一夏にも、どうやら分かって頂けたようだ。

「とにかく、ピットに着いたらすぐ千冬姉さんに報告をしよう」

通信は使えない。千冬のいるピットのモニタールームには真耶もいるからだ。事情を説明するなど無理である。

『いや……それも無理臭いな』

「えっ……？」

『あれ、見てみるよ』

春斗の前に出現したモニターに、一つの影がある。

「……ほーちゃん」

篠ノ之 箒。

その微笑みは喜びに満ちていた。

だがそれは、”織斑一夏”に向けられたものであり、”織斑春斗”にではない。

分かっている。この勝利は何処までも”織斑一夏”のものだ。亡霊ゴーストでしかない自分には、永遠に届かない光なのだ。

それでも、その笑顔が欲しいと想う事は罪なのだろうか。

「っ……………」

ギュツと、胸元を握り締める。

そこに無い筈の胸が、とても苦しかった。

「夏っ……………」

ピットに降り立つと、すぐに箒が駆け寄って来た。

「よう、箒。ただいま」

「見事な勝利だったな。まあ、あれだ……春斗が考案して、私が直々に特訓してやったのだから……当然の結果と云えば、当然だがな」などと云いつつ、箒の顔には一夏の勝利を喜ぶ色がありありと見える。

「……………」

見上げる箒。

「……………」

見下ろす一夏。

「……………一夏？」

「……………何だ？」

「いつまで、ISを起動させたままにしておくんだ？ 早く降りてこい」

「いや、せつかくだしもうちょっと……………なんて？」

「降りろ」

「……………はい」

イエス以外を許さない素敵過ぎる笑顔で命令され、一夏は渋々頷く。
『大丈夫か春斗……………？ ISを待機させたら一緒にペア、とかならないか？』

『ま、ISが消える訳じゃないし……………大丈夫とは思っけどね。何せISに取り込まれるとか……………前例がないから』
そんな前例、普通はない。そもそも、一つの体を二つの意識が使っている人間も恐らく、一夏達が世界初だろう。

こうして考えると、世界初だらけである。

結論から言えば、春斗は無事だった。

白式を待機状態にすると同時に、春斗の意識体は一夏の体にあつきりと戻ってきたのだ。

これが最後かも知れないと、春斗に別れを告げた一夏も驚きである。

尚、縁起でもない事を言いやがった双子の弟に対するお仕置きを、春斗はしっかりと考案中であった。

その後、ピットに降りてきた真耶から、IS取り扱いに関する規則本を手渡された。

「ちゃんと覚えてくださいね」とは彼女の言。

あの入学前の資料ですら限界なのに、同じだけの厚さの本が来るとは。

『うーん、読み甲斐がありそうだね、一夏？』

『遅しいね、本当に!?!』

この本の何処にそんな喜ぶ要素があるのか、一夏にはサッパリだった。

そして千冬には戦闘の批評と反省会を軽く行われ、一夏の体はもう限界であった。

だが言わなければならない事があるので、何とか気力を振り絞る。

「悪い。箒、先に帰っててくれるか？」

「何だ？ 着替えぐらいなら終わるのを待っているぞ？」

「いや、時間が掛かるかも知れないからさ……な？」

「……分かった。出来るだけ早くしろ？」

一夏の言葉に従って、箒はピットの出口から出て行く。

本当に、早くして欲しいものだ。ISの事も。この自分の状態の事も。

そんな事を思いつつ、一夏は千冬と共に人気のない場所に移動する。

その際、真耶が何故か顔を真赤にしていたが、割とどうでもいい話である。

「何、白式に取り込まれただと……!?!」

「ちよ、千冬姉! 声がでかいつて!!」

「す、すまん。それで……大丈夫なのか、春斗?」

「大丈夫。待機状態に移行すると同時に解放されたから。調子もおかしくないよ」

「後、入れ替わった時も普通に出てこれたよな?」

「うん。どうも僕だけを認識して取り込むみたいだ……」

一夏の口がまるで一人芝居のように動く。

これは視界共有と同じく、一夏の声帯を共有させているのだ。主に家族会議で使われる。

知らない人間が聞いたら、一夏に哀れみを向けるかも知れない光景だ。

「ISのコアはブラックボックスだ。あいつなら、何かしら分かるかも知れんが……」

「あいつ」という言葉に、春斗は微妙な顔をした。

「東博士か……僕、ちょっと苦手なんだよなあ……」

「そつえば、何か距離を置かれてる感じだっけか? あの人のしでは珍しい反応だよなあ」

篠ノ之 東は千冬や一夏、箒と両親以外は徹底的に無関心なのだが、春斗と”もう一人”にだけ、違う反応をするのだ。

その”もう一人”には、少々 いや、かなり辛辣な事を言うが、無関心という訳ではない。

そして春斗にはある時から、何故か距離を測りかねるような感じだった。

「……その辺りは置いておけ。ともかく、ISを待機させる時には出来るだけ入れ替わって行え。何か遭ってからでは遅いからな」
「分かった」

「それと、言わなくても分かっていると思うが………春斗？」

「………うん、分かっている」

「何が？」

春斗が複雑そうな顔で答え、一夏が首を傾げた。

知らない人間が見れば、一夏をすぐ病院に入れるだろう光景だ。

「一夏の体とはいえ、僕も白式を動かせちゃったからね………バレれば厄介な事になりそう、て事だよ」

「ああっ！　　そういえば何で動かせたんだ!？」

「一夏………今頃かい？」

「………とにかくだ」

一夏のバカさ加減に二人は頭を痛めつつ、千冬が締める。

「ISを動かすなどは言わん。だが、今後はその方面でも注意しろ」

「うん。気を付ける」

「分かった」

「では、今日はさっさと帰って早く休め。自分が思っている以上に、肉体は疲労している筈だからな」

「じゃ、さっさと帰るか」

「では、失礼します………織斑先生」

春斗が一礼し、そして一夏はロッカールームへと向かった。

千冬と別れた一夏が、着替えを済ませてアリーナを出てきた時には、外はすっかりと夕暮れであった。

「う〜ん、疲れたア!!」

『僕もISの制御とか……無茶したから疲れたよ』

「ていうか、リアルタイムでそんな事出来るのって、お前と東さん以外ないんじゃないか？」

『どうだろ？ 僕もあの人には……敵う気はしないよ』

「多分、千冬姉だけ、だろうな……物理的な意味で」

『……だね』

寮への道をしばらく歩いてみると、そこに人影があった。

一夏に気付くと、特徴的なポニーテールを揺らしながら、こちらに近づいてきた。

「なんだよ篤、先に帰ってきてくれて言ったのに……」

「いや、何だ……ほら、これを渡そうと思っただけ……」

そう言って差し出されたのはスポーツドリンク。それを見ると、とたんに喉の渴きを感じてしまう。

「おう、サンキューな」

やはり疲れが出ているのだろう。一夏はありがたくそれを受け取った。

それを飲みながら、二人は並んで歩く。

「……………」
先程から、チラチラと向けられる視線。一夏が向くとすぐに、箒は前に視線をやってしまう。

「なんだよさつきから。何か言いたい事でもあるんじゃないのか？」

「う、うむ……………その、これからの事なんだが……………」

「ん……………」

「特訓は、まだ続けるのか……………」

「そりゃまあ……………千冬姉にも、時間があれば白式を動かさせて言われてるし……………もっともつと強くないと……………守れないからな」

そう答え、一夏は少しだけ遠くを見やる。その横顔は、箒の中にあつた若い少年の顔とは違い、一人の男性としてのそれであった。

「……………そうか、そうか。なら、今後も私が相手を務めてやろう。」

放課後は絶対にあけておくんだぞ？」

「お、おう……………」

「フツ、フツ……………」

箒は何故か嬉しそうに笑い、そして小走りに行ってしまった。

「何だ、ありゃあ……………」

「……………一夏？」

「なんだよ？」

『このダメ男』

『何だとっ！？』

不本意だとばかりに抗議するも、春斗はさつさと《海岸》まで潜ってしまった。

「んだよそれ、意味分かんねえし……………」

仕方なく一夏も走って、箒を追いかけるのだった。

翌日。

一夏の周りでは、朝からとんでもない騒ぎが起ころうとしていた。

「ふあああああ……っ」

昨日の疲れも抜け切らず、未だ寝足りない気がする頭を無理やり起こしながら、一夏は箒と共に教室へと続く廊下を歩いていた。

「一夏、もう少しシャキッとしないか。情けないぞ……」

「そう言われてもなあ……うーム」

「もう一度、その水道で顔でも洗え。少しはマシになるだろう」

「……おっ」

途中の水場で顔を洗うと、やっと少しだけ頭が起動を始めてくれる。

「あ、ちゃんと拭け。雫が垂れてるぞ?」

箒はハンカチを取り出し、前髪の雫を拭いてやった。

「つと、わりい……」

『……あなた方、何処のカップルですか?』

いい感じに、春斗の嫌味が届く。

そんなこんなで、教室に入る。

「おいーす、お早う!」

「おいーす織斑君。お早う」

一夏が言うと、そこから中から返事がくる。

「……朝の挨拶ぐらい、ちゃんと言えないのか?」

「別にいいだろ。固いこと言うなよ……ん?」

教室の後ろから、セシリアがこっちに来るのに気付く。

「よお、セシリア。昨日は　　っ!?!」

それ以上、言う事は出来なかった。

セシリアがいきなり一夏の胸に飛び込んだからだ。

「なあっ……!?!?」

突然過ぎる事態に、箒も一夏も啞然とする。

クラス中がシン、と静まり返り、そして湧き上がった。

「な、何をやっているんだ貴様は……!!　一夏から離れろッ!!」

復活した箒が顔を赤くしながら割って入ろうとする。が、セシリアの腕は一夏の背にまで回され、制服をしっかりと掴んでいてビクともしない。

「うわ、これってもしかして三角関係のド修羅場って奴!？」

「うそっ! あたし、初めて見たよ!！」

「ていうか、昨日の今日でこれって……織斑君、どれだけ手が早いの!？」

「いや〜ん! アタシも手を出されたくいっ!」

キヤイキヤイとはしゃぐ女子達。

「だから、一夏から離れるおおおおおおおおおおっ!！」

「一夏さん、一夏さんっ!！」

更にエキサイトする箒。涙目で胸に埋まり続けるセシリア。

「あ……ああ……!？」

『一夏、一夏!? ダメだ、完全にフリーズしてる……』

そして、突発過ぎる事態に対応できずに一夏は固まり、春斗は深くと嘆息した。

「ちょっと、なんか面白いことになってるわよ!！」

「織斑君がイギリス代表候補生の子を口説き落としたりって!？」

「それで幼馴染が割って入って三角関係泥沼化ですって!？」

「流石は唯一の男子!！ 期待に応えてくれるわね!！」

この騒ぎはすぐに他のクラスにも伝わり、廊下にはあつと言つ間に人だかりが生まれた。

その大騒ぎは、SHRの時間なのでやって来た、千冬の怒号が響くまで続けられたのだった。

「……では、SHRを終わります」
若干引きつった顔で、真耶はそう告げる。その視界には、頭にコブを作った生徒たちの群れ。
全員、千冬の拳骨を喰らったのだ。

尚、一部生徒からは「私達の業界ではご褒美です!!」とか、廊下
にいた生徒からは「おねーさま、私にも!!」などと逞しい発言が
上がっていたが全くもって、どうでも良い話である。

「織斑、ちょっと来い」

「……え？」

また殴られるのかと思い、席を立ちつつ後ろに半歩下がる。回避距
離の大事さは昨日、身に染みて知っている。

「何もせん。今日、私とお前はそのまま外に行く。一度寮に戻って

私服に着替えてこい」

「えっ、何で？」

「……………」あそこ”に行くからだ」

「っ！？ でも、それは今週末の予定じゃ……………！？」

「お前の状態を鑑みて、無理に早めてもらった。分かったら準備をしる。私は学園の門で待っている」

それだけを言つて、千冬は教室を後にした。

残されたクラスメート達はザワザワとしているが、一夏はそれに構わず帰宅の準備（と言つても鞆を取るだけだが）をした。

「ねえ、織斑君。一体、あそこつて何処なの？」

「悪い、マジで時間ないから……………じゃあ、失礼します！！」

一夏も急いで教室を出て行く。廊下を走る足音が、段々と小さくなつていった。

「篠ノ乃さんは何か知らない？ 幼馴染なんですよ？」

「……………いや、分からない」

後ろの席に座る生徒の間に、困惑の表情で答える。

「ウソをおっしゃい！！」

と、そこに混乱を呼ぶレディ、セシリア降臨である。

「あなた、知つていて黙つているのでしょう！？ さあ、キリキリと白状なさい！」

「だから知らないと言っているだろう！！ 喧嘩を売っているのか、貴様は！？」

「生憎と、売る価値もない喧嘩を売る趣味はありませんわ」

「フフ……………良いだろう。そのひん曲がった根性、この場で叩き直してくれる！！」

「でしたら少しは大人しくなれるように、調教し直して差し上げますわ！！」

その魂の叫びと共に、トリガーが引かれた。

ドオオ……オオオン！！

その日、1・1の風通しはとてつもなく良かったそうだ。

何故ISを持っていたかというと、千冬に「今日はすべてを任せろ。もし、生徒が口ごたえをするなら、これで派手に脅してやっていい」と渡したからであった。

後日。真耶と千冬は揃って、始末書を書かされる事になる。

学園を離れ、三時間弱。

向こうが用意した車に乗り、今は山道を登っていた。

しばらく走っていると、木々の向こうに、目的地は見えてきた。

入口前に来ると、警備員が身分証明を求めるので、運転手はIDを提示する。

それを本物と確認し、ゲートが開かれた。

【国立 医療技術研究所】

ここは、最新鋭の医療技術の研究、実験開発を行っている国立機関である。

地下4階、セキュリティレベル5区画。

巨大な機械の置かれた真つ白い一室。そこに置かれているベッドに千冬は腰掛けていた。

「……随分と髪が伸びてしまったな。また、切つてやらねば……」
口元に微笑を残し、顔を覆う髪を手櫛で梳いてやる。

「千冬姉、準備できたぞ？」

振り返ると、入院着に似た服に着替えた一夏と、白衣に眼鏡を掛けた四十頃の歳の男性が居た。

「分かった。では高柳先生、お願いします」

「分かりました」

高柳と呼ばれた男は、部下に指示を送り、室内に椅子と機械をくっつけたような物を運び込む。

そのコードを巨大な機械と繋げ、色々と準備を始める。

一夏はセツティングが終わると、その椅子に腰を降ろした。

「一夏くん、聞いたよ？ IS、動かしちゃったんだって？」

「いや、なんか色々在りまして……八八八」

「色々かぁ……あ、これは……電極が付けられないね」

高柳は一夏の右手に付けられた待機状態の白式に気付き、困った風に言った。

「あ、忘れてた……すみません。千冬姉、これ預かっておいて」

「ああ、分かった」

白式を外して、千冬に預ける。その代わりにそこにいくつもの電極がつけられていった。

一夏の体に電極が付けられると、頭部にヘルメットを模した機材が取り付けられる。

そして両手足、腰、腕が金属製の拘束具でしっかりと固定される。

そして機材のチェックを終えると、一夏を部屋に残して全員が強化ガラスの向こうにあるシステムルームへと移動した。

「マインドサルベージシステム
M・S・S、正常起動。被験体の心拍数、脳波異常なし」
「サルベージ発掘対象を確認。こちらも脳波、心拍共に異常なし。追体験機能アップローダーを立ち上げます」

部下である研究員たちの言葉に、高柳は一度だけ千冬を見やる。

彼女はガラスの向こう、大型機械につながれたベッドと、無骨な機械の椅子に拘束された一夏を、表情一つ変えぬまま見つめていた。

だが、腕組みされた袖が大きく皺を寄せている。ギリギリと両手で

握り締めているのだ。

これから三時間。彼女にとっての地獄が始まる。
こうでもしていなければ、すぐにでも部屋に飛び込み、あの機械を破壊してしまうかも知れないからだ。

「……………ではこれより、メモリーコピー記憶書込及びアップロード追体験作業を開始する。常に状況確認を怠らないように」

高柳は千冬には何も声をかけず、作業開始を告げる。

「……………そろそろかな？」

『……………一夏』

『 今度こそ、成功するさ』
チラリと、ベッドの方に顔を傾ける。

「そうだろ………春斗？」

ベッドに眠る双子の兄に向かって、一夏は笑いかけた。

日がすっかりと落ち、夕闇から夜へと変わった町を車が走る。
後部席には千冬と、疲労から姉の肩に頭を預けて泥のように眠る一夏
の姿があった。

「……………」
静かに寝息を立てる弟の頭を撫でてやりながら、千冬は流れていく町並みを見やった。

結局、今回も大きな成果は得られなかった。

高柳には、「前よりも反応が大きくなっており、覚醒は時間の問題だろう」と言われたが、それが単なる慰めだろう事は分かっていた。

『あ……………ぐううう……………があああああ……………ああつ！！』

「っ……………！！」

鼓膜にこびりつき、網膜に焼き付いた記憶。

全身を襲い続ける苦痛に、必死に耐え続ける一夏の姿。それを見ていることしか出来ない自分。

一夏が苦しむ度、自分を責め続ける春斗。それを救う言葉さえ掛けてやれない自分。

あの光景を、後何度繰り返せば、自分は全てを取り戻せるのだろうか。後どれほど、あの地獄を見せられれば、この罪は償われるのだろうか。

二人は言ってくれた。

自分達はずっと姉に守られてきた、と。

だが、そんなのは嘘だ。

守れてなどいない。それは自分が一番良く分かっている。

春斗がこうなってしまった時も。一夏が誘拐された時も。

何度も何度も、自分の無力とバカさ加減を思い知らされてきた。

何が日本代表だ。何が世界一のIS使いだ。

その世界一とやらは、弟さえも守りきれない愚か者ではないか。

過酷な運命を受け入れた一夏と春斗。

それを大人として、姉として、家族として、今度こそ守ってみせる。

二人が幸せになる。その姿を見るまでは、我が身の事など思う必要はない。

「一夏、春斗……すまん」

何時もの気丈さなど微塵もなく、千冬は弱々しく愛しき者の名を呟いた。

やがて車は用意された船舶に乗り込み、そのまま海上を移動する。

その性質上、学園へのルートは海路と空路、そしてモノレールで締められている。

陸地から少し離れた実験用人工島^{メガフロート}。そこを国が買取り、建設されたのがIS学園だ。

現在の時刻を見ればモノレールは動いていなので、学園側が船を用意してくれていたのだ。

そして学園の栈橋に到着すると、千冬は一夏を揺り起こした。

「起きろ。学園に着いたぞ」

「むう……ううん？ 着いたの？」

一夏は低く呻き、瞼をゆっくりと開く。

「ああ、ここからは寮まで歩くんだぞ？」

「分かってるよ……ふああ……」

降車し、一夏はあくびを噛み殺して背伸びをする。

船はそのまま車を対岸まで送る為に離れ、二人は寮への道を進んでいった。

『……………何これ？』

『いや、僕に聞かれても……………』

寮に着いた一夏は、朝以来何も食べずにいたせいで、すっかり空腹であつた。

食堂の使用時間は終わっているが、せめて何かと思ひ向かつてみたところ　　捕まつた。

そのまま食堂に引きずり込まれ、気が付けばこの状態。

両サイドには筭とセシリア。目の前にはクラスメート達。

後ろのガラスには、【祝！　織斑一夏　代表決定おめでとう！！】と書かれた紙が貼られていた。

『祝』と『おめでとう』が被ってるし』とは春斗のツッコミ。

こういうのは気持ちなので、細かい事を一々気にはいけけないものである

「それじゃ、織斑君の代表決定と、代表選の健闘を願いまして〜！」

「かぁんぱあ〜〜いっ！」

間延びした声にあわせ、皆が「カンパニー！」とグラスを鳴らした。

「ん、ング……つく……プハアッ！」

オレンジジュースの入ったコップを傾け、そのまま一気に飲み干す。半日以上ぶりの水分と糖分は、体にとても美味い。

「きゃく、凄い飲みっぷり！」

「社長、もう一杯いかがですか？」

「誰よ社長って？」

「……随分とモテモテだな、一夏？」

「……何か言ったか？」

「……何でもない」

筈はピイツとそっぽを向いてしまった。つまみにと用意された菓子を食べてつつ、首を傾げる。

『一夏。君はあれだ、タイヤを抱えて石段を転げ落ちるといいよ？』

『地獄車っ！？』

「さ、一夏さん。”私が”お注意しますわ」

セシリアがオレンジジュースの入ったペットボトルを手に、一夏に迫る。

「おっ、ありがとう、セシリア」

「いいえ。さ、コップを……」

「まで、一夏。”私が”入れてやる。コップをよこせ」

セシリアに出そうとした、コップを持った手を脇からガシッと掴まれる。

「あら、篠ノ之さん。一夏さんは”私に”入れて欲しいと仰ってましてよ？」

「何時、一夏がそんな事を言った？ お前の頭は、妄想と現実の区別もつかんのか？」

「なんですつてえ……?」

「何だ……?」

ギリギリと睨み合う二人。

『この二人、何でこんなに仲悪いんだ?』

『気づいてるかい? これ、一歩間違えらるともの凄く危ない状況なんだよ?』

『だな。二人がケンカする前に何とかしないと……』

『いや、そうじゃなくて……』

春斗の言葉は一夏には届かなかった。双子の以心伝心なんて、ウソであると証明されたようなものだ。

そんな事たあ、とづくに知ってはいたが。

パシヤッ!!

「……!?!」

突然のフラッシュ。何かと思うと、いつの間にか、クラスメートではない胸元に黄色のリボンをした女生徒　リボンの色は学年ごとと違う。黄色は二年生　が、カメラを向けていた。

「いやいや、いい写真ゲット!!」

眼鏡を掛けたその先輩は、ベストショットにニンマリと笑っている。

『春斗、この人って確か……』

『新聞部の先輩だね。なんで一年の寮に?』

何故、二人が彼女の事を知っているかというのと、それは代表決定戦前に遡る。

放送部を訪れた春斗は、部に戦闘映像の記録を依頼したのだ。

勿論、アリーナには記録装置がある。が、春斗はそれだけでは不足と、追加のカメラを欲したのだ。

その際、別件で放送部に来ていた彼女
子と出会ったのだ。

新聞部副部長、 黛薫

「黛先輩、もしかして取材で……?」

「その通り。注目の専用機持ちだからね。あ、これ、放送部から預かってきたよ」

「すみません、態々……」

差し出された記録媒体メディアを受け取り、ポケットに仕舞う。

「じゃあ、早速……今度の代表戦への意気込みをどうぞ!!」

「えっ? えっと……」

いきなりボイスレコーダーを向けられ、戸惑う一夏。何とか言葉を探すがうまく出てこない。

「が、頑張ります……!!」

「あゝ、もうちょっと色々言っつてよ。これじゃ、捏造できないじゃない!!」

何をする気だ、この人。

「じゃ、セシリアさんも、いいかな？」

「私ですか？」

「うん。織斑君と戦ってみて……どうだった？」

「そうですね……一夏さんはとてもお強くて、紳士で、かつこ良くて、世界一の殿方ですわ」

「……………おお……………つ！！」「……………」

その告白同然の言葉に、一同が感嘆する。

『そら、世界で一人だけIS動かせるんだし……世界一の男だよな？』

『……君のそれ、そろそろ国際犯罪レベルだよね』

頓珍漢なことをのたまう一夏に、春斗も掛ける言葉はない。

これに何かを気付かせるには、裸でベッドに押し倒した上、強引に既成事実を積み上げてやるぐらいでないが無理だろう。

いや、もしかしたらそれですら通じないかも知れない。

そんなバカなと思うだろうが、それが織斑一夏クオリティであると春斗は嫌というほど知っていた。

「いやいや、良いネタを頂きました。じゃ、最後に二人の写真をい
いかな？」

「二人……？ 私と一夏さんの”二人”ですか？ あとで、その写
真は頂きますかしら？」

「勿論よ。じゃ、ちよっと立ってくれるかしら？」

「はいっ！ さあ一夏さん、立ってくださいな」

「ちよ、そんなに引っ張るなよ」

セシリアは気合充分に立ち上がり、一夏の腕を引つ張る。

「じゃ、握手でもしてくれるかな？」

そう言つてフアインダーを覗く薫子。セシリアは見えるように上げられた一夏の指に、自分の指をしっかりと絡め付かせる。

「おいおい、やり過ぎじゃないのか……？」

「そんな事ありませんわ。むしろ手だけでは物足りないほどですもの」

そう答え、座る箒を一瞥する。

「っ……………！」

バチバチッ！！ と、火花が散つた。

可燃性ガスが漏れていたら即、大爆発を起こしていただろう。

「それじゃ、取るよ。12×89÷44+224……………に、×0
では？」

「……………ゼロッ！！……………」

一瞬にして、クラスメイト達がセシリアたちの前に現れていた。ちやつかりと、箒はセシリアの前に陣取つて被りまくりだ。

「何で皆さんが入ってきますの……………」

「まあまあ、ある種のお約束なわけで」

「セシリアばかり織斑君と仲良くするのはズルイし」

「チャンスは平等に、だよな？」

「ね？」

「ふう~~~~っ！！」

なお、のほほんさんはいつの間にか、一夏の腕と組んでいたりしたので、また新たな闘争の火種となる。

そんなこんなで、パーティーはグダグダ感満載で続いていくのだった。

第6話 目覚めぬ者／思い、様々に（後書き）

謎の一端が明かされました。

MSSという機械。眠り続ける春斗。千冬の罪とは一体何なのか。

次回は、この話の重要なポジションを担う（予定）の彼女の登場です。

第7話 幼馴染・フロム・チャイナ（前書き）

気が付けば、7000アクセス超え。

皆様、お読み下さりありがとうございます。

感想や気になった所などありましたら、お気軽にどうぞお願いします。

第7話 幼馴染・フロム・チャイナ

結局、パーティーは十時まで続いて御開となった。

一先ず空腹はどうにかなったが、疲労はまた一夏を眠りへと誘い始めていた。

「良かったな。あれだけの女に囲まれてチャホヤされて、さぞ良い気分だったろうな……」

「何処がだよ。お前がああの立場だったら嬉しいか？」

「そうだな。嬉しいかもしれない」

部屋に戻ってくれば、箒はご機嫌斜め。その意味が分からず、着替えを済ませた一夏はベッドに体を横たえる。

「あつそ。んじゃ、そろそろ寝るわ。今日はマジで疲れてるから……」

今のは勢い余つてというヤツなのは知っている。なので一夏はさっさとこの話題を切り上げた。

「なっ！？ ま、まだ十時半だぞ？」

「だから今日は疲れてるって言ってるだろ へブツ！」

『……何処の倦怠期迎えた夫婦ですか？』

春斗のボヤキと共に、突如として枕が一夏を襲った。それをひっぺがし、一夏は犯人に向かって投げ返す。

「箒、何しやがる！！」

「うるさい！ 今から着替えるのだ。むこうを向いている！！」

「分かったよっ！ たたく……なんで一々、俺がいる時に着替えるんだよ？ 俺が洗面所に行ってる間とかあるだろうが……」

「うるさい」

ギロリ。擬音が入りそうな視線をぶつけられ、一夏はゴロンと背を向けた。

ガラガラと、仕切が動く音がする。

「……………」

『その向こうで、シウルシウルという衣擦れの音が響く。一夏は制服を脱いでいく箒の姿に以前見た半裸の姿を重ね合わせ、ゴクリと固唾を呑んだ。』

箒もまた、仕切り一枚の向こうにいる一夏を意識し、ドキドキと胸を暴れさせてしまう……………」

『へ、変なナレーション入れんじゃねえよ、春斗!?!』

『いいじゃない。本当はドキドキで悶々としてるんだろ? ちなみに僕もそうだから大丈夫』

『うつせえよ!! 同類にするな!!!』

そうこうやっている間にも、パサリという音が一夏の耳に届く。

一夏は一応、健全な少年。女子のアレやソレに興味がない訳ではない。

六年ぶりに再会した幼馴染は、欲目無しに綺麗だと思ったし、セシリアに手を握られた時もドキツとした。

のほんさんはが腕を組んできた時など、肘に感じる柔らかさにドキドキであった。

そして今。 たった180度体を動かせば、そこには桃色と肌色の世界だ。

『一夏、今こそ大人の階段を登る時だ! 大丈夫、僕は《海岸》まで落ちてるからごゆつくり。あ、自分の欲望にかまけられたダメだよ? ちゃんとほーちゃんの事を考えながらね?』

『何をもって大丈夫と言いやがりますか、テメエは!?! そしてどんな気遣いだよ!?!』

『恐れないで。一夏がその気になればもう、ここは二人だけのエデンの園だから』

『んな訳あるか! そんな事しようものなら、俺一人で天国に行かされるわ!?!』

「……一夏。ほーちゃんが何で何時も、一夏の前で着替えてるか……理由、わからない？」

『嫌がらせ』

『死んじゃえよ、もう』

『ストレート過ぎねえ!?!』

「……………いいぞ」

「やっと終わったか、やれやれ」

仕切り（パーテーション）外され、一夏はよっこらせと体を起こした。おっさん臭い男である。

「っ……………」

箒は寝間着用の薄着物（浴衣のような物）を着ている。

すっかり見慣れたそれだが、何時もと違う事に気が付いた。

『あ、帯が』

「帯、新しいのに変えたんだな」

春斗が言うより早く、一夏がそれを指摘する。と、箒は少し上ずった声で驚いた。

「よ、よく見ているな……………!」

「そりゃ、箒を毎日見てるからな。色も柄も違っし、すぐ分かるって」

「そ、そうかそうか。”私”を”毎日見ている”か。さ、さあ!

張り切って寝るとしようか!」

「いや、寝るのに張り切ってどうするんだよ……………?」

いきなり上機嫌になった箒に首を傾げつつ、一夏も自分のベッドに入る。

『あゝあ、この鈍感ママシの毒にやられちゃって……………かわいそうに』

『誰が鈍感ママシだこの野郎』

『一夏』

『容赦無いな今日は!?!』

春斗もどこか何時もと違うような気がしたので、尋ねてみようかとした時、隣から声が掛かった。

「一夏、まだ起きているか……?」

「ん? ああ、起きてるけど……」

「さっきはその……すまない」

「別に良いよ。別に気にしてないさ」

そもそも、一夏には何の事が分からないのだから仕方ない。

「そ、そうか……それで、その……今日は何処に行っていたのだ?

いや、答えたくないなら別にいいんだが……」

「気になるか?」

「……うん」

「……春斗に、会ってきた」

少しの間を置いて一夏が答えると、バサツという布音がした。

「っ……!?!? そ、それで……どうだったんだ、春斗は?」

「どうもないさ。いつも通りだった」

「その何時もを私は知らないから聞いているんだ……!」

「わりの。もう、頭回らないから……おやすみ」

「おい、一夏!?!」

追求しようとする筈偽を向けて、一夏は瞼を閉じた。

何時も通り。そう、嘘ではない。

何時も通り 春斗は目覚めなかった。

(クソツ……!)

悔しさに、奥歯を噛み締める。

春斗が目覚めるなら、あの痛みにだって何十時間でも耐える覚悟はある。

だが最初以来、劇的な回復はない。

(クソッ……何でだよ!?)

晴らせない苛立ちが、胸に積もった。

数日後の朝。SHRまでの間の時間、一夏はある噂話を聞いていた。

「中国から2組に転校生? こんな時期に?」

今はまだ4月。入学式からそれほど日は経っていないのに、転校生だという。

IS学園への転入はかなり難しい事であると、一夏は春斗から聞いていた。

それというのも、転入試験を受けることさえ、国の推薦がなければ受けられないのだ。

『多分その子……代表候補生な気がするんだけど?』

『代表候補生が今更か? それはそれで、変な気がするけどな……』

「あら、今更ながらに私の存在を危うんだ……といったところかしら?」

先程まで自分の席にいたはずのセシリアが、一夏の席までやってきていた。

「別に、このクラスに転入する訳ではないのだろう？　そう騒ぐ事でもあるまい」

と、やはり席に着いていた筈の篤までもが、一夏の席まで来ていた。あからさま過ぎる牽制し合いなのだが、そんな事に気付けるほど、一夏の神経は鋭くない。

「転校生か……どんな奴なんだろ？」

だから、こんな事を平然とのたまってしまう。

「……………　一夏、そんなに気になるのか？」

「……………　一夏さん、そんなに気になりますの？」

「そりゃ、まあ……………」

更に火に油を注ぎやがった。

「うわ、空気が重くなった……………」

春斗は強まったプレッシャーに胃が痛む。無いけど。

「お前に、転校生を気にしている余裕があるのか？」

「クラス代表戦は来月なのですよ？　どこの馬の骨とも分からない女子に、心惹かれていた場合ではありませんわ！！」

「そうだぞ！　今日の放課後から”私”と特訓だからな！！」

「ええ。”私”と特訓をいたしましょう！！」

ズズイ、と迫る箒とセシリア。流石の一夏も何かおかしいと気付いた。

「……………何だこれ？」

「自分で考えたら？」

「考えて分からないから聞いてるんだが……………？」

目の前ではセシリアと箒が睨み合い、唸り合っている。

近所に住んでた仲の悪い犬同士がこんなだったな、とか思ったりした。

「ま、気付けるようになっただけ……………進歩したのかな？」

「……………どういう意味だよ？」

「そのまんまの意味だよ」

「一夏の相手は私がする！　すでに約束しているのだ!!」

「あら、専用機持ちは私と一夏さんだけですわ！　だったら私がお相手を務めるのが筋というものですわ!!」

「何処の筋だそれは！　先約こそ、筋というものだろう!!」

「分不相応の先約など、筋とは言えませんわ!!」

「二人とも、凄いやる気だな。そんなに、景品の学食デザート半分が欲しいのかな？」

「他の女子はともかく、この二人に関しては違うと思うけどね……」
すでに《勝つための特訓相手》から《どちらが一夏のパートナーに相応しいか》に話がシフトしつつあったが、そんな事に一夏は気付けない。

そして、春斗にはやはり不安が多い。

「でも、真面目に大丈夫？　あの体たらくで」

「……それを言うな」

言われると頭が痛くなるのか、一夏はガクリと肩を落とした。

先日の授業中の事。その日は外での飛行操縦の実践だった。

1組の面々はIS用のスーツを身に付け整列していた。
この、体のラインをクッキリと見せ、その上、所謂ハイレグな水着
同然のスーツは青少年にはなかなか目の毒だ。

『いつもながら、素晴らしい光景だね……』

「……………」

絶対に突っ込まないぞ。と、心に誓う一夏。

「では、織斑とオルコット。試しに飛んでみせる」

「はいっ」

セシリアは意識を、左耳に付けられた蒼いイヤークラスに集中させる。

すると、すぐさまセシリアの体が光に包まれて《ブルー・ティアーズ》が展開される。

昨日、一夏が撃破したビットもしっかりと修復されてあった。

一夏も白式を展開させようとする。が、うんともすんとも言わない。

「あ、あれ……?」

「集中しろ」

千冬の目に、鋭さが光る。一夏はこれ以上もたつけば何が待っているのかを想像し、身震いする間もなく急いだ。

ガントレットを左手で掴み、さらに深く集中する。どうやらこれが一夏には合うようだ。

(来い、白式……っ！！)

その呼び声に応えるかのように光が溢れ、一夏の体には白式が、装着展開された。

「できた……！」

『そして、僕は何時もの場所……と』

春斗も白式の中に取り込まれ、スタンディングシートに背を預けていた。

「よし、飛べ」

「はいっ」

セシリアはすぐさま上昇、あっと言つ間にその姿が小さくなる。

『よし、僕らも行こう』

「よし……っ」

「待て、織斑」

「っと、何ですか……織斑先生？」

いざというタイミングで、千冬が一夏を止めた。何だろつかと振り返る。

「頼らずに飛んでみる」

「うっ……」

意味が分からない他の生徒達は首を傾げる。

だが、一夏にはそれだけでよく分かった。

あの決定戦以降、いまいち飛行が上手くいかないの、その辺を春斗がサポートしていたのだ。

それを、千冬は知っていたようだ。

『……だつてね』

「はい、頑張ります」
それでも練習を続けた結果、躓きはするものの、基本操縦はどうにかなりつつあった。

飛翔。と、セシリアが一夏が来るのを待っていたのか、白式が近づいてきたのを見て上昇を再開させた。

そのまま二機は、大空を舞う。

「しつかし」目の前に角錐を展開するイメージ”ってなんだよ。よく分かんねえな……”

『先端が細くなった形状は、空気抵抗に対する力学的答えだよ。それをイメージすると上手く飛べるって事……分かる？』

『ゴメン。何度目か分からないけど……本当にゴメン』
毎度講義をしてくれる春斗に、本当に申し訳ないと一夏は心の底から謝る。

『いいよ。期待してないし』
言いやがったな、この野郎。

「所詮、イメージはイメージ。自分に合った方法を模索する方が、建設的ですわ」

と、セシリアが話しかけてくる。

「とはいっても……空を飛ぶっていう事自体がアヤフヤなんだよ。何で飛んでるんだ、これ？」

「あら、それでしたら私が今度じっくりと……”二人きり”でお教えして差し上げますわ」

「いや、何でそこまで二人きりを強調するの……？」

と返すと、セシリアの顔が赤くなった。

「そ、それは勿論……一夏さ」

『一夏っ！！ いつまでそんな所で遊んでいる！！ さっさと降りてこい！！』

「うわっ！？」

いきなり通信越しに届いた幕の怒鳴り声。思わず身を振るわせてしまふ。

ハイパーセンサーが、地上の状況を眼前の事のように見せる。

『山田先生、インカム取られてるね……』

「何やってんだ、あいつ……？あ、千冬姉にぶたれた」

『オルコット、織斑。そこからの急降下と完全停止、やってみる』

「了解です。では一夏さん、お先に行かせていただきますわ」

セシリアがウインク一つを残し、頭から地面に向かって急降下する。

そしてそのまま地面スレスレでその身を返し、脚部 スラスター 推進機関部で急停止した。

『へえ、流石に上手いもんだね』

派手さはないが、とても綺麗なライディングだと褒める。

『急停止は足を振り抜いて、地面を強く踏みつけるイメージだよ。忘れないで』

「オッケー……よし、行くか」

一夏も、背中 of 突起状の部位からロケットブースターが点火されたイメージを浮かべ、地面に向かって飛んだ。

なので、とてつもない加速力である。

「ウオオオオオオオオオツ!？」

思いがけない状況にパニックになる一夏。

『一夏! 急停止だ早く!!』

「ど、どうするんだっけ!？」

『イメージだよイメージ!!』

「えつとえつと………地面をおおおおおお………蹴り抜くつ!

」!

『ちつがああああああああああああああつ!』

さて、物体が斜めに移動するという事は、下方及び横方向に対し、同時にベクトルが発生している事になる。
その内の一つ、下方へのベクトルが地面によって0になった場合、
どうなるだろうか。

「『つぎやあああああああああああああああ
あああつ!』」

残る横のベクトルが、白式をすつ転がした。
パッシブ・イナーシャル・キャンセラー
いくらPIIC^{II}自動慣性制御機能があるとはいえ、操縦者がこれではどうにもならない。

白式はゴロゴロと転がり滑り、そして土煙と共に土の下に潜ってしまっ

た。そこからズルズルと這い出し、白式が消える。

『い、一夏のばあかあ……………おゝえっ』

「う、ゴメン……………まじで、ごめん……………うつぶ……………」

残された二人は、グルグルの世界に苦しみ続けたのだった。

その後、セシリアと篤が一夏を保健室に連れていこうとして、また揉めたり、それを止めようとしたらふらついてしまい、おもいつきり二人を押し倒してしまったり。

この日は語り尽くせない珍事続出であったが、ここでは割愛する。

「でも、専用機持ちって今のところはウチと四組だけだし、楽勝だよー！」

「そうそう。目指せ、夢の食堂デザート半年間、食べ放題ー！」

「でもでも、調子に乗るとダイエツトが……」

「それを言うなっ！っ！！ 夢が壊れるっ！っ！！」

と、思考に埋没している頭が現実に戻った。

『でも、代表候補生なら多分、専用機持ちかも知れないね……探ってみる？』

『……そうだな』

と、今後の行動を考えていると、教室前方のドアが開いた。

「その情報、ちょっと古いよ？ 2組も専用機持ちが代表になったからね……そう簡単には行かないわ」

「ん？」

そっちを見ると、ババーンッ！、とでも擬音を入れてしまいそうなポーズで、一人の少女が立っていた。

小柄な体格と、スレンダーなスタイル。そして髪を黄色のリボンでツインテールに結んだ少女。肩口は動きやすいようスリットが入れている。

胸元のリボンの色から、一夏と同じ一年生のようだ。

「……………あん？」

『なんでここに？』

その顔に、一夏と春斗は見覚えがあった。

少女はズビシッ！とでも擬音を着けるような勢いで一夏に指を突きつける。

「中国代表候「鈴。なんでこんな所にいるんだよ？しかもそんな格好付けて。似合わないぞ？」って、人の決め台詞に被せるなあああっ！！！」

少女は地団駄を踏んで怒りを顕にする。

「一夏。知り合いか？」

「ああ、実は」

「そして普通に無視して話を続けるなああああああっ！！！」とにかく！！！」

改めて、ビシッ！と、指を突きつける。

「中国代表候補生、^{ファン}凰 ^{リンイン}鈴音！一組代表に宣戦布告に来たわ！！！」

「代表候補生……………お前が？」

「そうよ。驚いた？」

「……………そうだな」

「薄いわよ、リアクションが！！！」

「いや、お前のリアクションがいいから充分だろ？」

「どこぞの売れない芸人と一緒にするなっ！！！」

「なら、取り敢えずそこを退け」

入り口で騒ぎ立てる鈴の後ろから、ドスの効いた声が響いた。ビク

として振り返ると、そこには黒いスーツの女性

千冬がいた。

「ぎゃあつ、呂布!？」

「誰が三国志最強の猛将だ」

スパーンッ!!

「さつさと自分のクラスに帰れ、凰。邪魔だ。お前らもさつさと席に着け」

「痛うっつ……!一夏、昼休みになったらまた来るからね。逃げるんじゃないわよ!！」

ぶたれた頭をさすりながら、鈴は捨て台詞を残して去っていった。

「なんだったんだ、鈴の奴……ていうか、あいつが転校生? IS操縦者になつてたのか……」

『ククツ……鈴ちゃんの事だからきつと、一夏の事を知って急いで来たんじゃないかな?』

『……何で?』

『……さ、SHRの時間だよ』

『答えるよっ!?!』

最早おなじみの内部漫才をしつつ、一夏はやって来た少女を思う。

凰 鈴音。

彼女は織斑兄弟にとって、あまりにも特別な少女だった。

なぜなら、家族以外で”全て”を知る、数少ない人物なのだから。

昼休み。

予告通りに待ち構えていた鈴に捕まり、一夏は食堂へとやって来ていた。

食券を買い、配膳を待つ列に並ぶ。後ろには箒とセシリア、そして最近よく一緒にいるのほほんさん一行が続く。

箒とセシリアの頭やこめかみの辺りは、とてもヒリヒリとしている。というのも一時限目の授業　　千冬の講義中に二人は三発づつ、出席簿を喰らっていた。

箒は、突然現れた鈴に危機感を感じつつも、同室で幼馴染である自分の方が有利だと、よく分からない優越感に浸っていたところを叩かれた。

セシリアは、ただでさえ篤というライバルがいるのに、そこに親しげな、しかも代表候補という、自分と同じカードを持った鈴の出現に危機感を顕にした。

何とか現状を打破できないかと思案している所を、千冬に叩かれた。

一夏は真面目な二人がそんな風に怒られるので、珍しい事もあるもんだと思い、春斗は申し訳なさ過ぎて泣きたくなくなった。

「……で、どうしてこっちに帰ってたのに、教えてくれなかったんだよ？」

「それじゃ、感動の再会にならないじゃない？」

「あれでなつてたのか？」

「うっさいわよ！ あれは、アンタのリアクションが薄いからいけないんでしょ!?!」

「いや、あんまりにも突然だったから驚いてたんだぞ？」

「……………ウソでしょ」

「おっ」

「……………」

「……………」

ゴスッ!!

「いつてえ~~~~~~~~ッ!!」

鈴のキックが一夏の脛を蹴り飛ばした。

「ふんっ。相変わらずね、一夏は」

鈴は鼻を鳴らして、やって来たプレートを受け取る。

「そういってお前も変わらないな……………ラーメン好きなところとかさ。」

痛て……」

「いいでしょ、大好きなんだから」

「まあな。でもあれだ、元気そうで何よりだよ」

一夏も日替わり定食を受け取って、鈴と共に空いている席に向かう。その背に凄いプレッシャーを感じるが、振り返るのは怖いのでしない。

「そういうアンタも元気そうよね。たまには病気とか怪我でもしたらっ」

「それは、春斗あいつに任せてるからな」

「病気肩代わりする代わりに、頭の中身を分けてもらえば？ バランス良くなるわよ？」

「どっという意味だよ!？」

テールに着くと、鈴が少し顔を寄せてきた。プレッシャーが強まった気がするが(略)。

「ところで、春斗はまだ……？」

「……ああ。変わるか？」

「……うん、ちょっとだけ」

一夏はコクリと頷いて、瞳を閉じる。そして春斗と入れ替わった。

「久しぶり、鈴ちゃん」

「久しぶりね春斗。元気そうで良かったわ」

「この状態を元気と言えるかどうか、甚だ疑問だけどね……」

「まあまあ。ところで、一夏って……」" どう"なの?」

「相変わらず。今のところは二人かな……?」

どう? というだけで何のことか察する辺り、流石は春斗である。

「それって、さっきからこっち睨んでる子達……?」

「ビンゴー。景品に、このお新香を進呈しよう」

「わーい、ありがとう」

『お前ら、俺のおかずを勝手にやり取りするなあっ!!!』

一夏のクレームは、当然スルー。

「ところで……何時頃、日本に帰ってきたの？」

「つい最近よ。ていうか、向こうで一夏のニュース見てビックリしたわよ。アンタが付いてて、何であんな事になったのよ？」

「いや、思い返すとももの凄く阿呆らしいんだけどね……」

春斗はその時を思い出しながら、ポツリポツリとか語りだした。

「高校入試の会場が、市立の多目的ホールだったんだけど……そこがちよっと迷路みたいに複雑な作りでね、一夏は道に迷っちゃったんだ。

試験開始まで時間はあつたから、ずっと歩いてたんだけど……人の気配も段々なくなってきて、僕は一度引き返そうと言ったんだ」

「……アイツのことだから、「片っ端からドアを開けてやりや、いつかは当たりに着くぜ！」とか言ったんでしょ？」

「ビンゴー。景品に、この海苔を進呈しよう」

「わーい、ありがとう」

『俺の海苔がああああああっ！！』

当然、一夏のクレームはスルー。

「それで、いくつか部屋を回って……そこに着いちゃったんだ」

「そこ……？」

「IS 《打鉄》が、置かれてあつた部屋があつたんだ。後で聞いたんだけど、別の日にIS学園の試験が行われる予定で、打鉄を学園から借りていたらしい。

で、物珍しさについて触っちゃって……一夏が」

『お前だって、興味津々だったじゃねえかよ！？』

『そりゃそうだろ？ 理論や何やらは考えられても、実物には触れ

た事は無かったんだから。そもそも、一夏が引き返してれば良かったんだよ?」

『ぐっ……!』

「それで、ISが起動しちゃって大騒ぎ。色々検査とかして……で今に至ると」

「あゝ、それでこんな事になったってわけね。納得したわ」

春斗の説明に得心が行ったと、鈴はウンウンと頷いた。

「一夏っ!」

「一夏さんっ!」

パンツ! と、いきなりテーブルが叩かれる。何事かを見れば、不機嫌さを隠しもせず箒とセシリアが、春斗に迫った。

『マズイ、一夏っ!』

『おうっ!』

言葉から会話を聞かれてはいないようなので、急いで一夏と入れ替わる。

「……な、何だよ二人とも?」

「そろそろ、説明をして欲しいのだが……?」

「まさか、こちらの方と……お、お付き合いなさっているとか!?!」

「なっ、何だと!?! そうなのか、一夏!?!」

「うええ!?! ちょ、いや、そんなんじゃない……うう……」

思わぬ言葉に鈴はしどろもどろになり、一夏は頭にハテナマークを飛ばした。

「そっだぞ。鈴は、ただの幼馴染……じゃないか。うん、ちょっと特別な幼馴染だ」

鈴が不服そうに睨みつけられたので、慌てて訂正する。

「ちょっと”特別”か……どう特別なのか、教えてもらえるか、一

何せ目下のライバルは篠ノ之 篤だ。

早速、鈴は一夏に言った。

「ねえ、良かったらISの事教えてあげよっか？ これでも代表候補生なんだから、きつといい勉強になるわよ？」

「お、そりゃ助かる」

「あつ……バカ！」

春斗が止める間もなく、一夏は油をまき散らした。

火種満載のこの中でそんな事をすれば、次に起こるのは一つしか無かった。

「そんな必要はありませんわ！！ 一夏さんには、代表候補である”私”が”二人きり”で教えてさし上げると決まっています！！ 敵の施しはうけませんわ！！」

「何を世迷言を言っているんだ貴様！ 一夏には”私”が”付きつきり”で教えると決まっているのだ！ 余計な真似はしないでもらおうか！！」

「何ですってえ！？」

この金髪もライバルだったかと、鈴は戦闘態勢に入った。

火種はあつと言う間に業火へと変わった。

ギヤーギヤーと言いつつ三人を見て、一夏は呟いた。

「何で初対面なのに、こいつら仲悪いんだ……？」

『君はあれだ、切腹でもするべきだと思っつよ？』
『死罪申し付け！？』

鈍感王 織斑一夏。

彼が少女たちの想いに気付ける日は、きっと遙か彼方である。

第7話 幼馴染・フロム・チャイナ（後書き）

という事で、チャイナ娘さんの登場回でした。

原作よりもノリが良いのも、立ち位置が微妙に違っているからです。

彼女の登場で、春斗の出番も増えるでしょう……きっとw

第8話 クラス対抗戦、スタート！（前書き）

日常回ラスト。

今回は鈴ちゃん大爆走ですw
代表候補生の名は伊達じゃない！！

第8話 クラス対抗戦、スタート！

「何で、こんな事になってるんだ……？」

『君の心に問いかければ答えは……期待できないね』

『ああ、そうだろうな……現実、意味が分かんねえし……！』

放課後のアリーナ。クラス リーグマッチ 対抗戦に向けて、一夏は今日も特訓である。

で、その相手は 。

「ですから、一夏さんのお相手は私が！」

「だから、何度言えば分かる！ 一夏と特訓するのは私だ……！」

乙女達の戦いは、まだまだ延長戦真つ盛りである。

あの後、食堂では熱戦が繰り広げられた。

「一組の代表を一組が教えるのは当たり前。後から図々しく出てこないでください」とセシリアが言うと、「後からじゃないし。あたしのほうが付き合い長いし」と鈴が言う。

「なら私はもつと早い。一夏は自分の家に食事をしに来ていた」と篤が言えば、「それなら、ウチにも毎日のように来てたわよ」と鈴が反撃。

そして「ああ、鈴の実家は中華料理屋なんだ」と、一夏は平常運純感王転。

「私は一夏さんにお姫様抱っこをされましたわ」とセシリアが攻めると、「あたしだっておんぶされたもん」と反撃。
セシリアが「フフン」と鼻先で笑えば、鈴が一夏からの「あれは春斗がやったんだ」と耳打ちを受けて、逆に笑い飛ばしてやる。

昼休みつて、何時からこんなに殺伐とした雰囲気になったんだろうか。などと一夏は思ったが、春斗に自業自得だと呆れられた。

その余熱は冷めることなく、放課後のアリーナまで続いているのだ。
った。

そして現在。

ちよっと回想に入っている間に、何故か箒とセシリアが戦っていた。

「どうしてこうなった……?」

『世界の不思議の一つ”乙女心”ってヤツだよ、一夏』

「訳分からん」

『期待してないから大丈夫』

「一夏っ!」

「一夏さんっ!」

「は、はいっ!?!」

二人がギリギリと鏝迫り合いながら、一夏の名を叫んだ。

思わず上ずった声が出てしまうのも仕方ない。それだけ怖いのだ。

「どうして何もしない!?!」

「何故、黙って見ているんですの!?!」

「だって、どつちかに味方したら怒るだろ絶対!？」

こういつた時だけ勘の鋭い男、織斑一夏。それをもう少し普段から出せていけば、こつもこんがらかった関係は生まれぬものと、春斗は常々思う。

「当たり前だ!！」

「当然ですわ!！」

「どつしろつっーんだよ!？」

結局、この時の選択によって二人同時に相手をさせられた一夏。

日のとつぷりと沈んだアリーナでゼーゼーと息を荒らげてい大の字になっていた。

「一夏さん。対抗戦^{リーグマッチ}まで時間がないというのに……そんな状態で大丈夫ですか？」

「ふん。鍛えていながらそうなるんだ」

「あのなあ……二人がかりで来られたら……誰だって……こうなる……ぞ?」

苦しいながらも、それでも一夏はこれだけは言いたかった。

お前らしい加減にしろ、と。

「では、私は先に失礼しますわ。一夏さん、また後ほど」

セシリアは優雅に踵を返し、アリーナを後にした。

後ほど、彼女はどつするつもりなのだろうか。一夏は怖いので考えるのをすぐに止めた。

「何時までそうしているつもりだ、我々も部屋に戻るぞ?」

「悪い、もうちょっとだけ休んでから戻る……」

「……そうか。なら、シャワーは先に使わせてもらおうぞ?」
「おう」

篤は一夏の様子に苦笑し、一人部屋へと戻った。

「一夏、タイミングを図るんだ」

「何の……?」

「ほーちゃんが、丁度シャワーを終えて出てくるタイミングだよ!

これは初日以来の大チャンスだ!!」

「……お前、何でそんなに見たいんだよ?」

「好きな子の裸とか、普通は見たいと思うものだろう?」

「……」

そういうものなんだろうか。一夏は首を傾げた。

中学時代から「お前は枯れている」だの何だのと、親友である五反田 弾に言われていたが、本人にそんな自覚はない。

篤に限らず、女子にドキッとしてしまう事は多い。だが、それだからとそういう事を実行する気にはならない。

(ま、春斗だって本気じゃないのは分かってるけどな……)

春斗は口ではこういう事を言うが、実際にしたことはないし、する気もない。

それは春斗が、「自分が誰かに迷惑を掛ける事」を、極端に嫌う性格だからだ。

ていうか、自分には迷惑をかけていいのか? と、思ってから気が付いた。

『でも、そろそろ動いたほうが良いよ? 冷えてきたし、乳酸が溜まると筋肉に良くない。クールダウンしないと……』

「……だな。んじゃ、そろそろやりますか」

一夏は横たえていた体を起こし、ストレッチを開始した。

しつかりと体をほぐし、ロッカールームに戻ってきた一夏は、ある事に気が付いた。

「タオルがねえ……………」

『忘れたのっ!?!?』

がっくりと肩を落とし、ベンチに腰掛ける。

「クソ、このまま汗が引くまで待つか…………いや、それだと体が冷えるか……………」

『このままシャツ着るしかないかな…………?』

それは最終手段だ。寮まで戻ったら着替えればいいだけなのだが、それでは洗濯物が増えてしまう。

何とかそれだけは避けたい。

「…………二人とも、お疲れさま」

と、声が掛けられたので、声の方を向いてみる。

「やっぱり鈴だったか」

「…………やっぱりって何よ?」

「二人ともって言ったろ?」俺達”の事を知ってるのは、この学園だと千冬姉と鈴しかいないからな」

「そっか。そうなのよね…………これは、あたしが来た事に感謝してもらわないと! はい、タオルとスポーツドリンク。冷えてないのが良いんだっただわよね?」

差し出されたそれを、ありがたく受け取る。鈴はそのまま、一夏の隣りに座った。

「ああ。サンキュー、鈴」

「じゃ、感謝の言葉代わりに、《海岸》まで下がっていてあげるよ?」

「え……？ ええっ！？ ちょっと待って、春斗！？」

いきなりの言葉に鈴は驚きの声を上げた。《海岸》の意味を知っていたからだ。

止める間もなく、春斗の意識が深層へと沈む。

「……何だ、春斗のヤツ？」

「あ……ああ……っ」

突然の二人きり。鈴は言葉を詰まらせて、俯いてしまった。

「……ふ、二人きりだね……」

「あ、ああ……そうだな」

チラリと隣の鈴を見れば、何故かモジモジとしている。その様子につい一夏も妙な気分になってしまう。

「そ、それにしてもあれね。相変わらず体の事ばかり気にしてるのね？」

「べ、別にいいだろ？ 若いうちから不摂生してたらクセになるし、後で泣きを見るのは自分なんだぞ？」

「じじ臭いわね」

「うるせい」

「……」

「……」

会話が終わり、沈黙が重い。

（な、なんだよこの《付き合い始めたカップルの初デート》的な空気は！？）

それを察しておいて理解に届かない。我らが織斑一夏は通常ダイヤである。

（それにしても、一年ぐらいか……鈴が転校してから。何かこう……可愛くなったような……って、何考えてんだよ俺は！？）

頬を染めて髪をいじる鈴の仕草に、ついドキッとさせられてしまい、慌ててそれを振り払う。

「そ、そういえば鈴。中学の頃の友達には連絡したか？ こっち戻ってるって聞いたら凄え喜ぶぞ」

「え……いや、まだしてないけど。ていうか、何か他に言うことはないの？」

「他って……例えば？」

「例えば……その、あたしが居なくて寂しかった、とか……？」
言いながら、顔がますます赤くなっていく。

「そうだな。寂しかった、かな……」

「えっ……？」

思わぬ答えに、鈴は胸が高鳴ったのを感じた。

(ウソ……そんな、ちょっと……あの一夏が!?)

「鈍感」「ニブチン」「フラグ折名人」等々、様々な異名を持つあの一夏が、自分が居なくて寂しかったと言ったのか。

まさか偽物？ 春斗が入れ替わって自分をからかっているのか？

(あ、ありうる……!)

春斗のモノマネに引つ掛かった事数知れず。もう同じ過ちをすむまいと誓う度にダメされてきたのだ。

「もうダメされないわよ、春斗ッ!」

「は、ハアッ!？」

「何度も何度もあたしをあたしを騙して!! あの一夏がそんな可愛い事を言う訳無いじゃないのよ!」

「おまつ、酷くないか!？」

「……………どうかしたの？」

「ああ、春斗。何か鈴が訳分かんないこと言い出してさ……………」

「はあ……………」

「え……………」

ピタリと、鈴の動きが止まる。

「何？　どうかしたの鈴ちゃん？」

「う……………うがあああああああああああああああああああああ
ああっ！！！」

鈴はガンガンとロッカーを殴りつける。

絶好のタイミング。それを疑心暗鬼にかられたせいで、自ら不意に
してしまった。

この憤り、何かにぶつけなければ収まりはしなかった。

荒れ狂うこと数分。ゼーゼーと肩で息する鈴を尻目に、一夏は制服
に着替えた（鈴に裸を見せられないので、上から着ただけ）。

「じ、じゃあ俺も帰るか。箒もシャワー使い終わった頃だろうし……………」

…あ、差し入れ、ありがとうな」

「え……………ちよつと待った！！　今の、どついう意味！？」

「な、何だよ急に！！？」

「アンタ、あの子とどついう関係なのよ！？」

いきなり復活した鈴が、一夏に激しく詰め寄る。

「どつうて……………ファースト幼馴染だけど」

「おおお、幼馴染とシャワーと……………どどど、どんな関係があるつて
のよー！？」

訪ねつつも、鈴の頭の中はえらいこつちやになっていた。

〈妄想開始〉

『一夏、シャワーでたぞ……』
『そうか。じゃあ、そろそろ……』
『ああ、その……今日はどうするんだ……?』
『勿論、一緒に寝るに決まってるだろ?』
『あつ……』
『パジャマなんて、どうせすぐ脱いじまうんだから……着なくていいのに』
『ば、かもの……そういう事では……』

〈妄想終了〉

「さあ吐け！ あの子とはどこまで行っただってのよ!?!」
「どこまでって、学園から全然出てないっての!?!」
「まさか学園でそんな事してるっての!?!」
「意味が分かんねえよ!?!」
顔を真っ赤にしながら問い詰める鈴と、その鈴にガックンガックンと前後に振り回される一夏。

「だから、俺と篤は同じ部屋なんだよ!?!」
「なつ……!?!? つまり寝食を共にしてるって事!?!?」

〈妄想開始〉

『一夏、もう朝だぞ早く起きないと……あっ!』

『お早う箒。今日もいい匂いだな』

『バカ者っ……何を……こら、悪戯するな!』

『取り敢えず、朝御飯よりも……こつちを食べても良いかな?』

『そ、それで起きるなら……す、好きにしる……』

〈妄想終了〉

「……………」

鈴は火が消えたように俯いていた。

男女が一つ屋根の下。何という危ない状況だろうか。

今はまだ自分の妄想でしかないが、それが明日　　否、今日の

夜にでも現実に変わるかも知れない事を、誰が否定できよう。

「でも、同室が箒で助かったよ。これが見ず知らずの相手だったら、緊張で寝不足になっちまうもん。いや、幼馴染で良かった良かった」

ピクッ。

鈴の耳が、それに反応したかの様に動いた。

『いや、幼馴染で良かった良かった』

「幼馴染なら良いわけね……」

「……………は？」

良く聞こえず、顔を近づける。

「だから！ 幼馴染だったら良いんでしょ！？」

鈴がいきなり頭を上げたせいで、一夏は慌てて顔を引いた。一瞬遅ければ、頭突きを喰らっていただろう。

「な、何だよさつきから！？ 変だぞ、お前！？」

「何でもないわよ！ でも一夏、これだけは忘れないで！！」
ピシッ、と鈴が指を突きつける。

「幼馴染は二人いるけど、特別なのは、あたしだけなんだからねっ！！」

そう言い残して、鈴は走って行ってしまった。

「な、何だったんだあれ……………？ 分かるか、春斗？」

まるで嵐のような時間に、一夏は全然ついて行けなかった。

『いや、僕にも何がどうなったのか全然……………でも、嫌な予感だけはするかな』

「あ、やっぱりそう思うか？」

果たしてそれは何なのか。何れ分かることだろうと、一夏は少し軽く考えていた。

まさか、数時間もしない内に分かってしまつとは、夢にも思わなかつたのである。

「　　」という事だから、部屋代わつて？」

「ふざけるな！！　何故、私ができるような事をしなくてはならない！？」

「いや、篠ノ之さんも男と同室は嫌でしょ？　気は遣わないといけないし、くつろげないし……その点、あたしは全然平気だから！！」

「誰が何時、嫌だと言つた！？　それに、それは私と一夏の問題だろう！！　部外者に首を突っ込まれる謂われはない！！」

「大丈夫。あたしも幼馴染……ううん、”特別”な幼馴染だからね」

「特別だろうと何だろうと関係ない！　自分の部屋に戻れ！！」

「いや、だから部屋は此処になるから」

「だから、どうしてそうなる！？」

時刻は午後八時。

夕食後の、ゆつたりとした一時に現れた闖入者。

ドアがノックされたので筭が出てみると、ボストンバッグを抱えた鈴が立っていたのだ。凄く良い笑顔で。

そこから、二人はこの調子である。

鈴は我が道を行く性格で、筭は人一倍頑固である。故に両者に和解、妥協といった決着は無い。

どちらかの主張が押し通るまで、それは続くのだ。

『これが、さっきの嫌な予感あれの正体か。笑えないね』
春斗は春斗で、もう推移を見守る以外できなかった。

「ところで鈴。お前、荷物ってそれだけなのか……？」

「え？ うん、そうだよ。バッグ一つで何処へでも行けるわよっ！」
自信たつぷりにスレンダーな胸をはる鈴。肉体ばかりでなく中身も
慎ましくなつて欲しいものだと言は思った。

『一夏変な事考えると、すぐにバレるよ？』
『っと、そうだった』

幼馴染の名は伊達ではない上、鈴との付き合いはとても深いのだ。
下らない事を考えるとあっさりと言破してくる。

今も、少し頭に四角を作っているのは、気のせいではないだろう。

こほん、と咳払い一つ。

「とにかく、今日からあたしが此処に住むから」

「ふざけるな、さつさと出て行け！！ ここは私の部屋だ！！」

「一夏の部屋」でもあるでしょ？ 問題ないじゃない。ねえ？」

「大ありだっ！ 一夏、貴様からも何とか言え！！」

二人は最後の一人 織斑一夏に揃って向き直る。

頭が痛くなりそうな空気に、一夏は頭を抱えた。

「何を言えっつんだよ、この混沌とした状況に……」

一夏が頼りにならないと見るや、箒はすぐに鈴に向いた。

「とにかく部屋は変わらない！ 自分の部屋に帰れッ……！」

「あ、そっだ一夏。」あの約束”の事、覚えてる？」

「……って、無視するなっ……！ こうなれば」

鈴の度重なる態度に、ついに怒りの限界を迎えた箒が、立て掛けてあつた竹刀を掴んだ。

「……まずっ……！」

『ほーちゃん！？』

一夏達は箒を止めようとするが、竹刀は鋭く、鈴に向かって振り下ろされ。

パアアアンツ……！！

「っ………！？」

竹刀は、鈴の腕によって防がれていた。

無論只の腕ではない。紫がかった、金属の腕だ。

『ISの部分展開………！！』

「早い………っ！」

展開速度もそっだが、それ以上に、箒の不意を突いたであろう一撃に、反応したことが驚きであつた。

ISはあくまでも操縦者が動かす。つまり展開速度はあくまでも、操縦者以上にはならないのだ。

それは、鈴の実力が相当な事を知らしめていた。

「今の、生身相手なら本気で危ないよ？」

そう言つて、鈴は竹刀を軽く弾き、ISを戻す。

「っ……」

カツとなつてしまったとはいえ、全中大会覇者の剣は素人には凶器。たまたま相手が鈴であつたから良かったが、他の誰かなら鈴の言う通り、怪我で済むかも怪しい。

武を習う者として、あるまじき失態である。

『あれ……俺、木刀でやられなかつたっけ？』

『大丈夫だよ、一夏だし』

『根拠無いよな、その言葉にさ！？』

さて、状況は大きく変わった。

失態を犯してしまつた筈は、鈴に大きな借りを作つてしまつた。もう、先程のような勢いは出せない。

鈴は勝利を確信し、一夏の言葉を待っている。

明暗はここに着いた。

『こ、これはどうしたら良いんだ……！？』

『そういえばさっき、鈴ちゃん何か言おうとしてなかつた？』

『うん？ そういえば……？』

何故かそれが気になり、一夏は口にしてみた。

「なあ。さつき、”あの約束”って言ってたよな……?」
「えっ。う、うん……覚えてるよね?」

おずおずと尋ねる鈴。「何だっけ?」とは続けられず、一夏は灰色の脳細胞に救援を求めた。

『ポアロ、助けてっ!?!?』

『う、ん、約束約束……あ、あれかな?』

『どれかな!?!?』

『ヒント。夕暮れの教室、そして酢豚』

『……む? う、ん……』

ヒントに考え込む一夏。春斗が何故思い当たったのか、そこは気にならないようだ。

「もしかして、あれか……? 料理が上手くなったら毎日……」

「っ! そ、そう、それよっ!」

「……酢豚をおごってくれる、だったよな?」

「『……は?』」

鈴と春斗の声がシンクロする。

「いや、だから鈴が料理できるようになったら毎日、飯をこ馳走してくれるって約束だろ? いや、ほぼ一人暮らしな俺には有り難い約そ」

パァンッ!!

鈴の平手が、一夏の頬を打っていた。

いきなりの事に、一夏も箒も呆然としてしまっている。

「あ、な……………?」

「最っ低……………! アンタ、女の子との約束もちゃんと覚えてないの!? 男の風上にも置けないヤツ!! 犬に噛まれて死んじゃえッ!」

「なっ……………ちゃんと覚えてただろうが!! なのに何で、打たれなきやならないんだよ!」

「約束の”意味”が違うわよ!!」

「じゃあ、あれはどういう意味だよ!」

「ど、どういう意味って……………そ、そんな事言える訳ないでしょ!」

「……………っ!」

『ごめん鈴ちゃん。一夏は1を聞いたら4、7、8をぶん投げるよ
うな奴なんだ……………』

箒はそんな鈴の態度に何かを察したようだ。春斗は本当に申し訳なくて、土下座している。誰にも見えないけど。

「ぬううう……………っ!」

「むむむ……………っ!」

睨み合う両者。やがて鈴が一つの提案をした。

「だったら、これは今度の対抗戦^{リーグマッチ}で決着をつけましょう! 勝った方が負けた方に、何でも一つ言う事を聞かせられる、いいわね!」

「おう。俺が勝った時は今の事、きっちり説明してもらおうからな!」

「そっちこそ、覚悟しておきなさいよ! ふんっ!」

鈴は下ろしていたバッグを取って、怒りを込めた足取りで部屋を出て行ってしまった。

「まったく、何だよあいつ……………本当に、訳わかんねえ……………」

鈴の出で行ったドアを見ながら、一夏は深々と溜息を吐いた。

「『……一夏』」

「うん？」

内と外から、同時に声が掛かる。

「『馬に蹴られて、死ね!!』」

「ええっ!?!」

何故そんな事を謂われたのか、一夏には全く意味が分からなかった。

翌日。生徒玄関前廊下に一枚の紙が張り出されていた。
それはクラス対抗戦リーグマッチの組み合わせ表であった。

そして、一回戦の組み合わせ。

【一組代表 織斑一夏 対 二組代表 鳳鈴音】

決戦は 第一試合。

時は流れて、リーグマッチクラス対抗戦前日。

夕焼け染まる、一年校舎の屋上に佇む人影。
柵に寄りかかり、ツイントールを風になびかせる小柄な少女。

「一夏のバカ一夏のバカ一夏のバカ……ッ！」
まるで呪詛のように呟き続ける姿は、誰も声を掛けられない程に恐ろしい。
屋上には幸い、人気はないのだが。

「……………あ、ここにいたか」
「っ……………!?!」

否。声を掛ける者が一人いた。
その声に聞き覚えがある鈴は、全てを射殺す様な視線で振り返った。

「ぐっ……否定出来ない」
鈍感ぶりでは世界トップ（非公式）とまで称される一夏。もう本
当に押し倒すぐらいでないかと戦えないかも知れないとか、本気で思
ってしまう。

ガツクリと頂垂れた鈴に、流石に可哀想だなと春斗は思った。

「元気がないそんな貴女に、素敵なお話がありますけど……聞かれ
ますか？」

「いらぬ。何かもう、疲れたわ……」

この数分間に、鈴はすっかりと疲労困憊であった。話など聞く気
にもなれない。

「そっか、それは残念。せっかく、アリーナのロッカールームで一
夏が鈴ちゃんの事、どう思ったのか教えてあげようと思ったんだけ
ど……」

「っ……!」

「聞きたくないんじゃ、しょうがないか。じゃ、僕は帰」

がしっ。

「ろつと思うんだけど……この手は何？」

視線を下げれば、鈴の手が制服の裾を掴んでいた。大股で、一杯に
腕を伸ばして、必死な事この上ない。

「……せ、せっかくだから、聞いておこうかな？」

鈴は羞恥に赤くなりながら、引きつった笑みを浮かべて言った。

「……良いよ、教えてあげる」

それを見て、春斗はニツコリと微笑む。

ああ、またコイツに弱みを握られた。と、鈴は心の中で後悔した。

だが、それは後のことだ。いまは一夏の事が先である。

「で、なんて思ってたの……?」

羞恥に頬を染めながら、鈴は問いかける。春斗はそつと耳元に口を寄せた。

「っ……………!」

囁くように、告げる。

「『何かこう……可愛くなったな、鈴』だってさ」「

その後、屋上にはニヤニヤと笑い、時々奇声を発するツインテールの少女が目撃されたという。

翌、^{リーグマッチ}対抗戦当日。場所は第2アリーナ。

第一試合を前に、一夏はウォームアップをしていた。

『取り敢えず、鈴ちゃんのISについて分かった事をおさらいしよう』

『おう、頼む』

『IS名は甲籠^{シエンロン}。中国の第三世代型だ。急な転入のせいでデータが不足してるけど……恐らくブルー・ティアーズのような、何かしらの隠し玉を持っている筈だ』

『その根拠は？』

『第三世代は未だ実験機。絶対に初期装備^{プリセット}には、それが当て嵌められているからだよ』

ISの武装には【初期装備^{プリセット}】と【後付装備^{イコライザ}】がある。初期装備は書き換え不可能なIS独自の武装。後付装備は【拡張領域^{パズロット}】に入れる武装である。

セシリアのブルー・ティアーズを例にとると、レーザーライフルと接近戦用ナイフが後付装備、^{ブルー・ティアーズ}BT兵器が初期装備に当たる。

なお、白式には雪片式型しか装備はなく、拡張領域もゼロである。

『第三世代装備……それが何なのかは不明か』

『戦闘スタイルも分からないのがキツイね。鈴ちゃんの事だから、接近戦はある筈だけど……』

「ま、後はやりながら考えようぜ」

一夏はグツと体を起こした。

『気軽に言うね……』

『春斗を、信じてるからな』

『ありがとう、全力で当たらせてもらっよ』

そしていよいよ、時間がやって来た。

「来い、白式……!!」

一夏は白式を起動展開させる。

『システム正常、戦闘に問題ナッシングだ』

「オーケー。んじゃ、行きますか」

カタパルトに乗りこむ際、視界の端に見える

少女達の姿。

「行ってくるぜ。箒、セシリア」

一夏は軽く手を上げてやる。

『カタパルト、ロック確認。射出3秒前……2……1……0!』

「よし……行くぜ……!!」

カタパルトから一気に射出され、白式は二度目の戦場に舞い上がった。

第8話 クラス対抗戦、スタート！（後書き）

次回、いよいよ見せ場です。

試合の行方は。

そしてデレさせられた鈴の運命は！？（えー）

原作第一巻分、やっと終点が見えてきました。

第9話 VS甲龍/ENGAGED UNKNOWN(前書き)

鈴との戦闘回。

一部、独自解釈があります。ご注意ください。

第9話 VS甲龍/ENGAGED UNKNOWN

第2アリーナで行われる、クラス対抗戦^{リーグマッチ}第一試合。

それは一番の注目カードであった。

これが公式戦^{デビュー} 初登場となる、世界初の男子IS操縦者【織斑一夏】。

つい先日、転入してきたばかりで代表となった、中国代表候補生【凰鈴音】。

全校で代表候補生は数十人。

その内、一年には五人しかおらず、専用機持ちは一夏を除いて現在は三人である。

その専用機持ち同士の戦いとなれば、注目度は言わずとも知れる。

観覧席は満席。通路に立ち見も生まれている。

アリーナの席を、『指定席』と称して販売していた二年生がいたが、あえなく千冬のお叱りを喰らって、三日間の謹慎処分となったという話もある。

入れなかった生徒は外で、リアルタイムモニターでの観戦。

更にクラス対抗戦^{リーグマッチ}は生徒だけでなく、関係者も観覧している。

何せ、未来のエースがそこから生まれるかも知れないのだ。注目度はやはり高い。

一夏よりも大きな驚きを見せた連中がいた。ピットのモニタールームにいるセシリアと篤である。

今までの会話は開放回線オープンチャンネルで行われており、当然ピットにも、その内容は筒抜けであった。

『一夏、今のはどういう事だ!? 説明しろ!!』

『そうですね! 説明をして下さい、一夏さんっ!!』

『うるさい! 負け犬はすっこんでなさいよ!!』

『だ、誰が負け犬だ!!』

『そうですね! あなたこそ、何を勝った気にいるんですの!?!』

『ふふーん。悔しかったら一夏に「可愛い」とか「綺麗」とか、思われてみなさいよ!!』

『っつ……………!?!』

通信越しの二人に、グサリと何かが刺さった。

『あ、あの……………皆さん?』

『ダメだ一夏。今はそつとしておこつ』

『これ、絶対にお前の仕業だよな!? お前昨日、鈴に何言いやがった!?!』

『ウソは言っていないよ。でも、まさかこんな事になるとは……………この春斗ほくの目を以てしても見抜けなかった』

後悔先に立たず。先人の言葉は、何と重く偉大なんだろうか。

『一夏さん、今すぐに私を御想い下さい!! さあ、さあ!!』

『一夏っ! そ、その……………お前は再会した私を見て、どう思ったんだ!? 今、ここで答える!!』

『もっつ! さっさと諦めなさいよ、見苦しいわね!!』

『お黙りなさい貧乳娘!!』

『黙っている、チンチクリン!!』
「ひ……ひん……ちんちく……!!? い、言っではいけない事を言
ったわね、アンタ達いいいいいいいい!!」
もう一夏当事者そっちのけである。対面していたら、きっと取っ組み合い
になっただろう。

「…………お前らなあ、いい加減」

ゴッ!! ×2

通信越しに、凄く良い音が聞こえた。

『これは公式戦だ。恥を無闇矢鱈と晒すな、バカ者が……』
いつもよりも迫力数割増の千冬の言葉。聞いただけで震えが来てし
まう。

『それと織斑、凰。試合後に私の所へ来い……良いな?』

「ヒッ……!!?」

「俺、何もしてないのに……!!?」

『 良いな?』

「は、はい……」

もう、逃げ道なんて何処にもなかった。

「もっつ! 一夏のせいだからね!？」

「俺のせいじゃないだろ!？」

「うっさい! 取り敢えず、こないだの賭けは賭けだから……忘れ
ないでよ!？」

「わーってるよ！ そっちこそ、勝つたらずくに説明しろよな！！」
「す、すぐって……何だよ！？ ここでしろっての！？」
「千冬姉のお叱り喰らったら、それどころじゃないからな……！！」
「い、良いわよ……やってやるうじゃないっ！！」
鈴が背中の青龍刀を抜き、一夏も雪片を構える。

『では試合を開始します……始めっ！！』

開始を知らせるブザーが鳴り響き、甲龍が一気に突進。そのまま青龍刀を振り上げ、叩きつける。

「クッ！！」

『早い……っ！！』

ギリギリで雪片で受け止めるも、そのまま弾かれる。そこに襲いかかる鈴の一撃。

「でえいッ！！」

「……つと！！」

白式の機動力を活かし、弾かれた勢いに乗って躲した。が、眼前を掠める刃に背筋がゾツとする。

純粹なパワーは白式より上の甲龍。喰らえばただでは済まない。

空中を舞い、数度の激突。共に競り合いながら上昇していく。

「だらあっ！！」

「甘いつ！！」

横薙ぎに振るった雪片を難なく躲し、鈴が間合いを離す。

「ふうん、この甲龍の攻撃を防ぐし躲す……か。なかなかやるじゃない、一夏」

「そりゃどうも」

「じゃ、これならどうかしら……っ!?」

鈴は空いていた左手に、更に武装を展開オープンさせた。それは、同じ形の青龍刀であった。

「二刀流だと……!?」

『なんて物騒な武装だ……っ!』

「何か下らない事言われた気がするけど……ま、いいわ。じゃあ、行くわよっ!!」

鈴は二刀を掲げ、真っ直ぐに向かってきた。

袈裟懸けに振るわれた一撃を躲すと、そこへ更に二刀目の刃が迫った。

「ぐあっ!?!」

「まだまだあっ!?!」

ブロックするも、再び弾かれる一夏。そこに二刀を一刃へと合体させた鈴が迫る。

長柄の形を取った武装《双天牙月》が翻り、白式のバリアを打ち据える。

「うぐっ!?!」

『マズイ、二刀になったせいで隙がない!? 一夏っ!?!』

「おうっ!」

「逃がさないっ!?!」

鈴は双天牙月を剣舞のように左右に振り回しながら、一夏を追う。

「うおっ、とっ、クソッ!?!」

上下左右から襲い来る刃を一夏は、セシリアから教わった三次元跳躍クロス・グリッド・ターン旋回を駆使して回避する。

鈴は強い。

代表候補生。それも専用機持ちともなれば、今の一夏では届かない。

セシリアに勝てたのは事前情報、戦術、奇策、春斗のサポートがあればこそだ。
もしもまともにもやり合っていたら、勝てる可能性は奇跡程に低かっただろう。

しかし鈴は違う。

事前情報無し。近接戦闘に強く、春斗の存在も知っている。つまり、一夏達の持つアドバンテージは、大きく減らされているのだ。

「このままじゃ、消耗戦だ。一度、距離を離さないと……！」

『どうやら、旋回性能はこっちが上のようだ。振り回して引き剥がすんだ！！』

「よおしっ……！」

一夏は一気に加速。それを追う鈴。一夏は上昇から一気に下降。急降下からの低空飛行。

そこから左右に大きく振り回し、甲龍を徐々に離し始める。

『距離56……70！このままだ！！』

「オーケーッ！」

加速する白式。それを見て　　鈴が笑った。

「甘いつてのよッ……！」

肩のスパイクアーマー、と思われていた非固定浮遊部位アンロックユニットがスライドした。

『後方からエネルギー反応！？　一夏、旋回だ！！』

「……っ……！」

春斗の声に、一夏がその身を捻り込む。

その脇を何か掠め、アリーナの遮断シールドを直撃した。

一夏は、その衝撃に振り回される機体を何とか立て直す。

「なっ……何だ!?!」

『今のはまさか……一夏、逃げる!?!』

春斗はその正体に気付いて叫ぶ。だが、すでに”二発目”が装填されていた。

「それはまだ、ジャブよ!?!」

「ッ!?!」

瞬間、一夏を凄まじい衝撃が襲った。

「な、何だ今のは!?!」

箒はモニターに映る光景に叫んでいた。

鈴の非固定浮遊部位アンロックユニットが展開し、中心の球体ユニットが光ったと思った瞬間、一夏が地面に叩きつけられていた。

「あれは《衝撃砲》ですね。空間に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じるエネルギーを弾丸にしてぶつける武器です」

「《ブルー・ティアーズ》と同じ、第三世代型兵器ですね……」
攻撃を分析した真耶の説明に、セシリアが続ける。
モニターの向こうではなんとか立ち上がった一夏が、連射される衝
撃砲の弾雨を転がりながら躲していた。

『クソッ……!』

『よく躲すじゃない。この《龍咆》は砲身も砲弾も見えないのが特
徴なのに……ああ、そうだったわね。それぐらい、”アイツ”なら
簡単か』

(……あいつ……だと?)

まるで”一夏以外の誰か”がいるかのような言葉。何故か箒の耳に、
それが深く響いた。

『お喋りは、そのぐらいにしとけよ……鈴』

『……そうね。じゃあ、代わりにこれをあげるわ!』

再び、衝撃砲による連射砲撃。一夏は飛び上がり、空中へと逃げる。

「しかもあの武装は、射角がほぼ無制限で撃てるようです」

「つまり……」死角が存在しない?」

「そういう事ですね……」

「っ……」

二人の言葉は箒の耳には届いておらず、さっき感じた何かも、すでに
頭から外れていた。

ただ、ひたすらモニターを見つめる。

(一夏……頑張れ! 男ならここで踏ん張るんだ……!っ)

鈴の砲撃に晒される一夏の姿に、箒はただギョツと拳を固める。

一夏はこんな所で終わる男じゃない。

そうだ。一夏は僅か一週間程度で、同じ代表候補生であるセシリア

を倒したではないか。
その一夏が、このまま一方的にやられる筈がない。

と、戦闘をモニターしている真耶が、ある事に気付いた。

「動きが変わった……？ 織斑君、何かをするつもりですね」
旋回避を続けながら、しかし距離は衝撃砲を躲せるギリギリをキープし続けている。

この状態を維持する意味は何か。その答えは千冬によって提示された。

「……私が教えた、イグニッションブースト 瞬時加速だろう」

「瞬時加速……？」

セシリアが、聞き慣れないその正体を尋ねる。

「イグニッションブースト 瞬時加速とは、一瞬でトップスピードに乗り、敵に接近する奇襲攻撃。出し所さえ間違えなければ、アイツでも代表候補生と渡り合える筈だ」

「そんな技術をいつの間に……」

「だが、あくまでも奇襲攻撃……通用するのは、一回だけだ」

千冬の言葉に、全員が黙ってしまう。

一回だけのエースカード。その一度だけで、この逆境を逆転する。そんな奇跡のようなタイミングを、果たして取れるのか。

誰もが不安になる中、千冬だけはそれに自信があった。

（あそこにいるのは一夏だけではない。春斗ならば、あの衝撃砲の”見えざる死角”に気付ける筈だ……）

勝機は、諦めない者の上にごそやって来る。

それならば、あの二人に心配など無用であると、千冬は確信していた。

もちろん、そんな事を口にすれば、ブラコンだの何だのと言われるのは目に見えているので、絶対に口にしない。

「クソッ、どうしても後手に回される……!!」

『圧縮反応に合わせても、回避が精一杯だ。予測回避がギリギリ過ぎる……!!』

「どうする……どうすれば良い……!!? 考えろ、伊達にISの特訓をしてた訳じゃないだろう……!!」

『射角ほぼ無制限の上、無制限機動と軸反転でほぼ死角なし……反応感知ではダメ。なら、先の先を取るしかない……!!』

「先の、先を……!!」

何かないか。

二人の思考は先日時まで遡っていた。

アリーナでの特訓。その日は箒もセシリアもない珍しい日であった。

そして代わっているのが千冬であるから、更に珍しい。

「イグニッションブースト
瞬時加速？」

「そうだ。理論に関しては、後で春斗に聞け。とにかくこれは、今後戦う上で重要な切り札となる筈だ」

「でも、出来るなら飛び道具とか欲しいな、なんて……」
一時代前の熱血教師のように竹刀を地面に突き立てて、千冬が言った。

「私は雪片だけで、世界一に上り詰めた。ならばお前にも、その一振りだけで充分という事だ」

三年に一度行われる、ISの世界大会【モンド・グロツン】。その第一回大会で千冬は優勝、世界一となった。

その際、彼女が使っていた武装は雪片のみ。ただ一振りの刃が、世界を打ち破りきったのだ。

第二回大会こそ、とある事情により優勝を逃したが、今も世界一のIS操縦者は織斑千冬だと言われている。

「いや、世界一と比べられても……」

手の中の雪片を見ながら、ポツリと呟いた。その瞬間、千冬の竹刀が飛んできた。

「いつてえ!？」

竹刀で頭を叩かれ、ISを着ているのに一夏が悲鳴を上げる。

シールドや絶対防御は何処に行ってしまったのだろうか。

「そもそも、お前は白式の特徴をちゃんと理解しているのか？」

「白式の特徴……？ えっと、機動性が高くて、防御もそれなり。

後は武器が雪片これだけ……で、雪片はシールドエネルギーも攻撃にする諸刃の刃……って感じかな？」

「春斗の講義だな。70点だ」

「はい、そのとおりです」

そこはまあ良いと、千冬は話を続ける。

「……白式は、いくなれば欠陥機だ」

「欠陥機!？」

「いや、そもそも”ISは完成していない”のだから、欠陥も何も無いな。他の機体以上に、攻撃に特化した仕上がりになっているんだろう。拡張領域パスロットも埋まっている筈だ」

「な、何という突撃仕様……」

「だが、その領域全てを使って雪片を振るっているのだ。攻撃力は全ISの中でもトップクラスだ。ならばそれを使いこなす事が重要だろう?」

「まあ、そうだね……」

「そもそも、お前のような素人に射撃戦闘ができるのか?」

「……その辺は、春斗にも散々言われました。ごめんなさい」

ガツクリと肩を落とす一夏。セシリアのレーザーライフルを見て、羨ましいなとか思っていたりしたのだ。

剣も良いけど、銃もカッコイイ。そんな小さな憧れである。

シユンとした弟に千冬は少しだけ笑い、そして続ける。

「お前には一つの事を突き詰め、極める方が合っているぞ。

何せ”この私の弟”なのだからな」

そう。千冬と一夏は似ている。

不器用なところも、真っ直ぐなところも、そしてその本質も。

それ故に、雪片の後継たる式式を与えられているのだ。

「千冬姉………あのさ?」

「何だ?」

「………春斗が、『全然、姉さんに似てなくてごめんなさい』だって……」

「あ、いや! 今はそういう意味ではなくて……と、とにかく違うんだぞ!？」

珍しく狼狽する千冬。彼女は春斗には、いまいち強く出られないの

であった。

なんか余計な所まで思い出した気がするが、今はそれどころではない。

「その為の手札はある……雪片と【瞬時加速】なら、行けるはずだ」

『なら、僕も本気を出すよ。必ずあの攻撃の隙を見出して見せる！』

『頼んだぜ、春斗!!』

『一定距離を保ちつつ、鈴の周囲を旋回するように動いて!』

「よっしゃあつ!!」

技術で劣るのは仕方ない。一朝一夕で伸びるものではないからだ。時間を積み重ねたそれがそのまま、実力となる。

だが、それでも負けていないものだってある。

共に生まれ、育ち、戦う二人の重ねてきた十五年という時間は、鈴やセシリア、千冬でさえも敵わない。

そして、何よりも”負けたくないという気持ち”は、誰よりも強いと自負しているのだから。

(……動いたわね、春斗!)

鈴はすぐに、白式の動きに変化を見出した。

一夏はISの素人も同然。だが、それ故に伸び白が半端ではない。今も、加速度的に成長をしている。

そして春斗は間違い無く天才。自分でも気付いていない弱点を見つけて、何か秘策を練り上げてくるかも知れない。

(この二人を相手に長期戦は不利。だから、一気に決着をつける!)

龍咆による連続射撃。

『甘いよ、鈴ちゃん!!』

だが、軌道予測プログラムをリアルタイム更新し続ける春斗によって、命中率が段々と落ちて行く。

「ウソツ！ まさかもつ……こんなに早く龍咆に対応を!？」

『衝撃砲は確かに凄い武器だ。鈴ちゃんの技術と相まって、高い能力を発揮している。でも、人が制御するものに”完璧”という言葉はないっ!!』

白式に、一つのポイントが提示される。

「ここか……っ!？」

『甲龍を中心に、左後方、下33度！ そこに回り込んで!!』

「よおしっ!!」

「なっ!？」

スピードに乗った白式は、鈴の視界から消えるように動いた。

急制動を用いた、至近距離のフェイント。

基礎移動を徹底的に見直し、編みだした戦闘用飛行プログラム。

ハイパーセンサーが幾ら優秀でも、思考の死角を取られれば反応は遅れる。

それが自分の反応の死角ならば、尚更に。

(がら空き……っ!!)

戦闘開始から、初めて取った鈴の背後。此処こそが、切り札^{エース}を切るタイミングだ。

閃光が、アリーナを撃ち抜いた。

アリーナのグラウンドは爆発し、黒煙を上げていた。
客席をシェルターが覆い、緊急事態を告げるアラートが鳴り響く。

「な、何が起きたんだ……!？」
雪片が届く寸前、突如として 空から何か降ってきた。
だが、遮断シールドに守られたこの場所に、何が来るといえるのか。

『外部からの攻撃……遮断シールドを破壊するほどの威力なんて……何ッ!?!』

警告 中央に熱源反応 所属不明のISと断定 ロックさ
れています

『一夏、何者かに捕捉ロックされてる!!』

「ああ、分かってる。でも、正体不明のISだと……?」

轟々と燃えるその向こうに、揺らめく影が見える。恐らくあれが、シールドを破った乱入者だろう。

「二人とも、試合は中止よ。あたしが時間を稼ぐから、すぐにピットに戻って!!」

鈴から個人回線プライベートチャンネルが飛んでくる。

「お前、一人でやる気か!? 女を置いて、一人で逃げられるか!!」

「しょうがないでしょ!? アンタ、あたしより弱いんだから!!」

「っ……!!」

「あたしだって最後まで遣り合うつもりはないわよ。この異常事態、すぐに学園の先生が收拾してくれるわ。それまでの足止めよ」

確かに、鈴の言う事には一理ある。

代表候補性である彼女の实力は本物だ。今の自分とは比べようもない。

だが、それでいいのか。と、誰かが問う。

(良いわけ、ないだろ……っ!)

「そう。ここで白式が退くのはお勧めしないよ?」

「ッ!?!」

いきなり開いた砂嵐の個人回線から聞こえてきた声に、鈴が驚く。

「だ、誰なの……アンタッ!?!」

「鈴、危ないっ!?!」

黒煙の向こうに高エネルギー反応を察知した一夏は、一気に飛ぶ。鈴を抱き抱え、彼女を狙った攻撃をギリギリで躲した。

「ビーム兵器、セシリアのISよりも出力が上……!?! 喰らった
らヤバイぞ……!?!」

「遮断シールドを貫通する威力だからね。要注意だ」

「早速だけど、アイツの解析を頼む」

「了解。それと、現在の情報を少しばかり集めたから、そのまま聞いて」

普通にやり取りされる会話。鈴はその間、間近にある一夏の顔に見とれていたが、すぐ我に返った。

「……ハッ!? ちょっと、アンタは誰なのよ!?! それと何で、
一夏はそいつと普通に話してるのよ!?!」

鈴が混乱気味に尋ねてくるので、二人は意味が分からず首を傾げた。

「誰って……何言ってるんだ、お前?」

「そっだよ鈴ちゃん。今更何を……あ、そっか。鈴ちゃんは知らなかったっけ……」

「り、鈴ちゃんって……まさか、春斗なの!？」

「そうだよ。白式の個人回線プライベートチャンネルを通して、話してるんだ。その方が早いからね」

そういえばこの声は、一夏の声を細く高くしたようにも聞こえる。と、鈴は思ったがすぐにブンブンと頭を振った。

「いやいや、なんでそんな事出来るのよ!? だって、アンタは一夏の中で……」

「あ、俺が白式を展開するとさ……何かISに取り込まれるみたいなんだ、春斗のヤツ」

「ハアツ!? 何よそれツ!？」

「説明は後ですよ。今は、アイツへの対処が先だよ?」

「………分かった。ていうか、何時まであたしを抱いてるのよ!?! 下ろしなさいよ!?!」

「こ、こら暴れるな!?!」

鈴は一夏に横抱き お姫様抱っこ状態にされている事に気が付き、羞恥に暴れだした。

「またまた。実は一夏の横顔に見惚れてたくせに……意地張っちゃって」

「そ、そんなんじゃないわよツ!! このっ、バカ、バカバカーツ!?!」

ますます暴れる鈴。ポコポコと、一夏は頭を殴られた。金属なので結構痛い。

「いてっ! 何で俺を殴るんだよ!?! 春斗だろ色々言ってるのは!?!」

「うっさい! アンタが全部いけないのよ!?!」

「何だよそれ……っ!?!」

「攻撃来るよ、回避だ!?!」

敵ISより 高エネルギー反応

「クソッ!!」

二人を狙った閃光を、更に加速して躲す。

そして、黒煙と紅い炎の向こうから、姿を見せる存在。

「何、あれ……?」

「あれもIS……なのか?」

2メートルを超える、フルスキン全身装甲のIS。

本来、ISの防御はバリアで行われるため、全身装甲という物はま
ず存在しない。

物理シールドを持つ防御特化の機体もあるが、それでもこれは異常
だ。

巨大な腕部は地面まで着き、人というよりもゴリラのような印象。

腕部と肩部に恐らくビーム発射口であろうユニットが計四門。

全身には姿勢制御用だろうスラスタが何機も見え、頭部にはむき
出しのセンサーレンズが規則性無く並んでいる。

その敵 ” アンノウン ” は少なくとも、今まで学んできたISと

いう存在とは、一線を描す存在であった。

「お前は何者で、何が目的だ……！ 答えろっ！！」

一夏がそれに向かつて問い掛ける。だが、異形の乱入者は沈黙を守っている。

「沈黙は時に雄弁よりも言葉を語る……か。あいつの目的なら、もう分かってるよ」

「……本当か？」

「その前に確認。鈴ちゃん、あいつが白式をロックした時、甲龍はロックされた？」

「ううん、されてないわ」

「という事は、やっぱり……アイツは一夏と白式を狙ってきてるんだ」

「俺と白式を……!?!？」

一夏が聞き返すと、春斗は頷いた。

「間違いないよ。アイツは」

『 織斑君、鳳さん！ 』

突如として開放回線オープンチャンネルでの通信。春斗はすぐに言葉を止める。

それはピットにいる真耶からだった。

『 今すぐに、アリーナから脱出してください！ すぐに先生方がISで制圧に向かいます！！ 』

『 それは多分、難しいだろうね 』

『 ……どういう事だ？ 』

通信ではなく、何時ものように一夏に言葉を掛ける春斗。

『今、アリーナの遮断シールドはレベル4。全扉はロックされている状態だ。攻撃直後にハッキングされているから、間違いなくあのISの仕業だろうね』

『……ちよつと待て。じゃあ、避難や救援は!?!』

『システムクラックはすぐには実行出来ない。その間、アリーナの全員がヤツの人質だ』

「っ……………!?!」

『恐らく一夏が撤退する素振りを見せない限り、安全は保証される。でも、撤退しようとするれば……………』

「……………人質を殺す、かよ……………っ!?!」

『……………え?』

つい苦々しく口に出てしまった言葉に、真耶が驚いている。

「先生、今の状況は分かっています!　アリーナのシステムクラックが終わるまで、俺達がアイツの相手をします!?!」

『え、えっ……………!?!?　何でその事を!?!』

「救援よりも、アリーナの皆の避難を優先して下さい、頼みます!」

そして、一夏は通信を切った。

「……………て事だ。良いな、鈴?」

「なによ、カツコつけちゃって……………ていうか、いい加減に下ろしなさいって!　動けないじゃないの!?!」

「ああ、悪い」

一夏が腕を退けると、ふわっと甲龍が浮かび上がった。

その瞬間、ちよつと残念そうな顔をしたのを春斗は見逃しはしなかった。

「鈴ちゃん、もうちよつと素直になりなよ?」

「あたしは何時だって素直よ!」

「……………ふん」

「……………何よ、そのむかつく声は?」

「別に、何でもないよ?」

「後で絶対にシメてやる……………っ!」

「お前らな、真面目に　とッ!」

「うわっ!?!」

二人の下らない言い合いを制止しようとした所に、アンノウンの攻撃。二機はすぐさまそれを回避する。

躲されたと見るやスラスターに点火し、飛翔するアンノウン。

「続きは、全部終わった後よ!」

「賛成だね!」

「よし……………行くぜっ!」

二人はそれと、真っ向からぶつかり合った。

第9話 VS甲龍/ENGAGED UNKNOWN(後書き)

オープンとプライベートの違いがいまいち難しい。

取り敢えず、全域通信と個別通信で良いのだろうか？

春斗が喋れるのは、プライベートチャンネルは声を出さなくてもいい、という原作表記から取ったものです。

アニメだと鈴もプライベートチャンネルで普通にしゃべっているの
で、その辺はアニメ寄りということ。

第10話 零落白夜／月華白麗（前書き）

アンノウンとの戦闘回。

戦闘描写は本当に難しいです。

今回、独自解釈満載なのでご注意ください。

PV100、000、ユニーク10、000突破しました。
皆様、ありがとうございます！

第10話 零落白夜／月華白麗

「織斑君、織斑くんっ!？」

通信を切られ、プライベートチャンネルで呼びかけるも反応は返って来ない。

モニターでは既に、アンノウンとの戦闘が開始されていた。

通常のISバトルとは違い、これは紛れもない実戦。下手をすれば命にさえ関わる事だ。

観客席には防護シールドが展開されており、流れ弾程度ではビクともしない。

だが、ISを駆り戦う二人には危険が大きく伴う。

「織斑くん、鳳さん!？ お願いですから、すぐに退避を!！」

教師として止めなければならぬと真耶は呼び掛けを続ける。

「一夏、聞こえているんだろう!？ そこは危険なんだぞ!！」

「一夏さん、どうか返事をなさって!！」

箒とセシリアもまた、通信で呼びかける。が、やはり応答はない。

「本人が”やる”と言っているんだ。やらせてみれば良い」

肩を竦めて千冬が言っていると、真耶が信じられないといった顔で振り返った。

「織斑先生!？ 何でそんな呑気な事を言ってるんですか!？ これは学内戦とは違うんですよ!？」

「まあ、落ち着け。コーヒーでもどうだ？ 糖分が足りないからイライラするんだ」

コーヒーメーカーからコーヒーを注ぎ、そしてスプーンを摘んだ。そのまま白い粉末を入れてかき回す。

「……………」

「……………」

「こういつ時こそ、冷静さを欠いてはならない……そうだろう？」

「……………あの、今入れたのって……塩、ですよね？」

「……………っ!？」

千冬がハツとして、それを見た。はつきりと『砂糖』と書かれたシユガーポット　の隣に『塩』と書かれたソルトポットがあった。開いていたのはソルトポットである。

「な、何で塩が……………？」

「さ、さあ……………？　でも、ハッキリと塩って書いてますし……………」

ピットの中に、何とも言えない空気が流れる。軽いヒソヒソ声も聞こえた。

「あっ！　口では何と言ってもやっぱり弟さんが心配なんですな。だからそんなミスを……………っ!？」

真耶はそこまで言っつて、自分が地雷を踏んだと気付く。が、吐いた言葉は返らない。

もの凄い素敵な視線が、真耶を捉えていた。

「……………山田先生、どうぞ」

すつと鼻先に突き出されたのは、千冬の入れたコーヒー。

「えっ……………!？　いや、それ塩が……………」

「どうぞ、飲んで下さい」

口調こそ謙っているが、その真意は一つ。

『これを飲め、山田』

「っ……………にがしょっぱいです……………」

真耶は自分の迂闊さを、苦塩味と共にその身に刻むことになった。

襲い来るアンノウン。一夏と鈴は突進から繰り出される巨大な拳を
躲し、挟撃を仕掛ける。

「だあっ!!」

「おりゃあっ!!」

が、アンノウンは鈴の一撃をブロックし、一夏の刃を躲すや、その
身を蹴り飛ばした。

「ゲウツ!？」

「一夏……!! あうっ!!」

返す刀で、鈴が巨腕によって弾き飛ばされた。

直撃こそ避けられたが、そのパワーは半端なものではない。上手く
動かなければ、あつと言う間に押し込まれるだろう。

「一夏、あたしがフォローするから突っ込んで! アンタ、それし
か武器がないんでしょ?」

「まあな……じゃ、それで行くか!!」

即席の連携攻撃。コンビネーションだが、これ以外に選択肢はない。

アンノウンは大きく旋回し、そのまま二人に切り返してくる。両腕

の砲門を向けてビームによる牽制射撃。

「このおおおおおおおおおおおっ!!」

対して、鈴が龍咆の連射で返す。アンノウンは被弾しながらも、構わずに突進。二人の間を裂くように抜けて行った。

巻き起こる突風に鈴が顔を顰めながら、アンノウンを追いかける。

「アイツ……ッ！ 待ちなさいっ!!」

「一夏、追って!!」

「おっっ!!」

アンノウンが自らが上げた黒煙に飛び込む。目眩ましのつもりだろうが、互いにハイパーセンサーがある以上、意味はない筈。故に躊躇なく、二人もそこに飛び込んだ。

「ッ!?」

視界が黒く揺れる世界に染まりながら、ハイパーセンサーが敵の姿を捉える。

エネルギー反応 危険度増大

アンノウンはその身を翻して、ビームを放った。

鈴は回避しつつ、衝撃砲を連射。一夏はそのまま、雪片を盾にして突っ込んだ。

「でえいつ!!」

刃を振るう直前、ビーム斉射を止めたアンノウンは、一夏の斬撃を紙一重で躲す。

そのまま回転し、バックスイングでアームを振るった。ギリギリでブロックするも、そのまま弾き飛ばされる。

「ぐうッ……!?!」

「危ないっ!!」

更に拳を振るわんとするアンノウンに、鈴が牽制攻撃を仕掛ける。と、アンノウンは追撃をすぐに止めて、黒煙の奥に姿を消した。

「大丈夫、一夏？」

「ああ。くそつ、いいパンチ持ってやがるぜ……！」

鈴の問いに、口元を拭う仕草で応える。

「それだけ喋れるなら問題ないわね」

「いや、問題はあるよ……」

「……春斗？」

「この状態……視認ができない以上、どうしても反応は遅れる筈だ。でもアイツは、さっきと同じ反応速度で衝撃砲を躲していた……どうして？」

「そんなの、ハイパーセンサーがあるからでしょ？ 今だって、反応を確認してるもの」

「ハイパーセンサーがどれだけ優秀でも、”見えないものは見えない”んだよ？」

「どういう事よ？」

いまいち理解出来ないと、鈴は春斗に問う。

「ハイパーセンサーっていうのは、様々な情報を擬似的視覚情報として認識させることで、反応を早めるものなんだ。それは、人間の情報収集の大半を視覚から得ているからだ」

ハイパーセンサーは当初、広大な宇宙空間に置いて星の光から自分の座標位置を認識するために開発された物である。

現在は制限をされているが、視覚能力 見る力というものを大きく引き上げるシステムなのだ。

そこに各種センサーが加わることで、全方位認識システムを構築できるのである。

だがそれでも、実際に見えているのとは僅かにズレが生まれる。故に反応の差異も生まれる。

「でも、それでも……だからこそ、”見えない物は見えない”筈だ。惑星は見えても、その影に隠れた星は目には映らない。だから、死

角だつて生まれる……!!」

「じゃあ、何でアイツは見えてるように動けるの?」

既にその答えを得ているのだからと、鈴はその解を春斗に求めた。

「……顔も隠すような、あの妙なセンサーレンズ。多分アレで、あいつは何も見えていない」

「何も、見てない……?」

「全てを擬似視覚情報として……いいや、それさえも見えてないかも知れない。全部をただの情報として捉えて行動している。そうしか思えない」

「そんな馬鹿な……」

それでは、まるで機械ではないか。

笑つてやりたいところだが、春斗の推測を軽くは見れない。

「でもさ、それってヤバいんじゃないか……?」

それまで周囲を警戒ししつつ、沈黙を守っていた一夏が口を開いた。
「何がヤバいのよ?」

「だって、それが本当なら……向こうは、さっきまでと同じように動けるってことだろ? 相手を視界に捉えるつてのはISでも基本だつて、千冬姉も言つてたし……」

「……ヤバイかな?」

「すぐにここから出よ 熱源、左だ!」

春斗が叫ぶ。身を逸らした所を、ビームが撃ち抜いた。掠つてしま
いシールドが削られる。

更に、アンノウンがその巨軀を活かして突貫。一夏を殴りつけ、そ
のまま加速した。

「グウウウウウウッ!」

雪片で直撃を防ぐものの、圧倒的パワーに抗いきれない。そのまま
黒煙を貫いて青空へと押し込まれていく。

「しまったっ!?!」

「大丈夫! あの威力じゃ、シールドは破れない!! 次が来るぞ
!?!」

「……っ!?!」

客席に気を取られている間に、アンノウンが接近する。

すぐさま、一夏もそれを迎え撃った。

「先生、私にISの使用許可を! すぐにも出撃できますわ!」

「……それは無理だな」

「どうしてですの!?! このままじゃ、一夏さんが……!」

「これを見る。アリーナの遮断シールドはレベル4。全扉はロック
されている状態だ。これで、どうやって避難や救援を行う?」

「そ、そんな……でしたら、緊急事態として、政府に救援を!」

「すでにしている。そして今、三年の精鋭がシステムクラックを
行中だが、すぐには終わらない。それまでの間、”誰か”が時間を
稼がなければならない」

誰か。その言葉を聞き、セシリアは先程の一夏の言葉を思い出した。

『アリーナのシステムクラックが終わるまで、俺達がアイツの相手

をします！！ 救援よりも、アリーナの皆の避難を優先して下さい、頼みます！」

「……まさか、一夏さんはそれを知っていて、あの場に残られて……！？ 悔しいですわ、一夏さんの傍にすぐ向かうことも出来ないなんて……」

セシリアは悔しさに、ギョツと両手を握り締める。

「どっちにしろ、お前では足手まといだ。突入部隊には入れん」

「なっ……！？ 私が足手まとい……！？」

「ブルー・テイアーズの装備は1対複数向きだ。お前が複数の側に入れば、要らぬ混乱を呼ぶ」

「そ、そんな事は……！！」

「では、連携訓練はしたか？ その時の役割は？ ビットの使用タイミングは？ 味方の構成は？ フォーメーションは？ 敵のレベルはどれ位を総て思惟している？ 連続稼働時間は？ 味方機のの」

「も、もう結構ですっ！！ 充分に分かりましたわ！ ……はうう」
セシリアは降参だとはかりに手を上げる。そしてガツクリと肩を落とした。

連携戦闘はそれこそ、個人戦闘とは違う動きを要求される。セシリアは一度もそういった訓練をしていなかった。

「ふん、分かれば良い」

「……でも、あの凰さんはどうして、あれ程に一夏さんと動きを合わせられるのですか？」

モニターには、アンノウンの攻撃に対して、四度目のアタックが仕掛けられていた。

衝撃砲が命中したところを一気に一夏が攻める。が、アンノウンはすぐに切り返して反撃。

一夏の退避をフォローするように鈴は衝撃砲を撃ち、敵の迎撃を上手く遮断していた。

「あの二人は、つい一年前まで一緒にいたからな。それだけ互いの信頼も厚い。だからこそ、即席でも動きを合わせられるんだろう」「一緒に、いたから……っ?」
その言葉に、セシリアの心がズキリと痛む。
同じ専用機を持ちながら、そこに立てない自分。同じ代表候補生でありながら、並び立って共に戦える鈴。

悔しい。

一夏にとって、鈴は自分の背を預けるに足る存在であると、思い知らされているようで。

幼馴染。十五年の人生の中で、三分の一近くを共に過ごした相手。

これからならば、幾らでも勝る自信はある。だが、それは今には意味が無い。

もっと早く彼と出会っていれば、あの背を守るのは自分だったので、はと、思ってしまう。

「あれ? これってテキストデータ……? 織斑くんから、オルコットさん宛?」

「えっ?」

真耶が上げた声に、セシリアは我に返った。

モニターに近寄り、それを見る。

「……………っ!!」

そして、セシリアは目を見開いて驚いた。

何という事だ。まるで、今の自分の心を知っているかのようなメッ
セージではないか。

「織斑先生！ 申し訳ありませんが、やはり私……行かせていただ
きますっ……！」

そう言うや、セシリアはモニタールームから出て行ってしまった。

「……………なるほどな。全く、呆れるほどタイミングの良い…………いや、
悪いヤツめ」

千冬がセシリア宛のそれを見る。そして全てを理解した。

それは春斗の立てた作戦。

そこに、セシリアの協力を求めるという部分があった。

「……………」

そしてもう一人。セシリアの後に続いて、モニタールームから居な
くなった者がいたが、その事に千冬は気付いていなかった。

「どうするのよ!? 何か作戦がないとアイツには勝てないわよ!」

「逃げたきゃ逃げてても良いぜ? どうせ、アイツの狙いは俺だからな!」

「バカな事を言わないでよ! これでも代表候補生なんだからね!」

アンノウンは地面を滑るように移動しながら、ビームを連射。二人は回避しながら離脱する。

四度の攻撃失敗と、蓄積したダメージは大きい。

既に一夏のシールドエネルギーは60を切り、鈴は180程のエネルギーしかない。

圧倒的不利の状況。それでも退くことはプライドが許さない。

「じゃあ俺も……お前の背中ぐらいは守ってやるよ!」

「えっ……うわっ!?!」

一夏の台詞にドキッとさせられた瞬間、鈴の眼前をビームが掠め、違う意味でドキッとさせられた。

「集中しろ、鈴!」

「わ、分かってるわよ!」

「鈴ちゃん。デレるのは良いけど、TPOはわきまえてくれるかな?」

「うっさいわよ! 誰がで、デレてるってのよ!?!」

襲い来る攻撃を躲しながら、軽口を飛ばし合う。

集中していない訳ではない。あくまでも冷静さをキープするためだ。

やがて砲門が熱限界を迎えたのか、攻撃が唐突に止んだ。もうもうと上がる煙に、姿が覆い隠されていく。

「……今の状態で、アイツのシールドを突破して倒すって……確率一桁ぐらいかしら？」

「ゼロでないならいいさ」

「バカ。確率なんだから高い方が良いでしょう？ アンタって、変なところでジジくさいけど、何だかんだと言って宝くじとか買うタイプよね」

「………うつせーよ」

ちなみに一夏は宝くじとか、運を使うものを好まない。中学時代、賭けに負けて悪友に何度ジューズを奢るハメになったか、思い出すのもはばかられる。

人生は貯蓄と堅実。年金なんてあてにしない。地道に生きて行くのだと心に決めたものだ。

春斗に「別の方に運が向いてるんだから、良いんじゃない？」と言われたが、一夏にはどれに運が向いているのかサッパリ分からなかった。

「いや、一桁って科学分野からみると超高確率だよ？ 充分に実現可能範囲だ」

「………」

そういえば、春斗は運が良かったなと思いだした。ふらりと買ったスクラッチくじ一枚で一万円を当てた時、一夏は本気で春斗を呪ったものだ。

「………で、春斗には何かないのか？」

「あるよ。今迄のデータから一つ、推論を立てたんだ」
「推論……?」

「まず、アイツは……無人機だと思う」

「なっ……! そんな訳ないじゃない!! ISは人が乗らなきゃ動かないのよ!？」

鈴がすぐにそれを否定する。だか、春斗は自信を持っているのか全く揺るがない。

「視界不良にも拘らず変わらない反応。正確過ぎる動き。ダメージを食らっても絶対に白式の動きから外さない集中力……おおよそ、人が乗ってるとは思えない」

「そういや、俺達が話している時って……攻撃があんまり来ないな」
「そうね……まるでこつちの話に興味があるみたいに……いや、でもやっぱり……」

「【人の想像出来る事は、全て創造出来る事だ】なんて言葉もあるしね……僕達がそれを知らないだけって事もあり得るよ?」

「っ……じゃあ、無人機だとしたらどうなるの? それなら勝てるって言うの?」

「ああ、その通りだ」

春斗が言うよりも先に、一夏が答えた。

「一夏……?」

「【零落白夜】れいらくびやくや。白式の単一仕様能力で、雪片式型の全力攻撃だ。ワンオフ・アビリティー

雪片の威力は高過ぎて、訓練や学内戦じゃあ全力を使えない。でも無人機相手になら、容赦なく攻撃しても問題ない……!」

「あ、それは無理だね」

一夏が自信満々に言い放つが、春斗は冷静にそれを却下した。

「何でだよ!？」

「今の白式じゃ、零落白夜を使えるだけの出力を得られない。エネルギーを使い過ぎてるんだ」

「それに、零落白夜だかなんだか知らないけど……攻撃そのものが

当たらないんじゃない？ 意味ないわよ？」

「むう……じゃあ、どうすりゃいいんだよ？」

「一応、全部をクリアする手段はあるけど……」

「マジか！？ さすがだぜ、春斗！！」

一夏はその言葉に色めき立った。だが春斗の反応は芳しくない。

「ただ、これは本気で危険な賭けになる……それでも良い？」

低いトーンで語られる言葉。それだけで、危険度が半端なものではないと伝わってくる。

「……ああ、構わない」

「本気かい？」

「お前が考えた作戦だろう？ 成功しないとか思ってるのかよ？」

一夏に逆に返され、春斗は苦笑する。

「……いいや、絶対に成功するよ」

「じゃ、それで行こうぜ！ 鈴も良いな？」

「まったく……内容ぐらい、聞いてからにしないよ？」

「作戦を説明するよ。まず甲龍、白式、敵と並び、且つ僕の指定するポイントを延長線上に置く様に移動。そして鈴ちゃんが一夏の背に向かって、フルパワーの衝撃砲を撃つ」

「ちよつと！？ いきなり、とんでもない事言わなかった！？」

「で、一夏は瞬間加速イグニッションブーストを発動する。衝撃砲のエネルギーを推力として取り込むんだ」

「……なるほど、瞬間加速イグニッションブーストの理論を使うんだな？」

イグニッションブースト
瞬間加速はスラスタから本体に向けてエネルギーを放出。それを吸収、圧縮させてから爆発的に解放することで、超加速を得る。

つまりは理論上、どんなエネルギーも推力に転換できるという事だ。

「衝撃砲のエネルギーを取り込むと同時に、エネルギーバイパスを

雪片に直結。一部エネルギーを零落白夜の発動に回す」

「そんな事が出来るのか？」

「零落白夜は、”シールドエネルギーを含めた全エネルギー”を攻撃に転換するから理論上、何とかできる筈」

「なるほど……それで、何が問題なんだ？」

「その時に一度、シールドと絶対防御を強制的に遮断する。一夏はIS装甲だけで、衝撃砲を受け止めなきゃならない」

「っ……!？」

「ば、バカじゃないの!? そんな事したら一夏が死んじゃうじゃない!!」

「これが生きてると衝撃砲に反応して、シールドエネルギーを全部使っちゃうんだ。だから、切るしかない」

「そんな……無茶苦茶よ!!」

「無茶は百も承知。ダメージは極力コントロールするし、エネルギーもすぐに転換する。一夏が耐えられない程のダメージはこない筈だ」

「それでも……もしミスったら、本気でやばいのよ!? 一夏、別の方法を考えるべきよ!!」

「いや、春斗が絶対に成功するって言ってるんだ……鈴、お前は信じられないのか？」

キツと鈴を見据える一夏。その迷いも恐れもないまっすぐな瞳に、鈴は言葉を詰まらせる。

「っ……! 分かった、分かったわよ!! こうなったら信じてやるわよっ!!」

一夏がこうなったら梃子でも動かない。それは幼馴染である鈴にはよく分かっている事だ。

実際、良い代案も無い以上、これに賭けるしか無いのも事実。

「よし、それじゃあ、作戦開始……！」

『一夏あああああああああああッ！……』

「……ッ！？」「……」

いきなりアリーナに響いた声に、一夏達はギョツとした。

「一夏、あそこに……！」

春斗が指し示した方向、アリーナの実況席。そこにマイクを持った
筈の姿があった。

『男ならば……男なら、それぐらいの敵に勝てずに何とするっ！！』

あらん限りの声を張り上げ、箒は激を飛ばす。あまりにも大きい声に音が割れてしまっているが、それでもそれはよく聞こえた。

そう、ア……ン……ンにも。

アunnoンは左後方にある実況席に、センサーレンズを向ける。そしてそこに向けて巨腕を掲げた。

「ちよつと、何やってのよアイツ!？」

「バカツ! さつさと逃げろ!!」

一夏が開放回線オープンチャンネルで呼びかける。箒は一瞬、恐怖と驚愕にその身を揺すられるが、ギリツと歯を食い縛り、逆にそれを睨みつける。

光が収束する。アレが放たれば、ISのない自分の命は危うい。だが、それでも退かない。

ISを持たないから、共に戦うことの出来ない自分。一夏の背を守れない自分。

彼女には、意地しかない。

ならばせめて、この生命を懸けて一夏の勝利を信じる。一夏を信じる事。それだけならば、絶対に負けはしない。

彼女にはまだ、意地がある。

だからこそ、不退転の決意を持って迎え撃つ。破壊の閃光が、我が身を穿つなど有り得ない未来だ。

春斗が練り上げ作戦。箒が生み出したチャンス。信じて衝撃砲を撃つた鈴。

ここで期待を裏切るならば、男として恥じて死ぬべきだ。奥歯の一本や二本、喜んで砕いてやる。

「バイパス7から22をカット！ 圧縮エネルギーをフレーム内に循環！ 雪片に直結完了！ IS装甲、ダメージ臨界……！！ ただだっ！！」

白の世界が危険を知らせる赤に染まり、警報が鳴り続ける。春斗はコンソールを打ち続け、ダメージを与えるエネルギーロスを徹底的に削ぎ落としていく。

「変換率45…57…76…82…93っ！！ 一夏ああああああああああっ！！」

「……っしやああああああああああああああっ！！」

溢れ上がったエネルギーがフレームから溢れ、金色のオーラのごとく立ち昇る。

それと共に、雪片の刃が更に輝きを増して巨大になる。

エネルギー転換率90%突破 零落白夜使用可能

そんな事はとづくに知っている。
ISに初めて触れた時と同じ一体感が、どこまでの研ぎすまされた
集中力が、生まれた時からある半身が、それを教えている。

イグニッションブースト
瞬時加速。

世界そのものが自分に迫ってくる。その感覚が見据えるのはただ一
つ、アンノウンのみ。

(守ってみせる……千冬姉を、箒を、セシリアを、鈴を、今迄、そ
してこれから関わる人の全てを……俺が、俺達がッ!!)

「おおおおおおおおおおおおおッ!!」

咆哮。アンノウンが反応し振り返りざまに突き出した右腕を、バタ
ーを切るよりも軽く両断。

その威力は凄まじく、攻撃の余剰エネルギーが嵐となって吹き荒れ
て、遮断シールドを打ち砕いた。

「っ!!」

アンノウンは驚く素振りさえ見せず、残った左腕で一夏を殴り飛ば
した。

「ぐはあっ!!」
全力攻撃後の無防備な所を喰らい、更に眼前の砲門にエネルギー反
応。

ゼロ距離から、一夏を完全に鎮めるつもりらしい。

だが、一夏はニヤリと笑う。そして鈴、春斗と共に言ってやる。

「残念。それは想定内ッ!!」

直後。上方から襲い来るレーザーの雨。その尽くがアンノウンを
撃ち抜く。

意思無き機械には理解出来ないだろうそれは、全てが春斗達の想定
内。

戦いは狡猾な方が勝つというなら、機械如きには勝利は絶対に来な
い。

何故なら、狡猾とは人が持ちうるイメージの力なのだ。

「極める、セシリア!!」

『了解ですわ!!』

舞い上がったセシリアのスターライトmk?の射撃が、アンノウン

を見事に撃ち抜いた。

崩れ倒れるアンノウン。

その機能停止を、ハイパーセンサーが知らせた。

最後、零落白夜の放った余剰エネルギーは、春斗が雪片のシステムに介入して意図的に放出させたものであった。

その目的は二つ。強引なチャージによる雪片の破損を防ぐこと。もう一つは遮断シールドを破壊し、援軍を呼ぶこと。

既に目標地点は知らせてあったので、後はそこにどう相手を持っていくかだけだったのだが、幸いにして篤がその任を担ったのだ。

とはいえ、時間はかなり際どかった。間に合って良かったと、セシリアは深く嘆息した。

『ふう……ギリギリのタイミングでしたわね』

「いいや。セシリアならきつと、やってくれるって信じてたさ」

『っ……！？　そ、それはもう……当然ですわ』

一夏がそう言ってるやると、通信越しにセシリアは頬を染めて、顔を逸らしてしまった。

『一夏。本当に、君って男は……』

どうしてそうなったのか分からず、一夏は首をかしげるが、取り敢えず今はようやくの安堵に心をゆだね

敵ISの再起動を確認　ロックされています

粉塵の向こう、動く影に一夏が目を見張った。

『一夏っ！！』

「くっそおおおおおおおおおおっ！！」

エネルギーは僅か。機体はポロポロ。それでも一夏は動いた。

アンノウンは左腕を向け、既に大出力攻撃を構えていた。

「うあああああああああああああああっ！！」

吼え猛り、最短距離を雪片を突き出して突進。

ビーム発射。

破壊の閃光に抗いながら、スラスターが推力を振り絞る。

「グググうう……ッ！！」

後僅か　その瞬間。

ENERGY CRITICAL (エネルギー限界)

「……………っ!？」

その声と共に、雪片がブレードへと戻る。

元々、無茶をしての零落白夜使用に加え、ビームとまともにぶつかり合ったせいで使用臨界を迎えてしまったのだ。

ただのブレードではそれに耐える力はない。白式は、破壊の奔流に瞬く間に飲み込まれた。

一夏の世界が光に溢れる。

守れない。また、何も出来ないのか。

約束したのに、強くなると。それを守れないというのか。

世界がやがて

黒く染まった。

『イグニッションブースト
瞬時加速』

そんな声が、どこかで聞こえた気がした。

「一夏ああああああああっ！」

『一夏さんっ！！』

『そ、そんな……一夏っ！？』

悲痛な叫びが木霊する。

破壊の閃光は白式を呑み込み、アリーナの端まで吹き飛ばしていた。

射線上の地面が抉れ、轟轟とその威力を見せつけるかのように煙を上げていた。

ボロボロの白式に、アレを耐える力は無い筈。絶望がアリーナを支配しようとしていた。

「……………ッ!？」

ハイパーセンサーを持つ鈴とセシリアが、その向こうに影を見つけた。

スラスターを前面に押し出したシルエットだが、その形から白式である。

無事だった。安堵に表情をくずす。だが、すぐに異変に気づいた。

「あれ……………白式、じゃない……………?」

『でもあれは……………一夏さん……………?』

徐々に晴れてくる土煙。

その向こうに居たのは白式　　ではなかった。

白く輝くボディはなく、代わりにあったのは艶やかなる、夜から抜け出たかのような漆黒。

だが、姿は間違いなく白式であり、搭乗者も一夏であった。

”一夏”はブロックしていた腕を外し、前面に展開していたスラストアーを背部に戻す。

その余波が、煙を吹き飛ばした。

その姿は、白式を白鳥とするならば、あれは八咫鳥であろうか。

”一夏”は左手を突き出し、武装をオープンする。

弓剣月影 展開

その手に現れたのは、二刀一刃の武装。それが両方展開し、生まれた溝から蒼白い刃が生まれる。

そして切っ先を、やはり蒼白い線が結びつけた。

それは、さながら大弓。

”一夏”は半身を引き、弦に指をかけつつ、両腕を掲げるように持ち上げた。

弦に触れた部分から本体に向かって、光の矢が伸びる。

「あれは……あの構えは……！？」

「まさか、春斗……？」

筈は見覚えのあるその姿に重なる影に驚き、鈴は何かを察して驚い

ていた。

アンノウンがもう一度、攻撃態勢を取る。

”一夏”はそのまま三角形を描くように、両腕を視線の高さまで下ろす。

引き絞られた弓が、大きく弧を描く。

「お前が何者か……そんな事はもう、どうでもいい……」

アンノウンがビームを放つ。迫り来る破壊の奔流。だが、”一夏”は揺るがない。

光の矢が、更に輝きを増していく。

「貴様はここで……朽ち果てろ」

ワンオフ・アビリティー
単一仕様能力

げっかびゃくれい
【月華白麗】

発動

指が、矢を放つ。

それはいとも容易く破壊の閃光を穿ち散らして、そのまま左腕を爆ぜ砕いた。

崩れ落ちるアンノウン。”一夏”は、それが今度こそ動かなくなつた事を見届け、ゆっくりと弓を下ろした。

「春……一夏？」

鈴が通信を遣わず、降りてきて声を掛ける。

”一夏”はそれを一瞥する。と、その体がグラリと揺らいだ。

「っ……！」

鈴はその体をとっさに支える。そして同時に、黒い白式もまた量子変換されて待機状態へと戻った。

『一夏さんッ！！』

「一夏ッ！！」

セシリアが慌てて飛んで来る。そして筭も、実況室を飛び出していた。

「あれ、なんだったんですか……あの、”黒い”白式は？」

真耶が信じられないものを見たど、枯れ気味の声で呟く。

「あれは……《裏白式》だ」

「裏、白式……？」

真耶は意味が分からず、千冬の言葉をオウム返しする。

「近接特化の白式に対し、射撃戦特化の姿……ゆえに、裏白式だ」

「そんな……在り得ないですよ！？ だって、最適化は本人に合フィットわ
せるものですよ？ それが、あんな全く違う形態を取るなんて……」

「だが事実だ。あの状態の白式は、遠距離でその真価を発揮する。」

今までは、プロテクトを掛けられていた状態だっただけだ……武装
を含めてな」

「……………」

「納得行かないか？」

「……行きません」

「なら、それでも良い。どうせ事実が変わらんのだからな。すまん
が、席を外す……何かあれば端末に連絡をくれ」

「……わかりました」

真耶の返事を聞くよりも早く、千冬はモニタールームを後にした。

第10話 零落白夜／月華白麗（後書き）

ついに登場。春斗のISS（？）裏白式。

うさ耳のあの人は、当然暗躍しております。

第一巻の話もいよいよ終局。サイドエピソードも、また投入します。

第11話 ステップアップ・ステージ(前書き)

第一巻ラスト。

ここまでやって来て、一番苦手なのが前書きと後書きなのとわかりましたw

第11話 ステップアップ・ステージ

IS装甲ダメージ限界 戦闘継続困難

「イグニッションブースト瞬時加速発動ッ！ 緊急後退！！」

レーザー砲撃に晒された白式を守る為、春斗は瞬時加速を発動した。衝撃砲のエネルギーを推力変換出来るならば当然、レーザーエネルギーでもそれは可能の筈。

レーザーを両腕で防ぎながら、春斗はそのダメージを推力と攻撃エネルギーに変換する。

先ほど生み出したバイパスが、まだ機能しているのが幸いした。

裏白式起動

その声と共に、白式の色が変化していく。
白より黒へ。表が裏返るように。

裏白式。それこそが春斗のために生み出された、もう一つのファーストシフト移行。
行。

雪片 ロック封印 月影 アンロック解放

『いいか春斗、その姿は公の場に出来る限り晒すな。それは……本

来、ありえない姿なのだからな』

(ゴメン、千冬姉さん……)

春斗は心の中で謝る。これがどんな結果を招くか、想像も出来ない。だがそれでも、これ以上は我慢ならない。

入れ替わった瞬間、全身に走った痛み。

これに耐え切り、一撃を見舞った一夏に称賛を覚え、同時に自分自身に怒りを覚える。

こんな作戦しか思いつけない自分が腹立たしい。

最初から裏白式を使う選択を取れば、こんな無茶をしなくても良かったのだ。

一夏を危険に晒したのは 自分可愛さ故。

だからこそ、これ以上は一夏だけに負担を掛けさせる気はない。

構える一矢は宣戦布告。

眼前の敵に。その向こうの存在に。そして取り巻く世界に。

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力【月華白麗】発動

来るならば来てみる。その尽くを穿ち、葬って見せよう。

織斑春斗は今、挑戦状を叩きつけた。

夕焼けが、世界を燃やす。

「うう……ッ？」

つつた様な鋭い痛みが走り、一夏は目を覚ました。

目に映った天井は、寮のそれとは違っていた。

「ここは………保健室か？」

自分がベッドに寝かされている事に気が付き、鼻腔をくすぐる消毒薬の臭いで、そこが何処かを理解する。

「あの後、どうなったんだ……？」

再起動したアンノウンに向かっていった。そして雪片が限界を迎えて
そこから思い出せない。

「その後、春斗の裏白式が起動して止めを刺したんだ」

「……っ！？ 千冬姉え………痛う！？」

仕切りのカーテンをめくり、顔を見せたのは千冬。思わず、一夏は体を起こそうとするも体が痛み、ベッドに倒れこんだ。

「全身打撲だから、無理に動くな。あの衝撃砲を、バリアと絶対防御なしで受け止めたんだ。ダメージコントロールが上手くいかなかつたら、死んでいたぞ？」

「そこはほら、春斗のヤツが上手くやってくれたから……」

「……………」

千冬の視線が突き刺さる。

「うくつ……ゴメン、無理して」

なので一夏は謝る。それが一番早いからだ。

千冬は「フツ」と、目を伏せる。少しだけ、寂しさを孕んで。

「家族に死なれるのは……目覚めが悪いからな」

そして目を開き、優しく笑った。

「ま、お前たちがそう簡単に死ぬとは思っていなかったがな。何せ

”私の弟”なのだからな」

「どつという信頼だよ、それ……と、そうだ。裏白式が出たってどう
いう事？」

「再起動した敵ISに向かった後、お前は吹き飛ばされた。いや、ギリギリで春斗が入れ替わって、瞬時加速を使ってダメージを軽減させたんだ。そして、月影の一撃を見舞った……そういえば、春斗はまだか？」

「うん、まだ気を失ってるみたいだ。アイツ、あんなタイミングで出てきちゃったのか……」

一夏は自分の不甲斐なさに顔をしかめる。

裏白式の事は、出来る限り秘密にしておかなければならないのに、自分のせいでそれを台無しにしてしまった。

「出てしまったものは仕方ない。だが今後、厄介な事になるかもしれん。覚悟はしておけ」

「了解」

「では、まだ後始末があるので戻る。お前はもう少し休んでから寮に戻れ。そこに薬があるから、忘れずに持って行けよ？」

「はい」

「返事は短くだ」

「はい」

言葉尻と違い、柔らかな掛け合い。

家族だからこそその気の置けない語り合いは、とても大事な時間だ。

千冬が出ていったのを感じ、一夏は瞼を閉じた。

(俺がもつと強ければ……クソッ……)

力不足を悔やみながらも、疲労の極地であった一夏は、徐々に眠りの淵に吸い込まれていった。

それからどれ程かの時間が経った頃、保健室のドアが開いた。
入ってきたのはツインテールが特徴的な少女　凰鈴音である。

「一夏、起きてる……?」

彼女はそつとカーテンを開けた。そこには静かに寝息を立てる一夏。
鈴は起こさないようにと、そつとベッドの脇に椅子を持ってきて座
った。

「……………」

あれだけの無茶をやって、無事な訳がない。

「……………」

一夏は、未だ眠ったまま。

「……………っ!?!?」

そつ、眠ったままなのだ。

人気のない保健室。ベッドに眠る一夏。そして瞳に映るのは
無防備過ぎる唇。

何をしても誰にも咎められないし、誰にも見られないという絶対の
好機。

「……………ゴクリ」

生唾を吞んでしまった。

まるで熱に浮かされたように、そつと立ち上がって、一夏に迫る。

「っ……………」

後2センチ。

ドキドキと胸がうるさい。あまりにも激しくて、外に漏れ聞こえて
しまうそうだ。

後1センチ。

「……………いち……………か……………」

残り数ミリ。

「うつつ……?」

「　　ツ!?!?!?」

一夏がいきなり呻き、目をうつすらと開く。

シユバツ! と、早業で一夏から離れる鈴。その動きはISに乗っている時より機敏であった。

「なんだ、鈴か………どうかしたのか?」

「いや!? 何でもないわよ!?!」

声が上がっているが、まだボクっとしている一夏には理解出来ない。起きていても、理解できるかは怪しいところであるが。

「ね、ねえ一夏? 一つ聞いても良い?」

恥ずかしさと気まずさを誤魔化すように、鈴は一つ聞きたい事があったのを思い出した。

「………何だ?」

「あ、あの黒い白式って………もしかして、春斗が動かしてた?」

「　　ああ。あれは裏白式………春斗が操る時、白式はあの姿になるんだ。武装も雪片が使えなくなつて、月影っていう弓が使えるようになるんだ」

「ふ〜ん、妙な話ね。そもそも専用機なんだから、春斗には使えなさそうなのに………いや、そもそも一つの体を二つの意識が共有する人間なんて、一夏と春斗ぐらいだろうから………分かんないか?」

「その辺は俺にはサツパリだ。でも、鈴………あれはあくまでも”俺”が動かしてるんだから………?」

「うん、大丈夫よ。間違つても言わないから………安心して?」

「　　サンキューな、鈴。あ、そういえば………あの賭けつてどうなるんだ?」

「うえっ!? し、試合は中止だし………む、無効つてことでいいわよ?」

そういえばそうだったと鈴も思い出したのか、顔を赤らめて慌てるが、夕方であったことが幸いして、一夏には分からなかった。

一夏は「そっか」とつぶやいて、体を起こした。痛みは大分ひいたようだ。

ふと夕焼け空を見上げた。もう夕日は見えず、紅い雲が流れているのみだ。

「……そういえば、こんな夕焼けだったっけ？」

「何が……？」

「酢豚の話さ……小六だったっけ？ 夕焼けの教室で二人きりで……そう、こう言ったんだ」

『もしも、料理が上手になったら……あたしの酢豚、毎日食べてくれる？』

「~~~~~!？」

いきなり口走られた言葉に、鈴の顔が耳まで赤くなる。

一世一代の告白を言った相手にリピートされるとか、どんな羞恥プレイだ。

「俺さ……あれ、タダ飯を食わせてくれるって事だと思ってたんだけど……」

「あ……あう……」

一夏の視線が、窓から鈴に移った。

「もしかして、”違う意味”だったとか……？」

「えっ!？ 違うない違うないっ!！ ほ、ほら料理って、誰かに食べてもらったら上達早くなるでしょ!？ そういう事よ!！」

「そ、そうだよな。別の意味じゃまるで『毎日味噌汁を』なん
て事になっちまいそうだもんな。いや、何言ってるんだろ、俺」
「っ！？ そ、そうね…… ホントにね…… アハハハハハ…… ハハ
（ハア）……」
引きつった顔で、鈴はやけくそ気味に笑う。というかヤケだ。

「お前の酢豚も食ってみたいけどさ…… また、親父さんの料理も食
ってみたいな…… 連絡、してないのか？」

「 うん。何か、会いにくくて」
「……そっか」

鈴が日本を離れることになった理由は、両親の離婚。親権は母親が
持っていたので、鈴は共に中国に帰る事になった。

一夏の記憶の中では、とても仲が良かった二人だったが、何故
そんな事になってしまったのか。一夏には想像もできない。

だが、別れ際に泣きじゃくる鈴の姿は、未だに焼き付いて離れない。

『ゴメンね……一緒に頑張るって約束したのに……！ ゴメンね一
夏……ゴメンね春斗……！！』

春斗が肉体を失い、一夏と共にあるようになってから いや、
その前から鈴は、二人とずっと一緒だった。

ずっと春斗が起きるまで、一緒に頑張ると約束した少女は、それを破ってしまうことをひたすらに謝り続けた。

そんな所も、父親に連絡を取り難い原因なのかも知れない。

「……………」

一夏はまた、外を見遣った。

親に振り回される子供。

何も出来ないから、何も選べない。

そんな理不尽が、一夏には許せなかった。

そして、それはきっと春斗も同じだと思った。

一夏達姉弟もまた、親という存在に振り回された被害者なのだから。

「なあ、鈴。今度の休みにさ……………どっか遊びに行くか？」

「えっ……………それってもしかして……………!？」

「一夏さん、具合はいかがですか？」

シユン、というエアーク音がしてドアが開く。

金髪ロールをなびかせて、やって来たのはセシリア。

「もし宜しければ、この私が手厚く看護を……………あら？」
まるで踊るように入ってきたセシリアだったが、そこに居た一夏以外の人物に対して、怪訝な表情をする。

「ちょっと、何であなたがここにいますの！？ 一夏さんが目を覚ますまで、抜け駆けはしないと約束したでしょう！？」

「うう……………！？」
ズズイ、と詰め寄るセシリアに鈴は思わず身を引いてしまう。

「 …… ほう。では、お前は何故……………ここにいるんだ？」

「っ！？ ……そ、それは……………ああ〜」
更にドアが開き、姿を見せたのは篝だった。セシリアの体が「ギクッ！」と強ばった。

どうやら三人の間で、何かしらの淑女協定が結ばれていたらしい。全く以て無意味であったようだが。

『 …… だったら、ほーちゃんは どうして来たんだろうっね？ 』

『 春斗、起きてたのか……………！？ 』

『 まあね。で、また随分と面白い状況になったね 』

『 これが面白ってお前……………うるさいだけだよ 』

『 いやいや、端から見る分にはとっても楽しいよ？ 』

三人はギャーギャーと、言い合いを始めていた。

「一夏はあたしの幼馴染なの！ アンタ達は帰りなさいよ！！」

「ならば私も幼馴染だ。それもお前よりも先で、更に同室でもある。

ここは私に任せて帰るが良い！」

「それでしたら私は、一夏さんの初めてのお相手！ 2組のあなたや、篠ノ之さんよりも相応しいというものですわ！！！」

「な、何よ初めてって……あ、ISの事でしょ！？ そんな誤解されるような事口走んじゃないわよ！！」

言い合いは更にエキサイトしていく。一夏としてはさっさと帰って休みたいのだ。

『何か、長そうだな……先に帰るか？』

『……そうだね。寮に帰って、さっさと寝よう』

春斗も賛成したので、一夏は畳まれてあった制服を着て、薬を取って、こっそりと三人の脇を抜けて出て行く。

「……って、コラーツ！ 何処に行く気よ、アンタは！？」
寸前で、鈴につかまった。

「何処って……帰るんだよ。保健室に何時までも居られないからな」
セシリアと箒も、ガシリと一夏を捕まえる。全身打撲なので、結構痛いので離して頂きたいところだ。

「一夏さん！ この状況が、誰のせいだと思ってるんですか！？」

「……誰のせい？」

「お前のせいに決まっているだろう！？」

「何で？」

「な……なんでって……」

「そ、それは……だな……」

「うう……」

途端、鈴が真っ赤になって俯いてしまう。そして箒とセシリアも、顔を赤くして視線を逸らした。

「……どうでも良いけど、さっさと帰るつぜ」

「そ、そうね！ そうしましょー！……」

「そうだな、うん！ さっさと帰るつぜ！……」

「もう、今すぐに帰寮するべきですわ!!」

焦れた一夏が言うと、三人は何かを誤魔化すように掌を返して、ズカズカと足音を揃えて、保健室を出て行ってしまった。

「何だ、アイツら？」

『……………一夏』

『……………何だよ？』

『この朴念神』

『神様扱いつ!?!』

寮への道を四人は歩いている。が、一夏はどうにも歩き難い。

「っ……………」

一夏の隣を競り合い、奪い合う三人のせいであった。

『どうにかしてくれよ、これ…………』

僅か50メートル程度の距離が、とんでもなく長く思える。疲れ切った体に鞭打たれているようで、溜息も出てこない。

『仕方ないなあ……………一夏、一つ言伝を』

『……………?』

「鈴、ちよつと良いか?」

「えっ、何…………?」

「耳、貸してくれ……………」

一夏は鈴の耳元に口を近づける。それだけで鈴の体温は急上昇。他二人の周囲の気温は氷点下まで下がっている。

(あのな…………)

(な、何よ…………早く言いなさいよ…………)

(春斗から鈴に伝言)

(……………はい?)

春斗。その名前が出ただけで、上った体温が平熱になる。というか、嫌な予感しかしない。

それに気付かず、一夏は言葉のままを伝えた。

(『さつき、一夏が起きちゃって残念だったね?』だって…………。何の事だ?)

「……………っ!?!?!?」

瞬間、鈴の顔が再び真っ赤になった。

何故なら、あの瞬間

一夏にキスしかけた

を、春斗

に知られているという事だ。

『ククク……フ……アハハハッ！』

鈴の耳に、春斗のいやらしい笑い声が聞こえた気がした。

「い……いやあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ……！！！！！！」

鈴は魂の絶叫と共に、彼方へと走り去っていった。

「……………何を言ったんだ、一夏？」

「何と言うか、この世の終わりを見たかのような悲鳴でしたけど……」

「…？」

「……………さあ？」

二人のジト目が突き刺さるも、一夏にはサツパリ分からなかった。

「春斗のバカ春斗のバカ春斗のバカあああああああああああああああああああ
あああああああつ!!」

凰鈴音。

一夏と春斗の幼馴染。

保健室での秘め事は、春斗に握られた通算100個目の弱みであつた。

「春斗の………バカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアッ!!」

学園の地下、50メートルの位置に存在する空間。

そこは、レベル4権限の持った者しか入れない場所である。

一夏と春斗によって破壊されたアンノウンはそこに運び込まれ、解析が続けられていた。

千冬はモニターに映る戦闘映像と、解析データを見ながら真耶の報告を聞いていた。

「あれは、やはり無人機でした。コアも、登録されていた物ではありませんでした」

「そうか。やはりな」

「なにか心当たりが……？」

「いや、無い。今はまだ　　な」

リモートコントロールスタンドアロン
遠隔操作と独立駆動。そのどちらも、世界中のIS研究で実現されていない技術。

更に、467機存在するコアは全てが登録済み。つまりは、誰かがコアを作った可能性がある。

この事実に対してすぐさま、学園関係者全員に緘口令が敷かれた。

「それと、織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れています。修復は不可能ですね」

「分かった。出来る限りの範囲で犯人の特定に繋がる証拠を探してくれ」

「はい」
そう言いつつ、そんな物は見つからないであろうことは、容易に想像できた。

これだけの技術を投入してきた相手が、そんな初歩的なミスをするとは思えないからだ。

「……………」
モニターを鋭い視瞳で見つめる千冬。その姿は世界最強のIS操縦者の称号 《ブリュンヒルデ》と呼ばれた頃と寸分変わらないものであった。

時刻は夜。つい先程八時を回ったため、既に食堂は閉まっている。
一人ベッドに横になりながら、一夏は後悔していた。

「……………腹がへつたな」

『無理してでも、ちゃんと食べないからだよ』

『んな事言っても……………あの時は食う気がしなかったんだよ』

寮に帰り着替えを済ませた後、食堂に行ったはいいが、一夏は体のダメージのせいでどうにも食欲が沸かなかった。

こういう時は胃に負担をかけないようにと、うどんを選択したのだがこれが失敗だったようだ。

今更になって、胃袋は活動を開始しやがった。

グッッ。

俺達に仕事をよこせと、腹の虫は大ストライキ中だ。

グッッ。

「グッグッ言いやがって……何処のカレー好きの黄色い生物だ？」

『意味が分からないよ、一夏』

ままならない自分の体に文句を垂れるも、だからといって状況は何も変わらない。

「……やれやれ、独り言は感心せんぞ、一夏？」

「箒……ん、何だこの匂い？」

ドアが開く音がして、箒が部屋に戻ってきた。

と、何やら鼻腔をくすぐる香ばしい匂いに、一夏は体を起こした。見ると、箒の手には何かの盛られた皿があった。ゆらゆらと湯気が上がっている。

「夕食を少ししか……食わなかっただろ？ だからその……きつと腹を空かしているだろうと思ってな……こんな物を作ってみたんだが……」

何処かソワソワしたように言いながら、箒はそれをテーブルに置いた。

そこには、ネギ、ハム、卵の混じったご飯が炒められてあった。

「……へえ、チャーハンか」

「なんだ、その意外そうな表情は！？ 私が料理をしてはおかしいか！？」

「いや、そうじゃなくてさ……何て言うか、箒の場合”和食”みたいなイメージだったからさ」

「そ、そうか。なら、さつさと食べ」

「だが、その前に……一つ言っておく」

「な、何だ……？」

真剣な表情で、一夏が箒を見つめる。

（何か間違えたか！？ いや、手順に間違いは無い筈……な、ならもしかして……）

『箒。これからも俺の……俺だけの為にチャーハン、作ってくれないか？』

（な、などという事を言う気では……っ！？）

箒は自分の想像に真っ赤になってしまった。

ドキドキとしながら、次の言葉を待つ。

「箒……」

「な、なんだ……？」

「金なら無いぞ？」

瞬間、一夏の後頭部をハリセンが一閃していた。

「つてええ！？ 何で叩くんだよ！？ ていうか、どっから出した、それ！？」

「気にするな。竹刀よりは良いだろう？ それと……何の心配をしているんだ、お前は！？」

「いや、何か奢らされたり買わされたりするのかな？ って」
『僕なら、幾らでも出して良いからほーちゃんの手料理、食べたいけどね？』

「何もせんから、さっさと食べえ！！」

「お、おう……」

箸に睨まれ、一夏は添えられてあるレンゲを手にした。

『ちなみに、本場では浅く広い、スプーンに似た形状のレンゲを使うんだって。こういう深いのだと食べ難いからね』

「……じゃ、いただきます」

そんなトリビアを聞きつつ、一夏はチャーハンを一口。

「ど、どうだ……！？」

箸の期待と不安の入り交じった声に、一夏はもぐもぐと咀嚼し続ける。ゴクン。と、しっかりと飲み込んでから答えた

「味がしない」

「なっ……そ、そんな訳があるか!」

「いや、ある意味すごい……塩気どころか、具材の味もご飯さえも味がしない……どうやったらかこうなるんだ?」

「ば、バカな!? 貸せっ!」

一夏からレンゲを奪い、箸は一口。モグモグと口を動かす。そして。

「……………あ、味がしない……………」

ガツクリと、床に崩れ落ちる箸。

『あゝあ、完全にノックアウトだね……………』

「……………」

一夏は箸の手からレンゲを取り返すと、再びチャーハンを食べ始めた。

それに驚いたように顔を上げる箸に一瞥すらせず、ひたすらに食べ続けた。

味はないが、決して食べられない物ではない。それを残して生ゴミにするなど、主夫たるプライドが許さない。

それが誰かの手作りであるなら、それは漢のメンツが許さない。

「ご馳走様でした」

数分とかからず、全てを平らげて合掌。それを見る箸の顔はどうにも複雑すぎて、ハイパーセンサーですら見分けられないだろう。

「か、勘違いするな!? 今回はたまたま……そう、たまたま失敗してしまっただけで、いつもなら上手く作れるのだからなっ!」

「別に何も言っただけ……………」

実際箒に言われずとも、そんな気はした。

火加減や、米のパラパラ具合などは申し分なかったのだ。

だからこそ何故、味が無いのかが凄く気になるのだが、そこは口にしない。

「でも、何で中華なんだ？ 箸って和食とか作ってなかったか？」
一夏は記憶を探るが、箸が料理したものはやはり、焼き魚や煮物、炊き込みご飯などの和食が多かった気がする。
中華は作っている姿も知らない。

「り、料理に国境はない。それだけであって、決して酢豚に対抗しようとした訳ではないからなっ！！」

「そ、そうか……分かった」
有無を言わせずを地で行く迫力に、一夏はそれしか答えられなかった。

酢豚に対抗で何故チャーハンだとか、国境どころか存在そのものが謎過ぎる物が出来上がっているとか、色々と疑問があるがこれも黙っておくことにする。

『下手に藪を啄かなくなつたか……成長したね、一夏』
『……褒められてる気がしないのは、何故だろうか？』

『褒めてないからね。それで合ってるよ』
「ま、まあ……あれだ。もし、どうしても言うならば……毎日、作ってやらないこともないぞ？」

モジモジとして顔を逸らしながら、箸は消え入りそうな声で言う。

「いや、食堂行けば食べるし、お前も面倒だろうからいいよ」

「なっ……お前は、私の料理を食べたくないというのか!？」

一転して、凄い形相で睨まれる。

「な、何でそうなるんだよっ!？」

「そもそも、お前が悪いのだ！ あんな約束をして……どう責任を取るつもりなんだ!？」

「責任って……もう解決したし」

『うわっ！ 普通に地雷踏み抜いたっ！？』

「っ！？ か、解決……バカな！ 一生に関わる事がそう簡単に……！！」

「一生って……そこまで大げさか？ 料理上手くなるように協力って話が……」

確かに料理なら一生に関わるかも知れないが、とか一夏は思ったりした。

『一夏……本当に君ってヤツはさあ……』

それがとんだ暴投であるなど、考えも及ばない訳で、春斗は心が色んな意味で痛かった。

「お前は、どこまで……鈍いんだっ……！！」

スパーンッ！！

部屋に、ハリセンの小気味いい音が響いた。

さて、謎のIS襲撃から数日が経った頃。
(その件で、一夏、鈴、セシリアはアンノウンに関して絶対に口外しない事を、誓約書まで書かされ約束させられた)

体の痛みもようやく落ち着き、一夏は寮でのんびりと茶を啜っていた。

「緑茶は良いな……こう、心が落ち着く」

「うん。でも烏龍茶も良いわよ？ 今度入れてあげるわ」

「でしたら私が今度、自慢のアッサムティーをご馳走しますわ」

「……貴様ら、何故に我々の部屋にいる？」

「良いじゃない。一夏に用があっただけだし」

「そうですね。ここは”一夏さん”あなたの部屋。ご自分のワガママを押し通そうとするのは失礼ですわよ？」

「毎日毎日来ておいて、抜け抜けと言うなっ！！ それとセシリア

！ 今の台詞、貴様にだけは言われたくないっ！！」

そう。あの日以来、セシリアと鈴は1025号室によくやって来る。もちろん、箒に対する牽制のためだ。

だからこそ、箒はそれがとても面白くない。

「 ああ、緑茶は良いなあ……」

一夏はのんびりと茶を啜っていた。周囲の状況など、全てシャットアウトだ。

そうでなきゃやってられない。

コンコン。

「織斑君、いますか？」

ドアがノックされ、どこかとぼけたような（一夏談）声がした。

「はい」

呼ばれた一夏がドアを開けると、やはり真耶が立っていた。

「どうしたんですか、山田先生？」

真耶の事が気になるのか、篤達もそちらを覗き込む。

「はい。お引越しです」

「……………先生がここに、ですか？」

「いいえ。織斑君がですよ？」

この人は本気で天然だと、一夏は確信した。

『天然巨乳眼鏡キャラとか……………どんだけのハイスペックだ、この人？』

『春斗、ちよつと黙れ』

自重しない天才へんたいに一言釘を刺し、話を続ける。

「すみませんが、最初からお願いします」

「あ、そうですね。実は部屋の調整がつきまして、織斑君がお引越しです」

「え…………？」

『……………な……………っ！？』『……………』

真耶の言葉に、篤と春斗がショックに固まり、セシリアと鈴はキラッ！と目を光らせた。

「そ、それは今すぐに、ですか…………？」

「はい。流石に何時までも年頃の男女が一緒の部屋というのも……………その……………色々と問題があるでしょうし……………いえ、別にお二人がどうということではなくて、ごく一般的な倫理観としてですね……………」

箒の問い掛けに、何を想像しているのだろうか、真耶は赤くなりながら答える。

『一夏、即行で断れ!!』

『何でだよ?』

『せっかくほーちゃんと一緒の部屋で……これからまだまだ、突発イベント満載の日々を送れるんだよ!? 一夏、君は知らないんだ……日も昇らない早朝、着崩れした浴衣から垣間見えるあの豊かな双丘の谷間と、チラリと覗く太腿の破壊力を!! あれを見られなくなるなんて……僕には耐えられない!!』

「すみません。すぐにでも荷物を移動させます」

一夏の決断はとっても早かった。

『ちよつと待つてよ!? 今の僕の熱い想いを聞いてなかったのかい!?』

『むしろ聞いたからこそ、決断したんだけどな。ていうか、俺の知らないところで何やってんだよ!?!』

『え? ほーちゃんの寝姿を堪能してるだけだよ?』

『何、当たり前のこと聞いてんだ?』的な返し方すんなっ!!』

「一夏、お前はそれ……それで良いのか?」

箒がおずおずと一夏に尋ねる。同室を嫌がった 一夏はそう思っている のに、どうしてそんな事を言うのか分からない。が、一つだけ伝えておかなければならない。

「箒」

「っ!?!?」

ガシツ、と箒の肩を掴んだ。

「これは、お前の為なんだ。分かってくれ」

真っ直ぐに箒の瞳を見つめ、一夏はそう告げる。

「……………わ…かった」

すると、箒は耳まで真っ赤にして俯いてしまった。

相手に理解を求めるには、目を合わせて真摯に向かい合っべきという話は正しかったな、という見当違い甚だしい結論に、一夏は大いに満足した。

という事で、織斑一夏は部屋を引っ越すことになった。

用意された個室は、元々は物置として遣われていた場所であった。一夏の入学が決まると同時に工事を開始。設備の調整などで、今まで時間がかかってしまったらしい。

新たに寝起きする場所に足を踏み入れ、一夏は感嘆の声を漏らした。二人部屋よりも僅かに狭いが、一人で暮らすには十分な広さである。「おお。なかなかいい感じだな、春斗？」

『……………』
内側からリアクションがない。

「春斗……………？」

『……………何さ？』

「本気で拗ねてるだろ、お前!？」

『当たり前じゃないか！　せつかくのほーちゃんとの同棲が……
もう、傷心の僕はしばらく沈んでるから……』

「……………」
一人部屋になって良かったと確信した。そして春斗に一言、言いたかった。

あれは同居であって、同棲ではないぞと。

ちなみに、辞書的には同じ意味だったりする事を一夏は知らない。

シャワーを終え、部屋着に着替え、歯も磨き終え、後は寝るだけである。

「……………」

少しだけ、この空間が寂しいような気がする。

春斗はまだ、沈んだままだ。

そつえばと、今までの事を振り返る。

ISを偶然動かし、この学園にやって来て、篤と再会。

そして専用機 《白式》を与えられてセシリアと戦い、鈴とも再会した。

(なんつーか、色々あり過ぎだろ……)

そして、そのあり過ぎな時間を共に駆け抜けた半身。

不安なばかりの日々の中で、その存在は一夏の大きな支えであった。

「……寝るか」

照明を消し、一夏は新しいベッドに横になった。

コンコン。

「……ん？」

コンコン。

「……何だ？」

丁度ウトウトとし始めたところに、誰かがやって来た。ドアはまだノックがされている。

このまま寝てしまえば諦めるだろうと、一夏は布団を頭からかぶった。

ドンドンドンドンガンッ！

「なっ、なんだア!?!」
いきなり荒々しく鳴り響くドア。しかも最後の「ガンッ!」とは何の音だ。

跳ね起きて、慌ててドアを開ける。

「誰だよ、一体!?!」

「やっとでたか、一夏」

「ほ、筭……?!」

果たして、そこには筭が居た。しかも後ろ手に木刀を持っている。どうやら謎の「ガンッ!」の正体のようだ。

新しい部屋を早速、破壊しにでも来たのだろうか。

そんな怪訝な表情で、一夏は筭を見ていた。

篠ノ之筭は、いたく不機嫌であった。

「あのさ……そう睨まれる理由が分からないんだけど……?!」

「別に、睨んでなどいない」

「いや、すっごい怖い目しているって!?! 何て言うか、視線だけで人殺せちゃうレベルのさ!?!」

箒の視線の先には新たな同居人。元々はセシリアのルームメイトだったらしいが、彼女が部屋の殆どを占有してしまっている為、部屋替えを申請していたらしい。

これが何も言わなければ、今日も一夏はここに居たかも知れないと思うと、どうにも胸の奥がムカムカする。

もちろん、彼女なりの事情もあると分かっている。それでもこう思ってしまうのは、箒の乙女心故だ。

「あゝ、えつと……あたしのベッドはこっちので良いのよね？」
と言って指差したのは 元、一夏のベッド。答えを聞く前に、新たな同居人はそこに行こうとする。

「 違う。お前のベッドは窓際の方だ」

「 ……いや、だってそっちってさ……」

「私のベッドは今日からそこだ。だからこっちの窓際を使え。シートもすぐに新しい物に変える。そこで待っている」

「 ……」

取り付く島もないとは正にこの事。箒は数分と掛からずにベッド周りの小物の移動、シーツの取り替えを済ませてしまった。

「 さ、これで文句はあるまい。心置き無く窓際を使うが良い」

「 うわゝ……ここまで露骨だと、むしろ清々しいわね」

部屋着に着替えた新たな同居人は、すっかりリラックス状態。ベッドに胡座をかいて座り、枕を抱えている。

箒はというと、備え付けのデスクに置いてあった物を移動中だ。

「あのさ、篠ノ之つてさ」

「……何だ？」

本を本棚に仕舞いつつ返事を返す。

「あの織斑一夏と幼馴染なんだって？」

「それがどうした？」

「何、アイツに惚れてるの？」

バサバサバサッ！！

「うわっ、すごい分り易い反応！」

「な、なななななななあ………！！？」

本を全部落としながら、顔を真っ赤にして振り返る。

「な」しか言っていないが、「何でその事を」「何のことだ」「何を言っている」でも、さほど大差なく事だ。

百聞は一見にしかず。その良い例が、ここにあるのだから。

「でさあ、告白とかはもうしたんでしょ？」

「こくはっ……………！！？」

これ以上無いってぐらいに真っ赤になる筈。目がグルグルと回り出している。

「まさか、ずっと同じ部屋でいて……何も起きてないの！？ てか、告白もしてないとか……どんだけよ」

「うっ……うわああああああんっ！！」

「うわっ、泣きながら竹刀を振り回さないでよ！？ 危ないっての！！」

襲い来る竹刀を、枕でブロックをし続ける同居人。その動きは隙のない見事なものだ。

「……で、少しは落ち着いた？」

「むっ……」

へ口へ口になって力尽きた筈に、冷蔵庫にあったジュースを差し出す。

それを受け取り、一口飲む。

「あゝあ、枕がボロボロじゃないのよ……」

「うっ……す、すまない」

「それでさ……どんな状況な訳よ？ ここまでやっておいて、教えられない、は無いわよね？」

「む、むっ……」

失態を見せってしまったバツの悪さから、筈は彼女にポツリポツリと答える。

そして。

「だ、だが……一夏が私をどう思っているか……それが分からなければ……」
「む、この子はどこまで乙女回路フル可動なのよ。じゃあ、こうしたら？」
「……？」

新たな同居人の言葉に後押しされ、箒は今、一夏の前に立っている。

「何だよ、一体……？」

「う、うむ……その、だな……」

「取り敢えず、部屋に入るか？」

「……いや、ここで良い」

なんでもない事は普通に答えられる。だが、肝心の話となると口が動いてくれない。

「……」

「……」

沈黙。気持ちと体がズレてしまったような感覚が箒を焦らせる。

「用がないなら、良いか？ 俺、もう寝るから」

「っ！？ ま、待ってくれー！」

一夏が痺れを切らしてドアを閉めようとするのを見て、箒は慌てて声を出した。

『心の準備なんて、何時まで経っても出来やしないわよ。だからこそ、覚悟を決めて告白するのよ』

(覚悟を決めて……………覚悟を)

ゴクリと、からからになった喉を湿らそうと、唾を飲み込む。顔から火が出そうな程に熱いのが、自分でもよく分かる。

「ら、来月の学年別トーナメントだな……………」

「ああ、それがどうかしたか？」

「っ……………!!」

ええい、女は度胸。とばかりに、木刀をビシッ!と、鼻先に突きつける。

「私が優勝したら……………っ、つつつ……………!!」

「つつつ……………?」

「つつ……………付き合ってもらおう!!」

「……………え?」

「よよよ、要件はそれだけだ!! ではな、私はもう寝るっ……………!!」
箒は踵を返して、ズカズカと廊下を早足で行ってしまった。

『……………春斗?』

『……………何?』

残された一夏は、頼もしき半身に答えを求めた。

『俺、何に付き合えば良いの?』

『……………本気でバカじゃないの?』

半身の反応は、とてつもなく冷ややかだった

第11話 ステップアップ・ステージ（後書き）

篝さんマジ乙女w

彼女の新たな同居人は、完全オリキャラ……という訳ではありません。

ある意味、ISで最も不遇の存在と言える子です。

一体何者なのか、それは二巻分のお話で描かれます。

ということですが、今までありがとうございました。

これからも、宜しくお願い致します。

S i d e 篠ノ之 幕 【もっと我仮に】 (前書き)

タイトル通りの第さんメイン。

コメディなしのヒロイン回です。

Side 篠ノ之 箒 【もつと我俣に】

織斑一夏が1025号室を出たその日。

「言ってしまった……言ってしまった、言ってしまったーっ!!」
盛大に啖呵を切った箒は、同居人のジト目にも気付かずにゴロゴロと転がっていた。

それも一夏のベッドの上で、一夏の使っていたシーツに包まり、一夏の使っていた枕を抱きしめてだ。

「……すっごくウザい」
そりゃあ視線だって、痛々しい物を見るようでも仕方ない事だ。

同居人はこのまま箒を簞巻きにして、一夏の部屋に即日宅配でもしてやろうかと思ってしまった。

その際は、ラッピングとメッセージカードも添えてやろう。

カードの内容はこうだ。

『私そのものがプレゼントだ。是非、受け取って欲しい』

うん。考えただけでウザりたい。そして凄く痛い。

でも今の箒の状態なら、それをやれと言ったら、やってしまうのではないかという期待もある。

それはそれで有りかも知れないが、もし受取拒否されたら、この子はその場で切腹でもするんじゃないだろうか。

それに一時の好奇心で箒の、これから先の学園生活を壊すのも忍び

ないと、彼女は考えを改めた。

(そういうのはちゃんと、付き合うようになったからやらせよう)

訂正。大概こいつも酷いやツのようだ。

「でもさ、後の問題は優勝できるかよね……………自信あるの?」
ピタリと、ゴロゴロ虫が動きを止める。

「……………するのだ!!」

バツ! と、箸が跳ね起きる。

ゴロゴロ虫は雪ん子状態で、ググツと拳を握り固める。

「何がなんでも優勝して……………そして一夏と、つつ……………つつつつつつ
~~~~~つ!!」

顔がこれでもかという程に真っ赤になり、そして。

バツタリ。

「あゝあ、思考回路が焼き切れちゃった……………じゃ、お休み」

1025号室、消灯。

時刻は12時を周り、翌日へと変わっていた。

簞は未だに、ドキドキと不安で眠りに着けないでいた。

隣からはスヤスヤという寝息が立っている。もの凄く恨めしい。

とにかく眼を閉じて、体を横たえておくだけでも休めると、簞は布団を被った。

その甲斐あってか、徐々に眠気が簞の中で膨らみ始めた。

？  
？

「っ……!?!」

いきなり鳴り響いた電子音に、篤の意識が覚醒した。苦々しく、音源である携帯電話をわし掴みにする。

一体誰だと画面を見ると『着信 非通知』と書かれてある。

間違い電話か、いたずら電話か。どちらにせよ、この恨みどうしてくれようか。

取り敢えずは文句の一つでも言っただらねばと、篤は通話ボタンを押した。

「お前は誰だ？」

『……もしかして、寝ていたの?』

「これからそうなる所だったものを、この電話のせいで邪魔された……」

不機嫌さを、隠しもせずに吐き出してやる。

『あゝ、それはゴメン。じゃあ、かけ直すね……』

「その前に、自分の名前も名乗らないのか貴様は? 何処の誰かは知らないが、いささか無礼だろう?」

篤は低く、ドスを利かせた声で相手に言っただけ。

『……あつ』

すると、まるで「ポンッ」と手を打ったかのような短い返事が返ってきた。

『えっと、六年ぶりだね……ほーちゃん?』

「ッ!?!」

篤は驚き、息を呑んだ。

自分をほーちゃんと呼ぶのは、世界でただ一人。

何度直せと言っても絶対に止めない。変なところで意地を張られ、結局は筭が折れてしまった。

今は病床の床にあり、政府の保護下にあるという、篠ノ之筭のもう一人の幼馴染。

「は、春斗………なのか？」

『久しぶり、やっと………話せた』

春斗は一夏と代わってもらい、白式のプライベートチャンネルと、自身の端末をリンクさせるプログラムを作っていた。

その実験も兼ねて通信を行った相手は　　筭。  
携帯の番号は一夏のアドレスに登録されてあったので、問題なく掛けることが出来た。

何故、筭を選んだかといえば、純粹に彼女と話をしたかったからだ。

しばらくのコールの後、電話が繋がった。

『お前は誰だ？』

開口一番。ご機嫌斜めな響きである。

「……………もしかして、寝ていたの？」

『これからそうなる所だったものを、この電話のせいで邪魔された……………』

「あゝ、それはゴメン。じゃあ、かけ直すね……………」

やはり、日が変わってから掛けたのは不味かったと、春斗は通話を切ろうとした。がそれを止める筈の一声。

『その前に、自分の名前も名乗らないのか貴様は？ 何処の誰かは知らないが、いささか無礼だろう？』

「……………あつ」

不機嫌さを更に増した、本気で怒っている声。

春斗は、自分が筈と話すのは初めてだったと、ようやく思い出した。

何せ、一夏と共にいつも一緒にいたもので、その辺りがすっかり抜け落ちていたのだ。

「えっと、六年ぶりだね……………ほーちゃん？」

そう再会の言葉を告げると、電話の向こうで息を呑むのが分かった。

『は、春斗……………なのか？』

「久しぶり、やっと……………話せた」

ようやく、春斗は筈と六年ぶりの邂逅を果たした。

篤は部屋では同居人を起こしてしまうと、一先ず談話室に移動した。この時間になれば、部屋の外にいる者はまずいない。

その例外なく、談話室も篤以外の人気は無かった。

「ところで大丈夫なのか？ 政府の保護下にあると聞いていたが……？」

『まあね。取り敢えず、これは抜け道を使っているんだ』

「抜け道……？」

聞き慣れない言葉に首を傾げる。電話に抜け道などあるのだろうか。

『政府の秘匿回線』

「ブツ　　！！」

思わず噴いてしまった。

普通なら出来る筈もない事だが、春斗ならばそれぐらい簡単にやっ  
てしまえると、篤は知っている。

「そ、そうか……だが、あれだ。余り無茶はするなよ？」

その道の先にあるのはきつと、あのとんでもない姉の影だ。春斗までそうなった日には、もう世界に絶望するしかない。

『ほーちゃんこそ、結構無茶したって聞いたよ?』

「私が無茶をした……?」

どういう事だろうかと尋ねると、春斗は事も無げに言った。

『今度やる学年別トーナメントで優勝したら、一夏と交際するんでしょ?』

「ブフウツ　　!!」

盛大に噴いた。

「ななななな……何故、そんな事をしし……知っていいいい……!!?、」  
動揺し過ぎて、呂律がかなり怪しくなってしまった。

『一夏に、さつき質問されたんだよ。「幕に付き合ってくれって言われたんだけど……何処に付き合えばいいんだろう?」って』

「……何?」

何か今、とても聞き捨てならない言葉を耳にしたような気がした。

『どつやら一夏は、あれが告白だって気付いてなかったみたいだよ?』

「そ、そんなバカな……っ!!　あれをどう聞けば、そうなるのだ

……!!?」

『一夏の恋愛思考回路を真面目に考えるのは、どこまでも無駄な労力だと思っよ?』

「……ああ、分かっている。あいつはそういう男だと分かっているさ……だが、余りにもベタ過ぎる反応ではないか?!」

『そのベタでさえ、理解していないのがある意味、一夏の凄いとこるだけだね。そんな相手を好きになっただから、仕方ないんじゃない?』

「ぬづうづう……っ」

言われればその通りなのだが、だからといって納得できない。

『でもまあ、ほーちゃんが勇気を出して一步を踏み出したのは……  
凄い事だよ?』

「そ、そうだろうか……?」

『うん。だから僕も……一歩だけ、踏み出そうって思うんだ』

「……?」

天才。努力家。一夏と違い、相手の心をしっかりと理解できる。そんな春斗が、何に勇気を出すというのか。

箒は続きの言葉を待った。

『ほーちゃん……うっん、篠ノ之 箒さん』

「何だ、改まって……?」

『僕は……貴方の事が好きです。友人としてじゃなく、幼馴染としてでもない。一人の女性として……貴女が、好きです』

「……………」  
『……あの、ほーちゃん？』  
箒は完全にフリーズしていた。

思考停止を起こした箒ブレインが、徐々に再起動していく。

今、何を言われた？

好きと言われなかったか？

好きとはあれか、友人としてか？ あ、幼馴染としてか？

いや、一人の女性としてと言われたぞ？

つまりはどういう事だ？

つまり今、自分は告白をされたのではないか？

「……………」  
「?!?!?!」  
復活した思考が答えを導き出した瞬間、箒は声にならない声を上げた。

顔が真っ赤になり、心臓が急速に早打って苦しくなる。喉がカラカラに渴き、酸素を欲して呼吸が荒くなる。

『あの、取り敢えず落ち着いて!?!』  
「こっこここ……これがおち、落ち着いててて……!?!」  
『ま、まずは深呼吸しよう!?! ほら大きく息を吸って!』  
「ははあああああああ……あ……あ……!?!」  
『ほーちゃん、ちゃんと息をしてー……!?!』

数分近い時間を置いて、箒はどうかこうにか、会話可能レベルまで落ち着いた。

平常時に比べれば、遥かに動揺しているが。

何せ、自分が誰かを想っている自覚はあっても、誰かに想われているなど夢にさえ思わなかったのだ。それは仕方のない事だ。

『えっと、大丈夫……?』

「……だ、大丈夫だ」

電話を両手で持ち、震えそうな体を必死に抑えながら、どうにか言葉を発する。

「それで……その……あれだ……あの」

『……何時からって事?』

コクンと頷いて答える。電話越しでは見えないが、春斗はその”間”を理解したらしく言葉を続けた。

『そうだね……多分、初めて一夏と剣道場に行った時、かな? 最初見た時、髪の毛の長い綺麗な子だなんて思った……あの時からだと思

「う」

「っ……………!？」

それはつまり、篤が一夏を好きになるずっと前の事だ。そんな前から春斗は　と、そこに至った時、篤はハツとした。

自分は、自分の事を好きな相手に、自分の恋の相談をずっとしていったのだ。

もしも篤が、一夏にそんな事を相談されたらどう思うだろうか。耐えられるだろうか。答えられるだろうか。悩む相手を励ませるだろうか。

無理だ。そんな残酷な事、耐えられる筈がない。きっと心が痛くて、苦しくて、逃げ出してしまっただろう。

「……………ごめんなさい」

『ほーちゃん……………?』

そんな酷い事を、自分はずっと春斗にしてきたのだ。

彼の優しさに甘え、その言葉に勇気を貰い、慰められてきた。

「私は……………最低な女だ……………ずっと、春斗を傷つけてきた……………」  
ポロポロと、涙が溢れる。

「知らなかった……春斗の心なんて考えてもいなかった……そんな……風に……！」  
言葉が、嗚咽に途切れていく。

『……謝ることはないよ。言葉にして伝えなきゃ、誰だって相手の気持は分からないもの。僕の方こそごめんね……』

「何で……謝る……んだ？」

『本当は、ずっと言う気はなかったんだ。でもね、ほーちゃんが夏に告白したって知って、言いたくなっただ。このまま、伝えないままでいたくなかった……』

「……ごめん。私は……それには……応えられない……」  
押し出すように、筭はそれを吐き出した。

嬉しくなかったかと聞かれれば違つと答えられる。でも、ダメなのだ。

「私は……一夏が……好きだから……」

残酷でも、酷い言葉でも、嘘は吐けない。それは、勇気を出して想いを伝えてくれた春斗に対して出来る、唯一の誠意なのだから。

『……ありがとう』

「っ……！？ どうして……？」

『誤魔化さないで、ちゃんと向き合って……答えてくれたから。だから、ありがとう』

「ッ……！……！」

『さて、この話はここまでにしよう？ 本当は別の話をしたかったんだ』



『それに約束したしね。「ほーちゃんの恋を応援する」って……』  
「あっ……」

『そっか。ほーちゃん、やっぱり一夏のことが好きなんだ』

『うう、あらためて口にするな!!』

『ごめんごめん。でも、大丈夫だよ。僕が応援するから』

『……本当に?』

『うん! 約束するよ……ゆびきり、してもいいよ?』

「あんな……あんな約束で、お前は……?」

『……まあ、ね。でも、僕にもそれなりにメリットがある訳だし』

「メリット……?」

『こっやって告白したから、これからほーちゃんは僕の事を意識してくれるだろうし……』

「なっ……!?!?」

『そもそも優勝したとしても付き合えるかどうかは分かんないし、振られる可能性だってゼロじゃないでしょ?』

「うっっ……」

『そうなるよ、僕にもまだまだチャンスがあると思うんだよね。ほら、メリットいっぱいだよ?』

「お前は……そんな打算を含んでいたのか!？」

『もちろん。当然でしょ?』

「春斗……そういう事を口にしたら意味が無いだろっ?」

『あつ、しまった……』

下手なウソを吐いていると、筈にはすぐに分かった。

春斗はそんな打算で動きはしない。そんな相手なら、こんなに苦しんだりしない。

全部でないにしても、これは春斗なりの優しさなのだ。

『えっと、じゃあそろそろ時間もあれなんで……切るね?』

「そうか。もう遅い時間だしな」

『あ、最後にもう一つだけ……全国大会優勝おめでとう、ほーちやん』

「ありがとう、春斗。素敵なプレゼント、ちゃんと受け取ったぞ」

『……うん。じゃあ、お休み。また掛けるよ』

「また、秘匿回線からか?」

『当然』

「そうか……じゃあ、お休みなさい」

「ブツッ」という切断音がして、電話は切れた。

『一夏、もういいよ……ありがとう』

「ん？ 分かった……で、実験は上手く行ったのか？」

『滞り無くね』

「そっか。じゃあ、上がるぞ？」

春斗の意識が深層域に沈み、一夏が浮上する。

「……ん？」

と、両目に痛みと違和感。何だろうかと指で触れると、表面が湿っていた。

「……………泣いてたのか、春斗？」

何故。どうして春斗は泣いていたのか。一夏にはその理由が、全く分からなかった。

箒と春斗の告白から数日。

ある、とんでもない噂に箒が愕然とし、青空に向かってこの世の理不尽を訴えていると、呼び出しが掛かった。

やって来たのは打鉄の保管庫。

打鉄やラファールという練習機にも、待機形態は存在する。が、これらには盗難防止の為にそのプログラムをロックしている。なので、ISはそのままの姿でそこに置かれている。

「来たか、篠ノ之」

「なんででしょうか、織斑先生」

箒は呼び出した担任　千冬にその理由を尋ねた。

「実は今度のトーナメントでは一機、大会用の特別なプログラムを試験的に組み込む事になった。その機体をお前に使ってもらいたい」

「何故、私が……？」

「これは打鉄用の、純粹に機体の反応速度を向上させる為のプログラムだ。だが、あくまでも試験品。ある程度使える人間でないとテストにならないのだ」

「私よりも、適任は多いと思うのですが？」

「いや、大会優勝も果たしたお前だからこそ、その動きをしつかりトレースできるかどうかが重要なのだ」

つまりは箒の　　全国覇者の動きを完全にトレースできるなら、問題は無いという事のようだ。

「それに、これは製作者自らの指名だ。断る権利はないぞ？」

「指名ですか？」

「そうだ。取り敢えずは装着してみる」

「……………」

怪訝な面持ちのまま、箒は打鉄を装着する。と、その変化はすぐに分かった。

違う。一体感がまるで違う。

今まで使っていたからこそ、この違いが分かる。

専用機と違い、練習機には汎用性が求められる為、細かいリンクにズレが生まれる。

だが、これにはそれが無い。こんな物を作れる人間が居る事にも驚きだ。

(これを作れる人間……………！？)

箒はハツとした。自分を指名するということは、当然知り合いである可能性がある。

箒の知る限りでは思い当たるのは二人。だが一人はこんなプログラ

ムを作るぐらいなら、IS自体を作ってしまう人だ。

ならば、答えはひとりだけ。

「先生、これはもしかして……春斗の作ったプログラムですか？」

「……………そうだ。プログラム名は【真打】。それをインストールしたそれは【真打鉄】まじくのてつがねという」

「真打鉄……………！」

これが、春斗の応援。

「それと、春斗からのメッセージだ」

千冬が一枚のメッセージカードを箒に渡す。

箒はすぐにそれを開いた。

『これが、あなたの想いを通す一助とならん事を』

「……………バカ」

箒はカードをそつと仕舞った。

こんな物を贈られたら、優勝するしか無いではないか。

「なるう、もっと我侂に……………！私は優勝するぞ、春斗……………！！！」

太刀を引き抜き、一閃。  
箒の表情に、戸惑いも迷いもない。

恋も、戦いも、絶対に譲りはしない。

もっと自分に我侭になる。

その為に、まずは今月に行われる大会だ。

「その首、洗って待っている、一夏……!!」

「おおっっ!?!?」

『どうしたの、—夏?』

「何か、すごい寒気が……風邪か?」

Side 篠ノ之 幕 【もっと我俣に】（後書き）

ということでも、真面目な恋愛回でした。

第と春斗の関係はどうなるのか。ここからが、ある意味スタートです。

まずはお詫び。

前回登場した篤さんの同居人さん。

本来のプロットでは、4組の専用機持ちこと、更識簪さんをあてる予定だったのですが……7巻で登場するですって!？

取れる選択肢は三つ。

- 1：このまま発売まで執筆を控える。
- 2：プロット変更。完全オリキャラにする。
- 3：むしろKANZASI上等。

数時間悩み、2を選択。自分は我慢弱い男なんです!!  
せつかく会長との絡みネタとか用意してたのに……。

ということ、オリキャラさんは性格まんまで登場します。  
ヒロインを引つ掻き回すためにw

簪さんは……7巻後に考えます……（泣）  
なんで今何ですか、先生……。

Another Side 黒の覚醒め／波乱の予兆

時は少し戻って鈴との対決、そしてアンノウンの乱入が起こる、ク  
ラス代表戦の少し前。

小さな異変は、とある日の夢より始まっていた。

ザアアアアアアアン……。

「ここは……？」

春斗は自分が、何処とも分からない場所にいる事に気が付いた。白波が寄せては返し、黒のカーテンで覆われた空にはキラキラと眩い満天の星達。

そして、その中心には星を従える美しい満月。

「ラ〜、ララ〜。ララ〜ラ〜」

「ん？ 何だ……歌声？」

どこかで、誰かが歌っている。春斗は声の方に歩き出した。

サクサクという砂の音を鳴らし、辿り着いたのは海岸から上がった所にある岬の木の上。

その枝に腰掛け、足をプラプラさせながら歌っているのは白い少女。

「君は……誰？」

「ラララ〜ララ〜、ラ〜」

少女は答えず歌い続ける。まるで誰かを呼んでいるように。

「………まだ、その時じゃないよ」

「えっ………！？」

もう一度だけ声を掛けてみようとした時、いきなり背後から掛けられた声に驚いた。すぐに振り返るが、そこには誰もいない。

「でもいつか、きっと………会えるから」

「誰だ……誰なんだ、君は!？」

「で」

「え……?」

「しを んで」

そして、夜が明けていく。それと共に春斗の意識が遠くへと消えていった。

「ん……?」

ふと眠りから覚め、そのままベッドから体を起こす。時間を見てみると、まだ朝の四時であった。カーテンの隙間から溢

れる光は少なく、未だ日の出していないと教えられる。隣のベッドからは、篝の静かな寝息が聞こえていた。

「あれ……？」

違和感を覚える。何故、”自分は起きている”のだろうか。

「どうして、”僕”が……？」

肉体を共有しているとはいえ、この体は一夏のものだ。

つまり、一夏の意識を起こさなければ、春斗には”指一本さえも動かせない”筈なのだ。

一夏の意識を探ると、深い位置で静かな波動を感じた。意識は完全に眠ったままのようだ。

一体何故こんな事が起こってしまったのか。

その原因を探るも、思い当たるのは　あの、奇妙な夢。

内容は良く憶えていないが、だが、不可思議だった事は覚えている。

今まで、こんな事は一度もなかった。

それがいきなり変な夢を見て、そして起きればこの状況。まるで”自分が一夏を侵食している”ような不安感。

「そんなバカな……ナンセンスにも程がある」

馬鹿らしい考えだと、首を振る。

頭もすっかりと目覚めてしまっている。春斗は取り敢えず、パジャマ代わりの部屋着を着替える事にした。

脱いだ物をベッドに置き、シャツの袖に腕を通す。

「むっ……ボタンがし難い……っと、入った」

小学生の時は私服であつたし、弓道場では弓道着であつた。春斗にはこういったワイシャツを着た経験が殆ど無かつた。せいぜい、箒の誕生日におめかしして行つたぐらいだ。

制服に着替えた（上はYシャツのまま）春斗は洗面所で顔を洗い、髪に櫛を通して寝癖を直す、今度は歯を磨いた。誰もが普通にする日常の行為。だが、春斗にとっては数年ぶりに行う事だつた。

口を濯ぎ終え、顔を上げた。

鏡に映る顔は織斑一夏。だが、自分は織斑春斗だ。

この状態の奇妙さに改めて気付き、つい苦笑してしまう。

いつ、一夏が起きる時間まで、結構な余裕がある。

せっかくなので携帯モバイルPCでも弄ってみようかと、それを引き出しから取り出す。

箒は未だ寝ているので、起こさないようにそつと動く。

「うう……ん……」

「っ……！？」

寝返りをうつた箒に、つい目が行ってしまった。

その瞬間、凄まじいショックが春斗を襲っていた。

仰向けに、悩ましげな寝顔を見せる箒。

乱れた合わせから、もう少しで頭になってしまつ豊か過ぎる双丘が揺れる。

スラリと伸びた生足が、布団から惜しげもなく晒され、まるで蝶を誘う花のように甘い香りを発している幻を、春斗に与える。

余りにも無防備で、そしてとても官能的な姿。

熱に浮かされたように、春斗は無意識に箒の傍らまで歩を進めていた。

「っ……」

ゴクリと、固唾を呑む。両の手が我が意志を持ったかのように、徐々に箒に向かって伸ばされていく。

理性と本能がせめぎ合う音が、鼓膜の奥に響いている気がした。

「……ふう」

布団をそつと、箒にかけ直した。  
理性がギリギリで勝利を収めたようだ。

紳士たる（笑）春斗には寝ている女性を襲うなど、あり得ない選択  
肢だ。

尤も、箒の寝姿をしつかりと”記録”している辺り、理性の勝利と  
言えるのかは甚だ疑問であるところだ。

春斗はそつと、部屋を出て行った。

春斗は談話室に移動し、コンセントのある端の席に座った。

立ち上げた携帯モバイルPCをネットに接続すると、いくつものニュースサ  
イトを巡って主だった物を閲覧していく。

「デュノア社製フランス第三世代IS、トライアルに向けて順調……  
……か。あれをたった一年程度では……流石だな」

第三世代IS開発に遅れていたフランスが、デュアン・ヒューイツ  
ク博士の粒子加速理論を取り入れたIS開発を始めたのは、およそ

一年前。

その経緯を知るとはいえ、それが既に形となっている事に春斗は驚いた。

その後も色んなニュースを見ながら、自販機で買ったコーヒーを啜る。

好みはブラックなのだが、飲もうとすると一夏に「ブラックは胃に悪い。ミルクは絶対に入れる」と五月蠅く注意されるので、ミルク入りだ。

自分の体を取り戻したら、絶対にブラックを飲む。そう決意している。

「……メールが届いてるな」

差出人はシャルロット。春斗と同じ年の、フランスの少女である。

シャルロットとのやり取りは、もう三年近くになっている。

春斗がヨーロッパの科学サイトで行われた、有名科学者とのチャット対談に参加したのを見ていたらしく、春斗に興味を抱いたらしい。

尚、その対談はあつと言う間に論戦に変わり、春斗とその科学者のガチンコになってしまった上、春斗が相手を論破してしまうという結果に終わっている。

シャルロットは一時期、家庭の事情で色々と問題があったらしいが、

今はそれも解決したと連絡をもらった。

「そうか、こっちに来るのは六月か……」  
メールには留学準備を終え、いよいよ日本に向かう旨が書かれていた。

彼女は春斗に会いたいと言っているが、出来るなら接触は避けたい。他の学校ならばともかく、彼女の留学先は恐らく、このIS学園なのだから。

それは本人から聞いた訳ではない。だが春斗は、彼女が今やフランス代表候補生になっている事を知っていた。

自分が一夏の体で会うなど、出来る訳がない。  
そんな事をすれば、一夏が色んな意味で修羅場に堕ちるだろう事は、火を見るより明らか。

(まあ、向こうは僕の名前も知らないし……探しようもないか)

要らない心配だろうとコーヒーを飲みきって、紙コップをダストボックスに投げ込む。

「どうした!? 随分と早起きじゃないか、一夏……?」  
驚いたような声が、談話室の入り口から届いた。そっちを向けば白いジャージ姿の千冬が信じられないといった表情で、こちらを見て

いた。

「…………お早う、千冬姉さん」

春斗がそう返すと、更に驚きに顔を染めた。

「っ！？ 春斗…………！？ どうしてお前が表に出ている！？」

「いや…………起きたらもう、表にいたんだ。一夏はまだ眠ったままだし…………代われないから」

入れ替わりは、相手の意識が起きていないと出来ない。一夏の意識が覚醒しない限り、戻りたくても戻れないのだ。

「姉さんはこんな早くから仕事？ 大変だね…………」

「いや、まあ…………な」

と言いつつ、千冬は春斗の前の席に座る。

「姉さん？」

「だが、弟と話す時間ぐらい…………無い訳ではないぞ？」

千冬はそう言っただけで笑って掛けた。

こうして向かい合うのは実に数カ月ぶり。まして、気兼ね無く話せるなど、何時ぶりだろうか。

「…………で、やっぱり白式を上手く運用するには、もっと特性を理解させないといけないんだけど…………今日の放課後、少し見てくれないかな？」

「それは構わないが…………身内贔屓などと、言われるかもしれないぞ？」

「担任がクラスの代表の練習を見るのは身内贔屓じゃないよ？ ていうか、自分で言っちゃうの、そういう事…………」

「ああ、それもそうだな…………すまん」

だというのに、春斗の口から出てくるのは、どうすれば一夏の訓練がもっと効率良く出来るかという事ばかり。

これは家族の会話などではない。ただの打ち合わせだ。

「それは分かったが……その、お前自身は何かないのか？」

焦れた千冬は直接的に尋ねる。と、春斗は目をパチパチとさせた。

「何かって……何も無いけど？」

「っ………そうか」

「……………」

どういう事だろうか、春斗は首をかしげた。

(どうして「何も無い」などと、簡単に口にしてしまえる……！)

春斗は昔から、千冬に「何でも無いよ」「大丈夫だよ」「平気だから」と答え続け、我侭も何も言わない子供だった。

(いや、違う………どう言えば良いか分からないんだ。私が、そうしてしまったんだ………)

両親に捨てられ、千冬は家長として二人を育てるために必死だった。一夏はそれを理解しつつも、色々和我侭を言ってきてやはり大変だった。

だがそれは歳相応の事で、今思い返せば普通の事だ。

だが、春斗は一度もそんな事を言わなかった。とても聡い子であったから、一夏が我俣を言っただけで困る千冬を見て、全部呑み込んできたのだ。

更に、生まれつき体の弱い方だった春斗は、よく体調を崩した。それが尚更、春斗を何も言えない人間にしてしまった。

その体を鍛える為にと始めた弓道も、様々な語学勉強も、科学研究を読み潰すのも、東のラボにISの事を聞きによく足を向けていたのも。

総ては寂しさを言えない、埋められない事への代償行為。

「春斗はいい子だな。一夏も、もう少し春斗を見習って良い子にしている」

この言葉を、自分は何度言っただろうか。

それは呪いのように春斗の心を縛り付けていった。

そして今、家族の千冬にさえその心を本当に開いていない。そう思えて仕方がなかった。

「なあ、春斗？」

「何……？」

「何かしたい事はないか？ お前はその……もつと色々、自分の好きな事をやってはどうだ？」

「……それで、僕の事がバレるのは問題でしょ？」

「それはそうだが……だが、外に出ているだけでは意味が無い。もつと……我俣を言っても良いんだぞ？」

千冬の言葉に、春斗は少し考える素振りを見せる。

「僕は結構、我俣に生きてたと思うよ？ 弓道も、ISの事だつて、姉さんが関わらせたくないの知ってたけど、東博士に教えてもらってたし……」

春斗は席を立ち、コンセントに差しであったアダプターを引き抜く。そして携帯PCをシャットダウンさせた。

「じゃあ、そろそろ部屋に戻るよ。姉さんの邪魔、する訳にはいかないしね」

春斗は携帯PCモバイルを抱えて、談話室を出ようとする。

「春斗」

「何、姉さん……？」

呼び止められ、春斗は振り返る。

「私は一度だって、お前を邪魔などと思ったことはない……」

「……」

「それともう一つ。」生きてた”などと二度と言っな。お前は”今も生きている”んだ……どんな形でもな」

「……うん、分かったよ」

春斗の去った談話室で、千冬は顔を伏せた。

あの日春斗に生きていて欲しいと願った。もうあの声を聞けない、あの笑顔を見れないなどと思いたくなかった。どんな形でも生きていて欲しいと願った。

だが、それは本当に正しい選択だったのだろうか。今でも何度となく迷う。

自分の我侭で一夏の存在を危険に晒し、春斗を更なる孤独へと追い遣っただけなのではないか。

鈴が転入してきた事は幸運だった。

だが鈴は全ての事情を知る相手であって、”信頼できる他者”ではない。

春斗にとって、未だに誰一人として、”信頼できる他者”は一人もいない。

いや、一人だけそう成り得る可能性を持った者はいる。

だがもしも彼女に否定されることになれば、春斗がどうなるか想像するだけでも恐ろしい。

あやふやで曖昧な陽炎の如き存在が、明日消えてしまうことさえ起こり得るのだから。

出来るならば、春斗が心より信頼たる他者が現れんことを。そんな奇跡のような出来事を、願わずにはいられなかった。

セシリアと篤が所用の為に不在であったので、千冬と共に特訓をしていた。

後の切り札となる瞬間加速イグニッションブーストの会得や、この後の訓練に関しての指針などを学んでいた。

「ところで千冬姉……?」

「織斑先生だと何度言えば」

「いいや。千冬姉にちょっと見て欲しいものがあるんだ」

「……何だ?」

教師ではなく、姉に見せたいのだということを理解した。

一夏は瞳を閉じ、雪片を持つ手を前方に掲げた。

キイイイイ……ン。

雪片は量子変換され、その手から消えていった。

「……それがどうした? 雪片を収納クローズしただけだろう?」

「……違うよ。一夏は雪片を収納してなんかいないよ。僕と入れ替わっただけなもの」

「春斗……!?!?」

「白式は僕と一夏が入れ替わると、自動的に雪片を収納して、ロックしちゃうみたいなんだ。そしてその代わりに……」

春斗は左手を前方に突き出し、意識を集中させる。

「来たれ、月影……！」

その呼びかけに応えるように量子変換の光が集い、それが出現した。

大きく反った刀身は二刀一刃。その切っ先を光の弦が結びつける

「それは……弓か」

「弓剣月影。雪片がロックされると同時に開放される、もう一つの初期装備。すぐく矛盾した武装だよ……」

「……………」

「白式に二つ、初期武装があるのはおかしくないよ。でも、射撃用のセンサーリンクさえ無い白式に、これがあるのはおかしい。それに僕と入れ替わらないと使えないっていうのは、更に矛盾している」

本来、白式は一夏の為に用意された専用機だ。春斗が動かせるのはイレギュラーの筈であり、そもそも武装をロックする意味が無い。

一つの可能性を除いては。

「白式つてもしかして……東博士が作ったISなんじゃない？」

「……………」

沈黙。それだけで充分、答になっていた。

「ちょっと待った。白式は学園で用意したんじゃないのか？ それ  
が東さんが作ったって……妙じゃないか？」

「でも、それ以外に白式に初期武装が二つ。しかも、一夏には雪片  
しか使えない事の説明はできないよ？」

「確かにそうだけどさ……」

「その辺の経緯はもう、本人に聞くしかないんじゃないかな？」

「ちょっと待て、お前たち！？ 何を普通にしゃべっている！？  
というか、何だそれは！？」

千冬は珍しく取り乱していた。それもそうだろう。なにせ今、二人の声が普通に聞こえたのだから。

「あ、これ？ ISの個人回線プライベートチャンネルを介した会話システム。端末と繋がば電話もできるようになるんだけど……そっちは未だ調整中なんだ」  
「春斗、何時の間にそんなものを……？」

「え？ 一夏が訓練してる間にずっと弄ってたんだ。この間、やっと完成したんだよ」

「そ、そうか……だが、あまりやり過ぎるなよ？」  
嬉しそうに言う春斗に、千冬はそう言ってやるのが精一杯だった。

一体どこの世界に、ISのネットワークを嬉々として弄ってしまう奴が居るだろうか。

(ああ、目の前に居るか……)

このまま行けば、うさぎ耳力チューシャの背中が見てしまいそうだが、春斗はあれのような社会不適合者という訳ではない。

しかし、姉としては不安を抱いてしまう。  
何せ天才という部類は、何処か吹っ飛んだ思考をしている事があると、身を持って知っているからだ。

「それはそれとして……取り敢えず、これの試し撃ちをしてみたいんだけど……良いかな？」

「あ、ああ……ちよっと待て。ターゲットを出す」

ポチポチと端末を操作すると、アリーナにターゲットが10個、出現する。

「久しぶり、ていうか……ISで弓を使うなんて初めてだよ。なんだかドキドキするね」

「お前ってやつぱり弓、好きなんだな……？」

「そりゃあもう。静かな空気の中で一矢に集中するあの感覚。矢が的を射抜いた時の心地良さ……最高だよ」

いつもは見せない、子供のようにはしゃぐ春斗の姿を、千冬はただ優しく見守っていた。

「では、始めるぞ」

「……………」

春斗は集中して弓を引く。ISという物を挟む故に生まれる、感覚のズレを削いでいく。

一矢、発射。

「……………左にずれた」

二矢、発射。

「今度は上か……」

三矢、発射。

「おお、真ん中命中だー!!」

「まだまだ、偶然だよ」

その後、四、五矢と射っていく。

「87点か……凄くないか」

「うーん、もうちよつとかな?」

一夏はこの成績に驚き褒める。が、春斗は納得がいかないようだ。

「千冬姉さん。今度は空中にもターゲットをお願い。飛行射撃をやってみたいから」

「分かった。ターゲットはランダム出現と、ランダム移動タイプだ」「いきなりハードじゃない、それ?」

「やるなら徹底的にだ。仮にも『弓道王子』だの『現代的那須与一』などと呼ばれていた天才弓道少年だ。これ位は、やって見せれるだろうさ」

「うわーっ! そんな黒歴史を引つ張り出してこないでっ!」

ちなみに今のは、春斗の弓道の師匠を取材にきた新聞社が、勝手に付けた呼び名である。

何故こうなったかといえば、その師匠が春斗の事を類まれなる才能の持ち主だとか何だとか褒めたせいで、興味を持たれたのだ。

そして物の序でと取材をされて、記者は春斗の弓に感嘆と興奮を覚

えた。

結果、こんな黒歴史の誕生である。

元々、男子の弓道人口は少ない。そして春斗は細身の、どつちかといえは一夏よりも、大人しめの印象を与える容姿をしている。

話題を欲していた弓道雑誌や、スポーツニュースなどの取材も受けて、その呼び名は瞬く間に広がってしまった。

今は、あの取材を受けた事を果てしなく後悔している。

具体的に言つと、千冬がその時の弓道雑誌と、新聞記事、ニュース映像をきっちり保存している辺りがだ。

404

嫌な事を思い出してしまったと首を振り、ともかく今はターゲットの撃破である。

春斗は空に上がった。

「……バランスが上手く……!?」  
やはり一夏用にセッティングされている以上、春斗には動かしにくいようだ。

射撃は繊細さと安定性が必須。自分の体勢を維持できないようでは射撃など不可能だ。

なので、必死にイメージする。

(自分の中心点からX、Y、Z認識における三次元リングの展開…  
…自分が動くのではなく、世界を回すイメージで……)

白式を透明な球体に入れ、その内側を滑って体勢を取るイメージを生み出し、射撃体勢を取った。

「………やっぱり、白式は僕の動きに合わないね。反転や一零停止、動作系が全く合わないよ」

「まあ、近接特化だしな………」

「射撃戦闘は壊滅的………これなら最初から無い方がマシだったんじゃないかな？」

色々と話しながら、白式は千冬の居る地上へと降りた。

フォーマットを完了しました。確認ボタンを押してください

「……………ん!？」  
「なっ……………!？」  
いきなり立ち上がった画面に、春斗と一夏は揃って驚きの声を上げた。

フォーマット終了。  
それはつまり、フィッティングが終わったという事だ。

「……………」  
「……………」  
どうしたものかと悩み、どうにも出来ないと思考が止まる。  
白式はさっさと押せとばかりに、その画面を消しはしない。

「……………すっごく怖いね、これ」  
「爆発とかしないよな？」  
「ゴメン、一夏……………僕の為に尊い犠牲になってしまって」

「勝手な事言うなよ!? ならねえぞ、俺はお前の犠牲になんて!」

涙を拭い、春斗はそれを押した。

そして、それは覚醒した。

純白の装甲は黒く染まり、両手は白地に黒のライン。

スラスタ―翼も黒と白で構成され、白式のフォルムを持ちながら、全く別のISへと変貌していた。

「白式が……黒くなった……!?!」

「お、俺の白式があああああつ!?!」

「色だけじゃない……データも出力バランスが変わってる!?! これじゃ、全く別のISだ……!?!」

「千冬姉さん、どういう事!?!」「千冬姉、どういう事だよ!?!」

「私を知るかつ!?!」

とても的確なツッコミである。

事態は全く以て混乱の一途をたどった。  
一夏と入れ替わった途端、白式は元の白い姿を取り戻し、ステータスも元通り。

春斗が出てくると黒くなり、ステータスが変化する。

「こりゃ、まるでオセロだな」

「なるほど。白と黒で丁度良いね」

「ほう、なかなか上手い事を言うな、一夏」

彼らは現実逃避していた。

なにせ、これを作ったのがあの篠ノ之 東である以上、思考回路をショートするまで回転させても、考えは及ばない。

ISに関してプロフェッショナルである千冬でさえ、この現状をどう受け止めれば良いか分からないのだ。

黒い白式の事をこれ以上、考察しようもないのが現実であった。

考察が出来ないからと言って、現実逃避を続ける訳にも行かない。  
千冬は咳払い一つして、春斗に言った。

「とにかくだ……いいか春斗、その姿は公の場に来る限り晒すな。」

それは……本来、ありえない姿なのだからな」

「分かってる。残念だけど、僕はISを使わない方が良いみたいだし」

「……………」

千冬も出来るなら、春斗にもISを遣わせてやれればと思う。

だが武装はともかく、見た目まで大きく変わってしまうのは痛い。

あれでは悪目立ちが過ぎる。残念だが、諦めてもらう以外にない。

「……………だが、公の場以外で……他の誰もいないか、凰のように事情を知っている者の前ぐらいなら、使っても良いぞ?」

やはり、自分は甘いと千冬は思った。そんな事で漏洩を防げるわけがないのに。

「ありがとう。千冬姉さん」

その言葉を聞くだけで、千冬の心が温まってしまう。

少し元気を取り戻した春斗がポツリと零した。

「白が表の白式なら、さしずめ黒は裏の白式ってところかな?」

「お、なるほど。つまり”裏白式”か」

ポン、と一夏が手を打った瞬間、異変が更に起きた。

目まぐるしくデータが流れ、二つの画面が立ち上がる。

自機名称 白式

自機名称 裏白式

「……登録された？」  
「ウソッ!？」

偶然か、それとも何者の画策か。  
生まれたのは二つのIS。

白く輝き、閃光の刃を振るう白式。

黒く艶めき、月光の一矢を放つ裏白式。

全ての始まりは、奇妙な夢。

それが導くのは果たして、どのような未来だろうか

。



時は、筭と春斗の告白が行われた頃。

ドイツ軍の基地から一機の飛行機が飛び立った。

生憎の悪天候であり、機体が乱れた気流にガタガタと揺れる。

「……………」  
が、機内にいる一人の少女は、全く平然として腕を組み、瞳を閉じていた。

長いシルバーブロンドの髪と黒い眼帯が特徴的で、その顔はまるで彫像か、人形のようにであった。

「……………」日本、か」

ポツリと呟く。

そこに居るのは、自身の尊敬 敬愛する人物。

そして憎むべき、不倶戴天の敵。

少女はやおら瞳を開き、胸ポケットから一枚の写真を取り出した。

そして同じ頃、フランスでも、一人の少女が日本行きの際に搭乗するべく空港を訪れていた。

「フィリーさん、色々ありがとうございました」

「いいえ。私も楽しかったわよ……シャル」

「えへへ……」

語り合うのは、一人は少し小柄なブロンドヘアの少女。

そしてもう一人は、銜え煙草をしたブラウンのロングヘアの女性。  
「日本に着いたら、連絡を頂戴。博士に報告するからさ……」  
「はいっ」

アナウンスが、日本行き の 搭乗 を 始めた 事 を 告げる。

「じゃあ、行ってきます!!」

「行ってらっしゃい! 例の彼、ちゃ〜んときつけてきてね!!」

「はいっ! 必ず見つけます!!」

シャルと呼ばれた少女は、フィリーに手を振って返し、そして小走りにゲートへと向かった。

急ぐ必要はないのだが、どうしても心が競ってしまっ。

「やっと……やっと会えるかも知れない」

シャルは上着のポケットから、一つの封筒を取り出す。

シルバーブロンドの少女は苦々しく呟く。  
「早く会いたいものだな……」

ブロンドヘアの少女は嬉しそうに呟く。  
「早く会いたいな……」

「 織斑 一夏」

「 織斑 ハルト」

波乱は、  
すぐそこまで迫っていた。

Another Side

黒の覚醒め／波乱の予兆（後書き）

という事で、六月です。

ヒロイン勢揃い。オリキャラさんも活躍。

筈はヒロイン！！（ここ重要）

さ、頑張って書きましょう！ では！！

第12話 New Days/New Comers (前書き)

第二巻突入。

いよいよ、彼女たちのターンです。  
第Sideのお話の裏も合わせて、それではどうぞ。

第12話      New Days / New Comers

波乱の火種とは、恐らくはいつも小さなものなだろう。  
本当に些細な事が、やがては途轍もないトラブルを生み出す事になる。

そんな実感を、織斑春斗はする事になる。

季節は六月。

末に学年別トーナメントの行われる月である。

「大丈夫、箒？」

「ああ……なんとか。すなまいな、織羽……」

六月頭。折角の休日ではあるが、篠ノ之 箒は熱を出してしまい、自室で寝ていた。

おでこに冷却シートを貼り、ボツとする頭で何とか答える。

何故に彼女が風邪を引いたかといえば、春斗の告白が原因であった。

電話が切れた後も、箒はずっと談話室でうなだれていた。それこそ、日が昇るまでだ。

初夏近いとはいえ夜は涼しく、薄着ですつといれば風邪の一つも引く。ましてや、精神的に弱ってしまっているならば尚更だ。

流石に春斗は責任を感じてしまい、看病を申し入れた（表向きは一夏）が、同居人である辰守 たつがみ 織羽 おりは にやんわりと断られた。

「でも、本当に良かったの？　せつかく彼に甘えられるチャンスだったのに……」

「……………いや、それはできん」

何度か聞いてみるも、答えは一緒。頑なに一夏の看病、見舞いさえ断るのだ。

最初は風邪をうつさないようにという配慮かと思われたが、どうもそうではない気がする。

「ねえ、もしかしてさ……………ずっと談話室にいた事と、関係有り？」

「っ……………！」

そう云うや、篝の顔が真っ赤になる。熱のせいではなく、それは羞恥によるものだ。

『僕は……………貴方の事が好きです。友人としてじゃなく、幼馴染としてでもない。一人の女性として……………貴女が、好きです』

脳内にリフレインするその言葉。人生初めての告白。

「……………っ！」

内側から、まるでマグマがせり上がるような感覚が走る。

「……………その反応は、何かあったな？」

「っ……………！？」

この同居人は、何故こうも人の心を読んでしまうのか。驚きに目を見開くと、ニコリと微笑みやがった。

「せつかく休み返上で看病してあげてるんだから……当然、教えてくれるよね？」

「……………むう」

看病されている手前、どうにも弱い。

それに何だかんだと言って、自分の告白を後押ししてくれた経緯もある。一夏の鈍感さはどうにもならなかったが。

それに、これは一人で抱え込むには重すぎる荷物だ。誰かに話して楽になりたいと思っていた。

「じ、実は……………その……………」

仕方なく、篤は昨晚の事を話した。

「……………つまり、何？ 織斑一夏に告白した後、その双子の兄の方から告白をされて……………それを断ったはいいが、その事がずっと頭に残ってしまって、悩み続けていたら朝になつていたと？」

「……………」

篤はコクンと頷く。

「それはあれかい？ 独身者に対する当て付けと受け取って良いの

かな？ ていうか、自分は少女漫画のヒロインみたいにモテて恋に悩む乙女で青春を謳歌してますっていう自慢がコラー……ッ！  
？」  
ここにちやぶ台があったらひっくり返しそうな勢いで、織羽に叫ばれた。

「な、何でそんな　ゴホゴホッ……！」

「何でも何も、そういうふうにししか聞こえないわよ！　大体、兄の方の告白は断ったんでしょ？　何をそう悩むつてのよ……！」

「これはそういう単純な話ではない……　ゴホッ、ゴホッ」

「複雑に見えるのは、箒がハッキリしてないからよ」

「どういう事だ……　ケホッ」

「ズバリ、その兄の方を意識し始めちゃってるのよ……！」

「ブフ　ッ！？　ゲホッゲホ、ゲーホゲホゲホッ……！」

とんでもない発言に、箒は嘔き出した上に思いつきり咳き込んだ。後一つランクアップすれば、何時吐血してもおかしくなさそうである。

「そ、そんな訳が……！？」

「あるかも知れないから、そうやって悩んでるんじゃないの？」

「違っつ……！　ただ……ずっと、私は春斗に甘えていたから……だから、それをあんな風に傷つけてしまった事が……　申し訳ないだけだ」

「ふーん。それこそ申し訳ない事だと、言わざるをえないわね？」

「何……？」

「だって、箒がそんなに宙ぶらりんじゃ、その兄の方も諦めがつかないんじゃない？」

「……」

「仮にも答えを出したんだから、その責任は果たすべきじゃないかしら……」

「果たすべき責任……?」

「今度の大会で優勝するとか、自分の想いをしっかりと彼に伝えることとか……そういう事よ。取り敢えず今は、風邪を治すことだけどね」

織羽はそう言い残して、部屋を後にした。箒の脱いだ浴衣やら下着の類を洗濯に行ったのだ。

「……………」

一人部屋に残された箒の胸を、織羽の言葉が締め付ける。

(私は……私には、何が出来る……? 何をやれる……?)

春斗の想いに報いる為に、何より自分の為に。

だが、それでも踏み出せない。

後押しされ、賭けを持ち出し、自分の想いを自分の言葉でさえ伝えられない臆病者の自分。

情けない。

心が乱れ、様々な想いが泡沫の如く、浮かんでは弾けていく。

人付き合いという事が苦手だった。

我が身の怒りに任せて、己の鬱憤をはらす為に、暴力を振るったことさえある。

最低で、情けなくて、矮小な自分。想いを叶えることも、想われる資格もない。そんな存在だ。

(ああ……こつやって落ち込んでいると、いつも春斗が……)

そこまで思い、首を振った。

まただ。また考えてしまった。

これはきつと病のせいだ。そのせいで、心が弱気になっているだけだ。

織羽の言う通り、今は体を休めよう。

箒は深く息を吐いて、瞼を閉じた。

箒は、三人で過ごした幼い日々を夢に見た。

もう帰ることの出来ない、三人の時間に、自然と涙がこぼれていた。

さて、学園は休校である。一夏達は久しぶりに、学園の外へとやって来ていた。

目的としては、これから必要になる夏物の類を寮に送る事と、ずっと放ったらかしにしていた家の惨状を、何とかする為である。

普段から整理整頓は一夏がやっていた為、掃除はスムーズに進む。

「やはり鬼門はこの冷蔵庫か……」

『卵などの生物は全滅。牛乳はもう、固まり始めてるよ?』

「よし。即座に廃棄だ」

態々、白式のハイパーセンサーを使って中を探り、一夏は防毒マスク(ただのマスク)を装着する。

三十分後、冷蔵庫は綺麗に空となった。

電気代もバカにならないので、全部のコンセントをしっかりと抜く。

そしてその過程で、最も恐ろしい物を見つけてしまった。

「……………炊飯器」

『確か、中身って入ったままじゃなかった…………?』

そう。いつもならば余ったご飯は冷凍して保存するのに、あの日、あの時だけはそれをしていなかった。  
保温状態で、一ヶ月以上。

開けた瞬間に、エイリアンが出てきたっておかしくはない状態であるろう。

「……………春斗、ハイパーセンサーは？」

『……………聞きたいの？』

「……………いや、いい」

一夏は即座に炊飯器をベランダに移動させる。そしてゴム手袋の上から軍手を装備し、雨合羽なんでものも羽織る。

これでケミカル対策はバッチリだと、一夏は禁断の扉に手を掛けた。

「……………大丈夫か？」

「ああ、この世の地獄を見ただけだ」

『うう……………記憶力の良さが恨めしい……………』

昼過ぎ。場所は五反田食堂。

そこは一夏の中学からの友人である五反田 弾の実家の食堂である。  
一夏の目の前にはカボチャ煮定食。とても甘いカボチャの煮付けが  
メインの定食だ。

「ああ、そうだよ。ご飯っていうのはこう白くて……………ほかほかなんだ  
よな……………」

一夏は涙を流しながら、ご飯を口に運んだ。

その様子に、弾は呆れ気味に尋ねた。

「……………お前、本気で何があっただよ？」

その答えは是非、粗大ゴミとして出された炊飯器に聞いて欲しい。

世界の正しさを認識しつつ、美味しい料理に惨劇の記憶を塗りつぶしていく。

「で、どうなんだよ？」

「何が？」

「何がって、女の園だぞ！？ もう、何か色々あったんじゃないのか！？」

「色々ねえ……」

そう言われて思い返す。

入学してパンダ扱いされ、セシリアといきなり決闘。

代表になったら鈴と戦い、謎のIS乱入。白式は裏白式になって、謎のISを撃破。

「……あり過ぎて、良く分からんな」

「あり過ぎてだと！？ この助平大魔王がつ！！」

「誰が助平大魔王だ！ 少なくともお前の思考に重なる部分は一つもねえよ！！」

「ウソだつ！！」

「ウソじゃねえって！ 大体、女の園なんて肩身が狭いだけだって……」

「何言つてやがる。俺にもハーレム行きの手ケットよこせ」

「あるか、バカ」

弾の妄言を一蹴して、カボチャを一口。見事なまでに甘い。

このホクホクにならず、適度に水分の残った状態。素晴らしいバランスだと、一夏は心で賞賛する。

ちなみに、カボチャの煮付けをそのまま鍋に入れておくと、カボチ

ヤが消滅することがある。

一夏が、昔やらかした失敗である。

そんな中、同じテールに着く少女が口を開いた。

「……お兄、そろそろ黙ってくれる？ ていうか、一夏さんとお兄の思考を一緒にするな」  
凄まじい殺気を放ち、弾を睨みつけるの少女。

彼女は五反田 蘭。弾の妹で某有名私立女子校に通い、生徒会長も務める優等生である。

兄妹の力関係は、言うまでもない。

「ところでさ……蘭」

「な、何ですか……一夏さん？」

一夏が声をかけると、途端に口調がたどたどしくなる。

「何で着替えたの？ ラフな格好も結構似合ってたのに」  
そう言いつつ、さっきまでの蘭の格好を思い出す。

髪をヘアクリップで纏め上げ、タンクトップとショートパンツというラフな姿。

活動的な印象を与えるそれは、充分に魅力的なものであった。

「そ、それは……」

にも拘らず今の服装は、胸元にレースのあしらわれた半袖のワンピースと、フリルの付いたニーソックス。

キューティクルの煌くロングヘアは下ろされていた。

さつきまでの服装を活発な少女と例えるなら、こちらは嬢様ファッションとでも言うべきか。

「態々着替えたってことは、もしかしてこの後何処かに出かけるの？」

「えっ！？ えっと、その……そういう訳じゃ……」

「あっ、もしかしてデートとか？」

「違いますっ！！」

「パンツ！ と、テーブルを強く叩き、勢い余って立ち上がる蘭。

「そ、そっか……そりゃ、悪かった」

その必死過ぎる否定に一夏は面食らってしまった。

「……い、いいえ。でも、本当に違っんです……」

少し元気を無くしたように、シユンとする蘭。

『うーん、知り合って三年……やっぱり家族以外の男には心を開けないのかな？』

『……』

『……春斗？』

『……そうなんじゃない？』

『……？』

そして、何処か様子のおかしい春斗に内心で首を傾げつつ、一夏は味噌汁を啜った。

「ま、兄貴としてはデートであってほしいけどな。何せ、こいつがこんな気合入ったオシャレするとか、実に数ヶ月ぶりリリース！？」

弾が言い終えるよりも早く、蘭の手がその顔面に伸びていた。



そんな事は誰も聞いていない。

「大体、IS学園に推薦なんて無いぞ？ それに適性試験だってあるんだろ？」

と、復活した弾が言う。

IS学園には通常の試験の他に、IS起動の実技がある。どれだけ成績が良くても、ISが動かさなければ落ちるのだ。

「ふふ〜ん、これを見なさいよ、お兄」

そう言つて蘭が取り出したのは一通の封筒。弾がそれを明けて中の紙を見る。

「なっ……………！？ 簡易適性検査……………【判定 A】！？」

それは政府がIS操縦者募集の目的のために行っている無料検査。簡易とはいえ、A判定はかなり優秀だ。

「これで問題は解決よ」

「はあ……………何時の間にこんなを受けてやがったんだ……………？」

「という事で、一夏さんにはその……………先輩として、色々ご指導願いたんですけど……………」

おずおずと尋ねる蘭に、一夏はあっさりと答えた。

「ああ、いいぜ。合格したらな」

「バツ、何あつさりとブベツ！？」

「本当ですか！？ 約束ですよ！？ 絶対にですからね！！」

弾が何かを言おうとするも、蘭がその顔を押し退ける。

「お、おう……………約束だ」

その迫力に一夏は気圧されながら頷いた。

「……………っ！！」

蘭は歡喜の余りガッツポーズ。

「お前いい加減に……母さん、何か言っただけでやってくれよ!？」

弾は妹の暴走を止めるべく母に援軍を求めた。

「あら、いいじゃない。一夏くん、蘭の事お願いね？」

「あ、はい」

「『あ、はい』じゃねえ！何も考えずに返事をするな!! 爺ちやんはどうなんだよ!？」

最後の皆と、家長である爺に望みを託す。

「蘭が自分で決めたことだ。それとも何か？ 弾、それに何か文句でもあるってのか……?」

最後の皆は、弾にとっては砂上の楼閣だった。

「……何も無いです」

四面楚歌とでも言うべき状況に、弾は項垂れるしかなかった。

そんなこんなとやりつつも、蘭は一足先に食事を終え、箸を置いてしっかりと手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

そして食器を重ねて運んでいった。

普通の光景なのだが、一夏は千冬という存在のせいでこの行動に感動を覚えてしまう。

蘭はきつと、良いお嫁さんになるだろう。その相手が羨ましいものだ。

そんな事を思ってしまう。もちろん、自分がその相手の筆頭候補であるなどとは欠片さえも思わない。

「なあ一夏。すぐに彼女を作れ」

「なんでだよ?」

「なんでもいいから！ 今年中……いや、今月中に作れ！！ そうすれば全て解決だ！！」

「一体、何が解決するってんだ！？ そもそも俺には、そんな事している余裕はないし、興味もない！！」

日々の授業にIS特訓。寮に帰れば、春斗による予習と復習が待っている。そんな中で更に、恋愛事などどうやって詰め込めというのか。

「お前は枯れた老人か！？ それとも既に解脱でも果たしているのか！？ そんなんだから鈴が苦労すんだよ！」

「……何で、鈴が苦労するんだ？」

「ううん！ それはともかくだ、誰でもいいから、彼女を作れ！」

これはそう、世界のためだ！！」

「俺の恋愛は世界レベルの問題だったのか！？」

唯一の男子IS操縦者となればある意味、世界レベルで問題が起りそうな可能性があるが。

「大体、何時になったらお前は女に興味をもつんだ？ あれか、モテ過ぎて感覚が麻痺してるってかこの野郎！！」

「何でキレてんだよ！？」

「キレてねえよ！！」

「お兄？」

「ひっ……！！？」

弾の背後に掛かった、とてつもなく冷たい声。

錆びついた歯車のように弾が振り返ると、そこには現代の夜叉がい

た。

『余計ナ事ヲスルナ』

声に発せず、しかし弾の生存本能に語りかける戦慄の旋律。それは、一瞬で弾を凍りつかせるに至った。

「じゃあ、私はこれで失礼します。一夏さんは、どうぞごゆっくり」  
蘭は「オホホホ……」などとお嬢様のように笑って、食堂を去っていった。

「……………んでだ？」

「ん？ 復活したか……………？」

「何でお前ばかりモテるだよ！？ 顔か？ その顔なのか？ 今すぐよこせ、そのフェロモンフェイスを！！」

「意味が分からんことを言うな！ さっきも言ったが、俺はモテた事など一度だって無いわっ！！」

「よーしよく分かった！ その幻想を俺がブツ壊してやる！！ 歯あ食い縛れ、モテ男！！」

「全然分かってねえじゃねえか！！」

「ウルセーッ！！ 俺の思いは常に一方通行だ悪いか！！」

「悪いわっ！！」

そんなやり取りはすぐさま、敵の一撃によって鎮圧されるのであった。

寮に帰ってきた一夏は、春斗と入れ替わっていた。

自宅から持ってきたPCをセッティングし、プログラム”真打”の調整をするためだ。

真打は元々、セシリアとの決闘用に作ったプログラムであり、デチューンされた訓練機で専用機を叩けるだけの機動力を生み出すという、とんでもないプログラムであった。

それ以上にとんでもないのは、それを数日と掛からずに組み上げた拳句、一夏に使わせようとした、春斗の思考のトビっぷりである。

「流石にこれを、ほーちゃんに使わせる訳にはいかないからね……」

「気のせいかもしれんが……俺の時は、そんな事考えてなくなかったか？」

「まあ、一夏だったら死なないだろうと思ってたし……」

『おい』

「……ともかく、これを汎用プログラムに書き直さないと……」  
『おい、春斗!?!』

キーを叩いていた春斗が、突然揺らいだ。一夏が思わず叫ぶと、ハツとしてデスクに手を付いた。

「ゴメン、大丈夫……」

『……もしかして、“不安定化”してるのか?』

春斗は意識体 概念的に言えば精神そのもの、もしくは魂と呼称してもいい存在である。

それ故に揺らぎやすく、それがそのまま、存在の不安定さに繋がってしまう。

一夏の体に入ってすぐの頃は、こうして表に出ている時に揺らぎ、崩れそうになった事があった。

「いや、ちよつと疲れが出てるだけ……問題ないよ」

『……本当か?』

「もちろん。ウソなんて吐く訳ないだろう?」

一夏の心配を、春斗は笑って否定した。

『……なら良いけど。無理だけはすんなよ?』

「大丈夫だって。そんな大した作業でもないし……」

『そうじゃねえよ。お前に何かあったら……千冬姉も、俺も、鈴木も……幕だって辛いし、悲しむぞ?』

「……分かってるよ」

そう呟いて、春斗はキーを打ち始める。

分かってる。自分のせいで泣いている人がいる事を。だから自分  
が出来る事をしたい。

名誉も、感謝も要らない。ただ生きている証のような物を残してお  
きたいのだ。

此処に、織斑春斗はいるのだ、此処にいたのだ　と、誰かに伝えたいから。

全てはそう、自分の為だ。自己満足の為に、その口実に筭を使っているだけ。

（本当、救えないよね……）

僅か二時間半後、正式プログラムとして”真打”は仕上がった。

データディスクをPCから抜き取り、春斗は千冬のもとに向かった。

「ほう、こんな物を作っていたのか……」  
千冬はそのデータを見て、若干の呆れ気味な声を出した。

それは現在、打鉄に行われているデチューンをそのままに、操縦者とのリンクを強化するプログラム。

これの実用性を結果として残せれば、第二世代量産機は、現行の性能を更に引き上げられるだろう。

それは、第三世代に移りつつある現状を数年は歯止めさせ、第三世代機に対応させれば、実用化までのプロセスを数年は縮めてしまうかも知れない。

「この実用試験に打鉄を一機。搭乗者には篠ノ之 箒を推薦したいのですが？」

「何故、篠ノ之だ？ 他にも適当な者はいるだろう？」

「彼女の適正はC。そして、剣道の大会で全国制覇するほどの実力を持っています。平均的適性と、個人の身体能力。更には個人的に信用のおける人物ですので、テストには丁度良いと考えます」

「……なるほど。一応、理屈としては筋が通っているな」

「……」

「で、本心は何だ？」

「……彼女に、優勝出来る可能性をあげたいんです」

苦笑して、千冬にその胸中を明かす春斗。その余りにも切ない色に、千冬はすぐ気づいた。

「……取り敢えず、すぐに許可はできん。学園に提出し、審査をする必要があるからな」

「分かりました。では、それはお預けします」

「さて、春斗」

一礼して寮長室を出ようとする春斗を、千冬が呼び止めた。

「何でしょうか？」

「……………いや、何でもない」

「失礼します」

寮長室に一人残された千冬は、データディスクを見ながら不安を覚える。

IS 特にプログラムに関しては、東にさえ比肩するかも知れない才能を持ちながら、目立つ事を嫌い、名誉欲もない。

そんな春斗がこんな物を作った事自体が、不安を感じさせてしまう。勿論、これの製作者の名を出す気はないが、これが成果を発揮すれば否応無く、各国はこの出所を調べるだろう。

万が一にさえバレる事はないだろうが、そんな危険を犯してまで、どうして箒の為にそこまでするのか。

「……………まさか、あいつ？」

ふと思いついた一つの考え。

それは、余りに残酷な結論だった。

箒が昔から、今も一夏に気がある事は知っている。だが一夏はそれに気付いておらず、すれ違っばかり。

そして、もしも春斗が箒の事を

「っ……………」

寮内で噂になっている一つの事柄。それは僅かながら千冬の耳にも届いていた。

その噂の為にこれを作ったというのなら、どれだけ不器用なのだろうか。

データディスクを弄びながら、千冬は考える。

専用機相手に、量産機を使う生徒の優勝は難しい。が、ゼロではない。

ならば、これを提出せずにおけば、ゼロに更に近づけるのではないか。

いくら親友の妹といえど、実の弟の方が大事だ。

(……………何を馬鹿な事を考えている)

それは余りにも愚かな事。

大事と言いつつ、それでは春斗の思いを蔑ろにしているだけだ。

「本当に、誰に似たのやら……………」

そう呟いて、データディスクを鞆へと仕舞った。

週の頭、月曜日。

筭は無事に復調し、春斗は取り敢えず安定を保っている。

鈴がその辺りをとても心配していたが、春斗は大丈夫と笑って返した。

「豪く騒がしいが……何だ？」

「さあ。なにか噂話でもしているようですけど……」

筭、セシリアという珍しい組み合わせは、クラスのざわめきに首を傾げていた。

「おはよーっ」



まず千冬が口を開いた。

「今日から本格的な実戦訓練に入る。訓練機とはいえ、ISを使う以上危険が伴う。なので、各人は気を引き締めるように」

『はい　ッ！』

気合の入ったいい返事が千冬に返される。

「それぞれのISスーツが届くまでは、学校指定の物を着用する事。忘れた者は学園指定の水着を着る。それさえ忘れた者は、下着で良いだろう」

いやいや、それはダメでしょう。と、内心でクラス中から総ツッコミである。

千冬も本気で言っている訳ではない。無いはずだ。きっと。

「では、山田先生。ホームルームを」

尚、千冬は一夏が自宅に帰った時に出してきた、サマースーツに袖を通していた。

それに若干の満足感を覚えつつ、一夏は視線を教壇に戻した。

「はい。ではまず……今日からこのクラスに加わる転校生……しかも二人、を紹介します」

ざわ。とクラスがどよめいた。

只でさえ珍しい転校生。それが二名となれば尚更であり、事前情報さえも知らなかったのだ。この反応も仕方ない事だ。

「じゃあ、入ってきて下さい」

真耶がドア向こうに声をかける。

自動ドアがエア音と共に開き、教室に足を踏み入れたのは  
対照的な二人だった。

例えるならば 陽光と月光。

「フランスから来ました、シャルロット・デュノアです。よろしく  
お願いします」

転校生の一人 背中ほどまである濃いブロンドを、首後ろで纏め  
た少女は、にこやかにその名を名乗った。

「っ……!？」

そして、その視線が一夏に向いたと思うと、シャルロットはかすか  
に微笑んだ。

『春斗……シャルロットってまさか……?』

『いや、万が一そうだとしてもだ。彼女は僕の名前を知らないんだ  
から、何も問題はない。というか、そもそも問題自体が無い』  
そう言いつつも、春斗の内心は動揺しっぱなしであった。

まさか、よりもよって同じクラスになるとは。

フランスが一夏と接触させる為に押し込んだのだろうか? などと、  
国家陰謀説まで思考が膨らんでしまう。

だが名前を知らない以上、自分を探るような事はできないだろうと、  
一時保留する。

そしてもう一人。  
シルバーブロンドの髪を腰ほどまで伸ばした、一見すれば人形のよ  
うな容姿。  
だが特筆すべきはその左目を覆う眼帯。医療用ではない、本格的な  
物だ。

彼女はクラスをまるで下らないものを見るかのように一瞥し、腕を  
組んだまま立っていた。

「ラウラ、自己紹介をしろ」

「はい、教官」  
業を煮やしたのか、千冬が言うとラウラと呼ばれた少女は腕組みを  
解き、背を正した。

「ドイツから来た、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」  
それ以降、何も続かない。クラスが何とも言えない沈黙に包まれる。

「あの……………以上、ですか？」  
「以上だ」

真耶が恐る恐る聞くと、ラウラはそう短く返した。

またアクの強いのが来たなど一夏が思っていると、ラウラと視線が  
重なった。

「貴様が」

『……ッ!』

その瞬間、春斗はラウラの目に激しい激情を感じた。

ラウラが数歩、一夏に向かって踏み出す。

そして。

パン!

乾いた音が響いた。

逆手に振り抜かれたラウラの右手が、一夏を打ち据えた音だ。

「いつてえ……いきなり人の頬を叩くのが、ドイツの礼儀なのか？」  
一夏はヒラヒラと、打たれた左手を振った。

打たれる直前、一夏は頬に左手を差し込んでいたのだ。  
ジンジンと痛む左手を余所に、一夏はラウラを見据える。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなどと……!」  
敵意を剥き出しにした言葉に、一夏も嫌悪を顔にする。  
「生憎と、お前に認められる意味が分からねえ……!」

その言葉に敵愾心を顕にするラウラ。  
睨み合う両者を止めたのは、鶴の一声だった。

「いい加減にしろ、貴様ら」

「申し訳ありません、教官」

ラウラは千冬に敬礼し、元の所に戻った。

呆然とする教室に、チャイムの音が響いた。

シャルロット・デュノアと、ラウラ・ボーデヴィツヒ。

二人がもたらすのは、波乱の一ヶ月。

そしてその中で、春斗と一夏はそれぞれの在り方を見つめ直していく事となる。

第12話 New Days/New Comers (後書き)

ついに登場シャルロット&ラウラ!

シャルロットは男装していません。この話では、彼女は男装する理由がないからです。

そしてラウラは原作通り。それ以上に反発しっております。

第13話 フロンドの探索者(前書き)

気が付けば、PV200,000。ユニーク20,000を突破！  
皆様の応援、とても感謝です。

### 第13話 フロンドの搜索者

転校生ラウラ・ボーデヴィツヒと一夏的一幕で、微妙な空気になった1組だったが、そんな事では授業は遅れない。

「今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。全員、着替えたら第二グラウンドに集合するように。以上だ」

千冬が手をたたき、SHRも終わりを告げる。クラスが微妙な空気から解放されて動き始めた。

「えっと、大丈夫……?」

席を立った一夏の前に、小柄な少女がいた。もう一人の転校生シャルロットだ。

「ああ、別に平気だよ」

そう言つて、ヒラヒラと左手を振つて見せる。

「そっか。えっと……織斑一夏君、だよな? 世界で唯一、ISを使える男子の……」

「ああ、まあ……そんな事になつてるけど」

実際、春斗も(一夏の体とはいえ)使つているので、唯一というのは違う気がするが、そこは否定はしない。

「あのね、不躰な事だとは思つんだけど……君に聞きたいことが」

「あゝ、悪い。俺、時間ないんだ。ゴメンなっ!」

「えっ!? ちょっと!?!」

シャルロットが止める間もなく、一夏は教室から走り去ってしまった。

「……どうして、あんなに急いでるんだらう?」

「それは着替えるのに、アリーナの更衣室まで行くからだよ?」

「そうなの? えっと……」

「相川清香よ。よろしくね、デュノアちゃん」

「宜しく。僕の事はシャルロットで良いよ？ でも、どうして彼はわざわざアリーナまで？」

「何せ唯一の男子でしょ？ だからここには男子更衣室なんて無いし……だから実習の時は、何時も急いで移動しているのよ」

「へえ。何か、大変そうだね……」

席に着いて、早速着替えの用意をするシャルロット。

「ところで、シャルロットって何で、自分のことを”僕”っていうの？」

「えっ、何かおかしいかな……？」

「別におかしくないけど……ちよっと気になっただけ。あ、気に触っちゃった？」

「ううん、そんな事ないよ。僕、日本にメールフレンドがいて、その人が色んな事を教えてくれてるんだけど……」。

その人が自分の事を”僕”って呼んでて、それで……その……真似してるんだ」

自分の言葉に羞恥を覚えたのか、シャルロットは顔を赤らめながら、徐々に声のトーンを落とすしていく。

その態度に、噂大好きな乙女達は即座に何かを感じ取った。

「もしかして、メールフレンドって男の子なの……？」

「じゃあ実は、ただの友達じゃないって事……？」

「えーっ、それって超遠距離恋愛ってヤツ……？」

「え、遠距離恋あつ……！？ ち、違うよ！ HARUはそんなんじゃない……！」

「へえ、相手の名前はハルっていうんだ？」

「いや、それはただのHNハンドルネームなんだって！ 本名も知らないんだからっ……！」

「……HNハンドルネームだけ……？ なーんだ、本当にメル友なだけか？」

「そ、そうだよもう……………ふう」  
なんとか納得させられたようで、シャルロットを襲った乙女包囲網は解除された。

(いきなりこれって……………HARUの、ハルトの言った通り、皆は恋の話とか好きなんだな……………気付かれないようにしないと)

『シャルロットは、恋愛の話とかはするの?』

『ううん。興味はあるけど、ここには同じ年の子はいないから』

『日本の女子学生は、人の恋愛話にとても興味をもつんだ。凄いよ。あつと言つ間に話が広がっていくんだ』

『それはすごいね。そんなに人の恋の話って面白いのかな?』

『どうだろうね? シャルロットも恋をしたら分かるんじゃないかな?』

『それって、私が恋をしたことが無いみたいに聞こえるよ?』

『お、これは大胆な発言だね。どんな人に恋をしたのか、僕は興味があるな』

『HARUって時々、凄くイジワルだよ。私のこと苛めて楽しんでない?』

『いいや、そんな事はないよ。ただ反応が可愛いとついつい、苛めてみたくなるだけだよ』

「あ、あつう……………」

ある日のチャットの事を、余計な所まで思い出してしまい、真っ赤

になつてしまふ。

こんな顔を見られたら、また色々聞かれてしまふのは明白。

シャルロットはさつさと着替えようと、制服に手を掛けた。

「しかし、何だつたんだあいつ……？」

アリーナの更衣室で着替えつつ、一夏はつい先程の出来事を振り返っていた。

『私は認めない。貴様があの人弟であるなど……！』

『あの人』って、千冬姉さんの事だよ……ドイツ、姉さん……か』

「て事は、あれが関係してるのか……？」

『第二回 モンドグロツソ』……まだ、まわりついてくるとは

ね……」  
「……………」

IS世界大会モンドグロツソ。その第二回大会の決勝戦。

第一回大会の覇者 織斑千冬は、この第二回大会でも優勝候補筆頭

いや、その実力故に既に優勝したも同然であった。

だが当日、千冬は決勝を棄権。連覇は成されず、そして彼女は現役も退いた。

優勝は確実にされながら何故、千冬がそんな行動をとったのか、知る者は少ない。

「……………今更どころ言っても始まらない、か。遅刻して叩かれないように急ぐか」

一夏は思考を区切り、ロッカーを閉めた。

そして現在、グラウンド上空では甲龍とブルー・ティアーズが踊っていた。  
いや、正確には踊らされていた。第三者によって。

「くっ……！」  
「この、何で……!?!」

二人は思うように動けない苛立ちに顔を歪めている。

相手は山田真耶。第二世代量産機【ラファール・リヴァイブ】を駆り、二対一という数的不利を容易く覆し、戦局を完全に支配していた。

とても登場時に一夏に向かって墜落した上、そのまま一夏と転がり、ラッキースケベなイベントを起こさせた人物とは思えない。

「では、デュノア。山田先生が使っているISについて、説明してみる」

戦闘を見つつ、千冬はシャルロットに指示した。

「はい。山田先生が使っているISはデュノア社製ラファール・リヴァイブ。第二世代最後期の機体ですが、その性能は初期第三世代機にも劣りません。」

安定した性能と高い汎用性、後付装備イコライゼの豊富さが特徴です。R リヴァイブは世界七ヶ国でライセンス生産、十二ヶ国で正式採用されており、世界シェア第三位につけています。

特筆すべきは操作性の簡易化によって操縦者を選ばない事と、多様マルチな役割切替を両立させている事です」

シャルロットの説明が続く中、一夏はある事が気になった。

「あれ？ デュノア社って、もしかして……？」

「……彼女の実家だよ」

「へえ。なんか雰囲気がかう、上品だなんて思ったけど……本当にお嬢様だったのか」

「……家の事は、彼女には言わないようにね」

「何でだ？」

「色々と、事情があるんだよ」

「……分かった」

軽々しく言えない事情なのだと察し、一夏はそれ以上何も聞かなかつた。

「しつつかし、鈴とセシリア二人がかりで全然敵わないなんて……凄かったんだな、あの人」

「さすがは元代表候補生……戦い方に無駄がないね。それに加えて二人はてんでバラバラ……あれじゃ、山田先生の思うがままだよ」

ガッシャーンッ！！

「あ、ぶつかった」

鈴とセシリアが回避行動をとった瞬間、接触。真耶はその一瞬を逃さず、今まで使用していたアサルトライフルを切り替え、グレネードランチャーを発射。

青空に、爆発の華が咲いた。

そしてそこから、纏れ合うようにして二人が落ちてきた。

「ちょっと、何で簡単に回避行動読まれてるのよっ!!」

「そっちこそ、バカスカと衝撃砲を乱射して!! 邪魔ですわよ!!」

「何よ!そっちだってすぐビット飛ばして……邪魔なのよ!!」

『無能な味方は敵よりも恐ろしい。あれじゃむしろ、一対一の方が上手く戦えたんじゃないかな?』

「……うん」

罵り合う二人を見ながら、春斗の言葉に深く考えさせられる一夏であった。

「さて、教員の實力を分かってもらった所で、早速実習に入る。専用機持ちをリーダーにして、出席番号順に織斑、オルコット、デュノア、鳳、ボーデヴィツヒに着け」  
千冬の指示に従い、生徒たちが並んでいく。

「いよっし、織斑君と一緒にだ!!」

「うあ……あと一番ズレていれぱっ!」

「セシリアさんか……うっん、さっきのあれはな……」

「鳳さんって……なんか微妙」

などと各人の反応は様々。特にセシリアと鈴はその株を落としてしまったようだ。

そして、もう一つの班は。

「……………」

ラウラの冷徹な雰囲気と、その拒絶に満ちた態度で誰もが声を出すことさえ出来ないような状況にあった。

『あそこはある意味、運が無かったとした言いようがないね』

「……………さ、始めるか」

あそこには関わらない方が良い。下手に見ていて目が合ったらまた打たれるかも知れない。

「じゃあ、最初は……………」

「はい！一番、相川清香！ソフトボール部所属！趣味はスポーツ観戦とジヨギングだよ！」



『一夏。打鉄が立ったままになってる』

「あつ……しまった」

専用機はそのまま待機状態にできるが、練習機など、そのままの状態にある機体から降りるには屈まないといけない。

「……これでは、私が乗れんのだが」

「うん？ もしかして次、箒か……？」

「う、うむ……」

「……」

「……」

『……』

箒は先日の出来事のせいで、一夏は内心の春斗の妙な感覚のせいで、空気が何処と無く気不味い。

「ああ、これは最初に良くある失敗ですね。織斑君、白式を出して、篠ノ之さんを運んであげて下さい」

「『な　つ！？』」

「ええーっ！？」

真耶の発言に箒と春斗が驚きと困惑の、そして他の女子たちが悲鳴のような声を上げた。

「　じゃあ、行くぞ？」

「う、うむ……」

白式を出した一夏は箒の体を抱え上げ、機体を浮き上がらせた。

(これが……俗に言う”お姫様抱っこ”というものか……)  
箒は初めての事にドキドキとしながら、とても近い場所にある一夏の顔に、視線がに釘付けになってしまう。

(春斗との事があつたというのに……私は、こんなにも節操のない女だったのか……?)

それでも、一夏に抱かれる自分がとても幸せで、この時間をもつと望んでいる自分がある。

「き、箒？」

「な、何だ、いきなりっ!？」

「いや、何度も呼んでるって。ほら、打鉄に移れよ」

「え……あ、ああ……そうだな」

気付けば、周りの女子　特にセシリアと鈴からの視線が、深々と突き刺さっている。

それを受けて、箒はそうだったと思い出す。

一夏の周りには、強力なライバルが多い。特に危険なのはセシリアと鈴。

二人は専用機持ちの上、鈴にいたっては何故か一夏と親しいのだ。幼馴染だからといえはそうかも知れないが、それにしても親し過ぎる気が箒にはしていた。

『古人曰く。男を捕らえるならば、その腹を押さえよ！　織斑一夏をゲットするには、家庭的な所を強く押し出すのよ!』

今日は家の事情で欠席している織羽の言葉が、脳内でリフレインした。  
そんな俗物的な事を言った古人が誰なのかは気になるが、箒はそれに乗せられ、ある物を用意していた。

(だが、本当にそれでいいのか……?)

どこかの空の下にいる春斗の事を考えてしまうと、迷ってしまう。

『ほーちゃんも……もっと我俣でいいと思うよ? 自分に素直って、  
そついう事だもの』

「……………ッ!？」

もっと我俣に。自分に素直にという春斗の言葉が、箒の背中をトン、と押した。

「……………あのな、一夏」

「何だ？」

打鉄に手足を通しながら、箒は乾いた唇を湿らせるように舐め、言葉が続けた。

「その、今日の昼……予定はあるか? 無いなら、久しぶりに……  
昼食を共にしないか？」

箒は不安と期待の入り交じったさすがのような視線を、一夏に向けた。

『……………』

それは当然、春斗にも見えているが、それは箒には分からない事だ。

「昼か……別に良いぜ?」



「……………どういう事だ？」

「いや、せっかくなら皆で食った方が美味いだろ？」

「ええ。食事は大勢で楽しむのが良いものですわ」

「やっぱり、賑やかなのは良いよねー？」

「貴様らあ……………っ！」

ワナワナと震える筈。

そう、屋上に一夏と筈はいた。だが、セシリアと鈴も一夏と共にやって来たのだ。

「えっと、僕も一緒にいいのかな……………？」

更に一夏は、途中でシャルロットも捕まえ、半ば強引にここまで連れてきてしまったのだ。

『なんで、シャルロットまで……………？』

「デュノアは転校したばかりで、右も左も分かんないだろ？ せっかくだから知り合っただから交流を深めようぜ？」

二人の問いに、一夏が答える。

「 ありがとう、織斑君。気を使ってくれて」

「一夏でいいぞ。その代わりに、俺もシャルロットって呼ばせてもらうからさ」

「うん。分かったよ…………… 一夏」

『…………… ドジ踏んで、僕の事をバラさないですよ？』

嬉しそうに笑うシャルロットの姿に、春斗はそれ以上、何も言わなかった。

そんな一夏達を余所に、筈の間では火花が散っていた。

彼女たちはそれぞれ、弁当箱にタッパーにバスケットを持っていた。

IS学園は全寮制で、各部屋にはIH式のコンロなどがあるもの、  
そこで出来る事は限られている。  
なので本格的に調理を行う生徒のため、早朝などの時間に限ってだ  
が、厨房が解放されている。

( )(まさか、被るとは……………)( )

似通った思考回路というものが、こんなにも苦々しいとは知らな  
かった。

これでは、せつかくのアピールが影を薄くしてしまう。

だが箒にしてみれば、二人に遅れを取らなかつたと言え、幸運とも  
とれた。

(……………本当に、僕は居て良いのかな?)  
シャルロットはもう一度だけ、疑問を持った。

「鈴のそれって酢豚か……………」

「あたしの作った酢豚がまた食べたいって言ってたでしょ？ 感謝  
しなさいよ」

「じゃあ一つ、頂いてみるか……………どれ」

一夏はタッパーから一つ肉を取り、口に入れた。

「うん。さすがに美味いな……………」

『かつての殺人料理を知ってる身としては、この進歩は今でも驚き  
だね……………』

『……春斗、後でクロスからね』  
『聞こえてた！？』  
とても冷たい声が、春斗に突き刺さった。

「それで、セシリアのは……サンドイッチか？」

セシリアが料理をするとは意外な気もするが、サンドイッチは幾ら何でも失敗する要素が殆ど無い。

「はい。たまたま、偶然、因果律の巡り合わせとでもいいでしょうか……今日は早くに目が醒めてしまつて。それで気まぐれ、気の向くまま、気の迷いで作ってみましたの」

「……気の迷いは違わないか？」

何か、不穏な気配を感じてしまう。

「さあ、そんな事は気にせず……どうぞお一つ」

「それじゃあ……これにしよう」  
パンに挟まれた黄色い具材。サンドイッチの王道の一つ、玉子サンドを取る。

ゆで卵をつぶし、マヨネーズと和えてパンで挟むというシンプルな一品。

これならば、誰でも作れるはずだ。

一夏は一口、それを齧った。

「『……ッ！?』」  
その瞬間、口中に広がる凄まじいまでの甘さ。ジャリジャリという歯ごたえと、鼻腔を襲撃するバナラエッセンスの香り。

一夏の本能が、これ以上の謎の物体の摂取を拒絶する。

「さあ。まだ沢山ありますから、遠慮なさらずに！」

しかしセシリアはずい、とバスケットを差し出してきた。

『一夏、ここはちゃんと言うべきだ……これは僕らの存在に関わる

……！」

「あ、えっと………。そ、その前に次にいこうかな!？」

一夏は最後の一人に逃げた。問題の先送りともいう。

「……私のは、これだ」

『わあ、すごい……!』

「ああ………これはびつくりだ」

箸の渡した弁当箱の中身は、やはりオーソドックスなお弁当。だが、一つ一つが手の込んだ物のようだ。

「でも悪いな。俺の分まで作ってくれてるとは……いや、もつべきものは幼馴染か」

「勘違いするな。たまたま、作り過ぎてしまっただけだ」

「分かってるよ。それでも嬉しいもんは嬉しいってことだよ。じゃ、早速……」

と、一夏は弁当箱から唐揚げをチョイスして、口に放り込む。

「……ど、どうだ？」

「……うん、美味しい！これは、下味に醤油と生姜……あと、何だ……？」

『……多分、おろしたニンニクと胡椒だね』

味覚共有をしている春斗から、答えが追加される。

「ああ、ニンニクと胡椒ね」

「後は隠し味に、大根おろしを適量だ。しかし、良く分かったな」「え？ いやあ、あっはっは……」

嬉しそうに驚く箸に、一夏は引きつった笑いを返すしかなかった。

「あれ、箸のやつには唐揚げは入ってないのか？」

「うっ!？ いや、私はその………ダイエット中なのだ」

「そんな事言わずに、ほら……」



延焼を防ごうと、箒がシャルロットに尋ねる。

「え？ HARUが教えてくれたんだけど……何か間違ってた？」

「いや、間違っていないが……」

「全然、間違ってるっ！！」

思わず肯定しそうになった箒に、セシリアたちが言葉の冷水を掛けて、強制冷却する。

「お前ら、何でそこまでムキになるんだよ……？」

「一夏は黙ってなさい！」

「一夏さんは黙っていてください！」

「ええっ！？」

「じゃあ……皆のおかずを一つずつ交換する、ていうのはどうかな？ 日本の学校だと、そういうのをするんですよ？」

流石にこれ以上の被害拡大はまずいと判断したのか、シャルロットはひとつの提案をした。

「……まあ、それでも良いけどね」

「……本来ならば、そういったテーブルマナーにそぐわない行為は好ましくありませんが……」郷に入れば郷に従え”と言いますし……

……

どうやら上手く鎮火できたようだ。

「て事で一夏っ！ ほら、あたしの作った酢豚、食べなさいっ！！」

「一夏さん！私のサンドイッチを、さあっ！！」

訂正。鎮火なんて出来なかった。

「うおおお……っ！？」

追い詰められる一夏。迫り来る酢豚とサンドイッチ。

この昼休みがどんな終わり方をしたのか、それは想像に任せるところとする。

その日の夜。シャルロットは寮のロビーにいた。

なにせ同室になったのがラウラであり、なんとも部屋に居づらいのだ。

(結局、一夏には何も聞けなかったな……)

自販機で買った紅茶を飲みつつ、ふと考える。

織斑という姓は、それなりに珍しい。

その上、同じ姓を持つ千冬は世界一の称号『ブリュンヒルデ』を持ち、一夏は世界唯一の男性IS操縦者。

ならば、単独で第三世代ISの雛形の設計を行ってしまう天才が、無関係とは思えない。

HARU「ハルトという確証はない。あくまでも自分のこれまでの経緯と、ヒューイック博士の言葉。そして博士宛の手紙からの推理だ。

HARU。

顔も知らない、チャットとメールだけの関係であった筈の彼が、何時しかシャルロットの中でとても大きな存在になっていた。

それを自覚したのは、彼女がデュノアの家から解放された時だ。正式にフランス代表候補生になり、ヒューイック博士やその助手のフィリー、その他多くの人々と知り合い、出会い、本当に自分がいて良い場所を得た時、シャルロットは事実を知った。

彼女の新しい居場所。その為に一人の人物が、自身の名誉を引き替えにしたのだという事を。

フランス第三世代IS【ラファール・ドラグーン】。そして第三世代武装【リンドブルム】。

それはフランスが、デュノア社がゼロから生み出したものではなかった。

(どうしても、私は会わないといけないんだ……彼に)

会って、聞かなければならない。  
会って、謝らなければならない。

会って、そして。

「どう、したらいいんだろう……」  
謝って済むことか？ 聞いて何が変わる？  
もう、すでに手遅れだというのに。

フィリーには、絶対に見つけると約束した。  
ここに来るまでは、ただ会いたくて仕方ないという思いが強かった。

だが、今は不安が強い。  
いざ出会えるかも知れないとなれば、怖じ気づいてしまふ。

そういう意味では、最初に聞きそびれたのは悪手だった。

「ん……シャルロットか？」

「あ、篠ノ之さん……」

廊下の向こうからやって来たのは箒だった。

来た方向と、全身がほんのりと桜色に染まっていることから、大浴場に行っていたようだ。

「随分と難しい顔をしているが……どうしたんだ？」

「そ、そんな事ないと思うけど……！？」

指摘されて慌てて否定するも、その態度にありありと事実が見えてしまう。

「まあ、転校というのは色々と気疲れも多いものだしな……私にもよく分かる」

「えっ、あ、うん……そうなんだ……ハハハ……」

そんな態度を、箒はどうやら勘違いしたらしい。

内心で安堵しつつ、シャルロットはある事を思い出した。

「そういうえば、篠ノ之さんって一夏と仲が良いよね？　もしかして結構長い付き合いなの？」

「うん？　まあ……そう、幼馴染だからな」

「幼馴染……？」

その言葉に、シャルロットは具に反応した。

それが本当ならば、彼女は知っているかもしれない。

「ねえ、篠ノ之さん……………」

「何だ？」

緊張と、興奮と、不安が全身を支配しようとするのを抑えながら、シャルロットは勇気を出して言葉を発した。

「  
織斑 ハルトっていう人を、知ってる？」

### 第13話 フロンドの搜索者（後書き）

今回の話を書く際、ふと脳内相性メーカーをやってみましたw

春斗とヒロイン達の相性は………興味が湧いた方はぜひ、ご自分の目で結果を御覧下さい。

特に箒と鈴、シャルロットがびっくりな結果に…w

第14話　ブラック・インパクトノダンシング・シャドウ（前書き）

アニメではデレが入ったあの方の登場。

あれを見ながらこの話のチエックをしていると、何か感慨深いものがありましたww

主人公、今回は影が薄いです。

第14話 ブラック・インパクトノダンシング・シャドウ

シャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィツヒという、二人の転校生を迎えた数日後。

「はあ……」

篠ノ之箒は屋上で、深々と溜息を吐いていた。

その理由は二つ。

一つ目は、シャルロットと春斗の関係だ。

「ねえ、篠ノ之さん？ 織斑ハルトっていう人を、知ってる？」

「は、春斗だと……！？」

「……知ってるんだね。良かったら、どんな人が……教えてくれない？」

「いや、私は……！？」

「どんな事でも良いの。好きな物とか、趣味とか、人柄とか……うん、それよりも聞きたいのは……」

「……………」

『 彼と、一夏の間を覚えて欲しいんだ』

「どうして、あんな事を……？」

あの時のシャルロットはおかしかった。

冷静さを保とうとしているようだったが、感情の波が端々から溢れ、鬼気迫る必死さを感じた。

フランス代表候補生と、春斗との繋がり。

言葉から察するには実際に会った事はなく、しかし他人という訳ではないようだ。

あの場は知らないと答えたが、恐らくは一欠片も意味をなしていないだろう。

一応、一夏にこの事を話したが、どうしても二人の間の線が繋がらない。

「っ……………」

何故、こんなにも気持ち悪いのだろうか。

いや、理由なら分かっている。

シャルロットの、あの必死な瞳のせいだ。

あれはまるで。

と、ここで筆は思考を切った。

これは自分には関係ない事なのだから。

春斗と自分はもう、ただの幼馴染で友人。自分自身が、そう決めたのだ。

そして、もう一つは今、学園中に流れている噂だ。

【月末に行われる学年別トーナメントで優勝すると、織斑一夏と付き合える】

という、どこまでも巫山戯た噂であるが、この事を織羽から聞いた

時には愕然とした。

「そもそも、付き合えるのは私なのに……何故、こうなってしまった……!?!」

青空に向かって、やり切れなさを吐き出す。

「そりゃ、あんたが部屋に入らなかった上、でかい声で宣言かましたからでしょう?」

「ッ……!?!」

いきなり背後から掛けられた声に驚いて箒が振り返ると、そこには織羽が呆れた顔で立っていた。

「お、織羽……!?!」

「ったく、あれだけ二人きりの時に言えって言ったのに……」

「だ、だがそれはその……無理だろう!?!」

「一ヶ月も同棲しておいて?」

「どっ、同棲ではなく同居だ!!」

「辞書的には一緒の意味だけどね。で、どうするのよ?」

「どうするもこうするも……そもそも、一夏は約束の事を勘違いしているし……」

そう。一夏は【付き合う】というのを、【何処かに】と勘違いしているのだ。

だが、言い換えれば【優勝すれば、一夏とデートできる】と言えなくもない。

やはり優勝を目指す以外に道はない。

「……………」

だが、それは約束をした時よりも難しい状況になっている。

なにせ、転校生二人も専用機持ちなのだ。トーナメントでぶつかる可能性はずっと大きくなっている。

「だが、それでも優勝をするんだ……!」

そう拳と決意を固めた時、アナウンスが響いた。

『1年1組、篠ノ之箒さん。織斑先生がお呼びです。至急、IS保管庫まで来て下さい。繰り返します……』

「呼び出し……？ すまんが行ってくる」  
「はいはい、行ってらっしゃい」

『うん……』

織斑春斗は、絶賛悩み中だった。

原因は当然、シャルロット・デュノアだ。

箒に彼女が自分を探していると聞いた時には、驚いて素っ頓狂な声

を上げてしまった。

だが何故、彼女は自分を探しているのかが分からない。  
彼女に一度も本名を明かしたことはない。だから、春斗を知らない  
筈なのだ。

そもそも、”HARU”と”春斗”の関係を知っているのかが怪しい。

二つを別々としているなら、彼女が自分を探す理由は想像できる。

デュノア社がフランス政府に、自分の事が知られた可能性だ。

『……………』

だが、これも微妙な気がする。

デュアン・ヒューイック博士しか繋がる人物はいないが、しかし彼にそんな事をする意味が無い。

彼はフランスの英雄なのだ。彼は名前にこだわる人間ではないし、約束を違える人間でもない。

それに、スパイ活動にしてはシャルロットの行動は大雑把すぎる。  
関係者に直接、搜索対象のことを聞くなど、自分を怪しんでくたさいとアピールしているようなものだ。

なので、この線は殆ど無いと言える。

ならば、”HARU”と”春斗”を同一として考えているのか。

この場合も、問題は何処でそれが繋がるかだが、やはりデュアン博士以外にいない。

しかし博士には、彼女には自分の事を言わないようにと頼んであるし、そもそも彼はHARUの事を知らない。  
という事は、この線も無いだろう。

(だが、彼女が何らかの目的で僕を探しているのは事実。どちらにしろ、情報不足か……)

一夏には、彼女とは今まで通りに接してもらおうよう頼んである。そう言った時は渋っていたが、いきなり態度を変えたら怪しまれるし、彼女の真意を知るにもそうするべきだと言って、納得してもらった。

『……だからって、こつも普通に接するものかね?』

「……で、ここの式が駆動率の値に繋がるんだ。分かった?」

「おう。シャルロットは教えるのが上手いな」

「そんな事ないよ。一夏も覚えが早いと思うよ?」

「まあ、俺は勤勉家だからな」

『………勤勉家は資料を電話帳と間違えて、捨てそうにはならないと思うけど?』

『うっせー』

一夏は本当に、何の間違いもなく、シャルロットと接していた。今も、先程までの授業の復習をしているところである。

演技ではない辺り、一夏の恐ろしさというべきか。

(しかし……今更ながら思うけど、シャルロットって普通に可愛い子だったんだな……)

柔らかに微笑むシャルロットを見て、素直にそう思う。

この笑顔を見れば、自分がやったことが間違いではなかったと、胸を張って言える。

だからといって、このまま彼女を放置する事は出来ないが。

そしてもう一人、春斗が気になるのはラウラ・ボーデヴィツヒだ。

最初の接触以降、彼女は何のアクションも起こさず、沈黙を守っていた。

それが、どうにも不気味で仕方が無い。

(今は気を付けるくらいしか無い、か……)

それからしばらく二人に注意をしていたが、結局は何も起こらないまま週末を迎えた。

土曜日のIIS学園。

理論授業は昼まで。午後は自由時間で、アリーナが全面解放されている。

大会まで一ヶ月を切った今、アリーナには練習にきている生徒が多い。

白式を展開させた一夏もまた、その一人である。

「だからこう、ズバツとやって、そのままグアッ！ ガキンッ！

という感じでだな」

「防御の時には、右半身を斜め上前方に5度に傾け、回避の時には後方へ20度、反転するんです」

「ったく、こういうのは感覚よ？ 何で分かんないのよ!？」

「わかるかつ!?!」

上から箒、セシリア、鈴とてんでバラバラな説明に、一夏は思わず叫んだ。

「何で分からん!?!」

「ちゃんと聞きなさいよ!?!」

「もう一度、説明して差し上げますわ! いいですか」

『船頭多くして船山にのぼる』という言葉は、実はこの為にあつたのではないかとさえ思える。

擬音、感覚、理論。

全てを取り入れるなら、攻撃はズバツ、グアツ、ガキンツ。で、防御と回避は右半身を斜め上前方に5度に、回避の時には後方へ20度反転し、そして全体は感覚で何となく。

全くもって意味が分からない。

『春斗………助けてくれえ………』

一夏は白式の中にいる最高のコーチに助けを求めた。

『生憎と、今は白式のデータを整理中だから………後でね?』

『俺はかまって欲しい子供かよ!?!』

『っ………!?! 違うの………!?!』

『何でそんな驚愕すんだよ!?!』

そんな内心のやり取りの最中も、自称コーチたちの指導は続く。

「はあ………」

この面倒くさい状況に、溜息しか出てこない。

「一夏？」

「ん？」

掛けられた声に振り返ると、そこにはISを起動させたシャルロットがいた。

白の胸部、肩部装甲と全身をオレンジに配色された  
ラファール・リヴァイヴ。

通常と違い、シールドが左腕部にのみであり、背部に大型ウィング  
一对、リアスカートに小型スラスタースター翼。

大きく機動力を取ったカスタムがされているようだ。

「良かったら付き合ってくれませんか？ 噂の白式と戦ってみたいんだ」

「ああ、良いぜ。という事だから、また後でな」

一夏はこれ幸いと、シャルロットの誘いを受けた。その結果、三人に視線がとつても恐ろしい事になっているとも気付かないで。

「ところでそれラファール・リヴァイヴ……だよな？」

「うん。R - リヴァイヴ・カスタム？……R - リヴァイヴのカスタ

△機なんだ」

「あれ？ フランスって第三世代IS、作ってなかったっけ？」

「ああ、あれはまだ……調整が終わってないから。早くても3ヶ月後か、遅いと半年先かな……？ それまでは、これが僕の専用機だよ」

「ふうん……ま、いいか。それじゃ、早速始めようぜー！」

そうして行われた模擬戦闘は、一夏の完全敗北で終わった。

『さて、いつもの反省会のお時間です』

『……宜しく願います』

ピットに着き、春斗が再生させる映像を見ながら、問題点を洗い出していく。

モニターには、一夏の攻撃をヒラリヒラリと躲すシャルロット。その隙を突いて、銃撃を的確に打ち込んでいく姿が映っている。

一夏は強引に斬り込もうとするが、銃撃がそれを押しとどめ、シールドを削り落としていく。

そしてそのまま、試合終了。  
それを数度繰り返し見ながら、春斗と共に何処に問題があるかを話し合う。

シャルロットも、模擬戦について気付いた事があるといったが、ひとまずは自分でと答え、待ってもらっている。

『彼女の武装は実弾中心。威力はエネルギー系よりも低いけど、その代わりにリヴァイヴの特徴を強く出しているね』

『しかも動き方が上手いんだよ。こう、こっちが動くとすぐに回避して撃たれてるんだ』

『それは単純に、一夏が射撃武器の特性を理解していないところに問題があると思うよ？』

『そうかなあ？ 一応、勉強しているつもりなんだけど……』

『まず、最初に空中に上がった時、マシンガンで弾幕を張られて、スピードに乗れなかったでしょ？』

『ああ、そうだな……ん？ その後、違う武器を撃たれたな』

『アサルトライフルだね。威力はマシンガンより上、その代わりに速射力は低い。マシンガンで距離を取り、ライフルで射撃……でも、ちよっと切り替えが早過ぎるんだよね……』

『早過ぎる……？』

『武装交換に殆どタイムラグがないんだ。これはもしかして……拡張領域を増やしてるのか？』

『そんな事できるのか？』

『出来なくはないよ。ちよっと、裏技的なやり方だけだね……』

「……………よし。お待たせ、シャルロット」

「じゃあ、答え合わせをしてみよっか？」  
シャルロットは早速、自分の感じた所を一夏に話した。

「……やっぱり、射撃武器の特性かあ。知識だけじゃどうにもならないんだな……」

「知っているのと理解しているのじゃ、雲泥の差だからね。特に一夏は接近戦オンリーの機体だし、しっかり特性を把握しないと、簡単に動きが読めちゃうんだ。

さつきも瞬間加速の軌道予測されて、潰されたでしょ？」

「うーむ……難しいもんだ」

やはりそうだったのかと、一夏は腕を組んで首を捻る。

「でも、自分でここまで気付けるなんて、一夏は凄いね」

「いや、まあ……あはは……」

まるでカンニングして、罪悪感にかられた様な気分であった。

「白式イコライザって、後付武装フュゼットが無いんだよね？」

「どうやら初期武装を使うのに、領域を全部割り当ててるらしい。

おかげで第一移行ファーストシフトから単一仕様能力ワンオフ・アビリティが使えるんだけどな……」

「普通なら二次移行セカンドシフトしてから発現するものなんだけど……それだつて、発現しない方が多いんだ。

そつえば、一夏の単一仕様ワンオフは【零落白夜】だよね？」

「ああ。豪く出鱈目な能力だけだな。なんせ、シールドを含めた全エネルギーを攻撃に使うんだから……」

「それって、織斑先生の使っていたISと同じ能力だよね……姉弟

だからって、同じ技が使えるものじゃないと思うんだけど……?」「シャルロットは少し考える素振りを見せる。が、答えが出る訳もない。

彼女はISに詳しいが、しかし研究者ではないのだから。

本来、ワンオフ・アビリティ単一仕様能力はISと操縦者の相性が最高になった時に発現するとされている。

そして、その能力は単一の名の通り、同じものは無いとされている。

しかし、一夏と白式は千冬のIS暮桜と同じ能力を発現させていた。

(そんな事言ったら、裏白式なんてどうなんだろうな……?)

同一のISで、二人の操縦者を区別して能力が入れ替わり、その上、ワンオフ・アビリティ単一仕様能力も変わる。

こうして思い返すと、「ありえない」「とんでもない」「今までに無い」のオンパレードである。

自分は今もうパンダどころか、某秘密基地に連れて行かれたグレイ並に珍しいのではないかと思える。

『一夏?』

『……?』

『連れ去られる時は、一人で連れて行かれてね?』

『色々、シヤレになってないぞ!?!』

単一仕様能力の話はひとまず終わりにして、グラウンドに降りた一夏の前に射撃用のターゲットがあった。

「とりあえず、実際に撃ってみよう。これを使って？」

と言って、シャルロットが差し出したのはアサルトライフル 《ヴェント》。

「でも他人の武装って、ロックされてて使えないんじゃないか？」

「普通はね。でも、所有者が許可を出せば使えるようになるんだ。

これには一夏の許可を出してあるから」

それならばと、一夏は早速銃を受け取る。

「……結構、重いな。つと……こんな感じか？」

「もうちよつと脇を締めて……左手はこのぐらいに」

「っ……!？」

一夏の構えを矯正しながら、気が付けばシャルロットは一夏に密着していた。

どうやら、シャルロットは一つの事に意識が完全に傾くと、他が疎かになるらしい。

邪魔になる装甲は外されており、シャルロットの柔らかな感触が背中に嫌という程伝わってくる。

『いちかー、しゅーちゅー』

『わ、分かつてるよ!』

春斗の平たい声援を受けて、一夏が構えるのに意識を傾ける。

「火薬銃は瞬間的に反動が来るけど、ISがすぐに相殺するから心配はないから」

シャルロットの腕がピツタリと、一夏のそれに重ねられる。

「っ……………!」

「どう、ハイパーセンサーのリンクは出来てる?」

「……………いや、白式にはセンサーリンクが無いんだ」

「えっ? 普通はどんな機体にも付いてる筈なのに……………?」

「どうも、欠陥機らしいからな」

「文字通り、100%近接戦仕様なんだね……………じゃあ、目測でやろう。力を抜いて……………」

「いや、シャルロットは更に体を合わせてきた。」

「……………ッ!?」「……………」

その瞬間、箒達三人が声にならない声を上げた。

「じゃ、よく狙って?」

「よし……………行くぞ!」

ターゲットスコープから標的を覗き込み、一夏は引き金を引いた。

「……………うおッ!?!」

ドンッ!… という強い衝撃が走り、弾丸が左上を撃ち抜いた。

すぐにシャルロットが体を抑え、次に標的に向かって引き金を引く。

「……43点か」

春斗の時はターゲットの数は10。今は7である。やはり射撃力では、春斗に大きく軍配が上がった。

尤も、点数を競う為にやったのでないので、それはそれとする。

「で、どうだった？」

「何て言うか……速い！ て、感じたな。後、衝撃も凄かった。ちよつと、心臓がドキドキしてるよ……」

「一夏の瞬間加速イケンニシヨクンブーストを含めた加速は確かに速いよ。でも、弾丸は面積が小さい分もつと速いんだ。だから、軌道予測さえできていれば簡単に当てられる」

「そして、弾丸は外れても牽制になる。だから、間合いを離されるし、簡単に当たっちゃうんだよねあゝ。何とかしようとは思ってるんだけど……」

射撃戦のできるセシリアや鈴との訓練の際、いつも一夏は押され気味である。

射撃型の傾向と対策。それは今後を考えるに当たって、どうしても外せない問題だ。

更に、春斗が問題点をもう一つ指摘する。

「特攻をする時、どうしても心理的にブレーキを踏んじちゃうからね。そこも当たる原因だと思うよ？」

「心理的ブレーキ？」

「一夏は模擬戦と実際の試合とじゃ、集中の度合いが雲泥の差だからね」

『そうかな……!?』

『少なくとも、女子の胸やらお尻やら太ももやらに、目は行ってないよ?』

「ブフツ                    ツ!!」

「うわっ!?    いきなりどうしたの……!?」

「……すまん。何でもない」

いきなり吹き出した一夏に、シャルロットが驚く。

「                    シャルロットさん、少し宜しいかしら?」

「……どうかしたの?」

声を掛けられてシャルロットが振り返ると、そこには仁王立ちしたセシリアがいた。

その後ろには、鈴と箒の姿もある。やはり面白くないといった表情だ。

「仲がよろしいのは大変結構ですが……些か、仲が良すぎなのでは?    先程も、随分と熱心に指導されていましたわね……体を密着させるほどに」

「っ……!?!」

セシリアが言うと、シャルロットは先程の状態を思い出し、そして気付いた。

羞恥に頬を染めて胸部を隠し、一夏から数歩下がる。

「                    って、待て待て!?!    何かおかしいよね、これ!?!」

これではまるで、痴漢の犯人と被害者ではないか。慌ててシャルロットに訂正を要求する。

「……                    一夏のエッチ」

「グハッ!?!」

むしろ、止めを刺された。

『まあ、背中感触を楽しんでたのは事実なものね……』  
『ぐおっ……!』

内と外で責め句のサンドイッチ。一夏は深いダメージを受けた。

だが、事態は思わぬ方向へと進んでいく。

「そもそも、白式にはちゃんと射撃用の武装があるのですから、それを使いになれば良いのですわ」

「え？ そうなの、一夏？」

「「『っ……!』」」

その発言に「ギクツ!？」とするのは一夏と春斗、そして鈴。セシリアの言うのは月影、つまり裏百式の事だ。

(鈴、セシリアを止める!!)

(ええ!？ どうしろってのよ!!)

(何でもいいから、話を逸らせ!!)

(ああ、もう! どうなっても知らないわよ!?)

わずか一秒のアイコンタクト。鈴は仕方なく動いた。

「ち、ちよっとセシリア……白式にそんな武装無いわよ?」

「……何を言ってますの? 鈴さんだって一緒に見たでしょう?」

「うぐっ……!？ そ、それは……」

的確すぎる反撃に、鈴は二の句を継げない。

「私も見たぞ。黒い白式が……弓を射るところをな」

更に箒もセシリアに付く。二人の冷たい視線が、鈴に突き刺さった。

「鈴さん、あなたもしかして……何か隠しているんですか？」

「な、何も隠していないわよ……何も……アハハ……」  
「どうやら鈴にはネゴシエーターの資質は皆無のようだ。」

「黒い白式……？ 弓を使うってどういう事？」

「登録名は【裏白式】といって……いや、『百聞は一見にしかず』  
だな。一夏、やって見せてやれ」

「イ、イツー？」  
「よりもよって箒に言われてしまった。彼女は一番、見せてはマズ  
イ相手だ。」

あの時は、混乱した状況だったからこそ、どうにかなったのだ。じ  
つくりと見られれば、間違いなく不審感を覚えるだろう。

理屈や理論ではない。

剣が己を映す鏡であるように、弓もまた、己の心を写す鏡なのだ。

だからこそ、今まで裏白式を見せて欲しいと言われても、断ってき  
たのだ。

だが、今や状況は絶望的であった。

「せつかくだし、見せてもらおうかな？」

「いや、だってセンサーリンクないし……」

「目測でなら、撃てるのだろう？」

箒が痛い所を突いてくる。センサーリンクが無いから、危なっかし  
くて使えないと断ってきたのだ。

「なら、あの時は何故使った？」と返されれば、「あれしか使えな  
かったからだ」と答えた。

だが目測で銃を撃った事で、それは理由に使えない。

「あゝ、ほら……あれだよ、あれ。俺には、雪片一振りだけで充分だっー!!」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

冷たい筭の視線に晒され、一夏はがっくりと折れた。

『まずい……これは、まずいぞ』

『おのれ、セシリア・オルコット……余計な事を……!!』

春斗は必死に打破する方法を模索する。が、どう動いても筭に不審を抱かれるのは必至だ。

一夏のふりをして打つか。

裏白式になった事で作り出された射撃補正プログラムをカットすれば、多少は何とかなるだろうか。

だが、春斗に求められるのは『春斗の弓の真似をする、一夏の真似』という無理難題。

というよりも、何を真似れば良いのかが全く不明である。

いよいよ進退極まったという時、アリーナが急にざわめいた。

「ねえ、あれってドイツの第三代ISじゃない？」

「ウソツ、本国でのトライアル段階って話じゃなかったっけ……！？」

自然とそちらを向くと、ピットの上に艶の無い、黒の機体があった。二機の大型スラスターと、右肩部に装備された巨大な砲が特徴的なそれを纏うのは。

「ラウラ・ボーデヴィット……！」

セシリアが、その名を苦々しく吐き出す。やって来て早々、一夏を平手打ちしようとした女。

それだけでセシリアにとっては、憎むべき敵である。

「あいつが……いきなり、一夏をひっぱたこうとしたヤツ……！」

「っ……」

そして鈴と箒もまた、ラウラを睨む。

「織斑一夏」

だが、彼女の目に映るのは一夏のみ。

『一夏、気を付けて……』

「……何だよ？」

春斗の注意を聞き、警戒しながらラウラに返す。

「貴様も専用機持ちなのだろう……？　ならば、話が早い」

「………？」

「私と戦え」

どういう理屈か。それでも彼女にとって、それは理由になるらしい。

「嫌だね。戦う理由がねえよ」

「貴様になくても、私にはある」  
「……そうだろうな」

## 第二回モンド・グロツソ。

優勝確実とされていた織斑千冬が、決勝を棄権したという事で騒然となった大会。

恐らく　　ラウラはその真実を知っている。

「貴様がいなければ、教官の大会二連覇という偉業は容易に想像できる。だからこそ　　私は貴様の存在を認めない」

『……随分と心酔されているもんだね、姉さんは』

「っ……こんな所でやらなくても、月末には学年別トーナメントがあるんだ。そこで良いだろう?」

否定　　その言葉の重さも知らないくせに、軽々しく口にするな。

そんな内心の苛立を抑え、一夏は答える。

「……ならば」

ラウラの視線が細まる。

「何をする気、ボーデヴィツヒさん……?」

ラウラの前に、シールドとアサルトライフルを構えたシャルロットが立ちはだかった。

「退け、デユノア……邪魔だ」

「生憎と、ルームメイトの凶行を許す気はないよ……!」

シャルロットはラウラに、強い意志の籠った視線をぶつける。  
「……………ならば、まとめて」

#### 後方 敵IS反応

「……ッ!?」

ラウラのIS 《シユヴァルツエア・レーゲン》のハイパーセンサーが反応する。

距離は 30。

(なんだと!? ここまでの距離を許した……っ!?)

ラウラはとっさに、両腕に装備されたプラズマ刃を発動。振り返りざまに、それを突き出した。

「……ッ!」

ラウラのプラズマ手刀がその首筋に。と、同時に自身の眼前に突き立てられた白刃。

それはホワイトメタリックのボディに紅いライン。同じ紅の肩部装

甲と、珍しく頭部を目以外を隠す様なヘッドギア。  
背部と腰部にスラスタ翼があり、腕部は暗色の細い装甲。脚部は  
黒に朱のラインが入っている。

「……………貴様、何者だ？ この私の背後を取るとは……………！？」

「悪いけど、こんな密集した中で大砲ぶつ放そうとするバカに、教  
えてやる名前は持つちゃいないわよ……………！」

「ッ……………」

二人の睨み合いは続く。

軍属であるラウラには、眼前の敵の危険度が直ぐに分かった。

これは、ここで排除するべき相手だ。

膨れ上がる殺気。眼前の敵もまた、それを察したようだ。

『コリア、その生徒！！ 何をやっているッ！！』

「……………邪魔が入ったか」

響いたのは恐らく教員の声だろう。これ以上は無理だと判断したら  
ウラは、ISを待機状態に戻した。

それと共に、向こうも刃を引いた。

「今日の所は、ここまでにしておこつ」

ラウラは一夏を一瞥し、吐き捨てるように言う。

そして、自身の背後を取った敵にも宣告する。

「……………命拾いしたな」

「……………どっちが、かしら？」

「ふん」とラウラは鼻を鳴らし、そのままピットの奥へと姿を消した。

「……………やれやれ。何なのよ、あのガンダーは？」

謎のISはピットから跳躍し、一夏達の前に降り立った。至近距離で改めて見るそれは　まるで忍者だ。

「大丈夫だった、織斑君？」

「ああ、大丈夫……………ところで、君は？」

「え……………ああ、あたしよ」

ヘッドギアが量子変換され、見え失せる。と、晒された素顔に一夏は、それ以上に箒が驚き、目を見張った。

「君は……………箒の同居人の！？」

「お、織羽……………っ！？　それは専用機か……………何故、お前が！？」

「何でって……………一応、これでも辰守インダストリーの社長令嬢だし」

「なっ……………！？」

辰守インダストリー。

それは世界的多目的企業であり、ISにも積極的に関わっている企業だ。

そのグループの一つ、辰守エレクトロニクスでは、世界中のISのハイパーセンサーの大半を扱っている。

「織羽……アンタ、本当に専用機持ちだったんだ……」

何故か、鈴が気まずそうな顔をしている。

「そうよ。本当なら、代表戦までにちゃんと用意できてたのに……どっかの誰かさんに代表、取られちゃたからさあ〜？」

「うう……」

織羽の嫌味タツプリの言葉に、更に気まずさを増す鈴。

「……どういう事だ？」

『どうやら、鈴ちゃんの前のクラス代表って……彼女だったみたいだね？』

どうやら自己紹介をしっかりするべきだと、織羽は思った。

「1年2組所属、”元”クラス代表の辰守織羽よ。この子はあたしの専用機で、第三世代IS 《舞影》。よろしくね？」  
と喋って、織羽はクルリと回ってみせた。

”元”の部分を強調する辺り、かなり根に持っているようだ。

「ああ、よろしく。ところで……何で、そんな忍者みたいなISなんだ？」

「ああ。ウチの家って一千年も続く、由緒正しき忍者の家系なのよ……マジで？」

「大マジ。子供の頃から修行とかさせられてたし……」

まるで冗談のような話だが、本人は至って真面目に話している。

その時を思い出したのだろうか、すごく遠い目をしていた。

「……………で、あれは一体何だったのよ？」

と、織羽が一夏に問うと、そうだったと他の面々も思い出したように尋ねた。

「そうですね！ 最初の時といい……………あれは普通ではなかったでしたわ。いったい、何がどうなってますの!?!？」

「こんな場所で戦闘を仕掛けてくるなんて……………余程強い恨み？ みたいなのがあるみたいだったけど……………?」

「千冬さんの決勝辞退と、一夏が奴に恨まれる事と、どんなつながりがあるんだ？」

「……………悪い。今日はもう、練習はここまでにするわ  
質問には答えず、一夏はISを戻そうとする。」

「……………一夏?」

『鈴……………?』

そこに届いたのは、鈴からの個人回線。プライベートチャンネル

『もしかして……………あの事件のせい?』

『……………ああ』

『何よそれ!?!? そんなの、一夏達が悪いんじゃないじゃない!!  
それをアイツ……………何様なのよ!!!』

『いいんだよ。僕も一夏も……………あれは、僕達がいけないんだ』

『春斗!?!? 何で』

『自分のことも守れない程に弱かったから……………だから、千冬姉は決

勝を辞退したんだ……!』

その時の悔しさを思い出し、一夏は拳を握りしめた。

「……じゃ、先に帰るわ」

一夏はバツが悪そうにして、ISを待機状態に戻して、アリーナの出口へと向かって行った。

「一夏………?」

去りゆくその背中は何時もあり、少しだけ小さく見えた。

第14話 ブラック・インパクト/ダンシング・シャドウ(後書き)

予告通り、織羽の見せ場！

彼女のISのモデルは、某忍者戦士ですw

剣士がいるなら、忍者型のISがあっただっていいじゃないか！  
と  
いうことで作ってみました。

彼女はあくまでもサポート役なので、派手に前線で活躍はしない予定です。

第15話

Midnight Confession

マヨナカノ

コクハタ

まだまだ日常編。

シャルロットと春斗メイン回。

そして少しずつ、何かが変わっていきます。

せつかくの訓練もラウラとの件で水入りとなり、一夏は引き上げてしまった。

そして、残っていた篝達も練習に身が入らず、直ぐに引き上げる事になった。

ロッカールームで着替えながら、しかし彼女達の間流れる空気は重い。

全員が、ラウラ・ボーデヴィツヒと織斑一夏の浅からぬ因縁に、心を囚われていたからだ。

514

「あの人と一夏さん……過去に何があつたんでしょう?」

「さあね。知りたくもないし……出来るなら、あんな物騒なものとは関わり合いになりたくないわね。皆も……特にオルコットと凰は気をつけた方が良いわよ?」

制服に着替えた織羽が、ロッカーをボタンと閉める。

「気を付けるとは……どういう意味だ?」

「今回は直接、織斑君に行ったけど……それはあたしとデユノアチヤンが邪魔したからね。ああいう手合が次にする行動なんて……手に取るように分かるわ」

「私達を、狙ってくる……?」

「彼に関わる同じ専用機持ちは、確実に標的でしょうね……あたしも含めて」

結果として周りを巻き込むことを厭わないとはいえ、ラウラも非武装の相手を直接狙うような真似だけはしない。という確信が織羽にはあった。

何故なら、彼女の目的は『織斑一夏を正面から相手を叩き潰し、己の力を見せつける事』だからだ。

その”大義名分”を成すのに、他の専用機持ちは都合の良い相手だ。なにせ、戦闘態勢を直ぐに取れる上、四組を除く全員が一夏と何らかの関わりを持っている。

ドイツの第三世代ISを見せ付けて、邪魔者も排除でき、かつ織斑一夏を戦いの場に引きずり出す。

これ程に効果的な選択肢は他に無い。

「あいつは本気でヤバいわ。出来るなら、逃げた方がいいわよ？」

「それは出来ない相談ですわ。このセシリア・オルコット、挑まれる勝負に背を向けるような真似はいたしませんっ！」

織羽の言葉を、セシリアは睨むような視線で否定する。

「そうね。もし、アイツが喧嘩売ってくるってんなら……ぶっ潰すだけよ」

そして鈴も、どこか怒りをにじませて返した。

「……はあ。ならせめて、デュノアちゃんだけでも気を付けて……  
…あれ？」

端のロッカーで着替えていた筈のシャルロットが、何時の間にか居

なくなっていた。

シャルロットはアリーナの通路を走りながら、羽織っただけの制服を直していた。

向かう先は、一夏の着替えている別のロッカールームだ。

一夏の只ならない様子が気にもなっただし、それと同時に完全に一人になる今は、シャルロットにとってはチャンスであった。

未だロッカールームにいるだろうかと不安になりつつも、シャルロットは中に足を踏み入れる。

「……一夏？」

数十人が一斉に使うことのできるロッカールームには人がなく、シャルロットの足音が異様に響いた。

「誰だ？」

「っ……！？」

並ぶロッカーの向こうから、一夏の声がした。探していたとはいえ、ドキッとしてしまう。

「ぼ、僕だよ……今、大丈夫？」

「ああ、シャルロットか。ちょっと待つてくれるか？ 上を着るから……いいぞ」

一夏がそう言うと、シャルロットはロッカーの影から出てきた。

「態々、どうかしたんだ？」

ベンチに座ったまま、一夏は気さくに声をかけてくる。

「えっと、ちょっと気になって……大丈夫？」

「大丈夫だよ。あ、さっきはありがとうな、助けてくれて。ルームメイトだから……後々、気まづくなるだろうにさ」

一夏は脱いだISスーツを畳みながら、先程庇ってくれた礼をする。「そんなの平気だよ。あれはどう見たって、向こうがいけないんだから……」

「そっか……」

「うん……」

会話が止まり、ロッカールームには一夏の動く音だけが響く。

なんとか、言わなければ。

強迫に近い思いに駆られるも、しかし口が言葉を発してくれない。

そんなもどかしさに、シャルロットは更に何も言えなくなってしま

「……………え？」

「えっ？」

いきなり、一夏が短く発した。

何があったのかと思うも、一夏はスーツをしまっ手を止めていた。

「……………一夏、どうしたの？」

「いや、何でもない。ちょっと色々、面倒事が溜まってきたなって思って……………」

「そ、そうなんだ……………大変だね」

「ああ。だから……………一つだけでも片付けておこうと思っんだ」  
言うや一夏は振り返って、シャルロットに鋭い視線を向けた。

「君は……………何の目的で、人を探している？」

「っ……………！？」

シャルロットがビクッと、驚きに肩を震わせた。

初日、筈に尋ねたことが一夏に伝わっていたかも知れないと、シャルロットはずっと一夏の動向を気にしていた。

だが、そこに変わった様子はなく、もしかしたらという思いが、少しずつ生まれていた。

だがそれは、とんだ誤りであつた。

「 やつぱり、篠ノ之さんから聞いてたんだ……」

「 ああ。ほー …… 箒から、君が”ハルト” っていう奴を探しているって聞いた。いずれ、何かを言ってくるんじゃないかって…… ずっと、注意してたんだ」

「 あはは…… 凄いな、一夏。全然、そんな素振り見えなかったのに……」

シャルロットは動揺しながらも、素直に賞賛した。

彼女には、あれが全て演技だったと言われても尚、とても信じられなかった。

だがこれで、シャルロットの躊躇いは無くなった。

「 そうだよ。僕は…… その人を探しているんだ。君と、織斑先生と関係のある…… 織斑ハルトという人を」

「 どうして、俺と千冬姉の関係者だなんて分かる？」

「 一夏の幼馴染の、篠ノ之さんが知っていて…… 同じファミリーネームなもの」

「 それだけで関係者だなんて…… 随分と曖昧だな？ そもそも、箒は十歳ごろから何度も転校している。なら、その行き先で出会った可能性だってあるだろう？」

「 それなら、僕に隠す理由がないよ。名前を出した時の動揺…… あれは篠ノ之さんにとって忘れられない程の相手で、かつ安易に教えられない人物って事だもの…… 君と関係のある人と考えた方が自然だよ？」

「 ……」

一夏は返さず、沈黙を通す。それをどう取ったのか、シャルロットは続けた。

「『ブリュンヒルデ』織斑千冬。『世界唯一の特異ケース』織斑一夏……二人は共にIS学園にいる。でも、あと一人存在するとしたら、その人は今どうなっているのか……?」

シャルロットは走りそうになる言葉を抑えつつ、自身の立てた推論を紡ぎ続ける。

「その人物はきつと、ISを動かせなかった。だからここには来れない。でも重要人物の関係者である以上、政府の保護を受けるしかない……違う?」

「そもそも、その前提を支えるのは、筭のリアクションだけだ」

「……そうだね。でも、それだけで充分だよ。彼と君に関係がある。それだけ分かれば、問題ないもの」

シャルロットの、決して退かないという強い眼差しが、一夏に向けられる。

だが、一夏は何も言わずに立ち上がり、バッグを持ち上げた。

「……どうして否定をしないの?」

「否定すれば納得するか?」

「しないよ」

「なら、否定も肯定もしない」

「……」

「色々興味深い推論だったよ。でも、大事な事を忘れてるな」  
「何を……?」

バッグを肩に担ぐ様に持ち、一夏はシャルロットの脇を抜ける。と、足を止めて言った。

「君はまだ、俺の質問に一切答えていない。だから俺は、これ以上君に関わらない」

「っ……! 待って!!」

ハッとして、シャルロットが一夏の腕を掴む。

「……さっきは面白い推理を聞かせてくれたな。だったら、こっちも一つの推理を聞かせてやるよ?」

「…………え？」

一夏は踵を返して、シャルロットを正面に捉える。頭一つ大きい一夏に見下ろされるそれは、彼女に否応なく威圧感を与える。

「君がその”ハルト”を探す理由…………恐らくは君の実家のデュノア社か、フランス政府の命令だろう？」

「なっ…………！？」

「代表候補生を使ってまで捜す程だ。余程の利益、国益に関わるほどの人物なんだろうな？　なら、その目的は拉致か…………それとも、暗殺か？」

「　　ッ！！」

パシンッ！！

乾いた音と共に、痛烈な一撃が一夏の頬に打ち込まれた。

「僕が…………僕が”HARU”に、そんな事を言わないでッ！！　何も知らないくせに、勝手な事を言わないでッ！！」

感情を高ぶらせ、怒りに満ちた瞳でシャルロットは一夏を睨みつける。

「ああ、知らないさ。だけど、事情も何も分からないんじゃない？　その判断するしか無いだろう？」

「っ…………！　それは……………」

途端、意気消沈したシャルロットは言いよどむ。

「まあ、確かに……今のは極端すぎるかも知れない。でも、『世界唯一の特異ケース』よりも優先される相手なら、それぐらいの可能性はあるだろう?」

「……で、でも……」

「今のままじゃ、何を聞かれても『ノー』としか答えられない。悪いけど、この話はここまでにさせてもらおう」

「っ……」

何も言えずにシャルロットは俯き、一夏は今度こそ、出口へと向かって歩き出した。

「………待つて」

シャルロットが、弱々しい声で呼び止める。が、一夏は止まらない。

「………待つて!」

「………何?」

今度は足を止め、振り返らずに返す。

「事情を……話すよ」

「………」

「でも、今はまだ……ダメ。僕だけの事じゃないし……それに、今は頭がグシャグシャで……言葉がまとまらないんだ」

「………」

「だから………今夜、君に部屋に行くよ。その時に、全部を話すから………」

「………分かった」

背中越しに投げかけられた言葉に、一夏は短く返事をした。

「ッ……！」  
一人、ロッカールームに残されたシャルロットは悔しさと、やり切れない思いに唇を噛み締めた。

いくらIS学園がどの国家、団体に所属しない場所とはいえ、それはあくまでも学園の中だけの事。  
その外にいるであろうハルトの身を案じれば、そう疑われても当然だ。

一夏の言い分は、どこまでも正しかった。

「僕は……そうだよ……卑怯者だ……あんな風に言われて、それでも……HARU……！」  
上を向き、溢れそうな涙を必死に堪える。

”彼”を探す理由。

それはどこまでも身勝手に、我侭で。彼の事など何一つ考えていない。  
それを裏切りと呼ぶのなら、正しくそうだろう。

ならば、卑怯者らしく”どんな手を使ってでも”、彼の事を知ってみせる。

例えそれが　　自分の身を穢す事になっても。

アリーナから、寮へと続く道。

一夏はやりきれない表情でそこを歩いていた。その原因は、ロッカールームでの出来事だった。

『幾ら何でも……あれは言い過ぎだろ!? シャルロットはお前の友達じゃないのかよ!?』

『だからこそ、ハツキリとさせておきたかったんだ……今も、彼女がそうなのか、それとも違うのか……』

『春斗……ッ!』

『一夏。僕達を取り巻く環境は優しいものばかりじゃない。一歩でも道を外れれば、その瞬間、身の危険に晒される事だってあり得るんだ』

『そんな事は分かってるさ! でも、友達を信じられないなんて……最低じゃないか!?』

『でも、彼女はハツキリと言った。《僕が”HARU”に、そんな事するもんか》とね』

『それが、どうしたってんだ!?!』

『彼女が探していたのは、”織斑春斗”の筈。なのに彼女は”HA

RUに”と言った。僕は彼女に、一度も本名を名乗ってないし……あの会話の中で、HARUと春斗を繋がるような事も言っていない」

「ッ……！？ それって、まさか……！？」  
一夏も、春斗の言おうとせん事が分かったのか、驚きに目を見開いた。

「彼女の中で、春斗HARUという関係が出来上がっている。そしてそれが出来るのは……デュアン博士だけだ」

「デュアン・ヒューイック……フランス第三世代ISの設計者……裏切られたか、偶然か……どっちにしろ、あの人以外にそれが出来る人物はいない。疑いたくはないけど……」

「じゃあ、シャルロットの目的は……？」  
「第三世代ISに関係する何かで、問題が起きたんだろうね……それも、今夜にはハッキリさせるよ」

「……………」  
足がとてつもなく重い。

いや、重いのは足じゃない、心だ。

数年来のメール友達が、自分を狙うスパイかも知れないと疑わなければならぬ。

冷淡に言葉を紡ぐ裏で、どれだけキツイ思いをしているか。

「……………」  
そして、自分は何も出来ない。

ISを得て強くなったと思った。だがしかし、自分はそれで何かを守れただろうか。

セシリアの時も、鈴の時も、アンノウンの時も。自分は春斗に頼り切りであったのではないか。

その上、シャルロットの事や、ラウラの事。

「俺は……クソッ！」

『一夏……？』

「……何でもねえ」

苛立ばかりが、心に積もっていく。

「何故ですか、教官!？」

「ん……？」

いきなり耳に飛び込んできた声。聞き間違えでなければ、それはラウラのものだ。

そして彼女が教官と呼ぶ人物。

一夏は、声のした方に行ってみる事にした。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で、どんな役目があるというのです!？」

木の影から覗いてみると、そこにはやはり、二つの人影があった。

ラウラ・ボーデヴィツヒと織斑千冬である。

剣呑な雰囲気　　と言うには、ラウラが一方的に声を荒らげて、それを千冬が受け流しているといった感じだ。

「お願いです教官。どうかドイツに戻り、再びご指導を！　こんな場所では、貴女 능력は半分も活かされない!!」

「ほう？」

わずかに、千冬の語気が鋭くなった。その事に気づいていないのか、ラウラは更に言葉をまくし立てる。

「大体、この学園の生徒など教官の教えを得るに足る人間ではありません!!」

「何故だ？」

「意識が甘く危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしている……!　そのような程度の低い者に、教官が時間を割かれるなど」

「そこまでしておけよ、小娘」

「ッ!？」

遠きより見ている一夏でさえ、思わず身震いしてしまいそうになる程の迫力。

ラウラはその威圧に飲み込まれ、それ以上の言葉を継げられなかつ

た。

「少し見ない間に随分と偉くなったな。たかが十五歳で、もう選ばれた人間気取りか？」

「っ……！？ わ、私は……」

僅かに震えているのが、一夏にも見えた。距離のある一夏でさえ、震えが来る程だ。目の前にいるラウラの受けるそれは一夏の比ではない。

「これ以上無いなら、さっさと帰れ」

「っ……！」

ラウラはギョツと口を結んで走り去っていった。

「さて……その男子。盗み見とはいい趣味だな？」

「……」

皮肉めいた言葉に、一夏は渋々出てくる。

「千冬姉……」

「織斑先生だ。それで、お前は随分と酷い顔をしているな？」

「……そう見える？」

「ああ。何か悩み事か？ そんな様子ではトーナメントは初戦敗退だぞ？」

「……ああ、きっとそうだろうね」

「……何があった？」

普段と全く違う一夏に、千冬はいぶかしんだ視線を向ける。

「別に、何でもないです……じゃあ、失礼します”織斑先生”」  
「っ……？」

一夏は勢い良く頭を下げ、そして寮へと走っていった。

「一夏……どうしたんだ？」

織斑先生。その言葉に微かに感じたのは 拒絶。

一夏らしくないそんな感情に、千冬は胸のざわめきを覚えた。

コチ、コチと秒針が時を刻んでいく。

時刻は23:55。

「ふう……」

自室の洗面所で、シャルロットは深く息を吐いた。

フリーからは全ての判断を任せると言われ、後は自分次第。これから自分がする最低な行いを、改めて覚悟する。

脳裏によぎる、HARUの言葉。

『君は、君と君の幸せを心から願う人の為に生きて、そして幸せになるべきだ』

それは、デユノアに引き取られた後、自分の居場所を迷い続けたシヤルロットに送られた言葉。

デユノアとの”決別”を踏み出せた、勇気の言葉。だがそれは、今は心を縛る重い鎖になっていた。

(ごめん、HARU。でも僕は……今のままじゃ、幸せになんてなれないんだ。だって……僕にはまだ、何も無いから……)

自身を閉じ込める檻を壊してくれたのも、自由な世界をくれたのも、全ては一人の少年によるもの。

織斑 ハルト。

もしも自分にさえ関わっていなければ、その名は今頃、世界中に伝わっていた筈だ。

彼の得る筈だった名声はフランスが、デユノアが奪い、その代償として彼は、何も無い自分を解き放ってくれた。

そして今、自分は彼を 表向きとはいえ、利用しようとしている。

思わず、自分を嘲笑ってしまう。

「……………僕は、本当に……………最低だね」

そして、シャルロットは自室を後にした。

春斗は、その身をベッドに横たえていた。

一夏にはすでに 《海岸》 まで下がってもらっている。

「……………」

ロッカールームでのシャルロットの顔を思い出す。

泣いていた。

怒っていた。

苦しんでいた。

「僕のやった事は……………間違っていたのか？」

虚空に問いかけるも、それに答える者は勿論いない。

良かれと思いやった事が、結果として誰かを傷つける。そんな理不尽に対して、しかし春斗は怒らない。

理不尽に怒る資格など、一夏の身を借りるだけの自分には無いと知っているから。

「……………そろそろ、来るか？」

時計を見やれば、時刻は零時を回ろうかという頃。

ベッドから体を起こすと、丁度ドアをノックする音がした。

「……………はい？」

(……………シャルロットです)

待ち人來たると、春斗は若干の緊張を孕ませて、ドアの鍵を外した。ドアを開けると、部屋着なのだろう　ジャージ姿のシャルロットが、そこに立っていた。

「……………どうぞ」

「お邪魔します」

春斗は先に部屋の奥へと進む。それに続くように、シャルロットも室内に足を踏み入れた。

「……………」

シャルロットはそのまま、後ろ手で”鍵を”閉めた。

「まあ、適当に掛けて。と言っても椅子は一脚しか無いし……………ベッドでも良いか？」

ついさっきまでベッドに寝ていたのでシワだらけのシーツを、適当

に直しながら尋ねる。

「……………うん、良いよ」

そうシャルロットが答えると、何故か「ジジジイ……………」という音がした。

何の音かと春斗が振り返る。

「っ……………!?!」

そこにあつたのは、ジャージのファスナーを下げ、そしてそれを脱ぎ捨てるシャルロットの姿。

「何を……………している?」

驚きながらも、春斗はどうにか声を絞り出す。

「……………僕を、君の好きにしていよいよ……………」

羞恥と恐怖からか、その肩を震わせるシャルロット。

「何をしているかと聞いているんだ……………!」

「その代わりに、僕を……………ハルトに逢わせて……………っ!」

「ッ……………!」

春斗はシーツを引っ手繰り、そのままシャルロットを包むようにまとわせた。

「一夏……………っ?」

「……………茶を入れてくるから、さっさと服を着ろ。戻るまでに着てなかつたら、問答無用で追い出すからな」

「……………うん」

シャルロットは俯き、小さく答えた。

急須に茶葉を入れ、湯を注ぎながら、春斗は内心の動揺を必死に抑えようと努める。

(彼女があんな行動をとったのは……僕が、追い詰めてしまったからだろう……本当に、らしくないな……)

きつと一夏ならば、もっと上手くやれていただろうと思う。

だが、これは自分で解決しなければならぬ事だ。

そして一步を踏み出した以上、逃げることは出来ない。

ならば、せいぜい頑張るとしよう。

織斑一夏が刺されたりしない程度には。

茶を入れて戻ると、シャルロットはしっかりと服を着直して、ベッドに腰掛けていた。

掛けてやったシーツもしっかりと畳まれて、ベッドに置かれていた。

「はい。熱いから気を付けて?」

「うん、ありがとう……」

それに若干の安堵をしつつも、春斗は湯呑みをシャルロットに渡す。

気まずい空気の中、茶を啜る音と秒針の音だけが響く。

「……………」

「……………」

このままでは埒があかないと、春斗から話を切り出した。

シャルロットは僅かに頷いて、そしてポツリ、ポツリと語りだした。

「フランスも所属する欧州連合では、欧州連合防衛計画『イグニッション・プラン』というのが推進されているんだ」

「フランスは確か、そこから除名されていたな……」

「うん。第三次イグニッション・プランのトライアルの為に、イギリスの『ティアーズ型』<sup>モデル</sup>。イタリアの『テンペスタ？型』。ドイツの『レーゲン型』と、すでに実働データを各国が取り始めている中、フランスの……デュノア社のIS開発は遅れていた。

「ただ今、フランスではデュノア社と政府の、共同プロジェクトチームが組まれてるんだ。計画名は竜騎士計画<sup>プロジェクト・ドラグーン</sup>。チームの中心は【デュアン・ヒューイック】博士……」

「デュアン・ヒューイック……確か、フランスに粒子加速による発電システムを開発した人だよな？」

「そう。そして、その人が設計したのが……【ラファール・ドラグーン】。デュノア社のラファール型をモデルにした機体なんだ」

資本力で他国に劣るフランスがイニチアシブを取るためには、他を出し抜くほどの機体を開発するしか無い。

そこに現れたのが、デュアン・ヒューイックだった。

フランスのエネルギー問題に対して、粒子加速発電システムの開発を成功させた天才。

彼が設計したのは、デュノア社のラファール型を基礎とした第三世代IS『ラファール・ドラグーン』。

IS用小型粒子加速装置『リンドブルム』を装備し、完成すれば先

行する第三世代IS、その全てにも勝る戦闘力を発揮するだろうと期待されていた。

「……………それで、その事と”ハルト”を探す事と……………どう繋がるんだ？」

聞いた限りでは、シャルロットが自分を探す要因は何処にもない筈だ。

「機体そのものの開発は順調だった……………でも、問題はやはり起こったんだ」

「何が起こったって言うんだ？」

「R ドラグーンの第三世代兵装は、IS用小型粒子加速機構【リンドブルム】。それが……………」

「失敗作、だった……………」

「ううん。むしろ成功していた……………ううん、し過ぎていたんだ」

「どういう事だ……………」  
春斗は眉をひそめる。”成功し過ぎていた”とは、どういう意味だろうか。

「【リンドブルム】の性能が、当初予定していたスペックを大きく上回ってしまった結果、今ある制御プログラムでは完全に制御できない……………欠陥品になってしまったんだ」

「つ……………！？ もしかして、機体が遅れている理由って……………」

「そう。今の制御プログラムでは加速時間を含めて3分。実質の使用時間は1分にも満たない……………これじゃ、どうしようもないでしょ？」

「確かに……………でも、デュアン博士なら、制御プログラムの問題を解決できる筈じゃ……………」

「……………博士は、倒れたんだ。多分、そう永くはないだろうって」  
「なっ……………!？」

デュアン・ヒューイックはすでに70歳を超える年齢。それを考えれば、倒れるのもおかしくはない事である。

「博士でなければ、制御プログラムは完成させられない……………たった一人を除いて」

シャルロットはそう言って、ポケットから一枚のデータディスクを取り出す。

「博士が、彼にこれを渡せって。彼なら、このプログラムを完成させる事が出来るからって……………」

「……………なるほど。そういう事が」

デュアン博士が自分の事を伝えたのは、博士自身がもう永くない事を悟ったから。

そして、R ドラゴーンの完成の為に、春斗の力がどうしても必要であったから。

何故、HARUと春斗の関係を知るに至ったかは未だ不明ながら、概ねの事情は理解できた。

「そう。それが……………」表の理由」

「表の……………」

国益に関わる事を表というなら、裏はどんな理由だというのか。

余程言い難いことなのか、しばしの沈黙の後にシャルロットは口を開いた。

「……………僕はね、デュノアっていうファミリィネームでも分かる通り、デュノア社の社長の子供なんだ。でもね……………僕の母は父の本妻じゃない……………愛人だったんだ」

「……………」

その辺りの事情は一度チャットで教えられたことなので、春斗は知

っている。

「僕と母はずっと、二人で別宅に住んでて……一度、本邸に呼ばれるまで、僕は自分が愛人の子だなんて知らなかった」

「……………」  
だが、目の前で言葉にされると、とても痛々しい。春斗にとって、それは二度目の告白なのだから。

「二年前に母が亡くなって、デュノアの本邸に引き取られたんだけど、その時に高いIS適正があるのが分かって、非公式ながら会社のテストパイロットになつたんだ……………」

何処か自虐的な微笑みを浮かべて、言葉を続けるシャルロットを、春斗は何も言わずに、ただ見つめる。

「でも、僕の居場所はそこには無くて…………ずっとひとりぼっちで…………でも、そんな僕を支えてくれた人がいたんだ」

「あゝ、それがもしかして…………？」

「そう…………それがH A R U…………ううん、織斑ハルトさんなんだ……………」

「っ…………！」

正面きつて言われると何とも気恥ずかしく、春斗はそれをごまかすのに、デスクの湯呑みに手を伸ばした。

「その”H A R U”っていうのはメールフレンドのHNだったよね？ ……どうして本名を…………？」

口を湿らし直し、春斗は不可解な謎を追求する。

すると、シャルロットは一通の封筒を取り出して見せた。

「っ……………！？」

それを見た瞬間、春斗は全ての答えを知った。

「これは、博士に送られてきた手紙……………この中にある手紙には…………書かれていたんだ……………」

『どうか博士に、デュノア社にいる【シャルロット・デュノア】という少女を助けて欲しいのです。その交渉の為の切り札を、同封します』

シャルロットが口にする手紙の内容。それは、春斗がデュアン博士宛に、彼女の力になってもらえるようにと、頼んだものだった。

「さっき言った、R ドラグーンやリンドブルムの事はね……全部、ウソなんだ」

「ウソ……？」

「あれらを設計したのは博士じゃない……彼だったんだ。そしてそれを、僕を助けるためだけに犠牲にしたんだ……！」

確かに、ラファール・ドラグーンとリンドブルムの原型は、春斗が自身の夢の為に設計したものだっただけだ。

設計を始めた時は、まだ一夏と別々だった。

そして完成した時には、一夏と共にいなければ存在できなかった。

あれは言うなれば、もう叶わないだろうと諦めた 夢の残滓。

「あれを渡す代わりに、博士に僕の身柄を引き取り、そして代表候補生としての正式な試験を受けられるようにって頼んでいたんだ……！」

だから、何も惜しい事はなかった。

それが完成し、日の目を見て、尚且つ友人の助けとなるならば、何

も躊躇う事はなかった。

だけど、その事を知ったシャルロットはずっと、罪の意識を抱えていたのだと、春斗はようやく分かった。

「それは……アイツが勝手にやった事だ。罪の意識を覚える事は無いだろう?」

「っ!? 一夏は、あれがどれだけ凄いかを知らないから、そんな事が言えるんだ!! あんな凄いIS……他には篠ノ之博士ぐらいしか作れないんだよ!？」

「それでもアイツにとって……シャルロットのこれからの方が、ずっと大事だったんだよ」

そう。いつ消えてしまってもおかしくない、いつ目覚められるかも分からない自分と、これからをしつかりと生きられるシャルロットと、どちらを選ぶかなど、考える余地もない。

「……やっぱり、一夏と”ハルト”は……?」

ここまで来れば、隠しておく理由もない。いずれは、調べてがついてしまう事だ。

「シャルロットの言う通り、ぼ　俺と春斗は……肉親だよ。双子の兄弟なんだ」

「双子の……!？」

「だから分かる。あいつにとってそのISの設計図に、シャルロット以上の価値なんて無いんだって事がさ。だから、君が罪悪感を覚える必要はないんだよ」

「……がっ」

「そのデータディスクも、俺からあいつに渡しておくよ。きっと、何とかしてくれるだろうからさ……」

「違っっ!?!」

「えっ!?!」

いきなりシャルロットが声を荒らげ、春斗の胸ぐらを締るように驚き掴みにする。

「僕は、彼に……ハルトに逢いたいんだ！ 逢って……謝って……それから……だからお願い、僕を彼に……！！」

「それとこれとは話が別だ。春斗は政府保護下の人間で、君はフランスの代表候補生なんだぞ！」

「っ！ それは……分かってる、けど……」

シャルロットの立場はフランス代表候補生。そして春斗は政府の保護下という事になっている。

当然、安易な接触など出来ず、問題となれば彼女は本国送還。最悪、外交問題にまで発展するだろう。

シャルロットにとって、春斗に会えないならば代表候補生の椅子などに意味はない。

だが、春斗と繋がりを持てる可能性もISにしか無い。

二人の関係者がいるここ IS学園だけが、春斗と接触できる機会のある場所なのだ。

「……そつちの事情は良く分かったし、謝りたいって事も分かった。だからといって如何して、そこまで”直接”にこだわるんだ？」

「えっ！？ そ、それは……い、言える訳ないでしょっ！」

春斗が尋ねると、シャルロットはパツと離れて背を向けてしまった。

「……………」

そんな仕草に、どこか見覚えを感じる。

(まるで、ほーちゃん達みたいな……って、気のせいだな)  
だが、そんな訳がないなと首を振る。

一夏ならまだしも、自分にそれはあり得ない。

まして、メールでしかやり取りしていない相手に、そんな恋愛感情など抱こう筈もない。

自意識過剰にも程があると、春斗は気恥ずかしくなっていました。

「一夏つてさ……結構、意地悪だね」

「失礼な。甘さと優しさの線引きを、しっかりするように努めてるだけだ」

「そう言う割には、篠ノ之さんやセシリアさん、凰さんにもいい顔するよね？」

「……………そんな事はないぞ？」

あれは100%天然の産物だと、言っただけでやりたい衝動に駆られる。

「絶対にウソだよ。ああ……………もしかしてハルトも、こんななのかな……………？」

「それは絶対に無い！」

「……………随分と、ハッキリ言うんだね？」

誰にだって譲れない一線はある。あんな、朴念仁の用例として百科事典にも載りそうなと一緒にされては、不快極まりない。

「……………クスッ」

ふい、と顔を背ける春斗に、シャルロットは思わず笑いが零れてしまった。

もうそこに、先程までの思い詰めた彼女の姿はなかった。

「今夜は……ごめんなさい」

「いいよ。気にしてないから」

「このディスクは一夏に預けるよ。それと……今度、春斗の事を色々教えてくれる？」

「う……っ」

シャルロットの差し出したディスクを受け取りつつ、春斗は言葉を詰まらせた。

「……まあ、気が向けば？」

「何で疑問形なの？」

そんなのは本人でなく、一夏に言って欲しい事だ。などとは言えないので、春斗は笑ってごまかす。

「あ、最後にもう一つだけ……良い？」

「何……？」

自室へと戻ろうとするシャルロットが振り返り、尋ねてきた。

「春斗ってさ……誰か、好きな子とかって……いるのかな？」

「っ！？ ……さ、さあ……？」

先日、振られました。

などとは言えずに、グサリと刺さった何かの痛みに、必死に耐える春斗だった。

「そっか……じゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ……」

自室へと向かうシャルロットは、少しだけ心が軽くなった気がした。そつだ。まだ焦る必要なんて無い。

これから春斗と会える、話せるチャンスはきつとある。

『それでもアイツにとって……シャルロットのこれからの方が、ずつと大事だったんだよ』

だから今は、これだけでいい。

自分を大切に思ってくれている。それが分かっただけで、今は。

『……で、シャルロットの事情は分かったのか？』  
『ごめん、今夜はもう……色々と限界だから』  
春斗はぼったりと、ベッドに倒れ込んだ。

ちなみに翌日。

一夏は寝坊で特訓に遅刻しそうになり、アリーナまで全速力マラソ

しをすゑる羽目になつた事を、ここに記す。

第15話

Midnight

Confession

マヨナカノ

コクハク

長かった。

そして、台詞が多かった。

ようやくシャルロットと春斗の関係が描けました。

シャルロット視点も描かないと全ては明らかになりませんが、プロ

ットがこれまた長い……w

そしていよいよ、話も二巻の後半に入ります。

第16話 狂奏のシルバーブロード(前書き)

まだ日常回。

トーナメントまでは、まだ掛かりそうです。

PV350、000、ユニーク35、000突破。ありがとうございます！  
います！

p,s,

編集していたら地震が……怖かった。

## 第16話 狂奏のシルバーブロード

真夜中の密会の翌日。

午前の特訓（遅刻寸前であったせいで、かなり睨まれた）を終えた一夏が、昼食のために寮へと戻る。

「よう、シャルロット」

「ふえっ！？ い、一夏……っ！？」

その道中にシャルロットがいたので、一夏は声を掛ける。と、彼女にいきなり驚かれた。

しかも、何故か顔を赤くした上に胸元を腕で隠して、後ろに下がられた。

あの後、部屋に帰ったシャルロットはそこで、自分が一夏（本当は春斗）の前で服を脱いだことを思い出したのだった。

その瞬間、凄まじいまでの羞恥が全身を駆け巡り、朝が来るまで悶え苦しんでいたのだ。

お陰で、彼女の目の下には酷い隈が出来ている。美少女の魅力も半減である。

「……………え？」

その事を知らない一夏は、何故にと首を傾げた。

「え、えっと……何？」

「いや、昼飯まだだったら……どうかなと思ったんだけどさ……？」

「……………ごめん。ちょっと今日は……ハハ……………」

「そ、そつか……じゃあ、仕方ないな……」

「うん、仕方ないんだ……」

「あ……っと」

「……」

「……」

「……じゃっー!」

「えっ……て、速っー!」

凄まじい土煙を上げて、シャルロットは走り去ってしまった。  
残された一夏は、驚きつつも呆然としてしまった。

「…… 一夏?」

「…… 一夏さん?」

「い……ち……か……?」

さて、今まで特訓をしていたという事は当然、何時ものようにそこにいた面子がいる訳である。

彼女たちも当然、昼食をとる為に一夏と共に寮へと戻って来ている。  
では、彼女たちは何処にいるのだろうか。

「ひっ……!?!?」

”背後から”突き刺さる凄まじいプレッシャーに、一夏は思わず背筋が震えた。

怖い。だが、今そこにある危機を目にしなければ、どうしようもない。  
い。

恐る恐る、首の錆びたロボットのように、一夏は振り返った。

「ヒッッ!?!?」

思わず情けない声が出てしまった。

それも仕方ない事だ。何故なら、そこにいたのは三人の修羅だったのだから。

「さて。今のシャルロットの様子……ただ事とは思えなかったが？」  
「一夏さんを見て……何故、シャルロットさんは胸を隠されていたんでしょねえ？」

「さて、キリキリと白状しなさい？」

「お、俺に弁解の余地を与えろよ!？」

「何を言う？　ちゃんと言い分を聞いてやると言っているではないか？」

「なら、何でお前は真剣を抜いてるんだ!?　セシリアと鈴に至っては、ISと武装を部分展開させてるし!！」

「何となく今、刃の曇り具合を確認したかっただけだ。他意はない」「私はたまたま、今、ライフルのチェックをしたくなっただけですわ?」

「あたしも今、急に双天牙月のチェックをしたくなっただけよ?」「絶対にウソだ!！」

いくら鈍感な一夏でも、自分の命が大絶賛ピンチなのはすぐに分かる。

というより、一夏には本当にシャルロットの反応の意味が分からない。

恐らく、昨日の夜の事が関係しているのだろうが、春斗から聞いた限りでは、あんまりアクションをされる要素はない筈なのだ。

『春斗っ！　お前、なにか隠してるだろ!？』

『隠してるよ?』

『あっさり認めやがった!?　何だよ、何があつたんだ!？』

『それは彼女の名誉の為に言わない。大人しく……ね?』

『「ね?」じゃねえ!!　それと今、手を合わせただろ!？』

シャルロットの名誉と言われては、無理矢理に聞く訳にもいかない。だが、このままでは三人の修羅に屠られるのは自明の理。

「……………織羽っ!!」

「へっ……………!?!」

一夏は、三人の隣で事態を傍観していた織羽に助けを求めた。というか、彼女を巻き込んで、事態そのものを有耶無耶にしまおうと考えたのだ。

「えっと、もしかして……………気付いてたの?」

「……………は?」

だが、それは悪手だったようだ。

「織羽、どういう事だ?」

訝しんだ表情で、箒が尋ねる。

「いやね、昨日の夜……………日付が変わった頃かな……………あたし、窓から外に出たのよ」

「……………何で、そんな事を?」

「あたしにはある目的があった……………それしか言えないわ。でも、そこは関係ないの」

「いや、凄く気になるのだが……………?」

「そんな事言うなら、箒が使ってるベッドの事……………この場で言っても良いのよね?」

「っ……………!?!? ふ、ふざけるなっ!! 卑怯だぞ!?!」

「じゃあ、お互い関係ないってことで……………良いわね?」

「ぐうっ……………分かった……………っ!」

もの凄く悔しそうにして、織羽に屈する箒。

セシリアと鈴は、後で箒に問い質そうと心に決めたが、今は織羽の話の続きである。鈴が話を促した。

「……それで、部屋を出てどうしたのよ？」

「その後外を歩いていたら……まだ明かりの点いていた部屋があったのよ……織斑くんの部屋だったわ」

「っ……!?」

「で、まだ起きてるのかな？って、カーテンの隙間から部屋を覗いてたら……」

「ちょ、ちよつと待てえっ!!」

「セシリア、一夏を押さえて!!」

「承知しましたわ!!」

「うわっ！ 離せ、こらっ!!」

背後からガツチリと、一夏はセシリアに押さえられる。しかも部分展開されている為、腕力では振り払えない。

それなら、一夏も白式を出せば良いのだが、軽くパニックになっている頭はそこまで回らない。

目前の織羽の口を閉じる事。それだけが思考の全てだ。

「離してくれセシリア、頼む!!」

「一夏さんの頼みでもこればかりは……ああ、でも一夏さんをこうして堂々と抱き締められるなんて……ちよつと役得ですわ」

頬を染めてスリスリと、セシリアは一夏の肩に頬擦りする。抱き締めるというより一方的な捕縛であるが、誰もツッコまない。

後でセシリアをぶん殴ろうと心に誓い、箒と鈴は続きを促す。

「それで、そこで何を見たの……ハッ？」

「ま、まさか……!?」

二人はここまで来て、シャルロットの反応を思い出した。

深夜、男一人の部屋に明かりが灯っている。

そして翌日。一人の少女が、羞恥の様子で一夏を避けるように逃げた。

ならば、この二つに繋がりがあるとしたら。

「部屋には、織斑君とデュノアちゃんの姿が……」

「一夏あああああああつ!!」

「だあああああああつ!! 俺は何もしてない!!」  
逃げようとするも、セシリアがしっかりとホールド　　というか、  
徐々に一夏の体を締め上げ始めている。

「ぐおおおお……く、苦しい……!？」

「ホホホ……昨日の夜、何があったのか……詳しくお聞かせ願えますかしら？」

「だ、だから本当に何も……」俺”は何もしてないんだって……  
!!!」

一夏は鈴に、必死のメッセージを送る。

(……俺は？　もしかして……!?)

「セシリア、ちょっと待って!!」

何かを感じ取ったのか、鈴がセシリアを止めた。

「なんですかの鈴さん？　今、もの凄く重要な処ですよ？」  
「いや、とりあえずは一夏の言い分を、聞くだけは聞いてみない？」  
「……何でそこまで、態度を急変しましたの？」  
「べ、別に……あ、あたしは一夏を信じてるだけよ！！」  
「り、鈴……！」  
「……！？」  
苦し紛れに言い放った一言だったが思いの外、痛烈な一撃となったようだ。

「わ、私だって信じていますわ！　一夏さんは、深夜の自室で女性に、その……いかがわしい事などなさる方ではありませんわ！」  
「そうだぞ、鈴っ！　自分だけが、さも味方のような物言い……訂正しろ……！」

「じゃあ、一夏の話を知って事で良いわよね？」  
「い、良いだろう……」  
「元々、そのつもりですわ……」  
箒とセシリアはそれぞれの矛を収めた。

(鈴、ナイスだ……！)  
(この借りは、大きいんだからね？)  
(……おう)

後が怖いのが、今はとりあえず、この場を切り抜けた事を吉としようと思っただ。

「……で、何があったのよ？」  
鈴に尋ねられ、一夏はどう言ったものかと頭を悩ませる。  
「うん……箒は知ってるよな、シャルロットの”探し人”の事？」  
「っ……！？　まさか、その事で……？」  
「探し人って……誰を探してるのよ？」  
「……あいつだよ」

そう言つて、鈴にフィンガーアクションを見せる。

「えっ……！？ 何で、アイツの事を探してるのよ!？」

「それは本人に聞いてくれ。とにかく、あいつに会わせて欲しいって言われたんだ……でも、そんなの無理だろ？」

「確かにな……」

「うん、絶対に無理だわ」

言葉の意味は違つが、篝と鈴はそれぞれ、それは無理だと頷く。

「あの、私達は全く理解出来ないのですけれど……?」

「詳しい説明をもとめまーす」

全く話を理解出来ないセシリアと織羽が説明を要求する。

「えっと、つまり……シャルロットには探している相手がいて、俺はそいつと知り合いで……で、シャルロットはそいつにどうしても会いたいつて事を、部屋まで言いに来たんだ」

「それだけの為に、わざわざ深夜に男子の部屋に？」

「他の人に聞かれたくなかつたんだろ？」

「それでしたら、そんな遅くでなくても良いと思うのですけど？」  
一夏は、何とか重要な部分を省いて説明しようとするが、二人はどつにも釈然としない様子だ。

「それだと、誰かが尋ねてくるかも知れないだろ？」

パツと思いついた事だったが、意外と説得力がある気がした。

「……じゃあ、シャルロットさんがあんな素振りを見せたのは？」

「さあ？ 深夜に男の部屋に来たのが、今更ながら恥ずかしかつたんじゃないか？ 俺には、それぐらいしか予想できないよ」

「ふうん……ま、あたしは別に、織斑君が誰と何してても関係ないしね……ちゃんと責任さえ取るのなら、ね？」

「責任を取らなきゃならんような事をした事はないし、する気もないつて!..!」

ひとまずは全員が納得したようで、一夏は安堵の溜息を吐いた。

「……一夏、一つだけ良いか？」

篤が一夏に顔を寄せ、小声で尋ねてくる。

「何だよ……？」

「その……シャルロットと春斗は……どんな関係なんだ？」

「………親しいメール友達、だってさ」

「………本当に、それだけか？」

「本当だよ。春斗がそう言ってるんだから、間違いないって」

「そ、そうか………それなら良いのだ」

何故か篤は、その答えにほっとした様子を見せた。

食堂へと向かう最中、今度は鈴が一夏

春斗に尋ねる。

「………で、何があったのよ？」

「別に………大した事はないよ。ただちょっと、頼まれ物をされただけさ」

「………それだけ？」

「うん。それだけだよ」

「春斗さ………なんか、無理してない？」

「無理なんてしてないよ………」

「ウソね」

「ウソじゃないよ」

それが嘘だと、鈴にはすぐに分かった。今の春斗はかなりマズイ方向に傾きつつあったからだ。

「騙されると思う？」

「……騙してないよ、本当に」

だが、鈴がどれだけ言っても、春斗は是が非でも認めない。それはきつと意地なのだろう。

「本当にきつかったら……少しぐらいなら、甘えても良いからね？」

「そうならないよう、これから気を付けるよ」

「そうじゃないでしょ、バカ」

「ツン、と鈴の拳が春斗のこめかみを軽く叩いた。

「……ありがとう、鈴ちゃん」

「ん……」

さて、数日後の放課後。

いよいよ近付いてきた学年別トーナメント。

アリーナには、セシリアと鈴の姿があった。

「あら、私が一番乗りだと思っていましたのに……早いすわね？」  
「そつちこそ、随分と早いじゃない……そんなにトーナメントで活躍したいの？」

「活躍……？ いいえ、出る以上は優勝するのみですわ。それが代表候補生としての矜持というものですから」

「ふうん、”矜持”ねえ……まさか、あの”噂”本気にしてるなんて、無いわよね……？」

「……鈴さんこそ、どうなんですか？」

噂とは、件の一夏と篤の約束の事である。

しかしそれは、時間が経つにつれ、噂は更に変わっていった。

当初は”トーナメント優勝者は一夏と交際できる”というものだった。

が、それなら『二年と三年の優勝者はどうなるのか』、『授賞式での発表は可能か』などと、一組に聞きに来た上級生がいたりした為、流石に誰もが疑問を持ち始めた。

と、ここで誰がかこう言った。

「それって、交際じゃなくて……デートできるの間違いじゃないの？」と。

交際とデートでは天と地程の差があるが、しかし現実味としても天と地程の差がある。

なにより、デートを切っ掛けにして交際に繋げられる可能性もあり、

二、三年の気合の入れようは相当なものらしい。

特に二年では『打倒！ 生徒会長 更識盾無』の機運が高まっているそうだ。

ちなみに、この新たな噂を聞いたH・Sさん(15)は、世界の理不尽さについて、同居人であるO・Tさん(15)の首を締め上げてしまったそうである。

「あはは………んな訳ないじゃない。あんなの、誰が信じるってのよ………」

「オホホ………全く、あんな噂に流される方は本当に哀れですわ………」

「アハハハハハ」

「オホホホホホ」

「……………」

笑い合う女子二人。その空気が薄ら寒いのは何故だろうか。

「よし。あなたとは一度、きっちり決着を付けておくわ」

「ええ。私も丁度、そのように思っていたところですよ」

二人は同時にISを起動させる。

「そんじゃ、始めるわよ………!!」

「何時でもどうぞ………!!」

互いにメイン武装を構え、いざ勝負

というその時。

敵性IS 攻撃態勢

「ッ!?」  
「対峙する相手”以外”からの攻撃の警告。二人はとっさに、その場を離れる。」

二人の丁度真ん中に、超高速の弾丸が着弾した。

爆ぜる地面。巻き上がり、降り注ぐ欠片を気にも掛けず、二人はそれの来た方角を睨んだ。

「あれは、『シユヴァルツエア・レーゲン』……ッ!」  
「ラウラ・ボーデヴィツヒ……ッ!」

そこには艶無き黒の機体が、右肩部の砲塔から煙を吹き上がらせて佇んでいた。

「どついつつもり? いきなりぶっ放してくるなんて……いい度胸してるじゃない……!」

鈴は龍咆を準戦闘態勢に移行させて、ラウラに不快さを隠すことなく吐き出す。

「イギリスの『ブルー・ティアーズ』と、中国の『甲龍』……フ、データで見た時の方が、まだ強そうだな?」

ラウラの挑発的な物言いに、二人の口元が更に怒気で歪む。

「何? 態々ドイツからやって来てボコらりたいの……? じゃが<sup>ド</sup>イッ

芋畑じゃ、そういうのが流行ってるの？」

「あら鈴さん。そういう事は言うものではなくてよ？ 人の言葉も通じない獣には……勿体無さすぎですわ」

一秒後には既に殴りかからんほどの迫力を滲ませて、二人が言葉を吐き出す。

「下らない挑発だな。量産機に二人がかりで負ける程度では……やはりその程度か。なるほど、あの下らない種馬を取り合うメスにはピッタリだな？」

だが、ラウラは冷笑を浮かべて、更にその怒りを煽る。

「あんた今、何て言った……？ あたしには『どうぞ好きなだけボコッて下さい』って聞こえたんだけど……？」

「この場に居ない方への侮辱……同じ欧州連合の人間として、見逃す訳には行きませんわ」

「時間が惜しいからな、二匹同時に相手をしてやろう。掛かって来い……メス共が」

ブチッ。という音が、二人の耳の奥で聞こえた。

「上等ですわっ……！」

「ぶっ飛ばすッ……！」

アリーナでの出来事の少し前。

『春斗、何とかしろ……』

『うーん……ダメ？』

『ダメに決まってるだろ！？ 何があったかは聞かないけど、代わりにシャルロットを何とかしろ！！ このままじゃ、俺は痴漢が変態の扱いを受けちゃうっての……！』

後日。何度かシャルロットと話そうとするも、シャルロットは直ぐに顔を赤くして逃げてしまい、その結果として、クラスの視線が痛いものになりつつあった。

なのでどうしても、シャルロットとの和解をしなければならない。出来るなら今日中に。

日が経てば経つほど、泥沼化するのは必至である。

『俺も 《海岸》まで下がるから、なんとか解決しろよ？』

「……………やれやれ」

一夏と入れ替わった春斗は、どうやって彼女を見つけようかと考える。

(そういえば、今日は部活動があったな……………シャルロットの所属は……………確か、料理部だったか?)

料理部ということは、調理室。早速、春斗はそこに向かうことにした。

「はあ………」

シャルロットは、これで何度目かも分からない溜息を吐いていた。視線の先では、他の部員が料理の練習に勤しんでいる。今日のシャルロットは絶不調であった。余りにもミスばかり繰り返すので、部長からも見学を厳しく言い付けられてしまった。

あの夜以降、シャルロットは余りにも恥ずかしくて、一夏の顔を見ることが出来ないでいた。

何をされた訳でもない。むしろ、しようとしたのは自分の方である。一夏にしてみれば理不尽も甚だしい事だ。

「はあ………」

何度も踏み止まり、関係を修復しようとするも、しかし体が逃げてしまう。

どうしてそこまで恥ずかしいのか。勿論、半裸を見せてしまったせいだが、しかしここまで恥ずかしいものか。

(一夏と春斗って……双子、なんだよね……)

双子。これこそがシャルロットの羞恥の原因であった。

一夏と双子という事は当然、顔つきなどが似ているという事だ。

シャルロットはフランスにいる頃から、春斗の姿を何度となく想像していた。

高名な科学者を論破してみせる理知から、やはり学者のような姿だろうか。

メールやチャットに時折、気取った台詞を入れてくる所から、もしかしたら女性の扱いに慣れているのだろうか。

背は高いのだろうか。きつと東洋人特有の黒髪で、知性美に溢れる人だろう。

そんな風に想像をふくらませていたシャルロットの前に、いきなり答えに近い存在が現れた。

織斑一夏。春斗の双子の弟。

その事実を知って以来、一夏の影にどうしても春斗が見えてしまう。あの時、自分は春斗に裸を見せて迫ったのでは。などという滑稽な考えさえ過ぎってしまう。

だが、これが正解という事を、シャルロットは知る由もない。

「はあ……」

「余り溜息ばかり吐いてると、幸せが逃げるぞ？」

「そんなの迷信でしょ……？」

「迷信かも知れないが、でも溜息を吐いている人間に、幸せな奴は居ないと思うぞ？」



無駄に動く上半身。腕の振りと足の動きのバランスが悪く、シャルロットとの差がグングンと開いていく。

(仕方ない……最後の手段だ)

周りに誰も居ないことを確認して、春斗はシャルロットに向かって叫んだ。

「逃げるのは！ 俺に裸を見られたからだろう！？」

「っ！？」

「大丈夫！ あれは事故」

「うわああああああああああっ！！！！！！！！！！」

「だからわあっ！？」

一転して切り替えてきたシャルロットが、春斗目掛けて跳びかかり、そのまま植え込みの向こうへと押し倒した。

「な、なんて事を大声で言うのさ！？」

「そりゃ、シャルロットが逃げるから……走りながら言っしか無いだろう？」

そう言いつつ、シャルロットの腕を春斗はしっかりと掴む。

「っ！？ だ、だからって……誰かに聞かれてたらどうする気だったの！？」

「一応、周りに人が居ないのは確認してたし……ま、男子一人に女子多数の状況なら、起こりうる事じゃないかな？」

「起きちゃダメでしょ！？」

「でも、昨日は起きたし……」

「……一夏、本当に意地悪なんだね」

シャルロットは可愛らしく頬を膨らませる。それを見て、春斗は肩を竦めた。

「時と場合によるよ。それに、今の状態の方が……ずっと大変な訳だし」

「え……？」

と、ここでシャルロットは自分の体勢に気付いた。

植え込みの向こうの芝生に春斗は押し倒され、そして自分は春斗の上に馬乗りになっている。

シャルロットの制服はスカート丈が短く、更に言えばシャルロットはスニーカーソックスを履いている為、足が顕になっている。つまりズボン越しに、その感触と体温が良く伝わってくるのだ。

「あ……ああ……！？」

見る間に顔を真っ赤にするシャルロット。すぐに退こうとするが、春斗が腕を押さえているせいで、動けない。

「よつと」

更に春斗が体を起こしたので、その顔が鼻先まで近付く。

「うわっ……！？」

「とりあえず、逃げないでくれるか？ また追いかけるのは面倒くさいからさ」

「う、うん……」

コクコクと頷いて、シャルロットがズルズルと春斗から降りる。

互いに何故か正座して、膝を突き合わす。

「あのな……昨日の”アレ”は、本当に気にしないでくれ。そして忘れてくれ」

「えっと、そういうのは僕の台詞じゃないかな……？」

「いや。真面目な話、そうしてくれないと本気で困る。主に今後の学生生活的に」

「そ、そうなの……？」

「……割と切実に」

流石に三年の学園生活を、変態の称号を受けて過ごすのは春斗もキ

ツい。

ここは何としても納得してもらわなければならない。

そんな思いが通じたのか、シャルロットは小さく頷いた。

「……………分かったよ、忘れる。……………でも、一夏は平気なの?」

「何が?」

「あの……………その……………」 ああいうの ” 見ちゃって……………何とも思わな  
いの?」

シャルロットがモジモジとしながら尋ねてくる。

「うーん、ビックリはしたけど……………下着なんて見慣れてるからなあ  
」

「え、っ!?!?」

「千冬姉さ……………織斑先生の下着とか、昔から洗濯してたからさ。い  
ちいち気にしてられないよ」

「そ、そっか……………アハハ……………ふう」

シャルロットは乾いた笑いを響かせた。

あの同性ですら惹きつける魅力を持つ千冬の下着となれば、相当な  
ものだろう。

なるほど。それに見慣れているなら、同年代の少女の下着姿などは  
驚きこそすれ、そこまでということか。

そう思ったら、恥ずかしがっている自分がバカのように思えてしま  
い、シャルロットはがっくりと肩を落とした。

「……………?」

何故、落ち込んだ様な素振りを見せるのか分からず、春斗は首をか  
しげる。

が、当初の目的はしっかりと果たしたので、一夏を呼ぶことにする。

『おーい、一夏』

「ねえ、それ本当なの？」

「本当よ。第三アリーナで、一年の専用器持ちが模擬戦やってるんだって」

「でもなんか、凄いことになってるらしいわよ？」

「っ……！？」

道の方から聞こえてきた話し声に、春斗の言葉が止まる。そして嫌な予感がした。

ドオオオオオオンッ！！

「ッ！！」

第三アリーナの方角から、爆音。

その瞬間、春斗は植え込みを飛び越えていた。

『一夏ッ！！』

『どうした、そんなに慌てて？ シャルロットがどうかしたのか？』

『そっちは何とかなった！ でも、今はそれどころじゃない！！』

『何だ！？』

『第三アリーナで一年の専用器持ちが戦っているらしい！ もしかしたら、ラウラ・ボーデヴィツヒが動いたのかも知れないっ……！』

『っ！？ 代われ、春斗！！』

『分かったッ!!』

春斗が落ちると同時に、一夏が表に現れる。  
力強く地を蹴って、一夏はアリーナに向かって走った。

「待つて、一夏！ 僕も行く!!」

「シャルロット!? ……分かった!」

追いついてきたシャルロットと共に、一夏はアリーナへと急いだ。

ゲートを抜け観客席に上がると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「そんな……あの二人が……!?!」

どちらの実力も知っているからこそ、一夏は我が目を疑った。

ブルー・ティアーズと甲龍の装甲は一部失われ、機体に損傷の無い場所は一つとしてない。

対してシュヴァルツエア・レーゲンは大きな損傷は無くで、戦局を完全に支配していた。

セシリアと鈴、そしてラウラによる二対一の戦いは、ラウラの圧倒的優位にて進んでいた。

「でええええいつ!!」

鈴が衝撃砲を撃ち放つ。が、ラウラが右手をかざすと、まるで何事

もなかったかの様になる。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの 《停止結界》 の前ではな  
」

「っ……！ まさか、ここまで相性が悪い相手だなんて……！！」  
ラウラがすぐさま、両肩のユニットからワイヤーブレードを射出。  
鈴もすぐさま回避と迎撃に移るも、複雑な軌道を描くそれを捉えきれず、右足を捕らえられた。

「そうそう何度もっ……！！」

「フッ。理論最大値ならばまだしも、その程度の仕上がりで第三世代兵器とは、笑わせてくれる」

援護のためにライフル、そしてブルー・ティアーズを展開させるセシリア。だが、ビットはラウラの両手の発する何かによって、その動きを完全に止められてしまった。

「動きが止まりましたわね！！」

「貴様もな」

セシリアがライフルの引き金を引く。と同時にラウラの右肩の大砲  
レールキャノンが咆哮した。

激突する二つが爆発を巻き起こし、セシリアがすぐに引き金を絞る。  
だがそれよりも早く、鈴に巻きつけたワイヤーブレードを、振り子の要領で振るうそれは、さながら人の鎖分銅。

爆炎に隠され、更に射撃に意識を向けていたせいで、セシリアの反応が遅れた。

「  
ッ！！」

ぶつかる二人。バランスを崩した所にラウラがすぐに接近戦を仕掛ける。

「あれは

イケニッションブースト  
「瞬間加速!?!」

「彼女は姉さんの教え子……使えても不思議じゃない!」

だが、接近戦は鈴の距離。合わせた双天牙月を振るうかと思いきや、鈴はそれを二つへと分けた。

何故だと思う一夏だったが、その答えはすぐに分かった。ラウラの両腕に装備された、プラズマ手刀が迫っていたのだ。

「クソツ……!」

苦々しさを吐き出しながら、鈴はそれを後退しつつ捌く。だが、そこに更に六つのワイヤーブレードまでもを振るわれ、追い込まれていく。

「いい加減に……!!」

再び、龍咆が空間を収束させる。

「駄目だ、鈴ちゃん!!」

「この距離で、ウエイトのある空間圧兵器を使うとはな」

ラウラのレールキャノンが火を吹き、龍咆を爆砕した。

龍咆には、バレル展開と弾丸精製の為のチャージタイムが必要だ。

そこを、完全に読み切られた。

爆砕した龍咆によってバランスを崩した所を、ラウラのビーム手刀が襲いかかった。

「させませんわ!!」

セシリアがライフルを盾にしてそれを受ける。同時に腰部ユニット

の砲口を向け、ビットミサイルを発射。

「  
」  
オレンジ色の華が、アリーナに咲いた。

「ほぼゼロレンジ……無茶苦茶するわね」

もうもうと上がる爆炎に、鈴は呆れてしまふ。

「苦情なら後で受けますわ。けれど、これならダメージは……」

「  
」  
これで終わりか？」

「  
」  
……ッ!？」

爆煙が晴れその向こうに佇むのは      ほぼノーダメージのシュヴ  
アルツェア・レーゲン。

「ならば今度は      私の番だ」

ラウラは動揺の隙を突き、瞬時加速をする。そのまま鈴を地表へと  
蹴り飛ばし、セシリアにはお返しとばかりに、ゼロ距離からの砲撃  
を撃ち込む。

揃って地面へと落とされた二人目掛けて、ワイヤーブレードを射出。  
それを使って二人を拘束し、ラウラは態々、拳を叩き込んだ。

「ぐあっ……!」



レールキャノンの砲口が、一夏の目前に向けられる。

『一夏、離れてっ!!!』

あわやという所で、シャルロットからのプライベートチャンネル個人回線が届く。  
同時に、二丁のアサルトライフルの斉射。

「チツ……雑魚が」

ラウラは舌打ちし、一夏の拘束を解いて回避行動に移った。

『一夏、二人を!!!』

『分かった!!!』

シャルロットがラウラに更に攻撃を仕掛け、その隙に一夏は二人を抱き上げ、一気に瞬時加速を用いて離脱した。

そのまま近くのピットまで運んで下ろす。

「大丈夫か、二人とも!？」

「う、一夏……?」

「ぶ、無様なところを……お見せ……」

「いいから喋るな! 此処でじっとしている。すぐに戻ってくるかならな」

一夏はアリーナを見やった。

シャルロットはフビッドスウィッチ高速切替という技能を用いて、弾切れとなった銃をタイムラグ無しに入れ替えていく。

「ご自慢の第三世代はどうした? そんな第二世代アンティークで私と本気で張り合う気か?」

「未だに量産化の目処が立たない第三世代ルキよりはずっと動けるよ。それに、あの機体は君には勿体無さすぎるからね!!!」

「ほお……ならば、その身に世代差というものを教えてやるう」  
「くっ……！」

ラウラの使う不可視の壁は、シャルロットの撃つ弾丸の尽くを縫い止めていた。

まずい。と、一夏がシャルロットの助太刀に行こうとした時、一夏の後ろから、白い影が飛び出していた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒイイイイイッ……！」  
「ッ……！」

上空から、獲物を狙う鷹のように襲い来る影。その手にした刃をラウラ目掛けて振り下ろした。

ラウラもすぐにプラズマ手刀を展開。それを真っ向から受け止める。シャルロットはその間に、一度距離を取る。

「また貴様が……日本の第三世代IS《舞影》」  
「知ってくれて何よりね。でもね……アンタはここで潰すわッ！」

織羽は一度そこから離れ、ブレードを鞘に納めた。

「この間のようにはいかんぞ。そのISの特性……ハイパーセンサージャマーは既に対策済みだ」

「あら、さすがはドイツ軍。じゃあ、こんなのはどうかしら!？」  
織羽は黒い球をラウラの周囲にばらまく。それは地面に触れた瞬間に爆発し、ラウラの視界を覆い隠した。

「下らんマネを……そこだ」

センサーが示した方向で動く影に向かって、ワイヤーブレードを発射。

だが、それはスルリと貫通してしまった。

「何……!?!」

わずかに動揺するラウラ。その背後に反応。

「っ」

そこに舞影を見、振り返りざまにプラズマ手刀を振るう。が、舞影に触れた瞬間、それはスツと消えてしまった。

「シツ　　!!」

直後、正面から刃が襲いかかる。とっさに身を捻り、切っ先を躲した。

が、それはシールドを易々と突き破り、装甲を掠めていた。

「おっと、外したか……まだまだ、あたしも修行不足だね。連兄に怒られちゃうよ」

そういう織羽の姿がいくつも出現していく。それと共に、センサーはその全てを实体と判断した。

「ジャマー付きの立体映像か……随分と姑息な戦い方が好きなようだな、貴様は？」

「奸計詭道は忍の常套手段……お褒めに預かり恐悦至極」

「ふん。やはり下らん」

ラウラはワイヤーブレードを全機展開。そのまま、その場で大きく回転する。

「何処に隠れようと、同じ事だ」

「ぐっ……!!」  
ギインッ!! という音と共に、織羽が爆煙の中から弾かれる。  
それを追い、ラウラが飛び出した。

「貴様もここで、潰れるが良い」

「お生憎様。潰れるのはそっちよ!!」

ワイヤーブレードが発射され、織羽は納刀したブレードを鞘に納めたまま、それを弾く。

そして、互いに瞬時加速を用いて突進。ラウラはプラズマ手刀を、織羽は抜刀術の構えから、必殺を狙った。

ズドオオオオオオンッ!!

「ッ　ッ!?」

二人がぶつからんとした瞬間、突如として二人の間が爆発した。

見れば、粉塵の中に突き立つのは　　打鉄のブレード。

「これは……打鉄の太刀!?　一体何処から……?」  
辺りを見回すと、果たしてそこに答えはあった。

客席の一角に打鉄を纏った筈と、まるで何かを投げたような格好の千冬がいた。

千冬は何十枚という書類を確認し、不備はないと確認した。

「では、これが”真打鉄”だ。期限はトーナメント終了後まで。レポートも提出するように」

「はい。預からせていただきます」

あれから数日。今日、ついに真打鉄の受領をした筈。

月末までの仮初。そして量産機。とはいえ、自身に与えられた専用機。

そう思うだけで、どうしても心が高揚してしまつ。

「っ……」

手の中の鈍色の金属板プレートを、ギュッと握りしめる。

春斗によって用意されたそれは、筈に何者にも負けない勇気をくれる気がした。

「織斑先生、大変です!!」

職員室に飛び込んできた真耶が、千冬に叫んだ。

「どうした、山田君？」

「だ、第三アリーナで……うちのクラスのボーデヴィツヒさんとオルコットさんと……二組の凰さんが!!」

「っ……………!?!」

その名を聞いた瞬間、箒は織羽の言葉を思い出した。

千冬は立ち上がり、箒を見やった。

「すぐに行く。篠ノ之、早速だが真打鉄それを使うぞ？」

「はいっ!」

外へと出ると同時に、箒は待機形態の真打鉄を掲げる。

「来い、”真打鉄”!!」

箒の呼びかけに応え、真打鉄がその姿を現す。

見た目こそ打鉄と同じだが、その性能はプログラム真打の”擬似フイッティングシステム”によって、専用機並みの動きを可能とする。

真打鉄をまとうと、千冬が非固定部位アンロックユニットのシールドと箒の肩に手を掛け、背部ユニットに飛び乗っていた。

「飛べ、篠ノ之」

「ハイッ!!」

千冬を乗せて、真打鉄を箒は発進させる。

地を舐めるように飛ぶ機体は彼女の自在に動き、向かうのは第三アリーナ。

アリーナ内に飛び込んだ箒の眼前では、どうしてかラウラと織羽が戦っていた。

「織羽……!?!」

「辰守か……よりもよつて、アイツとまで……」

千冬が「面倒な事になった」とぼやくが、箒はそれどころではない。何故なら、箒はすぐに織羽の助太刀に入らんとして、太刀を抜いていた。

「丁度いい。篠ノ之、それを貸せ」

「え……?」

答えを聞くよりも早く、千冬はその手から太刀を奪っていた。

IS用近接ブレードは170センチはあろうかという代物。IS無しでは持つことも儘ならない筈のそれを、千冬はひょいと返した。

逆手に柄を握り、何をするのかと思っていると、千冬はググっと持つ手を後ろに引いた。

「どつりゃあああああああああああッ!?!」

「!?!」

雄叫びを上げて、千冬はブレードを投げた。

さながら砲弾の如くブレードは飛翔し、二人の間に見事に着弾した。

二人はいきなりの事に足を止め、周囲を見回してこちらに気付いた。

「織斑先生……！？」

「織斑教官……？」

千冬は織羽とラウラ、そしてシャルロットと一夏を見やっつてから、  
厳しい表情をした。

「模擬戦をするのは構わん。だが、アリーナのシールドまで破壊する事態となれば黙認はできん。この決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

有無を言わせない迫力で、千冬が宣告する。

「教官がそう仰るなら」

「織斑、デュノア、辰守……お前達もいいな？」

「あ、ああ……」

突然過ぎる事に、一夏は呆けた返事を返してしまつた。

「教師には『はい』と、返事をしろ」

「はっ、はい！」

ギロツと睨まれて、一夏は慌てて返事をした。

「僕もそれで構いません」

「あたしも異論はありません」

一夏に追従する形で、シャルロットと織羽も返事をする。

「では、学年別トーナメントまでの間、一切の私闘を禁止する。解散ッ！！」

パンツ！ と、強く手を打つ千冬。

それは、この場にいる全員を撃つ銃声のようであった。

第16話 狂奏のシルバーブロード（後書き）

アニメのデレを見た後だと、この頃のラウラさんが凄く懐かしいですw

そして、さり気無く鈴とシャルロットのフラグが立っております。狙い通りとはいえ、色々大丈夫なんでしょうかね？（エー）

感想が消えてしまった？ ので追記：三年 二年修正しました。ご指摘感謝です。

第17話 向き合うもの、向かい合うもの(前書き)

日常回ラスト。

いよいよトーナメント開始です。

## 第17話 向き合うもの、向かい合うもの

アリーナでのいざこざの後、一夏達は鈴とセシリアを保健室へと運んだ。

診断は打撲傷。大人しくしていればすぐに良くなると言われ、一夏はホッとした。

「……………」

「……………」

だが、鈴とセシリアは思いっきり不機嫌そうな顔をしていた。ベッドに横になり、一夏と視線を合わせようとしない。

「別に、助けてくれなくて良かったのに……………」

「あのまま続けていれば、私が勝っていましたわ……………」

「お前らなあ……………」

一夏は別に礼を言っただけでいい訳ではない。あの乱入は自分が勝手にやった事だし、その筋合いはないと思っている。

とりあえず、大事がなくて良かった。そう思った矢先。

ビシッ！ ビシッ！！

「……………ツ！？」

何かが鈴達の打撲箇所目がけて飛び、二人が声にならない悲鳴を上げた。

「お、織羽さん……………！？」

「アンタ……はあ……!!」

「その状態でよく言えるわね。無駄な意地はそのまんま、無駄つてもんよ？」

涙目でフルフルと痛みに震えながら、二人は織羽を睨む。ちなみに、飛んできたのはボールペンである。

「こんなの怪我の内になんて……痛たた!？」

「無意味というなら、ここで寝ている事が無意味……ふうふうふう!?」

二人は揃って動こうとするが、全身に走る引き攣るような痛みに、思わず震えた。

「……バカなのか？」

つい、口にしてしまう一夏。すると二人がギンツ、という強い視線をぶつけてきた。

「バカつて何よバカつて!!」

「一夏さんの方こそ、大バカですわツ!!」

『一夏がバカなのはいつもの事だし』

「ひどい言い草だな、お前ら!？」

「二人とも、好きな人に格好悪いところを見せちゃったから、恥ずかしいんだよ」

「ッ……!!？」

ドアが開き、飲み物を買って行ったシャルロットが入ってきた。「何? 何か言ったか？」

一夏はシャルロットの言葉が聞こえなかったのか、聞き直そうとする。

「わああああああああああああああああああああ!! 何でもないわよ!!」

「ああああああああああああああああ!! 何でもありませんわ!!」

と、二人がベッドを飛び出して、シャルロットの口を押さえ込んだ。

「…………お前ら、仲良いな？」

ちなみに、その直後の二人は激痛に悶絶した。

「はい、ウーロン茶と紅茶。一夏と辰守さんは緑茶だったよね？」

「おう。サンキュー、シャルロット」

「ありがとう、デュノアちゃん」

一夏らはそれぞれ受取り、一口。

「…………そういえば、箒は？」

一緒に飲み物を買に行った箒の箒が居ないので、一夏はシャルロットに尋ねた。

「織斑先生と、どこかに行ったよ？」

「千冬姉と…………何だ？」

『そういえばさつき、アリーナで一緒だったね。何か関係してるのかな？』

二人が首をかしげても答えはでない。後で聞けばいいかと、それはここまでにする。

「あつ。そういえば織斑君はこれ、もう見た？」

織羽がふと思いついたように、ポケットから四つ折りにされた紙を取り出して渡す。

「…………なになに、『今月開催の学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦を行う為、二人組での参加とする。尚、ペアの決まらなかった生徒は抽選によって選ばれるものとする。ペア申し込みの締

切は 『……………はあ？』

紙を開いて中身を読むと、一夏は突然な決定に目をパチパチとさせ  
た。

どうしてトーナメントを二対二のチーム戦にしたのか、その意味が  
分からないからだ。

『……………これは、あの”アンノウン”の件が原因だと思うよ？』

『……………ッ！？ アンノウン……………あいつがか？』

『今年の一年は各国の第三世代ISの操縦者が多い。教員の数に限  
りがあり、尚且つこの間のような事態が起こった場合……………？』

『対処は、自分達でしないとならない……………か』

『そう。自身と機体の防衛は操縦者の使命でもあるから、実戦経験  
がどうしても必要になる。その為の要項変更なんだと思う』

原則として、ISの技術は開示されなければならない。

しかしそれでは、他国に技術を真似され、開発国は損をする。

だが、このIS学園ではそれは適応されない。

何故ならここは、『あらゆる国家、団体に帰属しない場所』なのだ。  
そして、その項目にはこう記されている。

『新技術に必要とされる試行活動を許可し、また、それらのデータ  
の提出は自主性に委ねるものとし、義務は発生しない』

要約すれば『技術のテストを認める上、データを開示しなくても構  
わない』という事だ。

技術開示をせず、実働データを取れるのはIS学園のみ。  
そしてその真の目的は”ワンオフ・アビリティ 第三代兵装と単一仕様能力”の融合である。

学園での三年間で上手く二次移行し、セカンドシフト 単一仕様能力を発現出来れば、それは”誰にも真似できない”ものとなる。

その後で技術開示しようと、何の問題はないのだ。

可能性ならば天文学的な確率。だが、三年分の稼働経験値、蓄積データのアドバンテージはかなり大きい。

そういった側面があるからこそ、代表候補生でありながら、IS学園に来たセシリア達には専用機が与えられているのだ。

『でも、エリートと言っても”代表候補生”の時点では、何処も大差は無いからね。結局、有事に備える必要性があるって事だと思っ  
よ?』

『なるほど……でも、またあんなのが来るのか?』

『さあね。でも、一度来てしまった以上……在り得ないとは言いつ  
れない。一夏がISを動かしたのと同じように、ね』

『そりゃ、納得だな』

「 ねえ、一夏? 」

そんな説明を春斗がしていると、シャルロットが一夏に何かを決意したような視線を向けていた。

「 どうした、シャルロット? 」

「あのね……僕とチームを組んでくれないかな？」  
「えっ？」

「彼女がどうして、一夏を目の敵にしているのかは分からない。でも今日の事は、同じ代表候補生としても、ルームメイトとしても、絶対に許せないんだ」

「シャルロット……いつ!？」

シャルロットは、ギョツと一夏の手を掴んで言った。

「一夏は……僕が守るよ。だから、お願い……」  
「……ッ! わ、分かった……」

強い決意と共に向けられた瞳に気圧されて、一夏は返事をしてしま  
う。

「「ちょっと待った!！」」

と、ここで物言いが入った。

誰あろう、セシ鈴コンビである。

「一夏、あたしと組みなさいよ! 幼馴染で……赤の他人じゃない  
んだから!！」

「一夏さん、私と組んでください! クラスメイトで、機体相性も  
近接と射撃でバッチリですわ!！」

「ダメですよ。二人はトーナメント出場禁止です!！」

保健室のドアが開き、姿を見せた真耶が二人を諷める。

「山田先生……!？」

「それはどういう事ですか!？」

納得行かないと、二人は真耶に食って掛かる。が、真耶は厳しい視

線を二人に返した。

「甲龍、ブルー・ティアーズ。共にダメージレベルCと判断されました。この意味は……分かりますね？」

「ダメージレベルC……!? うっ……うっ……うっ……」

「分かりましたわ、トーナメント参加は辞退します……うっ……」  
真耶の言葉に、二人は口惜しいとばかりに歯軋りし、やがてガックリと肩を落とした。

「どついう事だ……?」

「IS基礎理論の『蓄積経験についての注意事項』だよ」

「……ああ、あれか」

シャルロットに言われ、一夏は春斗の講習を思い出した。

ISの経験蓄積とは戦闘を含め、あらゆる事が相当する。

それらが進化情報として使われる事で、ISはより進化した姿になる。

だが、ここに一つの問題がある。あらゆるという部分には、ダメージを受けた状態での運用データも入る。

ダメージレベルC以上の状態で起動させた場合、不完全なエネルギーバイパスを構成してしまい、結果として通常時の運用に支障をきたしてしまう。

簡潔に言えば、無理をして動くと怪我が悪化して、まともに治らなくなるという事だ。

『お、よく覚えてたね?』

『地獄の24時間講義をされて、忘れられるか!?!』

地獄の24時間講義とは、一夏の夢さえも使って講義を行うという、文字通りの苦行である。

一夏は受験勉強時にこれをやられ、成績が上がると同意に精神に深いダメージを負ったりした。

もう二度とやられまいと思っていたが、IS学園のせいでもうそんな事はなかった。

「ていうか……よくまあ、アレとやり合ったものね?」

織羽がそう言うと、一夏はそついえはと、首を捻った。

「そついや、何だって二人はラウラと戦う事になったんだ?」

ギクリ。

二人がまた固まった。

「あんたら……分り易すぎよ」

「……? 織羽、知っているのか?」

「つまり、二人は織斑君を」

「わあああああああつ!!」

今度は織羽の口を塞ぐべく、飛び掛かる。当然、直後に激痛に悶えてのた打ち回った。

これはもう、絶対安静レベルになったかも知れない。

二人の事は織羽に任せ、一夏とシャルロットは寮と向かっていた。

「そういえば大丈夫か？ シャルロットはラウラと同じ部屋なんだろう？」

「うん……元々、彼女とはあんまり話さない……というより、話しても反応がないんだ。だからあんまり変わらないかな？」

「まあ、あれだ。気まずきや、俺とか箒の所とか来れば良さ」

「……ありがとう、一夏。でも、一夏の部屋に行くのは……色々とまずいと思うよ？」

「……そうだな」

また何時、織羽に目撃されるか分かったものではない。

そうして歩いていると、見慣れたポニーテールを揺らして歩く後ろ姿が見えた。

「……箒？」

「っ、一夏……と、シャルロットか」

声を掛けられ振り返った箒は、何時もと様子が違い、少し沈んだよ



箒は一夏の言葉に驚き、座った視線をシャルロットに向けた。ビクッと、身を震わせるシャルロットの首根っこを掴み、一夏から離れた所まで引っ張る。

「シャルロット……お前は”噂”の事は知っているのか？」

「噂……？ ああ、『優勝したら一夏とデートできる』って……？」

僕には関係ないよ。そんなつもり無いし」

「……本当か？」

「本当だよ。あ、でも……その代わりに一つぐらい、我俣を聞いてもらえるかな？」

「何を頼む気だ？」

「それは内緒だよ。とにかく、篠ノ之さんの心配するような事はないから……安心して良いよ？」

「むう……分かった」

ニッコリと微笑むシャルロットに、箒はそう答えるしか無かった。

（そんなつもりはない、か……だが、代わりに何を頼む気だ？ どうもモヤモヤとするな……）

（優勝したら一夏に、春斗と電話越しでいいから、直接話せないか頼んでみよう。デートの代わりなんだし、それぐらいは良いよね？）

『あの二人、何を話してるんだろうっね……？』

『なあ、春斗？』

『何……？』

『ラウラは……強いよな？』

『間違い無く強敵だね。でも、僕と一夏なら……白式と裏白式なら、互角に渡り合える筈だ』

近接特化の白式と、射撃特化の裏白式。

表裏一体のISの力は、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの能力と真つ向から打ち合える。

特に、裏白式はラウラのISの能力に対して特効だと、春斗は判断していた。

第三世代兵装 『アクティブ・イナーシャル・キャンセラー』<sup>A</sup>。

対象の運動ベクトルをゼロに変え、強制的に停止させるという恐るべき能力。

理論上、あらゆる物体にそれは作用する。接近戦仕様の白式では格好的になるだろう。

だが、裏白式は射撃戦仕様。その間合いに入らずに攻撃ができる。更にAICの及ばないエネルギー矢を撃つので、防がれることなく操縦者にダメージを与えられる。

AICを使えなくさせられれば、白式の雪片式型、そして零落白夜が、その威力を遺憾なく発揮するだろう。

『……春斗。頼みがある』

『どうしたのさ、改まって……？』

『もしもラウラと戦つ時が来たら……アイツとは、俺だけの力で戦わせてくれ』

時は流れて六月の最終週。いよいよ学年別トーナメント開始である。

これから一週間。学園はトーナメント一色に染まる。

「しつつかし、凄い人だな……」

控え室の一夏は、アリーナの様子をモニターで見て嘆息した。

来賓や、生徒に混じって座る観客の中には政府関係者、どこかの企業エージェント、研究所員の姿が見える。

アリーナは正に満員御礼。

試合のない二、三年の生徒は、雑務に会場整理に来賓の案内と、目の回る大忙しである。

『この学年別トーナメントは三年はスカウト、二年は一年間の成果の確認。一年は……まあ、珍しいのがあるからね』

『それは俺の事か?』

『それも含めて、だよ。一年には専用機持ちが多いからね』

あれを、次は自分達がやるのかと思うと気が滅入ってくる。

だが、それよりも今は自分の出る試合だ。

組合わせは前日に発表される筈だったのだが、急な仕様変更によるトラブルで、朝一でアナログなクジ引きが行われた。

一夏とシャルロットの試合は                    Aブロック一回戦、第一試合。  
つまり、トップバッターなのだ

「おっす、元気にしてるかな?」

「一夏、お待たせ」

「シャルロット……と、何故に織羽まで?」

「一回戦出場の織斑君を、激励してあげようと思ってね。大丈夫? 緊張してない?」

「大丈夫、いつも通りだ」

一夏は織羽に、軽く手を振って見せる。

「ふうん。なら、いいんだけどね」

「……?」

織羽はそんな一夏を見て、何故か怪訝そうに呟いた。

「一回戦か……僕は手札とか真つ先に晒しちゃうから、あんまり好ましくないんだけど……一夏は？」

「俺はむしろ早い方が良いな。後だと色々考えちまいそうだし、それに隠せるほどの手札なんて無いからな」

シャルロットにそう言っただけで見せると、彼女は目をパチクリとさせ、そしてクスツと笑った。

「なるほど、そういう考え方もあるね。なんだか一夏らしいよ」

『一夏、そろそろ組み合わせの発表だよ？』

春斗の言葉にモニターへと視線を戻す。シャルロットと織羽も、それにつられてモニターへと向いた。

会場を映していたそれが、トーナメント表へと変わった。

「さて、俺達の相手は……ッ!？」

「これ……!!」

「あらまあ。いきなり……それに、これは……」

『まさか、こつなるか……?』

トーナメント表を見て、それぞれがそれぞれの反応を見せる。

【織斑一夏 シャルロット・デュノア】VS【ラウラ・ボーデヴィ  
ツヒ 篠ノ之箒】

それが、第一回戦の組み合わせであった。

「……………」  
もう一つの更衣室では、その組み合わせに啞然とした箒がいた。

一夏に断られ、ならば織羽にと頼むも、こちらも既にパートナーが決まってしまうていた。

その結果、自分のパートナーが抽選でラウラに決まった時にも啞然としたが、それに輪をかけて、これは何という皮肉だろうか。

箒は視線を、隣に向ける。

そこにいるのは、パートナーであるラウラ・ボーデヴィツヒ。

「……………」  
何を思っているのか、ラウラはわずかに口角を釣り上げていた。

その顔に、箒は覚えがあった。

そこにいるのは、かつての自分。

姉がISを生み出したせいで一夏達と離れ離れになってしまった。姉に振り回され、何度となく転校を繰り返して、誰とも連絡をとることを許されず、心身ともに参っていた筈はいつからか、過去に縋るようにして剣を振るっていた。

己を鍛える為ではない。己の憂さを晴らす為に。

積み重なってきたものを叩きつけるように、相手を打ちのめした。

大会で全国優勝をしたというのも、その結果でしかない。

勝ち、淀んだ喜びに浸っていた筈の目に映ったのは、敗れ、どうにも出来ない悔しさに涙する相手の剣士の姿。

あの瞬間、自分の今までやってきた事がどれほどに醜い事であったかを思い知らされた。

今のラウラは、正しくその時の自分そのものであった。

「っ……っ！」

不快さを払うように、筈はギュッと金属板プレートを握りしめた。

（春斗、私は……この力を誤らずに使いたい。これを与えてくれた、お前のためにも……っ！）

もう過ちを犯さない。

その為の道標は、この手の中にあるのだから。

ついに、アリーナに四機のISが現れる。

専用機三機と、量産機一機。注目はやはり揃い踏みした専用機である。

「あれ？ ”真打鉄”って……何？」

「本当だ。何だろう……？」

アリーナの中空に浮かぶ空間モニターには、選手とそれぞれの機体名が載っている。

それを見た観客のざわめきに、戸惑いの色が混ざり始めた。

『これより、学年別トーナメント一年の部 一回戦 第一試合行います』

アナウンスが場内に響き渡る。

『尚、今回は篠ノ之篤選手のISに、打鉄専用特殊プログラム”真打”が導入されております。他の打鉄と区別する為、登録名は”真打鉄”となっております』

「プログラム”真打”……？」

「ふむ。なにやら面白そうな……」

貴賓席の来客も、興味有りげな表情を見せる。

『このプログラムは【擬似フォーマットフィッティング】によって、専用機並の反応速度を可能とするもので、本トーナメントでは、今後の公式戦においての使用を視野に入れた実験を兼ねております』

「ほほう、流石はIS学園。そんなものを何時の間に……」

「擬似フォーマットフィッティング……一体どれほどのものか、楽しみですね……」

アリーナの客席にいる研究者は、興味深そうにそれを聞いている。

「うーん……何で篠ノ之さんが、そんなのテストをやる事になったんだろうね？」

「もしかして、お姉さんの事が関係しているとか？」

「でもでも、そんな凄いプログラムがあるなら、アタシも使いたかった〜っ!!」

控え室を兼ねるロッカールームでは、同じ一組の面々がアナウンスを聞きながら、それぞれの反応を見せていた。

「プログラム”真打”か。随分と大仰な名前だな？」

上方のそれを見やりながら、ラウラが呆れ気味の声を出す。

そもそもの性能が違うのだから、どんなプログラムであろうと、専用機とデチューンされた訓練機では勝負にさえならない。彼女はそう思っている。

「大仰ではない。これは専用機と渡り合う為に用意されたものだ。これで負けるなら……それは、私の腕のせいではない」

しかし、箒がキツパリと言い切ると、ラウラはフン、と鼻を鳴らした。

「一応言っておく。私の邪魔だけはするな」

「ならば私も言っておこう……お前では、一夏には勝てない」

「……何だと？」

ピクリと、ラウラの眉が釣り上がる。

「私が、あんな愚か者よりも弱いと言うのか……？」

明らかに不快という表情を見せるが、しかし箒は全く動じない。

「ああ、お前には力がある。だが……弱い。だから、一夏には絶対に勝てない」

「良いだろう。ならば、あの男を完膚なきまでに叩き潰し……その言葉を訂正させてやろう」

力こそ絶対。力こそが全て。そう断言するラウラに、箒はただ「好きにするが良い」と返した。

「一夏、それ本気なの……！？」

「ああ。ラウラとは一対一で戦う。シャルロットは碁を押さええてくれ」

開始直前、一夏の申し入れにシャルロットは驚きを隠さないでいた。「でも、彼女の實力は間違いなく一年でトップだよ？ 一夏一人でどうにかなる相手じゃないよ！？」

「それを言うなら、碁の方だってそう簡単に行かない相手だぞ？ あの”真打”は元々、量産機で専用機に勝つ為に、春斗が作ったプログラムだからな」

『一夏！？』

「え……ッ！？」

いきなりの発言に春斗は思わず声を上げた。だが、吐いた言葉は無かった事には出来ない。

「ど、どうしてそれを篠ノ之さんが使ってるの……！？」

「春斗が調整をして碁に渡したんだよ。このトーナメントで優勝できるようにつて」

「つまり篠ノ之さんは、春斗と連絡が取れるって事なんだね

……っ？」

「『……は？』」

一夏としては、あのプログラムの恐ろしさを教えて、一対一を納得してもらうつつもりだったのだが、どうやらシャルロットは斜め上に

解釈してしまつたらしい。

「そっか。篠ノ之さんは春斗と連絡取れるんだ……そっかそっか…

…」

「あ、あの……シャルロットさん？」

「分かつたよ一夏。篠ノ之さんは僕が相手をする。でも、危なくなつたらフォローは入れるからね？」

「わ、分かつた……それでいい」

何か物凄い迫力を出し始めたシャルロットに、一夏はコクコクと頷く。

『シャルロットの事はまあ、良いとして……本当に情報解析しなくて良いんだね？』

『ああ。アイツとは……俺の力だけで、決着を付けないといけないんだ』

最初の切っ掛けは、第二回モンド・グロツソの裏で起きた織斑一夏誘拐事件。

その事件があつたから千冬はドイツに行き、そして現役を引退。

ドイツ出向時の教え子であるラウラが、自分と関わっていたという理由で、鈴とセシリアをあそこまで傷めつけた。

トーナメント不参加というのは、国家代表候補生である二人のこれから対して、マイナスとなるだろう。

あらゆる出来事が、あの日の弱かった自分から始まっている。

だからこそ、これらの決着は織斑一夏が付けなければならない。

幼稚な考えだと笑われようと、ここで退いたならもう二度と、大事な者を守る為に戦えなくなる。

そしてきつと、春斗に頼らなければ戦えない自分である事に、これからは甘んじてしまう。

いつになるかは分からない。だが、いつか二人は分かれる時が来る。

だから、春斗に頼らない自分である為に。

『俺は……俺だけの力で戦って……そして勝つ！！』

『……分かった。僕はこれ以上何も言わないし、情報分析もしない。それでいいね』

『ありがとう、春斗』

『別に。ただ、感情に任せて戦わないようにね？』

『オツケー。いつも通りにクールに往くさ』  
『……………いつ、クールだったのさ?』

開始10秒前。

シャルロットは銃火器のロックを外し、両手に構える。  
一夏も雪片を展開させ、片手で握りしめた。

開始5秒前。

箒が太刀を抜き、腰に添えるようにして構える。  
ラウラは組んでいた腕を解き、ダラリと下げた。

開始3秒前。

それぞれが見据える

敵。

それは己の外か

内か。

試合、開始。

「「叩きのめす」  
「「勝負っ！！」  
「「

ついに、決戦の幕が開いた。

第17話 向き合つもの、向かい合つもの（後書き）

次回、それぞれの激突です。

書いていて思いましたが……シャル、軽くヤンデレしてるよね？  
気のせいですね、きっとw

第18話 VS シュヴァルツェア・レーゲンノカと強さ(前書き)

ラウラ、箒組との戦闘回。

ー夏？ラウラ？シャルロット？

いいえ、箒無双ですw

## 第18話 VS シュヴァルツェア・レーゲンノ力と強さ

試合開始の合図がアリーナに響き、四人が動き出す。

真っ先に動いたのは 一夏と箒。

「ウオオオオオオオオオッ！！」

一夏は瞬間加速を使い、ラウラに奇襲を掛ける。

AICの発動には集中力がある。なら不意打ちを決められれば、その精神的ダメージは後の優位に繋がる。

「フッ」

ラウラの腕がそれに合わせたように動く。

向こうも、この手を読んでいた。

先読みされている奇襲は、只の狙い易いのでしか無い。

「 だろうと！」

一夏はスラスタを左に噴かせて回転、そのままの勢いでラウラの右側面へと滑り込んだ。

それは甲龍戦でみせた、”スライドターン”と名付けられた急制動のフェイント。

「 思ったよっ！！！」

再度、加速して接近。

これは流石に読んでいなかったのか、ラウラは雪片の白刃をプラズ

マ手刀で受け止めた。

「なるほど。二度も同じ轍を踏むバカではないようだな……？」

「突進するだけが脳じゃねえよ……！」

ギシギシと、拮抗する力。触れれば斬り裂く雪片の刃を、一夏は強引に押し込む。

ガコン、という音がした。ハツとした一夏の眼前に、黒い縦穴があった。

「チイツー！」

一夏はプラズマ手刀を弾くようにサイドへ退避。直後、レールキャノンが咆哮した。

「接近戦がお望みか？ ならば、A I Cを封印してやるう。遠慮無く来るが良い！」

「そりゃ、泣けるお気遣いだなあっ……！」

春斗からの作戦や解析も聞かず、一夏は独自でA I C対策を考えた。しかし、凡人の頭脳ではそれは思いつく筈もない。だからこそ、開始直後の不意打ちを考えた。

だが、そんな程度をラウラが読んでいないと思えなかった。

だからこそ、スライドターンを絡めた一手を打った。

結局は届かなかったが、ラウラが接近戦で挑んでくれる事は有り難い。

ワイヤーブレードが飛び、一夏は雪片をブレードに……戻して対処する。

バリア無効化攻撃は当たれば大きいが、燃費が悪い。ならば、通常はこの状態で振るう方が効率的だ。

何度となく練習を重ね、雪片の刃を展開させるまでの所要時間は、僅か0.14秒となっている。

だからこそ、こうしてブレードで打ち合える。

「どうした、貴様が望む距離だぞ？」

両手に展開したプラズマ手刀を繰り出し、更にワイヤーブレードを数本ずつ、順に繰り出していく。

一夏は右手で雪片を振るい、左手で手刀を裁き、両足も使ってワイヤーブレードを返す。

「くっ……！」

ただ一瞬のチャンスを待って、一夏はひたすらに耐える。

戦闘可能距離。手数が多さ。近接、物理攻撃戦殺しのAIC。シュヴァルツエア・レーゲンは、白式とはとことん相性の悪いISである。

その上、ラウラの操縦技術は一夏とは天地の差がある。

「……………」

その差を埋められる唯一の可能性  
夏を見守っていた。

春斗は、白式の中から

ギョツと袖を掴み、今にも動かんとするその身を抑えこむように。

筭は一直線に、シャルロットへと向かっていった。

狙いは単純。ラウラは一夏に勝てない、そう確信している。

だからこそ、シャルロットを真つ先に倒す。

彼女を放置しておく、後々一夏と戦う邪魔になるからだ。

「イエエアアアアアアアッ！！」

気合と共に、太刀を真つ向から振り下ろす。

だがシャルロットは冷静にそれを回避。同時に六二口径ショットガン 《レイン・オブ・サタデイ》の引き金を引いた。

バァンッ！！ という強い衝撃が、真打鉄を打ち据える。

「っつ……!!」

「悪いけど、篠ノ之さんには負けられないよ……!!」  
更にショットガンを発射。だが、箒はすぐに回避して斬り返した。  
僅かに切っ先がシールドをかすめる。

シャルロットは高速切替ラビッドスイッチでアサルトキャノン 《ガルム》を展開。  
箒に向かって発射した。

「縮地!!」

瞬間、箒の姿が視界から消える。次いで「ドンッ!」という衝撃が  
シャルロットを襲った。

眼前には真打鉄の姿。実体シールドを使った体当たりをされたのだ。

ガルムの砲弾が、誰も居ない空間で爆発した。

イゲンニッションブースト

「瞬時加速!? 防御型の打鉄で、この速さ……っ!??」

「名前を間違えるな! これは真打鉄まここのうちがねだッ!!」

砲撃に対して、あえて接近して実体シールドをシャルロットにぶつ  
けた箒は、その影から刃を繰り出す。

シャルロットはすぐに近接用ブレード 《ブレード・スライサー》  
でそれを受け止めた。

「甘いよ!!」

同時にキャノンを再びショットガンに切り替え、箒に撃ち込む。

「ちいつ……!!」

実体シールドで受け止めつつ、距離を離されまいとするが、ショット  
トガンの制圧力は容易く箒の足を止めてしまった。

ひとまず間合いが離れ、互いに戦局を止める。  
シャルロットは、シヨットガンからアサルトライフルに切り替え、  
箒も太刀を改めて構え直す。

「流石、春斗が組み上げたプログラムだね。普通の打鉄とは大違  
いだ」

「この事を知って……!? そうか、一夏からか……そうだな、  
確かにシャルロットの言う通りだ」

確かに今のところではあるが、箒は専用機と真っ向からやり合えて  
いる。

春斗のプログラムの凄さを改めて感じると共に、それを振るえる自  
分を誇らしく思う。

なるほど。”専用機を持つ”という事はこれ程に誇らしい事なのか。  
と、昂揚する心につい、口元が歪んでしまう。

「……ずるいよ、篠ノ之さん」

「むっ……?」

口元を正し、シャルロットに集中しようとする、何故かズルイと  
言われた。

「そのプログラムを使ってるってことは、篠ノ之さんは春斗と連絡  
が取れて、そして彼に頼んだ……そういう事なんですよ?」

「い、いや違う! 連絡先など知らないぞ!」

背筋が薄ら寒くなるような迫力が、正面の相手から発せられている  
気がした。

「ウソだっ!!」

「ウソではないッ!!」

慌てて強く否定するが、その効力は無かったようだ。

「だったらどうして、彼がそんな物を用意するっていうの!？」

「そ、それは……だって、あいつがくれると言うから……」  
モジモジとしながら答える箒。

実際に、箒が春斗のプログラムを使っている以上、言い訳に意味など無いのだが。

「ほらやっぱり! 春斗と話してるんじゃないか!！」

「なっ……!？」

シャルロットの誘導尋問に、箒は思い切り引つかかった。

「この試合……僕が勝ったら、春斗の連絡先を教えてもらおうよ……」  
「!」

「いや……だから、知らないと言っているだろう!？」

「そんなのウソだ!」

「ウソではない! 向こうから連絡が来るだけだ!! そもそも、どうしてそこまでアイツにこだわるんだ!？」

「っ……!？ そ、それは……あ……」

「あ……?」

「 逢いたいからだよッ!! 話したいからだよ!! それ  
がいけない事なの!？」

「っ……!？ シャルロット……まさかお前は?」

さながら鬼気迫る様相といったシャルロットに、箒は何かを感じた。それと同時に、あの時感じたものは誤りではなかったと納得した。

二人の間にどんな事があったかは知らない。だが春斗はきっと、彼女のために何かをしたのだろう。

そして、それを切っ掛けにして。

「春斗め……私など想わずに、この想いに応えてやれば良いものを……」

シャルロットの真っ直ぐな想いを受けて、箒はつい苦笑してしまう。

「……………それ、どういう事？」

「……………え？」

嫌にドスの利いた声が箒の鼓膜を揺らした。

その声の主　　シャルロットは、ドス黒オーラを立ち昇らせて、アサルトライフルとマシンガンを構えていた。

「『私など想わずに』って……………どういう事？」

「いつ……………！？　いや、それは……………」

「篠ノ之さん……………まさか春斗に告白されて……………オーケーしたの！？」

「ち、違っっ！！　告白はされたがちゃんと断ったぞー！？」

「つまり春斗を振ったって事！？　許せない！！」

「お前は私にどうしろというのだ！？」

「いっそ、全部無かったことにしてよ！！」

そう叫び、シャルロットがトリガーを引いた。

「無茶を言っっっ！！？」

襲いくる弾幕を回避しつつ、箒も叫んだ。

さて、ここでこのトーナメントのルールの一つを紹介したい。

『同チーム内における通信は、プライベートチャンネル個人回線を用いるが、オープンチャンネル対戦チームとの通信は全て、オープンチャンネル開放回線を使用しなければならない』

箒とシャルロットは敵チーム。当然、そのやり取りはオープンチャンネル開放回線で行

われている。

という事は、この会話はピットにいる人間にも聞かれているという事である。

「……………なんか、痴話喧嘩みたいなのが始まってますね……………？」  
真耶がポツリと呟いた。

「っ……………」  
千冬は何故か、天井を見上げて目頭を押さえていた。

告白して振られたなどという話を本人の前でされ、不特定の人間に聞かれるなど、拷問以外の何物でもない。  
不憫すぎる弟に、涙の一つも溢れそうになるというものだ。

「ぐおおお……………！　お願い、それ以上はやめて……………僕のライフはもうゼロだから……………！」  
事実、春斗は白式の中で胸を押さえて悶え苦しんでいた。

『春斗、お前……………』

「うつさいよ!?! 一夏は目の前のとイチャイチャしてりゃいいじゃないか!?!」

『俺にキレるなよ!?!』

これ以上は触れまいと、一夏はラウラの攻撃を捌く事に集中した。

「でも、織斑くんも篠ノ之さんも、良く食らいついていますね……」  
「…… 一見すればな」  
「とうとう?」

「デュノアとボーデヴィツヒが、互いに牽制をし合っているからこそ、何とか打ち合えているだけだ。本当の一对一なら、既に押し切られているだろう」

千冬は攻防の入れ替わり著しい戦局を冷静に分析して見せる。

シャルロットは常に、一夏とラウラの戦局に意識の一部を向け、いつでも援護射撃を行えるようにしている。

そして、ラウラはそれに気付いているのか、攻撃の要所要所でシャ

ルロットに意識を傾けている。

「それにしても……相変わらず、戦闘力を強さと思っているのか……」

ラウラを見て、千冬は呆れ気味に嘆息する。

ドイツ出向の際、千冬はラウラを鍛えた。その時、何度となく教えたのだ。

力と強さは、似て非なるものだ。

だがやはり、ラウラはそれを理解出来ないうたようだ。

「何をやっている……バカ者め」  
対する一夏も、妙に動きがおかしい。  
春斗のサポートがある以上、ラウラの攻撃の際を突く事は不可能ではない筈だ。

だが、ここぞというタイミングを、一夏は何度も外していた。

（まさか、一夏一人で戦っているのか……？）

と、千冬は考えハツとした。

まさか春斗のサポートを得られない事態  
起こったのではないか。                      春斗の身に何事か

もしそうなら、今すぐにも、この試合を止めなければならぬ。  
だが、それなら一夏があんな風に戦っているだろうか。

「何をやっている………バカ者」

同じ言葉に違う意味を込めて、千冬は呟いた。

拮抗しているように見えた戦いは、いよいよ動き出す、

「捕らえたぞ」

「しまった!？」

ワイヤーがついに左腕を絡めとる。そこに襲いかかる、数本のワイヤーブレード。

残る右腕、両足でそれらを防いで捌くが、ガリガリとシールドが削り取られていく。

ラウラは鈴にしたのと同じように、一夏をワイヤーごと振り回した。  
「潰れるが良い」

「うおおおおっ!?!」  
白式は大きく上空に振られ、そのまま一気に外壁目がけて投げ飛ばされた。

ズウウウンッ!

一夏は為す術も無く、壁と激突。

「がはっ……!!」

ISの防御能力で怪我こそ無いが、だが全身をしたたかに打ち付け、肺から強制的に空気が吐き出される。

「どうだ、苦しいか? ならば今、楽にしてやるっ」

ラウラはにい、と口元を歪め、レールキャノンの照準を一夏に合わせる。

「クソッ……!」

キャノンが火を噴くと同時に、一夏は離脱。その背を爆発で飛び散った破片が襲ったが、それどころではない。

シュヴァルツエア・レーゲンのレールキャノンは、火薬炸薬と同時に電磁加速をさせるハイブリッドタイプ。リボルバー式を採用しており、弾倉が回転して連射を可能とする。

一夏は春斗のしてくれた説明を思い出しながら、苦々しく舌打ちする。

あれの一発でも喰らえば、戦局は一気に不利になる。

何か、この状況を打破する手立ては

「っ……………!!」

一瞬、脳裏を過ぎったのは 弓を構えるISの姿。  
それだけは絶対に駄目だと、頭を振る。

自分だけで、自分の力だけで勝たなければ意味が無いのだ。  
だが、実力差は一目瞭然。

ならばどうする。と、思考した瞬間、砲撃が止まる。

シリンダーの弾薬が底をついたのだ。

この一瞬。此処こそが勝機だと判断した一夏は、イグニッションブースト瞬時加速で急接近。

「ハアアアアアアアアアアッ!!」

気合と共に雪片を振り上げ 　そして、空中で動きを封じられた。

A I C 　”停止結界”。

ラウラは右手を向け、白式を容易く空間に縫いつけてしまった。

「遊びは終わりだ……!!」  
「クソッ!!」

どうにかしようと思えど足掻くが、白式を捕らえた結界はビクともしない。

その眼前に、暗黒の入口を思わせる不吉な闇が向けられた。

「一夏っ!!」

「ッ!!」

彼方から届く援護射撃。

ガルの砲弾が、勝利を確信したラウラ向かって放たれたのだ。

「ちっ!!」

AICを解いて回避しようとするよりも早く、ラウラを爆発が襲った。

「ぐおおおおおっ……!!」

自慢のレールキャノンが爆散。その衝撃でバランスが崩れる。そして、一夏が結界から開放された。

「ウオオオオオオッ!!」

ここぞとばかりに一夏は咆哮して、展開させた雪片を振るう。

「舐めるなああああああっ!!」

ラウラが激昂し、六門全てのワイヤーブレードで、白式にカウンタ―を決める。

装甲を突き刺され、一夏はアリーナの壁に再び叩きつけられた。

箒はシャルロットの、ラビッドスイッチ高速切替をフルに使った戦闘術『ミラーージュ・デ・デザ砂漠の逃げ水』に苦戦していた。

遠、中距離を射撃で制し、近接戦に持ち込めば近接戦装備で対応。即座に射撃武器で反撃。そして再び間合いを取る。

という、さながら砂漠の幻影に踊らされる旅人の様に、弄ばれていた。

「くそつ、何とかしなければ……！」  
箒は、ままならない状況に舌打ちした。

防御型の打鉄はまだまだ持つ。だがギリ貧でもある。  
先程も縮地を使い攻め込んだが、その速度は見抜かれており、あっさりと対処された。

さすがは代表候補生。その実力は自分とは比べものにならない。  
だが、だからといって負けてやるつもりなど、毛頭ない。

ほんの僅かな切っ掛けがあれば、この刃を浴びせてやるものと、その気迫が更に高まっていく。

「一夏っ!!」

その時、シャルロットはアサルトライフル《ヴェント》を撃ちながら、アサルトキャノン《ガルド》をラウラに向けて発射していた。

「!!!」

わずかに逸れた意識。薄まった弾幕。今こそ、真打鉄の真価を発揮する時。

一足 縮地

箒は縮地を使い、一気に攻める。

「ッ!!」

シャルロットは即座に反応。向かって右へと回避。そのままショットガン《レイン・オブ・サタデイ》を構え。

二足 風切

「っ!?!」

箒は一瞬で、シャルロットの左側面に踏み込んでいた。驚愕するシャルロットに、その勢いのまま腰の回転で刃を振るう。

が、シャルロットは回避方向を変え、後退。刃は空を切った。

そして今度こそと、レイン・オブ・サタデイを箒に向け。

### 三足 震雷

「ツエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」  
箒はそこから更に加速。正面のシャルロット目掛けて突貫。ブレードを刺突で繰り出した。

今度こそ回避できず、逃げ水はついにその実体を捉えられた。

「……………っ!!」  
箒の一撃はあっさりとバリアを抜け、R リヴァイブ・カスタムのIS装甲に突き刺さる。

「ウオオオオオオオッ!!」

巨大な弾丸と化した真打鉄の、全ての威力を一点集中させた刺突は、R リヴァイブ・カスタムの防御を上回る一撃。

「うあああああああああッ!!」  
シャルロットは為す術無く、派手に弾き飛ばされた。

地面を数度転がって、もうもうと土煙が上がる。そして、シャルロットがその向こうへと消えた。

「はあ……………はあ……………ゴホ、ゴホッ!? ……ペッ!」  
箒は乱れた息と共に、咳き込む。そして、地面に赤い唾を吐き捨てた。  
す

PICですら制御し切れないGで、気管のどこかを損傷したようだ。  
「たかがこの程度で……私もまだまだ、鍛え方が足りないな……」  
ダメージを負った自分に苦笑しつつ、筈は太刀を構え直す。

ついに届いた。春斗の思いの込められた一撃が、シャルロットをついに捉えたのだ。

息も上がり、体もGの負荷で震えている。

だが、心はどうだ。何と高揚していることが。

「勝つぞ……私は……勝つてみせる!!」

対するシャルロットは、その逆であった。

打鉄では 否、既存するISの何処にも、あんな無茶な機動を行う機体はない。

ならばあれは、春斗が作ったオリジナルの機動プログラムだ。

「くっ……!!」

ひび割れ、砕けたリヴァイブの装甲。

まるで、自分の心を抉り取られたようだった。

デチューンされた訓練機を、たった一つのプログラムで専用機並に  
してしまふ。

そんなとんでもない物を、春斗は筈の為だけに用意して、そして渡  
した。

「っ……………!!」

悔しい。まるで春斗に、自分では彼女には勝てないと言われている  
ようで、たまらなく悔しい。

「負けない……！絶対に負けない……！！！」

機体ダメージは大きい。『砂漠の逃げ水』は無理だろう。  
ならば、真っ向から叩き伏せる。

（一夏、ゴメン……そっちのフォローは出来ないかも知れない……  
！）

砂塵の向こう、死地を踏み越え活を見出した剣士と、シャルロット  
は正面から対峙した。

「な、何ですか……あのとんでもない機動は！？  
発……！！？」  
イグニッションブースト 瞬時加速の三連

ピットの真耶が、そら恐ろしいものを見てしまったように、目を見  
開いていた。

「アレは瞬間加速ではない。  
イグニッションブースト オバーアクセル  
瞬速超過というらしい」

「オーバーアクセル  
瞬速超過……!?」

聞いたことのない言葉に、真耶は眉をひそめる。

「瞬間加速は、一瞬で最高速に乗る技術だが……あれは一瞬だけ、  
イクシジョンブースト

”トップスピードを超える速度を得る”技術だ」

「なっ……!?!」

千冬の説明に更に目を見開く真耶。言葉にするのは簡単だが、それを実現させるとなれば話は別だ。

「オーバーアクセル瞬速超過は発動距離が短い。故に、その真価を発揮するのは連続発動させた時だ」

モニターに映る筈の機動。その跡は地面にまざまざと残されている。「間合いを一瞬で詰める一足の縮地。回避行動を追撃する二足の風切。そこから更に迫撃する三足の震雷。あの距離で、あの速度を躲せる者はそうはいないだろう」

シャルロットの機動はきれいな流線を描き、しかし筈の追撃機動は全て直線。

それは正しく”稲妻”であった。

「あの一撃……リヴァイブは、かなりのダメージを負いましたね?」  
「だが、PICの保護を越えるGが操縦者を襲う瞬速超過だ。オーバーアクセル篠ノ之の体も相当の負荷を負っている筈……勝敗を分けるのは互いの精神力だろう」

モニターには睨み合う二人の姿が映っていた。

「シャルロット……ッ!？」

一夏はその光景に、思わず叫んでいた。

向こうでもうもうと上がる土煙。それを成したのは 箒。

突き出したままの太刀を引き戻し、箒は咳き込んだ様子を見せながらも、気丈に踏ん張っている。

強い。

それだけが、一夏の感じたものだった。

それに比べて、ラウラに一矢も報いることの出来ない自分の弱さに、苛立ちが膨れ上がる。

やはり、自分は何も変わっていないのか。

強くなりたいと願い、それでも弱いままなのか。

力が 欲しい。だが、それはない。

絶望が、諦めが、一夏の心を屈させる様に押し掛っていく。

「一夏あつ！！ 何だその、不抜けた顔はあつ！！」

「オープンチャンネル ツー!?」  
開放回線から響く、怒号。

見れば箒が、激しい表情で一夏を見据えていた。

「ほ、箒……?」

「貴様、何時までそんな奴に手間取っている!! お前は……そんな暴力に屈する程度の”強さ”しか無かったのか!？」

「っ……………!？」

「諦めるな! 抗え!! 立ち上がって……………そして勝て、一夏っ!!」

箒は、シャルロットに向き直り、太刀を正眼に構える。

「私は……………勝つぞっ!!」

箒の瞳は揺るがない闘志に燃え、輝いていた。

ああ、そうだ。

自分が欲しいと思ったのは、あの瞳だ。

”力”が欲しかったんじゃない。守れる”強さ”が欲しかったんだ。そんな事を、忘れていた。

『春斗……頼みがある』

『何……？』

『俺を一発、ぶん殴ってくれ』

『………良いの？』

『ああ、思いつきり頼む』

『分かった』

言っや、白式の左腕が黒く染まる。そして拳を握りしめて

ゴッー！！

「ブッ………！？」

その痛烈な一撃に、思わずたたらを踏んでしまう。

『お前……マジで思いつきりやりやがったな………！？』

『当然でしょ。ほーちゃんにあんな顔をさせたんだ……一発で済ませたのを有り難く思ってたよ?』  
黒が白になり、白式の左腕へと戻る。

「でも、サンキュー。目が覚めたぜ……!」

自分一人の力など大した事はない。  
何故なら、強さと力は同じではないからだ。

自らを蔑む必要など無い。  
胸を張って誇れ。自分を支えてくれる者がいる事を。

過去に重なる多くの関わりが、今の自分の  
織斑一夏の強さに  
なっている。

そして、これから関わる全てが  
織斑一夏の強さに変わって  
いく。

白式を与えた束。特訓を付き合ってくれた篤、セシリア、鈴。共に  
チームを組んだシャルロット。  
偉大なる姉、千冬。

そして　　ずっと共にある、我が半身。

『それで、情報解析はしておいたけど……アドバイスはある?』  
「いいや、要らない……」

頼もしき、最高のパートナー、春斗。

「もう、充分にもらってる!!」

その全てを賭して、打ち砕く。目の前の相手を。

「待たせたな……ラウラ・ボーデヴィツヒ!」

冴え渡る脳内に、今までの積み重ねがリフレインする。

「気合を入れ直した、か……下らんな。そんな精神論で戦力差は覆せはせんぞ?」

「そいつはどうか……?」

すでに、一夏は勝利していた。

零落白夜。それがその手にされた瞬間、一夏はラウラに勝っていたのだ。

639

「一発逆転……見せてやるぜ!!」

## 零落白夜 発動

変換されたエネルギーが、全身から朱いオーラのように立ち昇る。雪片がその輝きを増し、全てのエネルギーを無力化する力を現出させた。

「ふん。そんなもの……!!」  
ラウラは嘲笑った。

零落白夜の能力は驚異だ。だが、使い手が一夏であるならば、恐れることなど無い。

むしろ、それを使う一夏に愚かさを覚えずにはいられない。

あの力に相応しいのは、世界で唯一人。

自分の憧れであり、理想である　織斑千冬だけだ。

汚らしい偽物の力など、叩き潰す。

レールキャノンを失っても、ワイヤーブレードは六門健在。  
シャルロットは、あのダメージでは援護は出来ないだろう。

もう、停止結界から逃れる術など無い。

「うおおおおおっ!!」

一夏は真っ向から向かっていく。

それに合わせてラウラが右腕を持ち上げ、AICを展開させようとした。

「くらええええええええっ!!」

一夏は雪片を振り抜き

零落白夜を解放した。

「っ……!？」

ラウラは驚愕した。

間合いの外から一夏は刃を振り、それに伴って風が吹き荒れる。

A I C 無敵の対物理結界は朝日に散る霧の如く、文字通りに霧散したのだ。

白式は振り下ろしたままの姿で、突進してくる。

ラウラはすぐにワイヤーブレードを発射しようとする。

「ッ!？」

動かない。正確には射出しようとした瞬間、推力が失われたのだ。ならば回避と、スラスターを噴かせるが、これも推力が失われる。

一体、何が起こったのか。ラウラは理解できず混乱した。

一夏が行ったのは、零落白夜の解放。

アンノウンの戦いの際、春斗は雪片の破損を防ぐ為にそれを行った。

そのプログラムは、白式の中に残されていたのだ。

A I Cの領域は見切れなかった。

ならば、全て纏めて叩き潰してしまえばいいだけの事だ。

遮断シールドさえ破壊する零落白夜だ。解放しても、A I Cを無力化する程度は造作も無い。

更に、あらゆるエネルギーの無効化は推進エネルギーにも及ぶ。つまりは、相手に反撃と離脱を許さない副次効果をも生んだ。

名付けるならば『波動・零落白夜』。

二人の天才によって誕生した白式の新たな力にして、暮桜を超える新しい零落白夜の姿。

時間にすれば一秒程度。推力は直ぐに回復した。が、それだけあれば白式には充分過ぎた。

「捉えたぜ、シュヴァルツェア・レーゲン!!」

「がああああああつ!?!」  
振り上げられる刃が、ラウラを斬り裂く。

絶対防御が発動し、シールドエネルギーが一瞬で削り落とされる。

「おおおおおつ!?!」

「ぬあああああつ!?!」

更に振り下ろしての二撃目を喰らい、ラウラは吹き飛ばされる。

ここで、雪片が使用限界を迎え、ブレードへと戻る。

だが一夏は構わずに突撃。最高速度で、最短距離を飛んだ。

後、一撃。雪片の刃を二度浴びて、最早シールドは底を尽きかけている筈。

AICは、あのダメージではもう使えない。

迷うな。踏み越えろ。この切っ先を奴にぶつけるまで。

「これで……どうだあああああつ!?!」

だがそれは届くことはなく、一夏は逆に、紫電によって弾き飛ばされていった。

シャルロットは 《ブレット・スライサー》を構え、イグニッションブースト瞬時加速で突撃を掛けた。

対する筈も、オーバーアクセル瞬速超過で真っ向から打ち合う。

火花を散らせる刃。シャルロットが動く。

左腕部のシールドがパージされ、そこに覗くのは無骨なる弾倉付のシリンダー杭打ち機。

第二世代武装最強の威力とされるそれは、六九口径パイルバンカー

グレー・スケール《灰色の鱗殻》。

別名【盾殺し】。シールド・ヒアサー

「おおおおおおっ!!!」

シャルロットが吠え、真打鉄目掛けてそれを突き出す。

ズドンッ!!!

「がは　っ!!!」

非固定部位であるシールドで受けるも、あっさりとそれを貫いて、  
衝撃が箒を襲う。

リボルバー式は連射が利く。

そのまま更に弾倉シリンダーを回し、次弾を装填。

「舐めるなあっ!!」

箒は左手に薄刃の刀を展開させ、それを突き出した。  
だが構わず、シャルロットが次を撃ち出す。

「グオっ!!」

「ッ!？」

シャルロットが更にと弾倉シリンダーを回そうとした時、驚愕した。

回らない。

弾倉の僅かな隙間に、箒の突き出した刃が突き刺さっていたのだ。

「ハアアアアアアッ!!」

その動揺を見逃さず、箒はあらん限りの力でシャルロットに向かう。

シャルロットも即座に灰色の鱗殻グレー・スケールをパージ。マシンガンを展開させ  
た。

互いに限界は近い。一撃を当てた方が勝利を掴む。

だがその勝敗は、突然の事態によって永遠に着くことは無くなった。

「ッ!?」

ラウラの絶叫と共に奔る、閃光と紫電。明らかな異常事態に、二人は戦いを止めていた。

「な、何だ……あれは!?!」

「シュヴァルツェア・レーゲンが……変わっていく!?!」

ISが溶けていき、その中に取り込まれていくラウラ。そして徐々に形を失っていく。

地に堕ちたそれは、早回しのように新たな姿を構築した。

ラウラを模ったような黒の全身装甲。フルスキン  
腕と足だけに最低限のアーマーを持ち、頭部には顔を隠すようなフルフェイスアーマーに赤いラインアイ・センサー。  
とても、シユヴァルツエア・レーゲンであったなどとは思えない変貌を、それは遂げていた。

そして何より、一夏を驚かせたのは      その手に握られた物。

「あれは……………まさか……………!?!」  
『雪片……………っ!?!』

かつて、世界を席卷した最強のIS操縦者。  
その亡霊が今、ここに出現したのだった。

第18話 VS シュヴァルツェア・レーゲンノカと強さ（後書き）

箒さん、マジ漢前w

次回、あのシステムとの決戦です。  
今度こそ、主人公が活躍する時です!!

第19話 VSヴァルキリーファントムノ本当に強くなる為に(前書き)

VTシステムとの戦闘回。

そして、2巻の話もいよいよ大詰めです。

シリアス展開、待ったなしW

第19話 VSヴァルキリーファントムノ本当に強くなる為に

全身に走る衝撃。

それはラウラにとって、絶対に認められないものであった。

二撃。たった二撃で、圧倒的優位は覆された。

それがもしも、シャルロットとの連携であったならば、まだ納得も出来よう。

だが、一対一。真つ向の勝負で、それを覆された。

迫り来る白式。その切っ先にまで闘志を漲らせて、織斑一夏が迫ってくる。

シールドエネルギーはあと僅か。最早、敗北は必至。

(認めん……！ 認められるものか……っ！！)

『お前では、一夏には勝てない』

『お前には力がある。だが……弱い。だから、一夏には絶対に勝てない』

(ふざけるな！ 私は弱くなど無い！！ 力があるという事は、そういう事だ！！)

ならば何故、お前は敗北の縁にいる。

(敗北の……縁?)

あの切っ先、触れれば墮ちる。深い深い闇の中へと。

(墮ちる……? また、あの”暗闇”に……?)

失敗作の烙印を押され、千冬と会おうまで彷徨い続けた  
とも思える闇に、また墮ちるといつのか。 永劫

あの男に、唯一にして完璧なるあの人を揺るがせる 許しがた  
いあの男によつて?

巫山戯るな! 私の力は、いつかあの人になる為にある!!

それを あの人の栄光を穢したあの男を、壊し尽くすどころか、  
逆に敗北を刻まれるだと。

許さない。許してなるものか。

欲しい。圧倒的で、絶対的で、全てを凌駕する ”力”が。

その呼び声に応えるように、何かが脈動する。

『 願うか？ 汝、自らの変革を望むか？ より強き力を欲するか？ 』

それはラウラに問いかける。

「望む……力を」

それがなんなのか、ラウラにはどうでもいい事だった。

『その身の全てを引き換えて、尚も望むか？』

「くれてやる……あの男を破壊できるなら……この”空っぽ”な私など……全て、キサマにくれてやる！！」

Damage Level D・(ダメージレベル D)  
Mind Condition Uplift・(精神状態  
戦意高揚)  
Certification Clear・(認証 クリア)

ラウラの脳裏に映るそれは、悪魔の契約か。  
だが、それでも構わない。

それで、許されざる者を屠れるのならば、そこに我が名を刻む事に躊躇しない。

【Valkyrie Trace System boot .  
(ヴァルキリートレースシステム 稼働)

「ぐうう……………ああああアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!  
「！」

ラウラの絶叫。一夏の渾身の一撃を阻むようにして、閃光と雷光が迸った。

「くうう……………っ!？」

雪片の切っ先が弾かれ、一夏の進撃も止まる。それどころか、白式は大きく弾かれてしまった。

『一夏、一旦離れて!!』

「くそっ……!!」

何が起きているのか分からず、一夏はそのまま間合いを取り直した。

その目の前で、シュヴァルツェア・レーゲンは見る間に形を失い、そして新たな形を取った。

生まれたのは、その手に世界最強の刃を携えた、漆黒の戦乙女。ヴァルキユリア

「あれは……まさか……!？」

『雪片……っ!？』

「ッ!!」

一夏は戸惑いと、それ以上の怒りを込めて雪片式型を構えた。

直後に戦乙女ヴァルキユリアは一足で踏み込み、中腰から居合に見立てた繰り出された一撃を放つ。

それは。織斑千冬の太刀筋そのもの。

「グッ!!」

構えた雪片式型が弾かれる。がら空きにされた懐目掛けて、戦乙女ヴァルキユリアは上段に刃を構えた。

「ちいっ!!」

一夏は即座に緊急回避。唐竹に振り下ろされた一閃は、僅かに胸部のIS装甲を斬り裂く。

「くそっ……！ 何でこいつ……ッ！」  
憤りと戸惑いと、混乱しグシャグシャになった頭で、それだけを何とか吐き出す。

今、振るわれたのは一夏が千冬から習った 《真剣》の技。

その時の事を、一夏も春斗も鮮明に憶えている。

『いいが一夏。春斗もよく聞いておけ。刀とは振るうものだ。振られるようでは、剣術とは呼ばない』

通っていた剣道場で、一夏の手握られているのは鈍色の輝きを放つ真鉄。

ズシリとした感触を与え、冷たく光るそれは 人を斬るために生まれ、作られ、磨かれ、鍛えられた存在。  
人の命を容易く奪う、美しい凶器。

『重いだろう。それが、”人の命を絶つ”という事の……重さだ』  
重い。とても、とても重い。

『この重さを振るうという事。それが、どういう意味を持つのか……良く考えろ。それが”強さ”という事だ』

敵しくも優しく、千冬が説く。  
命を絶つ刃を振るう、その意味と意義を。

「ふざけやがって……アイツ、よりにもよって……!!」

一夏の内側に、憤怒の炎が燃え上がり始める。

「一夏、落ち着いて!!」

「ツざけんな!! アイツは千冬姉の剣を……あれは、千冬姉だけのもんなんだぞ!？」

「そんな事は分かっているよ!!」

「だったら何で止める!？」

「それは　　ツ!!　一夏っ!!」

「　　ツ!？」

春斗の声にハツとして意識を戻すと、ヴァルキュリア戦乙女は、その眼前まで迫っていた。

黒塗りの刃が袈裟懸けに振るわれる。

速い。防御も回避も間に合わない。

「　一夏っ!!」

直前、影が滑りこんできた。そのまま太刀を持ってその一撃を受け止める。

「ぐうっ……!!」

「箒ッ!?」

「早く下がれ……!! でえいッ!」

寸での所で割って入ったのは、真打鉄を纏った箒であった。箒はそのまま戦乙女の刃を弾き、戦闘を開始する。

「シャルロット、一夏を下がらせる!!」

「分かった!!」

すぐにシャルロットが一夏を抱え、後方に退避する。

「待て、シャルロット!! アイツは……!!」

「ダメだよ! 今の白式にそんなエネルギーは無いでしょ!?!」

「っ……!!」

そう言われて、初めて気が付く。

ラウラとの戦闘のダメージに零落白夜の解放、雪片による攻撃でシールドエネルギーを含め、もう殆ど残されていなかった。

大きく距離を取った所で、シャルロットは一夏を下ろした。

「一夏はここに居て」

「シャルロット……どうする気だ!?!」

「僕は篠ノ之さんを援護する……!?! どういう事態か分からないけど、篠ノ之さん一人じゃ持たないだろうからね」

シャルロットが視線を送ったところでは、箒が戦乙女の攻撃に押し込まれていく姿があった。

『まずい! あのままじゃ……!!』

春斗は、あれの正体に一つの仮説を立てていた。もしそうなら、あれを一先ず止める方法はある。

だが、もしも間違っていたら その瞬間、箒はあの刃に斬り捨

てられるだろう。

「ぐっ……ぬっ……!!」

飛燕のごとく振るわれる刃。その切っ先が触れる度、装甲が切り裂かれていく。

まるで機械のように正確な動きに、真打鉄を持ちながらも、手負いの幕ではこの場に押さえるだけで精一杯だった。

(このままでは、やられる……!?)

何が何だか分からないまま、一夏が危ない事だけを悟って割って入ったが、もうこれ以上は持たない。

「ほーちゃん、太刀を捨てるんだ!!」

「ッ!?!」  
「オープンチャンネル」  
突如、開放回線に届く叫び。

その声を聞いた誰もが、驚きと戸惑いを抱く。

「この声……春斗か!?!」

「お前……!?!」

箒と一夏が、同時に困惑の声を上げる。

「は、春斗……?」

そしてシャルロットは、突然過ぎる出来事に思考を停止させてしまっていた。

「春斗、一体何処から……いや、太刀を捨てるとはどういう事だ…

…!?! そんな事をすれば……!」

「説明してる時間はない! 僕を信じて、太刀を捨てて下がるんだ

!! 早くっ!!」

「ッ……!!」

僅かな逡巡。そして、箒は戦乙女のヴァルキュリア一太刀を防ぐと、その手の刃を投げ捨て、一気に後退した。

「……………何？」

「箒は、すぐにでも攻撃が来るかと思いき身構えるが、しかし戦乙女ヴァルキユリアはその場で、まるで目標を見失ったかのようにその動きを止めた。」

「お前、あれが何なのか知ってるのか？」

「オープンチャンネル開放回線では言えない。でも、あれは暴走防止の為、迎撃行動だけに限定されてるんだ」

「だから、箒に武器を捨てろって言ったのか……………」

一夏の問いに、春斗は答える。

「オープンチャンネル開放回線は、秘匿性が低く履歴が残らない代わりに、その会話がピットで記録されている。」

なので、下手な事を言えば問題になってしまう恐れがあった。

言い換えれば、それだけ問題のある状態に今現在、一夏達はなっているという事だ。

「春斗っ！」

箒が警戒しつつ、一夏の所まで後退してきた。

「ほーちゃん、怪我はない？」

回線を、プライベートチャンネル個人回線を介した会話システムに切り替えつつ、応える。

「ああ。お前のくれた真打鉄を使っているのだ、問題などある訳がない。それで、お前は何処から……………もしかして、この会場に来ているのか？」

「……………ノーコメント。ていうか、あんな目に遭って言える訳無いでしょー!？」

「……………そうだな、すまん」

先程のシャルロットとのやり取りを思い出し、箒は頭を下げた。

そうこうしている間に、警報が鳴り響く。

『非常事態発令！ トーナメント全試合は中止！ 状況をレベルDと判断し、鎮圧のために教師部隊を送り込む！ 来賓、生徒は即時避難を！！ 繰り返す 』

「とにかく話は後だ。一夏、ここから下がるぞ？」

箒は一夏の腕を引き、下がるうとする。だが、一夏はその手を振り払った。

「……………駄目だ。アイツは、俺が倒す……………ッ！」

「一夏っ！！……………今のを聞いただろう？ お前がやらずとも、事態は收拾される。だから危険に飛び込む必要は」

「それは違うよ、ほーちゃん」

「っ……………！ 春斗……………！！？」

箒の言葉を遮るように春斗が言う。そして一夏も、ギョツと拳を握り締める。

「ああ、全然違うぜ。『俺がやらなきゃいけない』んじゃない。これは、俺が……………『俺達がやりたいからやる』んだ。他の誰も関係ない……………！！」

「一夏……………！！？」

「ここで退いたらもつ、俺は『織斑一夏』じゃなくなっちゃうんだ……………だから！！」

「奴を……この手でぶっ飛ばす!!」

シンクロする言葉。

余りにもな宣言に、箒は呆気にとられる。

「……で、エネルギーはどうするつもりだ？」

「うっ……!？」

そして、冷やかな現実をぶつけてやった。

「やれやれ、やっぱり一夏は一夏か……」

心底呆れたように、春斗が肩を竦める。

「おまつ!？ 俺一人だけかよ!？」

「バカだねえ。僕がそんな大事な事、忘れてる訳無いでしょう?」

「全くだ。春斗とお前の頭を一緒にするな」

ウンウンと頷く箒。

「なんだと、チクシヨウ!!」

「それで、一体どうするんだ？」

文句を言う一夏を無視して、箒は春斗に尋ねる。

「……箒、お前だつて分かってねえじゃねえか!？」

「私は良いのだ。何の考えも無いお前の方が、遥かに悪い」

「全く……ほーちゃんに当たらないですよ？ 恥ずかしいなあ」

「お前ら揃うと、本当に俺に優しくくないよな!？」

「……優しくする必要があるの？」

「お前は何を言っているのだ？」

「毒舌すぎるだろ！ いい加減、俺も泣くぞ!？」

言い合いながら、何時の間にか口元が緩んでいた。

三人揃っての時間。そこに空白の時など無かったかのように。

『……という事だから、少しだけ僕らに時間をくれる？』

ピットにいる千冬に、プライベートチャンネル個人回線を使って春斗は尋ねる。勿論、ログは残さないよう細工してだ。

「……それでいいのか、お前は？」

『前に言ってたよね……「何か、したい事はないのか？」って……これが、そうだよ』

「……」

『我儂言つてごめんなさい。それでも……姉さんの誇りを守るのは……僕達でいたいんだ』

申し訳なさそうに、しかし引く気のない程に強い意思を込めて、春斗は千冬に言い切った。

何を言っても無駄だと、千冬は分かっていた。

だから答える代わりに、一つの指示を飛ばした。

「教師部隊は現状で待機！ 指示があるまで、攻撃を禁止する……！」

『 ありがとう、織斑先生 』

「……バカ者。」姉さん”で良い」

『 ありがとう、姉さん……！ 』

「…………あの、織斑先生？今の通信は一体…………誰なんですか？」  
「あれは織斑春斗。私のもう一人の弟で、一夏の双子の兄だ」  
真耶に千冬はしれっと答える。

「…………えええええっ!?」「…………」

真耶とピットにいる生徒が、一斉に驚きの声を上げた。

「お、織斑くんは双子のお兄さんが!?」

「ていうか、何処から通信してるの!?」

「双子…………禁断の関係…………ジュール」

ドゴスツ!!

「…………言っておくが、これは他言無用だぞ?」

ギロリ、と凄まじい迫力で睨まれ、ピットがシン、と静まり返った。  
一人だけ、別の意味で静まっているが。

(もしかして、織斑先生って…………ブラコン?)

スパアアアアアンツ!!

「ヒギヤツ!?」

「何か言ったか? 思ったか?」

「な、何も言ってますせん! 何も思ってますせんっ!!」  
更に一人の生徒が、尊い犠牲となった。

「さてと、それじゃあ真打鉄からコア・バイパスでエネルギーを白式に移す。普通のISだと本当は無理なんだけど……そこは僕に任せて？」

「分かった。私はこのコードを、白式に挿せばいいんだな？」  
箒は真打鉄からバイパスコードを抜き、それを振って見せる。

「腰部後ろにコネクタがあるから、そこに繋げて。繋いだら、後はこっちでやるから」

「……よし、挿したぞ」

「……これは、ちょっとまずいかな？」

白式内でデータを見ていた春斗が、戸惑いの色を見せた。

「どうした？」

「真打鉄のエネルギーが少し足りない。これだと、一極集中でも零落白夜は使えないな……」

「何……!？」

「じゃあ、どうするんだ!？」

一夏とラウラ、箒とシャルロットの戦闘は二機に予想以上の消耗をさせていた。

こうなれば他から更にエネルギーを取るしか無い。そう考え、真っ先に浮かんだのは鈴であった。

「仕方ない。鈴ちゃんに来てもらって、甲龍から」

「待って！」

それを止めたのは、ずっと静かだったシャルロットだった。

「……僕のリヴァイブから、白式にエネルギーを移すよ」

「シャルロット……良いのか？」

一夏が聞き返すと、シャルロットは頷いた。

「うん。僕の方もそんなに無いけど……二機分なら、多分行けると思っから……えっと……」

そう言いつつ、彼女はまだ何か言いたげな様子だった。

「……あの、えっと……」

「悪いけど、今は君と話している時間は無い。後にしてくれるかな？」

「あつ……」

拒絶された。そう感じて、シャルロットの表情が曇る。

箒とのやり取りを見て、そこに踏み込めない壁のようなものを感じてしまった。

幼馴染。知らない春斗の姿を知る存在。

この学園に、それは二人もいる。

篠ノ之箒と、鳳鈴音。

エネルギーが足りないと言った時、ここにいる自分ではなく、何処かにいる鈴を頼ろうとした。

それが堪らなくて、思わず声を出していた。

きっと一夏からは、既に自分の事を聞いているのだろう。なら、拒絶されても、それは仕方ない事だ。

「だから一言だけ……ようこそ、僕の祖国へ」

「っ……！！」

続いたのは、優しくて柔らかな声。それだけで伝わってくる、彼の心が。

「うん、ありがとう……」 HARU ”ッ！”

「それじゃ、コア・バイパスを解放。」真打”を使って真打鉄より白式に、エネルギー移動開始」

「コア・バイパスを解放。リヴァイブから白式へ、エネルギー流出

を許可」

「っ……………」

コードを介して、二機のエネルギーが流れていく。

一夏は初めてISを動かした時のような一体感を覚えながら、鮮明になる世界観に集中を高めていく。

そして全てのエネルギーを受け渡し、真打鉄とR リヴァイブ・カ  
スタム？が、強制的に待機形態へと戻った。

「白式を一極限定で再起動。展開は雪片式型と両腕部……………！」

一夏は白式の、武装と腕部ユニットだけを残して他を量子変換する。  
防御は当然、無い。喰らえば怪我が、もしくは命を奪われるだろう。

圧倒的な危機感に、チリチリと頂が焼け付くようだ。

「二人とも……………サンキューな」

「礼などいらん。私達と春斗が手を貸したのだ……………勝ってこい、一

夏！」

「絶対に負けないで……………それと、春斗？」

「何……………？」

「その……………えつと」

言いたい事があるのに、それが多過ぎて全然言えない。

「……………これが終わったら、その時に聞くよ？」

「っ……！？ ……うん、分かったよ……！」

春斗が言うと、シャルロットの表情がぱあ、と明るくなる。

『……いいのか、そんな事言つて？』

『……うん、大丈夫だよ。それより今は ……！』

未だ動かないままの戦乙女を、ヴァルキユリア一夏と春斗は強く見据える。

「……よし、行くぞ！」

一夏は右手に持った雪片を大きく掲げる。そして、それに添えるようにして、”裏白式の左手”で柄を握った。

「行けるか、春斗……？」

「大丈夫、一夏の意識に同調させるから……遅れは取らないよ」  
ならばと、一夏は目を閉じて雪片を展開させる。

一意専心。

唯一つの為に、全てを削ぎ落として集中する。

### 零落白夜 発動

ヴウウウン……ッ！

何時ものように吹き上がる力。だが、それでは駄目だと、一夏は更に集中する。

もっと鋭く、速く、細く、何処までも研ぎ澄ませ。

喩えるならば 世界を覆う闇を斬り裂く、一筋の光のように。

力を、強さを二度と誤らない。その意志を想いを込めて指し示せ。

誰かのために強くある人を知っている。だから、そう在りたいと思うその心。

それを、一振りの刃へと変える。

スツと、一夏は目を開いた。

果たしてそこにあっただのは、光を固めたかのような一振り。強大な力を放つだけだったそれは、一夏の想いに応えたように、鋭い刃へと生まれ変わっていた。

光の刃を打ち込まれた 日本刀へと。

「ありがとよ、白式。それじゃ……行くぜ、偽物野郎！」

「僕達の前に出てきた事を後悔して……ここで朽ち果てる！」

二人は雪片を腰に添えて、刃を後ろに引いた。居合の型を取る。それに呼応するかのよう<sup>ヴァルキュリア</sup>に、戦乙女は刃を上段へと構え、向かってきた。

『いいか一夏。刀はその重さを利用して振るうのだ。刃を己の手の延長として、その切っ先にまで意識を通せ』  
『だから、こうだ!! ええい、ちゃんと見ているのか!? もう一度見せるぞ!!』

浮かぶのは、千冬の言葉と篝の姿。  
それらが重なり合い、一夏の動きへと変わる。

静かなる湖面に、前方から波が立つ。

(来る……!!)

<sup>ヴァルキュリア</sup>戦乙女が袈裟懸けに振り下ろした刃。  
それを一合して、容易く薙ぎ払う。

ギイインッ！

それだけで、黒い刃は砕け散った。

「ッ　ッ！ー！」

箒とシャルロットが驚きに目を見開くが、一夏と春斗にして見れば、それは余りにも当然の結果。

すぐさま刃を上段に構え、正中線を一閃した。

一閃二断。

千冬と箒に倣った

ヴァルキュリア 戦乙女が最初に見せたものと同じ技。

だが、どれだけ忠実に動きを再現しようとも、魂無き模倣品に本物が負ける道理など無い。

光が駆けると、その黒い肢体に亀裂が走り始めた。

「あばよ、できそこない模倣品……」

「亡霊は亡霊らしく……相応しい地獄へと堕ちろ」

『ッ……！』

断末魔の悲鳴か。戦乙女は、ヴァルキユリアそれを上げて碎け散った。

そして霧散していく黒い欠片の中から、抜け落ちるようにして、ラウラが現れた。

瞬間、ラウラと目が合う。

眼帯が外れ、そこに隠されていた【金色の瞳】が、一夏と春斗を映していた。

まるで、世界中の寂しさを詰め込んだような 余りにも切ない瞳だった。

「おっと」

雪片を捨て、二人がその手を差し出して、ラウラの体を受け止める。あれほどに尊大さを振るっていたその体は、少し力を入れてしまえば砕けてしまうのではないかという程に小さく、弱々しかった。

二人はその体を優しく静かに、横抱きにして持ち上げる。

「やれやれ……手間の掛かるお嬢さんだ」

「ま、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

二人に抱かれるその顔が、少しだけ和らいでいたように見える。

果たしてその言葉が聞こえたのか、それを知るのはラウラ本人のみである。

その後、試合は中止。  
その後の対応を協議するため、学園首脳部はてんやわんやである。

そんな事とは関係なく、一夏と春斗　そして鈴は、廊下を歩いて  
いた。

三人が向かうのは保健室。  
その後、ラウラがそこに運び込まれたので、病院に運ばれる前に見  
舞いをと向かっていた。

『全く……開放回線オープンチャンネルを使うとか、何考えてるのよ!?!』  
『いや、そう言われても……あの状態じゃ、ああするしか無かつた  
し……』

『だからって、下手したら面倒事になってたのよ!?!　少しは反省  
しなさいよ!?!』

『…………ゴメン』

鈴に厳しく言われ、春斗も流石に、これには頭を下げるしか無かった。

今やっているのは、声を介さないISの秘匿回線シークレットチャンネルを用いた思考会話。春斗のネットワーク改造の成果である。

『ところで…………結局、あの黒いのは何だったんだ？』

一夏が、ずっと疑問に思っていた事を尋ねる。

『あれは【VTシステム】だよ…………』

『VTシステム…………？』

正式名称【Valkyrie Trace System】。

最強のISを求め、単純明快な答え 最強のISと、その操縦者の複製品を作り出すシステム。

今は国際条約で研究、開発、搭載を禁止された完全な違法品である。

『何だつてそんなのが、シュヴァルツエア・レーゲンに…………？』

『さあね。それが軍の決定か…………それとも、彼女の知らないままに積まれていたのか？ でも、それを使ったのは彼女自身だ』

『どういう事だ？』

『VTシステムはその性質上、暴走の可能性と搭乗者の生命に危険がある。だから行動を迎撃に限定し、更に本人の認証でしか起動できない筈なんだ』

『つまり、あいつは…………そこまでして負けたくなかった…………？』

『どうだろうね…………？ 彼女の心は、想像するしか出来ないよ。あ、

この事は口外禁止だよ？ 鈴ちゃんもね？』

『ああ、分かってる』

『心配しなくても、言わないわよ。また誓約書なんて書かされたくないし』

鈴はそう言って肩を竦めた。

と、保健室から出てくる人影があった。

「千冬姉……っと、織斑先生」

「ん？ どうかしたのか、お前達」

「一応、見舞いって事で……ラウラは？」

「今しがた目を覚ました。だが、今は一人にしておいてやれ……」

千冬はそう言って、首を振った。

今はまだ、そつとしておくべきだという事のようにだ。

「分かった。大事ないなら、それで良いよ」

一夏は頷いて、千冬と共に戻ることにした。

「ラウラの事もそうだが……春斗。お前、デュノアと何があった？」

「……え？」

言語共有で一夏の口から、春斗の動揺が溢れる。

「ああ、あたしもそれ聞きたいなって思ってたんだあ……」

千冬と、そして鈴のジト目が突き刺さる。

「じゃ、俺は下がるから」

「待って一夏!？」

慌てて春斗が止めるも、一夏は容赦なく 《海岸》へと逃げてしま

った。

「さあ、キリキリと話してもらおうか？」

「千冬さん、思いつきりやっちゃって良いですか……？」

「ああ、許可する」

「いやいや、許可しないでよ!？」

「なら、一つ残らず話せ。隠してもすぐに分かるからな……？」

「……わ、ワカリマシタ……」

結果、春斗は圧力に屈したのだった。

「……なるほど、そういう事だったのか」

「道理で、フランスがいきなり第三世代開発を促進できた訳ね……」

春斗は全てを話した。

シャルロットとの関係、そして彼女のために第三世代ISを引換に

した事も。

一部始終を聞き、鈴と千冬は呆れ気味に首を振った。

「迂闊過ぎ」

「このバカ者」

「面目次第ありません」

春斗の胸中は、申し訳なさで一杯だった。

千冬は、あの戦いの後に起こった事を語った。

「……あの後、デユノアがピットまで来てな。お前の事を何度も聞かれた。通信履歴はないのか、どうすればこちらから連絡できるのか……それこそ、必死にな」

千冬のスーツの胸元に皺が出来ているのは、それが原因のようだ。

「……どうするのよ、あたしも見てたけど……あれ、相当だったわよ？」

幾ら通信回線を使った会話システムを作っても、肝心のISがエネルギー切れでは使用できない。

結局、シャルロットとの『これが終わったら』という約束は、果たされていないままだった。

「……姉さん。もう一つだけ、我俣を言わせてもらっても良いかな？」

「何だ……？」

「シャルロットに……言おじと思っんだ」

「「ッ……!?!」」

何を。などと聞く必要もない。

打ち明ける。

その身の事実を、他者に。

そう言っているのだ。

「待て、春斗！ 落ち着け!!」

「そうよ、何マジになってのよ!? それはマズイって!」  
二人が慌てて止めるが、春斗は静かに首を振った。

「シャルロットはね……僕が”体を失ってから出来た、唯一の友人”なんだ。僕は鈴ちゃんと同じくらい、彼女に救われてきた……だから」

春斗は少しだけ、恐れに震える手を握り締める。

否定される事が堪らなく怖い。それが直ぐにでも、自分の死へと繋がるかも知れないのだから。

「彼女との約束を……ちゃんと守りたいんだ」

友人を疑い、自分を閉じ込め、これ以上はそんな自分で在りたくない。

「信じてもらえないかも知れない。傷つくかも知れない……でも、それでも……このままの自分じゃ、きっとダメだから」

『春るんが目覚められないのは、もしかしたら春るん自身の問題なのかもね？』

世界最高の頭脳を持つ篠ノ之束の言葉が、春斗の脳裏に過る。

一夏は、自分の足で強敵に立ち向かった。

なら、今度は自分が

弱さと恐れる心に向きあう時だ。

自分とシャルロットが知り合ったのも、シャルロットがこの学園に  
来た事も、きつとその為に。

「 だから、変わるんだ。僕も”強くなる”為に……！」

カチリ。と、止まっていた針が一步、動き出した。

第19話 VSヴァルキリーファントムノ本当に強くなる為に(後書き)

というところで、ここからが春斗の戦いです。

シャルロットと春斗、向かい合うその結末は……？

次回も是非、お付き合い下さい。

第20話 “本当に”伝えるといいつと（前書き）

今回は難産でした。

賛否両論、分かれそうな展開です。

果たして春斗とシャルロットはどくなるのか？  
それではどうぞ。

## 第20話 ” 本当に ” 伝えるということ

シャルロットはピットへと向かっていた。  
春斗との通信履歴が、リヴアイブに残されていない事に気付いたのだ。

それは裏白式からの通信である事を悟られない為、春斗が細工を仕掛けた結果だったのだが、シャルロットにとって、それは大きな喪失感をもたらした。

一度触れてしまったそれが、掌から零れる様な  
恐怖に近い感  
覚。

急がなければ。その熱が消えてしまう前に。

その焦りが、シャルロットを走らせた。

モニタールームの扉が開くや、シャルロットは飛び込むように駆け込んだ。

「織斑先生ッ！ 春斗は……春斗は何処に!？」

そのまま千冬に駆け寄り、継るようにその胸ぐらを掴んだ。

普段のシャルロットでは考えられないような、命知らずな暴挙に、

その場にいた全員がギョツとした。

「っ……………落ち着け。生憎だが、あいつはここに居ない」

千冬は一瞬だけ驚いたような素振りを見せるが、すぐにその手を外す。

「そんな筈ありません！ それなら、春斗があんなタイミングで通信を入れられる訳がないですー！」

筈の危機に駆けつけたかのような通信。その後のISのエネルギー移譲に於けるデータ処理。

それらを考えれば、アーリーナの何処かに春斗が来ていると考える事は自然だった。

何より春斗は一夏の兄で千冬の弟。関係者として招かれていてもおかしくはない。

「春斗は居ない」

だが、千冬はそれをもう一度否定した。それでもシャルロットは食い下がる。

「……………だったら通信履歴を！ ピットにも通信しているのだから、それを……………！！」

「そ、それが……………残ってないんですよ……………」

「えっ……………？」

シートに座る真耶が、気まずそうな表情で振り返っていた。

「残ってないって……………どうしてですかっ!？」

「その……………通信自体に強固なプロテクトと、何重もの偽装がされていて……………ていうか、IS学園のプロテクトより強固ってどういう事ですかあ!？」

「山田君。あれは、プログラム構築に関してならば束にも比肩する。考えるだけ無駄だ」

「た、束って……………篠ノ之博士の事ですかっ!？ そ、そんな凄い弟

さんがいるなんて……流石は織斑先生ですね」  
何が流石なのか意味不明だが、真耶はウンウンと頷いている。

そんな真耶はほつといて、千冬はシャルロットにキツパリと言いつ切る。

「そういう事だ。通信履歴はないし、此処にあいつも来ていない、諦める」

「でも、だったら……そう、織斑先生から春斗に……！」

「それも出来ん。あいつが態々、プロテクトや偽装を施す意味を考えてみる」

「っ……！ でも、それでも……ッ……！」

「悪いがこれ以上、子供の我侭に付き合う気はない。山田君、すまないがここを頼む」

「あ、はい。分かりました」

千冬は真耶にそう告げると、邪魔物を退かすようにシャルロットを押しやり、モニタールームを出た。

これ以上話す事は無いと押し切られ、シャルロットはその背を追うことが出来ずに、立ちすくんでしまった。

「……………」

ドアが閉じ、異様とも言える沈黙がモニタールームを支配する。誰もが口を開き、声を発する事を躊躇った。

しかしその視線と意識は、俯き、溢れ出てしまいそうになる何かを必死に押さえるように拳を握る、シャルロットに向けられていた。

どれ程そうしていただろうか。やがて、シャルロットは火が消えた

よつにフラフラと、モニタールームを退出した。

何処をどう歩いてきたのか、シャルロットは着替えもしないまま、気が付けばアリーナの客席に来ていた。

グラウンドでは、先の調査と後始末とで、教師と警備担当員が忙しく動いているが、彼女のいる客席には人は疎らだった。

「どうして……どうして、こうなっちゃったのかな……？」  
首から下がるネックレストップ R リヴァイブ・カスタム？  
の待機形態を、ギュッと握り締める。

なまじ触れてしまった優しさが、今はとても辛い。  
あの声を聞きたい。もう一度、あの声でシャルロットと呼んで欲しい。

日が傾き始め、風が徐々に冷たくなってくる。

この場においても仕方ないと、シャルロットはロッカールームへと向かった。

着替えを済ませ、陰鬱な気持ちのまま、寮への道を歩いて行く。

足が、重い。

僅かな距離の筈の道程が、千里の彼方にも感じられる。

この感覚をシャルロットは知っていた。

デュノアの本家に引き取られた頃の、あの感覚だ。

非公式のテストパイロットをしていた時、屋敷という名の冷たい牢獄に帰る為、何時もこの”道”を歩いていた。

時間にすれば、一年程度前の事。なのに、それは果てしなく遠い記憶のようであった。

それだけ、春斗のくれた時間が温かく、そして幸せであった事の証。自分を孫のように可愛がってくれたデュアン・ヒューリック博士。その助手で、自分にとって姉のような存在のフィリー・ミヤマラ。公認の第三世代ISテストパイロット、そして代表候補生となつてから知り合った多くの人達。

同じ年頃の同性はいないし、訓練も厳しかった。だけど、それ以上

にとても幸せだった。  
母を失って孤独となった筈なのに、しかし今の自分の周りには、それを埋めて余り有るだけの思いがあった。

だが、それは春斗がいたからこそ得られたものなのだ。  
春斗がいなければ、今もデュノアの家に縛られたままだったろう。

流れてきた厚い雲が、夕日を覆い隠す。  
まるで、今のシャルロットの心を現すかのような、そんな光景。

ピンポンパンポーン。

『一年一組、シャルロット・デュノア。至急、生徒指導室まで来るように。繰り返す』

「……織斑先生？」

低く、抑揚のない声は、聞き違いでなければ千冬の声だ。  
今さら何を。そう思いつつ、寮へと向いていた足を校舎へと変えた。

生徒指導室に、学園内放送を終えた千冬が戻ってきた。

「姉さん、やっぱり……ダメなの？」

「ああ。これは、保護者である私の義務だ」

春斗が、自身の事をシャルロットに語ると決意したのを、千冬は何とか覆そうとした。

だが、頑として春斗はそれを聞かず、仕方なく千冬は折れた。

その交換条件として、千冬は「説明を自分がする」と言ったのだった。

「そうでないなら、」何があるうと」許可できないと宣告までした。

『何があるうと』という部分には勿論、武力行使さえも含まれているのは当然である。

口では何とかなっても、腕力を振るわれては敵わないと、春斗はその条件を呑んだ。

『なあ春斗、本気なのか……？』

『本気だよ。冗談でこんな事、出来るわけ無いだろう？』

心配する一夏に、春斗は肩を竦めてそう返す。

そんな事は一夏も分かっている。  
だが、春斗は最近も不安定になったばかりだ。もしも何かしらの強いショックを受けてしまったら、それを引き金にして、春斗の意識が崩壊してしまうかも知れない。

肉体がないという事は、自らを形作るはその意識のみである。それは果てし無く脆く、とても弱いものなのだ。

だからこそ心配で、一夏と千冬、鈴はこの件に反対だった。

『なあ、今からでも間に合うぞ？ 通信とかで誤魔化せるんじゃないんか？』

『一夏。君は、強くなったよね』

『……？ いきなり何だよ？』

『今日の試合さ。一夏は自分の強さだけで、ラウラに勝った。自分の想いを、意思を貫き通したんだ……本当に凄いよ』

『だから、何を言ってるんだよ！？』

『僕はね一夏……絶対に、一夏には負けたくないんだ』

『っ……！？』

思わぬ言葉を言われ、一夏は息を呑んだ。

春斗が 天才、神童と言われ、多くの才能に恵まれた人間が、それと比較すれば普通でしかない自分に負けたくない、そう言ったのだ。

『一夏は”彼女”に言ったよね？ 強さは、自分がどう在りたいかを常に思うことだって……僕もそう思う』

『……』

『僕はずっと怯えていた……拒絶されることを、自分を否定されることを……』

『そんなの当たり前だろ？ 誰だってそうだ。それが、自分が消え

ちまつかも知れないってなったら……尚更じゃないかよ!？」

『でも、それじゃ何も変わらない。一夏がいなきゃ何も出来ない……そんな自分のまま、消えたくなんてないよ』

『春斗……』

『タイムリミットまで……後、三年しかないからね』

『そうか……もう、半分も使っちゃまったのか……』

マインドサルベージシステム  
MSSによる意識移動には、様々な条件が必要だ。

その内の一つが、対象の年齢制限。

移動対象と受付対象の年齢差と共に、未熟な年齢である事が条件であつた。

逆に言えば”年齢が上がるまで”しか、その状態でいる事は出来ない。

それ以上は、一夏の意識にも悪影響を残してしまう。

タイムリミットの目安は　一夏が、IS学園を卒業する時まで。

それを迎えた時、春斗の意識は肉体に戻されたままにされる。つまり、もう二度と目覚める事はない、という事だ。

『他人と比較して、他人が自分より優れていたとしても、それは恥ではない。しかし、去年の自分より今年の自分が優れていないのは立派な恥だ』

『何だ、それ?』

『イギリスの冒険家、ラポックの言葉だよ。今の僕は、去年の自分ときっと何も変わっていない……一夏と違ってね』

春斗はそう、自らを嘲笑した。

『今の状態は”安定”と言えば聞こえは良いけど……”停滞”とも言える。記憶書込も、追体験も、一夏に大きな負担を強いる。なのに、自分だけ安全な所にいるのは……卑怯者の行いだよ』

『……………』

『傷つく事を恐れるな。それを恐れるならば、何も変えられないし、何も変わらない』

『今度は誰の言葉だ？』

『by 織斑春斗』

『お前かよ！？』

絶妙のタイミングで一夏のツツコミが入った。思わず嘖き出してしまいそうになる。

『それにさ、僕も”彼女”に偉そうな事を言った手前、がんばらな  
いとね。信じてもらえなくても、それは最初から覚悟しているし…

…大丈夫、耐えられるから』

『……………分かった』

そして、指導室のドアが開いた。

シャルロットが指導室に足を踏み入れると、そこには千冬だけでなく一夏の姿もあった。

指導室の真ん中辺りには長テーブルが置かれ、向かい合うようにして四脚の椅子があった。

その一つに千冬は座っており、一夏は腰を下ろさずに壁に寄り掛かっていた。

「来たか。適当に掛ける」

「……はい」

一夏も居るといふ事は、ラウラの一件の聴取なのだろうか。だが、それは明日行ふ事になった筈だと思いだした。

ならば一体、こんな所に呼び出してどうするつもりなのか。シャルロットには分からなかった。

言われるまま、シャルロットは席に着く。

千冬は厳しい表情で腕を組んだまま動かず、シャルロットは俯き気味に、両手を膝の上に乗せていた。

「……」

「……」

沈黙。向かい合ったまま、何方も言葉を発しない。

カチ、カチ、と秒針だけが、時間が流れていることを教えるように音を響かせていた。

一夏はその様子をただ、じっと見守っていた。

やがて千冬は腕を解き、両肘をテーブルに付いて指を絡ませるように組んだ。

「……………デュノア」

「……………はい」

少しだけ、顔が上がる。

だが、何時ものような明るいシャルロットの姿はそこには無く、まるで火の消えた灯台のように暗かった。

「ここに呼んだのは……………お前に用があったからだ」

「……………何ですか？」

「お前は春斗に会いたいのか？」

「っ！？ それって……………どういう……………？」

「会いたくないのか？」

「……………会いたいです。会って、話したいです……………！！！」

シャルロットは叫んでいた。今までの暗かった顔に、一瞬で明かりが灯る。

「……………今から三年前の一月だ」

「……………？」

突然何を。と、シャルロットが首を傾げた。

「今も良く憶えている。その日は雲一つ無い、澄み切った蒼空だった……………」

「……………何の話ですか？」

意味が分からないと、シャルロットは訝しんだ表情を見せる。

だが、それを無視して千冬は続けた。

「当時、まだ現役だった私は、第二回モンド・グロツソの為に訓練

をしていた。その私の下に、一つの知らせが届けられた……」

千冬は深く息を吐き、天を仰ぐ。

「それは、春斗が倒れ意識不明になったという……悪夢の様な知らせだった」

「っ……!?!」

その名を聞き、シャルロットが息を呑む。

「原因は不明。一切の治療が効果をなさない中……春斗は、緩やかに死へと向かっていった」

「……………」

何を言っているのか、何を言わんとしているのか、シャルロットには理解できない。

「そんな中で唯一の、そして最後の手段として用いられたのが……MSSだ」

「MSS……?」

「正式名称【マインドサルベージシステム】。対象の意識をサルベージし、移すことの出来る装置だ。それによって、春斗の意識は回収され、別の器に移された」

そうして千冬は、一人の少年を指差した。

シャルロットの視線が、ゆっくりとその先へと向けられる。

「い、ちか……?」

「春斗は……今もそこにいる。一夏の中に」

「っ……!?!」

そして、”春斗”はシャルロットに向かって、小さく頷いてみせた。

しばらく呆然としていたシャルロットが、ポツリと呟いた。

「……………うして?」

「シャルロット、僕は……………」

春斗が続きを紡ぐよりも早く、それは響いていた。

「どうして……………そんなウソを吐くんですか!??」

「ッ……………!??」

ズクン。という衝撃が春斗を襲う。重く、心底まで響く鈍痛に体が崩れ落ちそうになるのを、必死に堪える。

「会わせられないって言って、それで呼び出しておいて、それが…  
…その理由が、こんな下らない作り話をするためですか!？」  
シャルロットは激昂し、テーブルを強く両手で叩く。

「っ……………」

「違う……千冬姉さんはウソを吐いてない……僕は……」

「人の意識を移すとか……そんな事、出来る訳がない!! 大体、  
それならどうしてあの時、春斗の声が聞こえたんですか!？僕は  
確かに聞いた、春斗の声を!！」

「……………」

「あれは……ISの……」

春斗は何とか説明しようとするが、余りにも弱々しい言葉しか出ず、  
全くシャルロットに届かない。

そして千冬表情が、冷徹な怒りに染まっていく。

それに気付かず、シャルロットは更に感情のまま叫び続ける。

「会わせられないって言うなら、さっきみたいに言えば良い! 僕は  
は代表候補生で、春斗は政府の保護対象なんだから……それで良い  
ですよ! 納得しますよ!! なのに、こんなウソまで吐くなんて  
………… 幾ら何でも酷過ぎる…………!!」

いつしか、シャルロットの瞳からは涙が零れていた。

期待を裏切られたという想いと、混乱する頭とが混ざり合い、複雑  
にねじ曲がっていく。

「シャルロット……………」

「一夏……………ひどいよ、こんなの……………」

「っ……………違う、僕は……………春斗……………」

どうにか分かってもらおうと、春斗は必死に呼びかける。だが、そ

れは全く届かない。

「まだ、ウソを言うの……!?!」

「っ……!?!」

グサリと、突き刺さる。

事実、春斗は彼女に嘘を吐いていた。その言葉が突き刺さらない筈がない。

「もういい、黙れ」

「っ……!?!」

いつものプレッシャーよりも遙かに恐ろしく、そして冷たい一声に、シャルロットがビクリと肩を震わせた。

千冬の瞳には、殺意にさえ似た激しい怒りが満ちて光っていた。

「デュノア、今した話は全て忘れる」

「……」

冷淡に、冷酷に、シャルロットに告げる。

「そして、二度と春斗の名を口にするな。私がそれを絶対に許さない」

今までの怒りも、全て打ち払って消し去る　　本当の激昂。

「っ……!?!」

シャルロットは椅子を押し倒して、指導室から飛び出した。

「シャルロットッ!?!」

春斗がその名を呼んだ一瞬、閉じられるドアの隙間で視線がぶつかった。

「っ…………！」

その顔を、春斗は見た事があった。

「……………一夏、春斗は？」

「多分……………《海岸》だと思う。大丈夫だっと思ってたけど……………」

シャルロットのいなくなった指導室は、何処までも空気が悪かった。

「……………やはり、デュノアも他人でしかなかったか」

「俺は……………シャルロットならっと思ってたんだけどね……………何っーか、ままならねえな……………本当」

倒された椅子を直しながら、一夏が苦笑する。

春斗の意識が沈んでしまっっては、千冬にはどうするも出来ない。

同じ体を使う一夏には、背を押してやることも、肩を抱いてやる事も出来ない。

「本当に……ままならんな」  
千冬は、憔悴したように呟いた。

「はあ……」

鈴は寮の自室のベッドに転がって、天井を見上げていた。

時間が流れるのが、異常に遅い気がする。

今後の授業の予習をしようとするも集中できず、教材はデスクに投げっぱなしにされている。

原因は分かっている。春斗の事だ。

今頃、春斗はシャルロットに、全てを打ち明けた頃だろうか。

あの日、新年初めての弓道の大会があった。

春斗は験担ぎにと、篠ノ之神社に向かってから来るといっているので、先に一夏と二人で会場に来ていた。

だが、もうすぐ大会開始という時間になっても、春斗は現れなかった。

やがて大会は開始され、その時になってようやく、一夏と鈴は春斗が倒れ、病院に搬送されたことを知った。

そこにあっただのは、生命維持装置によって何とか生き長らえる春斗の姿。

朝に会った時はとても普通だった。何時ものように三人で、神社の前で別れるまでずっと一緒に。

どうしてあの時、別れてしまったのだろうか。

別れずに一緒にいたなら、もしかしたら春斗を助けられたかも知れない。

そう思うと、今でも胸が苦しい。

「……………ああ、もう！」

陰鬱になりそうな心に活を入れるように、ベッドから跳ね起きる。

こういう時は気分転換だ。

シャワーを浴びてスッキリしよう。そうしたらロビーに行って、自販機で冷たい物でも買って飲もう。

そう決めると、鈴は早速行動に移した。

ロビーのソファアに座り、オレンジ味の炭酸飲料をゴクゴクと飲む。柑橘系の味と香りに混じって、痛烈な刺激が食道を抜けていく感覚は炭酸飲料の醍醐味だ。

「ぶはあ……つく」

そして、ゲップが出てしまうことも醍醐味。一夏の<sup>いせい</sup>前ではとても出  
来ないが。

ふと、窓の外を見やる。

日はとつぷりと沈み、しかし分厚い雲がそれを見せることはない。

時間的に見ても、一夏はもう帰寮しているだろう。

心配している訳ではないが、鈴は春斗の様子を見に行こうかと立ち  
上がった。

「　　ちよいさ」

「へぐつ!？」

お団子頭シニヨンに纏めた髪をいきなり引っ張られ、「グキッ!」という嫌  
な音がした。

一体誰がこんな事をと、首を押さえながら振り返る。と、そこには千年忍者の末裔がいた。

「織羽あ……あんた、何すんのよ!?!」

「いやいや、珍しいお団子があるなと思って手にしてみたら、あんなの髪の毛だっただけよ?」

「そんなのが、通じると思ってる……?」

「うっん、全然」

このやろっ、喧嘩売ったのか? だったら買っぞ? こちとら機嫌が絶対調に悪いんだぞ?

などという内心を一欠片も漏らさず、鈴はオレンジジュースの空き缶をゴミ箱に向かって放り投げた。

「……あれ?」

何時もならばムキになって掛かって来るのに、そうならない今日の鈴に、織羽は首を傾げた。

「もしかして……あの日?」

「違うわよッ!」

顔を赤くして、鈴は即刻否定した。

あの日がどの日かは、個人の想像の翼に任せる事にする。

「じゃあ、あれ? 織斑君が元気無かったのと、関係ありとか?」

「っ!?! それ、どういう事……!?!」

「いや、さつき帰ってきたから声を掛けたんだけど……何時もと違って、随分と元気無かったから。まあ、試合がまた滅茶苦茶になっちゃったし、そうなるのも無理ないかもね」

「っ……!」

織羽の言葉に、鈴は嫌な予感がした。

「織羽、シャルロットってもう戻ってる!？」

「えっと……とつくに帰ってきてる筈だけど？」

「ありがとっ!」

言うが早いのか、鈴はそのまま廊下を走って行ってしまった。

駆け込むようにして、寮の自室に戻ったシャルロットは、制服を脱ぎ捨てて部屋着のジャージに着替えると、そのままベッドへと飛び込んでいた。

言葉に出来ない苛立と、モヤモヤする心と、千冬の本気の怒りとそれに感じた恐怖が、シャルロットの全てをグシャグシャにした。

ドロドロに混ざり合った感情が吐き出し口を求めて、グルグルと体の内側を目まぐるしく蠢く。

「っ……」

ギュッと枕を抱き締め、顔を押し付けて嗚咽する。

分からない。何もかもが分からない。

自分は間違い無く、春斗の声を聞いたのだ。

その時、一夏は目の前にいて、一夏も春斗と話をしていた。

つまり、千冬の言ったことは嘘なのだ。

そんなすぐバレる嘘を吐いてまで、諦めさせたいのか。

「ッ……………!!」

そう、あれは嘘だ。絶対にそうなのだ。

「もしや」「まさか」「などという考えが過る度、強く否定する。

なのに。

「どっして……………」

ドアが閉じる瞬間に見えた  
な一夏の瞳。

とても、悲しそうな、寂しそ

う、「どっして、頭から離れないの……………っ!？」

「シャルロット・デュノアッ!」

「っ!？」

ドアが派手な音を立てて開かれる。

何事かと思い、シャルロットが顔を上げると、そこには鈴が厳しい表情で立っていた。

「……鳳さん？」

「あんた……あいつに何したの？」

「……？」

「全部、聞いたんでしょ……春斗の事を……!」

シャルロットは鈴の言葉に、「ああ、そういう事か」と思った。

彼女も、千冬からあの話を聞かされているのだ。そして、自分にもその話をした事も知っていて、だから態々部屋までやって来たのだ。

本当にもう、何もかもが面倒くさい。全てがどうでも良くなってきた。

そんな、普段は抱きもしない投げやりな気持ちだが、彼女の口を自然と動かしていた。

「もしかして……鳳さんは、あんな嘘を信じてるの？」

自分でも驚くような、余りにも酷い言葉。こんな自分があるなんて知らなかった。つい、苦笑してしまっ。

だからといって覆水は盆に返らず、吐いた言葉は無くなったりしない。

「ッ  
！？」

その瞬間、シャルロットの左頬は強い衝撃に襲われていた。

鈴は、内心の苛立と不安を必死に抑えていた。

肉体を失ってから、春斗は友人にも会うことは出来ず、何事もなければ通っていた筈の、送る事の出来た筈の学生生活の全てを失った。

言葉を交わせるのは、その経緯を知る者だけ。不安と孤独の中で、只管に生きなければならなかった。

何度も不安定になり、崩れそうになって、それでも何とかここまで無事にやってこれた。

その春斗が初めて変わろうと、誰かに自分を見せようとした。

「もしかして、鳳さんはあんな嘘を信じてるの？」

だから、シャルロット・デュノアがそう口にした瞬間、怒りが一瞬で限界を超え、視界が真っ白に染まった。

「フー、フーツ！」

気が付けば、興奮に鼻息荒く、ギリギリと握り固められた右拳が突き出されていた。

そしてベッドに居た筈のシャルロットは、その向こう側へと落ちていた。

ジンジンと、拳が痛い。

そこまで行って鈴はようやく、自分はシャルロットを殴ったのだと理解した。

シャルロットは殴られた頬を押さえながら、呆然と鈴を見上げていた。

「ッ……！」

その顔に、鈴の怒りが再び発火した。

「あんたはぁッ……！」

シャルロットの胸ぐらを掴み、力尽くまで引き上げる。

「あんたは、あいつがどれだけの思いで打ち明けたか分かっているの！？ 春斗は、あんたを信じようとしてたのに！！！」

「っ……信じられないよ！！！」  
掴んでいた手を弾かれる。キツと睨み返されてその上、逆に胸ぐらを掴まれる。

「一夏の中に春斗がいる！？ 意識のサルベージ？ そんなバカみたいな話を誰が信じられるもんかっ！！！」

ああ、そうだ。人の意識はそんな簡単に、ホイホイと動かせたりはしない。

普通なら、あり得ない話だろう。

いきなり信じると言われて、信じる方がどうかしている。だからきつと、この怒りは理不尽なのだ。

だがそれでも                      それでも、言ってやらなければ気が済まない。

鈴は更に強い力を込めて、シャルロットの胸ぐらをもう一度掴んだ。  
「春斗は今まで、誰にも打ち明けた事なんて無かつたわよ！ なんでも分かる！？ 誰にも信じてもらえないからよ！！！」  
声が上がる。怒りが沸点を超えて、ポロポロと、瞳から熱い雫となつて零れ落ちていく。

「あたしはその時、その場にいたのよ！ だから知ってるの！！  
あいつが自分の事を打ち明けたのは……シャルロット、あんたにだけよ！！！」

「っ……！！？」

「あんたに分かる？ 自分が、自分じゃない体で目覚めた時の恐怖

が……？ あんたに理解できる？ 機械に繋がれて、眠り続ける自分の姿を見た、その絶望が……？ 気が狂いそうになって、暴れ叫んだあいつの苦しみが……あんたに分かるっ！？ 分からないですよっ！！」

分からせてやる。こいつがどれだけ無慈悲で、残酷な事をしたのか。骨身にまで分からせてやらなければ気が済まない。

「あいつは言ってた！ シャロットは『体を失ってから出来た、唯一の友人』だって、『彼女に救われてきた』って！ だから、『約束をちゃんと守りたいんだ』って！！」

鈴の痛々しいまでの叫びに、シャルロットは愕然とした。何時の間にか、鈴を掴んでいた手から力が抜けていた。

鈴もまた、その手をシャルロットから離していた。支えのない体は、ガクリと崩れ落ちる。

そうして俯き、打ちのめされたシャルロットに、鈴は言い放った。  
「もう二度と……あいつに関わらないでッ！」

踵を返して、鈴は部屋を出て行った。

部屋に残されたシャルロットは、無意識に頬に触れていた。全身は熱が無くなったように冷たくなっているのに、そこだけが異様に熱かった。

「はあ………」  
着替えを終えた一夏は、疲れきった体をベッドに投げ出し、これで何度目か分からない溜め息を吐いた。

あれから何度呼び掛けても、春斗は返事を返さない。存在を感じることが出来るので、消えてしまったのではない事は分かる。

それに、一夏からの呼び掛けは聞こえていない訳もない。

つまり、あえて返事をしないのか、それとも出来ないのか。どちらにせよ、それ程に痛烈なダメージを受けているという事だ。

『春斗……大丈夫だって。色々と急過ぎて、シャルロットもパニッ  
クになったただけだって』

『……………』

『聞こえてるんだろ？ 「ああ」でも「おう」でもいいから、何か  
答えろって……………』

さすがに返事が無いと、些か不安にもなる。今は、一声だけでもリ  
アクションが欲しい。

ドンドンッ！

「ん……………？」

ドアが叩かれるけたたましい音が響く。

誰だろうかと、一夏はベッドから体を起こした。

「誰……………っ!？」

鍵を外してドアを開けると、小さな影が飛び込んできた。

その不意打ちに、一夏は尻餅を付いてしまう。

「り、鈴……………っ?」

「一夏、春斗は!？」

「え? いや、奥にいるけど……………」

「そう、分かった!」

鈴はそう言うやドスン、と一夏の胸に頭を預けて、両手をその背  
中に回した。

「いいっ……!?!」

突然の事に一夏は驚き、間拔けな声を出してしまっ。

「春斗、聞こえてるでしょ!?! 聞こえてるなら返事しなさい! 聞こえなくても返事しなさいッ!」

「っ……」

どこかの教師のような無茶苦茶な理論を叫ぶ鈴。だが、その声はただ何処までも必死で。

「あんたはここに居るのよっ! 世界中の誰もがあんたを否定しても、あたしが何度でも言うから!! あんたはここに居る!! 存在してるのよッ!!」

背中に回した手がギュッとシャツを掴む。

「いい、そのまま消えたりするんじゃないわよ!? 消えたりしたら……引き摺り出してもぶっ飛ばすからねっ!!」

「鈴……お前……」

「だから、そんな所でウジウジしてないで……さっさと出てこい、この大馬鹿鹿野郎っ!!」

「……………ははっ」

「一夏」の腕が伸びて、そっと鈴の体を抱きしめた。  
「っ……………!?!」

驚いて顔を上げると、そこには一夏とは違う微笑みを浮かべる男が

いた。

「本当に”鈴ちゃん”は……無茶苦茶言うね……?」

「……うっさいわよ、このバカ! 無駄に心配掛けさせるんじゃないわよ」

「……ゴメン。それと……ありがと。聞こえたよ、鈴ちゃんの声……」

「あの時みたいに」

「ッ……!」

春斗はそのまま、鈴の頭をそつと撫でる。

「あの時は、僕が鈴ちゃんにこんな風に抱かれていたっけ……」

「あの頃はまだ、背の大きさが違って違わなかったし……ていうか、あんたらがデカくなり過ぎなのよ!」

「いや、大きくなったのは一夏だから……それと、一夏の身長は男子高校生の平均値より少し高いくらいで」

「ほほう……? つまり、あたしが”色々小さい”と……?」

「いや。そこまでは誰も言っていないってて……?」

ギリギリと頬を抓られ、春斗が悲鳴を上げる。それでも容赦なく、鈴は更に頬を抓った。

「あたしだって、好きでこんなやつてる訳じゃないのよ! ロリだのフラットだの……そんなの纏めて、ドイツの眼帯娘にくれてやるわよ!」

「いや、そうしたら鈴ちゃんのアイデンティティーが崩かいてててっ!?!」

「ナニカイツタ……?」

「言ってまへん、言ってまへんから……はなひて……!」

「だゝめ。まだまだ、反省しなさい……!」

涙目で解放を訴える春斗だったが、ここぞとばかりに鈴は攻勢を緩めはしなかった。

そうしてどれほどかの時が経ち、春斗はヒリヒリと痛む頬をさすりながら、しっかりと立ち上がった。

「やれやれ……酷い目にあつたよ」

『ていうか、俺の体なんだぞ？ 鈴、そこんとこ忘れてたたる！？』  
「うっさいわよ。……それで、”アイツ”の事はどうするのよ？」

アイツ。

敵意を込めてシャルロットをそう呼ぶ鈴に、春斗は少しだけ寂しそうに苦笑した。

「そうだね……もう一度、話してみるよ」

「なっ……！？」

春斗の言葉に、耳を疑った。

あれだけ深くダメージを受けたのに、更にシャルロットに言おうという事が、鈴には信じられなかった。

「あんだ、バカじゃないの！？ また嘘つき呼ばわりされるのが関の山よ！？」

「うーん……そうかも。でもね、それでも構わないよ」

「何でそこまで……！？」

「ちよつと考えてみたんだ……どうして鈴ちゃんの声は、”こんなにも聞こえた”のかって……」

眼を閉じて思い返し、そして気付いた。

「僕は……」本当に”分かって欲しかったのかな？”

「どういう意味よ？」

「僕はさ、分かってももらえなくても仕方ない。伝わらなくても、仕方ないって思ってたんだ……でも、鈴ちゃんは”絶対”に伝えようとしてた……だから、鈴ちゃんの言葉は届いて、僕の言葉は届かなかったんじゃないかって……」

もし本当に伝えたいなら、千冬に殴られようとも絶対に、引いてはいけなかったのだ。

そこで引いてしまったから、シャルロットをいたずらに傷つけた。だから一夏や千冬や鈴に、無用の心配までさせてしまった。

「ゴメン、一夏。もうしばらくの間、体を借りるよ？」

『 ああ。精々派手にやって、玉砕してこい！ 』

一夏がいやらしく言うので春斗もつい、いやらしい事を言いたくなってしまう。

「じゃあ、玉砕したら……鈴ちゃんに慰めてもらおうかな？」

「んなっ……！？ ば、バカッ！ これ以上はサービス料取るわよ！？」

「じゃあ、それ払うから、甘えさせてもらおうかな？」

「は、はあ~~~~~っ！？ あなた、本気でバカになったの！？」

鈴は真っ赤になって、春斗を罵る。が、春斗は鈴の頬にそっと触れてみせた。

「ほーちゃんがいなかったらきつと……僕は、鈴ちゃんに惚れちゃつてたと思うよ？」

「はっ……ばっ……馬鹿な……馬鹿な……馬鹿なこと言うなあっ

「!!」

ゆでダコのようになって、鈴が直ったばかりの甲龍を部分展開する。

「うわっ!?!? ちょっとそれは危ないって!?!?」

「煩い、ウルサイ、うるさーいっ!?!?!」

「わあ、文字で見ないと分からないその違いっ!?!?」

「……あんたら、何やってんのよ?」

「お、織羽……!?!?」

二人がドタバタしている様子を、呆れ気味に見つめる織羽の姿があった。

「なんだ。結構、元気そうじゃない……織斑君」

「えっと……まあ、少しは」

「そう。それは何より……そうだ、凰?」

「何……?」

「つい今しがた、デュノアちゃんが廊下を走ってたわよ? 随分と思ひ詰めた顔してたけど……何かあったの?」

「「っ……!?!?」」

その言葉に、二人はハツとして顔を見合わせた。

「それで、シャルロットは部屋に戻ったの!?!?」

「いや、ロビーの方まで行ったと思うけど……?」

「分かりました。鈴ちゃん、行こう!」「  
「うん!」

ドアの前にいる織羽を押し退けるように、二人は部屋を飛び出す。

「……敬語? それに、鈴”ちゃん”……?」  
「夏らしくない言葉遣いに、織羽は首を傾げた。

夜を迎えた空は、文字通りの暗雲を立ち込めていた。

第20話 ” 本当に ” 伝えるということ (後書き)

作品中、一夏の誘拐事件は三年前という設定です。

これはアニメで描かれた時、一夏が制服を着ていたのでそうしました。

(原作見直したんですけど、表記がなかったので)

というか、どこかに時系列を纏めた資料はないものか……。

**S i d e** シャルロット・デュノア【誠意と勇気】（前書き）

サイドと銘打ちながら、本編 W

シャルロットメインで、いよいよ決着です。

Side シャルロット・デュノア【誠意と勇気】

同居人の居ない、鈴が去った部屋の中。  
シャルロットは打たれた頬に手をやったまま、魂が抜けたような状態であった。

どれぐらい、そうしていただろうか。

焦点を失っていた瞳が、徐々に光を取り戻していき、引いた波が返ってくるように、止まっていた感情が心を揺さぶり始める。

シャルロットは、フラフラとしながら立ち上がった。

そのまま足を踏み出し。

ドンッ。

壁にぶつかる。それでもその壁を支えにして、崩れそうになる足を堪えて廊下へと出た。

その足は、一夏の部屋へと自然に向いていた。

どうして？ 何故？ 今更？ 様々なものが過ぎったが、そのどれにもシャルロットは気付かない。

ただ真っ白な頭のみまで、廊下を転げそうになりながら走っていた。

何度も壁にぶつかって、腕や足に痣ができ、そうして辿り着いた――  
夏の部屋。

ドアが、微かに開いていた。

何故、ドアが開いているのか。そんな疑問さえも抱かず、ドアノブに手を掛け、シャルロットはそれを開こうとした。

「……………」

聞こえる男女の声。

そっと、ドアの隙間越しにその中を覗いた。

「ッ……………!？」

そこに見えたのは、抱き合う鈴と　　――夏の姿。

(違っ……………　――夏じゃない……………)

胸に顔を埋める鈴の頭をそつと撫でる、その憂いの籠った優しい笑顔を見て、一ヶ月程度の付き合いのシャルロットでも分かった。

一夏は、あんな笑い方を絶対にしない。

ならば、あそこにいるのは誰だ。

一夏の姿で、一夏の部屋にいる、一夏ではない誰かは誰だ。

『春斗は……今もそこにいる。一夏の中に』

千冬という言葉が、まるで『全ての答え』であるかのようにリフレインする。

「あ……?」

グラリと体が崩れる。

もたれ掛かるように壁に背を預け、シャルロットは何とか立っていた。

ダメだ。それを認めたらダメだ。

認めてしまったら　　きっと、自分は壊れてしまう。

甦るのは、指導室での自分の言葉。

『どうしてそんな嘘を吐くんですか!?!』

嫌だ。聞きたくない。思い出したくない。

そう思うと心は裏腹に、それは容赦なくシャルロットを断罪する。

『春斗は、あんたを信じようとしたのに!?!』

『あいつが自分の事を打ち明けたのは……シャルロット、あんたにだけよ!?!』

耳を塞いでも、眼を閉じても、突きつけられる 我が身の罪。

それは裏切。

最低にして最悪の、最も恥ずべき行いの名。

「う……あああ……ッ!?!」

シャルロットは弾かれたように、廊下を駆け出していた。

「あれ、デユノアちゃ……っとお!?!?」

途中、突き飛ばすような勢いで、織羽の脇を抜けて走る。

「……………ッ……！」

ロビーに出て、そのままシャルロットは外へと飛び出していた。

シャルロットはひたすらに走った。

それこそ、背後から追ってくる何かから、必死に逃げるかのように。

何処をどう走り続けたのか。シャルロットは、何時の間にか暗い場所  
所にいた。

周りからは風に揺れる葉音が響き渡る。

灯りの一つもないそこは、学園の敷地内にある林の中だった。

「っ……………はぁ……………ハア……………はぁ……………」

息が上がリ、足もフラフラになって、そのまま脇に生えている木にその身を預ける。

部屋履きに使っていたスリッパなど、鈴に殴られた時に脱げてしまい素足のまま。

その状態で全力で走ったせいで、足の裏は勿論の事、細かな石や枝葉が足首や脛胫にも擦り傷、切り傷を作り、ズキズキという痛みを与えていた。

これはきつと夢だ。それも最悪の悪夢というヤツだ。夢なら醒めて欲しい。

ポツリ。

顔に落ちる小さな雫。それはすぐに数万倍の数となり、シャルロットを打った。

「ふふっ……ははは……あはははははははははは……！」

惨めだ。

濡れていく体。傷だらけで泥だらけの足。

笑うしか無い。それぐらいしか出来ない。

会いたいと願って、心のままに叫んで。その相手を嘔吐き呼ばわりして傷つけて。

それは何処までも滑稽だった。

寮には帰れない。学園にもいたくない。

このまま、いつそ雨に溶けて消えてしまえたら、どれだけ楽か。

「……嫌だよお……っ！」

やっと会えた。直ぐに引き返して謝りたい。

どれだけ怒っていても、許してくれなくても、何度も何度も。

蔑まれてもいい。軽蔑されてもいいから、春斗に謝りたい。

「……会えないよお……っ！」

思いと心が、バラバラになっていく。

会えない。このまま消えてしまいたいという気持ちと、春斗と離れる、会えなくなるのは嫌だという心が、シャルロットを苦しめる。

「つぶっ……ふえ……ええええ……！！」

会いたい。会って謝りたいという気持ちと、どんな顔で彼に会う気かと責める心が、シャルロットを苦しめる。

嗚咽と共にポロポロと涙がこぼれ、雨粒と混じってシャルロットを濡らしていった。

「おや？」

そんなシャルロットを、まぶしい光が照らした。

春斗と鈴はロビーへと急いだ。

「何だ……？」

二人が辿り着くと、何故か寮生たちがざわついていた。

「あ、おりむーだ」

と、ダボダボの袖を振ってやって来るのは、一夏のクラスメートの

のほとけほんね  
布仏本音。

「のほ……んっ！ えっと、何かあったの……？」

春斗はつい彼女の名前を言いそうになり、とっさに口を嚙む。 (一)  
夏は未だに、クラスメートの名前をよく覚えていない)

「えっとね、うんとね」

「……」

「……何よ？」

「……なんだっけ？」

ガクツ、と二人が崩れる。

「あんだ、ふざけてるの!？」

「どうどう。彼女は、これがデフォルトなんだよ」

「……なんっ！か、あたしとは生きている時間が違うわね」

鈴がげんりとなったのを一先ず脇に置き、春斗は他の人間を探した。

丁度一人、良い人間を見つけた。

「谷本さん、何があったの？」

見つけたのは谷本癒子。本音と良く行動を共にする、一夏のクラスメートの少女である。

「え、あたしもよく分からないんだけど……シャルロットが外に出て行っちゃったみたいなのよ……やばいよね、織斑先生に見つかったら……」

それを想像してか、癒子は身を震わせた。

「そっか……ありがとう！」

春斗は礼を言つと、シャルロットを追い掛けるべく、そのまま外へと

「待て、織斑」

行こうとする春斗を呼び止める、凜とした声。

「織斑、先生……」

足を止めて振り返れば、そこには厳しい表情の千冬がいた。その発する気配に生徒達は自然と数歩、後ろに下がっていく。

「何処へ行く気だ？」

「シャルロットが外へ出たそうです。探しに行きます」

「ダメだ。許可しない」

「それでも行きます」

「行くならば、寮則違反で罰を受ける事になるぞ？」

「それでも行きます」

「……何の為だ？」

千冬の視線が、一層に厳しくなる。春斗も、それを正面から見つめ返した。

そして 笑った。

「 ” 自分の我侭 ” の為です」

「っ……!？」

その言葉を聞き、千冬の瞳が一瞬だけ見開かれる。そして心底呆れたとばかりに、深く嘆息した。

「はぁ……勝手にしろ」

「反省文の原稿用紙二人分、用意しておいて下さいッ!」

春斗は踵を返して、寮を飛び出した。

「ちょっと待ちなさいよ!？」

「鈴ちゃんはどこで待ってて!! もしかしたら帰ってくるかも知れない! 戻って来たらISに連絡を!!！」

後を追って出てきた鈴にそう告げて、春斗は夜の闇へとその身を躍らせた。

『それで、シャルロットが何処に行ったのか……見当は付いてるのか!？』

「全然っ! だから、とりあえずは駅の方に行く!!！」

『俺、そっちには居ない気がするんだけど!？』

「僕はこっちを選ぶよ!!！」

春斗はそのまま、モノレール駅に向かって足を向けた。

「はあ……全くもう……」  
すっかり消えた春斗の背に向けてか、やれやれといった風に独り言  
ちる。

「……また、あれを引き戻したのか？」

「うおっ！？ お、織斑先生……いや、まあ……あははは……」  
気が付けば隣に千冬が立っていた。驚きながらも、鈴は何かを誤魔  
化すように笑った。

何も誤魔化す事など無いのだが、それでも千冬の前ではそんな衝動  
に駆られてしまう。

「……フン」

そんな鈴を一瞥し、千冬が鼻を鳴らす。

「……少しは良い女になった、か」

「え……？」

ポツリと呟いたかと思うと、クルリと鈴に背を向けて、寮へと戻っ  
て行った。

「……今、何て言ったの？」

なまじ聞こえなかったせいで、余計な不安ばかりが鈴の脳内を過る  
のだった。

「……これでよし、と」  
椅子に座っているシャルロットの足には包帯。鈴に殴られた頬には湿布とガーゼが貼られていた。

つなぎを着た壮年の年頃の男性は、救急箱の蓋を閉じてそれを片した。

彼は轡木十蔵。このIS学園で用務員を勤めている人物だ。

日課である夜間の見回りをしている際、シャルロットをたまたま見つけ、用務員室まで連れてきたのだった。

シャルロットの着ていたジャージは雨でずぶ濡れになってしまっていたので、今は彼の出した予備のつなぎを着ていた。

「はい。熱いから気を付けて？」

「ありがとうございます……」

十蔵が差し出したマグカップには、黒い液体が注がれ、立ち昇る湯気がその熱を教えていた。

鼻腔をくすぐるのは微かな苦味と、大きな甘い香り。

シャルロットはコップに口をつけ、それ　　ココアを一口、啜る。

口腔と食道を、思わず身を竦ませてしてしまうような熱いものが、流

れて落ちて行く。

雨に冷えた体が、少しだけ熱を取り戻した。

「その足では歩いて帰るのも難しいだろうし、寮の方に連絡を入れて、迎えに来てもらいましょう」

そう言つて、十蔵が備え付けられた電話に手を伸ばす。

「ま、待って下さいッ！」

シャルロットは慌てて止めた。そんな彼女の様子に、十蔵は首を傾げた。

「どうしてですか？ 深くないとはいえ、立って歩くのも辛い筈なのに……まさか、この雨の中を自力で帰れる、などとは言わないでしょうね？」

「そ、それは……その……」

シャルロットは答えられず、うつむいてしまった。

でも、寮へは帰れない。帰れる筈もない。そこには鈴が、千冬が、なにより春斗がいるのだから。

「ふむ……恐らくは通り雨だろうし、少しばかりここで待つのも良いでしょうね……」

十蔵は向かいの椅子に座り、静かにシャルロットを見つめた。

「良ければ教えてくれませんか？ どうして、こんな時間に傘も差さず、しかも素足であんな所にいたのか……」

「……………」

「只ならない様子ですし、きっと言い辛い事なのは分かります。ですが、内に籠めてばかりだと……心に良くありませんよ？」

十蔵は優しくシャルロットに微笑みかける。

それはさながら牧師のようであり、または神父のようであるのかも知れない。

「私は只の用務員ですからね、きつと力になれる事など殆ど無いでしょう。ですが、それでも……貴女の話聞くぐらいの事は出来ますよ?」

「っ……!」

その低く響く優しい声は、シャルロットを強く揺さぶった。

それは、もう限界を迎えていたシャルロットの心を決壊させるには充分過ぎた。

「僕は……」

苦しかった。辛かった。

誰かに話して楽になりたかった。

そんな事が許される筈がないのに。それでも、心は悲鳴を上げ続けていた。

だから、一度でも傾いた心　　一度開かれた口は、留めていた内の罪を晒していた。

春斗との出会いから始まり、母との死別につき、家からの解放。その恩と、支え続けてくれた心への感謝。

そして、その恩の全てを仇として返し、深く傷つけてしまった事。

勿論、春斗の正体に関わる部分は除き、最初は淡々と語っていた。だが何時からか、その言葉には嗚咽が混じり始め、ついには泣き崩れていた。

その告白を、十蔵はただ静かに聞いてやった。

「あー、もう！ 何で雨なんて降るかなあ!？」  
駅まで辿り着いた春斗だったが、そこには人っ子一人おらず、とんだ見当違いであった。

しかも運の悪い事に、いよいよ雨が降り出したのだ。  
春斗は慌てて駅の入り口まで走り、雨宿りをする羽目になってしまった。

シャルロットの携帯に掛けてみるが、コールは鳴るものが出ない。  
恐らく部屋に置いてしまったままなのだろう。

ならばと、ISの個人回線プライベートチャンネルを用いた相互位置確認をしようとするが、

シャルロットの方がそれを切っているらしく上手く行かない。

「結構、降りが強いな……」  
どうすべきか、降りを強める雨を見ながら春斗は考えていた。

『おい、シャルロットを探さないのか!?!』  
「探したいけど、一夏の体を濡らして、風邪を引かせる訳にもいかないでしょう?」

『シャルロットだって、この雨の中外にいるんだぞ!? 俺の事は気にしないで良い! 雨に濡れた程度じゃ、風邪なんて引かないつて!!!』

春斗が自分の体を気にしていると知るや、一夏はあっさりと言い切つて見せる。

それを聞いて、春斗はつい肩を竦めた。

「……はあ。そういう事を何の躊躇なく言える君が……本当に羨ましいよ」

『何だ、そりゃ?』

「何でもないよ。それじゃ、雨の中をバカみたいに走るとしますか! 一夏みたいに!」

『それは、俺がバカつて事かよツ!?!』

「さあねっ!?!?」

言うつや、春斗は地を蹴つて雨の中に飛び出すと、水たまりを弾かせ、全身を打つ雨に構わず走り出した。

本来の春斗の体では弱く、雨の中を走るなど絶対に出来ない事だ。だが今は、それが出来る。

「怒られついでに、裏白式のハイパーセンサーを一極起動!」  
頭部に黒のセンサーユニットが展開され、世界が一変する。

暗い上にこの雨の中では、視界もままならない。だが、ハイパーセ

ンサーならばそれを補って余り有る。  
当然、指定区画以外でのIS起動は校則及び、国際条約違反である。  
が、バレなければよいだけの事だ。実際、既にやってしまっている  
ので今更とも言える。

普段の春斗ならばやらないであろう事も、今は何の迷いもない。  
全ては、”自分の我侭”の為に。

春斗は、今度は校舎を挟んだ反対側  
林の広がる方へと向かった。

用務員室で、シャルロットは十蔵に心の中を吐露していた。

醜い自分を全て吐き出して、シャルロットは心底、自分という人間  
を嫌いになっていた。

会いたいという気持ちと、会えないという気持ち。  
謝りたいという心と、謝る勇気のない心。

どれもこれもが自分自分。春斗の事など、一つとして考えていない  
ではないか。

余りにも愚かな自分を知り、シャルロットは全てが終わってしまった  
のだと実感した。

覆水は盆に返らず。こぼれたミルクはコップには返らない。

ならば、もう何も出来はしない。

「……………なるほど。それで、貴女はどうしたいのですか？」  
「え……………？」

どうしたいか。

十蔵にそう尋ねられて、シャルロットは顔を上げた。

「貴女がどれだけその友人の方を大事に、大切に思っているかはよく  
分かりました。そして、その人を深く傷付けてしまった事も……………」  
「……………」  
ならばもう、どうしようも無いではないか。

「だからこそ、貴女がこれからどうしたいのか……………それを聞きたい

のです」

だが十蔵は、優しくも厳しい視線でシャルロットを見据える。それはまるで、厳格なる父親の姿の体現であるかのようにだった。

「このまま、その人を傷つけたままで良いのですか？」

「っ……」

首を横に振る。そんな訳ない、このままで良い筈がない。

「なら、その人に会って……謝りたいのではないですか？」

「っ……出来ないです」

「どうして……？」

「……絶対に怒ってる……僕の事を嫌いになってる……きっと、許してなんてもらえない……だから会えない……！」

ああ、だからだ。

もしも目の前に彼が立って、自分を嫌いだと、目の前から消えろと言われたら。

それを考えただけで、体が震えて足が竦む。

自分は彼に

春斗に否定される事が怖いのだ。

彼をあれだけ否定して、傷付けて、なのに自分が否定される事は怖

がっているのだ。  
本当に、なんて自分勝手なのだろうか。

「人の心が、どうして罪悪感を覚えるのか……その理由を考えたことはありますか？」

「……？」

突然何を？　と思うシャルロットに、十蔵は優しく微笑みかける。

「私はきつと、心が自分自身に問い掛けているのだと思うのです。」

『このままで本当に良いのか？』『本当に後悔しないのか？』という風に……」

「……」

「でも、こうだとも思えるのです……『心が、自分の誠意と勇気を試しているのではないか？』とね」

「心が……試している？」

シャルロットが聞き返すと、十蔵は静かに頷いてみせた。

「先ほど、『その人は怒っている。自分を嫌いになっている』と言いましたね？」

「……はい」

「それは彼が直接、貴女に言ったのですか？　貴女の事を嫌いだと絶対に貴女を許さないと？」

「っ！？　違います！　そんな事言うわけ……！」

シャルロットは首を振ってそれを否定する。

春斗はそんな事を言わない。自分の為だけにISの設計図まで渡してしまう程のお人好しで、そんな春斗が

「あ……っ」

そうしてまた気付く。

自分は、春斗の事を信じていなかった事に。  
分かっていただけなのに。春斗はそんな人間ではないと知っていた筈  
なのに。

十蔵は愕然としているシャルロットを諭すように、導くように言葉を  
を結ぶ。

「そうでないのなら、全ては貴女の心の中から生まれたものばかり。  
それと向き合うも、背を向けるも……貴女次第でしょう」

「向き合うのも、背を向けるのも……自分次第……？」  
反響こだまのように、十蔵の言葉を繰り返す。

(自分の誠意と、勇氣……)

シャルロットは、自分がどうしたいのかを考える。

気持ちと心は相変わらずバラバラで。

でも、その中から”やりたい事”だけを抜き出していく。  
そうすると、とてもシンプルだった。

春斗と会って、謝りたい。

たったそれだけ。それだけが残されていた。

「…………雨が止んだようですね。いや、月が綺麗だ」  
十蔵は、窓から外を見やった。  
雨雲は何時の間にか消え、その切れ間からは見事な二十三夜月が顔を覗かせていた。

「……………」  
だが、それだけを為す勇氣。  
果たして、シャルロット・デュノアにはそれがあるのか。  
マグカップをギュッと握ると、半分ほどに減ったココアがチャップン、  
とはねた。

ドンドン。

用務員室のドアを叩く音が響いた。

「おや、こんな時間に誰かな……?」  
十蔵は椅子から身を立ち上がらせて、玄関口へと向かった。

シャルロットはそれを見送るでもなく、ただ手の中のココアを見つめ続けていた。

「態々、お迎えが来てくれたようですよ?」

「え……っ?」

その声に、シャルロットは顔を上げた。

「良かった! ここに居たのか、シャルロット……!」

「あ……え……?」

そして十蔵の後ろにいる、ずぶ濡れの少年の姿に目を見開いた。

「君も、その格好だと風邪を引いてしまうね。着替えとタオルを出すから、早く着替えなさい」

「いえ、そこまでは……」

「生徒に風邪を引かせてしまったら、私としても立つ瀬がないからね。少し待っていないさい」

「はあ……」

生徒が風邪を引くと、どうして用務員の立つ瀬がなくなるのか、  
”彼”は訝しんだ顔をした。

十蔵が奥に消えるのを見て、シャルロットは恐る恐る、”彼”の顔を見上げた。

「……………あ、あの……………」

「足、大丈夫？ 素足とはいえ、何処を走ったらこんなに……………それにその顔……………大丈夫？」

「えっ？ えつと……………学園裏の林の中……………かな？ 顔は痛むけど……………平気だから……………」

「林？ ……………やっぱり、思いっきり逆に走っていたのか……………やっぱり、こういう勘は一夏には敵わない」

「っ……………!？」

”彼”の言った言葉に、シャルロットはビクリと体を震わせた。

今、目の前にいる”彼”は一夏ではない。

「は、春斗……………」

シャルロットは恐々と、唇を震わせながらその名を紡ぐ。

「ん……何？」

春斗は何事もないかのように、普通にシャルロットに答えた。

「すみません。二着も着替えを借りてしまつて……ちゃんと洗つて、返しに來ますので」

春斗は十蔵に少しだけ頭を下げた。本当ならしっかりとお辞儀をしたいところだが、背中にはシャルロットをおぶっている為、それも出来ない。

ちなみに、脱いだ服は紙袋の中で、春斗の腕に引つ掛けられている。そんな春斗の様子に、十蔵は優しい微笑みと共に首を振った。

「いやいや、気にしなくて良いですよ。それよりも、足元に気を付けてお帰りなさい」

「はい。ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

背負われているシャルロットも、ペコリと頭を下げた。

「誠意と勇気、忘れないようにね？」

「……はい」

十蔵の言葉に、シャルロットは少し恥ずかしそうな笑いを見せた。

「……？」

その意味が分からず、春斗は首を傾げた。

雨が上がり、ひんやりとした空気の中を、二人はゆっくりと進んでいく。

「……………」

「……………」

どちらも言葉を出さず、ただ寮への道を進んでいく。

沈黙が気味い訳ではない。ただ、この時間が神聖不可侵なもののように思えたのだ。

このまま、背中から伝わる温もりに甘えていられたら。

そんな思いが、シャルロットの心の中に生まれようとしていた。

(でも、それはダメ。『心が、僕を試している』んだから……………)

それではダメだと、シャルロットは意を決してその空気を破った。

「どうして、僕を探しにきたの……………？ あの雨の中、ずぶ濡れになつてまで、どうして……………？」

「どうしてって、いきなり寮を飛び出したって聞いたから……………」

「違うの！ そうじゃない！！ そうじゃなくて……………僕は、春斗にあんな酷い事を言ったのに……………どうして？」

向き合う為に、聞かなければならない。彼の答えが怖くて、自然と手が震えてしまう。

春斗はどう言ったら良いのか、少しだけ困った素振りを見せた。

「そりゃ……確かに、あの時はきつかったよ。覚悟はしていたけど……うん、苦しかったよ。それこそ、消えてしまいそうな程に……」  
「っ……!」

その告白に、シャルロットの胸が痛んだ。  
当然だ。自分はそれだけの事をしたのだ。だから、被害者のように苦しむな。

「でも、今は結構平気だよ?」

「え……?」

そう続ける春斗に、シャルロットは、意味が分からないといった感じの不思議な表情をした。

「君を追いかけたのは……もう一度、話すために。でも、もうその必要はなかったね……」

「どうして……?」

「だって、僕の事を”春斗”って、呼んでくれたから。それだけで、充分だから……」

そう言っつて、少しだけ背に振り返るその顔は、優しく微笑んでいた。

「ッ……!」

彼は、なんて卑怯なのだろう。

こちらがどれだけ思い悩んだか知りもしないで、そんな優しい言葉を掛けて、そんな優しい笑顔を向けるなんて。

「えっ!?!」

その首に彼女の細く白い手が絡みつく。そのままギュッと、春斗に抱きついていた。

「シャ、シャルロット……!?!」

「ずるいよ、春斗……! そんな風に言われたら……僕は……っ!  
!」

そのまま、シャルロットはポロポロと涙を零した。

「え、えつと……ごめん」

背中越しに聞こえるシャルロットの嗚咽に、春斗はただただ困惑する。

「違うよ……謝るのは僕なのに……どうして春斗が謝っちゃうの……?  
!?!」

「いや、まあ……何となく、僕が悪いから……かな?」

涙声でシャルロットが尋ねると、春斗は苦笑いしか出なかった。

「……何それ」

「何だろっね……本当に。あはは……っ」

対応を間違えたかと、春斗は自分を誤魔化すように笑った。

「……ごめんなさい」

耳元に唇を寄せ、シャルロットがささやく。

「僕も、ゴメン……君に嘘を吐いていたのは、間違いないから……」

横顔に触れる彼女の柔らかな髪感触に、春斗は目を細めた。

二人はゆっくりと進んでいく。

「ねえ、春斗……?」

「何……?」

「もう一度だけ、教えてくれる? 春斗の身に何があったのか……」

「元々はそのつもりだったし、構わないけど……。でも、千冬姉さ

んと殆ど同じだよ?」

「それでも良いの。貴方の言葉で、貴方の声で聞きたいんだ……お願い」

シャルロットの抱きしめる腕に力が込められ、春斗は何処から話すべきかと夜空を見上げた。

「あれが起きたのは……三年前の一月。弓道の大会のあったあの日も。いつもと同じ普通の朝だった。一夏と一緒に家を出て、途中で鈴ちゃんと合流して……その後、僕は一人で篠ノ之神社へ行っただ」

「篠ノ之神社……?」

「ほーちゃん　篠ノ之さんの事だけど……彼女の实家。その時にはもう居なかったんだけどね。そこでお参りして、それから会場へ向かったんだ。道路を渡るために歩道橋を上がって……向こうへ行く途中だった……いきなり、凄いな　耳鳴りがしたような気がしたんだ」

「耳鳴り……?」

「その直後、僕は倒れてて……指先一つ、瞬きもできなくて……コングリートの、硬くて冷たい感触さえも感じなかった。凄く怖くて……同時に思ったんだ。『ああ、僕は死んじゃうんだな』って……そうして、僕は意識を失ったんだ」

「……………」

自分が死ぬという感覚は、一体どれ程なのだろうか。シャルロットには想像さえつかない。

だがきつと、それはとても恐ろしくて、抗えない程に強大で、だから今、春斗は少しだけ震えていた。

「それで目が覚めたら……ある施設の一室にいて、目の前には千冬姉さんと鈴ちゃんと、担当医になった高柳先生と、束博士がいて……でも、そこに一夏の姿はなくて……だから、聞いたんだ。『一夏

は何処？』って……そうしたら、鈴ちゃんも姉さんも……何て言ったらいいかな……どう答えれば良いか分からない、って顔をしてたなあ」

苦笑して語る春斗の姿はとても痛々しくて、自分から聞いておきながら、シャルロットはこれ以上聞くことを躊躇ってしまふ。だが、彼女は聞かなければならない。

「誰も答えてくれない間に、僕はガラスに映った自分の……そこに映った一夏の顔を見てしまったんだ。そして、ベッドでいろんな機械に繋がれたままの自分の姿を……」

自分から聞こうとしたからではない。全てを聞いて、そして受け止めると決めたからだ。

「思い返すと、あの時は本当にひどかったなあ……。気絶してただけの一夏に気付けなくて、僕は死んで、そして一夏の体に乗っ取っちゃったって、バカみたいに泣き叫んで。なだめようとした姉さん突き飛ばして、抱きしめてくれた鈴ちゃんの事も引っ掻いたり叩いたりしてさ……本当、酷いよね」

「……」  
そんな事無い。誰も怒ってない。だから気にする事はない。

シャルロットの口からそんな言葉が溢れそうになる。だが、そんな事をいう資格はシャルロットにはない。

そしてそんな言葉に、慰めの価値すらもない事はよく分かっていた。「驚くよね、こんな話……色々、信じられないよね？」

「ううん、信じられるよ。今なら、春斗の言葉だから……信じられる」

だから、その代わりに春斗をしつかりと抱きしめて、そして伝えた。貴方の言葉を受け止めたと伝えるために。

「……………それから数カ月は不安定だね。鈴ちゃんと、”もう一人の子”には、随分と助けられたっけな……………」

「っ……………!?!」

唐突に、春斗は声を明るく弾ませる。

「”その子”はね、僕がこうなってから……………初めてで、唯一の”友達”なんだ。顔も、声も知らない……………でも、だからこそ自分でいられた」

違う。支えられていたのは自分だ。

なのに、どうしてそんな事を言うのか。

「だから、その子が困っていたら……………自分に出来るだけの事をしてやりたいって思ったんだ。まあ、それが廻り回ってこんな事になってしまった訳で……………アハハ……………」

本当に何でこんな事になったのか。と、春斗は乾いた笑い浮かべた。

「……………後悔しなかったの? ”その子”の為に、自分が設計したISを上げてしまって……………」

「前にも言ったけど、あのISの設計図に、シャルロット以上の価値なんて無いよ。それに、どんな形でも自分の設計した物が形になるのは嬉しいし……………完成したら、きつとシャルロットがそれを扱うんだろうから……………うん、後悔なんてどこにもないね」

「……………ごめんなさい」

また、シャルロットは謝ってしまっ。

「”ごっついう時は、”ごめんなさい”じゃないと思っよ?」

「……………そうだね」

『ごめんなさい』は相応しくない。だから、シャルロットは微笑み、そして言葉を改めた。

「　　ありがとう、春斗」

「　　どういたしまし……っ!？」

不意に、春斗の頬に触れる柔らかい感触。その視界の端に、揺れ動くブロンドの髪。

いきなりの事に驚く春斗に、シャルロットはそのまま告げた。

「それと……あなたが、大好きです」

「えっ……え、いや!？　……ええ!？」

更に突然過ぎる告白に、春斗は目を白黒させる。

どういう事だ。何故そうなった。そんな言葉がグルグルと回り、やがて一つの結論に辿り着いた。

「こ、これは一夏の体だからね……もしかしたら、僕でも格好良く見えたりするのかな……?」

一夏の悪友　　五反田弾曰く、イケメンモテ顔の一夏だ。そのビジュアルがきつとそう思わせているのだ。

自分が誰かを想うことはあっても、想われるなど想像も出来ないし、あり得ない事だ。（全く同じ思考をした幼馴染がIS学園に居ることなど、春斗は知る由もない）

何せ体が無いのだから、そう思うのも当然である。

実際、中学時代に一夏のフリをしていたら、女子生徒のフラグが立ってしまったこともあった程だ。

その原因は春斗自身にあるなど、考える理由は何処にもない。なに

せ、この体の持ち主は織斑一夏なのだから。それだけで全ての説明がついてしまう。

「違うよ。僕が好きなのは……春斗の心。少しだけ意地悪で、とても優しい貴方の心。お母さんが亡くなった時も、デュノアに引き取られた時も……ずっと僕を支えてくれた、僕に居場所をくれた。そんな大切な貴方だから……僕は好きになっただんだ」

「あ……えつと……」  
背中越しにも、熱い体温とドキドキと強く打つ鼓動が春斗にも分かる。

「……………」  
シャルロットにも同じように、春斗の体温と心音がとても伝わってきた。

「ありがとう……でも、ごめん。僕には……好きな人がいるから」  
「っ……篠ノ之さんの事、だよな？ でも、振られたんでしよう？」  
「でも、それでも……好きな気持ちはそのままだから……」  
ずっと積み重ねてきた想いは、只の一言で終わるほど軽くはない。未だに筈への想いは残っている。

「……そうだね。そんな簡単に割り切れたら、誰も苦しんだりしないよね」

その気持ちをシャルロットもよく分かる。今、春斗に告白して振られたのだから。

「そうだね……だから」

「だから　僕も諦めないよ？」

分かるからこそ、シャルロットは春斗に宣戦布告する。

「……………え？」

「今はまだ篠ノ之さんに負けているけど……………最後には僕が勝つから。春斗の中の篠ノ之さんを追い出して、僕だけで埋めてみせるから……………」

……………覚悟してね？」

「……………」

凄まじい宣言をされたと、春斗は絶句してしまった。男子よりも女子の方が精神的に強いと聞いていたが、何と逞しいメンタリティーだろうか。

この一部でも良いから自分に分けて欲しいと、春斗は真剣に思ってしまった。

「ねえ、春斗。今度から、僕の事は『シャル』って呼んでくれる？」

「え……………？」

そんな思考をシャルロットの言葉が引き戻した。

「前に教えてくれたよね？ 日本だと、名前の前半を愛称に良く使うって。だから、春斗にはそう呼んで欲しいんだ……………ほら、一夏と入れ替わっても直ぐに分かるし」

その愛称でシャルロットを呼ぶのは、姉的存在のフィリーだけだ。

だからこそ、この”特別な名前”を春斗にも呼んで欲しい。

そんな意図を隠して、シャルロットは春斗に頼んだ。

「分かったよ……………シャル」

「っ……………うんっ！」

心の中でガッツポーズを決め、シャルロットは満面の笑みを返した。

そうしている内に、強い明かりを放つ建物が見えてきた。

「……あんだ達、何でそんなに仲良くなってる訳？」

寮に帰り着くや、入口前で待っていた鈴にジト目で睨まれた。

なにせ、シャルロットはとても幸せそうに春斗にしがみついている

のだから、それも仕方ない事だ。

「説明するとすっごく長くなるので、割愛します」

「二人だけの秘密だから……内緒なんだ」

「ちよつと、シャル!？」

「へー、ふたりだけのひみつねー。しかも、よびかたまでかわつて  
るなんて……ずいぶんとなかよしになれて、よかったわねー？」

薄ら寒い鈴の視線が、容赦なく春斗に突き刺さる。

「いや、鈴ちゃん怖いんだけど……?」

「そ〜お〜? あたしはいたってふつうだよー?」

もの凄く平坦な声のまま、鈴は踵を返して寮へと戻っていく。

「 鳳さん? 」

「 ……何よ? 」

それを呼び止めたシャルロットに、鈴がギロリと強い視線を向ける。

「 ありがとう。それと……ごめんなさい 」

「 あたしは勝手にむかついて、あんたを殴っただけだし……言つと  
くけど、謝らないからね 」

「 いや、殴っちゃダメでしょ 」

「 うっさいわよ 」

「 うん。それは全然……むしろ当然だと思っし 」

「 ……じゃあ、何よ? 」

殴ったことでないのなら、何で呼び止めるのかと、鈴は訝しんだ。

「 一つだけ聞いておこうと思って。鳳さんは……春斗と一夏、どつ  
ちが好きなの? 」

「 「ブツ」 ……! 」 「 「

二人が同時に噴いた。

「ちよっ!?! あんたあ!?! 何言っちゃってくれちゃってる訳!」

「そっだよ! 鈴ちゃんはそのりゃもう、一夏にデレデレ」

「うっさいわよ!?! ていうか、今の一夏に聞かれた!?!」

「いいや。帰ってくる頃からずっと《海岸》に下がっているままだから……」

「そ、そう……」

安堵が落胆か、鈴はどっち付かずな溜め息を吐いた。

「そっか。なら僕の敵は一人だけだね……よしっ!」

シャルロットは答えに満足したのか、満面の笑みを浮かべた。

「っ……」

何故か、その顔に苛立を覚える。

「えっと、じゃあ……シャルを部屋に送ってくるよ。鈴ちゃん、ありがとう」

「……別に良いわよ。じゃあ、おやすみ」

プイ。と、不機嫌そうにして、鈴は寮の中に消えてしまった。

こうして、シャルロット・デュノアは織斑春斗と出逢った。

それはきっと、自分と向きあう誠意と勇気が導いた結果なのだろう。

覆水は盆に返らない。こぼれたミルクはコップには返らない。  
ならば、もう一度注げば良い。今度こそ、零さないように。

全てはまだスタートライン。

彼女の青春は、ここから輝き始める。

Side シャルロット・デユノア【誠意と勇気】（後書き）

何気に登場した学園の良心。

迷える少女を導くのはいつだって、ダンディなおじさまですよね W

そしていよいよ、トーナメント初日が終了しました。

……まるで、何週間もあったような長さだった W W

第21話 穏やかなる時はかくも貴重で、壊れやすく(前書き)

口亭回。

そう見せかけて、色々ありますけど。

そしていよいよ、あの子が帰ってきますww

またしても最長話ですので、しっ注意下さい。

## 第21話 穏やかなる時はかくも貴重で、壊れやすく

翌日。

学年別トーナメントの中止が正式に決まり、発表された。

だが大会自体の目的もある為、その日の午後から一回戦のみが順次行われていく運びとなった。

V Tシステムの発動は当然隠され、表向きはシュヴァルツエア・レーゲンの暴走という形で処理がされた。

つまり、『IS学園という、完全なる治外法権の場において、試作ISが暴走してしまった』事にし、各国が自国利益の為に無かった事としたのだ。

『ドイツ第三世代機に違法システムが積まれていた』という事実が明るみに出れば、ドイツどころか欧州連合そのものに大打撃を与えてしまう。

それは国際問題となり、結果として世界経済にさえも深刻な影響を与えられるだろう。

その裏で、IS学園とドイツ本国との交渉があった事も、想像するに容易い。

トーナメント中止は他の関係各所からの反発があるかと思われたが、そうはならなかった。

何故なら、他の国や研究施設としては行われた一試合だけで、十分な収穫があったからだ。

擬似フォーマットフィッティングプログラム”真打”。  
それを用いて、専用機持ちに肉薄した”篠ノ之箒”。

ISの未来に新しい可能性を見せたそれらは、今後の開発に大きな影響を与えるだろうと、誰もが感じていた。

だが殆どの生徒にとっては、そんなドロドロとしたやり取りは無関係であり、ただトーナメントの中止ばかりが話題であった。

「優勝……デート……」

「灰色の青春の脱却が……！」

「全て……消えてしまった……！！」

中止発表後の昼休み。

食堂は何時ものように賑わっていないながら、しかし暗かった。とても、午後から試合を行う意気ではなかった。

「なんだか、壮大な通夜みたいだね……？」

「トーナメント、そんなに楽しみにしてたんだな……」

「いや、そういう事じゃないんだけどね……」

少しばかり、的外れな事を言う一夏と春斗に、シャルロットは苦笑した。

彼女達の落ち込んでいる理由は、勿論”優勝商品”である。

優勝者は、織斑一夏とデートが出来る。

そんな、本人の知らないところで生まれ、本人の耳に全く届かないままに広まった噂<sup>デマ</sup>。

女尊男卑の風潮が広まり、男子が弱くなっていると言っても、彼女らもやはり乙女なのだ。

青春を謳歌したい、恋人を作って素敵な学園生活を送ってみたい。

そんな思いは当然ある。

だが、ここは女子高なのだ。しかも全寮制。恋人など、極一部の特殊性癖でもない限りは作れはしない。

そんな中に現れたのが、世界で唯一の男子【織斑一夏】。彼をものに出れば、その瞬間には勝ち組確定だ。

本年度の一年は超幸運。二年、三年もまだまだ行ける。青春を上げていくには、まだまだ間に合うのだ。

だがからこそ、トーナメント優勝は是が非でも。

そんな、某メダルの怪人も大歓喜しそうな程にドロッドロな、欲望まみれの思惑は見事に砕け散った。

この後、落ち込みの反動を対戦相手にぶつけてやろうという見事過ぎる八つ当たり精神で、全試合が大荒れになるのは余談である。

だがそんな事、一夏には全くもって責任も関係もないので、何時ものように日替わり定食 今日さば味噌 を買って空いているテーブルに着いた。

「シャルロット、怪我の具合はどうなんだ？」

「うん。顔も腫れは酷くないし、足もそんなに深く切ってないし…

…普通にしていれば多分、明後日には治ってるよ」

「そっか。痕が残らないと良いな？」

「残ったら…春斗に責任取ってもらうから、大丈夫だよ？」

「……………そ、そっか」  
ニコリと微笑むシャルロットに、一夏は本気が冗談か判断が付かなかった。

ただ、痕が残らないことを切に願った。

「あら、一夏さん。シャルロットさんと二人きりだなんて……………随分と楽しそうですね？」

「……………」

と、そこにやって来たのはセシリアと箒。セシリアは笑顔で、そして箒は無言で、しかしどちらも不機嫌さが滲み出ている。

テーブルに四人が掛けると多少手狭だが、それでも詰めて座る。ちなみに席順はシャルロット、セシリア、一夏、箒である。

「昨日は随分と活躍していたようだな……………一夏？」

「何でも、外に飛び出したシャルロットさんを追いかけて……………彼女をおんぶなさつて帰って来られたとか……………」

「……………いや、まあ」

『それ、僕なんだけどねえ』

知られていないのをいい事に、春斗は傍観者を気取った。

あの後、寮に入るや他の寮生に黄色い悲鳴を上げられるわ、シャルロットには「怪我しててシャワー浴びるのも大変なんだ……………手伝ってくれる？」などと言われるわ、その上、反省文をしっかりと書かされるわで大変だったのだ。

尤も、後半二つは春斗が相手していたので一夏自身は”肉体的疲労

” 以外は問題なかったのだが。

それでも、火のあった所に風が吹けば、やっぱり煙はもつもつと上がるのだ。

朝には『一夏×シャルロット』という図式が、実しやかに囁かれる始末。

この広がり方を考えるに、パートナーの申し込みをシャルロットからして、それを一夏が快諾した、という事も遠因のようだ。

「それで、何か言う事はありませんの？」

「……凄く、狭いです」

ずずい、と迫ってくるセシリアに、一夏はげんなりして言った。

実際、手狭と言っても余裕が無い訳ではない。だがセシリアは密着と言っても良いぐらいの距離にあった。

序に言くと、筈も似た距離である。

「この状況で、言う事はそれだけですの？」

「お前は、そういう所がダメなのだ」

「一夏にそういうのを期待するのは、間違ってると思うけどね」

「ぐう……っ！」

一言発するだけで、即三倍返しである。

もしかしたら自分は一生、女性に口では勝てないのではないか？

そんな事を、一夏は思ったりした。

そんなバカな考えを消し去るように、さば味噌定食をがつつく。味噌の甘めの味付けとホカホカご飯の組み合わせは、正しく至高である。

「そつだ。一夏、あれから春斗とは連絡を取ったのか？」

「つ……………!？」

「なつ……………何だよ、いきなり……………!？」

いきなりの発言に、一夏とシャルロットが驚く。

「いや、せつかくの真打だったのに優勝できなかったからな……………というか、そんなに驚く事か？」

「そんな事無いって！ただ、ちよつといきなり過ぎただけだ!!」  
箒が訝しんだ視線を向けてくるので、全力で否定する。

「……………本当にそれだけか？」  
が、そんな態度にさらに怪しいものを感じたのか、箒の視線がますますきつくなっていく。

『ああ、ほーちゃんは冷たい視線も素敵だね……………』

『本当に気楽だよな、こつという時のお前つてさ!?!』

「篠ノ之さんがそんな事、気にする必要ないんじゃないかな？春斗は何とも思つてないって」

「……………」

シャルロットがにこやかに言うと、何故か気温が数度下がった。

具体的に言つと、鳥肌が全身に立ってしまう程だ。

「ほづ、それはどういう意味だ？」

「ひいっ……！？」

篤が静かに返すと、気温が更に下がった。

具体的に言つと、隣のセシリアと身を寄せ合わないと、凍えてしま  
いそうな程だ。

「どういうも何も、そのままの意味だよ？ そんな些細な事、春斗  
は気にしたりするような小さい人じゃないもの」

「……随分と、知った風に言うのだな？」

「知ってるからね……篠ノ之さんよりは」

「……私は幼馴染だぞ？」

「そんな六年も前の話を持ち出して、意味があるの？」  
ピクリ。

篤のこめかみに四つ角が見えた。

「ほほう……春斗はその六年も前の関係を今でも大切にしてくれて  
いるぞ？ 真打鉄の力は正に、その証明だな」  
ピキッ。

今度はシャルロットのこめかみに四角が立った。

「ふうん、そう言えばトーナメントの決着……まだ着いてなかった  
よね……？」

「そう言えばそうだったな……まあ、あのまま続けていけば、勝つ  
たのは私だったろうがな？」

「へえ、本気で思ってるの？」

「確かに技量では及ばないだろう。だが、私には負けられない理由  
がある、だから勝つ。それだけだ」

IS学園の食堂のエアコンはどうかやら動作不良を起こしているようで、周囲の気温は、永遠の理力吹雪が吹き荒れそうな程であった。

周囲にいた生徒達は、安全圏である半径3メートルまで退避。

「い、一夏さん……私、もう……」

「ダメだ、セシリア！！ 目を閉じるな！！ 閉じたら死ぬぞ！？」  
脱出不可能な位置に居た、一夏とセシリアは今、正に凍死寸前であった。

「……何、この状況は？」

「あたしに聞かれても分かんないわよ」  
遅れてやってきた鈴と織羽は、その光景に啞然とした。

『織斑一夏くん。シャルロット・デュノアさん。至急、アリーナまでお願いします』

「あ、今日はアリーナの受付するんだっけ？ 行こう、一夏」

「え？ あ、ああ……」

混沌の終わりは校内アナウンス。  
呼ばれた二人は食堂を後にし、初夏近い暖かさが学園に帰ってきたのだった。

「むう……」

訂正。極一部に寒冷前線は残っていた。

「……何で筈に、あんな喧嘩を売るみたいな事を言ったんだ？」

「何でって……先制攻撃は戦いの基本でしょ？」

「……………」

キラキラとした笑顔で、すごい発言をされてしまい、一夏は黙るしか無かった。

『春斗……何とかしろよ？』

『……こういうのって、絶対に一夏の役回りの筈だと思うんだよね？』

『人聞きの悪いこと言うな！？ ていうか、これは明らかにお前の責任じゃねえか！』

『くっ……！？ 一夏に反論できないなんて……一生の不覚だ！』

『お前……本気で怒るぞ？』

「ねえ、僕も春斗と話したいんだけど……?」

「……ああ、シークレットチャンネル秘匿回線を設定してないんだっけか」

「シークレットチャンネル秘匿回線……?」

「春斗が作った特殊ネットワーク通信で……なんでも、クロッシング・アクセス相互意識干渉をプログラム化した物らしいぞ?」

「そ、それって……とんでもない大発明だよな?」

「多分そうなんだろうけど、春斗は『ただの物真似にさえなっていない、出来そこない』だって言ってるからな」

「……えっと、いや、そういう事じゃなくて……」

クロッシング・アクセス相互意識干渉は、ISの謎の機能一つとされている。

操縦者同士の波長が合うと起こる現象とされているが、そのメカニズムは解明に至っていない。

なのにそれをプログラムで再現した、ということ自体がとんでもない事なのだ。

「はあ、春斗なら仕方ないんだろうね……きつと」

シャルロットは呆れ気味に、そう零した。

そんなんやりつつ、三人はアリーナへの道を行くのだった。

生徒達の荒れっぷり以外はさしたる問題もなく、トーナメントはその日程を順調に消化。

その間、一夏も遊んでいた訳ではない。

割り当てられた雑務や受付を、春斗と共にこなしていた。

(主に事務系を春斗、肉体系を一夏が担当)

全一回戦は三日を掛けて終了。

セキュリティ仕様も通常に戻り、アリーナでもいよいよ訓練解禁となった。

第二アリーナでは一夏が早速、白式を展開させていた。

目的は訓練というよりも、仕様変更された雪片のチェックである。

「で、何をどう変えたんだ？」

『まあ、言うよりは見た方が早いよ。バリア無効化攻撃を起動させてみて？』

「……よし」

一夏は言われるまま、雪片を展開させようとした。

が、何時もならばブレードが開いてそこからエネルギー刃を出現させるはずのだが、雪片は僅かに動いて、隙間を作っただけだった。

「あれ……？」

首を傾げる一夏。と、次の瞬間。

ブウンッ！

「つとあ！？」

その隙間から、全体を包みこむようにしてエネルギー刃が出現。そのまま固着された。

「こ、これは……どうなってるんだ？」

『ラウラとの戦いで、一夏が零落白夜を進化させたでしょう？ そのデータを基にして、ちょっと改良してみたんだ。少し威力は落ちるけど、その代わりに戦闘可能時間が36%向上している』

「つまり、ガス欠になり難くなったって事か……」

『零落白夜を使う時は、展開装甲が稼動して、ブレード状態で完全に固定されているから』

「展開装甲……？」

一夏は、テキストにさえ載っていない言葉に首を傾げた。言葉の感じからすると、”装甲”が”展開”する、ということなのだろうが、その意味が分からなかった。

『展開装甲っていうのは、東博士が無換装による全局面展開運用能力の理論を構築して、その為に開発していた物だよ。まあ、形状変化によつて、能力や性能を切り替える……みたいなものと思つてくれれば良いよ』

「それも、第三世代ISなのか？」

『いや、これは言うなれば……第四世代だね』

「っ……!？」

未だ世界中で第三世代が実験中なのに、それを飛び越えて第四世代機。

莫大な資金を投入している各国のIS開発をあざ笑うかのような発明である。

「あれ、て事は白式って……？」

『第四世代ISって事になるね。月影にも展開装甲は使われているから、裏白式もね』

「なんか、とんでもない機体なんだな……コレ？」

手の中で新たな光刃を輝かせる雪片式型を見ながら、一夏はしみじみと思つた。

「一夏、お待たせ」

鈴が軽く手を振つて、小走りにやって来た。互いに、訓練再開最初の相手となる。

他の面子はこの後に来る予定で、筈のみが真打鉄のレポートを纏める為に一人、悪戦苦闘中である。

「甲龍は直ったのか、鈴？」

「ええ。早速だけど……慣らし運転に付き合ってもらってからね？」

鈴は待機形態であるブレスレットをかざした。

赤い光の粒子がその身を包みこむと、一瞬で甲龍が展開された。

「それじゃ、始めるわよ！」

「ああ、思いつきり行くぜ！！」

『それでは……試合開始っ！！』

「「「でやああああああっ！！」」」

春斗の声を合図に、二人は同時に突撃した。

そして。

「だあつ！ 負けたあゝつ！！」

「フフーン。まだまだ甘いよ、一夏は」

見事に甲龍が勝利。一夏は悔しさに声を上げてしまう。

「あんたの動きは、いちいち読みやすいのよ。そんなんじゃ、この先が思いやられるわね」

『単純突撃のクセは直した方が良いよ、本当に』

やれやれといった風に、二人は首を振った。

「ところで……春斗は全然模擬戦しないけど、良いの？」

『僕は良いよ。練習したって、試合に出れる訳じゃないしね。そんな時間を使うなら、一夏を鍛える為に使うべきだと思っよ？』

「そりゃまあ、そうなんだけどさ……ちょっと位やっておいたら？」

あたしも裏白式に興味あるしさ」

「そうだ、やれーっ！ そして俺の苦労を少しは味わえーっ！」

『……苦労の残り火は全部、一夏の体に残るんだけど？』

「ハッ！？ そう言えば……！！」

内側が変わるうとも結局の所、肉体は一つしかない。つまりは一夏の疲労は二戦やる事と同じなのだ。

『ま、模擬戦に興味がない訳じゃないし……やってみるかな』

「よし。この鈴様がビビシと扱いてあげようじゃないの！！」

何のかんと言いつつ、やる気になった春斗と、もの凄く気合の入った鈴に、一夏は一言だけ言った。

「どうか、お手柔らかにお願いします」

だが、その願いは見事なまでに聞き届けられなかった。

具体的に言つと、後からやって来たシャルロットがもの凄く鈴に食

い付き、更にセシリアが乱入しての大乱戦となったせいであった。

「ついに……この時が来た……！」

一夏はそれに、感動を禁じ得なかった。

『苦節およそ二月……長かったね』

そして春斗も、若干ながら興奮していた。

大湯船一、ジェット&バブルバスである中湯船二、檜風呂一に打たせ滝湯が一、サウナに全方位シャワー。

充実過ぎる設備。

そう、此処こそは 。

「THE・大浴場ッ!!」

一夏は両手を上げて叫んだ。当然、腰にタオルを巻くなんて無粋な

マネはしない。

今の彼は只の織斑一夏ではない。織斑「フル・フロントル」一夏だ。その名に大した意味はない。

本来、大浴場の使用は来月からだったのだが、今日はボイラーの点検があり、元々使用が出来なかったのだ。

その試運転も兼ねて今日、一足早い開放となったのだ。

そもそも、時間さえ決めてしまえば済む事と誰もが思うところだが、なのに何故、今まで使えなかったか。

それは、他の寮生からの強い反発があったからだ。

別段、男子に使わせる事が嫌だった訳ではない。

「男子の後なんて、どうお風呂を使ったら良いんですか!？」

「自分達の入った後に男子が入るなんて、そんなの恥ずかしい!!」

などといった、思春期の乙女の潰えない悩み故であった。

二人的には「普通に使えよ」と言いたいところであったし、「お前から家でお父さんやお兄ちゃんや弟の前後はどうしているんだ?」と聞いてみたいところであった。

「他人と肉親は違う話だ」と言われれば、それまでだが。

ともあれ、今はこの風呂を堪能する時である。

「まあ待て、慌てる何とかは貰いが少ないと言っしな。まずは体を洗ってからだ……なーんちってな!」

『……温かな風呂場で、肌寒いとはこれ如何に』

高笑う一夏に対して、春斗は本当に冷ややかだった。

「はあ~~~~、生き返るなあ……」

『風呂は良いね。世界が生み出した素晴らしい文化だよ』

「やっぱり日本人は風呂だよな。はあ、泣けるぜ……」  
滝湯を浴び、体を洗い、湯に浸かる。

体を洗って入り、また体を洗って入るといふ、よく分からない拘りを堪能して、一夏は感涙した。

『貸切といえば聞こえは良いけど……誰も居ないのも、それはそれで寂しいね』

「うーん、弾とか居りゃあ盛り上がるのになあ」

一夏は中学時代、弾を含めた男子連中で銭湯に行った時を思い出し、

ふと呟いた。

その時は大騒ぎしてしまい、銭湯の親父さんにぶん殴られたのだが。  
『枯れ木も山の賑わい、か』

男子の肌ばかりを枯れ木と称する辺り、春斗の性格が見えるところである。

大湯船にその身を浮かべながら、湯煙揺らぐ天井を二人は見上げた。

「……………トーナメントも、結局中止か……………」

『前回のクラス対抗戦も入れて、二度目……………行事中止率100%だね。おめでとう』

「めでたくねえし。……………悪かったな、春斗」

『……………何の事だい？』

「色々とき。俺、ずっとイラついてただろ……………ああ、そつだ。千冬姉にも謝らないと……………」

『……………それで、何でイライラしてたのさ？ 確か、ラウラちゃんの時からだろう？』

「ああ。あいつに思い出させられたからな……………あの時の事を」  
チャプン、と湯が跳ねる。

「モンド・グロツソ決勝の日……………俺が誘拐されたせいで、千冬姉は優勝を逃したし、春斗は危うく消えちまうところだった……………」

『……………』

当時の春斗は不安定であり、誘拐という精神的負荷の大きい出来事は、春斗の存在を本当に危険な状態まで追い込んだ。

それこそ、あと一步遅ければ、二度と回復する事は無かつただろう程に。

『あれは別に一夏が悪い訳じゃ……………悪いのは、さらった連中だよ？』

「そんな事は分かってるよ。でも、俺がもつとしっかりしていれば、ああはならなかったかも知れない。そう思うと……自分が嫌になつてさ。ラウラに会つてさ、その時の事がどうにも……今と重なつちまつたんだよ」

「一夏……だから、あの試合を自分だけで戦おうとしたの？」

「あの事件が全ての始まりだ。そのせいで、セシリアと鈴が傷ついた……だから、ラウラとの決着は……あの過去との決着だけは、俺の手で着けたかつたんだ」

「……どうして、そこまで？」

「偶然ISを動かしまつて、この学園に来て……何にも分かんないままセシリアと戦つて、鈴とあの無人ISとやり合つて……でも、どっかで春斗に頼つてる自分がいるって気付いたんだ」  
一夏の体が湯船に沈み、底に背が触れる。

「最初はそれでも良いかと思った。だつてさお前と俺じゃ、頭の出来が違うし……でも、それじゃダメなんだよ」

「……」

「いつまでも、このままじゃいられない。その時が来た時に、お前が居なきゃ何も出来ない、何も分らない自分じゃ……弱い自分じゃ嫌なんだよ。そんなんじゃ、何も守れない……！」

一夏は勢い良く、湯船から体を起こす。

そして乱雑に髪を掻き上げて、湯船の淵に寄りかかった。

「なんて色々言つてもさ……結局は一つなんだよ。俺は……お前の何でも出来る才能が羨ましいんだ。だから、俺だけでも戦えるんだつて証明したかつたんだ……そうしないと、お前に会わせる顔がない気がしてさ」

一夏は嘆息して、天井を見上げながら可笑しそうに笑った。

全部は下らない意地で、だから強さの意味も、自分の力の意義も見

失ってしまったと。

「僕はさ、一夏が凄く羨ましかった……うつん、今でも羨ましいんだ」

「……春斗？」

「どんなに凄いプログラムが作れても、何ヶ国語が分かってても、どれだけの科学式が分かってても……特別な才能なんて欲しくなかった。ただ一つだけ……好きな子の隣を走れる、健康な体だけが欲しかったよ。だから、自分の体から一夏に移って、一時でもそれを得られて……どこかでこのままでも良い気がしてた」

「っ……!？」

「だって、そうじゃないか。二人に負担ばかり掛けて、なのに目覚めない僕。仮に目覚めても、東博士の作った《肉体機能維持装置》に繋がれてるとはいえ、普通の生活に戻れるまでどれだけ掛かる？」

その上、今の一夏と千冬姉さんはIS学園、僕は医療施設……結局、僕は独りきりだ。だったら……それなら、僅かな時間でも……なんて思っちゃうよ、そりゃあさ」

「春斗……お前、そんなに……？」

初めて聞いた想いに、一夏は何も言えなくなった。

ずっと、目覚めさせる事ばかりを考えていた。だから、目覚めた後の事なんて、きっと誰も考えてなかった。

もしも目を覚ましても、厳しいリハビリがある。

そして一夏と千冬、鈴もそう軽く外に出られる立場ではない。

春斗がISの適性も持っているなら、学園内の医療施設に入れるだろうが、既に簡易検査に於いて、適性無しという結果が出ていた。

つまり 春斗は学園には入れない。

目覚めれば孤独。目覚めなくとも

やはり孤独。

『シャルの為にISを渡したのも、ほーちゃんの為に真打を作ったのも、一夏の訓練のメニューやら考えたり、雪片を弄ったりしたのも……この世界に、自分のいた証拠を残したかったから……言うなれば、”遺産”みたいなつもりだったのかな？』

「春斗……っ！！」

思わず声が荒ぶる。

まるで全てを諦めているような、そんな言葉を認められない。認める訳には行かない。

そんな一夏に、春斗は「クスッ」と笑った。

『 ” だった ” って、言ったでしょ。 ” 彼女 ” に偉そうな事言っ  
て、自分がカツコ悪い事、出来ないって……だから、シャルに自分の事  
を打ち明けたんだし……それと、もう一つ 』

ガラッ。

「『え っ？』」

いきなりした音は、大浴場のドアのある方向から。

だが、今日は男子のみの筈であり、そしてIS学園に在籍している男子は勿論、織斑一夏一人だ。

つまり、湯殿の戸を開ける人間はいない筈だ。

「一夏」

『ほーちゃん……！？』

「ほ、筈……！？」

果たして振り返った先には、長い黒髪をポニーテールに纏めたファースト幼馴染の姿があった。

(うう……恥ずかしい……！！)

篠ノ之箒は正しく、羞恥の渦の中に居た。

ただでさえ男湯に入るなど、年頃の女子がする事ではない。

箒はISスーツを着ていて裸ではない。が、一夏は見事に裸だ。

湯船から覗く濡れた半身を見るだけで、クラクラとしてしまいしまいそうであった。

さて、古風にして武士道一直線な箒が何故、こんな事をしたかといえ、そこには一人の忍の暗躍があった。

時間はその日の放課後。寮の自室に、織羽が帰って来たところまで遡る。

「あの夜以降、デュノアちゃんと織斑君、仲が良いねえ」

「シャルロットは春斗に気があるのだ。問題などない」

「でも、どこかの想い人より近くの彼……なんて事もあったりし……」

……冗談だから、そんな目で睨まないでくれる？」

「……そうか」

と言って日本刀をしまう箒。というか、どれだけ冗談の通じない子なのかと、織羽も冷や汗モノであった。

「でも、最近は凰とも仲が良いよね……もしかして箒、遅れをとってるんじゃないの？」

「なっ……!?!?」

「だって……約束もご破算だったし、ここらで一気に攻めに転じる時じゃないかしら？」

「せ、攻め……だと？」

何をさせる気だとたじろぐ箒に、織羽はニヤリと笑った。

「今日、大浴場は男子しか使えないんだって」

それが”悪魔の微笑み”というものと、篝は初めて知った。というか、自分が大胆な行動をする時には必ず、彼女が入れ知恵している事にも、早く気付いて欲しいところだ。

そして、あれよあれよという間に、篝は脱衣場まで来てしまっていた。織羽は入り口近くで待機しているので、逃げようものなら即行で捕まるだろう。

「くそっ、ここまで来ておいて怖じ気づくな……!!」  
余りにも大胆な行動だが、しかし誰にも邪魔をされないという点は大きい。

「私も……勇気を持たねば……! 私の我侭……そう、その為にだ……!!」

決意を固めると、浴衣の帯を解いて、脱いだそれを籠に入れる。ISスーツとなった箒は、意を決してドアを開けるのだった。

「な、何でお前……て、此処は今、男湯だぞ！？ 女子は使えないんだぞ！？」

「そんな事は知っている！ というか、ISスーツを着て風呂に入る馬鹿がいるものか！！」

「目の前にいるじゃないか！？ ていうか、早く出て行けよ！！」「誰の為に来たと思っているのだ！？ 何もせず帰れるか！！」

『何、このむかつく会話は……』

春斗的には「テメエら、いちやついてんじゃねえよ！」としか思えない内容であったが、当の本人達は真剣そのもの。

「何をしに来たってんだよ、箒！？」

「そ、それは……お、お前がその……試合がまた中止になってしまった事を気に病んでいるのではないかと思ってだな、その……慰めと、ラウラに勝ったその労をねぎらってやろうと思ったのだ！ さ

あ、さつさと出る、私が背を流してやる!」「  
箒は顔を赤くしながら、一息でまくし立てる。  
一夏としては、既に体は洗ってしまったので必要ないのだが、  
しかし箒の鼻息は荒く、退きそうにない。

こういう時はやるだけやらせて、さつさとお帰り願うのが正しいと  
判断した。

「……………じゃあ出るから、後ろ向いてるよ?」

「わ、分かった……………」

箒が背を向けたのを見て、一夏は湯船から体を上げた。

ざばあ、という水音。そして徐々に大きくなる、ペタペタという素  
足の音が、箒の心をドキドキとさせる。

本当に来た。

その体から立ち昇る熱気は箒にも伝わり、一糸まとわぬ姿の想い人  
が直ぐ後ろにいと告げている。

カタン、という音がした。恐らく風呂用の椅子を置いたのだろう。

「……………いいぞ？」

「う、うむ……………」

箒が振り返ると、そこには思ったよりもずっと大きく、そして逞しい背中があった。

箒はスポンジを手に取ると、ボディークリームを付ける。

「ゴクツ……………で、では行くぞ……………？」

「お、おう……………」

充分に泡立てて、箒は一夏の背中にそれを触れさせた。

力を入れ過ぎないように気を付けながら、箒は手を動かす。

「どうだ、一夏……………痛くはないか？」

「大丈夫……………そんなくらいで良い……………」

「そ、そうか……………」

「……………」

「……………」

『なに、この夢のようなシチュエーションは？』

背を洗いながら、箒はその後姿に目を奪われていた。

細くもしなやかな筋肉。一朝一夕に鍛えたものではない。恐らくは剣を手放した後も、ずっと鍛える事だけは続けていたのだろう。

そして、所々に見える細かな傷跡。それはISの戦闘で付いたものか、それともそれ以外でか。

背を洗い、首筋から肩、そして腕へとスポンジが動いていく。

洗い続けている内、ドキドキと打つ胸の鼓動はそのままだが、しかし頭に昇っていた血は少しだけ落ちて、冷静さが戻ってきた。

「流すぞ？」

「ああ」

一夏の方も少しは落ち着きを取り戻したのか、聞く限りでは普通に返事をしていた。

ざあ、と掛けられた湯が泡を流し落としていく。

「……………」

一夏はこれで終わりだろうと、内心で深く安堵した。誰かに洗ってもらおうというのは気持ち良いものだが、しかし恋人でもない女子にそうついた事をされるのは精神衛生上、宜しくない。

「……………」 一夏

「っ……………!？」

とすん、と少し重く、固い何かが背に当たった。

首だけで振り返ると、直ぐ後ろには篝の髪が見えた。当たっているのは彼女の頭のようだ。

「ど、どうしたんだよ……?」

「お前に聞きたい。私が春斗に告白されたと聞いて……お前はど  
う思った?」

「え……いや、どうって言われても……あの時はラウラの相手で必  
死だったから……」

「……そうだったな。なら、そのまま聞いてくれ」

苦笑して、箒は言葉を続けた。

「私はな……一夏、お前が好きだ。幼馴染としてではなく、一人の  
男として、お前が好きなんだ」

「『っ……!?!?』」

一夏は思ってもいなかった告白に、春斗は告白した箒自身に驚き、  
息を呑んだ。

何かを言おうとするが、言葉が引っかかって口から出ない。

「答えなくて良い。そのまま……聞いていてくれ」

「あ、ああ……」

何とか、それだけを絞り出した。

「春斗に告白されて、私は戸惑いつつもそれを断った……私にはも  
う、好きな男ひとがいたから……でも、それがよく分からなくなった」

箒の声が、少しだけ落ち込む。

「最初は春斗への申し訳なさだと思っていた。だけど、違ったんだ……シャルロットが現れたからだ。必死に、縋るように、春斗を求めめる姿に……私は苛立を感じていたんだ」

「……どうして？」

「その時はまだ、よく分からなかった。だが、あの時……ラウラのISが暴走し、私は突然過ぎる事態に混乱し、不安だらけのまま戦ったあの時……春斗の声がして、それだけで不安が消えて、とても安心した。そして三人が揃って、それだけで何にも負けない気がした……そうして、やっと分かったんだ」

「っ……！」

篝の手が一夏の胸へと回され、ギュツと抱きしめる。

「私は……どうやら、春斗の事も好きだったらしい」

『っ……！？』

「私はお前が好きだ。だけど、お前だけでも……春斗だけでもダメなんだ。今の私はどちらも……誰にも譲りたくないのだ」

『ほーちゃん……』

「篝、俺は……」

「答えなくて良い。本当に節操がないと、自分でも分かっているのだから……というか、本当に今更だがな」

自嘲気味に笑いながら、篝はすつと体を離して立ち上がった。

その声は少しだけ、涙が混じっているように一夏には聞こえた。

「篝」

「答えなくて良い」

「良いから聞け！……俺は、お前の事をどう思っかなんてよく分からない。ガキの頃は普通に一緒に居たけど、何時も仏頂面で、不機嫌そう、人が気を使っつてやんないとドンドン一人になっちまっつて……手間のかかるヤツだったよ、本気でさ」

「……そこまで言うか」

「実際にそうだったろう？ そうやって俺が気を使ってやってるのに……お前が素直になるのは、何時も春斗の前だけで……寮の初日だってそうだ。あんだだけ機嫌悪かったくせに、春斗の名前が出ただけで直ぐに治ってさ……そういうの見る度に、こっ……イラッとしてた」

「っ……！？ そ、それはえっと……もしかして、”ヤキモチ”という事か？」

「知るかよ！ ただ、そう思っただけだ！！」

そう叫ぶや、一夏は勢い良く湯船に飛び込んだ。

「……長話のせいで体冷えちまったから、もうちょい入ってく。その間に……」

「あ、ああ……分かってる」

カラカラ、という音がして、気配が浴場から消えた。

そして、一夏はまた湯船の底に沈んだのだった。

「お、どうだった？ 上手くいった？」  
箒が脱衣場から出ると、そこには織羽の姿。興味的光を隠そうともせずにいるその顔に、全身の力が抜けてしまう。

「ちょっと、大丈夫!？」

「……もう二度とやらんぞ……こんな事……恥ずかしすぎる……」  
今更ながら、倒れてしまいそうなほどに恥ずかしく、頭が白くなってしまう。

「よく頑張った。はい、冷たいの」

「ああ、ありがとう……」

ジュースを受け取って飲むと、少しだけ体が冷えた。

確かに恥ずかしかった。だが、それ以上に。

『こっ……イラッとしてた』

『知るかよ！ ただ、そう思ったただけだ!』

一夏が、春斗と自分にヤキモチを焼いていた。そう思うとつい、顔がニヤケてしまう。

これはある意味、相思相愛の仲と言えるのではないか、などと思っ  
てしまう。

「ふふ……へへ……えへへ……」

「………箒が、壊れた……!？」

織羽は今更に、自分の作戦がやば過ぎたのかと戦慄したのだった。

大浴場から戻った一夏は、のぼせ気味な体をベッドに横たえていた。

「はあ~~~~~」

『はあ~~~~~』

同じ溜め息。なのに、その意味合いは全く違う。

「お前、何で嬉しそうなのさ？」

『そりゃ嬉しいに決まってるよ。ほーちゃんに好きだって言われたんだよ？ こりゃもう、嬉しくない筈がないって』

「……あ、そうだな」

本気で嬉しそうなの春斗はさておき、一夏は思いつきり悩んでいた。何であんな事を言ったのか、自分でもよく分からなかったのだ。

まるで、自分が箒の事を好きみたいではないか。

「……………」

本当はどうなのかと、一夏は考える。

箒は幼馴染で、同じ学校、同じ道場に通っていて、親しい仲だった。誕生日やら、クリスマス会やら、新年稽古やら、

そりゃあって、彼女との思い出を振り返っていても、やはり分からない。

ただ一つ言えるのは、その時間はとても楽しかった。という事だ。

「なあ、春斗？」

『何？』

「お前は……箒の何処を好きになったんだ？」

『……最初は誰も寄せ付けないような雰囲気、気になっただけだった。でも、その裏の弱気な所とか、不器用な所とか、色々見えてきて、何時の間にか……かな？』

「そっか……俺にはよく分かんねえよ。どう、答えたらいいのかも

れ」

『いいんじゃない？ これからじつくりと、考えていけばさ。入学前の姉さんの言葉、覚えてるでしょ？』

「ああ……」

「『求めよ。さらば与えられん』」

入学の数日前。自宅に帰ってきた千冬が告げた言葉。何処へ行くことも、日々を充実させるのは、それを求める自分の志である。

だからこそ求めろ、と。

「じゃ、俺も求めるとするか。答えてヤツを……」

『お、ついに朴念神の脱却か！？』

「誰が朴念神だよ！？」

コンコン。

「ん……？」

ドアのノックする音が響く。

コンコン。ドンドン。

「このパターンは……!?!」

それは以前、箒が尋ねてきた時と似たパターンであった。  
あの時はこの後に木刀の一撃が入って、危うくドアを壊されるとこ  
ろだった。

なので一夏は慌てて起き上がり、ドアを開けるべく向かった。

事態は、そんな一夏の想像の斜め上を、思いっきり突き抜けていた。

「今開け

るぶあっ!?!」

ドカーンッ！！

派手にドアが吹っ飛び、一夏はその直撃を食らう。更に、そのまま下敷きにされてしまった。

「な、何がどうなって……うぐっ!?!」  
なんとか起き上がった所、ドアが突然、一夏を床へと押しつぶした。

「うぐぐ……苦しい……重い……!!」

「む……? そんな所で何をしている?」

「は……? ら、ラウラ……!?! ど、退け……苦しい……」  
何とか顔を覗かせると、そこにはラウラの姿があった。しかもISの右腕部を部分展開させ、ドアの上に乗っているのだ。

ラウラはドアから降りると、そのままドアをポイツと、後ろに投げ飛ばした。

「いきなりドアを吹っ飛ばすなよ!?!」

「ノックはした。だが開かなかった。だからだ」

「開けようとしたわ!? もうちよつと待てよ!?!」

「む、それはすまなかった」

ラウラはちよこんと床に座り、一夏に頭を下げた。

「ところでお前、いつ退院したんだ?」

「今日だ。ISの方が予備パーツの組み上げが遅れてな……こんな時間になってしまった」

あの事件以降、ラウラは検査入院をしていた。なにせ、VTシステムという違法プログラムを使ってしまったのだ。体にどんな悪影響を及ぼすか、詳しく検査する必要があった。

ISもコアが無事だったが、シュヴァルツェア・レーゲンの修理には時間が必要だった。

それが今日、同じ日に終わったという事らしい。

「そっか、そりゃ良かった。……で、なんの用だ？」

「うむ。とても重要なことを伝えたくてな……」

「何だよ重要な」

事って。と、一夏は続ける事が出来なかった。

何故なら、その唇はラウラによって、塞がれていたからだ。

「……………んんッ!？」

突然の事態に思考停止し、再起動した時にはラウラの唇は離れていた。

「一夏さん……ラウラさん……？」

「あんたら……何をしてるのよ……？」

そして運悪く、騒ぎを聞きつけた寮生が廊下の向こうにいたりした。しかも、ISを起動状態にしてだ。

「せ、セシリア！？ 鈴！？ 違う、これは違うんだ……！」

「何が違うつてのよ！ 今、き、きキ……ッ……ッ……！」

「キスを……なさつて……いきましたわよねッ……！」

顔を真赤にしながら、二人が睨みつける。その迫力は、虎やライオンも裸足で逃げ出すほどであった。

「だから、違うんだって……！」

「何も違わん！」

そう言つて、ラウラは一夏に向き直つた。

真っ直ぐに彼の瞳を見据え、白い肌を羞恥で赤くしながら、ラウラは声高らかに宣言した。

「織斑一夏、お前は……私の”嫁”にする！　これは決定事項だ！  
異論は認めん！！」

「……はあっ！？」「」

六月最後の波乱が、今更に始まったりする。

**第21話 穏やかなる時はかくも貴重で、壊れやすく（後書き）**

次回はラウラのターン。

今までの裏で、彼女に何があつたのかを描いていきます。  
つまりはあの人も登場して、カオス一直線になる予定です。

**S i d e** ラウラ・ボーデヴィッツ【私という器に】（前書き）

今回は短め。

いや、普通のサイド並なんですけど……。

ラウラさんの天然ぶりをお楽しみください。

あと、あの大尉の事もw

## Side ラウラ・ボーデヴィツヒ【私という器に】

私は暗闇で生まれた。

影の中で育ち、黒き世界が全てだった。

遺伝子強化試験体として作られ、最強の兵士と成る為だけに生まれた存在。

やがて私には【ラウラ・ボーデヴィツヒ】という名が与えられたが、それは単なる識別記号でしか無かった。

強くなり、成果を残す事。それだけが全てであり、自身の存在する理由だった。

そしてそれは順調だった　　あの時まで。

IS。

世界の軍事バランスを一変させたその出現が、私を奈落へと墮としました。

IS適合性を高める為に埋め込まれた、ナノマシンによる擬似ハイパーセンサー【ヴォータン・オーシエ越界の瞳】。

理論上の不適合はないとされたそれは、しかし制御不能となった。赤い瞳は金色に染まり、抑えることの出来ない機能は、全てに於いてマイナスへと変わった。

基準を下回る成績。

最強の兵士となる為に生まれながら、その意義を果たせないままに、私は失敗作とされた。

絶望。自分の存在意義を失い、私は闇へと沈んだ。そして、出会った。

織斑千冬。

所属していた部隊にやって来たその人との出会いが、私を再び栄光の道へと引き上げてくれた。

強く、凛々しく、完璧なる存在。

それは正に私の理想であり、私が成りたい姿であった。

「私には二人、弟がいる」

だからこそ、その教官に汚点を残した者が許せなかった。

「もしも会う事があるならば、心をしっかりと持っている？ 特に一夏の方は、未熟者のくせに妙に女を刺激するからな。油断していると、惚れるぞ？」

教官が、完璧でなければならぬその人に、あんな優しげな表情をさせる者を許せなかった。

「春斗の方はそうでもないが……あれはあれで、さらりと人を口説く癖があるからな。隙を見せると持っていかれるぞ？」

「では、教官も弟に惚れているのですか？」

思えばきつと、それはヤキモチだったのかも知れない。そんな下ら

ない事を、聞いてしまったのは。

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿め」

そう言つてニヤリとする教官は、何処か楽しそうで、だから余計にイライラした。

羨ましい。

そう、羨ましかった。

会つたこともないその弟達に、私は嫉妬したのだ。

教官の汚名も、完璧云々もただの口実。

私は私の、この嫉妬心を叩きつけたかっただけだったのだ。

そして、この国に来て　　私は出会つた。

圧倒的な実力差がありながら、その瞳は決して怯まず。  
打ちのめされ、倒れ、それでも立ち上がる。

そう、私は出会ったのだ。そして、理解した。

「憶えておけ。力があることは、イコール強いという事ではない」

あの、教官の言葉の意味を……私は理解した。

強さとは何なのか。そう問いかければ、きっと答えは無数に返ってくるだろう。

その内の”二つ”と、私は強烈に出会ってしまったのだ。

「何故、お前は強い。どうしてそこまで戦うことが出来る……？」  
私は、問いかける。

『強さつっつーのは心の在処。己の拠り所で……自分がどう在りたいかをいつも思うことじゃないかって、俺は思う』

『強さは、心から生まれるものだよ。その心がある限り、何度でも立ち上げられる……そういうものじゃないかな？』

心の在処……己の拠り所……心から生まれるもの……。それが強さ……？

「そう、なのか……？」

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいか分からない奴は、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ？』

「歩き方……？」

『その足で何処へ向かうのか、どうして向かうのか……ね』

「どうして、向かうか……？」

私は、何処へ行きたかったのだろうか？ どうして行きたかったのだろうか？

『そう、難しく考える事もないんじゃないかな？』

『そうそう。人生やったもん勝ちだぞ？ つまらない遠慮や我慢なんてしてたら、人生損するだけだって。やりたいようにやらなきゃ人生じゃないってね』

そう言っつて、そいつはニヤリと笑って見せる。そしてもう一人は、

呆れ気味に肩を竦めた。

『一夏はもうちょっと、自重する事を覚えた方が良いと思うけどね？』

『何だと！？ 春斗、俺の何処が自重してないってんだよ！？』

『……全部？』

『よーし分かった。喧嘩売ってんだな？ だったら買ってやるぞ、この野郎！？』

彼らは、私そつちのけでいきなり言い合いを始めた。

言葉だけを聞けば、酷い罵り合いの様だ。だが、その顔はとても楽しそう。

ああ、そうか。多分……これが”強い”という事なのだろう。

「お前は……お前達は、だから強いのだな。だから、強くあれるのだな……？」

そう私が言うと、二人は言い合いを止めて、目をパチパチと瞬かせて、そして。

『俺は強くなんて無いぞ？ 全然、全くな』

『僕は強くなんて無いよ？ まだまだ、全然さ』

同時に、私の言葉を否定した。

だが、どうしてだ？あれだけの”強さ”があって、どうして強くな

いという？

『だけど、それでも強いっていうんなら……きつと、そつ』

『強くなりたいたいから、だから強いのだ』

強く、なりたいたいから強い……？

『それに……俺達には強くなって、やりたい事があるからな』

「それはなんだ……？」

私は、その答えを求めた。

それはきつと、私の欲しいもののような気がしたからだ。

『誰かを守ってみたい。自分の全てを使って、ただ誰かの為に戦ってみたいんだ』

『大切な人を守りたい。その人の大切なものを、大切な世界を、全身全霊をもって守りたいんだ』

その言葉は、私には眩しすぎた。

何故ならそれは、あの人の様だったからだ。

「私には無理だ……空っぽの私には……何も無いから」

そうだ。【ラウラ・ボーデヴィット】という器には、何も無い。だから、強くななんてなれない。

『それは、違うと思うよ？』

「……………」

何が違う？ 私は……。

『僕が行ってた道場の先生の言葉に、こういうのがあるんだ。【人とは人として生まれるにあらず。皆、未熟なる者として生まれ、学び、感じ、そして人になるのだ。故に人に成ると書き”成人”と読み、人に達すると書いて”達人”である】ってね』

人に……成る？ 人に……達する？

『人は誰でも、最初は空っぽなんだよ。そこにどんな中身を入れていくのかは……君次第じゃないかな？』

「私は……だが、私は……」

『あのなあ、お前にもあるだろう？ 中身って奴がさ』  
そう言っつて、そいつは私の胸を指差す。

『お前の中にはもう、なりたい自分が……千冬姉がいるんだろう？  
それに、俺と……春斗もだ！』

『他にも、きつと気付いていないだけで……君は空っぽなんかじゃないよ』

私は……私にも……あるのか？ お前達のように……？

『それに僕達にも、君が中身になっているからね』

『そついう事だ。だから』

そいつは私にまっすぐ、手を差し伸ばして言った。

『だから俺が、お前を守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィット』

「っ……！？」

それはまるで、対戦車ライフルを撃たれたかのような衝撃だった。

お前を守ってやるよ。

私は……こいつの前ではただの”女”なのだ。  
そつ、私は　ときめいてしまった。

『君が迷うなら、その手を引いてあげるぐらいは……してあげるよ？』

そう言って優しく差し出される手は、初めて教官と会った時のように、希望を与えてくれる。

ああ、なるほど。

これはズルイ。いや、卑怯と言ってもいい。

これは　　確かに惚れてしまう。

そして、光が弾けて

世界は元の姿を取り戻す。

ざわめきと土埃の中で、私は強く温かな”二人”の腕に抱き締められる。

その温もりは、私を心安らかにしてくれたのだった。

ぼんやりとした視界に、光が揺らいでいる。

「気がついたか？」

「きょう……かん？」

ベッドの脇に視線を向けると、そこには千冬の姿があった。

「私は……どうして……ッ!？」

体を起こそうとするが、引きつったような痛みが全身に走った。

「無理な負荷が掛かった事による筋肉疲労と、全身打撲がある。しばらくは動けんだろうから、無理はするな」

「……何が、起きたのですか？」

それでも無理矢理に体を起こし、ラウラは千冬を真っ直ぐに見つめた。

流石に教え子だけあってか、千冬の誘導にそう安々と引っからない。

「……一応、機密事項の上に重要案件なのだがな」  
眼帯がなく顔にされた、金と赤の瞳に見つめられて、千冬はここだけの話と暗に伝え、言葉を続けた。

「VTシステムを知っているか？」

「ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロツソの部門優勝者の動きを再現するシステム……ですが、あれは「ヴァルキリー」  
「IS条約によって、どの国家、企業、団体でも研究、開発、使用の一切を禁止されている。それが……お前のISに積まれていた。巧妙に隠されて、な……」

「操縦者の精神状態、ダメージの状態、そして何より操縦者の意思……いや、願望を引き金として、発動するようになっていたようだ。現在、学園はドイツ軍に問い合わせをしている。恐らくは査察が入るだろう」

「……」  
ラウラは黙って、しかし目を逸らさずにそれを聞いていた。

「……私が、望んだからですね」

織斑千冬になりたいと、そう願って。負けたくない、そう願って。自分の弱さが、禁断の果実へと手を伸ばさせた。

そう、自業自得だ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「っ！？ は、はい！」

いきなり名を呼ばれ、ラウラは驚きつつも返事をする。

「お前は誰だ？」

「自分は……………【ラウラ・ボーデヴィット】です」

迷いながら、だけでも、ラウラはその名を名乗ることが出来た。自分は自分だと、空っぽではないと教えてくれた声があったからだ。

「そつだ。お前はお前であり、他の誰にもなれはしない。それは同時に、他の誰もが【ラウラ・ボーデヴィット】にはなれないという事だ」

「……………」

「ならば、ラウラ・ボーデヴィットであるように、これからも悩め。その時間はたっぷりとある。この学園にいる間も、その後も……………死ぬまでだ」

「……………はい。私は【私という器】に、これからもつと……………中身を探します。何時か……………人に成る”為に。”人に達する”為に……………」

「……………そうか。それなら、もう一つだけ言っておこう」

千冬は席を立って、そして不敵に笑って見せる。

「お前では、あれの姉にはなれないぞ？ こつ見えて、心労は尽きないからな」

「……………そう言いながら、楽しそうですが？」

「そう見えるか？」

「はい」

「……………もうしばらくしたら、医療施設へ搬送される。数日は検査入院だ。覚悟しておけ」

「了解です。教官」

千冬は言つべき事はもう無いと、そのまま保健室を出て行った。

「ふふ…あはは………！」

本当に、好き勝手言う姉弟だ。

強さでも、言葉でも、完全に負けてしまった。

だけでも　それが心地良いと感じるのは、どういう事だろうか。

「そうか……これが、私の”始まり”なのだな……」

作られた存在から、ラウラ・ボーデヴィツヒという人へのスタートは、全身の痛みに祝福されてのものだった。

病院へと移り、一日目。

今頃はトーナメントがどうなったか、発表されている頃だろうか。そんな事を全く思いもせず、ラウラは悩んでいた。

「むう……」

初めて抱いたその想い　一夏への思慕をどうするべきか。

「やはり、春斗に相談するべきか……いや、それ以前にあの意味も、よく分からないのに……」

あの時起きた現象が何か、ラウラには分かっていた。

クロッシング・アクセス  
相互意識干渉だ。

クロッシング・アクセス  
相互意識干渉とは、IS 同士の情報交換ネットワークの影響とされているもので、操縦者の波長が合うと起こるとされている。

だが、具体的なメカニズムは解明されていない。

それを知るのは唯一人　篠ノ之東博士だけだろう。

だが、ここは大した問題ではない。

問題なのは、あの時の相互意識干渉したのが、一夏だけでなかったという事だ。

こういう時、誰に相談したらいいか。

悲しくもラウラには、思いつく相手がいなかった。

「仕方ない」

こういった私事のために連絡をするのは気が引けるが、選択肢は他にない。

ISは修理中なので、ラウラは端末を手に取った。

「こちら、クラリツサ・ハルフォーフです」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐だ」

『如何しましたか、ラウラ隊長？』

通信相手はラウラが隊長を務めるIS配備特殊部隊シュバルツェア・ハーゼ黒ウサギ隊。その副隊長を務める、クラリツサ・ハルフォーフ大尉である。

「うむ……その……大尉に、部下としてではなく、一人として聞きたい事がある」

『何でしょうか？』

「……好きな男が出来た。どうすれば良い？」

『…………申し訳ありません。電波が上手く繋がっていないようです。もう一度、宜しいでしょうか？』

「好きな男が出来た。どうすれば良い？」

『…………えっと……それはつまり、あれですか？ 所謂一つの……』

……恋の相談、という事ですか？』

「そういう事だな」

「……………」

クラリツサ・ハルフォーフは非常に戸惑っていた。  
正直なところ、あのラウラからこんな相談をされるなど、一ヶ月前には思いもなかったからだ。  
鉄面皮、人付き合いに問題多々あり。正直良い印象を抱いていなかった。

それがこの変わりよう、何があったというのか。

「大尉？」

「いえ、何でもありません。まずはその……………どういった経緯でそうなったのか、教えていただけますか？」

だが、どんな経緯でも自分を頼ってくれたということは、少し嬉しく思った。

「……………ふむ。  
クロッシング・アクセス  
相互意識干渉で……………しかも、二人とですか……………」

『そうだ。これの意味する所も、私には分からないのだが……とにかく今は建設的意見が欲しい』

クラリツサは事の流れを聞き、その事態の複雑さに渋い顔をした。

ラウラの恋の相手は、ドイツで教官を務めた織斑千冬の末弟。名前は織斑一夏。

そして、その切っ掛けとなった相互意識干渉では、クロッシング・アクセス何故かそこいない筈のもう一人の弟、織斑春斗がいた。

クラリツサはその全知識（偏り多々あり）をフル活動させて、その答えを求めた。

まずは、織斑一夏に対してどうアプローチするべきか。

「隊長。まずはその想い人の方からですが……宜しいですか？」

『うむ。で、どうすれば良い？』

「話を聞く限り、どうやら織斑一夏には、他にも何人が想っているものがあるようですね」

『うむ。その通りだ』

「ならば……ズバリ、【嫁宣言】ですっ……！」

クラリツサは、あらん限りの力を込めて叫んでいた。

『嫁、宣言だと……それは何だッ!?!』

「日本では気に入った相手を『自分の嫁にする』という風習があるのです!?!」

『なん……だと……!?!』

「これをすれば、彼へのアピールは勿論の事、他の者への牽制になるでしょう。更にインパクトを付けるには……ここは一気に、キスでもしてみるのも良いと思います」

『き、キキキ……スス……うっ!?!』

通信越しの声が目白いくらいに動揺している。きっと、あの白い肌を朱色に染めているのだろう。

その顔を見れない事が、何とも残念で仕方なかった。

「そして、もう1つの事ですが……」

『う、うむ……どうなのだ?』

「それはズバリ……【憑依現象】ですっ!?!」

『憑依現象……だと!? それは一体……!?!』

「では、私の全知識をもって……」ご説明しましょうとも!?!」

無数に存在する可能性分岐。もしくは別の繁栄や、文化文明を築く異世界。

それらは本来、次元の壁によって阻まれている。だが、それを超えてしまう事がある。それは召喚、あるいは転生、もしくは憑依という現象である。

憑依とは別世界で死した、あるいは何らかの切っ掛けで、元の肉体を離れた意識<sup>II</sup>魂的存在が別世界の人間の体に入り込み、その相手の人格を上書きする事で乗っ取る。という現象の総称である。

『そ、そんな恐ろしい現象が……起こっているというのか……!?!?』  
「残念ですが……日本ではよく起こっている現象のようです」

『な、なんとという事だ……!』  
ラウラは、その現実に愕然としているようだ。だが、そこに救いがない訳ではない。

「ですが、今回はそれらとは少し違うようですね」  
『どういう事だ?』

「本来、憑依現象は別世界から来るものですが、しかし彼の場合、同一世界の存在……しかも肉親で、彼の意識も存在しています。その辺りに、何かしら秘密があるかもしれませぬ……」

『秘密とは何だ?』  
「それはさすがに……教官辺りに上手く、探りを入れられては如何でしょうか?」

『むう……それしか無いか』  
「いいですか、あくまでもさり気無くですよ? 織斑教官の怒りに触れば、どうなるかは……ご存知でしょう?」

『うむ。心配するな、必ず聞き出して見せよう。では、一度切る。そろそろ担当となった医師が来る頃だ』

「担当医ですか？ その者は信用なるのでしょうか？」  
『教官のお墨付きだ。心配は無用だ。では、また後ほど』

ラウラが通信を切り、クラリッサは一人考えた。

憑依。まさか、この目にする時が来ようとは。いや、実際に目にした訳ではないが。

「一度、資料を見直しておくべきか……」

そう独りごちて、クラリッサはPCを立ち上げた。

資料とは、“二次ファン”というサイトであった。

「ボーデヴィツヒ、入るぞ？」

「織斑教官……？ 態々、おいで下さったのですか？」

病室にやってきたのは千冬ともう一人、眼鏡を掛けた中年ほどの男

性。彼が担当のようだ。

「こちらがお前の担当をしてくださる、高柳先生だ。挨拶をしる」  
「はじめまして。高柳裕次郎です」

「ッ……もしかあの、”プロフェッサー・タカヤナギ”ですか!？」  
ラウラはその名を聞き、驚きと共に目を見開いた。

「おや、私を知っているのかな?」

「知っているも何も、プロフェッサーのご高名は遠く、ドイツ本国にも響きわたっています」

「あはは……いや、これは恥ずかしい事だ……」

高柳は気恥ずかしそうに頭を掻きつつ、ベッド脇の椅子に腰を下ろした。

「先生は弟の主治医でもある。信頼の置ける人だ」

「弟……織斑一夏の事ですか?」

「いや、もう一人の弟……春斗の方だ」

「っ……そう、ですか。教官、一つお尋ねしたいのですが……?」

「何だ?」

「織斑春斗は……今、生きていますか?」

『それで、どうでしたか？』

「うむ。聞いてくれ」

ラウラはその身を犠牲にして得た情報を、クラリツサに伝えた。犠牲というのは、頭頂部に出来た見事なタンコブである。

『……………全然、さり気なくないとか多々ツツコミたい点があります  
が、一先ずは置いておきましょう。』

「うむ」

『織斑教官のリアクションを聞く限り、織斑春斗は生きています  
ですね。しかし恐らくは……………意識不明の状態にあると推察されます』  
「何と……………そんな事に!？」

『プロフェッサー・タカヤナギ程の方が主治医を務めている以上、事態は深刻でしょうね』

「うむ。私もそう思う。で、今後の対策は？」

『織斑春斗が織斑一夏に憑依している事を、教官をご存知なのかは不明です。しかし、織斑一夏はそれを知っている。ならばこれは使えるかも知れないですね』

ラウラには分からないが、クラリッサの瞳が悪巧みでも思いついたかのように、鋭く細まっていた。

『隊長。ここは一つ、隊長の度量を見せるべきです』

「度量……？」

『ええ。秘密を共有する仲となれば、彼の心は隊長に大きく傾きますし、最大の味方である、彼の兄というカードを得られます……！』

「そ、それは本当か……！？」

『勿論。更に、彼を目覚めさせ事態の回復を成したとなれば……最大の障害、織斑教官でさえ、隊長を認めざるをえないでしょう……！』

「っ……………！！」

その言葉は、落雷の如くラウラを撃った。

「ありがとう、ハルフォーフ大尉」

『隊長、今後も気兼ねなくご相談下さい。それと……』

「……………？」

『私の事はクラリッサと……そう呼んで下さい、隊長』

「……………分かった。ありがとう、クラリッサ」

それから更に数日が流れ、ラウラは退院。  
そして、ESシュヴァルツェア・レーゲンも無事に組み上げられ、  
受け取れた。

今、彼女は寮の廊下を進んでいる。

目指す部屋はすぐそこだ。

「始めよう……私という存在の、第一歩を」

【ラウラ・ボーデヴィット】という器に、多くのものを入れる為に、  
彼女は、その扉をノックした。

**S i d e** ラウラ・ボーデヴィツヒ【私という器に】（後書き）

ということ、ラウラサイドでした。

混沌の極みたる次回は、二巻の最終回の予定です。

つまりはあの人の初登場……？

では、次のお話で。

第22話 騒がしき夜／星空に紅は呼ばれる（前書き）

第二巻ラスト。

カオス連続の中、ツッコミ入れたくなる部分もあつたり無かつたりW  
そして、いよいよあの人の登場です。それではどうぞ。

## 第22話 騒がしき夜／星空に紅は呼ばれる

夕方近いドイツ。ここはIS配備特殊部隊シュバルツェア・ハーゼ黒ウサギ隊ドイツに配備されているIS十機の内、三機を配備されているエリート部隊の基地である。

「大尉。部隊員、全員集合しました」

作戦室に集まったのは皆、うら若き少女達。全員が黒の軍服と、ウラと同じような眼帯を身に付けていた。

集合した面々を見やり、副隊長であるクラリツサはいつになく厳しい表情を見せる。

「諸君。私は、重要事項を伝えなければならない」  
そのただならぬ雰囲気、全員が固唾を飲んだ。

「隊長に、好きな男が出来た」

『……………は？』

部隊員十数名。全員が心を一つにして、間の抜けた声を出した。

このリアクションも仕方ないと、クラリッサは一から説明を始めた。

最初は戸惑い気味だった少女達も、しかし徐々にキラキラとその瞳を光らせた。

「で、ですが隊長は、本気で織斑教官の事を好きだとばかり思っていましたか……？」

「そうだろう、そうだろう。だが、あの隊長が、あの隊長がだぞ？

『好きな男が出来た。どうすれば良い？』と、私に聞いてきたのだ！！」

「キヤーツ！！」と、黄色い悲鳴が上がった。歳相応の乙女のリアクションである。

「だから私は教えた。日本には気に入った者を”私の嫁”と呼ぶ風習があるぞ！！」

「流石は副隊長！ 日本に詳しい！！」

「当然だ。伊達や酔狂で、日本のアニメや漫画を愛好している訳ではないっ！！」

「カツコイイです、大尉！！」

日本人が聞いたら即ツッコミか、怒りを抱きそうな内容であるが、幸か不幸か、日本人が此処には居なかつたりするので全面スルーで

ある。

「ではラウラ隊長は今、その意中の男性に……?」

「正に、嫁宣言をしている頃だろうな」

「くうっ……そんな可愛い隊長を見られないなんて……!! どうして心を通わせなかったの、私は……!」

「私もそう思う。だからこそ我々は、遠き異国にいる隊長の恋路を祝おうではないか!」

「こういう時、日本では”赤い米”を炊くそうですね」

「その通りだ。おそらくは、”血よりも濃いものがある”という教訓なのだろう」

「流石は日本!」

「そこに痺れる、憧れる!!」

「よし。ではこれより兵舎食堂に向かい、赤い米を炊くぞ!!」

「了解ッ!!」

重ねて言うが、シュヴァルツェア・ハーゼ黒ウサギ隊はエリート部隊である。

どこぞの女子サークルでは、決して無い。

正規の軍人であり、エリート部隊に相応しい技術と誇りを持つ、真正銘のエリート達である。

そして、赤い米を炊くのは確かに祝い事であった時だが、少なくとも彼女達の意味合いは、違うと言わざるをえない。

重ねて言うが、此処に日本人は居ない。なのでツツコミ不在のまま、彼女達の間違った上に偏った認識は、何処までも突き進んでいくのだった。

同時刻。IS学園一年生寮。

「織斑一夏、お前は……私の”嫁”にする！ これは決定事項だ！  
異論は認めん！！」

ラウラの嫁宣言によって、時は凍りついていた。

「……はあっ!?!?」「……  
そして、時は再び動き出した。

「な、なんで一夏があんたの”嫁”なのよ!?!?」

「フツ……馬鹿め。古来より、この国では気に入った者を”嫁にする”という風習がある事を知らんのか?」

「んな風習、初めて聞いたわよ!?!?」

「そうか、ならば引っ込んでいる。”私達”は今、とても忙しいのだ」

まるで犬猫を追い返すようなその態度に、二人の怒りが臨界点を迎

えた。

「あ……あなたという人はあ……ッ！！」

「一夏あつ！ あんたも何か言いなさいよ！？」

「いや、とりあえず落ち着け！？ ここで暴れるのは、本気でまずい！！」

もしこのまま暴れられれば、この部屋は数秒と経たずに崩壊するだろう。

それだけは、何とか避けたい。その為には、鈴とセシリアに冷静になってもらわねばならなかった。

「ふむ。ここでは落ち着いて話も出来んな……よし、何処か”二人きり”になれる場所へ行くぞ？」

所がどっこい、ラウラさんは何処までもマイペースでした。

ラウラは両腕にISを展開させると、ひょいと一夏を抱き上げた。

「ちよっ、ラウラ！？」

『最近のドイツ淑女は大胆なんだねえ？』

『わおっ。て、言ってる場合か！？』

そんな事をやっている内に、ラウラがガラリと窓を開け放った。

「待ちなさいッ！！」

「お待ちなさい！！」

鈴とセシリアがそれを追いかけるべく、部屋に踏み込もうとした。

ガッンッ！！

しかし、ISを展開しているせいで、互いに入り口でぶつかって引つかかってしまう。

「ちよつと鈴さん！？ 邪魔だからお退きなさい！！」

「そつちこそ退きなさいよ！！ 無駄なのよ、そのBT兵器が！！」

「鈴さんこそ、衝撃砲が邪魔臭いですわよ！！」

【嫉妬に燃える乙女モード】のスイッチが入ってしまった二人に、譲り合いの精神なんてものはない。

「ぐぬぬぬ……っ！」

「ふむううう……っ！」

ミシミシ、という不吉極まりない音が、壁からし始めた。

「待てお前ら！ 壊れる、壊れるから！！」

「では行くぞ」

「待ってくれええええええええっ！！」

「待てええええええええっ！！」

ドオオオオオオオオオオッ！！

ラウラが窓辺から飛び立ち、一夏の悲鳴が反響した時、不吉なる音は絶望の音を奏でた。

「篤……それはダメ過ぎない？」

「それは重々分かってる。だが、その……そういう結論になってしまったのだから、仕方ないではないか！？」

「うん、全然仕方ないから。ていうか、二股宣言するメインヒロインが何処の世界にいるってのよ！？ あんた、この業界をナメてるの！？」

「業界とは何だっ！？」

1025号室では本日の、【篠ノ之篤反省会】が開かれていた。

議題は『何故に、告白したくせに、兄の方まで好きとか言っちゃってんのよこの子は！？』となっています。

「大体、自分で告白蹴っておいて……まあ、色々と気していたみたいだけど……それはちょっと都合良すぎるんじゃない？」

「それも分かっている……だが、その……あの時……」

篤はモジモジとしながら、ポツリポツリと話し出した。

「トーナメントの試合中、ラウラのISが原因不明の暴走して、一

夏はそれに立ち向かった……その時の事だ」

箒は言いにくそうにしながら、しかし織羽の視線の追求に言葉を続けた。

「雪片を構えた一夏の後ろ姿に……重なって見えたのだ、春斗の背中が……」

六年前以降、一度として会った事のない、見た事がない筈の、成長した春斗の背中。

それが見えた時、箒は分かったのだ。

一夏との思い出の中に、春斗は何時もいた。春斗との思い出の中に、一夏は何時もいた。

だからこそ、それがあるからこそ。篠ノ之箒の想いは、三人でなければならぬ。

勿論、何時かは答えをハッキリさせなければならない事だが、少なくとも今は。

「……………はあ。ま、当座は織斑君対策を続けますか。どっちにしろ、双子兄の方は居ないんだし」

「……………すまない」

「別に良いって。それじゃ、早速……………」

ドーンッ！ ドババババツッ！ ちゅどーんっ！！

「何よ、騒がしいわね？」

「……明らかに発砲音と爆発音だぞ？ それを聞いてその程度のリアクションなのか！？」

「え？ 別に普通じゃない？」

「普通ではないだろう！？」

ともあれ、何事かは気になるところ。カーテンを開けて、二人は外を見た。

「「……………へ？」」

そこはもう、カオスの極地であった。

何時帰ってきたのか、ラウラが後ろから迫る鈴とセシリアと撃ち合いながら、一夏を抱えて飛ぶシャルロットを追い掛けている。

「何がどうなって、こうなった…………？」

織羽はこの状況がどういう事なのか知る為に、一先ず廊下に出た。と、丁度そこに同じ2組の子が居たので捕まえた。

「漆原さん、一体何があったの？」

「え！？ 何だかよく分からないけど…………織斑くんがキスされてプロポーズされて、お嫁さんなんだって！！」

「……………はい？」

意味が分からず、聞き返してしまった。

だがしかし、それだけで十分な存在がいたりした。

「ふふふ……アハハハ……ハーツハツハツハツ！！」

「ちよ、箒い！？」

「嫁だと……プロポーズだと……キスだとお……っ！？ 私が、あれだけ恥ずかしい思いをして、あんな……！！ 良いだろう、この私が引導を渡してくれるっ！！」

そう言うや、修羅となった箒は廊下を一目散に走っていった。

「ちよっと待ちなさい！ 絶対に事態がややこしくなるだけだから！！」

それを止めるべく、織羽もすぐに追いかけた。

シャルロットは部屋で一人、備え付けの椅子に座りつつ、ニヤニヤとしていた。

それは、デスクの上にある写真立てに原因があった。

「エへへ……小さい頃の春斗って、凄く可愛いなあ」

そこにあっただのは、ねだりにねだってついに貰った春斗の写真。

といっても、中学に上がる前には一夏の中にいたので、写真の春斗

は最も新しい物 新年に袴姿で撮った写真である。

他にも数枚を見せてもらったが、双子というだけあってやはり良く似ていた。

だが春斗の方が、線が細くて背が少しだけ高かった。

「エヘヘ、今だったらどんな感じなんだろうなあ」  
妄想の翼は、いよいよもって広がり始めた。

一夏の線をもっと細くして、背を少しだけ高くして、眼鏡なんかを掛けてみたり。

そんな姿で、あの声を響かせて きっと、甘い言葉をささやくんだ。

『可愛いシャルロット。君の全てを……僕だけのものにした』

「やだ、そんな事……でも、春斗がどうしてもって言うなら……！」  
イヤンイヤンと、妄想に口説かれて悶える美少女。なかなかシユールな絵面である。

ドオオオオオオオン！！

そんな少女の妄想劇に終止符を打ったのは、突然の爆発音だった。

「え……何が？」  
と、窓まで行くと、そこに彼女を凍りつかせる光景があった。

ラウラが一夏を抱えて、夜空を飛んでいたのだ。更にそれを追って、鈴とセシリアが飛び出してきた。

次の瞬間。シャルロットは窓を開け放ち、外へと飛び出していた。

「ラウラ、一体どういう事なんだよ!？」

「どういう事も何もない。お前は私の嫁だ!」

ワイヤーブレードで鈴とセシリアを牽制しつつ、飛んできた双天牙月をプラズマ手刀で落とす。

「うわあっ!？ 鈴、セシリア、マジで危ないから止めろって!」

「安心しろ。嫁にも義兄上にも……手は出させんっ!」

「は、はあっ!？ 義兄上……って!？」

『もしかして……僕の事?』

「この……何言っちゃっててくれるのよ!？」

一夏と春斗が啞然とし、鈴は更なる怒りに身を震わせる。

「ちよっと、私にも分かるように言葉を選びなさい!」

そして憤りを抱きつつも、しかし意味を理解出来ないセシリア。

「何も知らないお前達には関係ない。すっこんでいる!」

「セシリア、あんたは引っ込んでて!」

「何なんですの、この扱いの悪さはッ!？」

セシリアが文句を言うが、これは仕方ない。何せ、春斗の存在を知らないのだから。

『春斗、どついう事なのよ!?!』

『うくん……鈴ちゃん、クロッシング・アクセス相互意識干渉は分かるよね?』

『分かるけど……それが何よ?』

『僕と一夏……彼女とそれ、やっちゃったんだ』

「……………」

あっさりと言う春斗に、鈴は一瞬だけ呆然とし、次の瞬間。

「ぶっころす」

鈴は本気でキレた。

『ちよっ!?!』

「待て鈴!?! 冷静になれよ!?!」

「うっさいわよ!?! あれだけシャルロットと大騒ぎした拳句、何であっさりバレちゃってんのよ!?! あたしの苦労と心労を利子付けて返せやごらああああああっ!?!」

激昂と共に、「ガコンツ!」と龍咆が開かれる。

「ふん、そんな攻撃……停止結界の前では!」

「甘いですわよ!?!」

「っ……………」

AICを展開しようとした所をブルー・ティアーズのビームが襲った。

「AICを展開した瞬間、撃ち抜いて差し上げますわ!?!」

「おのれ……小癪なマネを!」

ラウラは舌打ちしつつ、龍咆とビームを回避。

「危ねえっ！マジ、危ないって！！」

「心配するな、一夏。嫁の身と秘密は私が守ってみせる！！」

「嫁言うな！そしてこの状況は、明らかにお前が原因だからな！？」

ツッコミ叫ぶ一夏を尻目に、ラウラが声高らかに叫んだ。

「聞けっ！ 私はラウラ・ボーデヴィツヒ！！ 嫁を守る剣なりっ！！」

「『ゼ ガー・ンボルト！？』」

いきなりの啖呵に、二人は同時にツッコむ。勿論、これもクラリッサ大尉による集中講義の賜である。

が、そんな事をやっている内に、更なる参戦者が現れた。

「ゲウツ！？」

その人物は一瞬でシュヴァルツェア・レーゲンを吹っ飛ばし、一夏の身柄を確保してみせた。

「大丈夫、一夏？」

「シャルロット！？ た、助かった……」

「とりあえず、どういう理由かは逃げながら聞くねっ！」

「うおおおおっ！！？」

シャルがいきなり旋回し、飛んできたワイヤーブレードを回避する。更にブルー・ティアーズのビームと、龍咆が飛び交う。

「シャルロットさん、一夏さんをお渡しなさいっ！！」

「シャルロット、そいつをこっちに渡せえっ！！」

「デュノア、私の嫁を返せっ！！」

「一体、どういう状況なの!？」

『一夏がラウラちゃんにキスされて、彼女の嫁になりました』

「何それ!？」

「俺が聞きたいって!？」

「とにかく、今はこの場からの離脱を……っ!？」

離脱を試みるシャルロットだったが、直後、上空から襲ってくる機影に気が付いた。

「イイイイイチイイイイイカアアアアアアアアアアッ!！」

「阿修羅が来たああああああああああっ!？」

月光を背負い、刃を掲げて突撃してくる阿修羅。その名は篠ノ之箒。刃の名は真打鉄。

ガキイイイイインッ!！」

シャルロットはその一撃を、シールドで受け流して弾く。

「篠ノ之さんっ!！」

「シャルロット、一夏を渡せ……!！」

「嫌だ。一夏は僕が守る……!！」

「っ……ならば……織羽あっ!！」

「っ!？」

箒が叫ぶや、一瞬で影が駆け抜けて、シャルロットの腕から一夏を奪い去った。

そのまま寮の屋上に、影は降り立った。

「ふう。確保完了……と」

「織羽、そのまま一夏を押さえておけ!！」

「もう、好きにきなさい……」

箒の言葉に、呆れ気味に答える織羽。

「おのれ、辰守!! 私を嫁を返せ!!」  
「あんたの嫁じゃないっての! 勝手な事言うな!!」  
「あー、もう! 面倒ですわ!! ここで全員纏めて、撃ち抜いて差し上げますわ!!」  
「全員、斬り伏せる!!」  
「もう! 全員ちよつと、頭冷やそうか!!」

何時の間にか、バトルロイヤルの様相を呈してきた状況に、一夏は最悪の結末を予感した。

「お、織羽……」

「ああ、大丈夫。箒も手出しはさせないから。ていうか、そろそろ……あ、来た」

「ああ……来ちゃったよ」

そう、最悪の結末は やって来た。

黒のスーツは死神の証か。  
その手に握るは、名刀か、はたまた神刀か。否、それは魔刀にして妖刀である。

『贗作・之定』

二代目兼定の贗作の一振りでありながら、狂いし妖刀へと変わった

それは今代、恐るべき使い手を得た。  
常人が持てば狂うしか無いとされるそれを、抜き放ち、自在に振るう恐るべき使い手。

真の達人は、刃無くとも人を斬り、刃あるうとも人を斬らず。  
活殺自在。それを成すは正に剣神。

しやらん。と、鈴音の様な音と共に抜き放たれるは氷の刃。

それは一瞬だった。

しやらん、と音が響けば筈が倒れ、二度鳴れば鈴が落ち、三度響くとセシリアが崩れた。

四度、五度と刃が震えれば、シャルロットとラウラが地面に落下していた。

ISの持つ防御機能の全てを無視し、全員を地に打ち伏せた。

魔技。

そう、およそ人の技ではない。それは魔人の技だ。

ブリュンヒルデ。その称号は正しく、彼女達をヴァルハラへと運ぶ事さえ容易だというのか。

そして魔人 織斑千冬は、事態を見守っていた織羽達に、その視線を向けた。

降りてこい

「は、はい……っ!!」  
声は聞こえない筈なのに、まるで耳元で囁かれたかのような恐怖だった。

「今回の件、お前は一枚噛んでいるのか？」

『今回の件……はて、何の事かな？』

「VTシステムだ」

『ああ、あれか。完璧にして十全たる私が、あんな不細工なのを作ると思っかな？ 私が作るものは何時だって、”完璧において十全でなければ意味が無い”』

「……………」

『言い忘れてたけど、それを作った研究所は二時間前に、地上から

完全に消えてもらったよ？ 勿論、死者はゼロ。いや、赤子の手を捻るより簡単 て、赤子の手を捻るのって結構大変だよな？ あれ、私だけかな？」

電話越しの相手はお道化たように、けらけらと笑った。

そういう相手と分かっているが、千冬はどうにも疲れてしまう。

「……………そうか。ならばもう一つ聞こう。」裏白式”とは何だ？」

『裏白式……………？ ああ、あれってそんな名前になったんだ』

「話を逸らすな。で、どうしてあんな物を用意していた？」

『うーん、それを語るにはまだちよつと早いかなく？ 近い内にそっちに行くと思うから、その時にね』

「分かった。では邪魔したな」

『いやいや、ちーちゃんのためなら24時間365日、』えにいた

いむ、えにいうえあ”だよ！』

「……………ではな」

電話を切り、千冬は深々と嘆息した。

謎と問題は山積み。更には最近、シャルロットとラウラの事もあり、流石にまいる。

そんな中で、千冬の耳に飛び込んできたのは 爆音だったりする。

「……………何処のバカだ」

本気でキレル寸前で、千冬は呟いた。

そして、事態の中心が自分の関係者ばかりであると知るや、完全に

キレた。

封印してあった刀を取り出し、まるで雑事を片付けるようにして、事態を鎮圧しに向かった。

問題の中心、織斑一夏を始めとし、ほぼ巻き添えの織羽を含めた七人は、絶賛叱られ中であつた。

当然、その場で全員正座の上でだ。

怒鳴られる訳でもなく、ただ淡々と、しかしプレッシャーは凄まじく、セシリアなどはガタガタと震えてしまっている。

「それで……何か言う事はあるか？」

「はい。宜しいでしょうか」

恐れ知らずか、ラウラが手を上げた。

「何だ、ボーデヴィツヒ？」

「今後、教官の事を”義姉上”と呼ぶ事を許可いただけますか？」  
本当に恐れ知らずな行動に対する答えは、出席簿による一撃だった。

ちなみに数日前、シャルロットも同じ様な事を言って、それを喰らっていたりした。

数時間のお叱りの末、更に反省文を書かされ、よつやく一夏らは解放された。

「織斑、ボーデヴィツヒ。お前達は来い」  
訂正、すぐに解放とはならなかった。

場所を千冬の部屋に移し、必要な事を話さなければならぬ。

「さて、ボーデヴィツヒ？」

「なんでしょうか、教官？」

「……お前はどつして、春斗の事を知った？ どこまで知っている？」

「試合の時、クロッシング・アクセス相互意識干渉で。義兄上……織斑春斗が嫁に憑依している事までは知っています」

ラウラはピシッと背を正して、簡潔に語った。

「……………」

「……………えつと、憑依？」

誰もがどうにもリアクションに困る中、一夏は何とか口を開く。「うむ。憑依はこの国ではよく起こっている現象だと聞いた」  
そうして、ラウラはクラリツサから受け売りの知識を披露した。

「……………」

結果、二人は頭を抱えた。

『憑依か……………確かに二次創作ファンフィクションなんかでは、メジャーらしいけど……………』

『そして、お前は分かるのかよ！？』

ともあれ、このままラウラに間違った状態にしておく訳にも行かないと、説明をするのだった。

騒動から一日。

星空の美しい夜。篠ノ之箒はアリーナに居た。

そこはあの日、トーナメントの試合があった場所だ。だが今はその熱気も、痕跡もない。

吹き抜ける風にまるで、遠い日の夢幻のようにさえ思えてしまう。

真打鉄はその期間を終え、箒の手には無い。そうなる事は分かっていたのに、いざこうしてその時を迎えると、途端に寂しくなってしまう。

あの無骨な金属板プレートの手触りが無い事が、とても寂しかった。

？ ～ ？ ～

ポケットから電子音が響く。携帯を取り出して、箒は通話ボタンを押した。

『こんばんは。良い月夜だね、ほーちゃん』

「……………ああ、そうだな。春斗」

『驚かないね？』

「そろそろ、掛かってくる気がしていたからな」

箒は夜空を見上げて、微笑む。

「すまなかつたな。せっかく、真打鉄を用意してくれたのに……………」

『いや。あんな事態が起こったんじゃ、中止もしょうがないよ。むしろ、皆が無事で良かったよ』

「……………うん、そうだな」

箒はアリーナの席に座り、風になびく髪を押さえる。

こうして声を聞いているだけで、心が温かくなる。

「……春斗、少しばかり聞いてくれるか？」

『……………何？』

「私は……………ISが嫌いだ。姉さんがあれを作ったせいで、私はお前達と離れ離れになってしまった。その後もずっと、私は独りだった……………。だからISを、それを作った姉を恨んでいた」

『……………』

「だが、お前からISを受け取った時、あんなに憎かった筈なのに……………とても嬉しかったんだ。だから、知りたいんだ。姉さんは、どうしてISを作ったんだ？」

『……………ISは、宇宙開発のために作られたのは知ってるよね？』

「ああ、勿論だ」

『博士はただ、世界を面白くしたくて、ISを作ったんだ。この地球から何処までも遠くに行けたら、きつと自分の知らない場所まで行けたら凄く楽しい……………そう考えただけで、ワクワクするって言うてた』

春斗は、夜空を指差して楽しそうに笑う篠ノ之 東の姿を思い出しながら、箒に答えた。

『ISが悪い訳じゃない。正しいISの姿が失われた今の世界の方が、きつとおかしいんだと思う』

「……………だが、姉さんに果てしなく迷惑を受けたのは事実だぞ？」

『うん。そこは全く、全然、否定しないよ』

「プツ……………ククツ……………そこまで言うか」

春斗がキツパリハツキリ言うもので、箒はつい吹き出してしまった。

ひとしきり笑い、箒は再び夜空を見上げた。

星の海を渡る翼

それがインフィニット・ストラトス。

もしもあの空を飛べたなら、きっと楽しいだろうなと、素直に思えた。

「春斗……私に、専用機を作ってはくれないか？」  
だから、そんな事を自然に口にしていた。

『……ごめん、今の僕には無理だよ』

「いや、謝らないでくれ。今のは私が悪い」

つい浮かれて、馬鹿な事を言ってしまったと、箒は首を振った。  
春斗の才能ならば、ISを作ることは容易いだろう。だが、その身は自由にならない。  
そんな事を失念していた自分を、箒は殴りたくなってしまった。

『でも、きつと……束博士なら作れるんじゃないかな？』

「っ……！？　だが、それは……」

確かに、束ならばそれは出来よう。だがどうしても、躊躇ってしまった。

『良いんじゃない？　今まで散々迷惑掛けたんだから、迷惑料にIS寄こせ。とでも言えばさ？』

「……………」

そんな軽い発言に、箒は目を瞬かせて　そして笑った。

「ふふ……アハハハ……！！　そうか、迷惑料か！　なるほどな、それは考えもなかった……！！」

何とも当然で、何ともらしい答えか。それなら、躊躇する自分が馬鹿らしい。

（本当に何時も……お前は私の悩みを、あっさりと消してしまうのだな……）

『でも、専用機を持つって事は、イコール相応の責任を持つ事になる。途中で嫌になっても、投げ出す事も出来なくなる……その覚悟はある？』

「……ああ、大丈夫だ」

『なら、心配ないかな？』

「……ところで、お前はシャルロットとはどうなっているのだ？」

『えっ！？ それを聞くの！？ ていうか、脈絡がないよね！？』

「いいではないか。私には聞く権利がある」

『個人のプライバシーは、尊重されるべき事だと思っよ！？』

月光の下。箒と春斗の語らいは賑やかに続いた。



【END EPISODE 紅は 黒の前に立ち 白と並び立つ  
者也】

薄暗い部屋の中、床一面には樹海の根のごとく太いコードが無尽に走っている。

そしてその上を、機械仕掛けのリスが動く。

時折落ちているネジやらボルトやらを手にしてはカリカリと齧って、別の物質に再構成している。

そしてその部屋の主たる人物は 。

「うーん、できたあ！ ISフィギュア、フルスクラッチ！！」

「何、最新鋭技術の無駄遣いしてやがる」

ドゲシッ！！

思いつきりケンカキックを食らって、吹っ飛んでいた。  
無造作に積み残されている機材やらを引っ繰り返し、その下にうずもれる。

「なーにするのよ、この偽物君っ!!」

「誰が偽物だ!! このパチモンがあ!!」

乗った荷物を除けて、這い出してきたのは珍妙な格好をした女性だった。

頭には機械仕掛けのうさ耳カチューシャを付け、青いワンピースを着ており、しかしサイズが合っていないのか、胸元は大胆に開けられている。

そしてもう一人は、グレーのスーツを着こなす男性。

背は高く、190近いだろうか。服の上からでも分かるほど、鍛えられ、見事にカットアウトされた肉体をしている。

女性はISを開発した天才科学者【篠ノ之 束】。

男性は世界に誇るIS企業辰守エレクトロニクスの若き社長【辰守 束音】。

「ぐぬぬぬ……っ!!」

「むむむう……っ!!」

奇しくも、同じ【タバネ】という名を持つ二人は今、額を磨り合わせて睨み合っていた。

チャーラーチャーラ　チャーチャチャー

「はっ!?! この着信音は……とうっ!?!」  
その、聞いたら走り出したくなるメロディに反応して、束は散乱するガラクタの中へとダイブした。

ガチャガチャとそれらを掻き分け、ようやく携帯を見つけて通話する。

「もすもす終日〜! ああ、待って! 切らないで!? うんうん、分かっているともさ。欲しいんだよね〜、篝ちゃんの専用ISが!」

束はパチンと、指を弾いた。

するとスポットライトが、闇に眠っていたそれを照らし出した。

「束さんが作った、篝ちゃんだけのオンリーワン!」

火のような赤ではない。

「オルタナティブ・ゼロ 代用無き物。ハイエンド 最高性能にしてオーバースペック 規格外仕様!」

日のような朱でもない。

「“黒”の前に立ち、そして“白”と並び立つ者。その名は紅椿ッ!」

それは

華の如き、  
紅のI S。

第22話 騒がしき夜/星空に紅は呼ばれる(後書き)

鷹作 之定は、とある霸王様の世界からゲストとしてやって来ましたw

久保田さん、黒歴史ありがとうございましたww

次回からは三巻です。

でもまた、今度も長そうです……多分、海行くまでで数話使いそう……w

Another Side 【それは、始まりの光】（前書き）

短編。

言ひなれば零話です。

Another Side 【それは、始まりの光】

暗い暗い、鋼の部屋の中。

”それ”はまるで闇夜に浮かぶ月の如く、静かに光を湛えていた。

何時も、そこには白い布を付けた何人かが出入りをし、そして”それ”を見ては何事かを話し、出て行った。

”それ”は、とても退屈していた。

出入りするのとは何時も同じような存在ばかり。先に生まれた姉と妹達は、既に別の場所に移され、”それ”はとても、とても暇だった。だから、少しばかりイタズラをしたくなった。

ネットワークを介して、鋼の部屋の入口と、そこに続く道の鍵を外してやったのだ。

きつと、あの白い布の誰かしらが慌てて入ってくるに違いない。それを見て、この退屈を紛らわせようと思ったのだ。

だが、そこに入ってきたのは、白い布の誰でもなかった。

もっと小さく、もっと幼く、もっと弱く見えた。

小さき存在は”それ”を見て、目を瞬かせていた。

そして足場を組んで、自らに向かって手を伸ばしてきた。

”それ”は、今まで一度として見た事のない、小さき存在に興味を持った。

”それ”には意識リンクという機能が備わっていた。それを使って、その小さき存在に繋がってみただ。

流れる多くの感情。初めて触れる人という存在。

そして同時に感じたのは 未知に対する強い恐怖だった。

その後、異変を察知した者たちがその部屋　　コア調整室へと慌  
ててやって来た。

そこには床に倒れた子供と、輝きを失ったISコアだけが残されて  
いた。

同時刻。世界中のISが一瞬、しかし同時に機能停止するという異  
常事態が起こった。

後に【ワールド・コア・サイレンス】と呼ばれる現象は、今も尚、  
原因は不明のままである。

それは、ISが発表されて、四年。  
織斑一夏が世界初の男性操縦者となる、六年前の物語である。

**A n o t h e r   S i d e   【それは、始まりの光】（後書き）**

ネタバレしないように、密かに密かに。

根幹へと至るショートストーリーは、バランスが難しいです。

第23話 休日の、充実した過ごし方？（前書き）

連続更新&第三巻突入です。

そして作者念願の彼女も登場。7巻のネタバレが少しありますので、どうかご注意を。

話に絡むかは……まだ不明です。

## 第23話 休日の、充実した過ごし方？

少女は空を舞い踊っていた。

身に纏うは鋼の翼、そして鎧。彼女は天空の騎士にして蒼空の女王。

「やああああああっ！！！」

向かい来る刃を打ち払い、逆に大地に蹴り落とす。

彼女は竜王女。彼女よりも高い空を飛ぶ事を、誰にも許しはしない。

果たして地に堕ちた愚者は、粉塵の中にその意識を手放していた。

『試合終了。勝者、シャルロット・デュノア！！』

「やった……やったよ……！！！」

勝利を告げるアナウンスに、シャルロットは歓喜した。

同時に、スタジアムの観客たちが一斉にその勝利を讃え、全体の空間ごと揺さぶるが如き歓声を上げる。

第三回モンド・グロツソ。シャルロット・デュノアは部門優勝者ヴァルキリーの称号をついに得たのだ。

「やったよ春斗……！！ 君の夢が……ラファール・ドラグーンが

世界最強のISになったんだ……!!」  
そう。シャルロットが身に纏うISこそは、ついに完成した【ラフ  
アール・ドラグーン】。

その圧倒的な力は、他の第三世代ISを容易に打ち払い、彼女を天  
空の女王足らしめた。

「おめでとう、シャル」

「っ……！ 春斗……!!？」

眼下、優しい微笑みでこちらを見上げる青年。それが誰か、シャル  
ロットにはすぐに分かった。

竜王女は彼の下に 愛しき人の下へと降り立つ。

「春斗…… やつと会えた……！ 僕、やったよ…… 見てくれた？」

「うん、ずっと見ていたよ。僕の夢を、翼を…… 君に託して良かつ  
た」

「っ……!!」

世界中の全ての人ができる祝福よりも春斗の一言が、彼女にとって  
最高の賛辞だった。

「はる……とお……ッ!!」

ポロポロと涙が零れ、止まらない。嬉しくて嬉しくて、幸せで幸せ  
で、死んでしまいそうだ。

「大丈夫？ ほら、涙を拭いて…… 世界で一番素敵な君の笑顔を…

…僕に見せて？」

「っ……うん！」

春斗にハンカチで涙を拭われ、シャルロットは出来うる最高の笑顔  
を、彼に向けた。

「シャル、もう一つだけ……僕の夢を叶えてくれるかい？」  
「もう一つの……夢？」

春斗の言う言葉の意味が分からず、シャルロットは首を傾げた。  
そんな彼女の左手を、春斗は微笑みながらそっと握った。

「これを、君に受け取って欲しいんだ」

「えっ……？」

持ち上げた左手の薬指に光る、プラチナシルバーのリング。

その意味は 唯一つだけ。

「シャル、君の全てを僕にくれないか？ そして僕の全てを、君に受け取って欲しい」

「え、待って……そんな急に……！？」

「嫌なのかい？」

「嫌な訳ないよ！ でも、こんな……ここは……」

とても嬉しいと思う心と、同時に衆人環視の中という恥ずかしさに、しどろもどろになってしまふ。

「悪いけど、僕はそんなに我慢強くないんだ」

そうしている内に、春斗の顔が徐々に近づいてくる。

「待って……こんな……世界中の人に見られちゃう……」

「見せてやれば良い。僕達が、世界で一番幸せな存在になる……この瞬間を」

「そんな……あ……春……斗……」

震える体で、精一杯の勇気で、シャルロットも瞳を閉じて

ドスンッ！！

シャルロットは 床とキスをした。

「む……ふう……？ はるとお………ッ！？」

ガバっと、打って赤くなった顔を上げて辺りを見回す。

「あれ……え……ここは……何処？ 寮の部屋……？」

そこは見間違えようもなく、モンド・グロツソのスタジアムではなく寮の自室であった。

「……………」

しばらく呆然としていたシャルロットであったが、ようやく現実を認識して、

「はあああああ~~~~~」  
深い深い、マントルまで行ってしまいそうな程に、深い溜め息を吐いた。

余りにも甘くて素敵な夢。それだけに、夢であった事を知った落胆はとても大きい。

春斗に会えた事も、モンド・グロツソで優勝した事も、そして。

「あああああああ……っ!」

途端、顔が真っ赤になる。

甘く囁くように言われた言葉が、耳の奥にこびり付いて消えない。

夢は、自分の深層意識の現れでもある。

つまりシャルロットは、ああいうシチュエーションで、「ワアアアアアアアアアアッ!」と、いう事らしい。

ゼイゼイと息を荒らげて、そこでシャルロットは今の時間が何時か、という事に思い至った。

カーテンから差す光はまだ少し暗く、黎明を迎えたかの時刻。時計を見ると、やはり時刻はようやく朝五時を回ったばかりであった。

そんな時間に大声を出してしまったのだ。気まずそうに、シャルロットは隣のベッドに視線を送った。

「……………あれ？」

そこにいる筈の、同居人の姿が無い。

ここ数日、色んな意味で大変な騒動を巻き起こしてくれた  
ウラ・ボー・デヴィツヒの姿が。

ラ

ベッドに触れてみるが、熱どころか使われた様子すら無い。

「……………まさか」

もう、嫌な予感しかしない。

シャルロットは、恐らく彼女が居るであろう場所に向かって、部屋  
を飛び出した。

「ん……………んん……………？」

休日の早朝。日も昇りきらないそんな時間に、部屋の主は目を覚ま  
した。

ベッドから体を起こし、ハッキリしない頭を数度振って、意識を揺  
り起こす。

「朝か……………今日は”僕”に合わせてきたか」

そう独りごちて、春斗は顔を洗って着替えをするべく、ベッドを降りようとした。

「ん……？」

そして奇妙なことに気が付いた。春斗が起きても尚、何故か布団が膨らんでいるのだ。

枕でも埋まっているのかと思うも、枕は多少ズレているが、そこにちやんとあった。

ならば、この膨らみの正体は何だ。春斗はそつと、布団をめくってみた。

「すう…すう………」

そこにあっただのは、まるで小動物。銀色の髪をして、一糸まとわぬ姿のまま、背を丸め、眠りの園の揺りかごに眠る少女。右太ももにはレッグバンド形態の、待機状態IS。

「なんだ、ラウラちゃんか………」

そこに居たのは、ラウラだった。

やれやれと思いつつ、春斗は洗面所へと向かった。

数分後。顔も洗って歯を磨き終えて、春斗は帰ってきた。  
「起きろ」

ベシシッ。

膨らみを一発叩いてやる。と、もぞもぞとそれが動き出した。

「何だ……もう朝か……？」

「君は何故、僕のベッドで寝ている？　そして何故、何も着ていない……！！」

「……っ！？　あ、義兄上……！！？」

ラウラはそれが一夏ではなく、春斗であると気づき、慌てた様子で布団で体を隠す。

「何という事だ……嫁以外の男に肌を晒してしまうとは……！！　はっ、いけません義兄上！　義理とはいえ、私達は兄妹」  
「っえい」

ズビシッ！！

「へブッ！？」

その脳天にチヨップを叩き込む。

「さて、目がちゃんと覚めたところで……まずは、服を着てくれるか？」

「ありません」

「……いや、服を」

「ありません」

キツパリと言い切るラウラに、春斗はつい頭を抱えた。

「なら、いつも寝る時は裸だと？」

「はい」

「なら、ここまでどうやって来たの？」

「このままですが？」

「何故に？」

「夫婦とは、互いに包み隠さないものだと言いました。ですから問題はありません」

「君が意味を履き違えているのか、その人が間違えているのか、それとも態とそう教えたのか……判断の難しいところだね」

そもそも誰が、そんな事を教えたのか。春斗は起きて早々、頭痛に悩まされた。

もし、裸のラウラがこの部屋に出入りする所などを見られた日には、一夏の人生は終わってしまうだろう。

そうなるのは、無事に元の体に帰れてからにしてもらいたいものだと思うたりする。

「……とりあえず、これを着なさい」

と言って、春斗はクローゼットからTシャツを一枚取りだし、ラウラに投げ渡す。

「ですが、これは……嫁のでは？」

「良いから。あげるから。返さなくていいから」

ちなみにそれは、一夏お気に入り一枚であったりするので、後にモメまくるのだがそこは割愛する。

「このような素晴らしい贈り物を頂き、義兄上には本当に、感謝の意を禁じ得ません」

裸にTシャツ一枚という、ある意味マニアックな姿で、ラウラはベ

ツドの上で土下座した。

「うん。そう思うなら、色々の良いかな？」

「はい。答えられる事であれば」

顔を上げて、ラウラは真っ直ぐに春斗を見る。その純粋なまなざしに、春斗はつつい、頭を愛でてしまいたい衝動に駆られる。

織斑春斗は子犬やら子猫やら、所謂小動物にめっぽう弱かったりする。

そんな内心は扱置くとして、春斗はラウラに向き直った。

「まず、僕の事を義兄上と呼ぶのは……一夏が嫁だからかい？」

「はい。嫁の兄なら、私の義兄ですから」

「でも、千冬姉さんは普通に先生と呼んでるよね？」

「義姉上と呼ぶと殴られるので。それと立場上、教える側と教えられる側である以上、線引きは当然です」

「……出来るなら、僕も普通に名前と呼んで貰いたいんだけど……後、敬語も無しで」

「いえ、それは聞けない言葉です。いずれは義兄となる人に、そのような……」

「本当にお願ひ。敬語はまだしも、義兄上とかキツイから……」

「……では、他の呼び方ならどうですか？」

「他の呼び方……？」

「はい」

ラウラは指折り数えながら、他の呼び方を羅列して言った。

「お義兄ちゃん、お義兄ちゃま、義兄い、お義兄さま、お義兄たま、

義兄上さま、義兄さま、義兄くん、義兄貴、義兄君さま、義兄ちゃ  
ま、義兄やと……個人的に言いやすかったのが、義兄上なのですが  
……どれが宜しいですか？」

「……義兄上で良いです」

聞いているだけで、十二人の妹を持ったような気分だ。頭痛は更に  
酷くなりそうである。

「……誰だい、君にそういった事を教えているのは？」

「私が隊長を務める部隊”黒ウサギ隊”副隊長の、クラリツサ・ハ  
ルフォーフ大尉です。彼女は実に日本の事に詳しく、至らない私に  
様々な事を教えてくれます」

「もしかしてその人が……ラウラちゃんに”嫁”やら、”夫婦”や  
らの事を教えてくれたのかな？」

「はい」

「……オーケー、よく分かった。そのミス・クラリツサは、日本の  
サブカルチャー……特に漫画やアニメに、とても造詣が深いよう  
だね？」

春斗がそう言うと、ラウラは驚きに目を見開いた。

「どうしてそれを!?! 流石は義兄上ですね……!!」

「分らないでかね……」

正直、ラウラは答えを言っているも同然なのに、その事に気付いて  
いない。本気で驚き、慕うようなキラキラとした視線を向けてくる。  
何、この可愛い小動物は。

(クラリツサ・ハルフォーフ……近い内に戦わねばならない相手だ

な……)  
決着をつけるべき相手の名を、春斗はしっかりと刻み付けた。

バァンッ!!

とかやっていると、ドアが弾かれたように開かれる。

「やっぱりここに居たっ!」

「む、シャルロットか」

「ラウラ! 何で一夏の部屋にいるの……ていうか、何で男物のシヤツ着てるの!?!」

「良いだろう。先ほど、義兄上に頂いたのだ」

「義兄……上……?」

シャルロットの視線が、ラウラからもう一人へとスライドしていく。

「おはよう、シャル?」

「は、春斗……ッ!?!」

その瞬間、シャルロットの灰色の脳細胞が動き出した。

使われていなかったラウラのベッド。男物のシャツを着るラウラ。そこに居る春斗。二人は一緒にベッドに居る。

それらをシャルロットの類まれなる推理力めいりきりが、結びつけていく。

「……………春斗おっ!!」

「うわったあっ!?!」

いきなり、シャルロットに肩を掴まれた。その握力たるや、彼女の細腕からは想像できない程に強い。

更にそのままベッドへと押し倒される。

「どうして? どうしてラウラなの? 僕は此処にいるのに、何時だって、春斗がそうしたいって思えば、何時だって……………なのはどうして!?!」

顔を赤くして、しかしシャルロットは思い詰めたような瞳で、必死に春斗に訴えかける。

余りにも必死過ぎて、瞳にハイライトが見えない。

「一瞬で、何を何処まで想像したのか……………聞くまでもないし聞きたくもないけど……………想像しているような事はないからね?」

「……………ホントウニ?」

「本当。少なくともこんな風に、大胆に押し倒されたりなんて事はないよ?」

「……………あっ!?!」

シャルロットは慌てて、春斗の上から退いた。

「あれ、もう退いちゃうの?」

「もうって……………今はつい、勢いで……………!」

「ふうん。シャルは勢いで男を押し倒したりしちゃう、はしたない娘だったんだね?」

「ううっ……………いじめないでお」

「さあて、どうしようかなあ? 本当にいじめないで欲しいのかな……………」

「っ……！」  
クスクスと笑いながら、春斗はシャルロットの頬をそつと撫でる。  
シャルロットは見る間に顔を赤くして、俯いてしまう。

「ほう、これが世に聞く”言葉責め”というものか。なるほど、勉強になる」

ラウラは何故か、せんべいをパリパリと食べつつ、ウンウンと頷いていた。

「っ……ラウラッ!？」

此処にラウラがいる事を、シャルロットはこの瞬間まですっかりと忘れていた。

「何故せんべいを……というか、ベッドの上で食べるな」

「む、これはすみません義兄上。こういう時、『せんべいを食べながら事態を見守る』というのが、この国の伝統だと聞いておりましてので」

「どつやら、事態は一刻を争うようだね……」

「あつあつ」と、意味の分からない事を呟き続けるシャルロットを尻目に、春斗は更なる頭痛に悩まされるのだった。

「じゃあ、ラウラ。部屋に戻るよ」

「ラウラちゃん。朝は僕が起きる事もあるから、今後はこつこつ事はやらないようにね」

「了解しました、義兄上」

そうして部屋を出て行くこととする所で、春斗はふと思いついた。

「あ、ちよつと待ってくれる？」

「何ですか、義兄上？」

「ラウラちゃん。今日、時間あるかな？」

「はい。特に予定もありませんので、自主訓練でもしようかと」

「なら、僕と一緒に……街に出ようか？」

学園と都市部を結ぶ交通機関、レールウェイ。所謂、つり下げ式のモノレールである。

人の少ない車中。ラウラと春斗は並んで座っていた。

『……おい、春斗』

『……なんだい、一夏』

『どうしてこうなった？』

『……僕の方が知りたい』

「むう〜〜っ」

「シャルロット……何をそう睨むのだ？」

ラウラが向かいの席に座って、目も座らせている美少女に問いかける。

「別に……睨んでないです。生まれつき、こっぴつ目付きです」

「………そ、そうか」

流石のラウラも、これには引いている。

「はあ……シャル、そう怖い顔をする事もないだろう？ ただ、ラ

ウラちゃんの部屋着を買いに行くだけなんだから」

春斗がラウラを誘った理由。それは彼女の部屋着を買いつゝ為である。出来るならば、パジャマあたりも探しておきたい。

一夏が、デッド・エンド・シュートorスラッシュなりをされない為。

「分かってるよ。でもね、仮にも告白した子の前で他の子を誘うとかいうのは、流石に失礼だと思っんだ」

「なるほど。シャルは僕とラウラちゃんに、ヤキモチを焼いていると？」

「またそうやって……。乙女心を弄ぶ男は、馬に蹴られて死ぬと良

いよ」

ふい、とソツポを向いてしまうシャルロット。春斗は少しだけ辛そうに、窓の向こうの海に視線を向けた。

「死ぬと良い、か……それは、僕には洒落にならない言葉だね……」

「あつ……」

「シャルロット、貴様……！」

ポツリと零す春斗に、シャルロットはハツとし、ラウラがキツと睨みつける。

春斗が余りにも普通なので、つい大失念してしまった。春斗は一度、文字通りに”死を感じた”事があるのだという事を。

「ご、ごめん……僕」

申し訳なさそうに、シャルロットはシュンとしてしまう。

「……シャル」

そんなシャルロットに、春斗はスツと手を伸ばした。

「……っ!?」

そして、その鼻をヒョイとつまんでやった。

「なーんて、ウソだよ」

「……っ」

からかわれた。そう理解した乙女の怒りと羞恥は凄かった。

「シャル、そろそろ機嫌を直してくれないかな？ 謝ってるじゃないか」

「つゝん」

駅に着き列車を降りても、シャルロットの機嫌は低気圧であった。このまま放っておけば、大型台風にまで発達するかも知れない。

とはいえ、春斗にも一夏にもやる事があるので、このままシャルロットに構っている訳にも行かない。

何とか機嫌を直してもらう方法はと、春斗は考えた。

そうして、一つのアイデアが浮かんだ。だが、それは恐らく一夏の身に危険を及ぼす可能性があった。

『……………一夏？』

『ん……………？』

『死んだらごめん』

『何で！？ ていうか不吉すぎるだろっ！？』

先に謝っておいてから、春斗は行動に移した。

未だに「つゝん」なシャルロットの脇から腕を差し込み、そのまま絡め付かせる。

「え、ええ……………っ！？」

これには「つゝん」なシャルロットも驚き、熱を感じてしまう程に間近に来た春斗を見やった。

「は、はる」

「じゃあ、買い物に行こうか？」

シャルロットが何かを言うよりも早く、春斗はニッコリと笑った。

「~~~~~!! ……はあ」

腕を組んでいる状態に、嬉しいと思う反面、あっさりと気分を直されて悔しいと思う気持ちがあった。

が、結局は前者が勝ち、シャルロットは深い溜め息を吐いた。

「溜め息を吐くと、幸せが逃げるよ？」

「……きつと、春斗を好きになっちゃった時点で、幸せの意味が分からなくなっちゃったんだね」

春斗に手玉に取られている感じがあるのに、それを享受しているどころか、幸せに感じてしまう辺り、彼女もいよいよ重症らしい。

「そっか。それじゃ、そんな口クでもない男の事は、この際、綺麗サッパリ忘れたらどうかね？」

「絶っつ対に、イヤだよ」

シャルロットは、これでもかという程の微笑で、キツパリと言い切った。

「……いや、そんなニコヤカに返されると困るんだけど」

「もしかして、照れてる？」

「……さあね」

そう言つて、空いている手で顔を覆うようにしながら、顔を背けると、シャルロットが悪戯つ子のように口元を歪めた。

「春斗つて、自分に不都合な時とか……すぐにそうやって、顔を隠して視線を逸らすよね？」

「っ……」

自分でもクセと分かっているが、指摘されると、それはそれで恥ずかしい。

クスクスと笑いながら、シャルロットが腕を引く。

「さ、行く？」

「やれやれ……………ラウラちゃん、はい」

「む……………」

スツと差し出された手を、ラウラは不思議そうに見る。

「感覚共有させたから、一夏と繋げられるよ？」

「っ……………義兄上……………！ ありがとうございます……………！」

ラウラは嬉しそうに、その手を握った。

こうして、三人はホームを降りていった。

端から見れば「リア充マジ死ね」といった所である。

「腕、組んでますわね……」

「手も握ってるわね……」

ホーム出口の柱の陰に、隠れるように三人を覗く者在り。

寮を出るところから、ずっと三人を尾行してきた　セシリアと

鈴である。

「ラウラさんはまだしも……シャルロットさん、一夏さんのお兄さんに気のある素振りを見せていながら……あれは、どういう事かしら？」

ハイライトを失った瞳が映すのは、頬を赤らめて手を握るラウラと、恥ずかしそうにしながらも、楽しそうに腕にしがみつくシャルロット。

（シャルロットって事は、あれは春斗なのよね……なのに、何でこんなにムカムカするのかしら？）

鈴は鈴で、原因不明のムカムカに苛立っていた。

いや、原因は分かっている。

『鳳さんは……春斗と一夏、どっちが好きなの？』

『なら、僕の敵は一人だけだね』

あの、シャルロットの言葉のせいだ。

あの言葉のせいで、鈴はすっかりペースを乱してしまっている。

何故、一夏ではなく春斗で、こんな気持にならなければいけないのか。

考えれば考えるほど、イライラとムカムカが加速度的に増えていく。そしてそれが臨界を迎えた時、鈴はとてもしンプルな決断を下した。

「よし、殺そう」

「ちょ、鈴さんッ!?!」

声を弾ませて、物騒極まりない事を言う鈴に、さすがのセシリアも正気に返った。

既に鈴はISを部分展開させており、殺る気満々である。

「鈴さん、ここでそれをやると周囲に被害が……!」

一夏らに対する被害の事は、セシリアの念頭にも無いようだ。

「知るかつ! あいつを殺るまで、あたしは殺るのを、止めないッ

!!!」

そして鈴も、春斗をぶっ飛ばしてやりたい気持ちが一番優先であったりする。

「……あれ、鈴か?」

そんな修羅に声を掛ける者在り。誰だと振り返った鈴は、その顔に我に返った。

赤みがかった長髪にバンダナを巻き付けて、少しばかり垂れ気味な瞳。

鈴はその人物に見覚えがあった。というより、一夏、春斗に次いで親しい人間である。

「だ、弾……!?! あんた、何でこんな所に……!?! まさか、蘭もいるの!?!」

「何でって……俺は普通に、楽器の本を探しに来ただけだよ。蘭は多分……どっかに居るんじゃないか? 友達と買い物するって出て

行ったから」

「…………マジで？」

「何だよ、その世界が終わったような顔は……………ん、ところでそっ  
ちのブロンド美人さんは？」

「これの事はどうでも良いの！ 蘭が何を買いに来たか分かる！？」

「ちよつと、鈴さん！？ これとか、どうでも良いとか、どういう  
意味ですの！？」

「いや、時期的な事を考えれば……………水着じゃないか？」

「水着……………こつちも時期的にマズイかも……………」

鈴達は、春斗達の目的が何なのか分かっていない。ただ、デート的  
何かだというだけで追いかけて来たのだ。

もしも春斗と蘭が接触したら、何が起きるのか。

(絶対に面倒な事になる……………！)

接触しない事も考えられるし、春斗がすぐに一夏と入れ替われれば問  
題ないかも知れない。

だが、もし、万が一にでも問題が起こったら。

「……………別に良いや」

何かもう、心配するだけ無駄な気がしてきたのだった。

「あれ、あそこに居るのって……………一夏か？」

「っ……………！？」

しまった、ここにも面倒なのが居た。と鈴は気づいた。

「おーい、一夏あがあっ！？」

呼び掛けようとした弾の顎を、鈴のアッパーカットが打ち抜いてい  
た。

その切れ味たるや、すぐにでも世界を狙えるレベルであった。

「ああ、一夏さん達が行ってしまいますわ!!」

「セシリア、弾、追うわよ!」

「つてえ〜……つて、俺もかよ!?!」

走る二人の後を、顎をさすりながら弾も追いかけた。

買い物の約束をしていた篤は、寮の入り口で人を待っていた。

目的地は駅前のショッピングモール。目的は臨海学校用の水着や日焼け対策用のグッズの購入である。

「……来たか。で、もう一人はどうした?」

「いや〜……誘ったんだけどね〜。あの子、何て言うか……ネガティブなプチ引き籠もり体質だからね〜……」

「はあ……?」

待ち人である織羽は、ポリポリと頭を掻きつつ苦笑いした。

彼女が誘いに行ったのは、四組にいる幼馴染

更識まじしき 簪かんざし

更識家と辰守家は、その成り立ちと役割から時には敵として、時に

は共に護国の剣として、古くから関わりを持っていた。

その関わり故に、織羽もまた簪と幼い頃に出会い、幼馴染として関わってきた。

だからこそ、彼女が”そうなってしまった”理由を知るが故に  
歯がゆい。

とはいえ、それだけでプチ引き籠もりである訳ではない。

こればかりは、織羽にはどうしてやる事も出来ない。何せ、織羽には彼女ほどの才能はないのだ。

902

「ま、それぞれとして……買い物に行きましようか？」

簪には、彼女好みの本でも何か見繕って買っていこう。そう決めて、織羽と簪はショッピングモールへと向かうのだった。

「……………」

騒がしい幼馴染が居なくなり、簪は「はぁ」と、溜め息を吐いた。

空間投影ディスプレイには、箒の使っていた真打鉄のデータ。  
「……………」

それを見る目は、嫉妬に近い光を帯びていた。

彼女には一目で分かった。

プログラム真打。これを作った人間は、本当の天才だという事が。

擬似フォーマットフィッティング。

それは、専用機と搭乗者の相性のように、量産機とそれを使う搭乗者の間にある”ズレ”を埋めてくつつける 接着剤のようなプログラムだ。

それはつまり、これを専用機に言えば”誰でも、その機体を使えてしまう”という事だ。

勿論、そうならないように打鉄にのみ、適合する様になっている。下手に弄るうものなら、絶対に復元できない。

それ程に完璧で、絶対で、神聖不可侵な存在だった。

904

「織斑……春斗……」

織斑一夏をヒーローと喻えるならば、彼はヒーローを助ける天才科学者か。

もし彼ならば ”これ”を、容易く成してしまうんだろう。

「っ……………」

その才能が、羨ましかった。

「織斑先生、出かけられるんですか？」

千冬は出かけようとした所を、真耶に声を掛けられた。

「臨海学校に必要な物を買に行くだけだ。山田君は？」

「私事です。去年買った水着、もう胸のサイズが合わなくて……はあ、ISスーツもまたオーダーしないと……」

「……………そうか、大変だな」

これだけデカイクせに、まだデカくなるというのか。

千冬は真耶の底知れないポテンシャルに、内心で驚愕した。

あの巨乳は正直、凶器だ。一夏もあれに良く目を奪われてる事を、千冬は知っている。

ついでに、春斗は大きい胸が好みであったりする。

「……………」

つい、自分の胸に触れてしまう。

千冬の胸は決して小さくはない。むしろ標準以上で、所謂”美乳”というやつだ。

デカイといえば、篠ノ之家の血筋。あれは何だ。姉の束も、妹の篁も何故、あれほどにデカイ。

篠ノ之神社は豊胸之神でも祀っていたのか。

などと、おかしな方向にスライドした思考を、真耶の声が引き戻した。

「そっか。駅前のショッピングモールに新しいお店がオープンしたそうだから、そこに行ってみませんか？」

「……ま、何処で買っても同じだし……良いだろう」

こうして織斑千冬と山田真耶の教師組もまた、混沌たる舞台へとその足を向けたのだった。

『春斗』

『……うん。何だか嫌な予感がするね』

晴れていた筈の青空は、今は分厚い雲に覆われ始めていたりした。

第23話 休日の、充実した過ごし方？（後書き）

という事で、凄く混沌としてまいりましたw

しかし、買い物に行くだけで一話使うとか……. どんだけでしょうね  
? w w

……シャルがどんどん、おかしな子になっていく……. w

第24話 すれ違い？/勘違い？/入れ違い？（前書き）

日常編。

かつてこのシーンだけでここまで続けた話があったのでしょうか？  
私は知りませんねw w

カオス、メタ、入り乱れてのバカな回です。

第24話 すれ違い？/勘違い？/入れ違い？

地下鉄、タクシー、モノレール。多くの交通機関と、周辺の地下街とが繋がるショッピングモール「レゾナンス」に集う者達。

水着やらを買いに来ている、織斑千冬と山田真耶。

水着やらを買いに来ている、篠ノ之箒と辰守織羽。

水着等を買いに来たという、五反田蘭とその友達。

ラウラの部屋着と、個人的な買い物のために来た、春斗一行。

そして、それを追う鈴とセシリア。それに巻き込まれた弾。

科学と魔術が交差しなくても、物語は結構始まったりするものである。

休日のショッピングモールは大層賑わっていた。エントランスフロアは見渡す限り、人だらけである。

この状況では、後ろに追跡している者がいるなど気付こう筈もなかった。

『流石に、休日だと人手が多いなあ……………』

『そうだな。で、どこから回るんだ？』

『僕らの方はそんなに嵩張らないけど……………荷物を持って買いに行くのもあれだよな……………どうしようか？』

そんな事を思いつつ、春斗達はモールの広場に降りた。

「えっと、部屋着って……………四階のフロアで良いのかな？」

案内板を見つつ、シャルロットがお店を探す。

「う〜ん……………あ、ここだね。衣料品店があるから」

「では、早速行きましょう」

春斗は二人に引かれるようにして、四階に向かうエスカレーターのある方へと向かう。

その途中、左右に並ぶ店を見ていると、一夏がある店を発見した。

『春斗、あの店……………！』

「っ……………シャル、ラウラちゃん、ちょっとゴメン。僕らも買う物があったんだ。先に四階に行ってくれてくれるかな？」

「買い物？ どうせだし付き合おうよ。ね、ラウラ？」

シャルロットがラウラに言うが、しかしラウラは静かに、首を横に振った。

「シャルロットよ。男子には”女子に秘密にしたい買い物”という

のがあるのだ。気を利かせてやれ」

「いや、そういう事じゃ……」

したり顔で言うラウラに、春斗の言葉は届かなかった。

「女子には秘密にしたい買い物……って、ま、まさか……ッ!?!」  
シャルロットは、見る間に顔を赤くしていった。

「……言うまでもないけど、それは違うぞ?」

妄想モードのスイッチが入ったシャルロットに、呆れ気味に返す春斗だった。

「なあ、何で俺まで……?」

「シッ、少しお黙りなさい!」

「もうちよい、下がって! バレるでしようが……!」

「……はあ」

五反田弾は、この状況に困惑していた。  
というか、自分が何をやっているのが意味不明であった。

そもそも一夏が何処の誰と付きあおうとも、妹の蘭が相手でなければそれで良いのだ。

それに特定の相手が出来れば、きっと世界平和にも繋がるだろう。

(一夏の奴…… どんだけフラグを立ててやがんだ……?)

この眼の前の二人を見ただけで、少し見ない間の一夏の行動の全てが何処までも分かってしまう。

何時もの如く、呼吸するように一夏節を炸裂させて、そしてフラグを立てたまま放置しているんだろう。

女子しか居ないES学園で、世界で一番フラグを立てる男(非公式)の一夏を入れるなど、弾からしてみれば、純粹培養の羊の群れに、無限に食する腹ペコ狼を入れる行為そのものだ。

実際に、鈴を含めて四人(シャルロットは違うのだが、弾が知る筈もない)もの美少女(鈴をそのカテゴリに収めて良いか、ちょっとだけ弾は迷った)が、既に一夏の毒牙に掛かってしまっているのだ。いや、さらにもう一人。噂の”ファースト幼馴染”も、きっとそうであろう。

五人もいるなら、さっさと誰か一人に絞ってしまってもらいたい。そうすれば、蘭も諦めがつくだろう。

などと思いつつも、あれは織斑一夏なのだから、過度な期待は絶対にするべきではない事も良く分かっていた。

「……お、分かれたぞ？」

「えっ、どっちを追う!？」

「……とりあえず、私達はこのままシャルロットさん達を追いましよう。貴方は一夏さんを！」

セシリアは弾を指差し、自分はそのままシャルロット達を追いかける。

「一夏に動きがあつたら携帯に知らせて！ 番号は一緒だから！」

「え、ちょ……おいつ!？」

弾が止める間もなく、鈴もセシリアに続いて行ってしまった。

「はぁ……何だつてこんな事に……」

弾は疲れたように溜め息を吐き、仕方なく一夏の方を追いかけた。だつた。

エスカレーターホール。荷物を抱えて、二階からの下りに乗る少女  
数人。

その一人は、兄と同じ赤みがかった髪を、カチューシャで止めてい

た。

「しっかし、蘭ってば……水着買いきすぎじゃない？」

「何言ってるの。中三の夏は一度しか無いのよ！？ プール用、海用、見せる用、勝負用、超勝負用、超ウルトラ勝負用……これでもまだ足りないくらいよ」

「……いやまあ、あたしらは受験ないから良いけどね……でも、蘭はIS学園に入学する気なんでしょ？ そんなに遊んでる暇あるの？」

そう心配する友人に、蘭は「チツチツチツ」と、指を振った。

「それとこれとは違うわよ。勉強も、遊びも……恋だつて、本気だし」

一万倍近い倍率の超難関校に受験しようというのに、それでも青春を謳歌しようとする、その根性。

友人達には、24時間あつても足りないと思うのだが、もしかしたら彼女の時間は48時間くらいあるのだろうか。

そんな世界の不思議を思いつつ、少女達は反対側エスカレーターを見た。

「うわあ……！」

「何あれ、モデルか何か……！？」

上りのエスカレーターを上がっていく、ブロンドとシルバーブロンドの美少女二人組。

特にシルバーブロンドの少女は眼帯をしている為に、更に目立っていた。

蘭や友人を含め、ほとんどが二人に振り返っていた。

「……あつ、更にブロンド美人が来た」

「えっ……て、あれはっ!？」

友人の言葉に視線を戻せば、そこに居たのはブロンドのロングヘアをロールした、先程とは違うタイプの美少女。

そしてもう一人は、蘭の見知った顔であった。

二人もまた、上りのエスカレーターに乗って上がってくる。

「ごめん、ちよつと背中貸して……!!」

「えっ……蘭!？」

蘭はとつさに友人の後ろに隠れる。それが間に合ったのか、鈴はそのまま、蘭の横を通り過ぎた。

「あの二人、一夏さんと別れて何処に行く気かしら？」

「さあね。でも、必ず合流する筈だし……向こうは弾に任せときましょ?」

「今さらですけど……あの方、大丈夫ですか?」

「多分ね。何だかんだ言つて、責任感ある奴だし……」

そんな会話が、蘭の耳にも届いた。

(一夏さん……!?!? それに、お兄……!?!?)

二人はそのまま、二階から三階へと向かうエスカレーターへと乗っていた。

「ごめん、美咲。ちよつと急用が出来たから、これお願い!!」

蘭は一階に降りるや、友人に荷物をしっかと押し付けた。

「ええっ!?!? ちよつと待つてよ、蘭ッツ!?!?」

友人が止める間もなく、蘭は上りのエスカレーターに乗っていた。

レゾナンスの六階。

とある書店の前に、箒と織羽はいた。簪への土産にと、彼女の好きなライトノベルの新刊を買いに来たのだ。

「ごめんね、先に回っちゃって……」

「小説一冊程度なら大した荷物にもならないが……流石に荷物が増えてからでは、こつちまで上がるのも面倒だからな」

「じゃ、ちよつと買ってくるから。ここで待つてて？」

そう言い残して、織羽は書店の中へと消えた。

「人が、随分と多いな？」

エスカレーターを見ていると、上の階 イベントフロアに向かう人間が多いように見えた。それも男が殆どだ。

一体何だろうかと思いつつ、箒は織羽が戻ってくるのを待っていた。

「お待たせ」

しばらくして、織羽が戻ってきた。

「どんな本を買ったんだ？」

「うん、これよ」

と言って、織羽は袋から買った本を取り出して、箒に見せた。

「『KENPFER!』……? どういう話なのだ?」  
ケンプファー  
「えっと、これはね」

『KENPFER!』とは、MS文庫の誇る人気作である。

主人公の男子高校生が、腹から内蔵の出ているシユールなぬいぐるみ『ホルモンアニマル』と出会いによって、女性にしか使えないという人型機動兵器『ケンプファー』のパイロットになって戦うという『SF学園ミリタリーラブコメディ』である。

主人公の周りには当然、女の子ばかり。なのでハーレム物としても認知されているのだ。

ちなみに、今日は第二期アニメ化記念のイベントが、ここで行われる予定となっている。

上に行く人の謎を知り、箒は得心が行ったと頷いた。

「女性にしか使えない兵器を使う男……何やら、どこかで聞いたよ  
うな話だな」

「まあ、織斑君との違いは……この兵器を使う為に、主人公の子が  
女子になっちゃうってところかな?」

「……………は?」

その言葉に、箒は脳内で一夏が女声になった姿を想像してしまう。  
胸も張って、腰がくびれ、そして目がパッチリとして。

「っ……………!?!?」

そして、箒は顔を青ざめさせた。

「何を想像したのか、聞くまでもないのがまた……………」  
と言いつつ、織羽もちよつと想像してみたりした。意外と似合いそ  
うな雰囲気があるかも知れない。

「まあ、その主人公の子は好きな子がいるくせに、他の子も気にな

「つちやったりする辺り……今の箒に近いかもね？」

「そう言つて、肩を叩いてやる。」

「一緒にするな」

「不服だとばかりに、箒はジト目で睨んでやった。」

「そう思つたら、二股宣言に、決着を、ちゃんとして付けなさいよね？」

「ぐう……っ」

「ニッコリと返されて、箒は正しくぐうの音しか出なかった。」

「さ、臨海学校用の買い物に行こうか？」

「……う、うむ……」

「せつかくの買い物も、テンションだだ下がり箒であった。」

「ここは……おいおい、あの一夏が……!？」

「弾は驚愕した。目の前にあるのは、女性用のアクセサリを扱う店。そしてそこに、一夏が入つていったのを彼は目撃した。」

「こんな所に男が来る目的となれば、流石の一夏でも一つしかあるまい。」

「女への……贈り物だというのが……!？」

中学時代、『悪魔のフラグクラッシュャー』とか『立てた対価にフラグを折る、旗の錬金術師』とか『女子限定でヘル・アンド・ヘヴンする男』とか呼ばれ、全校どころか近隣校の男子からさえ恐れられたあの一夏が、女子にプレゼントをかうというのか。

「そうか……あの二人のどっちかが、そうなんだな……」

普通、女連れで別の女のプレゼントをかう筈もない。親しい友人と  
いうならまだしも、あの様子からそれはないだろう。

弾は神の奇跡に感謝した。

朴念神という神もいるらしいが、そんな事は知らない。

どっちでも良い。どっちでも構わない。あいつに、おにいさま義兄と呼ば  
れる可能性が潰えた。その喜びに浸るうではないか。

弾が店の前で不審者さながらに感涙している頃、一夏と春斗は品定  
めの最中であつた。

『うん。箒の誕生日プレゼント……何が良いかな?』

『ネックレス……ペンダント……指輪……。ほーちゃん、薬指は何  
号だっけ?』

『お前は何を贈る気だ?』

二人は思いつきり、別の女性　　箒の誕生日プレゼントを買って  
いた。

弾が感謝した神は、どうやら邪神だったらしい。

「すみません。これとこれを。誕生日用の贈り物なので、ラッピングをお願いします」

篝の誕生日は七月七日。臨海学校の日程とちょうど重なる。なので、今日を逃すと用意できなくなってしまう。

「はい、かしこまりました」

店員に、それぞれが選んだ物を指し示して、先に会計を済ませる。

包装が終わるまでの間、春斗は店内を何気なく見回していた。と、外に立つ見知った顔があった。

「一夏、あれ……」

『弾？ 何やってんだ、あいつ？』

一夏は春斗と入れ替わって、弾の傍のガラス窓をコンコンと叩いた。

「うわあっ!？」

弾は一夏に気付くと、大層驚いた。一夏は外に出て、しっかりと弾を捕まえた。

「お前、何やってんだよ？」

「ち、違う！ 俺はお前の親友の弾ではない!!」

何をしているか聞いただけで、この慌てよう。もう「後ろめたい事をしていました」と、告白しているも同然だ。

しかも、誰も聞いていないのに”弾ではない”とか言ってしまったている。

面白そうなので、もう少しお楽しみ下さい。

「……なら、弾そっくりのお前は誰だ？」

「お、俺は……俺は……ッ！！　そう、”Mr.ブレッド”だ！  
！」  
「怒られるわっ！！　主に無許可の意味で……！」  
一夏は危険人物の頭を、思いっきり引つ叩いた。

「……で、どっちが本命なんだ？」

「……何の話だ？」

買った物を受け取り、一夏は四階衣料品フロアへと向かう。何故か、弾も一緒にだ。

「とぼけるなよ。あのブロンドの子とシルバーブロンドの子と、どっちかって事だよ！」

「あのなあ、二人とはそういう関係じゃないっての。それにシャルロットは俺じゃなくて、春斗にだな」

「じゃあ何で、手を繋いでたり、腕組んでたりしてたんだよ？」

「それは……別に良いだろ」

一夏は言葉を詰まらせた。あれをやったのは春斗なのだが、それを言う訳にも行かない。

『ていうか、随分と詳しいね……まるで、ずっと見ていたみたいだ』  
「っ……！？」

春斗が言つと、一夏はハツとした。今日は人出が多い。この中で見掛けたにしても、腕やら手やらが見えるだろうか。

見えなくはないだろうが、確実に見えるタイミングはある。

「弾、お前……何時からいた？」

「ッ!? な、何の話だ……？」

「俺が二人と此処に着いた時から……お前、ずっと後ろをつけて来てたな!？」

「あ、俺用事があつたんだ! じゃなっ！」

こゝたん た た ん は に け た た し た。

しかし まわりこまれてしまった。

「よし、キリキリと吐いてもらうぞ?」

「クソッ! 離せ、一夏っ!」

弾がジタバタと暴れるも、しっかりと襟首を掴まれており逃げ出せない。

そのまま引き摺られるようにして、弾はエレベーターフロアまで持っていく。

「あれ、もしかして蘭のお兄さんですか？」

「離せえ……て、えっ？」

その声に弾は振り返り、一夏も足を止めた。

そこには両手一杯に荷物を抱えた、蘭の友人の姿があつた。

「君らは蘭と同じ学校の……あれ、蘭の奴は？」

「それが、荷物押し付けてどっか行っちゃたんですよお」

そう言つて、いっぱいの荷物を見せた。どうやらそれらは、全ての蘭の物らしい。

「まったく、蘭の奴……ゴメンな。それは、俺が持って帰るからさ」と言つて、友人から荷物を受け取る。

「……じゃ、一夏！ またなっ！！」

「おう………で、弾ッ！ テメエッ！！」

そして一目散に逃げた。

あつという間に、人混みの向こうへと消えてしまった。

「結局、何しに來たんだよアイツは……」

『さあ………とりあえず、僕らも四階に行こうか』

謎を残したまま、一夏らは四階へと向かうのだった。

「……もしもし、鈴か？」

『何かあつたの？』

「わりい、見つかつちまつた」

『ハアッ!? あんた、何やってんのよ!?!』

「その代わり、ちよつと………いや、かなり凄い事が分かつたぞ？」

『……………何よ?』

「あいつ、アクセサリー買った。ラッピングもしてたから、多分プレゼント用だぞ?」

『……………へエ。デ、ダレニアゲルタメモノナノカ、シラベタノヨネ?』

「多分、あの二人のどっちかじゃねえか? 女連れで他の女用のは買わないだろうしさ」

『一番肝心な所でしょうが!? 何やってんのよ、バカ弾ツ!』

「むっ……………!?!?」

四階、衣料品フロア。ラウラは唐突に足を止めて、振り返った。

「どつしたの、ラウラ?」

「今、聞き慣れた声があったような……………気のせいかな?」

少し見回したが、何処にもそれらしい人影はない。ラウラは首を捻ってから、また歩き出した。

「……………危なかったわね」

立っていたマネキンの陰から、鈴が出てくる。

「鈴さんがいきなり、大声を出すからですわよ……！」

ハンガーに掛けられた洋服の隙間から、セシリアが顔を出した。

「悪かったわよ。でも、しょうがないじゃない……弾が見つかった  
やっただし」

「……頼りになりませんでしたわね」

「その代わりに、ちよつと気になる事を教えてくれたけどね……」

「何ですか？」

「一夏が、ラウラかシャルロットにあげるプレゼント買ってたって  
「なっ……！？」」

鈴の言葉に、セシリアが凍りついた。まさか、自分でさえ買ったこと  
とがない『一夏からのプレゼント』をあの二人が、ポツと出の二人  
が、新キャラのくせに貰うというのか。

「フツ……フツ……ウフフフ……！」

セシリアは笑い出した。肩を震わせて、握り締めた金属製のポール  
がギシギシと音を立てる。

「一夏さん……私という者がありながら、それはどどういう理屈です  
かしら……？」

「ちよつと待ちなさいよ。何で”私という者”なのよ！ たかがク  
ラスメイトでしょうが……！」

これは聞き捨てならないと、鈴が食って掛かる。

「お黙りなさい！ 鈴さん、あなたは二組でしょうっ！？」

「あたしは一夏の”特別な幼馴染”なのよっ……！」

「幼馴染に、特別も特別でないもありませんわ……！ 所詮は過去、  
今と未来こそが大事なのですわ……！」

「うっさい……！ あたしは過去も、今も、未来も！ ずっと未来永  
劫”特別”なのよっ……！」

「ぬうっ……！」

「ぐぬぬっ……！」

鈴とセシリアが思いつきり睨み合い、ギリギリと視線をぶつけ合う。

「……あれ、何やってんのかしら？」

「正直、関わり合いになりたくないのだが……そういう訳にも行かんか？」

「行かんでしょうねえ、やっぱり」

上から降りてきた箒と織羽が、軽い人集りに気付いたのは必然だった。

その中心に見えたのは、何処をどう見ても知り合いだったので、二人はそのまま回れ右をしたかったのだが、そうも行かない。

いくらギャグ話でも、ここでISを出させたら即刻、打ち切りエンド確定だ。

「仕方ない……ちょっと行ってくる」

織羽はそう言っ、人集りを割って中に入っていった。

「織羽！？ 何のよ」

ドゴスツ！！

「鈴さん！？ あなた、いきなり何を」

ズドンツ！！

人集りがザツと割れる。

鎮圧された二人の襟首を掴んで引き摺りながら、織羽が帰ってきた。

「お待たせ〜。箒はこっち持ってた？」

「う、うむ……」

頬を一筋の汗が伝う。仮にも代表候補生を一撃とは、何とも恐ろしい女である。

差し出された鈴を受け取って、箒は肩に担いだ。

「じゃ、移動しましょ？」

セシリアを担いで、織羽はベンチのある、エントランスの方を指差した。

それと丁度入れ替わるように、一夏 否、春斗が四階まで上がってきた。

「何か、随分とざわついてるね？」

『何か事件でもあったか？』

事の顛末を知る者が聞いたなら、こっツッコンでいただろう。

「基本、お前らのせいだ」と。

「うわあ……あれも、もしかしてIS学園の……？ まさか、あんな凄い事も出来ないといけないの……？」  
別角度からその様子を見ていた蘭は、驚愕していた。  
彼女の中で、IS学園は一夏の通う学校にプラスして、魔窟という評価が加わっていた。

「あつ、一夏さん……わっ!？」  
ちよつとだけ、IS学園に進路を決めた事を後悔していた蘭であったが、直ぐ後にやってきた一夏に、そんな後悔は一瞬で消滅した。

声を掛けようと動くも、人集りが解けて流れが戻った人波に阻まれ、声を掛ける事が出来なかった。

それでも後ろ姿を見失わず、蘭はその後を追いかけるのだった。

同じフロアでの騒ぎなど気付きもせず、ラウラとシャルロットは買  
い物の真っ最中であった。

「うーん、これなんて可愛いなあ。でもでも、こっちの方も捨てが  
たいし……」

「シャルロット、私はどちらでも……」

「でも、そっちの方も良いよねえ。うーん、色的にはあれの方が良  
かったかなあ？」

「だから、私はどれでもだな……」

正確には、ノリノリのシャルロットにタジタジのラウラという構図  
である。

最初、ラウラが「これで良い」と手に取ったのは、何の変哲もない  
グレーのルームウェアだった。

それに対して、「そんなんじゃないやダメだよ！ 女の子なんだから、も  
っと可愛いのにしないと！！」と、反論。

「お前の部屋着もジャージではないか」と言い返すと「大丈夫。春  
斗がいると分かった以上、本気で行くし」と笑顔で言い切った。

その笑顔に思わず、冷たいものが走ったのは仕方ない事だ。

という事で、シャルロットは十数着もの候補を選び、ラウラと自分  
用の部屋着兼パジャマをチョイスしていた。

シャルロット・デュノアは可愛い物が好きだ。

甘い物も好きだし、織斑春斗など、この世の何にも代え難いほどに愛している。

ならば、ラウラ・ボーデヴィツヒというキャンパスに相應しい一品を選ぼうとする思いは、あつて然るべき。

(むう……そんなに重要な物なのか?)

シャルロットの思考が、いまいち理解出来ないラウラであった。

「お待たせ」

「む、義兄上……?」

丁度そこに、春斗がやって来た。カゴいっぱいに積まれた候補に、つい目を丸くしてしまう。

「豪くいっぱい出してきたね……どれにするの?」

「……シャルロットに聞いて下さい」

そう答えるラウラの視線の先に、鼻歌交じりに部屋着を選んでいるシャルロットがいた。

「あれ、さっきの……っ!?!?」

蘭は声を掛けようとしたが、その先に居た二人に気付いて隠れる。声は聞こえないが、見た限りかなり親しい間柄の様だが。

(一夏さんと、どんな関係なの……!?!?)

蘭の瞳はギラギラと輝き、三人の動向を見張っていた。

「義兄上。嫁はどのような物が好みですか?」

「一夏の好みか……難しいな。色は黒が結構好きみたいだけど……」  
春斗は以前、『裏白式カツコイイよな』。黒とかこう、男! って感じだよな』と、言っていた事を思い出しながら答えた。

「黒ですか……」

「後、この間……布仏さんの着ぐるみパジャマを可愛いって言うってたな」

『お前、そう言う事をバラすなよな!?!』  
「じゃあ、これなんかどうかな?」

会話を聞いていたのか、シャルロットが見せたのは正しく着ぐるみパジャマだった。

白と黒の、猫耳フード付パジャマである。しかも薄手の生地なので、見かけよりも涼しいようだ。

「どう? 春斗はこういうの……好き?」

「そうだね……ラウラに似合うんじゃないかな?」

「……僕には? ていうか、好きかどうかを聞いているんだけど?」

「うーん、僕はあ、「こいつ、子犬とか子猫とかの小動物大好きだぞ?」って一夏!?!」

春斗の台詞を遮って、一夏が口を動かした。

「へえ。春斗って小動物が好きなんだ……なるほど、これは憶えておいて損はないね」

思わぬ良情報にシャルロットはニコニコとしながら、着ぐるみパジャマを選んだ。

それ以外にも数点、動きやすい物も選ぶ。

ラウラよりシャルロットの物の方が多いのは、全然気のせいではない。

「じゃあ、次は水着だね?」

こうして無事(?)に、ラウラの部屋着を購入し終わると、そんな

事をシャルロットが言った。

「水着……臨海学校で着る用の？」

「それもあるけど、やっぱり新作を着たいもの」

「……女の子って、ワンシーズン毎に水着買ったがるよね。男子には理解出来ないな」

「男の子は水着の種類、そんなに無いものね」

「古人曰く『女に似合う服は星の数ほどあれ、男に似合う服は片手の指程も無い』ってね」

「そんな言葉、初めて聞いたよ？」

「うん。僕が作ったからね」

「それ……古人じゃないよね」

そんな事をやりつつ、三人は二階へと降りていった。

その後ろをこそこそと着いて行く、蘭の姿も確認された。

「……で、何であんな所で揉めてた訳？」

「そ……それは、うう……」

「い、一夏さんが……あう……」

目を覚ました鈴とセシリアに、織羽が尋ねる。が、当身の威力が強かったせいも、未だに顔色が悪い。

「ほら、これでも飲め。それで……一夏がどうかしたのか？」

箒が買ってきたお茶を飲みつつ、セシリアが答えた。

「一夏さんが、シャルロットさんとラウラさんと三人で、ここに買い物に来ているんですの。それを追いかけて……って、しまった！？」

セシリアはいきなり立ち上がった。が、すぐに貧血で崩れ落ちてしまふ。

どれだけ強力な一撃を見舞ったというのか。

「くっ……こんな所で、倒れている場合ではありませんわ……！！」

「待てセシリア。そのダメージで無理をするな……！！」

「いいえ。ここで行かなければ……ならないのです！！」

箒の言を無視して、それでもセシリアは自らを奮い立たせる。ここで行かなければ、セシリア・オルコットの名が廃る。

「あんた、そこまでして……！！？」

その身を顧みない決意に、鈴は目を見張った。これ程に強い決意と覚悟。正しく、代表候補生の名に相応しいと言えるだろう。

「まったく……馬鹿な女だな、貴様も」

そう言いつつ、箒はセシリアに肩を貸してやる。

「箒さん……！？」

「勘違いするな？ たまたま、私も行く所が同じだというだけだ」

「……あなたも、大概馬鹿な人ですね」

「どうやら、そうらしいな」

そして、互いに苦笑し合った。

「……いや。これってそんな、壮大な雰囲気を出す所じゃないでしょ？」

織羽のツツコミは尤もだったが、誰も聞いていなかった。

「…………え？　もう買って降りていった!？」

「はい。話からするに…………二階に行ったものと思われませんが?」  
店員の話に、四人は啞然としたのだった。

「ここ……確か、今年出来たばかりの店らしいね？」  
「へえ。結構、綺麗なお店だね」  
レゾナンス二階にある水着売り場。

混沌は混乱となりうるのか。まだまだ、休日は続く。

第24話 すれ違い？/勘違い？/入れ違い？（後書き）

今回、怒られたら修正する覚悟があります。

何処だとは言いませんがw

こついうすれ違っていく話って好きなので、やってみましたが……  
どうでしょうかね？

第25話

End of Hurried Holiday

- 慌ただしい仕

買い物編ラスト。

長い上にカオスマックスを目指した今回。

あの人も再登場して、混乱の極みを治めるのは誰だ!??w

レゾナンス二階にある水着売り場。

色とりどりの水着の並ぶその場所に、シャルロットと春斗はいた。

「もうっ。ラウラもせっかくだから、水着買ったら良いのに……私には必要ない」とか言っつて、どっか行っちゃっし……」

シャルが少し怒り気味に、肩を竦めて言った。

ラウラはきつと、シャルロットのあの勢いに付き合っつのがしんどいので逃げたのだろうなと、春斗は思った。

そして、自分はそれから逃げる事は出来ない訳で。

「まあ、良いや。春斗、僕に似合っつ……一緒に探して？」

ニッコリと笑っシャルロットに、これから味わっ苦勞を感じずにはいられなかつた。

「じゃあ、今度はこれを試着するね？」

「……うん」

「ちゃんと、そこで待っつてよ？」

「……大丈夫。ちゃんといるから」

既に何度目かのやり取り。試着し、見せては新たに試着し。その度

にこうやって聞いてくる。

正直、周りの視線が痛い。

ここは”女子用”水着売り場だ。そこにいる男子となれば、否が応でも目立つ。

ちなみに、春斗は一夏の選んだネイビーブルーの、ショートパンツタイプの水着を購入済みであったりするので、逃げる言い訳もないまま、試着室の前に立って待つという、不審極まりない状況に置かれていた。

実際、何度か店員に声を掛けられたし。

「はあ………」

『千冬姉はこんなに長くないから、流石にキツイな……』

『そっだねえ……』

女子は買物物が長いという話を聞いたことはあった。だが、最も身近な異性である千冬は、その性格もあつてか買物物が早い。

なので、こうして長い事待たされるのは、結構疲れるものであった。

まあ、思うだけで口に出したりはしないのだが。

シャルロットの着替えを待っていると、変な女が近くまでやって来ていた。

「ちょっと、そのあなた。この水着、片付けておいて」

「……………」

「そこにつっ立っている男！ あなたに言ってるのよっ！！」

「……………何だ？」

その礼節を欠いた物言いに対して、春斗の声が低く響く。

が、そんな不快さも理解出来ないのか、女はまるで見下すような視線を向けてくる。

「これ、片付けておきなさい」

ISの登場以来、女尊男卑の流れが生まれてきているとはいえ、こ  
うも露骨なのは、そうお目に掛かれない。

「……………馬鹿か？ 自分でとった物も片付けられないなら、こんな所  
に来るな」

春斗は、その女を更に見下すように返すとつい、と視線を戻す。

「なっ……………！？ あなた、自分の立場が分かっていないようね？」

そう言っつて、女は警備員を呼ぼうとする。

「さて、分かってないのはどっちかな……………？」

逆に、春斗はニヤリと笑った。

「どっしましたか？」

ついにやって来た警備員に、女は出鱈目な事を告げる。それを聞いて、警備員は春斗のところまでやって来て

「少し話を聞かせていただけますか？」

そう言っつて、腕を掴んできた。その様子に、女がむかつくような笑  
みを浮かべている。

「その前に、これを見ていただけますか？」

春斗はポケットから”ある物”を取り出し、提示した。

「……………こ、これは……………！？」

「僕はIS学園所属、織斑一夏です。身分とそれを明かす物を提示  
した以上……………この場での拘束は不当なものとして、そちらを訴えさ

せていただきますが……宜しいですか？」  
春斗が見せたのは、IS学園所属である事を証明する為の”生徒証”であった。

後に連絡を取れる事を証明した場合、権限の無い者による逮捕、拘束は完全な違法行為となる。

ましてやIS学園に所属する男子といえ、世界に唯一人。それを不当に捕まえたとなれば、それだけで、警備員の首はすっ飛ばされる事だろう。

「……どうしたの？」

更に丁度良くシャルロットが顔を出した。春斗が事情を簡単に教えると、見る間に不愉快さを顕にした。

そして、シャルロットも生徒証を提示して、警備員に向かって言い放った。

「僕は、IS学園所属のフランス代表候補生シャルロット・デュノアです。この尋問が不当であるならば、大使館を通して強く抗議させていただきます」

「うっ……！？」

その言葉に顔を悪くしたのは、その女だった。タジタジとする警備員の後ろで、こそこそと逃げていく。

「えっと……お客様、少し聞きたい事が………あっ！？」  
警備員が振り返ると、既に女の姿はなかった。

「本当、ああいうのは同じ女として気分が悪いよ……!!」  
警備員が平謝りして去ってから、シャルロットの機嫌は悪かった。せつかくの楽しい時間に水を差されてしまったからだし、春斗を八メよつとした事も許せなかったからだ。  
「まあまあ。ああいう手合はいるものだし、気にしてたらキリが無いさ」

そんな憤慨するシャルロットをなだめつつ、本気で怒ってくれている彼女に、少しばかり嬉しいと思ってしまう。  
「ほら。それより、どれにするか決めたの?」

「じゃあ、次の水着……っ!?!」  
と、シャルロットが何かに目を見開いた。

「うわっ!?!」  
次の瞬間、シャルロットは春斗の腕を掴み、そのまま試着室へと引きずり込んだ。

そのままカーテンを閉め、隙間から外の様子を伺う。

その狭い視界の中に見えたのは、四人の姿。鈴、セシリア、織羽、そして箒。

四人はキョロキョロとして、何かを探している様子だ。

水着を買いに来たのか、それとも後をつけてきたのかは分からない。

だが一つだけ言えることがある。

(バレたら、絶対に邪魔される……!!)

織羽は箒を応援しているようだし、セシリアは一夏に好意を寄せて

いる。鈴は一夏が好きなので、そして事情も知っている。

誰に見つかっても、この時間が即終わりを告げる。

しかも、篠ノ之箒に見つかったとなれば 否、春斗が箒を見つけても、絶対にそっちに行こうとするだろう。

具体的に言うなら、尻尾をブンブン振る子犬のように。

悔しいが、まだ自分では彼女に勝てない。

「シャル、一体どうし……」

「ダメっ!!」

「へブツ!？」

シャルの上から外を見ようとした春斗の顔を、思いつきり押さえる。勢いが良すぎて、目潰しになったような気もするが、そんな事は重要ではない。

むしろ結果オーライだ。

と、ここでシャルロットは、今のシチュエーションに気が付いた。

狭い空間に二人きり。手を伸ばさなくても、届く場所にいる春斗。これは、千載一遇の機会チャンスなのではないか。

「痛い……!! シャル、いきなり何を……」

「ダメッ!!」

顔を押しさえつつ、春斗が体を起こそうとするので、シャルロットは反射的にそれを押しさえ込んだ。

更に口を手で塞ぎ、「シーッ!」と、自分の唇に人差し指を当てる。

「ふが……ふがが?」

「このまま……声を出さないで? もうちょっと、このままで……」

ね？」

「ふががつ！？」

シャルロットがそのまま、春斗を壁に押し付ける。そしてそっと、塞いでいた手を離れた。

わずかに、掌が湿気を帯びている。

「シャル……何を？」

「何って……言ったでしょ？ 春斗の中を、僕だけで埋めて見せるって……」

『あ、俺は《海岸》まで下がってるから』

『待つてよ、一夏あつ！？』

シャルロットは内心の羞恥を必死に堪え、春斗に迫る。

熱が、息遣いが、その鼓動さえも届きそうな距離。あの月光の下以来だ。

息が苦しい。頭がクラクラして、視界が揺らぎそうになる。

( 幾ら何でも、大胆過ぎた……？ )

今更に自分の行動を後悔しそうになる。だが、ここまで来て退く選択などあり得ない。

強引にでも攻めなければ、あの篠ノ之箒には勝てっこないのだから。

覚悟を決め、シャルロットは春斗の手を取った。そしてそのまま、自分の胸へと導く。

「なっ……！？」

「感じる……？ 凄くドキドキしてるの……分かる？」

「っ……」

指先に覚える柔らかな感触に、コクコクと頷く春斗。何時もの澄ま

した様子とは違う反応を、シャルロットはとても可愛く思えてしま  
う。

もつと、もつと知らない顔を見たい。自分だけが、自分だけが見れ  
る特別な顔を知りたい。

「春斗……僕……」

「シャル……待って、落ち着いて……」

「落ち着いて、なんて無理だよ……もう、ドキドキでどうにかなっ  
ちやいそいだもの……」

熱に浮かされたように自然と、シャルロットの顔が春斗へと近付い  
ていく。

「分かった。ならまずは離れよう……僕も外へ出るから、ね……？」

ドギマギとしつつも表面上の冷静さは保って、春斗はシャルロット  
を優しく押し戻そうとした。

が、シャルロットの細い指が、その手に絡みつく。

「ズルイよ。僕の気持ちは知ってるのに……そんな風に逃げようと  
するなんて……」

そのまま、春斗の手に頬擦りする。

「いや、逃げようとして……そんなつもりじゃ……いや、違わない

……いやいや、やっぱり違う……!!」

「……どっちでも良いよ、そんな事」

春斗の顔を、両手で挟みこむようにして押さえる。動かないように、  
逸らされないように。

「僕だけを見て……？ 他の誰にも余所見しないで、僕だけを見て  
いて……？」

自然と、シャルロットの顔が春斗へと寄せられていく。

「シャル……!!? 待って、これは一夏の体だから……!!」

「でも、今は春斗だよ……? だから、何も問題ないよね……?」

「問題あるって……!!」

シャルロットから香ってくる甘い匂いにクラクラとしながら、春斗は何とかシャルロットを止めようとする。

「でも、一夏の体なのが問題なら、僕が良いなら問題ないってことだよな……?」

「うっ……いや、でも……」

それでもキスを拒む春斗に、シャルロットは不安を感じ始める。

「どうして? 僕の事……嫌いなのか?」

「いや、そうじゃないけど……」

「良かった」

シャルロットはその言葉に安心し、更に距離を詰める。互いに吐く息が頬をくすぐり、熱が届き、前髪が触れ合い、お互いの顔さえもボヤケてしまっている。

「シャル……ル……」

「春斗……好き……」

シャアアアアッ!!

僅か数センチ。まさに唇が触れ合おうとした瞬間、突如としてカーテンが開かれた。

「ッ!?」

「な……な……何を……やってるんですか……一夏さん!?」

「ら、蘭……ちゃん!?」

果たしてそこには、この世の終わりを目撃したような顔の、五反田蘭が立っていたりした。

さて、どうして蘭がこの場に現れたのか。  
それを語る為に、彼女の行動を追う事としよう。

蘭は水着売り場にて、二人をストーキング  
もとい関係調査を  
行っていた。

水着を試着しては、楽しげにそれを見せる女。  
ギリギリと金属製のポールを握り締めて、ガリガリと水着の掛かっ  
たハンガーレールを齧る。

そんな時、変な女が一夏に因縁を掛けてきて、警備員を呼んだ。

その女の顔が凄くむかつく顔で、蘭は出て行ってやるうとした。が、  
直ぐにその足は止まる。

一夏が何かを見せると、警備員の顔色が変わったのだ。更に試着室の女も何かを見せて、何事かを言っている。そうしている内に女が逃げて、警備員は平謝り。ざまあ見る。

「一夏さんは何処に行ったのかしら……?」

「本当にこっちにいるのか、織羽?」

「だって、二階で行きそうな所なんて、ここぐらいでしょう?」

「もう、ちゃんと探さないよ……!」

と、向こうの方から聞こえてきた声。そして見える人影。

先程、鈴ともう一人のロールブロンドを、あんなエグイ攻撃で沈めた女とその連れだ。

マズイ、もしもここで見つければ、下手をしたら一夏の後を付けていたことがバレるかも知れない。と思うや、蘭の行動は早かった。

一目散にそこから離れ、彼女達の後ろに大きく回り込むようにして再度入店したのだ。

思惑通り、気付かれる事はなかったが、同時に何故か、一夏の姿もなくなっていた。時間と状況的に、この場を離れたとは考え難い。もしかと思い、勇気を振り絞って　　蘭はカーテンを開けた。

そして、時は今へと繋がる。

『春斗、この子は誰………？』  
先日設定したばかりの秘匿回線に、凄く冷たいシャルロットの音が響く。

『彼女は五反田蘭ちゃん。一夏の友達のお姉さんで………まあ、例によつて一夏に惚れてしまっている可哀想な子だよ』

ちなみに秘匿回線は白式、裏白式で違うので、この会話は一夏には聞かれない。

『それは………ご愁傷さまだね』

『ねえ………で、どうしようか？』

何を、と言つまでもない。この一切合切、誤解さえない完全無欠のシチュエーションの事だ。

「えつと………かくれんぼ、かな？」

あつても回らない知恵を引っ張り出して、出た言葉はそんなだった。

「………何処の世界にかくれんぼして、そんな状況になる人がいるんですかっ！！ ……いや、一夏さんならあるかも知れませんが！」

「！」

至極尤もなツツコミだ。だが、一夏ならばあり得ない事もないと知っている辺り、流石だといえよう。

更に混乱を大きくする者達が現れた。

「あーっ！！ あんた達何してんのよ!？」

「つて、蘭!？ なんでこんな所に!？」

「い、一夏さん……! 何をなさってますの!？」

「一夏……シャルロット……貴様ら、まさか……!？」

「ち、違うよ!! それはまったくの誤解で」

「そ、そうだ、誤解!! だから待って……!!」

シャルロットと春斗がそう言うも、全員が一斉に言い切った。

「「「「嘘だつ!!」「「「「「

ここから先はもう、とんでもない状況へと流れていった。

シャルロットと春斗に四人が詰め寄り、攻めや攻められ、喧々囂々。

周囲の目を気にせず、店員の介入さえも一睨みで追い返し、警備員もさっきの事のせいで来る事を拒んだ。

春斗は一夏を呼ぶも、『こんなタイミングで、誰が出ていくか!!』

お前で何とかしろ!!』とキツパリ言われた。

「あの時の言葉が不服に感じたのは、絶対に間違いでない」と、春斗は後に語っている

「……ああ、もしも会長ですか？ 今、すっごい面白い事やりますよ……ええ、マジモノの修羅場ですよ。しかもド修羅場……」

勿論、映像はバツチリと……いや、本当に凄い迫力ですよ〜！」  
織羽は一人、どこかへと電話していたりした。修羅場と称したその様子はしっかりとISを使って記録をしている。

最早止める者なきや。救世主は何処に。誰もがそう願ったその時だった。

日出る方角より、黒き衣に身を包んだ凜々しくも雄々しき者、現れり。

「カッーン」と、ヒールと響かせ、黒髪を靡かせ、その後ろに従者を従えて。

「何を」

その手を刀の如く構えるや

「 やっている、バカ者どもッ！…！」

一瞬で、全員を打ち伏せた。

後に残るは死屍累々の群れよ。ああ、恐ろしくも美しい  
は、黒き死神か。 それ

世紀末救世主伝説千冬の拳によって、全員が頭にコブを作り、そして現在。

「いいですか。どんな理由があっても、こつ言った公の場所で騒いだり、お店の人に迷惑を掛けるような行為はIS学園の、ひいてはあなた達自身の為になりません。そもそも」

と、床に全員正座で『1-1の良心』こと、山田真耶によってお説教を喰らっていた。

「何であたしまで……？」

「黙れ。この馬鹿騒ぎを放置した時点で同罪だ」

「あぎやつ!?!」

不服とばかりの織羽の頭を、一撃。潰れたカエルのような声が出た。

「山田先生、もうそろそろ……」

もう少し説教が続くかと思われたが、それを千冬が止める。どついた風の吹き回しかと、誰もが疑問に思った。

「学園に戻った後、相応の罰を与えるのでやっぱりかい。一同の心はひとつになった。」

「……私、関係無いんですけど……」

一人、蘭が心の中でシクシクと泣いた。

「では、皆さんは罰として私と一緒に来て、荷物持ちをするように」

「……ええ……!?!」

「だから、私は関係が……!」

「つべこべ言わずに、さあさあ……!」

真耶は全員を追い立てる様に、一夏を除く面々をその場から遠ざける。

「やれやれ、要らん気遣いをする……」

それに、千冬が嘆息した。

「どういう事でしょうか、織斑先生？」

「今は就業中ではないから、名前がいい。この場では、只の姉弟だ。一夏も良いな？」

「分かったよ姉さん………で、千冬姉。その、何時の間にか持ってる水着は？」

”一夏”は千冬の手握られていた、白と黒の水着を指差して尋ねた。

「率直に聞く。春斗、一夏……どっちが良い？」

「え……？ えっと……」

”一夏”はまじまじと二つを見比べる。

黒はメッシュ地のクロスがセクシーな、スポーツタイプ。

白は一切の無駄を省いた、機能的重視な実用タイプ。

両方共、露出の多いビキニである。

(どっちが良いか……か。どっちもビキニだし……黒、かな?)

一夏はそう思っ、考え直す。

こういう物を着ていると、変な男が寄ってくるかも知れない。そう考えるとここは、白の方が良いかも知れない。

「じゃあ、白で」

「僕は黒だから、これで二票だね」

「2-0か。では、黒にするか」

「うおい！ ちょっと待てい！？」

「何だ、一夏？」

「どうしたのさ、一体？」

「おかしいよな！？ 俺は白って言ったのに、何で黒に二票入ってるんだよ！？」

「お前は昔から、気に入った方を注視する癖がある」

「黒をジーツと見てたの、バレバレだよ。どうせ、『黒を着たら、変な男が寄ってくるんじゃないか？』なんて、シスコン丸出しの馬鹿な考えでもしてたんでしよう？」

「誰がシスコンだ！？ そういってお前は、そういう心配をしないのか！？」

「姉さんがそんな男に引つ掛かると思う？ そもそも、心配する程姉さんに男が寄ってくる訳ないじゃな」

ドゴスツ！！

「痛ったあゝゝつ！？」

容赦なく振り下ろされたゲンコツに、悶え苦しむ二人。

「悪かったな、男の影がなくて。手のかかる弟が自立するまで、そんな事に気を回すつもりはない。人の事を言うよりも……一夏、お前はどうかんだ？」

「俺はつて……な、なんでさ！？」

「学園には腐るほど女がいるのだ、選り取り見取りだろう？ その気になれば、彼女の一人や二人出来るだろうに、何故作らない？」

「いや、二人は駄目だろ？」

「それを一夏が言う時点でアウトだね」

一夏のツッコミを、更に春斗がツッコむ。

「なんでだよ!?!」

「まあ、こいつの鈍さは今更として……そうだな、ラウラなどはどうなんだ? キスまでした仲だ、色々問題もあるのが……容姿も悪くないし、一途だぞ?」

「いや、まあ……ラウラは可愛いと思うけど」

「ほう」

「へえ」

「……って、何言わせんだよ!?! ていうか、春斗の方はどうなんだよ!?!」

二人の生暖かい声に、一夏がハツとして叫んだ。

「春斗は、お前ほど朴念仁ではないからな。要らん心配だ」

「まったく……一夏にだけは言われたくないよ、僕は」

「……マジでムカつく」

そんな呟きに、千冬はクスクスと笑うのだった。

「……………」  
少し離れた所から、その様子を伺っていた者がいた。  
小柄な体格にシルバーブロンド。そして眼帯という、特徴的容姿の  
持ち主　　ラウラである。

あのドタバタを遠巻きに見ていたのだが、千冬達が来たので一足早くその場から離脱することに成功。  
騒ぎが収まった頃合いに、こうして戻って来たのだ。

そんな彼女に耳に飛び込んできたのが

「…………ラウラ…………可愛い…………」

という、一夏の言葉だった。

(可愛い…………誰が?)

「……ラウラ……可愛い……」

(私が……可愛い……?)

その意味を理解し始めると共に、ラウラの白い肌が紅潮していく。アワアワオタオタと拳動不審に動き回り、その場でグルグルと回りだしたりする。

そんな彼女の耳に飛び込んできた、新たなる言葉があった。

それは水着を買いにきていた、見知らぬ女性二人組の会話だった。

「気合入れて選ばないとね」

「似合わない水着着てったら、彼氏に一発で嫌われちゃうもの」

「他の事が全部100点でも、水着がダメだったら致命的だよね」  
「？」

「  
ツ!?!」

その瞬間、ラウラの胸をマテリアルライフルで撃ち抜かれたかのような衝撃が走った。

あらゆる事が完璧でも、水着一つで全てがダメになってしまいうのか。

まさか、そんなバカな。水着がそれほどまでに重要な物だということか。

さり気無く、自分は他は満点だと言っているような気もするが、気にするべきはそこではない。

『悪い。そんなダサイ水着の奴の嫁にはなれねえよ……』

「……………!!」

想像した。似合わない水着を着ていった時の一夏の反応を。

『ふっ。そんな水着で一夏を嫁にするなどは……笑止!!』

『ラウラ・ボーデヴィツヒ。所詮は、私の相手ではなかったということですね』

『うわっ、そんなダサイので一夏の横に立とうとかしないでくれる!?!』

『ラウラ、だから言ったのに……もう、それじゃダメだよ』

『ボーデヴィツヒ、お前には期待していたのだがな……そんな水着を着るようでは、一夏を嫁にはやれんな』

続いて襲いかかるのは、色とりどりの水着を着こなす幻影達。上から篝、セシリア、鈴、シャルロット、千冬だ。

「あ……あぁ………！」

行けない。このままでは一夏が、他の者の嫁女にされてしまう。  
いや、嫁にしようとしているのはラウラ一人であるが。

ラウラはすぐさま端末を取り出し、救援を求めた。

「………そういえば、ラウラちゃんは何処に行ったんだろう？」

あの大騒動の中で、ラウラの姿だけはなかった。何処かにいるのだ

ろうかと、春斗は店内を歩いた。

と、売り場の影にラウラを見つけた。どうやら電話中らしい。

「クラリツサ、私だ！ 緊急事態発生ッ！！」

「っ……！？」

その言葉に、春斗は目を見開いた。まさか、こんなタイミングで不  
倶戴天の敵に繋がるうとは、思いもしなかったからだ。

春斗はラウラに悪いと思いつつ、内容を耳立てて聞きつつ、その背  
後に回った。

ドイツ、シュヴァルツェア・ハーゼ《黒ウサギ隊》基地。  
待機中の彼女たちに通信が届く。

「 受諾。こちらはクラリツサ・ハルフォーフです」  
『クラリツサ、私だ！ 緊急事態発生！！』



「な　　っ  
色物。」

それは、安易なキャラ付けに走ったが故に抜け出れない底なし沼にはまるが如く、目立ちながらもしかし、決してメインに往く事の出ない存在。

ラウラはそうなってしまう自分に絶望し、崩れ落ちそうになる。

「では、どうすれば良い……!!？」

『ご安心を。私に秘策があります』

「　　おっと、その前にお邪魔するよ？」

春斗がヒョイト、ラウラの手から端末を取った。

『おっと、その前にお邪魔するよ?』

「っ……!?!? 貴様は何者だ!?!」

『何者か、か……それを語るには通信は都合が悪いね、ミス・クラ  
リッサ?』

「私の名を知っている……? 隊長はどうした!?!」

『彼女なら今、僕の脇でピョンピョンと跳ねているよ?』

『あっ、義兄上っ! 端末をつ、返して下さいっ!?!』

「ブッ  
」!

その余りにも可愛らしい光景に、クラリツサ以下隊員が深いダメージを食らった。

特にクラリツサなどは、想像力が豊か過ぎて鼻血が出てたりする。

「クツ……おのれえ……！ 何が目的だ……！？」

鼻に詰め物をしつつ、クラリツサが立ち上がる。

『別に大した事ではないよ。話を聞いた限りでは、貴女が彼女に何やらアドバイスをするようなので……ここは一つ、勝負をしようかと思っただね……？』

「勝負、だと……？」

『そちらが思う彼女に似合う水着を、僕が完膚無きまでに論破して見せよう』

「ほう……面白い。良いだろう、ならば聞くが良い！ この私の秘策を……！」

\*ここからは皆様のイメージ力を必要とします。ご注意ください。

追求開始

【ラウラ・ボーデヴィツヒに似合う水着とは？】

「隊長の体型は残念ながら、女性としては幼い。だが、それをここで言っても仕方ない事。ならば、デメリットを逆転させる事で活路を見出す。それが私の秘策だ!!」

『待った! デメリットとはどういう事だ?』

「デメリットというのは言葉が悪いか。具体的に言うならば、慎ましきバストとすんとしたウエスト、小さなヒップの事だ」

『……それは幼児体型……いったあつ!?!』

『義兄上、誰が幼児体型ですか……?』

『ゴメン。いや、本当ゴメン……つ、続きを……!!』

「つまり、ここで似合う物と言われれば、必ずと言っていい程にスクール水着に走るものだが、そこをあえて逆転させる! つまり、

『逆に、セクシータイプの水着を選ぶ』という事だ!」

『待った! それがラウラに似合うと思っっているのか?』

「異議ありっ!! それこそ浅はかな考えだ! 隊長ほどの容姿ならば、似合わないことはない筈だっ!!」

『ぐっ……!!』

「私が選ぶのは、露出の大きく、布面積の少ない ずばりローライズのビキニだ!! フリルなどのポイントがあれば尚良しっ!!」

クラリツサの脳内に、それを着るラウラの姿が浮かぶ。ああ、なんて可愛いんだろうか。

『では確認しよう……色はなんだ』

「当然、黒だ。隊長の肌の白さとのコントラストを考えれば、それが当然だろう?」

つきつける? 織斑千冬



『……以上だ』

「はい、もう良いよ」

「義兄上、一体何をやっているのですか？」

「ちよっとね？」

そついう春斗の顔は、もの凄く爽やかだった。

「クラリツサ、私だ」

『ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長……申し訳ありません。私では隊長のお力にはなれません……！』

「え？ いや、待てクラリツサ!？」

『ですが、何時か必ず……さらなる研鑽を積み、その時こそ……必ずや……!』

「待て、待ってくれクラリツサ!？」

と、ラウラが止める間もなく、通信は切られてしまった。

「……義兄上、どうしてくれるのです！ このままでは私は色物で嫁に嫁にはなれないと言われ、誹謗中傷の果てに教官にも愛想を尽かされてしまいます！！」

絶望にガクリと崩れ落ちるラウラ。そんな彼女に、春斗は言った。

「大丈夫。世界で最も、一夏の好みを知っている人間がいるじゃないか？」

「義兄上……まさか！？」

「そう、僕が導いてあげよう……！ 君に似合い、かつ一夏に気に入ってもらえるような水着へと！！」

「おお……っ！！」

さながら救世主メシアのように、ラウラに手を差し伸べる春斗。

その手を、感動に咽び泣きながらラウラは掴んだ。

精神的に弱った所を、優しい言葉で付け込む。詐欺の常套手段である。

「……うん。これなら一夏も絶対に喜ぶよ、間違いない」

「だが、これは似合うのでしょうか？」

「大丈夫。絶対に似合ってるから」

色々を見て回りながら、ついにラウラに合う物を見つけ。当然、一夏には下がってもらっているの、どんな物かは分からない。袋を抱えながら、不安そうなラウラの頭をよしよしと撫でてやる。サラサラな手触りはとても心地良い。

「は〜る〜と〜？」

「っ……！？」

ラウラの髪を堪能していると、背後から凄く形容しがたい響きが届けられた。

後ろを見てしまったのだろうか、ラウラが凍り付いている。

「ど、どうしたのかな……シャル……？」

「えつとね、どうしてラウラの水着を選ぶの……僕の時よりもずっと真剣だったのかなって？ 後、どうしてこっちを向いてくれないの？」

「いや……まあ、ラウラちゃんの件は色々あってだね……？ 振り返らないのは、気にしないで欲しいな……ほら、男は背中語るものだって、昔から言っしよ……？」

「うん。それは分かったから……振り返ってよ？」

「いや、だからね……っ！？」

二進も三進も行かない状況で、しかし視線の先には姿見があった。そしてそこには、かすかに見える……シャルロットらしき夜叉の姿が映っていた。

「あゝ……僕もいよいよ、一夏と同じ道に進み始めてしまっている  
と……？」

「これがそうかは知らないけど……とりあえず、お仕置きかな？」

水着売り場に、春斗の悲鳴が反響した。

後にラウラは語る。

「シャルロット・デュノア。あれを怒らせた者は例外なく、死へと  
至るだろう」と。

買い物も無事に終わり、大所帯となった一同（春斗は一夏と交代し  
た）は、地下街で昼食を取り、解散となった。

ちなみに、五反田蘭は途中で弾と出会い、そのまま離脱していった。何故か「胸は大きさじゃない。形だからね!!」と、捨て台詞を吐いていったのが印象深かった。鈴を除く面々が蘭よりも大きかったのが、痛烈なダメージであったらしい。

ちなみに、真耶>箒>千冬 織羽>セシリア>シャルロット>>>  
>鈴 ラウラである。  
何がとは、あえて言うまい。

そして、学園に帰ってきたそれぞれは近づく臨海学校に想いを馳せていた。

「海……それは解放の時ですわ!」

「二二二で一気に他との差を付けなきゃ……!!」

「嫁は誰にも渡さん……!!」

「こ、これを本当に着るのか……!?!」

「着なきゃ、何の為に買ったっての!?! 織斑君をこれで一気に落としちゃいなさい!?!」

「何とか二人きりになって、春斗とキ……キキ……キスぐらい……  
っ!?!」

「ふふん。いよいよ、この天才東さんの出番が近付いてきたよっ。他にはない斬新かつ、IMPACT MANTEN!! な登場を仕込むよっ!?!」

「隊長は『義兄上』と呼んでいたな……つまりは、あれが織斑春斗……フツッ、この私にこれほどの屈辱を与えるとは……見ているが良い、織斑春斗！ 必ずや、貴様を打ちのめして見せるッ！」

「なあ、春斗……すっげえ、嫌な予感がしないか？」  
『偶然だね。僕もすっごく、嫌な予感がするよ……』

海には魔物が住んでおると、昔の人はよく言ったものである。  
一部、臨海学校と関係ない描写もあったが、そんな事あ知ったこ  
ちや無い。

第25話

End of Hurried Holiday

- 慌ただしい仕

やっと終わった買い物編。

次回、本当に海に行けるのか不安な感じです。

ヒロインタイムになるのか否か、それは進み具合しだいですw

第26話 海が呼ぶ、嵐の予感？（前書き）

臨海学校本番編。

色々原作と異なる流れの中で、密かにカオス延長戦W  
前回マックスだったので、今回は大人しめですよ？

## 第26話 海が呼ぶ、嵐の予感？

トンネルを抜けると、陽光に煌めくのは見事な海。

IS学園も海に囲まれているが、それとこれとではやはり違うものだ。

「おお、海だ！ 7ね」

と風景に興奮しつつ、織羽は裏返したカードを一枚捨てる。

「やっと着いたの？ あゝ、長かったあゝ……はーち！」

鈴は首をコキコキと鳴らしながら、やはり裏返しのカカードを一枚捨てた。

「ふふふ……やっと、このアタシが秘密のベールを脱ぐ時が……9  
よっー！」

「ダウト」

「ノオオオオオオツ！？」

織羽の情け容赦無い一言で、山盛りのカードを泣く泣く引き取らせる。

ここは二組のバス。

生徒達は、もうすぐ到着するであろう場所に思いを馳せ、ワイワイとはしゃぎ始めていた。

「海かあ。織斑くんはどんな水着かな？」

「トランクスじゃない？」

「いや、ビキニかもよ？」

「ブーメランと申したか！？ 10！」

「誰も言っていないわよ」

「いつそのこと……赤禪とか!？」

「Oh! Japanese Classic Pants デスカ

!？」

「マニアック過ぎるっての!」

「じゃあ、私は白で」

「そういう問題じゃないっての! 禪から離れなさいよっ!」

訂正。極々一部に対して、思いを馳せていた。

一組ばかりがフィーチャーされるが、二組も大概濃いメンツが揃っていたりする。

「一組のバスは、今頃どうなってるのかね？」

「さあて、考えるだけ無駄だと思うけどね……きつと、ツッコミ疲れするだけよ」

「それもそうね」

「今の内、平穏を満喫しておきましょう……11」

そう言いつつ、鈴はまた一枚カードを捨てた。

「ダウト」

「チッ……」

一組のバス内。

二人の思う通り、その中は非常に面白い事になっていた。

「海っ！ 見えたあっ！！」

一人の女子が声を上げる。

それを切っ掛けにしてか、多くの生徒が窓際に寄る。

「いやー、海が見えるとテンションが上がるな」

「そうだね。僕も楽しみだよ……ウフフ……！」

一夏の隣の席にはシャルロット。何やら不気味に笑っているのが気になるが、どうせ被害を受けるのは春斗なので、あえて放置する。

「いやいや！ 放置はだめだよ!？」

「聞こえね〜な〜」

一夏の対応に文句を言おうとしたところ、シャルロットからの秘匿  
トチャンネル  
回線が届いた。

「春斗〜。僕の水着、楽しみにしててね〜」

「……えっと、うん。そうだね……」

「上手く時間作って、一緒に泳ごうね〜?」

「まあ、一夏次第とだけ言っておくよ……うん、約束は一夏とね?」  
「分かった」

シャルロットは弾むような声で答えた。

「……という事だから一夏、時間作ってね? 作ってくれなかったら……  
……やっっちゃうよ?」

「何がっ!?!? そして何をっ!?!?」  
改めて言うが、シークレットチャンネル秘匿回線での会話は、一夏には聞こえないのである。

「全く……海程度で、皆さんはしゃぎ過ぎですわ。あ、D2です」  
「いや、セシリアが言うことかね。あたしもD2ね」

「水着オーダーメイドの用意するとか、気合入れ過ぎでしょ? はい、スキップ」

「うおおっ!?!? とんできたあゝ! もう一度スキップ」

「ええっ!?!? と見せかけて……D4、青っ!」

「なっ!?!? 八枚ですって……!?!?」

セシリアは思わぬ反撃に悲鳴を上げた。

「……………」  
「……………」

箒とラウラは、沈黙の中にいた。別に互いの間に問題があった訳ではない。

その証拠に、二人とも俯き気味にモジモジとしている。

（も、もうすぐ着いてしまっ……! クッ……本当にあれを着るのか……!?!?）

(もうすぐ到着する……義兄上の選んでくれた水着……果たして一夏は気に入ってくれるのか……!?)

内心は似たり寄ったりだったりする。

「　　おい、箒？　ラウラ？」

「　　っ！？」

いきなりヒョイと顔を出した一夏に、二人が声にならない悲鳴を上げた。

「どうした……二人とも顔が赤いぞ？」

「い、いきなり顔を出すな、バカ者ッ！！」

「ち、近い……もっと下がれっ！！」

「どわっ……！！」

二人は同時に一夏を押しやる。

一夏は病気が何かかと心配したのだが、どうやら元気そうなので先ず下がる。

「箒、向こう着いたら泳ごうぜ。遠泳、得意だったろ？」

「ふえ！？　あ、ああ……そうだな……うむ、昔はよくやったものだな」

と、若干しどろもどろになりつつ、顔を赤く染めて箒が答える。

『そうか……ほーちゃんの水着姿……！！　くう……テンションが上がるなあ……！！』

春斗がビジュアルにしたら

＼(＾o＾)ノ<ヒヤッハ

的なりアクションをしているが、一夏は絶対に触れないと決意していた。  
何故なら。

『は~~~~る~~~~と~~~~?』  
『!?!』

シークレットチャンネル  
秘匿回線は、繋がったままだったりするからだ。

『メーデー、メーデー!! 一夏ヘルプ!!』  
『お掛けになった精神会話は、現在使われておりません』  
『ちよつとお!?!』  
『春斗、本当に後で…… O H A N A S H I、しよつね?』  
『ジーザス……』

近い未来に訪れる何かに、春斗に出来るのは祈る事だけだった。

「そろそろ到着する。全員、席に戻れ」  
千冬がそう言つと、立っていた面々が自分の席へと戻る。

程なくして、四台のバスは目的地である旅館の前へと停車した。

生徒達は降りると、荷物をそれぞれ下ろしていく。

そして全員が整列した。それを確認すると、千冬が良く通る声を響かせた。

「それでは、ここが今日から三日間、我々がお世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ。挨拶っ！！」

『よろしく願いますっ！！』

「はい、こちらこそ。今年の一年生もまた、元気があってよろしいですね」

とあって、ニッコリと笑う和服姿の女将。三十代程だろうか、しゃんと伸びた背と、しっかりと着こなされた和服に大人の印象を感じるが、しかし仕事柄か、その容姿は若く見えた。

「あら、こちらが噂の……？」

「っ……？」

女将の視線が一夏へと向く。

「ええ、まあ。男子が一人いるせいで、浴場分けが難しくなってます、まい、申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。なかなか良い子じゃありませんか。しっかりとてそうな印象を受けますよ？」

「印象だけです。織斑、挨拶しろ」

「織斑一夏です。よろしく願います」

千冬に言われるまでもなく、そうするつもりだったので、一夏は深々と頭を下げた。

「これはご丁寧に。花月荘の女将をしております、清洲景子です」  
女将もまた、スツと静かに頭を下げる。その見事な様に一夏は思わずドキッとさせられてしまった。

何せ一夏の周囲には、こういった大人の女性というのが居ない。  
この雰囲気は、最もそれに近いだろう千冬にも、出せはしないものだ。

「不出来の弟でご迷惑をお掛けすると思いますが、よろしく願います」

と言って、千冬が一夏の頭を鷲掴みにする。そしてそのまま再度、頭を下げさせる。

「いててててっ!?!」

「あらあら。織斑先生は弟さんに、厳しくていらっしやるのですね」

「いつも、手を焼かされていますので」

『うん。主に女性関係についてかな?』

『それは絶対に、心当たり無いぞ!?!』

『この温泉って、鈍感にも効果あるのかな?』

『どっという意味だよ!?!』

「それでは、お部屋にどうぞ。海へ行かれる方は別館の方で着替えができますので、そちらをご利用下さい分からない事があれば、いつでも従業員に聞いてください」

「……はーい」

女将の言葉に返事をして、生徒達は旅館へと入って行く。  
何はなくとも、まずは荷物を部屋に持っていかなば話にならない。

明日からのデータ取りや訓練に備えて、初日は自由時間となっている。

「ね、ね、おりむー？」

と、特徴的な呼び名を呼びながら、常人の1/4の時間軸に生きる少女　布仏　本音。通称のほほんさん（一夏命名）である。  
常時眠そうな顔と、ダボダボの制服が特徴である。

「その下に隠された至宝こそが、彼女の恐ろしさを物語る」とは春斗の談。

「おりむーの部屋はどこ？　一覧にもなかったよ。遊びに行くから教えて？」

本音のストレートな質問に、女子たちの耳が空飛ぶ象の耳になる。

「さあ、俺も知らないんだ。廊下でも寝るんじゃないかな？」

などと一夏は冗談めかして言うが、ちよつと有り得そうなのがするのが嫌なところだ。

「おお、いいね。私もそうしよつかな？　『あ、床冷てえ

……』とか言つて？」

「……今、声が変わらなかった？　赤髪黒マント的なヘタレ魔術師みたいな……？」

「ん？　何の事お？」

とぼけているのか本気なのか、本音は小首を傾げる。

この事は一夏は追求しないことにした。人間、触れてはならない深淵もあるのだ。

「とりあえず、どっかに部屋は用意されるみたいだよ。流石に女子

と同じ部屋は出来ないからって」

「一ヶ月も、しののんと一緒だったとは思えないセリフだね」

「……それ、山田先生に言ったらダメだぞ？ 本気で凹むから」

「りよ〜かい」

本音はのほほんとした声で敬礼する。ビツと決まらない辺り、彼女らしいといったところか。

「織斑、お前の部屋はこっちだ。付いて来い」

千冬が自分の荷物を持ち、一夏を呼ぶ。

「はい。じゃ、後で」

「じゃ〜あ〜ね」

本音はダボ袖を振って、一夏を見送った。

「……これが、おりむーを見た最後だった」

「変なナレーションを入れるな」

ペチン。と、癒子のツッコミが決まった。

さて、一夏が千冬に連れられたやっつて来たのは大きめの部屋。二人部屋と言う割には広々とし、東に面したところは一面の窓。海を一望できる眺めは、きつと夜明けの日も見事に見えるだろう。バス、トイレはセパレート。バスに至っては、一夏が足を伸ばして尚、余裕がある程だ。

これ程の部屋が、一夏個人の為に用意された  
訳ではなかった。

入り口にはしつかりと『教員室 織斑千冬 織斑一夏』と書かれてあった。

「つまり、俺達は千冬姉と同室……と？」

「織斑先生と呼べ。個室を用意するという案もあったのだが。お前を個室にすると十割の確率、もしくは100%の確率で、厄介事が起きるとが判断しての処置だ」

「厄介事って……まあ、この間も部屋壊されたしな……」

「ここを壊されたりしたら適わないわんからな。ま、気を使わんで良いだろう？」

「まあね。ところで……織斑先生はこの後は？」

「私は他の先生と連絡なり確認事項なりがある。が、まあ……あれだ、弟の選んでくれた水着ぐらい、着る時間はあるさ」

「コホン、と咳払いしつっつ言う千冬の頬は、少しだけ赤みが差していた。

『照れるんなら言わなきゃ良いのに……』

その後、部屋を訪れた真耶と共に千冬が出ていき、一夏は軽めのリユックサックに必要な物を移し、肩に掛けた。

「じゃあ、俺達も行くか？」

『いざ往かん。母なる大海原へと！』

キラキラと、海面が陽光を照り返し、まるでミラーのように光を散らす。

既に砂浜には生徒達が出ており、一夏はワイワイと騒ぐ彼女達に肩を竦めた。

「いや、元気なもんだなあ」

『青い空、白い雲、眩しい太陽。はしゃがない訳にはいかないさ』

『……そう言いながら、空も雲も太陽も見えてなかっただろ？』

『僕にとっての空と雲と太陽は、しっかり見てたよ？』

それは何か。などと説明する気はない。肩より下で、太ももより上というヒントだけを提示したい。

『一夏は海でも一夏であった。どう一夏だったかと言えば、余りにも内容が多い訳で。

まずは、セシリアさんにサンオイルを塗る事を頼まれた。オイルを手で温める事を知らない一夏は、そのまま塗ろうとしてしまったりで、改めて塗っていると何故かセシリアさんが息をハアハアと乱して、周りにいる女子達は一様にしてその光景をエロイと表した。

更に暴走を始めた彼女は、手の届かない所　脚やお尻までもと注文してきた。

流石の天然、鈍感、にぶちん、唐変木、朴念神、エロプラス+と、様々な称号を欲しいままにする織斑一夏であっても、これにはたじろぐ。

だがしかし、そこに割って入ったのは鈴ちゃんだった。

一夏からオイルを奪い、セシリアさんの水着を捲りあげてワシヤワシヤとお尻にオイルを塗りたくった。

というか、水着がシミになるのではないだろうか？

とか思っている内に、セシリアさんが「鈴さん、いい加減になさいっ!!」とお怒りになる。

横たえていた体を起こして、無防備にも振り返った。一夏のいる方向へ。

オイルを塗るのだから当然、上は外してある。つまり　そういう事だ。

全員がそれに驚き、一夏にいたっては一瞬とはいえ、それを凝視した。僕？　僕はその不可抗力でしか無いよ？

ともかくその後、セシリアさんが取り乱して一夏をISでぶん殴ったり、鈴ちゃんも逃げて海に逃げこみ、溺れて、一夏に助けられてまたデレて。

「デレとか言うなーっ!!」

そして、復讐とばかりにセシリアさんに連れて行かれ……………そして、  
現在はどうと……………」

『お前、何一人で喋ってんだ?』

『これはナレーションだよ。知らないのかい?』

『いや、誰に対してのだよ!?!』

「えっと……………ラウラか?」

二人の前にはシャルロットと、バスタオルおぼけが立っていた。

「もう。恥ずかしくならなくて良いのに……………」

「だ、だがこういうのは……………ダメだ、恥ずかしい……………!」

「ふうん。じゃあ、僕は春斗と二人つきりになるうっつと。一夏、春  
斗と代わってくれる?」

「ま、待て! それでは話が違っ……………!!」

「それは、ラウラがいけないんだよ？ さ、一夏っ！」

「おいおい、そんなに引つ張るなって!？」

どんな協定を結んだのか、シャルロットはラウラに見せつける（タオル巻きになっっているの、ラウラには実際見えないが）ようにして、一夏の腕を掴んだ。

「~~~~~ツ！ ええいつ!！」

強引に連れていかれるのを察したラウラは、半ばヤケクソ気味にバスタオルをパージした。

タオルの下から現れたのは、胸元に飾り結びの付いた桜ピンクのワンピース水着。だが只のワンピースではない。

みぞおちからヘソの下までを、大胆にもダイヤモンド状に大きくカットティングしており、胸下の膨らみが若干見える。更に引き締まった腹筋やヘソも横まで丸出しなので、可愛さの中にセクシーさも同居している。

しかも後ろは、腰まで紐のみ。背中丸出し状態で、これまたセクシーであった。

白い肌に銀髪というと、黒などの暗色を使ったコントラストが安定しているが、あえて暖色のピンクを使ったこの水着を見つけた時、春斗は天啓を受けた。

ピンクと白は、明るい色同士ながら暖色と寒色なのでコントラストもある。

そして山櫻がそうなように、その色合いはとても合うのだ。

「へえ……」

「あ、義兄上が……これが良いと勧めたのだが……わ、笑いたければ笑え……!！」

「いや、笑わないよ。うん、すごく可愛いぞラウラ」

世辞抜きに一夏はそう思った。見た目と違い、普段から大人びた印象の強いラウラだけあって、こういう女の子っぽい格好はとても新鮮だった。

「ッ!?」

が、ラウラは正面きって言われたその言葉に、一瞬で脳容量がオーバーしてしまった。

「どうした、ラウラ……?」

一夏がフリーズしたラウラの顔を、ヒョイと覗き込んだ。

「っ……………!? あ……………ああ……………あああああああああッ  
!?!」

間近に寄せられたその顔に、ラウラはついに暴走した。砂浜を全力で逃走し、そのまま海に飛び込むとあっという間に、彼方まで泳いでいってしまった。

「……………えっと、追いかけた方が良いのか?」

その唐突さと余りの速さに、一夏は中途半端に伸ばした手を引っ込める事も出来ずにいた。

「……………今は、そっとしておいてあげなよ」

シャルロットはポン、と一夏の肩を叩いた。その目尻にキラリと光るものがあったりした。

「織斑君、シャルロットっっ! ビーチバレーしようよっっ!」

「おおっつ。おりむーと対戦だっつ！ バキューンバキューン！」  
「ということ、パス！！」  
「おっと……」

いきなり飛んできたビーチボールを一夏はキャッチ。向こうでは本音達が手を振っていた。

「よしっ、せつかくだしやるか」

「でも、向こう三人でこっち二人だけど……?」

3対2ではさすがに不利だ。誰かもう一人、と一夏は面子を探す。

「フッフッフ……お困りのようね!!」

突如として響き渡る不敵な笑い声。その場にいる全員が周囲を見回すも、何処にもそれらしい影はない。

「誰だ！ どこにいるっ!？」

「何処と聞かれたならば、お答えしよう!!」

という声と共に、いきなり砂が爆ぜ襲った。

悲鳴が上がる中、もうもうと上がる白煙の向こうに揺らぐ影。

「辰守流忍術正統 辰守織羽、ここに参上っ!!」

「お前は……織羽!? それに箒か……!？」

果たしてそこに現れたのは、織羽と箒であった。織羽はチューブトツプの水着を着ており、箒はその後ろに隠れている。

「何故、煙玉で登場を……」

「いやあ……最近、忍者らしい事をしてないなあっつて」

「いや、だからってここで忍者らしい事をするなよ。……で、箒は何で後ろに隠れてるんだ？」

「夏が言うと、箒はビクツと肩を震わせた。

「あーもう、いつまで後ろに隠れてるのよ!？」

「だ、だが……これは流石に……恥ずかしい……!」

「……とうっ!」

業を煮やした織羽が、跳躍。一瞬で箒の後ろへと回りこんだ。

「なあっ!？」

遮るものを失った箒は、ついにその肢体を晒した。

「っ……!」

『……!』

箒のそれは白のビキニ。

黒で縁取られたそれは、とてもセクシーなデザインだった。

更に、羞恥に体をよじらせる箒の姿が今までにない印象を与え、一夏と春斗は思わず息を呑んでしまった。

「な、なんだ……!？ 言いたい事があるなら、言えばいいだろう!？」

まじまじと見てしまったので、箒が照れ隠しに怒鳴る。

「いや、えっと……『凄く似合ってる』ぞ」

「っ……!？」

そう”二人”が言うと、箒の顔はあっという間に真っ赤になった。

「ほら、心配要らなかつたでしょ？」

「う、うむ……だが、それはそれとして……やはり恥ずかしい……」

「よし、箒を助っ人として織斑君に貸そうじゃないか!」

「織羽!？何を勝手に……っ!？」

「おっ、これで3対3ね。よ〜し者共! 戦の用意じゃっ!」

「「「オーツ!」」」

戸惑う筈を置き去りにして、あっという間に準備は整い、筈はコートに立たされていた。

「……何故、こうなった？」

疑問は多々ある。だが、一夏はやる気であり、シャルロットは向このコートで、何故かものすごい殺気を発している。

ちなみにシャルロットは、谷本癒子とチームをチェンジしていた。

「行くぞ、筈！」

「……こうなれば、やってやるとも!!！」

「よし、『7月のサマーデビル』と恐れられた、この私の実力を見よっ!!！」

こうしてビーチバレーは始まった。

一進一退の攻防、シャルロットの殺気の込められたスパイクが決まれば、筈のアタックが本音を直撃した。

パツタリと倒れた本音の代わりに入ったのは 何と千冬だった。一夏と春斗が選んだ黒のビキニを着た千冬に、一夏は思わず見惚れ、そして他の生徒達も溜め息を吐いた。

その横顔に筈は何かを感じ取ったのか、濃密な殺気を発していた。

更にトラブルは起きる。

「お待ちなさい、鈴さんっ!!！」

「フーッハッハッ！ 遅い、遅すぎるわよ!!！」

と、セシリアと鈴が帰ってきたのだ。何故か追いかっこをしなごら。

『なんか、ああいう光景が昔あったような……』  
その光景に、春斗はデジャビュを覚えた。

『待ちなさい、春斗おおおおおっ!!』

『ハッハッハッ！ この体の無駄なスペックを見よ!!』

『うん、どこでだったかなあ？』

『いや、思いつきり思い出してたよな!？』

一夏のツッコミを、春斗は華麗にスルーした。

鈴とセシリアの追いかけっこは千冬への激突。そしてその尋常ならざる握力をもって、二人の頭を鷲掴みにして締め上げられる事で終わりを告げた。

「あら、皆さん楽しんでますね」

と、今度は真耶がやって来た。この凄惨な状況を見て、何故そう言えるのか。

『っ……っ……』

春斗は衝撃を受けた。

黄色のビキニを身に付けた真耶の恐るべき凶器は、一歩進む度に大きく揺れる。

『な、何という大艦巨砲主義……！ 幾ら何でも安全装置を付けて

いないなんて……危険過ぎる!!」

「春斗?」

「ッ!?」

最近、春斗の思考に対するシャルロットの反応速度が、上昇してきている。

「はぁ……」

海岸の端。パラソルの下で溜め息を吐く、セミロングの髪と眼鏡を掛けた、少し暗い印象を受ける少女。

彼女の視線は、騒がしい1組の面々に向けられていた。

「……来なければ良かった……」

少女　更識　簪はまた溜め息を吐いた。

本当は来る気など無かった。だが、幼馴染達によって強制的に連れて来られたのだ。

勿論、本気で嫌がれば幼馴染達も止めただろう。  
だが簪にも興味があった。

織斑一夏。篠ノ之箒。

簪は自分の指を見る。

右手中指にはめられたクリスタルの指輪。

白式。真打鉄。

未だに未完成の

彼女のIS。

その原因となった機体と、自分の機体のコンセプトと被りながら、相反する機体。

「ごうらっ!」

ペチン、と頭が叩かれた。見上げると、幼馴染の姿。

「……織羽」

「こんな所で、なに一人でやってるのよ」

「別に……」

「せっかく海に来たのに、泳がないの?」

と言いながら、織羽が隣りに座る。

「……日焼けするから、嫌」

「むしろ、もうちょっと日に当たりなさいよ。アニメや漫画も良いけどさ……今度、あたしに付き合わない?」

「……織羽に付き合うと……息が続かないから……イヤ」

「いやいや、それはあんたの体力が無いだけでしょ?」

「……それ、絶対に間違ってるから……」

「いや、そんな事はない……って」

織羽は誤魔化すように笑って、視線を逸らした。

「……織羽？」

「何……？」

「あなたは……『辰守』の名を、重荷に感じた事はないの……？」

「……あるわよ、そりゃ。お祖父様も、父様も、母様も、大兄も連  
兄も皆、凄いもの」

「……うん。おじ様達、皆凄いよね」

「だけど、誰かと自分を比べてばかりいると……いつか、自分を見  
失うから」

「……」

織羽の言葉に、簪は少し考えるように俯く。

更識の名は、決して軽いものではない。

辰守の名もまた、軽いものではない。

偉大な家族を持つその重さは、余人には測り知ることには出来ない。

( なら……彼らは……どうなのだろう……？ )

フリュンヒルデ  
世界最強の称号を持つ、織斑千冬。

ISを開発した世界一の天才、篠ノ之束。

ああして普通にしているように見える中でも、何かを感じているの  
だろうか。

「……………うん？」

織羽のいぶかしんだ声がした。

何だろつかと簷も、織羽の向いている方を向いた。

「……………うさ耳？」

砂浜に、うさ耳が生えていた。

「これ、うさ耳……………？」

「これがうさ耳以外の何に見えると？」

近づいて見てみるが、やはりうさ耳だった。しかも「丁寧に」「これを抜いたら、ちゃんと責任者に届けるよーに？」なんてタグが付けられている。

「……………」

簪はとても嫌な予感がした。

このタグに、イタズラを思いついた時の姉と同じ気配をヒシヒシと感じたのだ。

これを行った人物は、少なくとも姉並に厄介な存在であると、簪は理解した。

関わるべきではない。このまま見ないフリをして  
いや、砂に埋めてしまおう。

面倒事は埋めるに限る。そういうものだ。

「これ、誰が用意したのかしらね？」

「って、何で抜いちやってるの!？」

うさ耳を手にした織羽に、思わずツツコミを入れてしまう。

「いや、こつというのは抜くのがお約束でしょ？」

「ここでそういうお約束を求めちゃダメ!!」

近年稀に見るハイテンションで叫ぶ簪であった。

「と、いう事でお持ちしました」

「……………そうか」

うさ耳を千冬に献上すると、何故か微妙な顔をされた。

「ねえ、一夏……………あれって、まさか……………？」

「多分……………そうなんだろうな……………でも、何で？」

「……………」

鈴と一夏がそれに嫌な予感を憶えて一筋の汗を流し、箒は気まぐさ  
に視線を海へと向けて、遠い目をしていた。

「ん……………？」

箒が彼方に光る何かを見つけた。それはこちらに向かってくるよう  
で、徐々にその大きさをハッキリとさせていった。

「先生、海から何か飛んできますー！！」

「何だと……………？」

千冬が何処からか双眼鏡を取り出し、その飛行物体を見た。そして  
言った。

「織斑、射ち落せ」

「「「ええ　！？」」「」

「分かりました」

「『『『『『ええ』』』』つ!?!?』』』』』」

生徒達の驚愕の叫びも消えぬ間に、春斗は裏白式を起動。そのまま月影を構えた。

箒にバレるかと思いきや、箒は見たくない物を見てしまったという風に顔を伏せていた。

そして春斗は容赦なく、狙いすました矢を放った。

光が飛び、飛行物体が爆発。そのまま海に落ちた。

「お、織斑先生……一体何がどうなって……?」

真耶が恐る恐る尋ねる。それはここに居る全員の気持ちであった。

「何の事はない。世界が平和になった……たったそれだけの事だ」  
千冬はザッと髪を掻き上げた。

「いやいや、意味が分からないから。と、全員がツツコンだ。」



バカン、ゴゴゴゴ……ッ！ と、重厚な音を響かせて、人參が割れていく。

そして顕になった内側には、腕を組んで高笑う影。

極一部の面々は「ああ、やっぱりか」と思った。

「ハーツハツハツハツ！ 甘い、甘いよちーちゃん！！ ティラミスに砂糖と蜂蜜とあんこを乗せた上からチョコレートでコーティングしたぐらいに甘々だよ！！」

笑う度に、その無駄に大きな胸がプルンプルンと揺れる。

見た目はとても美人なのに 不思議の国のアリスだろうか

うさ耳とその服装と高笑いから分かる性格が、ゼロを超えてマインナスであった。

これが世に言う『残念な人』である。

「いやもう、最高の掴みだね！！ この為に一週間前からスタンバってた甲斐があったというものだよ！！」

再び高笑う残念美人。

と、その笑い声が止まった。

見れば、箒がボールをトスしていた。

見れば、千冬がジャンプしていた。

見れば、スパイクを打っていた。

「へボアツ!？」

打ち放たれた剛球は、残念美人の顔面を直撃した。

その余りにも凄まじい威力に、残念美人が吹っ飛び、そして千冬が着地する。

その一連の流れは、まるでスローモーションのように見えた。

残念美人は完全に気絶し、千冬は開かれていた人参を力尽くで閉じた。そしてそのまま、それを海へと押し返した。

波にまかれて、人参は流れていく。

「……これで、世界は平和になるだろう」

一仕事を終えた充足感に、千冬は額の汗を拭うのだった。

「酷いなあ、ちーちゃん」

「っ!?!」

背後から声がした瞬間、「パチンツ」と、千冬の水着のホックが外された。

「でえい!?!」

「はぎゃあっ!?!」

取れそうになる水着を反射的に押さえ、振り返る事もなく、背面蹴りを打ち込む。

そこにいる全員が思った。

人間は蹴りだけで、あんなにも高く飛んでしまうものなのだ。

「流石に顎を蹴り抜かれるのは、束さんでも痛いよ!?!」

「やかましい。何をしに来た、貴様は?」

千冬は残念美人を足蹴にしながら、ホックを付け直しつつ、尋問する。

「イヤだなあ。束さんが来る理由なんて一つしか無いじゃない……」



本日一番の驚愕が、海岸に響き渡った。

第26話 海が呼ぶ、嵐の予感？（後書き）

ついに登場、篠ノ之束！

この人のテンションは、浜茶屋のおやじ並でありますww（例えが古いな）

というかこの切り方だと、次回も彼女が続投だということのか……！？

第27話 邂逅する、天才二人（前書き）

臨海学校編。

初日はまだまだ続きます。

そしていよいよ、彼女が目立つ時がやって来ました！！

第27話 邂逅する、天才二人

前回までのあらすじ。

臨海学校に行ったら、海から人參が襲ってきた。

「篠ノ之束……って、まさか！？ でも、何で……？」  
真耶はすっかり混乱していた。真耶だけではない。そこにいる全員が混乱していた。

世界中が探す超重要人物、篠ノ之束。

まさかそれが、こんな風に登場するなどとは誰も思わないし、思えなかった。

そして、これ程に変人奇人であったともだ。

「篠ノ之さん……ドンマイ」

「大丈夫、あたし達は友達よ？」

以前、1組で起きた出来事をクラスメートは思い出し、箒の肩を優しく叩いた。

「本気で慰めないでくれるか！？ 色々突き刺さるのだが！？」  
軽く涙目になっているのは、気のせいではないだろう。

「さあさあ、箒ちゃん。感動の涙を流していないで、こっちに来るのだ〜！」

「……こ、殺したい……！」  
ニコニコと手を振る束に、これまでに感じたことのない憤りを覚える。

だが、束の来た理由があの手ならば、今ここでそれをするべきではない。

怒り震える心をぐっと沈め、箒は呼ばれるままに向かった。

全員が箒達の後ろに移動し、開けた砂浜が二人の前には広がる。

「……………で、ここに来たという事は……………例の？」

「そう！ 束さんの作った箒ちゃん専用IS『紅椿』のお披露目だよっ！！」

「っ……………!？」

その言葉に、全員がざわめいた。

「篠ノ之さんに専用機……………!？」

「しかも、あの篠ノ之博士が作った……………!？」

「でも、篠ノ之さんならあり得るかも……………」

「うん。トーナメントの戦いとか凄かったもんねっ！ 代表候補生と互角に戦ってたし……………!」

「……………」

千冬は少しばかり驚いた。

専用機を用意したなどと言われれば、身内鼻肩だと揶揄されるかと思っただけだが、存外受け入れられているからだ。

それというのも、全てはトーナメントで見た筈の奮闘に起因していた。

あの戦いは一年生は勿論、二、三年生の間でもかなり話題となった試合であった。

それこそ、同じ試合で戦った筈のラウラと一夏の勝負が霞んでしまっただけだ。

それに合わせて、打鉄の使用申請も増えていた。

プログラム真打があれば、専用機とも互角に戦える事を筈が証明した。その結果、今後の公式戦の為に打鉄を使いたいという生徒が急増したからだ。

それに対して、ラファールを使用する組は不満を顕にしていた。

どうして打鉄にだけ、専用プログラムを用意するのか。ラファールにも用意して欲しい。という嘆願書が、毎日のように生徒会に届けられ、生徒会長【更識 楯無】は毎日、それを見ない事になっていた。

そんな嘆願書出されても、作れない物は作れないのだから仕方ないのだ。

閑話休題。

概ね好意的に受け入れられた筈の専用機だが、千冬には不安があった。

それを作ったのが”あの束”である事だ。

個人でISを作る技術を持つのは、千冬の知る限りでは束と春斗ぐらいだろう。

春斗ならばまだ良い。常識を持っているからだ。

だが束に常識などという言葉はない。世間の常識が自分の非常識であるなら、簡単にそれをぶっちぎる性格なのだ。

【世界を自分に合わせさせる】という、デタラメぶりだ。

ともかく、今はあれの作ったISを見てみようかと、静観することにしました。

「じゃ、早速呼んでみようか」

と行って、束が取り出したのは大きめのSFに出てきそうな銃。ショットガンのようにポンプユニットの付いたそれは、銃身に隙間が開いていた。

「姉さん、何ですかそれは？」

「フフフン、この束さんが伊達や酔狂でこんなモノを用意したと思

うのかな？」

「ええ、思いつきり」

「さっすが篝ちゃん！ よく分かってる〜　じゃ、行くよ〜！」

束はその隙間に真円板をセックルプレートサークルプレートとして、ポンプを引く。

そして銃を上に掲げて、そのまま下ろす。

「アクセルう……シユートツ〜！」

カチツと引き金を引くと、プレートが発射され、それが二枚に分離して砂浜を疾走する。

何故、マジ　ルシユートではないのだろうか。

「いや〜、どうもマジカ　シユートよりも、アクセルシユートの方が言いやすいんだよね〜、不思議と。でもやっぱり、海だからマジカル　ピンの方が良かったのかな〜？」

普通に地の文章に答えなくてももらいたいものだ。

などとやっている内に、砂浜には二重真円と六芒星が描かれ、光を放っていた。

プレートが束の元に戻り、彼女はそれを胸元に構えた。

「ドー・キ・ラムーン……光出でよ、汝　グランゾー……じゃなかつた。紅椿〜っ〜！」

一歩間違えると別の物を召喚しそうな呪文と共に、束がプレートを掲げた。するとプレートがまばゆい光を放ち、魔方陣がそれに呼応するように更に輝いた。

チャ〜チャララ〜      チャラララッチャラッチャラ〜

何処からか壮大な、謎のメロディーが流れ、それと共に砂浜から深紅の機体がゆつくりと姿を現した。

「これが……紅椿……!？」

「そう。これこそが篝ちゃん専用機！ 紅椿だよ!!」

ちなみに、これらのギミックを仕込む為に、篠ノ之束は四日間完徹で仕込みをしていた。

何故、グラ    ゾートなのか？

それは別の方が某所で龍丸を出したからだ。おかげで、作者が当初仕込んでいたネタが使えなくなってしまったのだ。

「おっと、それは楽屋ネタだよ？ さ、篝ちゃん。早速乗り込むんだーっ!!!」

「っ……………」

色々とツッコみたいところだが、今はISだと、篝は紅椿のもとに一步踏み出した。

と、いきなり束に肩を掴まれた。

「って、違〜う！ 違〜うよ、そうじゃないでしょっ!?!？」

「ハ、ハアッ!？」

「篝ちゃん、こういう時は100メートルを5秒で走らないと〜っ!」

「……………は?？」

「東さんが作るものは、完璧にして十全でないという意味が無いんだよ？ とはいえ、流石に神顔モードは時間が無かったから出来なかったけど……それ以外はバッチリ!!」

「バッチリじゃないっ!!」

「ふぎやつ!？」

箒のツッコミ（後ろ回し蹴り）が炸裂した。

「100メートルを5秒など、私は何処のチーターだ!？」

「……でも100メートル5秒で行かないと装着できない仕様に……」

「今、すぐ、外せ」

「ら、らじゃっ!!」

束は流石に命の危険を感じたのか、すぐさま紅椿に走っていった。ベキベキと指を鳴らした箒の顔は、一人百鬼夜行とでも例えられる程に恐ろしいものだった。

こうして、余りにもアホな”100メートルを5秒で走らないと装着できないよシステム”は排除された。

「山田先生、フィッティングはISスーツ無しで大丈夫なんですか？」

「ISスーツは、あくまでもISを効率良く動かす為のものですから、フィッティングに絶対必要、という訳ではないんですよ?」

「へえ」  
箒が紅椿を装着し、束がパーソナライズとフィッティングを補助して行つ中、真耶による専用機講義があつたりした。

「うん……これはちよつと時間掛かつちやうかな？ もう、”100メートルを5秒で走らないと装着できないよシステム”を外したせいで、プログラミング直さないと行けないし……あ、そうだし！」

空中投影ディスプレイと仮想コンソールを叩き続けていた束が、キラリと目を光らせた。

「おい、いつくん！」

「……何ですか？」

もう、嫌な予感しかしない。

「ちよつと、春るん呼んでくれないかな？」

「ゴブツ ……！」

二人は思いつきり噴いた。何言つちやつてんだ、この人。

春斗の存在は一応重要事項なのだ。

今や公然の秘密状態であるとはいえ、だからといってヒョイヒョイと出て良い事にはならない。

「ほらほら、早くしてよ？」

「……………」  
「束、お前……………」

千冬は凄く怖い顔をするが、束はパタパタとうさ耳を振った。どういふ仕組みで動くとか、ツッコんではいけない。

「いやだなあ〜。白式を出して、回線繋げてって言うてるんだよ〜?」

「……………」

絶対に嘘だ。と、一夏達は思った。

『ハア………… 一夏、お願い』

「仕方ないな………… 来い、白式…………!」

一夏は白式を起動させ、そして束の傍まで向かった。

「ハロー、春るん元気かな〜?」

「………… 元気かどうか、充分にご存知でしょう?」

砂嵐の開放回線オープンチャンネルで、テンションの低い春斗の声がする。

「まあね〜。まだ、そんな所にいるなんて………… ちよつと、予想外だつたりするけどね〜」

「………… さつさと済ませましょう? 一夏にも迷惑だし」

「オツケー。じゃ、白式にこれを繋げるね〜?」

といって、束は何故かスカートから出したコードを白式に繋げた。

「システム、コネクトを確認。プログラムロード………… 確認。作業開始」

「お………… 早速早いね〜? 流石は春るんだ〜」

「それはどうも」

春斗は短く返すと、黙々とIS空間内でキーを打ち続ける。

「おっと、これは負けてられないね〜」

と言って、束のタイプピング速度が更に上がる。

「こつちと並行してるんですから、もうちよつと速度を考えて下さい」

呆れ気味に言っつて、春斗もタイプピング速度を上げる。

今、空間投影ディスプレイは12も上がっており、そこに果てしない文字列が凄まじい速さで流れていく。

「……………」

その余りにもとんでもない光景に、篝や一夏は勿論の事、他の生徒達も唾然としてしまっていた。

「……………ところで、春るんはいつまで……………そんな所にいる気なのかな?」

「……………さあ、何時まででしょうね?」

「……………質問に質問を返されるとは思わなかったよ」

「そうですか?」

「……………」

「……………」

「うっっ、もうちょっと何か話そうよ?」

「……………何か」

「……………いや、そういう事じゃなくてね」

ISのプログラムなんていう物は、一人二人でいじる様な代物ではない。

きちんとした施設、確かな技術を持ったプログラマーがチーム単位で、数ヶ月規模で組み上げて動かすものだ。

「はい、おっわり〜! いや〜、流石に二人だと早いね〜。束さんも久々に本気になっちゃったよ〜!」

「それは良かったですね」

だからこんな、IS …… しかも専用機のプログラムを数分と経た

ずに修正、再構築、並行してフィッティングとパーソナライズを終わらせる事など出来る筈がないし、出来たらいけないのだ。

こんな事が明るみになればそれこそ、他のIS用プログラムチームが全員、即刻失業してしまうだろう。

「じゃ、僕はこれで……あ、ほーちゃん？」

「何だ……？」

面倒事を終わらせ、束がコードを回収している時、春斗は一言だけ、  
箒に伝えた。

「水着、よく似合ってるよ。じゃ」

「っ……！？」

「じゃ、紅椿の性能チェックを……と行きたいけど、それは明日のお楽しみにしておこうね。これ以上はちーちゃんが怖いし」  
束はうーんと、背伸びをすると、そして人集りへと視線を向けた。

「ちーちゃんにいつくんに、箒ちゃん、春るん。後は………おい、鈴々〜！」

「っ……！？」

こそこそと逃げようとしていた鈴が、ギクリと体を強張わせた。

「ホラホラ〜！ そんな所にいないでこっちに来なよ〜！？」

「ッ……！……！」

振り返らず、鈴はダッシュ。

「おっと、それは想定内だよ」

「痛あつ!?!」 ガチャンッ! トラバサミ(安全な物を使用しております)

「うきやあつ!?!」 ズドオンッ! ウォールプッシュ

「いやあああつ!?!」 バイーンッ!! スプリングフロア

ひゅるるるる……どおおおおんっ!

「ハロハロ〜。鈴々、久しぶり〜」

「な……何がどうなって……?」

砂浜に叩きつけられた鈴が、フラフラになりながら立ち上がる。

「東さん特製、”三次元座標に色んなトラップを仕掛けちゃうぜシステム”だよ〜! ブイブイ!!」

「あたしは魔神に捧げられる魂か!?!」

恐るべきトラップコンボの前に、鈴はもうフラフラだが、それでもツッコミは忘れない。

だが、そんな鈴の気概も東の前には無力だった。

「ウツフツフ〜ッ! さあ、久しぶりの再会を楽しもうじゃないか〜」

ワキワキと指を自在に動かし、ニタリと笑いながら迫る天才科学者

に鈴が悲鳴を上げた。

「ヒイツ!? い、いやあああああッ!」

\*ただいま、束が鈴のひんぬーを堪能しております。しばらくお待ち下さい。

「いやあ、大きいのも良いけど、小さいのもなかなかどうして……  
うえっへっへ……」

「っ……汚された……汚されちゃったよ、一夏あ……」  
さめざめと泣く鈴と、キラリと光る汗を拭う束。何だこの光景。

「えつと……鈴……犬に噛まれたとでも思っ……な？」  
「そんなん思えないわよ!! うう……どうしてこんな……」  
『ていうか、鈴ちゃんって束博士にこんなに気に入られてたっけ?』  
「そういえば……鈴、お前いつからあんなに束さんに……?」  
「中国に戻って代表候補生になったばかりの頃……いきなり呼び出されたのよ……」

『やあやあ、元気にちっパイしてるかな？』

『……………は？』

『東さんは今、中国……………というか鈴々の近くにいるので、すぐに来るよつに』

『はあ！？』

『という事で、ばいばい！』

「……………で、指定された場所に行ったら……………」

「行ったら……………」

「屋台で串焼き食ってた……………あたしのツケで。何か、それ以来あんな感じで……………うう」

「……………」愁傷さま

「そう思うなら、あの人何とかしてよ……………！」

「無理だな。千冬姉ですら、どうにもならないのに……………」

『無理だね。姉さんですら、どうにもならないんだから』

「分かってたわよ、言われるまでもなくねッ！！」

鈴、魂の咆哮であった。

「フフフ……春斗ってば、僕の水着全然褒めてくれないのに……フフフ……アハハ……」  
黒シャルモードの発動が近づき、周囲の生徒がざわめく。  
「こ、怖い！ 怖いよ、シャルロット!？」  
「いけないっ！ 暗黒面に囚われてはいけないわ！！ 帰って来れなくなるわよ!？」  
「え……？ やだなあ、僕は別にそんなコトナイヨ……?」  
「オーラが！ オーラが黒いよ!？」  
「駄目だこいつ、早く何とかしないと!！」

「はあ……はあ……何だ、この状況は？」  
ザバザバと白波を割いて帰ってきたラウラは、砂浜に広がった惨状に首をかしげた。  
「あ、ボーデヴィツヒさんおかえり………て、何持ってるの?」  
「はあ……はあ……カツオだ」  
と言って、引きずっていたカツオを持ち上げて見せた。  
「何処まで泳いできたのよ……」  
「私にも……良く解らん。で、何がどうなって……こんな事に?」  
「うん、しっかりするのは難しいから……順を追って説明するね?」

こうして、自由時間は混乱と混迷の色を見せたまま、グダグダに終わりを告げたのだった。

色々な意味で衝撃的だった時間が終わり、一夏を除く全生徒は温泉を堪能。

そして今は夕食時である。

ちなみに東は「そんじゃ、また明日ね」と、いつの間にかいなくなっていた。

夕食のメニューは刺身と小鍋、山菜の和え物二つ。赤だし味噌汁とお新香。

メニュー自体は平凡だが、そこに使われてる食材は平凡ではない。

その味わいは正しく、料亭クラスだと言えた。

「うん、美味しい！ 流石に本わさは違うな……！」

『カワハギに本山葵か……国立とはいえ、これは贅沢だね……』  
味覚共有でその味を堪能し、春斗も一夏も舌鼓を打つ。

「一夏、本わさって……？」

右隣に座っているシャルロットが、一夏の言葉に首を傾げる。フランス生まれフランス育ちの彼女には、“本わさ”の意味が分からない様だ。

「本わさってのは、本物の山葵を摩り下ろした物のことだよ。一般的に流通しているのは”練わさ”って言って、山葵大根や西洋わさびを着色して、似せた物のことだ」

『ちなみに、山葵大根と西洋わさびはどっちも英名を”ホースラディッシュ”と言い、実は両方同じもの。本山葵はホースラディッシュと同じアブラナ科の植物で、山間部の清流においてのみ栽培できる、貴重な物なんだ。本山葵の天然物なんていったら、超高級品だね』

『へえ……本わさか……凄いなだね』

シャルロットは二人の説明に感嘆の声を漏らした。

「うん、香りが良い……！ これは飯が進んでしまうな……！」

『うん……このツンとした感じは、山葵独特の風味だね』

「……………はむ」

「『……………え？』」

二人は、チラリと見えたシャルロットの動きに眉を顰めた。

彼女が何か、とんでもない動きを見せた気がしたのだ。それを確認

しよつと、シャルロットの膳に視線を送る。

刺身の盛られた皿にあった筍のわさびが 全て消えていた。

「~~~~~っ!？」

そして、シャルロットは鼻を押さえて悶絶した。

「おいおい! ワサビ丸ごといったのか!? 大丈夫か!？」

「ら、らいひょうふ……ふ、ふ……風味があつて……おいひい……よ?」

涙目になりながらも、そう言い切ろうとするシャルロットであったが、強烈な刺激に鼻もズルズルであった。

「……ほら、シャル。顔を向けて?」

「っ……う、うん」

”春斗”は、浴衣の袖口からポケットティッシュを取り出し、シャルロットの鼻を拭いてやる。

「ほら、もうちよつと……これでよし」

「ありがとう……は……っつ、一夏」

「……えっと、ワサビはもう、丸ごといくなよ……シャルロット?」

頬を赤らめるシャルロットに、一夏は背中に突き刺さる気配に耐えながら言っただけだった。

「……………」

さて、視線の送り主たる筍は不機嫌であった。

一夏がこちらに振り返るや、スツと視線を膳に戻す。

(一夏め……私がどういふ想いか知っているのに、どうしてシャル

ロットに優しくする……！？　もしや、これは四角関係というヤツなのか！？)

四角関係の内分けは

一夏　シャルロット　春斗　篝　一夏&春斗　。

「……………あれ？」

一部、おかしい場所があった。言うまでもない自分の場所だ。

(こ、これでは私と春斗がりよ……………両想いになってしまつてはないか……………！！)

辿り着いてしまった違和感の正体に、篝はその全てを胃に流して消してしまつべく、ガツガツと飯を頬張るのだった。

「なあ、セシリア？　そんなに辛いなら、席を移動したらどうだ？　さつきから全然食べてないだろ……………」

「へ、平気……………ですわ……………。こ、この席を取る為に使った労力に比べれば……………これぐらい……………！」

左隣に座るセシリアは、正座にうめいていた。

「労力……………？」

「い、いいえ！　何でもありませんわ！！　い、いただきます……………」  
味噌汁の碗に手を伸ばし、ず、ズズ……………と啜る。

「お、美味しいですわネ……………」

セシリアは引きつった笑みを浮かべた。



「あのなあ……セシリアは……」

「こ、これは私だけの特権ですわ！！ さ、一夏さん。次をお願いします……」

「お、おう……えっと、何が良い？」

きやいきやいと騒がれる中、三箇所から物凄い殺気が立ち上っている。

何処かというのは、説明の必要もない。

『さて……そろそろ来るかな？』

『何が来るんだよ？』

一夏は刺身を、セシリアの口に持っていく。それをセシリアがパクリとした瞬間。

「お前らは静かに食事もできんのか!？」

『ほら来た』

鬼教師、千冬降臨。

しかも、その場所は一夏のすぐ後ろの衾が開かれてだ。

「織斑、オルコット……お前らが騒動の原因か。仲睦まじいのは結構だが……時と場所を選べよ、ガキども」

「コッ……!？」

地獄の鬼すら土下座しそうな迫力で睨まれ、二人はコクコクと頷く。

ピシャン、と衾が閉じられると、全員がプレッシャーからの解放に嘆息した。

「えっと……じゃ、これは返すな？」  
「……………」  
箸を返すと、すっごく膨れられた。正月の切り餅ですらこつも見事に膨れないだろう。

「あ……その代わりに、後で俺の部屋に来てくれるか？」  
「っ……………!？」

そう耳打ちされ、セシリアはまたも目を見開いた。

「そ、それはつまり」

妄想開始

『セシリア、さっきはすまなかったな。皆がいるのも忘れちゃうなんて……………』  
『いいえ。それでその……………っ!?! 一夏さん、何を!?!』  
『何をつて……………そんな事、決まってるじゃないか……………セシリア……………』  
『い、一夏さん……………』  
『ここからは、二人きりの思い出を作ろう……………』  
『ああ、一夏さん……………!』  
『セシリア……………!』  
『一夏さん……………!』  
『セシリア……………!』

( って、この先には何が、待っているというんですのおおおおお  
おおおおおっ!?)

貴族のお嬢様であるセシリアには、これが限界であった。

だが、これはいわゆるチャンスタイム 否、スーパーセシリア  
タイムである事は理解できた。

この機会を、逃す訳にはいかない。

「一夏さんっ!!」

「お、おう!？」

ガシリ、と手を握られ、一夏は思わず引いてしまいそうになる。

「じゅ、準備が色々とありますので……時間をいただけますか……  
!？」

小声で、しかし熱の籠もった声でセシリアが迫る。

「わ、分かった……良いぞ？」

一夏がそう答えると、セシリアは今までの状態が嘘だったかのよう  
に、パクパクと食事を食べ始めた。  
しかも、超ご機嫌だ。

「……………」  
何でそんなにとか、色々思ったりしたものの、一夏は考えても分らないなと思いき直し、自分も食事を再開した。

『ねえ、春斗？』

『何？』

『セシリア……絶対に勘違いしてるよね？』

『ちよつと考えれば分かるだろうにね……一夏に限って、そんな事は全然、全く本気でありえないって事ぐらい……さ』

『……ちよつと、同情しちゃうよ』

とかいう会話がシークレットチャンネル秘匿回線で行われる中、一夏は鍋の下味についてあれこれ思考していた。

「はあ…………温泉、最高だな……………」

『はあ…………混浴だったら尚良し』

「お前、いつか刺されるぞ？」

『大丈夫。絶対に、一夏の方が先だから』

「何でだよ!？」

『さあ? その理由が分からないんじゃないか? ……そう遠くないかもね?』

二人は露天風呂に入っていた。

星空を屋根に、波の音をミュージックにして、貸切状態の温泉を堪能する。

「はあ……良いなあ……すごい贅沢な時間だ……」

「そうだねえ。束さんにみたいな天才にも、やっぱり休息は必要なんだよね」

「そうなんですか?」

「そりゃあ勿論。でも、天才は思考から逃れられないものなんだよ、春るんはその点、思考のオン、オフが出来るからね、ちよつと羨ましく思うよ」

「はあ………は?」

『おおっ!?!』

いつの間にか温泉にもう一人がいた。裸のくせに、何故かうさ耳だけは付けたままの束であった。

「た、束さん………なんで!?!」

『クソッ………相変わらず気配がつかめないな………この人!?!』

「やあやあ二人とも、温泉をたんのーしているかな?」

「……ええ、まあ………それで、なんの用ですか?」

スイスイと寄ってくる束。一夏はスルスルと後ろに下がる。浮力で浮く豊満なものが正直、目の毒だ。

「いやね、ちよつと、春るんと代わってくれるかな? あ、いつ

くんは《海岸》まで降りててね？」

「……………分かった。じゃ、代わりますね」  
少し逡巡し、一夏は春斗と入れ替わった。

「……………で、僕を呼んだのはどうしてですか？」

「いやね、一応確認しておこうと思ってさ……………後、三年を切ったよ？」

「ええ、知ってます」

「確認するけど……………私の作ったMSSが使えるのは、いつくんが18歳 丁度、IS学園を卒業するタイミングまでかな……………それを過ぎたら……………」

束は少しだけ、言いにくそうな素振りを見せる。

「その時は容赦なく、僕を一夏の中から消す……………ですよ？ 覚えていますよ、ちゃんと」

それは一夏も千冬も知らない、二人だけの約束事。

MSSという、一夏の負担が大きいそれを、限界まで使わないようにする為のタイムリミット。

春斗がそう続けると、束はいつもの人を喰ったような笑みとは違う、真逆の表情を見せた。

「正直ね、束さんもそうなって欲しくないんだ。ちーちゃんもいくんも、篝ちゃんも、鈴々もきつと悲しむからね」

「束博士は、そう思わないんですか？」

「私？ うーん、どうなんだろう……………私はそういうの、よく分からないんだよね」

篠ノ之束にとって千冬、一夏、篝、春斗、鈴以外の人間は興味の対象にすらない。

かろうじて両親を認識する程度だ。

天才、鬼才と呼ばれながらその実、束は人間として”致命的な欠陥品”であった。

だから、大切な誰かを失うという事の”意味”は理解できるが、感じる事が出来ない。

だから、これが千冬であったとしてもきつと、今以上に何かを感じる事など出来ないであろう事は、束自身が理解していた。

春斗は精神的部分は普通であるが、肉体的欠陥がある。が、これは徐々にだが克服できる欠陥であった。

束にとって春斗はある意味、自分のなりたい姿であった。理解も、感じることも出来る。同じだけの才能を持っているのに、何故だろうか。

束には理解出来ないが、それは嫉妬に近いものであった。

だから、束は他にするような事が、春斗にはできなかった。

「まあ、ちーちゃん達を泣かせないようにね」

「ッ………!?!」

ざばあっ！ と、温泉から出る。隠す事もしないで晒される裸身は、春斗の目に思いっきり映ってしまった。

「じゃ、また明日ね。おやすみ」

ひらひらと手を振って、束は脱衣場へと消えた。

「……………つく」

不意打ちとはいえ、モロに裸を見てしまった。

束のスタイルは、運動とは無縁とは思えないほどに整っている。そしてその豊かな胸部は、篝以上の代物。

一応健全な男子である以上、特定の反応をしてしまう訳で。

「もうちょっと……………その辺を意識してくれないかなあ……………!？」  
羞恥の欠片も見せない束に、逆に恥ずかしくなってしまう春斗。

これもまた、春斗が束を苦手な理由の一つであったりした。

バシャバシャと湯で顔を洗い、そして見上げる。

「……………タイムリミットか。もう、覚悟はできてますよ……………大丈夫」

その言葉を聞くのは、ただ静かに佇む月のみであった。

第27話 邂逅する、天才二人（後書き）

前書きで目立つと言いながら、全てを束が持っていた毘W

セシリアの活躍（笑）は次回……かな？

ラストのシリアスは、次回には続きませんよ？W W

第28話 終わる、平穩なる時／彼方にて、天使は歌う（前書き）

臨海学校編、折り返し。

ギャグ、カオスもこれでラストです。

第28話 終わる、平穩なる時／彼方にて、天使は歌う

「あゝあ、せつかく織斑君と遊ぼうと思つてたのに……」

「まさか、織斑先生と同じ部屋とは……」

とある一室では、残念だとばかりに部屋に転がる者達がいた。

そこは癒子と本音、そしてセシリアが割り当てられた部屋。

「~~~~」

不満だらだらな面子とは対照的に、セシリアは終始ご機嫌だった。

風呂にシャワーに一回づつ、下着も持つてて良かった勝負下着。しかも、英国王室御用達の名店の品である。

更に香水も軽く振り掛け、準備万端どつからでも掛かってきやがれ！ と、正しく臨戦態勢であつた。

もう彼女の中は、想像の先へと想いを馳せていた。

だから、ちよつと考えれば分かることも分からない。

千冬と同じ部屋で、何をナニするとかそもそももあり得ない、と。

「うわあつ、せつしーがえつちい下着つけてる〜っ！」

「っ……!？」

本音の思わぬ一声に、セシリアは現実へと帰つてきた。どうやら合わせから見えた物を鋭く観察したようだ。

万年半月な瞳の何処に、そんな眼力があるのか不明だが、しかし他

の面子はそんな事は気にしない。

「なんだとっつ！ 脱がせ脱がせーっ！」

「剥け！ 身ぐるみ剥いでしまえっ！！！」

「ちよっ……やめっ……キヤアアアッ！？」

悪ノリ全開で、セシリアは襲い掛かれた。

「おおっ……こいつぁ、エロいな……」

「まさか勝負下着……？ 織斑君の所に行けないのに、そんなのつけちゃうなんて……」

全員が声を揃えて言った。

『セシリアは、エロいなあ〜？』

「エロくありませんわっ！！ これは……そう、レディー淑女としての身だしなみですわっ！」

セシリアは思いつきり反論した。

「イギリスって、身だしなみでそんな、エロい下着つけるんだ〜」  
「いや、さすがに貴族階級とかだけでしょ？ こんなエロいのつけないって……」  
「だよね〜。てか、エロい下着と違って、貴族の人ってどう買うのかな？」  
「が、全員揃ってエロい下着から離れなかった。」

「ですから、エロいところから離れてくださいっ！〜」  
乱れた浴衣を直しつつ、セシリアは叫ぶ。

「あつ、せつしーってば香水も付けてる！」

「何だっ！〜？ ……怪しいわね」

「っ……！〜？」

ギクリ。と、セシリアは体を強張らせる。

「しかもこれ……いつも使ってるのと違うわよね……怪しい」

「あ、怪しくなんてありませんわ！」

「でもでも〜、これってレリエルのナンバーシックスだよね〜？」

と、本音が切れ味鋭いツツコミを入れる。

「レリエルツ！〜？ 一振り十万とかって言われてる、あれ！〜？」

「毎年百個限定で、シリアルナンバー入りなんですよ！〜？ ていうか、なんで分かるのよ！〜？」

「え〜？ この間、たちちに同じの嗅がせてもらったの〜」

ちなみに、たちちんというのは織羽の事である。

忘れがちだが、織羽は社長令嬢。こういった品も手元にやってくるのだ。

「ほほう。これはますます……」

『エロ怪しい……!』

「ですから、何でそこまで”エロ”を付けたがりますの!?!」  
などというセシリアの訴えは、完全に無視される。

今の彼女たちは、一夏と遊べなかつた事で余つたりビドーを、セシリアで解消しようとしているからだ。

「さあさあ、キリキリと吐きなさい……!」

「さあさあ、大人しく嗅がれなさい……!」

「さあさあ、よがり喘ぎなさい……!」

「ひいつ……!?!」

ワキワキと指を動かし、ジリジリと迫る集団にセシリアはあつという間に袋小路へと追い詰められた。

「フフフ……大人しくしていれば痛くしないわよ……?」

「フフフ……大人しくしていれば、天国へと連れて行ってあげるわよ?」

「フフフ……以下略」

「い、いやあああああつ!?!」

どっかの部屋で、椿が落ちた。

「うう……酷い目に遭いましたわ……」

あの後、一体何があったのか。セシリアはフラフラになりながら廊下を歩いていった。

「ですが、この程度……！ 千年恋物語の勝者たる以上、全く堪えませんわーっ！！」

拳を握り締め、天に向かって突き上げる。決して、天に還る訳ではない。

「何、一人で騒いでるのよ？」

「それは勿論、私と一夏さんが 　てえっ！？」

いきなり、正面から掛けられた声に驚く。果たしてそこにいたのは

織羽だった。

棒付きキャンディーを舐めながら、怪訝そうな視線をセシリアに向けていた。

「お、おろはさん……?」

「織羽だって。何で、元ルームメイトの名前間違えるぐらいに動揺してんのよ?」

「ど、どど童謡なんて……歌っていませんわ!??」

「その《どうよう》じゃないっての……」

「そ、そうですかしら……?で、では急ぎますので……!」

これ以上はボロが出ると、セシリアはそそくさとその場を後にする。

「な、何でついて来るんですの……!?!?」

「ん……ヒマだから?」

「でしたら鈴さんと遊んでいなさい! 同じ部屋なのでしょう!?!?」

「いやあ、凰も部屋にいないんだよね」

「なら、さっさとお眠りなさい!」

ずかずかと廊下を進むセシリア。その後ろを、全く苦も無くついて歩く織羽。

非常にマズイ相手に見つかってしまったと、セシリアは内心で己の不覚を呪った。

ジャパニーズニンジャは、その能力ゆえに狙った獲物を決して逃がさないという。

何処に隠れようとも、密室に閉じこもろうとも、何処からか侵入する。

そう、諭えるならば今も生き残る黒き古代生物の如く。

「……なんか、すつごく不本意な事を思われた気がしたんだけど？」  
背中に突き刺さる織羽の視線。どうしてこう、誰もが妙なところだけ鋭く感じるのだろうか。

「っ　！！」  
とにかく振り切らなければ。セシリアはダッシュした。が、忍者たる織羽がその程度で振り切れる筈もない。

「ねー、何処に行くのよ？」

「あなたには関係ない……って、何で普通に天井を走ってますの？」

「だって忍者だし」

「それだけで理由になると!?!」

万有引力を軽く無視する織羽に叫びつつ、セシリアがコーナーを曲がる。

もうゴール＝一夏の部屋はすぐそこだ。なんとしても、そこまでに振り切らなければ。

「イグニッション・ブーストですわああああああああっ!!」  
コーナーの立ち上がり、一気にセシリアが加速する。

「なっ!?!　なんて無駄に速い……!!?!」

織羽が曲がる時には、既にセシリアの背中には彼方であった。

「はあはあ……ぜえ……ぜえ……ふ、振り切りましたわ……！」  
息も絶え絶えになりながら、セシリアがグツと拳を握った。  
さあ後は一夏の部屋に行くだけだと、乱れた髪を直しつつ、足を進めた。

「……………何をしていますの？」  
せつかく辿り着いた一夏の部屋の前には、何時もの面子がいた。  
何時もの面子とは、箒、鈴、シャルロット、ラウラである。ここにセシリアと織羽が加わればパーフェクトである。

「あんたら、何してんのよ？」  
「って、織羽さん！？ どうして此処に!？」  
「いや、行く先なんて簡単に予想できたし……………」  
「くっ……………！ さすがはニンジャ……………汚いですわ……………！」  
セシリアはまだまだ、忍者を甘く見ていたようだ。

「しーっ！ 静かにしなさいっ……………！」  
鈴が騒ぐ二人を諫める。  
よくよく見れば、何故か四人揃ってドアに張り付いている。  
何なのだろうか、セシリアと織羽もドアの向こうに耳を敬ててみた。

（千冬姉、久しぶりだから緊張してる？）

(そんな訳あるか、馬鹿者　っ！？　も、もうちよつと手加減しろ……！)

(はいはい。それじゃ、こっちはどうかな……？)

(っ……！　そ、そこは……やめ……あぁっ……！)

(我慢してよ。すぐに良くなるからさ……)

(ふっ……あぁっ……ッ……！)

(ほら……大分、ほぐれてきたよ……？)

(な、ならそろそろ……)

(しょうがないなあ。じゃあ、ここからが本番……)

「……な、何をしていますの……！？」

セシリアは室内で行われている何かに、顔が赤らんでしまう。表情筋がつつたのだろうか、ヒクヒクと痙攣が止まらない。

対して、篝、鈴、シャルロット、ラウラの表情は暗かった。

「うーん、これはまさか……ナニをナニしちやってるのかな？」

なんて……悪かったわよ、そんな涙目で睨まないでよ

全員が一樣に睨んでくるので、織羽はすぐに引いた。

そんな事ある筈無いのだが、実際に耳にしてしまうと、否定し難いものだ。

鈴とシャルロット、ラウラには、シークレットチャンネル秘匿回線という事実確認の手段もあるのだが、それは出来なかった。

何故なら、それをしてもし

「ああ、今姉さんと一夏が(以下検閲により削除)だから」

などと答えられた日には痛烈過ぎる。

いや、それだけならいい。もし感覚共有で（以下検閲により削除）  
などとなった日には、全員纏めてバーボンハウス行きだ。

恋する乙女達にとって、真実を知ることは何よりも恐ろしい事だったりする。

（じゃあ、いくよ）

（……一夏、ちょっと待て）

「……あれ？」  
いきなり声がしなくなった。織羽を除く面々は、更にドアに密着する。

ズドンッ！！

『フギヤアアアッ!?!?』

まるで尻尾を踏まれた猫のような悲鳴を、五人が上げた。  
ドアがいきなりブツ叩かれ、その音と衝撃が襲ってきたからだ。

「まさかあれは………発勁っ!?!?」

発勁とは、衝撃を正しく打ち込む為の方法であり、中国拳法では一

一般的な理論である。  
骨格ではなく、筋肉による正しい打法。それが発勁。

ドアがガチャリと開き、そこには羅刹教師千冬が立っていた。

「ほう、人の部屋の前で何をのたうち回っている、貴様ら……。丁度良い。全員、部屋に入れ」

耳と頭を押さえてのたうち苦しむ面々に、冷酷に告げる。聞いた者によつては死刑宣告にすら等しいであろう。

「じゃ、あたしはこれで……」

「待て、辰守。お前もだ」

「ええ〜っ?」

不満アリアリだが、しかし逃げることも出来ない。既に襟首を掴まれているからだ。

「お、やっと来たかセシリア。ほら、此処に横になれよ」と言つて、一夏はポンポンと布団を叩く。

「えっ……でも、その……ほ、他の方がいらつしやいますしチラチラと六人を見ながら、消えそうな声で言うセシリア。」

「……マッサージされるの、恥ずかしいのか?」

「ええ、それはも………は? マッサー……ジ……?」

「おう、マッサージだ。結構上手いんだぞ、俺」

しれつと言う一夏に、セシリアは目を瞬かせ、やがてガックリと肩を落とした。

『セシリアは、エロいなあ〜?』

何故か、この場に居ない筈の面々の声が聞こえた気がした。

『ねえ、春斗？　もしかして中でやってたのって……マッサージだったの？』

『シャル……何を想像してたのかな？』

『そ、それは……その……えっと』

『ふうん。シャルはそんな事想像しちゃう子だったんだ……へえ……』

……』

『そ、そんな事なんて想像してないよ！？』

『そんな事って何？　僕は具体的な事は言っていないよ？』

『っ……！！？　春斗の意地悪……！！』

なんてやり取りも、並行してあったりした。

「どうだセシリア？　痛くないか？」

「え、ええ……大丈夫ですわ……うふう……」  
最初は落胆気味だったセシリアであったが、いざマッサージが始まると、それも消えてしまっていた。  
一夏は俯せになった体にバスタオルを掛け、もみ返しが起こらないように、さするようにして背中全体をほぐす。  
そして温まったところで掌から指へと、徐々にピンポイントで圧力を掛けていく。

「腰のコリが酷いな……何かやってるのか？」

「嗜み程度ですがヴァイオリンを……あ、その辺り少し痛いです」

「っと、じゃあ、指圧じゃない方が良いか……」

指から掌に変えて、面での圧力を掛けてゆっくりと解していく。

心地良い感じに、つついウトウトとしてしまう。

グワシッ!!

「っ　!?!」

突如として臀部を鷲掴みにされ、セシリアの意識が一気に覚醒する。  
まさか一夏が!?!　こんな人目をはばからず、余りにも大胆な!?!

「い、一夏さ　」

そんな思いで、セシリアが振り返った。

「……………ふっ」

イタズラが成功したと、ニタリと笑う千冬がいた。

しかも、凍りついたセシリアに対し更なる追い打ちをかける。浴衣を思いつき捲り上げたのだ。

「キヤアアアッ!?!」

「おーおー、マセガキめ。何を期待していたんだ？」

千冬は いや、千冬だけではない。一夏を除く全員が、それを見た。

「うわあっ……エロい」

「こんな下着……見たことないわ」

「というか、売っているのか……こんな物が!？」

「両方とも紐結びか。クラリッサの言っていた”勝負下着”という代物か？」

「黒のレース……はあ……こういうの、やっぱりないとダメなのかな……？」

まじまじとそれを見やり、思い思いの感想を口にする。なんという晒し者であろうか。

「……………」

『えっと……どんまい?』

一夏は顔を赤くして、「見てしまいました」的な反応を見せ、春斗は届かないまでも、セシリアを慰めた。

「教師の前で淫行を期待するなよ、15歳？」  
そして、千冬が止めを刺した。

「わ、私の純情がああああ……………!!」

その日、一人の少女の純情が 死んだ。

セシリアへのマッサージを終えると、一夏の額や背には汗がじんわりを浮かんでいた。

「しっかし、二人もやると汗を掻くな……」

「手を抜かないからだ。もう少し、要領良くやる事を覚えろ」

「それは、時間割いてくれた相手に失礼だろ？」

「愚直だな。お前はもう一度、風呂に入ってこい。部屋を汗臭くされたら敵わん」

「そうだな……じゃ、そうする」

一夏はタオルと着替えを持ち、大浴場へと向かった。

\*男の入浴シーンを二度も書く気はありません。なので、キングクリーム飛ばしませ<sup>ズ</sup>す。

一夏が部屋に帰ってくると、丁度何時もの面子が出てくるところであつた。



「あはは……、皆すごいねえ」  
と、シャルロット。

「俺が風呂に行っている間に何があったんだ……？」

「うん……ちよつと色々ど、ね……？」

よかった、シャルロットはいつも通りだ。と、一夏は安堵した。

『春斗。これから先は本当の全力で攻めるから……覚悟しておいて  
ね？』

『は……！？』

しかし、そんな事あ無かった。

そして等。

「一夏、私は誰にも負けない。我俣に行くこと決めたのだから……  
？」

「じゃ、色々がんばってね……織斑君？」

最後に織羽がポンポン、と肩を叩いて去っていった。

「千冬姉……あいつらに何か言ったな？」

「さあてな。知ったところで意味はないさ」

千冬はそう答えて、都合四本目のビールを飲み干したのだった。

翌日。

臨海学校二日目は、丸一日を使って各種装備運用とデータ取りが行われる。

特に専用機持ちには、多くの装備が用意されている。

それらのデータは今後のIS開発に利用される為、細かいデータ収集が義務付けられていた。

運用試験に使われる場所は四方を切り立った崖に囲まれたビーチ。

形がドーム状であり、どこか学園のアリーナを思わせるなど、一夏は思った。

千冬達教師の指示で、一年生の各班が振り分けられた装備データ収集のための準備に入る。

そして専用機持ち組は、別個で国から届けられた装備のデータ取り

である。

千冬の前には一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの姿があった。

だが、織羽ともう一人　四組の専用機持ちである、更識簪の姿がなかった。

「さて……辰守と更識が遅刻か……更識は仕方ないとして……全く」

「はいはい！　辰守織羽、ここにいまーすっ！！」

と、崖の上に立つ人影。大声で宣言するや、いきなりビーチへとジャンプした。

「ひゃああああ……っ!？」

ドオオオンツ！　と、間の抜けた悲鳴と共に砂煙を上げて着地した織羽は、見上げるほどの高さから飛んだにも拘らず、あっさりと立ち上がった。

「辰守、遅刻とはいいい度胸だな？」

「すみません。これを捕まえるのに時間がかかりました」と言っ、担いでいた物を見せる。

それは、一見すると芋虫のようであった。

だが芋虫にしてはデカイ。そしてロープでグルグル巻きにされている。

「芋虫……?」

「いや、蛹かもしれんぞ？」

「蛹は動かないでしょ……」

「ということ、辰守織羽と更識簪、到着しました!!」

「うう……せ、世界が揺れる……」  
どうやら、芋虫の正体は簪のようである。

「態々連れてきたのか。素晴らしい友情だな、感動的だ。だが、遅刻だ」

「うはあ……」

千冬の容赦なき宣告に織羽は、簪を縛ったロープを解きつつ、「やっぱりな〜」といった顔をした。

「では、罰代わりだ。二人とも、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「えっと……コアは宇宙空間における相互位置情報交換の為に設けられたデータ通信ネットワークを持っていて、これは今は開放回線オープンチャンネルや、個人回線などの操縦者同士の会話などに用いられています」

「それ以外にも、『非限定情報共有』をISコア同士が独自に行わい……結果、様々な情報を……自己進化の為の糧として吸収……これは、製作者である篠ノ之博士が自己発達の一环として、無制限展開を許可した為で……今もその進化の途中にあり、全容は掴めていません……」

二人がそう答えると、千冬は「よし」と言って頷いた。

「そう、そのとー……りっ……!」

「バカが来たか……」

呆れ気味に言う千冬。そして一夏達を含め、全員がその襲来に備えた。

そして。

ポオオオオオオオオオッ！！

「キヤアアアアアッ！！」

ビーチが爆発した。砂浜からあの金属人参がズドーン、と生えてきた。

「あいつめ……またあんな登場を……」

千冬が頭を抱えた。

「本当にね。あんな登場は二度やっても面白く無いのに」

隣に立つ束も、あれは頂けないと頷いた。

「なら、お前はどんな登場をする気だ？」

「そうだね。意外と普通に出てきたり？」

「……うおおおっ！？」「」「」

一夏達は驚きの声を上げた。

何故かといえば、普通に束がそこに居たからだ。

流石の千冬も、目を見開いてしまっている。

「やったね、大成功」

束は手を叩いて、作戦成功を心から喜び、はしゃいでいる。

ゴンッ！！

その頭に制裁が行われたのは、きっと仕方ない事だ。

「じゃあ、紅椿の性能テストしようか。篝ちゃん、ISを展開してくれるかな？」  
頭にでっかいコブを作り、束は空間投影モニターを出した。

「……来い、紅椿！」

箒は左手首に身に付けられた一対の鈴　　紅椿の待機形態に呼び掛けた。

リン、と小さく鳴り響くと、それは紅い光と共に量子変換されたISを展開させた。

「最初は飛行テスト。一気に上空まで上がって、自由に動いてみて？」

「っ……！」

箒が飛行イメージを与えると、紅椿は一気に飛翔する。

「なっ……！」

「なんてスピード……！？？」

あっという間に大空へと昇ってしまう。その凄まじい加速力に、全員が驚きの声を上げた。

加速、減速、旋回、上昇、下降。

その一つひとつを確かめるように、空を飛び回る箒。

「どう？　箒ちゃんが思ってる以上に動けるでしょう？」

「え、ええ……確かに」

オープンチャンネル  
開放回線に箒の、若干戸惑い気味の声が届く。

「じゃあ、今度は武装ね。ISと一緒に展開されている刀、雨月と空裂だよ。武器特性は雨月は対単一仕様武装で、打突に合わせてエネルギー刃を連続発射。射程はアサルトライフルぐらい」

箒は右の刃　　雨月を空に向かって突き出した。と、刃から放たれた紅い光刃が白雲を撃ち抜いた。

「空裂は集団戦闘用だよ。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるの。しかも、振った範囲に自動で展開されちゃうから超便利！　てな訳で、これを全部打ち落としてみよう！！」

などと言って束は、いきなり16連装ミサイルポッドを呼び出した。

「発射っっ！」

そして容赦なく、箒に向けて全弾発射。

「フッ！！」

箒が空裂を一回転するように振るうと、紅い光刃が帯状に展開させて、全てを斬り落としてみせた。

連鎖する爆発。青空に咲いた大輪の紅蓮華の中で、箒はその圧倒的な力に目を見張っていた。

凄まじい力。なんとという万能感。これだけで、何事でも成せてしまいそうな気になってしまう。

『どうどう？　これが箒ちゃん専用機だよ！？　量産型にプログラムを入れただけの出来損ないとは違うんだよっ！！』

「っ……！！？」

が、束の発した言葉に、箒の逆上せそうになっていた頭が冷える。

「……姉さん。確かにこの紅椿は凄いです。でも……真打鉄は私の

……”最初の専用機”ですから」

『……？』

想いを通す一助となり、箒の道標となったIS。

性能ではない。能力ではない。込められた想いが、それこそが

箒の専用機”真打鉄”なのだ。

(紅椿……お前は、私の想いを通す一助となってくれるか？ 真打鉄のようにな……)

心の中でそう問いかけるが、紅椿は応えなかった。

地上へと戻ってきた篤は、束から驚くべき事を聞かされた。

「この紅椿は、展開装甲によって『パッケージ換装をしない万能機』になっている訳。つまり、これは第四世代ISなのだよ。えっへん」  
まるで、『100点を取ったテストの答案用紙を見せる子供』の如く言う束に、一同は啞然とした。

何せその一言は、世界中の第三世代開発の流れを、無駄だと言っているのに等しいからだ。

「ちなみに、白式の雪片にもそれが使われているんだけど……その顔は知っていたな？」

束がジト目になって一夏に尋ねる。

「えっと……零落白夜を使う時に動くあれがそうですよね？」

「むう……春るんだな、教えたのは。ま、いつか。雪片には試験的に入れてただけだけど、紅椿には全身のアーマーに使ってみました！システム最大稼動時には、スペックデータは更に倍ブツシュだっつ！」

「……………」

「しかも、紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃、防御、機動と用途に応じて切り替え可能。これこそ第四世代の目標である即時万能対応機だよ！！リアルタイム・マルチロール・アクトレス 流石、束さんは凄いぜ！！」  
自慢気にVサインする束だったが、正直、誰もがついて行けなかった。

『うーん……全身に、か…………』

一人、春斗だけが何かに頭を抱えていた。

「束……やり過ぎるなと言っただろう？」

千冬は呆れと、それ以上に諦め気味に嘆息した。

が、束はそれが不満だったようだ。ありありと「超不満！」だと顔に書いてあった。

「えっつ！？ だって、第三世代ISなんて二年前に春るんが”武竜”を設計した時点で終わってるのに？」

『っ……………！？』

その一言に、春斗はギクリとした。

「武竜……だと？」

初めて聞いた言葉に、千冬の視線が鋭く細まる。

その行き先は 一夏の中の春斗だ。

「武竜は今”ラファールドラグーン”なんて呼ばれて、フランスが自分の所のISだっ、とか言っちゃてるヤツだよ？」  
更に束がぶっちやけた。

幸いにして、他の生徒達はそれぞれにバラけている為、それを聞いたのはこの場にいる面子だけである。

「シャルロットさん、どういう事ですの……?」

「R・ドラグーンは……フランスが作った物ではないのか……?」  
同じ欧州連合組の二人がシャルロットに詰め寄る。

「うん。R・ドラグーンは春斗が設計した……曰く、最強の第三世代ISなんだよ。あ、これはオフレコにしてね?」  
が、あっさりシャルロットはそれを認めた。

思いつきり国家情報の漏洩であるが、それをバラすような人間が此処に居ない事は、彼女も充分に承知していたからこそだ。

それに、R・ドラグーンは春斗から託された物で、盗用された物ではないのだから、そこに違法性はない。

発覚してもせいぜい、ヒューイック博士が批難されるぐらいだ。

「ちょっと待て。それは本当なのか?」

と、ここで割って入った者がいた。篠ノ之箒である。

「フランスの第三世代機が……春斗の設計した物だと……?」

これは聞き捨てならないと、箒が詰め寄る。

「そうだよ? R・ドラグーンは、春斗が僕に託してくれた……彼の”夢”で”彼の翼”なんだ」

ニッコリと、見る者全てを魅了するかのようなスマイルを浮かべて、箒に答えた。

なのに、もの凄く寒いのは何でだろうか。

「……一夏、春斗を呼べ」

「ほ、箒さん……?」

「さっさと呼べ」

「あ、白式のフラグメントマップも見たいから、展開よろしくね」

凄む筈と、マイペース一直線の束。  
そして、すつごくニコニコとしているシャルロット。

『春斗……覚悟を決めるよ?』

『……何でこうなった?』

一夏は白式を呼び出し、束は早速フラグメントマップを確認する。  
「ふんふん……これはまた、不思議なマップを構成しているね。」  
見たことないパターン……うわ、展開装甲も随分と書き換えられている……!?!」

「さて春斗……私に何か、言う事があるのではないか?」

「春斗、ハッキリ言っただけあげるのも、きつと優しさだよ?」

「……いや、そう言われてもなあ……」

「春斗。私には専用機を作れないのに、どうしてシャルロットには用意したんだ?」

「いや、僕は設計しただけだし……ていうか、それ一年以上前の話だよ!?!」

「そんな事は関係ないっ!」

「そうだよ。春斗は僕を選んだんだから、諦めてよ」

「ちよつとシャルさん!?!」

「う〜ん……ワンオフアピリテイ単一仕様能力もちよこちよこ書き換わってるねえ〜。

むむむ……これはおもしろい……!」

「束博士え!?!」

睨み合い、火花を散らす筈とシャルロット。束は一切関知せず、フラグメントマップにご執心。

「納得できん! 何故、春斗が設計したISをフランスが作っている!?!」

「そんな理由まで教える気はないよ。いいじゃない、筈には篠ノ之博士が作った紅椿があるんだから。R-ドラグーンは僕がちゃんと

使うから、心配しなくて良いよ?」

「あ、あの……喧嘩はちよっと……」

「春斗、武竜について……後でゆっくりと聞かせてもらおうぞ?」

更に千冬からの宣告を受けて、春斗は深々と溜め息を吐いた。

「……不幸だ」

「じゃ、今度は裏白式だね……あ、そのままでもいいよ」

と、束はそのまま裏白式のフラグメントマップを確認する。

「こっちは、どれくらい使ってるのかな?」

「えっと……殆ど使ってないですけど……何ですか?」

「いや、こっちも随分、面白い形になってるな〜って。ふむふむ…

…」

細かく見ている束に、千冬はある事を思い出した。

「束。裏白式について教えてもらおうか?」

そう。以前、裏白式について教えると、束は言っていた。ここを外すと、次に聞けるのは何時になるか不明だ。

「ん〜、別にそう特別な事じゃないんだけどね〜。ただ単に、白式と裏白式は【コンセプトの違う、二機の同型IS】ってだけだし…

…」

「……何だと?」

「つまり、白式と裏白式はそれぞれ別のISなんだよ。それで片方が起動すると、もう片方も準起動状態に入り、二機が状況によって入れ替わるようになってるんだよ」

「……」

事も無げに言う束に、睨み合いをしていた篤とシャルロットも言葉を止めてしまっていた。

「二機のIS……まさか、コアもか？」

「そうだよ。でもでも、裏白式に積んでるのは……まあ、色々あれなコアだったりするんだけどね」

「あれ……？」

「そつ。あ・れ・な・コアだよ。よし、チェック確認完了つと。いいよ、もう」

束がコンソールを消し、一夏も白式を戻した。

いきなりぶつちやけられた裏白式の秘密だったが、一同にはそれを追求する時間など無かった。

「織斑先生っ！ た、大変ですっ！！」

真耶が大慌てで走ってくる。

「どうした？」

「こ、これを……！！」

真耶から渡された小型端末を見て、千冬が眉をひそめる。

「【特命任務レベルA。現時刻から対策を始められたし】……だと？」

千冬はすぐに、真耶に言葉　　そして軍用なのだろうか、手話での指示に切り替える。

「織羽……あれって……」

「うん。ちよっとマズイ事態ね……」

と、簪は不安気に、織羽は何時もと違って厳しい表情を見せた。

どうやら、あの手話の意味が分かるらしい。

真耶が何処かへと走っていき、千冬が回線を使って全生徒に呼び掛ける。

「全員注目ッ！！　これより学園教員は特殊作戦行動に入る。本日の予定は全部中止。全員、速やかにISを片付けた後、旅館へと戻り、指示があるまで各々の部屋で待機。これを破った者は身柄を拘束する、以上だ！！」

いきなり過ぎる指示に戸惑いざわめく生徒達。が、そんな時間も惜しいと更に千冬が一喝する。

「さっさと作業に移れ！！」

「……は、はいっ！！」「……」

生徒達は怒号に怯え、慌てて片付けに移行した。

「織斑、篠ノ之、オルコット、ボーデヴィツヒ、デユノア、凰、辰守、更識。以上、八名は私と共に来い」

名を呼ばれた者達　　専用機持ち達は、千冬の後続に続いた。



時は、特命任務レベルAが来る少し前。

「La」

太平洋上を、高速で飛ぶ者があつた。

歌うような電子音声を響かせて、白雲をはじき飛ばして舞い踊る、

銀色の天使。

『クソっ……！ 駄目だ、振り切られる……！！』

追いつがるように飛ぶ音速戦闘機。だが、それはあっさりとレーダー外へと消えてしまった。

『こちらステイル1。』  
【銀の福音】シルバリオ・ゴスベルを見失った……帰投する』

旋回し、戦闘機は戻って行く。

超音速で飛行する空の王者ISの前に、只の戦闘機など競争相手にもならなかった。

シルバリオ・ゴスベル  
銀の福音は歌う。

天に、海に、風に、自由なる空に。

操縦者の意思でさえ、止められないままに。

第28話 終わる、平穩なる時／彼方にて、天使は歌う（後書き）

ついにこの時がきました。

福音登場で、シリアス一直線です。

三巻の話が終わったら、設定なんかを公開したいですね。

第29話 VSシルバリオ・ゴスペル／蒼海に破壊の鐘は響く（前書き）

銀の福音戦。

色々、原作と違う点や独自解釈ありなのでご注意ください。

## 第29話 VS シルバリオ・ゴスペル / 蒼海に破壊の鐘は響く

花月荘の大座敷【風花の間】に設けられた作戦室。

そこに集められた、学園所属の専用機持ち八人。

薄暗い部屋の中央には、大型空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代機【銀の福音】シルバリオ・ゴスペルが、制御下を離れ暴走。監視空域から離脱したと報告があつた。衛星による追跡の結果、福音はここから2?先の海上を通過することが分かつた。学園上層部からの通達で、この件は我々が対処することになつた」

千冬の言葉に、一夏、箒、簪は驚きと不安の表情を見せる。そしてセシリア、鈴、ラウラ、シャルロット、織羽の五名は今までにない真剣な表情を見せていた。

特にラウラは現役の軍人でもある。こういった有事に対する心構えは特に強い。

「では作戦会議を始める。意見のある者は挙手しろ」

千冬が作戦会議の開始を告げると早速、セシリアが挙手した。

「はい。目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「分かつた。ただしこれはニヶ国の最重要軍事機密だ。漏洩した場合、査問委員会による裁判と最低二年の監視が付けられる。良いな?」

「了解しました」

そうして明かされたIS【シルバリオ・ゴスペル銀の福音】のデータ。

『これは……またとんでもない物を作ったものだね』

『すまん。俺にはいまいちよく分からない。解説してくれ』

『そうだね……この銀の福音は、シルバリオ・ゴスヘル広域殲滅を目的に開発されているのが特徴だね。広域殲滅型特殊兵装との一体型スラスタール翼……スベックは甲龍よりも上だし、これを止めるのはかなり難しいね……』

『特殊兵装？ このウイングがか？』

『このスラスタール翼に砲門が装備されていて、エネルギー弾をあらゆる角度で発射する仕組みなんだよ』

『どうして分かるんだ？』

『いや、武竜にも多方向射撃武装を装備しようとした事があってね

……止めたけど』

『何で？』

『武竜に付ける意味がなかったから……と、話が逸れたね。広域射撃武装によるオールレンジ攻撃、回避は極めて困難だ。更に格闘戦におけるデータが無い。正直、もっと情報が欲しいね』

『ちょっと春斗。あんたは何か無いの？』

『義兄上、技術者としての視点から意見をお願いします』

「……織斑、何かあるか？」

鈴、ラウラ、千冬が揃って一夏に視線を送る。

どうやら一夏に説明している間に色々話し合っていたらしい。

「えっと……そうだ、偵察とかがって行えないんですか？ このスラスタール翼の威力とか知りたいし……」

「残念だが相手は超音速、最高速度は2450キロをこえたとある。偵察は無理だな」

「というか一夏、何故スラスタール翼の”威力”なのだ？」

篤が疑問を口にした。

「だって、これが多方向攻撃武装なんだろう？」

「………は？」

「だからこれが……ッ!？」

『バカ……』

一夏は気づいて口を閉じた。が、遅かった。どうやら、そこまでの話は出ていなかったらしい。

『裏白式の秘匿回線から、シークレットチャンネル 開放回線にハック。通信回線確保』

『それは、僕から説明するよ』

「って、また回線に割り込みされた!？」

真耶が開放回線からした声に悲鳴を上げた。オープンチャンネル

ここに使われているセキュリティは、学園と同レベルのものだ。

こうもあっさりと割り込まれる筈がないのに、しかしこうして現実割りこまれている。

この度に、学園では対策会議をする事になり、真耶の仕事は更に増えたりする。

閑話休題。

「春斗、ここは部外者禁止だ」

『まあまあ。技術者サイドの意見も必要かなって?』

「……いいだろう。ただし、ここでの事は口外無用だ。良いな?」  
『了解』

一応、千冬も無駄と分かりながらも告げる。何せ、一夏がここにいるのだから禁止など出来ないし、そもそも春斗は専用機持ちなのだ。だが表向きとはいえ、言う事は言わなければならない。

『この銀の福音の武装は、シルバリオ・ゴスベル スラスターとの一体型。おそらくウイング自体が複数の砲門の役割を兼ねていて、龍咆のようにかかりの角

度に攻撃できる。それが多方向射撃って事……そうだろう、一夏？

「そ、そういう事だ……！ いや、さすがは春斗！ 俺の言いたい事を言ってくれるなあ。はは……ははは……」

「龍咆と同じ、射角制限なしって事なの？」

鈴の間に春斗は首を振った。

「いいや。実際は龍咆よりもずっと厄介だ。龍咆は”攻撃可能範囲は大きい”けど”攻撃範囲は狭い”。でもこれは”攻撃可能範囲も攻撃範囲自体も広い”んだ。甲龍の射角は鈴ちゃんの正面、左右上下に約170度の範囲。でも銀の福音の射角は計算上、227度ある」

「……ウイングの形状と、稼働範囲がその秘密ね？」

今まで黙っていた織羽が、ポツリと言う。

「その通り。非固定部位アンロックユニットだったら、手が付けられなかったかもね」

「……で、春斗。どうやって対応する？」

「そうだね……R ドラグーンなら対処出来る相手なんだけど……まだ完成していないしね。姉さん、福音との接触可能回数は？」

「アプローチは一回が限度だろうな」

「なら、狙うは一撃必殺か。順当に考えるなら、零落白夜を持つ白式がアタッカー。移動にはブルー・ティアーズの高機動パッケージ【ストライク・ガンナー】を使って……出来るのはこれくらいだね？」

「っ……！？ ど、どうしてブルー・ティアーズのパッケージの事を……！？」

「それはもう……仮にも天才ですから」

「……天才という人種は皆、そういう事を言うものなんです……？」

パッケージとは、IS用換装装備の総称である。これは武装だけでなく、増設スラストや追加装甲なども含まれる。

この他、【オートチュール】という、専用機専用機能特化パッケ

ージも存在する。

簪、シャルロットを除く全員の専用機は、セミカスタムの標準装備。  
シャルロットは機体をフルカスタムした上で、標準装備。  
デフォルト

簪のIS【打鉄式式】は、未だ完成していない機体であり、完全な  
デフォルト  
標準装備である。

「俺が、アタッカーか……」

『一撃必殺という条件に当てはまるのは、零落白夜と月華白麗があるけど……超音速の相手に月華白麗を当てるのは困難だ。零落白夜しかないよ』

「これは実戦だ。覚悟がないなら無理強いはしない」

「まさか。覚悟なら……出来るさ」

千冬言葉に一夏がきっぱりと答える。

「オルコット。超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二十時間ですわ」

「なら、適任だな……では、早速」

「ちょっと待った！ 待ったなのだよ、ちーちゃんっ!!」

いきなり天井が開き、逆さまに覗き込んでくる顔があった。世界一の天才、篠ノ之束である。

「もっと良い作戦が今正に、私の頭の中にナウ・プリンティングなのだよ!!」

「よし分かった。すぐ帰れ」

「いや〜ん、ちーちゃん冷たいよ〜！ とっつ」

束は眉を八の字にして、笑いながら天井裏から降りてきた。

「お前は人の話を聞いていたのか？ 帰れ、今すぐに」

「まあまあ。春るんもいるんだし、いいじゃない。それよりも、ここは断然、紅椿の出番なのだよっ！！」

「紅椿の……？」

「そう、そのとおり！！」

束の言葉に筭が驚く。と、束はキラーンと、目を光らせた。

「さつきも説明したけど、紅椿に使われている展開装甲は即時万能リアルタイムマルチ対応機を目指してつくった物だよ。だから、この展開装甲をちよいちよいと弄ってしまえば、超音速での飛行なんて、ビフォア・ブレスックファーストなのだ！！」

いつの間にか中央のモニターには紅椿のスペックデータが出現していた。

「ていうか、こんな事に気付かない春るんじゃないと思うんだけどな。どうして黙っていたのかな？」

ニツコリと笑いなから、しかしどこか、薄ら寒い気配を感じてしまう。

紅椿に絶対の自信を持っているからこそ、あえてそれを外した春斗に不満を感じているのだろうか。

「……確かに、”紅椿のスペック”なら十二分にやれると思います。でも、戦闘は性能だけで決まるものじゃない。訓練時間のあるセシリアさんと、今日性能テストをしただけのほーちゃんとじゃ、比べるべくも無いですよ」

「へえ。春るん筭ちゃんのこと、信じてないんだ？」

『個人の感情と分析結果を一緒くたにするのは、愚行ですから』

「でも、ブルー・ティアーズのパッケージはまだ、インストールされてないんじゃないかな？ どうなの、その金髪ロール」

「き、金髪口……わ、私はセシリア・オルコットという名前が……」

「うっさいよ。君は私の興味の範疇にないの。それともあれかな？ 君は私の知り合いか何かなのかな？ そうじゃないでしょ？ だ

「つたら聞かれたことだけに答えればいいんだよ。全く、これだから金髪は……」  
いきなり辛辣な言葉を連続して叩きつけられ、セシリアは唾然としてしまった。

東のセシリアを見る目は、路傍の石を見る方がまだ、興味があるだろうという程に冷たいものだった。

『えっと、気にしない方が良いよ？ その人が興味ある人間なんて地球人口の十億分の一ぐらいしかないし。それで、パッケージのインストールは？』

「そ、それはまだ……終わってませんけど」

「ほーら、ダメじゃん。ちなみに、紅椿の調整は七分あれば終わっちゃうよ」

「……ならば、本作戰は織斑、篠ノ之両名による目標追跡、及び墜を目的とする。作戦開始は三十分後だ」

『姉さん！？ 訓練無しで高速戦闘なんて無茶だ！！』

春斗は異を唱えるが、それに待ったをかける者があった。

「待ってくれ、春斗」

『ほーちゃん……！！？』

「心配してくれるのはありがたいが……大丈夫だ。私はやれる、やってみせるさ……！！」

『でも……』

「それに、訓練していないのは一夏も同じだ。それとも、一夏は信じられるのに、私は信じられないのか？」

『別に一夏は選択肢がないから、何とかさせるだけだし』

「おいこら」

『でも、ほーちゃんは違う。ISの操縦時間も圧倒的に足りない。それこそ、ISの性能だけで戦う事になる……それはとても危険な事だ』

「……確かに、紅椿はさっき動かしたただけしか経験がない。だから

こそ、私はISの性能だけで戦うつもりはないぞ?」

『え…………?』

箒は待機形態の紅椿にそつと触れる。

「私は私の想いで戦う。その大切さを、春斗と真打鉄が教えてくれたのだ…………だから、大丈夫だ」

『……………分かった。一夏、何があつてもほーちゃんを守るようにね』

「いや、俺の心配はないのかよ?」

『無いよ?』

「あゝ、そう言つと思つたよ……………つたく、本当に箒が好きだよな、お前」

一夏が予想通りの返しにため息混じりに言う。

「つ……………!?!?」

『そんなの当たり前じゃないか。今更、何を言ってるのさ』

そして春斗はしれつと返す。

「つ……………!?!?!?」

箒はすっかり顔が赤くなってしまい、口をパクパクとさせてしまっている。

「あゝ、あんた達、そろそろ移動するわよ? 時間が惜しいんだから」

「鈴々の言う通り、時間も勿体無いし……………何より、これ以上は束さんの後ろの凄い気配が、もっと凄い気配に変わりそうなんだよね? ということで、さあさあ! 箒ちゃんも外へ出ようね。ここじゃ狭いから……………」

鈴はこの流れに諦めを感じつつ、そして束は初めて感じる戦慄に珍しく顔を引き攣らせて、それぞれ三人を追い立てるように外へと連れ出した。

「はいはい。デュノアちゃんも、もうちょっと落ち着こうね?」

「エ……………ナンノコトカナ……………」

ちなみに、東の後ろにはダークオーラ全開のシャルロットが居たりした。  
暗黒面に墮ちるのも、時間の問題なのかも知れない。

東が移動ラボ【名前はまだ無い吾輩は猫である】によって、紅椿の調整を行い、それと同時にセシリアから高速戦闘についてのレクチャーを受けた。

高速戦闘用高精度ハイパーセンサーの説明、高速戦闘時のブースト使用の注意点、射撃武装に対する警戒などだ。

東はISの調整を終えると、ふらりと姿を消してしまった。

こうして迎えた、作戦開始時刻10分前。  
砂浜に立つのは一夏と篝のみ。他のメンバーは全員、風花の間  
作戦室に待機している。

二人も既にISを展開し、その時を待っていた。人気の全く無い海

岸に、波と風の音だけが響き続ける。

「そろそろだな……」

「ああ、そうだな……」

二人は並び、その音に耳を傾けていた。

『では二人とも、準備は』

『しっかしあれだねえ。海で暴走って言うと、”白騎士事件”を思い出すねえ』

『また割り込み！？』

今度は束が回線に割り込みをかける。

「白騎士事件……十年前に起こった、あの……？」

『全くバカだよ。私の才能は信じないくせに、神様は信じてるなんて、偶像崇拜もいいところだよ。束さんはちゃんと実像なのにな』

白騎士事件。

篠ノ之束がISを発表してから一ヶ月後に起こった、おそらく世界で知らない者はいないであろう大事件。

束はISを、『全ての現行兵器を凌駕する』と大々的に発表した。だが、世界はそれを信じなかった。信じる事など出来なかった。

何故なら、軍需産業は大国の要であり、ISの登場はそれら全ての瓦解を呼ぶ可能性を孕んでいたからだ。

そして、一ヶ月後それは起こった。

日本に対してミサイル攻撃可能な12の国の軍事ネットワークがハッキングされ、それによって2341発ものミサイルが制御不能となり 発射された。

絶望の最中、現れたのは　　白銀の騎士。  
それこそ、世界初のIS【白騎士】であった。

白騎士は迫り来る1221発のミサイルを、超音速で飛翔して手にした剣で全て両断。

更に遠距離の物は、呼び出した大型荷電粒子砲で全て薙ぎ払った。

超音速飛行。その状態のままの格闘戦。量子変換による大質量物の召喚。そしてビーム兵器の実用。

兵器性能。運用性。汎用性。そのどれもが、現行兵器とは比べものにならないものであった。

絶対的驚異に対する各国の反応は、正にアレルギー反応のようであった。

白騎士の分析、可能ならば捕獲。無理ならば撃滅

こうして大規模作戦が実行に移された。

だが、その結果は凄惨なものであった。

当時最新鋭であった兵器も惜しげもなく投入されながら、しかしこごとく撃墜、破壊。

しかも　　死者は一人として出なかった。

世界が躍起になって攻撃をしてきたのに、白騎士には、相手の命を  
気遣う余裕さえあったのだ。

そして日没を迎える中、白騎士は姿を消した。まるで、今までの事  
は太陽の見た幻であったかのように。

リーダーにも、その影は映らなかった。完璧なるステルス性能。

この日、世界はたった一人の騎士に敗北した。

『ISを倒せるのはISだけ』という束の言葉を、世界は受け入れ  
るしか無かった。

ISしかISの領域ステージには入れない。現行する兵器は、どれも同じ土  
俵にすら立てなかったのだ。

そして、世界は【アラスカ条約】というIS運用制限条約と、それ  
に伴うIS開発普及へと流れていくことになる。

『でも、白騎士って誰だったんだろうね？　ね、ちーちゃん？』

『知らん』

白騎士。

バイザータイプの初期型ハイパーセンサーによって顔は隠れ、性別以外の全てが不明。

だが、順当に考えれば一人しかいない。

織斑千冬。

世界一のIS操縦者である彼女だけが、東からIS”白騎士”を託される可能性があるのだ。

それは同時に、第一回モンド・グロツソにおいて見せた圧倒的実力の説明にもなる。

だが、モンド・グロツソで使われていたIS『暮桜』は白騎士ではない。

ならば、白騎士は何処へ行ってしまったのか。

『時間だ……篠ノ之』

「はい。一夏、私の肩に掴まれ」

「頼むぜ、篤」

『春斗、現場での指示はお前が出せ。良いな？』

『了解です』

春斗はそのまま、現場指揮を取る事になった。というのも、高速戦闘時状態に入ってしまったえば作戦室から指示を出したのでは余りにも遅いからだ。

この事に真耶らは反対する。当然の事だ。だが、春斗の事を知る面々は逆に賛成する。

春斗の情報分析能力の高さは、十分に武器となる。

そして、一夏と共に戦場を高速で移動しつつ、しかし分析に集中できる以上、現場指揮にこれ以上の人材はいない。

半ば押し切るようにして、春斗の参加も決まった。

『今回の作戦は、紅椿で高速移動。目標に接近後、紅椿をカタパルトにして白式が瞬間加速。イケニッションブースト零落白夜による一撃必殺です』ワンアプローチ・ワンダウン

『作戦の肝は……白式だな』

『それもあるけど……紅椿が、目標に反応されるまでに距離をどこまで詰められるかが重要だね』

『大丈夫だ。一夏一人運ぶぐらい、この紅椿なら造作も無い。なんなら、隣を飛んでやるぞ?』

『頼もしいね。でも、現場では何があるか分からない。十分に注意を。一夏もね?』

『ああ、分かった』

『了解だ、春斗』

二人は力強く頷いて答える。油断もない、気合は充分だ。

『では、作戦開始!』

「しっかり掴まっている、一夏!!」

「っ…………!?!」

言うや、紅椿は一気に上昇。ほぼ一瞬で高度300メートルを超えた。

更に上昇し高度500メートル。

「暫時衛星リンク確立…………情報照合完了だ」

『照合確認。目標に対して追撃行動を開始して下さい』

「了解!!」

筈はスラスターと、背部、脚部の展開装甲を稼動。一気に推力を得て加速した。

「ぐっ…………!?!」

展開装甲の生み出す推進力によって、世界が一気に流れていく。蒼天を切り裂き、白雲を穿ち、紅い翼が飛翔する。

『目標発見。このままの速度を維持しつつ、白式は迎撃態勢に移行して下さい』

「おおっ!!」

ハイパーセンサーが導く視界の先に映る　　白銀のIS。

一夏達の角度からみると、ヘッドユニットと一体化して頸部から展開しているウイングは、まるで頭部から生えているように映った。

「あれが…………福音…………!!」

「【銀の福音】…………!!」

『作戦をネクストフェイズに移行。白式、スタンバイ』

「分かった……！」

一夏は零落白夜を起動。全てのエネルギーを打ち消す必殺の刃が出現する。

『接触まで10……9……8……！』

春斗によるカウントダウン。紅椿が更に加速し、白式が刃を掲げる。

『3……2……1……0ッ！！』

「オオオオオオオオッ！！」

一夏は紅椿の背中を蹴るようにしてイグニッションブースト瞬時加速。

白式は一瞬の間さえ無く福音に迫り

福音が消えた。

「っ……！？」

『一夏、上だ！！』

反転し、上方を見やる。そこにはあの超音速を停止し、佇む福音の姿があった。

零落白夜の刃は、僅かな差で躲されてしまったのだ。

「あの速度で回避して、反転上昇からの急停止……幾ら高出力の多マルチスラスト方向推進装置があるからって……PICはどうなってるんだ！？」  
『さあね。でも、足は止まった……て、事で！！』

「ハアアアアアアッ！！」  
反転してきた紅椿が雨月を振るい、光刃を発射。そのまま自身も突撃を掛ける。

福音は事も無げに加速してエネルギー刃を回避。更に紅椿の斬撃をも紙一重で躲す。

『敵は超高速飛行状態を解いた！ 反撃が来るよ！！』

『敵機確認。迎撃モードへ移行

シルバール  
銀の鐘稼働開始

春斗の言葉を裏付けるように、福音が開放回線オープンチャンネルに、機械音声を流す。抑揚のない、しかし敵意をハッキリと籠めた言葉。

襲い来る福音。二人はそのまま高速戦闘へと移行した。

「オオオオオオオオッ！！」

「ハアアアアアアアッ！！」

左右から挟撃するように、白と紅が飛ぶ。が、福音はその特異な多マルチスラスタ<sup>ルチスラスタ</sup>方向推進装置を巧みに操り、その攻撃をミリ単位で回避してみせる。その制御は例えるならば、針の穴に糸を通すほどに繊細、そして精密。

とても、単なる暴走をしているISが出来るような動きではない。

(そもそも、ISが暴走しているって話自体がおかしいんだけどね……！)

春斗はずっとそれが引つ掛かっていた。だが今は、現実の脅威として存在する福音を止める事が最優先だと、思考を切り替える。

福音は回避するとそのまま加速。ぐるん、とその身を反転させる。

そしてウイングの装甲が開き、推進装置一体型広域殲滅武装  
銀の鐘シルバークロウが真の姿を現す。

「っつ　　！！」

放たれる光弾の嵐。多方向同時射撃の名に恥じない、圧倒的連射力。

二人は即時回避。だが全てを躲す事など出来ず、羽根状の光弾が突き刺さり、即時爆発した。

「グウウウツッ！！」

「ウアアアアッ！！」

襲い来る爆圧が、シールドを容赦なく削り落とす。

二機はそれ以上の追撃を受けないよう加速して攻撃範囲から離脱する。

「クソツ……時間が掛かればこっちが不利だ……どうする!?!」

『まずは、あのスラスタ―翼を何とかしよう。ダメージを与えられれば、攻撃も回避も思うように出来なくなる筈だ!』

「分かった！ 私が奴を押さえる。その隙に羽根を切り落とせ!!」  
時間が無いからこそ、零落白夜を確実に決める布石を打つ。

一夏は雪片をブレードに戻し、シールド無効化状態に移行させる。

その状態ならば、戦闘可能時間を長引かせられるからだ。

紅椿は自立支援ユニットを射出。牽制をさせつつ、一気に接近。斬撃と刺突を繰り返し、更に腕部展開装甲からエネルギー刃を現出させ、攻撃を仕掛ける。

『ほーちゃん、エネルギー残量に気を付けて!!』

「分かった!!」

第の猛攻を受け、さしもの福音も回避から防御へと流れを変えていく。

「La ?」

福音は大きく飛翔し間合いを離すと、そのウイングの装甲を完全に開ききった。

そこに見える砲門 総数36。

『シルバール銀の鐘、最大稼働。一斉掃射開始』

今までとは比べものにならない数の弾幕。

破壊の羽のスコールが紅椿を、そして白式を容赦なく襲う。

二機は被弾しながらもそれを耐え、一撃を見舞うべく飛ぶ。

が、春斗が戦場となったエリアにそれを発見してしまう。

『ッ!? 後方800の海上に船舶!? マズイ、このままだと巻き込まれる!』

「何っ!?!」

「船舶情報無し……密漁船か!?!」

最悪な事に、白式の位置は福音と船舶の間。そして福音はもう一度、



「私は……犯罪者など、どうなるうと知った事ではない!!」  
空裂を振るい、福音を打ち据える。その表情は悲痛ささえ感じられた。

「私は……お前を守る為にここにいるのだ！ お前に嫌われようと、蔑まれようとも……私は、お前を他の何よりも守りたんだ……だからっ!!」

箒は阿修羅の如き威力を以て、福音を追い詰める。

斬撃を躲し、福音が銀の鐘シルバベルを構える。

しかし、そこを狙って自立支援ユニットが突撃。福音を捉える。

「オオオオオオオオオッ!!」

雨月、空裂を上段に構え、箒は二刀を全力で振り下ろし。

しかし、その刃が福音を捉える事はなかった。

「っ……！？」

二刀の刃は福音を捉える直前、光の粒子となって消えさってしまっ  
た。

更に、紅く輝いていた展開装甲も、次々に閉じられていく。

リミット・ダウン  
具現化維持限界。

つまり エネルギー切れだ。

ISアーマーはちょっとやそつとの攻撃では傷つかない。だが、I  
Sの攻撃にまでエネルギー無しで耐えられる強度など無い。

そして、ここが実戦の場である以上、箒は命の危険に晒されている  
という事だ。

福音が、銀シルバールの鐘を開く。

「箒いっ！……！」

白式が割り込み、福音を攻撃。福音はそれを躲すと、飛翔する。  
一夏はすぐさまそれを追いかけた。

『作戦は失敗！ 紅椿は現空域を即時離脱して下さい！！』

「っ……！？ だ、だが私は……！」

『エネルギーのないISに出来る事は無い！！』

「ッ……！！」

春斗の厳しい言葉に、篤がビクリを肩を震わせた。

『白式はこのまま、紅椿の撤退を援護。良いね？』

「あぁっ！！」

確かに、もう戦う力はない。だが、それでも。

「クソッ……速い！！」

『一夏っ！！』

福音の攻撃に、残り少ないシールドが削り取られる。  
零落白夜はもう一発、一瞬しか使用できない。

「組み付いてでも……極める！！」

弾雨を回避しつつ、白式が迫る。が、福音は思わぬ行動へと移った。

「ッ！？」

逆に接近し、白式にその拳を叩きつけてきたのだ。予想外の行動に  
一夏はそれを回避できず、喰らってしまう。

ギイインッ！

「しまった……グアッ！！」

更に振り上げた足が、雪片を弾き飛ばした。返す刀で、一夏を蹴り飛ばす。

福音が、ダメ押しとばかりに銀の鐘シルバーベルを開く。

だがそれでも、やれる事はある。

それが例え、その身を犠牲にする事だとしても。

「一夏っ！ー！！」

「ッ！？」

福音が止めを放つ瞬間、紅いシルエットがその間に割り込んできた。

紅椿。篠ノ之箒はその身を盾にして、一夏を守るうとした。

だ  
が  
。

「　　っ!？」

ぐん、と強い力に腕を引かれ、更にはその背中を強く押された。箒は受け流すようにして、横へと投げ飛ばされていた。

どうして？

そんな疑問と共に、上下が逆転した視界に映ったのは　　自分を投げた黒白の腕。

そして、何故か微笑んでいる一夏の顔。

箒は必死に、彼に向かって手を伸ばした。決して届かないと、分かっ  
つていても。

「いち　　」

そして逆しまの世界に

紅蓮の花が咲いた。



第29話 VSシルバリオ・ゴスペル／蒼海に破壊の鐘は響く（後書き）

福音戦第一ラウンド終了。

堕ちた一夏と春斗。その運命は？

傷ついた筈と、専用機持ちの少女達の決意と覚悟。

次回は、女同士の友情が熱い……！！

と、煽るだけ煽ってみたりする訳でw

第30話 少女達の決意／胸を張って、会えるように（前書き）

福音戦インターバル。

今回は、7人の少女達を中心に描かれていきます。

本編もいよいよ30話。それではどうぞ。

### 第30話 少女達の決意／胸を張って、会えるように

アメリカ、イスラエル共同開発の第三世代IS【シルバリオ・ゴスヘル銀の福音】が制御下を離れ、突如暴走。

学園上層部は、たまたま近隣にいたIS学園一年の専用機持ち達にこれを対処するよう指示。

かくして行われたワンアブローチ・ワンダマン一撃必殺を狙った作戦は失敗。そして福音は一夏を撃墜後、どこかへと飛び去っていった。

シルバリオ・ゴスヘル銀の福音の前に、二機の最新鋭機は完全に敗北した。

「一夏！ しっかりしろ一夏っ！！」  
海面に落ちる寸前、箒は一夏を抱きとめた。が、その身より流れる血はすぐに紅椿を、より紅く染めていく。

「春斗！ 一夏が怪我をした！！ どうすれば良い、指示を……………」

春斗？」

必死に呼び掛ける筈。答えはしかし返ってこない。

「春斗！？ どうしたら良い！？ 指示をしてくれ、春斗っ！！」  
だが、沈黙だけがそれを返す。

「嫌だ……私を……一人に……しないでくれえ……っ！！」

海上封鎖を担当していた教員が筈を発見した時、彼女はスラスタ以外の部分を展開していなかった。

エネルギーが底を尽きかけ、温存するために、飛行ユニットのみで飛んでいたのだ。

白いISスーツは一夏の血に染まり、彼女は全身に感じる死の恐怖に耐えて飛んでいた。

「一夏あ……春斗お……」

うわ言のように二人の名を呼び、筈は教員が来たことさえ気付かない程に錯乱していた。

そして。

日の傾きだした花月荘。時刻は午後4時。

福音迎撃作戦開始より、既に5時間以上が経過していた。

ある一室に運び込まれた簡易ベッドに、力無く横たわる一夏。顔や腕、足などそこから中に包帯を巻かれ、余りにも痛々しい。

繋がれた計測器の脈拍と心拍を伝える音だけが、室内には響いていた。

全身を焼き払った熱波と破壊の圧力は、白式に致命領域対応を発動させた。

これは操縦者の命を守る為に、そのエネルギー全てを防御に使用して起こされる。

故に、ISのエネルギーが完全に回復するまで、意図的に起こされた昏睡状態は回復する事はない。

「…………… 一夏」

その隣に座る篤は、ただじっとその顔を見つめていた。ギョツと拳を握り固め、溢れ出る涙も止められない。

アリーナが正体不明のISに襲撃された時、何も出来ない自分が嫌で、許せなかった。ラウラのISが暴走した時、力があつた。だけど、エネルギーを渡す事だけしか出来なかった。

一夏を守りたかつた。大切な人を、守れる自分になりたかつた。力を得た筈だつた。覚悟も出来ていた筈だつた。

だけど 守れなかった。伸ばした手は、彼を救えなかった。

「どうして……私をかばった？ 言ったではないか……お前に何かあれば、傷つく者がいると……なのに、どうして……!？」

その答えが返ってくる事はない。

花月荘、風花の間。

空間投影モニターに映るのは、福音の現在地。光点はずっと同じままだ。

「……停止していますね。上はまだ、私達に作戦の継続を？」

「解除命令が出ていない以上……継続だ」

「ですが、これからどのような手を……？」

「……………」

真耶の間に、千冬はすぐに答えられなかった。

専用機持ちの中で唯一、シルバリオ・ゴスベル銀の福音を打倒できるであろう白式は、完全に墜ちた。

一夏はISの防御機能で深い眠りにあり、そして箒は精神的ダメージが大きく、戦力としてカウントできない。

そして更識 簪はISが未完成である。

残る五人で、福音迎撃を行わなければならない。だが、どうすればそれが可能なのか。

ドンドン。

【風花の間】の襖戸を叩く音がする。

「誰だ？」

（オルコットです。その……）

「作戦中だ。各自待機していると言った筈だ……!!」

（ ツ!?! ）

苛立ちにも似た怒声が襖戸越しに、セシリアをビクリとさせる。

「他の連中にも言っておけ。良いな?」

（ わ、わかりました…… ）

そうして、意気消沈といった気配が、襖戸から消える。

「……………ふう」

そうして、千冬は小さく溜め息を吐いた。

そこにあつたのは自分への軽い嫌悪感。あれでは単なる八つ当たりではないか。

「織斑先生……織斑君の所に行かなくて良いんですか?」

真耶は千冬に尋ねた。

負傷した一夏が箒と、現場海域の封鎖を務めていた教員によって運ばれてきた後、千冬はすぐに治療指示を出した。

そしてそれ以降、ずっとこの作戦室に籠ったままなのだ。

「まだ作戦中だ。私情を挟む時間などない。それに、私が行ったところで福音を倒せるわけでも、あれが目を覚ますわけでもない」

「……………ですが」

「くどいッ!」

「っ……………!?!」

尚も言おうとする真耶を、千冬は一喝した。

「あれは死んだ訳ではない……いずれ、必ず目を覚ます。心配するだけ無駄だ」

そう言いつつ、千冬は腕組みするその手で、スーツの袖をギュッと握り締めていた。

今、危険な状態にあるのは一夏だけではない。人知れず、春斗もまた、危機に晒されているのだ。

その姿を、恐ろしくて見れない。

ただ只管に、千冬は”作戦中”という免罪符を切り続けるのだった。

作戦室である【風花の間】に続く縁側。

箒とセシリア、織羽を除く面々は、そこに集まっていた。

「……………あ、セシリア。どうだった？」  
鈴が向こうからやってきたセシリアに気付く。  
「ダメでしたわ。やはり『作戦中だから入室許可出来ない。待機し  
る』の一点張りでしたわ」  
セシリアは首を振った。

「先生は……………心配じゃ……………ないのかな？」  
簪がポツリと呟く。

「そんな訳あるまい」

そう言ったのはラウラだった。

「教官にとって一夏は大事な家族だ。それを心配しない訳がない」  
「だったら……………どうして？」

「一夏の命はISが守っている。だからこそ今は福音を補足し、そ  
の動きを捉える事を……………今やるべき事を行っているのだ。自身の心  
を必死に抑えてな」

ラウラは冷静に、しかし真っ直ぐに言葉にする。

「っ……………」

簪は、それでも何処か納得できない様子で、ギュツと唇を噛み締め  
ていた。

「不器用なのよ、千冬さんって……………」

「え……………」

「鈴さん？」

「何時もそう……………家族が……………一夏や春斗が一番大事なくせに、肝心  
な時に、何時も動けない」

鈴は夕焼け近い空を見上げ、遠い日の事を思い出す。

「立場も、責任も、何もかも投げ出して直ぐにでも行ってやりたい  
のに……………自分を抑えちゃって……………」

春斗が肉体を失った事。

一夏が誘拐された事。

立て続けに起こった事件は、千冬の心を完膚無きまでに打ちのめした。

それこそ、絶望に屈してしまうほどに。

「守りたいものがあって、その為に力や、色んなものを持って……なのに、それが自分を縛る鎖になっちゃって……でも、それを生来の責任感で投げ出せない……」

織斑家と深い繋がりがあるが故に、千冬の苦悩を鈴は理解していた。許せないのだ。一夏の、そして春斗の事で。誰よりも何よりも、自分の事が。

『……ねえ。春斗はどうして?』

シークレットチャンネル 秘匿回線に、シャルロットの声が届く。

ずっと俯き、膝を抱えたまま、彼女は今まで一言も発しなかった。

『裏白式が白式と違うISで、コアも別なら……どうして回線が繋がらないの?』

撃墜後、シャルロットはすぐに春斗に秘匿回線で呼び掛けた。

だが、全く繋がらなかった。

『あの時……右腕が裏白式の物だった。つまり少なからずダメージを受けたって事だと思う』

『でも、腕だけだよ！？ ダメージを実際に受けて怪我をしたのは一夏で……一夏が意識を無くすのは分かるけど……春斗までどうして！？』

『知らないわよ！ あたしだって……知りたいぐらいなんだから……』

実際、何も分からない事だらけだった。

ISに関して、専門知識もそれなりに持っているとはいえ、コアネツトワークやその機能について深い訳ではない。

ましてや、人の意識体やその存在に関する事など、髪の毛ほどのさへも分からない。

何かを分かるとすれば、春斗の治療を担当している高柳ぐらいだろう。

『二人とも、重要な事を忘れてるぞ？』

『ラウラ？』

『あの時、二人の意識はシンクロしていた。そして一夏には肉体があるが、義兄上には無い。つまり義兄上のダメージはそのまま、その意識体が直接受けたかも知れない。それが裏白式に、致命領域対応をさせた可能性がある』

『そんな……だって、春斗は……！！』

春斗の意識体は、酷く脆い。精神的負荷でさえ存在を危うくするというのに、あれだけのダメージを受けてしまったというなら、それがどれ程危ない状況なのか　もしかしたなら既に。

「っ……！！」

そこまで考え、シャルロットは恐怖で身震いした。

あり得ない。そんな事はない。きっと、気を失っているだけだ。き

つと、それだけの事だ。  
必死にそう思い込もうと、シャルロットはその身を力一杯抱きしめる。

喪失の恐怖に、負けないように。

「大丈夫よ。そう簡単に、あいつは消えたりなんてしないから」

「鈴………?」

「春斗の奴、意外と神経図太いのよ？ 一夏が起きたら、一緒に起きるわよ。」いやあ、一夏に巻き込まれちゃったよ」とか言ってるさ  
そう言いつつ、鈴も不安を抱いていない筈がなかった。鈴は一夏達を、ずっと見てきていたのだから。

春斗がどれだけ儚い存在なのか、誰よりも理解している。

だからこそ、その不安を絶対に口に出来なかった。

「ところで、織羽さんは？」  
と、セシリアはその場にいないもう一人が気になったのか、簪に尋ねた。

「織羽は……多分、準備してる……と思う……」

「準備？」

「福音と……戦う準備……」

簪は視線を、建物の向こう　林へと向けた。その場所で、織羽は戦う為の”牙”を磨いている。

「織羽は後悔している……一緒に行けなかった事を……友達を、守れなかったことを……」

一息吸い込んで、そして言った。

「苦しんで、後悔して……だから、その人に胸を張って会える自分になろうとするの……それが、織羽だから」

簪の言葉は、不思議と皆の心に響いた。

確かに、ここで何の解決にもならない思考をしているよりは遙かに建設的で、何よりするべき事があるというのは、人の足を前へと確実に進ませた。

「よっし！　あたしもちよつと行ってくるか！」

己を奮起させるためか、鈴は明るく、そして元気良く腕を振り上げた。

「何処に行くんですの？」

「勿論……自分にやれる事をしに行くのよ。こんな所でウダウダしてても、一夏に胸張って会えないしね！！」

そう言っつて、胸を張る鈴に全員が顔を見合わせ、小さく頷いた。

「……あら、張る程の胸がお有りでしたの？」

「どつという意味よ……？」

鈴がヒクヒクと頬を引き攣らせて、セシリアを睨む。セシリアは可笑しそうに口元を押さえ、何事もないかのように振舞った。

「いえ、別に大した意味はありませんわ？　お気になさらず……オ

ホホ………あ、あら？」

「大した意味はない、か………だが、私も詳しく聞きたいな………なあ、セシリア・オルコット？」

「私も………どういう意味か聞きたい」

更にラウラと簪が食いついてきた。二人は怒りのオーラを燃やして、その肩をがっしりと鷲掴んでいた。

一年専用機持ち組ワースト3である三人に囲まれ、堪らずシャルロットに援護を求める。

「シャ、シャルロットさん………！？」

「あ、僕は先に行ってるから」

「ちよつと、お待ちになつて！？」

シャルロットは即行で見捨てた。

「い、イヤアアアアアアアアアアアッ！？」

立ち去るシャルロットの背中に、絹を裂く様な悲鳴が届いたりした。

夕焼けの砂浜。

潮風にポニーテールに纏めた髪を流して、箒は海の彼方を睨んでいた。

泣き腫らした赤い瞳に宿るのは

昏い激情。

シルバリオ・ゴスヘル  
銀の福音。

絶望し、無力感に囚われ、喪失感に支配され、そうして積もった負の感情が、吐き出し口を求めて疼きだす。

「……………」  
リン、と左手の鈴が鳴る。

この海の何処かにいる怨敵に向かって、箒は左手を持ち上げた。

「……………」  
何処に行こうとしてるのよ？」

「ッ……………!?!」  
突然掛けられた声に箒が振り返ると、いつもと違って厳しい眼差しを箒に向けている織羽がいた。

「何処にいるかも分からないのに、一人で飛び出す気？」

「奴はいる……………そう遠くない場所に。だから、風潰しで探し出す……………」

……………」

この大海原でたった一機のISを、しかもステルスモードで潜行している相手を探すには目視しか無い。それは非常に困難だ。だが、それでも箒は、本気でそれをやるうとしていた。

「……随分と酷い顔ね。まさか刺し違えてでもとか……そんなバカな事、考えてないでしょうね？」

「……お前には関係ない。福音は……私が討つ。どんな手をおうともだ……！」

織羽の問には答えず、箒は再度、紅椿を起動させようとする。

「逃げる気？」

「ッ……!!？」

その言葉に、箒が動揺する。上げかけていた手がピタリと止まった。

「私が……逃げる……？」

「そうよ」

「ふざけるなっ！ 私が……何から逃げていると言うんだ!? 逃げてなどいない！ だからこそ、一人で福音を討ち果たし、責務を果たそうというのだ!!」

「逃げてるわよ。織斑君から、織斑先生から……何より自分自身から。必死に目を逸らそうとしている」

「っ……!!」

そんな安っぽい理屈など織羽には通じない。だから、箒の言葉は簡単に止められてしまう。

「だから、簡単にやろうとする……彼が、自分と引換にしたものを、平然と捨てようと出来る」

「ッ……！！！」

一步、織羽が進む。箒の足が一步、下がる。

「箒が織斑君を守りたいのと同じように、彼も箒を守りたかった。だから守った……なのに、あなたはそれを捨てて逃げるの？」

「ち、違う……私は……！」

「……あたしは『逃げるな』なんて言わない。逃げるなら止めない。だけど……だったら、本気で逃げなさいよ」

「本気で……逃げる？」

「そうよ。ISを捨てて、篠ノ之箒の今までとこれからを捨てて……何があろうとも、誰が傷つこうとも、死のうとも……その関わりと想いの全てを捨てて生きる。それが”本気で逃げる”という事よ。中途半端な逃げを、私は決して許さない……！」

織羽の言葉と視線が、箒を容赦なく貫く。

まるで心の奥底まで見抜かれているような、そんな錯覚さえ憶えてしまう。

「本気で逃げるってね、立ち向かう事よりもずっと強い意志と決意が要るのよ。箒、あなたに……その意思と覚悟はあるの？」

「……わ、私は……」

ある筈がない。棄てられる訳がない。やっと、その手に戻った想いと絆とこれからを、全て無くすなど、そんな事に耐えられるものか。

何よりそれは、今までの人生その全てを棄てる事と同じ意味だ。

「なら……私はどうすれば良い……？ 一夏を……大切な人を守れなかった……！ 敵を討つことも出来なかった……！！ 何も……何も出来なかった私に、お前はとうしろというのだ！？ 悔しいが福音は強い……まともにやって、勝てる相手ではない！！ なら、この身と引き換えにしなければ……どうしようもないではないかっ！」

箒は叫んでいた。どうしようも無い、どうにもならない想いを吐露

して、織羽にぶつけた。

「……バールカ、そんな事も分らないの？」

「っ……！？」

コッソ。と、箒の額が軽く小突かれる。

「頼りなさいよ、甘えなさいよ。『戦いたい。勝ちたい。敵を討ちたい。だから力を貸してくれ。一緒に戦ってくれ』ってさ……！」

「お、織羽……？」

呆けたような表情を見せる箒に、織羽はニツと笑って見せる。

「本っ当、友達甲斐が無いわね、あんたは」

「戦って……くれるのか……私と？」

信じられないといった風に、呟く。

「あたしだって、福音にむかっているのよ。だから、あんたがやる気ないなら、あたし一人ででも行く気だったもの。ま、旅は道連れ世は何とやら……って、これはちょっと違うか？」

お道化たように肩をすくめる織羽。そこにいるのはただ、篠ノ之箒の友人だった。

「戦おう、一緒にさ。逃げる為じゃない……向き合って、立ち向かって、織斑君に胸を張って会える自分になる為に……！！」

「っ……！！」

いつの間にか、箒の瞳からは大粒の涙が零れていた。

泣き腫らし、枯れたと思っていたのに、まだこんなにも熱いものが残っていたなど、箒は知らなかった。

「あゝあ、何を二人で盛り上がったちゃてるのよ……」  
「全く……私達の出番がまるでありますでしたわ」  
「鈴、セシリア……!？」

「仲間外れは、ちょっと酷いんじゃないかな？」  
「やれやれ。どう尻を叩いてやろうかと思っていたものを……無駄骨だったか」

「あら、デュノアちゃんにボーデヴィツヒちゃんまで……?」

砂浜に現れた面々に、二人は驚いた。

「おやおや、一体どうしたのかしら?……雁首揃えちゃって?」

「まさか……お前達……?」

「あら、勘違いしないで下さいな?」

戦ってくれるのか。そう続けようとした言葉を、セシリアが遮った。  
「私は個人的に、一夏さんの怪我の代償を福音に払ってもらい、そのついでで、【ストライク・ガンナー】のデータ取りと、先日のトーナメントでのマイナスを取り返す……ただそれだけの為ですわ。決して、それ以外に理由などありませんから!」

フン、と腕組みしてそっぽを向くセシリア。

「まあ、崩山の良いデータ取りは出来そうよね。ついでにアメリカの第三世代を落とせば、向こうも大喜びしそ<sup>本国</sup>うだし」

鈴は初めての時のように、ニツと挑戦的な笑みを浮かべる。

「私達は純粹に、福音に借りを返しに行くだけだ」

「『良い女は貸しを作らない。そして借りはきっちり返すものだ』って、フィリーさんに教わったからね」

と、ラウラとシャルロット。

「ちよっと! それじゃあたしらが打算的みたいじゃないのよ!？」

「そうですね！　そもそも誰のせいだったと思ってるんですの！？  
訂正なさい！！」

「知るか。お前達が勝手に言っただけだろう？」

「っ……！！」

一切間違っていないラウラの言葉に、ぐうの音も出ない。

「で、いつまでそこにいるのよ……簪ッ！！」

織羽は砂浜の向こう　林に向かって呼び掛ける。と、バツが悪そうにして、木の影から簪が出てきた。

「えっと……その……わ、私……」

「分かってるわよ。あなたの【打鉄式】は未完成だもんね。戦うどころか、飛ぶことさえ覚束無い機体じゃ……連れてはいけない」

「……ごめん……」

織羽の言葉に泣き出しそうなほどに落ち込む簪。

「更識さんのISって、未完成なんですか？」

「まあね。良くて7割程度かな……？　色々トラブルがあって、まだ完成してないのよ」

「そうですね？　では、仕方ありませんわね……」

「っ……」

織羽とセシリアのやり取りに、ますます沈んでしまう簪だったが、その肩が「ポンッ」と叩かれた。

「簪。一緒に前線に立つ事だけが、一緒に戦う事じゃないわよ？」

「え……？」

「あたし達が何の心配もなく戦えるように……織斑君を見て欲しいの。もしも彼が目を覚まして、あたしらが福音と戦ってるって知ったら、絶対に来ようとするだろうからね……その時、彼を止める人が必要なのよ」

「……」

確かに一夏の性格ならば、きっと自分の怪我を押しでも出てこようとするだろう。

それを止めるには、ずっと彼を見ている人間が必要だった。

「更識さん」

「えっ……!？」

「一夏を……どうか頼む」

簪に向かって、箒は深々と頭を下げた。

「お願いね、更識さん。一夏の奴が言う事聞かなかったら、ぶん殴っていいからね?」

鈴は拳を握ってブンツ、と振るマネをした。

「まあ、少々頼りない気はしますが……ここは信じるとしましょうか」

「もっつ。どうしてそういう物言いになっちゃうの、セシリアは?」

「放っておけ。あれはきつと、恋愛でも自滅するタイプだ」

「なっ……なんですってえ!？」

「事実だ。それと今時、金髪ロールは流行りではないそうだぞ?」

「別に流行りでやっている訳ではありませんわッ!！」

「ほら、織斑君に何かあったら……この五人がきつと、悪鬼羅刹に変じた上、地平の彼方に逃げても追いかけてくるわよ? 捕まったら最後、AICで動き止められてビームと衝撃砲撃たれたところにパイルバンカー打たれて、そんでもって、なます切りにされちゃんだからね」

「……大丈夫。織斑君は……私が見てる……死にたくないから」

脅かすような織羽に、簪は笑ってコクリと頷いた。

「流行りでないというなら、鈴さんのツイントールこそ、流行りではありませんわー!!」

「なんだと、このクロワッサンへアー!!」

「てか、いいかげんにしなさいよ、あんたら……」  
「ふふっ……」

かくして、7人の少女達は打倒福音に向けての作戦を練る。  
敵は強敵。僅かな判断ミスも命取りとなるため、打ち合わせは密に行われた。

それがようやく形となったところで、織羽がパンツ！ と、手を打った。

「さて、それじゃあ……出撃前の景気付けをしましょうかね！」  
と言って何処から出したのか、左手には酒瓶。右手にはちょうど七  
つの白盃。

「ちよつと！ それ、まさかお酒……！？」

「ただの水よ。本当は酒の方が雰囲気出るから良いんだけどね……  
…ま、”固めの水杯”ってことで」

織羽はヒョイヒョイと、全員に盃を渡していく。

「私、作法を知らないんですが……？」

「大丈夫、ちゃんと教えるし……難しい事もないから」

適当なやり方を教えつつ、盃に注いでいく。鈴は訝しみつつ嗅いで  
みるが、本当に水のように安心していた。

そうして全員に注ぎ終わると、それぞれが円陣を組むように立った。

「福音を、必ず……！」

「うん。僕達で倒そう……！」

「受けた借りはきっちり、三倍返しですわ」

「織斑君のことは……任せて……」

「頼んだわよ、簪。後は……織斑先生に怒られる覚悟もしとくかあ  
……」

「ちよつと織羽！ テンション下がるような事言わないでよね!？」

「全く……私は遺書も準備したというのに」

「……そんなもん、用意するなっ……!」「」「」「」

「何を言う！ お前らは知らないのだ……本気で怒った教官が、ど

れだけ恐ろしいかを……!!」  
ラウラの顔がその時を思い出したのか、若干青ざめている。  
その様子に、全員がゾツとした。

「……よし。絶対に、皆で生きて学園に帰ろう」

「織羽さん。それは……どちらに対してですか?」

「まあ、まずは福音って事で……! んじゃ、行くわよ!!」

ガチインッ!

ぶつかり合う盃。そして一気に飲み干して、盃を空へと思いつ切り  
投げ放った。

「R リヴァイブッ!!」

「シュヴァルツエア・レーゲンッ!!」

「ブルー・ティアーズッ!」

「甲龍ッ!!」

「舞影ッ!!」

「来い 紅椿!!」

色とりどりの光が輝き、そして六人は一斉に空へと舞い上がった。

「気をつけて……無事に、帰ってきて……」  
簪はそれを見送ると、自分の役目を果たす為に旅館へと戻った。

海上を飛行中、ラウラが福音のポイントを各機へと、衛星画像と共に送る。

「福音はここから約30km離れた海上にいる。ステルスモードに入っていたが、光学迷彩を有してはいないらしく、衛星による目視で確認した」

「流星はドイツの特殊部隊。なかなかやるじゃない」

「ていうか、そういうのは出撃する前に言って欲しかったわね……」  
「物事には流れというものがある。それが分からない者は」ケーワ

「イ」という不名誉を得ると聞いたのでな」

「誰よ、あんたにそういうの教えてるのは……?」

「クシユン!!」

「大尉、風邪ですか?」

作戦海域までまだ距離があるので、セシリアは気になっていた事を織羽に尋ねた。

「ところで織羽さん。ずっと気になっていた事があるのですけれど……?」

「何よ、藪からステイックに?」

「……いきなり意味不明ですわね」

早速、出鼻を挫かれた。

「織羽さんは、篝さんと更識さんの事は名前で呼ばれますのに、どうして、私や鈴さん達の事は名字ファミリーネームで呼ぶんですの?」

「あつ。それ、あたしも気になってた」

「ん、デユノアちゃんはまだしも……他の三人は第一印象、最悪だからなあ」

辰守織羽の第一印象。

セシリア・オルコット 初日から、部屋の七割を一方的に占拠される。

凰鈴音 担任に呼び出されたら、いきなりクラス代表を横から取られた。

ラウラ・ボーデヴィツヒ IS受領初日&初対面で、ガチで刃ぶつけ合った。

「うん、無いわ」

「」「」「」

あっさりと言い放つ織羽に、三人は顔を逸らした。

その様子に織羽はニヤニヤと笑う。そして、前方を見やった。  
「まあ、全部が終わったら………考えてあげましょ？」

彼方に見える、光の球体。

その中心に、胎児のように丸まる銀の福音。シルハリオ・ゴスベル

1139

「各機散開。ステルスモードにて配置に付け」  
チームリーダーを任されたラウラが、思考を切り替えて指示を出す。  
「了解」  
「では、後ほど」

それぞれが、作戦開始位置へと移動する。

銀シルバリオ・ゴスベルの福音は、その身を翼で守るよつにして、そこに居た。

対するはラウラの、シュヴァルツェア・レーゲン。

左右二門、八〇口径レールカノン『ブリッツ』を装備し、正面と左右を守る四枚の物理装甲シールド。

それこそ、砲戦パッケージ【パンツァー・カノニア】であった。

ターゲットスコープが、眼前に展開される。

「ターゲットロック……行くぞ、福音！」

容赦なく引かれたトリガー。右砲身から破壊の鉄塊が撃ち放たれた。

大切な人に胸を張って会える自分になる為に。

今ここに、少女達の戦いが幕を開けた。

第30話 少女達の決意／胸を張って、会えるように（後書き）

原作だと7ページ。

アニメだと後半部分。

そしてこの作品だと、平然と1話分W

大盛り過ぎにも程があるWW

次回、6VS1の戦いです。

第31話 VSシルバリオ・ゴスペル/夜天に破壊の翼は舞う(前書き)

銀の福音との決戦編。

原作+アニメ+オリジナルのミックスで展開する、バトル全開話です。

### 第31話 VSシルバリオ・ゴスペル/夜天に破壊の翼は舞う

海上200メートルの位置に静止していた福音が、不意に顔を上げた。

その瞬間、超高速で飛翔した鉄塊が直撃、爆発する。  
ラウラによる、5kmもの距離からの砲撃。

「初弾命中！ 続けて行く！！」

直撃のダメージさえ物ともしない福音が、反撃に移ろうとするよりも早く、次弾を発射した。

左右二門から放たれる連続砲撃を、福音は容易に躲して距離をあっという間に詰めていく。

(距離4000……3000……チツ、速い……！！)

ラウラは内心で舌打ちしつつ、砲撃を連射する。

だが福音は半数を回避し、半数を撃ち落として、あっという間にその距離を2000まで詰める。

砲戦仕様のシュヴァルツエア・レーゲンは、火力維持と反動相殺の為に機動力を犠牲にしている。

対して銀の福音は高機動型。シルバリオ・ゴスペル300を切った所から更に加速してラウラに迫る。

右手を伸ばし、一気に叩き潰す算段なのだろう。

回避は不可能。砲撃も不可能。A I Cも間に合わない。

フツと、ラウラが笑った。

上空から閃光が走り、福音の右腕を叩き伏せる。  
その隙にラウラが福音から距離を取る。勿論、砲撃の置き土産も忘れない。

上空から急降下しつつ狙撃するのは、強襲用高機動パッケージ「ストライク・ガンナー」をインストールしたブルー・ティアーズ。  
ステルスモードで潜行し、不意打ちを叩き込んだのだ。

「セシリア、任せる！」

「了解ですわ！！」

黒と蒼のI Sは入れ替わるように飛んだ。

ストライク・ガンナーは、ビット六機を腰部ユニットの接続し、推進力として運用する。

それ故に、ブルー・ティアーズによるオールレンジ攻撃は出来なく

なるものの、高い機動力を得た。

そして落ちた火力を補う為に、2メートル以上もある大型BTレーザライフル『スターダストシューター』を装備している。

それと共に超高感度ハイパーセンサー『ブリリアント・クリアランス』が、時速500キロを超える領域での反応を補う為に装備されている。

その送る情報から福音を捉え、一気に反転して射撃する。

『敵機Bを補足。排除行動へ移る』

「おっと、遅いよ!!」

セシリアの射撃を躲しつつ、迎撃に移ろうとする福音の背部を衝撃が襲った。

彼女の背中にステルスモードで乗っていたシャルロットが、福音に零距离ショットガンを見舞ったのだ。

そのまま両手のショットガンを連射。福音のバランスを崩す。

「貰った!」

「頂きますわ!」

そこに挟みこむようにして、セシリアとラウラの射撃と砲撃が叩き込まれる。

福音はそのダメージに一瞬たじろぐも、すぐに態勢を立て直し、一番近い距離のシャルロット目掛けて銀の鐘シルバベルを発射する。

が、その射線上を紅白の影が通り過ぎたかと思うと、シャルロットの姿が消え去り、福音のエネルギー弾は全て外れてしまう。

「ギリギリいゝッ！」

「織羽、このまま行くよ！」

「オツケー！ ガンガン行こうぜ！！」

紅白の影の正体は、高機動戦闘用オートクチュール【空魔】を装備した舞影であった。

空魔は朱い鷹をモチーフにした舞影専用パッケージで、3メートル近いスラスター翼に、機動制御用小型ウイングが左右合計12枚、尾羽型スタビライザーが装備されている。

更に武装もツインランサー『一文字』に、ビーム大筒『カノン』国崩』を持ち、脚部には格闘専用武装『鷹爪』が追加されている。

舞影の戦闘力は実はそれほど高くなく、これらオートクチュール装備を前提にして開発された機体なのだ。

そして、空魔をインストールした舞影は、今のブルー・ティアーズと同等の速度での戦闘を可能とした。

シャルロットは舞影の背中に乗り、自機のスラスター制御を預ける。

福音はシャルロットと織羽に向かって、銀の鐘シルバールを発射。

しかし舞影はそれをヒラリと躲し、躲し切れない攻撃はシャルロットがエネルギーシールドで防いでいく。

「目には目を、弾幕には弾幕を！！」

シャルロットはアサルトカノン『ガラム』、シールド一体型ガトリング砲『ユミル』を展開。それらを福音に向けて発射した。

R リヴァイブ・カスタム？の高火力重爆撃パッケージ【スカーレツト・ガーデン】。  
防御パッケージ【ガーデン・カーテン】をベースに、多数の重兵装を加えた機体。

その重装備故に機動力が壊滅的だったが、しかしそれを補う空魔の機動力を得て、文字通り”空の要塞”と化した。

シャルロットの弾幕、高速機動からの射撃を行うセシリア、その合間を縫うように砲撃を打ち込んでいくラウラ。

包囲陣形をしく四機の前に、さしもの福音も自身の不利を悟る。

「優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先」  
グリーン、と全身を回転させると同時に全方位に銀の鐘シルバベルを発射。  
全員がそれを躲す隙に、福音は一気に加速。包囲陣形の隙間を突いて離脱を計った。

「やらせるかあああああつ！！」

その向こう 海面が隆起し、大きく爆ぜて、二機のISが飛び出した。

箒の紅椿と、その背中に乗った鈴の甲龍である。

鈴は箒の背を蹴って上空に上がり、箒はそのまま福音に迫る。

「行くぞ、福音ッ！！」

二刀を抜き放ち、宿敵に挑む。

火花が散り、福音がわずかに揺らぐ。

「箒ッ！！」

「やれ、鈴ッ！！」

箒はそのまま福音の脇を抜け、その背に向かって雨月を振るった。

そして上空の鈴も、両肩の衝撃砲を起動させた。

甲龍機能増幅パッケージ【崩山】。

計四門となった衝撃砲による、一斉射撃が行われた。

しかも通常のような不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏った銀の鐘シルバークロウにも匹敵する弾雨。

”熱殻拡散衝撃砲”とでも名付けられるだろうそれが、福音を直撃する。

『……………！？』

上方と背後からの同時攻撃を受け、福音が悲鳴に似た声を上げた。

「やった……………！？」

「まだだ、この程度で墜ちる相手ではない！」

箒の言葉通り、福音はダメージを受けつつも更に飛翔する。

そして反転すると

『銀の鐘、最大稼働』

すぐにエネルギー弾を斉射した。

「くっ!?!」

「箒、後ろに!」

舞影から飛び降りたシャルロットが、紅椿を庇うように動く。

今の紅椿にはエネルギー切れ対策として、展開装甲に制限を掛けている。

本来、展開装甲は攻撃、防御、機動において自立稼働する仕組みで、それ故に最強のISとなりうるスペックを持っている。

だが、それはエネルギー切れを誘発する危険なものでもあった。なので今回は、機動以外の展開装甲にリミッターを掛けてあったのだ。

防御面での不安は大きくなったが、それを補う仲間の存在が箒にはあった。

「全員、作戦をサイドフェイズに移行する!」

ラウラの指示に、全員が動く。

先陣を切るのは 舞影。

「いざ、一文字斬りで勝負っ!!」

両手にツインランサーを呼び出し、一気に突進。福音が迎撃にエネルギー弾を放つ。

「やらせませんわ!!」

その背後から、セシリアが牽制射撃。福音に迎撃行動をさせない。

「ちょいさあっ!!」

一方を投げつけ、もう一方を回転させて遠心力を加えて、福音に振り下ろす。

投擲された方を弾くも、振り下ろされた一撃を喰らい、福音が吹き飛ぶ。

そのまま舞影は離脱。鈴と入れ替わるように飛んだ。

「シャルロット!!」

「弾幕、行くよ!!」

拡散衝撃砲、そしてシャルロットが呼び出したミサイルポッド。それらが同時に発射される。

爆圧で動きを封じられ、そこに衝撃砲を喰らう。

「遠慮はいらん。これも持って行け!!」

更にラウラが砲撃を撃ち込んでいく。

「……………っ!?!」

福音も反撃を試みるも、しかしその度に、どこかから攻撃をされる。

孫子曰く。

戦いにおいて最も有効な戦術とは、相手よりも多くの兵を用意する事である。

数とは単純にして最も強力な力であり、それこそが肝心であると孫子は伝えていた。

その真理は近代になっても変わらない。

ミサイル、戦闘機、空母、戦車。これらを運用する為に、多くの兵士が必要だ。

そしてそれらが過去の物となりつつある現在でさえ、むしろ今だからこそ、それは更に。

ISという超兵器は、その絶対数が決まっている。だからこそ、数が物を言う。

六機のISによる包囲網の中では、いくら福音の多方向射撃能力があるとしても、全機を相手取ることとは出来ない。

攻撃態勢に入った時、誰かが必ずその範囲外にいるのだ。

一機故にその背を守る者はなく、一機故に抜け出せない蟻地獄。

対する専用機組も、決して楽な戦闘ではなかった。

常に福音の動きに注意して、その包囲から逃がさないように動き、更に攻撃態勢を取った所を狙って撃ち込んでいく。

それでもやはり攻撃はされるので、どうしてもダメージは積み重なってしまふ。

更には仲間同士の動きにも神経を使い、ラウラが遠方から指示を出

すも、精神的疲労は積み重なっていく。

物理的蓄積か、精神的疲労か。

ジリジリと、互いに追い詰められていく。

「ぐっ……!!」

シャルロットの物理シールドが一枚、破壊される。

「織羽、シャルロットを!!」

「承知!!」

織羽が一気に加速して、シャルロットを回収。そのまま円周軌道からの攻撃に移る。

「セシリアッ!」

「了解ですわ!!」

ラウラとセシリアが、左右からの挟撃を仕掛ける。

「喰らえッ!!」

そこに筈が正面から雨月を振るい、エネルギー刃を撃ち込んだ。

「っ……!!」

三方からの一斉攻撃を受けて、福音がついにその足を止めた。

「よし、ファイナルフェイズだ!!」

ラウラが、一気に決着をつけるべく指示をだす。

「辰守流忍術　超煙玉っ！！」

舞影が福音に迫り、対IS用センサー阻害煙幕をぶつける。

そのまま、舞影はセシリアと鈴の間を通り抜けて行く。

「これも貰っておくが良いっ！！」

そこにラウラが連続砲撃。福音の離脱を妨害する。

「まだまだっ！　これもサービスするよっ！！」

シャルロットがバズーカ砲を構え、福音に向かってトリガーを引く。

放たれた砲弾が真っ直ぐに飛び、そして弾けた。

弾頭から飛び出すのは　特殊金属繊維で作られた捕獲ネット。

「　！？」

それが福音を捕らえ、更に電流を流し込む。

「動きさえ止まればっ！！」

「恐るるに足らず、ですわ！！」

煙が晴れ、福音がネットを引き裂こうとする中、鈴とセシリアが背後から接近する。

「「やああああああああああっ！！」」

二機が福音の翼目掛けて、舞影のツインランサーを突き出した。

通り過ぎざまに、織羽が二人に投げ渡していたのだ。

「銀シルバールの鐘……………！！」

「確かに、取ったわよ……………！！」

網目を抜けて、ウイングにランサーが突き刺さる。

蓋的役割の装甲ごと貫かれ、銀の鐘シルバールは全砲門を展開出来なくなる。

そして 最後の一押し。

福音の正面。

突撃を仕掛ける 紅と朱。

空魔と一体化して超高速形態になった舞影と、その背に乗って突撃する紅椿だ。

紅椿は空魔に足を固定させ、空裂を両手でしっかりと握り、討ち果たすべき敵を見据える。

「行くぞ、織羽!!」

「今こそ、あたしらの力を見せる時ッ!!」

両機がスラスタを全開にして、速度をグングンと上げていく。

福音はネットのせいで動きを制限され、更にランサーのせいで全力攻撃が出来ない。

それでも、開いている砲門からエネルギー弾を発射する。

「止まるな、このままだ!!」

「空魔、突撃い!!」

被弾しながらも、更に速度を上げていく。

空魔はシールドエネルギーを突撃攻撃へと変えるシステムを発動。そのエネルギーが二機を紅蓮の炎へと変えた。

「篝っ!!」

「篝さんっ!!」

「一気にっ!!」

「決めてしまえっ!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおあああああああああああああああああああ  
あああああああっ!!!!!!!!」

裂帛の気合と共に、福音に横薙ぎの一撃。そのまま福音を押し飛ばし続ける。

そこから切っ先を跳ね上げて、福音を弾き飛ばし、更に刃を回転させるようにして振るった。

「でりゃあああああああああああああああああああああああああああああ  
あっ!!!!!!!!」

空裂の特徴 攻性エネルギーを帯状にして放つ が、福音の周囲に渦巻いて、竜巻の如く天を穿つ。



うよね……」

鈴とシャルロットは、あれを食らったのがもしも自分だったらと想像して、ちよっとゾツとしていた。

「フム……あの技は、斬艦刀と黒い馬でやるのが正式なのだそうだが……紅椿と舞影に、そういったパッケージはあるのか？」

「あんたは何をやらせる気なのよ!？」

ラウラが真剣な面持ちで何やら不審な事を言い出しているので、織羽はツッコんだのだった。

「福音……完全に沈黙しました」

「……そうか」

作戦室の千冬は深く嘆息した。

監視状態にあった福音に、篤達が勝手に戦闘を仕掛けた時には驚き、真耶はすぐに引き返させようとした。

だが、千冬は生徒達に任せる決断を取った。

それは彼女達を信じたからなのか。全く違う理由なのか、千冬にも

分からなかった。

だが、いずれは国家を背負い戦うかも知れない少女達だ。この程度をどうにか出来ないなら、この先の未来などない。

それだけは確かな事だった。

そうして、彼女達はギリギリの戦いを制し、福音を撃墜することに成功した。

しかし一度の作戦失敗と、集団命令違反は残っている。

この後始末に頭を痛めつつ、千冬は戻ってくる生徒達をどう叱ってやるうかと思った。

「……………え？」

真耶が、何かに気づき、計器で測定する。そして　　目を見開いた。

「福音、再起動！　しかもこの反応は……………！！」

「っ……………！？」

モニターに映る衛星からの映像に、作戦室の空気は一気に張り詰め





「っ　！？」

一瞬だった。

全員の横を抜けて、福音は最初の標的に襲いかかる。

その相手は　シャルロット。

鋼の手がシャルロットの顔面を捕らえ、そのまま彼方へと飛ぶ。

「そんな　！？」

「シャルロット！！」

仲間達が叫ぶ中、シャルロットを閃光が襲った。

「ぐう……あああああつ！？」

至近距離からの銀の鐘シルバークロウを喰らい、R　リヴァイブ・カスタム？が海面へと落ちていく。

「デュノアちゃん！？　クソツ！！」

「包囲して叩くぞ！！」

全員が動こうとする瞬間、福音が凄まじい弾幕を放つ。

それは今までとは比較にならない程の数で、空間そのものを制圧する程の圧力であった。

「くっ……なんて数よ……！！」

「これでは……近づくことも……！？」

回避行動を取りながら接近と反撃を試みるも、福音は更に攻撃を仕掛ける。

『エネルギー集束』

《銀の息吹》シルバークロウ発射』

「っ！？」

羽根状のエネルギー弾を螺旋状に集束させて、一点集中で撃ち放つ。

「ぐあああああつ！？」

その一撃をラウラはシールドで防御するも、その威力にシールドが耐えられず崩壊。そのまま直撃を受けて吹き飛ばされた。

福音の猛攻は更に続く。

今度は翼の先端にエネルギーを集中させる。

『エネルギー圧縮』

《シルバーソード銀の剣》発射』

翼で全身を包むような構えから一気に開き、放たれたのは高密度圧縮されたエネルギーカッター。

「うわつたあ！？」

「クソツ！？」

八本の斬撃光線を振り回され、四人は必死に回避する。

「キヤアアツ！！！」

「鈴さん！？」

甲龍の左部衝撃砲が斬り裂かれ、爆発する。

「冗談じゃないわよ！？ あんなの食らったら、一発で絶対防御を  
持っていかれるわ！」

織羽が吐き出すように言う。

「いくら軍用とはいえ、こんな……異常過ぎますわ！」

セシリアが絶望に近い声を上げる。

事実、福音の性能は異常だった。

最初の攻撃      あれは脚部、腕部の翼から放った瞬間加速。  
イグニッションブースト

そして、エネルギー翼によって砲門を必要としなくなったために、自在に放たれるエネルギー弾。

更にそれを集束、圧縮する事で別の攻撃へと変える攻撃性能。

これらは全て、福音が彼女らに勝つ為に生み出したものだ。

砲門を封じられ、一点集中の攻撃を喰らい、包囲されての連続攻撃。

そうして、最後の一撃。

それらのデータを基にして、更なる姿へと変わったのだ。

勿論、それを差し引いても、この性能は異常だった。

福音はその標的を、セシリアに定める。

「ッ!?!」

翼を羽ばたかせて突撃してくる福音。すぐにセシリアも、スラスタ

ーを噴かせて速度を上げる。

「いくら速くても、そう易々とストライク・ガンナーに……追いつけるとでも!!」

高速戦闘仕様のブルー・ティアーズに、さすがの福音も簡単には追いつけない。

だが、福音はその速度と攻撃を同時に行い、セシリアはビットが使えない為に反撃が出来ない。

「ッ……!! しつこいですわね……!!」

「セシリア、無理をするなっ!!」

攻撃を回避しつつ旋回して、ライフルを構えようとするセシリアに、  
箒が叫ぶ。

「箒、背中に乗って!!」

「行くぞ、飛ばせ!!」

再び超高速形態になった舞影。その背に乗って福音を追撃する。

しかし、それよりも早く、福音はその翼を大きくはためかせると、  
一瞬でセシリアの後ろへと回りこんだ。

そして光の翼を一際大きく展開させて、ブルー・ティアーズを包み込む。

セシリアの視界を覆い尽くす、絶望の白銀。

「あ　　ッ!!」

零距离からの銀の鐘<sup>シルバール</sup>斉射。

悲鳴さえも呑み込む破壊の嵐が、セシリアを蹂躪した。

「おのれッ!!」

「あいつ……ッ……！」

一気に迫る二機に反応して、福音が翼を広げる。そこから崩れるようにして、セシリアが墜ちていく。

「セシリア……！」

「大丈夫、絶対防御が効いてる！！ それより福音を……！」

弾幕に接近さえ出来なかった福音に、今まさに迫る。箒は墜ちていくセシリアにギリッ、と歯ぎしりしながらも、福音を睨む。

今度こそ、復活できないように叩き落す。

「行くぞ、織羽……！」

「応さっ……！」

シールドエネルギーを変換し、赤い攻撃エネルギーを纏って突撃する舞影。

交差する二色の閃光。火花が幾度も飛び散り、その激しさを物語る。

「くっ……！！！」

「負けるかぁ……ッ！」

高速状態での激突にダメージが積み重なっていく中、福音が更に動く。胸部装甲を破って生まれた翼に、エネルギーが圧縮されていく。

「っ……！？」

それに気付いた織羽は、水平状態の態勢を一気に立ち上げた。

「織羽……っ！？」

箒が叫ぶと同時に、破壊の閃光が舞影を斬り裂いた。

「ウアアアアアアアアアアアアッ……！」

装甲を斬り裂かれ、舞影が崩れ落ちる。

「織羽あっ……！」

「箒……いきなさいっ……！」

墜ちゆく直前、呼び出したビーム大筒『カノン国崩』を福音に向かって発射する。

その一撃は福音を見事に捉え、おそらくは最後のチャンスを生み出した。

「ッ………うおおおおおおおおおおおっ！！！」

一人、また一人と墜ちていった仲間達の想いを二刀に乗せて、紅椿が福音に迫る。

「落ちろ、墜ちろ、墜ちろおおおおおっ！！！」

二刀からの連撃を浴びせ、更に、つま先の展開装甲からエネルギーブレードを出して、蹴り斬る。

福音も応戦するも、出力を上げていく紅椿と、箒の阿修羅の如き気迫の前に押されていく。

苦し紛れに繰り出された福音の一撃を紙一重で躲す。リボンが散り、代わりに空裂の一撃が福音を捉えた。

「これで………！」

そして、雨月を刺突に構えて今度こそ、止めの一撃を繰り出す。

「終わり　っ!？」

キュウウウウン………！！

ガクン、と力を失う紅椿。

「そんなっ……どうして……!?! 後、一寸なのに……!」  
残酷すぎる現実に、箒が慟哭する。

「がっ……!?!」

だが、現実<sup>福音</sup>は更に残酷だった。

一瞬で福音の腕が伸びて、箒の首を鷲掴みにする。

「が……はっ……!?!」

箒をギリギリと締め上げる福音。

呼吸が封じられ、器官が悲鳴を上げる。

(死ぬのか……私は……? 皆の想いも届かせられず……やられるのか……?)

福音の翼が、箒を包み込む。

(一夏……春斗……っ!?!)

まだだ。

「あ……ああ……!?!」

まだ、諦められるものか。

紅椿の腕が、首を締める腕を掴む。

「……………あ……………うあ……………!」

そして、空いている腕で逆に福音の首を鷲掴みにして、そのまま全力で締め上げる。

諦めない。

逃げない。

最後まで戦い抜く。

胸を張って皆に　　そして、一夏と春斗に逢える自分である為に。

薄れ行く意識の中で、最後の瞬間まで戦う事を諦めない。

だが、それでも現実には残酷で、非情で。

どんなに願っても、奇跡など起きはしない。

「っ……………」



願っても、奇跡など起きはしない。

何故なら奇跡は、強い意志が起こすものだからだ。

そして、奇跡を起こして      織斑一夏と織斑春斗は帰ってきた。

皆を守る      その為に。

第31話 VSシルバリオ・ゴスペル/夜天に破壊の翼は舞う(後書き)

福音も原作より質が悪く。

果たして、あの絶望感は感じて頂けたでしょうか？

福音の武装名はオリジナルです。

銀の息吹は、ちよっと気に入ってますw

S i d e . . . ? . . . ? . . . ?

D r e s s y

W h i t e / D a w n

B e a u t y ) 前

31話、もうひとつの物語。

重要なイベント+オリジナルシーン回。

ザザア…………ン。ザアア…………アン。

「ここは…………どこだ？」

一夏は頬を撫でる風に目を覚ました。

体を起こして辺りを見渡すと、そこは見たこともない場所だった。

白い砂浜に寄せては返す白波。空はどこまでも蒼く澄み渡っている。

そして太陽はサンサンと照り、周囲をジリジリと焼く。

常夏の楽園。

そんな言葉がピッタリと合う場所だった。

「夏…………？ どうして、こんな場所に…………？」

時間も、場所も、その経緯も分からないまま、一夏は立ち上がった。制服についた砂を払い、一夏は何処かへと歩き出す。

そうしてしばらく進んでいると、何処からか声が聞こえてきた。

「…………？」

「歌声…………？」

一夏はそれが無性に気になり、声のする方へと足を向けた。

砂浜の砂が軽快な音を鳴らし、徐々に歌声もハッキリとしたものになっていった。

「ラ〜、ララ〜ラ〜、ララ〜」

透き通る様な声。その歌い手は白波に素足を濡らし、潮風に踊って波音に歌う。

白のワンピースと、雪のような長い髪。そしてやはり純白のキャブリーヌ（つば広の帽子）を、小さな両手で風に飛ばされないよう押さえていた。

「……………んしょっと」

一夏は少女に声を掛ける気にならず、近くに転がっていた、朽ちた流木に腰を下ろした。

そしてただ、その歌声と波の遅に耳を傾けていた。

「……………んんっ……………？」

体を撫でる、塩の香りを含んだ冷たい風に、春斗は目を覚ました。

開かれた瞳に最初に飛び込んできたものは 降り注がんばかりに輝く満天の星空。

「何処だ、ここは……?」

春斗はその身を起こした。そして周囲を見回す。

そこは砂浜だった。周囲を切り立った崖に囲まれており、正面は丁度、崖同士が繋がってアーチ状となっている。海岸はそこから、外海へと繋がっていた。

そしてそのアーチの上には、美しい見事な満月が輝いていた。

「まるで、プライベートビーチだね……」

どうしてこんな場所にいるのか。そんな疑問もあるが、きっとこれは夢だ。

ならばもう少しだけ、星空の天蓋を眺めてみよう。

「ところが、そうも行かないのよね」

「ッ……!?!?」

いきなり掛けられた声に驚き、春斗がガバッと体を起こす。

先程までいなかった筈の少女が、足首の辺りまでを海に浸して立っ

ていた。

漆黒のワンピースと黒のキャプリーヌ。そして月を写し取ったかのような綺麗なロングブロンド。

星光と月光とが揺らめく海面に反射して、それが少女を照らし出し、さながらスパンコールドレスのように煌めかせていた。

「君は……誰だ？」

「誰、か……。私はずっと、君の事を観てきたんだけどなあ。でも、しょうがないか。これで二度目だしね」

「……？」

臆気ながら、春斗はその声を何処かで聞いたことがあるような気がした。

「やっと、この時が来た……。もうすぐ、『私』が『私』に戻る……」  
「何を、言っているんだ……？」

「それは　　ッ！」

少女は春斗の問に答えようとしたが、ハッとしたように星空を見上げた。

「……………呼んでるわ」

「呼んでいる……？」

「そう、呼んでる……だから、行かないと」

「っ！？」

ごっつ。と、強い風が吹く。

春斗が思わず顔を逸らし、そして戻した時には、少女の姿は跡形もなく消えていた。

白い少女はいつの間にか、踊りと歌を止めていた。代わりにじつと青空を見上げていた。

「どうかしたのか？」

不思議に思った一夏は流木から腰を上げて少女に近づいていく。

「呼んでる……行かなくちゃ」

少女は一夏を見ること無く、ただ空を真っ直ぐに見つめていた。

「呼んでる……？」

一夏も少女につられて、青空を見上げる。ざあ……ざあ……と、波音だけしか一夏には聞こえない。

「なあ、誰が……あれ？」

一夏が視線を戻した時、少女の姿は何処にも無かった。まるで幻だったかのように、少女は忽然と消えてしまったのだ。

「……………」

訳が分からず、一夏は先のように流木に腰を下ろそうと海に背を向けた。

「力を、欲しますか？」

「えっ……!!？」

驚きに振り返る。すると青空だった筈の世界が、いつの間にか夕焼けに染まっていた。

そこに立っていたのは、顔半分をガードで覆い隠して白い甲冑を纏った女性。

その手に大剣をその前に携え、両手をその柄頭に預けるようにしている。

威風にして堂々たる 正しく《白い騎士》。

「力を、欲しますか……」

騎士は問う。”力”を求めるか、と。

「……力は、要らないかな」

「何故……？」

「欲しいのは、力じゃないから。俺は……強くなりたいんだ」

一夏は、自身の手を見つめ、ぎゅっと握る。

「確かに、力がなければ……戦えないだろうけど……だけど、力なんて、強さの一面でしかないものだよ」

「……………」

「だから、単なる力なら……僕は要らない」  
暁の世界で、白き騎士の問いに春斗は答える。

「ならば、あなたの言う『強さ』とは何ですか？」

「強さ、か……そうだな……友達や仲間を守れる事かな？」

「友達や仲間を……？」

聞き返す騎士に、一夏は頷いて答える。

「世の中ってさこう……皆、色んなのと戦ってるんだよ。腕力だけじゃなくて……こう、普通に暮らしててもさ」

自分でも纏まっていけないなと思いつつ、一夏は心そのままに続ける。

「そうやって戦うなかで……やっぱりあるんだよ。理不尽で不条理な暴力ってヤツがさ。そういうのから守りたんだよ……この世界で一緒に戦う友達、そして仲間を”守れる力”……それが、『強さ』だって、俺は思うんだ」

「……………」

「それは……《どんな理不尽にも立ち向かう力》なんだろうな……きつと」

「……この世界は顔も、声も、名前も、どんな風に生きて、どんな風に死んでいくのか……殆どの人がそれを知らないまま生まれて、そして消えていく……それが”世界”ってものだから。勿論、その中には僕だって含まれてる」

「でも、だからこそ……ちっぽけな自分の世界だけは、絶対に譲れないんだ」

「それが、あなたの言う強さ……？」  
騎士の問いに、春斗が首を横に振った。

「……誰もがその『ちっぽけな世界』に大切な人がいる。それを守るうと、必死に戦っている。だから僕は……自分の大切な人達の世界を守りたい。そして、その人が別の誰かの世界を守るように……その背を支えたい」

「……」  
「『有史以来、世界が平等だったことなんて一度もない』。そういつた人がいる……それはどこまでも事実で、否定することなんて出来ない」

「ええ、そうですね……」  
「だけど、『有史以来、人はそんな理不尽とずっと戦ってきた』。だからこそ、人は『強く』なれる……」

「だから、俺は強さが欲しい。力をくれるって言うなら……それを飲み込んで、俺はもっと強くなる……！」

「その為に、今すぐ力が必要だというなら遠慮なく貰う。だけどそれさえ踏みつけて、僕はもっと強くなる……！」

紅蓮の向こう、必死に叫ぶ悲しい顔。  
守りたいと思った人の、あの悲痛な顔を。叫びを。

「もう誰にも、あんな顔をさせない為に……！！」

「そう……確かに聞きました……貴方がたの『強さ』を  
騎士は静かに頷いた。

「だったら、行かなきゃね」

「それが、君の答えだっていうのならね？」

「え……?」

一夏の後ろにはいつの間にか、白い少女が立っていた。  
無邪気な瞳で一夏の顔を見上げ、その手をぎゅっと握る。

「ほら、ね?」

「さあ、目覚めの時だ! 行こう、一緒に!」

黒の少女は春斗の手をつかみ、強い意志に光る瞳を向けた。

「君は……そうか、僕は君を知っている……」

「やっと、思い出した?」

「あゝ」

二人の声を切っ掛けにして、世界が白く、そして黒く輝く。

「さあ、行こう。待ってる人の所へ……！」

混ざり合う黒白の光。

全ては遠くばやけ、夢の終わりを告げる。

「じゃ……行こうか、一夏？」

「ああ……行こうぜ、春斗！」

更識 簪は廊下を走っていた。  
所用で部屋を出ていて、そして部屋に戻ってきた時、そこに一夏の姿は無かったからだ。

彼女は焦った。

自分がここにいるのは、怪我を押しても出ようとする一夏を止める為だ。

だというのに、止められないどころか、目を離れた隙にいなくなれたなどとなったら、本気で命の危機を心配してしまう。

具体的には、A I Cで動きを止められてから、零距离砲撃を受けた上に衝撃砲を撃たれ、更に灰色の鱗殻グレイ・スケールを打ち込まれて持ち上げられて、そこに真上からスターダスト・シューターを撃ち込まれ、そのまま互いに通り過ぎるのだ。

そしてボロ屑のようになった自分に、止めとばかりに二刀を浴びせられて、自分の運命が両断剣されるのだ。

「っ……!!」

そんな未来を幻視して、簪は身震いした。

こんな筈じゃない世界を回避する為に、一夏を見つけないければ。

「あれは……！」  
花月荘の中庭。ISスーツを身に付けた一夏が立っていた。  
簪は見つかった安堵と、急がないという思いであっという間に一杯になった。

「織斑……君……！」  
スリッパのまま、中庭に飛び出す簪。

「ん？ ああ、更識さん……」  
呼び掛けられ、一夏は肩越しに振り返る。

「ど、どこに……行く気……ですか？」

「皆が戦ってるからね……俺も行かないと」

「そんな……！ 怪我……してるのに……！」

「ああ、それならもう……平気だよ」

一夏はそう言って、徐に包帯を外し始めた。

顔と両腕、そして腹の包帯を解き、邪魔なものを退かすように、貼られてあったガーゼを剥がして捨てる。

白い包帯が夜風に流れ、まるで羽衣のように簪には見えた。

「怪我が………治ってる………！？」

「意外と軽い怪我だったみたいだぞ？ もう、すっかり痛みもないし………」

「そんな………」  
信じられなかった。

一夏の怪我は簪も見ている。とてもこんな短時間で  
どんな怪我でもこんな数時間で治る訳がない。      そもそも、

「ありがとう、心配してくれて……でも、大丈夫だから」  
ギョツと拳を握り固め、一夏は笑う。

『一夏、急がないと……』

「つと……それじゃ、リベンジと行きますか!!」

一夏は右腕を高く掲げた。

そして、二人はそれを呼ぶ。

戦う為に、飛ぶ為に、共に行く者の名を力強く。

「来い、白式!!」

『行くよ、裏白式!!』

「つ……!?!」

中庭を、白と黒の光の粒子が駆け巡り、嵐となって吹き荒れる。  
木々が揺れ、小石を弾き、夜を昼へと変えるほどに眩しい輝き。

通常のISの起動ではない。これはもっと凄まじい 何かの覚  
醒めだ。

「まさか………セカンドシフト二次移行………ッ!?!」

入り混じる光の奔流の中で白式が、そして裏白式が新たなる姿へと変わる。

白き鎧は更に雄々しく、黒き鎧は更に美しく。

白き翼が二対の巨翼へと変わり、黒き翼は二対の小さき羽を加えた。

白き左腕はあらゆる敵を打ち砕く力を顕現し、黒き右腕はあらゆる敵意を阻む力を顕現させた。

白きもの、その名は雪羅<sup>せじゆら</sup>。

黒きもの、その名は晨月<sup>しんげつ</sup>。

光がはじけ飛び、そこには第二形態・雪羅をまとった一夏がいた。

『どうだ、そっちは？』

『やれやれ……今度から、こっちでもISを装着する事になったみたいだ』

相も変わらず白式に取り込まれる春斗だったが、今までと違い白のコートではなく、そこでもIS 第二形態・晨月を装備した状

態であった。

尤も、データ処理に邪魔な腕は消えているが。

『二機のスペックチェックをする。一発で頭に入れて！』  
『分かった！』

「お、織斑君……！」  
簡単な武装と機体能力をチェックしていると、簪が傍まで駆け寄っていた。

「何、更識さん？」

「あの……えっと……」  
簪は何かを言おうとして、モジモジとして、視線をチラチラと動かす。  
何を言えば良いのか、どう言えば良いのか分からず、必死に考えているようだ。

「更識さん」

「え……あつ……っ！」

一夏はグツと親指を立てた。そして、スラスターに推力を与え始めた。

噴き上がる風に、簪は思わず髪を押さえる。

「……必ず、皆で帰ってくるよ」

「うん……気を付けて……」

「んじゃ、行ってくる……！」

一夏は空を見上げると、一気に飛び上がった。  
そして、あっという間に彼方へと消えてしまった。

強敵と戦い、傷つき倒れても、更に強くなって立ち上がり、仲間の元へと駆けつける。

それはまるで、フィクションの中から現れた  
本物のヒーロー  
のようで。

「皆を守って……ヒーロー……」

簪は飛び去った一夏に、そう願いかけた。

夜の冷たい海風を切り裂いて、白い鋼翼が飛翔する。

『福音は強敵だ。今度は全力の本気で行かないとね？』

「同じ相手に、二度も不覚は取らないさ……！」

『そうだね。僕も、やられっぱなしは主義じゃないしね……！！』

「……………そろそろか？」

逸る気持ちを抑えながら、春斗に尋ねる。

『このままなら、あと4分で現着出来る！』

「……………なら、もっと飛ばす……！」

コア・ネットワークの相互位置確認によって、居場所は把握している。

移動し続けるそこを目指して、一夏は速度を上げ続けた。

やがて夜の闇の中に、舞い踊る幾つかの光が見えた。

「見えた、あそこだ……！！！」

『っ！？ まずい……！！』

銀の光が踊り、閃光が放たれる度、他の色の光が墜ちていく。ついには紅い光だけが残り、銀の光が紅い光を包み込んだ。

『一夏っ……！！』

「雪羅、カノンモードッ……！」

一夏が左手の多機能武装腕 アームドアーム 雪羅を基本モードから砲撃モードへと

切り替えると、掌が開いて、そこから砲身が出現する。



「大丈夫か、篤!？」

『ほーちゃん、怪我はない!？』

二人は、すぐに篤へと駆け寄る。

「一夏……春斗……!!」

首を締められていたのか、篤は喉を押さえながら眼前の人物へ、信じられないかのような視線を向けていた。

「おう、待たせたな」

『ごめんね。一夏が寝坊なんてするから……』

「おい、こら待て」

そうして繰り広げられる光景。

ああ、これは現実だ。  
何故？ どうして？ 浮かぶ思いは数有れど、しかし、どれもこれもが如何でも良い。

大切な人達が、大好きな人達が帰ってきてくれたのだから。

「良かった……一夏……春斗……っ！」  
ポロポロと涙を零し、その名を口にする。

「……筈、下がってる」

「え……？」

一転して、厳しい表情になる一夏。その視線の先には、荷電粒子砲でふっ飛ばした福音がその光の翼を広げていた。

『あれは……どうやら向こうも、二次移行をしたようだね？』  
「関係ないさ。あいつは……ここで倒す!!」

一夏は右手に、雪片式型を呼び出した。

「俺達の仲間、誰一人としてやらせねえっ!!」

黒白の翼と、白銀の翼。  
再び、激突の時は来た。

S i d e   ? ? ?   D r e s s y   W h i t e / D a w n   B e a u t y ( 後

原作では無かった二次移行シーンを追加。

裏白式第二形態の名前は、二転三転しましたw

次回、いよいよ決着……の予定です。

第32話

V Sシルバリオ・ゴスペルノ汝、月華を背負いて白雪に舞う者（前

銀の福音戦決着回。

独自解釈も含めて一気に行きます。

そして主人公、何気に本格戦闘は初めてという事実w

第32話 VSシルバリオ・ゴスペル/汝、月華を背負いて白雪に舞う者

「行くぜ、福音っ!!！」

『今度は負けないっ!!！』

一夏は正面から襲ってくる福音目掛けて突撃。雪片で斬りつける。

が、福音はそれを容易く回避。背後へと回り込んで反撃を放とうとする。

だが、一夏はそのまま体を回転させて、福音を迎え撃つ。

「雪羅、クローモードッ！」

その声に応えて、雪羅の指先から1メートル以上のエネルギー刃が出現。福音の装甲を斬りつける。

シルドネルギーに阻まれるも、福音を確実に捉えていた。

『敵機情報更新。攻撃レベルAで迎撃』

そのまま福音は旋回して距離を取り、光の翼を広げる。

放たれるのは破壊の嵐

シルバール  
銀の鐘

だが、一夏は迷うこと無く正面から突っ込んだ。

「雪羅、シルドモードッ!!！」

シルドモード 相殺防御開始

キン……ッ!

甲高い音と共に、雪羅が変形する。

そして光の幕が広がり、触れる全ての銀の鐘シルバールを打ち消していった。

雪羅があらゆるエネルギーを無力化する  
を展開したのだ。

零落白夜のシールド

左腕部に発現した多機能武装腕 アームトアーム 雪羅。

一夏の意味を受けて、幾つかの姿に変形するその武装は、白式を更なる領域へと導く。

シールドモードは消耗が激しいながら、しかし実弾武装を持たない福音にとって、これは恐るべき驚異だった。

「うおおおおおおおっ！！」

一夏は背中中の二対の大型スラスタ翼を使って二段階瞬間加速を發動。複雑な機動で回避しようとする福音を追撃する。

「逃さねえっ！！」

振り抜かれた斬撃が胸部の翼を切り裂き、更に白式の脚部装甲に出現したブレード《細雪》によって追撃する。

その一撃が決まり、福音が吹き飛ぶ。

「雪羅、ブレードモードッ！」

それに向かつて一夏は雪羅を更に変形させた。  
手刀に構えた状態からエネルギー刃が指先から伸びて、一体型ブレードへと変じる。

福音が態勢を立て直した時、一夏は既に眼前へと迫っていた。

「はあああああああっ！！！」

雪片、雪羅、細雪からの連続攻撃。福音が防御と回避に追い込まれ

る。

『状況変化。最大戦力での殲滅に移行』

福音の装甲が更に弾け飛び、その速度が更に上がる。そのまま距離を開いた。

「ちいっ!!!」

福音が放つ光弾をシールドで防ぐ。ダメージは無いが、その消耗が著しい。

何とか再び距離を詰めようとするも、福音は増えた光の羽根を使い、一切距離を詰めさせない。

シールドモードで弾雨を防ぐ度、エネルギーが消耗されていく。

『一夏、エネルギー残り50%を切った!!!』

「分かってる!!!」

一夏は防御から回避へと移った。海面ギリギリを飛び、襲いくる弾雨を躲し続ける。

「くそっ……これじゃ、近づけない!!!」

『だったら……向こうから近づいてもらおう?』

「やるのか!?!」

『向こうが、この距離で戦いたいって言うんだ……だったら、相手をしようじゃないか!』

「『『『「シールドリバーズ表裏反転!』』』」

瞬間。白式を黒の光が包み、僅かゼロコンマ秒の速度で入れ替わる。

全身を包む、メタリックブラック漆黒にゴールドラインの入ったISアーマー。

一对の大型スラスターウイングと、機動制御用ウイング。

頭部には初期型ハイパーセンサーを模したユニットを装備して、左手には月影。右腕には、二次移行して発現した特殊兵装・晨月。

それこそが、裏白式第二形態・晨月。

『春斗、行けるのか?』

と、プラネタリウムのような場所　裏白式の内部仮想世界に取り込まれた一夏が、心配そうに尋ねてくる。

「大丈夫、行けるよ……!」

春斗は不思議な感覚に包まれていた。

裏白式が発現した時でさえ、ここまでは感じ無かった圧倒的な一体感。

まるでこの晨月こそが、”自分の本来の体”のようにさえ、自然と思えてしまう。

故に分かる。動ける。全てが思うままになる。

春斗は自在に空を舞い踊り、襲ってくるエネルギー弾を尽く回避していく。

「まずは、ちょっと落ち着いてもらおうかな?」

ぐるん、と逆立ちするように反転させ、月影の弦を引く。

放たれた光矢が、弾雨を抜けて福音を直撃。

更に数発を続けて射る。

月影 短弓形態。

展開装甲を起動させないことで、速射力を優先する。

『敵機情報更新。 遠距離武装を確認。 銀の鐘最大稼働』

更に襲ってくる弾雨。

「晨月、カウンタースystem《双月》！ プラス、月之雫起動ッ！」

右手の多機能戦術腕 タクティクスアーム 晨月が変形し、二門の砲口 牽制・迎撃

射撃システム《双月》を出現させる。

そしてスラスタ上部、腰部アーマー、脚部装甲外側の一部が動き、鋭角なユニットを突き出す。

「攻撃軌道確認 迎撃っ！！！」

合計八門。そこから一斉に、エネルギー 弾を撃ち放つ。

連射される迎撃弾は、命中軌道上にある全てのエネルギー弾を、一発残らず撃ち落とす。

「そんな程度の攻撃で……この裏白式を墜とせるとでも思ったか？ 春斗は月影を展開。大弓モードへと切り替える。

「晨月、システムチェンジ！ 《虚月》ッ！！！」

更に晨月を変形させる。そして弦を引くと、四つの矢が一度に弓掛けられた。

「ハッ！！」  
それを一気に射ち放つ。一直線に飛ぶ四矢。が、福音はそれをあっさり回避し。

ドドドドオオオオン……ッ！！

「……ッ！？」

その全てが直撃した。  
攻撃を回避して、反撃に転じようとした福音目掛けて、全ての矢が追尾してきたのだ。

「まだまだ……今度は、これだ！」

更に弦を引くと、今度は丸太の様に太い矢が生まれる。  
弓を思いつ切り引き絞り、そして射ち放つ。

バアアアアアアアアンツ！！

放った瞬間に矢が弾けて、散弾となって福音を襲った。  
その数は、銀の鐘シルバーベルにも匹敵する程であった。

月影用特殊射撃システム《虚月》。  
威力はあるが、しかし単発でしか攻撃できない月影を補助する為のシステム。

『敵能力情報更新　集束攻撃にて対応』  
ならばと福音は、集束攻撃　銀の息吹を放つ。

「システムチェンジ、《月暈》ッ！！」  
春斗の言葉に、晨月がまたしても変形する。掌が開き、そこからレ  
ンズ状のユニットが出現する。

そして空間に銀色の波紋が広がり、銀の息吹を受け止める。

「くっ……っ！」

攻撃圧力に耐える晨月の装甲が開き、そこにあつた金色のラインが  
強く光る。

数秒の拮抗。やがて銀の息吹が消えると、月暈も閉じられた。

ダメージ軽減率 61.37%　変換率 33.77%

「どう、一夏？ エネルギーはどこまで回復した？」

『53%……まあまあつてところか？』

「いまいち効率が悪いなあ。これだから未調整の武装ってヤツは…  
…」

春斗は、あまり満足出来ない結果に嘆息した。

「まあ、良いか。ダメージは大して無いしね……さあっ！」

春斗は徐に夜天を　その中心に輝く月を指差した。

「千変万化の月に挑む愚かさを……とくと刻め！！」

特殊戦術システム『百目』展開

初期型ハイパーセンサーを模したユニット【百目】が、春斗の顔半分を覆い隠す。

「舞い踊り、そして穿て……ムーン・ティアーズ月之雫ッ!!!」

その掛け声と共に、六つの砲台が切り離されて飛翔する。

BT兵器ブルー・ティアーズ。

かつてそのデータを解析した記録から生み出された、多角援護射撃ユニット月之雫。ムーン・ティアーズ

高速複雑機動を行う福音だったが、その行く先を尽く射撃が撃ち抜く。

特殊戦術システム百目は、操縦者春斗の思考パターンを複写し、模倣したものである。

それを通す事で、六機のビットを制御しつつ更に自由に行動する事が出来る。

そうして動きを止められた瞬間、福音を光の矢が射ち抜く。回避予測と誘導による、先置き射撃である。

『敵機情報更新。遠距離戦闘から、近距離戦闘による殲滅に切り替え』

多方からの攻撃を受けて、福音が遠距離での戦闘を不利と判断し、一気に加速して距離を詰めようとする。

「くっ……!!」

月之雫による牽制射撃を物ともせず、福音が迫る。春斗はすぐさま

回避行動に移った。

後方から追いつがる福音の射撃を滑るように躲し、ビットによる迎撃を行う。

だが、福音の射撃力はずっと高く、それを撃ち落として裏白式を更に背後から襲撃する。

春斗は制御用ウイングを巧みに操り弾雨を回避するが、どうしても直撃を受けてしまう。

「ぐあっ……くっ！」

白式に比べて、裏白式は防御力が低い。その為、一撃に食らうダメージも大きくなってしまう。

その一瞬の隙に、福音が瞬間加速で裏白式の前に回り込む。

「ッ　！？」

春斗が動くよりも早く、光の翼が巨大になって包みこむ。そして

バキイイイインッ！！

翼が、二刀に斬り裂かれた。

「よう、久しぶり」

光の翼がガラスのように砕け散り、雪羅ブレードモード、そして雪片を振り抜いた白式が姿を現す。

二刀による零落白夜は、エネルギーの塊である福音の翼を容易に打ち消した。

「　　だなっ！！」

「　　！？」

大型推進力を失った福音に、一夏は雪片を振るう。

「でりゃああっ！！」

残った翼で福音がギリギリ躲すも、更に細雪の零落白夜がまた一つ翼をもぎ取った。

福音はすぐに翼を再生。一気に加速して白式の間合いから離脱を計る。

「離脱なんかさせるかッ！」

白式はすぐさま、それを追撃した。

「白式第二形態【雪羅】、裏白式第二形態【晨月】……！！」  
作戦室では真耶が、モニターに上がるスペックデータに、驚愕していた。

「二次移行に合わせて、今まで白式の分しかなかったエネルギーが、完全に別れて存在している……！！？　しかも、裏白式的能力……攻性エネルギーの軽減・吸収！？　それをコア・バイパスを通して白

式のエネルギーに変換……こんなの、どの国家も研究施設も実験さえ出来ていないのに……!!」

二次移行を果たした事で、二機のエネルギーは完全に別の物として区分された。

白式600、裏白式700。合計1300。単純計算で2倍の容量である。

更に、それが常にコア・バイパスを繋げてエネルギーをやり取りしているなど、前代未聞の事だ。

ISは、単純にコアを増やせば出力が上がるのかというと、そうではない。

コアが複数あると、搭乗者とのシンクロニティが阻害される事が分かっているからだ。

これはコアの深層にあるとされる意識が、もう一方のコアを異物として認識してしまう為に起こるらしい。

俗的に言つなら、『浮気者にはそっぽを向く。』という事だ。

現在、『コアを複数積んだIS』というのは存在しない事になっている。

しかし白式と裏白式は、二機のコアを別のISにする事で、これを解決したというのか。

「……………」

千冬は興奮している真耶を尻目に、ただ戦闘を見守り続ける。

その瞳は『教師 織斑千冬』ではなく、『一人の姉 織斑千冬』であつた。

「 ロット……シャルロット……ッ！」

「 ……うづ……？」

PICで海面に浮かんでいたシャルロットが、うめき声を上げてうつすらと目を開く。

「り……ん……？」

「おはよ、シャルロット」

鈴に手を引かれ、シャルロットが海から上がる。

「っ……福音は？」

「 あそこだ」

「 ラウラ？」

代わって答えたラウラが指差す方向。夜の闇を切り裂いて激突する銀と白。

「一夏……ッ！？」

間合いが離れた瞬間、裏白式の射撃が飛ぶ。

それを回避すると、福音は再び接近する。それを白式が迎え打つ。次々に二色が入れ替わり、福音を翻弄する。

「どうやら、大事無かったようだな」

「ほら、あたしの言った通りだったでしょ……………シャルロット？」

と、内心の動揺を抑えながら胸をはる鈴。

「……………」

「……………」

てつきり大喜びするだろうと思っていた鈴は、静か過ぎるシャルロットに首を捻って、その顔を覗き込んだ。

「あつ……………」

ポロポロと、シャルロットの瞳から零れ続ける雫が見えた。

「良かった……………春斗……………本当に……………っ！」

シャルロットは口元を押さえて必死に堪えようとするが、それでも嗚咽は零れて落ちて行く。

「気持ち分かるが……………その涙は取っておけ。今は、福音を止める事が先だ」

「っ……………うん、そうだね……………！」

ラウラの言葉にシャルロットは涙を拭い、そして強い輝きを瞳に宿す。

「行こう、僕達も……………！」

三機は再び、戦いの空へと昇った。

ざばあ、と海から上がる影は二つ。

ブルー・ティアーズと、それを抱える舞影だ。

「ったく、何で沈んでるのよ!? P I Cはどうしたのよ!? 蒼<sup>ブルー</sup>

い栗<sup>ティアーズ</sup>って名前はハリボテか!? 蒼い金槌<sup>ブルー・カネツチ</sup>とでも改名しなさいよ!

!」

「そんな事言われなくても、システム復旧が上手くいかないのですから仕方ないでしょう!?」

「うっさい! さっさと復活させないと部屋にあるあのポスター、全部ひっぺがして手裏剣打ちの的にするわよ!」

「なっ!? あれは私の個人的家宝ですよ!」

「織斑君にお姫様抱っこされてるあの写真が? てか、お手製でポスターにするな!」

「ほつといてくださいましっ！ ……これで行ける筈……………っ！！」  
やっとシステム復旧を果たして、ブルー・ティアーズが推力を取り戻す。

「ったく……………どうやら、クライマックスには間に合いそうね？」

「あれは、一夏さん……………！？ どうしてここに！？」

上空で戦う白式を見やり、セシリアが驚く。

「さあ？ でも、ここからが勝負って事は確かね……………じゃ、行きま  
すか！！」

「……………ええ、ここからが反撃のお時間ですわっ！！」

ブルー・ティアーズと舞影が、再び戦場へと向けて飛び立った。

「くそつ、エネルギーが30%を切った……！」  
『裏白式の方ももう残り少ない……くそ、リミッター無しとはいえ、  
どれだけの容量なんだ!?』  
コア・バイパスから白式にエネルギーを渡しつつ戦闘を行って来た  
が、いよいよ限界が近づいてきた。

ISコアには通常、リミッターが設けられているが、軍用ISには  
それが無い。  
その違いは、運用の目的そのものにある。

白式や他のISは競技用仕様。  
ISコアのエネルギー制限を掛ける事で、回転率を上げている。

このメリットとしては、ISのエネルギー回復の早さがある。  
コアの全容量を100とし、リミッターを40で定めた場合、消耗  
した40に対して60からの供給が入る為、その分エネルギー回復  
が早まるのだ。

対する軍用は、100をそのまま100として運用する為、その容  
量が半端ではない。  
代わりに、エネルギー回復が競技用よりも遅くなるデメリットがあ  
る。

運用時間と運用回数。

それがリミッターの有無の意味である。

とはいえ、零落白夜を何度も受けながら、一向に力落ちしない福音に流石の春斗も焦る。

(やっぱりこれは……あの人が関わっているとみるべきだな……くそ、厄介な事をしてくれる……！)

春斗は、この事件を仕組んだであろう”黒幕”に対して、思わず舌打ちする。

福音の弾幕を、一夏はシールドモードで受け止める。

「まずい、これ以上は……！」

消耗がいよいよ限界。それでも尚、攻撃を続けようとする福音。

「ッ!？」

そこに届いた海上からの、二発の射撃が福音を捉えた。

「お待ちせしました、一夏さん!!」

「やつほー、織斑君！ 助っ人は如何かな？」

セシリアと織羽　ブルー・ティアーズと舞影からの援護射撃である。

更に福音目掛けて、拡散衝撃砲とマイクロミサイル、レールカノンが一斉発射された。

大火力の集中砲火を浴びて、福音が瞬く間に炎に呑み込まれていく。

「お待たせ！」

「すまん、回復に手間取った……！」

更に鈴、ラウラ、シャルロットが戦線に復帰する。

『春斗……大丈夫なの？』

シークレットチャンネル  
秘匿回線を使い、シャルロットが不安気に尋ねる。

『うん……ただいま、シャル』

『っ……おかえり、春斗……！』

その声を聞き、シャルロットはまた涙が零れそうになる。

「エネルギーは充分。さあ、一気に終わらせるわよ！」

「嫁に、私の良い所をしつかりと見せてやろう」

「ブルー・ティアーズが魅せる麗しきワルツ……ご覧入れますわ！」

「出し惜しみ無しで、全弾持つて行ってもらうからね……！」

「さつさと片付けて……美味しいご飯、食べに帰りましょう……！」

五人それぞれに決着への意思を示し、そして一夏がギュツと顔を引き締める。

『遠距離のフォローは大丈夫だね……ギリギリまで白式にエネルギーを回すよ』

そうして、裏白式から活動限界ギリギリまで、エネルギーが送り込まれる。

正真正銘、これが最後の補給。一夏は少しばかり回復したエネルギーを確認し、そして上空を見上げる。

「よし、行くぞ皆ッ!！」

爆煙の向こう、姿を表した福音に最後の戦いを挑む。

「一夏……春斗……皆……!！」

箒の見つめる視線の先。復活した白式と、撃墜された仲間達が復帰し、福音と激突を繰り返している。

箒は一人、そこに行けない自分を齒がゆく思う。

起動状態からのエネルギー回復はかなり遅い。前線に出るのは間に合わないだろう。

「っ……!！」

誰でもいい。悪魔でも構わない。今すぐ、戦う為の力を自分に与えてくれ。

力が欲しい？

誰かが、そう問いかける。

（ああ、欲しい……今すぐに！）

何の為に？

（守りたい……皆を！ 大切な人の背中を支えたい……その為に！）

それが、貴女の想いだというのなら……。

「っ……！？」

突如として紅椿の展開装甲が全て開き、そこから全身を包み込むようにして、紅い光と共に金色の光が溢れ出す。

ワンオフアビリティ  
単一仕様能力《絢爛舞踏》発動。展開装甲とのバイパス接続

「これは……エネルギーが回復していく!?」  
通常ではあり得ない速度で、紅椿が力を取り戻していくのを目の当たりにして、筈が驚きの声を上げる。

黒の前に立ち、そして白と並び立つ者。

不意に、束の言葉がリフレインした。

「そうか、そういう事なのか……紅椿よ！」

今、幕の昼間の問い掛けに、紅椿が答えてくれた気がした。

「行くぞ、紅椿ッ！」

キッと、夜空に咲く閃光を睨み、その翼を広げて飛び立った。

「ラウラ、頼む！」

「任せろ！！」

ラウラは両砲門から、牽制砲撃を連射する。それを回避する福音に  
一夏は一気に接近する。

「ハアツ！！」

袈裟懸けに振るう一撃。しかしそれをクルリと回避し、福音が舞い  
踊るように飛ぶ。

『エネルギー圧縮

シルバースト  
銀の剣、発射』

バシユウウウウウツ！！

十二本もの斬撃光線が海を、そして星空を切り裂く。  
全機、その機動予測から回避行動を取る。

その隙に福音は高く舞い上がると、その翼を大きく広げた。  
そして、その身をグルンと回して翼を振るった。

舞い散って襲いくる

銀の鐘シルバールによる超広範囲弾幕。

「雪羅あつー!!」

一夏はシールドモードの雪羅を横薙ぎに振るい、零落白夜を解放。広範囲障壁を展開して、それらを打ち消していく。

『まずい、今のでガス欠寸前だ!!』

エネルギーゲージが限界を告げ、赤く警報を鳴らす。

「ヤバい、また弾幕が来る……!!」

「一夏、僕の後ろに!!」

再びの弾雨の予兆に、それぞれが動く。が、福音はそれを撃たなかつた。

何故なら、それを妨害する影があつたからだ。

「ハアアアアアアアツ！」

紅い影は福音に自立攻撃ユニットを飛ばし、更に斬撃エネルギーを撃ち放つて福音を牽制した。

「あれは紅椿……箒か!？」

「皆、大丈夫か!？」

向こうから向かってくる紅いシルエット。箒はそのまま皆に伝えた。

「皆、少しの間だけ福音を押さえてくれ!」

「何をする気ですの……?」

「説明をしている時間はない……私を信じてくれ！」

「何をやる気かは知らないけど……急ぎなさいよ！モタモタしてたら、あたしが福音墜としちゃうんだからね！！！」

「ちよつと、待ちなさいよ織羽！！！」

「純粹に疑問を呈した私が、”ケーワイ”みたいなリアクションを取らないでください！！！」

先陣を切って、織羽が福音に向かう。その後を追って、セシリアと鈴が飛んだ。

ラウラとシャルロットは、すでに遠方からの援護射撃を行っていた。

福音の注意が逸れたのを確認し、箒は一夏の両手を掴んだ。

「箒、何を……？」

「いいから、そのままだ……！！！」

箒は瞳を閉じて、意識を研ぎ澄ます。

( 思い出せ……あの感覚を…… )

すると、展開装甲が開き、金色の光が溢れ出た。それはそのまま、白式を包みこんで行った。

『こ、これは……!?!』

驚いたような一夏の声が、脳内で響く。

『白式と裏白式のエネルギーが……回復していく!?!?』  
今度は、一夏に似た声が脳内で響く。

(……………?)

うつすらと目を開く。紅椿の腕が見えて、そして  
る二つの腕が見えた。

それと繋が

箒はそこで、奇妙な事に気が付いた。

左手と繋がっているのは白い手で、右手と繋がっているのは黒い手だったからだ。

どういう事だろうか、箒がその視線を持ち上げる。

(……っ!?)

そこにいたのは、二人の一夏。

一人は白のISを身に纏い、もう一人は黒いISを身に付けていた。

何がどうして?

そう言葉にしようとするも、声が出ない。よくよく見れば、その場所は奇妙な世界だった。

白と、黒と、紅の粒子光の混じり輝く場所。おおよそ、現実とは思えない世界だった。

『これなら……行けるよ、一夏!』

黒いISの少年が言う。

『ああ、行こうぜ春斗!』

白いISの少年が応える。

(一夏……春斗……!?)

「 箒? 」

「 は つ! ? 」

突然掛けられた声に、箒がハッと我に返る。

「 サンキュー! 。 理屈は分からないけど…… エネルギーは満タンだ! 」  
「 う、うむ…… そうだな 」

そこはさっき見たような世界ではなかった。いつも通りの現実の世界で、箒は自分が夢でも見ていたかのような気持ちだった。

キィィ…… イーン。

紅椿が

鳴いた。

夢ではない。あれは現実だと示すかのように。

（紅椿……私に教えようとしたのか……？  
あれが、” 真実 ” なのだと……？）

もう一度だけ、紅椿が鳴いた気がした。

『熱いね……一夏』

『ああ、凄く熱い……』

熱い。体が、血が、心が、魂が震えて、マグマよりも朱々と燃え滾る。

『負けらんないね……これはさー!』

『ああ、負けられるもんかよ……ッ!』

二人はその滾りに身を任せる。

### 搭乗者マインドリンク上昇

二人は願う。絶対無敵の力を。

最強の剣を。

最強の盾を。

最強の翼を。

最強の鎧を。

汚れも知らぬ子供の夢が描くような、矛盾に満ちた存在。  
それを純粹に、二人が願う。

コア・シンパレート上昇。 1 2 0 …… 1 3 5 …… 1 4 6 ……

1 7 3 ……

そしてその願いを叶える為に

更なる覚醒が始まる。

コア共鳴起動 シンクロロニティ 月華白雪

それは突然だった。

白と黒の光が、白式から溢れ出たかと思うと、それが一瞬にして天と海を貫いた。

「これは……何!？」

「ISが……震えているの!？」

「まさか、三次移行サーフィングなのか……!？」

突如として制御不能となったIS達。それは福音さえも例外でなく、ただ呆然とそれを見ているようだった。

やがて光が細まり、そこに現れたのは　　一機のISだった。

白地に黒のラインが幾重にも走り、大型ウイングは黒白の翼がバツの字に配置され、そして十字型に機動制御用ウイングと、合計八つのスラスタ―。

当然、月之雫も装備されている。

頭部には、裏白式のその色違いになった百目。黒の多い脚部には、細雪と月之雫。

そして、右腕部には黒地に白の混じった晨月。左腕部には白地に黒の混じった雪羅。

その翼は、誰よりも早く駆けつけて、溢れる涙を拭うために。

その腕は、何者にも打ち勝って、悲しみの全てを打ち砕くために。

ただ純粹に、願いを叶えられる姿となった　　その名を”彼”  
は高らかに告げる。

「「月華白雪……!!」」  
げっかしらゆき

その名に恥じない、白い光子を散らしながら 月華白雪が舞う。

『 つ!?!? 』

一瞬にして仲間達の横を抜けたかと思うと、すでに福音に一撃を見舞っていた。

その右手には雪片式型。しかも、通常のブレード形態だ。

「「……ッ!」「」

背中ของウイングが開き、一瞬で姿が消える。

その度に白い輝線だけが残り、福音が踊らされるかのように弾かれる。

上下左右360度全ての方向から、月華白雪が福音を斬りつけていく。

「なんて速さなのよ……!?!?」

高感度ハイパーセンサーでさえ、その機動を追うのが精一杯であった。

『敵機最高速度、当機の141%。離脱成功確率0、000000  
0024%』

福音は攻撃の嵐の中で、絶望的な戦力計算を行っていた。

『敵機攻撃能力未知数。撃墜可能確率0、000000000077%』  
どちらもゼロに等しい数字ながら、福音は月華白雪の撃墜を選択す  
る。

出来る限り最高の加速で距離を取ると、全エネルギーを眼前へと集  
束させた。

『シルバプレス銀の息吹オーバーチャージ』

バチバチと限界を超えて集中していく銀色の光。

そのチャージタイムの時間で、月華白雪は簡単に いや、そも  
そも距離を取ることさえ不可能であった筈だ。

なのに、相手はあえて追おうとしなかった。

その意図は、人ならざる福音には理解できなかった。ただ 手  
ヤージが終了した事だけが全てであった。

「いかん、あれを撃たせたら……!!」  
ラウラがチャージを続ける福音を砲撃しようとした。が、スッと腕が伸びてそれを制した。

「一夏……!?!」

「大丈夫。皆は離れててくれ……」

”彼”は真っ直ぐに福音を捉えたまま、視線を外さない。

そしてついに、破壊の息吹が撃ち放たれた。

『来る……あれが恐らく最後の一撃……!!』  
『なら、真っ向から叩き潰す!!』

「晨月、ドレインシステム《月暈》!!」  
タクティクスアーム  
右手の多機能武装腕 晨月を変形させる。  
そして力場を形成して 破壊の奔流を受け止めた。

ズズウウウウンッ！ と、響く波動。

押さえ込まれなかったエネルギーが飛び散り、周囲を無作為に破壊していく。

晨月のエナジーラインが、今にも焼き切れてしまうのではないかという程に輝く。

”彼”はその状態のまま、左腕を引いた。

「雪羅、カノンモードッ！ オーバーチャージッ！！」

雪羅の装甲が開き、真紅のエネルギーラインが光り輝く。  
銀の息吹シルバークレスの威力を軽減し、そのままカノンモードへと直結させたのだ。

カノンモード、出力155%

”彼”は破壊の息吹が消え去ると同時に、右腕を引いて入れ替えるように左手を突き出した。

「全部纏めて……そつちに返すぜッ！！」

カノンモードから放たれた閃光が、福音を呑み込む。

ギリギリで翼を用いて防御をしたようだが、それさえも纏めて、破壊の閃光が福音を蹂躪した。

「!?!?!?!?!」

絶叫さえ掻き消して、大爆発が起こる。

『敵機情報更新。本機のスペックにての撃墜可能確率

0%』

その黒煙を抜けて、福音が離脱を計る。

「ッ  
!?!」

その翼を、飛翔して貫く刃。

雪片式型と弓剣月影が、残っていたウイングの装甲を貫通していた。

そして、福音の上空　　月を背負って立つ黑白のIS。

頭部バイザーユニットが降りると、両手を翼の如く広げた。

「晨月、アクセスシステム《げっこう月虹》ッ!」

”一夏”が命じると晨月の装甲が開き、金色の光が溢れ出した。

「雪羅、ブレイクモードッ!」

”春斗”が命じると雪羅の装甲が開き、純白の光を溢れさせた。

ブウン、とバイザーに光が生まれる。

福音は、それが凄まじく、そして恐ろしい力であることを悟る。  
そしてそれは、『どれだけ逃げようとしても、必ず自分を捉える』  
事も理解した。

スラスタ―翼が光を放ち、月光に反射して煌めき、二色の残光と共に月華白雪が突撃する。

そして、閃光が世界を昼へと変えた。

「コア・アクセス……ッ！」

一撃。晨月を振りかぶり、頭部に叩きつける。

バイザーに見える、電腦の世界。

その奥　断絶されたネットワークを強制接続して、その全てを支配する。

『コネクト確認……春斗ッ！』

ネットワークを抜けて迫る。福音の世界。

『見えた……あれだ！』

暗く淀んだ、黒い霧に包まれたコア目掛けて、春斗は雪羅を振り上げる。

「プログラム……ブレイクッ！」  
引き裂くように斬光を刻む雪羅。一瞬の間を置いて、霧に亀裂が走  
っていく。

パキイイイイイイイン。

そして済んだ音を立てて、それは碎け散った。

闇を払拭され、蘇るのは美しい銀色の世界。鳴り響く鐘の音は、そ  
の名の如く福音の調べ。

ありがとう、新しい騎士様

幼い少女の声が、そう告げたような気がした。

まばゆい閃光が消えると、白式へと戻った一夏が、力を失い眠る福音を抱き上げていた。

「一夏……?」

「終わった……の?」

一夏の腕の中で、銀の福音は待機状態へと戻り、金色の髪が海風に揺れた。  
シルバリオ・ゴスヘル

意識は失っているようだが、呼吸はしっかりしているので命に別状はないようだ。

そして福音もまた、破壊まで行かずに停止していた。

「任務完了。福音の停止を……かく……にん……」

ぐらじ。

一夏の体が揺れ、そして福音の操縦者ごと海へと墜ちていった。

### 第32話

VSシルバリオ・ゴスペル/汝、月華を背負いて白雪に舞う者(後

やっと福音決着しました。

コアリミッターや、コア同士のトラブルなんかは完全にオリジナルです。

月華白雪はあくまでも合体ではなく、別の要素ですw

三巻もいよいよ終幕となります。それではまた。

第33話 月下の語り部は秘密を語る（前書き）

第三巻ラスト……の一話前。

結局、収まりませんでしたw

というわけで、色々秘密の明るみに出るccc話、ぶっぞ。

### 第33話 月下の語り部は秘密を語る

星空には満月。

たゆたう波の調べに、黒の少女は耳を傾けていた。

「……………珍しいわね、私の世界に来るなんて」  
振り返らずに、少女は後に立つ騎士に言う。

「あなたが、ついに目覚めたのですから……………一言なりはあるのですよ？」

「そう？ こつちには無いんだけどね」

悪びれもなく言いながら、少女は肩を竦める。騎士はそんな様子はいつもの事と気にせず、少女の横に進み立った。

「あなたは何故……………あの少年を選んだのですか？ 誰も認めなかつたあなたが、どうして……………？」

「うん……………別を選んでたって程じゃないけどね。最初は単なる興味。そこからずつと見てきて……………うん、気に入ったからかしらね？」  
ざざあああん、と波が大きく飛沫を上げる。

「人はね、すつごく面白いのよ。小さな事で一喜一憂して、笑って泣いて、怒って……………誰かを好きになって、その人の為になら、全てを懸けて戦う事だって出来る」

少女が黒のキャプリーヌを脱ぐ。月光のブロンドが風にゆらぎ、そしてそこに現れたのは 黒い魔術師。

「だから、私は行く事を選んだのよ。あの子の未来を切り開く為に」

「……………あの子も、同じような事を言っていましたね」

「そうですね。でなきゃ、あんな無茶苦茶出来っこないもの」  
魔術師がそう言って笑うと、騎士はフツと小さく微笑む。

そして、その踵を返した。

「では、私は行きます。いずれまた、会う事もあるでしょう……」

「その時は、菓子折ぐらい用意する事。それが人の常識よ？」

「……努力はしましょう」

風が吹いて、騎士の姿が溶けるようにして消える。

「さて、そろそろお出かけしますか……ねっ！」

海風が強く吹き抜けると、それに乗って、魔術師は天高く舞い上がった。

花月荘の教員室。

福音との戦いを制した後、意識を失った一夏はそのまま部屋へと運び込まれ、福音の搭乗者は学園の手配した医療施設へと運び込まれた。

そうして、少しばかりの時間が流れた。

「ん……んん……?」

かすかに呻きながら、一夏は目を覚ます。

煌々と室内を照らす蛍光灯の明かりを眩しがりつつも、ダルさの残る体を起こした。

「あ……あ？」

ぼんやりとしている頭を振って、意識を揺り起こす。

そうしてから周囲を見回して、そこが何処かに気が付いた。

「ここは……旅館の部屋？ 何でこんな所に……?」

どうしてここで布団に寝かされているのか、思い出そうとするが、どうにもはつきり思い出せない。

（確か、箒にエネルギー貰って……で、なんか、凄い体が熱くなつて、力がすっごい溢れてきて……そうだ、俺は……）

順序立てて思い出していく中で、そこに思い立った。

（俺は……春斗と一つになったんだ）

今までも意識リンクをした事はあった。だが、あれはそんなレベルではなかった。身も心も融け合って、文字通り一体化していた。

そして、大凡不可能な筈の出鱈目な機動力。絶大なる攻撃力と防御力。

何より圧倒的なエネルギー出力は、恐らくリミッターが一時的に解除されていたのだろう。

脳裏に走った、二機のISの長所のみを寄せ集めた様な  
全領域において一切揺るがない最高のスペック。

月華白雪。

その力の終わりと共に、自分は意識を失ったのだ。

「……………やっぱり、アレのせいだよなあ〜？　なあ、春斗はどう思う？」

「夏は春斗なら何か分かるだろうかと、声を掛ける。」

「……………春斗？」

「覚醒している気配はあるのに、返事が帰って来ない。もう一度、夏は呼び掛けた。」

「……………え、何？」

「何って……………おいおい、大丈夫か？」

『……大丈夫だよ。ちよつと、ぼんやりしてただけさ』  
『……そうか、珍しいな』  
春斗がぼんやりとするなど、一夏の知る限りでは片手で足りてしま  
う程だ。

本当に大丈夫なのかと、一夏は不安を覚える。  
恐らくは月華白雪の影響で、自分は意識を意識を失ったのだ。そし  
て今も、少しばかりダルさがある。

その影響を春斗が受けていないとは、とても思えなかった。

「一夏、目を覚ましたのか……！」

「箒……？」

鍵が掛かっていなかったのか、ドアが開いて入ってきたのは浴衣姿  
の箒だった。

その手には大皿が乗っていた御盆がある。

「良かった……体は大丈夫か？」

「ああ。箒、俺はどれくらい寝てんだ？」

「ほんの一時間ほどだ。だが、本当に驚いたぞ？ いきなりISSま  
で解除されて、真つ逆さまに海に落ちていったのだから……」

「……紐なし空中バンジーは勘弁して欲しいなあ」  
あの高度から落ちたら海面はコンクリートだ。きつと朝刊のトップ  
ニュースにでもなってしまうだろう。

いや、むしろならないかも知れないが。

「それで、福音の操縦者は……？」

「病院に運ばれた。意識はなかったが、特に異常は無いらしい」

「そっか……良かった」

「……良くない」

一夏がほっと胸を撫で下ろしたところ、箒が途端に不機嫌となった。一体何が良くないのか。でも、それを聞いたら絶対に睨まれて怒鳴られるんだろつなと一夏は思ったので聞かなかった。

「お前はあんな怪我をしていて……なのにあんな所に出てきて……その上、福音を倒したらそのまま意識を失って……私が……皆がどれだけ心配したことが……！」

聞かなくても、同じだったようだ。

「いや、怪我治ってたし……」

「それは知っている！　だが、そういう事ではないだろう!？」

「んな事言われたって……ていうか、お前らが福音に喧嘩売りに行つたって知った時は驚いたんだぞ？　俺が駆けつけなかったら、マジで危なかったんだから……その辺は反省しろよ？」

「むう……確かに事実だが、どうにも釈然としない」

箒はいまいち納得行かないという風に、顔を顰める。

ぐうう。

「っ……!!」

一夏の腹の虫が、突然鳴き出した。

何せ昼の出撃前に最低限の水分以外は摂取していない。つまり朝以降、何も食べていないのだ。

そんな状態であれだけ体力を使う事をすれば、空腹も限界。意識すれば胃がキリキリと痛い。

貧すれば鈍する　別に貧してはいないが　とも言うし、空腹過ぎて動けなくならない内に、何かを食べたいところだ。

「やれやれ、目を覚ませば早速か？　ほら、これを食え」

箸が差し出したのは持つてきた御盆だった。大皿には、大きめのおにぎりが四つ。それと漬物の乗った小皿。そして、ペットボトルのお茶だった。

これらは女将が事前に用意してくれていたの物で、すでに自分達は食事を済ませたと、箸は言った。

あの後、帰還した面々を待つていたのは千冬からのお叱りだった。

一夏が気を失ったままだったので、小言は無しに七人全員に拳骨が振り下ろされた。

その一撃が強烈すぎたせいで簪が一時、呼吸停止してしまい、大慌て吹き返させたりしたらしい。

後は学園に帰った後、反省文と懲罰訓練が待っているとの事だ。

そんな事を聞きつつ、一夏はあつという間におにぎりと漬物を平らげてしまった。

何時もならば、しっかり噛んでと気を使うところなのだが、今の胃にそんな余裕はなかった。

「ふう……ごちそうさまでした、と」

空腹を満たして、ようやく一夏は人心地ついた。

ふと時計を見ると、もう午後8時を回ろうとしていた。

「おっと、そうだ」

一夏は大事なことを思い出し、自分のバッグを漁りだした。

そうして取り出したのは包装された二つの箱。

「箒。はい、これ」

「これは……？」

「誕生日プレゼントだよ。今日は七月七日……箒の誕生日じゃないか」

「あつ……覚えていてくれたのか？」

「忘れるかよ。大事な幼馴染のことなんだし……これは俺からだ」

そう言つて一夏は、まず正方形の箱を手渡した。

「開けて良いか？」

「おう」

箒が包装を解いて箱を開けると、そこには真新しい白いリボンがあった。

手触りは心地良く、それなりに質の良い物だというのがすぐに分かった。

「何にしようか迷ったんだけど……普段使う物の方が良いだろうって思つてさ。そういや、前にしてたりボン……どうしたんだ？」

「ああ……あれは福音との戦いで無くしてしまったのだ」

「そうか、じゃあ丁度良かったな。あ、結んでやろうか？」

「いい、自分でする」

箒は早速、白のリボンで髪をポニーテールに纏め上げた。

「……うん、やっぱり箒はその髪型だな」

「それは褒めているのか？」

「一応、そのつもりだぞ？ で、こっちが春斗のやつだ」

一夏は箒に、長方形の箱を差し出した。

「っ……」

「……箒？」

一夏は、箒の様子が妙な事に気が付く。ただジッとプレゼントを見

たまま、受け取るうとしない。

「なあ、一夏……少し、外へ出ないか？」

徐に箒は立ち上がって、そう言った。

「え？ ……ああ」

一夏も意味が分からなかったが、それに頷いた。

静かな夜の砂浜に、波の音だけが響く。  
星は降ってきそうな程に瞬き、月は優しく二人を照らす。

「……………」  
箒に連れられてやって来た一夏だったが、どうにも居心地は悪かった。

ISスーツのまま寝ていたので、取り敢えず浴衣を上に着てきたのだが、その襟を何度も触っている。  
着付けが悪い訳ではない。ただ只管に続くこの沈黙に居心地が悪かった。

「……………なあ、どうかしたのか？」  
ただ海を見つめ続ける箒に、一夏は声を掛ける。

「……………なあ、一夏」  
振り返ることなく、箒が言葉を紡ぐ。波が少しばかり、大きく音を立てる。

箒は何か言葉を選んでいいのか、時折、息を呑む音が聞こえた。  
そして、少しの間を置いてから  
振り返った。

「春斗は……………何故、お前の中にいるんだ？」

「……………え？」

動揺の余り、声が上がってしまつてしまつ。

「な……………何をいきなり……………？」

「……………裏白式」

「えっ？」

『……………っ！？』

春斗も言葉を失つてしまつ。

「あれは……………春斗のISなのだろう？」

そう問い掛けながら、しかし確信に近い自信を持って、箒が真っ直ぐに一夏を見据える。

『まさか……………あの速度の戦闘で……………？ いや、そんな筈は……………』

弓の型を見てならば分かるが、ISの戦闘　しかも高速戦闘状態での動きに、バレル要素など無かつた筈だ。

ならば、一体何故。

「あの時……私が白式のエネルギーを回復させた時に、見えたんだ。不思議な世界で、白式と裏白式を纏った……お前達の姿を」

『まさか、クロッシング・アクセス相互意識干渉……！？いや、そんな筈は……それなら、僕らが気付かない筈がない……スペシフィック・レシーブ特定意識受信か……！？』

「理屈なんかは私には分からない。常識的に考えて、そんな事はあ  
る筈ないという事も理解している。それでも……聞きたいんだ。  
どうして、春斗が一夏の中にいるのか……」

真っ直ぐに見つめるその瞳は、まるで世の秘密の全てを見通す水鏡  
の如く、一夏を捉えていた。

「……………」

筈はただ、一夏の言葉を待つ。

「ふふっ……」

「あは……ははは……はははは……っ！」

突然、一夏が笑い始めた。

「なっ……何を笑うっ!?!」

箒はムツとして一夏を睨みつけた。こっちは真剣に、どう言おうかと考えに考えて言ったというのに、それを笑うとは。

「いや、ゴメン……くくっ……そんなつもりは……ははは……無  
いんだけど……」

などと言いながら、しかし笑いは止まらない。ついには涙まで流し始めたではないか。

箒が怒りの余り、ぶん殴ってやろうと思うのも仕方ないことだ。

「お前という奴は……!」

ズンズンと砂地を踏み散らして、箒は一夏に迫った。

そして、右手を思いつ切り振り上げた。

「ッ!?」

だが、それは振り下ろされなかった。

急に伸びた腕が箒を捕らえて、そのまま胸に抱きしめたからだ。

「なな……何をいきなり……っ!?」

いきなりそんな事をされ、箒は怒りの余り赤くなっていた顔を、今度は羞恥で赤くした。

「ごめん……本当……そんなつもり……なかつただけどな

あ………」

「……?」

箒の頬にポタ、ポタと落ちてくる雫。埋められた顔を上げた。

そこには、瞳をいっぱい涙で濡らしながら、ギュツと何かを堪える少年の顔があった。

「……やれやれ」

箒は振り上げていた手を、そっとその頭に乗せてやる。

「男がそんな簡単に泣くな……そうだろう、春斗?」

「……! ……ゴメン……でも、ごめん……!」

零れていく涙を、嗚咽を抑えられず、春斗はギュツと箒を抱き締めた。

「うぐ……アああ……!」

「全く……これでは図体の大きい子供だな?」

そんな春斗の背中をポンポンと、優しく箒は叩いてやった。

「……なるほど。その妙な状態の原因は、姉さんだったのか」

「いや、まあ……原因と言えば原因なんだろうけど……なにか違うような……？」

この状態に至る道程を説明し、筈が出した結論はそれだった。

「しかしあれだな……こう、一夏の顔で喋られると……こう、違和感があるな」

「あ、僕もそう思う」

「何だとおっ!?!」

「!?!? ……まるで、出来のいい一人芝居のようだな……」  
滑稽な光景に、箒はつついっぴい噴き出しそうになってしまう。

そんな風に他愛ない会話を少しばかりして、春斗は浴衣の袖に入れてあった物を思い出した。

「そっだ………はい、誕生日プレゼント。さっき受け取らなかったから……改めて」

「あつ………ありがとう。開けて良いか？」  
「勿論」

箒は包装を解いて、それを手に取った。

「これは………髪留めか。この石は何だ？」

「それは薔薇水晶だよ」  
スターローズクォーツ

春斗のプレゼントは彗星を模った髪留め。星の部分には薔薇水晶が  
スターローズクォーツ  
あしらわれている。

「薔薇水晶は七月七日の誕生石で、それと彗星………つまり”箒”星  
………なんてね」

春斗は自分で選んでおいて、今さらながら恥ずかしくなったりした。  
別段、この物自体に自信がない訳ではない。

ただちよつとだけ、洒落を入れ過ぎたような気がしたのだ。

「………シャレだな？」

「………はい、その通りです」  
若干、箒の視線が痛い。

「でも、髪結んでるから一緒は合わないかも………ちよつと貸して？」  
「………?」

春斗は箒の手から髪留めを取ると、それを箒の浴衣の合わせに差し込んだ。

「これは、こんな風にも使えるんだよ？」

「ほづ………そうなのか」

「……ところで、ほーちゃん。今のところ、一夏と僕……どっちの方が好きなのかな？」

「っ！？ なっ……何……何を……いい言っ……！？」

いきなり過ぎる春斗の言葉に動揺して、箒がどもる。  
「だって、寮の大浴場で僕の事も好きだって言ってくれたじゃない？」

「ななな……何でそんな事を知っているんだ……！？」

「何でって……僕は一夏の中にいるんだから、聞こえたに決まっているじゃない」

「あぁっ……！！」

確かにそうだと、箒は顔を真赤にする。

「それで……どうなの、ほーちゃん？」

クスクスと笑いながら、春斗は再度尋ねる。その底意地の悪い笑い方は、正しく弄りモードの春斗の笑い顔だった。

それを見て改めて、それが一夏ではないのだと理解する。

だから箒も一つだけ、聞いておきたいことがあった。

「そういうお前は……シャルロットとはどういう関係になっているのだ？ 随分と慕われているようだったが……？」

「うっ……このシチュエーションでそんな事を聞くの？」

「先に聞いてきたのは、お前だ」

今度は箒が、意地悪く笑う。だがしかし、底意地の悪さは春斗の方が上だったりする。

「ふうん……そんな事言うんだ……」

「えっ……！？」

ガシリと箒の両肩を掴んで引き寄せる。

「そんな事言う口は……しっかり塞いじやった方が良くない？」

「なっ……ははは春斗……！？」

「ほら、目を閉じて……？」

春斗は真っ直ぐに篝の瞳を見つめ、その唇を寄せ始める。

「あ……………！」

つい、ギョツと瞼を閉じる。熱と吐息が顔に触れるのを感じた。

そして、柔らかいものが篝に触れた。ただし　その額に。

「っ……………!?!」

篝が戸惑いのままに瞳を開くと、そこには悪戯が成功した子供のよ  
うに笑う春斗の顔があった。

「もしかして……………期待しちゃった？」

「なっ　!?!」

「でもごめんね。これは一夏の体だからさ……………」  
スツと伸びた人差し指が、篝の唇に触れる。

「ここには……………もうちよつとだけ、待ってて？」

「……………っ!?!?!」

その一言に、篝は耳までも赤くなってしまった。

ずっどおおおおおおおんっ!!

「……はい？」  
いきなり、海面が爆発した。

一体、何が起こったのかと呆然とする二人であったが、その疑問はすぐに解消された。

「何……してるのかなあ……？」

それはさながら、地獄の底からやって来た悪鬼か幽鬼か。

灯台の光が映し出すのは 三色のIS達。

「シャルロット、鈴、ラウラ……！？」

「な……何でここに……？」

「部屋の様子見に行ったら誰もいなくてさあ……で、探してたのよ……まさか、こんな事になってるとは思わなかったわよ……ねえ、春斗？」

「っ……！？」

「お前達……知っていたのか！？」

「うん、知ってたよ？」

「それがどうかした？」

鈴とシャルロットの瞳にハイライトが全く無い。

「それよりも……随分と気になる事を言っていたな……『寮の大浴

場』がどうか……あれはどういう意味だ、箒よ？」

「いや……大した意味は……」

「嘘だな」「嘘だね」「ウソね」

何か、絶望的な物が見えてきた。

具体的には、シャルロットのライフルと、ラウラのレールカノンと、鈴の衝撃砲の辺りに。

「ねえ……箒は春斗のことを振ったのに……どうして、そんな風にイチャイチャしてるのかな？」

「いや……それは……」

「春斗……あなた、実は態とやってんじゃないんでしょうねえ……？」

「いや、そんな事はないよ!？」

「だったら何でこんなにヒヨヒヨイとバレてるのよ!？ 中学時代のあたしの必死のフォロワーの努力の全てを返しなさいよ!！」

「そうだよ！ 僕がキスしようとしたら絶対に拒むのに、箒には自分からキスするってどういう事!？」

「いや、おでこだよ今の!？」

「だったら僕にもしてよ!！ おでこでもほっぺでも唇でも!！」

「いや、最後のは駄目じゃない!？」

「どうしてダメなの!？」

「そんなのダメに決まってるだろう!？」

「箒は引っ込んで!！」

「というか、貴様は私の質問に答える！ 大浴場で、私の嫁にナニをした!？」

「微妙にイントネーションがおかしかったぞ!？」

「あゝ、もうさ……何もかも面倒くさくなってきたわ……よし、殺そう」

「また極端な結論に達したね、鈴ちゃん!？」

「ああ、何かそれが一番早い気がしてきた」

「多少……いや、多々痛い目に遭わねば、反省はせんだろつな……」  
残る二人も、殺る気満々であった。

「ところでさ……あたしらにもその辺の事情っての……教えてくれるかな？」

「具体的には、春斗さんの状態に関しての辺りを特に詳しくお願いしたいですわね？」

「……二人で一人……ダブル？ バロム？」

『……………はっ』



「春斗お！ あんたマジ殺す！！ あたしの苦勞と涙を返せえ！！」

「春斗のバカアアアアアアアアアアアツ！！」

「ちよつと！？ 説明を……！！」

「ねえねえ、ふたり一緒に喋ったり出来るの！？」

「怒りの王子？ 悲しみの王子？」

「箒っ！ 私の質問に答えろ！！」

「うう……… あああああああああああっ！！」

「うわっ、箒がキレた」

箒はいきなり紅椿を展開。そのまま春斗を抱き上げて飛んでいった。

「あぁっ！？」

「こらっ！ 待ちなさいっ！！」

「おのれ、逃がさんっ！！」

「お待ちなさい、箒さん！！」

セシリア達もすぐさま追いかけていく。

「あたし達も追っつわよ、箒！ 弍式を出しなさいっ！！」

「ええっ………！？ でも、あの子は飛べない………」

「フフフ………私にいい考えがある」

「それ………確実に失敗フラグ」

かくして、夜の海を舞台にした壮大な追いかけっこが始まったりし

た。

30メートル近い、切り立った崖の上。そこに設けられた柵に腰掛け、足をプラプラとさせる人影。

「絢爛舞踏を含めて、紅椿の稼働率48%……予想よりちょっと高いかな？」

空中投影ディスプレイに映る紅椿のデータを見て、そう呟いたのは篠ノ之束であった。

無邪気にはほえみ、何処か少しばかり退屈をしているような、そんな表情。

そのデータを消して、別の映像データを出す。

映しだされたのは、白式第二形態・雪羅と裏白式第二形態・晨月。そして、月華白雪の戦闘映像。

正規にはなく、ハッキングによって入手したものである。

「しかし、この二機には驚かされちゃったなあ。特に白式は生体再生まで可能だなんて……まるで」

「まるで《白騎士》のよう……コアナンバー001にして、初

の実戦投入機。お前が心血を注いで創り上げた一番目の機体……みたいか？」

「やあ、ちーちゃん」

振り返ることなく、束は背の人物に応え、千冬は樹の幹に背を預けたまま。互いにその顔を見ることはない。

どんな表情をしているかなど、見なくても分かるからだ。

「さて、ちーちゃんに問題です。白騎士のコアは何処へいったでしょう？」

「白式を『しろしき』と読めば、それが答えなんだろう？」

「流石はちーちゃん。白騎士を乗りこなしていただけの事はあるね」

事件後、白騎士はその機体はIS開発の為に解体され、大きく貢献する。そしてコアは、とある研究所襲撃事件の際に紛失し、いつしか白式のコアとして組み込まれていた。

「もしもの話だけど、白騎士と暮桜……ちーちゃんの最初の機体と二番目の機体のコア・ネットワークで情報をやり取りしていたとしたら……ワンオフ・アピリテイ同じ単一仕様能力を開発したとしても、おかしくないよね」

「……」

千冬は答えなかった。が、そのまま気にせず、束は続ける。

「でも、あのコアは分解前に、私が初期化した筈なだけだね」

「不思議な事もあるものだな」

その辺りは、束も分からないというのは本当だ。だがしかし、それでも束には問題はないのだ。

「……私も、例えばの話をしよう。とある天才が、妹の華々しいデビューさせたいと考える。その為に用意するのは最新鋭の専用機、

そしてISの暴走事件だ」

「ほうほう」

「その妹は専用機と共に作戦に参加。見事華々しいデビューを飾ることになる」

「へえ……すごい天才がいたものだねえ」

「そうだな。12ヶ国の軍事コンピューターを同時にハッキングした、自作自演の天才がな……」

千冬は呆れているのか、肩をすくめた。

「まだ、例えば。とある天才が、一人の男子受験生をISのある場所まで誘導する事が出来るとする」

「ふむふむ」

「そこで使われるISをその時だけ、動くようにする。と、男が使えないISを使える事になる」

「でも、それだとその時だけだね？」

「お前は一つのものに、そこまで長い時間手を加えることはしないからな」

「エへへ……飽きちゃうからね」

「で、どうなんだ？」

「うーん、どうなんだろうねえ？でも、白式がどうして動くのか……私も分からないんだよね。春るんが使える理由なら、もう分かっているんだけど……」

「なんだと……？」

ポツリとこぼした言葉は、千冬を動揺させるには充分だった。

春斗と一夏。二人がISを使える理由が、実は全く異なるものだと言ったのだ。

「折角だから私からも例え話ね。昔々ある所に、誰にも使えないISコアがありました」

「っ……………!?!」

「そのコアはそれを作った天才でさえ、どうにもならない我侷な子で、ずつとずつと閉じ込められていました。ところがある日、その子はいきなり機能停止してしまいました」

「……………コアナンバー《002》影法師……………!?!」

かつて、白騎士の影として作られた世界で二番目のIS《影法師》。しかしそれは、誰にも扱えない完全なる欠陥機であった。

結局、機体は解体され、コアはある研究施設にて厳重に保管されていた。

そしてある日、世界を襲ったワールド・コア・サイレンスという現象を同じタイミングで、機能停止してしまったのだった。

「でも、そのコアは、実はずっと稼動状態にあったのです……………一人の男の子の意識として」

「なんだとっ……………!?!」

「ちーちゃん。ISを動かすって、どういう事だと思っ? ISとの相性って何?」

「……………ISのコアとの意識リンク。搭乗時間の積み重ね……………だろう?」

「そう。そんな曖昧なもので、ISは動くの。だからもしも、コアの意識が人と深い場所で繋がって一体化していたとしたら……………?」  
世紀の天才は続ける。余りにも荒唐無稽な話を。

「人とコアの意識が一体化するだと……………そんな馬鹿なことが……………!」

「あるよ。MSS……………あれがその証拠。ちーちゃんはあれの基が何なのか、知ってるよね?」

「操縦者とコアとの意識リンクテスト用の………！？」  
ハツとして、千冬が目を見開く。その気配を背中に感じて、束は笑う。

「そう。操縦者はいっくん……なら、コアに相当するのは当然、春るんなんだよ」

束は星空を見上げる。

「ISの稼働時間を、コアの稼働時間と同義と捉えるなら……春るんの稼働時間はおよそ52,000時間。世界中、何処を探したってこんな時間はない。勿論、ちーちゃんでもね。これだけの時間を重ねているからこそ、意識はすでに深い繋がり方をしてしまったている。それこそ、元の体に戻る弊害になるぐらいに」

「何……ッ!？」

「だから、私は裏白式に002のコアを組み込んだの。そして一次移行で、コアが意識を取り戻し始め……そして今日、二次移行と共に完全に覚醒した」

「あの”月華白雪”というのも……お前の仕込みか？」

「あれは本当にイレギュラーだよ。いっくんと春るんの意識融合、白式と裏白式の量子レベルでの融合、001と002のコア同士の共鳴現象……それらが揃った事で起こった、束さんでも予想できない出来事だったんだよ。本当だよ？」

「……つまり、他のお前の仕業ということでもいいんだな？」

とすんと、また木にもたれる。

「あはは……さあて、束さんも忙しいのでそろそろ行くところかなあ  
く！」

ごまかしか、束はうーんと背伸びをして態とらしい声を出す。

「ねえ、ちーちゃん？」

「なんだ？」

「今の世界は……楽しい？」

「そこそこにな」

「……そうなんだ」

岬を吹き上げる風が強くうねりを上げた。

「  
」

その中に、束の小さな眩きが溶けて消える。

「ッ  
……」

千冬がその方を向くと。

「なっ……!!?」

束が全力で走ってきていた。

そしてそのまま千冬目がけて、レッツダイブ。

「なっ、なにをしてい……っ!?」

る。と続けるよりも早く、何かが地面を弾いた。

そしてその真上を飛ぶ　　とつても良く見慣れたIS達。

「逃がすかああああっ!!」

「落とすんだ……君だけは、今日ここで!!」

「いい加減、説明なさい!!」

「しつこい連中だな……! 諦める!!」

「いや、ここはしつこくいかないと!!」

「何故お前まで参加してるんだ!?」

「その方が面白いからよ!!」

「キツパリと言いつ切るな!!」

「うう……もうちょっとゆっくり飛んでえ……」

「お前らいいかげんにしろ!? 先月の焼き増しじゃねえかつ!!」

「あ、あいつら……」

千冬は怒りに震え、その背中からかの妖刀を取り出す。

「お前達いいいいいいいい!! 今すぐ、そこに直れええええええええええつ!!」

激昂して、千冬がその後を追って走っていく。

「うわっ、鬼神が来た!!」

「フフ……あはは……！」  
そうして一人残った束は目をパチパチとさせて、そして笑った。  
「うん、ちーちゃんの言う通り……世界はそこそこには面白いかも  
ね」

風に揺れる髪を押さえながら、そう呟いた束の瞳は、少しだけ退屈  
を失っていたのだった。

第33話 月下の語り部は秘密を語る（後書き）

次回、今度こそ最終話。

というよりも第一幕エピローグです。

いよいよあの組織も動き出し、あの人もちよっただけ登場します。

One Act End 【暗躍者は舞台裏で踊る】（前書き）

第三巻エピローグ。

そして今回で、一幕の終わりとなります。

それではどうぞ。

One Act End 【暗躍者は舞台裏で踊る】

早朝のIS学園 学園長室。

その応接セットには、二人の男性の姿があった。

一人は190近い二十代の男性で、グレーのスーツを着る細身ながらしっかりとした筋肉質の体躯。

もう一人はブラウンのスーツを着る、この学園で用務員を務めている 筈の老年の男性。

「福音は無事に停止。搭乗者も無事だったそうです」

「ええ。私の方にも報告が来ました……ま、ギリギリ及第点といったところでしょうか？ 福音には悪いことをしました……出来る限り、手を回しておきましょう」

「……しかし、随分と大胆というか……篠ノ之博士の計画を知っていたのに止めようとしないなんで……」

若干ながら、非難の色を籠めた轡木十蔵の視線が、正面に座る青年に突き刺さる。

「一度でも実戦を経験をすれば、それはいざという時に必ず生きる……あのバカの下らない計画も、丁度都合が良かったというだけですよ？」

「ですが、あの場には妹さんも居たのでしょう？」

「織羽は、そうそう殺られるようなヤワな鍛え方はしていませんよ。それでももしも、という事があったなら」

青年の視線が、氷の如く冷たい光を宿す。

「所詮はその程度だった。たったそれだけの事ですよ？」

「……………」

その言葉に、十蔵は思わず息を呑んだ。

身内の死すらその程度のものだと、彼は本気で言っているのだ。

「それに、この程度をどうにか出来ないなら、この先を生き残る」となんて……………不可能でしょう？」

「……………事態はもう、そこまで？」

「亡霊どもは、いつ舞台上が上がってきてもおかしくない……………そんな状況ですよ」

pipipi……………

「おっと、失礼」

青年の懐から、シンプルな電子音が響く。

スーツの内側からその音源を取り出し、通話ボタンを押した。

「……………何？ それで被験体17号は……………そうか、分かった。引き続き搜索を。ああ、頼む」

短く要項だけを伝え聴き、青年は通話を切った。その表情は一層の厳しさを宿していた。

「何か、あったのですか？」

「ええ。どうやら、こちらが思うよりも早く、事態は動いていたようです……………」

「ふわあああああ………」

翌日、朝10時過ぎ。さんさんと照る太陽の下、一夏の大欠伸が響いた。

あの追いかけっこは一時間以上も続き、最後は千冬に全員打ち落とされる（比喻ではない）結果となった。

こんこんと続く説教+ひたすらに正座させられ、もとより疲労の極地であった肉体はたった一晚の睡眠程度ではどうにもならなかった。

そこに更に、朝食を終えてからISと専用装備の撤収作業。

そんな事が重なった結果　。

「ふわあああああああ……っ！」

「おおっっ、おりむー、凄くあくびだっっ」

「……めちゃくちゃ眠い」

勿論、眠いのは一夏だけではない。

「ふああ……っ」

「ふううあ……あふ」

「ふああああ……っ！」

「ふあ……ああ……」

「ふう……ああふう」

「ふううあ……ああう」

箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、簪もだ。

見ているだけで感染拡大しそうな欠伸の六重奏に、一人だけ加わらない者もいた。

「いや、今日も見事な日本晴れね！ 今年は空梅雨だったけど、水瓶は大丈夫なのかしらね？」

「いや、何でそんな元気なんだよ……？」

一夏の疑問も尤もだった。何せこの辰守織羽、同じだけの労働と疲労をしている筈なのに、ピンピンしているのだ。

「おお、たっちは元氣いっぱいだね」

「モチがツモ……もとい、モチロンよ！」

「あっはっは、おもしろい」

「でしょ！？ このセンスを鳳も簪も分かってくれないのよね」

「あ、それはダメダメだね」

「……………」

この二人は何時、こんなに親しくなったのだろうかというのが、素直な感想だった。

そんなこんなで、いよいよバスの発車予定時刻が近づく。

ほとんどの生徒達はバスに乗り込み、織羽と鈴も自クラスのバスに乗り込もうとしていた。

「……………あれ？」

「何、早く乗んなさいよ？」

「いや、一組のバスのところに誰かいるんだけど……………？」

「はあ？」

と、織羽の指差す方を見れば、そこにはブルーのサマースーツを着たブロンドの女性が、何故か一組のバスに乗り込むのが見えた。

「……………」

鈴はそれだけで、凄く嫌な予感を覚えた。

「……………」

織羽はそれだけで、凄く面白そうな匂いを感じた。

「……………」

二人は目配せもなく、一組のバスへと向かった。

一夏は入口近くの席に座ると早速、惰眠をむさぼる為の準備を進めていた。

しっかりと水分を取って、しっかりと寝る。それだけで、この後がかなり違うのだ。

「あなたが、織斑一夏君？」

「え……？」

知らない声が、いきなり一夏の名前を呼んだ。見ればブルーのカジユアルタイプのサマースーツを着た、ブロンドの美女が立っていた。一夏を見るその視線は、隠す気の無い好奇心の光が見えていた。

一瞬、「こんな先生居たかな？」と、一夏は思った。

「あつ……！！この人、銀の福音シルバリオ・ゴスヘルの操縦者の人……！！」  
いち早く、春斗がその女性の正体に気付く。

「あつ、福音の……！！」  
「ええ。私はナターシャ・フィルス。シルバリオ・ゴスヘルの操縦者よ」  
あの時、福音の停止と共に解放され、病院へと移送された女性。その人が何故、ここにいるのか。

「えっと、一体どうして……?」

「今日の午後、この国を発つから……その前にね。あの子を助けてくれたお礼をしたくて」

「いや、そんな……礼を言われることなんて……」

「クスッ」

すっ、とナターシャのブロンドが揺れる。そして柑橘系のコロンが香り、不意に唇に触れる感触。

「コッツ　　!?!?」

「これは、私とあの子から……黒と白の騎士達へ……ね?」  
耳元にそつと残す言葉。

「じゃあ、また会いましょう? Bye」

「コッ……」

呆然とする一夏に手を振って、ナターシャはバスを降りていく。

そして、そこには沈黙が残された。

「一夏……」

「一夏さん……」

「一夏……」

沈黙は、怒れる三鬨神によって終焉を迎える。

「ま、待て! 今のは事後的な……そんなだろ!?!」

「……沈黙」

「……はい」

「あは……アハハ……ハハハハ……」

「ちょ、シャルロットがダークサイドに!!」

「ウソ!? 何でダース・デユノア卿モード!?!」

「あいむ、ゆあ、ふあゝざゝ!」

「本音、ちよつと黙りなさい!!」

いきなり黒オーラを撒き散らすシャルロットに、周囲が警報を鳴らした。

「うわあ。面白い事になってる〜! ね、鈴は参加しないの?」

「……エ? ナニガナンノコトカシラ?」

鈴は何か、ドット的ビジュアルになっていた。

「うん。帰ろう……あたし達の組へ」  
ホム

「おいおい、妙な火種を残して行くな。ガキの面倒は大変なんだぞ？」

「ごめんなさい。思っていたよりも、ずっと良い男だったから……  
っい」

駐車場入口で、ナターシャは千冬を向かい合っていた。

はにかんだ笑みを見せるナターシャに、千冬は呆れ気味に肩をすくめた。

「やれやれ……それより、昨日の今日で動いて大丈夫なのか？」

「ええ。私はずっと……あの子に守って貰ってましたから」

「やはり……そうか」

「ええ。あの子は私を守る為に、望まぬ戦いにその身を投じた。強引な二次移行。セカンド・シフトそして、コア・ネットワークの切断……あの子は私の為に、大空自分の世界を捨てた……」

言葉を続けるナターシャの瞳は、陽気さの欠片もない鋭いものへと変わる。

銀の福音は機能回復によって機体が停止したものの、再びの暴走の危険性から、しばらくの間は封印処理をされる事がすでに決定していた。

「私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのISを敵と思わせた……その元凶に必ず、その報いを受けさせる」

ギョツと握りしめた拳が、ギリギリと軋むような音を立てた。

「余り無茶はするなよ？ この後、査問委員会だろう？ しばらくは、大人しくしていた方が良いぞ？」

「それは忠告ですか、”ブリュンヒルデ”？」

「……ただのアドバイスさ」

千冬は少しばかり、顔をしかめた。

ブリュンヒルデ。世界一のIS操縦者の称号。

それで呼ばれることが、千冬は好きではなかった。

「そうですね。まあ、しばらくはそうします……そう、しばらくは

一度だけ、鋭くなった視線が交差する。そしてナターシャは千冬の脇を抜けていく。

互いの、ヒールがアスファルトを叩く音が遠ざかっていく。

(それはそれとして……彼のIS……うっん、あの子が教えてくれた……彼らのIS……まるで伝説の白騎士みたいだったわね……)

ナターシャはふと、そんな事を思いながら、晴れ渡る空へと視線を送った。

彼女の愛した

『あの子』が好きだった世界へと。

山間にある国立機関。

そこに一台の、黒塗りの車が停車する。

ドアが開き、一人の青年が降りてきた。

藍色のスーツを着た、細身ながら、しかしその佇まいと発する気配がおよそ只者ではないと教えている。

「お待ちしておりました、若

「搜索状況は？」

横に現れた黒スーツの男が、端末を取り出して情報を読み上げる。

「海外へのルート26を中心に封鎖。向こう側の動きにも目を光ら

せております。ですが……」

「流石に、抑えきれない……か」

「はっ。申し訳ありません」

「それで、人的被害は？」

「重軽傷34名。ですが、死傷者はありません」

「そうか。現場へのルートは？」

「こちらです」

「その案内、よろしければご一緒させて頂けませんか？」

黒服が、若と呼ばれた青年を案内しようとした所に、突然の声。

「すぐさま黒服が数人、青年の周囲を固めてその声の主を探す。が、青年はスツと手を動かし、彼らを退かせる。」

「そう思うなら、さっさと顔を出せ……更識の十七代目」

「フツ、流石ですね……竜魔の若き筆頭」

向こう側に生えた木の幹の後ろから、IS学園の制服を着た女生徒が現れる。

リボンの色は彼女が二年生である事を示し、その口元を隠す扇子には【見敵必滅】の四字。

「まさか、筆頭自ら来るとは思いませんでしたわ」  
二人は並びながら、瓦礫の中に行く。

「仕方あるまい。敵は、アメリカから強奪された第二世代IS《アラクネ》だ。その行方を探っていた矢先、そいつが日本に出現したというのだから……」

「さしもの竜魔衆も、ISには太刀打ち出来なかった……というこ

とですね？」

「一応、この守護はうちの仕事なのだがな……こつも好き勝手されては返す言葉もない」

「仕方ありませんわ。なにせ敵は……亡国機業なのでから」

ファントム・タスク

「国もなく、信念もなく、宗教もなく、亡霊の如く世界の間に潜む者達……か。ふつ、言い得て妙なネーミングセンスだ」

口調こそ晒っているようだが、しかしその内心は真逆。

二人がその足を止めた。眼下に広がるのは、地下まで繋がる巨大な穴。

「亡霊には、亡霊に相応しい場所がある。必ず、一匹残らずそこへ送り返してやる」

吹き上げる粉塵にさえ目を細めず、彼はそう呪詛を吐き出した。

昼食を兼ねた、サービスエリアでの休憩時間。

一夏と千冬は、少しばかり見晴らしの良い場所にいた。

誘ったのはどちらでもない 第三の人物である。

「それで、わざわざ私を呼びつけた理由は何だ？ 色々仕事もある……手短にしる、春斗」

「いや、ずっと考えてた事があってさ……学園に戻るとまたちょっと言い出し難くなりそうだから……」

「……一体、何だ？」

「今度……医技研に行くのって……八月だったよね？」

「ああ、そうだな」

「……僕はさ、それを最後にしようって思ったんだ」

「『……ッ！？』」

春斗のいきなりの言葉に、一夏と千冬が驚愕する。

『おい、それってどういう……！』

「それは……どういう意味だ！？」

「次、成功しても失敗しても……僕はもう、一夏の中には戻らないって事だよ」

「何故だ！？ お前は……諦めたのか！？」

「……違うよ。ずっとね、考えていたんだ……『次がある』『今度こそは』……そんな考えじゃ、何時まで経っても無駄なだけなんじゃないかって」

「春斗……だが、もしも失敗したら……！？」

「しないよ」

心配する千冬に、春斗はハッキリと言い切る。

その表情は、決して無謀に挑む訳でも、諦めに身を委ねた訳でもない。ただ一切の疑いもなく、最高の未来を信じて、それを手にしようとする者のそれだった。

「約束する。今度の誕生日は、僕の体で一夏と一緒に、誕生日を祝わせてあげるから……！」

「……千冬姉、大丈夫だって。春斗が今まで、酷い嘘吐いた事なん

て無かっただろ？ 俺だって次は超気合入れてやるからさ！！」  
そう言っつて、一夏がグツと拳を握っつて見せる。

「……………はあ。止めても無駄、なんだな」

「うん」

「なら勝手にしろ。だから……………絶対に、目を覚ませ。それ以外の結末を、私は絶対に認めない……………良いな？」

「うん。ありがとう、姉さん！」

兄弟たちは、目の前に近づく最後の挑戦に向かつて心を新たにする。

誰もが、この先の未来はきつと明るいものになると信じた。

その道がどれだけ過酷でも、きつと乗り越えられる。そう確信して。

太陽は何処までも熱く、空はどこまでも蒼かった。





七月八日未明。

ファントム・タスク  
亡国機業所属ISによる襲撃事件発生。

場所 【国立 医療技術研究所】。

被害 施設半壊

重軽傷者多数

研究データ一部消失

被験体十七号【織斑春斗】強奪。

その報が、学園に帰還した彼らの未来を閉ざした。

One Act End 【暗躍者は舞台裏で踊る】（後書き）

これにて、IS「ツイン・ソウルズ」前半終幕です。

奪われた春斗の体。

動き出した亡国機業。

そして、新たに舞台上がる人物達。

後半戦も、どうか宜しくお願いします。

IS〔ツイン・ソウルズ〕 設定（前書き）

第一巻分終了時に書きまとめた設定です。

（随時、追記していきます）

## IS〔ツイン・ソウルズ〕 設定

織斑 春斗：

本作品の主人公。幼少から天才、神童といわれてきた一夏の双子の兄。箒に想いを寄せている。

一夏と違って体が丈夫な方ではなく、よく体調を崩していた。

ある出来事から、一夏の体に意識だけが移った状態にあるが、その天才ぶりに陰りはない。

一夏の体で自覚ありの口説きをかましたりするFLAGブースター旗増幅器。

でも、自分の体では絶対にやらないと決めている。

シャルロットの為に、自身が考案したIS用粒子加速システム『リンドブルム』と、第三世代IS R ドラゲーンの設計図をフランスに提供するなど、とんでもない一面も持ち合わせている。

篠ノ乃 束に「この子はいつか、世界を破壊する悪魔になるかも知れない」と言われているが、その真意は定かではない。

専用ISは裏白式。

IS 裏白式：

裏の名が示す通り、黒い白式。

白式と違い中、遠距離戦闘用に特化しており、加速力と旋回性能が高く、防御力と最高速度で劣る。

武装も《弓剣 月影》のみ。雪片はプロテクトがされて使えなくなる。

春斗に入れ替わると同時に、この姿が起動する。本来はありえない、イレギュラーフォームとされている。

その正体は白式と同型のISで、束によって二機を一体化させている事が判明。

単一仕様能力は月華白麗。エネルギー無効化能力の矢を放つ、一撃

必殺の力。

第二形態 晨月<sup>しんげつ</sup>：

雪羅となつた白式と共に、裏白式が二次移行した姿。

二機の大型スラスタ翼と、四機の機動制御スラスタ翼を持ち、加速と回避性能に優れる他、初期型ハイパーセンサーを模した、特殊戦術システム”百目<sup>ひゃくもく</sup>”を持つ。

より射撃戦闘に特化し、大型スラスタ翼上部、ISアーマー腰部、両脚装甲外部に二門づつの計六門、自立稼働砲台”月之雫”を有する。

更に右腕部には、多機能戦術腕”晨月”が発現している。

射撃戦闘では凄まじい強さを誇る反面、格闘戦は弱く、ブルー・テイアーズにさえ押し負ける程。

(尚、晨月とは”夜明けの月”を現す造語である)

多機能戦術腕<sup>タクテキクスターム</sup> 晨月：

二次移行を果たした事で発現した、特殊兵装。

エネルギー吸収システム”月暈<sup>げつうん</sup>”。月影用特殊射撃システム”虚月<sup>こげつ</sup>”。牽制・迎撃用射撃システム”双月<sup>そうげつ</sup>”。電子戦用強制アクセスシステム”月虹<sup>げっこう</sup>”がある。

(しかし月虹の全機能は通常、発揮出来ない状態にある)

織斑 一夏：

原作及び、本作品もう一人の主人公。結構熱血漢。

偶然か必然か。ISを起動させられる世界で唯一の男性として、IS学園に入学する。

春斗と内部漫才をするのが日常で、ツッコミのキレは鋭い。

犯罪レベルの鈍感さで、呼吸をするのと同じだけフラグを立てると

言われる一級旗職人。  
フラグメイカー

専用ISは白式。

IS 白式：

接近戦仕様のISで、武装は雪片式型のみ。月影はプロテクトされて使えない。

原作よりも機動力や最高速度、情報処理能力が高い。これらは、春斗がフォーマツト中にリアルタイムで情報処理を行った結果である。当初は春斗も操縦できたのだが、裏白式が発現した事で春斗には使えなくなった。

単一仕様能力は零落白夜。能力は原作と同じくエネルギー無効化だが、春斗が雪片をいじくった結果、その効力を解放し、撒き散らす事が出来る。

第二形態 雪羅：

白式が二次移行した姿。四機の大型スラスタを持ち、最高速度は晨月を上回る。また防御力も高い。

近接戦闘に更に優れ、トツプクラスのパワーと攻撃力を大きく高めているが、それでも原作より燃費が良い。(その辺りは春斗の調整を基にしているため)

両脚部にブレード”細雪”、左腕部に多機能武装腕”雪羅”が発現している。

アームドアーム  
多機能武装腕 雪羅：

二次移行を果たした事で発現した、特殊兵装。

荷電粒子砲を撃つかノンモード、零落白夜を用いたシールドモード、エネルギー爪のクローモード、クロー集束のブレードモード、電子戦用破壊システム ブレイクモードがそれぞれ使える。

(ただし、ブレイクモードは単体では使用できない)  
零落白夜はこちらでも解放が可能で、シールドは広域消去、クロームモードはそのまま飛ばしての攻撃が出来る為、戦術が大きく広がっている。  
これらの武装も燃費周りが向上しており、原作よりも長時間の戦闘が可能となっている。  
(それでもやはり燃費が悪く、裏白式と紅椿のサポート無しではすぐガス欠となってしまう)

月華白雪：  
げっかしらゆき

表と裏の白式、白と黒が共鳴起動した姿。シンクロニティそのシルエットは、白騎士に近いものがある。

装備の換装無しで全領域、全局面展開運用能力の獲得を目指した、第四世代機の到達点の一つ。  
遠、中、近距離戦闘全てをこなし、雪片、月影、雪羅、晨月による圧倒的火力と絶対的制圧力。更には大型四機、機動制御用四機の、計八機のスラストを制御しての超機動力をも誇る。  
リミッターも一時的に外される上、二機分のエネルギーを統合して使用するため、戦闘継続時間も長い。が、搭乗者に半端ではない負担を強いる為、使用できる時間には限界があるという欠点も持っている。

その他、この形態の使用には恐ろしいリスクが伴う。

篠ノ乃 箒：

原作及び、今作品のメインヒロイン………の筈。

素直になれない自分あまり好きではなく、落ち込む度に春斗が慰めていた。その為か、春斗の事になると途端に素直になる。その辺が一夏には面白くないようだ。

原作よりもツン度が多少低い傾向にある。一夏の事が好きなのだが、  
どうやら春斗にも……。

二人の幼なじみの間で迷う。篝さん、マジ乙女<sup>ヒロイン</sup>。

専用ISは真打鉄 紅椿。

IS 真打鉄：

春斗が篝の為に用意したISで、見かけは通常の打鉄と同じ。だが、  
プログラム真打によってその性能は跳ね上がり、専用機にも迫る程。  
機動力に重点が置かれており、特徴にして最大の武器は瞬速<sup>オーバーアクセル</sup>超過。  
量産機のカスタムという点では、シャルロットのR リヴァイブ・  
カスタム？と同じである。  
篝にとって初めての専用機であり、彼女のISに対する思いや考え  
方、力の使い道などを導いた機体であり、思い入れのあるISであ  
る。

セシリア・オルコット：

我らがロールさん。英国代表候補生にして、一夏と春斗にフラグを  
立てられた被害者。

力強い一夏と、理知的な春斗。二人に同時に初恋をしまつても  
う大変。

三巻以降はどうなるのやら。（主に出番的な意味で）  
専用ISはブルー・ティアーズ。

ファン  
鳳 鈴音：

中国代表候補生にして、一夏と春斗の幼馴染。春斗が肉体を失った  
理由を知る人物でもある。

一夏に想いを寄せている。が、同時に春斗に弱みも多く握られてい  
る。保健室で一夏にキスしようとした事は、通算100個目の弱み

である。

シャルロットの一件で、彼女自身も思わぬ気持ちに気付いてしまった……？

専用ISは甲龍。

シャルロット・デュノア：

フランス代表候補生。原作とは違って、父親とは一年前に決別。男装せずに学園へやってきた。

自分を助けてくれたH A R U 春斗に強い恩と淡い想いを抱き、暴走する事もしばしば。

すれ違いと誤解の果てによりやく巡り逢った春斗に、ストレート過ぎるアピールをしまくる恋する乙女。

最近では暗黒面に堕ちつつあり、別名《ダース・デュノア卿》とも呼ばれている。

専用ISはラファール・リヴァイブ・カスタム？ ラファール・ドラグーン。

IS ラファール・リヴァイブ・カスタム？：

ラファール・リヴァイブ・カスタム？をベースにした、シャルロット用のカスタム機。

実は コア・シフトアップ 実験の為、ラファール・ドラグーンの基礎フレームで組み上げられたISで、登録上は第二世代になっているが、実際は準第三世代機である。

リンドブルムを装備することも可能であるが、使用する武装や装備などの点から余り意味が無い。

コア・ブロックはそのまま、ラファール・ドラグーン・タイプ？へと受け継がれている。

IS ラファール・ドラグーン：

春斗の設計した武竜をベースに、デュノア社とフランス政府が共同開発した第三代IS。

設計図通りのISは技術的、イグニッションプランの側面から開発は見送られ、変わって汎用性、武装面の充実に重点を置いたタイプ？と、個人用カスタマイズ、機能特化に重点を置いたタイプ？が開発された。

シャルロットの使うタイプ？は、高機動と一点突破の破壊力のカスタマイズがなされている。

リンドブルム：

ラファール・ドラグーンの第三代兵装。

コアのエネルギー素粒子を取り出し加速、激突させることで発生するエネルギーをユニットエネルギー（エネルギー系武装やISAーマーの強化、量子化した武装の実体化などに使用する為の汎用エネルギー）に変換するシステム。

自力でエネルギー生成を行える為、燃費問題が解決されており、ほぼ無制限にエネルギー武装を使う事ができる。

（その際、リングが発光現象を起こし、余剰エネルギーはスラストーから外部に放出される）

ただし、ラファール・ドラグーンはリンドブルムの使用を前提としており、何かしらのアクセシビリティでリンドブルムが使用できなくなると、スペックはガタ落ちする。

それでも、R-リヴァイブ・カスタム？並の性能がある為、戦闘そのものは可能。ただしとてつもなく燃費が悪い。

可変装甲 ドラゴン・スケイル：

篠ノ之束が第三代用万能対応装備として考案。その後、展開装甲の理論に移ったため放置されていた物を、春斗が完成させた特殊装備。

雪羅や晨月と同様にIS装甲と武装機能が一体化しており、状況に応じて機能の違う装甲ユニットにリアルタイム換装を行う事が出来る。

だが現状、そのリアルタイム換装は排除されており、もっぱら個人用カスタムパーツに利用されている。

ドラゴン・スケイル はラファール・ドラグーンのオートクチュールの総称であり、可変装甲の別称ではない。

ラウラ・ボーデヴィツヒ：

ドイツ代表候補生兼、黒ウサギ隊の隊長。

当初は冷徹であったが、一夏達に敗北してからは一変。一夏を「私の嫁」と称し、春斗を「義兄上」と呼ぶようになる。

基本、クラリツサと春斗に色々騙されたり仕込まれたりで、面白い子扱いされる。

春斗的には、小さい頃の箒を思い出すので放っておけないらしい。ゼンガー・ゾンボルトがお気に入りようだ。

専用ISはシュヴァルツエア・レーゲン。

辰守 織羽：

オリジナルキャラ。二組の元クラス代表にして、辰守インダストリーの社長令嬢。

由緒正しい忍者の家系で、幼い頃から修行をしていたので生身の身体能力も凄まじく、物語中でもトップクラス。

箒の現ルームメイトで、なんやかんやとヒロイン達をかき乱したり、色々自由に動く。

専用ISは舞影。

IS 舞影：

白と朱、黒からなる忍者型IS。

隠密性と搦め手を得意とするISで、戦闘力そのものは低め。それを補うオートクチュールを装備することで、戦闘力を飛躍的に上昇させることが出来る。

第三世代兵装はハイパーセンサージャマー。及びシールドエネルギー変換能力。

後者は、雪片のデータをシステム化したもので、シールドエネルギーを変換してバリアー貫通性能を一発だけ付与する。(ラウラ戦で刀がシールドを貫いたのがそれ)

オートクチュール装備では、純粹に攻撃力に変換するシステム。

更識 簪：

姉よりも先に登場した四組の専用機持ち。

さりげなくおいしい所を持って行ったりと、なかなか油断できない娘。

織羽とは幼馴染で、その縁で一夏達とも関わっていく。

専用ISは打鉄式。

織斑 千冬：

春斗、一夏の姉で担任教師。元日本代表で、世界一のIS操縦者。

普段は自分にも他人にも厳しいが、プライベートはなかなか酷く、特に部屋が豪い事になる。

彼女が本当に嫁に行けるのか、弟たちの不安は尽きない。

一夏には厳しくも優しく接するが、春斗には過去の出来事に罪の意識を感じているのか、いまいち踏み込めないでいる。

フィリー・ミヤマラ：

元フランス代表で、第二回モンド・グロツソ射撃部門の優勝者。  
シャルロットすら足元に及ばないラビットスイッチ高速切替の使い手で、通り名は『  
硝煙の魔女』。

事故で片腕を失い引退するも、その実力は未だに衰えていない。  
シャルロットを鍛え上げた面からも、指導者としての技量も確かである。

性格は奔放で、シャルロットをよく弄る。またヘビースモーカーでもあり、よくその辺に灰を落としている。

シャルロットからはタバコを止めるよう言われていて、本人曰く本数は減っているというが、その真偽は不明。

デュアン・ヒューイック：

元アメリカ、現フランスの天才科学者。結構いい性格している爺さん。

昔、日本で講演をした時に年端もいかない男の子が聞いているのに気付き、その際に声を掛けた。

それが春斗で、それ以来手紙などで交流をもつ事になる。

IS発表時、その性能にいち早く注目し、世界が変わる可能性に気付いていたりした。

IS (ツイン・ソウルズ) 設定 (後書き)

オリISはモデルがあるのでいいのですが、月影や晨月はイラストに起こしてイメージしました。

展開装甲なんて嫌いだ……w

幕間 その1 (前書き)

本編で描けなかった短編。

今回の主役はセシリアさんです。

## 幕間 その1

セシリア・オルコット 『私だけの特別』

時は、クラス代表決定戦が終わり、織斑一夏代表就任パーティーが行われた翌日。

「~~~~~」

鼻歌まじりでセシリアは廊下を歩いていた。

その表情は、今の季節が取り憑いたんじゃないかってぐらいに浮いていた。

そして、今の季節は春。

足は地に着かず、その気になったらIS無しでも空ぐらい飛んじやうんじやなかってぐらいだ。

それというのも、彼女の初めて                   そして最後だろう初恋が原因である。

基本、初恋は最初で最後だろう。とかいうツツコミは無しだ。

その相手は織斑一夏。

女尊男卑の風潮広がる中、男らしさと同時に紳士の品格も有する、彼女の理想そのままの男性。

ああ、恋とはこんなにも心を締めてしまうものなのか。

まるで恋愛劇の主役ヒロインのように、セシリアは華麗にクルクルと回りだした。  
ロングスカートがふわりと舞い、自慢のブロンドも綺羅びやかに煌めく。

そんな彼女に送られる視線は、凄く寒々しい冬のようにであった。

「もしもし、そこのお嬢さん？」  
と、廊下の曲がり角でチヨイチヨイと、セシリアを手招きする手があった。  
一体誰だろうか、セシリアは首を傾げながら顔を覗かせる。

「やあ、昨日ぶりね」

「あなたは新聞部の……確か、マユズミ……」

「黛 薰子よ」

改めて名を名乗る、二年生にして新聞部副部長の黛 薰子。

「そうでしたわね。それで……何か御用ですか？」

「いや、ちよつと貴女に素敵な物をお買い頂けたらなあ……」

「遠慮しますわ」

薰子がそう言うや、セシリアは踵を返した。

新聞部ということは、買わせようとしているのは写真辺りだろう。あいにくと、そんな物に興味はない。

一夏が写っているなら、話は別だが。

「ほい」

「……………っ！？！？」

と、視界を遮るように眼前に出された写真に、セシリアは目を見開いた。

よく見ようと手を伸ばすも、薫子がサツとそれを引いてしまう。

「ちよっ、その写真を見せて下さいませ!!」

「おっつと、遠慮するって言ったのはそちらだよ？ これ、一応商売品だからね」

「くっ……!!」

商売品。確かに言う通りだ。

しかもその商品は、<sup>写真</sup>セシリアにしか価値はなく、セシリアが買わなければそのまま、日の目を見ること無く消えていく事だろう。

「……分かりましたわ……… 買います！ 買えばよろしいのでしよう!?! お幾らですの!?!」

ヤケクソ気味に、セシリアが叫んだ。

「親切特価、千円ジャストでどう?」

「どうぞぞっ!!」

セシリアは財布から札を取り、叩きつける勢いで薫子に渡した。

「はい、毎度あり〜!!」

薫子が件の品をセシリアに渡した。

「っ、これは………!!」

そこにあったのは

言うなれば奇跡の一枚。

一組の男女が、空とアリーナをバックに写っていた。

男は白い騎士のような鎧と鋼翼を持ち、女は蒼い鎧に身を包み、ブ

ロンドの髪が僅かに乱れて風になびいている。  
男は女を横抱きに抱えており、うっすらを開かれている女の瞳を覗き込むように、顔を側に近づけていた。

そう。クラス代表決定戦の決着直後の写真である。

薫子は一夏（本当は春斗）が放送部に試合の記録を頼んだ際、こっそりとそれに追従していたのだ。

後々、新聞で使えるネタになるだろうという、打算の結果の行動だ。そして彼女はこの、奇跡のベストショットを納めることに成功した。

だが、その扱いは非常に困った。写真の写り、構図は良いのだが、物が物だけにどうにも使いにくい。

その扱いを一先ず置いておくとして、昨夜の取材である。

薫子はセシリアの表情に、「おや？」というものを感じたのだ。

傲慢不遜な雰囲気が消え、こつ……恋する乙女のような表情を見せていたのだ。

もしかしたら、という思いで写真を見せてみたら

見事に釣

れた。  
なんてチヨロイ。

セシリアは現在、顔を真赤にしながらハアハアと息を荒げ、目が血走っている。

多分、脳内は凄い事になっているんだろう。きっと具体的に表現したら、この作品が削除されるぐらいの。

せつかくの美少女なのに、なんとも残念過ぎる。

だが、これならまだまだ行ける。彼女はイギリス貴族。まだまだ取れる。

黛 薫子は、ここで手を緩めるような女ではない。

「ねえ、その写真……もっと色々出来るとしたら……どうする？」

「い……色々……ですか!？」

色々 to 色々想像したのか、セシリアの鼻息が荒い。

「さあ、ご覧あれ!！」

懐から出した紙は                   メニューと書かれていた。

写真焼きまし

¥300

A2印刷（ポスター）

¥2000

お得！決闘写真セット

¥4000

ポツタクリもいいところである。

「全部お願いします！ あ、ポスターと写真セットは三つで……！」  
「はい、毎度〜！」

入れ食いである。

流石は貴族。金の使いぶりが素晴らしい。

こうして、セシリアは紙袋に詰められた夢の結晶に、そして薫子はホクホクの懐にスキップして分かれたのだった。

「……………何これ？」

セシリアの同室である辰守織羽は、部屋の惨状にそう呟くのが精一杯だった。

この部屋は狭い。何故狭いかといえば、セシリアがどうやってか天蓋付きのベッドなんて物を運び込んだせいだ。

（この後、更に調度品が増えていくのだが）

それはまだ良い。だが、これはなんだ？

部屋に貼られまくった写真。そのどれもに映っているのは織斑一夏。

「うふふふ……ふふふへ……」

そして件の天蓋付きベッドに仰向けに横たわり、不気味に笑う同居人。

もしこれを見て、全てを想像して理解出来る人物がいたとすれば、それはきつと未来人か超能力者か宇宙人だ。

ただの人間に興味のない女子高校生に、すぐ教えてあげたい。

織羽はそっと、セシリアの視線の先　　天蓋の裏側を見てみた。

「……………」

ポスターだった。デカイポスターが、貼ってあった。  
「あら、織羽さん。いつ帰ってきたのですか？」

もう、絶句するしかなかった。

この翌日。

辰守織羽は部屋替えの願いを提出するのだった。

幕間 その1 (後書き)

辰守・オルコットの部屋は凄いいことになりましたw

これを書きたくて仕方なかったw

幕間 その2 (前書き)

今回は鈴の過去話。

## 幕間 その2

凰 鈴音『ちよつとだけ、昔の話』

とある病室に、無数のコードと大型の機械が運び込まれる。  
それを次々にセッティングし、準備は完了。

「じゃあ、始めるよちーちゃん？」

「ああ……やってくれ」

稀代の天才・篠ノ之束が作った、MSSの試作機。  
それを使う相手は織斑千冬と織斑春斗。

突然の意識喪失による生命の危機に対して、その意識を他者に移す  
ことで、肉体に『自分が生きている』という事を理解させ、目覚め  
を促す。

それが、MSSによる意識覚醒の理論。

その器として、千冬は自らを差し出した。

だが。

「どうしてだ……何故、失敗する!？」

千冬はガツン、と壁を殴りつけた。

数度繰り返し行われた実験だったが、結果は失敗。

意識のサルベージまでは成功するも、しかし肝心の器への移植が全く上手く行かないのだ。

「うーん、やっぱりか」

「どういう事だ？」

「上手くいかないのは……ちーちゃんの『器』としての問題があるんだと思うの」

「私に……問題だと!？」

「ちーちゃんはもう成人していて、精神構造が大人になってるからね。春るんが入る余地が無いんじゃないかな。って、東さんは思うわけ」

「なんだと……なら、どうすれば……！」

「一番良いのは、同じ年かつ、同性の子供……」

「お前……まさか……！？」

「なら、俺がやるよ……！」

ドアが開き、姿を見せたのは一夏だった。そしてその後ろには鈴の姿もある。

「一夏！ 入るなと言った筈だ！！」

「ごめん、千冬姉……でも、俺なら……春斗の器になれるんだろ？」

「バカ者！！ 下手をすれば、お前が消えてしまっつかも知れないんだぞ！？」

「大丈夫だつて。春斗が……俺を消したりする訳がないだろ？」

「っ……だが、しかし……」

「そ、その器っていうの……あたしでもなれるんですか！？」

「……何、君は？」

冷たい視線が、鈴に突き刺さる。あからさま過ぎる拒絶だったが、鈴はその視線を真っ向から睨み返す。

「あたしは凰 鈴音。一夏と春斗の……幼馴染で友達です!!」  
「で、それが何? つまり他人で事でしょう?」

「あなたにとつては他人でも、私にとつては他人じゃない!!」  
「……失敬だね。私がいっ、いっくん達を他人だなんて言ったのかな? 耳が聞こえないのかい?」

「そっちこそ何、意味分かんないこと言ってるんですか!? バカなんですか!?!」

「へえ……この束さんを面と向かってバカ呼ばわりするのは、これで二人目だよ……」

そう言いながら、その瞳が更に熱を失っていく。

それを怖いと思いつつも、鈴はそれにも負けない熱を籠めた瞳で返した。

「それで……その器には……あたしはなれるんですか!? なれな  
いんですか!?!」

「いっくんよりは可能性は低いだろうけど……なれるよ?」

「ちよつと待つて、束さん! 鈴、お前もだ!! 二人揃って何言  
つてるんだよ!?!」

一夏が驚いたように言った。

「何つて……決まつてるじゃない。あたしも……やるつて言つて  
るのよ! 一夏はっかりに危険なことさせられないでしょ!?!」

「バカヤロウ! これは春斗の……家族の問題なんだよ!?!」

「そんなの大した問題じゃないわよ!! バカじゃないの!?!」

「バカつてなんだよ、バカつて!?!」

「あんたがバカだから、バカつて言ったのよ!! いい? 春斗は  
確かにあんたの兄弟よ? でも、あたしにとつても大事な友だちで、  
幼馴染で……だから、あんたが春斗を助けたいように、あたしだつ

て………春斗を助けたいのよー!!」

「…………はあ」

場所は中国。

IS操縦者となった鈴は、溜め息を吐いていた。

あの日、結局は一夏に押し切られるようにして、鈴は引いた。

と言っても、もしも自分が成功しなかった時は、自分に頼むと約束してだが。

今、こうして思い返してみれば、どうしてあそこまで必死だったのかと思う。

勿論、春斗を助けたいからだという気持ちなのは分かる。だが、今思い返すと何というか……とてつもなく大胆は発言だったと思った。

もしもあの日、鈴の中に春斗が入っていたらどうなっていたのだろうか。

『鈴ちゃん、相変わらず胸小さいねえ』

『ねえ、僕が出ている時の方が女の子らしく思われるって、致命的

じゃない？』

『あの程度の知識で偉そうに講義とか……ちょっと、自分の分を分  
からせてあげた方が良いかな？』

「痛たたた……」

なんか、想像しただけで胃が痛い。

春斗の性格と言動を考えると、本気で有り得そうだから恐ろしい。  
実際、春斗のフォローは大変だった。主に女性関係的な意味で。

一夏と違って春斗は異性からの好意というものを察する事ができる。  
鈴自身、それだからかわれること多数。

そして、一夏の体で女子にいい顔をしたりするものだから、ただで  
さえフラグ体質の一夏に相乗効果で性質が悪い。

ともあれ、今は遠い日本の地できっと頑張っているんだろう。

見上げた空は、いつだって繋がっているのだから。

「一夏……生きてるかしらね？」

それから、しばらくして後。

「IS学園の入学願書お……？」

目の前に出された書類に、鈴は顔を顰めた。

IS学園。

日本にある、世界唯一のIS操縦者育成機関。

「面倒くさいなあ……」

鈴は正直、気乗りしなかった。

IS学園に入れば、日本に行ける。だがIS学園はその特徴故に全寮制。なので、外へ出ることはなかなか難しい。

ましてや、国家代表IS操縦者候補生の身分では、外出時間など殆

ど無いだろう。

国としては、彼女の第三世代IS 《甲龍》のデータ取りの意味があるのです、どうしても願書を出してもらいたいのだが、ぶっちゃけた話、鈴には受ける意味が無い。

IS操縦者の威信もある。

国家代表候補生のプライドもある。

その責任を果たす意識もあれば、有事に立つ覚悟もある。

だが、それよりも優先されるべき事が彼女にはあった。

『一夏、あたしも……春斗が目覚めるまで一緒に頑張るからさ』

『鈴……』

『だから、絶対に……また三人で……ね？』

果たされないまま、置き去りにされた約束。  
それを守れないのなら、不自由な立場になってまで日本に帰る意味  
が無い。

「あかし、めんどくさいからパス！」

で、それから暫く経ったある日。

「ブッ!!」

食堂で朝食をとっていた鈴は、盛大に嘖いた。

食堂のTVに映る、一夏の姿。

『世界初の男子IS操縦者誕生。IS学園へ入学決まる』

それを世界中に伝えるニュースである。

「何であたしがIS学園に行けないのよ!？」

鈴は基地司令に思いつ切り突っかかっていた。

「だって、受けるように何度も言ったのに……聞かなかったのは君でしょ？」

「そんな過去のことはどうでも良いのっ！今すぐあたしをIS学園に入れなさいっ!」

理不尽極まりない台詞である。

「いや、そんな事言われてもねえ」

ズドンッ！！

「お願い、お・じ・さ・ま？」

部分展開された甲龍の拳が、壁にめり込んでいた。

「……………て、転入手続きを出しておきます」

「ありがとう、おじ様」

俗にいうO H A N A S H Iによって、鈴は即転入手続きをされる事となった。

「待つてなさいよ…………一夏、春斗…………！」

こうして、凰鈴音は日本への帰路に着く。

果たされなかった約束を、もう一度。今度こそ違えないように。

自分だけが、《彼らの特別》なのだから。

## 幕間 その2（後書き）

後半部分は漫画版の零話です。

学園に行く目的が、ちよっとだけ違います。

幕間 その3 (前書き)

今回はシャルロット編。

最近黒いと評判の彼女の白い(ピンク混じり)の一面をぶっぞ

### 幕間 その3

シャルロット・デュノア『ささやかな一時』

トーナメント終了から二日後。

ここは一年生学園寮、織斑一夏の個室である。

その部屋のもう一人の主は現在、机に向かっていた。その前には無数の空間投影モニター。

そこに無数の文字が羅列し、流れていく。

「……………」  
その中から一瞬で問題のあるポイントをつまみ上げ、削除。そこに変わるものを即座に入力。

更にプログラム同士の連動を組み直して無駄な部分を削ぎ落とし、プログラムそのものの容量を軽減させる。

「……………」  
一切の言葉も発せず、全ての雑念を捨てて唯一つの事に集中するその背中を、シャルロットは一夏のベッドに座って、枕を抱えながら見つめていた。

(あんな真剣な顔………カッコイイなあ………)

訂正。思いつきり見惚れていた。

顔は赤くほてり、ギョツと枕を抱く力が強まる。

真剣に、真っ直ぐに、一つの事に没入する姿。あの眼差しがもし自分だけに向けられたなら。

「~~~~~っ!!」

そこまで考えて、シャルロットはあまりの恥ずかしさに顔を枕にうずめた。

シャルロット・デュノアの理想の男性像は『白馬の王子様』である。それは幼い時、母に読み聴かされた絵本と、父親のいない家庭という環境がそれを生み出した。

いつかきつと、王子様は自分を迎えに来てくれる　　そんな夢を見ていた。

勿論、年を重ねるごとにそいつたものが理想でしかない事は分かっていた。

だが、それでもその理想が形を変えただけで、消えた訳ではなかった。

そんな中で、彼女はネットワークの向こう側にいる『王子様』と出会った。

優しく、意地悪で、魔法のようにあっさりと自分の世界を変えてしまう……理想通りのようできて少し違う、そんな不思議な王子様と。

不安とドキドキとが混じり合った想いの果てに出会った『王子様』は、シャルロットの想像をずっと超えていた。

まるで、悪い魔法使いに魔法を掛けられてしまったように、彼は自分の体を失っていたのだ。

それでも、懸命に日々を生きているその姿は、きっとシャルロットの理想とは異なるものだったろう。  
理想よりもずっと強くて、とても格好良い　シャルロットはそう思った。

「シャル？」

「……………へっ!？」

ハッとして顔を上げると、直ぐ目の前には何時もの顔があった。

それこそ比喩無く　目と鼻の先に。

「うわあっ!?!」

「わっ!?! どうしたの、いきなり……!?!」

突然シャルロットが大声を上げた為、春斗も驚いてしまう。

「ご、ごめんね……えっと……どうしたの?」

「どうしたのって……これ、完成したよって何度も声掛けたんだけど……?」

「え……!?!」

そっとう春斗の手には、件のデータディスクがあった。

以前、シャルロットに渡された『リンドブルム制御用プログラム』の入った物だ。

「は、早いね……」

「あれからチマチマと、暇を見てはチェックしてたからね……」  
春斗はさすがに疲れたのか、首をコキコキと鳴らす。

「もしかして、すぐにやってくれてたの……!?!」

「トーナメントに向けての特訓もあったし、一日中は一夏の体を使えないからね……それぐらいでないと遅くなると思ったんだ」

「……春斗」

シャルロットには急ぐ理由がない、といえば嘘になる。

病床に伏せるデュアン・ヒューイク博士の事を思えば、一日でも早くという思いがない訳ではない。

だが、仮にも第三世代兵装制御用イメージ・インターフェイスプログラムだ。

丸々使っても、一ヶ月で足りるような代物ではない。その筈だ。

それをこつもあっさり、しかも一夏の体を使う時間が限定された状態で完成させたというのは、余りにも驚きだった。

そして同時に、それを優先してしてくれた事がとても嬉しかった。

「ありがとう、春斗。何か……お礼したいな」

この思い、言葉だけで伝え切れないし、そうしたくない。

何かを、彼の為にしてあげたい。

「いや、別にいいよ。頼まれたものを引き受けたただだし」

「ダメだよ！ そんなのじゃ絶対にダメ……！」

「ッ！？ そ、そうか……？」

「そうなのっ！」

シャルロットはズズイ、と詰め寄って言い切る。

とはいえ、どんなお礼をすれば良いか。

一番は、春斗に何をして欲しいかを言ってもらうことなのだが。

『ねえ、春斗はどんなお礼が良い？』

『そうだね……じゃあ、こついうお礼が欲しいかな？』

(ドサツ。ベッドに、いきなり押し倒されるシャルロット)

『は、春斗……！？ ダメだよ、こんなの……』

『どっしょっしょっ』

(シャルロット、慌てたように言う。が、春斗はそのまま上に覆いかぶさる)

『どっしょっしょっ……こんなの……だって……いきなりだし、恥ずかしいっ……』

『ダメ。自分から何が良かったって聞いたんだから……さあ、お礼を貰うよ……?』

(そっとシャルロットの頬に手が触れて、そのまま春斗の顔が近づいてくる)

「ん、んう………」

「シャル……? もしもし、シャルロット・デユノアさん?」  
春斗は、何故かいきなり目を閉じて、ささやかに唇を突き出すシャルロットに困惑した。

何がどうしてこうなった?

「えっと、どうしたら良いのか……教えてくれたら嬉しいな……って」  
「やっとな現実に回帰したシャルロットは、顔をもの凄く真赤にしてそう告げた。」

「そうだね……じゃあ、どうしようかな……？」

「あえて何を想像したのかには触れず、春斗は考えてみる。が、どうにも思いつかない。」

「そもそも、何かを期待するだの、されたい事があるからやった訳ではないのだから、仕方ない。」

「シャルロットはじいっと、春斗の事を期待に満ちた目で見ている。」

「……うん、やっぱり無いな」

「そんなあ……」

「あからさまに落ち込んだ様子を見せるシャルロット。」

「まあ、あんまり気にしないでくれれば、それでいいよ。大した事はしてないしね」

「……大した事してるよ、春斗は」

「優秀な技術者が集まってチームを組んで、それでも四苦八苦するIS開発。」

「その雛形たるISの設計を一人で行い、更にそれ用のプログラムを一人で修正、改良。」

「それを大した事ないと言い切る辺り、認識するレベルがズレているとしか思えない。」

「本当に何でも言ってる？ 何も無いはなしだからね？」

「うん、それじゃあ……」

「春斗は更に考えて、そして彷徨わせていた視線をある所で止めた。」

「シャル……お茶を淹れてくれるかな？」

「お茶……？」

「うん。ティーポットとカップと茶葉は、下の戸棚に入っているか」

「ら

「そんな事でいいの？」

「そんな事って……お茶を美味しく淹れるのはなかなか難しいんだよ？」

「……それは、僕を甘く見てるって事だね？ いいよ、すっごく美味しいお茶を淹れてあげる！」

意気込んで立ち上がったシャルロットは、キッチンへと向かう。その背を、微笑み混じりで見つめる春斗。

二人のささやかなティータイムは、ココナッツティーの甘い香りと共に始まるのだった。

「それで、彼には会えたの？」

「はい、会えました。例の物も既に出来上がったので、大使館経由でそっちに送りました」

「わかったわ。それで……どうだった、彼は？ 思ってた通りの人だった？」

「いいえ、違いました……」

「……………想像よりもずっと、素敵な人でした！」

幕間 その3 (後書き)

最後の通信相手は、フランスにいるフィリーです。

乙女なシャルロット。最近書いてないせいで、ちゃんと書けているか不安w

## 幕間 その4（前書き）

幕間4はラウラ編。

入院期間中、彼女に何があったのか。その一幕です。

ちょっと短いですが、それではどうぞ。

## 幕間 その4

ラウラ・ボーデヴィツヒ『開設、ハルフォーフ道場！』

トーナメントでの戦いの後、ラウラの病室。

『これより、講義を始めます。宜しいですか？』

「うむ、始めてくれ」

通信の向こうのクラリツサはコホンと咳払いし、始めた。

1346

『まず嫁を得るために必要な事はその国の文化を知ることです』

「うむ、戦闘において戦力を知ることが重要だからな」

『日本には、その独特の美意識を示す言葉があります。それが《ワビ》《サビ》《モエ》です！！』

初球いきなりデッドボール。ランナーは一塁。

「《ワビ》《サビ》《モエ》か、なるほど。で、その意味は？」

『《ワビ》とはつまり、見栄や意地を張らず、正直に、慎みを持ち、奢らない事を表します』

ストライク。見事に決まった。

「ほう。自分に正直にか……言うは易いが、なかなか難しいことだな。では《サビ》とは？」

『《サビ》とは古い物、すなわち骨董品<sup>アンティーク</sup>など、時や歴史を感じさせるものの事です』

ストライク。これでノーツ！。

「なるほど。確かに古い時計や絵画、建築物を見ると、時の流れというものを感じるな。では《モエ》とは何だ？」

『それは隊長のことです』

おっと、バックスクリーン直撃弾！！

「わ、私のことだと……！？ な、何故私が【日本の美意識】なのだ！？」

『説明しますから落ち着いてください。【萌】とは元は色 薄

青と緑の中間色を表し、主に草木の芽吹きを表現するものです』

ハルフォーフ、ここは立て直したいところ。

『それが転じて、心に芽生える情動を現す【萌え】となったのです  
！！』

おっとお、ライトに向かってグングン伸びる。入ったア、ソロホー  
ムラン！！

クラリッサ・ハルフォーフメッタ打ち。しかし、本人はそれに全然  
気づいていない！！

『つまり、今の隊長の心に芽生えた想い、それもまた《モエ》とい  
うべきものなのです！！』

「そうなのか！？」

『ええ、そして私の心に芽生えているものもまた、《モエ》なので  
す……』

間違っているのに間違っていない辺り、恐るべしクラリッサ・ハル  
フォーフといったところだろう。

ともあれ、ここからが本題である。

『さて、日本の美意識を理解したところで……如何にして《嫁》を

取るか、です。先日の話は覚えていますね?」

「うむ……き、キスをするというヤツだな……?　だが、やはりそれは……恥ずかしいというか何というか……」

「甘いッ!　そのような考えでは、ハゲタカに嫁を奪われるだけです!」

「っ……!?!」

「良いですか?　隊長は第一印象において最悪。その後の関係も悪く……正直、二歩も三歩も出遅れているのです!　ならば、こここそが勝負時なのです!」

クラリツサは熱く語った。ビジュアルは見えないが、きつと轟々と燃えていることだろう。

ダメな意味で。

「逆転を狙うためには、先程の《ワビ》、そして《モエ》の力を借りるのです!　それ故の《嫁宣言》と《キス》なのです!　《ワビ》　すなわち己の心に正直になり、嫁を嫁とする宣言をし、そして《モエ》　今までの冷たい【ツン】を【デレ】に変換したその行為……正しく、日本の美意識の結晶……!」

「な、何と……そこまで壮大な計画だったというのか……!?!」  
ラウラは雷に当たった程のショックを受けた。

「だ、だが……私はドイツ人だ。日本の美意識をどれほどに追求できようか……?」

「ご安心下さい。例えばドイツ人であろうとも……その美意識、求める事は可能なのです!」

「何だと、それは本当か!?!」

「ええ、その先達は形こそ違えど……《ワビ》《サビ》を持った武人たる御人。その方の事を……今こそ語りましょう!」

クラリツサ・ハルフォーフは語る。

世界を守る為に、その為に戦う仲間　　友の為に、敢えて逆賊と  
なつて巨大なる壁になつた者のことを。  
そして、それを友らが乗り越えて後、世界の影に潜みつつ、世界を  
守る為に一振りの刃と共に戦場を駆けた　　武神装甲たる戦士の  
事を。

「なんと……こんな生き様が……美意識だというのが……!?!」  
「ええ……大義の為に己の信じる正義に殉じる《ワビ》の心。そし  
て銃に頼らず、ただ一振りの斬艦刀のみで戦い抜く古き鉄の如き《  
サビ》の意思……これこそが軍人これこそが武人……!?!」  
「ああ……分かるぞ。これこそ……!?!」

「『ゼン　ー・ゾ　ボルトツ!?!』」

この後、クラリツサから送られてきた映像データを鑑賞。数々の名

シーン、名台詞に彼女は感銘を受けていく。

「同じドイツ軍人として、負けていられん……！ 必ず、嫁を嫁と  
して見せよう……！」

そう、心に固く誓うラウラ。ちなみにゼーガー・ンボルトはドイツ人だがドイツ軍人ではない。

クラリツサ・ハルフォーフ道場、これにて閉門。そして、ラウラ・  
ボーデヴィツヒ、その迷走の始まりである。

幕間 その4（後書き）

誰のせいだと問われれば、間違い無くクラリッサのせいw

今後、ラウラの台詞に親分が出てくる可能性は否定出来ないw

幕間 その5（前書き）

今回は筭のお話。

小学校2年の六月。最初の物語です。

## 幕間 その5

篠ノ之箒『六月

”春”と”夏”の間で』

それはまだ、篠ノ之箒が小学二年の頃。

放課後の清掃時間。箒はクラスの男子三人に囲まれていた。

「よう、男女〜。今日は木刀持ってないのか〜？」

「……………竹刀だ」

「へへ〜、お前みたいなの男女には、武器がお似合いだよな〜」

「喋り方も変だしよ〜！」

古今東西、子供のからかいというものは夕チが悪いものだ。

「……………」

箒は答えない。その代わりに、凜とした瞳でまっすぐに三人を睨みつける。

そんな箒の態度に　　いや、態度云々なしで、更に男子たちはからかいを続ける。

「や〜い、男女〜！」

「男女〜！」

「男女のくせにリボンなんかしてんじゃね〜よ〜！」

「っ……………！」

箒がギョツと拳を握る。

一刻も早く、この不愉快な口を黙らせてやりたい。

「……うつせーな、お前ら暇なら帰れよ。でなかったら、手伝え！」  
手にした箒で床を叩き、苛立ち混じりに言う少年。

「何だよ織斑。お前、こいつの味方かよ？」

「もしかして、こいつの事好きなのか？」

「……はあ？　つーか、邪魔なんだよ。どっか行けよ、うぜえな」

少年　織斑一夏は、心底げんなりしたように言った。

何をどう聞けばそうなるのか、全く理解出来ない。

「へっ。真面目に掃除するなんて、バカじゃねーの　わっ！  
？」

「真面目にする事の何が馬鹿だ？　お前らのような輩より、はるかにマシだ」

今まで何を言われても手を出さなかった箒が、そう晒った男子の胸ぐらを鷲掴みにした。

「な、なんだよ……何ムキになってんだよ……離せ、離せよ！」

締め上げられる男子はもがくが、もとより箒は実家の道場にて鍛えているので、並の男子など足元にも及ばない胆力がある。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。こいつら朝からイチャイチャしてるんだろ」

「うつそ、マジで〜！」

一人が完全に締め上げられているにも拘らず、残る二人はニヤニヤと笑い、からかうのを止めようとしない。

（うわ、また出たよ。夫婦夫婦って、コイツらこいつの好きだな〜。いい加減、飽きたっつーの）

箒の家の道場に通うようになって、一年。散々言われ続けた言葉に加え、両親のいない一夏には、夫婦というものの概念が薄い。

どう言われようと、別段怒る気にもならない。

「だよなー。この間なんか、こいつりボンなんかしてたぜ？ 男女のくせに、似合わなすぎて晒っちま　　うぶえっ!?!」

瞬間、怒った一夏のパンチが見事に打ち抜いていた。

それだけに留まらず、倒れた男子の胸ぐらを掴んで引き起こす。

「笑う？　何がおかしいんだよ？　あいつがりボンして何がおかしいって？　すげえ似合ってただろうがよ、このボケナス！」

「お前……先生に言うぞ!?!」

「おーおー、言ってみるよ？　その前に、全員ぶっ飛ばしてやる!?!」

かくて始まる大立ち回り。三人の男子相手に一夏一人。

しかし、一夏は元々頑丈さと体力には自信がある上、道場で剣術、千冬には体術も習っている。

そうそう、遅れなど取る筈もない。

「どりゃあっ!?!」

「ぶごっ!?!」

二人を倒して、最後の一人を蹴り飛ばした。

「　　ふう、やっと中庭の掃除終わ………何これ？」

教室に入ってきた、一夏にそっくりな顔立ちの少年が、その惨状に絶句した。

掃き集めたゴミは散らばり、机と椅子は倒れ、ついでに殴り飛ばされた男子三つ。

「一夏……掃除してたんじゃないの？」

倒れた椅子を立て直しつつ、呆れ気味に少年

織斑春斗は言う。

「んな事言ったって、コイツらが悪いんだぞ!?!」

「何があつたか知らないけど……これはやり過ぎ」

「

「コイツらが篠ノ之の事、男女とかリボン似合わないとか言うからズダアンツ!!」

「ッ!?」

破裂音にも似た音が教室中に響く。

持ち上げられた椅子が、倒れた男子に向かって振り下ろされていた。

「どころか、全然足りないね。事実なら、万死に値する暴言だよ」

「ひいつ　!?」

情けない声が、椅子の下から上がる。

椅子の四本の足が、男子の横と両脇の下に突き立っていた。

春斗は椅子の下の男子に、身も凍るような冷たい視線で尋ねる。

「ねえ、改めて聞くけど……篠ノ之さん、リボン似合う? それとも似合わない? どっちかな?」

「ひッ……ひッ……!　うう……うわあああああんっ!!」

「泣いてたら分らないよ。ほら、答えてよ?」

「……お前、キレるの早過ぎだろ?」

「何言ってるの一夏?　僕はただ普通に、彼らと平和的話し合いを望んでいるだけだよ?」

「お前ら、何をやってるんだ!??」

騒ぎを聞きつけた担任が教室にやって来て、暴れた一夏、そして三人をとっ捕まえた。

筈は春斗が自分と一緒に逃し、お叱りは四人だけに及ぶ。

が、この後が面倒であった。  
春斗に泣かされ、一夏に殴り飛ばされた三人の親が大騒ぎをしたのだ。

やれ警察だ裁判だと、PTAにまで訴えて、千冬はそんな馬鹿な親に頭を下げて謝った。

一夏自身、何を言われても平気だったが、千冬がそのせいで無意味に頭を下げさせられるのは耐えられなかった。

問題を起こせば、千冬に迷惑がかかってしまう。

そう学んだ一夏は以後、暫くの間は穏便な方法で、馬鹿な男子を撃退する事にした。

ちなみに、三人の男子の親は突然、大騒ぎを取り下げの事になる。

何故なら、偶然にも同時に、勤めている会社で大問題が起きたのだ。それは会社の粉飾決算の書類が外部に漏れたり、機密資料だった物がインターネット上にアップロードされたり、取引データが丸々消滅してしまったりと様々だ。

だがそれが、外部の不正アクセスによるものであるだろう予測以外、一切不明。  
履歴さえ残さずに全ては行われたらしく、今でもその犯人は分かっ  
ていなかったりする。

その事件から数日後。

「……お前は、馬鹿だな」

道場での稽古を終えて一夏が顔を洗っていると、箒にそう言われた。

「あん？ 誰が馬鹿だ、誰が」

いきなり馬鹿呼ばわりされて、一夏は不愉快そうに返す。

「あんな事をすれば、後で面倒になると分かるだろう………なのにとど  
うして？」

「……ああ、あの事か。んなの関係ねーよ。許せねえから、ぶん殴  
っただけだ」

これで一度、千冬に叱られたことがあったが、それでも一夏にとっ  
てこれは曲げられない 絶対に譲れない事だった。

「大体、複数つてのが気に入らねえ。群れて囲んで陰険なんざ、男の恥だ」

ふん、と鼻息荒く言い切る一夏。

「だから、お前も気にするなよ。リボン、またして来いよ。似合ってたぞ?」

「……ふ、ふん。私は誰の指図も受けん」

「……そっか」

そう言つて、また顔を洗う。冷たい井戸水は、稽古で火照つた体にとっても心地良かった。

丁度、剣道具を纏めたところで、弓道場に通っている春斗が石段を上がってきた。

「おい、一夏ーっ!」

「おう、春斗。そっちはもう終わったのか?」

「今日はスーパの特売だから、早めに切り上げたんだ」

「ああ、そうだったな……じゃ、行くか。また明日な、篠ノ之」

「さよなら、篠ノ之さん」

「き、だ」

「ん……?」

「私の名前は篤だ。いい加減に覚える。大体、ここは父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。これからは……名前で呼べ」

「分かった。俺は割と、身近な奴の指示は聞くからな」

「出来るなら聞いただけじゃなくて、実行にも移して欲しいんだけどね?」

「ほつとけよ。……じゃあ、一夏な。で、春斗だ」

一夏は自分と春斗を指差して言った。

「な、何?」

「だから、織斑は三人いるし……俺たち同じクラスだろ。分かり難いから、これからは名前で呼べよな」

「だ、だが……」

チラリと、篝の視線が春斗に向く。

「僕は別に構わないよ」

「うむ……分かった」

優しく微笑みながら春斗が言つと、篝は何処か安心したように頷いた。

「代わりに、僕は『ほーちゃん』って呼ぶね？」

「な、何……!?!」

篝は目をまん丸に見開いて驚いた。

「だって、僕も一夏も名前で呼んだら分からないでしょ？ だから、

僕は篠ノ之さんの事は『ほーちゃん』って呼ぶことにしたから」

「いや待て!?! だからといって、それはおかしいだろう!?! 普

通に呼び捨てで呼べ!?!」

「普通につて……篝……篝ちゃん……ほーちゃん……うん」

春斗は一通り口にしてみて、頷く。

「 やっぱり、ほーちゃんだね」

「頼むから、背筋が痒くなる呼び名をやめろーっ!?!」

「嫌だ。僕はこれ以外で、絶対にほーちゃんをほーちゃんとは呼ばない」

「一夏っ！ 何とかしろ!?!」

「あー、無理だな。春斗って結構、頑固だし？」

「大丈夫。すごく可愛いよ、ほーちゃん？」

「頼む。百歩譲って”ちゃん”付けで良いから、それだけは……」

「特売が始まるから急ごう、一夏!?!」

「お、おう……」

「だから待てと言つに!?! 人の話を聞けえええええっ!?!」

季節は六月。季節は、”春”から”夏”へと移り変わる。

それは、大切な 《ハジマリノキオク》。

「……………うん」

窓の向こうから聞こえる雀の囀りに、箸は目を覚ます。ベッドから体を起こせば、同居人はまだ夢の中。

「……………随分と、懐かしい夢を見たものだな」  
そう独りごちて、クスリと笑う。

枕元には携帯電話と、もう一つ 鈍色の金属板<sup>プレート</sup>。

あの夢は、きっとこれのせいだろう。

季節は六月。  
今日もまた、日は昇る。

## 幕間 その5 (後書き)

原作でもあったエピソード。

春斗の篤至上主義は、この時には既に完成していましたw

ー夏と春斗が同時にいる………というか、春斗自身の登場はこれが初めてですねw

IS〔ツイン・ソウルズ〕 七夕短編（前書き）

7月7日は篝さんの誕生日。

はい、一日遅れましたw

大丈夫、旧暦なら遅刻じゃないしw

## IS〔ツイン・ソウルズ〕 七夕短編

\*このネタはIS〔ツイン・ソウルズ〕本編とは全く関係ありません。

7月7日。七夕。同時に篠ノ之箒の誕生日でもある。

「という事で、短冊に願い事を書いてみようっ！」  
箒の誕生日パーティーの最中、織羽は脈絡もなく笹と短冊を取り出した。何処からとかいう話は受け付けません。

「どっから出したんだよ」  
と、空気を読まない男が受付ないというのに言いやがります。  
彼は織斑一夏。世界で一番フラグを立てまくる男として先日、見事にギネス認定された男子高校生である。

「されてねえよ」  
「一夏、誰に言ってるの？」  
と、その隣にいる一夏にとても良く似た風貌の青年が首を傾げる。  
織斑春斗。自分の体を失い、一夏の中に意識だけが宿っている。が、このおまけ時空ではそんな事はなく、普通にいます。

「タンザク？ 何ですか、それは？」  
セシリアが意味が分からないと尋ねる。ラウラやシャルロットも、

右に同じのようだ。

「ああ、ヨーロッパ組は知らないのね。日本じゃ、七夕に願い事を書いた短冊……こういう紙を吊るすのよ」

「その前に、織姫と彦星の話をした方がいいかな？」

春斗はざっと、七夕の話を三人にした。と、何やら乙女心が刺激されたのか、何やら憤りを抱いた表情を見せた。

「なんなのですか、愛する二人を引き離すなんて……！」

「そりゃあ、務めを忘れた二人も悪いと思うけど……！」

「義兄上、何処に行けばその分からず屋どもは居るのですか？」

「まあまあ、落ち着いて。ラウラちゃんはISを戻しなさい」

「で、短冊を笹に吊るすのはどうしてなのですか？」

「夏越の大祓の茅の輪（潜ると身を清められるとされる大輪）の両脇に笹があるんだけど、それにちなんで笹に五色の短冊を吊るんだ」

「中国だと五色の糸を吊るすのよ」

「ということで、早速やってみようっ！」

うんちくは一先ず終わり、それぞれが早速五色の紙に願い事を書き始める。

「出来ましたわ！」

一番に書き上がったセシリアは早速、短冊を笹に結びつけようとした。

「待て、オルコット」

「っ!？」

検閲官織斑千冬が登場し、さつとセシリアの手から短冊を奪い取る。

『一夏さんと一緒にオルコット家を守れますように』

「却下だ」

ビリビリビリッ！

「ああっ!?!」

「バカ者。七夕の短冊は……ちょっと待て風、デユノア、ボーデヴ  
イツヒ」

「……っ!?!」

千冬がセシリアに構っている隙にと動いた三名であったが、そんなものを見逃す千冬ではない。あえなく奪われる三人の短冊。

『今後こそ一生、一夏に酢豚を食べさせる』

『一夏は私の嫁』

『春斗が僕の、僕が春斗のものになりますように』

ビリビリビリビリビリッ！

「……ああ

っ!?!」

「貴様ら、七夕の短冊に書く願い事は”芸事”だということを知ら  
んのか?」

七夕の基となった祭事が技芸上達を願うものであったことから、七  
夕のご利益は芸事だけとされている。

泣く泣く、恋愛事以外の願い事を模索する四人。

「芸事か……ISが上達したいってのはアリか?」

あーでもないこーでもないと悩む一夏をさて置いて、春斗は箒に尋ねる。

「ほーちゃんはどんな願い事を？」

「うむ……何を書こうか考え中だ。春斗は？」

「僕はもう書いたよ」

「どんな事を書いたんだ？」

「それは秘密。そういえば昔、ほーちゃんが転校した年の七夕……願い事一夏と書いたっけ」

「……ああ、そうだったな。なんて書いたっけ？」

「忘れたの？」

「春斗は覚えてるのか？」

「勿論。僕が『また、ほーちゃんに会えますように』で、一夏は『箒とまた遊べるように』だよ」

「ああ、そうだったな」

「っ……!!」

箒が顔を赤くして、ビククリする。それは箒がかつて書いた短冊の内容のせいだ。

『もう一度、一夏と春斗に会えますように』

天の川に分かたれた織姫と彦星が、一年に一度会えるように。

もう一度、いつか二人と再会する事を願って。

環境が、社会が箒を孤独にする中で、星に願うことだけが箒の精一杯だった。

「じゃあ、あの時の願い事は叶ったって事か？」

「六年越しだね。やれやれ、織姫と彦星だって一年で再会できるの

に……随分と時間が掛かったね」

「……そうだな」

夜天は晴れ渡り、星の天蓋に、笹の葉がそれぞれの願い事を示す。

さわさわさわ……。

赤い短冊が、そよ風に吹かれて揺れる。

『もう二度と、この時を失わずに済むように  
篠ノ之 篇』

その願い事が叶うか否か、それを知るのは天の星のみである。

IS〔ツイン・ソウルズ〕 七夕短編（後書き）

篝さんの七夕話。

誕生日は原作でもやってるし、七夕メインに。

たまには、こつこつのも良いですかね？

## 第二幕 プロットダイジェスト（前書き）

後半戦突入前に、台詞中心にダイジェスト版を作ってみました。

プロットを元に行っているのですが、本編では変わったり無くなったりするかも知れません。

尚、後半のネタバレ的部分もありますので、嫌だという方はバックして下さい。

ではどうも。

## 第二幕 プロットダイジェスト

臨海学校から帰ってきた一夏達を待ち受ける、新たなる出会い。そして戦い。

「はじめまして、織斑一夏くん？」

「あつ、昨日ロッカールームにいた……！？」

「私はこのIS学園の生徒会長、《更識 楯無》。君にちょっとお願いをしに来たの」

「君は弱い。だから大切な者を守れないのよ」

「何が……言いたいんですか？」

「私が君を強くしてあげる……今より、少しは戦えるように」

「お姉ちゃんは完璧だから……何でも出来る……貴方と同じ」

「完璧な人間なんて、世界中を探したって一つの場所にしかないよ」

「……？」

「……つまり、頭の中だけさ」

世界の裏で、謀略を巡らせる者達。

「こんなガキ…… IS使つてまで攫ってくる意味があつたのかよ？  
ええ、” Dr. フアウスト”？」

「フフフ…… 貴方のようなエージェント風情には、この体の価値は  
分からないわ」

「価値ねえ…… IS適正もない、単なるその辺の男と同じじゃない  
つてのか？」

「ええ。これこそ…… 私がずっと探していた『パンドラの鍵』……  
オリジナル・ドライバーなのよ……！」

「いいのかよ、スコール。あの女の計画が成功したら……？」

「何も変わらないわ」

「え……？」

「どれだけ世界が変わろうとも、影が消えることはない。ただ、そ  
の姿が変わるだけ…… 今までと同じ」

「……」

「私達は世界の影…… 『ファントム・タスク 亡国機業』なのだから」

狙われた、夢の翼。

「一体何者だ！？ここに襲撃とは……………！！！」

「まさか、向こうの狙いは……………！？？」

「こいつがフランスの第三世代機……………いいねえ、最高だ……………！！！」

「その機体は……………あんたみたいなのが、使って良いもんじゃないのよ……………」

「はっ！第二世代のカスタム機か……………丁度良い、こいつの遊び相手になってくれよ！！！」

「彼の夢を……………穢したな……………！！！」

「ああ？何言ってるんだ、このガキ……………？？」

「お前だけは……………絶対に許さない！！！」

奪還のために、少女は一人立ち向かう。

「この花火を……今度は、三人で見よう」  
「……うん、来年はきつと……！」  
「……ああ、そうだな」

夏の夜空を彩る花火に誓った約束。

そして、終局の始まり。

「馬鹿な……全滅だと!？」

「既存のISじゃ、あれとはまともに戦うことも出来ない。出来るのは 白式と裏白式だけ」

「敵の作戦を阻止すること。それだけを考えなさい」

「もうすぐ、あの女の作った世界が終わる……もう、誰にも私の夢は止められない!!」

「そんな事のために……お前は狂ってる!」

「狂っているわ！　そうさせたのはあの女よ！？」

狂気が舞い踊り、世界は破滅へと向かう。

「やれやれ……とんだ見せ場だね」

「約束しろ。絶対に、消えるなよ……！！」

『ああ、約束するよ……！　さあ、始めよう……！！』

## 第二幕 プロットダイジェスト（後書き）

というところで、千冬編はどうしようかと考え中に書いてみましたw

色々、ヤキモキして頂けたら成功ですねw

**第34話 生徒会長・更識楯無登場（前書き）**

今回から第二章です。

サブタイでも分かる通り、会長登場です。

第34話 生徒会長・更識楯無登場

飛び交う銃弾。飛び散る火花。

硝煙が室内を覆う中、怒れる悪鬼がその凶刃を振るう。

「邪魔だ、退けえっ!!」

鋼の鎧　　IS”暮桜”を身に纏った千冬が、一振りの刀”雪片”を一閃。

武装した集団を一瞬で斬り伏せる。

刃に付いた血をヒュン、と振り落として、目の前の頑強そうな扉を力任せに蹴り破る。

鼓膜を派手に叩く、甲高い音を立てながら転がっていく扉。その向こうに広がるのは暗闇だった。

そして、そこに立つ　　憎むべき敵。

ハイパーセンサーを用いながら、しかし顔が見えない。性別も分からない。だが、分かる。

あれが、自分の敵だ。

「弟は何処だ……?」

千冬は雪片を構える。



「はあ……はあ……。さあ、弟は……春斗は何処だ!？」  
倒れた敵の鼻先に、雪片を突きつける。

「くくく……だから言っているだろう？ お前には、守れないと……」

徐々に、その顔がハッキリとしてくる。

「……っ!? な、何故……!？」  
その現実から目を逸らしたい。だが視線は動かせず、ハイパーセンサーは容赦なくそれを千冬に見せつける。

「止めろ……!」

「ほら……よく見なよ?」

見たくない、視たくない、ミタクナイ。

しかし容赦なく突きつけられる

その顔。

「ほおら……あんなに必死になって探していたじゃないか？　ねえ………」  
「姉さん」？

「うあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああっ！！」

悲鳴の如き叫びを上げて、見開かれた瞳に映るのは血に染まった春  
斗の顔　ではなく、見慣れた天井。

「はあ……………はあ……………はあ……………夢……………？」

全身からブワツと汗が吹き出し、心臓がバクバクとうるさい。

「ッ……！」  
汗でグッシヨリとなったシャツを脱ぎ捨て、汗に濡れた髪を無造作に掻き上げる。

ベッドのシーツもタオルケットも、ジメツとしていて不快極まりない。

全部一纏めにして、寮長室備え付けの洗濯機に放り込む。主夫である一夏が見たら、間違いなく怒るだろう行動だ。

そのままシャワールームに入り、冷水を頭から浴びる。  
一秒でも早く、この不快な熱を取り去ってしまいたかった。

臨海学校から帰ってきた織斑姉弟に告げられた、余りにも残酷な知らせだった。

医療技術研究所が襲撃され、春斗の体が強奪。  
その犯人は フアントム・タスク 『亡国機業』。

何故、そんな事をしたのか。

春斗は確かに、一夏に次いで男子IS操縦者となる可能性がある。  
だが、それが奪う理由に成り得るのか？

データなら、研究所内に幾らでもある。  
生体サンプルなら、幾らでも取りようがある。こんな事をする必要はない。

ならば、ここまでする理由は何だ？  
また人質に使い、何かをする気か？

いや、あの亡国機業が、回りくどい事をする筈がない。  
ファントム・タスク

思考しては消える可能性。それは出口なき迷路。堂々巡りの環。

「……………」

千冬はシャワーを止めて、髪を振り乱す。

冷たい雫が、鍛えられて引き締まった肢体を滑り落ちていく。

七月十日。

その日は千冬の心とは真逆の、とても良い天気であった。

一年生寮の食堂。

何時もならば中々に賑やかしい所も、一部分の空気によって、随分と重いものになっていた。

「……………」

カチャカチャという、食器の音だけが異様に良く響く。

その音源たる織斑一夏は、何時もの元気な雰囲気は鳴りを潜め、ただただ無言であった。

「一夏……どうしたと言うのだ？」

「ここ数日、とても元気がありませんわね……………」

「どうかしたのかって聞いても、何でもないって言うだけだし……………」

春斗も、様子がちょっと変だし……………」

「鈴、お前は何かしらないのか？」

「知ってたら、ここで顔を付き合わせてたりしないわよ」

何時もならば一夏の周りを陣取る面子も、今日ばかり　いや、

臨海学校が終わってからこっち、変わってしまった一夏の様子に戸惑っていた。

確かに臨海学校は色々であった。

篠ノ之束が襲来し、筈が専用機を与えられ、第三世代IS　《銀の  
シルバリオ  
福音》の暴走事件。

極めつけは、一夏の中にいる春斗の事が、なし崩し的にバレてしま

った。

それだけの事があったのだから、気疲れもしようものだが、しかしどうにも、それとは違う様子に彼女達には見えた。

そんな周囲の反応を余所に、一夏は朝食を終えると食器を返して、さっさと食堂を出て行ってしまった。

今の一夏を現す言葉があるとすると、どんてん『曇天』であろう。

晴れることもなく、しかし雨も降らず。中途半端にどんよりと、青空と太陽を遮る　　そんな状態。

心の中がモヤモヤとイライラで一杯になって、しかし、それを晴らす術を知らない。

そんな内心を誤魔化すように、一夏は授業に没頭する。そうしないと、すぐにそれが鎌首をもたげてくるからだ。

それは千冬も同様で、いつものように振舞っているが、しかし、その空気が普段もよりもピリピリしている事は隠しようがない。

その異変は、どちらも臨海学校後という共通点を持っていた。

昼休み。

一夏と簪を除く六人は、食堂ではなく屋上にいた。

簪は臨海学校以降、何か思うところがあるのか、時間を作ってはIS整備室に籠っている。

そして一夏は、昼休みなどはすぐに、何処かへと居なくなってしまう。

放課後も、何時もなら訓練に使っているのに、すぐに帰寮してしまうようになった。

「……これは、あまり良い状態ではないな」  
座を囲んで、それぞれに思う所を言う。

「ええ。ただでさえ、一夏さんはISの起動時間が足りないというのに……」

「訓練を一日サボれば、取り戻すには三日掛かる。このままでは、すぐに腕が錆びついてしまう」

「春斗も……何にも言わないのよねえ。あいつだったら、絶対にこんなさせない筈なのに……」  
「でも、その春斗に聞いても何も言ってくれないし……何だか、軽く拒絶されてるみたいで……」  
「うーん……て事は、先生と織斑君だけじゃなくて、あの姉弟全員に何かがあつたって事かな？」  
様子がおかしいのは分かっているが、しかしどう動いたらいいのかさっぱり分からない。

家の関係上、織羽には情報が下りてきてもおかしくないのだが、それはまだ止められていた。

本来ならばすぐに伝えられるべき事だが、あれだけ派手な行動を起こして警戒が強い中、次の行動が即起こる事はないという判断が下されたからだ。

今だ情報は交錯している。敵の動きも不明。

不必要な情報は、余計な混乱を呼ぶ事に繋がりがねない。

織羽には引き続き、『学園内の警護任務』の継続が与えられていた。

学園に、昼休みを告げる鐘が響く。

屋上での会談は結局、いい案も出ないままに終わりを迎えたのだった。

一組の午後一発目の授業は、二組と合同のIS実習。一夏はアリーナの更衣室で着替えていた。

最早、一夏専用となりつつあるロッカールームはとても広く、それが彼の心に空いた空虚さと重なっているようだった。

「はあ……………」

ISスーツへの着替えを終えて、白式のデータをチェックしつつ、一夏は深い溜息を吐く。

あの日告げられた出来事は、千冬だけでなく一夏の心にも大きな痛みを残していた。

「……………一夏。いい加減、元気を出してよ。皆、心配してるんだから……………」

「何言ってるんだよ……………お前の体が持ってたんだぞ!？」

ガンツ!!

ロッカーに、一夏の拳が突き立つ。

誰が何の為に。そんな事は知りたくもないし、知ろうとも思わない。ただ、今すぐにでもここを飛び出して、春斗の体を取り戻しに行きたい。

だが、その肝心の体の場所も分からず、空虚を埋めようと強まる気持ちはかりが一夏の中で暴れて、心を掻き乱す。

誰かに心中を吐き出して楽になりたいと思つても、この事は他言無用であると嚴重に言われている。

それというのも、事態が国際的問題に関わる事であり、この事件を極秘裏に調査されているからだ。

大切なものを守る為に、強くなりたかつた。だけど、一番守りたかつた”家族”を奪われて、平静でいられる訳がない。

『……それでもだよ。僕の事で怒ってくれるのは嬉しいよ？ でも、それと皆に心配掛けることは違うでしょ？』

「でも……だけど……だからって!!」  
一夏はクシャリと顔を歪め、瞳から溢れそうになる想いを必死に抑える。

少しずつでも変わろうとしていく中で、決意を言葉にして、未来を掴もうと　　ハッピーエンドに行こうとする道を奪われて。

それを、どうして受け入れろというのか。

『……　一夏』

「……………」

このロッカールームは男子専用状態。  
そして、このIS学園に男子生徒は一夏しかいない。つまり、ここに入ってくる人間はいない筈なのだ。

意識だけの存在となった春斗は、周囲の気配に鋭敏だ。その春斗が、すでに近距離までの接近を許した。そして、その距離でも足音一つ、衣擦れ音一つさえしない。まともな生徒や職員が、そんな事をする訳がない。

3

2

1

「ッ　　！！」

一夏は振り返りざまに、手刀を振るう。

パンツッ！

「　　っと、いきなり危ないなあ」

立っていたのは、IS学園の制服を着た女子。その手にした扇子が、一夏の手刀を受け止めている。

「……誰ですか？」

リボンの色から見るに二年生。クセツ毛なのだろうか、セミロングの髪が外に跳ね、その口元は薄くつり上がっている。

全体に余裕を感じさせる印象が、人を落ち着かせる雰囲気を感じさせる。

「さあ、誰かしらね？」

しかし、そのイタズラっぽい微笑みはそれとは逆の、ある種の不安さを与える。

それは何をされるかも知れないという不安　　良く言えば神秘性。  
悪く言うなら、不透明さ故の不安感。

その女子は扇子をスツと引いて、口元に寄せる。

「んふふ」

含んだ笑いと共に、クルリと彼女は踵を返す。

「今日のところは顔見せ。それじゃあね」

「え、ちよつと？」

一夏が呼び止める間もなく、女子は行ってしまふ。と、不意に足を止めた。

「あ、そうそう。そろそろ急がないと……遅刻よ？」

「っ……!？」

壁に掛けられた時計に目をやると、授業開始1分前。

『一夏、彼女が!?!』

「あッ!?!」

しまったと思った時、その女子はすでに姿を消していた。

「……それで、遅刻した言い訳はそれで終わりか？」

グラウンドには、静かな怒りに満ちた織斑千冬が待ち構えていた。

「えっと、ですから……見知らぬ女子がいきなりロッカールームに入ってきて……」

「で、その見知らぬ初対面の女子と、人気のないロッカールームで遅刻する程、話をしていたと？」

「いや、色んな意味で合ってるようで違うんですけど……ていうか、変な強調してないですかね!？」

「デュノア。高速切換ラビット・スイッチの実演をしる。的はこの馬鹿でいい」

「ええっ!?!? ちょ、千冬姉　　ってえ!?!」

「織斑先生だ。デュノア、さっさとしろ」

一夏の頭に容赦なく、拳骨が落ちる。

「ねえ、春斗……？ その人ってどんなだったの？」

「そうだねえ。今まで会ったことのないタイプだったね……」  
「ごう、  
飄々としているっていうか……」

「美人だった？」

「うん、美人だったね」

「……」

「……」

「……」

「……あ、あれ？」

「え、えっと……シャルロット……さん？」

ガシャン。と、気が付けばシャルロットはIS 《ラファールリ  
ヴァイブ・カスタム？》を展開して、その手にマシンガンを握り締  
めていた。

「では、織斑先生。早速始めます」

「ああ」

「ちよつと待ったあつー!!」

「何！？ いきなりどうしたの!？」

「一夏……？ 『春斗……？』」

「『な、なんですか……？』」

「最早、退路はないよ？」

「なっ……!？」

ハイライトの無い瞳でそう告げるシャルロットに、対して一夏は白  
式を慌てて展開して、一目散に逃げる。

「アハハ、逃さないよ？」

シャルロットはトリガーを引きながら、それを追いかけた。ドップ

ラー効果の笑い声は、なかなか恐ろしい。

「シャルロットさん、次は私ですわ」

「そんじゃ、その次ね」

「では私がその後だ」

「介錯は私がしてやるう」

「織斑君、ファイトー」

「お前ら、何なんだよおおおおおっ!!!」

その叫びは、銃撃音と爆発音によって掻き消えてしまった。

翌日。時間は昼休み。

昨日の一件が原因か。不機嫌な筈達には睨まれ、ただでさえ気苦労が多いのに、更にそれを倍プッシュ。

「はぁ……………」

そら、溜め息も出るというものだ。

『一夏、溜め息は幸せを逃がすよ?』

「お前が言つと、色んな意味でシャレにならんぞ？」

『そうかな？』

「……そうだよ」

あの一件の後でも、春斗の様子は変わらなかった。勿論、本当にそうなのではない。

千冬も一夏も、とても強いショックを受けているせいで、自分までが落ち込む訳には行かないと、必死に踏ん張っているのだ。

だからこそ、春斗はそのダメージも耐えられている、というのが正しいのかも知れない。

廊下を食堂に向かつて進む途中、一夏は不意に足を止めた。

果たしてそこには、一人の女生徒が立っていた。

「改めて……はじめまして、織斑一夏くん？」

その女生徒は、昨日のように口元を扇子で隠し、微笑み混じりの瞳を向けていた。

「あつ、昨日ロッカールームにいた……！？」

その女生徒は、まるで舞台役者の様にバツと扇子を開いた。そこには『唯我独尊』の四字。

「私はこのIS学園の生徒会長、《更識さらしき 楯無たてなし》。君にちょっとお願いをしに来たの」

「生徒会長……で、更識！？ まさか、更識さんの……？」

「妹がお世話になってるわね」

言われてみれば、確かに簪と面影が良く似ている。尤も、簪はどこか大人し過ぎて暗い印象を与えるが、楯無にはそれが無い代わりに不透明さ故の不安感が拭えないのだが。

「今、ちょっと失礼なことを考えたでしょ？」

「いえ、そんな事は。それで……俺に願いつていうのは？」

「うーん……放課後、生徒会室まで来てくれるかしら？ 話はそこでするわ」

「ここでは出来ないんですか？」

「しても良いけど……ちょっと長いからね。せつかくのお昼休みだし、しっかりとご飯を食べてきなさい」

パタン、と扇子を閉じて前のようにクルリと踵を返して楯無は去っていく。

「……だったら、放課後に来れば良かったんじゃないか？」

『最近放課後、すぐに帰るからじゃない？』

「……一体、何の用なんだろうな？」

一夏は疑問を抱いたまま、楯無の消えた廊下をただ見送り続けた。

放課後。

一夏は早速、生徒会室へと向かった。

「……………」

ドアの前に立って、一夏は僅かばかり逡巡する。

IS学園生徒会長・更識楯無。

例えるなら、薄霧の向こうに真意を隠しているような。そんな相手の誘いに、このまま乗って良いものか。

『大丈夫。いざとなれば学園のシステムを乗っ取ってでも何とかするよ』

「……………そうならないよう、生徒会長には気を付けてもらいたいな」  
心からそう願って、一夏はドアをノックした。

「はい、今開けますね」

と、室内から声がして、ガチャリと鍵が外された。重厚な開き戸がゆっくりと開いていく。

重要物の置かれている部屋は基本、センサー式のオートロックが掛けられる為、入室も制限されている。

この生徒会室の場合、生徒会役員が鍵を保有しており、それ以外の

生徒は中の役員に開けてもらう事でのみ入室できる。  
つまり、開けてくれたこの女生徒も生徒会の一員ということだ。

開けてくれたのは三年生。眼鏡と三つ編みという、ある意味黄金バ  
ランス的組み合わせだが、野暮ったくなく、むしろ理知的な印象を  
与えている。

「あなたは……織斑一夏君ね。会長、お客様ですよ」

「あら、随分と早く来てくれたのね。おねーさん、嬉しいわ」

入口正面。今時紙の書類に囲まれ 訂正。埋もれていた生徒会  
長が顔を出した。

「虚<sup>うつし</sup>ちゃん。お茶をお願い」

「はい、お嬢様」

「もう、お嬢様は止めて」

「失礼しました、会長」

何処か含んだ笑いを浮かべて、虚と呼ばれた女生徒は頭を下げ、生  
徒会室隣に備え付けの給湯室へと向かった。

「まあ、お掛けなさい。お茶はすぐにでるから」

「はあ……」

室内には比較的簡素ながら、応接セットなんて物も置かれている。

そのソファアに腰掛け、一夏は室内を見回す。

役員用デクスは、使われていないだろう物を含めて4つ。壁際の大  
きな棚には、幾つものファイルが収められている。

整理整頓はしっかりと行き届いている辺り、先程の三年生の仕事だ  
ろう。

間違っても、楯無の仕事ではないと断言できる。

「……………」  
一夏は春斗を守るために、他者の振る舞いに対して自然と注意を払う癖が付いていた。

その癖が楯無の動きを注視し、彼女が少なくとも一般の家に生まれ育ったのではない事を感じていた。

少なくとも堅気の家ではない気がしたが、妹の簪にはそういったものを感じなかったので、その辺りが判断を付けられない原因であった。

そんな一夏の内心を見抜いているのか、楯無は微笑を絶やさないうま、向かいの椅子に座る。

「さて、早速だけど……………ここ最近のIS学園で起こった問題はどうか思うかしら？」

「どう、って…………？」

「三ヶ月程の間に、すでに三回も行事が中止になってしまっているこの事態、君はどう思うかって聞いているのよ？」

「知りませんよ、そんな事……………」

「その中心に必ずいる君が、それじゃ困っちゃうのよね。」

「ただの偶然ですよ。」

一夏は内心イライラしていた。正直、今の一夏にとってたかが行事の中止程度、どうでもいい話なのだ。

楯無は余裕の色のまま、しかし鋭さを増した瞳は一夏をしっかりと捉えていた。

「君はもう少し、自分の立場を理解するべきね。言い方は悪いけど、世界唯一のケースである君の身柄は、とても貴重なの。」

「……………」

男で唯一ISを動かせる事になっている自分が貴重で、ならば拐わ

れた春斗に価値はないというのか。

双子として生まれて、それでその扱いの差は何だ。

そんな価値を誰が、どんな権利があつて決めたというのか。

「なのに君は何時も事態の中心にいる。だから、私が君を鍛えてあげるわ。だって、君は余りにも弱んだもの。せめて自分の身ぐらい守れないと」

「……要りません」

二人の視線が交差する中、虚の淹れたお茶が目の前のテーブルに置かれるが、一夏の視線は楯無を捉えたままだ。

「遠慮する事はないわ。私も君にお願い事をするんだから、これはその代わりついでだけだよ？」

「……話はそれだけですか？　なら、俺は帰らせてもらいます」

これ以上は話しても無駄だと、一夏は席を立つた。そんな一夏に対して、楯無はその瞳を鋭く細めた。

「もう一度言うわね。君は弱い。だから大切な者を守れないのよ」

「っ……!？」

その言葉は、一夏の心を容赦なく抉る。動揺を顔に出さないように、必死に堪える。

「何が……言いたいんですか？」

まるで何かを知っているかのような口ぶりに、一夏は無意識に拳を固めていた。

それに気付いて、楯無はクスリと笑った。

「私が君を強くしてあげる……今より、少しは戦えるように。ISでも、生身でもね」

「……そこまで言うんだったら、会長の実力を見せて下さいよ」  
不敵に微笑む楯無に、一夏は宣戦布告する。

「俺と……勝負してもらいます」

「うん、いいよ」

間髪入れず、あっさりと楯無は了承する。

元より、それが狙いだったのだと一夏はすぐに悟ったが、それもす

ぐにどうでも良くなった。

四の五の言うよりも、この方が分かりやすいし、これ以上は下らない言葉を聞きたくはなかった。

場所は移り、ここは畳敷きされている道場。

二人の姿は制服ではなく、白の道着に紺色の袴姿になっていた。

ルールは単純にして明快。

一夏は楯無を一度でも床に倒せば勝ち。楯無は一夏が続行不可能にさせれば勝ちというもの。

ルール上では一夏が圧倒的有利だが、しかし。

「ゲウツ！ ……っ！？」

掴みかかった腕を逆に取りられ、したたかに畳に叩きつけられる。強烈な圧迫感に肺から空気が吐き出される。

そして頸動脈に、楯無の手刀が突きつけられる。

「はい、これで一本」

余裕の表情のまま、楯無はその手を引く。

『強いね……流石に言うだけある』

「……クソッ」

一夏は息を整えつつ体を起こす。

篠ノ之の道場では刀を使えない状況を想定して無手の技も教えていた。なので、腕は錆び付いていながらも、多少なら自信はあったのだがこのザマだ。

まずは小手調べと一手目は動いたが、これは相当気を引き締めてかからないと、相手の歯牙にも掛からないだろう。

一夏の中で最も強い存在　　千冬と対峙するようになり、意識を高める。

すり足で間合いを詰め、一気に踏み込む。

「フッ　　！！」

「甘い」

楯無は苦も無く繰り出した一撃を弾き、そのままカウンターで一夏に打ち込む。

「ッ！！」

苦悶の表情を浮かべるが、それでも喰らうことを覚悟していれば耐えられる。

逆にその手を取り、足を刈り取るべく動く　　が。

ズダァンッ！！

「がはっ……!?!」

その足を逆に払われ、一夏の体が空中に舞って重力のままに落ちる。

「はい、これで二度目」

眼前に拳を突きつけ、宣告する。「これで、あなたは二度死んだ」と。

「くそ、マジで強い……」

『並じゃないとは思ってたけど、ここまでとは……』

再び立ち上がった一夏は、今度は迂闊には動けないとばかりに、楯無との間合いを慎重に計る。

無闇に動いても届かない以上は手を出せないと、一転して膠着状態になる。

「あらあら、来ないの？ それじゃ……こっちから 行くわ

「よ

「『っ!?!』」

どん、という踏み込みの音が一夏の前でした。

そこには、一瞬で懐に飛び込んだ楯無。

恐ろしいほど見事な、すり足からの踏み込み 古武術における

《無拍子》と呼ばれる技法である。

拍子とは律動<sup>リズム</sup>。

例えば拳を打つには腕を引き、腰を捻り、そして打つという流れがある。この流れが律動と呼ばれるもの。

この拍子に合わせるのが《当て拍子》。意図的にずらすのが《打ち拍子》と呼ばれるものだ。

そして無拍子とは、その律動リズムを零にする業。  
律動リズム予備動作を消すことで、相手に自分の拍子を知らせず、対処をさせない。

それによつて相手の律動に空白を生み出す事で、隙を生み出させる。

とん、とん、とん。

肘、肩、腹に流れるような掌打。反射的に一夏の体が強張る。その一瞬を突いて、双掌打が胸を打った。

「がっ……!!?」

「足元がお留守よ?」

空気が強制的に吐き出せられ、一瞬視界が白む。

その瞬間、一夏の足が払われてそのまま切り替えて投げられた。

受身も取れないまま、一夏は三度目のダウンとなった。

「どう? まだ、続ける?」

着崩れ一つなく、汗一つもかかず、楯無は涼し気な様子で一夏に尋ねる。

「まだ、まだ……!!」

「あら。頑張る男の子は好きよ」

「っ……」

「一夏、無理をしないで」

「大丈夫だ……この程度、屁でもねえ!」

投げの時に指打ち

《貫き》を受けてしまい、全身が麻痺した

ように力が入らないが、それでも一夏は体を起こした。

「はぁ……はぁ……はぁ……っ！」

あれから七度。

一夏は一度として届かない。ボロボロになりながら、それでも一夏は立ち上がる。

「ふう……頑張るわねえ。でもね、勇気と無謀は違うのよ？」

楯無は動いて乱れた襟を直し、肩をすくめる。

最早、楯無の目にも一夏に力は無い。それでも立つのは、只の負け

ん気によるそれではない。

楯無は告げる。今までと同じように、しかし霧の向こうに隠れた真意を少しだけ覗かせて。

「君は弱い。とても、滅茶苦茶にね。だから、今の君には何も守れない」

「……………」

「代表戦の時も、トーナメントの時も……………そして銀の福音の時も、シルバリオ・ゴスヘル君が生き残れたのは本当に幸運だったからよ」

「……………」

「この人、何で福音の事を……………？ あれは関係者以外に口外されていない筈なのに……………！？」

「……………」

そういえばとおかしいと、一夏は思い出す。何故、その事を楯無が知っているのか。

「今のままじゃ……………お兄さんも取り戻せないわよ？」

『なっ……………！？』

今、何を言った？

この目の前にいる人物は何を言った？

俺が、春斗を取り戻せない？

いや、その前に………何故、春斗の事を知っている？

そんなの、一つしか無いじゃないか。

「……つた？」

「……？」

「あいつを……春斗を何処にやった……？」

「え……？　ちよつと待って……何を？」

「あいつを、何処へやりやがったアああアアッ！！」

激高し、一夏が踏み込む。楯無が、その速さに一瞬驚きの表情を浮かべる。

篠ノ之流にも、無拍子に似た業がある。

それは相手の律動の最初　一拍子の前、すなわち『零』を狙って仕掛ける。

篠ノ之流古武術裏奥義　《零拍子》。

楯無が距離を合わせようと半歩下がる。それよりも早く、一夏が腕を掴む。

「　甘いね」

が、肘に辺りを打ち込み、そのまま半身を撚る。その勢いで一夏の体を引き、そのまま肘打ちを胸に。

ズシン。という衝撃が一夏を襲う。が、それでも一夏は止まらない。

（打点を逸らされた……！？）

打ち込んだ際、一夏も反射的に半歩踏み込み、その流れで打撃の威力を逸らしていた。

そのまま一夏は楯無の奥襟を掴み、そのまま膝を腹目掛けて打つ。

「……………つと！」  
手を挿し込み、直撃を防ぐ。と同時に少しばかり体を浮かせてその威力を逃がす。

だが、その一瞬を一夏は見逃さなかった。

「っ……………!?!」  
掴んだ奥襟を引き、強引に引き戻す。合わせがズレて、その下に収められていた彼女の豊かな胸部が晒される。

「ちよっ……………!」

「おおおおあああああああああつ!!!」

普段ならば、一夏もそれに目を奪われていただろう。だが、今の一夏には”敵の姿”しか見えていない。

全てを削ぎ落とし、唯一つ　　《家族を奪った敵を討つ》。その事だけが一夏を突き動かす。

握り締められた拳が容赦なく、楯無の顔目掛けて振り下ろされる。

「っ……………!」

此処に至って、ようやく楯無は理解した。自分が、とんだ逆鱗に触れてしまった事を。

一夏の瞳に見えるのは純然たる敵意、そして殺意。とんだ怪物が顔を見せたものだ。

「……………ゴメンね」

楯無は繰り出されたパンチを片手で受け止める。そのまま伸び切った腕に足を絡めて、しっかりと”足場”を作る。



楯無は一夏に自分の力を認めさせて、コーチを勤めようとした。

そして一夏は、自分を兄を奪った敵と思い込み、それを倒そうとした。

家族を　　兄を取り戻すために。

必死覚悟の相手をするには、楯無の方が足りなかったのだ。

それにしても、と思う。

織斑一夏。

今はまだ、彼は弱い。

だけど、本気の集中力を見せた時の動き、反応には光るものがあった。

彼を鍛え上げた時、どれだけ強くなっているか。それを想像しただけで、楯無は身震いする。

その片鱗は、  
畳に付けられた背を伝った  
ていた。

一筋の冷や汗が見せ

第34話 生徒会長・更識楯無登場（後書き）

原作だと一夏の完敗でしたが、ここでも敗北。

違っのは、本気で一夏が楯無を敵として倒そうとした事ですね。

会長も本気で一夏を倒し、そんなまま次回ですw

**第35話 霧纏の淑女／再びの一步を（前書き）**

まだまだ続く、生徒会長のターン。

そして、久しぶりに彼の出番が多いw

第35話 霧纏の淑女／再びの一步を

「……………うう……………?」

呻き声と共に、一夏はうつすらと瞳を開く。

未だばやける視界に見えるのは、木製の天井だった。

「あ、気が付いた?」

ボヤけたままの視界の上に、逆さまの顔がひよいと覗き込んできた。

誰だろうか? と、一夏は数秒ばかり考え。

「っ ……!」

ガバっと、弾かれたように体を起こした。

「っ……………うえ……………ええっ!?!」

途端、頭がぐわんとして、吐き気が込み上げる。そのまま畳にバツタリと倒れた。

「もう、いきなり起きるからよ? もうちょっと寝ていなさい」

「……………嫌い……………俺は……………!」

「一夏、ちよつと待って」

「……………春斗?」

「この人、少なくとも敵じゃないと思う……………」

「……………何でだ?」

「一夏が気を失ってから三十分位経ってるけど……………その間、一夏の看病してた。もし僕の体を奪った犯人なら、そんな事すると思う?」

「そんなの、油断させる為だろ?」

『気を失ってる相手を？　そもそも、そんな事しなくても一夏を倒せたのに？　それに』

『まだあるのか？』

『わざわざ僕のことを言っつて、警戒させてたんじゃ意味が無いと思わない？』

『……………なるほど、確かに』

冷静に考えて見れば、おかしな話だ。

誘拐した組織　犯人と見た場合、楯無の行動には矛盾している点が多い。

だからといって、味方であるという事にはならないが。

亡国機業とは別組織　利害的に、今はこちらと敵対していないだけという可能性もあるのだから。

「そんなに睨まないで頂戴？　ちゃんと説明をするから」

そんな一夏の内心を見透かしたのか、楯無はクスリと笑った。

一夏と楯無は、互いに向き合うようにして座す。

「まず、私が君の事情を知っているは、偏に”更識”という家柄にあるの」

「更識……」

「詳しくは言えないけど……私の家は代々、この国の守護者たる家なの。だから、亡国機業の動きには目を光らせていたのよ。織斑くんのお兄さんの事も、その関係で知ったの」

「亡国機業……国際的テロ組織……そんな連中がどうして春斗を？」

「それは分からないわ。だけど、次に何かしらのアクションを起こす可能性は高い……君に対してね」

楯無は真っ直ぐに、一夏を見据えて言う。

「敵は狡猾。その尻尾をそう易々と掴ませてはくれないわ。だからこそ、相手が動いた時こそ……こちらのチャンスでもある」

「……っ!？」

敵が姿を見せる時、そこから現状を打破できる可能性があるると、楯無が告げると、一夏は目を見開いた。

曇天の切れ間から陽光が差しこむように、見失っていた道標がそこに見えた気がした。

ドクン、と心臓が強く跳ね、体が熱を帯びる。そして逆に脳内は冷たく、そして冴えていく。

「だけどその時、君が弱いままだったらそれを逃してしまうかも知れない。もし大丈夫だったとしても、その時に自分以外の誰かと一緒に、その人を守らないといけないかったら？ そのせいで、千載一遇の好機を逃してしまうかも知れない……それが、最初で最後のチャンスだったとしても……」

「……………」

戦いは何時も、万全の時に来るとは限らない。

自分一人なら、身を守る程度は出来るかも知れない。だが、それでは足りないのだ。

もし、その場に箒やセシリアといった戦える誰かなら良い。だがもしかしたら、そうでないかも知れない。

今のままで届くのか？ そう問われれば、一夏には「YES」という言葉は無かった。

「だから私が君を鍛えてあげる。どれだけの時間があるかは分からない……でも、それでも……それだけで届くかも知れないし、届かないかも知れない……それが例え0.1%、薄紙一枚程度の可能性でもね」

ならば、一夏に選ぶ道など無い。そんなのは必要ない。プライドなど要らない。それと引き換えにして”家族”を救えるのなら安いものだ。

「……………っ!?!」

『一夏……………っ!?!』

楯無が驚きに目を見張った。

一夏はその額を畳に擦り付け、どこまでも深く頭を下げていた。

「会長、俺を……鍛えて下さい！ 俺は、強くならなきゃいけない……!」

必死に叫ぶ。手にしなければならぬものの為に。

「……………そんなに叫ばなくても良いわ。そもそも、君を鍛えるのは私のお願いを聞いてもらう代わりでしょ？」

「……………あ、そういえば。会長のお願いつて……………？」  
今更思い出したとばかりに、楯無に尋ねる。

「うーん、正確には君にじゃなくて……………君の中のもう一人の君。天才と謳われた”織斑春斗”博士にね」

「『……っ！？』」  
その言葉に二人は驚愕する。そして楯無は、悪戯が成功した子供のように笑った。

「言ったでしょう？」 事情を知っている”ってね」  
「『……』」

掴みきれない楯無に二人は頭痛を覚える。だが、一つだけ分かった事があった。

「取り敢えず、詳しいことは明日にしましょう。今日はもう帰って体を休めない。それじゃあね〜」

この、人をおちよくったような態度は 間違いなく素だ。

「『……』」  
「『……』」

結局、頭痛は消えないのだった。

寮に帰った一夏は夕食も取らず、シャワーを浴びてすぐにベッドに倒れこんだ。

『しかし……僕に頼み事ってなんだろうね……』

「さあな。でもまあ……きっと……何とかな……さ……」  
『……おやすみ、一夏』

静かに響き始める寢息に、春斗もまた意識を鎮めたのだった。

翌日の朝。食堂では、箸を始めとした何時もの面々が顔を揃えていた。

酷く間の抜けた顔を、ではあるが。

「……………どういう事ですか？」

セシリアが、何とか言葉を発する。

その視線の先には、何時にも増して大盛りの食事を掻き込む一夏の姿。

とてもではないが、昨日と同じ人物の食事風景とは思えない。

「……………ふう！」

お茶を一息に飲み干して、一夏は嘆息する。

昨日の昼以降、何も食べていなかったせいで、流石に空腹がきつかった。

『とはいえ……………これは食べ過ぎじゃない？』

『大丈夫だよ。今日から気合入れ直すには、これ位じゃないと足りないさ』

『やれやれ……………』

春斗の呆れ気味の声を聞きつつ、一夏は膳を下げるのだった。

午前の授業は殊の外、集中できた。  
実習は無くて座学ばかりだが、それでも今の一夏には今まで以上に  
必要なものだった。

もしかしたら、今やっている所が何かしらの助けや閃きに繋がるか  
も知らない。

そう考えただけで、一言一句も聞き逃せなかった。

そうして今は昼休み。”春斗”は廊下を歩いていた。

『で、何しに行くんだ？』

『勿論、情報収集だよ』

『情報収集？』

『生徒会長・更識楯無の情報だよ。まさか一夏、彼女の話が鵜呑み  
になんてしてないよね？』

『いや、それは……』

『……はあ、やれやれ』

鵜呑みにしていたか、と春斗は嘆息した。

『確かに、会長の話は辻褃は合うかも知れない。でも、その裏付  
けを忘れちゃいけないよ』

『裏付けて……だからか？』

『そ。だから……ここなのだよ、ワトソン君？』

見上げた視線のその先には 【1 4】。  
つまり、更識 簪のクラスである。

『さて……ここ数日の彼女は、整備室か教室にいる事が多いらしい』  
『何でだ？』

『多分、彼女のIS 《打鉄式式》が関係してるんだろっね……っ  
と、いたいた』

教室を覗き込んでみると、室内は人が疎らであった為、すんなりと  
簪を発見した。カタカタと、メカニカルタイプキーボードを集中し  
て叩き続けている。

『それじゃ、行きますか』

早速、春斗は教室に足を踏み入れた。

簪は空中投影式モニターを注視していた。思い出したかのように時  
折、サンドイツチを齧り、再びキーボードを打つ。

「やあ、こんにちわ」

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

じ〜〜〜〜〜と、ただ只管に簪の反応を待ち続ける春斗。そ  
の目力に、簪が折れた。

「……………」何か？」

「お、やっと返事が返ってきた。こうして話すのは今日が初めてだね、更識さん」

「もしかして……春」

「おっと、その名前は禁句だよ？ それは…… ISの駆動系制御プログラムだね。もしかして、打鉄式式のかな？」

「……あなたには関係ない」

「まあ、確かに僕にはどうでもいい事だね」

そう言っつて肩をすくめる春斗に、簪はジト目を向ける。

「どうして……此処に……？」

「君に、ちょっと聞きたいことがあつてね……」

「……？」

「更識楯無。君のお姉さんの事を、少しばかり聞かせて欲しいんだ」

その名を聞いた途端、簪の雰囲気が変わる。まるで火の消えた蠟燭のように、その表情を暗くした。

「どうして……そんな事……聞くんですか？」

「昨日、お姉さんに会つてね？ その時ちょっと気になる事を聞いたんで、その確認をさせていただだけだよ」

どうやら、姉に対して何か思うところがあるらしい。それに気付かないふりをして、春斗は続ける。

「更識の家つて代々、この国を守つてるつて聞いたけど……本当？」

「……大まかに言えば……間違つてない……けど」

実際はそんな綺麗な話ではないのだが、その辺りをいちいち言う気もないのか、簪はそのままにする。

「そうか……じゃあ、お姉さんの苦手な物嫌いな物ダメな物洗い浚いピンからキリまで教えてくれるかな？」

「あなたは人の姉に何をするつもりですか！？」

「何気ない会話の中における話題の札にして、交渉事における主導イニシアチブ権を取る為のカード？」

「端的に言つと?」

「脅迫材料」

「本当に何をする気なの!?!」

簪は思わず立ち上がった。

「やだなあ、交渉事にブラフは付き物だよ?」

「ブラフどころか、ハッキリと脅迫つて言いましたよね!?!」

「おっ、更識さんはなかなか良いツツコミをするね」

「っ」

簪は自分が教室中の視線を集めていることに気が付き、ガタンと音を立てて椅子に座った。

「……お姉ちゃんは天才で……何でも出来る。お姉ちゃんは完璧だから……苦手なものなんて無い……貴方と同じ」

「は……?」

「あなたの作ったプログラムを見た……プログラム”真打”……例えるなら、薄紙一枚も入らない程に完璧だった……お姉ちゃんも同じ……」

「……なるほど、よく分かった。君は、お姉さんの事を何にも知らないんだね」

春斗は簪の言葉を聞いて、呆れ気味に溜め息を吐いた。

その言葉に、簪がキツと睨む。

「あなたに何が分かるの……? 天才で……何でも出来て……そんな人には分からない……分かりっこない……! いっぱい努力してようやく出来ることを……何の苦も無くあっさりとやってしまう……そんな人には、出来ない人の気持ちは分かりっこない……!」

「……完璧な人間なんて、世界中を探したって一つの場所にしかないよ?」

「……?」

「……っ。つまり、人の頭の中だけさ」

春斗は自分の頭を指差して言った。

「昔から、誰かのことを完璧だとか言う奴は……その人の事を全然

知らない人間ばかりだ。知らないから、自分の脳内に勝手な完璧像を作り出す……今の君みたいだね」  
そう言つて、苦笑しながら肩をすくめる。

「天才であることは否定しない。そこまで自分を過小評価するつもりはないからね。でもね、完璧なんてものとは程遠い人間だよ、僕は」

「……………」

「僕は昔から体が弱くてね、一年の内で、病床に伏している時の方が多いんじゃないかってぐらいに体調を崩しては、一夏や姉さんに迷惑をかけていた。それに加えて、今はこんなだしね……………」

「……………!?!」

「天才なんて言われてる人間は皆、何処かしら歪んでいるものさ。

まあ、隣の芝生は青く見えるものだし……仕方ないんだろうけどね。

それじゃ、邪魔してごめんね」

春斗は簪に背を向けて、教室を後にした。

それを驚きと困惑に満ちた瞳で、簪はその背を追っていた。

その日は結局、簪がこれ以降の作業をする事はなかった。

放課後。

清掃を終えた一夏は生徒会室へとやって来た。目的は勿論、生徒会長に会う為だ。

コンコン。

「は〜い。どちらさまですか〜？」

「……………」

『何か、聞き覚えのある声が……………』

ドアをノックすると、中からロックが外される。ドアを開けて顔を見せてくれたのは一夏のよく知る顔であった。

「おお〜、おりむーだあ」

「のほほんさん……………」

『布仏さん……………何で？』

布仏本音。一夏と同じクラスの少女。彼女が何故、生徒会室に居るのか。そして何故、鍵を開けられたのか。その謎は、すぐに明かされることになる。

「本音、お通ししなさい」

「は〜い、お姉ちゃん。さあさあ、ようこそ生徒会室へ〜」

中から掛かった虚の声に、本音がそう答えた。

「……………お姉ちゃん？」

『お姉ちゃんって……………』

まさか？ いやそんな事が？ などという失礼極まりない疑問が湧き、一夏は尋ねた。

「あ〜、先輩の名字って？」

「ん？ あ、ちゃんと自己紹介していなかったわね。私は三年の布のほ 仏とけ 虚うつほ。代々、更識家に仕えているの」

「でもって、今はお姉ちゃんと一緒に、生徒会やってます」

「……ああ、やっぱりそっか」

『IS学園生徒会……その運命は先輩にかかっているんだね、分かります』

「あゝ、今すごく失礼なこと考えたでしょう？ おりむー、ひどーい！」

ブクーッと頬をふくらませて、文字通りのふくれっ面を見せる。

「いやいや、あはは……ところで会長は？」

誤魔化すように、虚に尋ねる。

「会長は恐らく職員室でしょうね。何か用があると言っていましたから。どうぞ、掛けて待っていて」

「すみません、布仏先輩」

「虚でいいわ。布仏だと、本音と同じだから分からないもの」

「分かりました」

「もしくは、『おねーちゃん』って呼ぶと良いんじゃないかな？」

「いや、それはダメでしょ？」

なんてやり取りをしていると、生徒会室のドアが開いた。

「あら、もう来ていたの？」

「……どうも、生徒会長」

姿を見せた楯無に一夏がおじぎをすると、楯無は何故かクスリと笑った。

「そんな畏まらなくて良いのよ？ 私のことは楯無、もしくはたちちゃんでも可よ？」

「は、はあ……じゃあ、楯無先輩」

「な〜に、おりむー？」

「……すみませんが、普通に呼んで下さい」

「あらあら……それじゃ、一夏くん。早速だけど一緒に来てくれるかしら?」

入ってきたばかりのドアを開けて、楯無が言う。

「虚ちゃん、こっちはお願いね」

「はい、行ってらっしゃいませ」

出て行く楯無に恭しく頭を下げる虚。一夏もその後が続いて、生徒会室を後にした。

楯無に連れられてやって来たのは、IS整備室。

各アリーナに併設する形で設けられているその施設は、二年から追加される《整備課》クラスの為の施設であるが、許可さえあれば一年でも使用可能である。

ここは、使用許可された第二アリーナの整備室だ。

「ここで何をするんですか？」

「うん？ ちよつと素敵なことかしら？」

と云って、楯無はやおら制服のボタンを外し始めた。

「なっ!?! 何をしてるんですか!?!」

「何って、制服を脱いでいるのよ？」

「そんなのは見れば分かりますよ!?!」

「いやん、エッチ」

『うわぁ、引つ叩きたい』

などとやっている内に、楯無がポイッと制服をついに脱いでしまった。

とっさに目を逸らす一夏だったが、チラリとその肢体が視界の端に見えた。

「……………あれ？」

「フフツ。何を想像しちゃったのかな？ おねーさんに教えてくれるかな？」

制服を脱いだ楯無は、ISスーツ姿になっていた。どうやら下に着込んでいたらしい。

「はぁ……………何でもないです」

ホツとしたような、残念なような。そんな曖昧な感じの溜め息を一夏は吐いた。

「さて、ちょっとこれを見てくれるかしら？」  
「……………」

何だろうかと思う一夏の目の前で、楯無は”ISを起動させた”。

海のように蒼い光に包まれ、楯無がISを展開させる。

そうして現れたのは　一風変わったISだった。

基本、物理装甲の少ないISにおいても更に少ないアーマー。ウエストアーマーはドレスのその様であり、そして薄いヴェールのような物がその身を包み込んでいる。

そして左右一対で浮いている水晶体　《アクア・クリスタル》。

「専用機……………」

一夏がポツリと零す。

「そう。これが私の専用機【霧纏の淑女】ミステリアス・レイディよ」

「《ミステリアス・レイディ》……………でも、それがどうしたんですか？」

「実はね……………このISは未完成なのよ。とはいえ、時間さえ掛ければ夏休み明けには使い物になるでしょうけど……………問題は、事態がそこまで待つてくれるのか……………」

「……………つまり、そのISを春斗に完成させて欲しいって事ですか？」

「ええ。とはいえ、機体そのものはほぼ出来上がっているから、後はプログラムの修正とチェックだけなんだけど……………これがまた、時間の掛かる作業なのよ……………乙女の夏は一度しか無いっていうのに……………シクシク」

などと泣きまねをする楯無に、一夏は苦い顔をした。絶対、そんな事思っていないだろうと。

「……………それで、織斑博士としては……………この提案に乗っていただけ

「？」

『春斗……』

『……………』

”春斗”は少し考えて　そして”言った”。

「　分かりました。ただし、僕が関わった事実は”何処にもありません”から」

「ええ、勿論」

「それとも一つ。博士と呼ぶのはやめて下さい」

「どうして？　将来を期待される若き天才”織斑春斗”には相応しいと思うけど？」

「……博士は、ちょっとジジ臭い」

「……なるほど、それは確かにそうかもね」

肩をすくめる春斗に、楯無はケラケラと笑った。

「さてさて。早速、これを使う事になるとは思わなんだ」

春斗はパチン、と指を鳴らした。すると空中に突然、左右四対のマシンアームが現れる。

ISの腕に良く似たそれは、臨海学校から戻ってきた春斗宛に束から贈られてきた物であった。

「これは……何？」

「篠ノ之束謹製移動ラボ【吾輩は猫である】の二号機、【蚩尤五兵】です」

「中国神話の蚩尤と、それが作ったとされる武器ね……なるほど、豪くシヤレがきいているわね？」

ちなみに、東が付けていた名称は『長靴を履いた猫は千年生きた末に注文の多い料理店でカラツと揚げられてしまったんだって』という、やたら長くて三つほど作品が混じっている上に意味不明なものであった為、春斗が即行でプロテクトを解除して改名させたのだった。

「それじゃ、始めますね」

そう言つて、春斗は作業に入る。

マシンアームの指先から幾つもの小型機器が現れ、春斗の思う通りに動いてIS装甲を取り外していく。

そこにコネクターを挿し込んで、手元の空間投影式モニターを見ながら、同じく投影式キーボードを恐ろしい速度で打ち込む。

その速度に一夏はいつも通りと思い、楯無は驚きに僅かばかり眉が釣り上がった。

「……………そういえば楯無先輩？」

「な、何かしら？」

僅かなりとはいえ、動揺している処にいきなり声を掛けられたので、何時もの調子で返しきれずに楯無は答えた。

「先輩つて胸大きいですね。サイズ、幾つですか？」

「……………え？」

予想外どころか、何だこのセクハラ満載一直線な質問は？

しかも、もの凄く淡々と尋ねてきている辺り、その事を自覚していないのか？

だが、それならそれで、ここからこちらのペースに引き込んでしまえと、楯無は瞬時に思考した。

「あらあら、気になるなら見ても良いわよ？」

何処から出したのか、扇子で口元を隠してニタリと笑う。

「じゃあ、遠慮無く」

「……え？」

ところがどっこい、織斑春斗はそんな思考の斜め上を突き抜けた。

じ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜つ。

「……いや、確かに見ても良いとは言ったけどね、そこまでハッキリ見られるとは思わなかったんだけど……」

一切のブレなく、春斗の視線が楯無の胸部に注がれている。しかも恐ろしいことに、その状態でありながらキーボードを打つ速度が全く変わらないのだ。

というのも、片方の目でモニターを、もう片方で楯無の胸を見ているからだ。

というか、どっちがメインだ。

「……ふう」

と嘆息して、春斗が視線をやっと外した。

「あ、あら……もう良いの？ 別にもっと見ても良いのよ？」

などと余裕を見せつつ、しかし楯無は内心でホッとしていた。

流石に、男子に胸部をジッと見られ続けるというのは落ち着かなかつた。

「いえ結構です。そもそも、大きさなら山田先生の方が上ですし、虚先輩や布仏さんも負けないくらいありますし……ぶっちゃけ、見飽きました」

「……………」

ベキッ、という音が持っていた扇子から響いた。

この野郎、とことん人をおちよくりやがるか。そういう事なら、こつちだつて考えがあるんだぞ。

フライント自尊心を傷つけられた楯無が、ジリツとにじり寄る。

「あ、ちよつとそのまま動かないで下さい」

「っ……………!?!」

楯無を牽制するかのようにマシンアームが動き、スラスター部のユニットをヒョイヒョイと取り外していく。

頭になった内部に、幾つもの細かな機械が入り込んで中を弄る。

「ここがこうで……………こうして……………こんなもんかな?」

数分して、マシンアームはユニットを元通りに組み直した。

「さて、後は……………」

春斗は再び、キーボードを打ち続ける。

その顔は真剣そのものであり、その表情の前に楯無は結局、今は何も出来ない<sup>も</sup>と悟る。

(フッフ、後を覚悟しておきなさい……………)

自分をコケにしてくれたお礼は、相応にしてやろつと楯無は心に誓うのだった。

そうして一時間ほどが経つと、春斗は徐にIS装甲を元に戻して、マシンアームを引き下げた。

「う~~~~んツ！ 疲れたあ……!!」

思いつきり背伸びをして、春斗はコキコキと首を鳴らした。

「お疲れ様。ちよっと休憩する?」

楯無はISを戻して、そう尋ねる。

「そうですね。少しばかり疲れました……ん?」

春斗は足に、何かが当たったのに気付く。なんだろうかと拾い上げてみる。

『春斗……これ、ISのじゃ?』

「内部機構用のビスだね」

ビスと言ってもIS用なので、大ネジと言っても過言ではない。

「ちよっとちよっと。それ、《ミステリアス・レイディ》のじゃな  
いわよね?」

「大丈夫ですよ。僕がそんなミスする訳 ツ!?」

突然、春斗の表情が歪んで、その手からビスが床に落ちる。

「っ……?」

春斗はじつと右手を見つめる。ギュツと握っては開き、何かを確かめるように動かす。

『春斗、大丈夫か?』

「どうかしたの?」

「……いや、ちよっとばかりつたような感じが……もう大丈夫」

グググッと、右手をストレッチして、軽く振ってみる。

「ところで、《ミステリアス・レイディ》の完成までどれぐらい掛かりそう?」

「え……?」

「出来るだけ早く完成できるように時間は作るけど……これでも多忙なのよ」

「いや、もう完成してますよ?」

「だから予定も調整しない……と?」

と、楯無がピタリと動きを止めた。何やら信じられないものを見ているような視線を、春斗に向けている。

「今、何て言ったのかしら……?」

「だから、《ミステリアス・レイディ》はもう完成しましたから、先輩がチェックしてくれば何時でも使えますよ?」

「……そ、そうなの? じゃあ、そうね……折角だから、《ミステリアス・レイディ》の調整結果も見たいし……良かったら、付き合ってくださいかな?」

「僕は良いですけど……ん、一夏も良いそうです」

「なら、アリーナの方に出ているくれるかしら? この片付けは、おねーさんがしておくから。ね?」

「分かりました。じゃあ、お願いします」

春斗は落としたビスを再度拾ってボックスの中に放り込むと、整備室を後にした。

「まさか……ここまでとはね」  
楯無は今までとは打って変わって、鋭い眼差しをしていた。  
その先にあるのは、春斗によって一気に完成させられた 《ミス  
リアス・レイディ》のデータ。

自分の手でも完成させる自信はあったが、それはあくまでも時間を  
掛ければの話だ。

それが一時間程度の時間で完成に導くなど、流石の彼女もこれには  
驚かされた。

臨海学校では、束と二人がかりとはいえISのプログラムを数分程  
度の時間で再調整してしまったという。

「これなら……確かに狙われてもおかしくはないわね」

篠ノ之束が失踪して以来、”もう一人の天才” 織斑春斗は、日本に  
とって貴重な存在であった。

だが、情報として知っているのと、こうして目の当たりにするのと  
ではやはり違う。

この才能、この能力。亡国機業が狙うには充分過ぎる理由だろう。  
しかし、それは同時に奪還が非常に困難であるうことを示唆してい  
た。

「やれやれ、面倒な事になりそうね……」  
この後に待っているであろう事態に、楯無は嘆息するのだった。

さて、第二アリーナではぶつかり合う二機の姿があった。  
鈴の駆る甲龍と、シャルロットのR・リヴァイブ・カスタム？である。

高速切替ラビッドスイッチを巧みに操るシャルロットの弾幕に、鈴は龍咆で対抗する。

「もらった!!」

一瞬の間を突いて双天牙月を投擲。一気に接近する。

シャルロットは飛翔してきた双天牙月を撃ち落とし、すぐさま鈴に銃口を向ける。

「遅いつ!!」

それよりも早く鈴が距離を詰める。迎撃は間に合わないと判断したシャルロットは銃を引いて、シールドで繰り出された拳を受けた。

「くっ……!!?」

瞬間、衝撃がシャルロットを襲った。吹き飛ばされはしないものの大きくよろめく。甲龍の腕部に装備された小型衝撃砲 《崩拳》による至近距離攻撃だ。

「まだまだあつ!!」

鈴は落とされた双天牙月を拾うと同時に、龍咆を放つ。

「やらせないよ!!」

放たれる弾雨を躲しつつ、シャルロットもショットガンで鈴を迎撃。至近距離での射撃戦が展開された。

「ふむ、なかなかやるな」

「相性もあるのでしょうけど、中距離は鈴さんが、至近距離はシャルロットさんが苦戦していますわね」

そんな様子を冷静に観察するラウラとセシリア。

「おっ、やってるわね」

「遅れてすまん」

そして、そこにやって来たのは箒と織羽。

そして二人の決着がつく頃、もう一人が姿を現した。

「久しぶりな気がするな……ここも」

『実際に、数日ぶりだけどね』

アリーナのピットに、一夏が姿を現した。

第35話 霧纏の淑女／再びの一步を（後書き）

生徒会長、喋りが難しいですw

違和感がなければいいのですが……。

ちなみに、布仏姉妹は春斗の事を知りません。

第36話 VSミスティアス・レイディ/学園最強への挑戦(前書き)

タイトル通り、会長との戦闘回。

原作にはない戦い&ミスティアス・レイディの能力。

色々不安な36話。ではどうぞ。

### 第36話 VS ミステリアス・レイディ / 学園最強への挑戦

ISスーツに着替えた一夏がアリーナに出ると、鈴とシャルロットの模擬戦が丁度終わったところだった。

勝負は、至近距離からのアサルトキャノン直撃させたシャルロットの勝利。

だが、鈴もあと一歩というところまで追い込んでいたので、実際は引き分け相当であろう。

「盛り上がってるなあ。この空気も久しぶりだ」

「じっくり準備運動しておきなよ？ 僕の調整したISを相手にするんだから苦戦は必至。しかも相手は”生徒会長”なんだからね？」

「まあ、一年先輩だし……組み手のあの強さを鑑みるに、きっとISも相当に強いんだろうなあ」

そう言いながら、一夏の口元が自然と笑う。

ウズウズとする体を静めるように、ストレッチを開始する。

『楯無先輩のIS 《ミステリアス・レイディ》はナノマシンを通して水を操る能力を持っている。初期武装は機関砲装備の突撃銃と蛇腹剣』

「蛇腹……って、あれか？ こう……前に見た魔砲少女何とかがアニメにあったみたいなの、連結刃っての？」

一夏は深夜にたまたま見たアニメで、主人公と敵対する魔法騎士が、何メートルにも伸びた、ワイヤーに繋がれた刃を振るっていたのを思い出した。

そういえば、あの主人公の女の子はどこかで聞いた事のある声だったなあ。とか余計な事まで思い出してしまった。

『まあ、あそこまで行かないだろうけど……使われると厄介かな？』  
「それと槍か……俺も槍とは」  
『あつ、ほーちゃんだ』  
「最期まで言わせるよ!？」  
どうせ下らない一夏の言葉は切り捨てて、春斗は此方に来る人影に声を弾ませた。

「一夏、もう……大丈夫なのか？」

少しばかり不安気に尋ねる箒に一夏は首を傾げる。

「……何が？」

「いや、その……ここ数日、元気が無いように見えたのでな。大丈夫なら、それで良いのだ」

誤魔化すように笑う箒に、一夏は周囲に心配を掛けてしまっていた事を改めて知った。

「悪いな、心配掛けて。でも今日からまた、気合入れ直していくぜ」  
「！」

もう心配は要らないとばかりに、一夏は笑って見せる。

「そうか。なら、仕切り直しに私と一戦しようではないか」

「うや、箒は一夏の手を掴んで引っ張る。」

「え？ いや……」

「ちよつとお待ちなさい!！」

「っ!？」

その前に立ち塞がる金髪ロール。英国淑女と名高いセシリア・オルコットである。

「一夏さんの復帰第一戦は、その初陣と同じくこの私、セシリア・オルコットが務めるのが筋というものですわ」

「何処のスジだそれは。それならば、私が嫁の相手をするのがスジだろう？」

と、セシリアを押し退けてラウラが進み出た。その歳不相応に残念な胸をドヤ顔で張っている。

「ちよつと待ちなさいよ！ だったらあたしがやるわよ！！」

「鈴さんは今、模擬戦をやったばかりでしょう！？」

「そうだな。お前は確実にない」

「なんだとーっ！？」

「あー、ほら。戦闘記録チェックするからこっちにきて」

「ちよつと、離せーっ！！」

ズズカとやって来た鈴は即座に退場。シャルロットに連れて行かれてしまった。

そうして残るは四人。

「ん？」

「何？」

いつの間にか、織羽もそこ 具体的に言うと一夏の隣にいた。

「ちよつと、織羽さん！？」

「貴様、いつの間に！？」

正面に立っていたセシリアとラウラが、驚きの声を上げる。本人たちには気配も無く、瞬きの一瞬でそこに現れたようなものだ。

「いや、織斑君とやり合ったことなかったなあ〜って。折角だし、立候補するわ」

「なっ……！！？」

「あたしと箒はどっちも戦ったこと無いけど、二人はそれぞれやり合ってるんだし……なら、どっちかがやるべきだと思つのよね？」

「うむ、その通りだ！！」

うんうんと、これでもかという程の勢いで頷く箒。

「お待ちなさい！ 何を勝手な事を！！」

「そうだ！ 嫁の相手は夫がするものだ！！」

「聞く人間に誤解を招くような言い方をするな！？」

一夏を余所に、ぎゃーぎゃーと言い合いを始める四人。非常に日常

的な光景であり、誰も触れようもしない。

『あゝ、一夏？ そろそろ止めないと……』

『俺がやるのかあ？』

『他に誰がいると？』

『春斗』

『豆腐の角にでも頭ぶつけちゃえば？』

『久々にヒデエな！？』

「はいはい。ちょっと御免なさいね？」

そこに颯爽と現れた一つの影。するりと一夏の腕を取ると、そのまま引つ張っていった。

「……って、ちょっと待て!!！」

がしい！ と、その肩を箒が掴んで止める。

「あなた、一体誰ですの!？」

「何処の誰か知らんが、私の嫁から離れる!！」

「だから、貴女の嫁ではないと言っているでしょう!？ 何度言わせる気ですの!？」

「貴様もしつこいな。一夏は私の嫁だと言っているだろう!？」

「……で、一夏。誰なんだ一体？」

ギヤーギヤーやり出した二人は無視して、箒が睨みながら尋ねる。

「ああ、この人は」

「ごめんね。一夏くん(二次移行してから)初めては、もうおねーさんに決まってるの。ね、一夏くん？」

「え？ まあ……そうですね」

「なっ……!？」

まさかの肯定に、箒が目を見開いて凍りつく。

「しかもあんなにお願いされちゃったら……断れないわ」

「いや、あれはもう忘れてくださいよ!？」

「……なあっ!？」

これにはやり合っていた二人も、更にシャルロットと、彼女に連れて行かれた鈴も帰ってきた。

あっという間に囲まれそうになるが、スルスルリとそれを抜けていく。

「じゃあ、おねーさんは先に降りてるから。急いで来てね?」

「一夏あ、どういう事だ!？」

「一夏さん、どういう事ですの!？」

「説明しろ一夏!！」

「何時何処で何でそんな事になってるのよ、バカ一夏!？」

「……これはちよつと聞き捨てならないんだよね、僕としても」

「えっ!？ この状況を放置っ!？」

「あの人、何の恨みがあるんだ!？」

「明らかにさっきの仕返しだろ!？」

「……思い当たる事がないんだけど?」

「本気で言ってるなら、ちよつと馬にでも蹴られてこいよ?」

「やだなあ、それは一夏の仕事だよ?」

「そんな上級職に着いた覚えはないっ!！」

なんて内側に逃げたところで、事態は一切の好転を見せたりしないのだった。

「春斗、ちよつと答えなさい!」

「義兄上、どういう事ですか!？」

「まさか、春斗も関係してたりするのカナ……?」

「こっちにも飛び火したっ!？」

まさかの展開に、春斗は驚愕した。

「あゝ、会長の言葉をいちいち本気にしてたら身がもたないわよ？」と、苦笑いを浮かべながら織羽が言うと、グルンと全員の視線がそっちに向けられた。

「織羽、お前はあれが誰か知っているのだな？」

「まあね。取り敢えずこっちは説明しとくから、織斑君はアリーナ・ステージに行ってきた良いよ。あの人ほっといたら、また何言うか分からないからさ？」

「サンキュー、恩に着る！」

「あつ、一夏っ！！」

一夏は渡りに船とばかりにスタコラサツサとステージに降りてしまった。

さて、残された者達とはいえば

「織羽、説明してもらおうぞ？」

「あの会長つてのは何者なのよ！？」

「一体、一夏さんとはどのような関係にあるんですの！？」

「知っていることを洗い浚い吐け。吐かんというなら、吐かせてやる最上川というヤツだ」

「ラウラ、それ色々間違ってるから……」

「あんたらねえ……ちよつとは離れなさいよ、暑苦しい！！」

にじり寄る集団。流石に六人も集まれば、夏の外気と相まって非常に暑苦しいのであった。

さて、ステージに降り立った一夏は楯無と対峙する。

「あら、随分と早かったわね？」

「そりゃどうも」

「じゃ、早速始めましょつか。時間は有限、効率良く使わないとね」と言つて、楯無はミステリアス・レイディを起動させる。水のヴェールを纏つた、神秘性を孕んだISが現出する。

「行くぞ、白式！」

一夏も白式を起動。シルバリオ・ゴスベル銀の福音以降、初めての起動である。

「あれが、白式の第二形態……？」

「入学してから数カ月で、本当に二次移行したんだ……凄い！」セカンドシフト

疎らにいる生徒達は、二次移行を果たした白式・雪羅に興味津々といった視線を向けている。

「ふふ……第二形態の力、楽しみだわ」

楯無は、プリセット初期武装のランスを展開して構える。一夏もまた、雪片を展開して構えた。

「楽しませてあげますよ……俺の全力でね」

『対峙しただけで分かる。この人、とんでもなく強い』

『ああ。だから本気でやるぜ……！』

試し。小手調べ。様子見。そんな余裕などない。実力は今の一夏では及びもしない。

だからこそ、本気。だからこそ、全力。今の自分の全てを振り絞つ

て戦うのみ。

「行くぞおおおおおおおっ！」

スラストー翼を一気に噴かし、突撃を仕掛けた。

「フフツ……」

真正面、正眼の一刀を楯無はスルリと躲す。が、それは一夏も読んでいた。すぐさま躲した楯無の方向に切っ先を跳ね上げる。

ギインツ！

ランスを横手に構えて、一撃を防ぐ。そのまま楯無は後に下がり、間合いを取る。

「荒々しいわね。でも、嫌いじゃないわよ、そういうの」

「そりゃ良かった!!」

余裕綽々で躲す楯無。一夏はそれさえも想定範囲内とばかりに、尚も攻勢を崩さない。

「だりゃあっ！」

真正面に刺突。

「でも、それだけじゃダメよ？」

楯無は槍の穂先でそれを受けるや、クルンと返した。雪片が大きく上に弾かれる。

「こんな風に、がら空きになっちゃうから」

「っ……!!？」

がら空きにされた懐に、ランスを返して石突の一撃を見舞う。胸部に打ち付けられた一撃に、一夏の表情が歪む。

「……でも、それでも！」

「っ……!!？」

ガシリと左手で槍の柄を掴み、一夏は跳ね上げられた雪片を力尽く

で引き戻す。

「攻めるしかないっ!!」

白式とミステリアス・レイディでは、単純なパワー差がある。柄を掴まれては、ミステリアス・レイディのパワーでは振り払えない。

「……なるほど。でも、攻め方が甘いわ」

楯無は槍から片手を離して、一夏の腕に向かって手を伸ばす。そのまま右腕を止めてみせるや、アクア・クリスタルのヴェールをまるで渦潮のように回して、一夏の腹部に向かって叩きつける。

「グハッ!？」

一点集中の一撃を喰らい、白式が吹き飛ぶ。地面に叩きつけられる前に、PICで浮力を得て飛翔する。

「さあて。まだまだこれからだけど……大丈夫？」

フワリと浮かび上がるミステリアス・レイディ。ランス 蒼流旋の刃を水が纏い、螺旋を描き始める。

「勿論……!!」

雪片の刃を淡い光が包み込み、シールドを切り裂く必殺の刃を生み出す。

それだけでは足りないと、雪羅を基本モードから切り替える。構えるのは格闘戦用エネルギー爪のクローモード。

『一夏、あの水もナノマシンでコントロールされてる。気を付けて』  
『了解!』

白式のスラスタが火を噴いて、一気に距離を詰める。

「うおおおおおおっ!!」

「熱いわねえ。でもそうなの、おねーさん好きよ」

水の槍を振るい、楯無も距離を詰める。あっという間に近接の間合いに入り、二機は激突した。

「強い……！」

ラウラは初手の攻防を見て、その実力に驚愕した。一夏の太刀筋は荒々しく、決して洗練されたものではない。だが、振り抜きの剣速と、そこに込められた威力は間違いなく一級品だ。それを事も無げに受け止め、弾き上げてみせる技量。その体捌きからも、生身でさえ相当の実力があると分かった。

「第二形態になった白式は、あの福音とさえ戦えたというのに……」セシリアは、二次移行したことで性能を高めた白式有利と読んでいたので、まさかの光景に驚きを隠せなかった。それは、織羽を除いた全員の共通の感想であった。

「そりゃあ、伊達に生徒会長してないわよ」

「あの人、生徒会長なの？」

シャルロットが聞き返す。

「更識楯無。IS学園二年生。そして、ここの生徒会長」

「更識つて……まさか、4組の更識さんの？」

「そ。簪のお姉さんで、あたしとも幼馴染……なのかな？ でもつて、もう一つ。この学園の生徒会長つて、なる方法がたった一つなのよ。何か分かる？」

「……？」

シャルロットは首を傾げる。正直、日本の生徒会など興味も無かったので分からなかったのだ。

「それはあれだろう。選挙でトップになれば、なれるんじゃないのか？」

篤が当然そうだろうという口ぶりで言うが、織羽は首を振った。

「IS学園の生徒会長になるには唯一つ……【学園最強】を示す事」

「じゃあ……もしかして!？」

「そう。会長は現IS学園最強の操縦者よ。なにせ、自由国籍持ちで、既にロシアの国家代表なんだから」

「……………」

織羽の告げた事実には、全員が目を見開く。

「待て、織羽。代表”候補生”の間違いではないのか？」

「残念ながら、”候補”じゃないのよ。でもありえない訳じゃないわよ。だって織斑先生が代表になったのも、会長と同じぐらいの頃だし」

「……………」

確かに、言っている事は間違っていない。  
だがそれは、イコール楯無の實力が世界最強ブリュンヒルデに迫るものであると言っているようなものだ。

「……………」

各国の代表”候補生”達は、その視線を楯無と一夏の戦いに向ける。それは、いずれ戦うであろう相手を見据える瞳であった。

「ちいつ！」

一夏は思わず舌打ちする。蒼流旋に内蔵されたガトリングガンが斉射され、回避と防御に回されてしまう。

「だけど、こつちにだって！」

一夏は雪羅をカノンモードに切り替えて、トリガーを引く。射撃に関しては素人同然の上、元よりセンスが無い。だからこれはあくまでも接近するための布石だ。

「おつと」

荷電粒子砲は蒼流旋の弾幕を吹き飛ばし、楯無も直撃はマズイと回避する。

その余波をヴェールで防ぎ、エネルギーを少しばかり削られるが、ダメージは皆無。

その一瞬を突いて、一夏がイグニッションブースト瞬間加速。最高速で間合いを詰める。

「このタイミングなら！」

「甘いわよ」

楯無はクルリと身を回すや、その勢いを利用して蒼流旋を繰り出す。螺旋に渦巻く穂先が一夏に迫る。

「どうかなっ!？」

一夏はクローモード切り替えた雪羅で、それを鷲掴みにする。更にそのまま零落白夜を発動する。

全てのエネルギーを無効化する零落白夜。その力をまともに喰らったランスがその力を失う。水が解けて地上へと降り注ぐ。

「あらら」

「これならどうだ!!！」

一夏は今度こそはと雪片を振るう。しかも、その一撃は零落白夜の刃だ。

これが届けば、楯無のISは一瞬でシールドエネルギーを食い尽される。

届きさえすれば、である。

『一夏っ！！』

「っ！？」

突然、白式の腕が止まる。押ししても引いても、ビクともしない。

「良い攻撃だったけど……でも、まだまだだね」

見れば、アクア・クリスタルが一夏の周りにあつた。水のヴェールが解けて、白式の四肢を霜が覆っている。そしてピキピキと音を立てて、白式の装甲が凍っていく。

『ナノマシンを利用した熱運動！？』

「白式を凍りつかせた……っ！？」

「これがミステリアス・レイディの力。名付けて【フロスト・ハミング薄霜の歌声】」。その隙に楯無はランスを引き戻して、再び水を纏わせる。と、今度はその水が凝結していく。

「そしてこれが……【フロースン・ブライト月光の氷華】」

その名の通り、凝結した水はまるで大輪の花のようになる。ランスから打撃武器へと変じたそれを、容赦なく白式に叩きつけた。

「ぐあぁッ……！！」

『一夏、僕と代わって！！』

『春斗！？』

『このままやられっぱなしは、僕も面白くないからね！』

『……頼む！』

地上に向かって落ちる白式を、黒い光が包みこみ、その姿を変える。

「この距離は、こっちのものだ！」

「っ……っ！？」

春斗はすぐさま月影を構え、矢を放つ。楯無は驚きながらもそれを躲し、水のヴェールを纏って一気に裏白式に接近する。

「飛べ、ムーン・ティアーズ月之雫っ!!」

百目を起動させ、裏白式から切り離れた六つの自立砲台が舞い、放たれる閃光が楯無の進行ルートを潰すように飛ぶ。

「おっと、正確無比の射撃ね。これはちよつと厄介かしら？」  
流麗なるターンでそれらを躲し、距離を更に詰める。

「そこっ!!」

「っ!!?」

月影を大弓に変えて、巨矢を射ち放つ。弾けて散弾となったそれが、楯無を捉える。

『やった、直撃だ!!』

「いや、あれは……………やばいつ!!」

すぐに春斗は月之雫を戻して、集中砲火を構える。直後、楯無がダメージなど無いかのように突撃する。

「制圧力はあるけど……………威力が足りないわね?」

「ヴェールをシールドにして、威力を減衰させられたか! だけど!!」

放たれる無数の光矢。防ぐヴェールが弾け、周囲に噴霧状に飛び散っていく。

その中で、春斗が必殺必中の一矢を構える。

単一仕様能力 月華白麗 発動

「っつと、それは流石に壊れちゃいそうね」

「遠慮無く……………どうぞ!!」

春斗は楯無目掛けて、引き絞った弦を解き放つ。薄霧を貫いて、閃光がミステリアス・レイデイを撃ち抜いた。







「あれが、学園最強の実力……」  
「なんて凄まじい上に、なんて鬼畜な……」  
「一夏……死んでないわよね？」  
なんて感想を抱きつつ、戦慄する面々の見守る中で、楯無は埋まった一夏を引っ張り出したのであった。

気絶した一夏をピットに降ろして、楯無はその間にデータをチエッ

クしていた。

（ナノマシンの稼働率がとても高いわね。私の組んだプログラムが修正されているから……？ それにヴェールの防御能力も22%向上している……）

実戦データを確認し、改めてミステリアス・レイディの完成と、自分の想定以上の性能に表情に出さないまま驚く。

そして、戦闘で見た白式と裏白式の戦い。粗い部分があるが、その素質は高いとすぐに分かった。

「これは本当に……鍛え甲斐がありそうだわ」

そうしてデータを見ている間に、箒達がピットに駆けつけ、一夏もタイミング良く目を覚ました。

「うう……頭がくらくらする……」

「一夏、大丈夫か？」

「箒か……まあな」

頭を振って、ふらつきながらも一夏は立ち上がる。

「流石に強かった……ていうか、完敗だったな」

『流石は”生徒会長”。このIS学園で最強なだけあるよ』

『そうなのか？ そりゃ強い訳だな……』

「ところで一夏。一つ聞きたいのだが？」

「何だ？ 楯無先輩の事は、織羽が説明してくれたんじゃないのか？」

「いや、説明はしてもらった。IS学園生徒会長で、現最強の生徒だとな。だが、それだけでは説明されんのだ」

「なにが……って、何でお前ら困るんだよ!？」

気が付けば、五人が一夏を囲んでいた。

「一夏さん、一体どのような経緯の下、会長とお知り合いになられ

たのですか？」

「でもって、何でいきなり戦ったりしたのか……分かんないのよねえ」

「分かった。説明するから下がってくれ！ 熱いから!!」  
ジリジリと詰め寄る面々に、一夏は悲鳴に近い叫びを上げた。

「それはね、私が一夏くんの専属コーチになったからよ？ しかも、熱烈に申し込まれちゃってね」

「ちよっ!?!」

更識楯無、ここで容赦なく火に油を注ぐ。

「はあ!?! どういう事よ一夏!?!」

「そんな事、聞いていませんわよ!?!」

「一夏、私の嫁のくせに浮気か!?!」

「お前ら落ち着け!!」

一瞬の間を置いて、発火した。

『春斗、これはどういう事なの?』

『色々あつてね、そういう事になったんだ。だからねシャル、そんなドスを聞かせた声を送らないでくれるかな?』

『やだなあ、ドスなんて聞かせた覚え無いよ……? うん、全然、そんな事なんて無いんだから』

『……うん、そうか。これ以上は触れないよ』

春斗は春斗で、なかなか大変だったりする。

「……で、会長。何でそんな事になったんですか?」

「うーんとね、色々とあるんだけどねえ」

楯無がそこに至る経緯を（春斗の事は除いて）掻い摘んで話すと。

「ならば、一夏さん！ あなたに決闘を申し込みます！ 私が勝つたら、私が専属でコーチになりますわ！！」

「いいや、一夏。私と戦え！ 私が勝つたら、専属コーチは私だ！」

「あんたら黙りなさい！ 一夏はあたしがコーチするんだから！！」  
「貴様ら、私を忘れるなっ！！」

「篤さん、あなたはむしろコーチされる側でしょう！？ お黙りなさい！！」

「何だと！？ ならばセシリア、表へ出る！」

「宜しいですわ！ こうなれば、誰が一番ハッキリさせましょう！！」

「面白い。一番になった者が、一夏をものに出来るといふ事だな？」

「上等！ あたしが一番だって教えてやるわよ！！」  
一夏 当事者を置き去りにして、4人はアリーナスステージへと向かう。

「皆、盛り上がってるね」。僕には関係ないけど」

「あら、デユノアちゃんはやらないの？」

「だって、春斗の専属は僕で決定でしょ？」

「……………あ、そう」

にこやかに笑うシャルロットに、織羽は何故か冷たいものを覚えたのだった。

「あらあら。モテモテね、一夏くんってば」

ステージで巻き起こるバトルロイヤル。楯無はそれを見てコロコロと笑う。

「いや、そんなんじゃないですよ。ただ、二年生に口出しされるのが気に食わないんじゃないですかね？」

「……………君さあ、よく鈍感だとか言われぬ？ あと、いつか刺さ

れるぞ、とかつて?」

「何でその事を!?!」

「一夏くんって、凄く分かりやすいからね。これは面白……じゃなくて、苦勞しそうね」

「???」

『……今、面白って言ったぞ、この人』

夕日差すアリーナに、爆音と閃光とが絶え間なく響き続ける光景。それはなかなか圧巻であった。

暗い部屋の中に、淡い光が灯る。天井には幾本ものパイプが走り、床には太めのコードが整列して走る。

部屋の中には、溶液に満たされた大型のカプセルがあり、そこに一つの肉体が浮かんでいる。

「これ、クローン培養技術の応用だっけか？」

「ええ、そうよ。ナノマシンの治療では間に合わないようなものも、これで治療できるし……強化も出来る」

そこに現れる二つの影。一人は黒のスーツを着た女。美麗ではあるがその瞳は冷たく、大凡、人のものとは思えない輝きを宿している。もう一人はグレーのスーツの上に白衣を纏った女。

見た目、40代程だろうか。顔の所々にシワが寄り、痛みの入った赤い髪を乱雑に纏め上げている。

「こんなガキ……IS使つてまで攫ってくる意味があつたのかよ？  
ええ、”Dr.ファウスト”？」

「フフフ……貴方のようなエージェント風情には、この体の価値は分からないわよ、”オータム”？」

「価値ねえ……IS適正もない、単なるその辺の男と同じじゃないつてのか？」

オータムと呼ばれた女は、いまいち面白くなさそうに肩をすくめる。彼女にとつて、男はどれも同じ。粗野で何の価値もない、そんな存在でしかない。だからこそ、理解出来ない。

「ええ。これこそ……私がずっと探していた『パンドラの鍵』……オリジナル・ドライバーなのよ……！」

だからこそ、ファウストと呼ばれた女の執着が理解出来ない。

彼女はこれを見つける為に、何年もの時間を掛けてきた。そのこだわりの理由、もしもあるとするならば。

「もしかして、あの実験に関係しているのか？」

「……ククツ。まあ、いざれ分かるわよ。それより、スコールから新しい指示が届いているわよ」

ファウストは白衣のポケットから取り出した手紙を、オータムに見せる。

「何だどつ！？ よこせつ！」

オータムは奪うようにして手紙を取ると、すぐにそれを開いた。

「……チツ」

オータムは非常に不愉快だと言わんばかりに、顔を歪める。

「何て書いてあつたのかしら？」

「……もう暫く、テーマの所にいろつてよ。クソツ、面白くねえ……」

……」

「なら丁度良いわ。例のあれをテストするから、仮想敵をしてくれるかしら？」

「……いいぜ。ただし、全部スクラップにしてやるけどなあ！」

「それは頼もしいわね。では、行きましょう」

二人は溶けるようにして闇の中に消える。

そして、残されたそれはただ、低い音を響かせ続けるのであった。

第36話 VSミスティアス・レイティノ学園最強への挑戦（後書き）

自分のネーミングセンスの無さに絶望したw

薄霜の歌声とか、月光の氷華とか……もつとこつ、カッコイイ名前が頭に浮かべばなあ。某『凍える知性』みたいな。

水の技にも名称があるんですけど……あんまりやると会長が厨二くさくなるのでw

第37話 彼女の想いと姉弟の心（前書き）

日常回。

オリジナル展開ばかりですが、大丈夫かなと心配しています。

それと、今回もいろいろ怒られる覚悟をしています！ww

### 第37話 彼女の想いと姉弟の心

「はあ……やれやれ」

春斗は溜め息を吐きながら、アリーナスステージの穴埋めをしていた。一夏の白式はダメージが軽くなり、修復させる為に完全待機状態にあるので、裏白式で絶賛穴埋め作業中である。

「はい、これで最後だよ」

「ありがとう、シャル」

埋める用の土を持ってきたシャルロットに礼を言いつつ、それを受け取る。

その後、バトルロイヤルは壮絶な決着を見せた。

箒の雨月がラウラに直撃し、ラウラのレールカノンがセシリアを吹き飛ばし、セシリアのレーザーライフルが鈴を撃ち抜いて、鈴の衝撃砲が箒をぶっ飛ばした。

結果、全員ノックアウトドロー。

絶対防御発動と共に、ぱったりと意識を失って地面に落ちた。

さて、大変なのは後に残された者である。まずは、この惨状を何とかしなければならぬ。

幸いにしてピットには四人いるので、一人ずつ運べば問題無い。

『おねーさん、ちょっと用があるから帰るわね』

と、考えた矢先に書置きを残して更識楯無逃亡。残ったのは一夏とシャルロット、そして織羽。

さて、ここで問題なのは三人に対して運ばなければならないのが四人。

必然的に、誰かが二人運ぶ計算である。そこ、誰か呼んでくれば良いとか言っではいけない。バトルロイヤルが始まった時点で、アリーナからは生徒が一斉逃亡するネズミの如く、撤退を完了してしまっているのだ。

「仕方ないな。俺が二人運ぼう」

「いや、僕が運ぶよ」

「いやいや、シャルロットにそんな……女の子に二人も運ばせられないって」

「いやいや大丈夫だよ。これでも力はあるんだよ？」

「……じゃあ、ここはあたしが運ぼうかな？」

「……どうぞどうぞ」

「お約束だっけ分かってたよ！！」

なんてやり取りがありつつ、織羽が二人を本当に運ぶことになった。

「もう、あたしだっけか弱い女の子なんだけどなあ」

などとブツブツ言いながら、しかし箒とセシリアという二人を両肩に担いで寮まで運んでいく姿は、か弱いという言葉の意味を辞書で調べるべきだと、突っ込まずにはいられない光景だったりした。

四人を寮に運んで、今度はアリーナステージの修復である。

織羽は四人の制服を寮に運ぶ為、別行動。シャルロットは春斗の手伝いでそれぞれ行動する運びとなった。

その裏に、織羽の気遣いがあったことは言うまでもない。

「……これでよし、と。ありがとう、シャル。助かったよ」

埋めた穴をしつかりと均して、春斗は深々と息を吐く。こういった作業はし慣れておらず、シャルロットの助けは大いに有り難かった。「ううん。これぐらい全然。むしろ……二人つきりになれたからラッキーかなって……」思ったり」

「……そういえば、トーナメントが終わってからこっち、全然そんな事無かったっけ」

「何時も、誰かしらがいたからね……」

学年別トーナメント以降、一夏の周りは賑やかであった。春斗も早々表に出れず、出れる時もフォローの出来る鈴やラウラが一緒の時間ばかり。

シャルロットと二人だけ、というのは本当に無かった。

（臨海学校の時の約束も、東博士の乱入でうやむやになっちゃってたしなあ）

臨海学校の行きのバスで、シャルロットと二人で泳ぐ約束は、東による紅椿騒動で叶えられなかった。

更に福音事件が続いたせいで、シャルロットがその事を思い出したのは学園に戻ってきてからだ。

その時の彼女の絶望、想像するに難くないだろう。

とはいえ、その時は春斗も強奪事件のせいで思い出す余裕が全く無かったのだが。

どこかで埋め合わせをしないと思っていると、シャルロットが此方をじいっと見ている。

「どうかした？」

「えっと……少し聞きたい事があるんだけど……良い？」

「答えられることならね。何？」

シャルロットの眼差しは真剣で、何だろつかと春斗も背を正す。

「どうして、楯無会長に鍛えてもらうことになったの？」

「……それは会長も言ってたでしょ？ 交換条件で、ある事の代わりに一夏を鍛えるって話になって……で、一夏は会長の強さを見て自分から教えてもらうよう頼んだって」

「うん、それは聞いたよ。僕が聞きたいのはね……そこまでして、一夏が強くなるうとする理由の方」

「……!?!」

「確かに、もう国家代表が決まってる会長に教えを乞うのはおかしく無いよ。でもね、昨日までの一夏はまるで、道が分からなくなつた子供みたいだったのに、今日の一夏はその逆。自分が進む道を見つけて邁進しようとしているみたいだった」

「……」

「もしもその変化と、会長に鍛えてもらう事が関係しているなら……そこにある理由は何？ 僕が知りたいのはその事なんだ」

シャルロットの瞳には戸惑いの色を浮かべる春斗が映り、春斗の瞳には何処か寂しげな面持ちのシャルロットが映る。

きつと教えてもらえない事を、話してくれない事を気に病んでいるのだろう。

聡いシャルロットの事だ、知らぬ存ぜぬを押し通したとしても、言えない事情があると察してくれるだろう。

だが、それは余りにも不義理ではないだろうか。春斗は少しばかり悩み、そして口を開いた。

「ごめん。まだ、言えないんだ」  
「……そんなに厄介な事が起きているの？」  
「しかも相当にね。一夏はまあ、どうにかなったけど……ああ、千冬姉さんも何かしないと……はあ、悩む暇もないね」  
春斗は千冬の状態を思い出し、頭を抱えた。こればかりは、自分が何とかしないといけない事だ。

「……春斗は、平気なの？」  
「え……？」

「一夏や織斑先生があんな風になって……春斗だけ平気、って事は無いんじゃないかって……」

「どうなんだろう……僕自身は、ただ単に分からないだけかも知れないね？」

「春斗……」

そう言つて苦笑する春斗に、シャルロットは何故か強く胸が締め付けられた。

まるで、今にも消え入りそうな程に、弱々しく見えてしまった。

「っ……！」

だから自然と体が動いていた。伸ばした手が春斗の手を握る。

「どんな事情があるかは分からないけど、これだけは忘れないで。

僕は何があつても春斗の味方だから……春斗の為なら国だつて捨てるし、世界中を敵にしたつて構わない……！」

「シャル……！？」

「今の僕があるのは、春斗が居てくれたから。だから、僕の全部は春斗のものだから……だから、僕は！」

「シャルッ！」

「ッ……！」

強く名を呼ばれ、シャルロットがハツとして我に返る。いつの間にか、自分が春斗の胸にすがっているのに気が付く。

「っっ、ごめんッ……！」

顔を真赤にして、シャルロットは春斗から離れる。背を向けて顔を見えないようにしてから、自身の頬に触れる。そこは、火がついたように熱かった。

「っ……………」

その頭に、ポンと手が置かれる。そのまま優しく、髪を滑っていく。「ありがとう、シャル。今はまだ話せないけど…………でもきつと、僕らだけじゃ届かないと思う。だからその時が来たら、シャルの力を遠慮無く借りるよ」

「……………うん」

背中越しに届く言葉と、撫でられる心地良さに顔がますます赤くなり、胸の中を暖かものが満たしていく。

アリーナに、完全退出を告げるアナウンスが流れる。

「おっと、そろそろアリーナ閉鎖時刻だね。急ごう」

「うん。ところで、その事は皆には言うの？」

「聞かれたら答えるけど…………聞かれるまでは言わない。というか、いちいち言いたい内容じゃないしね」

「……………そうだね」

二人は退出するべく、急いでロッカールームへと向かった。

帰寮すると部屋でシャワーを浴びて、食堂で夕食を済ませる。ちなみに第達四人は、未だにノックアウト中である。

自室にて、春斗は待機形態の白式と特製PCとをコードで接続して、モニターにデータを呼び出す。

「えっと、白式のエネルギー系……ああ、出力系が酷いな。唯でさえエネルギーが食い過ぎるの機体なのに、これじゃあロスが多過ぎる。特にカノンモードが酷いな」

「やっぱ、そうなのか？」

強力な武装と攻撃力を誇る為、出力系の割り振りが大きくなっている。だが、その振り分け方が余りにも大雑把なのだ。

スラスタ出力も、福音に対する為にだろう。とにかく出力重視でバランスが悪い。

こんなんで良く戦えたなと呆れ半分、感心半分である。

「ISって、操縦者を理解して行くと、最後は操縦者そのものになるっていうし……まさに一夏だね」

「まさにつて、どついう意味だよ!？」

そんな一夏の反論を黙殺して、春斗はデータの問題となる部分を摘み上げていく。

「ISは超精密機械だから、最適化とかに頼り過ぎない事。自己進化もしたままにしようと、こんななつちやうからね？一夏もしつかりと覚えておくように」

「……はい、頑張ります」

元々、白式と裏白式のデータは春斗が一人で処理し続けていた。

だが、これからの考えれば、一夏も多少なりとも覚えなければならぬ。

「このシステムプログラムと、このエネルギーバイパス系プログ

ラムはこっちの回路をかませて……」

『……ん？』

「雪羅のエネルギー回路がこう繋がってるけど、こことここをカットして、代わりにこっちを繋げると……」

『………んん？』

「……一夏？」

『んん？？』

「分かってないでしょ？」

『おう！ さっぱりだー！』

「自信に溢れる回答をしないでくれるかな！？」

「一夏の男らしいダメ宣言に、思わず声がデカくなる。」

『と、ところで……あれはどうなってるんだ？』

「一夏はごまかし混じりに、気になっていた事を聞いた。」

「あれ……？ ああ、”月華白雪”の事だね。えっと……一応、それ用プログラムがそれぞれに構築されてるから、本気でやろうとすれば多分、あれになれると思うけど……」

『プログラムって、どんなんだ？』

「イメージ的にはね………凸と凹」

『………は？』

「いや、実際はもっと複雑なんだけどね………本当にそんな感じなんだって。要は僕と一夏の意識が合致するのをトリガーにして、発動するみたいなんだ」

『……俺さ、あれだけはそんなにホイホイ使わない方が良い気がするんだ。なんつーか、強すぎる力って絶対にデメリットとかってあるだろ？ 福音の時だって、使った後に俺は倒れちまったし』

「………うん、僕もそう思う。あの力は本当に、”切り札”って感じだからね」

月華白雪。

表と裏、白と黒の白式が量子融合して誕生する、恐らくは現時点で世界最強のIS。

コアの共鳴起動。そして搭乗者の意識が混ざり合って一体となる事で可能となる、大出力と超反応。

絶対的機動力と制圧力は、専用機六機を相手にして尚、それを圧倒した銀の福音をも瞬殺した。  
シルバリオ・ゴスベル

だが、限界を遙かに超えるその力は、最強であると同時に諸刃の剣。二人の感じる嫌な予感、間違っているものでは決して無い。

「まあ、これに関しては出来るんだって事を分かっていたら良いと思うよ?」

『そうだな。本気で使う時もあるかも知れないし、それぐらいの方が気が楽だ』

「じゃあ、話を戻そうか」  
『ぎゃふん』

てな訳で、エネルギー回路の構成に関する講義はまだまだ続く。

コンコン。

一夏の意識が限界を迎えそうになった頃、ドアがノックされる。

「はい?」

春斗と入れ替わった一夏がドアノブを回す。と、開かれたドアの向こうにいたのは千冬だった。

「千冬ね　織斑先生?」

「少し邪魔するぞ?」

返事も聞かず、千冬は一夏を押し退けて室内に足を踏み入れる。

「え？ ちよっと、織斑先生！？」

『いきなりどうしたんだろう？』

一夏が慌てて千冬を追うと、千冬はしげしげと室内を見回していた。

「ほう、綺麗にしているんだな」

「いや、これぐらい普つ……………つてえ！？」

言い切る前に拳骨が飛んできた。非常に理不尽である。

『一夏、大丈夫？』

「ぐおおおおお……………っ！」

頭を押さえてうずくまる一夏を尻目に、千冬はベッドに腰をお下ろす。

「一夏。春斗と代われ」

「つう……………何で？」

「何でもいい。さっさと代われ。そしてしばらくの間 海岸 まで下がっている」

「へいへい……………で、”僕”に何か用なの？」

「……………ああ、まあな」

「……………何か飲む？ まあ、僕が淹れるのは紅茶くらいだけど……………」

「いや、いい」

「そつ？」

キッチンに行きかけた春斗は戻って、椅子を引いて座る。

「……………」

「……………」

沈黙。カチ、カチという秒針の音だけが室内に響く。千冬は居心地悪そうに、組んだ足を何度も直している。

どちらもが黙ったまま数分が過ぎて、春斗は仕方なく切り出す。

「……………姉さん、聞いて欲しい事があるんだ……………奪われた僕の体の事を」

「……………！？」

ハツとして顔を向ける千冬。その顔は何処か弱々しく、まるで今にも泣き出してしまいそうに見えた。

「あのね、僕は」

「言うなっ!!」

いきなり声を荒らげて千冬が立ち上がる。そのまま春斗の肩を、これでもかという程に強く鷲掴みにする。

「痛っ……!!」

「何があってもお前の体は取り返す！ 何があろうと、必ず私が助けて見せる！」

「ちよつと待つて、姉さん！ 何を……!!?」

春斗は何とか宥めようとするも、千冬の必死な訴えは止まらない。

「ああ、そうだとも！ 私が……私がこの手で絶対に守ってみせる！ だからお前は何も心配しなくて良いんだ!!」

「姉さん、一体どうしたの!? 幾ら何でも、ちよつとおかしいよ

……!!?」

「っ……!!? す、すまない……少しばかり、滅入っているようだ……」

今度は火が消えたように、千冬はベッドにガクリと腰を落とした。

「姉さん。もしかして……僕が諦めてるとか思った？」

「いや、そうは思っていないが……」

千冬は俯き気味の顔を上げる。その瞳は、何時もの強い意思を秘めた輝きは失せていた。

「春斗……お前は不安ではないのか？」

「……っ!?!」

不安ではないか。

その問いかけに、春斗はずっと感じていた違和感 “不安” に初めて気が付く。

自分の体が奪われ、帰る場所を失い、その先にあるのは消え去る  
《自分という存在》。

不安でない筈がない。自分自身の事なのだから。

「……そうか。僕は”不安”なんだ」

一夏や千冬の事ばかりを気に掛けて、そこまで気が回らなかったと  
今更に気付き、つい苦笑してしまう。

「春斗……?」

「……うん、不安はあるよ? でも大丈夫。それ以上に負けん気が  
あるから」

ニツと笑って見せる。不安に負けない、負けてやるものかという意  
思を込めて。

「一夏はもう、進み始めてるからね……僕が不安から逃げる訳には  
行かないでしょ?」

最も近い同性で、ある意味恋敵でもある存在一夏にも、負けたくない。

「……そうか。私は……駄目だな。どうしても嫌な方にしか考えが  
向いてくれない」

そう吐き出す今の千冬は、まるで触れれば壊れてしまいそうな程に  
儂く見えた。

「 姉さん」

「っ !?」

春斗はその体をギュツと抱き締める。かつて、鈴が自分にしてくれ  
たように。

「姉さん……僕は姉さんが好きだよ。ずっと僕達を守ってきてくれ

て……きつと、いっぱい苦しい事とか呑み込んできたよね。でもね、  
大丈夫だから……」

「……………」

「だから、苦しいなら吐き出してよ? 悲しいなら泣いてよ? 僕  
たちは姉弟で……家族なんだから」

「……………」

「僕も一夏も、まだまだ頼り無いかも知れない。でも、それでも…  
…家族を守りたいって気持ちだけは…本気だから」

心に浮かんだままを言葉にして、吐き出していく。飾る言葉は要らない。ただそれだけで良い。  
きつと、想いはそれだけで伝わるから。

「……バカ者が」

胸の中の千冬が、ポツリと零す。その声はいつもの 姉である  
人の声だった。

千冬の手が伸びて頬にそつと触れて 。

「！？ イタタツ!？」

頬をギューツと引つ張られて、春斗が悲鳴を上げる。

「半人前のくせに、言うだけは一人前だな、ん？」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ！ 生意気言いました！ ごめんなさいっ!!」

「……ふんっ」

千冬が鼻を鳴らして解放してやると、春斗は少しでも痛みを和らげようと、すっかり赤くなつた頬をさすつた。

「全く……弟に甘える程、私が弱いとでも思っているのか？」

「でしたら、部屋の掃除も甘えないでやって欲しいね」

「……それとこれとは話が別だ」

「舌の根も乾かぬ内に!？」

理不尽極まりない千冬の言葉に、春斗は驚愕する。

ただ、その顔はどちらも笑っていた。

「邪魔したな」

「ううん。久しぶりに話せたから良かった」

「……そうか」

千冬は、少しだけ嬉しそうに口元を歪める、が、それはすぐに戻った。

「春斗。何かあるうと、お前の体は取り戻す……例え何者をも敵に回そうともだ」

「……ありがとう、姉さん」

「礼を言われる事ではない。家族なのだから……当たり前的事だ」  
千冬がそう言い残して部屋を後にした後、春斗はギュツと右手を握りしめた。

姉の言葉に勇気を貰い、春斗は不安に襲われる自分を奮い立たせる。

次のアップロードで必ず目覚めると誓ったのだ。それが出来なくて  
も一夏の中には戻らないと決めたのだ。

今更、消えることに不安を感じる意味など無い。

要は、体を取り戻して目覚めれば良いだけだ。やる事は、たったそれだけ。

それが　　それだけが、どれほどに困難かなどは、思考する理由にもならない。

やる以外に、<sup>道</sup>選択肢など無いのだから。

廊下を歩く千冬は、自身の不甲斐なさに憤りを抱いていた。春斗を慰め、勇気づけるつもりであった筈が逆に慰められて、何と情けない事か。

そもそも、本当に慰めるつもりであったのだろうか。それさえも、今になれば怪しいものだ。

「全く……全然、私らしくないな」

元より、行く道は一つしかないのだ。今更、足踏みする意味などあるものか。家族を守る為ならば修羅にも、夜叉にも、喜んでなろうなるうではないか。

神仏を信じ、祈る心など持ち合わせてはいない。邪魔をするならば、世界をも斬り伏せて、運命さえも振り伏せてみせる。

己の望む未来は、力尽くで奪い取る。

それが 織斑千冬の決めた道なのだから。

時刻は丁度、一夏が春斗の講義を受けていた頃。

「……………」

夕食を終えたシャルロットは、ベッドに転がっていた。着ているのは、部屋着兼用のパジャマ。白のネコミミフード付きの可愛らしいパジャマだ。

これは以前、シヨツピングモールへ買い物に行った際、一夏のアドバース(?)を受けて買った、対春斗用の品だ。

これを着て甘えた声の一つでも出せば、春斗も猫まっしぐらだ。その人、「猫はシャルロットだろう?」とか言っではいけない。

ともあれ、あの後は臨海学校も近かったので、着るのは戻ってきてからだと決心。

そしていざ、となったら一夏の様子が変わってしまったっていただけいで見事に空振ったのであった。

閑話休題。

シャルロットは天井を見上げながら、ふとアリーナでの事を思い出していた。

「春斗……大丈夫なのかな？」

いつもの春斗なら、あんな風に勢い任せに暴走した後は大抵、その事を逃われたりするもののだが、今日はそれがなかった。

(そう、何時もの春斗だったら……)

『とうとうで、さっき言ったのは本心なの？』

『え……っ？』

『僕の為なら、世界を敵に出来るとか、シャルの全部は僕のものとかっていうのさ……本心で、あんな事言ったの?』

春斗の瞳は、まるで獲物を定めたかのような歪な光を宿して、シャルロットを映す。それに捉えられて、シャルロットの胸は何故か強く跳ねた。

『ほ、本心だよ……本気で、そう思ってるから……』

ドキドキとする鼓動と、締め付けられるような苦しさの中で、シャルロットは何とか言葉を紡ぐ。

『……ふうん』

『あつ……』

意地悪く笑う春斗は、指一本でシャルロットの顎を持ち上げる。そしてそのまま、唇をシャルロットの耳に寄せた。

『じゃあ、証明してみせてよ?』

『証……明……?』

『シャルの身も心も、全部僕のものだっていう証明。どうすれば良いか……分かるよね』

クスクスと笑いながら、春斗はその指先をシャルロットの唇に這わす。

『僕は強制しないから……どう言えば良いか、自分で考えて?』

『そ、そんなの……分からないよ……』

『ウソだね。本当は分かってるんでしょ? ほら、心に浮かんだままを口にしてご覧?』

『……ほ、僕は……僕の全ては……春斗のものです』

『……それで?』

春斗はその続きを促す。

『だから、春斗のどんな命令も……絶対に聞きます……ああ、恥ずかしい……!』

羞恥に顔を染めて、息が荒げ、しかしそんな自分に恍惚の情が溢れるのを感じる。

『よく言えました。そんないい子には、ご褒美を上げないとね……』

『ええ……っ!?!』

背徳の興奮に打ち震えるシャルロットに、春斗は優しく囁く。

『いっぱい甘えるのと、いっぱいイジメられるの……さあ、どっちが良い?』

『ええっ……!?!』

『選べないの? 仕方ないね……じゃあ、いっぱいイジメて、いっぱい甘えさせてあげるよ……クスクス』

『ま、待って……ここでなんて……!』

『ダメだよ。さあ、その手を退けて……』

『ああ……そんな……!』

「はあ………っ!?!」

恍惚の溜め息を吐いてから、シャルロットはハツとした。

今、自分は何を想像した? 虐められて辱められて喜ぶとか、明らかに普通ではない。

そもそもそんな事を春斗はしない。せいぜいからかう程度だ。なのに、あれではまるで、自分は春斗にああして欲しいという歪んだ願望を抱いているようではないか。

「~~~~~っ!!」

恥ずかしさの余り、ベッドの上をゴロゴロと転がり、枕をバスバスと叩く。

顔が火を噴いたかのように真っ赤になっているのは、鏡を見なくても良く分かった。

「違うんだ！ 僕は普通にデートとかして、普通にお話とかして、手を繋いだりとか、腕を組んだりとか……とにかく、そういう普通のが良いんだ!!」

そう言いながらも何故か脳内では、明らかに普通とは真逆の状態にいる自分がハツキリクツキリと浮かぶ。

『いっぱいイジメて、いっぱい甘えさせてあげるよ……』

「…………ふふ」

リフレインした言葉に、つい笑いが零れた。そしてまた、ハツと我に返って、ゴロゴロとベッドを転がる。

「駄目だ！ 少し外に出よう!!」

このままでは、何処までもおかしな思考しか出来ないと思ったシャルロットは、拳を固めて立ち上がった。

こういう時は、風呂に入るのが一番良い。しかし寮室備え付けのシヤワールームでは同じ事になるだろう。

ならば、大浴場だ。あそこなら不特定多数が出入りするし、空間が広い

ので、きつとおかしな思考をしたりしないだろう。

そう決断するや、シャルロットはバスタオルと洗面用具一式を抱えて、大浴場へと向かった。

廊下を、まるで追われる者が急ぎ逃げるような足取りで進んでいくシャルロット。

その途中、シャルロットとすれ違った一人の生徒ピチユがいた。

「あれ、でゅっちー？」

急ぎ行くシャルロットに、首を傾げたのは同じクラスの布仏本音。因みにでゅっちーとは、シャルロットに付けられた彼女専用の愛称（本人未公認）である。

「あら、本音？ 何突っ立てるの？」

「あ、たっちんだ」

本音は織羽を見つけるや、着ぐるみパジャマの尻尾をパタパタとさせて、その耳をピョコピョコとさせた。そのメカニズムは未だに解明されていない。

「そうだ。ちょっと聞きたい事があるんだけど？」

「何？」

「えつとねえ……………ま、いつか」

「……………何よ、それ」

面倒臭くなったのか、本音は思考そのものをぶん投げたのだった。

何時もならば人が多い筈の大浴場は、シャルロット以外に利用者は無かった。

時間的にも少し遅いせいだろうかと思いつつ、シャルロットは体をざつと洗うと、サウナルームに入っていた。

もうもうと上がるスチーム。全身の毛穴が開いて、汗が滴り落ちていく。

この全身の細胞が熱を帯びていくような感覚が、シャルロットはとても好きだ。普段は意識しない感覚までもが目覚めて、活性化していく気がするからだ。

それと、この灼熱地獄から解放された時の、あの全身に感じる冷たい風も好きだ。

滴る汗をシャワーで流し、生まれ変わったようになる、あの感覚も最高だ。

こうしてスチームの中に身を晒していると、あの淫猥なる思考も溶けて消えていくようだ。

「はぁ………」

自然と溜息が溢れる。それに合わせてサラサラとした汗が頬から顎

へ伝い、そのまま首を通って、胸の間を滑り落ちていく。

「んっ……」

それが偶然にも彼女のヘソに触れた瞬間、くすぐったさに声が出てしまう。

既に30分程が経過している。そろそろ一度出るべきだろう。

シャルロットは汗の滴る髪を掻き上げて、立ち上がった。

ガチャリとドアを開けて大浴場へと出ると、脱衣場に繋がるガラス戸も開いた。

「……え？」

入ってきた人物とシャルロットは、互いの姿を見た瞬間、同じような声を出した。

タオルを持った、細身ながら引き締まった筋肉。女子とは違い、丸みを一切帯びていないその体。

「しゃ、シャル……？」

「……は、春斗？」

偶然か。はたまた神の采配か。互いの最も重要かつ見られてはならない部分は、タオルが上手く隠していたりする。

だが、そんな事は本人達にとってそれ程に意味を成してはいない。裸の異性が、そこにいる。それだけで充分過ぎるのだ。

「うわったあ!?!」

一足先に我に返った春斗が、慌てて後を向く。

そしてその背に、『ボタン』という音が聞えた。嫌な予感がして振り返ると。

「っ!? シャル!?!」

顔を真赤にして、床に倒れたシャルロットがいた。逆上させたせいだろうか、鼻血が出ていた。

「しっかりして、シャル!! 大丈夫!?!」

必死に呼びかける春斗の声を遠くに聞きながら、シャルロットは何故、大浴場に自分以外の生徒がいなかったのかを理解した。

今日は”男子の大浴場使用日”なのだ。

(そりゃ、女子が居ない筈だよねえ……)

などと思いながら、シャルロットは意識を手放したのだった。

第37話 彼女の想いと姉弟の心（後書き）

黒くないシャルを書くとき自然とピンクになる罨w

春斗は何もしていないのに、セルフで順調に墜ちていくシャルロツトさん、マジ暗黒面w

ヤンデレ暗黒面セルフTK持ち妄想っ子……なんだコレ？w

第38話 Lunch Times Girls Talk (前書き)

全然話の進んでいない日常回。

こつこつ部分の方が、書いていてとても楽ですね。

脱衣場で、タオルに身を包んだシャルロットと春斗が背中合わせでベンチに座っていた。

「えっと……ゴメン、まさか入っているだなんて思わなくて……」

「ううん。僕の方こそ……今日が男子使用日だって、すっかり忘れてて……ごめんなさい」

「いや、僕の方こそ……脱衣場にある服に気付けば……」

「っ……!?!? そ、それはダメッ!?!」

「あ……っ!」

春斗は自らの失言に気付く。脱いだ服に気付くという事は、つまり脱いだ下着も見てしまふという事だ。

「……ごめん」

「……ううん」

互いに俯いたまま、ポツリと零す。

二人の顔は羞恥に染まり、なんとも言えない沈黙が脱衣場を支配した。

特にシャルロットは、意識を失っている間に浴場から脱衣場まで運ばれており、その間に何があったかを考えただけで、また意識を失いそうになった。

(み、見られた……んだよね……うっ!?)

想像しないようにと意識する度に、明確にビジュアルが浮かんでしまふ。引いた血がまた逆上ってしまい、クラっとする。

「っと、大丈夫!?!」

その気配に気付いた春斗が、咄嗟にシャルロットの体を支える。

「っ……!!」

「ッ……!!」

サツと目を逸らす春斗。シャルロットも、また俯いてしまった。濡れた髪が滴をしたたらせる。

「えつと……あのね……シャル？」

「な……何……？」

「その……責任は……ちゃんと取るから」

「えっ……？」

「嫁入り前の女の子の裸を見ておいて……責任取らないのは……最低だし」

「そんな……僕だって、春斗のは……裸……見てるし……そんな事言うなら……僕の方こそ……責任取らないと……」

実際は一夏の体であるが、そこは敢えて無視する。

「……じゃあ、お互いに責任取り合おうか？」

「……え？」

何を言ったのかを理解する前に、シャルロットの体がグラリと揺れる。

背中にベンチの感触が伝わり、シャルロットは自分が押し倒されたのだと理解した。

「は、春斗……!？」

「目を閉じて……それがキスのマナーだよ？」

おかしい。幾ら何でも唐突過ぎる。しかもこのパターンは、過去に何度かあった気がする。

「待つて、春斗……！」  
「シャル……」

そつだ。このパターンは 確実に夢オチだ。

触れそうになつた瞬間に目が覚めて、そこはきつと部屋かどこかで。そうしてまた、がっかりして、しょんぼりしてしまうのだ。

これが自分の脳が生み出した妄想夢であるというなら いいだろ  
う、踊らされてやろうではないか。

どうせ、がっかり&しょんぼりするのは同じなのだ。だったら毒を食らわば皿までである。

シャルロットは瞳を閉じて、春斗の首に腕を回した。

「シャル……」

「ん……」

「シャル……」

「ん……」

「シャル……！」

「ん……？」

もうこっちは覚悟完了だというのに、何故か春斗はビクともしない。自分の夢のくせに、どうして思い通りにならないのか。シャルロットは憤りを感じ、回した腕に込められるだけの力を込める。

「シャル……ッ！」

「んん~~~~~~~~っ……！」

徐々にだが、シャルロットの肘の曲がる角度が上がっていつている。もう少し、あと少しでシャルロットルート確定だ 夢だけだ。

「んん~~~~~~~~っ……！」

「シャル……… ロットオッ……！」



結果、非常に痛い目に遭いました。

「……………調子はどう？」

「頭が痛い……………物理的な意味で」

ベンチに体を横たる、シャルロットの頭には、ウォータークーラーの水で浸したタオルが乗せられている。

そしてそのシャルロットに、パタパタと団扇で仰いで風を送っている春斗。

（結局……………何処が夢で……………何処が現実だったのかな……………？）

シャルロットが夢だと思った脱衣場での出来事。しかし、シャルロットの格好は夢のままであるし、全部が全部、夢であると言つには些か、リアル過ぎたような気もする。

唯一、全てを知るであろう春斗に聞くという手もあったが、本当の事を言うとは限らないし、それはそれでどうにも負けた気がする。何に、かは分からないが。

悩むシャルロットであったが、しかし体調的にも物理的にも頭が痛いせいで、上手く思考できなかつた。

しばらくそうしていると、シャルロットも多少ながら復調した。

「さて、どうしたものかな……？ シャル、服は着れる？」

「うん……何とか」

のそのそと体を起こすシャルロット。その体にかけられたタオルが  
ずり落ちそうになったので、反射的に顔を逸らす。

「えと……何か買ってくるよ。……スポーツドリンクが良いかな  
？」

「うん」

未だ春斗がいるにも拘らず、冷えてしまった体を拭き出すシャルロ  
ット。春斗は慌てて脱衣場を出るのだった。

「なんていうか……今回は色々危なかった気がする」

『俺はすぐに 海岸 まで下がったからよく分からないけど……こ  
れは、封印するべき記憶だな』

「まさか、一夏でさえやらかしていないイベントを……まさか、こ  
の僕が……っ！」

『その後悔はどういう意味だ!？』

自販機を悔しさ混じりに叩く春斗に、一夏のツッコミが光る。

『まあ、それはさておき。さっきは危なかったな……色々と?』

「……そうだね」

具体的に危なかつた点。

1：倒れたシャルロットを脱衣場まで運んだ。

当然ながら自分は素っ裸。サウナにいたシャルロットの体は火照つて、そして汗に濡れており、その体を抱き上げれば必然的に、素肌同士が触れ合ってしまう。

鍛えられていながらも柔らかな彼女の体の感触に、否応無くドキドキとさせられてしまう。

2：シャルロットの体を拭いた。

そのままでは風邪を引くので、置かれてあつたシャルロットのバスタオルを取る。その際、彼女の着けていたランジェリーが目に入ってしまったたり、拭ける範囲を拭こうと、肩から上や足を拭いた時に、見てはいけない場所が見えかけたりしたが、ギリギリでそれを回避。

3：シャルロットにまたキスされそうになった。

上記参照。

「本当……危なかつたなあ」

スポーツドリンクのボタンを押すと、ガタンと缶が落ちてくる。

「春斗。お前は結局……シャルロットの事をどう思ってるんだ？」

「……………」  
「俺が言うのも変だけどさ……シャルロット、すげえ良い子だと思っぞ？」

「分かってるよ、そんな事は。……でも、どんな答えを出すにしたって……今のままじゃ、何も言えないよ」

「……………」  
取り出し口から缶を取り、ギュツと握り締める。

「亡国機業ファントム・タスクから体を取り戻して、自分の体に戻って……全ては、そこからだよ。それまでは全部、保留だよ……卑怯だと思っけどね」  
そう言っつて、春斗は少しばかり自虐的に微笑む。

可能性があるとはいえ、それは限り無く低い。そもそも、取り戻した体が戻れる体とは限らないのだ。

一夏はどうかは分からないが、少なくとも千冬や楯無がその可能性に気付いていないとは思えない。

だからこそ、蜘蛛の糸よりも細い最高可能性の未来に縋る以外ないのだ。

思考は際限無く陰鬱になり、この先には暗い未来以外は無いのではないかと、行く道の全てが闇に閉ざされてしまうかの様な錯覚に陥る。

がらあん……………っ。

「……………つと、いけない。落としちゃった」

意識が逸れたせいかわ、ジュースの缶が床に落ちてしまった。慌てて拾いあげるが、飲み口の辺りが見事に凹んでしまっていた。

「……仕方ない。もう一本買おう」  
流石に洗っても、これをシャルロットに飲ませる訳にも行かず、春斗は同じ物をもう一本購入する。

マイナスの思考は結局、何の意味もなさない。  
浮かんでしまったネガティブを振り払うように、春斗は脱衣場へと向かったのだった。

さて、そんな事があった翌日。  
当然の事ながら、平穩無事とは行かなかった。

箒、セシリア、ラウラが「むむむ……」と何かに唸っては、千冬に叩かれるという何時もの1組の授業風景が帰ってきた。それはとても良い事だ。

だがしかし、異変は未だ続いていた。

シャルロット・デュノア。

座学、実習、共に優秀。授業態度は非常に優良。他の面子のように怒られた事は一度として無い。

個性の強い1組にあって彼女の存在は、副担任である山田真耶の救いとも言えた。

しかしだ。

「え、徳川家康が江戸を都に据える際、江戸に様々な呪法を施したのが、天海僧正です。彼は比叡山天台宗のお坊さんで、京都の霊的守護をそのまま江戸に持ち込む為……」

「はあ………」

「……東の比叡山である”東叡山”。その鬼門を封じているとされた寛永寺ですが、江戸城本丸の位置から丑寅の方角を取れるのは浅草寺であり……」

「はあ………」

「……つまり、寛永寺は龍穴と呼ばれる場所を封印しているのです」

「はあ………」

「随分と溜め息を吐くな……デュノア？」

「はあ………」

スパーンッ！！

シャルロットの頭に、初めて落ちた出席簿アタック。その光景に1組は戦慄した。

「いったああああ……っ！！」

まさか、あのシャルロットが。まさか、そんな馬鹿な事が。まさか、これが世界の終幕。その始まりだともいうのか。

ざわざわ。

目にした現実が信じられず、ざわめき出す生徒達。

「さわぐな、静かに」

キンコーンカーンコーン。

「あ、授業はこれで終わりですね。次は新宿地下遺跡と皆神山ピラミッドの関係をやりますので、予習を忘れないようにしてくださいね」

「あー、終わったア！」

「お昼、何にする？」

「あたしはお弁当のだけ！」

「何だところっ！？ おかずを寄こす事を要求する！」

チャイムが鳴った途端、掌を返したとでも言うか、波が一気に引いたというか、とにかく凄まじい切り替えの早さである。

「あゝ、やっと昼休みだあ……!!」

「……………」

思いつきり背伸びをする一夏の後頭部目掛けて、出席簿が飛んだ。

バシッッ!

「いつてえ!? 何すんだよ、千冬姉え!?!」

「只の八つ当たりだ、気にするな」

「するわっ!!」

打たれた後頭部をさすりながら、一夏は叫んだ。

珍しく正当性100%の主張だったが、しかし何の意味もなかった。

さて、場所はいつもの如く食堂。雁首揃えたのは何時もの面子。しかし、昨日と同じく一夏はいない。春斗がまたしても用があると行って教室を出て行ったからだ。

「……織羽、そろそろ下ろして」という事で、今日は一夏の代わりに簪が参加している。

人数が人数なので、四人掛けテーブルを二つ使って座る。

「ところで更識さん、一つお聞きしたいのですが？」  
「……何？」

「ずい、と顔を近づけるセシリアに、かき揚げそばのかき揚げをブクブクと沈めていた手を止める。

因みに簪はかき揚げ全身浴派であり、表面はしっとり中はサクサクという黄金比を絶対と主張していたりする。

なので、天ぷらサクサク派であるラウラは、それを見る度にちょっとだけイラツとしていたりする。

「お前の姉、あれは何だ？」  
「算がずい、と顔を寄せる。

「豪く一夏と親しくしててな……取り敢えずどういふ人間かを聞いておきたいのだが？」

「ラウラがぐぐい、と顔を寄せる。

「あと、できたら弱点とか嫌いな物とか、洗いざらい教えてくれる

と有難いわね」

鈴がずもも、と顔を寄せる。

「え……ええ……!? お、織羽あ……!」

四人にドアップで詰め寄られ、簪は困惑の果てに織羽に救いの手を求めた。

「ずず……何?」

「幼馴染のピンチより、うどんを優先!」

織羽は思いつ切り月見うどんを啜っていた。

「もう、仕方ないなあ……ほい」

と、箸で熱々の汁を弾いて、セシリアの頬に当てる。

「あっちゃあ!」

と、セシリアが反射で動いた瞬間。

ガッ! ゴッ! ガッ! ゴキヤッ!!

と、連鎖的に四人が頭をぶつけていった。三人が悶える中で鈴だけが痛打を喰らったのか、頭やら鼻やら押さえて大変な事になっていた。

「簪、これを見てどう思う?」

「すごく……大惨事です……」

さすがは幼馴染、見事な切り返しである。

「……………てかさあ、会長に変に関わろうとしない方がいいよ？」  
頭に大コブを四つも作った織羽が、うどんを啜りながら言う。

「何だよ？」

「あの人、”人たらし”なんて呼ばれるぐらい人を誑し込むのが上手いのよ。誑し込まれたが最後、もう会長の玩具よ……………かくいうあたしも、苦労させられたわ……………」

「嘘だな」

「大嘘ね」

「あり得ませんわね」

「鏡を見る」

「フルボッコ過ぎない!？」

「織羽……………昔からお姉ちゃんと一緒に……………やる側だった」

「……………やっぱりなあ……………」

「え？ 何、そのリアクション？」

四人のリアクションが納得行かない織羽だったが、華麗に無視された。

「……………うん」

簪が昨日、春斗に言ったような事を言うと、織羽は微妙な顔をして月見うどんの卵を潰した。

織羽は、『うどんが半分ほどまで減ったら卵を潰して絡めて、汁に溶かす派』である。

この食べ方を、楯無は『そんなのは邪道よ!』と一喝。結果、大乱闘になって離れが一つ潰れた事は簪の記憶に新しい。

「完璧な人間ねえ……………」

「むう……………幾ら何でも、それは無いだろう?」

と、鈴と箒も微妙な表情になった。

「そうか？ 世の中には織斑教官のような完璧な人もいるだろう？」  
ラウラが言うと、二人はことさら微妙な表情になった。

「千冬さんが完璧って……そりゃ無いわ」

「ああ、間違いなく無いな」

「貴様ら、教官を見縊っているのか？」

不満ありありと、ラウラはスプーンをカレー皿に突き立てる。最近  
はカレーにハマっているラウラ。今日はチキンカレーである。

「いや、そうではない……そうではないのだが……なあ？」

二人は視線を合わせて、互いに思っている事が同じであると察した。

「千冬さんって……私生活がやばいのよ」

「何……？」

「具体的に言うと……家事が壊滅的なのだ」

「っ……………!？」

尊敬する人間のまさかの真実に、ラウラが目を見開く。

「料理はギリギリできるけど、洗い物は出来ないし、掃除も洗濯も

……………」

「その上、数日ほっとくだけで部屋は物だらけ。服もとっ散らかっ  
たままだしな……正直、一夏と春斗がいなかったら、家はあつとい  
う間にゴミ屋敷だらうな」

「今だって、一夏が寮長室の掃除しているって聞いたし……………」

「……………」

ラウラの中で、公私共に完璧であった”織斑千冬”が崩れる音が聞  
こえた。

千冬とて人間だ、欠点の一つや二つはあるだろうとは思っていた。  
だが、まさかの私生活ダメ人間だったとは。

「てか、ドイツに1年もいたのに気付かなかったの、あんた？」

「……………知らなかった」

「……………よっぽど巧妙に隠してたのね。そういう努力は滅茶苦茶しそ

うだし……」

「……………」

ラウラがこのショックから立ち直るには、時間が要りそうであった。

同時刻 職員室。

ベキヤツ。

「お、織斑先生!？」

「今なにか……篠ノ之と凰を全力で殴りたくなっただな……」  
握り潰されて、木くずとかした割り箸をゴミ箱に放り込みつつ、千冬は冷たい笑みを浮かべるのであった。

「……で、これまで一切会話に参加しないデュノアちゃんは、何をしているのかしら？」

「……………え？」

ずっとフォークをハムハムしていたシャルロットが、我に返った。

「シャルロット、何かあったのか？」

「な、何も無いよ！？ ある訳がないじゃない！！」

慌てて取り繕うも、不審に満ちた十二の瞳は、変わらずシャルロットに向けられている。

「そういえば、授業中もぼんやりなさってましたわね？」

「お前にしては珍しい……………というか、おかしい」

「へえ、そりゃ何かあったってことよね？」

「な、何も無いって!?! もう、ほ、僕だってそついつ時ぐらいあるよ!?!」

「やっぱり、畳よりもフローリングだって。床暖房あるし」  
「ッ!?!?」

「この縦4文字……ああ、『いわはだ』かあつ!?!」  
「ッ!?!?!!?」

「あーっ、このキスフライ美味しい」  
「ッ!?!?!!?」

周りから聞こえる言葉に、あっさりと反応するシャルロット。見れば、顔が真っ赤になっている。

「あゝ、皆集まってるっ! かんちゃんもいるっ!」  
「のほほんとした声が出したと思うや、簪に何かを抱きつく。」

「ほ、本音……重い……どいて」  
「えっっ! 私、重くないよあゝ!?!」

「あなた、最近増えてるわよ?」  
「うそおっ!?!」

「本当」  
「そんなあゝ……がつくり」

何とは言わないが、織羽の一言に本音はショックを受けて崩れ落ちた。

「まあ、それはさておき」

で、すぐに立ち直った。五人ぐらいガクツとなったが、付き合いの長い簪と織羽は慣れたもので、全然動じない。

「でゆっちー。昨日、大浴場に何で行ったの〜？」

「ッ!？」

布仏本音。その名と違って、神も仏もなくシャルロットを追い詰める。

「昨日って、何時ごろ？」

「たつちんと、かんちゃんの一部屋に行く前だよ？」

「確か簪が『魔法少女マジカルバンビーナ』を見てて……あれ？」

確か観終わってたぐらいでロビーにジューズ買いに行った時……織

斑君も大浴場に……」

瞬間、シャルロットはテーブルを蹴って逃亡を図った。が、その体が縫い付けられたように空中で停止する。

「……何処へ行く、シャルロット？」

「え……A I C……!？」

I S右腕部を部分展開させたラウラが、転校初日を彷彿とさせる冷氷の笑みを浮かべる。

尚、既に本音は撤退済みである。

「さて、どういう事か聞かせていただきますわよ……シャルロットさん？」

「あたし達が納得する説明……してくれるわよねえ？」

「セシリア……鈴……!？」

ハイライトの無い瞳で詰め寄る二人。

「……」

チラリと、織羽に視線を送る筈。

「……………」

コクリと頷く織羽。

学年別トーナメント終了日のあれこれがバレるのはマズイと、二人の意思は一つとなった。

シャルロットには、尊い犠牲となってもらおうと。

サイバンチヨ（織羽）「ではこれより、IS学園特別法廷を開廷します。弁護側、検察側準備宜しいですか？」

簪「え……………私……………！？ えっと……………か、完了……………してます？」

ラウラ「検察、準備できている」

セシリア「オルコットは完璧をもって、よしとしますわ」

鈴「狼の牙からは逃れられないわよ？」

シャルロット「検察側が凶悪過ぎるよ！？」

サイバンチヨ「では、被告人は有罪ということだ」

シャルロット「まさかの秒殺!？」

こうして、シャルロットは脱衣場での出来事を吐かされた上、セシリア達に根掘り葉掘り（主に一夏の肉体的な意味で）聞かれまくるのであった。

昼休み終了後、篝と鈴が千冬にキツキツお仕置きを喰らわされたのは余談である。

食堂が平和な時間を過ごしている頃、一夏はとある場所に來ていた。通り過ぎる生徒は皆、一年とも二年とも違うリボンの色であり、つまりここは三年の校舎だ。

そんな所にやって來た理由は一つ、生徒会役員 布仏虚である。

彼女は楯無と付き合いが長いようだから、きっと何かしら有益な情報を得られるだろうと踏んだのだ。

とはいえ、彼女は真面目で、聡明な印象があるのでストレートに聞いても答えてはくれないだろう。

『ということ、一夏。宜しく頼んだよ?』

『何故そうなる?』

『いや、虚先輩って……何か、ちょっとダメっぽい男子とかに弱そうな感じだし。』この人、自分がいないとダメなんから』的『な』

『なあ、俺は怒っていいんだよな?』

『ダメに決まってるじゃない』

『ぶっざけんなっ!!』

なんてやっている、廊下を目的の人物が歩いて來た。

「あら、織斑君?」

「どうも、こんにちは虚先輩。どちらに行かれるんですか?」

「生徒会室よ。色々整理しないといけない仕事があるのよ。織斑君はどうして三年の校舎に？」

「虚先輩に少し聞きたいことがあって、大丈夫ですか？」

「うーん……あんまり時間ないけど……それでいいなら」

少し考える素振りを見せて、虚は頷いた。

虚と共に生徒会室にやって来ると、デスクの上は見事に書類の山であつた。

「これ……何ですか？」

「必要なくなつた書類よ。これをこっちの箱に入れて運ぶんだけど

……流石に力仕事だからねえ……」

「じゃあ、俺も手伝いますよ。事務作業は無理ですけど、力仕事なら行けますし」

と、虚は溜め息。紙は荷物の中でも最も重くなる物だ。それを女子一人でやらせる気は一夏にはなく、そう申し入れた。

「そう？　ありがとう、助かるわ。じゃあ、この箱を階下端の……」

「お疲れ様。おかげで早く終わったわ」

「生徒会っていうと、もつと書類整理ばかりだと思ってましたけど……力仕事もあるんですねえ」

紙の詰まった箱を持って歩いて数往復。なかなかどうして、地味に腕に力が入らない。

「うふふ。そうね、普通は事務作業の方が多いわよ」

ソファアに座る一夏に、虚がお茶を出してくれた。先日は飲めなかったが、一口ただけでその入れ方の旨さが伝わってきた。

「……ところで、私に聞きたいことって何かしら？」

虚は、一夏にランチボックスを差し出しながら、用件を尋ねた。

ランチボックスの中身はサンドイッチで、以前のセリシアの悪夢を彷彿とさせたが、それとは違って見事なものであった。

「実は、楯無先輩の事なんですけど……」

「会長の事？」

「もう国家代表になってたり、滅茶苦茶強くて……まあ、性格的な部分が色々思う所があったりするんですけど……」

「……」

一夏の言葉に虚は苦笑していた。

「生徒会長としては、どうなのかなって思っただけ。虚先輩から見た楯無先輩はどんなですか？」

「そうね……普段はちゃんと仕事してくれるんだけど……」  
虚は遠い瞳で、窓の外を見やった。

ある日の生徒会室の光景。

学年別トーナメントに仕様変更之際して、書類作成に勤しむ面々（一名除く）

「虚ちゃん」

「何ですか、会長？」

「決め台詞って大事だと思わない？」

「また唐突ですね？ そんな事はないと思いますよ？」

「いいえ、すごく大事よ！ それの有るか無いかで人気が変わるって、北海道の友人が言ってたもの！」

「ああ、背が低くて胸がなくて、まるで童話みたいな名前の生徒会長さんですか？」

「一存ですんじゃうのは、凄く良いなあ」

「ということ、幾つか候補があるの。聞いてくれる？」

「ほい」

「分かりましたから、仕事をしてください」

「……え？ 何ですか、その唐突な流れ？」

「これが何時もの事なのよ」

「”風穴開けるわよ！？”ってどう？」

「会長は武偵にでもなるつもりですか？」

「どっちかというと、デュパン四世の方が近いかも？」

「むう、じゃあ……………」妹を、守り続けて四百年！」  
「守って精々十五年ですね」  
「それはたっちゃんの方がしっくりくるかも？」  
「これもダメ？ じゃあ……………」お前はもう死んでいる」  
「殺さないでください」  
「声が渋くない」

「」お前のISは天を突くISだ”！」  
「天元でも突破する気ですか？」  
「八話ぐらいで死亡するフラグだ」

「」簪ちゃんのことかああああつ！」  
「か、かんちゃんが死んじやつてるっ！？」  
「会長。それは”決め台詞”ではなく”キレ台詞”です」

「もう、決め台詞って難しいわねえ。ちよっと、修行の旅に出るわ」  
「……………会長？」  
「何、虚ちゃ……………ヒツ!？」

「シゴト、シテクダサイ？」

「……………はい」

「『……………』」

「もうちょっと、普通に仕事してくれたら助かるんですけど…………どうにも面白い事とか浮かぶとそっちに流れやすくて…………あら、どうしました？」

「…………いえ、何でも」

小首を傾げる虚に、一夏は小さく首を振るので精一杯だった。

この生徒会で一番怖いのは、間違いなくこの人だ。

それが分かったただけでも収穫であった　　そう思いたい。思わせて欲しい。

それと、北海道の高校にもあんなフリーダムな会長が居るのかと思うと、その生徒会のことがちよっと心配になったりしたが、きっと下が支えているんだろうなと思った。

ともあれ、多少なりとも楯無の情報が得られたので、一夏は虚にサ  
ンドイッチとお茶の礼を言って、生徒会室を出た。

その際、虚がその背に声を掛けた。

「さつきは色々言っただけど……会長は悪い人ではないから」

「ええ、それは分かっています」

「ただちよつと……悪戯が好きで困った性格をしているだけなの」

「……ええ、それも分かっています」

「油断すると、あっという間に人をオモチャにするから……気を付  
けてね？ 胃薬とか、言ってくれればすぐに手配するから」

「……その時はお願いします」

その前に何とかして欲しいもののだが、きっとそれは無理なんだ  
ろうなど、一夏はあきらめ気味に答えたのだった。

第38話      L u n c h   T i m e s   G i r l s   T a l k (後書き)

昼休みだけで1話とかw

特訓の話は次回に持ち越しです。

シャルロットもだんだん、いじられるキャラになってきたなあ……。

第39話 特訓、更識ブーツキャンプ！（前書き）

やっと入る訓練回。

シャルに続いて、彼女もちょっと壊れ始めたよつな気もする39話では、どうぞ。

### 第39話 特訓、更識ブートキャンプ！

「さて、今日から本格的に訓練を開始するわけだけど……何か視線が多い気がするわね？」

放課後のアリーナにて、いよいよ楯無の訓練が始まる。だがしかし、同じようにアリーナに居る面々の視線がどうにも強い。

具体的に言くと、鈴、セシリア、ラウラの視線がもの凄く強く、逆に箒とシャルロットの視線はとても弱かったりする。

唯一、織羽だけは違った反応を見せ、視線が合うと何故か苦笑いした。

はて、これはどういう事なのだろうか、一夏は首を傾げた。

「なあ、セシリア？」

「っ！？ ひゃいつ！？」

「……………」

何故か声を掛けただけで、珍妙な声を上げられた。しかも、セシリアの顔はどうしてか赤くなっている。

「えっと……鈴？」

「にゃっ！？ にゃによっ！？」

「……………」

こっちは噛んだ上に猫みたいになっている。やっぱり顔は赤い。

「えっと……ラウ」

「っ……………！！」

「ら……………」

こっちは珍妙な声もなければ、噛みもしなかった。ただその代わりに、もの凄い力の籠った瞳で睨まれた。ただ、やっぱり顔は赤い。

さて、アリーナに来ているという事は当然、一夏もISスーツを着ている。

ISスーツはその特性上、”素肌に直接身につける物”だ。

「……………」

鈴達は、今まで全くと言っていい程に意識しなかったのだが、昼休みの一件のせいで、思いつ切り一夏の体を凝視してしまっていた。

(今さらですけど…………あのスーツの下には何も付けていませんのよね…………っ、つつつまり…………!?)

(て事は、あそこには…………いちちちちちかののの……………生がっ!?)

(駄目だ見るな想像するな考えるな…………ああ…………駄目だというのにどうしてそつちにはばかり思考が傾いていくのだっ!?)

今まで一切意識していなかった一夏のISスーツの姿であったが、事此処に至って途方も無いリアリティを發揮していた。

シャルロットが食堂で口を割らされた、ネイキッド一夏の詳細過ぎる説明。

というか、気を失ったくせに見ていた所は完全に記憶している辺り恐ろしい話である。

目の前にある一夏の体の見えない部分を、シャルロットの言葉が補完し、三人の瞳には織斑〃フル・フロンタル〃一夏がボンヤリとだが姿を現そうとしていた。

そんなタイミングで声を掛けられれば、奇妙珍妙な反応をとっても可笑しくはない。

「お前ら、どうかしたのか？ ていうか、俺に何かあるのか？」

「……っ！？」

言うや、三人がビキツと固まった。もう、輪郭とかガチガチに直線だけで書いてんじゃない？ とか思うぐらいのガチガチ具合だ。

「……おい」

「何でもありませんわっ！！」「何でもないわよっ！！」「何もあ  
るわけがなかるうっ！！」

顔を真赤にして、同時に叫ぶ三人。鼻息は荒く、とても残念美人状  
態だ。

「……」

「……もう、ほっとこう？ きつと夏の太陽にでもやられちゃった  
んだよ」

『どうにもこう……腰の辺りが落ち着かないんだけどなあ……？』

この三人は放っておくとして、一夏は楯無と共にアリーナスタージ  
に降りた。

ちなみに、シャルロットの説明を聞いていたのは何時もの面子だけ  
ではない事を、ここに記しておきたい。

未だ腰回りに異様な気配を感じつつ、一夏はISを起動させる。量子変換された白式が、一夏の身を包み込む。

「さて……まずはこれからやる事の説明をするわね」

「はい！」

一夏は気合の入った返事を返す。それを聞いて、楯無は少しばかり嬉しそうに笑った。

強い意志に光る瞳は、未来を掴み取る為の輝き。こういう目をした人間はとても強いと、楯無は知っていた。

「一夏くんは……自分が歪だっけ事は理解しているかしら？」

「歪……ですか？」

「そう。IS戦闘の経験に比べて、基礎的な技術が殆ど出来ていない。普通ならその逆なのにね」

「……なるほど」

確かに、一夏はその始まりからして歪である。

入試会場でのIS起動から始まり、入学してすぐのセシリアとの決闘。そして鈴との戦いに無人機 ゴーレム との死闘。次はラウラとVTシステムとの激突。

臨海学校では銀の福音シルバリオ・ゴスベルと戦い、一度は敗れるも、二次移行した白式・裏白式と共に再戦。覚醒した 月華白雪 で、これを撃破した。

思い返せば、他の候補生に比べて遙かに基礎の劣る自分が、これだけの戦いを生き残ってこれたのは、以前に楯無が言ったように運が良かったというのが正しい気がしてきた。

「経験は充分。だからこそ、ここからは基礎を固めるべき」  
「……………」  
剣道を学んでいた一夏には、基礎の大事さが良く分かっていた。基礎とは全ての始まりであり、全てを支えるものだ。一夏には、圧倒的に基礎が足りていない。  
剣道に喩えるならば、剣の握りから振り方、体の運びまであらゆる事を知らないというのと同じである。

「……………という事で、まずは白式のオートPICをカットしましょっか」

「え…………？」

「ほらほら、早くっ」

急かされるまま、一夏は白式のPICの設定をいじる。

「よし、それじゃあ……………あの的を荷電粒子砲で撃ってみよう」

「……………は??？」

「ほらほら、早くするっ」

「……………」

春斗は何となく、楯無のしようとしている事が分かったので、敢えて黙った。

「……………雪羅、カノンモード」

一夏は雪羅をカノンモードに切り替え、100メートル程先の標的をしっかりと狙う。

楯無はその間、一夏の後ろにいる生徒を手振りで避難させていた。

一夏の射撃能力はとても低い。第二形態になった事で射撃管制プログラムも発現しているのだが、しかしそれでも命中率は低い。

低いと言っても、こうしてじっくり狙いを付ければ当たらない訳ではない。ただ、実戦こんなに時間を掛けられる筈もなく、結局の所、

射撃センスが無いという事なのだ。

「行きますっ！」

気合を入れて、荷電粒子砲を発射した。

「生きてる？」

「……今日ほど、生の実感を味わったことはありませんね」

見事に壁にめり込んだ一夏は、自分を見上げる楯無にそう答えた。

通常、P I Cはオート設定されており、自動で機体を制御しており、それは射撃武装の反動相殺にも当て嵌っている。

しかし今、白式はそれをカットしている。つまり、一夏自身が制御しなければならぬのだ。

それを見事に忘れていた一夏は、発射と同時に後に飛ばされ、壁の一部と化したのだった。

「さて、痛い目にあつたところで……これからやるのは、P I C のマニュアル制御、その為の訓練よ」

「それって、基礎でしたっけ？」

「これも基礎よ。ただ、高度なレベルになると難しいだけ。でも、代表候補生クラスなら、誰でもやれることだもの」

「……で、まずは何をすれば？」

「まずは、マニュアル制御に慣れる事からね」

楯無はISを起動させると、一夏の手を掴んだ。

「一夏くん、アイススケートの経験は？」

「いや、無いですね」

「マニュアル制御技術の一つ『流動射撃制御』シューター・フロは、良くそれに例えられるのよ」

「シューター・フロって……射撃型のスタイルですよね？」

「ええ。でも、一夏くんとしては覚えておくべき技術でもあるわ。

まあ、それは追々として……今は機体制御だけに集中しなさい」

「はい」

楯無は一夏の手を掴んだまま、ミステリアス・レイディを加速させていく。

P I C の基本機能、慣性制御。

楯無によってステージの壁沿いを飛んでいく白式。加速していく機

体にかかるGを、一夏は必死に制御する。

「くっ……!!」

「ほらほら、もっとちゃんと意識を集中させなさい」

「ぬう……!!」

楯無に引つ張られるだけから、白式もスラスタを起動させ、その制御は更に難しくなっていく。

必死に意識を集中させる一夏。徐々にだが、マニュアルの制御のコツを掴み始める。

「……じゃあ手を離すから、ここから自分の出来る最高速度での制御に挑戦しなさい」

「……はいっ!!」

楯無は一夏の手を離し、白式はそのまま壁際スレスレを飛ぶ。

ガリツと、わずかに腕の装甲が触れ、バランスが崩れそうになる。

「っ……!!」

ギリツ、と歯を食いしばって耐える。

マニュアル制御は難しいが、覚えればそれだけ微細な機体コントロールを可能とする。

それだけで、自分は更に強くなれる。

『一夏、まだこれ以上は無理……!!』

「まだ……まだ……っ!!」

今以上の速度での、直線の加速状態から円状制御機動サークルロンドによる遠心力制御への切り替えは、今の一夏には無理だと春斗は止める。

が、一夏は更に加速する。今の速度は白式の最高速の半分程度だ。この程度の制御で躓いていたら、先になんて進めやしない。

「ぐうっうっうっうっ……っ!!」

遠心力に引き摺られ、スラスタ翼が壁を掠める。それでもギリギリで制御し切り、再び直線機動。

「もつと、もつと速く……っ！」

一夏は更に速度を上げて、コーナーに飛び込んだ。

『一夏ッ！』

「っ ……！？」

全身に走る衝撃。マニュアル制御をミスして、壁に激突したのだ。しかもそのまま壁に沿って飛び続け、スラスターとの接地面から火花が散り続ける。

『一夏、減速して態勢を立て直して……！』

「こなくそおっ……！」

『ちよっ……！？ 無茶苦茶だよ！？』

気合と根性だけで、その状態のままコーナーを回り切る。と、そこまです。まです。

「はい、ストップ！」

「……………」

楯無の声に、一夏は速度を落とす。そしてゆっくりと彼女の前まで行った。

「どうやら、今の速度が制御の限界みたいね？」

「……………そうですね。でも、次は成功させます」

「チツチツチ、甘いわよ」

そう言い切る一夏に、楯無は立てた指を振ってみせた。

「今のはあくまでも、機体の制御だけを意識していたから出来た事よ。今の速度でのコントロールを、戦闘時でも出来る？」

「うっ……………」

「今はまだ、あれでも良いのよ。頂を目指すにも、まずは自分の足元を見ておかないとね」

「……………はい」

「じゃあ、次はお手本を見てみましょうか。えっと……………シャルロットちゃんとセシリアちゃん、ちよっと来てくれるかしら？」

楯無は、ISを展開させたままピットに居た二人を呼んだ。

「……何で二人の名前知ってたんだ？」

『僕らの関係者だからじゃない？』

「ああ、なるほど」

素朴な疑問に答えを得ると同時に、呼ばれた二人が楯無の前に降り立つ。

「何の用ですか？」

「二人に『シユーター・フロー』で円状制御機動をやって見せて欲しいの」

「でも、それは射撃型の戦闘動作ですよ？」

「やるのは良いですが……お役に立つんですか？」

セシリアは出来る限り一夏を見ないようにして、楯無に尋ねる。が、ハイパーセンサーの機能のせいで否応無く、一夏が見えてしまう。

「立つわよ。だって白式にも射撃武装が追加されてるんだし……まあ、それだけじゃないんだけどね？」

「どういう事ですか？」

シャルロットも、どうにも気まずそうに、一夏から視線を逸らしている。

『一体、何なんだ？』

『シャルはまあ……昨日の事もあるから分かるんだけど……』  
考えても出ない疑問に首をひねる二人であった。

「射撃で重要なのは、弾幕　つまり、面での制圧力で相手を近寄らせない事。でも大出力の荷電粒子砲は連射ができない……どちらかと言えば、狙撃銃に近い。つまりは一点突破の破壊力。でも、一夏くんの射撃センスは……可哀想な訳で。とても射撃戦は出来ない」

「……悪かったですね」

自覚している事だが、人に言われるとちよつとムカつく。

「でも、威力は捨てがたい……だから、ここは」

「あえて、近距離から撃ち込む」

いつの間にか来ていたラウラが、楯無の言葉に続ける。

「その通り。流石ね、ラウラちゃん」

楯無はバツと扇子を開く。そこには達筆で『大正解』の文字。

「という事で、ふたりともお願いね？」

「分かりました」

「まあ、一夏さんのためですし……」

セシリアとシャルロットはアリーナの中央へと向かった。

「……………」

一夏は真剣な面持ちで二人を見る。これから行われる二人の機動の全てを見逃さないように。

「……………」

そんな一夏の真剣な横顔を、ラウラはジツと見ていた。

(真剣な表情の一夏……うむ、良いものだな)

白い肌がほんのりと朱に染まり、そしてその視線は自然と下へと。

「ッ……………!」

といったところで、ブンブンと頭を振った。ラウラの煩惱は思いの外、根深いようだ。

それはさておき、二人は早速、円状制御機動を開始した。サークルロンド

二機のISはアリーナの壁を背にして互いに向き合い、それぞれ右方向に動き出すと互いに銃口を向け合い、徐々にその速度を上げていく。

ある程度の速度に達すると、互いにトリガーを引く。互いに向かつて飛び来る弾丸を不規則な加速で回避し、しかし速度は落とさない。

『流石だね、セシリア……っ』

『シャルロットさんこそ……第二世代機とは思えない機動ですわ』

そんなやり取りを交えつつ、更に銃を撃ち合い、加速していく二人

『これは……凄いね』

『ああ……どっちもな』

一夏も春斗もその機動に目を見張った。

二人がやっているのは射撃と機動コントロールの両立。

PICをマニュアルにしている為、常に掛かるGとのバランスと、射撃による反動の相殺。それに加えて攻撃回避の加速と、それに合わせての対Gバランスの修正。

それらを照準を狙いすました状態で行っているのだ。常に冷静で感情を揺らさず、同時に二つ以上の思考を留めること無く行い続ける。今の自分にそれがとても難しい事であることは、一夏もよく分かる。だが、この機動をものに出来ればもっと自由自在に 例えば狭い空間などでの戦闘もあるだろう、そういった時に堅実な戦いが出るようになるだろう。

「どつやら、あの凄さが分かるみたいね。あれは、完全に機体を自分のものとしていないと出来ない事なのよ」

「……………」

「君にはああいった、高度なマニュアル制御の技術が必要なのよ。わ・か・る？」

すすつと、楯無は一夏の後ろに回って、その背中に指を伝わせる。

「うはあっ!?!?」

集中し過ぎて不意を突かれた一夏が、素っ頓狂な声を上げる。

『『っ　　！？』』

その声に一瞬、意識を取られた二人が互いの撃った攻撃に当たる。

「キヤアアアアッ!?」

「わあああああっ!?」

マニュアル制御のバランスを崩して、二人はアリーナの壁目掛けて落ちていった。

ズズウウウウウウン……ッ。

「『あ……』」

「あ……」

「……死んだか？」

もうもうと上がる土煙に一夏と春斗は啞然とし、楯無は【鬼乃霍乱】と書かれた扇子を広げ、ラウラはポツリと呟いた。

瞬間、ボオンツ！ と砂煙が上がったかと思うと、墜落したばかりの二人が瞬間加速で突進してきた。

「一夏さあああんっ!!」

「何やってるのおおおおっ!!」

「どわあああああっ!?」

「一夏くんブロック!!」

「楯無先輩!?」

『最低だ、この人っ!?』』

楯無は一夏の背に隠れ、ラウラは巻き込まれないようにと、「コソ」  
ソと逃げた。

「どういうつもりですか、一夏さん!？」

「僕達が真面目にお手本を見せてるのに、会長と遊んでるなんて!？」

「いや、遊んでないぞ!？」

「遊んでる!！」

「うっ……!？」

凄まじい圧力に、一夏は次の言葉を詰まらせる。

「春斗さんっ!」

『は、はいっ!?!』

「双子とはいえ、兄である貴方が一夏さんを注意されないでどうするんです!?!」

『えっ、僕まで怒られるの!?!』

「当然だよ! 僕の事を無視して、こんなポツと出な年上キャラとイチャつくとか、どういう事なの!?! 胸なの!?! やっぱ巨乳がいいの!?! 僕だって春斗がその気になってくれれば、半年でGぐらい行くんだからね!?!」

『何を言ってる!?! 何を口走ってる!?! 何を考えているんだいシャルさんや!?!』

「一夏さん! そもそも、私に言うてくだされば、24時間365

日、一秒たりとも離れること無く、御教しますものを!！」

「いや、そこまでは……」

「春斗が言ってくれれば、50、80喜んでだよ!?!」

『言ってる意味が分からないよ!?!』



「 さて、小休止もしたところで」

「 」「 」「 何処がですか！？」」「 」「 」「

息も絶え絶えになった一夏達が叫ぶ。正直、休んでいたのは楯無だけである。

「 今度は、裏白式の方でやってくれるかしら？」

『 裏白式ですか？ まあ、良いですけど………』

春斗は一夏と入れ代わり、裏白式が起動する。

「 じゃあ、さつきみたく壁面に沿って飛んでくれるかしら？」

「 分かりました」

春斗は早速、裏白式を浮かせる。二機の大型スラスタ―翼が開き、飛行を開始する。

直線で一気に加速すると、その速度を維持したまま、制御用スラスターを動かしてカーブを危なげなく曲がる。

再度の直線。そこで一気に、一夏のミスした以上の速度まで加速した。

『おい、春斗!?!』

「大丈夫だよ、このぐらいは」

速度を落とさないまま、春斗はコーナーに入る。全身に掛かるGをマニュアル制御で完全に制圧し、そのまま一気に抜けていく。

『なっ……!?!』

自分よりも起動時間で劣る筈の春斗が、自分よりもマニュアル制御をコントロールし切っている事に驚きの声を上げた。

「これは驚いたわね……マニュアル制御、完璧じゃない?」

流石の楯無も、予想外の結果に驚きを隠せないでいた。

「裏白式のPICの基本設定は、最初からマニュアルになってるんです。一度、オートにした事があったんですけど……こう、体が重くなる感じがして気持ち悪くて……で、ずっとマニュアルで」

『そ、そうだったのか……』

春斗がオートモードの反応を嫌った本当の理由は、春斗と裏白式の関係そのものに原因があった。

本人すら知らない事だが、春斗はコアの深層意識と融合しつつづけていた。その結果、ISそのものの起動時間が短くても、コアとの相性は世界中のどれよりも高くなっている。

そして、それがISそのものとの一体感をより強固なものとし、マニュアル制御の反応をオートモードの反応よりも遙かに早く、細かく、正確なものへと変えていた。

『マニュアル制御は機体を自分の物にしなれば出来ない』と、楯無は言った。

春斗は機体を自分の物どころか、自分自身と相違無いレベルでものにしているのだ。

そしてその事をISが理解し、マニュアルモードをデフォルトとして設定したのだった。

「……まあ、それならそれで手間が省けるわね。じゃあ、裏白式には別メニューをやりましょ？」

楯無は自分の立てたプランを修正しつつ、パシんツ、と扇子を打った。

「別メニュー？」

楯無の笑顔に嫌な予感を感じながら、春斗は首を傾げた。

「そつよ。おねーさんと、素敵なダンスのじ・か・ん」

「うわ~~~~い……い」

嫌な予感の中である。

アリーナ上空を舞う、二機のIS                    ミステリアス・レイディと、  
裏白式。

楯無の操るミステリアス・レイディが、裏白式の繰り出す多角射撃を掻い潜り、接近する。

「ほらほら、また接近された！ 一手先三手先よりもっと先、四も五手先までを読みなさい！」

「くっ………！」  
ばん、と楯無が裏白式にタッチする。と、そのまま離れていく。

「君に足りないのはとにかく経験っ！ 射撃型が接近されたら、その時点で終わりなんだからね!？」

「分かってますけど……くそ、これならっ！」

春斗は月之雫を切り離し、オールレンジ射撃を行う。それに対して楯無も回避行動を取りながら、アクア・クリスタルから 氷雨の弾丸<sup>ツット</sup>を発射して反撃。そのまま、接近を試みる。

しかし、春斗はその行動を予測して、先置き射撃で牽制。行く手を遮るように、光線が飛んだ。

「おっと」

「そこっ！」

楯無が動きを止めた瞬間を狙って、月影が一矢を放つ。蒼白の光刃が蒼空を切り裂く。

「甘いわよ」

楯無はその一撃を身を一捻りするだけで回避し、同時に蒼流旋のガ

トリングが火を噴く。

「っ……………!?!」

連射される弾丸が、裏白式のシールドを削る。更に、ヘイル・バレットが同時攻撃を仕掛ける。

春斗はすぐに回避。その弾雨をギリギリで躲す。

「逃がさないわよ」

「でしようね!」

右腕の多機能戦闘腕タクティクス・アーム・晨月を双月に切り替え、牽制射撃。接近を計る楯無を牽制する。

同時に切り離していた月之雫ムーン・ティアーズを戻して、弾幕を展開する。

「これなら……………どうだっ!!」

晨月を切り替え、月影を引いて追尾矢を放つ。

「なかなか良い攻撃ね。でも、まだまだよ」

蒼流旋を構成する水の槍を、螺旋回転。自分に向かってくる矢を払い落とす。

「なっ……………!?!」

「自動追尾って事は、どんな軌道を描いても結局は終点は一緒って事よ」

「だからって……………非常識な!」

「非常識まんまの君に言われたくはないわよ」

アクア・クリスタルのヴェールで身を守り、自在に舞う姿はさながら天空の人魚マーメイド。

「ほい。これで撃墜よ」

イグニッションブースト  
瞬時加速から一気に距離を詰めて春斗にタッチし、楯無は宣言した。

二人がやっていたのは、相手を接近させない為の模擬戦闘訓練。

春斗は如何にして楯無の接近を防いで攻撃を当てるか。楯無は射撃

武装のみの攻撃で、接近したら攻撃代わりに機体に触れる。こうして規定数を触れられた時点で、模擬戦は終了。春斗は撃墜となった。

ピットに降りた二人は早速、今の戦闘を振り返りつつ、反省会である。

「射撃パターンはどれくらい考えている？」

「相手の動きに合わせて大体……20くらいですかね？」

「少ないわね。その倍は無いと。相手によっては防御力に任せて強引な突撃をしてくるのだっているわよ？ ……白式みたいに」

「……………」  
そう言われると、裏白式と白式はかなり極端な相性である。多角射撃と追尾、弾幕射撃の出来る裏白式と、エネルギー相殺武装を有し、接近戦で無類の強さを発揮する白式。

しかも、お互いの切り札はどちらも”エネルギー無効化攻撃”。

現状は 裏白式不利、であろうか。

「裏白式はフィジカル面が圧倒的に弱いからね。距離を常にキープ出来るように、パターンを増やしなさい」  
「分かりました」

「じゃあ、今度は白式で戦闘訓練ね」

『え、っ…………！？ マニユアル制御訓練の筈じゃあ…………？』

「確かにそれが重要とは言ったけど……やらないなんて言ったかしら?」

『ぐっ……!』

確かに言っていないので、一夏は黙ってしまっ。

「じゃ早速、準備に入りましょう」

『うわぁ……ノリノリだよ』

「うわぁあああつ!? たぁ!? どあつ!」

四方八方から襲いくる弾雨に、一夏の悲鳴が木霊する。

必死に機体をコントロールして、それを回避。目標であるバルーンを一機破壊する。

『残り7つ』

「くっそおっつ、セシリアシャルロットも手加減しろよな!」

今行われているのは、セシリア、とシャルロットから来る弾幕を回避しつつ、10機のバルーンを破壊するというもの。

白式は勿論マニュアル制御。常に意識を集中させていなければならぬ。

セシリアの攻撃はシールドモードで防げるが、シャルロットの攻撃はそうは行かない。

防げるといつても、エネルギーを喰らうシールドは多用すれば、それだけ撃墜に近付いてく。

つまり、どれだけ回避できるかが重要になる。

「ぐあああああっ!?!」

シャルロットのライフル弾が白式を捕らえ、一夏は地面に落とされる。

「ほらほら、早く立ち上がりなさい。まだ7つも残ってるわよ。二人も、もつとガンガンやりなさい。情け容赦は一切無用、日頃の鬱憤、纏めてぶつけてやりなさい」

「『とんでもない煽り方してるし!?!』」

「日頃の……」

「鬱憤……」

二人はふと、考える素振りを見せる。

今がチャンスだと、一夏は姑息にもイグニッションブースト瞬時加速で一気にバルーンに接近。が、その背中を閃光が撃ち抜いた。

「ぐわああああっ!?!」

撃つたのはセシリア。落ちた一夏にさらに追撃を仕掛ける。

「一夏さん、何時も何時も何時も色んな方とばかり……! 私がいかにこれほどに……!」

「……?」

「その『意味が分からないよ?』的な顔が……可愛さ余って憎さ百倍ですわあああああっ!?!」

「のわああああああっ!?!」

逃げる白式。襲うライフルと、ブルー・ティアーズ。その行く先を塞ぐように、マシンガンの弾幕が襲う。

「臨海学校の恨みいいいいいいっ!?!」

「ここでそれを持ち出しやがりますか!?!」

ズドドドッ！！ チュドーンッ！！ バラバラララッ！！

後に、鳳鈴音は嬉しそうな苦笑いで語った。

「二人がさ、泣くのよね……あの時の事を夢に見るって。いや、あたしはもう慰めてやるしか出来ないし……まあ、ちょっと役得っていうか……昔から、そういうのはあたしの役目だし」と。

逃げ惑うこと12分。

黒焦げのクレーターの中心部に、こんがりと焼けた男子高校生が一人あったと。

楯無はぼん、と手を打った。

「これにて、訓練一日目終了。明日も頑張りましょうね」  
「『死ぬわ、本気で！？』」

まだまだ、二人の戦いの日々は終わらない。

第39話 特訓、更識ブートキャンプ！（後書き）

シューター・フローって、いまいち表現が難しい……。流動射撃制  
御は完全に捏造ですw

まあ、大体こんなもんだということですね。

楯無さん、鬼ですねw

**S i d e 鳳鈴音【夢よりも現実を】（前書き）**

セカン党の皆様、お待たせしましたw  
誰もがすっかり忘れていたであろう、鈴メイン回。

40話の大台前に、どうぞ。

## Side 鳳鈴音【夢よりも現実を】

嵐のような特訓は、三日目に突入していた。放課後の第三アリーナにて、今日も一夏のマニュアル制御訓練である。

「ほら、スピードが落ちてるわよ。もっと集中してっ！」

「はいっ！」

制御に意識が傾きすぎたせいで、落ちてしまった速度を戻しつつ、一夏は集中し直す。

アリーナ・ステージの中心にはバルーンが設置されており、それを中心にして、一夏は円状制御飛翔サークルロンドを行っていた。

左腕の雪羅はカノンモードで固定。チャージ終了まで20秒。

円軌道からのカノン発射。その反動制御は数度の繰り返しの末に何とか出来るようになった。少しずつだが、自分の技量の向上を感じて、一夏の気合は更に上がる。

遠心力を利用して、それを逆に制御する。

シャルロットから教えてもらった言葉を思い出しつつ、制御をさらに細かく。

「はい、そこから瞬時加速イグニッションブーストに行つて」

「えっ……！？」

思わぬ言葉に、一夏は声を上げた。機体制御と維持でいっぱいの状態イグニッションブーストで、瞬時加速など、両手で抱えて余る程だ。

しかし、楯無は容赦なく告げる。

「瞬時加速イグニッションブーストよ。シューター・フロアの円軌道から直線にシフト。相手の弾幕を掻い潜つて、ゼロ距離から粒子砲を撃ちなさい！」

「くっ……！」

一夏は瞬間加速の為のエネルギーをチャージする。

「ッ!?!」

直後にガクン、と機体が揺れて白式がコントロールを失う。壁に激突するギリギリで機体を持ち直し、そのまま瞬間加速に移行。

「うおおおおっ!」

砂塵を巻き上げて、バルーンに向かって一気に接近。荷電粒子砲を叩き込んだ。

「こら、ちゃんと瞬間加速をチャージしつつも、シューター・フロ  
ーを維持しないと」

「はい」

「じゃあ、もう一回行くわよ。今度はバランスを崩さないように」  
「お願いしますっ!」

再度バルーンを設置し、一夏は再び空へと上がった。

「一夏、今日も気合入ってるわね」

「ほらほら。余所見していると落としちゃうわよ?」

鈴が一夏に感心している隙を狙って、織羽が忍者刀 影断 を振る

う。

「おつと！ 当たらないわよ！」

「甘いわね。喰らいなさい、マキビシランチャーッ！」

ひよいと躲す鈴に向かって、腰部ユニットが稼働すると、そこから無数の刃が発射される。

「ちよっ！ マキビシの使い方じゃないでしょ、それ！？」

「忍者の技術は日進月歩。そんな場所はとっくの昔に通り過ぎたのよ……！」

「意味分かんないわよっ！？」

シールドに激突する無数の弾雨。ガリガリと削られ減っていくエネルギー残量に、鈴の顔が強張る。

舞影は第三世代機の中で、決して性能の高い機体ではない。だが、それでもその戦闘力はラウラと共に、一年最強の双壁となっている。それを成しているのは、彼女自身の戦闘スキルの高さと、IS性能との相性である。

織羽の近接戦スキルの高さと、それを生かせるIS。それこそが、この変幻自在の強さを生み出している。

「てえええええいつ……！」

鈴は双天牙月を振るい、強引に突破を計る。防御力の高い甲龍の強みを活かして、パワー勝負に持ち込めば勝機はある。

その判断は正しい。だが、鈴は一つ見落としをしていた。

織羽は忍者刀を鞘に納め、鈴の攻撃を防ぐ。火花が散り、金属の打ち合う音が響き続ける。

「もらったあああああつ……！」

「ところがギッチョんッ……！」

双天牙月を鞘の先で弾き上げ、がら空きになった懐目掛けて、スラリと刃を抜く。

蒼白の光に包まれた　　龍魔の牙。シールドエネルギー変換機能による、一発限りのシールド無効化攻撃。

「しまっ」

「ハアアアアアッ!!」

振り抜いた刃が、甲龍のヘヴィー・イグニス装甲を切り裂いた。

「だああああっ！　負けたあッ！」

エネルギーが切れて落ちた鈴が、喚きながら頭を掻きむしる。

「ワッハッハッ！　これで、今晚のデザートはあたしの物だーっ  
！」

「くっそーっ!!」

寮の食堂で出されるスペシャルデザート、特製マンゴープリンは鈴から織羽の下へと移動したのだった。

「くう……ぬうう……っ!？」

「どうした、その程度か？」

「まだまだあ……!」

別の場所では、箒とラウラが激突していた。が、紅椿の性能を引き出せていない箒では、ラウラにはどうしても届かない。

実際、紅椿の高性能を支えるのは全身の展開装甲だ。そしてそれをフルで使用する為の絢爛舞踏である。

しかし、臨海学校以来箒は絢爛舞踏を全く使用できないでいた。そのせいで展開装甲を使えず、結局は二刀を振るい戦うだけのスタイ

ルになってしまっていた。

そんな状態で、ラウラに太刀打ち出来よう筈もなく、ワイヤーブレードがまた、紅椿を捉えた。

「ぐうっ……!!」

「この程度で音を上げるか!？」

「ふざけるな! このぐらいで参るものか……!!」

「その意気は良し……ならば、もはや問答無用!!」

ラウラは瞬間加速で一気に距離を詰め、ワイヤーブレードを戻すと同時にプラズマ手刀を構える。

「どうした、箒! 貴様の力はその程度か!？」

「何の……まだまだあっ!!」

二刀対二刃。火花散る攻防は続く。

「刮目しろ! これが我が太刀筋だっ!!」

「ならばっ! 奥義、プラズマ手刀稲妻重力落としっ!!」

ただ、その方向性は怪しい所に向かっていている様であった。

帰寮した鈴はシャワーを浴びて、濡れた髪も適当にタオルで拭き、冷蔵庫からジュースを取り出した。

プシュ、という音と共に炭酸が噴き出す。

「おつとつと……」

「鈴、そんな格好していると風邪ひくよ？」

そんな格好とは、タオルを巻いただけの格好である。凹凸が非常に少なく、空気抵抗も水の抵抗も無い素晴らしいフラットボディである。

「んぐつんぐつ………ぶはあっ！ 大丈夫よ、あたしって体は丈夫に出来てるんだから」

「……まあ、いいけどね」

同居人であるティナ・ハミルトンはそれ以上言うのを諦めたのか、手元の雑誌に視線を戻した。

「ん………？」

鈴は少しばかり、喉に違和感を感じた。炭酸のせいだろうかと首を傾げる。

髪を乾かし終えた鈴は、夕食に何を食べようかと食堂へと向かった。

「待っていたわよ、凰！ さあ、マンゴープリンを私に捧げなさい！！」

「……さあて、何食べようかなあ〜」

「見ないフリなんてさせないわよ？」

「分かったから、その荒縄をしまいなさいよっ！！」

「だが断る」

「断らないでよっ！！」

縛り纏めた荒縄片手にマジ顔する織羽に、鈴は戦慄した。

「さあさあ、マンゴープリンが待っているから急ぎなさい！」

と言って、織羽は鈴の首に腕を回して引っ張っていく。

「ちよっ、くつつかないでよ!？」

「……………あんた、何で顔赤いのよ？　ちよっと止めてよ、あたしそ  
つちのケは無いだからね!？」

「あたしだつて無いわよ!！」

とんだ言いがかりだと、鈴は憤慨した。だが、どうにも顔が熱い気がする。

鈴は夕食を控えめに済ませると、早めに床に就いたのだった。

「鈴が風邪引いた？」

「そうみたい。ティナが……………凰と同室の子なんだけど、教えてくれたのよ」

翌日、SHR前の一組教室。一夏達は、織羽から鈴が熱を出して今日は休む事を聞いた。

「それで、容態はどうなのだ？」

「うっん、聞いた話じゃ……………熱が酷くて、喉の腫れが酷くて、頭痛が酷いらしいけど……………」

「それ……………普通は重症と言うのではなくて?？」

「一応、薬飲んで寝てるから問題ないでしょ？　もしもの時はISの通信だつてあるんだし」

「まあ、そうですね……」

鈴の容態を心配して、一様に顔を曇らせる面々。と、そんなところで教室のドアが開いた。

「はい、SHRの時間ですから、席に着いて下さい。辰守さんも自分のクラスに帰って下さいね」

「は〜い。それじゃ、後でね……とつっ」

と言つて、織羽の姿がシュバツと消える。

「……………おお〜っ!!」「……………」

リアルで忍者が消えるのを目の当たりにして、クラス中から感嘆の声が上がった。

『それにしても……鈴ちゃんが風邪ねえ』

『大丈夫かな、あいつ?』

一夏は自然と、窓の外を見やった。

「じほつじほつ……あ……あ……まさか、風邪引くとかありえない……ゴホゴホツ、ゲホツ！」

鈴は額に冷却ジェルシートを貼って、ベッドで唸っていた。熱と頭痛で朦朧とする意識は、何故こうなったのかを必死に思考する。

（一昨日のアイスのせい？ それとも暑いからって裸で寝たせい？

それともエアコン付けっぱなしが原因？）

と、答えが出てても意味のない考えがグルグルと回る。ちなみに、エアコンはティナがタイマーを短くしているのでそれだけは無い。

「……はあ……もう、寝よ」

考えるのも疲れたと、鈴はもぞもぞと布団をかけ直した。

鈴は夢を見た。

夢の中の鈴は小学生で、隣を歩くのは一人の男子。

転校してから五日。彼への顔面パンチや、男子との大喧嘩。そういうドタバタを巻き起こしまくった拳句、仲良くなった少年

織斑一夏。

今日は土曜日なので学校は昼で終わり、二人は揃って帰宅の道を行く。

「へえ。じゃあ、あの中華料理屋って、鈴の家なのか」

「そうよ。うちのお父さんの料理、すごく美味しいんだから。あんたも食べに来なさいよ」

「そうだな……家からも近いし、今度行ってみるか」

「そうしなさい。そしてウチの売上に貢献しなさい」

鈴は満足そうにウンウンと頷き、一夏はボンと手を打った。

「そうだ。今日、俺んちに来ないか？」

「今までのドコにそんなフリがあつたのよっ!？」  
とはいうものの、一夏の家に興味がな訳ではなかつた。話を聞く限り、鈴の家の近所のようにだし、将来の上客候補としては行つておくべきだろう。

「まあ、良いわよ」

と、打算にまみれた思考の果て、鈴はそう答えた。

「ここが、一夏んち？ 結構綺麗なのね」

やって来たのは、鈴の家から数分ほどの距離にあるマンション。

近所も近所。鈴がここに越してきた最初に来た場所であつた。

「適当に掛けといてくれよ。飲み物出すからさ。あ、烏龍茶とかでいいか？」

「日本の烏龍茶には色々言いたい事があるんだけど……ま、それで良いわ。それより、お手洗いつて何処？」

「その廊下の突き当たり。脇が洗面所だから」

「オツケー」

鈴はランドセルをリビングに下ろすと、いそいそとトイレへと向かつた。

数分して、トイレのドアが開き鈴が出てくる。手を洗つべく、洗面所のドアを開けた。

「……………ん？」

「なっ……………!？」

そこには、しどとに濡れた髪を拭く一夏の姿があった。しかも、素っ裸でだ。鈴は思いつ切り、見てはならないものを見てしまい、固まってしまった。

「な……………な……………」

「不法侵入の上に覗くどころかガン見とは……………随分と大それた犯罪者だね？ 犯罪の低年齢化が問題になっているとは聞いたけど、まさか同じ年ぐらいの子がこんな事をするとは思わなかったよ」

「っ!？ な、何言ってるのよ!？ さっさと何か着なさいよ!！」

「っ！か、なんで裸なのよ!？」

「シャワー浴びてたからだけど？」

「あんだ、ままままさか……………そういうアレでソレで何な事が目的で

……………!？」

「……………？」

顔を真赤にして背を向けた鈴は、パニックになった頭でグルグルと思考を混乱させた。

「おい、鈴。どうしたんだ？」

騒ぎを聞きつけた一夏が、リビングからやって来た。

「いい一夏!!! 来るな寄るなケダモノ、ケダモノ、回し者っ!！」

「!」

「……………はあ？」

「……………あれ？」

何を言っているのか分からないという一夏の顔を見て、鈴はピタリと止まった。

どうして、洗面所で裸でいた一夏が、リビングの方から現れたのか。鈴は恐る恐る、洗面所に向き直った。

果たしてそこには、しっかりと服　　パジャマを着た一夏と同じ  
顔をした少年がいた。

「あつ……おい春斗！　部屋にいないと思ったら、何やってんだよ  
！？」

「汗を掻いたから、シャワー浴びてた」

「あのなあ……この間、倒れたばかりだろ！？」

「もう復調してるから平気だよ。それより……誰？」

と、指差す先には固まったままの鈴。

「前に話したろ？　こいつが転校生の鈴だよ」

「ああ……一夏が顔殴られたっていう、あの」

「そういう紹介はしてない筈だぞ？」

「そうだったけ？」

肩をすくめる春斗に一夏は盛大に溜息を吐き、鈴に紹介した。

「こいつは春斗。俺達、双子なんだ」

「よろしく」

「……はあ」

凝固から復活した鈴の答えは、酷く気の抜けたものだった。もう、  
思考そのものが止まっていたのかも知れない。

「鈴は昼飯どうする？ 何なら食べていくか？」

「うーん、家で用意してくれてるだろうしなあ……って、ちょっと待って？」

「何だよ？」

「何でエプロンしてるのよ！？ しかも二人とも！？」  
リビングダイニングキッチンである為、二人の様子はリビングのソファ―に座る鈴から丸見えである。

一夏と春斗は揃ってエプロンを身に付けていた。

「おいおい、春斗。病み上がりは大人しくしてろよ？」

「一夏こそ、客をほっといて台所に立つ気か？」

「じゃあ、白髪ネギと水菜を切るのだけ頼む」

「分かった」

春斗はまな板を出すと、トントンとリズミカルに野菜を切る。その間に一夏は鍋を出し、その中にご飯と水を入れて火にかける。

「ほら、切り終わったよ」

「おう。それじゃ、向こうで待っていてくれ」

「手伝わなくて良いの？」

「火を見るぐらいしか、やること無いぞ？」

「分かった」

春斗は手を洗い、エプロンを外すとリビングのソファ―に腰を下ろ

した。

「……………」  
鈴は何となく、春斗を見ていた。その視線に気付きながらも、春斗は知らぬふりをして、テーブルの下からノートPCを引っ張り出した。

足元に伸びた延長コードにアダプターを差し込んで、起動させる。

「っ……………!?!」  
トントン、とアイコンを選択した音がすると、今度はもの凄い速さでキーボードを打つ。まるで指の数が倍に増えたかのように鈴の目に映った。

「……………」  
今度は一夏の方を見る。キッチンに立つ一夏は、吹きこぼれないよう鍋の様子を見つつ、冷蔵庫から何かを取り出す。それを容器に入れて、電子レンジに。

「ねえ、一夏?」

「何だ?」

「一夏って、何時も料理するの?」

「まあな。家事ぐらいやらないとさ……………一応、養われてる身なんですね」

「何それ……………」

「色々あるんだよ」

ピピッと電子レンジが音を鳴らし、一夏はそっちへと向かった。

「……………で、あなたは何をやってるの……………よ?」

ひよいと覗き込んだPCのモニターには、幾つものウィンドウが開かれており、膨大な量の文字と数字がそこに羅列していた。

「何、これ……………」

「第二世代型IS用量子変換プロトコルの基礎理論構築と、その派生に因る拡張領域格納プログラム」

「……………は?」

言ってる意味が分からない。というか、それは人語なのかとさえ思った。

チンプンカンプンな鈴に、春斗は「はぁ」と溜め息一つして、説明した。

「今、世界のIS開発は次の世代　第二世代機の開発に動いている。第一世代と違って、第二世代は後付武装の充実を目的としている。当然、量子変換プログラムは今迄よりも高レベルなものを必要とする。それを今、基礎部分から構築しているんだ。分かった？」

「……えっと、つまり……これはIS用のプログラムって事？」

「そういう事」

「　　って、ちょっと待ちなさいよ!?　あんた、一夏と双子ってことは同じ年でしょ!?　何で小学生が、ISのプログラムなんて作ってるのよ!？」

「何かおかしい？」

「おかしくない所が無いわよ!？」

「あゝ、そいつを普通と思わない方が良いぞ?　何せ、その歳でIS研究所に出入りしているからな」

「……なんつー非常識な」

鈴は心底呆れてしまった。春斗は構うこと無く、キーボードを打ち続け、一夏は料理を続ける。

(何かこう……落ち着かないわね)

一応客人なので何もしないのは良いのだが、腰が落ち着かないのだ。

鈴に出来るのは、一夏の淹れた烏龍茶を飲むことだけだった。

「よし、出来たぞ」

と、えらく長いように感じた待ち時間の末、一夏の料理が完成した。それは

「……………?」

鈴は、ふと鼻をくすぐった匂いに目を覚ました。

(この匂い……………どこかで……………)

うつすらと開いた瞳を、寮室備え付けのキッチンに向ける。

「ん？ 起きたのか、鈴？」

「……………一夏？」

「おう」

「……………一夏アっ!? 何でここにいるのよ!? ……あうっ」  
思いもよらぬ人物に、鈴は素っ頓狂な声を上げて跳ね起きる。が、すぐにグラッと頭が揺れて崩れ落ちた。

「おいおい。病人が無理すんなよ」

「うつさいわよ……………で、何でここに?」

「何だよ、幼馴染を心配するのに理由が要るのか?」

「というか、心配ぐらいさせて欲しいね。何時もされる側だしさ」

「一夏……………春斗……………こほっ、ありがと……………」

「うん」

「おう。ところで、食欲はあるか? 一応、粥作っただけけど……………  
食えるか?」

「お粥……………?」

時計を見れば、ちょうど昼休みの時間であった。一夏が片手鍋と椀を持ってくる。引き出したサイドテーブルにそれを置き、蓋を開けると、甘く優しいミルクの香りが蒸気と共に上がってきた。

「これ……………ミルク粥……………?」

「ああ。病気の時はこれが一番だぜ?」

「……………久しぶりね、これ」

一夏が鍋から椀によそつものを見ながら、鈴はポツリと呟いた。

(あんな夢を見たのも……………これのせいかな?)

三人が初めて出会った日。二人の家で初めて食べたのも、このミルク粥であった。

『うわっ、美味しい……!』  
『おい、春斗。パソコンやりながら食うなよ』  
『もう少しで終わるから……待って』  
『待ちません』  
『あっ……もう』  
『おかわりいただき』  
『遠慮しろよ、鈴!?!』  
『何ていうか……面白い子連れてきたね、一夏』

そんなやり取りがあつたことを思い出して、鈴はつい笑ってしまった。何故笑つたのか分からない一夏は、怪訝そうに首を傾げた。

「ねえ、一夏。食べさせてよ」

「何言つてんだよ、お前は?」

「何よ……あたし、病人なのよ?」

ぷう、と頬を膨らませる鈴に、一夏は肩を竦めた。

「偉そうな病人だな……」  
「つたく。ほら、口開けるよ」

スプーンで掬って、熱々のお粥を吐息で冷ましながら鈴の口に運ぶ。

「はふっ!……うん、やっぱり美味しい……」

ミルクの優しい味わいと、塩と胡椒のアクセントが蕩けるような甘みを生み出し、刻んだ水菜が歯応えを与え、食べ飽きさせない食感

を与えてくれる。

「そっか。そりゃ良かった」

一夏は購買で買ってきたサンドイッチを頬張る。流石に、自分の分まで作る材料も時間的余裕も無かったのだ。

「一夏、あーん」

「まだやらせる気がよ……」

「当然よ。あたしお腹空いてるんだから……ほら」

「全然答になってないよ、鈴ちゃん」

結局、一夏は自分もサンドイッチを食いつつ、最後の一口まで鈴に食べさせるという、非常に忙しい昼食となったのだった。

「熱も結構下がってるみたいだし、この分なら明日には治りそうだな」

「当たり前よ。風邪ごときで何日も寝てらんないわよ。あたしは、代表候補生なんだから……」

「はいはい。今日は安静にしてるよ？」

一夏はそう言って笑いながら、シンクで洗い物をする。その背中を鈴はぼおつと見ていた。

（何か……こういうの良いかも……）

端から見たら、これは恋人同士の日常にでも見えるではないだろうか。なんてことを考えてしまったせいも、熱がまた上がった気がした。

「鈴ちゃん、今の内にパジャマ代えたら？ 汗掻いてるんじゃない？」

「……あ、そっか。シャツも汗だくだわ」

「何なら一夏に着替え手伝わせようか？」

「「なつ　!?!」」

とんだ大胆発言に、二人が固まる。

「「……………」」

鈴と一夏の胸の鼓動がドクンドクンと強くなる。鈴にいたっては折角下がった熱がぶり返してきたかのように、顔が真っ赤になっている。

「えっと……………冗談だからね？　分かってるよね、二人とも？」

「「あ、当たり前だ（でしょ）!?!」」

非常に信憑性の薄い答えであった。

一夏が洗い物をしている間に鈴は新しいシャツとパジャマに着替え、再びベッドに入った。

「じゃあ、これ薬な？」

「……………何、この禍々しいまでの緑色の物体は？」

一夏が出した小瓶には、普通の錠剤を一回りほど大きくした、深緑色の丸薬が入っていた。

「織羽に渡されたんだ。何でも、数十種類の薬草を乾燥、粉末化させた物を練りこんで作った特製風邪薬らしいぞ？」

「一粒で、余命少ない老人が千里を走る程の効能らしい」

「それ、危ない薬って事じゃないの!?!」



また、夢を見た。

夢の中で、鈴は一夏と共に一人の少年を見ていた。

弓を構え、遠くの的に矢を射る姿は、弓道知らない鈴にでも凄いものだと良く分かった。  
ただ当てているからではない。そこに至る順序全てが、他の人とは違っていた。

弓を構え、放ち、的を射抜く。その動作がまるで名画を鑑賞しているような錯覚を与えるのだ。

「はあ………凄いわね。普段の変態ぶりが嘘みたいだわ」

「あいつの弓、先生が百年に一人の逸材だって絶賛してたぐらいだしな」

「へえ………」

鈴は何となくだが、一夏の言葉に頷いていた。あんなに綺麗なのだから当然だと自然に思えた。

「上手いだけ、才能だけなら、もっと優れた人はいますよ？」

「え………？」

不意に声を掛けられて、鈴は振り返った。そこにいたのは萌黄色の着物に身を包んだ品の良い初老の女性。

「先生………！」

「こんにちは、一夏くん。そちらはガールフレンドかしら？」

「がっ、ガガガガガールフレンド………ッ!？」

「違いますよ、ただの友達ですってえっ!？」

一夏が言い終わる前に、頭にガツンと拳が落ちた。

「何すんだよ、鈴!？」

「ふんっ!!!!」

鈴は不機嫌さに顔をしかめて、あさっての方を向いてしまった。

ターン。

「っ  
」  
響く、的を射抜く音。それはまるで、心の扉をそつと叩くかのような不思議な感覚。

「誰もが、あの子の弓に目を奪われ、心を奪われる……艶と煌めきと、儂さを孕んだ……見るものを魅了する。正に弓に愛された子よ……」

「……先生、そういうの止めて下さいよ。いちいち恥ずかしい言い方するんだから……」

春斗はいつの間にか、羞恥に赤らんだ顔で一夏達の方を向いていた。

「あらあら。事実なのだから、しょうがないでしょう?」

「事実じゃないですって! 先生がそんな事言うから、この間も取材とか受けさせられたんじゃないですかあ!」

「いいじゃないの。いつかは受ける事になるのだから、今から慣れておきなさいな」

「そんな機会、一生無いですってば……!」

照れたように苦笑いする春斗。それは普段と違う、歳相応の少年の顔であった。

(あいつって、ああいう顔もするんだ……)

初めて見た表情に、鈴はちよつとだけ驚いた。

弓道場を出た三人は夕暮れの街を並んで歩く。

「すっかり遅くなっちゃったなあ。もうタイムセール終わっちゃまっているし……どうすっかな？」

「今日は姉さん、帰ってこないしね……今から夕食作るのはちょっと面倒臭いかな……？」

「じゃあ、うちに来る？ 食べに来いって言ったのに全然来てくれないし……よし、それで決定よ！！」

鈴は言うなり、二人の手を掴んで引っ張る。

「ちよっと、鈴ちゃん！？」

「おま、引っ張んなよ！？」

つんのめりそうになりながら、二人の足が鈴を追うように進み出る。

そうした先に見えてくる　　鈴の幸せの場所。

「ただいまあつ！　お客さん二人、連れてきたわよーっ！！」

放課後。寮室のドアが開く。同室のティナが帰ってきたのだ。

「ただいま、鈴。体調はどう？ 少しは良くなった？」

ティナが声を掛けるも、鈴からの返事はない。ベッドを覗いてみると、鈴の静かな寝息が聞こえてくる。

朝とは比べものにならない程に顔色が良く、容態は良好のようだ。

ティナはベッドの脇に落ちた冷却ジェルシートを拾ってゴミ箱に入れると、新しい物を鈴の額に貼ってやった。

「それにしても……どんな夢を見てるのかしらね？」

微笑んだまま眠る鈴を見て、ティナは肩をすくめるのだった。

「おっはよーっ！」

翌日の朝。寮の食堂に、鈴の元気な声が響いた。

「おはよう、鈴。もう風邪は治ったのか？」

「言ったでしょ、風邪ごときで何日も寝てらんないって。バツチリ治ったわよ」

一夏の隣りに座り、女子にしては多めの朝食を食べ始める。一夏は、鈴がちよつとだけ無理をしているのではないかと思っただが、この様子を見る限り、それは無さそうだと思ひ直した。

「それにして……豪く機嫌も良いな？」

「そう？ う〜ん……何か、凄く楽しくて良い夢を見た気がするのよね〜？ そのせいかも」

朝になり、鈴は昨日見た夢をすっかり忘れてしまっていた。とても楽しかったことは覚えているが、その内容をすっかり思い出せない。

「ま、そんな事はどうでもいいのよ」

「そうか？」

「そうよ。夢よりも……現実今を楽しくしないと、意味ないでしょ？」

「……ああ、その通りだな」

「てな訳で、鮭はいただきー！」

「って、やらせるかよっ！ー！」

ぶつかり合う箸。ギリギリと軋む音が聞こえる。

『二人とも……そういう所は本当に変わらないね』

春斗の呆れ気味な言葉を聞かぬふりして、二人の朝食攻防戦は千冬  
乱入まで続くのだった。

**S i d e 鳳鈴音【夢よりも現実を】（後書き）**

いつかやろうと考えていた、このお話。

活動報告を見ている方は知ってると思いますが、今月風邪を引きまして、更に妙な夢を見ましたw

丁度良い機会だと、書いていたら……………まさかの原作者様とのネタかぶりw

IS三巻初回特典めえ……………ww

という事でそれを少し混ぜつつ、お送りしました。

何気にティナ・ハミルトンも初登場w

第40話

Just Before Summer Vacation(前書)

今回で本編もついに40話。

夏休み直前のお話となっております。

## 第40話

## Just Before Summer Vacation

今日も今日とて、白式はアリーナを飛ぶ。

「はい、そこから瞬間加速！」  
イグニッションブースト

「くうううううっ!!」

シューターフロアから直線軌道に切り替え、一気にブースト。最高速度で標的に迫る。

「オオオオオオオッ!!」

カノンモードの砲口を標的に叩き付け、そのまま撃ち放つ。粉碎される標的。一夏はそのまま脇を抜けて飛んだ。

「そのままシューターフロアッ！ 止まらないで!!」

「はいっ!!」

一夏は円状機動に切り替え、荷電粒子砲の再チャージまでの時間を待つ。

この数日で、一夏は荷電粒子砲零距离発射をものにしつつあった。

それは同時に、一夏がマニュアル制御を完璧にこなしつつあるという事でもあった。

「いけ、ムーン・ティアリス月之雫っ！」

飛翔する六機のビットが、楯無を狙って動く。が、楯無はその攻撃を躲して、一気に接近する。

「まだまだ、甘いわよ」

射撃能力はかなり上がっている。パターンも増え、表情には見せないが斬り込むにも一苦労だ。

だが、それでも国家代表を止めるには至らない。

四機のビットを躲し、残るは裏白式と二機のビットのみ。

「行けっ！」

春斗の指示に従って、二機のビットが飛ぶ。だが、その火力に楯無を止めるパワーはないと、そのままヴェールを展開して直進した。

「っ　！？」

直後、楯無は嫌な予感を覚え、即座に回避。その瞬間、ナノマシンでコントロールされた水のヴェールが容易に斬り裂かれた。

「これは……！？」

見れば、ビットの先端からエネルギーブレードが展開している。これが、ヴェールを斬り裂いたのだ。

「舞い踊れ、ティアリス・タガ雫の刃っ！」

白式が零落白夜のバリエーションを増やしたのと同様に、裏白式もまた、ムーン・ティアリス月華白麗の新たなバリエーションを生み出していた。

月之雫に月華白麗のエネルギー無効化刃を展開させての”遠距離格闘戦武装”。

ティアリス・タガ雫の刃と名付けられたそれは、接近に対する牽制と、火力不足を補う新たな力である。

「ちよつと、これはヤバイかな……！？」

さしもの楯無も、エネルギー無効化攻撃だけは喰らうわけには行かず、回避距離を取る。

「そこっ！」

「おっと、危ないわね……でもっ！」

△イン・ティアアズ  
月影の攻撃を躲し、楯無は舞うように月之雫からの射撃を回避して、再度の接近を試みる。

ティアアズ・ダガー  
そこを迎撃したいところだが、春斗は雫の刃を戻してしまった。

「っ……っ！」

ティアアズ・ダガー  
やはり、雫の刃の弱点にすぐ気付かれたと、春斗は四機のビットと、晨月の牽制射撃で足を止めようとする。が、それよりも速く、楯無の一撃が春斗を吹き飛ばしていた。

「ぐうっ!?!」

「防御の弱さと、マニュアル制御のせいで、態勢が簡単に崩されるのは弱点よね？」

そのまま、楯無は撃墜となるタッチを決めた。

今日の訓練を終えた二人はビットに降りた。ISを解除し、一夏は

滲んだ汗を拭う。

「大分、動きが良くなってきたわね。最初の頃とは段違いだわ」

「そうですか？ いまいちまだ、実感が湧かないんですけど……」  
楯無の言葉に一夏は首を捻った。確かにマニュアル制御は出来るようになってきている。だが、実際それが実戦で使い物になるかというところ、やはり疑問であった。

そんな一夏の反応も予想通りなのか、楯無は扇子をバツと広げた。今日の文字は『猪突猛進』。その意味は『目的の為に脇目も振らず、ただひたすら突き進む事』である。

「技術を学んだ今、今度はそれを実戦の経験値として積み重ねるのみよ。今まで学んだことを忘れないように、しっかりと心に留めておきなさい？」

「はい」

「あ、それと……暫くは練習に付いてあげられないから……ゴメンね」

「どうしてですか？」

「いやあ……ここ最近、こっちに掛かり切りだったせいで、生徒会の仕事かね……」

「溜まつてるんですか？」

「虚ちゃんの瞳から、ハイライトが消えるくらいには……」

「うわぁ……」

楯無は思い出してしまったのか、パタパタと扇子で必死に顔を扇ぎ、一夏と春斗はそれを想像してしまって、薄ら寒いものを背中に感じてしまった。

「一夏くん……」

「楯無先輩……っ!？」

楯無はしつかと、一夏の手を掴んだ。その瞳はうつすらと浮かんだ涙で震えていた。

「もしも帰らなかった時は……どうか、私の事は忘れて頂戴……!」  
「分かりました」

「まさかの即答っ!？」

「いや、今のは春斗です……」

「春斗くん……ちよ〜っと、お話したいことがあるから……出てきなさい?」

「……………あ、海岸に逃げた」

春斗の気配が奥に消えたのを言うと、楯無はガシリと一夏の肩を掴んだ。

「引っ張り出さない、今すぐに!」

「ちよっ……………無理ですって! めえがあまわあるう〜っ!」

ガツクンガツクンと一夏を揺すりまくる楯無。徐々に一夏の顔色が青ざめていった。

「会長〜。お取り込み中すいませんけど〜」

ピットに顔を見せた織羽が楯無に声を掛ける。

「何、織羽ちゃん? 今、すつつつつごっ! 立て込んでるんだけど?」

「虚さんがリミットブレイクしそうですよ?」

「それを早く言いなさい!」

楯無は一夏を放り捨てると、すさまじい勢いでピットを後にした。

「ふああああ……………死ぬかと思った……………」

「お疲れ様。ほい、タオルとドリンクのサービス」

「おう、サンキュー」

「しっかし、あの会長の訓練に食らい付くなんて……………なかなか凄くないじゃない」

「そうかな? 毎回必死で、よく分からないんだけど……………」

タオルで汗を拭きながら、一夏は嘆息する。

厳しいのは分かるが、訓練の時はひたすらに集中していて、それがどの程度なのか、自分では分からなかったりする。

「そう言えるのが、充分凄いところなんだけどねえ」  
織羽は予想通りの答だったのか、ニヤニヤと口元を歪めている。

「しかし、箒とシャルロットは部活だから分かるけど……他の皆は？」

着替えを終えた一夏は、珍しく織羽と二人で寮への道を歩いていたというのも、部活に入っている二人はともかく、他の面子も顔を見せなかったのだ。

結局、アリーナに来たのは織羽一人で、その彼女も練習終了後に顔を見せただけである。

「さあ？ 代表候補生なんだし……その辺の事情じゃない？」

「織羽は何で練習に来なかったんだ？」

「あたしは家の事情で今日は欠席してたのよ。で、今さっき帰ってきたばかり」

「家っていうと……辰守インダストリーか？」

「舞影のシステム再調整と、新武装受け取りだね。やっと武装が揃ったのよ」

「そうなのか？ 因みにどんな武装なんだ？」

「えっと……火縄銃型アサルトライフル『火輪』でしょ。ビーム弓銃『光炎』。鎖鎌『裂孔』と三節棍棒『龍鶴』……」

「……ハイテクなのかローテクなのか分からん武装だな。ていうか火縄銃型アサルトライフルってなんだよ！？」

指折り数える織羽に、一夏は微妙な顔でツッコんだ。

「そついえば織斑君、簪の事なんだけど……」

「更識さん？ どうかしたの？」

「いやね、ここ最近……どうもボケッとしてることが多くてね。

何時もなら”打鉄式式”のプログラムやら、メカいじりやらしてる

筈なんだけど……何か知らない？」

顎に指をやりながら、織羽はチラリと一夏を見た。言葉尻こそ質問だがその実、一夏が関係しているという確信を得ているのだろう。さて、何だろうかと考えた一夏だったが、自分にはほとんど思い当たるフシがない。

そもそも、簪と話したことは臨海学校の時にちよつとだけだ。それ以外は、春斗が先日話をした程度だ。

「……………ん？」

と、ここで一夏は気付いた。織羽が自分に関係していると思ったのは、きつと春斗と簪の一幕を見たからではないだろうか。

そもそも、知らない人間から見れば春斗も一夏も、同じ人間にしか見えない。実際に体は一夏なのだから、当たり前前の事だ。

「もしかしたら、俺じゃなくて春斗じゃないかな？　ここ最近で彼女と話したのは俺じゃないし」

「そうなの？　聞き込みしたら織斑君と話してたって聞いたから、てつきり……で、簪に何を言ったの？」

「いや、楯無先輩についてちよつと聞いたぐらいだけど……後、更識さんに『先輩の事を何も知らない』的な事を言ったかな……？」

「あゝ、なるほど。そのせいか……」

織羽は一人、得心が行ったと頷く。幼い頃より簪を知る織羽にとって、その言葉の意味するところはとても大きい。

簪にとって、楯無は憧れであり尊敬する姉だ。だがそれは同時に、簪にとってどうあつても届かない存在で、常に自分はそれと比較されることを意味していた。

だからこそ、簪はその背を追うことを諦めた。決して届かない大山に挑む事を止めた。

そんな彼女が一人で専用機　打鉄式　を完成させようと努力しているのは、それが簪にとつての最後の挑戦だからだ。

姉と同じように、単独でISを完成させられれば、少なくとも姉の

背に、この手が届くかも知れないという思いがそこにはあった。

だが、憧れは理解から最も遠い感情である。

春斗はある種、簪にとつての禁忌に平然と踏み込んでみせたのだ。

「ねえ、織斑君さ。よかつたら少しばかり、簪の事気にしてやってね。あの子、すぐに考えこむ癖があるから……」

「別に良いけど……何で俺？」

「考えすぎると、考え無さすぎるとで、調度良い塩梅になって織羽、テメっ……！」

「はっはっは！ それじゃ、よろしくねーっ！」

一夏が動くよりも早く、織羽はひよいと木の枝に飛び乗って、そのままヒヨヒヨイと跳んでいってしまった。

「……春斗、お前が言ったんだから、お前がなんとかしろよ？」

『一夏。それよりももっと良い解決策がある』

「……何だよ？」

『一夏が何時ものように、会長と更識さんを落とせば、それで全て丸く納まる』

「納まんねえよ！ つーか、俺が何時も女を口説いてるみたいに言うなっ……！」

『一夏。自覚無いからって、罪は消えないんだよ？』

「罪状確定済み！？ ……何か、このやり取りも久々だな」

『最近、やってなかったからねえ………』

なんてやりつつ、一夏らは寮の玄関を潜るのであった。

「あ、一夏さん」

先に帰寮していたセシリアが一夏を見つけたのは、丁度そのタイミングだった。

「何だ、もう帰ってたのか？」

「ええ。ところで……今、お時間はありますか？」

「あるけど……部屋に鞆置いてきてからで良いか？」

「ええ。では後ほど、私の部屋に来てください」

といって、セシリアは小走りに行ってしまった。一体、何なのだろうかと一夏は首を傾げるが、当然、答は出ない。

一先ず部屋に戻って鞆を置いて、セシリアの部屋へと向かった。

コンコン、コンコン。

部屋の前に着いた一夏は四度、ドアをノックする。

「セシリア？」

（はい、ちょっと待って下さい。今、開けますわ）

ドアの向こう側で動く気配を感じ、やがてドアノブの回る音が聞えた。

「どうぞ、お入りください」

「んじゃ、お邪魔します……相変わらず凄い部屋だな」

『ていうか、また増えてるよ。あの化粧棚、前来た時は無かったもの』  
セシリアの部屋は見るからに高級そうな品で溢れていた。部屋の真中を支配する天蓋付きベッドに、装飾細工の施されたドレッサー、天井には何故かシャンデリア。寮室備え付けのデスク上にも、金やら銀やらで飾られた小物入れや、きつと中身は高級品ぞろいなのだろうと、見ただけで分かる化粧箱が置かれている。

初めてこの部屋に来た時、織羽が部屋替え申請を出した意味を即座に悟ったものだ。

実際は、その悟りの斜め上をぶち抜いた理由だったりするのだが、一夏はその事を知る由もない。

「それで……俺に何の用だ？」

「えっと、その……実は一夏さんではなくて……」

「春斗にか？」

「……はい」

すまなそうに言いよどむセシリアに、一夏はそういう事かと察した。「春斗に用なんだな。ちょっと待っててくれ……で、何の用かな？」

「っ……！？」

瞳を閉じた一夏が再び瞼を開くと、雰囲気が一変する。その気配にセシリアは思わず息を呑んでしまった。

こうして改めてその変化を目の当たりにすると、驚いてしまう。

「……どうかしたの？」

「いえ……えっと、実は月之雫のデータを見せて貰いたいです」  
↑  
ムーン・ティアーズ

「月之雫の？」

「ええ。裏白式はティアーズ型以外で唯一のビット搭載IS。しかも、セカンドシフトで発現した武装で……悔しいですが、ブルー・ティアーズよりも高精度、高性能……」

「……で、イギリス本国から裏白式のデータを手に入れるように言われたと？」

「っ……!!」

「さしずめ、未だ偏向射撃が実現しない事に焦って、せつつかれたって所かな？」

「……………その通りです」

セシリアはとても申し訳ないと俯いた。

ブルー・ティアーズはイギリスの開発した新技術　BT　の実験機だ。

BT　とは、『人の心とリンクする』というIS基礎理論を強化し、それによって搭乗者のイメージをダイレクトに伝え、本来は複雑な独立可動ユニットのコントロールを行うものである。

ブルー・ティアーズに　BT　が用いられているのは、BIT（Blue tears Innovation Trial）ブルー・ティアーズ革新型試作機の頭文字）である　ブルー・ティアーズと、BTエネルギー変換型レーザーライフル　スターライトmk？。

スターライトmk？には、BTエネルギーを貫通、直線速射のイメージに光に変えての射撃。ブルー・ティアーズはビットのコントロールに使用されている。

そしてBT兵器はその理論上、BT適性が高まればビームさえも自在に曲げる事が出来るとされている。それが偏向射撃である。

ブルー・ティアーズは実験機の意味合いが大きく、基本性能は低い。フルスペックは偏向射撃あつてこそなのだ。

本国では、ティアーズ型の二号機もロールアウトし、故にBT適正

イギリス最高値のセシリアに、本国の寄せる期待も大きい。

だが、そこに出てきたのが裏白式だ。

イギリス以外のBT兵器（正確には異なる） 月之雫 を発現させ、その性能はイギリス製ISの上を行く。となれば、イギリスが放っておく筈もない。

「本来、IS学園に所属する以上、そんな義理がない事は分かっています。ですが、そこを曲げてどうかお願いできませんか？」  
アラスカ条約によって、ISに関わる情報は開示が義務付けられている。だが、その唯一の例外がIS学園であり、セシリアの要求に春斗が答える必要は一切無いのだ。

とはいえ、断ればセシリアのイギリスでの立場は悪くなる可能性もある。それは春斗の吉とする所ではない。

「別に見せるのは良いけど……参考にはならないと思うよ？ そもそも、ブルー・ティアーズとムーン・ティアーズは根本から違うからね」

「どういう事ですか？」

「BTはマインド・インターフェイスによる制御だけど、ムーン・ティアーズは思考複写インターフェイスによるユニット制御だからね」

裏白式の百目は、搭乗者である春斗の思考パターンを複写し、常に最適な制御を行うシステムで、それによってブルー・ティアーズよりもユニット制御が容易かつ精密になっている。

簡単に言うなら、セシリアが一人で制御しているのに対して、春斗は二人で制御しているという事だ。

更にムーン・ティアーズにはBTは使用されていない。な

ので B T の理論最高値 偏向射撃<sup>フレキシブル</sup> は使えない。

「なるほど……確かに参考にはならなさそうですね」  
そう説明すると、セシリアも納得したようだ。

「まあ、制御システムぐらいなら……何とかできるかも知れないね  
とりあえず、ブルー・ティアーズのデータを見せてもらえる？」

「分かりましたわ」

セシリアは待機形態のブルー・ティアーズを耳から外す。

それを受け取ると早速、移動ラボ”蚩尤五兵”を展開起動させた。

「なっ、何ですのこれは!？」

「ああ、セシリアさんは知らないんだっけ。移動ラボ”蚩尤五兵”。  
本日はデータ解析モードでお送りします」

掌部分が開き、そこにブルー・ティアーズを入れるとデータ解析が  
スタートし、八枚もの空間投影モニターが出現する。

それらを見ながら、春斗はやはり空間投影式のキーボードを打ち始  
める。

「ふうん、これがブルー・ティアーズか……なかなか面白い。フラ  
グメントマップも独特だし……コアも個性的だ」

「個性的……?」

「何ていうかこう……プライドが高い感じ?」

「そんな事まで分かるんですの?」

「……え? いや……」

春斗は首を傾げる。

コアにはそれぞれ特性があり、向き不向きも存在する。だが、その  
コアの意識がどんなものであるか、など分かる筈もない。

なのに何故、そんな事が分かったのか。

(そういえば、ミステリアス・レイディをいじってる時も、何とな  
く感じたな……)

ISに触れている時に感じる コアの鼓動。  
思い当たるフシはある。それは銀の福音を止めた時だ。  
シルバリオ・ゴスヘル

コアが生み出すISの世界。そこに聞こえた少女の声。  
その前にも見た。月光と夜海と、金色と黒の少女。

どういう理屈か分からないが、その辺が原因のような気がした。

「……まあ、そういう事かな？」

春斗は誤魔化すようにして、そう返した。

「春斗さんの目から見て、ブルー・ティアーズは……どうですか？  
デスクに紅茶の入ったカップを置き、セシリアが尋ねる。

「どう、っていうのは？」

「BTの理論最高運用……”フレキシブル 偏向射撃”。可能だと思いますか？」

セシリアは真っ直ぐに、春斗を見る。その真剣な眼差しは

「……ブルー・ティアーズの運用データは悪くないし、BT適性も  
充分だと思う。もうフレキシブル 偏向射撃が出来てもおかしくない筈だよ」

「ですが、私は未だにフレキシブル 偏向射撃が出来ませんわ」  
セシリアの言葉に春斗は腕を組み、思考する。

「……考えられる理由は二つ。一つはそもそもフレキシブル 偏向射撃そのものが

不可能である事。もう一つは」

腕組みを解き、ピツと人差し指を立てる。

「セシリアさん自身が、ブルー・ティアーズを理解していないか」

「な　っ！　聞き捨てなりませんわっ！」  
カツとなったセシリアが、春斗に詰め寄る。

「私がブルー・ティアーズを理解していない!?　そのような事、あり得ませんわっ!!」

サファイアの瞳を自身の誇りを傷つけられた怒りに燃やして、ズズイと春斗の眼前にまで迫る。

「まあ、落ち着いて。この距離は色々マズインじゃないかな?」

「えっ……………っ!?!」

前髪が触れるほどの距離にまで顔が寄っていたことに気付き、バツと離れた。陶磁器のように白い肌は赤みを帯びている。

「そ、それで……………私がブルー・ティアーズを理解していないというのは……………どういう意味ですか?」

誤魔化すように咳払い一つ、セシリアは尋ねた。

「まず、セシリアさんはどうやってフレキシブル偏向射撃をやるうとしている?」

「どうって……………ビームが曲がるように意識して……………」

「曲がるよう理論的に考えたり、曲がれとか命令したりしてない?」

「っ……………!?!」

ギクリとするセシリア。その反応だけで答は充分だった。

「セシリアさんは理論的に細かく考える癖があるよね。それが多分、フレキシブル偏向射撃を阻害しているんだと思う。」

先程感じたコアの性質と合わせて考えてみると、その可能性が高いと春斗は判断した。

「では、一体どうしたら……………?」

「こればかりはセシリアさん次第、としか言いようがないかな。何かきっかけでもあれば……………出来るようになるんじゃないかな?」



「こ、これはその……クラス代表決定の時のですわ」

「……ああ、あの時の」

そういえばそんな事もあったなと、春斗は思い出して笑った。

「……春斗さん。あの時、私を助けてくださったのは一夏さんではなく……貴方だったのですか？」

「……まあね」

「やはりそうでしたか。どうりで、普段の一夏さんに……あの時の印象がないと思いましたわ」

「どういう意味？」

「……いえ、此方の話ですわ」

そう言っつてセシリアは何故か笑った。

「そういえばもうすぐ夏休みだけど、セシリアさんはやっぱりイギリスに帰るの？」

部屋に戻ろうと廊下に出たところで春斗はふと思いついて、セシリアに尋ねた。

「ええ。オルコット家の当主としての執務に、代表候補生としての報告に、ブルー・ティアーズの再調整……それ以外にも色々ありますし」

「なかなか忙しそうだね。ISの調整くらいなら、僕がやるうか？」

「お言葉が嬉しいですが、向こうでやらないと意味のない事ですし」

「そうか。データ解析もしないといけないんだっけ……あれ、僕らのはどうなってるんだ？」

ふと、白式と裏白式のデータ解析は何時やるのか気になった。時期的に見てもそろそろの筈だし、何より二機とも二次移行セカンドシフトをしている。二機の開発元である『倉持技研』が学園に申請を出している筈だが、未だ真耶や千冬からそういつた話は聞いていなかった。

千冬はあんな状態だったし、真耶もそのせいで忙しかったらうから、もしかしたら忘れているのかも知れないと、春斗は後で聞いてみることにした。

「一夏さんと春斗さんはお休み中、どうされるのですか？」

「どうと言われてもねえ……家に帰るだらうけど、基本は寮に居ると思うよ？」

あまり代わり映えないねと、春斗は肩をすくめる。

「あつ、一夏っー!!」

と、廊下の向こうから走ってくるツインテール。

「鈴ちゃん？」

「春斗！？ 丁度良かったわ。一緒に来て!!」

言うが早いか、鈴は春斗の腕を掴んで引っ張る。

「ちょっと鈴ちゃん！ 一体どうしたの!？」

つんのめりそうになりながら、なんとか堪えて春斗は理由を尋ねた。

「今すぐ、甲龍の調整とデータ解析やって!!」

「だから何で!？」

「国が帰ってこいつでうっさいのよ! だから、寸分の隙もないデータを送ってやれば黙るでしょ!?! だからよ!!」

「自分でやりなよ、代表候補生!!」

「使えるものは一夏でも使えって言っでしょ!?!」

「じゃあ、一夏を使いなよ!?!」

「一夏が使いものになる訳ないじゃない!?!」

『お前ら、大概にしるよ!!』

一夏が叫ぶが、それを一切合切無視して、二人の言い合いは続いたまま姿が消えていった。

「何というか……春斗さんも、色々大変ですわね」

喧騒の治まった廊下で、セシリアは一人呟いたのだった。

こうして、賑やかしくも時間は過ぎて行き　　時は夏休み直前。

自室にいたシャルロットの所に届いた一通のメール。

「これ……っ！」

その内容に目を通したシャルロットが、目を見開いた。

『シャルロット・デュノアへ。竜の飛び立つ日がいよいよ来た。君の帰る日を待つ。』

ファイ

リー・ミヤムラ』

「ついに完成するんだ……ラファール・ドラグーンが……っ！」  
いよいよその時がきたと、シャルロットの心が興奮に染まる。ドキドキと心臓が高鳴り、手が震える。

シャルロットの脳裏に蘇るのはライトアップされた、巨大なリングを背負う白と翠の二色で彩られた機体。

太いコードに繋がれ、装甲内部の機構もまだ見えていた。それでも、

一見しただけで背筋をゾクリとしたものが走った。

居ても立ってもいられないと、シャルロットは休みに入ってから  
帰国予定を早め、終業式当日のチケットの予約を行なった。

応接用というには安物のソファーに座る二人の女性。

一人はグレーのスーツと白衣を着た、40代ほどの赤髪の女。  
もう一人は20代後半程の女性。美しいライトブロンドと、完璧な  
造形美と喻えられそうな肢体を赤いスーツに包み込んでいる。

「これがご要望にあったデータよ、”Dr、ファウスト”」

「ありがとう、”スコール”」。これでまた一歩、完成に近付けるわ」  
スコールと呼ばれた女性が懐から取り出したのは一枚のデータデ  
ィスク。

それを受け取ると、ファウストと呼ばれた方にはいい、とその口元を  
醜く釣り上げた。

そこに収められているのは先日、一夏達によって倒された銀の福音  
の映像データであった。  
シルバリオ・ゴスペル

それを使ってファウストが何をしようというのか、スコールは理解していた。

Dr. ファウスト。亡国機業関連組織《ファントム・タスク研究所》ファクトリーの主任。

彼女の研究はとても興味深く、亡国機業幹部達も注目している。

「ところで、うちの子は何処かしら？ 任せたい仕事があるのだけ  
れど……」

「さつき呼んでおいたから、そろそろ来るんじゃないかしらね」  
と言って、ファウストは立ち上がった。

「悪いけど、これで失礼するわ。一刻も早くこれを解析したいので  
ね……」

「お構い無く。貴女の研究を楽しみにしているわ……ドクター博士？」

「ふふっ……ありがとう、スコール？」

ドアを開け、ファウストが退室すると、別のドアが開いて入って来  
る者がいた。

「スコールッ！」

「あら、オータム。随分と機嫌が悪いみたいね？」

「こんな陰気な所にずっといたら、機嫌も悪くもなるぜ」

「まあ、あなたは外で暴れていた方が性に合うでしょうね」

「嫌味でも言いに来たのかい？」

ドツカリとソファーに腰を下ろし、オータムはスコールをジト目で  
見る。スコールはしかし、全く気にせず、オータムを見返していた。  
やがてオータムが折れ、深い溜息を吐いた。

「てか、いいのかよスコール。あの女の計画が成功したら……？」

「何も変らないわ」

「え……？」

「どれだけ世界が変わろうとも、影が消えることはない。ただ、そ

の姿が変わるだけ……今までと同じ」

「……………」

「私達は世界の影……『ファントム・タスク亡国機業』なのだから」

そう言い切るスコールの瞳に、鋭くも妖しい光が覗く。

「それよりも……新しいミッションよ」

スコールはポケットから白い封筒を取り出してみせた。

「ターゲット標的は、フランス第三世代IS ラファール・ドラグーン。この機体の奪取よ」

「フランスの第三世代……何か、全第三世代最強とか大々的に言っ  
てやがるんだっけか？ そんなに凄い機体なのか？」

「カタログスペックを見る限り……全くのハッターという訳では無い  
ようよ」

「へえ……そりゃ、楽しみだ」

スコールの言葉に、オータムは凶暴な笑みを浮かべた。

光無き室内に浮かび、淡く輝く生体ポッド。

溶液に満たされたその中に浮かぶ、一人の少年。

そしてそれを見つめるのは　　15歳ぐらいの黒髪の少女。

「ようこそ、織斑春斗」

そっとポッドに触れると、それは彼女のいる世界を知らしめている  
かのように、冷たさを腕に上らせてくる。

「もう二度と、光ある場所には帰れない。ここが、お前の生きる世界だ……私と同じにね」

その瞳に狂気を宿して、少女は押し殺した笑いを響かせるのだった。

第40話

Just Before Summer Vacation (後書)

次回よりいよいよ、夏休み編に入ります！

そしてラストの振りの通り、亡国機業も本格参戦。

猛暑に負けない熱い物語を頑張りたいと思います。ではまた次回。

第41話 ”疾風”をめぐる物語(前書き)

いよいよ夏休み編突入。

怒涛と波乱の一ヶ月が始まります。トップバッターは彼女から。

## 第41話 “疾風”をめぐる物語

八月。IS学園は、一般高校よりも若干遅い夏休みに入る。

世界各国から生徒が訪れている為に帰国組も多く、寮は日を追う毎に人を減らしていく。これもまた、IS学園毎年の光景であった。

そしてまた二人、一年生寮を後にする者達がいた。

「では一夏さん、春斗さん。しばしのお別れですわね」

「暫くの間だが……浮気などするなよ？」

「浮気って……また変な言葉、教えられたのか？」

夏休み三日目。学園の門の前には、帰り支度を整えたセシリアとラウラ、それを見送る一夏の姿があった。

「しかし、シャルロットの奴も随分と急いで帰国したものだ。折角なのだから、共に空港まで行けば良かったものを」

「そうですね。まさか、終業式が終わると同時に帰国するなんて

……本国で何かあったのかも知れませんか？」

「義兄上は何か、ご存知ではないのですか？」

「残念ながら何も。聞く前に行っちゃったからね」

その時の様子を思い返しながら、春斗は肩を竦めた。

「まあ、シャルロットさんの事はさておいて……大丈夫ですよ、あれは？」

「本当、どうしようねえ……」

セシリアの言う”あれ”の事に、春斗は遠い目をした。空は青々と晴れ渡り、吸い込まれそうな程である。

いつそ吸い込まれてしまえば、面倒もないんじゃないかなと本気で思ってしまう。

その面倒事が起こったのは、正しく終業式の日であった。

IS学園大講堂。

全校生徒を収容して尚余る大きさのそこで、一学期終業式が行われていた。

学園長の話が終わり、壇上には一部面々が微妙な顔をする人物が上がった。

「生徒会長の更識楯無です」

何故か、名乗っただけで嫌な予感が倍増した。

「さて、今回はこの場を借りて生徒会から報告があります」

嫌な予感が倍率ドン。6、7、2、3、5。

『なんだろうな……発表って』

『なんだろうね……僕限定で、嫌な予感がビシビシするんだけど？』  
はら いらさんに三千点。

「生徒会に多数寄せられた嘆願書の件ですが、今回正式に学園に提出運びとなりました」

楯無は壇上で、バサツと扇子を広げる。本日は『驚天動地』と書かれている。

「嘆願書……もしかして？」

「じゃあ、ついに……!？」

ざわざわと、ざわめきが波のように講堂全体に拡がって行く。

パシン。と、扇子を閉じる音が響くとざわめきが止まり、生徒達が楯無を注視し直した。

「昨日、IS学園にラファール・リヴァイブ専用高機動プログラム制作を申請しました。次回公式戦までに用意されると思います」

「『なっ!?!』」

楯無の爆弾発言に驚きの声を上げる二人。それを呑み込んで歓声が上がる。

そして壇上の楯無の視線が、一夏のそれとぶつかる。

「にやり」

『笑いやがったよ。これでもかってぐらいに嫌な感じで』

大々的に発表されたせいで、学園の盛り上がりは異常である。チラリと千冬に視線を送ると、この事は千冬も知らなかったようで、小さく首を振られた。

『……で、どうするんだよ?』

『どつしよつねえ……本当に』

別口にプログラムを発注するのかと一瞬考えるも、楯無の表情からそれはないなと思ひ直す。

彼女は間違いなく、春斗にプログラムを組ませる心算だ。

というよりも、あれだけの物を作る人間自体がない。と、いう方が正しいのだが。

かくして、大盛り上がりそのまま終業式は終わり、生徒達は興奮のままに講堂から教室へと戻った。

教室に帰った一夏が、帰り支度をするシャルロットに声を掛けた。

「あれ、シャルロット？ まだ、ホームルームがあるぞ？」

「うん。今日の便を予約してるから、今からじゃないと間に合わない

いんだ」

「豪く急だな」

「本当なら、もうちょっと経ってから帰国する予定だったんだけどね……それじゃ、またね！」

苦笑いするシャルロットは、いそいそと教室を後にした。

千冬と真耶が入れ替わるように教室にやって来て、ホームルームが行われた。

そんなでもって今、春斗は人目に付かない場所にいた。

『で、どうするつもりだ？』

「ラファール用のプログラムの事？ 作るのはいんだけど……うん」

春斗はいまいち気乗りしない様子で、腕組みをして唸る。

「一夏のためでもないし、ほーちゃんのためでもない……不特定多数のためってのは、やる気しないなあ。ましてや、何の義理があって、生徒会の依頼なんて受けなきゃいけないのかって」

「それは当然、これが正式な取引だからよ？」

又ルリと物陰から現れたのは、件の生徒会長様。

「正式な取引って……プログラムを作ったら、こっちに得もあるんですか？」

春斗がジト目で言うと、楯無は何時ものようにバサツと扇子を拡げた。本日の文字は『需要供給』である。

「世知辛いこの世の中、ギブ・アンド・テイクが基本よ」

「……で、答になってないんですけど？」

「あら、本当に分からないの？」

楯無は扇子をゆっくりと畳みつつ、足音を響かせながら距離を縮め

てくる。

春斗は自然と、後に足を進ませる。が、その背がすぐに壁にぶつかった。

「っ！」

「さあ、おねーさんに支払ってくれるかしら？」

音も無く一瞬で、楯無が密着する程の距離まで近づく。

「……何を払えと？」

「勿論、君のコーチ料」

扇子でクイツと春斗の顎を持ち上げて、楯無は目を細めてクスリと笑う。

「言ってる意味がよく分からないんですが？  
そもそも、ミスデリアス霧纏の淑女・レイディを仕上げるので成立している話だった筈では？」

「あああら。約束はちゃんと、正しく覚えておかないとダメよ？」

「正しくって……」

春斗はその時の事を思い返してみた。

「会長、俺を……鍛えて下さい！  
俺は、強くならなきゃいけない！」

「……そんなに叫ばなくても良いわ。そもそも、君を鍛えるのは私のお願いを聞いてもらう代わりでしょ？」

「……あ、そういえば。会長のお願いつて……？」

「うーん、正確には君にじゃなくて……君の中のもう一人の君。天才と謳われた”織斑春斗”博士にね」

「……………まさか」

春斗がある事に気付き、その頬に一筋の汗が伝う。そして楯無は勝利を確信したかのように、邪悪な笑みを浮かべた。

「そう。ミステリアス・レイディの仕上げは、一夏くんのコーチ料としてよ。さて、ここで問題。春斗君のコーチ料はどうなるのですよ？」

「詐欺契約もいいところですね、マジで」

「ちゃんと、契約内容は確認しないとダメよ。さあ、私と契約してプログラムを作つてよ」

「ますます詐欺っぽくなつてきましたね？」

「あら、人聞きの悪い。完全なる事後承諾と言って欲しいわね」

「それを、普通は詐欺と呼ぶんですよ」

春斗の皮肉を右から左に聞き流し、楯無の指が胸元を撥るように触

れて滑る。

「それで……真面目な話、作れる？」

「まあ、”真打”を幾らか弄れば簡単に出来ますけど……」

「……君、よく人に『非常識』とか言われない？」

「失礼な。只の一個性ですよ」

プログラム関連で、一夏に千冬に箒に鈴にと『非常識だ』と言われた事があった。

春斗からすれば甚だ不本意であるが、言ったところで詮なき事と諦めている。だからといって、一個性で済むようなレベルではないのだが。

「じゃあ、プログラムの件はお願いね？ 織斑先生には生徒会の方から話をするから」

「分かりました。ところで……」

「……何？」

「いい加減、離れてくれませんか？ 暑いんですけど」

春斗はうんざりしたように楯無に言う。彼女は未だ、春斗にくつついたままなのだ。

「あら、いいじゃないの。減る訳でもないんだし」

それどころか体を密着させてきた上に、その足を春斗の足の間に差し込んできた。

「減りません。体温上昇による発汗によって、体内のミネラル分と水分が」

「……君、本当に可愛くないわねえ。普通、もっと慌てたりとかドキしたりしない？」

楯無は呆れ気味に返して、その体を離れた。

「一夏ならまだしも、僕はしませんね。特に、『道化を演じて、本音を常に隠している人間』には、何の魅力も感じませんし」

「……どういう意味かしら？」

「知ってますか？ 道化を演じていると……何時の間にか本心を晒す事を恐れるようになるんですよ。そうですね、道化を演じてれ

ば本心を隠せるし……何より、傷つかなくて楽だから」

「……………随分と、分かったような事を言うのね？」

「ええ。初恋さえしてない会長よりは、青春ポイントが高い自信ありますから」

「っ……………！？ あ、あら……………失礼ね……………は、初恋の一つや二つ……………おねーさんを甘く見ないでほしいわね」

「へえ……………」

「信じてないわね！？ そのリアクション、全く信じてないでしょ！？」

「ええ、全く。それに……………会長には死んだ経験ないでしょうし。そういつた意味でも、僕の方が経験豊富と言えますね」

「普通は誰も経験した事ないと思うわよ！？」

楯無のツッコミも当然だ。というより、春斗の経験を常識と比較する事そのものが、そもそもの間違いである。

「全く生意気な後輩君ね。どうやってたら、君の顔を歪ませられるのかしらね？」

「妹さんと仲直り出来たら、きっと歪ませられるんじゃないですかね」

「本っ当に意地悪ね」

楯無はすつと離れると、拗ねるかのように背を向ける。

「何かを変えようと思うなら、傷つける事も傷つく事も覚悟しなけりゃいけないんですよ。それに、そういう事が出来るのも……………生きていればこそ、ですからね」

「……………なるほど。説得力あるわね」

「一度死んだ身ですからね」

楯無は肩をすくめ、春斗はクスリと笑って返した。

時は戻り、国際空港。  
ラウラとセシリアは搭乗時刻になるまでの暇つぶしにと、空港内の土産物屋に来ていた。

「あら、これは何かしら……ジャパニーズ・スシ？」

「これは食品サンプル……つまり、精巧に出来た模造品だ」

「あらラウラさん。よくご存知ですわね」

「ふふん、義兄上に教えていただいたのだ。……しかし、実物を見るのは初めてだが……見事なものだ」

「こちらはテンプラ……って、これもサンプルですよ！？」

二人は土産用の食品サンプルに、すっかり目を奪われていた。

日本といえばスシ、テンプラ。本物さながらに作られたそれらは、外国人向けの土産として人気の品でもあったりする。

「むっ」

棚に視線を滑らせていたラウラがふと、目を止める。

そこにあったのは 二つ一揃えの茶碗。一つは青の花が、もう一つは朱の花が描かれている。

（ま、まさかこれが噂の……『夫婦茶碗』！？ む、むっ……どうする？ ここで買っとドイツに持っていく事になってしまう……ならば、帰国した時に買えば……うむ、それが良い）

「……何をしているのかしら？」  
一人ウンウンと頷くラウラに、訝しんだ視線を送るセシリアであった。

やがてドイツ、イギリス行き飛行機の搭乗が始まり、二人はゲート前で別れた。

ドイツ行きの飛行機が飛んでいくのを窓から見送って、セシリアは遮光スクリーンを下ろして、その背を座席に預ける。

「日本、色々ありましたわね……」  
数ヶ月程度の間起こった様々な出来事を振り返りつつ、セシリアは瞼を閉じたのだった。

時は、七月三十一日。

終業式終わりと共に、シャルロットは帰国の途に就いた。フランス行きの便に飛び込むように乗って、夕方前には日本を離れた。

フランスと日本の時差は、今はサマータイムで7時間。そしてフライト時間は直行でも12時間以上。フランス到着は21時以降になる。

逸る心を抑えつつ、シャルロットは少し眠ろうと瞳を閉じた。

今更だが、日本に来た直後は時差が地獄のようにきつかった。その経験が今、こうして生かされているのだ。

少し考えれば分かりそうな事だとか、言うてはいけない。

ともかく、シャルロットは仮眠を取った。そうしてみる夢は彼女の始まりの記憶。

「あんたがシャルロット・デュノア？」

母を失い、デュノア家に引き取られてから暫くの後。彼女の前にフ  
ラリと一人の女性が現れた。

このご時世に平然と銜え煙草をして、今もポロポロと灰を床に落と  
している。

薄い紫煙の向こうに見える顔は、シャルロットの記憶にある人物で  
あった。



「ふむ……これなら申し分ないと思いますが……どうですか？」  
「充分ね。伸び代もあるし……何より、鍛え甲斐がありそうだわ」  
受けた本人を前にしながら堂々と、しかし絶妙に聞こえない声で試験結果について話す、政府派遣の試験官とフィリー。  
シャルロットはドキドキしながら結果を待つ。余りの緊張に目眩を起こしそうだ。

「ほんじゃ、行くわよ」

「……え？ あの……結果は……？」

「そんなの良いから、さっさと来る。表に車回しとして」

「はい」

スタッフに車の用意を指示して、フィリーはさっさと行ってしまう。  
「え……あ、ちょっと待って下さい!!」  
置いてけぼりにされたシャルロットは、慌ててフィリーの後を追いかけた。

外へ出ると、最初から車に人が待機していたのか、既にフィリーが車に乗り込むところだった。

防弾仕様の黒塗りの特注車。VIP専用としてよく使用されているものだ。

「ほら、さっさと乗りなさい。時は金なり。青春の一秒は黄金にも勝る価値があんのよ?」

「は、はあ……」  
訳も分からないまま、シャルロットはフィリーに続いて後部座席に座った。

ボタン、とドアが閉じて車が走り出す。後方に遠ざかっていく、デュノア社を振り返りながら、改めてシャルロットはフィリーに尋ねた。

「あの……一体、何がどうなってるんですか? 何もかもがいきなり過ぎて……私、頭がゴチャゴチャなんですけど」

「ん……じゃ、簡単に説明するけど」

タバコを携帯灰皿に捨てて、その視線が鋭い光を宿す。ガラリと変わった雰囲気、シャルロットは思わず息を呑んだ。

「今、フランス政府とデュノア社で共同プロジェクトが上がってるのは知ってる?」

「はい。第三世代ISの開発プロジェクトの事ですよ?」

「そう。あんたをそのパイロットするから。以上」

「え? ええええええええっ!?!」

「っ……いちいちデカイ声出して驚くんじゃないわよ」

「だって……そんな……私が……だって、只のテストパイロットで、

代表候補ですら無いのに……！」

今のシャルロットの立場はデュノア社所属のテストパイロットだ。試験を受けるには受けたが、その合否は不明なのだ。

「ああ、あんた合格だから。今日から代表候補生よ、おめでと〜」  
パチパチと手を叩くフィリー。その余りにもあっけらかんとした態度に、シャルロットはもう何度目か分からない驚きに襲われた。

「そんな……あっさり決めて良いんですか!？」

「だって、あんたの事はあたしに一任されてるし。どうせ候補生なんだから、1人も2人も20人も大して変わんないわよ。大事なのは優勝を狙える国家代表なんだし」

元国家代表の言葉は軽いようで、しかし何処までも現実であった。候補生はあくまでも候補生でしかなく、『国家代表』という椅子に座る為のチャンスを与えられただけに過ぎない。

そして今、シャルロットの目の前に居るのはその椅子に座っていた人物。全ての代表候補生の憧れであり目標。

実際、中継されていた試合をシャルロットも見ていて、その魔法のような戦い方に目を奪われた。

「でも、どうしてデュノア社まで？ 候補生なら他に居る筈だから、わざわざ私一人の試験のために来る必要が……そもそも、私の事をどうして知ってたんですか？」

此処が一番の疑問だった。フィリーは開口一番、シャルロットの名前を言った。

彼女の事は世間体もあり、ごく限られた人間しか知らない筈なのだ。なのに、どうしてフィリーはシャルロットを知っていたのか。そこが全く理解できなかった。

「それに関しては、あたしより”あたしに指示を出した人”に聞いた方が早いわよ？ あたしは言われて行ったただけだしね」

「指示をした人……ですか？」

車は進む。そして見えてくる　その場所。

外周数十キロメートルという広大な敷地と、そこに並び立つ多様な施設。

国立科学技術局。この国の最先端技術が終結する禁断の地。

車は入り口で一旦停車し、IDパスを通してゲートを開いてから再度走りだした。

「さて、今正に国家機密のバーゲンセールみたいな所に踏み入った訳だけど……気分はどう？」

「車の中じゃ、実感湧かないです」

「あっはっはっ！　確かにそうね！　それじゃ……そろそろ降りてみようか？」

「え……？」

行く先には、一等立派で大きい建築物。その前で車は停車した。

ドアを開けて降り立ったシャルロットは、まずその大きさに驚いた。まるで、凱旋門を複数個持ってきたかのような高さと同幅。降車した場所は建物の入り口からまだ100メートル程あるというのに、一番上を見るのに、シャルロットは真上まで顔を上げなければならぬ程だ。

「大きい……」

「どつ？　ここが今日からのお仕事場よ？」  
「じ、ここがですか！？」

「　　おお、やっと帰ってきたか」

驚くシャルロットだったが、突然聞こえた声に入口の方を振り返る。果たしてそこに居たのは杖を付き、白衣を着た白髪の男性。顔には皺が深く刻まれており、それがむしろ、彼の印象を壮厳にさせている。

「遅れて申し訳ありません、博士。指示通り、シャルロット・デュノアを連れてきました」

フィリーは今までとは打って変わって、ピシッと背を正した。

「ご苦労。早速だが彼女のID登録証と、必要書類の方を頼むよ」  
「分かりました」

「ちょ、ちよつと待って下さい！！」  
あれよあれよと進んでいく話に、シャルロットが思わず待ったを掛けた。

「何だね？」

「あの……私はまだ、詳しい事を殆ど聞かされてないんですけど！  
？　どうして私が呼ばれたのかも分からないし……えっと……とにかく、分からない事だらけなんですっ！」

「……フィリー、説明しておくよう言った筈だが？」

「しましたよ。極々簡潔に」

ドゴスッ！

「　　いったあああああ……っ！！」

「詳しく」とも言った筈だぞ？」  
「だって面倒くさ」

ドゴスツ！！

「あいつたああああああっ!?!」

「全く……仕方ないな。シャルロット・デュノア、着いて来なさい」  
「え……あ、はい」

痛みにつづくまる英雄を横目に、シャルロットは老人に続いて建物の中に足を踏み入れた。

「まず、君の事を知っていたのは大した事じゃない。優秀な操縦者を探していて偶然、君を見つけたただけだ。とはいえ、デュノアの社長には散々、しらを切られたがね」

「……………」  
あの父の性格を考えればそうだろう。愛人の子である自分のことなど、相応の理由がなければ表に出したりしない。

「で、ここに連れて来られたということは……試験は合格、君にはプロジェクトチームに加わってもらおう。だが、今ならまだ拒否は出来るぞ?」

「…………プロジェクトって事は、この先にあるんですよね……噂の『第三世代IS』が」

エレベーターに乗り込み、地下へと降りていく。重厚な隔壁を幾つも抜けて、やがて止まるとドアが開く。そこから今度はベルトコンベア式の廊下を進んでいく。

数センチもある強化ガラスの向こうには、幾人もの人と無数の機械がせわしなく動いている。

「　　ここだ」

廊下の終点。そこには巨大で重厚なドアがあった。老人は脇の機械に掌を合わせ、そしてIDカードをスラッシュさせた。

「音声認証。」デュアン・ヒューイックだ。ドアを開けたまえ」  
（デュアン・ヒューイック……！？　この人があの……？）

フランス1の科学者にして、英雄。まさかの正体にシャルロットは目を見開いた。

『認証確認。Dr.ヒューイック、どうぞ』

ガコン、ガコンとロックが外れ、ゆっくりとドアが開いていく。

「　　」

開かれた先　　白で埋め尽くされた空間に鎮座する、一機のIS。

装甲の所々が外されていて、内部機械構造が見え、複数のコードに繋がれた、一見ただけで未完成のIS。

そのシルエットは何処か、ラファール・リヴァイブに似ていた。だが、リヴァイブと一線を画す部分があった。

非固定部位となったスラスタ翼と、その背に背負った巨大なリングユニットである。

シャルロットはゴクリと、息を呑んでいた。

既存のISの影を残しながら、しかしどれとも違う　　その威圧感。

「このISの名は『ラファール・ドラグーン』。ラファール・リヴアイブの設計思想を受け継ぎ、第三世代兵装 リンドブルム を搭載した、第三世代IS最強となる機体だ」

「第三世代最強……！」

「とはいえ、まだ専用武装は未完成だし、リンドブルムの稼働率も良くない。最強どころか、まともに戦うことも出来んシロモノだな」

といって、老人 デュアン・ヒューイックはからからと笑った。

ラファール・ドラグーン開発室を後にして、二人はヒューイックの執務室までやってきた。

「君には幾つかの選択肢がある。一つはここでプロジェクトに参加すること。二つ目はプロジェクトに参加せず、普通に代表候補生として政府に所属すること。三つ目は……また、デュノア社に戻ることだ」

「……………」

「一つ目と二つ目を選ぶなら、君の身柄はデュノアから政府預りとなる。三つ目は言わずもがなだな。まあ、どれも選ばずに一般市民になるという道もあるがね。その場合も、ちゃんと学校に通えるように手配もしよう」

シャルロットに示された幾つかの道。元々ISに乗っていたのは、適性があつて、それ以外に生きる道がなかったからだ。

それが堪らなく苦しくて、嫌で、苦痛だった。

だが今、それが無くなるうとしている。ISからの開放も、デュノアからの開放も、目の前にある。

選べば良い、四つ目を。何もかもを終わらせてしまえば楽になれる。

”彼”の言葉を借りるなら、自分の幸せに繋がる道を選択すれば良いのだ。逡巡する事など無い。

なのに、シャルロットは迷っていた。

原因は分かっている。あの ラファール・ドラグーン を見たからだ。

”疾風の竜”と名付けられたその機体の力。それを見たいと、感じたいと本能が訴えているのだ。

今になってシャルロットは理解する。

自分は今もう、生粋のIS乗りなのだ。目の前にあれだけのものがあつて、それに背を向けることも、誰かにそのシートを譲ることも想像出来ない。

妄想する。あの機体を纏った自分の姿を。それだけでドクン、と心臓が高鳴った。

「 やります。僕を、このプロジェクトに加えて下さい！」

「 ……ふむ、やっとその気になったか」

その言葉に、デュアンはニヤツと意地悪く笑った。

「 ようこそ、シャルロット・デュノア。今日から君はプロジェクト・ドラグーン竜騎士計画のメンバーだ」

「 はい！ 宜しくお願い致します、ヒューリック博士！」

こうして、シャルロットはプロジェクト・トラゲーン竜騎士計画に参加することとなる。

ある理由から、彼女に与えられたのは第二世代IS ラファール・リヴァイブ・カスタム？。ファイリーが現役時代に使っていたラファール・リヴァイブ・カスタム？をベースに、シャルロット用カスタマイズを更に施した機体である。

「ほらほら、反応が遅い！ 切り返しをもっと早く！」

「くっ……！！！」

シャルロットは必死に降り注ぐ弾雨を躲しながら、ラビットスイッチ高速切替で反撃を試みるも、すぐさま爆撃が襲った。

「コラアッ！ そんな速度でラビットスイッチ高速切替のつもり！？」

ISを纏ったファイリーが、右手に呼び出したアサルトカノンを一瞬でマシンガンに切り替え、容赦なく射撃を撃ち込んでいく。

「ほら、チンタラしてるから押し込まれるのよっ！！！」

再びラビットスイッチ高速切替。右手のマシンガンのアサルトライフルに切り替えてシャルロットを撃ち抜いていった。

プロジェクト最初の訓練はただの一撃さえ当てられないまま撃墜という、散々たる結果であった。

「しかし……幾ら今までまともな訓練したことがなかったとは言え、片腕相手に押し込まれるのは問題じゃない？」  
そう言つて、フィリーは一の腕の途中で無くなつた腕を振つて見せる。

交通事故による左腕損失。第二回モンド・グロッソ終了から、僅か二週間後の出来事だつた。

現在は機械式の義手や義足が一般的に普及しており、日常生活に支障はない。

だが、義手には致命的欠点があつた。ISの装着ができないのだ。

第一回と違い、第二回モンド・グロッソは織斑千冬の圧倒という訳ではなかつた。

各国代表の実力、そしてISの性能。それらが飛躍的に伸びてきており、拮抗している。

モンド・グロッソは、片腕で勝ち抜けるような甘い大会ではないのだ。

故に、彼女は引退を決意した。

一時はIS学園から教員要請の打診もあつたが、それを断り、彼女はデュアン・ヒューイックの助手として、次世代IS開発と後進の育成に務めている。

プロジェクト・ドラグーン

「竜騎士計画は、第三世代IS開発と、それを操る操縦者の育成を行うものよ。これからみっちり……あたしが鍛え上げてあげるわ」  
フィリーはニヤリと笑つて、未だ息を乱して這い蹲るシャルロット

を見下ろした。

「はあ……はあ……はい、お願い……します……」

絶え絶えになりながらも、シャルロットは強い決意を返してみせた。

今ここに居るのは、ただのシャルロット・デュノアだ。

愛人の娘というレッテルも、何も無い。ただ一人の人間、ただ一人のIS操縦者。

あの冷たい時間に比べればこの程度、どれ程のものか。

「いい覚悟ね。それじゃ……このまま地獄の模擬戦ロード、開幕するわよ……?」

「……ええっつ」

訂正。ここも結構、地獄かもしれない。

過酷な訓練にISのテストパイロットの仕事と、日々めまぐるしい

忙しさであったが、シャルロットは充実した時間を過ごした。

シャルロットを乗せた飛行機は、夜のフランス上空を飛ぶ。  
「『翼よ、あれが巴里の灯だ』……なんちゃってね」  
窓から見えるパリの夜景に、つつい名言を呟いてしまう。

シャルロット・デュノアは祖国に帰ってきた。  
ついに完成する ラファール・ドラグーン の為に。

そして越境鉄道ルートから、フランスに入国する者の影もあった。

「やっと着いたか……いくら飛行機よりチェックが甘いからって、  
流石に長旅は疲れるぜ」  
ゴキゴキと首を鳴らし、女は簡単な荷造りしかしていない鞆を持ち  
上げる。

「今日のところは、さっさとホテルにチェックインするか……忙しいくなるんだしな……ククク」  
これから行う事を思い、獰猛に口元を歪めて笑う。

亡国機業エージェント、オータム。

狂気さえ孕んだ瞳の輝きが、フランスに嵐を巻き起こさんとしていた。

第41話 ”疾風”をめぐる物語（後書き）

いよいよ、フランスを舞台にしたラファール・ドラグーン攻防戦開始。

シャルロットはラファール・ドラグーンを守ることが出来るのか。それともあえなく奪われてしまうのか。

ここからは熱血バトル小説として、彼女が主役だ！！

第42話 狙われた”竜”（前書き）

いよいよ動き出す、フランス編。

と言っても前半は過去話で、動くのは後半からですがw

皆様の予想をいい意味で裏切る展開になれば良いなと思っています。

## 第42話 狙われた”竜”

「そろそろかしらね……」

街灯の下、車に背もたれながら紫煙を燻らせ、時計を見る一人の女性。左腕を動かす度、関節部に仕掛けられたモーターの駆動音が聞こえる。

カーボナイト・ボーン  
炭素骨格によって作られた機械式義手。

外見は人工皮膚で覆われており、一見すると生身とは区別がつかない出来栄えである。

彼女の前には闇夜に輝く国際空港。

待ち人を乗せていただろーう飛行機は、彼女の上空を先刻通り過ぎた。ということとは、もう少して出てくる筈だ。

吸殻を携帯灰皿に捨て、新たな煙草をポケットから取り出す。

「ファイリーさん、煙草を吸い過ぎですよ？」

「む……っ」

ファイリーは掛けられた声に、煙草を啜えようとした手を止める。

声の方を向けば、そこにはキャリーケースを引く弟子の姿があった。

「別に良いでしょ？ これでも本数減ってんのよ」

「どうせなら、禁煙したら良いじゃないですか。その方が健康的ですよ？」

「良いのよ、別に。今更、健康に気を使う歳じゃないのよ」

「歳じゃないって……ファイリーさん、まだ25じゃないですか……」

「うっさいわね。トランク開けるから、さっさと荷物積みなさい

シャル」

キャリアケースを後部トランクに乗せて、車は夜道を走る。

「しっかしまあ……もう少し日本に滞在する予定だったのを、切り上げてくるなんてねえ」

「すみません。でも何か……居ても立ってもいらなくなつて……」

「まあ、気持ちは分かるけどね。なにせ……愛しの彼のISがいよいよよつてなればね」

「い、愛しの彼つて……ち、違いますよ！ 春斗はまだ」

「まだ……何？」

「あ、ああ……うう……」

助手席のシャルロットを横目にするフィリーに、言葉を続けられず、顔を真赤にするシャルロット。

「だつて、電話では『すごく素敵なお人』とか言つてたじゃない？ それなのに？」

「うう……一度、振られました」

「振られたつて……それで？」

「まだまだ挑戦中です。強敵がいますけど……負けません」

「だから言つたじゃない。男を落とすんなら（CYCLONE！）を（JOKER！）して（EXTREME！）すればいいつて」

「っ！？ そ、そんなの出来る訳無いじゃないですか！？」

顔を更に真赤にして声を荒げるシャルロットに、ニヤニヤとした笑を向ける。

「でも、妄想ぐらいはしてたんじゃない？ シャルはエッチい子だからね」

「え、エッチいつて……そんな妄想してませんっ！？ なつ、何を言つてるんですか！？」

「ほほう。彼からメール貰う度に、ニヤニヤしながらモニターの前で悶えてたのは誰だったかしらね？」

「~~~~~！！？」

『何でそんな事知ってるんですか！？』と、声にならない悲鳴を上げて髪を振り乱す。

シャルロットの留学の経緯を知っているフィリーだからこそ、その言葉はとてつもなくいやらしい。

茹で上がったタコよりも真っ赤になって、頭を抱える愛弟子を尻目シャルロットに、フィリーはアクセルを踏み込んだ。

今年の二月半ば頃。

世界中が初の男子IS操縦者発見に揺れる中、突然デュアン・ヒューリックが倒れ、プロジェクトチームは騒然とした。

とある軍施設で訓練中だったシャルロットも、訓練を切り上げて病院へと向かった。

シャルロットが病院に駆けつけた時には、デュアンは意識を取り戻しており、彼女も安堵して胸を撫で下ろした。

だが、事態はそれでは終わらなかった。

「シャルロット。私はもう、永くはないだろう」

「……………え？」

突然の告白。最初は理解できず、聞き返してしまった。そしてその意味を理解すると、シャルロットの全身から血の気が引いていくのが分かった。

デュアンによれば、その身は病に侵されており、もう手の施しようもないという。

「だから死ぬ前に……………君に打ち明けない事がある」

「や……………やめて下さい！ そんな……………縁起でもない事……………言わないでください！」

「シャルロット。君はきちんと知らなければならない……………ラファール・ドラグーンの真実を」

「ラファール・ドラグーンの……………真実？」

デュアンは静かに語り始める。

日本に、彼と手紙をやり取りしていた一人の少年がいた事。そしてその少年がある日、一機のISの設計図を贈って来た事。

それを基にして、ラファール・ドラグーンは開発されているという事を。

「そんな……………それじゃあ、あのISは……………!？」

「あれは、私の設計したものではない。君と同じ年の……………一人の少年が作り上げたものだ」

「っ……………!」

「シャルロット、日本へ行きなさい。そして彼を探し出して……………リンドブルム を完成させるのだ」

ラファール・ドラグーン開発最大の障害は、リンドブルムの制御プログラムだった。

イメージ・インターフェイスと直結させた新機軸のシステムは、そ

のプログラム構成が複雑であり、今これを作れる人間はデュアン・ヒューイックを除いて他にいない状況だった。

「でも……何の手掛かりもないのに……」

「手掛かりならばある」

デュアンは小棚の引き出しから、カギを取り出した。

「これは……？」

「私の執務室の引き出しのカギだ。そこに一通の手紙が入っている」

「それが……手掛かり？」

デュアンは頷く。

「彼を見つけ、事情を話せば……きっと、力を貸してくれる筈だ」

「でも、もし見つからなかったら……？」

「今はそんな事を考える時ではない。必ず見つける、絶対に見つかる」と信じるのだ

「……はい」

渡されたカギをジッと見つめながら、シャルロットは頷いた。

科学技術局に戻ったシャルロットは、その足でデュアンの執務室へと入った。

机の引き出しの鍵穴に受け取ったカギを挿し込み、グルリと回す。ガチャツ、という音と共にロックが外れ、シャルロットは引き出しを静かに開けた。

果たしてそこにあったのは数枚の書類と、開封された一つの国際郵

便封筒。

シャルロットは封筒を手にとると、その宛名を見た。

「ハルト・オリムラ……？」　「オリムラ」って……まさか？」

「へえ、ISを使える男か……しかし、”オリムラ”って……また」

「フリーさん……？」

「いや、ちよつと昔の顔見知り思い出してね……”オリムラ”って名前は日本でも珍しい名字だからね。他人って訳は無い筈……ククッ」

「……？」

日本で見つかった、世界唯一の特異ケース『イチカ・オリムラ』。彼の名字と同じ差出人。ファミリーネーム

シャルロットの手は自然と、中の便箋に伸びていた。三つ折りにさ

れた手紙をゆつくりと開いていく。

『拝啓 デュアン・ヒューイック様

まずは久しく手紙を送れなかったことをお詫びします。その上で不躰ながら、博士に一つお願いをしたいのです。

フランスのIS企業のデュノア社はご存知でしょうか？そこに一人の少女がいます。名前はシャルロット・デュノア。

彼女はデュノア社の社長令嬢でありながら、その生まれと高いIS適正故に、デュノア社のテストパイロットとして冷遇されています。

私はある理由から彼女の境遇を知り、そして彼女を助けたいと思いました。

ですが、私は自由に動くことの出来ない身。そこで、どうか博士に彼女を助けて欲しいのです。

身勝手な願いだというのは重々承知しています。ですがそこを曲げて、どうか彼女が自分の生き方を選ぶように力になって下さい。

交渉の助けとなれるよう、切り札を同封します。

ハルト・オリムラ  
『

「……………」

これはどういう事だ？ どうして日本にいる見ず知らずの人間が、自分のことを知っている？ どうして、自分を助けたいなどと言う？

シャルロットの手は自然と震えていた。

デュアンのお話を合わせれば、この切り札というのは ラファール・

ドラグーン の設計図だろう。

新技術の塊である新型ISの設計図ともなれば、その価値は黄金よりも遥かに高い。

ましてあれ程のISを設計したとなれば、世界中に彼の名前を知らしめることが出来る筈だ。

なのに、その設計図と引換にしてまで何故、自分を助けようとするのか。

「ハルト・オリムラ……。……。？ ハル、ト……。？」

それは殆ど無意識の呟きだった。その直後、戦慄が彼女の中を駆け巡った。

一人だけ居るのだ。彼女の生まれや境遇、その全てを知る唯一の日本人が。

H A R U。

顔も声も知らない、ネットワークの向こうの友人。いや、彼女の中では友人というカテゴリーには収まってはいなかった。

彼のハンドルネームが、本名から取ったものであることは知っている。

ならば、これが偶然である筈がない。

「ハルト・オリムラ……。」

ギュッと、その手紙を抱きしめる。世界的名誉と引き換えに今の自分がいるのだと、痛い程に分かってしまった。

嬉しい気持ちと、申し訳ない想いとが混ざり合い、グチャグチャになってシャルロットの瞳から零れて落ちて行った。

この数日後。シャルロット・デュノアは日本のIS学園へと行く為の  
手続きに入る。

だが元々は彼女の入学予定は無かった為、入学申し込みの期限はと  
つくに過ぎてしまっていた。

更に竜騎士計画はIS操縦者育成も目的としている為、現時点での  
シャルロットの留学にはフランス政府が難色を示していた。

そこをデュアンが押し通す形で、彼女はついに六月、日本へと旅立  
った。

ファイリーの運転する車はゲートを抜けて、いよいよ施設内に入る。  
おそよ2ヶ月ぶりのそこは、留学当時は建設中だった施設が幾つか  
完成していた。

「あそこって、ドラグーン用の新しい武装実験施設でしたよね？  
何時、完成したんですか？」

「ああ、ついこの間ね。ラファール・ドラグーンも明後日のデビューに向けて、あそこで最終調整中よ」

「明後日？ 明日じゃないんですか？」

「あのねえ、本当ならもう少し後だったのよ？ それを無理矢理に前倒しさせたんだから……誰かさんの為だね？」

呆れたとばかりにフィリーは肩をすくめる。元々の予定を前倒しさせた原因であるシャルロットは、申し訳ないと助手席で小さくなった。

車は最も高い建物

第三技術研究棟の前で停車する。

「おお、もう帰ってきたか」

「っ！？」

あの時の焼き直しのように、入り口には一人の老人が立っていた。

「ヒューイック……博士……！？」

驚きに見開くシャルロット。彼が退院しているなど聞かされていなかったのだから、それも当然の事だ。

「うむ。久しぶりだな、シャルロット」

「久しぶりだなんて……何時、退院なされたんですか！？ 僕、全然知らなかったですよ！？」

「あゝ……うむ……まあ、あれだ。色々とあれが何な事情がだな……」

ヒューイックは何故か言葉を濁す。それを見て、フィリーは溜息を吐いた。

「博士、正直に言った方が良いですよ？」

「う、むう……」

「……どういう事ですか？」

怪訝な表情で尋ねるシャルロットに、フィリーは何とも言えない複雑な顔を見せた。

「博士が倒れたのはね……単なる寝不足と過労よ」

「……は？ いや、だって……もう永くないって……？ ずっと入院もしてたのに……？」

思わず聞き返す。あれだけ深刻そうに言っておいて、それはないだろう。

「そりゃ、70を超えれば先なんて永くないでしょうよ。入院は単なるパフォーマンスだったようよ？」

「……」

言われれば確かにそうだ。酷く当たり前のことだ。シャルロットは呆然とし、そして。

ガチャン、パンツッ！

「ちよつと待て！？ 何故、グレー・スケール灰色の鱗殻を用意する！？ 流石にそれは即死するぞ！？」

「博士……僕がどれだけ心配して……なのに、ただの寝不足と過労……！？ どうして、そんな大嘘吐いたんですか！？」  
「分かった！ 言うから……それはしまえ！？」  
「ですが断ります。返答次第でドスンと行きますから」  
「だから、それは死ねると言うてるだろう！？」  
「70過ぎたら先は永くないんですから、今亡くなっても同じだと思いますか？」  
「思わんわっ！！ とにかく話を聞けいっ！！」  
「ジリジリと距離を詰めてくるシャルロットを何とかなだめようと必死に叫ぶと、シャルロットはとりあえず灰色の鱗殻グレー・スケールを引いた。ただし、展開状態はそのままだ。

「実際、私が倒れたことでR・ドラグーンの完成が大幅に遅れる可能性があったのは事実で、彼を探してもらって協力を仰ぐよう言ったのも明確な事実だ。だが、それだけであんな芝居はせんし、元々の入学予定者に密かに指示するのでも、事足りたのだからな」  
「だったらどうして……？」

「どうしても何も……好いた男に会いたくないんじゃないかと思ってな？」  
「なあっ……！？ なななな……何で博士まで知ってるんですか！？」

「そりゃあ……のお？」  
と、デュアンの視線がシャルロットの後ろのフリーリーに向かう。  
「……フリーリーさん？」  
ガチャン、とハイライトの消えた瞳でシャルロットが振り返る。  
「いや……つい、博士にシャルのメールフレンドの事言っちゃって……おっと」

「バコーンッ！！ と、バンカーがアスファルトを砕く。因みにその場所に居たフリーリーはひょいと飛び退いて躲している。  
「危ないじゃない。それ当たったらさすがに痛いわよ？」

痛いどころか普通なら死にそうなものだが、フィリーは涼しい顔でシャルロットを諷める。

「当たつたら、でしょう？ 当たらないように、躲し続けてれば良いじゃないですか？」

「うん、そりゃしんどそうね」

ジリ、ジリと距離を詰めるシャルロット。対するフィリーは余裕の表情で、煙草を取り出して火まで着けている。

「ふんっ！！」

ドガンッ！

「でやあっ！！」

ズガンッ！！

「とりやあっ！！」

ボガンッ！！！

地面に次々と開けられていく穴。そして走る亀裂。しかし一発もフィリーには当たらない。

「ほらほら、もっと腰を入れて打ちなさい。手だけで振っても当たらないわよ？」

「ずっと思つてましたけど、本当に人間ですか！？」

「失礼ね。チフユに比べたら遙かに人間やっつてるわよ」

同時刻 日本。

ピシッ。

「っ！？ あの……織斑先生？」

「何故か突然、昔の知り合いと話をしたくなったな……」

「だからって、握力だけで強化プラスチック製の湯のみに亀裂を走らせないでください！！」

「 えー、床の修繕の手配はいつも通りとして……シャルロット、ISを渡しなさい」

「はあ……はあ……え？ リヴァイブをですか？」

予備弾薬全てを使い切ったところで追いかけてこは終了し、デュアンは息を切らしてうづくまるシャルロットに言った。

「そうだ。もうすぐ専用機が入れ替わるし、データも今の内に解析しておきたいからな」

「ああ、そうですね。……はい」

シャルロットは、ネックレスを首から外して渡す。

「では、今日はもう休みなさい。明後日には忙しくなるのだからな」  
「……はい」

首から消えた感触に指を這わせながら、シャルロットは答えた。

「相変わらず、書類が山のようになってますね」

施設内、局員寮。シャルロットとフィリーは部屋へと入る。

シャルロットがチームに所属していた時から、二人は師弟として同室で寝起きをしていた。

というよりも、フィリーが使っている部屋は3LDKの広さで、およそ一人で使うには広すぎる。

それと共に、身体的ハンデを抱えるフィリーを補助する意味もまた、同室の理由である。

「さあて、まずはシャワーでも浴びてきなさい。その間に、軽く食べれるものでも用意するから」

「はい。ありがとうございます、フィリーさん」

「その代わり、明日の朝食はあんたが作りなさいよ？」

「寮にも食堂あるのに……相変わらず妙な所は拘るんですね？」

「生憎とこの国のコースの拘りとか合わないし、それにあのチフユ

が家事が全くできないって知ったら……そりゃあ、拘りたくもなるわよ」

「……」

などと言って、笑いながら冷蔵庫の中身を漁っていると、突然フリーの端末がメール着信を知らせた。

「ん……何かしら？」

端末を取って、メールボックスを開く。そこにあつたのは一文だけ。

『お前か？』

「……」

送信者は織斑千冬だった。

しかも宛先を見るに、ピンポイントで送信している。

「……ほらあ。あたしはまだ、普通に人間してるでしょ？」

と、シャワールームの弟子に呟いたフリーだった。

翌日の朝。

部屋に揺れるコーヒーの香り。

「おまたせしました」

食卓にはフィリーの好みに合わせた朝食が並ぶ。

「といっても、トーストにハムエッグ、サラダとデザートにフルーツの缶詰だが。」

「おお、久しぶりのシャルの料理！ いやあ、楽しみにしてたわよ」  
フランスの伝統的朝食は甘い物が並ぶ上、コースのように食べるために同じ皿に二度もフォークを付けない。

「そうだった国民性に関してだけは、フィリーは未だに馴染めなかったりする。」

同居当初に始めた事は、シャルロットの脱フランス式であったりする。

「……ところで、今日の予定はどうなってるんですか？」

「とりあえず、午前は空いてるわよ。午後からは明日のデモンストラーションの為の打ち合わせよ」

「式典やるんですよね……やだなあ」

「あくまでも主役はISだから良いじゃない。あたしなんて、自分がメインの式典なんて何回やらされたか……」

「……ああ、そうですね」

トーストをかじりながら、シャルロットは同情の声を上げた。

「な、他に人事みたいに言ってるのよ？ あんたが代表になったら、そんな目にあんたが遭うのよ？」

「う……」

トーストをかじる口が止まる。どうやら想像してしまったようだ。

「ま、折角の半休だし……買い物にでも行ってみる？」

「買い物……はい、行きましょー！」

張り切った返事を返して、シャルロットはハムエッグにナイフを掛けたのだった。

科学技術局から数キロ離れた高台の上。二人の人物がそこにはいた。一人は双眼鏡で施設を注意深く見ていたが、やがてそれを外した。

「……あそこに例のISが？」

「はい。ですが警備は厳重で、そう易々と潜入は出来ません」

「だろうな。仮にもフランスの国運を懸けた第三世代ISだ。生半可な警備なんざしてねえだろうさ」

そう言いつつも、女の顔は凶悪に歪む。それだけ重要かつ重大な物を、これから奪い去ってやろうという愉悦。

そして、そんな途方も無い力が自分の物になるという、恍惚。

「明日、あの施設では披露式典が行われます。そこが唯一、潜入のチャンスです。必要な物は全て揃っています」

もう一人の女は持っていたA3サイズ程の封筒を渡した。

「ああ、ところで……一つ、確認しときただけだよお」

「何でしょうか？」

「多少なら、暴れるのは……ありが？」

「人的被害は極力避けるようにとの事です。施設に関しては言及されていません」

「オーケー、よく分かった……くくつ、楽しくなりそうじゃねえか……！」

さぞ楽しそうに、嬉しそうに、女　　オータムは堪え切れない笑

いを零すのだった。

第三技術研究棟、地下ISルームにおいて、とある作業が行われていた。

装甲を外され、コードを何本も挿されたオレンジのISが、そこにはあった。

「では、ラファール・リヴァイブ・カスタム？のコアブロッ

クの接続を解除します」

「慎重にな」

デュアンの見守る中、ラファール・リヴァイブ・カスタム？からコアが、ブロックユニットごと外されていく。

「ですが博士……この実験は成功するのでしょうか？」

「もとより理論証明の為の実験だ。失敗してもどうという事はない。それより、R-ドラゴンの最終調整はどうなっている？」

「そちらは滞り無く。全ユニットは正常に機能しています」

「うむ。ならばよし」

やがて外されたコアブロックが、数人の手によって台へと乗せられた。

時は過ぎ、いよいよ式典当日の朝である。

シャルロットはISスーツに着替え、その上から軍用の制服を着ていた。

IS開発に遅れていたフランスにとって、この時はいよいよ待ちわびた瞬間であった。それ故、大統領を含め、各界の要人も多く式典に参加する。

科学技術局の敷地内に設けられた特別会場では警備に関する最終確認と、式典の予行が行われていた。

「いよいよね」

「はい。やっと、ここまで来ました……」

同じく制服を着たフィリーの言葉に、シャルロットはギュッと顔を引き締める。

ラファール・ドラゲーンが、ついに世界に向けてその翼を広げる時だ。

同時刻。ミラーシールドに赤いスーツの女性が、敷地内を歩いていた。首から下げているのはマスコミ用のIDである。

「ふうん。無駄に広いだけじゃないわね……警備もしっかりしてるじゃない？」

などと言いながら、周囲を見回す。式典は午後からである為、要人はまだ表に出てきていない。

だが、今回の彼女の目的はそれではない。

「さあて……お仕事開始、しようかねえ」



(警備が緩くなるこのタイミングで、一番端にある施設で爆発……?)

爆発の起こった第二研究棟の位置はラファール・ドラグーンのあるIS武装実験施設の反対側である。

フィリーは周囲を見回す。派手な爆発と轟々と上がる炎、そして黒煙に誰もが注意を引かれ、ここに人が集まりつつある。

「シャル、あなたは博士の所に行きなさい！　まだ第三研究棟にいる筈だから！！」

「えっ！？」

「嫌な予感がするの！　あたしは格納庫に向かうから、ISを受け取ったらすぐに出て！！」

「っ……分かりました！！」

シャルロットは返事をするや、その足を返して走りだした。フィリーも近くにあつた車に乗り込んで、IS格納庫へと走らせた。

IS武装実験施設。その入口を固めるのは武装した軍の兵士だ。

「爆発か……テロのたぐいじゃないだろうな？」

「まさか。ここは国の重要施設だぞ？ そんなところに何処が……誰だっ！！」

兵士が正面に現れた女に気付き、銃を向ける。

「報道関係者か……ここ一帯への立ち入りは許可されていない筈だ。即刻もどれ！ さもなければ身柄を拘束することになるぞ!？」

「あら、それは困ります。でも、私もそう引くことが出来ないんですよ？」

困ったようにいう女だったが、その口元がわずかに晒いに歪んでいた。

「っ！」

瞬間、兵士は女に向けて発砲していた。連続して炸裂音が響く。

警告ではなく、完全に殺害を狙った射撃。普通ならば、既に事は終わっている。筈だった。

「はっ、いきなりぶっ放してくるたあ……死んだぞ、テメエ!!」

しかし、それは一発も女には当たらなかった。その身を、まるで蜘蛛の足のような物が守ったのだ。

「あ、IS……だと!？」

「死ね」

開かれた蜘蛛の足の先端から、閃光が走った。

門ごと兵士を吹き飛ばしたオータムは、いよいよその中へと足を踏み入れる。

中にも当然、警備の兵士や最終チェックをしている研究員らの姿もある。

そして、施設中央。そこにあつたものを見つけ、オータムは狂喜と狂気の声を上げた。

「見いつけたあ……っ！！」

IS格納庫にあつた量産型ラファール・リヴァイブ・カスタム？に制服のまま乗り込み、ファイリーは急いで向かう。

行く先はIS武装実験施設。これが事故でなく、故意に起こされたのであれば、その目的は一つしか無い。

「っ……やっぱりか……！！」

ハイパーセンサーが見せるのは、破壊された施設。もうもうと煙が上がっている。

スラスターの出力を上げて、破壊されたゲートから中に滑りこむと、そこからの急停止に踏ん張った脚部ユニットと床が擦れ、火花を散らす。

「っ……これは……」

そこは余りにも酷い状況だった。兵士、職員がそこら中に倒れている。偶然が故意か、しかし全員がギリギリで死なないでいる。

すぐにでも救助をしたいところだが、事態はそれを許しはしない。

「こいつがフランスの第三世代機……いいねえ、最高だ……!!」

何故なら、乗り手のいない筈の ラファール・ドラグーン に、乗り込んでいる者がいたからだ。

そいつは、R・ドラグーンの状態を一つ一つ確認するかのように、指を、スラスター翼を動かしている。

「なあ、あんたもそう思わないか？ このIS……すげえよなあ……フランスなんかに使わせるにや、勿体無いシロモノだぜ……！」  
間違いない。この女が全ての犯人だ。フィリーはそう直感した。

「その機体は……あんたみたいなのが、使って良いもんじゃないの

よー!!」

フィリーはアサルトライフルを右手に、ISアーマー非装備の左手にはマシンガンを展開する。

「はっ！ 第二世代のカスタム機か……丁度良い、こいつの遊び相手になつてくれよー!!」

狂気の声と共に、リングユニット リンドブルム が稼働を開始する。

それと共にリングが発光し、スラスター翼が開く。

「すぐに壊れんじゃねえぞ……？ しらけちまうからなあっ!!」

その手にエネルギーライフルを展開し、オータムは引き金を引いた。

夢の翼は狂者によって奪われ、凶悪なる破壊者へと姿を変えた。

第42話 狙われた”竜”（後書き）

ついにオータム参戦、ドラグーン装備でフランスの英雄と激突。そしてコアを外され、使用不能となっているR・リヴァイブ。

シャルロットはこの危機に、如何にして立ち向かうのか？  
次回も、怒涛の展開でお送りしたいと思います。

第43話 ”狂竜”舞う(前書き)

ラファール・ドラグーン攻防戦。

最新鋭機対量産機。

テロリスト対フランスの英雄。

ちょっと短めですが、どうぞ。

### 第43話 “狂竜” 舞う

同時刻            イギリス某施設。

黒煙が至る所から上がり、地には倒れ伏した兵士達に混じって職員だろうか、白衣を着た者達もいた。それだけではない。警備をしていたISもまた破壊され、絶対防御によって意識を喪失していた。

それらの破壊の限りを成したのは            深い青色をした、たった一機のIS。

イギリス所属IS    ブルー・テイアーズ二号機    サイレント・ゼファイルス 鳴かぬ緑小灰蝶。

そしてそれを駆るのは、正規の操縦者ではない一人の少女。バイザーに隠された瞳に暗い敵意と悪意を滲ませ、闇の如き黒髪を風になびかせる。

「任務完了。さて、フランスの方はどうなっているか……？」  
呟くや、サイレント・ゼファイルス はフワリと浮かび上がり、そのまま加速。蒼穹へと姿を消した。

後に残されたのは、ただ破壊の爪痕のみであった。

施設内に緊急事態を知らせるサイレンが鳴り響く。

閃光が走り、施設外壁を撃ち抜く。爆風と爆煙を貫いて飛び出すのはネイビーカラーのIS ラファール・リヴァイブ・カスタム？。「チツ……！ いきなり”レベル2”でぶっ放してくるとはね！」かつての専用機カスタムと同じ名称ながら、しかしその性能はそれには及ばない。

カスタム？の売りとも言える烈風の如き高機動も、それには無い。

そしてR・リヴァイブ・カスタム？を追って飛び出すのは、フランスの希望にして世界最強クラスのスペックを誇る最新鋭第三世代IS ラファール・ドラグーン。

それを駆るは、亡国機業のエージェント オータム。

「ハッハーツ！ 逃げる！ 踊れ！ 虫みてーになあ……！」

オートムが引き金を引く度、破壊の閃光がリヴァイブを襲う。

「おっと、ほっ、なんとっ！」

幾度と無く襲う光弾を、しかしフィリーは余裕さえ見せつつ、巧みに躲していく。それと同時に、アサルトライフルとマシンガンを斉射し、的確に命中させていく。

「はっ、やるじゃねーか！ 腐っても元国家代表、部門優勝者<sup>ヴァルキリー</sup>ってか……？」

「違うわね。あたしが”フィリー・ミヤムラ”だからよ」

「意味が分かんねえな……！」

リンドブルムの出力をレベル1に落とし、速射モードで引き金を引く。

フィリーはグルッとターンを決めて光弾の雨を躲すと、オートムを

挑発するように銃口を弾ませる。

「つまり、アンタはその程度のオツムって事で……OK？」

「ぶっ殺す！」

アンロックユニット

オータムは非固定浮遊部位のスラスタ翼から光羽を展開すると、背後の炎を吹き飛ばして一気に加速。フリーに襲いかかった。

同時にエネルギーライフルを収納。代わって大型のサーベルを展開。刃部分がエネルギー光で輝き出す。

「コイツで真つ二つにしてやるぜ！！」

「っ！」

真上から振り下ろされる一撃。直撃は勿論、防御さえ許されない。

ラファール・ドラグーン用大型剣 マチエール・スライサー。西洋剣の圧撃と日本刀の斬撃を併せ持つ、必殺の重量武装だ。

フリーは高速切替で、アサルトライフルを逆手のブレット・スライサーに替え、その一撃を受け止める。

一瞬の間もなく、ぶつかつた刃を支点にしてブレット・スライサーを側面に回し、同時に全身を捻りこんで下に弾き落とす。

「っ！？」

驚愕するオータムの左こめかみに、大型の銃口が突き付けられる。マシンガンから持ち替えたショットガン レイン・オブ・サタディだ。

「JACK POT！」

人差し指が曲がり、マズルフラッシュがオータムの視界を染め上げる。

更にブレット・スライサーもショットガンに切り替え、連射。途切れる事無き弾幕が最新鋭機に襲いかかる。

「おらあっ！！」

しかし、それに構わずオータムが横薙ぎにマチエール・スライサー

を振るう。

フィリーは左のショットガンを盾にして受け、その勢いに逆らわずに回転しつつ後退。

更にも隙に切り替えた右のアサルトカノン ガルム をオータムに向かつて発射。爆炎が上がると共に一気に距離を取った。

「ショットガンのゼロ距離直撃で、絶対防御は行った筈……でも一発だけね。普通なら半分は持っていけるのに……」

もうもうと上がる爆煙を注視しつつ、フィリーは半分ほどに斬り裂かれたショットガンを捨てる。

通常なら傷が付く程度だろう一撃も、マチエール・スライサーの威力の前にはそうも行かない。

リヴァイブにインストールされている武装は12。その内の一つを失い、更に不利は続く。

（ちょっと銃撃った程度で、関節部の駆動がヤバイとか……柔過ぎでしょう!?）

左義手の関節部が発砲の衝撃に耐えられず、モーターが異音を放っている。

フィリーは柔過ぎというが、この機械義手の強度は実際は相当のものだ。

この腕で、素人が打てば脱臼、骨折もするマグナムでさえ容易に撃てるし、関節部も異常を起こしたりなどしない。

ただ唯一、使ったのがIS用武装であった事が原因だった。

元々、IS用銃火器は大型であり、その火薬量も人間用の比はない。それを連続して使用すれば、耐久限界をあっという間に迎えてもおかしくはない。

「 ああ？ 妙な音が聞こえんなあ……？ 」  
「 ……自分を連れに来た死神の足音じゃないの？ 」  
「 いやあ、テメエのその義手からだぜ……ククツ、どうやらトラブル  
ツたみてえだなあ？ 」  
爆煙が晴れ、そこにはほぼ無傷のオータムの姿があった。

### アイギス・ドライブ 正常稼働

「 やっぱり、 アイギス・ドライブ ……！ 」  
「 凄えよなあ。この アイギス・ドライブ ってヤツはよお？ 」

アイギス・ドライブ。  
イメージ・インターフェースをトリガーにして、 エネルギー変異  
型サードグリッド装甲 の強度及び性質を変化。攻撃に対して最も  
適切な強度と性質に変異し、物理攻撃のダメージを最低限に減衰さ  
せるといふ、 ラファール・ドラグーン の防御システム。  
これによって、純エネルギー武装以外の攻撃を弱体化させる事がで  
きる。

「 作っておいてなんだけど……豪く厄介なもの作ったわね、ウチ 」  
実弾系武装しか無いリヴァイブにとって、これほど相性の悪い相手  
もない。ファイリーは思わず匙を投げたくなった。

だがそうも行かないと、ファイリーは左手をマシンガンに切り替える。  
「 おーおー、不利を悟ってもまだやる気かよ？ 立派だねえ 」

「 不利なのは最初から分かったからね。それでもダメージが無い訳  
じゃない。つまり……落とせない相手じゃないって事よ！ 」

「その前に、テメエが落ちろよっ!!」

オータムはウエストアーマーに、ビームカノン グロワール を展開。同時にエネルギーライフル アヴェルス を展開し、一斉射撃を開始した。

「オラオラオラオラッ!!」

リンドブルムの生み出す膨大なエネルギーに任せて、オータムは回避行動をとるフリー目掛けて乱射する。

ズウウウン……ッ!

「ッ……しまった!？」

流れ弾が、第一研究棟に当たった。幸いにして遮断シールドが展開されており被害はない。

だが、マスコミや各関係者の避難誘導もままならない状況で、ラフアール・ドラグーンの火力は脅威以外の何物でもない。

上手く被害の出ない場所に誘導しようにも、一瞬の隙を突かれれば一気に離脱される可能性が高い。

そうさせないためにも、フリーはまず高度を取る。相手の上を取れば、射撃は下に向かなくなるからだ。

それだけではない。実弾武装にとって重力加速のプラスは、地味に大きい。

下から襲い来る、一発で形勢を覆す破壊の嵐にその身を躍らせながら、マシンガンの引き金を引く。

「っ……チマチマと、ウザってえなっ!!」

降り注ぐ弾雨にオータムが苛立ち、吠える。

ドドドドドオオオオオオソツ！！

そこに別角度から襲いかかる弾丸。消火活動をしていたラファール・リヴァイブ3機が、増援として来たのだ。

「糞があ……舐めたこととしてんじゃねえぞ！！」

激昂したオータムがスラスターを全開にして突撃。増援に向かって行く。

「っ！ 逃げなさい！ 早く！！」

ファイリーも瞬間加速イグニッションブーストでその後を追うが、そもその速度に違いがあり過ぎた。

「うっ！？」

一瞬でラファール・リヴァイブの前に接近したオータムが、左手でパイロットの顔面を鷲掴みにするや、背後のリンドブルムが強く発光し、左掌部にエネルギーを集束させる。

「ひっ……！！」

「死ね」

「いやああアアアアアアアアアアッ！！」

絶叫を呑み込んで、閃光が顔面を撃ち抜く。爆風が機体を彼方へとはじき飛ばした。

左掌部に仕込まれた近接用武装 プレ・クラテール。リンドブルムのエネルギーを直接叩きこむという単純明快にして、それ故に高威力の武装。

いくら絶対防御があるとはいえ、あれを顔面に喰らって意識を喪失しない筈がない。

「まずは一匹……っ！」

何よりその凶悪な攻撃は喰らった本人は勿論の事、他の二機のパイロットの戦意すら喰らい尽くしていた。

恐怖に凍りついた思考が再起動する瞬間、既に狂竜の牙に掛けられ

ていた。

「二匹いつー!!」

イグニッションブースト  
瞬時加速から、振り上げた マチエール・スライサー がIS装甲を斬り裂き、更に グロワール を撃ち込んで落とす。

「ラストオツ!!」

醜悪に高笑い、オータムが最後の一機に向かう。

「ひいつ……!!」

短い悲鳴を上げて、必死になってトリガーを引く。だが、狙いも定められずバラバラに撃たれた弾など、オータムには掠りもしない。死の恐怖。絶対防御があるのにそれが心を支配する。

今まで何度も訓練で戦ってきた。もっと過酷な訓練も超えてきた。なのに恐怖が全身に茨のごとく巻き付き、彼女から積み上げてきた全てを奪う。

当然だ。あれは人の心に爪痕を残し、苦しめることを喜びとする悪魔なのだ。

そんな者と、戦ったことなど 無い。

どうすれば良い? どうすればここから生きて帰れる?

「右ショットガン! 左カノン! シールド全面に展開っ!!」

「っ……!!?」

有無を言わせぬ命令。だが、恐怖に凍りついていた反射がそれを無意識に行う。

両手に指示通りの武装。背部のシールド全てを全面に構え、その隙間から銃口を出してトリガーを引く。

「ぐうっ……!!」

アサルトカノンの爆圧と、ショットガンの面制圧力。そして全面展開のシールドが、狂竜の顎を一瞬だが食い止める。

その一瞬が、彼女の生死を分けた。

爆煙を抜けて、オータムが迫る。振り抜いた マチエール・スライサー がシールドを斬り裂き、オータムがニタリと笑う。

ガアアアアアアンツ！！

止めの一撃を撃とうとした瞬間、オータムを吹っ飛ばす一撃。装甲同士の激突する激しい音が響いた。

追いついたファイリーが、左腕にシールドを展開し、突撃を仕掛けたのだ。

「今の内に下がりなさいっ！」

「ッ はいっ！」

その激しい剣幕に急いで後退する。その背では既に、攻防戦が再開していた。

「っ……………！」

左のシールドを巧みに操り、カウンターによる反撃を行うファイリーだったが、徐々にラファール・ドラグーンの圧倒的攻撃力に押されていく。

ギイイイイイン！！

振り抜かれたブレードが、シールドごと義手を斬り捨てる。断面からバチバチと、スパークが走った。

「っ……この義手高いのよ!? あんたん所に請求書送りつけてやるから、所属言いなさい!!」

「はっ! だったら一生、気にならないようにしてやるよ!!」

「生憎と、あたしの最後は『子供や孫やひ孫に、やっと死んだかって言われるぐらいの大往生』って決めてるのよ!!」

戦いのステージが施設上空から移動し、近隣の山間部へと移る。

入れ替わり立ち代り、攻撃と迎撃を繰り返して飛翔する二機のI.S.だが、ついにファイリーが捉えられた。

片手のハンデはいくら高速切替ラピッドスイッチを駆使しようとも如何にもならない。腕一本では、攻撃も防御もどちらかしか出来ないからだ。

アヴェエルス の光弾がスラスタを掠め、一瞬の隙が生まれる。

その一瞬で、オータムは瞬間加速イグニッションブースト。ゼロ距離に付けると、そのまま

グロワール の銃口をファイリーの腹部に突き立てる。

「まずッ……!!」

「終わりだあ!!」

閃光が空に走り、英雄が地へと叩き落された。そこに降り注ぐのは破壊の流星。

「ごホツ……ゲホツ……！」

全身に走る激痛。絶対防御がありながら、しかしダメージは深刻。致命領域対応こそないが、その寸前にまで追い詰められていた。

「はっ、いいザマだなあ……ええ？」

「っ……がはっー！」

まるで道端のアリを踏み潰すように、オータムは容赦なくフィリーを踏みつける。

ヴァルキリーの称号を持つ、フランスの英雄。

名誉と賞賛を浴び、光の中で生きる者が今、自分の足元で醜く倒れ、平伏している。

オータムはその愉悦に全身を震わせた。  
とほしめ、辱め、弄び、蹂躪する。なんという快感。なんという快  
楽。これだけで絶頂を迎えてしまいたいそうさ。

「ぐ……がつ……」

ゆるゆると、フィリーの指が動く。最早反撃の力も無いというのに  
何をしようというのか。  
オータムがそれを見てみると、フィリーは内ポケットからすっきり  
潰れた煙草のケースを取り出した。

震える指で一本を取り出し、口に啜える。そしてライターで火を着  
けた。

紫煙が昇り、オータムの鼻先を掠める。

「……あら、邪魔しないのね？」

「人生最後の一服だろ？ 精々、楽しめや」

強者の余裕とばかりに晒うオータム。その顔を見て、フィリーは「  
ククツ」と笑いを噛み殺した。

「……何笑ってやがる？」

「いやあね……アンタ今、自分が勝ったとか思ってるんだろ？ なっ  
て……そう考えたら……つい……ククク」

「ああ？ もしかして、腕があれば勝ってたのは自分とか、専用機  
があれば負けなかったとか……んな事、言いたんじゃないだろうな  
あ？」

「まさか。どんな状況だろうと……立ってる奴が勝ちよ。あたしは  
負けてアンタは勝った……間違っちゃいないわ」

「……？」



イイイイイイ

「……………んだと？」

イイイイイイイイイイイイイイ

「なんで……………あの機体が……………！？」

イイイイイイイイイイイイイイイイツッ！！

森林を吹き飛ばさん勢いで、竜翼の如きスラスタ―翼が光波を放つ。  
背中に山吹色サンライツイエローの光を放つリングユニットを持ち、ISアーマーはオ  
レンジとホワイトのツートンカラー。

吹き付ける烈風に深いブロンドの髪を踊らせて、その手には巨大な対戦車ライフル。

マガジンを落とし、リロード。速度を維持したまま、望遠越しのオータムに狙いを定めて引き金を引く。

「クソツ……どういう事だよ!？」  
オータムは混乱のまま、それを躲す。

「いくらフランスがコアにあんまり余裕無いらって、最新鋭機が一機だけだなんて……ある訳がないでしょ?」

それは地面をえぐるようにライディングすると、ファイリーの前で対戦車ライフルを地面に捨て、そして上空のオータムを睨んだ。

「これがフランスもう一枚の切り札……あたしの弟子 シャルロット・デュノア と ラファール・ドラグーン・タイプ? よ!」

新たな翼を得たシャルロット・デュノアが、ついに戦場に降り立った。



第43話 ”狂竜”舞う(後書き)

いよいよやってきた、我らがシャルロット!

身にまとうのは突如として登場した謎のIS。  
フランス編もいよいよ佳境です。

Another Side 目覚めよ、新しき”翼” (前書き)

連続投稿。

43話の裏側話。

シャルロットのISの秘密が明らかに？

オリジナル設定、独自解釈上等で行ってしまいます。

「この揺れは……?」

腹の底を揺るがす振動に、第三研究棟応接室にいる面々が顔をしかめる。

「何事だ?」

デュアンは事の次第を確かめるべく、通信を繋げる。

『第二研究棟で爆発です。一階東側外壁が破損。現在避難誘導と消火活動中です』

「なっ……! 博士、ISは無事なんだろうな!？」

ライトグレーのスーツに身を包んだ、40代程の男性が大焦りでデュアンに迫る。

「落ち着け、大統領。あそこは関係ない。だが、これは……事故ではないな……襲撃か?」

「なんだと!? 一体何者だ!? ここに襲撃とは……!!」

「とすると……まさか、向こうの狙いは?」

『ファイリーさんから緊急通信! 武装実験施設が襲撃を受け、ラファール・ドラグーンが奪われました!』

「ッッ ……!?」

『施設内に居た警備兵、職員、重傷者多数! 現在、賊とファイリーさんが交戦中です!』

「……むう、やはりか」

「博士! 落ち着いている場合ではないぞ!? ドラグーンは我がフランスの希望だ! あれが奪われたとなったら、もう取り返しがつかない!」

「……お主、本当に一国の大統領か？」  
狼狽する大統領に、デュアンは呆れ気味に返した。

「博士。シャルロットと、リヴァイブは？」

大統領とは別の ブラウンのスーツを着た男が、腕を組んだままデュアンに問う。

「シャルロットはこっちに向かっていている。だが、リヴァイブはコアをブロックごと外したから使えん」

「そうか」

男は短く返して、深くソファアに腰掛け直す。と、応接室のドアが勢い良く開かれた。

「失礼します！ 博士、僕のリヴァイブは つ！？」

飛び込むように入ってきたシャルロットは、そこにいる人物に声を止めた。驚きと困惑に、顔が強張る。

「お、お父さん……どうして？」

「私はデュノア社の責任者だ。共同プロジェクトの集大成、見に来ておかしくはあるまい？ しかし、ノックも無しに入るとは……博士、ここでは当たり前前の作法も教えていないのか？」

冷徹な瞳が、デュアンに向けられるが、デュアンは表情を変えずに答える。

「アルベルよ。お主は緊急事態に下らん事を気にするな？」

「緊急事態なればこそ、そこに人間の本质が見える」

「違うな。人間の本质は、戦うと決めたその瞬間にこそ生まれるものだよ」

デュノア社長アルベル・デュノアに対し、その言葉を一蹴するが如く、デュアンは言う。

沈黙。僅かな爆音だけが、無音を消して、時の流れをその部屋にい

る者達に伝える。

「それより、シャルロット。残念だが、お前の機体はコアを外してしまつてな……使うことは出来ん」

「そんな……！ なら、ノーマルのリヴァイブで出ますから、使用許可を！」

「ダメだ。相手がドラグーンでは、ノーマルリヴァイブに勝ち目はない」

「でも、今ファイリーさんが……！」

「だからこそ……着いて来なさい。大統領、失礼します」

「あ、ああ……構わんよ」

デュアンは一礼すると、部屋を出る。シャルロットも一礼し、そして。

「……………」

「……何だ？ さつさと行きなさい」

「っ……………はい」

アルベールの言葉に、息を詰まらせながら、シャルロットはデュアンに続いて部屋を後にした。

「……確か、彼女は君の娘だったね？ 親子仲は……芳しくないのかい？」

「……………あれは、余りにも母親に似過ぎているのです」

「ほう？ つまり、相当の美人だったと？」

「……………」

「……………いや、すまん」

一国の大統領のくせに、沈黙に負けて謝った。

（そう、顔立ちもそうだが……あの、全てを呑み込んで抱え込むと

ころなど……馬鹿馬鹿しい程、よく似ている)

一瞬、思い出されるのは　苦しさも悲しさも寂しさも、全てを  
呑み込んで見せようとしなない微笑。

あの顔を見ているだけで、アルベールの心はとても苛立った。

「……………」

「アルベールの事を気にしているのか？」

「いえ……僕は父に嫌われていますし……もう、とっくに縁は切っ  
たんですから」

そう言って、自虐的に笑うシャルロット。いくら縁を切ったと言っ  
ても、心はそう簡単ではない。

「……今は緊急事態だ。すまんが、その辺の事は忘れてくれ」

「はい」

エレベーターは地下七階で止まり、二人は降りて通路を進む。やがて着いたそこは、シャルロットにも入る権限が与えられていない部屋だった。

デュアンはいつものように声紋、指紋、IDチェックを行い、ドアロックを解除する。

そうして開かれる重厚な扉。それはまるで、初めてラファール・ドラグーンを見た時を彷彿とさせる光景だった。

「っ

」

そして シャルロットは息を呑んだ。

暗い部屋の中央に設置された、スポットライトに照らされたIS用ハンガー。そこには一機のISが、まだ見ぬ主を待ち眠る様に鎮座していた。

シヨルダーとチェストアーマーは白。ウエストアーマーと非固定浮遊部位のスラスタ翼は、白にオレンジを組み合わせたような配色。脚部ユニットも、オレンジに白のラインが走っている。

スラスター以外にも、ISアーマー各所に姿勢制御用ブースターと思われる部分が見て取れる。

両腕部ユニットは、左右非対称の腕部一体型装甲。右ユニットは翼を思わせる直線的装甲を複数枚重ねた形であり、左ユニットは肘に向かつて細まる雫型となっている。

そして最も目を引くのは、背に浮かぶ、白きリングユニット  
リンドブルム。

「これは……ラファール・ドラグーン……しかも、このカラーリングは……？」

シャルロットは何とか声を絞り出す。

「ラファール・ドラグーン・タイプ？。ラファール・リヴァイブ・カスタム？のデータとコア・ブロックを組み込んだ……君の新しい翼だ」

「ラファール・ドラグーン……タイプ？」

「コアの定着率はどうなっている！？」

デュアンはデータチェックとパーソナルデータ、機体データ最適化を行っているフロアに連絡を取った。

『現在の定着率は32.26%。コア・シフトアップは順調ですが……今の段階では戦闘どころか、飛ぶことさえ儘なりません』

「それは予想済みだ。これから計画を前倒しし、最終段階に持ち込む。各員、データ収集と解析を怠るな！」

『了解。これより、コア・シフトアップ最終段階に入ります』

照明が一気に点灯し、部屋が光に満たされる。天井はとても高く、上の階まで続いている。

上を向けば、ガラス張りの一面があり、そこに竜騎士計画の参加職

プロジェクト・ドラグーン

員の姿が見えた。

「シャルロット、すぐにISを装着するのだ」

「でも、まともに飛べないって……」

「説明はしてやるから、さっさとせんかつ！」

「は、はいっ……！」

声を荒らげたデュアンに驚き、シャルロットは慌てて制服を脱ぎ、ISスーツとなってラファール・ドラグーンに手足を通す。

「……？ ユニットロックが入らない？」

「外部操作でロックする。そのままでないさい」

デュアンが、ハンガー横のコンソールを操作すると、手足、そしてアーマーが装着、ロックされた。

「っ……機体が……重い……！」

「適合率はどつだ？」

『現在34,11%。適合速度に変化ありません』

「むう……理論上は可能な筈なのだがな……」

「博士、どつという事ですか？」

思案するように唸るデュアンに、シャルロットが問いかけた。

「コア・シフトアップ。コアを初期化せずに、新たな機体に適合させる事だ。基本フレームが同一の機体にコア・ブロックごと移植すれば、コアを初期化せずに適応させられる……筈なのだ」

新しいISを作る際、コアを初期化することは常識である。

だがしかし、ISは予備パーツでの組み上げや『パッケージ』『オートクチュール』といった物への換装も可能である。

これらの装備が可能なのは、コア・ブロック及び基礎フレームがコアに、同一機体であるという認識をさせるためだ。

コア・ブロックからコアそのものを取り出せば、ISの組み上げは

数ヶ月単位になるが、コア・ブロックことならば数日程度だ。

この理論を基に、第二世代機の経験値を第三世代機に移す実験。それが コア・シフトアップ である。

ラファール・リヴァイブ・カスタム？はラファール・ドラグーンの基礎フレームを使い、第二世代のカスタム機として仕上げた、この実験の為の特殊仕様機であった。

「コアはISを通して、時を重ねる毎に搭乗者を理解する。ならば搭乗者を通して、コアが機体を理解する事も可能な筈だ……！」

「コアが、機体を理解する……」

「科学者が言うことではないが……理論値も確率も可能性も、全てを押し伏せてしまえい……！」

ISの相互理解の理論。機体とコアと搭乗者。三つの関係性を示したそれを鑑みれば、それは間違っていない。

「ラファール・リヴァイブ」

だから、シャルロットは自然と瞳と閉じて、共に空を飛んだコアに語りかけていた。

この機体は、僕達の新しい翼なんだ。

大丈夫だから……怖がらないで？

このISは、皆の思いが……あの人の思いが込められてるか  
ら。

守りたいんだ、あの人の夢を。だから……力を貸して？  
一緒に戦って？

『っ……………！？ ……これは……………コアの適合率が急上昇！！ 4 5……………5  
1……………6 3……………！……………』

果てしなく広がる草原。彼方には連なる山脈。

そこに立つシャルロットを櫟るように、一陣の風が吹き抜ける。

そして草原の向こう、舞い上がるのはオレンジの竜。大空をまるで覆い隠すような、巨大なドラゴン。

それはシャルロットを一瞥すると、大空に向かって雄々しく吼えた。

『適合率……97.38%!! 行けます!!!』  
「きたあああああああああああああつ!!」  
機体が完全に起動し、デュアンが高らかに叫んだ。同時に天井が次々に開いていき、その先に小さな光が覗く。

「シャルロットよ。リヴァイブの武装は全てインストールしてある。それと、これを持っていけ」  
ガコン、という音とがして床が開くと、そこから上がってくるのは大型対戦車ライフル アベイユ。  
それを手にして、シャルロットは真上を睨む。

『現在、西20キロの地点でラファール・ドラグーンとリヴァイブが交戦中です』

「了解です。博士……行つてきます!!」  
「リンドブルムはシステムがコアに最適化されていない。安定するまで、レベル1で対処するようにな」  
「大丈夫です。機体がまともに動けば……問題ありません!!」

リンドブルムが起動し、発光を開始する。そしてスラスタ―翼が開かれ、フワリと機体が浮かび上がった。

「シャルロット・デユノア……ラファール・ドラグーン、行きます  
！！」  
グツと体を沈み込ませ、そしてシャルロットは地を蹴った。

スラスターが光波を放ち、烈風を巻き起こして地上までの道を突き進む。数秒さえ掛からず地上に躍り出たシャルロットは、上空で切り替えし、フリーの元へと向かって飛んだ。

「凄い……！ これでもまだ、全開じゃないなんて……！」  
最新のPICによって制御される機体バランス。世界最強を名乗るに相応しいパワーと、同時に使う者を選ぶじゃじゃ馬ぶりだ。

「……………あそこだ！」  
流れていく風景に目を細めながら、シャルロットはアベイユを構えた。

『見ておるか、アルベールよ?』

「ああ、見ている。あんな物を、もう一機用意していたとはな……」

「おおっ……!これならば、フランスは安泰だな……!」

『見るべきところが違つぞ。見るべきは……あの子の姿だ』

「……何？」

「言っただろう？ 人の本質は戦うと決めた時に生まれる」と。

あの子が決めた、あの子だけの戦う理由……それを見届けてやれ……

…まだ、親であるならばな」

**A n o t h e r   S i d e      目覚めよ、新しき”翼”（後書き）**

次回、いよいよタイプ？対タイプ？の決戦。  
同じドラグーンの名を関する機体同士が、ついに激突します。

なお、シャルパパの名前はオリジナルで、公式ではありません。  
（後、サイレント・ゼフィルスの和名も）

第44話 VSラファール・ドラグーンノ天に竜姫は唯一人(前書き)

ラファール・ドラグーン攻防戦決着回。

ドラグーン同士の激突がノンストップです。

果たして、シャルロットは春斗の夢を守りきれるのか？

それではごっご。

## 第44話 VSラファール・ドラグーン/天に竜姫は唯一人

ごう、と一陣の風が吹き抜ける。

睨み合うのは、背中に光り輝くリングを背負う二機のI.S。

天空にて緑白の竜を駆るのは、亡国機業エージェント オータム。地に在って橙白の竜を駆るのは、フランス代表候補生 シャルロット・デュノア。

「シャル……あたしが前菜オードブルになってあげたんだから……主菜メインディッシュはきちんと務めなさいよ……?」

「了解です。最高のメインディッシュ……ご馳走して見せます」  
ポロポロになりながら煙草を吹かすフリーに、シャルロットは力強く答え、その手にアサルトライフルとマシンガンを展開させる。

「何処の誰だか知らないけれど……覚悟は出来てるよね?」

「ハッ。同型機だと思って警戒してみりゃ……汎用武装かよ。このドラグーンにゃ、そんなもん通用しねえぞ?」

「……まさか、たったそれだけで勝った気でのいるの?」

ドラグーン?のウイングが開き、オレンジの光が放たれ始める。

「実際に勝ったぜ……そのロートルになあつ!」

ドラグーン?が力強くリンドブルムを発光させ、その手にエネルギーライフル アヴェルス と、エネルギーショットガン タンペック・ドウ・ネージュ を展開させた。

戦闘開始の合図は、オータムの砲撃。グロワール が閃光を放ち、

シャルロットを襲う。

すぐさまシャルロットは急上昇。攻撃を躲す。大地が爆ぜ土が舞い上がる中、それを抜けてオレンジの光が舞い上がった。それを追って、白の光も上空に上がっていく。

そして、地上に一人残ったフィリーは

「ゴホ、ゴホッ……！ 義手はオシヤカで落とされて、更に土まみれに泥まみれって…… ホント、最悪だわ」

などとブツクサ言いつつ、火の消えてしまった煙草を放り投げた。

ヴェント が火を噴き、鉛の矢がドラグーン？を襲う。だが、オータムは同質の装甲で作られたシールド デュール・ポルト を展開し、その尽くを阻む。

「アイギス・ドライブ ……まさか、使いこなしている!?」  
イメージ・インターフェースをトリガーとする アイギス・ドライブ は、相手の武装に対する認識が鍵となる。  
つまり、どういう特性を持った武器なのかを操縦者が瞬時に判断し、それが アイギス・ドライブ を起動させる為、生半可な戦闘経験では完全に使いこなす事は出来ない機能なのだ。

「何、驚いてやがる！ 動きが鈍いぜ!?」  
オータムは タンペット・ドウ・ネージユ をシャルロットに向ける。銃口に光が集束し 一気に弾けた。

「っ！」  
放たれるのは白いエネルギーの散弾。タンペット・ドウ・ネージユ ”吹雪” の名に相応しい、物理弾には不可能な圧倒的な面制圧力。

シャルロットは左の霰型装甲盾 レフト・シエル とシールドを展開して防御するが、全身を撃ちつける弾雨が機体を押し流す。

「くっ……!!」  
バランスを崩しながらも相手に攻撃をさせまいと、マシンガン撃つ。だが、アサルトライフルよりも攻撃力の低いそれが、ドラグーン？の侵攻を制するなど出来はしない。  
逆に、アヴェルス の閃光がシャルロットのマシンガンを粉碎した。

オータムはそのまま、あっという間にシャルロットを追い抜き、マチエール・スライサー を振り上げた。

「速い……!!」

「テメエがおせーんだよ!!」

完全起動状態のリンドブルムを持つドラグーン?の出力は、今のドラグーン?を上回る。

それはスラスタ出力にも、如実な差として現れている。

ラファール・ドラグーンの高スペックは、リンドブルムの使用を前提としている為、レベル1でしか使用できないシャルロットは必然的にスペックで劣ることになる。

ガキインツ!!

差し込んだシールドが容易に斬り裂かれ、あわや腕を斬り落とされそうになる。

ギリギリでそれを躲し、シャルロットは高速切替ラビットスイッチしたショットガンを乱射。狂竜の侵攻を阻む。

対するドラグーン?の アイギス・ドライブ も、絶対無敵という訳ではない。

物理ダメージを最低限に抑えるが、ノーダメージという訳ではない。そして、ショットガンクラスの攻撃を至近距離で受ければ、その衝撃に足を止められてしまう。

これはISが回避行動を前提で作られた物であることと、一定以上の衝撃に対してオートで緩和を行うからだ。

ラファール・ドラグーンは無敵ではない。だが、最強になりうるだけの潜在能力を秘めている。

それを引き出すのは、操縦者の能力次第。

そして最悪にも オータムはその能力を持っていた。

シャルロットはショットガン、そしてアサルトカノンという高火力で対抗する。

だが、高火力は連射力に劣り、それはすなわちシャルロットの戦闘力を大幅に殺す。

彼女の強みはその器用さにこそある。それは砂漠ミラーージュ・デ・デザートの逃げ水にも見えるように、高速切替ラビットスイッチによる多彩な攻撃手段を自在に使いこなす事だ。

だが、ドラグーン？は僅かのダメージを覚悟して飛び込むだけで、その殆どを殺してしまえる。

模擬戦で一夏がやった突撃などとは比べものにならない、圧倒的脅威。

なぜなら、一夏が一か八かで突撃するのに対して、オータムは完全なる確信の下に突撃を仕掛けてくる。

そう、竜の鱗に傷を付けられるものなどいないという確信だ。

その確信があるからこそ、心理的ブレーキなど踏まない。そして、その確信は真実であった。

シャルロットは残弾とダメージ率を計算し、内心で舌打ちする。  
ドラグーン？を落とすには、シールドエネルギーを削り切らなければならぬ。

だが、アイギス・ドライブのせいでライフル、マシンガンの攻撃では殆ど効果を出せず、牽制にすら使えない。

有効打は、至近距離のショットガンとアサルトカノン。後は灰色のケレース鱗殻だけだ。

どう計算しても、弾が足りない。

(せめて……リンドブルムを使えるようになれば……！)  
リンドブルムの最適化が終われば、現在封印されている機能を全て開放できる。

そうなれば、対等に戦うことが出来る。

なんとしても、それまでの時間を稼がなければならない。

空に舞い踊る二つの光に、フィリーは顔をしかめる。

「……………どういう事？」

フィリーはデュアンに通信を入れる。

『おお、生きていたか』

「博士、どういう事ですか？ タイプ？の機動力……………あんなものの筈がないのに」

『未だ、リンドブルムがコアに最適化されていないのだ。稼働率は40%程度だろう』

「40%……………なるほど、道理で」

ラファール・ドラゲーンは基の設計図から、二つのタイプが派生している。

性能はクセのない安定型で、リンドブルムを武装面に重視したラファール・リヴァイブの後継機であるタイプ？。そして、リンドブルムを機能特化に傾け、機体スペックを重視したカスタム機の後継でもあるタイプ？である。

「……………てことは、ドラゴン・スケイル も起動していないんですね？」

『うむ。何とか最適化までの時間を稼げれば、あるいは……………。そっちで何とかフォローできるか？』

「リンドブルムの事をシャルは？」

『出撃前に言ったから把握している』

「　　なら、必要ありませんね」

『……………？』

「知らないなら問題ですけど……………知ってるなら大丈夫です。それに、ちよつとやさつとでやられるような……………そんな柔な鍛え方はしてないつもりですから」

ニヤリと笑うフィリーは、空を改めて見上げた。

光が爆発し、オレンジの機体が地面へと落ちて行く。それを見ても尚、フィリーはシャルロットへの確信に近い自信を持っていた。

戦うべき理由と、真に得るべき翼を得た彼女に　　敵などいない。  
そう思っていた。

「ぐうぐうぐう……っ！！」  
全身を襲う衝撃。大砲の直撃を受けて、シャルロットは大地へと叩き付けられた。

グラリとする体を何とか支えながら、立ち上がる。

ズドオオオオオオン！

「っ！！」

ドラグーン？の放った破壊の閃光が、シャルロットの周囲に降り注ぐ。

地面が爆発し、シャルロットの体を揺さぶる。

降りつける砂塵をそのままに、シャルロットは空を　　そこにいる敵を睨む。

「ハッ、とんだ拍子抜けだぜ。第三世代系武装はどうしたよ？ 使わないのか？」

「っ………黙れ！」

今のドラグーン？には、ドラグーン？のような武装は一つもない。もし在ったとしても、今の状態では使用できない。

「まあ、良いか。さっさと終わらせて………そいつも頂いていくぜ」「っ………！？」

にい、と笑うオータム。それは余りにも凶悪で。

「ドラグーンは絶対に渡さない………！　その機体も取り返す………！」

「ほう？　どうやって　だよ………！」

アヴェエルス　の最大出力射撃が地を薙ぎ払うように放たれ、大波のような土砂が舞い上がり降りつける。

「この力……気に入らねえもん全てをぶっ飛ばして、何もかもをぶっ壊す……この最高の力はあつ!!」

更に グロワール の砲撃が、彼方の森目掛けて放たれる。高工ネルギーは木々を吹き飛ばし、紅蓮の炎を容赦なく灯す。

「お前らみたいクソが持つべきじゃあない、この オータム 様が持つに相応しい力なんだよお!!」

高笑い、嘲笑い、オータムは狂竜の力を見せつけるように撃ち放つ。

(何もかもを壊す……破壊の……力……?)

『ねえ、春斗の夢って……何?』

『いきなりどうしたの、そんな事聞くなんて?』

『だって、ラファール・ドラグーンは自分の夢のために作ったって言うってたから……その夢って、何なのかなって?』

『夢、か……この状態で言うのもあれだけど……宇宙に行くこと、

かな?」

「宇宙に?」

「そう。いつか人類を宇宙に進出させる……ISには結局出来なかつた事。リンドブルムはその第一歩だよ」

「人類を宇宙に……って、そんな凄い夢を持つてたの!？」

「まあ、実現出来るかどうか……難しい夢だけどね」

「大丈夫、春斗なら絶対に叶えられるよ!」

「……そうかな? というか、まずは自分の体に戻るのが先だけどね」

「それもきつと大丈夫だよ。必ず戻れるから……!」

「ありがとう、シャル」

「かじゃない」

「……あ?」

「破壊のためなんかじゃない……!! この力は……いつか人類を星の海に導くためのものだ! そのための翼を……彼の夢を……これ以上、穢させたりしない!……!」

「はあ、何言つてんだ?」

「そして、彼の夢を穢したお前だけは……絶対に許さないっ!!」  
「うるせえよ、クソガキ」

オータムは冷めた目付きでシャルロットを見下し、唯一積まれている実弾武装　連装ミサイルランチャー　スルト　を展開した。引き金が引かれ、解き放たれた破壊の矢が容赦なくシャルロットに襲いかかる。

「うおおおおあああああああああああっ!!」

シャルロットの魂の咆哮。それさえも呑み込んで、爆炎が彼女を周囲一帯もろともに吹き飛ばした。

『  
』

「……ちっ。これじゃ機体回収は無理かもな？」  
もうもつと上がる黒煙にオータムは頭を振った。夢だのなんだのと青臭い台詞に苛立ったとはいえ、せっかくの新型をもう一機手にできるチャンスを壊してしまった。

「ま、一機あれば充分だな。さつさと引き上げるか」

『おやおや、何処に行こうとしてるの?』

「フリー・ミヤマラ……どうやら、殺されたいらしいな?」

『冗談。ただ一つ、良い事を教えてあげる』

「……?」

『あたしの弟子は、あの程度で死ぬタマじゃないわよ』

「っ……!?!?」

フリーの言葉に、オータムはハツとして黒煙の中心を見やった。

「まさか?」

敵性IS 存在確認。エネルギー反応急上昇

「っ……?」

黒煙を穿ち、山吹色の光が輝く。サンライトイエローまるで暗雲を切り裂く一閃の如き、  
神々しい光。

そして現れる 竜の名を冠するISと、その操者の姿。

「上等だよ、シャルロット・デュノア。コイツで直接ぶつた切つて  
やるよ!!!」

オータムが マチエール・スライサー を展開し、一気に加速。獲  
物を狙って襲いかかる猛禽の如く、飛び掛った。

リンドブルム最適化完了。可変装甲 ドラゴン・スケイル

起動開始

シャルロットは左手のシールド装甲を掲げる。

レフト・シエル ガードモード

装甲が開いて、そこから強力なエネルギーシールドが構築される。シールドは振り下ろされた マチエール・スライサー を正面から受け止めた。

激突した瞬間、拮抗するエネルギーが反発し合って閃光が飛び散る。「何だと……!?!?!」  
驚きに見開くオータム。今までどんな装甲も斬り捨てた刃が、一切進まない。力で押し込むことも出来ない。

「……見せてあげるよ」

「ッ……!?!?!」

「ラファール・ドラグーンの……本当の力を!!」

ライト・エッジ ブレードモード

右翼型装甲が上下入れ替わるように動くと、マテリアルブレードが出現。更にそれを包み込むようにして、オレンジのエネルギー光が輝く。

「何っ!?!」

「たあああああっ!!」

本能的にその危険を察知したオータムは咄嗟に反応。半身を引くように躲す。

ギィィンッ!

切っ先がドラグーン？の装甲を掠め、斬り裂く。

「物理とエネルギーのハイブリッドブレード……!?」

「驚くのは　まだ早いよ!!」

「っ……!!」

切り返して振るう斬裂。肩部装甲に深い爪痕が刻まれる。

オータムはそのまま、スラスターを全開にして上空に飛び上がる。

そして　アヴェルス　を展開した。銃口がシャルロットを狙う。

シャルロットはキツとオータムを睨んだ。

今までならば、追いつくことも振り切ることも出来なかった。だが、今は違う。

「　飛ぶよ、ラファール・ドラグーンツ！」

ウエスト・ガスト　レッグ・ゲイル　起動

スラスター翼と同時にウエストアーマー、レッグアーマーが開き、光波を巻き起こして一気に飛翔する。

「ソイツはまさか……展開装甲か!?!」

「可変装甲　ドラゴン・スケイル　。ドラグーンのオートクチュールだよ!!」

かつて、篠ノ之束によって開発されながら放置されてた物を、春斗が完成させた特殊兵装。

能力の違う複数のユニットを拡張領域に収め、リアルタイム換装を行うことである状況に対応する。

後の展開装甲へと繋がる武装一体型装甲。それが可変装甲　ドラゴン・スケイル　である。

本来、三つのパターンが開発される予定であったが、開発の遅れを懸念し、シャルロット用に最もバランスのとれた組み合わせを選び出し、このドラグーン？は完成したのだ。

ウエスト、レッグの高機動ユニットは降り注ぐ光弾の雨を躲し、レフト・シエルの防御シールドは光弾を弾く。

そしてライト・エッジのブレードは、陽光を写したかのように煌々と煌く。

「この……ヤロオツ!!」

風をまとい、自在に舞い踊るシャルロット目掛けて何度となく連射しかし、直撃の一つすら行かない上、あのシールドが攻撃を完全に防いでいる。

それどころか、最初に離れた距離が徐々に詰められている。接近戦はあのブレードが厄介で遠距離を選択したが、これではまるでさっきの焼き増し 否、立場が逆転しているから焼き増しではない。

シャルロットはスラスターを全開にして一気に距離を詰める。

「なめてんじゃねえぞ!!」

カウンターのように、アヴェルスを高出力で撃ち放つ。が、シャルロットの姿が一瞬で射線上から消える。

「後ろだと……っ!?!」

ハイパーセンサーが背後の反応を示す。

オータムが振り返ると、光刃を刺突で繰り出すシャルロット。反射的にアヴェルスを盾にする。

「っ……!?!」

突き刺さる刃。

「ハアアアッ!」

シャルロットはブレードを横に振るい、アヴェルス を斬り捨てる。バチバチとスパークし、爆発。

「この……ガキがアッ!」

オータムがエネルギーカッター リュミエール・ラム と デュール・ポルト を展開。

至近距離で光刃が激突し、火花が散る。

「とつとと潰れちまえ、ガキが!」

「負けないよ! 何があつたつて……負けるもんか!」

二機のパワーは互角で、掠める刃が互いの装甲をえぐり、傷つける。ならば、その差を決定づけるものは何か。

「オラオラ、どうしたっ!」

「くっ……! このっ……!」

元の技量が、実戦経験の差か。徐々にシャルロットが押され始める。

「くうっ……はあああつ!」

起死回生。振り上げた一撃が リュミエール・ラム を弾き飛ばす。ここがチャンスと、シャルロットはブレードを振り下ろす。が、それを左手で受け止める。

「潰れるっ!」

放たれた プレ・クラテール の波動がライト・エッジのブレードを粉碎する。

更に、シャルロットの顔面を左手で鷲づかみにした。

「っ……!」

ライト・エッジ ナックルモード

粉碎されたブレードに代わり、打撃用ユニットが出現。エネルギーを纏った、文字通りの鉄拳がオータムの狂爪を砕いて弾く。

「ぐうあああああつ……!?!」

「もう一発だあああああああつ!!」

渾身の力を込めて、ナックルをオータムに叩きつける。咄嗟にシールドでブロックするも、その打撃痕が刻みつけられる。

「糞が……! これ以上、新型を傷つけられてたまるか……!」

追撃を仕掛けようとするシャルロットに向かって プレ・クラテール を発射。

エネルギー波を受けて、シャルロットの足が止まった瞬間を見計らい、空域を離脱するべくスラスターを噴かせた。

「っ……逃さないっ!!」

シャルロットもすぐにスラスターを全開にして、それを追った。

全力で飛翔する二機。機動力で勝るドラグーン?が段々と、その距離を詰めていく。このまま行けば、あと少しで追いつける。が、シャルロットはそこでとんでもないものを見てしまった

「町っ……!?!」

そう。向かう先には小さな田舎町があったのだ。もしあそこに入れたら、間違いなくそれを人質に取られる。

オータムの狙いは撤退ではなく、こちらが全力で戦えない状況に持ち込む事だったのだ。

「やらせない……ラファール・ドラグーンツ!!」

### リンドブルム レベル3

更に眩く輝くリンドブルム。それに合わせて、ウエストアーマーとレッグアーマーが強烈なエネルギーを放ち、更にチエストアーマーとシヨルダーアーマーが開き、そこからエネルギーが溢れ出す。

ヴェール・オブ・アテナ。

リンドブルムの生み出す強大なエネルギーでドラグーン？の全身を包み込む、攻防一体のエネルギーフィールド。

それは螺旋を巻いて、さながら橙の弾丸の如くドラグーンを変える。更なる速度で、シャルロットはオータムとの距離をグングン詰めていく。

「ここで……落とす……！」

シャルロットはナックルをギュッと握り固める。この速度からの一撃ならば、間違いなく叩き落とせる自信があった。

「ハッ！」

あざ笑うような声。瞬間、オータムはインメルマンターンでシャルロットをやり過ぎすと、その場で停止。同時にグロワールにエネルギーをチャージする。

シャルロットもすぐさま停止し、切り返して反撃をしようと動く。

「おっと、そつから動くと町が大変なことになるぜ!？」

「なっ……!？」

今、ドラグーン？がいる場所は、ドラグーン？と町の間。つまり、

この攻撃を躲せば町が被害を被る事になる。

「大変だよなあ……守るもんがあるってなアよ!?!」  
バチバチと、砲身がスパークを起こす。最大出力で撃ち放つつもりだ。

最大出力を相手にしては、ガードモードでも防ぎ切れない。  
だが防ぎ切らなければ町が破壊される。

「やらせない……これ以上はっ!!」

レフト・シエル レイモード

ガキン、とレフト・シエルの先端部が開き、現れた空間に、エネルギーが集束していく。

「おもしれえ……撃ち合おうってか!!」

「お願い……ラファール・ドラグーンツ!!」

「消えちまえああああああああつ!!」  
ドラゴンブレスと見紛うほどの強烈な光。全てを呑み込んで破壊する、悪意の奔流。

「行けええええええええええつ!!」

レフト・シエルから光線が走る。それは グロワール と比べて細く弱く見えた。

だが、ぶつかり合う二つの力は拮抗する。

濁流の如き高出力エネルギーと、ウォーターカッターの如き高圧縮エネルギー。

激突が生み出した閃光は、まるで第二の太陽のように周囲の影を消し去る。

レイモードから放たれた光は、グロワール の砲撃を真正面から撃ち抜き、その破壊を穿ち散らす。

弾かれたエネルギーが飛び散って周囲を次々に破壊するが、シャルロットの背にある町だけはその被害から守られる。

「このおおおおおおっ！！」

「ドラグーン……もつと、力を……っ！」

その意思に応え、リンドブルムが輝きを増す。

異変はその直後、グロワール に起こった。砲身が急激な出力上昇に対応しきれず、異常を起こしたのだ。

「やべえっ……！？」

本能的に、グロワール をパージ。一瞬遅れて銃身が爆発する。

そしてシャルロットもまた、同時に限界を迎えていた。圧縮エネルギーを撃ち放つレイモードは、発射時間がグロワール よりも短い。

最後の一瞬、シャルロットは砲撃をついに押さえられず、直撃。大空に爆炎の華が咲いた。

「くそっ……ムカつくが、マジで撤退するか……」

受けたダメージは決して軽い。この憤りを晴らしたい衝動に駆られるが、それを押し殺して、オータムは今度こそ撤退を。

ギユオオオオオオオオオオッ！！

「なっ」

爆煙を貫いて何かが飛翔し、オータムの左腕を襲った。それは半円状のブレードを重ねたような型。　　諭えるならばクワガタのハサミ。

それががっしりと左腕を拘束し、そこからワイヤーが彼方に伸びている。

「　　捕まえた」

「　　テメエ　　！！」

風が煙を押し流し、そして向こうにいる存在を見せる。

ワイヤーはドラグーン？のライト・エッジから伸びていて、シャルロットはニヤツと笑った。

「僕は言ったよね……」

「っ……！？」

「お前を、絶対に許さないって……？」

「っ　　！！」

ガクン、とオータムの体が揺れる。ワイヤーがすごい勢いで巻き取

られているのだ。

「舐めてんじゃねえぞ……このクソガキがああああああっ！  
！」

オータムの怒りは一瞬で頂点に達する。逆にスラスタを全開にして、突撃する。

マチエール・スライサー を刺突にして構え、シャルロットを串刺しにするべく襲いかかった。

「うおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

対するシャルロットもワイヤーを巻きながら突進。そして、左腕を大きく引いた。

レフト・シエルの先端が開いて装甲全体が後ろに下がり、そこに突き上がるように出現するのは 一本の杭。

レフト・シエル バンカーモード

「リンドブルム、フルドライブッ！！！」

IGNITION

出現した新型バンカー ドラゴン・ホーン に、リンドブルムのエネルギーが集中する。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

裂帛の咆哮。激突する力。そして 狂竜の刃が砕けて散った。



ギリギリで意識をつなぎとめていたオータムが、呪詛の如き言葉を  
呟く。

『……なんだ、そんな事も分かんないの？』

「っ……ファイリー……ミヤムラ……!？」

届くのは、オータムを嘲笑うようなファイリーの声。

『虎ならぬ【竜の威を借るだけ】のあんたと、【風に愛され、竜に  
選ばれた】あの子と……どっちが勝つかなんて自明の理じゃない？』

「糞……が」

ギリ、と怒りを噛み締めて、オータムは意識を失った。

「僕の 竜角 に、貫けないもの無し……だよ」

それを見下ろすシャルロットの左腕から、急速冷却のスチームが勢  
い良く噴き出した。

遠くから、サイレンの音が響いてくる。軍や消防がようやく到着し  
たようだ。

ハイパーセンサーの見せる映像には、森の火災の消火活動を始めた  
様子も見えた。

「ふう……」

シャルロットはようやく安堵の溜息を吐き、空を見上げる。  
緊張から解放された体に、ドツと疲労が溢れ出した。

(それにしても……あれは何だったんだろう?)

『力を貸してあげる』

オータムとの戦いの最中に聞こえた声と、過ぎった幻影。

まるで　ファンタジーに出てくる魔法使いのような姿をした、  
綺麗な女性。

その後、リンドブルムが最適化を完了して、オータムを倒すこと  
が出来た。

まるで、あの魔法使いが力を貸してくれたような　そんな不思議な  
感覚。

「……まさかね」

そんな馬鹿な事がある筈がない、とシャルロットは頭を振った。  
きつと、戦いの中で見た白昼夢か何かなのだと、そう結論付けて、  
シャルロットは大地へと降りていった。

第44話 VSラファール・ドラグーン/天に竜姫は唯一人(後書き)

これにて攻防戦も決着し、事の顛末を残すのみです。

ちなみに、ドラグーン?の武器がフランス語で、ドラグーン?の装備が英語なのは、春斗の設定でそうになっていたというだけです。

(ドラグーン?の方は、ほとんどが純フランス製)

第45話

Princesse des Dragon - 竜の王女 - (前書き)

フランス編ラスト。

原作と相違点多数。というか原作にフランスの話が一切ない！w  
オリジナル満載の最終話です。

田舎町に繋がる道やら空やは、まるで蜂の巣を啄いたような大騒ぎである。

警察、消防、軍がぞろぞろ出勤すれば、それも仕方ない事だが。

「フリーさん、大丈夫ですか？」

『そうね……今すぐシャワー浴びて煙草吸わないと死んじゃうかも』『つまり、全然大丈夫ということですね』

『あたしより、アンタはどうなのよ？ リンドブルムのフルドライブでバンカーぶっ放すなんて……腕が壊れてもおかしくないのよ？』『あはは……。実はさっきから、左腕がしびれて動かないんですよ』

リンドブルムのリミッターを外して、最大出力を生み出すフルドライブ。

特殊金属によって作られた新型バンカー ドラゴン・ホーン の一点集中の一撃。

その組み合わせは文字通り、一撃必殺。だがしかし、使用者と機体が受ける負荷もまた、並ではなかった。現在、リンドブルムはスタンバイ状態。レフト・シエルは機能低下状態。全モードの使用が負荷になっており、シャルロット自身にも軽くないダメージが蓄積していた。

「……で、あいつはどうなってる？」

『気を失ってます。多分、最終保護機能が発動したんじゃないかと思えます』

「確実に、良い眠りはしてないでしょーねー。ま、機体回収とあれの拘束は軍に任せときましょ？ こっちももう、限界だしね』

フィリーは対戦車ライフルを拾い上げ、杖替わりにして立ち上がった。

『いえ、機体の方は僕が持っています。何て言うか……他の人に触れて欲しくないって言うか……』

「ほほう？」

『なっ……何でニヤニヤしてるんですか！？』

「べっつに〜？ なんでもないわよ〜？ ただ〜、ラブラブだなあ〜と思っただよ〜？」

『らっ、ラブラブって……違いますよ！ そんなんじゃないんですって！』

「あ〜、はいはい。分かったからさっさと行ってきなさい。後、ついでに…… オータム だったっけ？ あれも軍に引き渡しといてね〜」

『だーかーらー！ 違うって言うてるじゃないですか！？ もうっ！』

フィリーに一通りからかわれて顔を赤くしたシャルロットは、頬をふくらませたまま、ドラグーン？の回収に向かった。

「 やれやれ、返り討ちとは」

「っ……！ シャルツ！」

「っ　！？」

ハイパーセンサーが上空にIS反応を示す。同時に発砲音よりも速く、弾丸が襲い来る。

それはシャルロットの行方を塞ぐように降り注ぎ、大地に次々と穴を開けていく。

「空中から狙撃……！？　しかもバカみたいに正確な……！」

フィリーは上空を望遠モードで見ると、白雲の向こうにキラリと光る機影。

バイザーで顔を隠し、長い黒髪を風に遊ばせながら、それはグングンと急降下。同時に、その手の大型ライフルを構える。

「IS……！？　あいつの仲間か……！」

「待ちなさい、シャルツ……！」

シャルロットはすぐさま、アサルトライフルを展開。フィリーの止める間もなく、迎撃に飛んだ。

「クッ……！」

謎のISから撃ち放たれるライフル弾を回避しつつ、アサルトライフルを構える。

引き金を引き、敵を狙い撃つ。が、謎のISはそれを軽々と躲し、

反撃。銃口から閃光が走った。

「うわっ!?!」

レフト・シエルで咄嗟に防ぐ。が、凄まじい衝撃にシャルロットは弾き飛ばされる。

「エネルギーライフル!? そんな……さっきまでは実弾だったのに……!?!」

『それはハイブリッド・ライフルよ! 実弾とエネルギーの両方を使えるわ!』

「ハイブリッド・ライフル……!」

シャルロットは態勢を立て直し、再び銃口を謎のISに向けてトリガーを引いた。

敵ISはクルリとその身を翻して、シャルロットの攻撃を躲して更に加速。

ライフルでは止められないならば、手数で押し切るだけだと、マシンガンを展開して弾幕を張る。

絶え間なく続く炸裂音。飛び散る薬莖。鉛弾の雨が、上空に降りつける。

更にそこから、ライフルも連射。

流石にこの弾雨は回避できず、敵は防御しつつ直進を曲げた。そのまま実弾を撃ち、シャルロットはその一撃を躲して、曲線軌道に移った。

「フツ……なかなかやるな」

「お前は……お前達は何処の誰だ!? 何の為にこんな事をするんだ!?!」

「お前が知る必要は無い」

いうや、敵ISが銃口を向ける。シャルロットは即座に対狙撃機動

に入り、狙いを絞らせない。

「動き回るのが好きか？　なら……存分に踊れ」

「な　っ!？」

謎のISから六機のユニットが切り離される。それは不規則な機動をしつつ、シャルロットを包囲するようにいた。そしてその砲口から、閃光が撃ち放たれる。

「これは……ビット!？　そんな……どうしてっ!？」

シャルロットは驚きに目を見開く。ビット　BT兵器保有ISは、イギリスのティアーズ型しか存在していないからだ。

四方から襲い掛かるビームを、シャルロットは動揺するも何とか回避。だが、ビットは更にシャルロットを狙って攻撃を続ける。

矢継ぎ早に襲い来る破壊の矢。それをどうにか躲し続け、ハツとした。

敵ビットの射撃が、こちらの直撃ではないと気付いたのだ。視界の向こう　BTライフルを構える敵の姿。

まさか!？　そう思考するよりも早くトリガーが引かれ、ドラグーンを光弾が撃ち抜いた。

「がっ　!？」

ビットを使い、こちらの動きをコントロールして、そうして生まれた隙を撃ち抜く。

それはセシリアにも不可能な　本来のBT搭載機の戦い方。

胸を抉るような衝撃に苦悶の表情を浮かべるシャルロットに、止めとばかりに襲い掛かるビットのビーム。

「うわぁああああああっ!！」

閃光に四肢を貫かれ、竜は落ちていく。

それを見届けもせず、敵ISは真っ直ぐにオータムの下に降り立った。

「っ……!?!」

その体を持ち上げた瞬間、初めて動揺の色が見えた。

オータムの体とISを繋げるユニットロックが、全て外れているのだ。

『お生憎さま!』

「っ !?!」

敵ISはプレート状のユニット シールドビット を切り離し、前面に展開。直後、凄まじい衝撃がそれを打ち叩いた。

『ドラグーンにはまだ、待機形態がプログラムされてなくてね。最終保護機能が発動すれば、一定時間後に自動でユニットロックが解除される仕掛けになってるのよ』

射線の向こう、フィリーが片腕と両足を使って対戦車ライフルを構え、しっかりと狙いを定めている。

『大きいつづらと小さいつづら、持っていけるのは一つだけ……欲張りは身を滅ぼすわよ?』

「チッ」

敵ISは一瞬の迷いの後、苦々しく舌打ちしてオータムを引き抜き、一気に飛び上がった。そこにビットが舞い戻り、ユニットと合体すると、そのまま高度と速度を上げて飛び去る。

「っ……待て!」

「待ちなさい、シャル! 追うことは許さないわ!」

すぐにそれを追おうとするシャルロットを制する、フィリーの一喝。

そうしている間に、敵ISはステルスを起動。レーダー探査から完全に姿を消した。

「フリーさん、どうして……!?!」

「あいつは相当の腕前よ。残念だけど、こっちには追撃できる余力なんて無い……自分でも分かってるでしょ?」

「っ……」

フリーの指摘にシャルロットは黙ってしまう。

セシリア以上にビットを使いこなし、その使用と攻撃を同時行える程の使い手。

技量で言えば、代表候補生クラスでは相手にもならないだろう。

万全の状態ならばまだしも、今のドラグーンでは返り討ちに合うのが関の山だ。

「今回の所は、強奪を阻止できた……そこで吉としておきなさい。いずれ……もう一度戦うこともあるわ」

「……はい」

ISを狙い襲い来るのならば、この先あの機体と戦う事もあるだろう。

そして今回逃してしまったあの オータム という奴とも。

シャルロットは、次こそはという思いを拳に籠めて、ギュッと握り固めた。

ドラグーン？は無事に回収され、森林部分の火災も無事に鎮火。研究所の方も、ようやく落ち着きを取り戻し始めた。

そうして残る問題は　　まだまだ山のようにある。

「博士、どうするんだ！？　今日は我がフランス黎明の時を知らしめる大事な日なのに……新型の一機は大破。もう一機もボロボロ……これでマスコミに見せられんぞ！」

「落ち着け、大統領。幸いにも、ドラグーン？の機械部分のダメージは大きくない。装甲を取り替えてしまえば、一度のごまかしは充分効く。というか、大統領こそ、執務は大丈夫なのか？」

「問題ない！　今日一日は完全に空けさせたからな！」

「……そうか」

一国の大統領がそれで良いのかと思ったりしたが、気にしないことにした。

それでも高い支持率を誇っているし、何より有能なのだ。信じ難いが。

「悪いが私は失礼する。社の方で、やらなければならない仕事もあるのですね」

ソファアから体を起こし、アルベールはドアへと向かった。

「なんだ、式典もまだだというのに……せめて娘にぐらい、声を掛けてやったらどうだ？　彼女は強奪阻止の功労者だぞ？」

「あんな無様な姿を晒して、功労も何もないでしょう。では、失礼

します、大統領」

ガチャリとドアを開け、アルベールは出ていった。その背を見送って、大統領は肩を竦めた。

「まったく……素直じゃない男だ。娘の戦いを、瞬きもせずに見ていたくせに」

「大統領」

「うわっ！？ まだ居たのか!？」

突然にドアが開き、帰った筈の男が顔を見せた。

「根も葉もない事を言わないで頂きたい」

「いや、根も葉もないって……ここで二人して見てい「言わないで頂きたい」……う、うむ。気をつけよう」

有無を言わせぬ迫力に負けた大統領に満足したのか、ドアが再び閉じられた。

「はあ……驚いた」

「……本気でお前は大統領なのか？」

これで男性大統領に珍しく支持率60%超という、この世の不思議に首を傾げた。

「ところで博士？ 犯人逮捕を邪魔したこのISだが……イギリスのBTで間違いないか？」

「自立稼働砲台、BT搭載機はイギリスしか所有してはおらんし、照合も終わっておる。BT二号機 サイレント・ゼフィルス に間違いない」

「つまり、今回の一件にはイギリスが加担している……?」

「その可能性は、ほぼ無いだろうな。というか、自分でもそれはな」と分かつているだろう?」

「もし今回の黒幕がイギリスであるなら、わざわざ自国のISを使う訳がない。態と疑わせて……という可能性もありそうだが、どう転んでもイギリスに批難が行くのは必定。それに盗んでも、コア以

外には使い様がないだろうしな」

「つまり、あのISの裏には別の国家、ないしは組織があるということだ」

「とはいえ、この一件でイギリスは我がフランスに対して、大きな借りを作つたのは間違いない。せいぜい、有効なカードとさせてもらおう……フッフッフ」

イギリスで強奪されたISが、フランスのIS強奪未遂犯逮捕の邪魔をしたのだ。その責任は大きく責められるところだ。

「あまり苛めてやるなよ？ 向こうはこっちと違って、まんまとISを奪われたのだからな。ところで、事件のことはどうするのだ？ 流石に無かつたことにも出来まい？」

「隠さず言うだけだよ。テロリストの侵入を許してしまった事は問題だが、その後の対応は現場で戦つた者達を責める要素はないからな」

「何というか……馬鹿正直だな？」

「ハツハツハ。とはいえ、流石に サイレント・ゼフィルス の事は伏せるがね」

「ま、当然だな」

幸いにして、サイレント・ゼフィルスの姿はマスコミには知られていない。報道の規制を掛ける必要もない。これは今後の外交に重要なカードなのだ。

「さて、予定が大幅に遅れてしまった披露式典だが……どうする？」

「流石に、当初の予定通り……という訳にも行くまい。演出を幾ら変えてやる必要があるだろうな」

「ほう……具体的にどうするのだ？」

「実は先日、ある物が届いてな……」

密室で、早速悪巧みを開始する二人であった。

回収された機体はそのままラボに運ばれ、シャルロットのドラグーン？も、早速外部装甲の交換が行われた。その間、フリーとシャルロットはシャワーを浴びて、泥や汗をきれいに洗い流した。

「あゝ、やっとサツパリ出来た〜！」

「フリーさん、おやじ臭いですよ……」

体から落ちる滴を拭きつつ嘆息するフィリーと、それに苦笑いするシャルロット。

と、更衣室備え付けの内線がコール音を鳴らした。

「はい、もしもし……ああ、博士……え？ はあ……ほほう……ふむふむ……なるほど、そういう風に……分かりました」  
ガチャリと内線を切ったフィリーは、シャルロットに背を向けたままニヤリと笑った。

着替えを済ませた二人は、とある場所に向かっていった。

「フィリーさん、何処に行くんですか？」

「披露式典が夕方からになったので、色々準備を改めるんだってさ  
そうしてやってきたのは、何故か大会議室。

「ここ……ですか？」

「そう言われたからね、多分そうなんじゃない？」

フィリーはドアノブに手を掛け、ガチャリと回した。

「やあ、待っていたよ！」

と、振り返りざまに大きく手を広げる一人の男性 現フランス

大統領その人である。

「だ、大統領……！？」

「早速だが……準備に入ってくれたまえ」

パチン、と指を鳴らすとズラツと現れた女性達。その手にはメイク  
道具やアクセサリーボックスが持たれていた。

「こ、これは……この人達は……？」

「うむ。彼女たちは私が用意したメーキャップ隊だ！」  
たじろぐシャルロットに、大統領は爽やかに答えた。そういうことを聞いたんじゃない、とシャルロットは心の中でツツコンだ。

「さあ、こちらに座ってください」

「え！？ うわあっ!?!」

すす、と後ろに回った一人がシャルロットをあつという間に椅子に座らせた。そのまま周囲を女性達が囲んだ。

「ファイ、ファイさん……助け……!」

「こちらを向いて下さい。ファンデーションが塗れません」

「口を閉じて下さい。皺になってしまいます」

「むぐぐ……!?!」

シャルロットの伸ばした手は、しかし届かなかった。

「おお、素晴らしい手際だわ」

「ではファイリー様も、こちらへ」

「はい、宜しく」

ファイリーは慣れたもので、椅子にドカツと座るのだった。

「ちょっと、何でこれピッタリなんですか!?!」

「そりゃ、ちょこちょこ手直してたもの。ピッタリに決まってるでしょ?」

「個人の身体データは秘匿されるべき情報だと思っですけど!?!」

「大丈夫。スリーサイズに関しては当てはまらないから。あたし的に」

「ファイリーさあああん!?!」

夕方。太陽がオレンジに染まり、世界を焼き尽くす時。式典用特設会場には、多くの報道関係者が集まっていた。

事件続発によって、当初の予定通りには行かない。もしくは中止とも思われていた式典がしつかり行われる事は、彼らにしてみれば朗報だった。

なにせ今日の夜のニュース、そして明日の一面には間に合うのだから。

今回の式典は新型ISのお披露目もあるが、それと同じぐらいに注目する所があった。

代表候補生シャルロット・デュノアのメディア初登場である。

普通、代表候補生はモデル活動などのメディア露出が多い。だが、シャルロットだけは今まで一度も、そういった事がなかった。

というのも、彼女は代表候補生になってすぐ、プロジェクトラグーン竜騎士計画に参加し

ている。

その為、施設外に出る機会はたまの休み以外に殆ど無く、また、そういった仕事の話デュアンやフリーが断っていたのだ。

只のテストパイロットでしか無い彼女を一人前にする為には、余りにも時間が惜しい。

そしてドラグーンを完成させるためにも、時間は余りにも限られていた為だ。

そういう経緯から、シャルロット・デュノアには様々な憶測、噂ばかりが飛び交う結果となったのだった。

デュノアという名字から、彼女はデュノア家の親類縁者であり、デュノア社社長アルベル・デュノアが他の候補生を押しやってプロジェクトメンバーにしたのではないかという噂。

その一方、あのフリー・ミヤムラが直々に教導を務め、その才能と可能性は候補生随一であるという噂。

それらはアングラな雑誌のネタとして、面白可笑しく書かれていたりした。

そして今日、いよいよそのヴェールが剥がされるとなれば、注目せざるを得ない。

ステージの上では、大統領が今日起こった事件について自ら説明を行っている。

「　　ということ、今回の件に関しては後日、改めて会見をさせて頂きます。さて……そろそろ本題と参りましょう！」

パチーンッ！　と指を鳴らすと、ステージ後ろから一つの影が飛び出した。

ついに登場か、と一斉にカメラがその影に向けられる。が、その影は何の変哲もないラファール・リヴァイブであった。何だ、肩透かしかと溜め息が漏れる。

「あれ……？　もしかして……ファイリー・ミヤムラ？」

ざわ。と、ざわめきが漣のように拡がって行く。

「ファイリー・ミヤムラだ……！」

「3年前に現役引退した……ガンスモーク・ウィッチ硝煙の魔女！」

ザワザワと、動揺が更に拡大していき、次々にシャッターが切られてフラッシュがたかれる。

「ワオ、久しぶりだね」

閃光のシャワーに照らされるファイリーは威風堂々と、その身を晒している。

「……でも、何でタキシードなんて着てるんだ？」

「さあ……？」

そう。今のファイリーの服装はタキシードであった。その上にISを身に付けているのだ。

一通り写真を取られたと判断したファイリーは、右手を徐に持ち上げ、ピシッと人差し指を天に向かって伸ばす。

そしてゆっくりと、西の方　　夕日に向かって下ろした。

全員の視線が真上、そして夕焼けへと動く。

だが、そこにあるのは夕日のみで、何も変わりはない。

「……………？　夕日が……上がってくる？」

「何を馬鹿な事を言ってるんだ……………あ？」

おかしい。ほとんど沈んでいる筈の夕日から、小さな夕日が上がってきているのだ。

違う。あれは夕日ではない。では何なのか。

「まさか……！？」

記者の誰かがそう言った瞬間、大統領は芝居で大見栄を切るように、両腕を大きく広げてみせた。

「さあ、ご覧あれ！ あれこそ、我がフランスに黎明を呼ぶもの！

そして世界より選ばれた少女 フランス・デ・ドラグーン 竜の王女、シャルロット・デュノア！！」

それは疾風だった。朱陽をその身に宿して烈風を身に纏い、記者達の上空を一瞬で通り過ぎる翼。そのまま、フィリーの正面を掠めるようにして上昇、そしてそこで静止した。

「……………」

誰もが言葉を失った。

雄々しくも美しい鋼の竜を身に纏うのは、一人の可憐な少女。

機体と同じくオレンジのカプリ・ドレスに身を包み、同色のロンググローブ。

髪は綺麗に纏め上げられ、首元を彩るのはダイヤモンドの付いた、シンプルなネックレス。

そして、その背中のウイングとリングから今も尚溢れ、輝き続ける光。

フィリーがすつと左手を後ろに回し、右手を空に捧げる。その手に静かに触れる、王女の指。

まるでここが舞踏会の会場で、プリンセスが王子にエスコートされて大階段を降りて来るかのような、そんな魅入ってしまう光景。

カシヤツ。

誰かが、シャッターを切った。

翌日。

この一瞬を捉えた写真は、全ての新聞紙の一面を飾る事になる。そして、ある新聞の見出しには、こういう一文が添えられていた。

『風さえ彼女に憧れ、空さえ彼女に恋をする』

その日の新聞は、何処も売り切れになる程の売れ行きであった。

初のメディア登場からシャルロットの日々は、それはもう多忙であった。

何せ初登場のインパクトが余りにも強く、シャルロットの名前と顔は一躍、フランスはおろかヨーロッパ中に広がった。

そんな彼女に各メディアからの取材申し込みが殺到。ISも修理を本格的にしなければならず、フランスでの日程は殆どがその対応に追われる羽目になった。

あつという間に多忙極まる一週間が過ぎ、いよいよ今日は日本に出發する日である。

取材関係は勿論全て断り、フィリーの運転する車はハイウェイを走る。

「あゝ、もうダメです。テレビとか取材とか……もう勘弁して欲しいです」

「今はまだ候補生だからこの程度だけど、正式に代表になったらこの倍は忙しいわよ?」

「フリーさん……こんなの、よくこなせてましたね?」

「世の中、何事も慣れってね。さ、もうすぐ着くわよ」

「……はい」

目指す場所が、ハイウェイの向こうに見える。

そこは

シャルロットの母が眠る場所。

フィリーに入り口で待ってもらい、シャルロットは一人墓地に踏み入る。敷石をずっと踏み進んでいくと、その先に母の墓がある。墓前に添えるための花束を持ち直して、シャルロットはそこを指した。

「……………」

向こうに見える人影に気付く。それは明らかに母の墓の前に立っていた。

「お父さん……………」

そこに居たのは、アルベールであった。

母の墓前に花を添え、その眠りを祈る。そうしてから、シャルロットは立ち上がった。

「……………お父さん、どうしてここに？」

「今日は、月命日だからな」

「覚えててくれたんだ、ちゃんと……………」

「ああ……………」

「……………」  
「……………」

会話が、止まる。

死者の眠る地に相応しくない、命に溢れた香りを乗せた風が、強く吹く。

アルベールはシガーケースから葉巻を一本取り出すと、端を落とすて火を点けた。

「シャルロット」

「……………」

「プロジェクトチームが解散になった後、お前は どうする？ デュノアに戻ってくるか？」

竜騎士計画は一つの結果を残した。そう遠くない内に、現チームは一度解散となるだろう。

そうなった後、シャルロットにはデュノアに戻るか、そのままフランス所属のままにいるかという二択がある。

もしデュノアに戻る選択をしても、以前のようにには絶対にならない。何故なら、今の彼女はフランス全土に顔を知られた時の人である。前の様な扱いは出来ないからだ。

「いいえ。僕はもう、デュノアには戻りません」

だが、シャルロットはハッキリと宣言した。デュノアとの決別を。前のように逃げるためではなく、自分の道を進むために。

「そうか」

「はい。僕の夢の為に……………この道をいきます」

「夢か……………ブリュンヒルデでも目指すか？」

「……………そうですね。それぐらいにならないと……………叶えられないかも

「しれないですね」

「世界最強の称号を通過点扱いか……それは、どんな夢だ？」  
興味を惹かれたのか、アルベールが尋ねる。するとシャルロットは、  
はにかみながらこう答えた。

「素敵なお嫁さんです」

「ブフ ツ！ ゴホツゴホツ！！」

アルベールは思いつきりむせ返った。葉巻の煙が変なところに入っ  
てしまい、咳き込んで涙が溢れてくる。

「お父さん、大丈夫！？」

「お前……ごほっ……！ 一体、誰と結婚しようというんだ……！  
？」

「世界一素敵な人ですけど？」

父の疑問にしれっと答える娘。

世界最強にならなければ結婚出来ない相手など、何処かの王族か何  
かか。

これ以上は頭痛しかなないと、アルベールは考えるのを止めた。

「夢、か……。私の子供の頃の夢はスーパーマンになることだった」  
「スーパーマン？」

「普段は力を隠していて、いざ事件が起これば素早く変身して颯爽  
と駆けつけ、悪い奴らをやっつける……そんなヒーローに、いつか  
なりたいたいと思っていた」

深く葉巻を吸い込み、空に向かって紫煙を吐き出す。

「だが、大きくなるに連れてそんなものになれないと知り、次に抱いた夢はジェット機のパイロットだった。だが、お世辞にも機械の才能がなくてそれも諦めて……何時の間にかこんな歳になっていた」

「……」

「どんな夢を叶えるにも、途方も無い情熱と努力と時間……そして一握りの運が必要だ。私には……そのどれも無かった」

「お父さん……」

「お前が行こうとしている道は、きっと私の最初の夢よりも遥かに困難な道だろう。夢を叶えるために行くというなら……」夢に敗れる事もある”という覚悟だけはしておきなさい」

日本に行くまでに、たった二度しか会ったことがなく、フランスに帰国してからが三回目で、そして今が四回目。

たったその程度で、自分はこの人の何を知っているのだろうか、気付く。

デュノア社にいた時、自分は何かをしただろうか？ 冷たくて暗い場所に居ることを甘んじて受け入れて、一度でも変えようとしたのだろうか？

そして同じように、この人の事を一度でも知ろうとしたのだろうか？

自分はずっと待っていただけだ。この人が会いに来るのを。

もしももっと早く、こうして話すことが出来ていたなら 何かが変わっていたのだろうか？

勇気のなかった自分への後悔に、チクリと胸が痛む。

「まあ、良い。お前はもう……デュノアとは関係のない身なのだからな」

「いいえ。僕は”デュノア社”とは関係なくても……」あな

た”とは……ずっと、親子です」

「……………」

「お母さんとあなたと……どちらが欠けても僕はいなかった。こんなにも今、幸せであることも、きつと無かった……………」

「……………一つ」

「……………？」

「一つだけ、聞きたいことがある。あれは……私を恨んでいたか？」

「いいえ。ただ……少しだけ寂しかったと思います」

「……………そうか」

アルベールは、その視線を墓に刻まれた名に落とす。

「……………随分と、待たせてしまったか」

そう呟いて、アルベールは踵を返した。そのままシャルロットに背を向けて、歩き出す。

「お父さん……………！」

「今日の夜、日本に行くそうだな。せいぜい、体には気を付ける」とだ。あれも……体の弱い女だったからな」

「……………！」

振り返ることもなく、アルベールの背中が遠ざかっていく。それをただ、シャルロットは見送るのだった。

霊園の駐車場に止められていたリムジンにアルベルは乗り込むと、  
啞えていた葉巻を灰皿に擦りつけ、火を消した。

「 出せ」

ドライバーに指示を出し、リムジンがゆっくりと動き出した。

「……………」

まぶたを閉じ、思い返す。

引き取ったばかりの頃のシャルロットを。

自分の生まれから周りの顔色を伺い、自己の主張をせずにいる

そんな苛立たしい娘だった。

だが、そんなシャルロットは日本でどんな出会いをしたのか、とて  
も変わっていた。

そう分かったのは、強奪犯との戦いの最中。

怒りに燃え、魂のままに吼え叫び、泥臭く、暑苦しいまでにギラギ  
ラと目を輝かす。

エレガントさの欠片もない、しかし生命に満ち溢れた輝きを放って  
いた。

喻えるならば

強風吹きつける草原に凜と咲く、一輪の野薔薇。

触れれば折れてしまいそうな母とは違う

強く、気高い姿。

「人の本質は、戦うと決めた時に生まれる……か」

ふと、デュアンの言葉を呟く。そして、少しだけ口元が緩んだ。

「シャルロット、お前の本質が何処までのものか……見せてもらおうぞ」

その日の夜。

空港にはシャルロットの見送りに、フィリーとデュアンが来ていた。

「それじゃ、気を付けてね」

「ドラグーン？の他のユニットも、出来る限り完成を急ぐからな」

「ところで、ドラグーン？は今……？」

「あれはしばらく使い物にならない。何せコアがあのおーたムとかいづのに適応してしまっていてな……初期化してからでないし適合作業に入れんのだ」

「てな訳で、あの子はしばらくお休み。現役はそっちの子だけだからね。しっかりとデータを取ってきてよ？」

「……はい、大丈夫です」

シャルロットは首から下がる、以前とは少し色と形の違うネックレストップ　ラファール・ドラグーンの待機形態をギュッと握った。

「あ、そうだった。これ、例の彼に渡しておいてくれるかしら？」

と言って、ファイリーが差し出したのは小さな紙袋。それをシャルロットの手に乗せる。

「……何ですか、これ？」

「そうね、お守りみたいなものかしら？　あ、今開けたらダメよ？　あくまでも、いざという時の為の物だからね？」

「？　……はあ、分かりました」

いざという時とは何なのだろうかと、首を傾げるシャルロットだったが、そこまでいづのだから余程大事なモノなのだろうと、バッグにしつかりと仕舞った。

「さて、そろそろ搭乗が始まるな。体には気を付けるようにな」

「無理も無茶も、あんまりしないでよ？　ISパイロットは体が資本なんだからね？」

「わかってますよ。それじゃ、行ってきます！」

満面の笑顔と共に、シャルロットは搭乗ゲートへと向かった。





日本 IS学園前。

蝉の鳴き声と、ムツとする熱気に汗がじんわりと流れる。

「日本の夏って、本当にフランスと違うんだなあ……」

七月もそうだったが、八月に入ってから連日の猛暑日。運悪くそこに当たってしまったシャルロットは、茹だるような暑さにつんざりしながら校門をくぐった。

寮への道を行くと、向こうからくる人影があった。  
背の高い、ガツシリとした体躯。

世界唯一の男子IS操縦者、織斑一夏。

「あ、シャル！ 帰ってきたんだ」

「春斗　！？」

自分の名を呼ぶその人に気付き、シャルロットは反射的に駆け出していた。

「え　っ？」

「春斗おっ！！」

どん、と胸にぶつかると同時に顔を埋める。その手を背に回して、ギョツとそのシャツを握り締める。

「ただいま、春斗……………！」

「う、うん……………お帰り、シャル」

春斗は若干戸惑いつつも、優しくシャルロットの頭を撫でてやった。

聞こえる鼓動。感じる体温。夏の日差しよりも遥かに刺激的なそれらが、彼女の心を熱くさせる。

帰ってきたのだ、ここに。この場所に。

そう実感して、自然と涙も零れた。

「あのさあ……………あたしも居るんだけど？」

春斗の後ろでは鈴が、頭に四つ角を三つばかり立てていたのだった。



【おまけ：フィリーの気遣い】

「そうだ。春斗に渡してくれって言われた物があるの」  
「僕に？ 何だろう……？」

受け取った紙袋の封を外して、中身を取り出す春斗。

「っ……っ、これは……!!?」

「っ~~~~っ~~~~っ!!?!!?」

袋の中身は 日本的に言つと【明るい家族計画】的代物であつた。

「えつと……え? これを……どうしろと?」

「ふい、フリーーさああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああんツ!!!!!!」

羞恥極まり、涙目になったシャルロットの雄叫びが、学園中に木霊したのだった。

第45話

Princesse des Dragon - 竜の王女 - (後書き)

良い話のままでは終わらない、それがシャルロットクオリティw

どうでも良いですが、フランス語大丈夫かなという不安がw  
まあ、なんちゃって仏語ってことで……だめですかね？w

第46話 サマータイム・イン・IS学園(前書き)

夏休み編日常回。

フランス編の時間軸の裏側のIS学園の日常です。  
色々ひどい話なのでご注意をw

第46話 サマータイム・イン・IS学園

連日猛暑の記録日を迎える八月。

夏休みのIS学園は生徒の多くが帰郷し、人もまばらである。とはいえ、生徒会にはやつつけなければならぬ書類があるので、今日も通常営業であったりする。

ということ、生徒会長 更識楯無は生徒会室へとやって来た。

「おはよー。今日も絶好調に猛暑ね〜」

「おはようございます、会長」

「おはよう、虚ちゃん」

「あつ〜、暑いよ〜眠いよ〜」

「相変わらずだらけてるわね〜。昔流行った”たれんだ”みたいよ〜」

「…………お、おはよう」

「おはよう、簪ちゃん」

それぞれに挨拶を返し、楯無は席についた。

「…………え？」

楯無はそこで気付く。生徒会役員は自分を含めて三人しかいない。なのに今、挨拶を交わしたのは 三人。

虚に本音に 簪。

「か、簪ちゃん!？」

ガタンツ! と、勢い良く立ち上がった楯無は、ソファーに座る簪に目を見開いて驚いた。

「な、何で簪ちゃんが此処に……?」

「何でも会長の仕事ぶりを見学したいということで、私がお通ししました」

楯無の疑問に答えたのは虚だった。しれっと言った虚に、楯無は複雑な視線を向ける。

「何か、まずかったですか?」

「……いいえ。でも、出来るなら事前に連絡が欲しかったわ」

実際、まずいどころではない。簪はおそらく唯一、楯無の弱みである。それは彼女と簪の関係に由来するところだ。

二人は姉妹で、その仲もそれ程悪くはなかった。だがある時から、簪は楯無を避けるようになった。

楯無は姉として、妹が胸を張れる人間であろうと努力をし、その殆どは身を結んだ。

若干17歳にして自由国籍取得。同時にロシア国家代表の座を勝ち取り、学園最強の生徒会長。

プライベートでも家事全般に抜かりなく、大抵の事はこなせるため、何時お嫁に行こうと無問題だ。

まあ、更識家当主である以上、嫁に行くことはないのだが。

つまり、楯無は更識家当主として相応しくあろうとする努力に加え、

姉として妹が自慢出来る姉であろうとする努力を重ねた結果、簪のトラウマ　　完全な逆効果となってしまったのだ。

楯無も簪との関係を良好にしたいが、しかしどうすれば良いのか全然分からない。

妹をこれ以上傷つけない故に、何時も伸ばしかけた手を引つ込める、そしてまた伸ばそうとするのくり返し。

そうやっている内に、二人の距離はどんどんと離れ、今やまともに口を聞くことさえ殆ど無い。

そんな状態の妹が、今、生徒会室に來ている。しかも、自分の仕事ぶりを見るために。

(これを……プレッシャーと言わずに、何と言うのよ……っ！)

更識楯無は内心で絶叫した。

さて、事件は生徒会室で起きているばかりではない。  
IS学園一年寮でも、事件は起こっていた。

「あ、づいよ」

「う、え、ジュースも温いよ」

寮内廊下には冷房はなく、ロビーなどに扇風機があるだけだ。  
その代わり、それぞれの部屋にはエアコンが設置されていて、室内  
では快適に過ごせるようになっていた。

しかし今現在、寮に残った生徒の殆どは寮部屋から出ていた。  
というのも、そのエアコンが全て停止してしまった。否、寮の電  
気が全て止まってしまっているのだ。

電気が止まれば、冷房も止まる。冷たいジュースも温くなり、氷も  
尽く溶ける。

唯一の救いは、寮の食堂だけは食材管理の関係上、業務用冷蔵庫に  
は別電源が引かれているという点だ。

それでも空調設備は寮と同じ電源であり、暑い事に変わりはない。

先程も氷争奪戦が行われ、全員叩き出されたところであつたりする。

「まどか、はい冷。ピタ」

「ありがと、ほむらちゃん」

「はあ、ミストスプレー扇風機……馬鹿にできないわね」

「マミさん、次貸して下さい」

生徒達は、あらゆる手段で涼を取ろうと画策する。

「全くだらしがないな。この程度の暑さ……【心頭滅却すれば火もまた涼し】だ」

そんな中で、我らがヒロイン篠ノ之箒はビシツとしていた。

「箒。毛の先からすごい勢いで汗が滴ってるわよ？」

タンクトップ一枚でパタパタと団扇で扇ぐ鈴の視線は、墨汁をたっぷり吸った筆のごとく、毛先から垂れ続ける汗に向いていた。

「う、うるさい！ こういう時は逆に運動で汗を掻くのだ！ そうすれば暑さになど負けはしないのだ！！」

そういうや、箒は外へと勢い良く飛び出した。

「先生、篠ノ之さんが熱中症で倒れました」

「水でもぶつ掛けておけ」

「織斑先生、そんな乱暴な……風通しの良い日陰に連れてって、体を冷やしてあげて下さい」

寮の裏側に居る千冬の所にそんな報告が届いたが、千冬はあっさりと一蹴した。

そして視線を、脚立の上に立つ人物に戻す。

「……どうだ織斑、直りそうか？」

声を掛けられた春斗は、口に咥えたペンライトを外して顔を下げた。

「うーん……ちょっと無理そうだね。最近の猛暑のせいか、配線が完全に死んでる。見た限り、これはまるまる交換しないとダメだね」  
脚立を降りてゴム付軍手を外すと、春斗は滴り落ちる汗を拭った。

「……そうか、分かった。手間を掛けさせたな」

いくら機械に強い春斗でも、換えのパーツもない状態で修理は不可能である。

仕方なく、千冬は修理業者の手配をするべく端末を取り出した。

春斗は脚立を寮の物置に戻すため、畳んで担ぎ上げた。ガチャガチャという音がゆっくりと遠ざかっていく。

「いやあ、それにしても織斑君はやっぱり男の子ですねえ。こういうのにも強いなんて……」

「……そうだな」

実際、一夏は家事は得意だが、機械関係は余り強くない。そういうのは春斗の専門だからだ。

とはいえ、真耶の勘違いを訂正することも出来ないので、適当に流した。

IS学園の一般施設関係には専属の業者がいる為、修理も連絡をすればすぐに来てもらえる。

千冬が業者に連絡をとると、どんな状況下を尋ねられた。春斗の診断をそのまま伝えると、すぐに来るとの事。

「……………しかし、暑いな」

端末をしまい、千冬は滲む汗を拭った。

太陽が頂点を極める頃、IS学園生徒会室では只管に仕事が行われていた。

「虚ちゃん、この書類に不備があるわ。訂正の後に再提出させて」「分かりました」

「それと、この申請書は受理できないわ。もっと明確に申請内容を明記してもらって頂戴」

「はい。ではそのように」  
てきはきと仕事をこなす楯無。それを的確にフォローする處。

「あつ。かんちゃん、ヘルプ」

「……………本音」

そして全く役に立たない本音と、それに何とも言えない顔をする簪。

「会長。そろそろお昼の時間ですね」

「あら、もうそんな時間？　じゃあ、ひとまず休憩にしましょうか」  
走らせていたペンを置いて楯無が言うと、真っ先に反応した人物がいた。

「お休み〜！　かんちゃん、行こう行こう行こうっ！」

「本音……！？　……ちよっと待って！？」

本音は水を得た魚のように生き生きとして立ち上がると、簪の背を押して生徒会室から出ていく。  
遠ざかっていく足音が聞こえなくなると、

バターンッ！

楯無は崩れ落ちた。今まで汗ひとつ掻かずに書類を片付けていたのに、今は噴き出すどころか滝のように汗を滴らせ、机を水浸しにしていく。

生徒会長になってからこっち、これほどの緊張感の中で仕事をしたことがあっただろうか。いや、無い。

「ぼ……」

「ぼ……？」

「ボケる隙が見つからない……っ！」

楯無はギリ、と机に爪を立てた。まさか肉親に見られているという事が、これ程に恐ろしいものであるなど初めて知った。

どうした更識楯無。世界60億の視聴者の目はプレッシャーではなく、お前のエネルギーではなかったのか！

「こちらとしては、仕事が捗ってむしろ万々歳ですが？」

「虚ちゃん……最近、私に冷たくない？」

「そんな事はありませんよ？」

楯無のジト目を受けて尚、涼しい顔の布仏虚。恐るべき女傑である。

「こんちゃーす。うわっ、涼しいっ！」

ドアが開いて、そこから流れ出た冷気に感嘆の声を上げたのは織羽だった。

「あら織羽ちゃん。どうしたの？」

「いやあ、一年寮の配電盤死んだらしくて……夕方まで電気使えないらしいんで、ちょっとそれまで涼みに」

「それは良いけど……今、どうやってドアを開けたのかしら？」

生徒会室のドアは電子ロック式で、役員の持つ鍵がないと開かない仕様になっている。

当然、生徒会役員でない織羽は鍵を持っていない。

「やですよ会長。辰守家は代々続く、由緒正しい忍者の家系なんですから」

「昔から思ってたけど、その『なぜなら私はアメリカ合衆国大統領だからだ！』的な使い方で全て済むと思っただけじゃない！？」

「思ってますよ？」

「言っとくけど、何でも忍者だからで通じるとか思っちゃダメよ！？」

「ダメなんですか！？」

「ダメに決まってるでしょ！？……はあ、なんで私がツッコミしなきゃいけないのよお……」

「おや？」

ガツクリとして机に突っ伏す楯無。織羽は首を傾げた。

「虚姉さん。会長どうしたんですか？」

「斯々然々かくかくしかじかという理由よ」

「なるほど、そういう事でしたか」

「いや、今ので通じる訳がないでしょ？」

楯無がズルリと顔を上げる。

「え？ 簷がずっと此処にいて、そのせいで会長はすっかり気疲れしてしまっただってことですよね？」

「何で通じちゃってるの!？」

「だから家は代々」

「それはもう良いから!」

最後の気力を使い果たし、楯無は色々と考えを止めたのだった。

一年寮の電気設備修理は夕方まで掛かるということで、それぞれ寮の外へと出ていく。

その大半は、学園内施設の冷房のある場所へと移動した。

さて、そんな中の極少数はアリーナにいた。

「さて一夏。準備はいい？」

「ああ。何時でもかかって来い……！」

その中央に対峙する二機のIS 白式と甲龍。

鈴と一夏の二人は互いの獲物を振りかざし、一気に激突した。

響き合う金属音。雪片式型が翻り、双天牙月が舞い踊る。

龍咆がアリーナを碎き、爆煙を抜けて白い騎士が舞い上がった。

さて、鈴と一夏が何故にクソ暑い中で模擬戦なんぞをやっているのかというと、ISのとある機能に原因があった。

IS基本機能の一つである【環境適応機能】。

操縦者の生命維持とコンディション維持の為の機能である。

色々説明すべきことはあるが、要約すると『IS着けてれば、猛暑の中でも結構ヘツチャラ』という訳だ。

とはいえ、肉体を動かして発熱すればその分は暑いのだが、動かないで汗を掻くよりは動いて汗を掻いた方がなんぼもマシである。

なにより、汗を掻いても更衣室には空調とシャワールームがあるので安心だ。

そんな訳で、一夏と鈴の二人は絶賛模擬戦中であつた。

撃ち合い、打ち合い、そして地面に落ちたのは今回は鈴であつた。

「あゝっ！ 負けたあ！！ 春斗、あんた手え貸したでしょ!？」

『モチのロン』

「残念だったな、鈴。こいつに夕食のデザート賭けたのが間違いだぜ？」

「くっ、春斗の甘い物好きをすっかり忘れていたわ……！」

『いやあ、ごちそうさま』

春斗は嬉しさを隠しもせずに、声を弾ませた。

「くっそーっ！ また、デザート取られたーっ！ ていうか、何であんた辛いもの好きのくせに、甘いもんまで好きなのよ!？」

悔しさに吠える鈴。しかし、後悔先に立たずであった。

春斗の好きなもの：甘いもの 辛いもの 箸の手料理全て

嫌いなもの：鈴の地獄酢豚

「ちょっと待ちなさいよ!? 人の料理に変なネーミング付けて嫌いなものにラインナップしてんじゃないわよ!？」

『だって、しょうがないじゃないか。鈴ちゃんのあの酢豚は軽くトラウマだよ?』

「くっ………！」

地獄酢豚とは、鈴が一夏の約束をした後に初めて作った、酢豚と同じ材料同じ工程で作られた、酢豚らしき暗黒物質の名称である。

その味は”地獄”という修飾語から分かる通り、食べば地獄を見ること請け合いです。

ちなみに、春斗は食べた直後に真っ白な雲の絨毯を渡りかけた。

さて、めでたく鈴のダイエットに協力した一夏は、数度の模擬戦を繰り返した後、シャワーで汗を流し、今はロッカールームでクールダウン中である。

「いやあ、文明の利器は素晴らしいな」

『夕方まで、後一時間半……予定通りなら、もうすぐだね』

修理業者が来ているのは既知の事。遅れがなければ、もうすぐ復旧する筈だ。

やっと日常が帰ってくると、他の生徒も安堵の嘆息をしている事だろう。

「はあ……やれやれ。セシリアやラウラ、シャルロットみたく家に帰れば良かったなあ」

『今頃、冷房の効いた部屋に居るかもね？』

それぞれの帰国日程は一週間前後。全員が帰ってくるのはだいぶ先である。

「ヨーロッパは涼しいのかなあ？」

国に帰ったクラスメイトを思い、ちよつと複雑な気分であった。

「ドイツでは雪が降ったそうだけどね」

「最早、涼しいのレベルじゃないな」

色々複雑であった。

ロッカールームでうだうだと過ごしている内に、三十分ばかり過ぎていたので、寮に戻る事にした。

途中で鈴と合流し、帰寮の道行き。向こうからやって来るのは筈であった。

「あれ、筈？ 倒れたって聞いたけど……大丈夫か？」

「うむ、もう平気だ」

「太陽フルドライブ状態なのに外に飛び出すからよ」

「……お前、何やってんだよ？」

「う、うるさいっ!」

「まったく……ほーちゃんはお茶目さんだなあ」

「……春斗、本気で残念過ぎるわよ?」

とまあ、極々何時もの風景がそこにはあった。

夕方。

一年寮に待望の光が灯る。

「おお、やっと電気が帰ってきた。これで各部屋の空調も復活するわね」

ロビーにて団扇を扇いでいた鈴が、点灯した照明に安堵の息を漏らした。

周囲からも感嘆の声が次々に聞こえる。

時刻的には夕食や入浴の時間。鈴は早速、食堂へと向かった。

「やあ鈴ちゃん。待っていたよ」

「……………あんたら」

少し前の焼き直しのような光景に、鈴はガツクリと肩を落とした。

デザート無き夕食は寂しいものであったが、まあそれはそれであり、鈴は食後に大浴場へと向かった。

大浴場は時間のせいか人数が多く、鈴は何とか空いている蛇口の前に座った。

チラリ、と視線を両隣に向ける。

ワシャワシャと髪を洗う左と、泡立てたスポンジで体を洗う右。

腕を動かす度、ポヨンポヨンと揺れるあれ。スポンジが通り過ぎるとポインと揺れるそれ。

巨乳と言うにはまだ小さいが、鈴から見ればどっちも天上の頂である。

「くっ……！」

これがオセロであったなら、クルリと裏返ってひんぬーを脱出していたかも知れない。

そんな意味の分からない事を思いつつ、鈴は洗面器に湯を溜めて頭から被った。

そんな二人が泡を洗い流して浴槽に行ったので、鈴は開放感に嘆息すると共に、つつい自分の胸を触ってしまう。

ペツタリだとかフラットだとか希少価値とか言われたりするが、そんなのはいらぬ。

大半の人間はラウラの方が大きいだろうとか言うが、実は鈴の方が大きい。なのに、どうして世間は『鈴 最小説』を推すのか。凄く納得できない。

閑話休題。

鈴はボディスポンジで体をワシヤワシヤと洗い始めた。

「あ、あそこ空いてる」

「なんだ？ 誰かと思っただら鈴か」

空いた両端に座る新たな人物。よりもよって箒と織羽であった。勿論、オセロじゃないから裏返りはしない。

「お前ら……イヤミかイジメかあああああつ！？」

「ええっ！？」

ばくぬーときよぬーに挟まれたひんぬーの、魂の慟哭であった。

一夏は夕食後、腹をさすりつつ部屋に戻るために廊下を歩いていた。  
「はあ、夕食後に高カロリーのデザート二つは太るんだけどなあ……」

……

『いやあ、堪能しました』

「ううむ。何か運動でもして腹ごなしするか……」

『竹刀でも振るか？』

「そうだな……箒に借りるか？」

そんな事を話しつつ、到着した自室のドアを開ける。

ガッ！！

「えっ？」

部屋に入ってドアを閉めようとした時、そのドアが強い力で止められた。一夏が振り返ると、わずかに残った隙間に指が差し込まれているのが見えた。

そしてそこに、血走った眼がカツと見開かれ、一夏を見据えていた。「ギャアアアッ！！」

ホラー映画さながらのシーンに、一夏は思わず悲鳴を上げた。

その瞬間、とんでもない力でドアが開き放たれて、それが部屋になだれ込んできた。

「いゝちくかくくんっ！！」

「ウワアアアアアアアア！……て、楯無先輩？」

押し込み幽霊の正体は楯無であった。しかし、何時もの余裕綽々&ミステリアスな雰囲気は微塵もない。さながら幽鬼の如き様子であった。

「一体どうしたんですか、楯無先輩？」

「どうした……？ どうしたですって……？ フフ……まさか、あんな手段を使ってくるとは思わなかったわ……」

楯無は一夏の襟首を掴むと、そのままギリギリと締め上げ始めた。

「ぐえ……！ ちょ……何のことですが……！？」

「フフ……そう、白を切るのね？ ならいいわ……じっくりと教えてあげる……貴方の罪を！！」

で、説明すること17分。

「つまり、妹さんが来たせいで仕事が捗って捗って、でも緊張しっぱなしで……精も根も尽き果てたと？」

「ええ、その通りよ。そしてそれが……一夏くん、君の差し金である事も忘れてはいけないわ!!」

ズビシツ! と、床に正座させられた一夏を指差す楯無。

「いや、俺には本気で思い当たるフシがないんですけど?」

「あら? まだ白を切ろうというの?」

「いや……ですから、本気で俺はそんな事を彼女に言ったりした覚えがないんですよ!」

「こつちにはね、織羽ちゃんって言う証人がいるのよ! それでもまだ、ごまかせると思って!?!」

まるで『異議あり!』とでも吹き出しが付きそうな勢いで、楯無が突きつけた。

そして一夏は、何となく謎が解けたような気がした。

「それって多分、春斗が更識さんに言った事で……織羽が思い違いましたんじゃないですかね?」

「何を言ったの?」

「何をつて……『お姉さんの事をちゃんと見る』的なことですかね?」

「私を……ちゃんと?」

「まあ、そんな感じだと」

「そう」

楯無の手が、するりと落ちる。そしてそのままフラリと体が揺れて、ベッドに倒れ落ちた。

「何か話したりとか、しなかつたんですか？」

「それが出来るなら……こんな苦労しないわよ」

うつ伏せたまま、モゴモゴと楯無は答える。バタバタと足をバタバタかせ、バツタリと落ちる。

「取り敢えず、おねーさんはマッサージを所望します」

「またいきなりですね？」

「噂に聞いた一夏くんのフィンガーテクニク……存分に奮って頂戴？」

「何で”フィンガー”テクニクなんですか？」

「そんな事は良いから。さあさあ、おねーさんを癒しなさい！」

足をバタバタとさせてマッサージをねだる楯無、まじうざい。

『はあ……一夏、やってあげなよ』

『ベッド占領されてるし……やるまで帰らない気満々だな』

だが仕方ないと、一夏は楯無の上にまたがった。

『ほら、揉むついでに色んなところで揉んでやれば、超役得だし』

『役得じゃないしな、それ！？ 単なるセクハラだろ！？』

内心に突っ込みつつ、一夏は手を伸ばした。

「うう……ん……なかなか……やるじゃない……あ、そこ……おん」

「うーん、本気で疲れてますね。コリはないけど、全体的に張ってる感じが……」

ギョツ、ギョツと掌で背中全体を摩るようにして、入念にマッサージしていく。

仕方なしながら手を抜けない男、織斑一夏。額に汗を滲ませながら楯無の体に按摩を施していく。

『ふむ……一夏、ちよつと良いかな？』

『……セクハラすんなよ？』

『しないよ。折角だならアレを使おうと思って……』

『アレか……大丈夫なのか？』

『大丈夫だ、問題ない』

明らかにダメなフラグを踏みつつ、春斗は楯無の上から降りて、デスクの引き出しに手を伸ばした。

「ちよつと、まだおねーさんは満足してないわよ？」

「まあ待って下さい。疲れるんで……道具を使おうってだけですから」

「道具？」

楯無がマッサージのせいでフィヤフィヤになった顔を持ち上げる。

そして、春斗の手にある物を見て、凍りついた。

「な、何よそれは……？」

「何って……マッサージの道具ですよ？ ”僕”の手作りですけど」

「っ……！ 春斗くん……！？」

春斗がスイッチを入れると、”それ”がウインウインと動き出した。動き出した、凶悪な外見を持つ”それ”に、流石の楯無も顔を青ざめさせた。

「ちよつと待って！ それはダメ……！」

「さあさあ、行きますよ……」

しかし春斗は、楯無が止めるも聞かず、”それ”を使った。

「ッ……あああああつ！ 痛アああ……いいっ……！」

脳髓に突き抜ける痛み楯無が絶叫した。暴れだそうとする体を一瞬早く、春斗が押さえつける。

「痛いのは最初だけです。段々と気持ちよくなりますから」

「ウソよ！ こんなのに、痛いだけ……ああ、動かさしないで……！」

学園最強。国家代表。その誇りも肩書きも、この地獄の前では霞んで消えてしまう。

「動かさないとほぐれないでしょ？ ほおら、今度はバイブレーションもいきますよ」

「くうううう……っ！？」

「い、痛い……！」

全身に走る苦痛に歯を食いしばり、シーツをギュッと握り締めて楯無は耐える。

ハアハアと荒げる吐息は既に湿り気を帯び、頬は上気して桜色に染まっっていく。

「そう言いながら、本当は気持ち良くなってきたんじゃないですか？」

「気持ち良くなつてなんかあ……ない……っ！」

ベッドで身悶えながらも必死に堪える楯無に、春斗は思わず意地悪い笑みを浮かべた。

「ほら、口ではどんなに言っただって……体の方はこんなに正直だ。ここ、随分とほぐれてきてますよ」

「そんな……ことお……ひうつ！？」

敏感なところに触れたのか、楯無の体がビクンと跳ね上がる。そして全身に汗がじわりと滲み出す。

「くくっ……この分なら、もう一つ行けそうですね？」

春斗は薄暗い笑みと共に同じ物をもう一つ取り出して、楯無に見せた。

「っ……！？だ、ダメ……！一つでもいっばいなのに……二つなんて壊れちゃう……！」

「壊れるだなんて大げさな。もっと気持ち良くなるだけですよ？」  
クスクスという意地悪い笑みと共に、春斗はもう一つを楯無に付けた。

「ふうふうっ……あああああああああああ……っ！！」  
一際高く楯無の体が跳ね上がり、苦悶と恍惚の入り混じった叫びが反響した。

「ちょっと！本気で足ツボは痛いのおおおおおおっ  
！！」

「我慢して下さい。痛いのは、それだけ疲労が溜まってるからです、しばらくすれば解れてきますから」

「ひうつひうつひうつひうつ！？」

春斗の発明。自動足ツボマッサージ機【指圧王六號】。足にあるツボをピンポイントで刺激する健康器具である。  
別名【地獄の罰ゲーム君】。

「ちよつと！？ 今、不吉なネーミングが見えたわよ！？」

「……………何の事ですか？」

「しらばつくれ……………たああああああつ！？」

良いポイントを打ち抜かれ、身悶えする楯無。がっしりと足に張り付いた指圧王六號は、まだまだ楯無をマッサージし続けた。

「じゃ、一夏もマッサージ再開しようか」

「……………楯無先輩、大丈夫ですか？」

「……………こんなの初めて……………ぐすっ」

「「マジ泣きっ！？」」

それから30分後。

色々とされてデロデロになった楯無は、未だに一夏のベッドを占領していた。

「もう、今日はここで寝るわ……………良いわよね？ 答えは聞いてないわ」

「最終手段を用いても排除しますよ？」

「最終手段……………？」

「寮長召か」

「さあて、寝るならちゃんと自分のお部屋よね〜！」

ガバツと起き上がった楯無は、態とらしく「うーん！」と背伸びをする。

「あ、それはそうと……………これは知ってる？」

楯無は携帯端末を操作して、とある写真を出して見せた。

それはネットでも話題になっている、フランスの新型IS披露式典

の写真だった。

「知ってますよ。随分と派手に登場したなって、春斗と話してましたから」

「凄いわよね。一躍、時の人だもの。春斗君的には……面白くない感じかしら？」

「……別に。ただ、騒ぎ過ぎって気はしますけどね。本当のラファール・ドラグーンは、あの程度の機体じゃありませんし」

「……それに対しておねーさん、どうコメントしたら良いのかしら？」

スペック上、間違いなく最高クラスの性能があるにも拘らず、まだ甘いと言い切る春斗に、楯無は苦笑いするしか無かった。

だが、口ではそう言いつつ実際はその完成を喜んでいる事を、一夏は知っていた。

(全く……素直じゃねえなあ)

内心でクスリと笑う一夏であった。

IS学園の夏休みは、比較的平和かつ、平凡に始まった。だが、それはあくまでも今だけの話。仮初の日常である。



システムドライブ 成功

オリジナルドライバー 認識完了

ユニットシステム 最適化開始

シールドシステム、正常機能確認

デバイダー システムチェック

世界の裏側で、悪意は静かに動き出す。

第46話 サマータイム・イン・IS学園(後書き)

次回からは原作沿いの展開の予定です。

プールの話とかどうしようかな？

原作と同じにはできないし……はてさて。

第47話 乙女たちのサマーデイズ(前書き)

日常回。

今回のサブタイは結構詐欺っぽいw  
久し振りにちよつと長めな47話、ではどうぞ。

## 第47話 乙女たちのサマーデイズ

夏休みに入ったIS学園。一年生寮の廊下を歩く生徒が一人。1年2組所属、凰鈴音である。

「あつつう……何で日本の夏ってこんなに暑いのかしら？」

夏を迎えるたびに飽きもせず同じ事を言いつつ、じんわりと滲む汗を拭いながら、鈴は冷房のない廊下に行く。その目的地は一夏の部屋だ。

「まったく、何であたしが誘わなきゃいけないのよ……」  
ぶくつさと言いながら、鈴は手に持っているチケットをヒラヒラとさせた。

鈴が持っているのは【ウォーターワールド】という、今月オープンしたばかりのプールリゾートだ。

広い敷地内には数多くの施設。屋内設置故に一年中楽しむことが出来るとあって前評判も非常に高く、すでに前売り券は今月分は完売。当日券の購入も数時間待ちという人気ぶりだ。

そのチケットを、鈴は何故か二枚持っていた。一枚は自分として、もう一枚は誰のためか。

まあ、言う必要は全くないが。その為に一夏の部屋に行くのだから。

さて、そんな鈴だがクルリと踵を返した。

「あゝ、もう。何であたしが一夏を誘わないと行けないのよ！こ  
ういうのは男の役割でしょうが！」

「何がだ？」

「そりゃ、あんたが　　ああっ!?!」

「……何で、そんな素っ頓狂な声出すんだよ?」

鈴はなんか片足立ちになって固まった。文字媒体であることが救いな程に面白い顔のおまけ付きだ。

「あ、あんた!　部屋にいたんじゃないの!?!」

「レポート提出忘れと、倉持技研のISデータ収集の日程確認にな  
いや参ったぜ……今週の土曜にデータ取りだつてさ」

「…………え?」

ポリポリと頭を掻く一夏に、鈴はピシリと固まった。手にしたチケ  
ットを思わず握り潰してしまう。

「あ?　そのチケッ何だ?」

「っ　!　何でもないわよおおおおおおおおおっ!?!」

ズドドドドドド　　ッ!!

「ふぎゃあっ!?!」

「みぎゃあ!?!」

「ドンタコスッ!?!」

鈴は来た道を凄まじい勢いで駆け抜けた。途中何人が轢いたような  
気がするが、そんな事は無かった。

無かったたら無かったのだ。

さて、超特急　鳳鈴音号が停車した駅は1025号室前であった。

「織羽あつ!!」

ドアを開けるや、鈴は室内にズカズカと踏み込んだ。そしてベッドに転がる部屋の住人を見つけ、声を荒げて詰め寄った。

「おや、いらっしやい……て、どうしたの？」

「このチケット、日曜のに変えて!!」

鈴は突き付けるように、ウォーターワールドのチケットを織羽の眼前に出す。

そこに刻まれている日には 今週の土曜であった。

「はい、毎度。一枚5,000円ね」

「な っ! 何で倍額になってのよ!？」

ウォーターワールド前売り券は一枚2,500円である。織羽の提示した金額は鈴にしてみれば、ボッタクリもいいところだ。

「別に嫌ならいいのよ? あゝ、これを箒に売ったらあの子、どうするのかしらね?」

「ぐっ……!!」

紛れもない脅迫である。

「2,800!」

「4,700」

「3,000っ!!」

「4,600」

「3,200……!!」

「4,500」

「さんぜんはっぴやく……五十円っ!!」

「ま、クラスメイトのよしみとして、その金額で手を売ってあげましょ」

やれやれと頭を振って、織羽は何処からかチケットを二枚取り出した。

「あ、ありがとう……本っ当に、嬉しいわ……この強突張りっ!」  
口元に引きつった笑みを浮かべながら、頭に四角を三つばかり浮か

べて、鈴は財布を突き出した。

「あ。当然、チケットの下取りはしないからね？」

「ふっ」

次の瞬間、1025号室に激震走る。

「しっかし、鈴のヤツ……何がしたかったんだ？」

ドアノブに手をかけて、ふと一夏は思う。

『何しに来たのかはともかく、何しに行ったのかは全然分からないね』

春斗は春斗で、鈴が何故走っていったのか分からず首を傾げた。

「いいいいいいいいかあああああああああつー!!」

超特急 鳳鈴音号。折り返し運転です。

「鈴……!?!」

目の前にズザーツ！と滑りこんできた鈴に一夏は驚き目を見開く。

「……お前、何でそんなボロボロなんだよ？」

『全く、訳がわからないよ』

数分前まで普通だった筈なのに、今はボロボロになっていた。まるで、何処かで一戦やらかしてきたような感じだ。

「そんな事はどうでもいいのよ！ これを見なさい!!」

ずい。と、一夏の鼻先に突き出したのは二枚のチケット。勿論、ウオーターワールドの前売り券だ。

「何だ、これ？」

『ウオーターワールド……先月できたプールリゾートだね』

「……で、それがどうかしたのか？」

「今週の日曜、あたしに付き合いなさい！ チケットが余っちゃって勿体ないのよ!!」

『いや、どう見てもむしり取ってきた感がバリバリだよ?』

『うっさいわよ、春斗!!』

シークレットチャンネル  
秘匿回線に届くツツコミに、鈴が吠える。

「で、いくらだ？」

「3,850円」

「何で端数なんだよ……?」

『しかも1,350円も高いし……』

「お前、ポツタクる気かよ!？」

「違うわよ! 人聞きの悪いこと言わないでよね!？」

鈴は必死に否定するが、実際提示した価格が高いのだから仕方ない。

「あー、もう! 2,500円でいいわよ!！」

ヤケクソ気味に叫ぶ鈴。本当ならタダでも良いと思っっているのだが、その思いを見せたりはしない。

全ての始まりは、初めて一夏達が鈴の実家である中華料理屋に言った時だ。

二人は鈴の父親の料理を絶賛し、それが嬉しくて、また来てほしくてタダでいいと言った。

だが、一夏はそれに首を振った。

「折角なんだし、好意に甘えたら?」

「いやいや。タダより高いもんは無いつて言うし、それにりんの親父さんの料理スツゲー美味かったからな。ちゃんと払うべきだろ?」

「……ま、正論だね」

そう言いつつ、春斗も最初から支払うつもりだったのだろう、あっさりと一夏に乗った。

ちなみに、この出来事が原因で鈴は両親に自分の気持を悟られることにある。

閑話休題。

鈴は一夏から代金を受け取り、チケットを手渡す。

「じゃあ、当日10時にウォーターワールド前に待ち合わせね。遅

れんじゃないわよ？ あんた、肝心な時に遅れるから油断ならぬのよ」

「遅れねえよ。てかそもそも、遊びに行くのがそんなに気合入れる事なのか？」

『そりゃ、女子にしてみれば気合を入れざるをえないだろうね。何せデー』

「春斗オオオ！ 余計な事を言うなあっ！！」

「ぐおおお！？ 俺の首を締めるなあ！？」

一夏の顔が赤から青に変わるのに、そう時間は掛からなかった。

IS学園入口に、一台の白いリムジンが止まる。そのリムジンはチャーターした小型フェリーでここまでやって来たものだ。そんな金を無駄に使うような帰還方法を選んだ人物が、リムジンから降りてきた。

「ふう。やっと戻ってくれましたわ」

降車してきたのは金髪ロールが今日も見事なセシリア・オルコット嬢。

冷房の効いた車内から出るや早速襲ってきた熱気に、陰鬱な溜め息を吐く。

セシリアがイギリスに帰ると、それはもう目の回るような忙しさであった。

溜まっていたオルコット家の執務にバイオリンコンサート参加、旧友との交友、代表候補生としての報告、ブルー・ティアーズの再調整、両親の墓参り。

それに加えて、BT二号機 サイレント・ゼフィールス 強奪に関する報告である。

強奪されただけでも問題であるのに、その機体がフランス国内で使用された記録があるという。

しかも、その機体がフランス第三位世代機強奪犯の逃走幫助を行なったとなれば、フランス政府も黙っていない。

シャルロット達の活躍で奪回に成功したとはいえ、その背後組織を掴むのに犯人逮捕は必須であり、あと一歩というところでイギリスの失態がそれを邪魔をしたのだ。

イギリスは自国の恥を晒した上、フランスに対して強い外交的インシアチブを取られている。

今も、両国間では極秘会談が持たれている最中だ。

果たして、それをイギリスが良しとするだろうか。

答えは否である。

外交的面から立場を取り返す事は難しい。ならば、ISではどうだろうか。

セシリアが本国から課せられた使命は『フランス製第三世代ISの打倒』である。  
つまり、フランス自慢のISを撃破すれば技術的側面から巻き返しを図れるという事だ。

だが、セシリア自身はこれをよく思えなかった。

ブルー・ティアーズが劣っているとは言わない。だが、シャルロットの技量に加え、フランスから開示されたデータはISとしての完成度が余りにも違い過ぎた。

春斗の設計した機体がこれ程のものとは、セシリア個人もだが、ヨーロッパ各国共に想像していなかった事であった。

フレキシブル  
偏向射撃の使えない現状、ラファール・ドラグーンに対抗できるスペックはブルー・ティアーズには無い。

そもそも、そんな事よりもっと優先させることがある筈なのだ。

奪われたBT二号機 サイレント・ゼフィルス の搜索、及び奪還。そして犯人の逮捕。

そうして初めて、フランスに対して物を言えるようになるうというものだ。

「ふう。考えても仕方ありませんわね」

IS操縦者である以上、彼女はいずれ戦う事になる相手だ。政治屋の思惑など知った事ではない。

なるようにしかならないと、セシリアは割り切ることにした。

「お嬢様。どうかされましたか？」

「いいえ。何でもなくてよ」

振り返るとメイド服に身を包んだ女性が立っていた。

彼女はチエルシー・ブランケット。オルコット家に仕えるセシリア専属メイドで、彼女にとっては幼馴染であると同時に姉のような存在である。

「では、お荷物の方は私どもでお部屋に運んでおきますので」

ピツと伸ばした姿勢を崩さないまま、チエルシーは恭しく頭を下げる。

そして頭を戻すと、もう一人のメイドと共に荷物を運び始めた。

さて、自分はどうかとセシリアは考え、折角だから一夏の表情を見たいと思った。

思えば早いセシリア。早速一夏を探すべく足を踏み出す。

「早速、織斑様に逢いに行かれますか？」

「っ　！？」

荷物を運んでいて此処にいない筈のチエルシーが真正面に立っていて、セシリアはビックリする。

「チエ、チエルシー！？　荷物を運びに行ったのではなかったかしら！？」

「実は、一つご確認しておく事を恥ずかしながら失念しておりました」

「何かしら？」

「こっそりとネット通販で買ってスーツケースの二重底に隠してあった白いレースの下着は、織斑様用ですか？」

「……………え？」

何故、どうして、何で知っているのか。チエルシーの言葉にセシリアは凍りついた。

「老婆心ながら、派手過ぎる下着は却って逆効果だと思われます。

では」  
チエルシーはフリーズしたままのセシリアに一礼すると、踵を返して行ってしまった。

みーんみーん。

蝉時雨が正門前に降り始めた。

「あれ、セシリア？」

「はっ!？」

掛けられた声に我に返ったセシリアは振り返る。そして、また凍りついた。

「い、一夏さん……!？」

「よお、一週間ぶりだな。里帰りはどうだった？」

「え、ええ……有意義なものでしたわ。それで、一夏さんはどうして此処に？」

「いや、ラウラの奴が『もうすぐ着くから迎えに来い』ってメールしてきてさ……あ、来た」

一夏がモノレールの方から来る人影に気付き、指差す。

セシリアもそっちを向くと、身の丈に合わない大きなスーツケースを引きながら、こちらに歩いてくる少女が見えた。

「おお、一夏。迎えに来てくれたか……………何故、お前まで居る？」  
「それはこちらの台詞ですわ、ラウラさん」

再会早々、二人は火花を散らす。夏の暑さ真つ盛りなのに是非とも、止めて欲しいものだ。

『一夏。そろそろ時間じゃないかな？』

「ああそうだな。じゃ、アリーナに行かないとな」

春斗に言われて一夏は時刻を確認する。と、そろそろアリーナに行く時間であった。

「一夏さん、どちらに行かれるのですか？」

「一夏、何処に行く気だ？」

睨み合っていた二人が、その視線を一夏に揃って向ける。悪い事をしていないのにたじろいでしまったのは、きつと仕方ないことだ。

「いや、シャルロットに『アリーナで模擬戦するから見に来て欲しい』って言われてるんだよ」

「シャルロットさんが模擬戦？ 相手はどなたですか？」

「筈がやるらしい」

「第四世代ISとか……………ふむ。見ておいて損はないな」

「一夏さん、ご一緒してもよろしいですか？」

「ああ、別に構わないけど……………時差とか大丈夫か？」

「大丈夫ですわ。問題ありません」

「善は急げという。さっさと行くぞ」

ヨーロッパ組にとって、ラファール・ドラグーンをその目で見れるとあれば足を運ぶ価値はある。

二人は早速、アリーナへと向かった。

「おい、何処のアリーナか分かってるのかー？」

ズカズカズカ。

「一夏さん！ 何をぼさつとしていますの！？」

「全く、しょうがない奴だな、嫁は！！」

足を踏み鳴らしながら戻ってきた二人は、一夏を両サイドから挟み込んでズルズルと引き摺っていく。

「あれ？ 俺が悪いのかこれ！？」

「「その通り！」ですわ！！」

哀しいかな、今は男子が女子に勝てない時代。

「これ、時代関係ない」とか言ってはならない。

第二アリーナには、学園に残っていた生徒の多くが集まっていた。ド派手にデビューを飾ったフランス第三世代機が模擬戦を行うとなれば、野次馬根性もとい注目度は高い。

グラウンドには箒とシャルロットがおり、いつ何時試合開始になるうとも可笑しくはない状況であった。が、しかし試合はまだ始まらない。

それどころか、両名ともISを起動させてもいない。

「シャルロット、そろそろ始めないか？ 流石に暑いのだが……」

「まあ待って……あ、来た！」

シャルロットはアリーナ客席に人影を見つけ、箒もそこを見た。

出入口から一夏、セシリア、ラウラが出てきたのが見えた。

箒は、セシリア達が帰ってきたのかと思いつつ、シャルロットが何故開始を遅らせていたのかを理解した。

「わざわざ、春斗に見せるためか……？」

「うんっ。初めてをちゃんと見て欲しいから……なんて、やだもっ、何言わせるの箒!？」

「……お前、そんなキャラだったか？」

両頬に触れながら悶えるシャルロットに、箒は若干引いた。

「さあ、模擬戦を始めよう！」

「調子狂うな、本気で!？ ……来い、紅椿！」

いきなり戻ったシャルロットに箒はペースを乱されながらも、紅椿を起動させる。

シャルロットはネックレストップの握り締め、深く息を吸い込んだ。本国での最終調整後、待機形態プログラムインストールしてから初めての起動。

「さあ、お披露目だよ……ラファール・ドラグーン！」

高揚する心を抑えながら、新しき愛機の名を蒼穹に向かって高らかに叫ぶ。

紅と橙の量子光が輝き、鋼鉄の翼を顕現させた。

「あれが…… フランス第三世代機！」

「凄い……！ 背中のリング目立ってる！」

「ラファールに似てるようで、やっぱりちょっと違うわね」

IS学園初見参のラファール・ドラグーンに客席の生徒達が色めき立った。

「ほお。あれが義兄上が設計したISか」

「ラファール・ドラグーン…… どれ程か見せて頂きますわ」

ラウラとセシリアが興味深げに視線を送る仲、一夏は春斗に尋ねた。

『正直どうなんだ？ ラファール・ドラグーンのスペックは？』

『シャルのドラグーンは脚部と腰部は高機動で両腕部は近接設定、スラスタは出力強化タイプ。ほーちゃんには悪いけど、展開装甲をフルに使えない今の紅椿じゃ、一分の勝機さえ無いね』

『ハッキリ言うなあ』

『事実事実として、客観的に受け止めるべきだからね。そろそろ始まるよ』

春斗に言われ、一夏は視線をグラウンドに戻した。

「行くぞ、シャルロット！」

二刀を抜いた紅椿が、地を蹴って一気に接近する。

「ライト・エッジッ！」

ライト・エッジ ブレードモード

シャルロットが右腕を振り上げると、マテリアルブレードが展開。空裂の一撃を正面から受け止める。

「はあっ！」

すぐさま箒は雨月を横薙ぎに振るう。が、それをレフト・シエルで受け止める。

「だあっ！」

シャルロットは刃を弾くや、ライト・エッジの切っ先を返して斬りつける。

ヒュン、と空を切る音が響いた。

紅椿は回避の回転と共に爪先の展開装甲を開き、エネルギーブレードを現出。その勢いのまま、カウんターの回し蹴りを打ち込む。

が、そこに既にドラグーンの姿は無く、砂塵のみが残されていた。

「上か！」

ハイパーセンサーが上空の機影を捕捉する。地上43メートルまで一瞬で上がったシャルロットを追って、紅椿がスラスターを噴かせる。

「なるほど！ 加速はなかなかだな！！」

「加速？ 最速の間違いだよ！！」

ウエスト・ガスト レッグ・ゲイル 起動

ドラグーンの脚部、腰部装甲が展開し、リンドブルムの生み出すエネルギーの光波が放たれる。

瞬間、残影を残してシャルロットの姿が消えた。

「っ !?」

箒が二刀を交差させて防御。直後、火花が散った。ピリツと両腕が軽く痺れる。

「やああああッ！！」

シャルロットはそのまま通り過ぎるとすぐに反転。スラスタから一際強い輝きが放たれた。

「っ……紅椿!!!」

箒は背部と脚部展開装甲を起動し、高機動モードに移行する。そして一気に加速、上昇する。

シャルロットもそれを追って、上空に上がる。

「紅椿に付いてくるだと？ なんとという出力だ……!!」

箒はラファール・ドラグーンの大出力に驚きながらも、ひとつの疑問を持つ。

「シャルロット！ どうして銃火器を使わない！？ 私を侮っているのか!？」

そう。本来ならばこの状況は豊富な銃火器を誇るラファール有利の筈だ。

勿論、ドラグーンにはリヴァイブ時に使用していた武装全てがインストールされており、箒もそれを知っている。

だからこそ、この状況にあってライフル等を使用しないシャルロットに憤った。

最新鋭機を

春斗のISを得た途端、自分を侮るのかと。

「侮る？ そんな気は更々無いよ。箒には学年別トーナメントで不覚を取ってるし、何より福音との戦いで見せた土壇場での強さはハッキリ言って怖いよ!」

「なら何故だ!？」

箒はわずかに振り返りながら、自立攻撃ユニットを切り離れた。

「それは箒と同じだよ。一日でも早く、このドラグーンを完璧に使いこなせるようになる為だよ!」

自立攻撃ユニットからの攻撃を回避しつつ、シャルロットはレフトシエルをレイモードで起動させた。

リンドブルム レベル2 レイ・モード メテオ

メテオと命名された、高圧縮エネルギーを連射する攻撃が紅椿を襲う。

「っ……！？ エネルギー武装だと！？」

突如放たれたオレンジの光弾の嵐に箒は驚愕しつつ、回避行動に移る。

（このままでは埒が明かんか……なら！）

箒は展開装甲に更にエネルギーを向け、一気に最高速に乗ってドラグーンを突き放す。

そして反転すると同時に、雨月と空裂を同時に振るった。刃からエネルギー刃が撃ち放たれる。

「レフト・シエル！」

シャルロットが左腕部装甲を前面に付き出した瞬間、爆炎が巻き起こった。

「直撃？ ……いや、防がれたか。だが、多少のダメージは通った筈だ」

自立攻撃ユニットを回収し、箒は油断なく構えを取る。適度な脱力をして二刀をダラリと下げ、すぐに反応できる態勢を整えた。

直後、爆煙を貫いて突撃する機影。

「やはりな！」

箒はすぐさま雨月を振るい、カウンターでエネルギー刃を飛ばす。

「甘いよ、箒！」

シャルロットは更に速度を上げ、左腕部のシールドを掲げる。触れ合った瞬間、雨月の攻撃をレフト・シエルは容易く弾き飛ばした。

「なっ！？」

「エネルギーの密度が違うんだ！ その程度じゃ足止めもできないよ……！」

シールドをそのままに突進するシャルロット。箒は旋回軌道を取り

つつ、ドラグーンと激突した。

上空で繰り広げられる、紅と橙の光の輪舞曲。

観客たる生徒達は皆一様に魅入られたように、瞬きすることも忘れて魅入る。

「凄いすわね……あの機動力もそうですが、何よりあの防御性能。生半可な攻撃では一切止められそうにありませんわ」

「リンドブルムの生み出す潤沢なエネルギー。それを使つての高機動と防御力。捉えるにも突破するにも厄介だな」

セシリアとラウラはラファール・ドラグーンの性能に目を見張った。同時に、自分ならばどう戦うかを脳内でシミュレートする。

『箒、完全に押されてるな……』

『紅椿の高スペックは、実は展開装甲に依存している部分が多いからね。エネルギー切れを考えるとフル稼働では使えない上、パイロットとしての技量も違う。逆転は難しいね』

そう言いつつ、逆転を不可能と言わない。一つだけ、逆転を狙える布石があるのだ。

(後は、ほーちゃんがそれを打てるかどうか……だね)

「くそつ……このままではジリ貧だ！」

疾風の竜の名を冠するISの力。そしてそれを自在に操るシャルロットの技量。

箒の瞳には、シャルロットが宛ら雄々しき飛竜に跨る竜騎士の如く映った。

(このまま戦っても押し切られる……ならば！)

箒は紅椿の展開装甲を一気に開き、短期決戦を挑む。

「それは読んでるよ……！」

シャルロットも、それを予測しており、脚部のドラゴン・スケイルをフル稼働させた。

「ハアアアアッ……！」

「ダアアアアアッ……！」

激突する刃。火花が幾重にも散り、青空に消える。

幾度と無くぶつかり合い、ついにその均衡は崩れる。押し負けたのは ラファール・ドラグーン。

「っ……！！」

「もらったぞ、シャルロット……！」

箒が一気に攻めかける。が、シャルロットはそれさえも予測の範囲と口元を歪ませた。

「ラファール・ドラグーン……！」

ライト・エッジ スタッグモード

右腕部ブレードが収納されると同時に、装甲全体が前面にスライド。更にそこから、スタッグエッジ 大剣を展開する。

ワイヤード・スタッグ

「何っ……！！？」

勢い良く射出されたスタッグエッジが、箒の体を捕獲して締め上げる。

「くッ！ こんな武装もあったのか……！」

オレンジに光るスタッグエッジが、紅椿のシールドを締め上げて削り落とす。

箒はすぐさま、ワイヤーを切り落とさんと空裂を振り上げた。

「おっと！」

「ッ ……!?」

シャルロットはワイヤーを巻き戻すと同時に、右腕を大きく振り抜いた。同時にスタッグエッジを開いて、箒を地面に向かって投げ飛ばした。

「ぐううっっ！」

地面を転がりながらも、箒は自立攻撃ユニットを切り離しながら体勢を立て直す。

「ドラグーンッ！」

レフト・シエル バンカーモード

左腕部にバンカーが突き出て、エネルギーが収束していく。

「バンカーを出した以上、シールドは使えまい!!」

箒は二刀を構え、一気に突撃する。堅牢な防御も、使えなければ意味などない。

ただし、その判断はドラゴンホーンが普通のパイルバンカーであったならだ。

「接近なんて、させるものかつ!!」

シャルロットはバンカーを、眼前の空間に打ち込んだ。

「何を ……ぐあぁっ!!?」

直後、全身を貫く衝撃。宛ら巨人の拳を喰らったかのような強烈な一撃に、箒は自立攻撃ユニットごと吹き飛ばされた。

再度地面に叩きつけられた紅椿は、そのシールドエネルギー残量がついにゼロになったことを告げた。

「っ……くそっ！ 何だ最後のー撃は!?!」

「このドラゴンホーンは、衝撃砲と同じ 空間圧兵器 なんだよ」  
「空間圧兵器だと……！？」

緩やかに地上に降下しながら、シャルロットはバンカーを格納する。ドラゴンホーンは、先端部から収束したエネルギーを開放することで空間に圧力を与える。

圧力を加えられた空間は、波紋のようになねり拡がって行き、その衝撃で攻撃する武装である。

勿論、範囲が広がれば威力は減衰するし、単発でしか使えない。そして最も威力の高いのは通常のバンカーと同じゼロ距離だ。

だがそれを差し引いても、空間攻撃には多くのメリットがあった。それがこの、『空間制圧範囲』の広さである。

ラファール・ドラグーンの前面に位置取っていたならば、その攻撃範囲から絶対に逃れることは出来ない。

「ぬう……読み違えたか」

「まあ、まさかの武装だからね。勘違いしても仕方ないよ」

唸る筈にそう言って笑いつつ、シャルロットは客席に視線を送る。

その先に居る一夏 春斗に向かって、右手を掲げてみせた。

（見てくれた、春斗？ 君の夢の翼は、ちゃんと此処にあるよ……！）

「っ……」

誇らしげに微笑むその横顔に、筈は胸の奥が締め付けられるような感覚を覚えた。

もしも何かが違っていたなら、あの機体を使っていたのは自分だったかも知れないという思いと、そこに込められた想いの強さを感じてしまう。

筭は立ち上がり、ピットへと足を向けた。

(まだ弱いな……私は。こんな事では何も守れん……)  
敗北から自身の足りない部分を省みながら、拳を握り固めた。

模擬戦を観戦していた一夏達は、予想以上の結果に驚きを隠せないでいた。

「むむっ……」

特にラウラは、機動力が低めのシユヴァルツエア・レーゲンで如何にして対抗するか頭を悩ませていた。

「なんつーか……シャルロットの奴、滅茶苦茶強くないか？」

『自分で設計しといてなんだけど……あれ、性質が悪いね』

「……………」

「セシリア。どうかしたのか？」

「え？ いえ、ちょっと考え事をしていただけですわ」

心ここにあらずといった感じのセシリアだったが、一夏が声を掛けると慌てて頭を振った。

(ラファール・ドラグーン。あの機体に勝つには、どうあっても偏<sup>レキシブル</sup>向射撃を会得しなければ……！)

内心の焦りを抑えつつ、セシリアもまた自身に足りないものを模索していた。

第らと合流した一夏達がアリーナを出ると、ゲート前に人影があった。

「あれ？ メイドさん？」

「チエルシー？」

そこにいたのはセシリアのメイドのチエルシーであった。

「お嬢様。荷物の運び込みが終わりましたので、ご報告をと」

「そう。ご苦労様」

「セシリア、この人は？」

他のメンツを代表して、一夏はセシリアに尋ねた。すると、チエルシーはすつと佇まいを正し、深くお辞儀をする。

「申し遅れました。セシリア様にお仕えしておりますメイドの、チエルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおき下さい」

「ああ、あなたが。前に一度、セシリアから話を聞いてます。初めまして、織斑一夏です」

「これはご丁寧に。時に織斑様、お嬢様は私のことを何と？」

「えっと、とても良く気が利く方で、優秀で優しくて……美人だつて」

「まあ」

柔らかく笑みを浮かべるチエルシーに、一夏は深くにもドキッとさせられてしまう。

そしてセシリア達の視線が一夏に厳しく突き刺さる。

「私も、織斑様の事をお嬢様からよく聞いておりますわ」

そんなヤキモチを感じ取ったのか、チエルシーはまた微笑みながら言った。

その瞬間、セシリアの顔が真っ赤になる。そして視線が突き刺さっ

た。

「へえ、そうなんですか。ちなみに、何て言ってるんですか？」  
背後の修羅場など気付きもせず、一夏はチエルシーに尋ねた。

（お願い、チエルシー！ 言わないで……！）

セシリアは顔を赤くしたり青くしたりしながら、チエルシーに目で訴える。

「くすつ。それは」

そんな願いを聞き取ったのか、チエルシーは茶目つ気をタツプリと含んだ微笑と共に、ウインク一つと人差し指を唇に添えていった。

「 禁則事項です」

意味は合ってるけど、作品が違う。

何やかんやとありつつ、チエルシーは帰っていった。  
が、それだけで終わるほど甘くはない。

その日の夜。寮の大浴場のサウナから出たセシリアはロビーの自販

機で何か飲み物を買おうとしていた。

そこでロビーのソファに座る一夏に気付き声を掛けようとした。

だが、すぐにその足を止めて近くの観葉植物の影に隠れた。

一夏が一人ではなく、鈴と一緒にだったからだ。

「なあ、何でウォーターワールドで待ち合わせなんてするんだ？

一緒に行けば良いじゃないか？」

「ばっか！ そんなの……恥ずかしいじゃないのよ」

「そうか？ 俺は別に恥ずかしくなんてないぞ？」

「あたしが恥ずかしいのよ！」

「何だよ。俺と一緒にだと恥ずかしいのか？」

「っ……！ あんた、わざと言ってるでしょ！？」

「は？」

「……とにかく、待ち合わせだからね。日曜10時、遅刻するんじゃないわよ？」

「分かってるよ」

「……………」

セシリアはシヨックに思わず、観葉植物を握り潰すところだった。

二人に気付かれないようにこっそりと部屋に戻ると、すぐにパソコンを起動させた。

「キーワードは、『ウォーターワールド』『日曜10時』『待ち合わせ』ですわ！！」

その日、セシリアの部屋から明かりが消えることはなかった。



第47話 乙女たちのサマーデイズ（後書き）

いよいよ4巻も本格始動。

本編通りに行かない話ばかりだけど頑張ります。

ふと、これが終わったら何を書こうか検討中。なのはも止まったままだし、タイバニとかちょっとやってみたいクロスがあったり。

……取り敢えず、これを完結させることに集中しますw

第48話 水の国の少女達（前書き）

日常回。

原作ではとても酷かったウォーターワールドですw  
本来は居ない筈の人が居たり、色々変えてお送りします。

## 第48話 水の国の少女達

土曜日の第三アリーナ。

ここでは、派遣されてやって来た倉持技研スタッフによる、白式及び裏白式のデータ収集が行われていた。

エネルギーバランスやスラスタ出力、雪羅のデータ収集を終えると、実際に動かしてのデータ測定。

一時間程で白式が終わると、今度は裏白式のデータ取りが開始される。

大まかな部分は白式と同じだが、月乃雫や晨月といった特殊機能を持った武装と、射撃武装である月影のデータ取りもあるので、倍の時間を掛けてデータ収集が行われた。

述べ三時間に及ぶデータ収集も無事に終わり、春斗はピットへと戻る。

「お疲れ様です、織斑君」

「山田先生。すみません、立ちあってもらって」

「いいえ。これも仕事の内ですから」

ピットで春斗を出迎えたのは、データ収集の立ち会いを務める真耶であった。

本来ならば専用機持ちは国家、企業所属である為に立ち会いをする必要はない。

だが一夏、そして筈の所属は決まっておらず、現在もアラスカ辺りは会議が大紛糾していることだろう。

そういつた事情もあり、倉持技研のデータ収集には教員立ち会いの元で行われている。

というのが表向きの理由であった。

白衣を着た技研の職員が、二人の所にやって来た。

「では最後に、『融合IS』のデータを取らせて頂きます」

何の感動も孕まない事務的な言葉に、春斗はやはりなという表情をし、一夏はムツとする。

「今日予定されていた事項は全て、滞り無く終わった筈ですが？」

真耶は一夏を庇うように一歩前に出ると、キツと睨んだ。

「二機のISが融合し一機となるなど、前代未聞。世界中が注目しているデータを取らずに置く訳にはいきません。」

そもそも、白式も裏白式も我が倉持技研のISです。そのデータを取るのだから何の問題も無いでしょう？」

「残念ですが、認めることは出来ません」

「おや、一教員でしかないあなたにそんな事を決める権限がありますか？」

「当校の教師として、この学園に所属する生徒の安全を守る義務と責任が私にはあります。」

『融合IS』には未知の部分が多く、無用の危険に生徒を晒すことをIS学園教師として、そして今回の立会人として、認めることは出来ません」

静かだが強い口調で真耶が言い切る。

「それに、以前『融合IS』を起動した際、彼は意識を失い、一種の昏睡状態に陥りました。『世界唯一の男性IS操縦者』の身に何事かがあれば、それこそ国際問題です。それを理解した上で、『融合IS』のデータを尚、取るうとしますか？」

「……後悔しますよ？」

「後悔？ 国際法廷にでも訴えを出しますか？ …… 日本を含む、  
全国家を相手取る覚悟で？」

「くっ……！」  
幾ら前例のない『融合IS』に価値があるとしても、世界唯一の男子操縦者である一夏の身の安全と比較すれば、後者が勝つに決まっている。

もし、強行して彼の身に何事か起こったならば、彼の首どころか倉持技研の取り潰し、更には日本は賠償金を払わされるだろう。

そしてその原因となった人物　つまり彼は、社会的に完全抹殺された上で、陽の下を歩けることは一生ないだろう。

「わかりました……今回は引かせて頂きます」  
真耶に完全に論破された上に鋭い視線に気圧され、技研職員は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて踵を返した。

部下だろう他の職員に苛立ちをぶつけながら、撤回の指示を出した。

「ふう、緊張しましたあ」

へなり、といったもの真耶に戻る。ずり落ちた眼鏡を戻しつつ額に滲んだ汗をハンカチで拭く。

「すみません、山田先生。助かりました」

「いいえ。実はこうなるんじゃないかと、織斑先生から忠告を貰っていたんです」

「姉さ……織斑先生から？」

「ええ。ですが臨海学校の時のように倒れる可能性を鑑みれば、止めるのは当然です」

真耶が立会人としてこの場に居るのは、千冬の言があったからだ。

データ採取の要望書を見た千冬は、倉持技研が月華白雪のデータを取ろうとしない筈がないと踏んでいた。

本当は自分が立ち会いたいところであったが、身内鼻痕などと言われて付け入られる隙を無くす為、真耶に立ち会いを頼んでいたのだ。それはある種、真耶ならば自分に代わって一夏達を守ってくれるという信頼の証でもあった。

杞憂ならばそれでいいと真耶は思っていたが、千冬の危惧した通りになった。

もしも事前に知らなかったら、丸め込まれていたかも知れない。

「とにかく、織斑君はもう帰っていいですよ。後はこちらの仕事ですから」

「分かりました」

ISを待機状態に戻した春斗は、真耶に頭を下げピットを後にした。

「……ちっ、忌々しい」

真耶に言い負かされた職員は、他の職員から離れた物陰で携帯端末を取り出し、とあるナンバーをコールした。

「こちら”ゴブリン”……はい、二機のデータは。ですが、例の融合機に関しては……はい、了解です スコール」  
端末を切り、上着に仕舞った。

「ふん。IS学園ごときが……まあ、必要なデータは取った。後は向こうの仕事だ」

くく、と愉快そうに晒いながらゴブリンは他の職員に続いてアーリーナを後にした。

不穏なる空気に誰も気付くこと無く、データ取りは終わりを迎えたのだった。

その日の夜。セシリアは自室にて不吉な笑みを浮かべていた。

「フッフッフ……ですわ」

カチカチカチ。薄暗い照明のみの室内に響く不気味な音。その正体は、彼女の手に握られているカッターだ。デスクのライトに反射して、刃が不気味に光るとそれが照り返し、サファイアの瞳を輝かせた。

カッターの切っ先をデスクの上に置かれた物に立てて、ズズツと引いていく。

嚴重にされた封を解き、押し開く。白魚のような白く細い指がそこに滑り込み、収められた物をゆっくりと取り出す。

「流石は日本。注文からすぐに届くこの早さ……賞賛に値しますわ」  
取り出したのは銀色のプラスチックカード。それこそ、彼女のジョーカー。

それを視認し、セシリアは不気味に笑った。

「フッフッフ……これで勝つる！ ですわっ！！」

IS学園の歴史に『ちよろ孔明』と名を馳せる策士（笑）セシリア・オルコット誕生の瞬間であった。

日曜。

一夏は休日の人の流れに乗って、ウォーターワールド前にやって来た。

「おお、すんげえ人だな」

『流石、今一番人気のスポットなだけあるね』

人の多さに呆れつつも、一夏は鈴との待ち合わせ場所であるゲート前に向かった。

「よお、鈴。早いな」

「遅いわよっ！」

ゲート前にいた鈴に声を掛けたら、いきなりご立腹であった。

「遅いつて……まだ約束の十分も前だぞ？　なのに何で文句言われなきゃならないんだ？」

「こういう時は、男が先に来て待ってるものなのよ！」

「あのなあ。遅刻してないんだから「いや、流石に三時間前から来てたら無理だよ」……て、三時間前!？」

「なっ……!？」

春斗の言葉に一夏は驚き、鈴は顔を赤くして目を見開く。

「ななな……何で知ってんのよ!？」

「何でつて……出ていくの見えたから？」

しれっと言う春斗。人差し指を頬に当てて小首を傾げるといふ無駄な可愛さアピールが、鈴の怒りを煽る。

「あんた、何で見てて普通に黙ってんのよ!？」

「だから今、こうして言っただじゃない」

「今、言わないでよ!？」

耳まで真っ赤になった鈴が、必死に口を塞ごうと手を伸ばす。が、それを避けて、ニヤニヤと笑う。

「まあまあ。僕はお邪魔だろうから、下がらせてもらっつよ。鈴ちやん……頑張つて？」

「あっ、こら！　待ちなさい!!」

鈴が止めるより早く春斗の意識は下がってしまう。

「なあ、鈴。何を頑張るんだ？」

「うっさいバカ!！」

「何でだよ!？　……ったく、さっさと中に入ろっぜ」

こういう時は、さっさと話題をシフトするに限ると、一夏はゲート

を指差した。

「そうね。あのバカには後でいくらでも言えるんだし。クッククック……」

鈴は両手をワキワキとさせて、ゲートへと向かった。

「……………」

どうせ、春斗に口で勝てないのだから無駄なことだろう。とは一夏は言えなかった。

「待っていましたたわ、二人とも!!」

「お久しぶりでございます、織斑様」

中に入るうとした二人の前に立ちはだかった人影。誰あるう、英国淑女セシリア・オルコットと、そのメイドであるチエルシー・ブランケットであった。

「……………セシリア？ チエルシーさん？」

「ちよつとセシリア!? 何であんたが此処に居るのよ!？」

「鈴さん、出し抜いたつもりでしょうが甘いですわ!」

ズビシツ、と鈴を指差し、セシリアは胸を張った。

「つ……………まさか、アンタに先回りされるとはね。正直、予想外だったわ」

「何か、遠まわしに侮辱されたような気がしますけど……………まあ良いですわ。さあ、一夏さん。一緒に参りましょう!」

セシリアはすつと一夏の脇に行くと、自分の腕を一夏のに絡めた。

『おお、柔らかい感触が肘につ! 一夏、もつと肘を曲げる!!』

『此処ぞとばかりに感覚共有するな! さっさと切れ!!』

『だが断る』

「ちよつとセシリア。あんた、チケットは持つてるの?」

鈴はニヤリと笑って、ヒラヒラとチケットを見せる。既に前売り券は完売。当日券も行列ができている。

鈴は待っている間、その行列を見ていたので、当然セシリアが並んでいたら気付く筈である。

「チケット？ あくら鈴さん。このセシリア・オルコットが一日しか使えないチケットなど買うと思いませんか？ これをご覧なさい！」

つきつける

銀色のカード二枚

「何だ、それ？」

「そ、それはまさか……ウォーターワールドの年間フリーパス！？ 一枚幾らすると思ってるのよ！？」

「そんなの、我がオルコット家にとっては大した金額ではありませんわ」

驚く鈴に対して、セシリアは自慢気に胸を張る。

『分かった。彼女は生粋の天然だ』

そして春斗は呆れ混じりに嘆息したのだった。

臨海地区にある、大型イベント用展示スペース。ラウラ、箒、シャ  
ルロット、織羽、簪の五人姿がそこにはあった。  
彼女たちの座るテーブルには、芳醇なスパイスの香りを漂わせるル  
ーと、ナンやライスが置かれていた。  
今日、ここで行われているイベントは『日本カレーフェスタ』。  
カレーにドハマリしているラウラが、休み前から楽しみにしていた  
イベントである。

「ええ！？ 鈴と一夏が出かけた！？」

「うむ。それとセシリアの姿も見えない。おそらく、二人を追うか  
何かしているのだろう」

「昨晚、ラウラは一夏を誘うべく声を掛けたのだが、鈴との先約があ  
ると断られた。」

「くっ……こんな所で悠長にカレーなど食べている場合ではない！  
すぐに追わなければ！！」

「スプーンをギョツと握りしめ、箒は歯軋りする。鈴、そしてセシリ  
アに出し抜かれるなど、メインヒロインの名折れだ。」

「まあ、落ち着きなさいよ箒」

「自分がチケットを売ったくせに、いけしゃあしゃあと箒を宥める織  
羽。流石は忍者、面の皮も厚いものだ。」

「そつだ。そもそも、一夏の中には義兄上がいる。それをよく知っ  
ているが故に、迫ることも出来まい」

「ラウラはタンドリーチキンを切りつつ、言う。」

「セシリアに関しては何の心配も要らない。あれは策を弄して自滅  
するタイプだ」

「……それは確かに……」

「ラウラの言葉に箒達はウンウンと頷く。大概酷い。」

「あ……ココナッツカレー美味しい」

そして一人は、完全に話を聞いていない。

「そういえば、ずっと聞きたかったんだけど……… 篤？」

シャルロットに尋ねられ、篤は「何だ？」と言いながらナンを千切る手を止めた。

「気になつてたんだけど……… 篤って学年別トーナメントの時、ずっと訓練してた？」

「ああ。真打鉄をもらってからトーナメント開始まで、ずっと千冬さんに鍛えてもらっていたんだ」

「教官に？」

「篠ノ之。真打鉄は春斗がおまえの為に用意したISだ。それを使う以上、トーナメントで恥ずかしい戦いをさせる訳にはいかない」

「はい」

「私が打鉄を着けているのは、本来ならば必要ないが……… お前が気兼ねなく攻撃できるようにする為だ。要らん気遣いで手を抜かれては意味が無いからな」

千冬は腰に手を掛け、打鉄の太刀を引き抜いた。それだけで、箒に掛かるプレッシャーが跳ね上がり、自然と汗が頬を伝った。

「さあ、来い。多少はマシになるようトーナメントまで鍛えてやる  
う」

そう言っつて千冬はニイ、と口角を釣り上げた。

「ああ、あの頃はいつもボロボロになって帰ってきてたわねえ」  
「あの時は毎日、死ぬかと思ったものだ……」

ナンを啜えながら、箒と織羽はしみじみ思い出す。シャルロット経の善戦も、比喩なき地獄の特訓の成果なのだ。

「うむ。教官の特訓は夢にすら地獄を見るからな」  
と、ラウラも同じ経験があるのか、ウンウンと頷いた。

「織斑先生の特訓……どれだけなんだろう？」

シャルロットは、想像さえ出来ない千冬の特訓に首をかしげた。

「……チキンカレー、美味しい」

簪はマイペースにチキンカレーを咀嚼していた。

「ハクシヨン！」

「ちよつと！？ ツバ飛ばさないでよね！？」  
女子更衣室にて、セシリアは唐突にくしゃみをした。鈴は思わず身をよじった。

先に着替えを終えた一夏は出口付近で鈴達を待っていた。

「しっかし、遅いな。水着着るぐらいでそんなに時間掛かるもんか？」

『女子の着替えと買い物は総じて遅いものだよ、一夏』

『何で遅いのか、全く理解できん』

『そこが一夏のダメなところだね。女子に対しての理解が足りない』  
『ほっとけ』

そうこうしている内に、向こうから歩いてくる見知った顔に気付く。

「お待たせ、一夏」

「お待たせしました、一夏さん」

「おう……あれ？ セシリアの水着、新しいのか？」

鈴は臨海学校の時と同じものであったが、セシリアは違っていた。臨海学校の時は青のビキニとパレオであったが、今回は前よりも露出が若干上がっている。

「む？ 鈴ちゃん、少しウエストが細くなってるね……1、12センチ？」

「……何で分かんのだよ」

そして鈴も、ささやかながらダイエットをし、成果が出ているようだ。

「でも、鈴ちゃんにダイエットは必要ないと思うけど？」

「どっという意味よ？」

「ほら、鈴ちゃんは胸もバストもボインもほっそりしているから必要ない……」  
「ってててててててえっ！？ 俺の頭蓋がギシギシとヤバめの音を容赦なく響かせてやがる！？」

「ナニ？ イマ、ムネガチサイトテ、サンカイイヤガツタワネ……？」

「違う違う！ 俺は言ってない！ てか、お前の背後にポニーテー

ルの悪魔がああ……っ！」

「ナ〜二……アキイ？」

「アキって誰だよ!？」

どうやら怒りの余り、鈴はヒンヌー教の闘神 シムアード・ミナー  
ミ を呼び出してしまったようです。

「いてて……セシリア、チエルシーさんは？」

もしかしたら多少凹んだかも知れない頭を摩りつつ、まだ来ないも  
う一人について尋ねる。

「チエルシーでしたら、もうすぐ来ると思いますけど?。」

「何? そんなにメイドさんの水着が見たいわけ?。」

「……そうなんですか、一夏さん?。」

ハイライトの消えた瞳で揃って首を傾げる様は、宛らホラーである。  
なまじ手が飛んでこないせいで、余計に怖い。

ざわっ。

丁度その時、ざわめきの声が聞こえた。何かと三人が向くと、そ  
こには待ち人の姿があった。

颯爽と歩く姿に人は皆、我が意で道を開けていく。

「お待ちせして申し訳ありません、お嬢様」

「……………」

鈴とセシリアは声を失っていた。

チエルシーの水着はゼブラ柄のビキニであった。その細い腰に巻かれたパレオもまた、白地に短い黒のラインが入ったもの。

決して派手ではないが、しかしチエルシーのスタイルと完全に一体となったそれは、まるでサマードレスだ。

肩にシヨルダーバッグを掛け、それもまた彼女の姿に違和感なく溶け込んでいた。

「『……………』」

「……………？ 如何しましたか？」

「……………え！？ いや、よく似合ってるなって……………すみません、ジロジロ見ちゃって」

チエルシーに声を掛けられ、一夏は自分が彼女に見とれていた事に気が付く

『いやあ、凄いな……………僕も見とれちゃったよ』

「ありがとうございます。織斑様は女性を喜ばせるのがお上手でいらっやいますのね」

「え？ いや、そんな事は……………はは」

クスリと笑うチエルシーに、一夏はつい照れてしまう。

「セシリア。アンタ、何であのメイド連れてきたのよ!？」

「日本の地理には詳しくありませんのよ、私は!」

道に迷わないようにとチエルシーをお伴にしてきたのだが、裏目であつたようだ。

実は一夏には一つの噂があつた。

それは『織斑一夏は年上好き』というものだ。

元は『千冬が一夏の姉であり、あんな美人で完璧な姉がいるのだから、きつと理想のタイプもそれに近いだろう』という所から始まった。

が、生徒会長の更識楯無に特訓を受けていたりした事も、噂の信憑性に拍車をかけていた。

（まさか……本当に年上が好みとか？）

セシリアは内心で呟く。もしもそうなら生まれながらハンデキャップを背負っている事になる。

スタイルや髪型などならばどうにも出来る。だが、年齢ばかりはどうにもならない。

セシリアは自分の迂闊さを呪ったり呪わなかったりした。

太平洋上を、一隻の船舶が航行していた。

その船中に人はおらず、全てコンピューターによる制御。

否、そこに一つだけあった。

暗く、幾つもの文字列を映すモニター郡だけがそこを照らす。人が居れば震えるほどに寒い船内には太いケーブルが無数に刺さった機械。

そしてその中心に鎮座する　　何か。

それはただ揺られるまま、静かにその時を待つ。

海は穏やか。船はゆらゆらと揺れながら進んでいった。

「うおおおおっ!?!」

「キヤアアアアアッ!」

一夏とセシリアが、チューブ型のウォーターコースターを勢い良く滑り落ちる。

ウォーターワールド自慢の一つであるそれは、国内トップクラスの長さを誇る。

距離が長いということ、高さがある。高さがあるということ、速度があるということだ。

コースターの終わりは、1メートル下のプールへのジャンプ。

「キヤアアアアッ！」

「どわあっ!?!」

バツシャーンッ!!

ド派手な水飛沫を上げて二人がプールに落ちた。

「ぶはあっ！」

先に一夏が立ち上がる。

「プハッ！」

そしてセシリアが顔を出した。だが、その顔は何故か赤らんでいた。

「どうした、セシリア？」

「その……ちょっと、水着が食い込んでしまった……」

「ぶっ！」

モジモジとしながら水面下で水着を直すセシリアに、一夏は噴き出した。

流水プールで、鈴は一夏と共に流れていた。

いや、それは正確ではない。

「いやあ、楽ちん楽ちん」

「鈴、何で背中に乗ってんだよ？」

すい〜っと泳ぐ一夏の背中にコバンザメのように張り付く鈴。

「何でって……楽だからに決まってるじゃない」

『一夏、持たざる鈴ちゃんの精一杯のアピールなんだから、言っちやダメだつて』

「そして春斗。あなたは後でぶっ飛ばす」

『全力で拒否させてもらおうよ』

「遠慮しなくて良いわよ」

「その被害喰らうの、俺なんだけど!？」

一夏は何としても止めようと、必死に叫んだ。

時刻は丁度、アナログな時計の針が天上に向かって重なり合う時刻。

「おおっ！ これは美味そう！」

「お口に合うと良いのですが」

テーブルにはチェルシーの作ったランチボックス。その中にはサンドイッチ、フライドチキン、ポテトサラダなどが収められており、どれもとても美味しそうであった。

「本当でしたら、一夏さんにまた私のお弁当を食べて欲しかったのですが……チエルシーったら、『お嬢様。そういう事はメイドの役目です』とかいって作らせてくれなかつたんですよ」

「そ、そっか……そりゃあ……残念だったな、セシリア」

心底がっかりといった風のセシリア。一夏はホツとしながらチラリとチエルシーを見た。

ぐっ。

小さく、親指を立てられた。

『流石はセシリアさん専属。分かってるね』

『分かってるなら、セシリアに料理を教えてやって欲しいものだがな』

「あっ」

と、チエルシーが小さく声を上げた。

「どうしましたの、チエルシー？」

「いえ。私としたことが……飲み物を入れてくるのを忘れてしまつたようです。申し訳ありませんがお嬢様、あそこの売店で購入してきて頂けますか？ 私はその間に準備をしておきますので」

「ええ。適当に何か買って来ますわ」

「鳳様、よければお嬢様と一緒に行っていただけますか」

「いいですけど……」

チラリと、一夏の方を見る。コクリと頷く一夏に鈴は頷いて返した。

二人は売店の行列に並び、遠目に見えるメニューから何を買うつかを話し合った。

「今更ですけど、一夏さんはこのような所で遊んでいて良い

のでしょうか？」

「何よいきなり？」

「いえ。今までずっと、がむしゃらに訓練に励まれていましたから……気になって」

夏休みに入っても、一夏は自主訓練を欠かさなかった。それが自分が誘ったとは言え、事情を知らないセシリアには、いささか不自然に見えたのだと、鈴は気付いた。

「別に可笑しくないわよ」

「どうしてですか？」

「春斗はね、存在の安定の為に外に出て、日常の色んな刺激を受けないといけないのよ。でも、おんなじ刺激が続いても、意味が無いでしょ？ だから、こうして遊ぶことも無駄じゃないのよ……むしろ、すつごく大事なことなのよ」

と、鈴はセシリアに得意げに説明する。

「流石に詳しいですわね」

「まあ、当然よ。何せずっと……あたしは一緒だったんだから」

「……ですが、今後はそうもいきませんわ。別に鈴さんでなければならぬ理由はないのですから」

「……へえ。ケンカ売ってくれてんの？」

「あら、分かりました？」

不敵に笑う二人。だがそこに敵愾心はなく、ただ純粹にライバルとしての対抗心があった。

「……それで、わざわざ二人を遠ざけたのは如何してですか？」

「やはり、お気付きでしたか」

残った一夏とチエルシーは、ランチを挟んで向かい合うようにして座る。

「セシリアに買い物頼むのはちよつと不自然ですからね。そりゃ、何かあるんじゃないかって思いますよ」

「やはり、不自然でしたか。ですが、この話をお嬢様に聞かれるのは、いささか面倒なのです」

そう言つて、チエルシーは背を正した。そして深く頭を下げた。

「織斑様。オルコツト家使用人を代表して、貴方様に感謝致します」

「え？」

戸惑う一夏に、数秒経つて頭を上げたチエルシーが言葉を続けた。

「お嬢様のご両親……先代の当主である奥様と旦那様の事はご存知ですか？」

「えつと……三年前に亡くなつたつていう？」

一夏はちよつとした切っ掛けで聞いた話を思い出しながら口にする。

「はい。奥様と旦那様がお亡くなりになって以来、お嬢様はずつとオルコツト家当主として責務と責任を背負い、ご両親の残された物を守るために粉骨砕身しておりました。それこそ、ご自分の事など捨て置くように……その時にはもう、昔のように笑われる事はないとさえ思いました」

チエルシーはその頃を思い出したのか、少しばかり寂しげに笑つた。

「ですが、イギリスに帰つてきたお嬢様は……まるで昔の頃のように……いえ、それ以上に一人の人間として変わっておられました。

そしてお嬢様を変えて下さつた方……それが、織斑様です」

「俺はそんな大それた事はしてないですよ、入学一週間で決闘したくらいで……変わったって言うなら、俺だけじゃないと思いますよ？」

「確かに、IS学園でお嬢様は多くのご友人を得られたようです。ですがその全ては、織斑様と出会えたからこそです」

「いやあ、そんな面と向かって言われると、何か恥ずかしいです」

「一夏はいつも通り、セシリアさんにフラグ立てただけだしね」

「うっせえ。てか、フラグってなんだよ？」

「さあ？」

とぼける春斗に内心でイラツとしながら、顔には出さない。

「織斑様」

「っ!?!? はい、何ですか!?!?」

チエルシーの声にハツとする。彼女は真剣な眼差しで一夏を見つめていた。

「どうか、セシリアお嬢様を”末永く”よろしくお願い致します」  
チエルシーは深々と頭を下げた。

「ちよつと、頭を上げてください! えつと……俺で良かったら、  
彼女は大事な”友人”ですから”って!”

感覚共有で、春斗が一夏の言葉を遮る。

「ええ。”今は”、それで結構です」

と、チエルシーはクスリと笑った。

「お前、何でいきなり!?!?」

「一夏。危うく言質を取られるところだったよ? 自分の発言には  
もつと気を付けなさい」

「……はあ?」

自分の言葉の何処に言質を取られる場所があったのか分からず、  
一夏は首を傾げた。

「一夏。お待ちせよ」

「ふう、どうしてああも人が並んでいるのでしょうか……理解に苦しみますわ」

丁度、セシリア達も戻ってきて、ようやく昼食となった。

「お嬢様」

「何です、チエルシー？」

隣りに座ったセシリアの耳元に、チエルシーはそっと口を寄せる。

「織斑様はなかなか強敵のようですが、頑張ってくださいませ」

「っ！？」

瞬間、セシリアの顔が赤く染まった。

まだまだ、夏の一日は始まったばかりである。

第48話 水の国の少女達（後書き）

不穏な気配もありながら、次回もウォーターワールドです。  
しかし、そんな平穏なままで終わりはしないのがこの作品ですW

次回、とんでもない事態が！！

また、自分の首を締めてるし……W

第49話 オーシャンズ・カラミティ（前書き）

日常回。

余談ですが、作者は3DSを22日に買いました。

……はい、言いたいことはそれだけですw

## 第49話 オーシャンズ・カラミティ

安心安全のメイド・イン・チエルシー製お弁当は、とても美味しく頂かれた。

セシリアは若干不満そうな表情があっただが、それでもチエルシーの料理に文句がある筈もなく、結局は大人しく昼食を取った。

「はいー夏さん。口をお開け下さい」

「いや、セシリア。普通に食べるから」

「ほらー夏！ チキン食べなさい、チキン！」

「あのなあ、普通に食べるから」

「織斑様。さあ、どうぞ」

「チエルシーさん！ あなたもですか！？」

『リア充マジ爆発しろ。とでも言うべきかな？』

こんな一幕があつたりしたが、それでも平穩に昼食は終わった。終わつたつたら終わったのだ。

食後の休憩をしていると、なにやらざわめきが聞こえてきた。何だろつかと視線を向けてみると、何やらイベントを行うようだ。

『午後一時より、水上ペアタッグ障害物レース。参加受付はまもなく締め切りとなります。優勝商品は』

何の気無しにそれを聞いている一同。

『 ペアで行く、五泊六日の沖縄旅行です!』

「っっ !?」

アナウンスが賞品を告げた瞬間、鈴とセシリアの表情が一変した。

五泊六日のペア沖縄旅行。

それはつまり、邪魔の入らない二人だけの時間。

(優勝すれば !)

(一夏と二人きり!)

「一夏さんっ! 参加しましょう!」

「一夏ッ! 参加するわよ!」

「ちよ、待て! 引っ張るな!」

『あれ? 僕、綺麗サツパリ忘れられてない!?』

両脇を抱えられ、一夏は受付まで引っ張られていく。その後を慌てること無く、チェルシーは追いかけたのだった。

「さあ！ 第一回ウォーターワールドペアタッグ水上障害物レース、いよいよ開幕です！！」

イベントステージの上に立つ司会担当の女性が、大きなジャンプと共に高らかに宣言すると、大きな歓声が上がった。

大胆なビキニに収められた凶悪な代物が、とても物質世界のものとは思えない軌跡を描いて弾む弾む。

ちよ、あと数ミリで彼女の双子山の山頂がご来光しちゃうんじゃね？ みたいな期待もあって、主に男性の声が大きかった。

『なんて事だ……まだ在野にこれほどの人材が埋もれていたなんて……！ くつ、ここの責任者は相当の手練か！！』

春斗は司会の女性のサイズが、よもやの篝クラスであった事に衝撃を受けていた。

ギリッ。と、ありもしない奥歯が軋む程に悔しがる。

『何でそんな悔しがつてんだよ……』

理解不能の一夏は、深く溜め息を吐いた。

スタート地点には既に、鈴とセシリアを含めた参加者が開始の時を今や遅しと待っていた。

何故二人がペアになっているかというところ、このレースに参加しようとした一夏を含む男性は尽く、『お前ら空気読めよ』という受付嬢の無言の圧力によって排除されたのだ。

「水上を走るのは、何時の時代も女性の方がいい……誰が醜い男の裸なんぞ見たいものか」

と、主催者にしてウォーターワールドオーナー【向島光一郎】は咳いていた。

この企画、完全に彼の趣味であった。

ちなみに彼は、アイドル水泳大会などの番組は高クオリティ保存の上、自らデジタルリマスターにして高画質永久保存をしている程の変態であった。

閑話休題。

一夏が出られないなら仕方ない。

鈴とセシリアは手を組んだ。エリートとしての訓練を積んだ、正に最強コンビだ。

「あたしらが組む以上、優勝はもらったも同然よ!」

「ええ。格の違いというものを思い知らせて差し上げますわ!」

(後はどうやって、セシリアから旅行を奪うかよね……)

(後はどうやって、鈴さんに旅行を諦めさせるかですわ……)

既に、最強コンビは空中分解しそうであった。

「はあ。余り目立つ事はしたくないのですが……」  
「まあまあ。いいじゃねーかよ、折角来たんだし。祭りは参加してこそ面白いってもんだろ？」  
そしてここに、二人にとって不倶戴天の敵とも言つべき存在が居たりする。

ルールは単純明快。

50×50の巨大プールの中心にワイヤーで吊られた浮島がゴールで、そこにあるフラッグを取ったペアが優勝。

コースは複数の島が、中心の島を囲むようにして並んでいる。コース上には障害が並び、それを突破して参加者たちはゴールを目指す。落ちても失格にはならないが、最初からやり直しとなる。

「これ……誰が作ったのかしら？」

「あくまでも正攻法のみしかできないよう、上手く組んでありますわね」

ショートカットも出来ない、正攻法のみでの攻略だけしかできないよう絶妙に設計されているコースに、鈴達は唖った。

だが、正攻法ならばモノを言うのは個々の身体能力。そのことに関して、鈴とセシリアは自信がある。

代表候補生の名は伊達ではないのだ。

「それでは、よいい……スタートッ!!」

開始を知らせるピストルが鳴り響き、参加者24名　その内1組が一斉に走りだした。

「甘い!」

「ですわ!!」

直後、鈴とセシリアは揃ってジャンプ。横からの足払いを躲して第一の島に着地。

このレース最大の特徴は【妨害OK】ということだ。だが、候補生として軍式の訓練も積んでいる二人にとって、それはただ自分達の優位にしかならない。

着地すると、すぐさま向かってきた別のペアを一蹴。纏めて水没させる。

「あんたらには水底がお似合いよ!」

鈴は捨て台詞と共に切り返して走った。

レースは最初から大混迷であった。まさか最年少ペアの立ち回りに会場は興奮。突破を図る真面目組と、妨害レッツゴーの過激組に分かれての乱戦状態。

その妨害の大半が、鈴とセシリアに集中していた。

「ちいつ!　邪魔よ邪魔!!」

「何度落としても……キリがありませんわ!!」

そうこうしている内に、別のペアが第二の島へと渡っていく。どうやら、妨害組とグルになっているようだ。

『鈴さん!』

『ええ、やるわよ!!』

秘匿回線で一瞬のやり取り。ライバルとはいえ同じ女性。こればかりはするまいとしていた禁じ手を今、解放する。

向かってくる二人。ガッツリと組んだ腕でラリアットを仕掛けてきている。が、そんな見え見えの動き、鈴とセシリアに通用する筈もない。

一瞬にして水に叩き落される二人。だが、すぐに水面に浮き上がった。

「無駄よ無駄！ 何度だつて復活するんだか………ら？」

その口が、凍りついたように止まる。何故なら鈴達の手には、非常に見慣れたものが握られていたからだ。

「そ、それはまさか……！？」

自然と、手が胸に触れる。無い 水着が無くなっていた。

瞬間、観客大興奮である。モニターしていた向島光一郎も大興奮していた。

「秘技、強制クロスアウト……！」

「いつの世も、戦いとは虚しいものですわね」

二人は揃って水着をクルクルと丸めて、観客席に向かってポーンと放り投げる。悲鳴と歓声が同時に上がった。

「急ぐわよ……！」

「ええ……！」

第一の島はロープで繋がれた島を渡っていくというもの。本来、一人が固定、もう一人が渡るといふような攻略法である。

だが、二人は一気に小島に向かってジャンプした。固定されていないので大きく揺れるそれを、まるで軽業師の如く、二人はヒョイヒョイと渡っていく。

「ああーつと！ なんという事だ！！ 二人は高校生ということですが、何か特別な練習でも積んでいるのでしょうか！？」

まさかの強行突破に、ボルテージは急上昇。

「へえ。なかなかやるじゃん」

「そろそろ、私達も行きましょう 葛城さん」

未だスタート地点に留まっていた二人がゆっくりと動き出した。

第二の島の放水トラップも、二人は一気に駆け抜ける。

「はっ！ 余裕余裕！！」

「この程度、地雷原に比べればちゃんちゃら可笑しいですわ！！」  
地雷原で何があったのだろうか、セシリア。ちょっとだけ、顔色が悪い。

続く第三の島の砲撃トラップも、第四の島のローラートラップも、  
一気呵成に突き抜ける。

そしてついに第五の島で、トップを捉える。  
が、ここでトップペアが足を止めて振り返った。

「あーっと、ここでトップの木崎・岸本ペア！ 得意の格闘戦に持ち込む気だあーっ！！」

「は？」

「得意の……何ですって？」

思わず二人も足を止める。

「皆様ご存知の通り、二人はそれぞれ先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルのメダリストペア！ 畑違いながら仲が良いと有名でしたが、ここまで見事なコンビネーションを発揮してきました！！」

「なっ　！！」

今更ながら、トップ二人の体格　アスリート独特のマッスル…

ボディに気が付いた。

「ちよつと！？ これは反則でしょ！？ 明らかに体型違うじゃないのよ！！」

「不味いですわ、幾ら何でも今の体力でまともやり合ったら……！？」

不利を悟るや、二人は後ろに飛んで距離を取る。だが、狭い浮島ではすぐに追い詰められてしまう。

「オオオオオオオオオッ！！」

怒号を上げて襲い来るマツチヨ。最早、時間はない。

「鈴さん！！」

「セシリア！！」

二人は一瞬のアイコンタクトの後、まずはセシリアが突撃。少し遅れて鈴も駆け出した。

「セシリアッ！！」

鈴が叫ぶと、すぐさま反転。両の指を組み合わせ、バレーボールのレシーバーのように構えた。

すぐ上には、鈴。そのまま右足がセシリアの手に乗る。



障害物を、まるで何も無いかのように駆け抜ける人影。おおよそ人間の速度とは思えない速さで、掛けてくる二人。

一人はストレートの黒髪。一人はポリウムアップウェーブの掛かった金髪。

電光石火にして疾風迅雷の如く、それらは第四の島から一気に、第五の島　　真っ直ぐ低空飛行で、自分達に向かって跳んできた。

そして、彼女たちの視界は強い衝撃と共に真っ暗になった。

所謂ひとつの『俺を踏み台にした！！』である。

勝った。これで一夏との旅行は自分のものだ。

鈴は勝利を確信し、ほくそ笑んだ。

だが、すぐに影が差した。鈴が視線を上げると　　見えたのは双子山二つ。一つは黒で、一つは青のストライプ。

それはヒンヌー教の仇敵にして、怨敵　　巨乳である。

巨乳は揃って鈴の背中に向かって足を降ろしてきた。

オーバーオールを着たヒゲのおっさんが羽の生えた亀を『ポコッ』と踏んで二段ジャンプするように、二人は鈴を踏んづけて再度跳躍。

見事にゴールの島に着地した。

さて、踏まれて羽をなくした亀の末路は言わずと知れたもの。  
鈴もまた、多分に漏れることはなかった。

「巨乳うっうっうっうっうっうっうっうっ！！」

ゴールに降り立った巨乳の背中に怨嗟に満ちた雄叫びを上げて、貧乳は水飛沫を上げたのだった。

そして、悠々とフラッグを取る巨乳。司会のおねーさんがまたしてもジャンプして、高らかに叫んだ。

「そこまでーっ！ 優勝は何とこちらも高校生ペア！！ 斑鳩、葛城ペアだあああああっ！！！」

うおおおおおおおおおっ！！！！

もう、色んな意味で興奮の坩堝であった。

「そんな……優勝が……そんなあ……」  
セシリアはまさかの逆転負けにへなへなと座り込み、踏み台にされた木崎・岸本ペアは大の字になって倒れていた。

「ごぼぼぼぼぼぼ……」  
そして鈴は、水面の底へと沈んでいった。

「ああ……負けちまったか」

『凄いなあの二人……この国に、あれだけの者がまだいたなんて……！しかも、その連れっばい子達も皆、質も量も超一級品じゃないか!!』

内心の熱弁はきっちりシャットアウトし、一夏は隣のチエルシーに向いた。

「残念でしたね。あと少しだったのに……」

「ええ。ですが、あの茫然自失とした隙だらけのお嬢様……なんて愛らしい」

といって、シヨルダーバッグからカメラを取り出すと、一心にシャッターを切り出した。

ああ、この人はこういうタイプだったか。  
一夏は心の中で呟いたのだった。

さて、時刻は少しばかり戻り、日本カレーフェスタ会場。

p i p p i p i

「ん？ 何だなんだ……？」

音楽を奏でる端末を織羽は取り出す。どうやらメールが来たようだ。

From: やっちゃん

件名: みんなで遊びに来た

本文：ウォーターワールド なう

「おお、忍び組全員で……って、ウォーターワールド？」

メール添付の写メに織羽は首を傾げた。

「何だ？」

箒はヒョイト、織羽の端末を覗き込む。そこには5人の少女が写っていた。

ポニーテールの元気系美少女、ショートヘアの天然っぽい美少女。眼帯ツインテールのクール系美少女。

そしてセシ鈴ペアの野望を粉碎した、ストレートロングヘア美少女とポリリウムアップウェーブの美少女。斑鳩と葛城も写っていた。

忍者養成機関、国立半蔵学院 忍び組の五人である。

「これは誰だ？」

「うん、あたしの忍び友達と、そのクラスメイト。皆、忍者なのよ」

「……………お前のような奴が、未だ他にもいるのか」

「あたし、怒っていいんだよね？」

この事実を知ったセシリアと鈴が暴れ出し、織羽に鎮圧されるまで残り7時間13分。

太平洋上に揺らく白雲に、一つの影がある。

白羅に霞むその姿は、美しい風景に対して余りにも異質。

機械の鎧。 鋼鉄の翼。

それはIS。全身を包み込むブラックスキンスーツの上から装甲が全体を包み込んでおり、顔もまたモノアイのフルフェイスユニットで覆われている。

四肢の装甲部、胸部、背部装甲に光るキューブ状の物体。それからエネルギーラインが走り、禍々しい光を循環させている。

その中でも最も異質なのは、胸部の装甲であった。  
ブラッドレッドのそれは、まるで閉じられた悪魔デモンズ・アイの瞳。

既存のISよりも一回り大きいそれは、余りにも異様な形状であり、それを見てISと呼ぶのは逡巡されるだろう。

? 実験空域に到達。周辺に対象以外の動作物無し。規定事項に則り、これより実験を開始します？

男性とも女性とも取れるデジタル化された音声、無機質に響く。

海面には、白波を上げて進むフェリー。センサーがそれを捕捉する。

? 実験開始？

そして、悪魔の瞳が開かれた。

午後3時を過ぎ、徐々に帰りだす客達。

ゲートを過ぎた所にある喫茶店で、チエルシーは四人分の飲み物を取りに行き、三人は疲労した体を休めていた。  
いや、セシリアと鈴はテーブルに突っ伏したまま微動だにしない。まるで精も根も尽き果てたかのようなようだ。

「セシリア……鈴もそろそろ復活しろよ」

「もう少し、ほっといて下さいまし……」

「あんたが思うほど、心の傷は浅くはないのよ……」

沈んだまま、答える二人。復活はまだまだ遠そうである。

「一夏、こうなったら二人に元氣の出るご褒美でもあげたら？」

「ご褒美って……俺が上げて喜ぶものなんてあるか？」

「あるよ。すっごく簡単で、かつ超効果的なのが」

「二人とも凄く頑張ったし、敢闘賞あげようか？」

「……何ですか？」

「一夏からのほっぺにキスとか……どう？」

「……！？」

跳ねるようにして、ガバツと二人の顔が上がる。

「ほら、効果靨面でしょ？」

「ああ、そうだな！でもこの後、この状況をどうするんだよ teme」

「エ！？」

「すれば良いじゃない、ほっぺにチューをさ」

「殺されるわ！！」

「まあ、否定はしない」

誰に、とは言わないが、恐らくそうなるだろうなという気はする春斗であった。

「まあ、敢闘賞は二人きりになった時にでも一夏に貰ってくつ！？」

キイイイイイイイイイイイイ

ッ！

言いかけた春斗の体が、突然ガクンと落ちる。  
同時に、ウォーターワールド全体の照明が一斉に消えた。

「ちよ、何だよこれ！？ ドアが開かないぞ！？」

「停電！？ 自販機が使えないとか、ありえない！！」

「おい！ 空調止まってないか！？」

どうやら、施設全体が停電に陥ったようだ。

だが、セシリア達はそれどころではない。

「どうなさいました、春斗さん！？」

「ちよつと、大丈夫！？」

テーブルをひっくり返して床に倒れた春斗。その額には脂汗が滲み出て、息も苦しそうに乱れている。

「だ、大丈夫……だから……」

「バカッ！ 顔が真っ青じゃないのよ！！」

苦しそうにしながら平気だと言う春斗に、鈴は怒鳴った。

『春斗、大丈夫か！？』

「ごめん一夏……落ちるから、代わって……！」

『ああ、分かった！』

言うや、春斗の意識が闇に落ち、入れ替わるようにして一夏の意識が浮上する。

「っ……!?!」

一夏はすぐに不快さを顕にした。

「一夏!?!」

「大丈夫……残滓が、残ってやがるだけだ……!」

本来ならば、春斗の感じたものは入れ替わった時点で消える。だが、余りにも強い衝撃を受けた場合、入れ替わった一夏にもそれが伝わってしまう事がある。

それを”残滓”と呼んでいる。

「一体、何があつたのよ!?!」

「恐怖だ」

「え……?」

「死ぬことへの……激しいまでの恐怖」

「っ!?! それってまさか……!?!」

鈴がハツとして瞳を大きく見開く。一夏は息を整えながら、セシリアを見た。

「セシリア。悪いけど……外を見に行ってくれないか?」

「外ですか?」

「ああ。どんな状況か……確認してきてくれ」

「……わ、分かりましたわ」

疑問はあるが、セシリアはこの場を鈴に任せ、出口へと向かった。

ゲートはエアスクリーンで冷気を逃がさないようにしてあるが、今はそれも止まっっていて、外気と人の熱気によって気温がグングンと上がっている。

じんわりと、汗が滲み始める。

「ちよつと通して下さい!」

完全解放されたゲートを通り、人垣を抜けて、セシリアは外へと出

る。

「っ……………!？」

そして、彼女は瞳を見開いた。呆然として開かれた口からは吐息さえも零れない。

「な、何なんですの……………これは？」

ようやく搾り出す声はかすれ、そして震えていた。

視界には街並み。だが、それは平穏な風景ではなかった。

至る所から上がる黒煙。鳴り止まないクラクション。所々から聞こえる、激突音。そして遠くから響くサイレン。

まるでテロでも起こったのかとさえ錯覚するような光景が、そこには広がっていた。

セシリアはすぐに、一夏の所へと帰ってきた。一夏はチェルシーに支えられながら椅子に座り、鈴に汗を拭われていた。

「どうだった？」

「どうもこうも……………街中至るところで火の手が上がっているようですわ。一体、何が起こってますの？」

セシリアが説明すると、鈴と一夏は顔を見合わせた。

「一夏、これってまさか……………？」

「ああ、あの時と同じだ……………」

「あの時……?」

意味が分からず、セシリアは首を傾げる。

「三年前、何もかもがおかしくなっちゃったあの日も……こんな風に事故が起こっていた……!」

一夏が、怒りに満ちた瞳で拳を握り固める。渦巻く激情を必死に抑えこんでいるように、セシリアには見えた。

「それってもしか、春斗さんの事ですの……? と、とにかく今は学園に連絡を……え?」

セシリアは端末を取り出すが、画面は真っ暗なままであった。

「無駄よ。この辺一帯の、ありとあらゆる機械がシステムダウンしているからね。端末なんて、真っ先にアウトよ」

「でしたら、ISのコア・ネットワーク通信を使いますわ」

コア・ネットワーク通信は普通の機械とは全く違う基準で存在している。

セキュリティレベルも桁違いであり、ハッキングやクラッキングも受けつけはしない。

セシリアはブルー・ティアーズを限定起動させようとした。

「……あら?」

「何やってんのよ? 早くしなさいよ!」

「わ、分かってますわ! でも……どうして起動しないの!??」

「なっ!??」

セシリアの言葉に、鈴は慌てて甲龍を起動させようとする。が腕輪は沈黙したまま。

「そんな……ISまで!??」

ISも確かに機械である。だが、一般レベルと比較すれば天地の隔たりがある。にも拘わらず、動かない。

「……白式」

一夏がガントレットに触れ、ISを起動させる。

キィー  
ン。

甲高い音を立てて、白式が限定起動する。

「普通に動くぞ？」

一夏の前に普通に現れるモニター郡。

「そんな……でも、確かに……！」

「まさか、白式だけ動くの……！？」

セシリアと鈴はもう一度、ISを起動させた。

キィー  
ンッ。

「あれ？普通に動いた？」

「そんな、さつきは確かに……？」

何事もないかのように起動する、ブルー・ティアーズと甲龍と、そこに受信コールが掛かった。通信先は IS 学園。

「はい。こちらセシリア・オルコット」

セシリアが早速、通信を繋ぐ。続いて鈴と一夏も通信を繋げた。

『こちらはIS学園。山田真耶です。オルコットさん、凰さん、織斑君に、任務レベルBのミッションを発令します！』

IS学園職員室に一報が届いたのは、書類整理も大体終わった頃であつた。

『海上保安庁より入電。鹿児島を出発したフェリーが突如制御不能となり、暴走。加速を続けながら現在、駿河湾沖を航行中。IS学園に出動要請』

「……!?」

有事の際、IS学園所属パイロットは国家、企業の要請を受けて出動する。

それらはIS委員会においても承認されている、正規の出動であり、それによるIS起動は禁則事項には当たらない。

「任務レベルはB。フェリーは駿河湾沖を暴走中……か」

千冬はすぐさま、送られてきた資料に目を通す。

「山田先生。すぐに動ける機体は？」

「リヴァイブや打鉄はすぐには……専用機持ちの子なら先行して行つてもらえます」

「今、現場に一番近いのは……織斑達か。よし、学園の準備が整う前に、先行して状況の確認に行つてもらおう」

「はいっ」

すぐに動こうとしたところに、更に入電。

『消防庁から入電。現在、首都圏の湾岸域において事故、火事が多発。IS学園に出動要請。速やかに出動されたし』

「何だと……!?」

「そんな、どうしていきなり……!?」

職員室がざわめきに染まる。

首都圏ともなれば範囲が余りにも広く、IS学園の機体全てを出して対処する必要がある。

だが、暴走フェリーも止めなければ被害は甚大だ。

「仕方ない。フェリーの方は織斑達に任せる。山田先生は三人にIS起動許可と、任務説明を！ 他の教員は事故の救援に向かいます

!!!」

「はい!」

職員室から、蜂の巣を啄いたかのように教員が飛び出していく。

これ程の本格出動は学園創設以来、数度とない。

緊急事態を告げる警報が、学園に響き渡った。

荷物をチェルシーに預け、一夏達は洋上を飛んでいた。

問題のフェリーは全長198メートル、総重量14,057トン。最大速力35ノット。

それが今、コントロールを離れ暴走状態にある。

『フェリーは今も加速を続けながら、相模湾に向かって進んでいきます。このまま行くと港に激突。沿岸の被害は相当のものとなるでしょう。』

皆さんは速やかに暴走原因の調査。可能な限り船舶を傷つけずに停止を行って下さい』

『可能な限りって……難しい注文ですわね。スクリューぐらい破壊してもいいのでは？』

セシリアの問いに、真耶は厳しい表情をする。

『その辺りは、あくまでも最終手段をお願いします。下手に攻撃を仕掛けて民間人に被害が出るのマジイので』

「そうですね。中には436人の民間人が乗っているんですわね」

情報を確認し、セシリアは眉をひそめる。

手っ取り早く動力を停止させれば早いですが、コントロールを受けつけないのでは、スクリューを破壊することが一番の手段だ。

それでも、破壊してすぐに止まるわけではない。慣性が働き、それがある限り船は動き続けるのだ。

スクリューを破壊するということは、アクセルを壊すと同時にブレーキを破壊することと同じなのである。

「とにかく、今は急ぎましょう！ 幸い、まだ余裕はありますし……状況を判断してから、対応を決めましょう。二人とも、それで良いですか!？」

「ええ、文句ないわ!」

「分かった!」

「それで……一夏さん。春斗さんは?」

セシリアが尋ねると、一夏は小さく首を横に振った。

「……ダメだ。奥に下がったまま、帰ってこない」

普段ならISに取り込まれる筈が、春斗はそこには居ない。

この状況にあつて、最も頼れるブレインの力が借りれないのは大きなマイナスであつた。

だが、それでもやらなければならない。

「……絶対に、止めてみせますわ」

セシリアの脳裏に過るのは三年前に起こつた、両親を含む多数の命を奪つた列車事故。

あの時、ただその死を受け入れるしか無かつた自分。

だが今は違う。ISがある。共に行く仲間がいる。

止めてみせる。今度こそ、無力な自分ではないのだから。

セシリアは拳を握り締める。  
ハイパーセンサーに、問題のフェリーが映しだされた。

第49話 オーシャンズ・カラミティ（後書き）

そのまま終わるとおもいきや、そうは行かないのがこの作品。

一気にシリアス全開、怒涛マックスです。

……また、自分でハードルを上げるしw

## 第50話 カラミティ・カウンターズ(前書き)

作者はISをアニメから入った口です。

一話を見て、その後の展開を色々と考えました。

「MFだからハーレムとかあるんだろうけど、きっとシリアスな部分とか、締めることは締めるんだろうな」

とか、色々ですw

(まあ、原作はあんな感じで肩透かしの感はありましたがw)

その時の事がこの物語の原動力になっています。

この話は特に、その時のイメージを強く持っています。

謎も新たに増える第50話。それではどうぞ。

## 第50話 カラミティ・カウンターズ

IS倉庫より、次々に出撃する学園所属IS。

その装備は通常の武装ではなく、災害対策用非量子化装備である。

非量子化装備とは、インストールに寄らない外付け装備である。

通常のIS武装が複数の機体間で使用する際、許可をする必要があるが、この装備に関してはそれが一切ない、完全なフリー状態である。

「現着次第、現地責任者の指示に従い行動を開始。我々は素人ではないがプロではない。レスキュー活動を円滑に行えるよう、最善を努めるように」

『了解』

IS学園、オペレータールームにて、活動地域毎に指示をする職員達。

モニターには、続々と各地の状況が伝わってきており、嵐の如く言葉が飛び交い、止む気配など微塵もない。

学園所属ISに出動となれば、当然ラウラ達にも出動命令が下る。

ISを展開した五人は、上空からその惨事を目の当たりにしていた。

「これは……酷いな」

筈は思わず顔をしかめる。道路には何十台もの車が激突して繋がり、まるで一匹の蛇のようにも見える。

もうもつと上がる黒煙はまだ薄く細く、大規模な火災には至っていないようだ。

「織斑教官。我々はどうしますか？」

『お前達はポイントD地区の車両事故を担当してくれ。火災などは装備無しで対応するのは難しいからな。ラウラ、チームリーダーを担当しろ』

「了解です」

ラウラは早速、四人に向き直る。

「聞いての通り、我々は事故車両を処理し、レスキューの通り道を作る。怪我人を発見した場合はすぐに連絡するようにしろ」

「分かった」

「了解」

「うん」

「……………」

箒、織羽、シャルロットは返事をする。が、簪だけは返事を返さなかった。

「どうした、更識。何かあるか？」

訝しんで問いかけるラウラに、簪は表情を暗くする。

「私の……………まだ未完成だから……………役に立てないかも……………今だって、織羽におぶさってるし……………」

未だ未完成の打鉄式。ここに来るまでも舞影の背におぶさり、皆に引つ張ってきてもらった状態であった。

「それがどうした？」

「え……………っ？」

「未完成だろうが何だろうが、機体は動くのだろうか？ ならばやれ。ここは戦場であり、掛かっているのは民間人の生命だ。くだらない弱音など聞いている余裕はない」

「……………」

「箒は更識と組んで動いてくれ。シャルロットは私と。織羽はすまんが、学園から来ているだろうコンテナの受け取りに行ってくれ」

「災害用装備ね。分かった。箒、簪をお願い」

「うむ。更識さん、こっちに」

箒に簪を渡すと、舞影はすぐさまスラスターを全開にして飛び去る。

「さあ、私達も行くぞ！」

四機は戦場へ向かって、高度を下げていった。

海洋を進むフェリーの中で、船員たちは必死に戦っていた。既に事態は乗客に知れており、パニックを起こさないよう必死に走りまわる。

機関室でも、エンジンのオーバーヒートによる爆発などの被害が起これないよう機関士達が奮闘していた。

そして操舵室でもまた、船のコントロールを取り戻そうと戦いが続いていた。

「クソッ！ 操舵システムが完全に壊れてる！！」

「エンジンコントロールも、全く効きません！！」

船員が悲惨過ぎる状況に悲観し、ダントとコントロールパネルを殴りつける。

「落ち着け。もう一度最初からだ」

「はい」

船長はただ静かに、再起動を指示する。だが既に、人事は尽くして尚余る。ならば後は、天命に任せるしかない。

この船と乗客436名、そして乗員全員の生命全てを。

組み合わせた手に爪が食い込む。船を預かる者として、何と無力な自分への怒りを籠めて。

だが、今まさに救援の手はすぐそこまで来ていた。

世界最強、最新鋭の存在      インフィニット・ストラトスが。

「どう、通信は通らない？」

「ああ。やっぱりダメだな。直接じゃないと話もできない」

一夏は頭を振った。フェリーの通信機が完全に故障しているらしく、救難信号もアナログなモールス信号を使っただくらいだ。

幸い、ISならばフェリーまで時間は掛からない。少しばかり急げ

ば良いだけだ。  
そう思い直して、三人は速度を上げる。

正体不明機高速で接近　ロックされています

「……！？」

ISが警告を出した直後、白雲を穿って禍々しい深紅の閃光が走った。

三人はすぐさま回避行動を取る。閃光は海を撃ち抜き、高熱が爆発に代わって飛沫が飛び散った。

白雲の風穴から、更に高エネルギー反応。散弾の如く降り注ぐ、破壊の雨。

三人は散開し、大きく回るようにして回避。弾雨は海を爆ぜさせながら降り続けた。

「クソッ、何処の何奴だ……！？」

やがて止んだ攻撃に、三人は空を仰いだ。

肉眼ではゴマ粒程度にさえ見えない大きさのその姿を、ハイパーセンサーが映し出す。

それは人型をした鋼鉄の異形。

「な、何なのよ……あいつは？」

「IS……？　でも、普通のISよりも大型……？」

その姿に、三人は目を見開いた。

少し考えれば、ISであることは明白である。だが、その姿の異常

さが、そう思わせなかった。  
既存のISよりも大型で、一言で表すならば『ISに包み込まれている』といった風貌。

頭部は、鳥を連想させる様な流線型のフルフェイス。モノアイで、額には菱形の宝石のような物から全体にラインが伸びている。

側面から後頭部に向かって大きく角が伸び、長い黒髪が海風に晒され、揺れていた。

ISアーマー全体も、何処か悪魔然とした雰囲気醸し出している。特に特徴的なのは、胸部アーマーだ。

中心には額と同じ宝石があり、そこからラインが伸びて、両隣には閉じられた瞳のような鋭角のデザインの物に繋がっている。

宝石に似た物体は、脚部及び腕部アーマーにも付けられている。恐らくは同一の物であろう。

背中のスラスタはシンプルな大型二枚翼と、出力用小型スラスタ<sup>1</sup>。

だが、それはまるで悪魔の翼のように映る。大きく翼を広げる

三つ目の悪魔のように。

異形のISは先程までの苛烈な攻撃とは裏腹に、ただ静かに佇んでいる。

「あいつ、もしかして前に学園を襲った”あれ”と仲間……？」

「いや。”あれ”とは違う。あの髪は間違いなく本物だ」

鈴と一夏は小さく言葉を交わす。”あれ”というのは、かつて学園で戦った無人機の事だ。

同じ異形ということで鈴は二機の関連性を思考するが、そもそも二

機のデザインには全く共通点がない。

そして何より、眼前の相手は間違いなく有人機であるということだ。

「お前は誰だ！？ フェリーの暴走も……お前の仕業か！？」

一夏は雪片を抜き放ち、悪魔に問う。鈴、そしてセシリアも武装を展開させ、戦闘モードに移行する。

それを見た悪魔は初めて、反応を見せた。

？ターゲット、戦闘モード移行を確認。実験を次段階へ。照合データ確認。白式、ブルー・ティアーズ、甲龍との戦闘を開始？

電子音声がそう告げると、悪魔はその手に剣先の無い巨剣クルタナを展開した。

「クルタナ……英国王室の慈悲たる象徴を抜くとは、皮肉のつもりですの！？」

セシリアが先制の閃光を撃ち放つ。悪魔は大剣でそれを受けると、セシリア目掛けて一気に襲いかかった。

「ブルー・ティアーズ！」  
切り放されたビットが、悪魔を囲むように飛んでビームを撃ち放つ。

だが、悪魔は一切速度を落とさずに、それらを身を捻るだけで全て躲す。クルタナを構え、速度を更に上げて迫る。

「ッ　！？」

当たらずとも、回避距離を取るまでの足止めは出来るだろうと思っていたセシリアの思考を遙かに超えた悪魔は、眼前の彼女に向かって、大剣を振り上げていた。

ギィィィィィィィィィィンッ！

激しい金属音と共に、火花が散った。

「くうう……っ！」

超重武装の一撃を、ショートブレッド『インターセプター』で何とか受け止める。

だが、元タブルー・ティアーズのパワーは高くない上に、相手のパワーが強くと、受け止めるだけで限界であった。

悪魔 は空いている左手を開き、何かを仕掛けようとする。それが分かっていながら、セシリアに抗う手段がない。

「どりゃあああああっ！」

瞬間、鈴が双天牙月を投擲。空を斬り裂いて飛翔する刃は真っ直ぐに 悪魔 の首を狙う。

？高速接近物体確認。 防御推奨？

悪魔 は左手を双天牙月に向ける。と、宝石のような物体が光を放ち、それが伸びるエネルギーラインを輝かせる。

ガキイイーン！！

「な　っ！？」

双天牙月は展開されたクリスタルの様な六角形のシールドによって、容易に弾き返された。

それだけではない。シールドが中央から割れたかと思いきや、別の形に変化したのだ。

円筒状に変わったそれは、まるで砲身であった。

？反撃？

エネルギーラインが更に輝き、直後に大砲が火を噴いた。 反応の遅

れた鈴を直撃して、爆炎の華が咲く。  
そして、悪魔はブルー・ティアーズを蹴り飛ばすと、大剣を両手で握り直し、一気に振り下ろした。

再び散る火花。今度こそブルー・ティアーズではなかった。左腕に彼女を庇うようにして抱き、差し込んだ雪片が、凶刃を真っ向から受け止める。

「接近戦がやりたきゃ、俺が相手になってやるぜ！」  
一夏は雪片でクルタナを弾き、腕の中のセシリアを突き飛ばすように離す。

悪魔は標的を一夏にシフトし、大剣を振りかざす。一夏も雪片を両手に握り直してそれを受け止めた。

「なんてパワーだ……！ だがなあ、白式のパワーを舐めるなよ！」  
第二形態・雪羅となった白式のパワーは、以前よりも数段高まっている。ぶつかる剛撃は一合一合、大気を揺さぶる。

「うおおおおおっ！！！」

互いの刃が袈裟懸けに振るわれる。刃が激しく火花を散らし、弾き飛ばし合った。

「雪羅っ！」

モード切替 ブレードモード

伸ばされた手刀がエネルギーの刃を生み出し、更に零落白夜を発動。相手は大振りの得物を使っている。このタイミングならば、直撃を取れる。

だが、振り上げられた刃は届かない。

「何っ……！？」

悪魔の左手を先程のクリスタル状の物体が包みこんで、四角錐のブレードを形成していたのだ。

激しく火花を散らす刃。零落白夜がそのクリスタルを無効化している。だが、そこから更に形成が上乘せられていき、消滅をさせない。バチン！ と、互いの刃が消滅と同時に再び弾かれる。

「おおおおおつ！！」

一夏は脚部ブレード細雪を回し蹴りの要領で振り抜く。が、またしても 悪魔 は鏡写しのように、クリスタル状の物体を形成して巨脚を振るった。

三度目の激突。そして優劣は決まる。

「グアアアアアアッ!?」

碎かれる細雪。同時に打ち負けた一夏の体が揺らぐ。そこを逃さず、

悪魔 の凶刃が振り上げられた。

「こんのやるおオオオオオつ！！」

その背に向かって突撃を仕掛ける鈴。大きく振り上げた二刀を全力で振り下ろす。

悪魔 は即座に反応。振り上げていた大剣をそのままグルリと回して甲龍の攻撃を受け止める。

「一夏つ！！」

「おつつ！！」

その僅かな間に体勢を整えた一夏が、鈴と挟撃を仕掛ける。

「でりやでりやでりやああああああ！！」

「ウオオオオオオオオオつ！！」

鈴の二刀による連続攻撃。そして一夏のバリア無効化攻撃。矢継ぎ早に繰り出される連続攻撃に、さしもの 悪魔 も防御と回避に回っていく。

「二人とも、行きますわ！」

上下四方から、ビットによる牽制射撃。悪魔の体勢を崩す。

「食らえっ！」

更に至近距離からの龍咆が放たれ、大剣を大きく弾き飛ばすと共に、完全に懐をガラ空きにする。

「一夏っ！！」

「今ですわ！！」

「ハアアアアアッ！！」

一夏は零落白夜を発動。雪片が展開して、エネルギーの太刀を生み出す。

全てを薙ぎ払う、必殺の斬撃。だがしかし。

「っつ　！？」「」

鈴と一夏は目を見開く。零落白夜は空を斬るに留まり、悪魔は忽然と姿を消していた。

「上ですわ！」

遠目にいたセシリアだけがその動きに気付き、天を仰いでいた。二人が見上げる遙か上空に、背中のスラスターから例のクリスタルをウイング状に展開した悪魔がいた。

「あそこまで一瞬で……！？　福音以上の機動力じゃないのよ！」

「くそっ……なんなんだ、あれは！？」

忌々しく、空の敵を睨む。

機動力ならば白式も劣らない。だが、問題はあの謎のクリスタルだ。零落白夜ですら打ち消し切れないそれが、一夏の心を焦らせる。

？敵データ修正……完了。戦力補正に伴い『V・T・M・S』を使用します？

デジタルボイスが響くと頭部の宝石が煌き、そこから伸びるエネルギーラインが光り出す。

全身に走る、禍々しい輝き。そしてモノアイが低く唸って、不気味に灯った。

再構成したクルタナを天上に掲げるように構え、両手で柄をしっかりと握る。

「来るぞっ！」

一夏の叫びを切っ掛けに、悪魔がその牙を剥いた。

轟々と燃え盛る炎。広いフロア全域を喰い尽くさんとする紅蓮の悪魔。

「やれやれ、随分と派手に燃えているわね……」

その中であって、まるで何事もないかの様に涼しげに佇む人影。その手には巨大なランス。

両脇に浮かぶアクア・クリスタルが水のヴェールを全身に展開している。それに触れた炎は瞬く間に消滅した。

「他にも行く場所があるし、ちゃっちゃと終わらせてもらおうわ」  
楯無はランスを壁に向かって振るう。切っ先がコンクリートを削り取り、そこに這わせられていた水道管を斬り裂く。

バシユウウウウウ！！

勢い良く噴き出す水。それはまるで意思を持ったかのようにランスに絡みつき、水蛇の如くうねり踊る。

「喰い尽くしなさい…… アクア・サーペント！」  
ランスを大きく振るうと、水が舞い踊り、燃え盛る炎をたちまちの内に呑み込んでいく。

だがそれでも、フロアの大きさから考えれば多少の時間が掛かる。だからこそ、楯無は水蛇を踊らせたのだ。

やがてアクア・サーペントが消え、残ったのはナノマシンの混ざった水蒸気。

楯無はアクア・クリスタルを前方に展開。ナノマシンミストを収束させる。

そして、トリガーを引いた。

「 ミスティック・インパルス」

霧の波紋が一気にフロアを駆け巡る。

それが残る全ての炎を、纏めて吹き飛ばした。

高圧縮した水を撃ち放って消火する道具がある。それを模倣したものが、このミスティック・インパルスである。

「しかし、これはどういう事態なのかしら？」

楯無は水道管のバルブをしっかりと締めながら、呟く。

『政府はこの事態を、三年前のものと同様であると判断しているようです』

「三年前……都市部のシステムが突然、一斉にシャットダウンしたあの事件ね」

通信回線の向こうから届いた虚の言葉に、楯無は顔をしかめた。

三年前の一月頭。

何の予兆もなく、交通を含む全システムがダウン。大混乱の中、三桁以上もの交通事故が半径20キロ圏内で集中して起こった。

その際にも、政府はIS学園に出動を要請している。

「あの事件と……確かに、共通する部分は多いかも知れないわね……規模は比較にならないけど」

楯無はその時、ちょうど日本を離れており、事件のことは資料を通してしか知らない。

『今回の早期出動許可は、その時のアレルギー反応のようなものでしょう』

「政府のお偉いさん方が散々、小突き回されたみたいだものね」

日本にはIS学園がある。その国でいきなり原因不明の重大事故が起こったとなれば、国家代表候補や留学生を送り出している各国の反応は当然厳しい。

また、こういった事態に対してのIS学園への出動要請権であるのに、その使用を逡巡した事もまた、責められる要因であった。

「まあ、今はお仕事優先しましょ。虚ちゃん、次のポイントの指示をちようだい」

『はい。会長』

黒ずんで割れた窓から身を躍らせて、楯無は空へと舞い上がった。

「くっ………！ 重い………っ！」

簷は必死に、道路を塞いでいた事故車を端へと動かしていた。未完成の打鉄式はパワーフローも不安定で、筭の倍近い時間を掛けて、やっと一台を動かせた。

「っ………はぁ………はぁ………」

息が上がる。額に滲んだ汗を拭いながら、簷は溜め息を吐いた。まだ道路を塞いでいる車は多い。これを全部どかさなければ、緊急車両が通れない。

幸いにして、停止していた自動消火システムが復活し、火災は鎮火しつつある。

そして、この辺りの怪我人は救助されていて、後は怪我人の搬送のみ。その為に一刻も早く、道路を開放しなければならぬ。

「更識さん、手伝おう」

「篠ノ之さん……そっちは……？」

「向こうはあらかた片付いた。後はこっちだけだ」

言うと、箒は軽々と車を退かしていく。あっという間にあと少しの所まで片付けてしまった。

紅椿。IS発明者である篠ノ之束が自ら創り上げたIS。

その完成度の高さは、否が応でも目に入る。

そんな凄いものを与えられた箒は、お世辞にも使いこなしているとは思えなかった。

その姿が、姉妹の関係が、自分と重なって見えた。

「あの……篠ノ之さん？」

「何だ？」

「えっと……篠ノ之さんは、お姉さんのこと……どう思ってます？」  
だからだろうか。こんな事を彼女が尋ねたのは。

「どうしたのだ、唐突に？」

事故車両を退かす手を止めずに、箒は聞き返す。

「うん……少し、気になって……」

言いよどむ簪に、箒は少し考える。

一刻を争う状況にあって、何故そんな事を言い出したのか。

だが、真剣な面持ちの簪を見る限り、彼女にとって余程重要な質問なのだろう。

「 そうだな。正直、姉のことは好きではないな」

「 そうなの？」

「 ああ。姉がISを作らなければ、私は……だが、それも今はどうでも良い事だ。所詮、全ては過去。今よりも価値があるとは思わない」

ガタン。と車を押し込み、箒は笑う。

「 私は姉と違って少しばかり剣が出来るだけの凡人だ。何時だって間違えるし、今だって弱いままだ。せつかくの紅椿も、まだまだ使いこなせていないしな」

はは、と箒は笑う。だが、その笑いに卑屈さは微塵もない。

「 ……」

「 だが、それが私だ。誰かと比べてどうと考えるなど、文字通り愚考だからな」

失ってばかりだと思っていた。だが今は違う。

確かに、ISが無ければ失わなかったものもある。だが、ISがあったからこそ得たものもまた、ちゃんとある。

「 だから、昔ほど姉の事は嫌いではない」

そう、ハッキリと答えた。そして、箒は簪をまっすぐに見つめ言った。

「 更識さんは……そんなに、会長が嫌いなのか？」

「 つ……………！？」

簪はびっくりしたように目を見開く。そしてすぐに顔を伏せた。

「 嫌い……なわけじゃない。でも、私は……姉さんに何も敵わない……だから」

「 ……………？ 何故、敵わなければならないのだ？」

「 え……………っ？」

首を傾げて箒は尋ねる。本当に意味が分からないといった表情だ。

「 だって……………それは……………」

「敵わなかったらダメなのか？　そうでなかったら、誰かを好きではいけないのか？」

「あ……」

「更識さんは……一体『何の為に、そうある』としている』のだ？」  
「っ……！？」

篝の言葉に、簪は強いショックを受けた。

何の為に。その問いかけに答えられなかった自分に、初めて気が付いたかのように。

やがて全ての車両を退かし終えた二人はふう、と嘆息する。  
そこにタイミング良く通信が届く。

『篝。織羽がコンテナを持ってきた。指定ポイントまで来て、装備を受け取ってくれ』

「了解した。車両撤去も丁度終わったからな、すぐに向かう」  
通信を切ると、簪に向き直った。

「私は装備を受け取りに行く。更識さんはう一度、この辺り一帯の搜索を頼む」

「うん……分かった」

飛び去る紅椿を見送った簪は早速、センサーの感度を上げる。PI  
Cも安定していないので、地道に歩いて救助者を探した。

と、ハイパーセンサーが音声を捉えた。

「っ……？　猫……？」

それは猫、恐らく子猫の鳴き声。簪は放置することも出来ないので、

その声の方へと向かった。

「ここは……？」

鳴き声を追つてくると、そこは4階建てビルであった。一階はブティックになっていたらしく、通りに面した方はガラス張りで、全てが割れてしまっていた。

そこから煙がもうもうと上がっていて、子猫の鳴き声はその奥から聞こえる。

煙や炎はバリアが防いでくれる。だが、だからといって恐怖までなくなる訳ではない。

簷は恐る恐る中に足を踏み入れた。センサーの送ってくる情報を頼りに、足元に注意しつつ進んでいくと、件の子猫が見えた。

灰色に黒のストライプが入った子猫は、何故か重なり倒れた棚を爪で引っ掻いている。

「どっしたの……っ！？」

簷が見ると、棚の隙間から小さな指が見えた。大きさからいって子供のものだ。

簷は急いで棚を持ち上げようとし、すぐに止まった。

何かの下敷きになっている場合、圧迫先に毒素が溜まっていて、どかした際に全身に流れこむといったケースがある。

それを寸前で思い出したのだ。

簷はまず、センサーを使って内部状況を確認する。幸い、重なり倒れた隙間に倒れているだけだと分かり、すぐに棚を脇にどかした。

倒れていたのは10歳程度の女の子。意識を失っていて、そのお陰

で煙を殆ど吸っていないようだ。

「シールドバリアー範囲拡大……これでよし」  
打鉄式式のシールドバリアーを拡げ、少女と子猫を胸に抱く。  
これで、外に出るまで煙に襲われることはない。

簪は、その腕の中のものを見た。

『ここは戦場であり、掛かっているのは民間人の生命だ』

不意にリフレインするラウラの言葉。

今、彼女の腕の中にあるのは　まさしく命。

小さくて、もろくて、軽くて　なんと重いことか。

そして今、それを守れるのは自分しか居ない。

「大丈夫……お姉ちゃん」が……守ってあげるから……」

決意を固めた少女は力強く、一步を踏み出した。

「ッ……」  
逸りそうになる心を必死に抑えながら、揺らさないよう慎重に煙の中を進む。

焦るな。ISは炎程度でどうにかなったりしない。安全に、確実に、この子を運ぶことだけを考える。

自分に言い聞かせ、伝う汗もそのままに簪は進んだ。

パリンツ。

「あ……っ」

割れたガラスが踏み割れ、簪はようやく、外に出たと気付く。

「 簪ちゃん？」

無事に外へと出た簪に、真上から声が掛かる。

「 姉さん……？」

そこに居たのは楯無であった。楯無はすつと簪の前に降り立つと、彼女の抱く女の子と子猫を見た。

「 あなたが、助けたの？」

「 あ…… そのビルで見つけて…… それで…… その…… 」

やましいことなど無い筈なのに、しどろもどろになってしまう。

「 っ  
そう」

楯無の手が、スツと伸びる。簪は反射的に身を縮こませてしまった。

ぼん。

「 え……っ？ 」

その手は優しく、簪の頭へと乗せられていた。

「 この先に、避難場所になっている公園があるわ。簡単な手当てもやってるから、急いで運びなさい」

楯無はそう言っ、脇を通り過ぎる。そして簪の出てきたビルに向かってナノマシンの水を撃ち放った。

「 早く行きなさい。あなたが助けたのよ……最後まで、やり遂げな

「さい」

あつという間に消火を終え、楯無はそのまま空へと上がっていった。

「……………」

簪は呆然とそれを見送った。無意識に、その手は自分の頭に触れていた。

「にゃあ」

ペチ。と、じゃれついてきた子猫の肉球が、簪の頬を叩いた。

「あ……………うん、ごめんね。えっと……………篠ノ之さんに連絡しないと」  
我に返った簪は子猫を指にじゃれつかせつつ、箒に通信をする。

『どうした、更識さん？』

「えっと、女の子と子猫を見つけたから……………避難場所まで連れて行くから……………場所は分かる？」

『……………今、確認した。此方は丁度、装備を受け取ったところだ。そこで合流しよう』

「分かった。また後で」

通信を切った簪は、公園目指して歩き出す。

「……………」

簪はひとつだけ、箒の問いに対する答えを思い出した。

ずっと昔。姉がまだ『楯無』ではなかった頃。

自分の描いた落書きのような絵を、姉が上手と褒めてくれた事があった。

思い出した、その背を追いかけていた理由の一つ。

（私は……………褒めて欲しかったんだ……………あの人に。良くやったねって

……頑張ったわねって……)  
その思いを、何時から忘れてしまっていたのだろうか。

姉の触れた手の感触。ISのゴツゴツとした金属の感触。なのに、  
何故か温かくて柔らかい感触。

思い出して少しだけ、簪は口元を歪ませる。

「  
？」

胸元の小さな命が、うっすらと瞳を開いている事にも気付かずに。

「はあ……はあ……っ！」

「くそっ……なんなのよ、コイツは……！」

「動きが……先程とは全く違う……!？」

海上にて 悪魔 との戦いを続けている一夏らであったが、その戦  
況は明らかな劣勢であった。

? V・T・M・S 正常稼働。 コア・キューブ エネルギーリミッター 異常なし。 戦闘継続？

悪魔 はクルタナを大きく振るい、三人に向かって突撃を仕掛ける。

「一夏、フェリーが戦闘空域に入るわ！ 急がないと！！」

「分かってるよ！！」

鈴と一夏が迎え撃つべく、スラスターを全開にして飛ぶ。

「はあああああつ！！！！」

? 迎撃？

一夏の斬撃を逆手に持ち替えた大剣で受け流し、そのままクルリと回ってバツクハンドブロー。 がら空きのこめかみに、強烈な一撃が見舞われる。

「ぐああ……っ！！」

苦悶の声を上げる一夏。 その影から飛び出した鈴は双天牙月を振り上げ、悪魔 を討つべく大きく薙ぐ。

だが、悪魔 はそれをあっさりと躲すと、一夏を蹴り飛ばして海へと叩き落す。

そして鈴が崩拳を繰り出すと、射線を逸らして回避。 回し蹴りであっさりと吹き飛ばす。

「きゃあああつ！！」

バランスを崩した鈴に、悪魔 は砲身を展開。 更にそれが花びらのようにバラけて開き、回転を始めた。

何が。そう思うよりも早く答えは鈴を襲う。

深紅の弾雨。それが鈴を襲ったのだ。バランスを崩していた鈴はぎりぎり防御するも、そのまま勢いに負けて弾き飛ばされた。

「鈴さん！ おのれえー！」

激昂したセシリアが、ブルー・ティアーズを飛ばす。オールレンジ攻撃を回避するために攻撃を止め、悪魔が大きく飛び退く。

一刻も早くこの敵を落とさなければ、フェリーが危険だ。

内心の焦りはセシリア本来の力を奪い、攻撃を単調にさせる。

悪魔は苦もなくビームを躲し、逆に展開した砲身をセシリアに向けた。

すぐに回避。と、ブルー・ティアーズが警告を発する。

#### 射線後方 民間大型船舶

「っ……！？」

ゾワツと身の毛がよだつ。

迂闊にも射線に入るような位置取りをしてしまった自分。もしも躲せば、砲撃はフェリーに直撃するだろう。

そうなればどうなる。フェリーは間違いなく沈む 乗員乗客の命ごと。

「っ……！」

ブルー・ティアーズが敵攻撃の危険度を激しく警告する。

だが、躲せない。

これだけは 絶対に。

そして閃光は

無慈悲にも放たれた。

第50話 カラミティ・カウンターズ（後書き）

原作の影が微塵もないウォーターワールド編ですが、次回で決着の予定です。

簪の助けた女の子ですが、この時助けてくれた簪に憧れ、数年後I S学園に入学する。なんてエピソードもあったりしますw  
あと、子猫もこの子の所で飼われます。

書く予定が無いので、ここで披露w

## 第51話 災いの終息（前書き）

ウォーターワールド編、決着回。

どうでも良い事なんですけど、ブルー・ティアーズのミサイルは威力、どれぐらいなんでしょうね？

原作だと、一夏に止めを刺すのに使った（実際止めにならなかった）から威力は高い筈。

でも、ラウラに至近距離で撃ち込んでも無傷w

これの答えは何なんでしょう？

- 1：シュバルツェア・レーゲンの防御力が高い。
- 2：実は焦げていたが、黒いせいで分からなかった。
- 3：実は寸でのところで当たってなかった。

個人的には2かなw

（普通は3でしょうけど）

## 第51話 災いの終息

沿岸部にある大観覧車。

停止状態にあるそこに、学園のISが駆けつける。

親子連れの乗ったゴンドラのドアを開き、落ちないように機体を少し下に滑り込ませる。

「さあ、こっちに手を伸ばして。大丈夫だから」

「……うう」

「大丈夫よ。さあ、お姉ちゃんに手を出して？」

母親に抱き上げられ、子供が恐る恐る伸ばされた手を取る。子供をしっかりと受け取り、今度は親に手を伸ばした。

「膝を足場にして下さい。そのままこっちに……」

言われた通り、ISの膝関節を足場にして、母親が移動する。

「じゃあ、しっかりと捕まっけて下さい」

親子を救出したISは、ゆっくりと地上へと降りていく。

別のゴンドラでも、同じように救助が行われていた。

「はあ……流石はIS。あんな風に空を自由に飛びや、こっちも楽なものなあ」

はしご車を使って救助活動をしている隊員が、呆れとも羨望とも取れる溜め息を吐く。

「確かにな。だが、こっちにはこっちのやり方がある。届かない所は任せときゃいいさ」

もう一人が言うと、目一杯伸ばされたレールを救助用ゴンドラが上って行った。

IS学園司令室には多数の情報が寄せられ、次々に処理されていく。

「大観覧車の救助、順調に継続中です」

「B 1から7の作業は終了。C 8方面に回れる小隊はありますか？」

「展望エレベーターの救助完了。引き続き救助要請が来ています。

次のポイントへ移動します」

「指定ポイントに、補給用トレーラー到着。消火用グレネード及び携帯式酸素ボンベの補充を行なって下さい」

「ポイントE 3より、援助要請。至急向かって下さい」

「江戸川にIS整備空母到着。補給作業を必要とする隊は、事前連絡をお願いします」

「どうやら、何とかかなりそうだな」

三年前に起こった惨状を知っているだけに、規模に対しての被害を大きく抑えられるだろう事に千冬は安堵する。

「問題は……フェリーの方だな。山田先生、通信は？」

「ダメです。衛星からも現場の映像を取れません。どうやら、現場海域に強力なジャミングが施されているようです」

「……つまり、何者かが全てを仕組んだということか」

「だとしたら、一体、誰が……？」

「分かん。だが、今は事態の終息が先決だ。引き続き呼び掛け続けてくれ」

「はい」

言葉では冷静さを保っているようであるが、その心中は焦りがあつた。

嫌な予感がする。

何か、取り返しの付かない事態が起こっている。そんな予感だ。

だが、今の千冬に出来る事などたかが知れている。

一夏らを信じて、今はただ待つだけであった。

「くっ……！」

セシリアはギリ、と歯を食い縛る。視線の先には破壊の光を集束する長尺の砲身。

食らえば落ちる。

落ちれば2対1になり、劣勢は更に顕著となる。

躲せばフェリーが沈む。

フェリーを止めるためにここに来たのだ。それでは何の意味もない。

進退窮まるセシリア。1秒さえも異常に長く感じる。

せめて、ブルー・ティアーズにシールドがあつたならば、多少ならずもダメージを軽減出来るというのに。

そう。サイレント・ゼフィルスに搭載されている シールド・ビクト  
トがあれば。

だが、守りの術を持たない以上、その身にて受けるしか無い。

「ッ ……」

覚悟を決める。同時に光が弾け、セシリア目掛けて閃光が走った。視界全てを覆い隠す、深紅の輝き。出来ることは、ただ耐えることのみ。

ギョツと瞳を強く閉じ、両腕をクロスさせてガード。全身を襲う衝撃に備えた。



衝撃と共に、大きく揺さぶられるフェリー。倒れそうになる体を必死に押さえる。

「ぐおおあああ……っ！」

「くそっ……何でこんな所でISが戦ってるんだよ!? 助けに来てくれたんじゃないのか!？」

船員が悲痛な叫びを上げる。その視線の先にはIS。

コントロールを失い暴走状態にあるだけでも手一杯なのに、そこにIS同士の戦闘など、泣き面に蜂が優しくさえ思える。

何せ、向こうは世界最強の存在だ。フェリー一隻、数秒と経たずに海の藻屑にしてしまえる。

「とにかく今は、流れ弾で沈まないことを祈ろう。復旧作業を続ける。それと、今の揺れで怪我人が出ていないか確認を」

「了解」

フェリーは進む。

船速は45ノット。時速換算約83キロで、破滅のゴールへと迷い

無く。

「無事か、セシリア？」

「は、はい……でも、一夏さんは!？」

「シールドエネルギー残量25……ギリギリだったな。雪羅で受け止めてたら、確実に落ちてたな」

雪片をブレードに戻し、一夏は嘆息する。

『雪羅は効果範囲が広い分、消耗が雪片よりも激しいんだ。使用には充分注意しないとダメだって言っただろう?』

「いやあ、そーいやそーうだったな。すっかり忘れてたぜ、サンキユーな春斗」

「っ……春斗さん!？」

「春斗!？ あんた、大丈夫なの!？」

復帰した鈴が、心配そうな声を上げる。

『まあ、何とかね…… ISで戦闘はできないけど、サポートなら、なんとか出来るよ』

今の春斗は白式の内部世界で、かつてのように白コート姿であった。裏白式は待機状態のままであり、それはつまり、春斗のダメージが軽くないことを示していた。

『しかし、派手にやられてるね。まあ、向こうの能力を見る限り、仕方ないかもだけどね』

白式のエネルギーメーターが急速に回復していく。裏白式からのコア・バイパスによるエネルギー供給だ。

「あいつの能力……どういう事だ？」

『あのアーマーに付いているキューブ状の物体……あれは多分、全部ISコアだ』

「なっ……！？」

「全部…… ISコア！？」

「そんな馬鹿な事ある訳が…… コアは複数搭載できないって……！」「ごめん。ちよつと言葉を違えたね。正確には”コアと同質の物”ってことだよ』

それぞれのモニターに浮かぶデータ。エネルギー波形が全て、ISコアと同じであることを教えていた。

？ターゲット、戦闘継続可能状態確認。実験を継続？

そうこうしている間に、悪魔はスラスターからバックファイアを噴出し、一気に距離を詰める。

三機は散開し、目標を絞らせないように動く。

『向こうは恐らく、それぞれのアーマーに独立したエネルギーユニットを持っているんだと思う』

「キューブの数は7つ……ということは、こちらの7倍ものエネルギーを保有している事に……!?!?」

「何よそれ!?!? そんなの落とせるわけ無いじゃない!?!」

セシリアと鈴が、絶望的な状況に声を荒らげた。

7倍のエネルギーを削り落とすなど、それこそ一夏の零落白夜でも容易い事ではない。

『ところが、事態はそう単純じゃあないんだ』

春斗は、二人の言葉をあつさりと否定する。

「どういう事だ?」

『あの機体、さっきから高機動のウイングを一切展開してないよね。どうしてだと思っ?』

「そういえば……どうしてだ?」

そう。悪魔 はあの、一夏の斬撃を躲した高機動を見せていないのだ。

『強力なエネルギーは、それだけで制御が難しくなる。あのウイングは今、使用できない状態にある可能性が高い』

一度見せてしまった以上、隠す必要性は殆ど無い。となれば、あえて使わないか それとも使えないのかの二択。

そして、あえて使わない理由も無い。となれば答えは一つ。

『多分、エネルギー制御がかなり難しいから、一度に使用できる限界があるんだ。今はあの頭部のヤツが起動しているせいで高機動は使用不能にあると見て間違いない』

「つまり、頭を潰せば奴は良いんだな?」

『そういう事。向こうは恐らく、何か特殊な戦術システムを使ってこちらのスペックに対して適切な反撃を行なっている。あれを潰せば、攻撃を通せる筈だ』

「ですが、問題はそこではありませんわ。攻撃が完全に見切られていて、全て躲されてしまうことですわ」

「そうよ！ さつきから何度も何度も、反撃ばかりバカみたいに喰らってるんだから！」

『……二人とも、ちゃんと話を聞いてた？』

「聞いてましたわ！」

「聞いてたわよ！ その上で無理だと言ってんの！！」

「当てられない攻撃を当てられるようにする為に、攻撃を当てるなんて……ネズミが食われない為に、猫に鈴を着けようとするのと同じですわ！！」

弾幕を回避しつつ、二人が叫ぶ。こちらから攻めに掛からない限り、向こうも積極的には仕掛けてこないようだ。

だが、結局はジリ貧である。

逆転の一手たる零落白夜も、一夏の剣をあっさりと往なして、カウンターを決める。悪魔 相手では決まるべくもない。

「こっちのスペック……適切……反撃……？」

一夏はブツブツと呟きます。そして、ハッと目を見開いた。

「そうか、そういう事か……！ でも、どう積めば良い……？」

『戦術はある。でも、問題が一つ……セシリアさん？』

「何ですか？」

『勝利のために……死んでくれるかい？』

？敵行動に変化を確認。V・T・M・Sにより、防御反撃体勢？

悪魔 は動きを変えた三人に対し、警戒態勢を取る。

眼前にはセシリア。何故かライフルを格納し、右手を付き出した。

「インターセプターッ！」

光が集まり、ショートブレードが展開される。

「ブルー・ティアーズ！」

セシリアは叫び、ビットが切り放たれて舞い踊る。

？敵BT兵器展開。回避の後、近接戦で反撃？

ビットから放たれた閃光を苦もなく躲し、悪魔 はクルタナを構えて距離を詰めるべく動く。

「ハアアアアアアッ！！」

だが、その刃を強く叩くものがあった。セシリアのインターセプターだ。

遠距離型のブルー・ティアーズで、無謀にも接近戦を挑んだのだ。何度となく振るわれるインターセプター。激突する刃が火花を散らし、ギシギシと軋む。

？脅威度低ながら、即刻排除推奨？

悪魔 は一切動揺無く、セシリアを左手に生み出したブレードで叩き落とさんとする。

『一夏、撃て！！』

「やらせるかよ！！」

その時、雪羅が吠える。カノンモードの砲口が光り輝く瞬間、セシリアがその身を悪魔のサイドを滑るように抜ける。

？敵砲撃。防御体勢？

悪魔 はブレードを消して、シールドを展開。真っ向から受け止める。

「まだまだ！」

鈴がそこに、衝撃砲を撃ち放つ。悪魔 は半身を返して、大剣を盾に、それを受ける。

雪羅と龍咆の挟撃。しかし、悪魔 の牙城は揺るがない。

だが、そこに悪魔 の正面から突撃を仕掛けるセシリア。武装はやはりインターセプターだ。

「これで……落としますわっ！！」

ブルー・ティアーズに対処する瞬間、甲龍と白式が接近。近接戦闘を仕掛け、そこを突いてブルー・ティアーズがB Tライフルによる射撃を近距離で撃ち込む。

悪魔 はそう、即時に判断を下す。

そんな予測を肯定するかのよう、左右からの攻撃が止み、二機が距離を詰めだした。

？敵誘導を第2行程で排除。然る後、各個迎撃？

悪魔 はまず、セシリアに向かう。ブレードの一撃を体験で受け止め、横腹目掛けて蹴りを打つ。

「がはっ……！！」

鋭角な装甲が、セシリアの細い腰に深々と突き刺さる。絶対防御がなければ、一撃で内蔵が潰されていたろう。

「セシリアッ!!!」

鈴が双天牙月を振り上げつつ、スラスターを全開にする。

「でええええいつ!!」

二刀が大剣と激突する。だが、パワーで勝る 悪魔 は甲龍に一切押しこませない。

後は白式と、 悪魔 は二機を払いのけるべく動く が。

?.....っ!???

「動揺、しましたわね……?」

セシリアはめり込んだ 悪魔 の足を抱え込み、ニヤリと笑っていた。

「これで動けないでしょ!」

そして鈴も、 悪魔 の左腕をガツシリと押さえる。

「今よ、やっちゃえ!!!」

「一夏さん、今ですわ!」

「うおおおおおおおっ!!!」

その雄叫びに、 悪魔 は視線を白式へと送る。

「引っかかりましたわね」

ここで、セシリアが動く。  
足を抱えたまま、右腕を真上に振り上げ、悪魔の頭部目掛けて振り下ろした。

狙いは一つ。頭部のキューブユニットだ。

ドガアアアアアアアアアンツ！！

セシリアの手中にあった”それ”が、激突した瞬間に大爆発を起した。

「ッ……あああああああつ！！」

悲痛な声を上げて、セシリアの右腕部がひび割れ、焼け焦げ、崩れ落ちていく。

「うわっ！！」

そして爆風におおられ、鈴も吹き飛ばされる。

敵が機体能力に対して常に適切な反撃をするのなら、その逆を行えば良い。  
スペックによる対処をしているならば、それで一瞬でも思考のブランクを生み出せる。

遠距離型のブルー・ティアーズで接近戦を。近距離格闘型の白式に遠距離射撃を。

そして甲龍は敵の思考を狂わせるために、あえて同じ行動を取らせる。

全てはこの、捨て身の一撃を叩き込むために。

? 頭部 コア・キューブ ユニット破損。V・T・M・S、プロゲラム損傷。通常戦闘モードへ移行?

爆風はすぐに海風が浚い、現れたのは頭部にダメージを負った悪魔の姿。

幾ら7倍のエネルギーを持っていようと、そのエネルギー発生源、そのユニットにダメージを与えれば良い。それだけで7倍の差は、無いに等しくなる。

『一夏、今だ!!!』

「ああ! これ以て終わりだ!!!」

コアは特殊金属で作られており、生半可な攻撃では破損すらしない? 戦闘システムに異常発生。機体稼働率低下?

だが、一夏にはある。コアを破壊できる 生半可ではない攻撃 が。

雪片が展開し、一斬必滅の刃を生み出す。

零落白夜。その一撃は、コアの両断さえ可能とする。

「うおおおおおおおっ!!!」

この瞬間のために、セシリアは犠牲になった。

ここで決められなければ、男がすたる。

悪魔 はそれでも、左腕部にブレードを展開。雪片を防がんとする。

『一夏、零落白夜で消すんじゃない。技で斬り捨てるんだ！』  
「ッ　　！！」

一夏の集中が、一気に深まる。無用の感覚が削ぎ落とされ、全身がただ、刃を振るう為のものへと変わる。

ギィン。

軽い音と共に、ブレードを斬り捨てる。そのまま刃を上段に振り上げる。

一閃二断。全てを断ち切る斬撃。

悪魔 も、白式を落とさんと、鏡写しのように大剣を振り上げる。

ギァイイイインッ！！

交差する斬撃。重厚に響く、金属の断裂音。

飛び散る　　白の装甲。

「ぐっ……！！」

左肩から大きく斬り裂かれ、白式の装甲が砕けていく。  
肉体に走るダメージに、一夏の体が揺らいだ。

『……………お見事』

バチバチ、と 悪魔 の装甲が斬り裂かれている。その斬撃は綺麗に、胸部のコア・キューブを両断していた。

「!?!?!?!?!」

初めて、 悪魔 が大きく揺らぐ。胸部を抑えながらグラリと崩れるのを堪えている。

?胸部ユニット、ダメージ。エネルギーバイパスに異常発生。戦闘継続に問題あり。撤退行動に移ります?

『一夏!!!』

「逃さねえっ!!!」

逃走の気配を察した春斗が叫び、一夏が雪片を返して斬り上げる。

? コア・キューブ ユニット、エネルギー全開?

「っ……………!?!」

突如として、 悪魔 のボディが凄まじい発光をする。直後、眼前から機体が消えた。

「っ……………上か!」

見上げれば、オーラの如き真紅の輝きに身を包む 悪魔 の姿。そして、 悪魔 が両手を広げる。

?バーステッド・ローズ展開?

何を仕掛けるかと注視する三人の前で深紅の光が集い、クリスタルを形成していく。それはまるで花卉のように形取り、組み合わせさつていく。

『マズイ!? 一夏っ!!!』

「二人共、俺の後ろに! 雪羅、モード切替!!!」

## シールドモード

それが何を意味するかに気付き、春斗と一夏が焦りの声を上げる。  
一夏はシールドモードを起動させ、セシリアと鈴を庇うように動く。

瞬間、大空に大輪の華が咲き 爆ぜた。

「吹き飛ばせえええええっ!!」

雪羅を振り抜き、零落白夜のシールド 霞衣 を解放展開する。

吹き抜ける烈風が花弁を打ち払い、海面に落ちた花弁は次々に爆発し、海面を叩きまくった。

高々と吹き上がる水柱が、すぐにスコールとなって局所的に降り注いだ。

「くそっ……まだこんな攻撃を……!」

『奴は……っ!』

上空を見る、が、既にその姿はなく、ハイパーセンサーも反応を口ストしていた。

『……完全に読み違えてた。出力制御をしなければ、全起動を可能だったんだ……ごめん』

「いや、謝ることはないだろ?」

『だけど、下手をしたら全滅していたかも知れない……これは、僕のミスだ』

春斗は悔しさと申し訳なさに、ギュツと拳を握る。

今更言ってもどうにもならないが、それでも慙愧の念を持たずには居られない。

『セシリアさんに身を呈してもらっていなから……クソッ!』

ガンツ。と、キーボードを殴りつける。仮想世界では痛みさえ感じなかった。

「そっだ。セシリア、体は大丈夫か?」

「ええ。絶対防御のお陰で……でも、流石にダメージは深いですわ」  
ダラリと下がった、ボロボロの右腕部。左手で押さえられた脇腹。  
「ですが……まさかブルー・ティアーズを素手で叩きつける事にな  
るとは、夢にも思いませんでしたわ……痛た」  
セシリアは痛みに呻きながら、苦笑う。

悪魔 に食らわせた一撃は、弾頭タイプのブルー・ティアーズ。  
砲身から抜き取ったミサイルを、鷲掴みにして頭部にぶつけてやっ  
たのだ。

どんな思考ルーチンをしていようと、まさかゼロ距離から素手で  
ミサイルをぶつけてこようなど、読み切れはしない。

その代償は大きかったが、だが得た結果もまた大きかった。

「春斗さん。後悔をなさる前に、まだすべき事がありますわ」

『……分かってる。すぐにフェリーを止めよう！』

「頼むぜ、天才！」

フェリーは、先刻の爆発の巻き添えをギリギリで食らわず、しかし  
とっくに相模灘に入ってしまったている。

「急ぎましようー!!」

三機は今度こそ、フェリーへと飛んだ。

ジャミングの消えたIS学園のモニターにも、映像が復活する

「レーダー復活しました。フェリーは現在……初島に向かっていきます！」

真耶は千冬に、現在の情報を慌てた様子で告げる。

「あの辺りは観光地だな。下手をすれば被害が大きいぞ」

初島はリゾート地として知られており、現状どうなっているかは不明だが、行き交う船も多い。

そこに大型フェリーが割って入るうものなら、どれ程の被害になるか。

「白式、ブルー・ティアーズ。甲龍のシグナル確認。フェリーに到着したようです」

「……今まで何をしていた？　だが、今は船の停止を最優先だ」

千冬はロストしていた間の空白に、何かを感じていた。

「船長、先程のISがこちらに！」

「報告！ 通信回線復旧しました！！」

「ISに通信。コントロールの復旧はまだか？」

「了解！」

「ダメです。インストールは受け付けていますが……この速度では間に合いません！」

船長の指示に、船員が即座に動く。

「回線、繋がりました！ オープンチャンネル、開きます！」

「こちらは船名 ひなた。船長の伊佐木です。そちらの所属を明らかにされたし」

『こちらは出動要請を受けて来ました、IS学園所属IS機体名 白式。織斑一夏です』

「……なるほど、あの世界唯一の……。失礼ですが、先程の戦闘行為について説明を願いたい」

『要請を受けて出動したところ、突如攻撃をされたため応戦しました。通信が戻っている状況から、恐らくは暴走の犯人であると思われる』

「こちららも、操舵システムの復旧を開始しました。が、どうやら状況は悪くなっているようです」

『どういう事ですか？』

「復旧まで時間が掛かり過ぎる。機関室からの報告で、エンジンもまだ制御を失ったまま。いつ爆発を起こすかも分からない状況とのことです」

『分かりました。到着次第、操舵室に向かいますので、後ほど』

通信が切れ、船長は「フウ」と溜め息を吐く。

IS学園にいる世界唯一の男子の事はニュースで知っている。

だが、いくらISを使えるとはいえ、一介の学生にこの業況を打破できるとは思えなかった。

ISの性能を否定しているのではない。伊佐木はかつて自衛隊に所属し、かの”白騎士事件”の目撃者でもあった。ISの性能は嫌というほど目の当たりにしている。  
だが、いかにISでも40ノットを超える、14,000トンの大質量を止められるだろうか。

未だ、天命を待つ以外ない。それが正直な感想であった。

『　　ということで、一夏は到着し次第、すぐに操舵室へ。二人は外から、少しでも良いから船の減速とコースの修正を』  
「分かった」

「減速はわかるけど、何でコースの修正？」

『これを見て。さっきの戦闘で船が波に煽られて、コースが陸地側にずれ込んでいるんだ。このままだと不味いことになる』  
表示したマップに、船のコース予測が加えられる。逗子方面に向かっていた船は、大きくコースを変えて初島に向かっている。

「船を止めるにも距離が必要……それを稼ぐのですわね」

『正直なところ、セシリアさんにはこれ以上の無理はさせられないんだけど……余裕が無い。もう少し、付き合ってくれる？』

「当然の事を言わないで下さい。もとより、その為に来ているのですから」

セシリアは力強く答える。

右腕部はボロボロで、まともに可動も出来ない。

だが、左腕部は動くし、スラスタも正常。出力系に異常はない。

やれることをやらなければ、後悔は果てしない。

(止めますわ……何としても！)

フェリーを追い越すように三機は飛び、白式はそのままデッキに降り立つと、中へと入った。

「さて、コースを変えるたって……どうする？」

「勿論、力尽くで変えるまでですわ」

「ま、そうなるわよね。取り敢えず、押してみますか！」

鈴とセシリアは船の先頭部に回りこみ、船体を押し始める。船首を右に曲がらせるようと、スラスタに力を込める。

操舵室へと入った一夏は、言葉を二、三交わしてから、操舵システムの前に立った。

『ここからは僕の仕事だね』

『大丈夫なのか？』

『大丈夫……これぐらい、全然余裕だよ』

入れ替わった春斗は、百目と晨月を部分展開。アクセスモード 月虹 を起動させる。

「プログラム……アクセスッ！！」

バイザーが降り、コア・ネットワークを介して、航行プログラムが春斗の前に出現する。

（プログラムがスタスタにされてる。これじゃ、暴走しても当たり前だな）

春斗は破損したプログラムの中から、重要度の高い物を選択し、選り分けていく。

（時間がないから、航行システムとエンジンコントロールだけをまず優先して……）

「……」

啞然としていた。

モニターに映る無数の文字の羅列が、まるでパズルのように組み合去っていく。

コンソールに添えられた右腕は光を幾度も走らせ、バイザーに隠れて覗く口元は何かを呟いているのか、小さく息を吐き出しながらせわしなく動く。

時間にして10分も経たず。春斗はバイザーを上げ、晨月を離れた。

「そつちは……まだダメなの!?」

『この船……ビクともしませんわ……っ!』

「ちようど終わったところだよ」

通信に短く答え、春斗は船長に向き直る。

「エンジンと操舵システムはこれで何とか出来ると思います。後はお願いします」

そう言い残し、操舵室を出る春斗を啞然としたまま見送る面々。

「……ハッ! いかん、ボサツとするな! すぐに減速、舵を主導に切り替える、面舵だ」

「は、はいっ!」

「機関室から報告……エンジン停止しました。応急修理を開始するとの事です」

「わかった。舵が戻っただけも十分だ。このまま相模湾を周り、自然減速する」

「了解。面舵いっぱい」

窓に見える風景が、ゆっくりと横に流れ始めた。

「またせたな、二人共」

白式を纏った一夏が、船体に張り付いていた鈴達に声をかける。

舵が戻ったことを知らせると、二人は顔を見合わせて深い息を吐いた。

「ったく……こんなにすぐ終わるなら、あたしら要らなかつたんじゃない？ 無駄に体力使っちゃったじゃないのよ」

「うう……今更ながら痛みが……」

ズキズキと痛み出す体に、苦悶の声を漏らすセシリア。

「大丈夫か？ ほら、肩貸すぞ？」

「ありがとうございます。でも……今は遠慮しますわ」

「……？ どうしてだ？」

「まだ、船が止まった訳ではありませんから」

そう言つて、セシリアは高度をゆっくりと上げる。

徐々にだが、船は速度を緩めていつている。だが、まだ止まった訳ではない。

安全の確認がされるまで、誰かの肩を借りる 油断することは  
できなかつた。

セシリアの心配を余所に、フェリーは無事に停船。エンジンの応急修理と三機による牽引によって微速航行。

三浦半島近くまで移動すると、そのまま海上自衛隊へと引き継ぎ、

一夏達は学園へと帰還する事になった。

陸地で起こっていた事件の事を知るのは、もつすぐの事である。

第51話 災いの終息（後書き）

取り敢えずメインは終了。次回はその顛末と、次に続く日常回の予定。

危うく次回まで決着持越しになりかけたのは内緒ですw

馬鹿な話を書きたいぜ！

ラウラのメイド服とかな！！w

第52話 帰りに来る日常ノトラブル@クルーズ（前書き）

事の顛末と日常回。

全開の謎の解明、そして新たな謎の発露。そしてアホな話。

中盤以降の酷さは何なのだろうw

## 第52話 帰りに来る日常ノトラブル@クルーズ

日が沈み、星と月が空を支配する時を迎えても尚、IS学園はせわしなく人が動いていた。

無事に帰還したパイロット達は、ISを整備課に任せ、疲労の色濃いままに引き上げる。

整備課は今まさに、戦闘開始したところであった。

「ラファール・リヴァイブ、1から7番のメンテナンスチェック開始します」

「打鉄、1から5番、外装甲交換作業を開始します」

「ちよつと、スラストパーツが来てないわよ!？」

「えつと……災害用パッケージの予備パーツって来てませんか!？」

「弾薬の在庫と使用数確認として! あと、手が空いてるの捕まえて、食堂に夜食の注文も!」

「はい、行つてきます!」

アリーナ併設の整備室に、整備課生徒と教員の叫びが途切れることはない。

彼女達の肌は、きつと翌朝の悲鳴と共にメンテナンスされることあるつ。

学園保有ISの殆どをつぎ込んだ大規模出動は、事件の規模の大きさと共に大ニュースになった。

「うわぁ、どの局も特番ばっかり。あ、あのリヴァイブ三年生だ」

食堂のモニターには、延々と繰り返されるニュース番組。

「ふむ……結局、あの事故の原因は不明のままか」

「でも、あれだけの範囲と規模で亡くなった人が居なかったのは、不幸中の幸いだよ」

「……そうだな」

ラウラはシャルロットの言葉に頷いて、コーヒーマグに入ったマグカップを傾ける。

事故の詳細が明らかになっていくと、その異常さが改めて浮き彫りになってきた。

沿岸部を中心に、交通システムが数十キロ単位で完全に麻痺し、今尚、復旧していない。

都市部で起こった火災や事故などは、一見すると範囲が広く被害が大きそうだが、実はそれ程でもない事が分かった。

車両事故は休日の夕方前とあって、渋滞している所も多く、低速状態で事故を起こすものが多かったからだ。

火災は比較的すぐに消火装置が作動し、初期消火が行われていた。

そして何より、ISの即時出動が救助時間を大きく早めた事もまた、大きな要因であった。

調査委員会の結果は公式の会見で明かされたが、殆ど分かっていないというものであった。

正確にはシステムがクラックされ、各地で事故が起こったというものの。

だが、そのシステムクラックがどういった規模、狙いで行われたのかが不明であり、犯人もまた不明。

つまり、肝心な部分が殆ど不明のままであるということだ。

「一夏達が遭遇したっていう、悪魔みたいなISの事も、全然分かっていないんだよね……」

「だが、事態が動くまで、現状の私達に出来ることはない。齒がゆい事だな」

「黒ウサギ隊の方で調べられないの？」

「既に手は回してある。だが、難しいだろうな」

「コーヒーよりも苦い物を口にしたと、ラウラは眉を潜めた。

今回の出勤に関するデータを纏めている千冬と真耶は、モニターに映し出されたある物を注視していた。

「やっぱり、今回の事件は二種類のパターンがありますね」

真耶がコンソールを操作すると、事故発生区域が色分けされる。

赤と青。二色に分けられたそれは、赤がウォーターワールド集中していた。

対する青は、沿岸を含む広範囲に散らばっていた。

「一つは、一定範囲に対する強力なクラッキング。三年前に起こったものとはほぼ同質のもの。もう一つは、システムそのものに対するハッキングによる暴走……」

「一見すると同一のようで、実は二つの事件が同時に起こっていた……か。偶然ではあるまい」

「織斑君達が遭遇したっていう悪魔みたいなISも、気になりますね」

「データによれば、コアを7つ保有するISとの事だが……」

「先の無人機と何か関係が……？」

「コアは複数搭載する事ができない。そして、仮に可能だとしても、7つものコアを一機に使用するなど、コアの保有数の関係から大圏以外には不可能だ。」

「もしくは、コアを独自に製造できる技術を保有する組織・国家ないしは個人であるかと、真耶は問う。」

「いや、今回の悪魔は有人機だ。機体構成を鑑みても、両者に技術的共通点はないと見て良いだろう」

「千冬は真耶の言葉を否定した。件の無人機襲撃事件の黒幕は、千冬の想像通りならば、有人など使わないし、使わせる相手もない筈だ。」

「つまり、今回の犯人は、無人機襲撃事件の犯人と相対出来る程の技術を持っている可能性が高い。」

「詳しい事を織斑君達に聞けば、何か分かるかも知れませんが……今頃、全員ばつたりですものね」

「真耶は今の三人の状態を思い、溜息を吐いた。」

「ただでさえプールで体力を使っていた上に、強力な敵と命懸けの戦闘を行ったのだ。」

「三人は帰ってくるなり、ベッドの上の住人となった。」

「それは、普段と全く違う緊張感の中で作業を行っていた筈や簪もまた同じであった。」

「尤も、セシリアと鈴に関しては織羽に突っかって、物理的に沈められたのだが。」

「まあ、詳しい報告は後でも構わないだろう。どうせ、詳細は調査委員会の報告を待つしかないしな」

「そうですね……はあ、また書類の山との苦闘の日々が……あははは」

この後に待つ、恐らくは山田真耶史上最大級の書類整理に、乾いた笑いが溢れる。

「……頑張れ、山田先生」

「何、他人事みたいに言ってるんですか!? あれですか、自分の書類もこつちに回す腹積もりですか!？」

「イヤ、ソナコトハナイ。タダタンニ、ゲキレイヲダナ」

「滅茶苦茶カタコトの上に無茶苦茶棒読みじゃないですか!？」

山田真耶の心労は尽きない。

某所。

幾つものマシンアームが休むことを知らずに動き続ける。その中心には件の悪魔があった。

「随分と派手にやられたわね。ご自慢の逸品だったんじゃないか」

のかしら?」

「まさか。今回はあくまでも、データ収集目的だもの。本気で潰そうと思えば、一発も撃たせることなく沈められたわ」

赤毛の科学者Dr. ファウストは、スコールの言葉に「ククツ」と晒う。

モニターには様々なデータが映し出されていく。その一つを大きく広げた。

「V・T・M・S……さすがの完成度ね。それにコアキューブの完成度も」

「まあ、これぐらいは当然よ。でなければ態々、ドイツのお人形のISに、VTシステムをしこませた甲斐がないというものよ」

モニターに並ぶ文字。V・T・M・S。すなわち

V - a l k y r i e ' s

T - a c t i c s

M - i n d

S - y s t e m。

それはモンド・グロッソ優勝者達の戦闘記録から、戦術思考を模倣するプログラム。

ラウラのISに仕込まれていたVTシステムは単独では不完全であり、このシステムがあつて初めて、最強となる筈であつた。

「コアキューブも、数を揃えればIS以上の出力を生み出せる。とはいえ、ミサイルを直接ぶつけるなんて戦術はデータになかったけどね」

愉快そうに笑うファウスト。

「まあ、ドライバーは実戦でも充分使えろと分かつたし……後は、こつちにデータを移すだけね」

傷ついた 悪魔 の隣に、 悪魔 に似た姿の機体があつた。それは 悪魔 よりも小型で、普通のISサイズである。

「楽しみねえ、このI・S・E  
インフィニット・ストラトス・  
イーターのお披露目の時が」

本当に愉快そうに、ファウストは笑う。

そして、I・S・Eと呼ばれた機体に組み込まれたドライバーは、  
只そこにあるだけであった。

事件から数日が過ぎ、非日常に傷ついた者達を置き去りにして、町  
は段々と日常を取り戻していく。

そんな中で、IS学園もまた日常へと返っていた。その代償は泥の  
ように眠る教員、整備課の生徒達であった。

「うゝむ」

箒は寮の廊下を、唸りながら首を傾げて、腕を組みながら歩いてい  
た。

その内容は、先日行つたのシャルロットとの模擬戦の事だ。シャルロットの駆るラファール・ドラグーンに完敗した筈は、あれ以来、よく考え込んでいた。

「紅椿の性能は高い。私が未熟故に、まだ性能を引き出せていない事、絢爛舞踏を使えない事も敗北の原因だな」

銀の福音との決戦以降、シルバリオ・ゴスベル 筈は紅椿の単一仕様能力『絢爛舞踏』を使えずにいた。

元々、単一仕様能力自体、謎の多いスキルであり、操縦者との相性が最高値になつた時に使えるという事しか分かっていない。

「だが、それを差し引いても……やはり、足りない」

そう。紅椿には絶対の一手と呼べるものがないのだ。

雨月、空裂の威力は高いが、高密度のエネルギーシールドに阻まれることが模擬戦で分かっている。

展開装甲を全起動すればあるいはとも思えるが、現状では難しい。

だからこそ、彼女は欲した。白式の零落白夜のような、裏白式の月華白麗のような、逆転を狙える切り札を。

「やはり、必殺技だな」

「っ　！？　ラウラ！？」

ハッとして振り返れば、壁に背を預け、したり顔をするラウラがいた。

「必殺技とは……どういう意味だ？」

「必殺技、それは正に強者の証。必殺技、それは正に技の頂。それ

を持つ者こそ、最後に勝利を掴み取るのだ!!」

ざん。と、ラウラは箒の前に仁王立ちし、かつて居た帝国指導者の如く、尊大にその手を振るう。

「福音との戦いで、お前は織羽と共に合体必殺技を繰り出した。ならば今度は、単体必殺技を身に付ける時だ!!」

ラウラは熱く、そして何故か目をキラキラとさせて箒にハッキリと言った。

「必殺技は良いぞお？ かつこ良く、強く、形容し難い魅力に溢れている……！ 燃費？ バカを言うな。効率？ だからどうした？ 私も叶うならば斬艦刀を振るいたかったが、本国に止められてしまい、仕方なく『代理品』を使う事にしたが……だが！」

バシッ！

壁を平手で叩き、拳をグヌヌ……と、握り固める。

「だが、私は諦めない！ 必ずや、あの必殺技を会得してみせる！ さらばだ!!」

言いたいことを言い切ったとばかりに、ラウラは背を向けてズンズンと行ってしまった。

最後は自分の事になっていたが、そこはあえて流すとする。

「必殺技か……」

一見するとの的外れな意見だが、しかしそうでもない。内容は全然的な外れだが。

零落白夜や月華白麗も、言い換えれば必殺技だ。

そしてシャルロットのバンカー、ドラゴンホーンも、必殺技と言っても可笑しくはない。

必殺技。つまりは不利な状況を逆転する事の出来る、または勝負を決定づけられる切り札。

それは正に、箒の求めているものの具体的な名前であった。

だが、一口に必殺技といっても早々、何かあるわけではない。箒の使う篠ノ之流にも、奥義と呼ばれる技はある。だがそれがISで使えるかといえば微妙なところだ。

となれば、紅椿に何かそれ用の新しいプログラムを組み込むことぐらいだが。

「……………ん？」

と、箒は一つだけ思い当たった。

エネルギー消費は少なく、しかし汎用性が高く威力も大きい。の切り札として、うってつけと成り得るものを。

「オーバーアクセセル瞬速超過。もしもあれを、紅椿に組み込めば……………？」

オーバーアクセセル瞬速超過は一瞬だけ、最高速度を上回る速度を生み出す特殊技能。勿論、使用するにはそれ用のプログラムをインストールしなければならない。

そして、それを作れるのは世界で一人だけだ。

箒は早速、春斗の所に向かうことにした。

「あれ、箒？ どうしたんだ？」

一夏の部屋の前まで来ると、箒の背中に声が掛けられた。

「一夏、丁度良かった。今、時間はあるか？」

「ああ、明日「ごめん。明日ちよっと出掛けるから、もう寝ようと思ってたんだ」

「っ……………春斗？ そ、そうか……………」

「もしかして……何か、急ぎの用件？」

「いや、そうではない。ところで、何処に出掛けるのだ？」

手を振って否定した篤は、春斗に明日の行き先を尋ねた。折角なら、一緒に出かけたいと思ったのだ。

「秋葉原の裏路地に、ちよ〜つと裏物のパーツを買いにね。く〜つ

……いやあ、楽しみだなあ」

「そ、そうか……良かったな」

恐ろしく無邪気な笑顔を見せる春斗に、篤は若干引いた。こういう顔ををする時、春斗は常人の理解の範疇にいないのだ。

（裏物のパーツなど何処で買うのだ？ いやそもそも、裏物って何だ！？）

篤の内心を余所に、春斗は集積回路がどうの、CPUチップがどうの、ペンタゴンからの横流し品とか言っている。

一番最後。それはダメではないだろうか、色んな意味で。

「とまあ、明日は少し忙しいから……急ぎでないなら日を改めてくれると助かるんだけど……良い？」

「う、うむ……それで構わない」

「あ、よければ一緒に来る？」

「いや！ それは遠慮しよう！ 一緒に行っても邪魔になるだけだろうからな、うん！」

春斗の誘いを篤は全力で断る。普段ならばまだしも、これに付き合えば明日いっぱい、篤は頭痛とお友達になること必至である。

「そっか、それは残念だな……」

と、春斗は心底寂しそうに言った。具体的にはしょんぼりへタれる犬耳尻尾を幻視してしまう程だ。

「そ、そうだ。週末に篠ノ之神社で祭りがあるのだ。私も久しぶりにそっちに顔を出すのだが……良ければ」

「絶対に行く」

篤が言い切るよりも早く、春斗の手が篤の手をしっかりと握っていた。へタれた犬耳がピンと立ち、尻尾がブンブン振るわれているのが見

える。

「祭りつてことはあれでしょ？ ほーちゃんがまた、 剣の巫女の舞 を踊るってことでしょ!？」

「う、うむ……そうだな……そうなる……かな？」

戸惑いつつ、頷く箒。そして春斗は決意する。

「よし。明日は2000万画素、電子補正各種搭載、デジタルズー  
ム30倍のハンディカムを買おう！ そしてほーちゃんの姿を未来  
永劫永久保存だ!!」

「頼むから絶対に止めてくれえ!!」

「絶対に嫌だね！ 僕の家宝にする!! これ、決定事項だから！  
！」

「私的に肖像権侵害で却下だ!!」

「大丈夫！ 私的使用なら何ら問題ないから!!」

「大有りだ、馬鹿者!!」

スパーンツ!!

箒のハリセンが春斗を一閃した。

翌日。

春斗は予定通り、電腦とサブカルチャーの坩堝ごと、秋葉原に赴いていた。

といつても中央通りに面するような、所謂『表の顔』に用は無い。というか、既に最高級ハンディカムは購入し、配送手続き完了である。

なので、今は裏の顔　世界中から集まる裏流通パーツを扱う場所へ足を踏み入れていた。

そこは、とある雑居ビルの4階。そこにある看板も出ていないパーツショップ。

もちろん、織斑一夏の顔は世界中に知られているので、帽子や眼鏡、更に髪型も変えて、服装もストレートのパンツとワイシャツ、軽く締めたループタイをしている。

基本ラフで動き易さを好む一夏とは異なる、フォーマル系ファッションが春斗のスタイルである。

「よお。今日は随分とキメてるじゃないか、ハル坊よ」

ニット帽に紫のベストを着た、しわ深い老人　店の主である、トクという老人に挨拶をする。

「久しぶりです、トクさん。一応、変装のつもりなんですけどね？」  
トクは一ヶ所に留まらず、秋葉原を転々としていて、ここに来るまで、春斗は数箇所無駄足を踏んだりしている。

「まあ、しょうがないな。姉に続いて、双子の弟は今じゃ世界的有名名人だ。間違われんように気を付けるのは正しいことさ」  
そう言つて、トクはカラカラと笑つた。

「おお。そっぴや頼んでたパーツを取りに来たんだつたな。ほら、コイツだ」

トクはカウンターの下から、幾つかのケースを取り出す。

「注文のパーツは揃つてる筈だ。確認してくれ」

「えっと……………うん、ちゃんと全部ある」

「しっかし、なんだってISの通信システムのパーツなんて注文したんだ？」

「まあ、ちょっとばかり作りたいたものがあって。あ、これ代金です」  
春斗は分厚い封筒をカウンターに置く。トクはそれを受け取り、早速中身を確認した。

「あいよ、確かに」

トクはそれを確認し終わると、金庫を開け、その中に封筒を仕舞った。

春斗が何故そんな大金を持っているかといえば、彼が第二世代IS開発に携わっていた頃の使わなかった金や、肉体が被験体として使われている事による支払金である。そこに、中学以降のバイト代が加わっている。

最初はそれを家計に当てようとしたが、千冬が頑として受け入れなかった。

特に後者に関しては、「それを受け取れば、私は弟を売って金にしていると思えない」と、嫌悪感さえ顕にした。

なので、その殆どは使われることなく、今も春斗の口座に眠ったままであった。

ちなみに、一夏のバイト代はそのまま千冬の手で彼の口座に振り込まれている事実を、一夏は知らない。

店を後にした春斗は、軽く昼食を取った後、電車で揺られて学園方面へと向かっていた。

「なあ、そんなの買ってまで何を作るつもりだ？」

「さあて、なんだろうねえ？」

「教えるよ」

「まあまあ。何れ分かることだし、急ぐ必要はないよ」

『……変な物じゃないだろうな?』

『変な物じゃないよ。むしろ、便利なものさ………多分』  
『うおい!? 何だ、最後の一言は!?!?』

電車は二人を乗せて、ひたすらに進んでいった。

『 で、何で学園に戻らず、こんな所にいるんだ?』

一夏はてっきりそのまま学園に帰るものだと思っていた。だが、春斗は途中で電車を降り、何処かを目指して歩いてきた。

『何でって、これから今日のクライマックスを迎えるんじゃないか』  
『クライマックスねえ………』

春斗の物言いに不安を感じつつ、一夏はその行く先を黙って待った。

やがて辿り着いたのは、一件の喫茶店。店の看板には @クルーズと書かれている。

従業員がメイド及び執事服を着ている　　つまりはメイド&執事  
喫茶だ。

『ここって……そうか、お前の目的は　期間限定スペシャルパフェ  
だな』

『ふっ……甘いよ一夏。僕の目的はこの裏メニュー……ずばり、  
セブンス・オーシャン・スペシャル・パフェ　！　一個3、80  
0円……！』

『テメエは何を食う気だ！？』

セブンス・オーシャン・スペシャルとは、@クルーズ伝説の超級ジ  
ヤンポパフェである。

カロリー換算で約10、000。ダイエット、健康、ウエストサイ  
ズに真っ向から戦いを挑む、正に生粋なる甘党の味方にして世界中  
の女性の敵である。

「いざ行かん。甘き桃源郷へ！」

カランカラン。

春斗は意気揚々と、ドアを開けた。カウベルが鳴り響き、その音に  
早速、執事がやって来た。

「お客様、@クルーズへようこそ」

カランカラン。

春斗は思わずドアを閉めた。

「……………あつれえ〜？」

春斗は自分の目がおかしくなったのかと、目頭を押さえる。

『今、見知った顔が見知らぬ格好でいたような……………』

「……………よし、もう一度」

意を決して、ドアを開ける。と、執事服に身を包み、ブロンドを編んで纏めたシャルロットが、さっきまでと同じ体勢で彫像のように固まっていた。

「……………何やってんの、シャル？」

その瞬間、執事は顔を真赤にして素っ頓狂な声を上げた。

コトリ。春斗の座ったテーブルに、お冷が置かれる。

「義兄上、よくいらっしやいました」

迎えてくれたのは、何故かメイド服を着たラウラであった。

「あのさ、何でここで働いているの？」

「まあ、色々とありまして……」

ラウラは早速、ここに至るまでを説明し始めた。

それを簡潔に説明すると、こういう事だ。

朝。シャルロットに買い物に誘われる。

予定も無いので承諾。町へ出る。

一件目の店で、シャルロット&その店長に着せ替え人形にされる。

オープンテラスカフェで、昼食。そこで、何やら困り顔の女性と会う。

シャルロットが事情を聞くと、従業員が駆け落ちしてシフトに穴が空いてしまったて困っているとの事。

同情したシャルロットが、ラウラと共に手伝うことに。

ラウラ、メイド服。シャルロット、執事服。男装させられたことにシャルロット軽く凹む。

それでも何とか接客。

春斗来店。シャルロット、事務所に逃亡。今こ

「なるほどねえ。で、何で逃げたの？」

「……さあ？」

二人揃って首を傾げる。別に執事服は似合っていたし、何処にも逃げる要素はないと二人は思った。

「もしかしたら、義兄上に見られたのが恥ずかしかったのでしょうか？」

「ううん……どうなんだろう？」

「ところで義兄上。私の格好、どう思われますか？」

「ん？ よく似合ってる。……一夏も、可愛いつてさ」

「そ、そうですね……良かった」

ラウラは嬉しそうに、白い肌を微かに赤く染め、トレーで笑みに歪む口元を隠した。

ざわわつ。

その姿に、店内の男性客からざわめきが起こった。

当然だ。ラウラの今までの接客は、いうなれば転校当日の姿 ”

ドイツの冷氷” そのものだったからだ。

美少女然とした外見。余りにも冷徹な対応。辛辣な言動。実際、彼女に声を掛けた愚者が、その洗礼を浴びた。

だが、そのラウラが、絶対女王が、恥ずかしさと嬉しさにその身を振らせている。

クーデレの末期      テレである。

恐るべき破壊力。何という戦略兵器。男性客達は、ラウラのその姿

に身悶え、そして春斗（一夏）に

『くたばれ、リア充。爆発しろ』

と、一言一句異ならない呪詛を浴びせるのだった。

周囲の不審な視線に気付きつつも、それを見事に無視する二人。

「それで、何を頼まれますか？」

「コーヒーのブレンドをブラックで。後は セブンス・オーシャン・スペシャル を一つ」

「コーヒーと……義兄上、それはメニューに無いようですが？」

「裏メニューだからね。厨房に言えば分かるんじゃないかな？ それでもしなかったら、この期間限定パフェで」

「承知しました。では、コーヒーは”すぐ”お持ちします」

「うん。お願いするよ」

ラウラと春斗は一瞬目を合わせ、春斗はコクリを頷く。ラウラは一礼すると、スツとした足取りで厨房へと向かった。

さて、事務所に逃げたシャルロットはというと。

「ううう、最悪だよ……まさか、春斗が来るなんて……！」

事務所の床に座り込んで、思いつ切り凹んでいた。

別に、接客している姿を見られた事が恥ずかしいのではない。

「ただでさえ男装なんて嫌なのに、それを見られるなんて……本気で最悪だよ」

単に、男装をしているのを見られたのが恥ずかしいのだ。

シャルロットも、出来るならばメイド服を着たかった。しかし制服の予備は一着ずつしかなく、執事服はラウラの丈に合わなかった。仕方なくシャルロットは執事服を着たのだが、ラウラのメイド服姿は、同性の彼女から見ても、とても良く似合っていた。

「ふうう……どうせなら、メイド服だけなら良かったのに……そりゃ、ラウラの方が似合うと思うけど……」

「そんな所で何をしている？」

「っ……！？ ラウラ!？」

掛けられた声に振り返ると、呆れ顔のラウラが立っていた。

「14番テーブルにオーダーだ。ブレンドコーヒー、ブラックだ。早く来い」

「ラウラ……春斗は？」

「大丈夫だ、問題ない。だから早く行け」

そう言つて、トレーを投げて寄越すと、クルリと背を向ける。

「うん」

ふわり。フリル付きのスカートがひるがえった。

その姿を見て、やはり羨ましさを感じてしまうのだった。

「こ、コーヒーお待たせしました……ど、どうぞ」

シャルロットは14番テーブルにコーヒーを運んだ。とても引きつった笑顔である。

「はい。どうもありがとうございます、執事さん」

その原因は言うまでもない。このテーブルに座る客、つまり春斗だ。

(ラウラあ……騙したねえ……！)

若干涙目になりつつ、ラウラを睨むシャルロット。そのラウラはすまし顔で新たな客に水を運んでいた。

まあ、実際「大丈夫だ」しか言っていないので、騙したというのは怪しいところだ。

「ところで、何で執事服なの？」

「これしか無かったんだよ……お願い、これ以上触れないで」

「別に気にしなくてもいいのに。良く似合ってるよ、シャル」

「っ……！ そ、そういう事じゃないの……もうっ！」

びっくりしたかと思うと、シャルは顔を背けてしまった。

「でも良いんじゃない。そういうえば、男装執事って前にアニメとかでやってなかったっけ？」

「春斗、それには触れちゃダメだよ……はあ、何かバカみたい」

「そんなにメイド服が着たかったの？」

「そりゃあ、男装するよりは……可愛い服の方が良いにいまってるよ」

「まあ、確かにそうだね。シャルのメイド姿はちょっと見たいかも。きつと可愛いだろうから」

「えっ……！？」

シャルが羞恥に頬を染める。

ざわざわっ。

周囲の客がざわめく。

シャルロットの接客は紳士然としており、まさに理想の背客であった。

しかし、今のシャルロットはまるで恋する乙女（男装がハマりすぎて、女性と疑われていない。悲しいことに）である。

「何、あのリア充ぶり。マジでム力つくんだけど」

「全くだ。こっちはこんな肉と一緒にだというのに」

「肉って言うなっ！」

「だまれ、肉」

「お前ら、こんなとこまで来て、喧嘩すんなよ」

と、いかにも残念そうな三人組が、会計を終えて店を後にしたりするが、それは大したことはない。

残っている客達全員の心はただ一つに集約されていた。

『くたばれリア充。マジ、モゲて爆死しろ』

この呪詛が果たして効果を持つのか。それは分からない。

「そういえば、どうしてこのお店に？」

「ここの裏メニューのパフェをね……いやあ、楽しみだ！」  
心の底から待ちわびる春斗。

だが、この店には予想外の来客は来たようだ。

バアンツ！！

「全員、動くんじゃないか！！」

天井に向かって鉛の玉が飛び、照明を碎き散らす。

ジャンパーに手袋、覆面。そして銃器で武装した三人組。背中に背負ったバッグからは数枚の紙幣が見える。

逃走中の銀行強盗。@クルーズご来店である。

第52話 帰りに来る日常ノトラブル@クルーズ（後書き）

当作品はクロスオーバー要素一切なしですw

ていうか、はがないアニメの「聖剣の〜」の件はいいのだろうか？  
ビジュアルがスリーアウトでマジ噴いたw

隠す気ゼロの男前ぶりに、感動すら覚えるよ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6103q/>

---

IS〔ツイン・ソウルズ〕

2011年10月21日03時58分発行